茨城県教育財団文化財調査報告第51集

一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書2（結城地区）

本田遺跡
善長寺遺跡
小田林遺跡

平成元年3月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第51集

一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書2（結城地区）

本田（ほんでん）遺跡
善長寺（ぜっちょうじ）遺跡
小田林（おだはやし）遺跡

平成元年3月

財団法人 茨城県教育財団

序

近年の産業・経済の発展，自動車の増加にともない，４号国道の交通量は著しく増加しております。建設省は交通渋滞の緩和と地域の活性化をはかるため，埼玉県越谷市から，茨城県五霞村，境町，総和町，三和町，結城市を通過して，栃木県宇都宮市にいたる「新４号国道」の建設を進めております。

財団法人茨城県教育財団は，昭和57年度以降建設省関東地方建設局と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び，新４号国道建設用地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は，昭和57，60，61，62年度に発掘調査を実施した結城市に所在する３遺跡についての調査結果を収録したものであります。本書が学術的な資料としてはもとより，郷土の歴史の理解を深め，教育・文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

最後に，発掘調査及び整理にあたり，委託者の建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所，茨城県教育委員会，結城市教育委員会をはじめ，関係諸機関，関係各位の御指導，御協力に対しまして，衷心より謝意を表します。

平成元年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　　礒　田　　勇

例　　言

1　本書は，建設省の委託により，財団法人茨城県教育財団が，昭和57・60・61・62年度に発掘調査を実施した，茨城県結城市に所在する本田(ほんでん)遺跡，善長寺(ぜっちょうじ)遺跡，小田林(おだばやし)遺跡の発掘調査報告書である。

2　3遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		大金新一	～昭和58年11月
		竹内藤男	昭和58年12月～昭和61年3月
		川又友三郎	昭和61年4月～昭和63年5月
		礒田勇	昭和63年6月～
副理事長		古橋靖	～昭和58年7月
		川又友三郎	昭和58年7月～昭和61年3月
		礒田勇	昭和61年4月～昭和63年3月
		小林元	昭和63年4月～
常務理事		綿引一夫	昭和57年4月～昭和60年3月
		萩原藤之助	昭和60年4月～昭和61年3月
		滑川貞雄	昭和61年4月～
事務局長		小林義久	～昭和58年3月
		小林洋	昭和58年4月～昭和60年3月
		堀井昭生	昭和60年4月～昭和62年3月
		坂場庸克	昭和62年4月～
調査課長		寺内寛	～昭和59年3月
		青木義夫	昭和59年4月～
企画管理班	班長	坪秀雄	～昭和57年5月
	〃	今村信夫	昭和57年6月～昭和59年3月
	〃	市毛洋一	昭和59年4月～昭和60年3月
	〃	北畠健	昭和60年4月～昭和62年3月
	〃	水飼敏夫	昭和62年4月～
	主任調査員	加藤雅美	昭和57年4月～昭和61年3月
	〃	山本静男	昭和61年4月～

企画管理班	係長	田所多佳男	昭和60年4月～昭和62年3月
	〃	園部昌俊	昭和63年4月～
	主任	山崎初雄	昭和60年4月～
	主事	鈴木三郎	～昭和60年3月
	〃	海老沢一夫	昭和57年4月～昭和60年3月
	〃	綿引良人	～昭和58年3月
	〃	大曽根徹	昭和58年4月～昭和61年3月
	〃	大部章	昭和61年4月～
調査第一～三班	班長	青木義夫	昭和57年度
	〃	堀川計三	昭和60年度
	〃	倉本冨美男	昭和61年度
	〃	加藤雅美	昭和62年度
	主任調査員	久野俊度	昭和57年・62年度調査（本田遺跡・小田林遺跡）
	〃	中沢時宗	昭和57年度調査・昭和59年度整理・執筆（本田遺跡）
	〃	小河邦男	昭和61年度調査（善長寺・小田林遺跡）
	〃	和田雄次	昭和60年度調査・昭和61年度整理・執筆（善長寺遺跡）
	〃	桜井一美	昭和60・61・62年度調査（善長寺・小田林遺跡） 昭和63年度整理・執筆（小田林遺跡）
整理班長		渡辺千秋	昭和59年度（本田遺跡）
		加藤雅美	昭和61年度（善長寺遺跡）
		沼田文夫	昭和63年度（小田林遺跡）

3　本書は，発掘担当者の協力を得て，次のように執筆分担した。

第1・2・3・4章
第6章　善長寺遺跡 ……和田雄次

第5章　本田遺跡 ……中沢時宗

第7章　小田林遺跡
終章 ……桜井一美

4　小田林遺跡，善長寺遺跡の発掘調査及び整理にあたっては，各々，埼玉県史編纂室増田逸朗氏，栃木県立博物館橋本澄朗氏の御指導を得た。

5　本書に使用した記号等については，第4章遺構・遺物の記載方法を参照されたい。

目　　次

序

例　言

第１章　調査経緯……　1

　第１節　調査に至る経過……　1

　第２節　調査経過……　2

第２章　位置と環境……　6

　第１節　地理的環境……　6

　第２節　歴史的環境……　7

第３章　調査方法……　11

　第１節　地区設定……　11

　第２節　遺構確認……　12

　第３節　遺構調査……　12

　第４節　基本層序……　12

第４章　遺構・遺物の記載方法……　15

　第１節　遺構の記載方法……　15

　第２節　遺物の記載方法……　18

第５章　本田遺跡……　21

　第１節　遺跡の概観……　21

　第２節　調査経過……　21

　第３節　遺構と遺物……　23

　　１　住居跡……　23

　　２　遺構外出土遺物……　27

　第４節　まとめ……　29

第６章　善長寺遺跡……　31

　第１節　遺跡の概観……　31

　第２節　調査経過……　31

　第３節　遺構と遺物……　35

　　１　住居跡……　37

2　土　坑…… 199
3　溝…… 207
4　堀…… 210
5　遺構外出土遺物…… 212
第4節　まとめ…… 220
第7章　小田林遺跡…… 257
第1節　遺跡の概観…… 257
第2節　調査経過…… 259
第3節　遺構と遺物…… 262
1　住居跡…… 265
〔1〕　縄文時代前期……265
〔2〕　古墳時代前期 …… 269
〔3〕　時期不明 …… 367
2　炉　穴…… 369
3　土　坑…… 381
4　溝…… 403
5　堀…… 411
6　井　戸…… 419
7　その他の遺物…… 421
〔1〕　遺構外出土土器 …… 421
〔2〕　石器・石製品 …… 425
〔3〕　古　銭 …… 441
8　低湿地調査（現水田部） …… 441
第4節　まとめ…… 444
終　章　むすび ……472

挿　図　目　次

本田遺跡・善長寺遺跡

第 1 図　茨城県内新 4 号国道関係遺跡分布図 …… 3･4
第 2 図　新 4 号国道周辺の遺跡分布図…… 9
第 3 図　グリッド概念図…… 11
第 4 図　善長寺遺跡テストピット図…… 13
第 5 図　遺構実測図の作成方法…… 16
第 6 図　各部位の名称と法量表現方法（土器）…… 18
第 7 図　各部位の名称と法量表現方法（石製品）…… 19
第 8 図　本田遺跡地形図…… 22
第 9 図　本田遺跡全体図…… 24
第 10 図　第 1 号住居跡・炉跡実測図…… 25
第 11 図　第 1 号住居跡遺物出土状況図…… 26
第 12 図　第 1 号住居跡出土遺物実測図…… 27
第 13 図　遺構外出土遺物実測図(1)…… 28
第 14 図　遺構外出土遺物実測図(2)…… 29
第 15 図　善長寺遺跡地形図・グリッド図…… 32
第 16 図　善長寺遺跡遺構配置図…… 36
第 17 図　第 4 号住居跡実測図…… 37
第 18 図　第 3 ・ 4 ・ 5 号住居跡出土遺物実測図…… 39
第 19 図　第 5 号住居跡実測図…… 40
第 20 図　第 6 A ・ B 号住居跡実測図…… 42
第 21 図　第 6 A 号住居跡出土遺物拓影図…… 42
第 22 図　第 6 A ・ B 号住居跡出土遺物実測図…… 43
第 23 図　第 8 号住居跡実測図…… 45
第 24 図　第 8 ・10号住居跡出土遺物実測図… 47
第 25 図　第10号住居跡実測図…… 48
第 26 図　第11号住居跡実測図…… 49
第 27 図　第11号住居跡出土遺物実測図…… 50
第 28 図　第11号住居跡出土遺物拓影図…… 52
第 29 図　第12号住居跡実測図…… 52
第 30 図　第12号住居跡出土遺物実測図(1)…… 54
第 31 図　第12号住居跡出土遺物実測図(2)…… 55
第 32 図　第12号住居跡出土遺物実測図(3)…… 56
第 33 図　第12号住居跡出土遺物実測図(4)…… 57
第 34 図　第12号住居跡出土遺物実測図(5)…… 58
第 35 図　第14号住居跡・第 3 号土坑実測図… 61
第 36 図　第14号住居跡出土遺物実測図…… 63
第 37 図　第15 A 号住居跡実測図…… 64
第 38 図　第15 A 号住居跡出土遺物実測図…… 66
第 39 図　第15 A ・ B ・16号住居跡出土遺物実測図…… 67
第 40 図　第15 B 号住居跡実測図…… 68
第 41 図　第16号住居跡実測図…… 69
第 42 図　第17号住居跡実測図…… 71
第 43 図　第17号住居跡出土遺物実測図…… 72
第 44 図　第18号住居跡実測図…… 74
第 45 図　第18・19号住居跡出土遺物実測図… 75
第 46 図　第20号住居跡実測図…… 77
第 47 図　第20号住居跡出土遺物実測図…… 78
第 48 図　第21号住居跡実測図…… 80
第 49 図　第21号住居跡出土遺物実測図・拓影図…… 81
第 50 図　第22号住居跡実測図…… 82
第 51 図　第22・23号住居跡出土遺物実測図… 83
第 52 図　第23号住居跡実測図…… 84
第 53 図　第25号住居跡実測図…… 86
第 54 図　第25号住居跡出土遺物実測図(1)…… 87
第 55 図　第25号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)…… 88
第 56 図　第27 A ・ B 号住居跡実測図…… 90
第 57 図　第27 A 号住居跡出土遺物実測図(1)… 91
第 58 図　第27 A 号住居跡出土遺物実測図(2)… 92
第 59 図　第34号住居跡実測図…… 94
第 60 図　第34号住居跡出土遺物実測図・拓影図…… 95
第 61 図　第35号住居跡実測図…… 96
第 62 図　第35号住居跡出土遺物実測図(1)…… 98
第 63 図　第35号住居跡出土遺物実測図(2)…… 99

第64図　第35号住居跡出土遺物拓影図……100
第65図　第36号住居跡実測図……102
第66図　第36号住居跡出土遺物実測図……102
第67図　第37号住居跡実測図……103
第68図　第37号住居跡出土遺物実測図……104
第69図　第38号住居跡実測図……106
第70図　第38号住居跡出土遺物実測図(1)……107
第71図　第38号住居跡出土遺物実測図(2)……108
第72図　第38号住居跡出土遺物実測図(3)……109
第73図　第38号住居跡出土遺物実測図(4)……110
第74図　第40A・B号住居跡実測図……113
第75図　第40B・41号住居跡出土遺物実測図114
第76図　第43号住居跡実測図……116
第77図　第43号住居跡出土遺物実測図・拓影図……117
第78図　第44号住居跡実測図……119
第79図　第44号住居跡出土遺物実測図……120
第80図　第45号住居跡実測図……121
第81図　第45号住居跡出土遺物実測図(1)……122
第82図　第45号住居跡出土遺物実測図(2)……123
第83図　第45号住居跡出土遺物実測図・拓影図(3)……124
第84図　第46号住居跡実測図……127
第85図　第46号住居跡出土遺物実測図(1)……128
第86図　第46号住居跡出土遺物実測図(2)……129
第87図　第46号住居跡出土遺物拓影図……130
第88図　第47号住居跡実測図……131
第89図　第47・48号住居跡出土遺物実測図…133
第90図　第48号住居跡実測図……135
第91図　第49号住居跡実測図……136
第92図　第49号住居跡出土遺物実測図(1)……137
第93図　第49・50号住居跡出土遺物実測図・拓影図(2)……138
第94図　第50号住居跡実測図……140
第95図　第51号住居跡実測図……141
第96図　第51・52・53号住居跡出土遺物実測図(1)……142
第97図　第51号住居跡出土遺物拓影図……143
第98図　第52号住居跡実測図……144
第99図　第52号住居跡出土遺物拓影図……145
第100図　第57号住居跡実測図……146
第101図　第58号住居跡実測図……147
第102図　第59号住居跡実測図……148
第103図　第61号住居跡実測図……149
第104図　第62号住居跡実測図……150
第105図　第53号住居跡実測図……151
第106図　第1号住居跡実測図……152
第107図　第1号住居跡（第1号製作跡）石製品出土状況図……154
第108図　第1号住居跡出土遺物実測図……156
第109図　第3号住居跡実測図……157
第110図　第3号住居跡出土遺物拓影図……158
第111図　第19号住居跡実測図……159
第112図　第24・29・30・31号住居跡実測図(1)……160
第113図　第24・29・30・31号住居跡実測図(2)……161
第114図　第24号住居跡出土遺物実測図(1)……162
第115図　第24号住居跡出土遺物実測図(2)……163
第116図　第27B号住居跡出土遺物実測図(1)…166
第117図　第27B号住居跡出土遺物実測図(2)…167
第118図　第29号住居跡（第2号製作跡）石製品出土状況図……169
第119図　第29号住居跡出土遺物実測図(1)……170
第120図　第29号住居跡出土遺物実測図(2)……171
第121図　第29号住居跡出土遺物拓影図……173
第122図　第30・31号住居跡出土遺物実測図(1)……175
第123図　第31号住居跡出土遺物拓影図……176
第124図　第39号住居跡実測図……177
第125図　第39号住居跡出土遺物実測図(1)……180
第126図　第39号住居跡出土遺物実測図(2)……181
第127図　第39号住居跡出土遺物実測図(3)……182
第128図　第39号住居跡出土遺物実測図(4)……183
第129図　第39・40A号住居跡出土遺物実測図・拓影図(5)……184
第130図　第39号住居跡（第3号製作跡）石製品出土状況図……186
第131図　第41号住居跡実測図……187
第132図　第41号住居跡（第4号製作跡）石製品出土状況図……188
第133図　第42号住居跡実測図……189
第134図　第42号住居跡出土遺物実測図・拓影図……190

第135図　第54号住居跡実測図……192
第136図　第55号住居跡実測図……194
第137図　第55号住居跡（第５号製作跡）石製品出土状況図……195
第138図　第55・56・57・60号住居跡出土遺物実測図……196
第139図　第56号住居跡実測図……198
第140図　第60号住居跡実測図……199
第141図　土坑実測図（第１・２・４・６号）……200
第142図　土坑実測図（第５・７・９・10・11号）……201
第143図　第１・４・６・10号土坑出土遺物実測図……202
第144図　第５号土坑出土遺物実測図(1)……204
第145図　第５号土坑出土遺物実測図(2)……205
第146図　第１号溝実測図……207
第147図　第１号溝・１号堀出土遺物実測図・拓影図……208
第148図　第２号溝実測図……209
第149図　第１号堀実測図……211
第150図　グリッド出土遺物拓影図……212
第151図　グリッド・表採出土遺物実測図……213
第152図　表採出土遺物拓影図……215
第153図　石製品実測図(1)……216
第154図　石製品実測図(2)……217
第155図　石製品実測図(3)……218
第156図　石製品実測図(4)……219
第157図　出土土器時期別内訳・器種別内訳…221
第158図　土器編年図(1)　甕……230
第159図　土器編年図(2)　甕……231
第160図　土器編年図(3)　小型甕・台付甕・壺232
第161図　土器編年図(4)　坏・埦・鉢……233
第162図　土器編年図(5)　高坏・器台……234
第163図　土器編年図(6)　装飾器台・坩・甑…235
第164図　時期別遺構配置図(1)……239
第165図　時期別遺構配置図(2)……240
第166図　時期別遺構配置図(3)……241
第167図　石製品製作種類別内訳……250
第168図　第１・２号製作跡製作工程内訳……251
第169図　第３・４・５号製作跡製作工程内訳252

表　目　次

表１　周辺の遺跡一覧表……10
表２　土層分類表……15
表３　土坑一覧表……206
表４　住居跡一覧表……242

小田林遺跡

第１図　小田林遺跡地形図……258
第２図　小田林遺跡周辺図……261
第３図　小田林遺跡遺構全体図……263・264
第４図　第22号住居跡実測図……265
第５図　第22号住居跡出土遺物拓影図……266
第６図　第23号住居跡実測図……268
第７図　第23号住居跡出土遺物拓影図……268
第８図　第１号住居跡実測図……270
第９図　第１号住居跡出土遺物実測図……270
第10図　第２号住居跡実測図……272
第11図　第２号住居跡出土遺物実測図……272
第12図　第３・21号住居跡実測図……274
第13図　第３号住居跡出土遺物実測図……275
第14図　第４号住居跡実測図……276
第15図　第４号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図……277
第16図　第４号住居跡出土遺物実測図……278
第17図　第５号住居跡実測図……279
第18図　第５号住居跡出土遺物実測図……281
第19図　第６号住居跡実測図……283
第20図　第６号住居跡出土遺物実測図……284
第21図　第７号住居跡実測図……285
第22図　第７号住居跡出土遺物実測図……286
第23図　第８号住居跡実測図……288
第24図　第８号住居跡出土遺物実測図……289
第25図　第９号住居跡実測図……291

第 26 図　第 9 号住居跡出土遺物実測図……292
第 27 図　第10号住居跡実測図……293
第 28 図　第11号住居跡実測図……294
第 29 図　第11号住居跡出土遺物実測図……294
第 30 図　第12号住居跡実測図……295
第 31 図　第13号住居跡実測図……296
第 32 図　第13号住居跡出土遺物実測図……296
第 33 図　第14号住居跡実測図……297
第 34 図　第14号住居跡出土遺物実測図……298
第 35 図　第15号住居跡実測図……299
第 36 図　第15号住居跡出土遺物実測図……299
第 37 図　第16号住居跡実測図……300
第 38 図　第16号住居跡出土遺物実測図……301
第 39 図　第17号住居跡実測図……302
第 40 図　第17号住居跡出土遺物実測図……303
第 41 図　第18号住居跡実測図……304
第 42 図　第18号住居跡出土遺物実測図……305
第 43 図　第20号住居跡実測図……305
第 44 図　第20号住居跡出土遺物実測図……305
第 45 図　第21号住居跡出土遺物実測図……307
第 46 図　第24号住居跡出土遺物実測図……308
第 47 図　第24号住居跡実測図……309
第 48 図　第25号住居跡実測図……311
第 49 図　第25号住居跡出土遺物実測図……312
第 50 図　第26号住居跡実測図……314
第 51 図　第26号住居跡出土遺物実測図……315
第 52 図　第26号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図……316
第 53 図　第27号住居跡実測図……317
第 54 図　第27号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図……318
第 55 図　第27号住居跡出土遺物実測図(1)……319
第 56 図　第27号住居跡出土遺物実測図(2)……320
第 57 図　第28号住居跡実測図……322
第 58 図　第28号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図……323
第 59 図　第28号住居跡出土遺物実測図(1)……324
第 60 図　第28号住居跡出土遺物実測図(2)……325
第 61 図　第29号住居跡実測図……327
第 62 図　第30号住居跡実測図……329
第 63 図　第30号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図……330
第 64 図　第30号住居跡出土遺物実測図(1)……331
第 65 図　第30号住居跡出土遺物実測図(2)……332
第 66 図　第31号住居跡実測図……335
第 67 図　第31号住居跡出土遺物実測図……336
第 68 図　第32号住居跡実測図……337
第 69 図　第32号住居跡出土遺物実測図……337
第 70 図　第33号住居跡実測図……338
第 71 図　第33号住居跡出土遺物実測図……339
第 72 図　第34号住居跡実測図……342
第 73 図　第34号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図……343
第 74 図　第34号住居跡出土遺物実測図(1)……344
第 75 図　第34号住居跡出土遺物実測図(2)……345
第 76 図　第34号住居跡出土遺物実測図(3)……346
第 77 図　第35号住居跡実測図……349
第 78 図　第35号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図……350
第 79 図　第35号住居跡出土遺物実測図(1)……351
第 80 図　第35号住居跡出土遺物実測図(2)……352
第 81 図　第36号住居跡実測図……354
第 82 図　第36号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図……355
第 83 図　第36号住居跡出土遺物実測図(1)……356
第 84 図　第36号住居跡出土遺物実測図(2)……357
第 85 図　第37号住居跡実測図……358
第 86 図　第38号住居跡実測図……360
第 87 図　第39号住居跡実測図……361
第 88 図　第39号住居跡出土遺物実測図……362
第 89 図　第40号住居跡出土遺物実測図……364
第 90 図　第40号住居跡実測図……364
第 91 図　第41号住居跡実測図……366
第 92 図　第41号住居跡出土遺物実測図……366
第 93 図　第19号住居跡実測図……367
第 94 図　第 1 号炉穴実測図……370
第 95 図　第 1 号炉穴出土遺物拓影図……371
第 96 図　第 2 号炉穴実測図……371
第 97 図　第 2 号炉穴出土遺物拓影図……372
第 98 図　第 3 号炉穴実測図……372
第 99 図　第 4 号炉穴実測図……372
第100図　第 4 号炉穴出土遺物拓影図……373
第101図　第 5 号炉穴実測図……373
第102図　第 6 号炉穴実測図……374

第103図　第６号炉穴出土遺物拓影図……374
第104図　第７号炉穴実測図……375
第105図　第８号炉穴実測図……375
第106図　第９号炉穴実測図……376
第107図　第９号炉穴出土遺物拓影図……376
第108図　第10号炉穴実測図……377
第109図　第11号炉穴実測図……378
第110図　第11号炉穴出土遺物拓影図……378
第111図　第12号炉穴実測図……378
第112図　第13号炉穴実測図……379
第113図　第14号炉穴実測図……380
第114図　第15号炉穴実測図……380
第115図　第１号土坑実測図……382
第116図　第１号土坑出土遺物実測図……382
第117図　第６号土坑実測図……383
第118図　第６号土坑出土遺物実測図……384
第119図　第16号土坑実測図……385
第120図　第16号土坑出土遺物実測図……385
第121図　第81号土坑実測図……385
第122図　第81号土坑出土遺物実測図……386
第123図　第83号土坑実測図……386
第124図　第83号土坑出土遺物実測図・
　　拓影図……387
第125図　第83号土坑出土遺物拓影図……388
第126図　第84号土坑実測図……390
第127図　第84号土坑出土遺物実測図……390
第128図　土坑実測図(1)……394
第129図　土坑実測図(2)……395
第130図　土坑実測図(3)……396
第131図　土坑実測図(4)……397
第132図　土坑実測図(5)……398
第133図　土坑実測図(6)……399
第134図　土坑実測図(7)……400
第135図　土坑実測図(8)……401
第136図　土坑出土遺物実測図……402
第137図　第１号溝実測図……404
第138図　第２号溝実測図……405・406
第139図　第３・４・５・６号溝実測図…409・410
第140図　溝出土遺物実測図(1)……414
第141図　第１・２・３・４号堀実測図…415・416
第142図　溝出土遺物実測図(2)……417
第143図　第１・２・４号井戸実測図……420
第144図　遺構外出土遺物拓影図(1)……423
第145図　遺構外出土遺物拓影図・実測図(2)…424
第146図　石器実測図(1)……433
第147図　石器実測図(2)……434
第148図　石器実測図(3)……435
第149図　石器実測図(4)……436
第150図　石器実測図(5)……437
第151図　石器実測図(6)……438
第152図　石製品実測図(7)……439
第153図　古銭拓影図……440
第154図　低湿地調査……443
第155図　小田林遺跡炉穴配置図……447
第156図　小田林遺跡炉穴の規模分類・長径
　　方向……449
第157図　小田林遺跡古墳時代前期土器集成
　　(1)……458
第158図　小田林遺跡古墳時代前期土器集成
　　(2)……459
第159図　小田林遺跡古墳時代前期土器集成
　　(3)……460
第160図　時期別住居跡配置図……468

表　目　次

表１　縄文時代前期住居跡一覧表 ……269
表２　古墳時代前期住居跡一覧表 ……368・369
表３　時期不明住居跡 ……369
表４　炉穴一覧表 ……381
表５　土坑一覧表……391～393
表６　溝・堀一覧表 ……411
表７　石器一覧表……428～432
表８　古銭一覧表 ……441
表９　近辺遺跡における黒浜期住居跡の
　　形状・規模等一覧表 ……446
表10　南三島遺跡（第１・２・３・４・
　　５・６区）炉穴形態別集計表 ……448
表11　出土の石器と石質 ……451
表12　土器分類集計表 ……461

写真図版目次

本田遺跡・善長寺遺跡

PL 1 本田遺跡調査前全景,本田遺跡調査後全景
PL 2 第1号住居跡遺物出土状況,第1号住居跡
PL 3 第1号住居跡遺物出土状況
PL 4 第1号住居跡・グリッド出土遺物
PL 5 善長寺遺跡発掘前全景，8分の1グリッド発掘，遺構確認
PL 6 第1・3・8号住居跡
PL 7 第4・5号住居跡
PL 8 第6A(大)・B号住居跡，第6A号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
PL 9 第10・14・15A・B号住居跡，第3号土坑
PL 10 第11・12号住居跡
PL 11 第16(大)・17・51号住居跡，第17号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
PL 12 第18号住居跡,第27B号住居跡遺物出土状況
PL 13 第19・20号住居跡，第9号土坑
PL 14 第21・22号住居跡
PL 15 第23・24号住居跡
PL 16 第25・27A(小)・B号住居跡
PL 17 第29(大)・30(中央)・31(左)・34・35号住居跡
PL 18 第36・61(手前)・37・38号住居跡
PL 19 第38・39号住居跡遺物出土状況，第39号住居跡
PL 20 第40A(大)・B・41・42号住居跡
PL 21 第42号住居跡遺物出土状況,第43号住居跡
PL 22 第44・45・46号住居跡
PL 23 第47・48・49号住居跡
PL 24 第50・52・54号住居跡
PL 25 第54・55・56号住居跡
PL 26 第57・58号住居跡
PL 27 第59・60号住居跡
PL 28 第62号住居跡，第10号土坑(左)，第55号住居跡石製品出土状況,第24号住居跡紡錘車出土状況
PL 29 第1・2・5(大)・6(右)・7(上)・8(左)号土坑
PL 30 第4・11号土坑，第5号土坑遺物出土状況，実測風景
PL 31 第1・2号溝
PL 32 第1号堀
PL 33 発掘後全景，現地説明会
PL 34 善長寺遺跡全景航空写真
PL 35 第1号住居跡出土遺物
PL 36 第3・4・5号住居跡出土遺物
PL 37 第6A・B号住居跡出土遺物
PL 38 第8号住居跡出土遺物
PL 39 第11号住居跡出土遺物
PL 40 第12号住居跡出土遺物(1)
PL 41 第12号住居跡出土遺物(2)
PL 42 第12号住居跡出土遺物(3)
PL 43 第12号住居跡出土遺物(4)
PL 44 第14号住居跡出土遺物
PL 45 第15A号住居跡出土遺物(1)
PL 46 第15A・B号住居跡出土遺物(2)
PL 47 第16号住居跡出土遺物
PL 48 第17・18号住居跡出土遺物
PL 49 第19・20号住居跡出土遺物
PL 50 第20号住居跡出土遺物
PL 51 第21号住居跡出土遺物
PL 52 第24号住居跡出土遺物(1)
PL 53 第24号住居跡出土遺物(2)
PL 54 第24号住居跡出土遺物(3)
PL 55 第25号住居跡出土遺物(1)
PL 56 第25号住居跡出土遺物(2)
PL 57 第27A号住居跡出土遺物(1)
PL 58 第27A号住居跡出土遺物(2)

ＰＬ 59　第27Ｂ号住居跡出土遺物(1)
ＰＬ 60　第27Ｂ号住居跡出土遺物(2)
ＰＬ 61　第27Ｂ号住居跡出土遺物(3)
ＰＬ 62　第29号住居跡出土遺物(1)
ＰＬ 63　第29号住居跡出土遺物(2)
ＰＬ 64　第30・31・34号住居跡出土遺物
ＰＬ 65　第35号住居跡出土遺物(1)
ＰＬ 66　第35号住居跡出土遺物(2)
ＰＬ 67　第35号住居跡出土遺物(3)
ＰＬ 68　第35・36・37・38号住居跡出土遺物(4)
ＰＬ 69　第38号住居跡出土遺物(1)
ＰＬ 70　第38号住居跡出土遺物(2)
ＰＬ 71　第38号住居跡出土遺物(3)
ＰＬ 72　第39号住居跡出土遺物(1)
ＰＬ 73　第39号住居跡出土遺物(2)
ＰＬ 74　第39号住居跡出土遺物(3)
ＰＬ 75　第39号住居跡出土遺物(4)
ＰＬ 76　第40Ａ・Ｂ号住居跡出土遺物
ＰＬ 77　第42号住居跡出土遺物(1)
ＰＬ 78　第42号住居跡出土遺物(2)
ＰＬ 79　第43号住居跡出土遺物
ＰＬ 80　第45号住居跡出土遺物(1)
ＰＬ 81　第45号住居跡出土遺物(2)
ＰＬ 82　第45号住居跡出土遺物(3)
ＰＬ 83　第46号住居跡出土遺物(1)
ＰＬ 84　第46号住居跡出土遺物(2)
ＰＬ 85　第47号住居跡出土遺物
ＰＬ 86　第48号住居跡出土遺物
ＰＬ 87　第49号住居跡出土遺物(1)
ＰＬ 88　第49号住居跡出土遺物(2)
ＰＬ 89　第49・50号住居跡出土遺物(3)
ＰＬ 90　第51号住居跡出土遺物
ＰＬ 91　第53・55・56・57・60号住居跡出土遺物
ＰＬ 92　第４号土坑出土遺物
ＰＬ 93　第５号土坑出土遺物
ＰＬ 94　第１号溝，第１号堀，グリッド，表採出土遺物
ＰＬ 95　第１号製作跡出土剣形品(荒割り・形割り)
ＰＬ 96　第１号製作跡出土剣形品(研磨・穿孔・完成・破損)
ＰＬ 97　第１号製作跡出土円板(穿孔・完成・破損)
ＰＬ 98　第１・２号製作跡，第20号住居跡出土遺物（臼玉・管玉）
ＰＬ 99　第19号住居跡，第１号製作跡出土円板(形割り・研磨)
ＰＬ100　第２号製作跡出土臼玉
ＰＬ101　第３号製作跡出土臼玉
ＰＬ102　第４号製作跡出土臼玉
ＰＬ103　第５号製作跡出土臼玉
ＰＬ104　第56号住居跡出土臼玉
ＰＬ105　第１・２・３号製作跡，第14・42号住居跡，第１号堀出土勾玉
ＰＬ106　第２・４・５号製作跡，第56号住居跡，第１号堀出土円板，第24号住居跡，第４・５号製作跡出土剣形品
ＰＬ107　第１号堀，第４号製作跡，第24号住居跡出土紡錘車，第５号製作跡勾玉
ＰＬ108　第２・４・５号製作跡出土工作台・砥石
ＰＬ109　第１・２・５号製作跡，第40Ｂ号住居跡出土原石

小田林遺跡

ＰＬ110　調査終了時全景，試掘終了全景（北側）
ＰＬ111　発掘前全景(昭和61年度)，発掘前全景(昭和62年度)
ＰＬ112　遺構確認(南側台地)，発掘終了全景(南側台地)
ＰＬ113　遺構確認，発掘終了(G2区)
ＰＬ114　L1区遺構確認，L1f_5区遺物出土状況，第１・３・４・５号住居跡，第３号住居跡遺物出土状況
ＰＬ115　第６・７・８・９・16号住居跡，第５・９号住居跡遺物出土状況
ＰＬ116　第17・22・24・25・26号住居跡，第26号住居跡遺物出土状況，

ＰＬ117　第26・27・28号住居跡，第27・28号住居跡遺物出土状況
ＰＬ118　第29・33・34号住居跡，第30・33号住居跡遺物出土状況
ＰＬ119　第35・36号住居跡，第34・35・36号住居跡遺物出土状況
ＰＬ120　第37・38・39・41号住居跡，第36・38・40号住居跡遺物出土状況，第１号炉穴
ＰＬ121　第２・３・４・６・８・９・10号炉穴，第４号炉穴遺物出土状況
ＰＬ122　第11・12・13・14・15号炉穴，第11号炉穴遺物出土状況，第１号土坑
ＰＬ123　第５・６・８・10・11・16・21・22号土坑
ＰＬ124　第24・26・27・41・43・47・48・49号土坑
ＰＬ125　第51・52・53・54・55・57・59・60・63号土坑
ＰＬ126　第64・66・71・81・83・84号土坑，第84号土坑遺物出土状況，第１号溝
ＰＬ127　Ｇ・Ｈ区全景，第４・５・６・７・８号溝（北側），第２・４号井戸，現水田部（Ⅰ～Ⅳ区）
ＰＬ128　現水田部（Ⅲ・Ⅳ区）遺物出土状況，Ｉトレンチ土層セクション（東側），テストピット土層セクション（南壁），現水田部作業風景，班内研修
ＰＬ129　住居跡出土遺物(1)
ＰＬ130　住居跡出土遺物(2)
ＰＬ131　住居跡出土遺物(3)
ＰＬ132　住居跡出土遺物(4)
ＰＬ133　住居跡出土遺物(5)
ＰＬ134　住居跡出土遺物(6)
ＰＬ135　住居跡出土遺物(7)
ＰＬ136　住居跡，土坑，溝，トレンチ，遺構外出土遺物(8)
ＰＬ137　遺構外出土遺物(9)
ＰＬ138　遺構外出土遺物(10)
ＰＬ139　遺構外出土遺物(11)土製品・瓦・古銭
ＰＬ140　出土遺物(12)石器
ＰＬ141　出土遺物(13)石器
ＰＬ142　出土遺物(14)石器・石製品
ＰＬ143　出土遺物(15)石器・石製品

第1章　調査経緯

第1節　調査に至る経過

一般国道4号は一名奥州街道とも呼ばれ，本土を南北に縦貫する幹線道路である。総延長は791.5kmでわが国最長の路線であり，東京都中央区日本橋を起点とし，埼玉・茨城・栃木・福島・宮城・岩手の各県を縦断し，青森県青森市に至っている。

最近の物流の輸送方法の変化や人口の都市集中化などから，4号国道の交通量の増加は著しく古河・小山・宇都宮の各市街地の交通混雑のもとになっている。

建設省は，将来に渡る交通量の緩和を図るため，その解決策として新4号国道建設を計画し，昭和40年に計画策定のための調査を始め，昭和44年に「新4号バイパス」建設の計画を提示した。計画では，新4号バイパスは埼玉県越谷市と栃木県宇都宮市を結ぶ約82kmで，そのうち茨城県部分は21.35kmで，南から五霞村・境町・総和町・三和町・結城市を通過することとなった。

これに伴い，同年，宇都宮国道工事事務所から茨城県教育委員会に，当該路線上における埋蔵文化財の有無，その位置，その取り扱いについての照会がなされた。茨城県教育委員会では直ちに分布調査を実施し，総和町に12遺跡(内1遺跡は境町にもかかる)，三和町に12遺跡，結城市に3遺跡，計27遺跡の存在を確認した。

昭和56年6月15日，宇都宮国道工事事務所から茨城県教育委員会に対し，新4号国道改築事業の施工に係わる総和町地区と，結城市地区の埋蔵文化財の確認調査及び遺跡の取り扱いについて照会がなされた。茨城県教育委員会では再度分布調査を行い，同年10月22日，総和町地区の南坪A遺跡ほか11遺跡（S1～S11・17），三和町地区の二十五里寺A遺跡ほか11遺跡（S12～S16，S18～S24），結城市地区の善長寺遺跡ほか2遺跡（S25～S27）の計27遺跡を埋蔵文化財包蔵地として，発掘調査による記録保存の措置を講ずるよう回答した。調査機関としては財団法人茨城県教育財団を紹介した。同年10月29日，宇都宮国道工事事務所から茨城県教育財団に発掘調査の依頼があり，その後，茨城県教育財団では宇都宮国道工事事務所と協議を重ね，昭和57年4月20日委託契約を結んだ。こうして当教育財団による新4号国道関係遺跡の発掘調査は，昭和57年4月に結城市本田遺跡から実施されることになった。さらに，昭和57年に総和町の南坪A遺跡ほか7遺跡，昭和58年には同町北新田A遺跡ほか2遺跡，昭和59年には三和町の二十五里寺A遺跡ほか3遺跡，昭和60年には総和町の溜原B遺跡と三和町の下片田遺跡を9月までに調査を終了させ，10月から結城市の善長寺遺跡の調査を開始し，61年8月末日に終了した。引き続いて9月から小田林遺跡の調査を開始し，62年10月末日に終了した。

なお，新4号国道路線上の27遺跡の略号については，路線の走る南から北に向かって，第1図

のように記号を付した。

第2節　調査経過

各遺跡の調査経過については第5章以下で記すことにして，ここでは昭和57年度以降の，調査経過の概略を年度ごとに記述する。

昭和57年度

4月から発掘調査を開始し，結城地区の本田遺跡を1年間の計画で調査を開始したが本田遺跡は遺構・遺物が少なかったため，昭和57年7月末日で調査が終了した。その後工事用スケジュールに合わせて，結城地区の調査を一時中止して，総和地区の南坪A遺跡ほか7遺跡の調査を開始した。この8遺跡も遺構・遺物が少ないため，昭和58年3月末日で調査を終了した。

昭和58年度

当年度は総和地区の北新田A・B・C遺跡の調査を行った。なお，北新田A遺跡のうち約500㎡については，用地問題が未解決だったため，昭和60年度に調査を実施した。

昭和59年度

昭和59年4月からは，三和地区の二十五里寺A・B・C遺跡，溜原A遺跡の4遺跡の調査を進めた。4遺跡は遺構・遺物が少なかったため，昭和59年9月末日で調査を終了し，10月からは昭和57～59年の3ヶ年間に調査を終了した15遺跡（総和町10遺跡，三和町4遺跡，結城市1遺跡）の整理を行った。

昭和60年度

当年度は，総和地区の北新田A遺跡のうち用地問題が未解決であった500㎡，溜原B遺跡，三和地区の下片田遺跡を1年間の予定で調査を実施したが，溜原B遺跡と下片田遺跡は，遺構・遺物が少なかったため9月末日で調査を終了した。溜原B遺跡の調査をもって，総和地区の新4号国道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査はすべて終了した。その後，契約を変更し，10月から昭和61年3月までの予定で結城地区の善長寺遺跡の調査に入った。善長寺遺跡は多くの竪穴住居跡が検出されたため，昭和61年4月以降も調査を継続することになった。

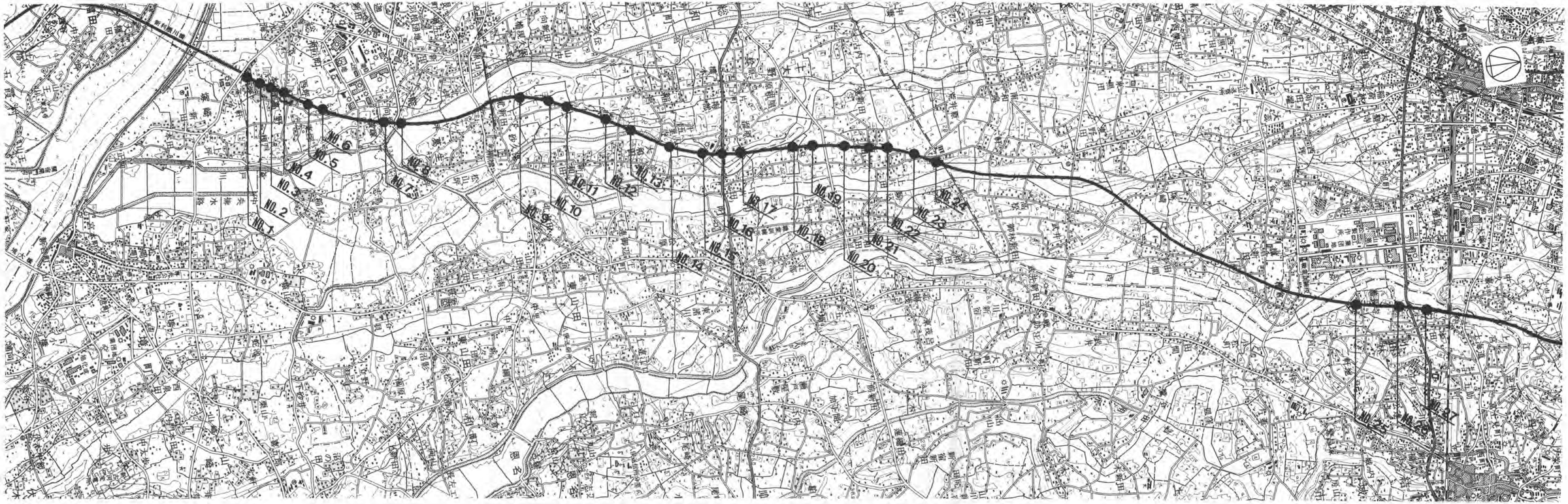
昭和61年度

4月から8月まで，前年度からの善長寺遺跡を調査し，9月から小田林遺跡の調査を実施した。

昭和62年度

4月以降も，引き続いて前年度からの小田林遺跡の調査を実施し，10月末日に終了した。

結城地区の本田遺跡・善長寺遺跡・小田林遺跡の3遺跡について，昭和57年4月から調査を開始し，昭和62年10月に小田林遺跡の調査が終了して，結城地区の「新4号国道」建設に伴う埋蔵



No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名
1	S1	南坪A遺跡	6	S6	西坪B遺跡	11	S11	北新田C遺跡	16	S16	溜原A遺跡	21	S21	中新田C遺跡	26	S26	小田林遺跡			
2	S2	南坪B遺跡	7	S7	向坪A遺跡	12	S12	二十五里寺遺跡	17	S17	溜原B遺跡	22	S22	上片田A遺跡	27	S27	本田遺跡			
3	S3	南坪C遺跡	8	S8	向坪B遺跡	13	S13	二十五里寺B遺跡	18	S18	下片田遺跡	23	S23	上片田B遺跡						
4	S4	高野遺跡	9	S9	北新田A遺跡	14	S14	二十五里寺C遺跡	19	S19	中新田A遺跡	24	S24	上片田C遺跡						
5	S5	西坪A遺跡	10	S10	北新田B遺跡	15	S15	二十五里寺D遺跡	20	S20	中新田B遺跡	25	S25	善長寺遺跡						

第1図　茨城県内新4号国道関係遺跡分布図

文化財発掘調査はすべて終了した。

なお，各遺跡の調査面積，期間，担当者は次のとおりである。

略号	遺跡名	面積	調査期間	担当者
S 27	本田遺跡	20,210㎡	昭57. 4. 1～57. 7. 31	久野俊度・中沢時宗
S 25	善長寺遺跡	7,144㎡	昭60. 10. 1～61. 3. 31	和田雄次・桜井一美
			昭61. 4. 1～61. 8. 31	小河邦男・桜井一美
S 26	小田林遺跡	23,507㎡	昭61. 9. 1～62. 3. 31	小河邦男・桜井一美
			昭62. 4. 1～62. 10. 30	久野俊度・桜井一美

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

結城市は茨城県の西部に位置し，東は下館市，関城町，南は八千代町，三和町，西・北は栃木県小山市に接している。人口は昭和63年５月現在で53,239人である。市域は東西幅約5.5km，南北幅約9.3kmで南北に細長く，面積は65.2㎢である。JR水戸線が市北部を東西に横切り，また，国道50号線がJRとほぼ平行して走っている。

結城市と八千代町，千代川村の一部，石下町の一部，水海道市の一部を含めて，結城台地と呼称されているが，当台地は南北に長く，長さは30km以上に及んでいる。東側では，鬼怒川を挟んで真壁台地に，南西側では，江川，飯沼川を挟んで猿島台地に接している。全体に平坦で起伏の乏しい，緩やかに南に傾斜する地形である。耕作は水田稲作と，麦を中心にした畑作であったが，最近は首都圏向けの野菜栽培が多くなってきている。

国道50号線と新４号バイパスが結城市小田林町で交差するが，善長寺遺跡はその地点から直線で南へ約0.6kmに位置している。結城市と小山市は，西仁連川とその支流の江川によって，市境を形成している。西仁連川は，結城市西端で江川と合流して南下し，善長寺北西で南東に向きを変えて流下し，下ノ宮付近で南南西に向きを変えて流れる。下ノ宮から，北東へ幅約200mほどの谷津が入っており，現在は水田として利用されている。結城市小田林地区は，西側に西仁連川，東側は下の宮から入る谷津に挟まれて，緩やかに南に傾斜する舌状台地を呈している。新４号国道は，この舌状台地の西縁辺部付近を通過する計画となっている。この国道上の調査遺跡には，国道50号線を境として北に本田遺跡，南に小田林遺跡，小田林遺跡の0.3km南に善長寺遺跡の３遺跡が所在している。これらの遺跡は，西方約0.3kmを南下する西仁連川に沿って台地奥まで形成された沖積地の水田に面する台地の西縁辺部に立地している。標高は31～37m，水田との比高は0.5～５mである。

遺跡の位置する台地は，20m下から砂層，粘土層，砂礫層の堆積を２回繰り返して16m堆積したのち，関東ローム層が約２mの厚さで堆積しており，さらにその上に腐植土が約２m堆積している。この腐植土を耕作土としている。

なお，当遺跡は善長寺遺跡として，文化課から照会があり調査を進めてきたが，結城市のその後の分布調査によれば，善長寺遺跡は，当遺跡の東側約100mに別遺跡として所在し，当遺跡は南原遺跡と呼称されている。

第2節　歴史的環境

結城市内の遺跡の数は，遺跡分布調査により，新発見の遺跡があいつぎ，昭和59年3月発行の結城市遺跡分布地図によれば，182遺跡が登載されている。遺跡は先土器時代，縄文，弥生，古墳，奈良，平安，鎌倉，室町，戦国，江戸時代とほぼ全時代にわたって認められるが遺跡の半数は古墳，奈良，平安時代で占められている。

先土器時代の遺跡は，当遺跡付近にはなく，市内東部に才光寺遺跡があり，ナイフ形石器や石槍の先端が出土している。また，県外の栃木県小山市では，東部の茨城県寄りで，当遺跡の北側約5kmに本郷前遺跡，同じく北側約2.5kmに八幡根遺跡があり，本郷前遺跡からはナイフ形石器，彫器，エンドスクレーパー，槍などが出土し，八幡根遺跡からは石器集中地点9か所が検出されている。

縄文時代になると，早期では，善長寺遺跡の北側約200mに小田林遺跡があるほか，南側約4kmに権現遺跡があり，茅山式の土器片が採取されている。前期の遺跡としては，善長寺遺跡の南東側約800mの塚越遺跡，南側約1.5kmの中曽根遺跡，南側約3.6kmの香取前A遺跡などで，黒浜式土器片の散布がみられる。中期では，善長寺遺跡の南東側約2.8kmに鹿窪坂の上遺跡があり，昭和54年に市教育委員会で調査し，住居跡2軒が検出された。そのほか，東側約2.5kmの西原遺跡，北東側約3.6kmの柳下A遺跡，東側約2.7kmの見晴町遺跡，東側約2.9kmの曽我殿台遺跡などから，阿玉台・加曽利E式の土器片が採取されている。これら中期の遺跡は，市内北部の台地上に，中央から北部にかけてほぼ直線上に並んで位置している。中期では特に堅果類の実や，パン状に炭化した遺物が多く出土している。後期の遺跡としては，善長寺遺跡の南側約4.3kmに東浦遺跡，南東側約2.4kmに沼尻向遺跡，北東側約3.9kmに松木合A遺跡，北東側約3kmに本町遺跡などがあり，称名寺・堀之内・加曽利B式・安行Ⅰ・Ⅱ式の土器片が採取されている。後期では特に底部に網代痕を残す土器が多く出土しており，中期と同じく北部台地上に，中央から北部にかけてほぼ直線上に並んで位置している。晩期では，前述の鹿窪坂の上遺跡，松木合A遺跡，善長寺遺跡の南東側約3kmに向原遺跡があり，安行Ⅲ式・大洞式土器片が出土・採取されている。小山市では，南東部の結城市寄りで江川対岸の，善長寺遺跡の北側約4.9kmに鉢形遺跡，北東側約4.3kmに向野上野原A遺跡，北東側約3kmに星の宮神社前遺跡，北東側約3.6kmに諏訪下遺跡，北東側約6.3kmに飯田裏遺跡が，また，江川を越えて結城市の真北に位置する東山田下遺跡（善長寺遺跡の北東側約6.4km），西高椅遺跡（同じく約6.3km），延島天神(A)・(B)遺跡（同じく約7.2km），伝河原遺跡（同じく7.5km）などが所在している。

弥生時代になると，稲作が始まり，遺跡も台地中央から河川近辺へと移ってくる。市内では，南西部の江川に沿った台地斜面部に確認された権現遺跡，善長寺遺跡の南側約3.4kmの南茂呂遺跡

がある。両遺跡とも弥生後期の土器片の分布がみられる。小山市では，前述の八幡根遺跡のほか，南東部の茨城県寄りに，明光(A)・(B)遺跡（善長寺遺跡の北側約4.4km），東本郷遺跡（北側約4.5km），下壱丁遺跡（北側約4.6km），白打遺跡（北側約5.1km），古光遺跡（北側約5.8km），西野台遺跡（北東側約4.6km），六道遺跡（北東側約5.2km）などがあげられる。

古墳時代になると4世紀の集落を主体とした遺跡がある。善長寺遺跡の南東側約1.2kmの水深遺跡では，小型坩と高坏が出土している。また，北東側約700mの新田東遺跡からは，壺，坩の破片が出土している。同じく北東側約6.3kmに四ッ京遺跡があり，器台，高坏が出土したが，他に籾痕を残す小型坩が出土し，この時代の稲作の証明がなされている。5世紀から古墳が確認され，善長寺遺跡の北東側約3.9kmの松木合浅間塚は全長約40mの前方後円墳で，粘土郭の主体部をもち，勾玉，鉄器，坩などが出土している。東側約2.9kmの曽我殿台遺跡，仙太郎稲荷塚古墳は共に全長30m未満の前方後円墳で，葺石におおわれ，刀子，石剣が出土している。南東側約6.7kmの林愛宕塚古墳は全長約30mの前方後円墳で，葺石と埴輪が出土したが，現在は消滅している。南東側約5.4kmの備中塚古墳は，径48mの円墳で，葺石におおわれ，埴輪が出土している。6世紀になると古墳の数は増加してくる。松木合4号墳からは鶏形埴輪，円筒埴輪が出土している。同じく松木合山の神塚は径約15mの円墳で円筒埴輪が出土している。林古墳群の消滅した古墳からは，直刀，鹿角装刀子，鉄鏃が出土している。また，善長寺遺跡の南東側約11.4kmの粕札古墳群の消滅した一古墳からは，勾玉，武具が出土している。また，戸崎古墳は横穴式石室がある古墳である。南東側約6.5kmの古山八幡塚は消滅してしまったが，直刀，須恵器，金環などが出土している。このほか，前述の曽我殿台や備中塚の古墳でも6世紀の古墳が確認されている。これに対して，栃木県小山市では，江川の対岸に，善長寺遺跡から南側に0.9～1.6km離れて，10基の5～6世紀の古墳が確認されているが，こちらはすべて円墳である。

以上，先土器時代から江戸時代にかけて，結城市及びその付近には数多くの遺跡が分布しており，原始～古代の各時代にわたって人々の生活が営まれていたが，調査例は少なく，今後の調査によって，より具体的になるものと思われる。

参考文献

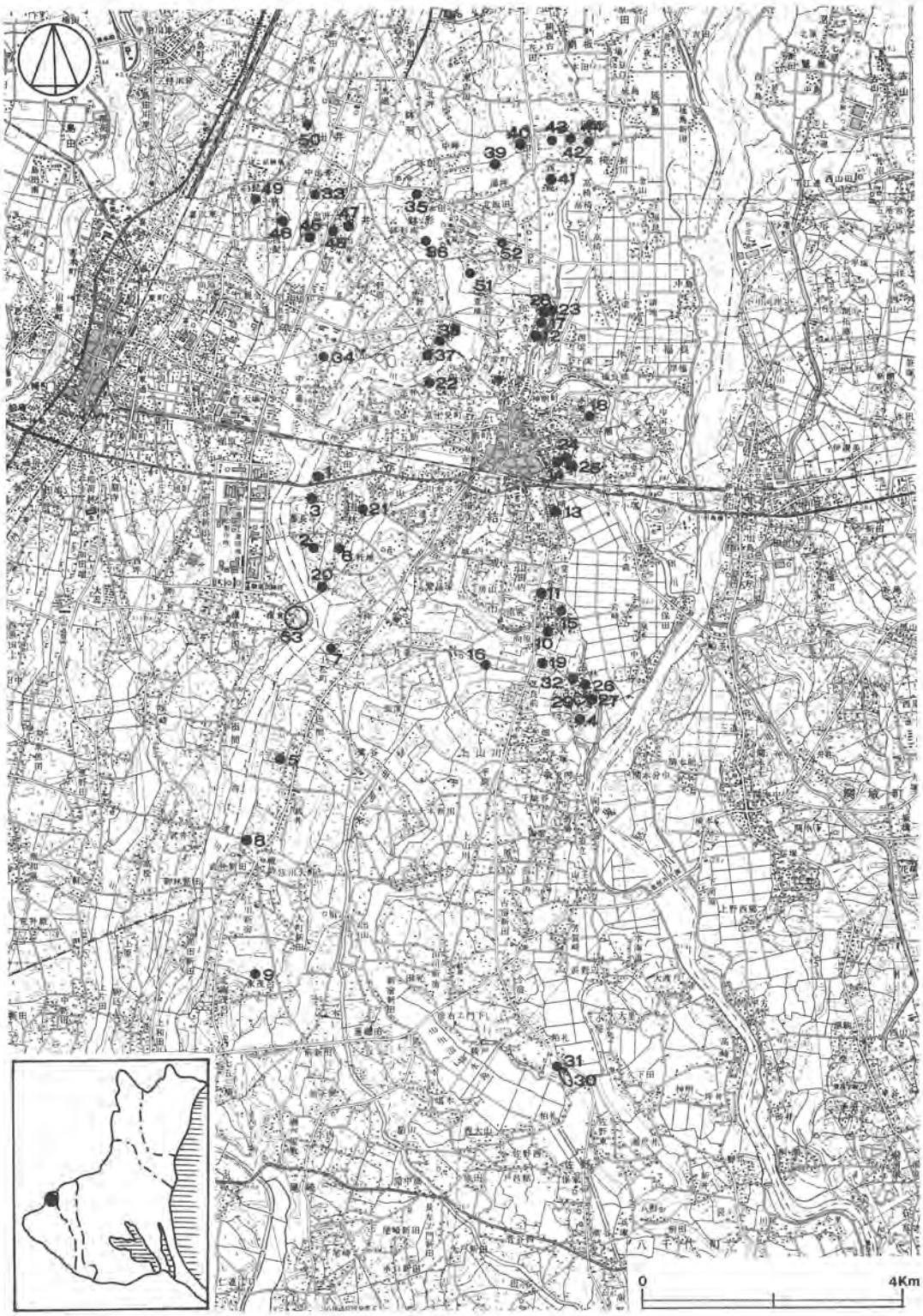
「結城市史　第四巻　古代中世通史編」結城市　昭和55年

「結城市遺跡分布地図」地名表　結城市教育委員会　昭和59年

「鹿窪坂の上遺跡」結城市教育委員会　昭和55年

栃木県埋蔵文化財調査報告第70集「本郷前遺跡」財団法人栃木県文化振興事業団　1985年

「栃木県遺跡地図」栃木県教育委員会　昭和52年



第 2 図　新 4 号国道周辺の遺跡分布図

表1　周辺の遺跡一覧表

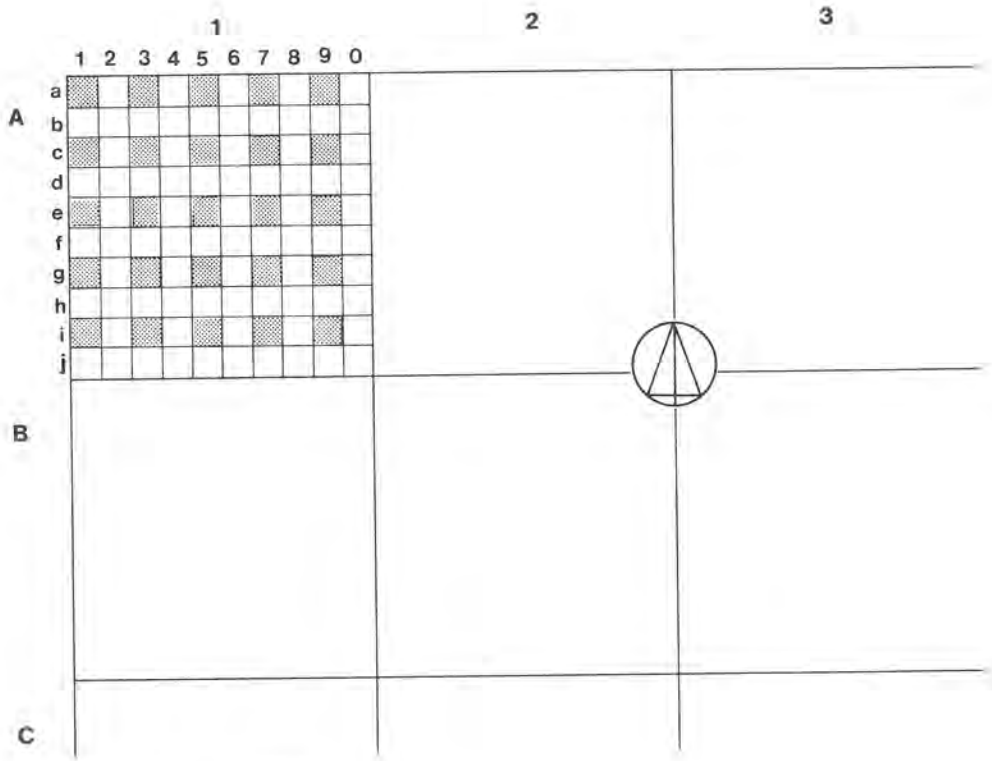
番号	遺跡名	遺跡台帳番号	番号	遺跡名	遺跡台帳番号	番号	遺跡名	遺跡台帳番号
1	本田	6029	19	向原	5903	37	星宮神宮前	3713
2	善長寺	5924	20	水深	5921	38	諏訪下	3711
3	小田林	2336	21	新田東	5928	39	飯田裏	3703
4	才光寺	5905	22	四ツ京	5947	40	東山田下	3716
5	権現	5916	23	松木合浅間塚	2331	41	西高椅	3718
6	塚越	5911	24	曽我田台	2332	42	延島天神(A)	3714
7	中曽根	5914	25	仙太郎稲荷塚	2332	43	延島天神(B)	3715
8	香取前	5917	26	林愛宕塚	2340	44	伝河原	2059
9	南茂呂	5918	27	備中塚	2341	45	明光(A)	3679
10	鹿窪坂の上	5901	28	松木合山の神塚	2331	46	明光(B)	3680
11	西原	5900	29	林古墳群	2340	47	東本郷	3682
12	柳下A	5890	30	粕礼古墳群	5909	48	下壱丁A	3677
13	観音台	5897	31	戸崎	5909	49	白打	3675
14	曽我田台	2332	32	古山八幡塚	2340	50	古光	3673
15	東浦	／	33	本郷前	3676	51	西ノ台	3710
16	沼尻向	3516	34	八幡根	3686	52	六道	3708
17	松木合A	2331	35	鉢形	3704	53	戸館古墳群	2063
18	本町	5895	36	向野上野原(A)	3707			

第3章　調査方法

第1節　地区設定

各遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第IX系原点を起点として，100mごとのX軸(南北)，Y軸（東西）の交点を遺跡内に求め，それを基準点とした。その交点が遺跡にない場合は，遺跡に最も近い交点を起点とし，そこから40mの倍数で遺跡内まで平行移動し，基準点とした。この点を基準にして，南北線上にX軸，東西線上にY軸をとり，40m方眼の大調査区を設定した。さらに大調査区を4m方眼の小調査区に分割した。つまり，40mの方眼の大調査区内に4m方眼の小調査区を100個設定したわけである。(善長寺遺跡の交点はX軸31,600m，Y軸920mである)。

大調査区の名称は，北から南へ大文字で，「A」・「B」・「C」……，西から東へ大文字で，「1」・「2」・「3」……とし，A1区，B2区等と表記した。小調査区名称は，北から南へ小文字で，「a」・「b」・「c」……「i」・「j」，西から東へ小文字で，「1」・「2」・「3」……「9」・「0」とし，大調査区と合わせて「A1a_1」・「B2b_2」区のように表記した。この調査区をグリッドと呼称した。



第3図　グリット概念図

第2節　遺構確認

遺構の確認作業は，本田遺跡では，幅2m，長さ16mのトレンチを東西方向に8mおきに設定して掘り込みを実施し，遺構の有無を確認した。遺構の確認状態に応じて，周囲を拡張した。善長寺遺跡は，調査区域を4分の1の割合でグリッドを発掘し，土層観察と共に遺構の分布状況を調べた。その結果，遺構の分布が濃密なため，遺構・遺物を破壊しない層まで重機によって全域を表土除去し，その後に遺構確認を行った。小田林遺跡は，遺跡中央に幅2m，長さ200mのトレンチを南北方向に，さらに東西方向に幅2m，長さ16mのトレンチを20mおきに設定して掘り込みを実施した。遺構の多い北部は，遺構・遺物を破壊しない層まで重機によって表土除去した。表土からの出土遺物は，グリッド，トレンチ名を記録して取り上げた。

第3節　遺構調査

各遺構の調査については次のような方法を用いた。

住居跡の調査は，長軸方向とそれに直行する方向に，土層観察用のベルトを設け，4分割にして掘り込み，地区の名称を北から時計廻りに1～4区とした。土坑の調査は，長径で二分する二分割法で実施した。溝・堀の調査は，適宜な位置に土層観察用のベルトを設定し，何区かに分け，各区ごとに掘こんだ。

土層については，色相，各種粒子の含有状態，粘性，締まり，給水性，混入物等と堆積状況を観察して分類の基準とした。

遺物の取り上げについては，各遺構名，遺物番号，出土位置，レベル，年月日等を記録して取り上げた。

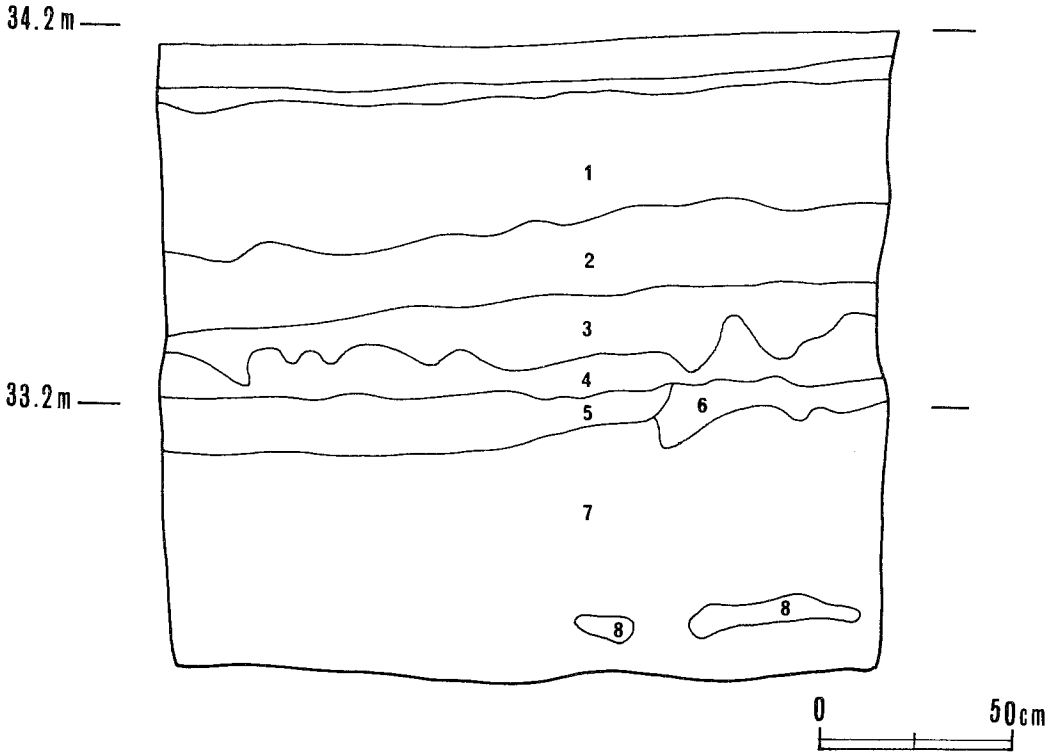
平面実測については，遺跡内の大調査区杭を基準に，水糸で1m方眼に地張りし，錘を使って測量した。土層断面，遺構断面の実測は，標高を用いて水糸を水平にセットし，水糸を基準として実測した。

記録の過程は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況平面図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順を基本とした。図面，写真等に記録できない事項については，調査日誌や遺構カードに記録した。

第4節　基本層序

本田遺跡は，特別にテストピットは掘らなかった。

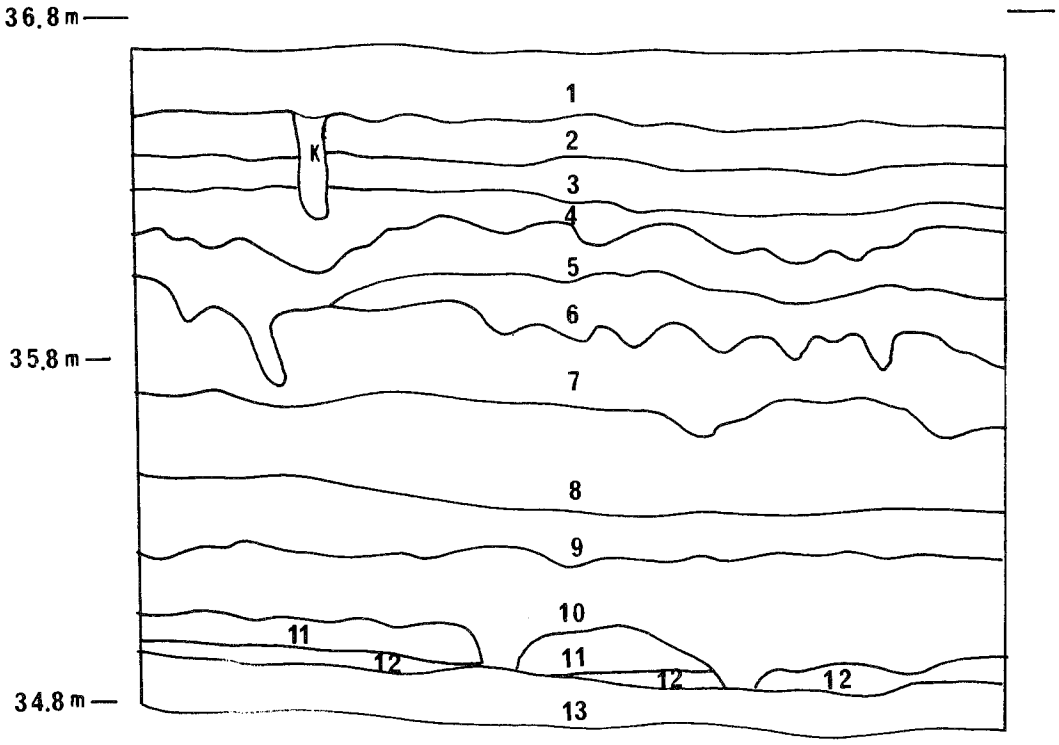
善長寺遺跡は，中央のD1区にテストピットを掘り，土層観察したのが第４図である。１層は暗褐色土で，耕作土の残りである。２・３層はソフトローム層で，３層は２層よりも黒味がかっている。４・５・７・８層はハードーローム層で，５・７層は鹿沼土の粒子を含んでいる。６層は鹿沼土層で，厚さは約15cmであるが，図のように堆積は部分的である。第２章第１節で述べた土層断面との対比では，１層が腐植土，２～８層がローム層にあたる。



第４図　善長寺遺跡テストピット図

小田林遺跡の調査区内は，A区～H区にかけて土取りと撹乱が多いため，縄文時代前期の住居跡が検出された遺跡南側部のLlg_0区をモデルとして基本層序としたのが14頁の図である。１層は表土で，耕作土であり，厚さは約20cmである。２～４層は暗褐色・黒色を呈しており，ローム粒子と炭化粒子を少量含んでいる。厚さは約30cmである。５・６層は漸移層で，暗褐色を呈しており，遺物が少量出土する。厚さは約10～20cmである。この下層のソフトロームとの境は，鋸歯状を呈している。７・８層はソフトローム層であるが，８層には下層のハードロームが混じっている。遺構はこの層から確認されている。厚さは約50cmである。９・10層はハードローム層で，９層は10層より黒味の強い褐色でかなり硬く締まっている。厚さは30～50cmである。11・12層は鹿沼層で，11層は12層より大きい粒子が堆積している。厚さは約10～20cmで，締まりはやや弱く，図の

ように断続的に堆積している。13層はハードローム層で，10層より非常に硬く締まっている。鹿沼粒子が少量混じっている。



小田林遺跡テストピット図

第4章　遺構・遺物の記載方法

第1節　遺構の記載方法

本書における遺構の記載方法は，下記の要領で統一した。

1　使用記号

住居跡－SI　　土坑－SK　　溝・堀－SD　　炉－F　　ピット－P

炉穴－FP　　井戸－SE

2　遺構に伴う施設等の表示方法

炉 　焼土

3　土　層

土層観察は，『新版標準土色帖』（小山忠正・竹原秀雄編著，日本色研事業株式会社）を使用し，整理の段階で土層を次のように分類記号化し，図中にその記号をもって載せた。

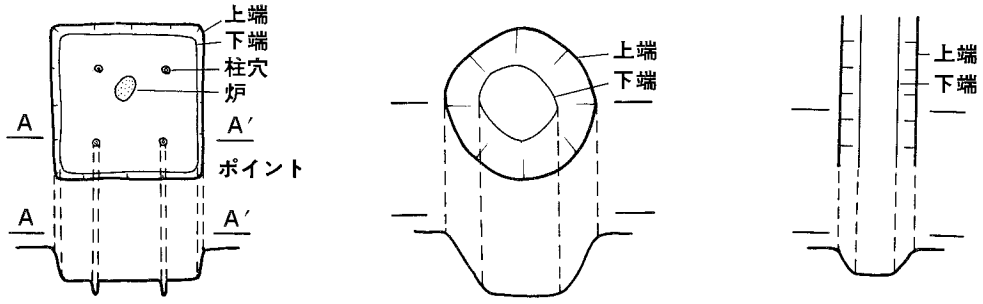
表2　土層分類表

番号	土色名	色相　明度／彩度	含有物
1	黒色	Hue 7.5YR 2/1	a　黒色土粒子
2	黒褐色	Hue 5YR 2/2 3/1	b`　焼土粒子多量
	〃	Hue 2.5YR 4/8	b　焼土粒子
	〃	Hue 7.5YR 3/1 3/3	b′　焼土粒子少量
	〃	Hue 10YR 2/3 2/2 3/2	b″　焼土粒子極少量
3	〃	Hue 7.5YR 2/2	c　焼土ブロック
4	〃	Hue 7.5YR 3/2	c′　焼土ブロック少量
5	極暗褐色	Hue 7.5YR 2/3	d`　炭化粒子多量
6	極暗赤褐色	Hue 5YR 2/3 2/4	d　炭化粒子
7	暗褐色	Hue 7.5YR 3/3	d′　炭化粒子極少量
	〃	Hue 2.5YR 3/4	d″　炭化粒子少量
8	〃	Hue 7.5YR 3/4	e　炭化材
	〃	Hue 10YR 3/3 3/4	f　炭化ブロック
9	暗赤褐色	Hue 5YR 3/2 3/3 3/4 3/6	g`　ローム粒子多量
10	褐色	Hue 7.5YR 4/3	g　ローム粒子
	〃	Hue 10YR 4/6	g′　ローム粒子少量
11	〃	Hue 7.5YR 4/4	g″　ローム粒子極少量
12	〃	Hue 7.5YR 4/6	h　ロームブロック
13	赤褐色	Hue 2.5YR 4/6 4/8	h′　ロームブロック少量
	〃	Hue 5YR 4/6 4/8	h″　ロームブロック極少量

14	にぶい赤褐色	Hue 5YR 4/3 4/4	i ローム小ブロック
15	明褐色	Hue 7.5YR 5/6 5/8	j ソフトローム
16	明赤褐色	Hue 5YR 5/8	k 撹乱
17	橙色	Hue 7.5YR 6/8	l˙ 鹿沼土多量
18	にぶい橙色	Hue 5YR 6/4	l 鹿沼土
19	明黄褐色	Hue 10YR 6/6	m˙ ハードロームブロック多量
20	浅黄色	Hue 2.5YR 7/4	m ハードロームブロック
21	黒褐色	Hue 2.5YR 3/1	m′ ハードロームブロック少量
22	褐色	Hue 10YR 4/4	m″ ハードロームブロック極少量
23	灰褐色	Hue 7.5YR 4/2	n˙ 砂粒多量
24	暗赤褐色	Hue 7.5YR 3/3	o˙ 礫多量
25	黄褐色	Hue 10YR 5/8	p 焼土小ブロック
26	黒褐色	Hue 10YR 3/1	q ソフトロームブロック
27	灰黄色	Hue 2.5YR 7/2	q″ ソフトロームブロック極少量
			r 鹿沼土ブロック
			s′ 炭化物少量
			t ローム大ブロック
			u 粘土
			v 鹿沼土粒子
			w 小石

4 遺構実測図の作成方法と掲載方法

(1) 住居跡　　(2) 土　坑　　(3) 溝・堀



第5図　遺構実測図の作成方法

○住居跡は，縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし，それをさらに大きさに応じて，3分の1，4分の1，5分の1に縮小して掲載した。

○土坑は，縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし，それをさらに3分の1に縮小して掲載した。

○溝・堀は，縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし，それをさらに大きさに応じて，3分の1，4分の1に縮小して掲載した。

○遺構からの出土遺物は，遺構平面図及び断面図に出土位置を記号で表示し，接合できた土器は実線で結んだ。出土遺物に付した数字は，遺物実測図の番号を指す。

5　一覧表の見方について

(1)　住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	炉	覆土状態	出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)							

○位置は，遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。

○主軸方向は，座標北と長軸のなす角度で示した。

○平面形は，掘り込み上面の形状を記した。

○規模の長軸×短軸は，上面の計測値，壁高は残存壁高の計測値を記した。

○床面は，踏み固められた度合いを「硬い」・「普通」・「軟らかい」に分類して記した。

○柱穴数は，その住居跡に伴うと考えられる柱穴数を記し，検出されない場合は「－」とした。

○炉は，その位置を記し，検出されない場合は「－」とした。

○覆土は，堆積層数を記し，堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」，撹乱を受けている場合は「撹乱」と記した。

○出土遺物は，主な遺物名や出土量を記した。

○時期は，出土遺物から時期判定の可能な範囲で，土器型式によって記した。

○備考は，重複関係，その他の特記事項を記した。

(2)　土坑と炉穴一覧表

土坑・炉穴番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	坑底	覆土状態	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					

○壁面は，底面からの立ち上がりの状態を簡潔に記した。

○坑底は，⌣「平坦」，◡「椀状」，◡「皿状」，〰「凹凸」というように表記した。

○その他の欄は，住居跡一覧表の項目に準じた。

第２節　遺物の記載方法

1　実測図の作成方法と掲載方法

(1)　作成方法

○土器は，四分割法を用い中心線で挟んだ左側に側面，右側に内面及び断面図を作成した。

○石製品は，展開図法を基本とした。

○上記以外の遺物については，効果的と思われる方法で実施した。

(2)　掲載方法

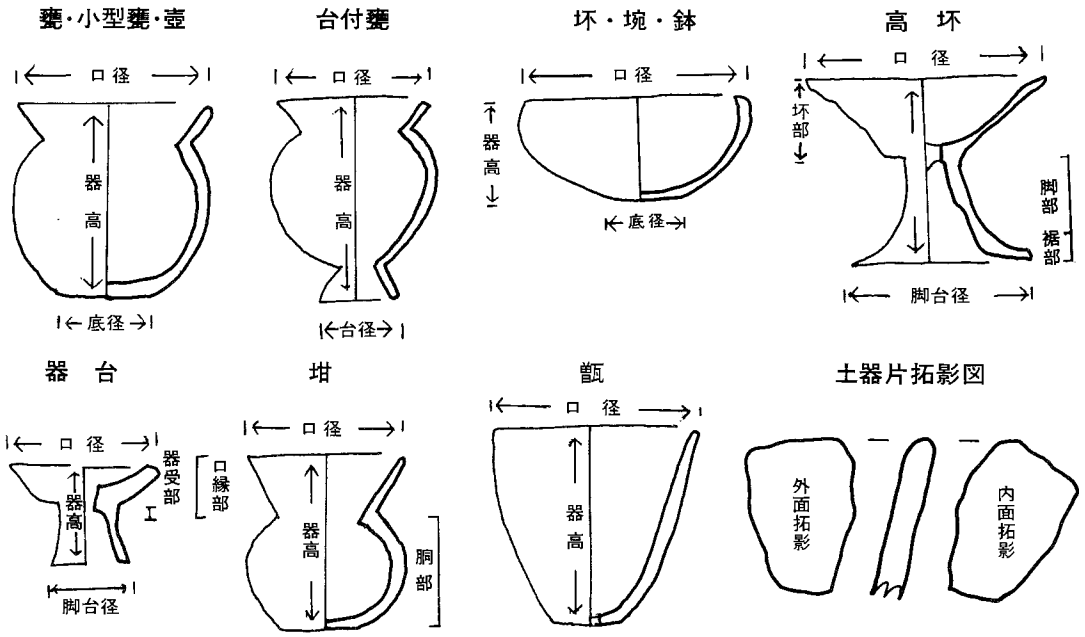
○実測図の掲載にあたっては，縮尺３分の１を基本としたが，遺物の大きさによっては原寸で掲載した。

○土器拓影図は，右側に断面を載せ，表裏２面を掲載したものは，断面を挟んで左側に表面，右側に裏面を，縮尺３分の１で掲載した。

○胎土に繊維が含まれる土器については，断面図中にドットを落として示した。

○石器実測図中における使用痕は，次のように表した。敲きの範囲は，|←□ □→| および◌で，磨りの範囲は，|←○ ○→| および◌で，凹みの範囲は破線で◌のように，砥石の使用範囲は←→のようにそれぞれ表した。

○遺物に付した番号は，土器，土製品，石器ごとに通し番号をつけ，遺構実測図，写真図版及び一覧表の備考欄に表わした。



第６図　各部位の名称と法量表現方法（土器）

2　遺物解説表について

遺構ごとの遺物を，次のような表にまとめた。

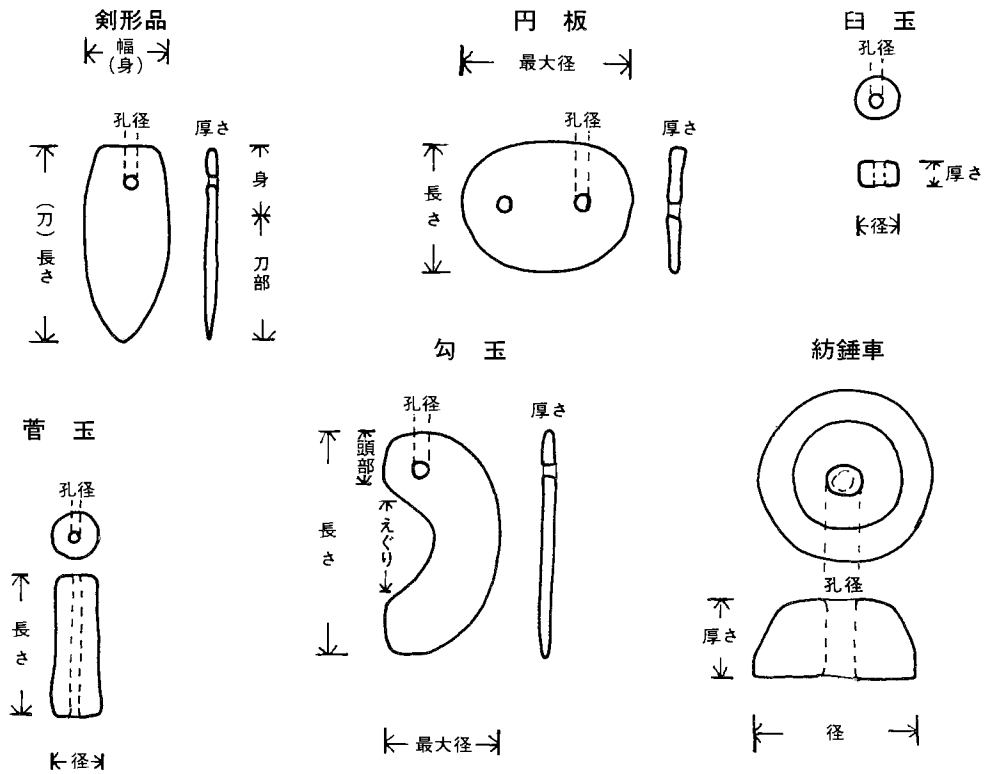
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考

○番号は，実測図版中の番号と同一である。

○法量は，口径－A，器高－B，底径－C，脚台径－D，とし単位はcmである。なお，A・C・Dの（　）は推定値であり，Bの（　）は残存高である。

○胎土・色調・焼成の欄は，上から胎土・色調・焼成の順で記した。焼成については，焼き締まって硬いものは，良好，焼成があまく手でこすると器面が剝離するものを不良とし，その中間のものを普通とした。色調は，前説の土層の分類と同じ土色帖を使用した。

○備考は，完存率や付着物，その他必要と思われる事項を記した。



第7図　各部位の名称と法量表現方法（石製品）

朱彩土器・石製品の表示方法

朱彩－ 剣形品－▲　　円板－●　　勾玉－○　　臼玉－△　　管玉－☆

石器一覧表

遺物番号	名　称	出土地点	法　量				石　質	備　考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		

土製品一覧表

図版番号	名　称	出土地点	法　量				備　考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	

○法量は，それぞれの最大値を記し，(　)をつけた数値は，一部を欠損しているものの現存値である。

○備考は，特徴等を記した。

第5章　本田遺跡

第1節　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県結城市小田林字西浦1,861ほかに所在し，面積は20,210㎡である。現況は，畑で一部水田となっているが，畑の約3分の2は梨畑跡である。当遺跡は結城市の北西部で，JR水戸線の小田林駅の南西約1kmに位置し，東西に走る国道50号線の北側に接している。西方約300mには，茨城県と栃木県との県境をなす江川が南流し，江川に沿った沖積地には水田が開けている。当遺跡は，この水田に面する大地の西縁辺部に立地しており，標高は31～35mである。遺跡は幅約80m，長さ約300mと南北に長く，南から北へ，また東から西へなだらかに傾斜して水田へと続いている。そのため水田面との比高は，遺跡の北西部では約0.5m，南東部では約5mとなっている。国道50号線を挟んで当遺跡の南方150mの新4号バイパス路線上には古墳時代の小田林遺跡が所在し，その南方約300mには同じく新4号バイパス路線上に古墳時代の善長寺遺跡が所在する。当遺跡からは古墳時代の住居跡1軒が検出され，トレンチからは石器や内耳土器片が出土している。

第2節　調査経過

4　月　本田遺跡の調査開始にあたり，作業員募集，器材搬入，プレハブ設置，遺跡測量等を行った。

5　月　鍬入れ式を行い，調査を開始した。上物除去及び草刈りを行い，調査前の遺跡全景写真を撮影した。X軸＋32,600m，Y軸－1,120mの交点を基準として調査区を設定した。当遺跡の南半分は梨畑跡であり，梨の根株が規則的に並びグリッド内に4～5株ずつかかるため，40m四方の大グリッド内に幅2m，長さ16mのトレンチを東西方向に8mおきに8本ずつ設定して，遺構確認をすることにした。（第9図）

6月前半　第1段階として南から北に向かってトレンチを交互に1本おきに発掘したが遺構は確認されず，G3区からわずかに石器2点と内耳土器片が出土しただけであった。F3区とG3区の東側の部分を除いては，表土が約50～80cmと厚く，表土の下は粘土層となっており，遺物はほとんど出土しなかった。

6月後半　第2段階として，残りのトレンチを発掘し，G3－7トレンチに住居跡1軒が確認された。遺構が確認されたG3－7トレンチを拡張した。

第 8 図　本田遺跡地形図

7月前半　第1号住居跡の調査を行った。遺物は少なく，土師器の埦，坩などが出土した。順次写真撮影，実測を行い第1号住居跡の調査を終了した。

7月後半　遺跡全体の草刈り及び清掃後，遺跡の調査後全景写真を撮影し，本田遺跡の調査を完了した。

第3節　遺構と遺物

当遺跡では，住居跡が1軒検出された。遺物は住居跡から土師器が少量出土し，トレンチからは，石器や内耳土器が出土している。

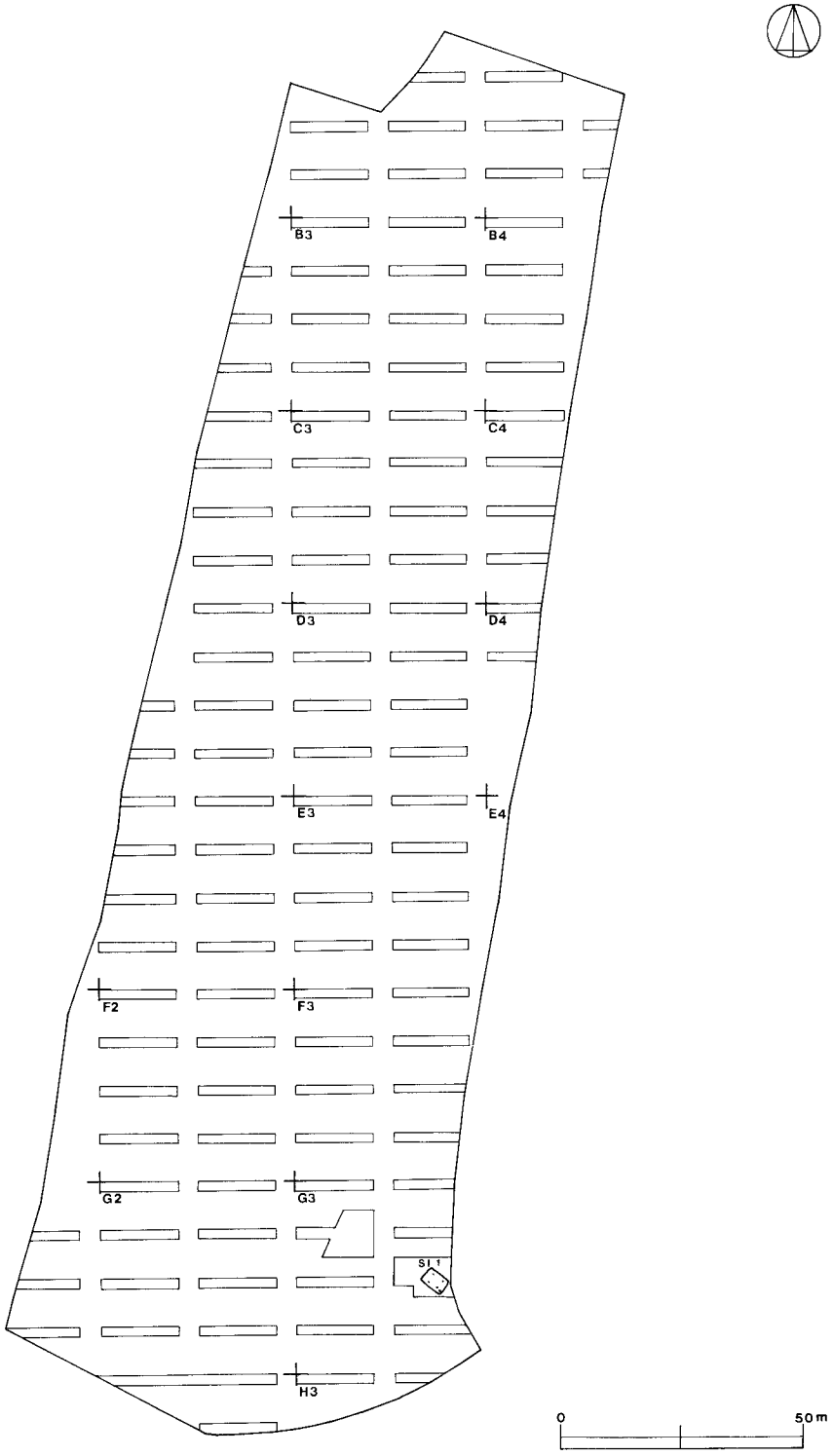
1　住　居　跡

第1号住居跡（第10図）

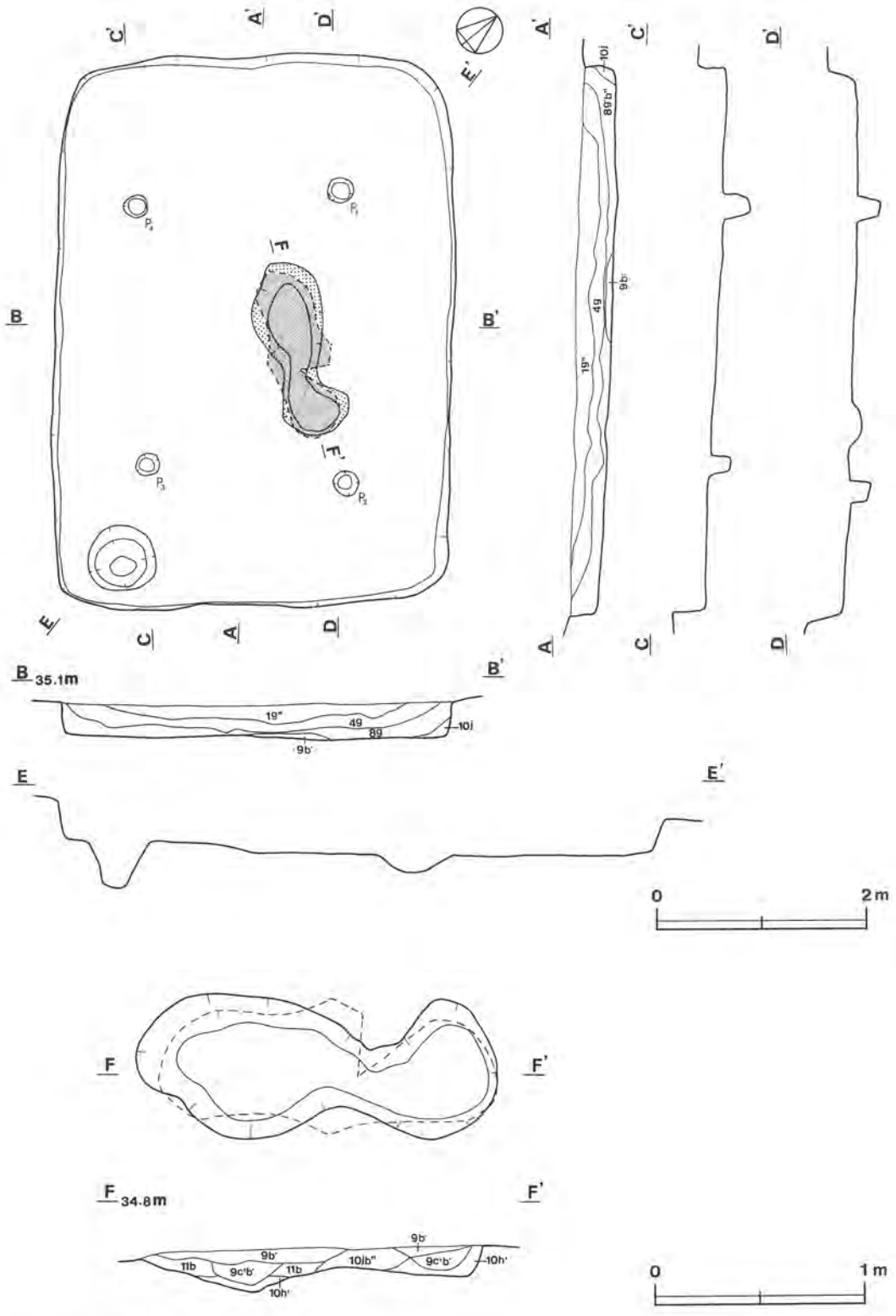
本跡は，遺跡の南東端に位置し，$G3f_8$区を中心に検出された。

平面形は長軸5.23m・短軸3.80mの隅丸長方形を呈しており，主軸方向はN－52°－Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり，しっかりとしている。壁高は約30cmである。床面は平坦で，やや軟かいが，炉跡の周囲は硬く締まっている。壁溝は確認されていない。ピットはP_1～P_4の4か所検出され，それぞれ直径約25cm，深さ25～30cmである。ピットはいずれも対角線上に，等間隔に掘られており，主柱穴と思われる。南コーナーには貯蔵穴が検出されている。平面形は直径約65cmの円形を呈しており，深さは約40cmである。住居跡中央部のやや東寄りには炉跡が検出されている。長径1.7m・短径0.5mで，二つの炉が接続した形を呈している。炉内には焼土が充満し，炉床は硬く焼けてブロック状である。覆土はローム粒子を含む黒褐色土と暗褐色土が主で，自然堆積の様相を示している。

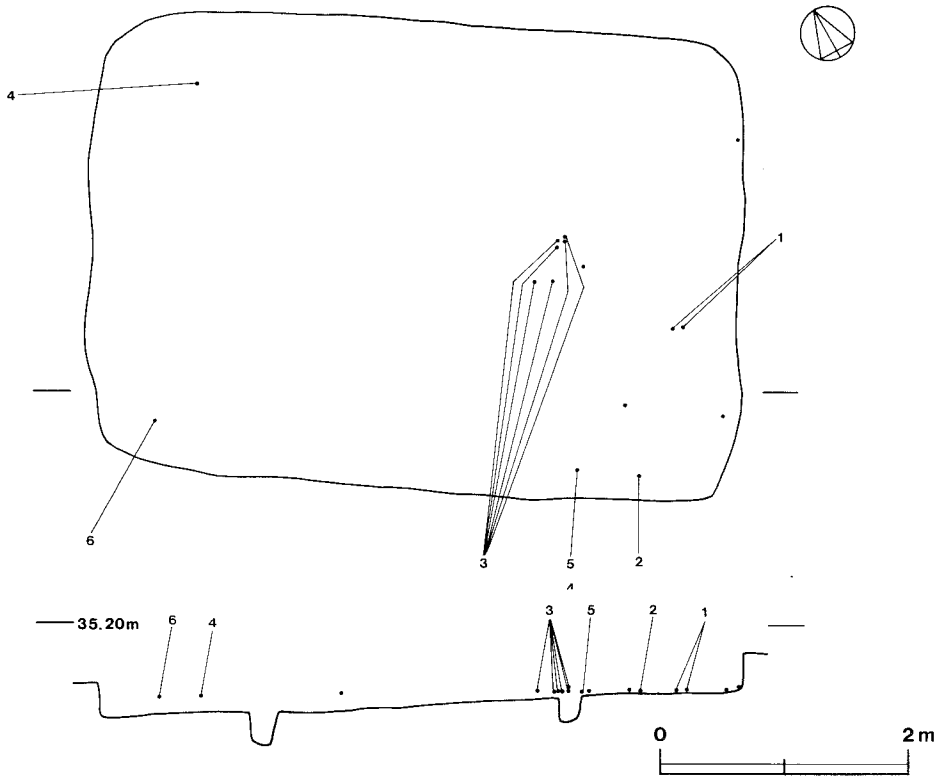
遺物は土師器の甕・埦・坩・高坏形土器などが出土しているが，量は少ない。また，東コーナー付近から，メノウの石片（第14図－4）が出土している。



第 9 図　本田遺跡全体図



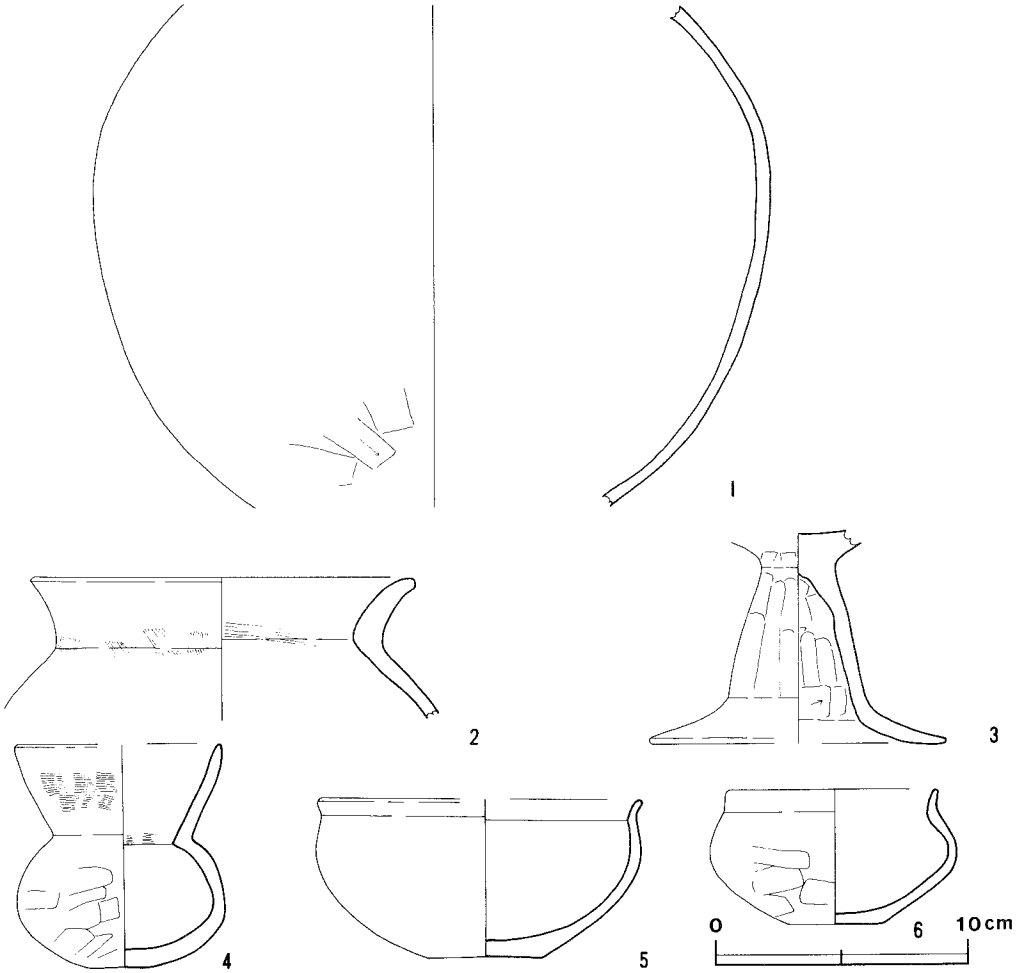
第10図　第1号住居跡・炉跡実測図



第11図　第１号住居跡遺物出土状況図

第１号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 1	甕形土器 土師器	B(20.5)	胴部はほぼ球形を呈している。	胴部内面－ナデ 胴部外面－ヘラ削り	砂粒 にぶい橙色 良好	10%
2	甕形土器 土師器	A 15.4 B (5.4)	口縁部は「く」の字状に外反している。胴部欠損	口縁部内・外面－横ナデ 頸部内面－ハケ目 胴部内・外面－ナデ	砂粒 にぶい橙色 良好	100%
3	高坏形土器 土師器	B (8.2) C(11.7)	坏部欠損。脚部はやや張りながら開き，裾部は屈曲して大きく広がっている。	脚部内・外面－ヘラ削り 裾部内・外面－横ナデ	砂粒 にぶい橙色 良好	40%
4	坩形土器 土師器	A(8.3) B 9.1	脚部中位はやや張り扁平な球形をなし，口縁部はやや内彎気味に開いている。丸底である。	口縁部－横ナデ 頸部－横位のハケ目 胴部内面－全体に磨滅 外面－ヘラ削り	砂粒 にぶい橙色 普通	80%
5	塊形土器 土師器	A(12.8) B 6.4 C 4.5	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がっている。口縁部は短く外傾している。平底である。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ナデ 底部－ヘラ削り	砂粒 橙色 良好	100%
6	塊形土器 土師器	A 8.3 B 5.5 C 3.9	体部は大きく開いて立ち上がり，中位よりやや上からすぼみ，口縁部は直立している。平底である。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内面－ナデ 体部外面－ヘラ削り	砂粒 橙色 良好	100%



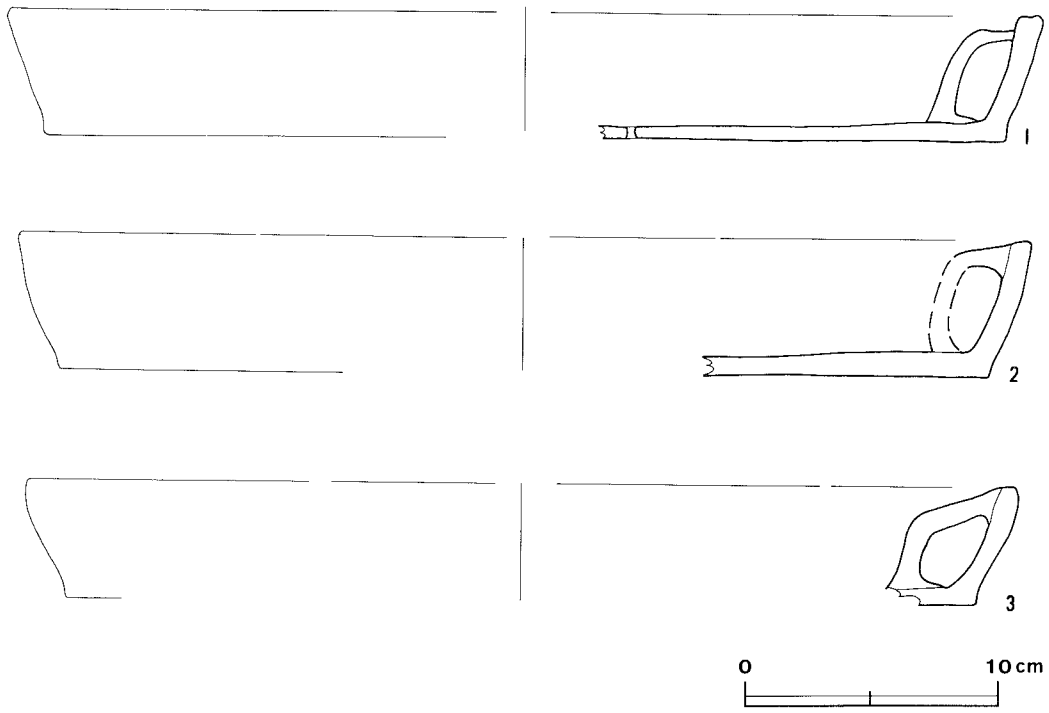
第12図　第１号住居跡出土遺物実測図

2　遺構外出土遺物

各トレンチからの遺物は少ないが，内耳土器や石器が出土している。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器　種	法　量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第13図 1	内耳土器	A(41.2) B　5.1 C(38.6)	体部は短く外傾している。口唇部は平坦である。	内・外面－ナデ	砂粒 にぶい橙色 良好	20%
2	内耳土器	A(40.3) B　5.5 C　37.2	体部はやや内彎気味に外傾している。口唇部は平坦である。	内・外面－ナデ	砂粒 褐灰色 良好	40%
3	内耳土器	A(39.0) B　4.8 C(36.4)	体部は短く外傾している。	内・外面－ナデ	砂粒 褐灰色 良好	10%



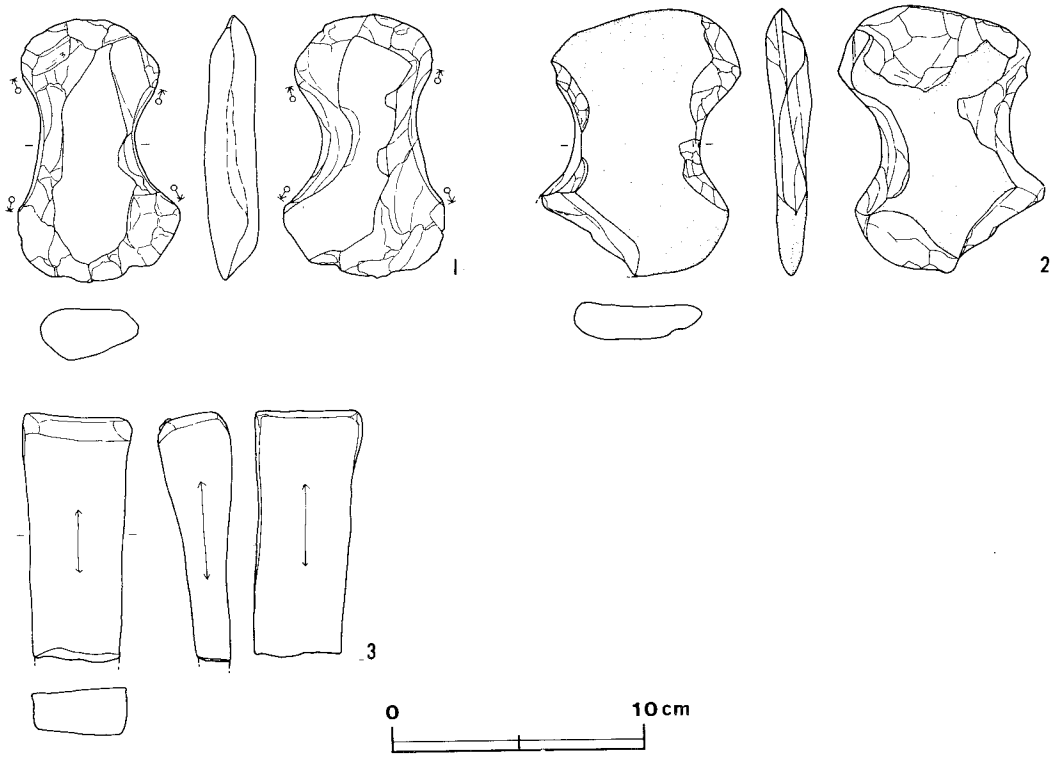
第13図　遺構外出土遺物実測図（1）

打製石斧（第14図－１・２）

１・２とも分銅形の石斧で，原礫面を多く残し，粗製である。１は刃部，括れ部とも大まかな剝離である。２は左側下部が裏面からの加撃で欠損している。刃部は片面から作り出されている。１は長さ10.7cm，幅6.5cm，厚さ2.2cm，重量165ｇである。２は長さ10.8cm，幅8.1cm，厚さ1.8cm，重量161ｇである。１・２とも石質は安山岩である。

砥石（第14図－３）

扁平な直方体で，約半分を欠損している。両端を除いて４面が使用されており，そのうち広い２面が多く使用されて薄くなっている。現存長は10.1cm，幅4.4cm，厚さ1.4～3.7cmで，石質は流紋岩である。



第14図　遺構外出土遺物実測図（2）

第4節　ま　と　め

当遺跡からは，住居跡1軒が検出されたにとどまったが，遺物から第1号住居跡の時期と，当遺跡と周辺の地形から集落の広がりを考えてみる。

第1号住居跡からは少量であるが，甕，椀，坩，高坏などの土師器が出土しており，これらの器形，整形を観察してみる。甕は，口縁部が「く」の字状に開き，胴部はほぼ球形で，ヘラ削りやナデが見られ，一部刷毛目が残っている。椀は，丸みの強い体部を持ち，口縁部は短く外傾し，平底である。坩は，小型で口径と胴径がほぼ等しく，口縁部が内彎気味に開く。また，胴部にはヘラ削りが見られ，丸底である。高坏は坏部が欠損しているが，脚部はややふくらみを持ちながら開き，裾部は屈曲して広がっている。以上，土器の特徴からは和泉Ⅰ式に比定され，本跡は古墳時代中期前半のものと思われる。

また，当遺跡の地形は，西または北に向かうにつれだんだんと低くなり，北西端は水田面とあまり差がなく，標高約31m前後である。第1号住居跡が検出されたG3区とF3区の東側部分は，遺跡の南東部に当たり，遺跡内で最も高い部分である。また，この部分は周囲より一段高くなって

おり，標高34～35mである。土層もこの高い部分を除いては，表土下にはほとんどローム層も見られず，粘土層が全面に広がっており，遺構は確認されなかった。一方，調査区域外になるが，第1号住居跡の南東部は，標高35～36mの平坦地となっている。また，第1号住居跡の南東部には，同時期の土器片の散布が見られる。これらの地形や遺物の散布からすると，当遺跡の南東部には集落の存在が推定され，第1号住居跡は，その周辺に位置するものと思われる。

第6章　善長寺遺跡

第1節　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県結城市小田林字南原387の2ほかに所在し，面積は7,144㎡である。現況は畑，山林で，部分的に宅地も含まれている。当遺跡は結城市の北西部にあり，JR水戸線小田林駅の南西約1.5㎞，市域を東西に走る国道50号線の南約1㎞に位置している。西方約300mには，栃木県との県境をなす江川が南流し，江川に沿った沖積地には水田が開けている。当遺跡はこの水田に面する舌状台地の南西端に立地しており，標高は33～35mである。遺跡は幅東西約40m，長さ南北約180mと南北に長く，北から南へなだらかに傾斜して水田へと続いている。そのため，水田との比高は遺跡の北部で3m，南部で約2mとなっている。当遺跡の北方約250mの新4号バイパス路線上には，縄文時代・古墳時代の包蔵地とされている小田林遺跡が所在し，さらに，国道50号線を越えて小田林遺跡の北方約0.5㎞には，昭和57年度に発掘調査をした古墳時代の本田遺跡が所在する。

当遺跡からは古墳時代の住居58軒，土坑11基，溝2条，堀1条が検出され，同時代の遺物が土器収納箱に約150箱出土している。

第2節　調査経過

善長寺遺跡は，昭和60年10月から昭和61年3月の6か月の予定で調査を開始したが，遺構数が多いため昭和61年度も調査継続し，昭和61年8月で完了した。以下，月ごとに簡単に経過を記述する。

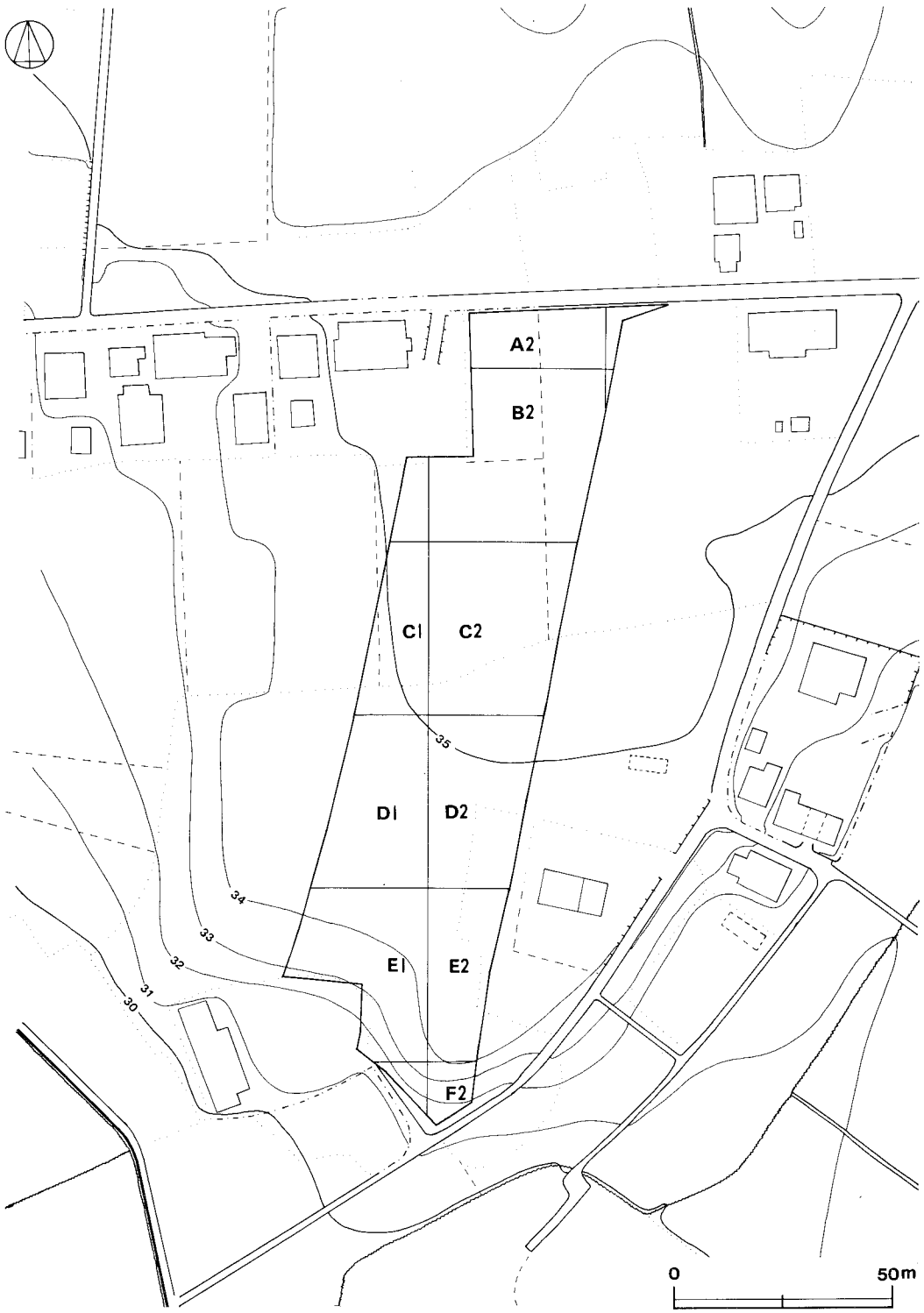
昭和60年度

10　月　　3日にエリア内伐開を始め，作業員募集説明案内状を発送した。伐開は14日に終了した。9日に雇用説明会を開いた。

14日から調査前の諸準備をし，17日に雇用申し込み書を回収して，18名の作業員を確保した。18日に建設コンサルタントによって基本杭を打った。

25日作業員を投入し，テント設営，草刈りを行い，29日に鍬入れ式を行った。鍬入れ式後草刈りを続行し，平行して残土置場の伐開，小調査区設定のためのグリッド杭打を行った。

11　月　　1日からエリア内の上物を除去し，5日に発掘前の全景写真撮影をした。同日，遺跡南部のF・E区から8分の1のグリッド発掘を開始した。E1・E2区から住居跡状遺



第15図　善長寺遺跡地形図・グリッド図

構を数軒確認した。8日から全域の遺構分布状況を把握するため，D～A区は16分の1のグリッド発掘をした。その結果，遺跡のA・B区を除く全域にわたって遺構が分布することが判明した。

15日には8分の1のグリッド発掘を終了し，住居跡状遺構約25軒を確認した。同時に8分の1のグリッド発掘終了後の全景写真を撮影した。

18，19日に残土置場の清掃をし，20日から南部より重機による表土除去を開始した。また，表土除去を終了した地点から遺構プランの明確な確認を進めていった。

12　月　5日までに重機による表土除去と確認清掃を終了し，6日から遺構掘り込みを開始した。住居跡1・3・4号，土坑1号，溝1号を掘り込んだ。

10日から19日まで，住居5・8・10～12号，土坑2号の掘り込みを始め，住居跡1・3～5号，土坑1・2号，溝1号の遺物実測・取り上げを行った。同時に住居跡1号の平面図作成を行い，住居跡1軒を完了した。1号住居跡からは石製品や石屑が多量に出土した。

23日から26日にかけて，住居跡8・10～12号の遺物実測・取り上げを行い，住居跡3～5号，土坑1・2号，溝1号の平面図作成をして住居跡3軒，土坑2基，溝1条を完了した。26日の午後は現場，事務所を閉鎖して年末・年始の休暇に入った。

1　月　6日から作業を再開した。9日までに，住居14～19号，土坑3号の掘り込みを行った。

10日から17日は，住居跡8・10～12の平面図作成をし，住居跡4軒を完了した。続いて住居跡20号，土坑9号の掘り込み，住居跡14～19号の遺物実測・取り上げを行った。

20日～31日までに，住居跡14～19号，土坑3号の平面図作成をし，住居跡6軒，土坑1基を完了した。また，住居跡6・21～25・27・29号，土坑10号の掘り込みを行い，住居跡20～22号，土坑9号の遺物実測・取り上げを行った。6・15号住居跡はそれぞれ2軒が重複していることが判明した。

2　月　2日から7日まで，住居跡34号の掘り込みと住居跡23・24号，土坑4・10号の遺物実測・取り上げを行った。続けて住居跡20～22号，土坑9号の平面図を作成して住居跡3軒，土坑1基を完了した。

10日から19日は，住居跡23～24号，土坑10号の平面図を作成し，住居跡2軒，土坑1基を完了させた。続いて住居跡35～36号の掘り込み，住居跡27号の遺物実測・取り上げを行った。

20日から28日にかけて，住居跡25・36号の遺物実測・取り上げ作業を行い住居跡27・

34・36号の平面図を作成して住居跡３軒を完了した。27号住居跡は，２軒の重複と判明した。さらに住居跡30～31号の掘り込みを行った。また，25日には，栃木県立博物館主任学芸員橋本澄朗氏を招いて班内研修会を開いた。

3　月　　３日から７日までは，住居跡６・29～31・35号，土坑４号の遺物実測・取り上げを行った。住居跡６・25・35号，土坑４号の平面図作成をして住居３軒，土坑１基を完了した。29号住居跡からも多量の石製品が出土した。

８日から18日は，住居跡29～31号の平面図を作成して，住居跡３軒を完了して，今年度計画の調査を終了した。なお，９日には，市教委・自治委員などの協力者に報告会を開いた。

11，12日に器材点検をし，13日から18日まで図面点検・補足調査を行った。

19日～25日にかけて，次年度整理のための資料搬出を中心とした残務整理と次年度の雇用計画を立案した。26日に現場・事務所を閉鎖してすべての業務を終了した。

昭和61年度

4　月　　８日に事務引き継ぎを行い，10日に作業を再開した。

11日から調査を始め，18日までに住居跡37～42号の掘り込みと，住居跡37・38号の遺物実測・取り上げを行った。

22日から30日まで，新たに住居跡43・44号の掘り込みと，住居跡37・38号の平面図作成をし，住居跡２軒を完了した。また，住居跡39～41号の遺物実測・取り上げを行った。40号住居跡は２軒重複が判明し，37・39・41号住居跡から石製品が多量に出土し，40Ｂ号住居跡からは多量の石屑が出土した。

5　月　　住居跡43・44号の掘り込みを続け，さらに住居跡45～48号まで掘り込みを進めた。また，住居跡41号の遺物実測・取り上げと遺構が浅い住居跡46・47号の遺物実測・取り上げを行った。さらに住居跡47号の平面図作成をし，住居跡１軒を完了した。

12日から19日までに，住居跡49号の掘り込み，住居跡42～45・48号の遺物実測・取り上げを行い，また，住居跡39・40・42・44・45・48号の平面図を作成して６軒を完了した。

22日から30日までは，住居跡50～54号の掘り込みと住居跡50・51号の遺物実測・取り上げを行った。また，住居跡43・50・51号の平面図作成を行い，３軒を完了した。

6　月　　２日から９日にかけて，住居跡55・56号の掘り込み，住居跡52～54号の遺物実測・取り上げを行った。また，住居跡49・53・54号の平面図作成をし，３軒を完了した。

10日から19日まで，住居跡57・58号の掘り込みと，住居跡55～58号の遺物実測・取り上げを行った。また，住居跡52号の平面図を作成し，１軒を完了した。55号住居跡から石製品が多量に出土した。

23日から27日は，住居跡59・60号の掘り込みと，住居跡56～58号の平面図を作成して３軒を完了した。また，住居跡59号の遺物実測・取り上げをし，さらに堀１号の掘り込みを進めた。

7　月　　１日から９日までに住居跡61号，土坑５～８号，溝２号の掘り込みを行った。併せて，住居跡60号，土坑５・６号の遺物実測・取り上げを行った。５号土坑からは数個の土師器完形品が出土した。さらに，住居跡55・58号の平面図作成を行い，２軒を完了した。

10日から18日は，堀１号の掘り込みを実施し，住居跡60号，土坑５～８号，溝２号の平面図作成をし，住居跡１軒，土坑４基，溝１条を完了した。

22日から31日までは，堀１号の掘り込みと実測を行い，途中25日からは図面点検も平行して行った。また，25日からは各遺構の清掃を行い，航空写真撮影に備えた。

8　月　　１日から補足調査をし，最後の遺構となった住居跡62号の掘り込みと遺物実測・取り上げ，平面図作成を行った。８日に調査終了後の航空写真を撮影し，すべての業務を終了させた。また，９日には現地説明会を開き，約80人の見学者が参加した。

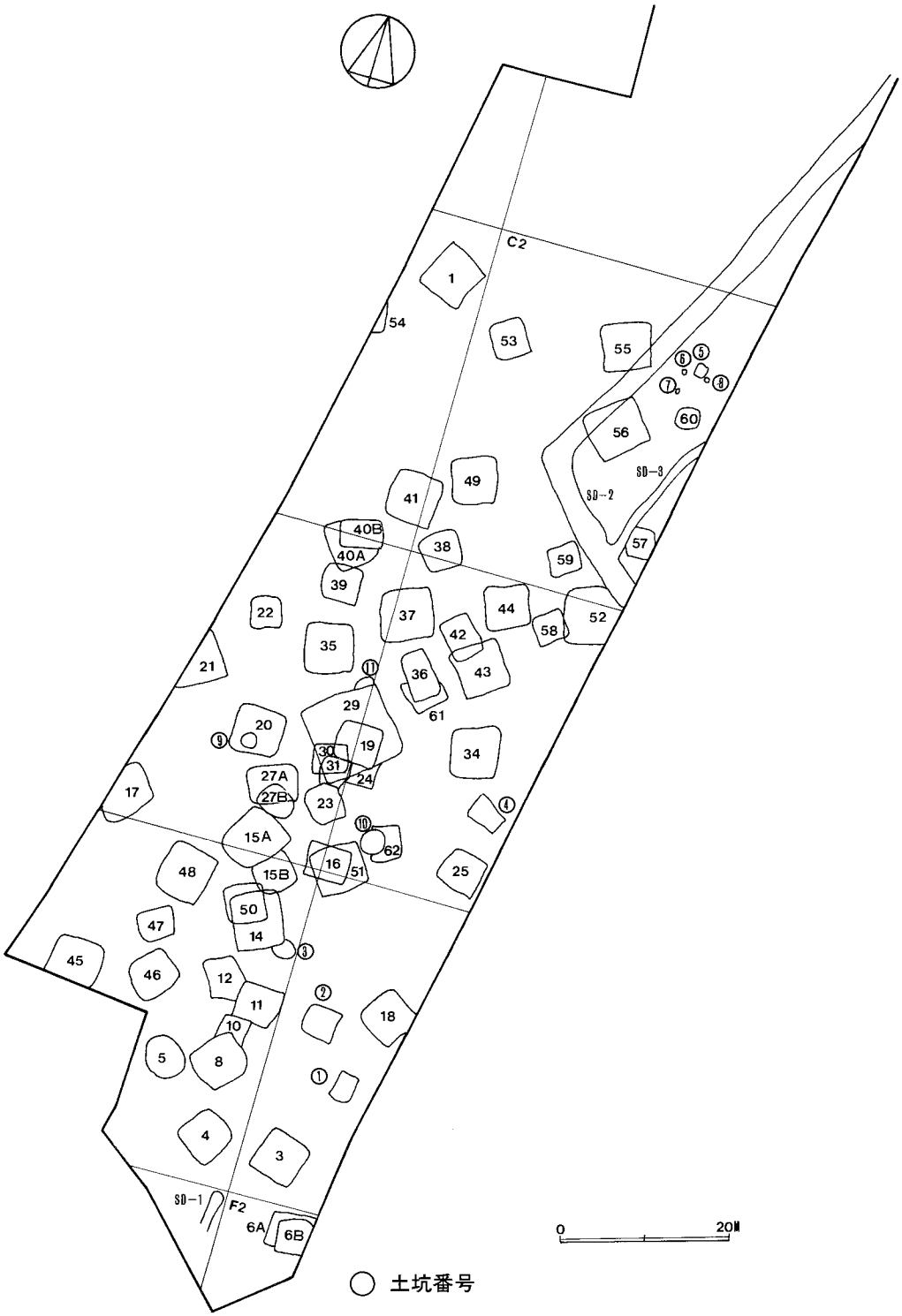
第３節　遺構と遺物

当遺跡で検出した遺構は，住居跡58軒，土坑11基，溝２条，堀１条である。

住居跡は，遺跡の中央から南側のＣ～Ｆ区にかけて検出され，北側のＡ・Ｂ区には検出されなかった。エリア外にかかる住居跡もあることから，遺構の分布（集落の範囲）はさらに東西に広がるものと思われる。時期は出土遺物から古墳時代前期41軒，中期２軒，後期15軒である。また，古墳時代後期の住居跡には石製品製作跡が５軒含まれている。なお，２・７・９・13・26・28・32・33番は，調査中に土坑，溝等に変更されたため，欠番としたものである。

土坑はＣ～Ｅ区から検出され，溝はC2区，F1区に１条ずつ検出されている。堀はB2区，C2区にかけて１条検出されている。土坑・溝・堀については，その時期・性格は不明なものが多い。

遺物はほとんどが住居跡から出土したもので，土師器，須恵器，石製品，鉄製品などである。土師器は甕形土器，壺形土器，坏形土器，埦形土器，鉢形土器，甑形土器，器台形土器，坩形土器，高坏形土器などが出土している。須恵器は坏を中心に７点出土している。石製品は，剣形品，有孔円板，臼玉，管玉，勾玉，紡錘車などのほか，石屑・原石が出土している。鉄製品は石製品



第16図　善長寺遺跡遺構配置図

製作跡の住居跡から１点出土している。

その他，縄文式土器も住居跡内の覆土やグリッドから少量出土している。

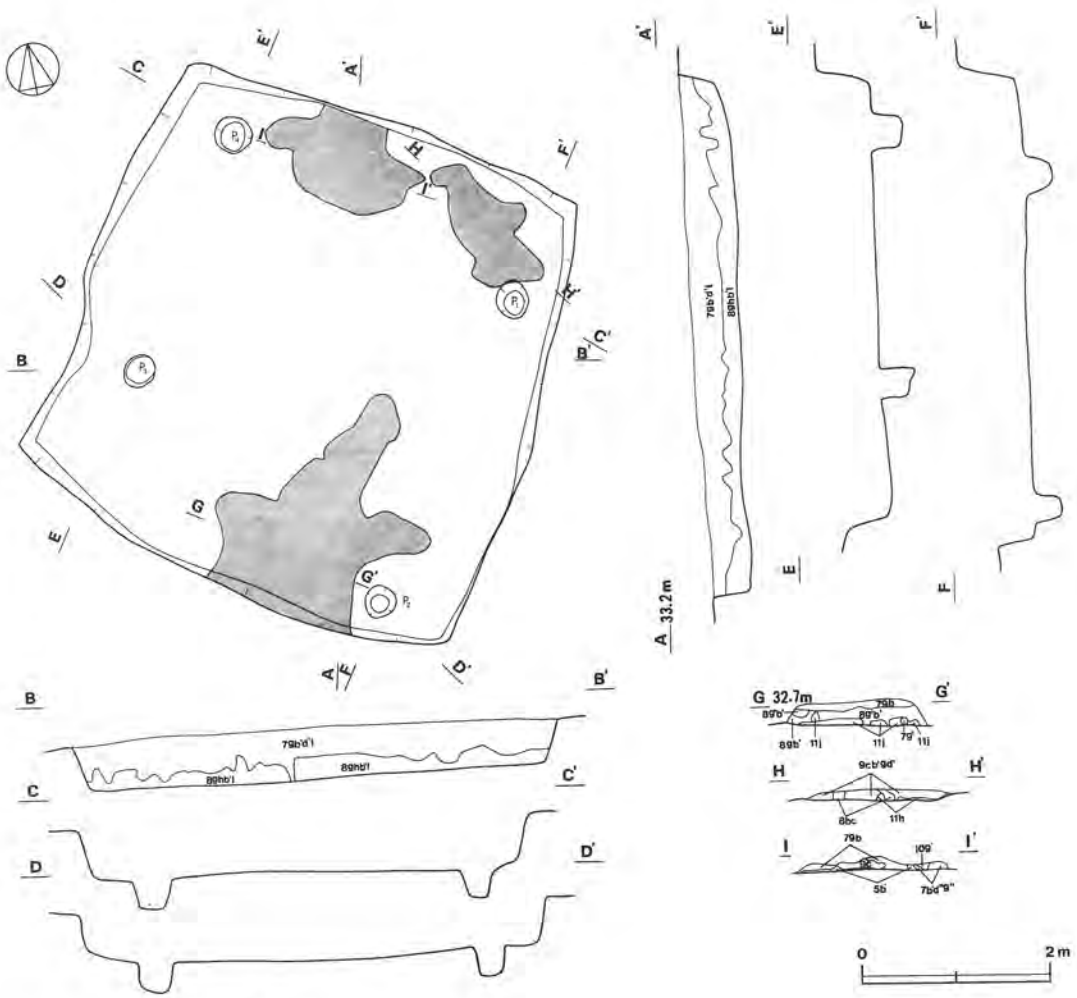
1　住　居　跡

(1)　古墳時代前期

第４号住居跡（第17図）

本跡は，遺跡南部のE1i$_9$区を中心に確認されたもので，第１号溝の北西約3.8mに位置している。

平面形は長軸5.3mの隅丸方形で，長軸方向はＮ－39°－Ｅである。壁はソフトロームで，西側の



第17図　第４号住居跡実測図

一部が撹乱を受けて軟らかいが，他は締まっており，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は40～60cmである。床はハードロームで，平坦である。床面は硬くよく踏み固められているが，西コーナー側は撹乱を受けて軟らかい。炉は検出されない。柱穴はP_1～P_4の4か所で，その規模は径34～42cm・深さ31～35cmであり，配列はやや不規則である。北壁近くに2か所，南壁近くに1か所2m前後で厚さ約30cmにわたって焼土層が確認され，床近くの覆土から炭化物が多く出土していることから，本跡は焼失家屋と考えられる。

覆土は2層からなり，暗褐色土，褐色土が堆積し，西側の撹乱部以外は，自然堆積である。2層ともローム粒子・鹿沼土・焼土粒子を含み，締まっている。

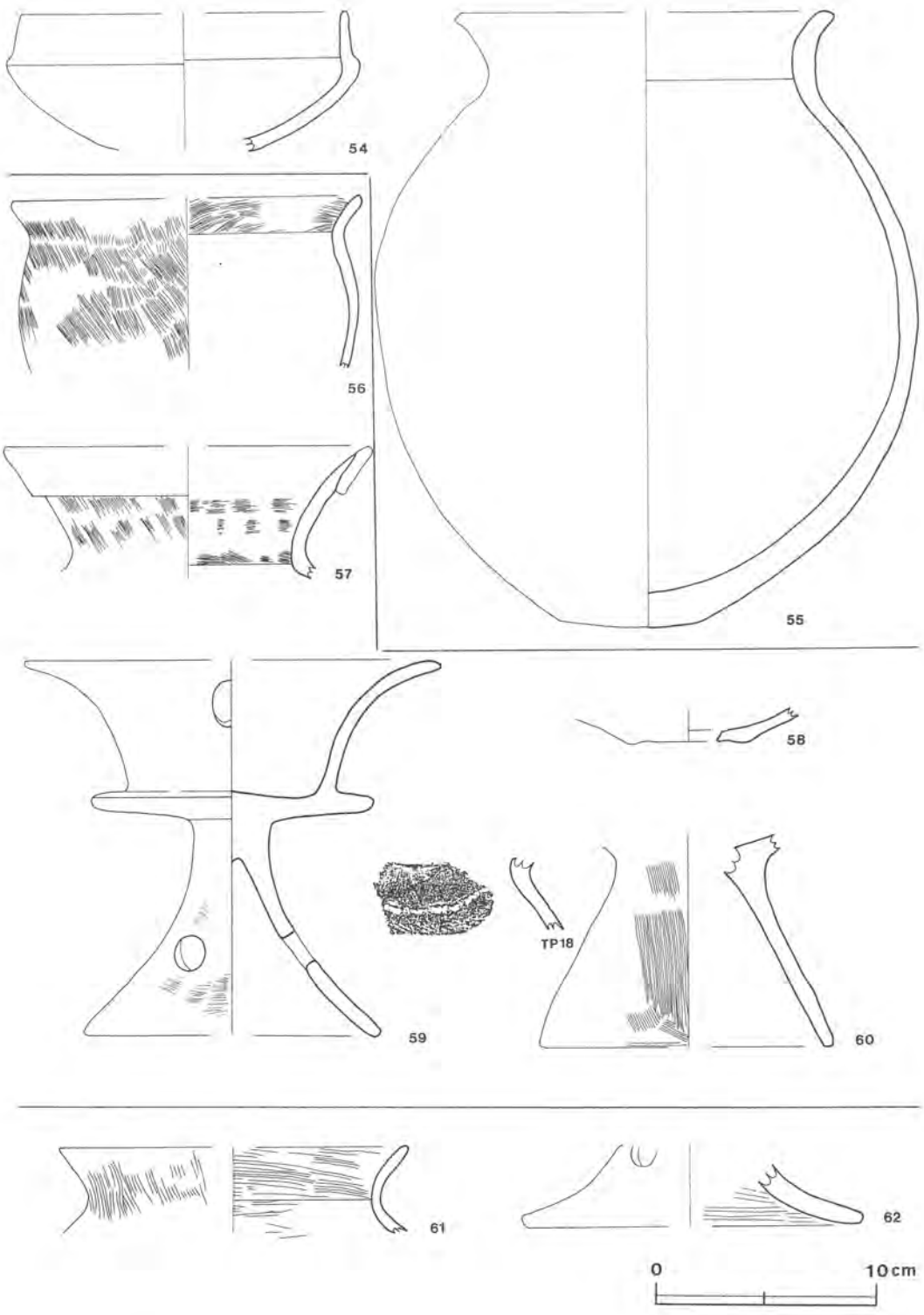
遺物は，覆土の上層から甑形土器（P58），下層から小型甕形土器（P56），壺形土器（P57），中央の床面から装飾器台形土器（P59），台付甕形土器（P60）が出土している。すべて五領式に比定される。

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 P54	坏形土器 土師器	A 15.0 B(6.2)	体部は内彎し，口縁部との境で段をつくる。口縁部は器肉を減じながら垂直に立ち上がる。	口縁部外面・内面－ヘラなで 体部外面－粗いヘラなで	砂粒・スコリア 橙色 普通	40%
P55	甕形土器 土師器	A 16.5 B 28.6 C 6.4	底部は平底。胴部は器肉を減じながら外傾し，長胴を呈する。口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	砂粒・パミス・スコリア にぶい橙色 普通	90% 胴部外面煤付着

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 P56	小型甕形土器 土師器	A 16.0 B(8.0)	胴部はやや長胴を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部外面－ハケ目整形後なで 口縁部内面・胴部外面－ハケ目整形	パミス・砂粒 灰褐色 普通	15%
P57	壺形土器 土師器	A 16.6 B(6.2)	口縁部はゆるく外傾して立ち上がり，上半で外面に折り返す。	口縁部内・外面上半－なで 口縁部内・外面－ハケ目整形	パミス・石英・砂 にぶい橙色 良好	20%
P58	甑形土器 土師器	B(1.5) C 5.7 孔径 2.4	底部は平底で，中央に単孔を穿つ。胴部は器肉を減じながら外傾して立ち上がる。	内・外面－なで	パミス・砂・石英 にぶい褐色 普通	30%
P59	装飾器台形土器 土師器	A 17.0 B 18.0 D 14.5	脚部はラッパ上に下方に開く。受部下半で段をつくり，外反して立ち上がる。脚部に4孔，受部に3孔を穿つ。	外面－なで 脚部内面－ハケ目整形後なで	スコリア・砂・石英 浅黄橙色 普通	60%
P60	台付甕形土器 土師器	B(9.9) D 13.4 孔径 3.3	台部はラッパ状に下方に開く。	外面－ハケ目整形 内面－なで	パミス・砂・スコリア にぶい褐色 普通	15%



第18図　第3・4・5号住居跡出土遺物実測図

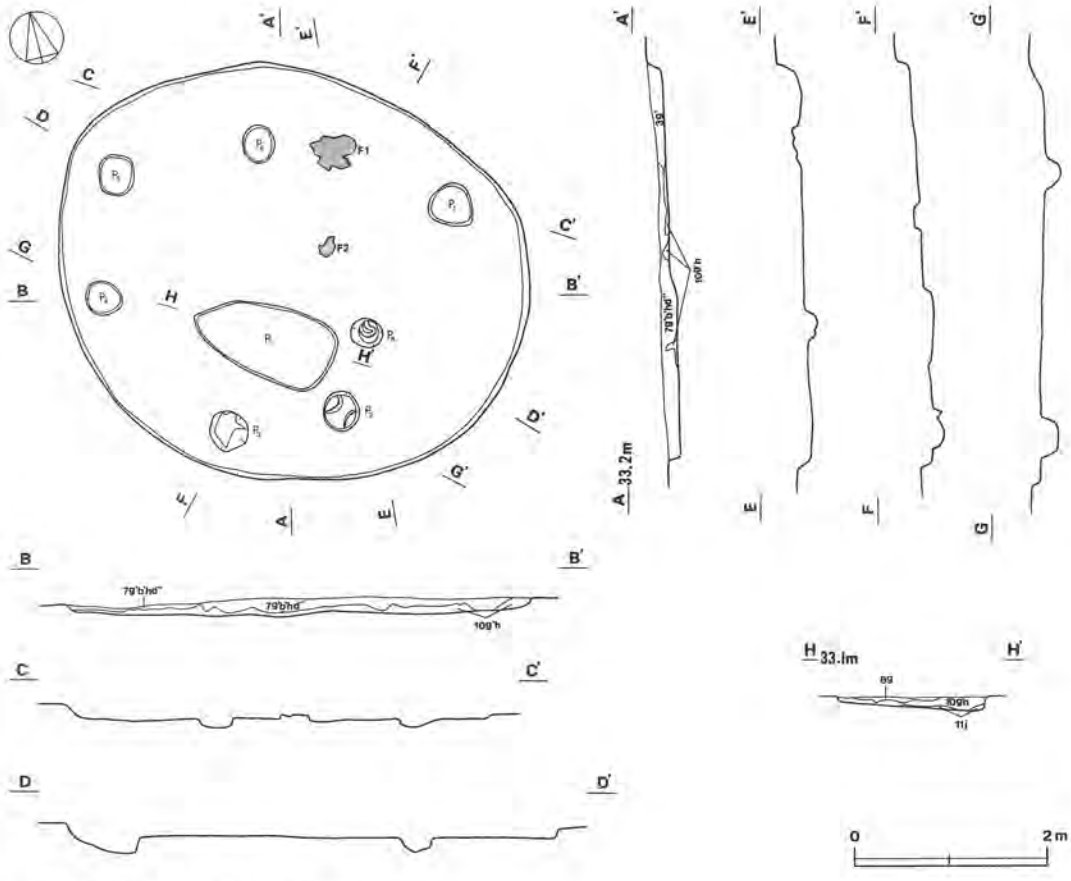
第 5 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第18図 P61	壺形土器 土師器	A 16.0 B(4.0)	口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	パミス・砂粒 にぶい橙色 普通	10%
P62	器台形土器 土師器	B(3.8) D 15.6	脚部はラッパ状に下方に開く。	外面－なで 内面－ハケ目整形後なで	石英・砂 にぶい橙色 普通	30%

第 5 号住居跡（第19図）

本跡は，遺跡南部のE1g$_8$区を中心に確認されたもので，第 4 号住居跡の北西約 6 mに位置している。

平面形は長径5.2m・短径4.3mの楕円形で，長径方向はN－46°－Wである。壁はソフトロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は 7 ～27cmである。床はハードロームで，北から南に



第19図　第 5 号住居跡実測図

かけてやや傾斜しているが，おおむね平坦である。床面はよく踏み固められている。中央と北側に炉と思われる焼土層が確認されたが，中央は最大幅47cm・最小幅30cmの不定形，北側は長径24cm・短径16cmの楕円形で，両者とも床面より6～8cm高いレベルにあるので，後世のものと考えられる。柱穴はP_1～P_6の6か所で，その規模は径35～50cm・深さ8～24cmである。壁にそって円を画くように配列されている。P_7は貯蔵穴と考えられ，長径156cm・短径80cmの楕円形で，床を6cm掘りこんで構築されている。

覆土は3層からなり，主に暗褐色土，褐色土が自然堆積し，どの層もローム粒子を含み，締まっている。

遺物は，覆土下層から甕形土器（P61），東側のP_1近くの床面から器台形土器（P62）が出土している。両者とも古墳時代の五領式に比定される。

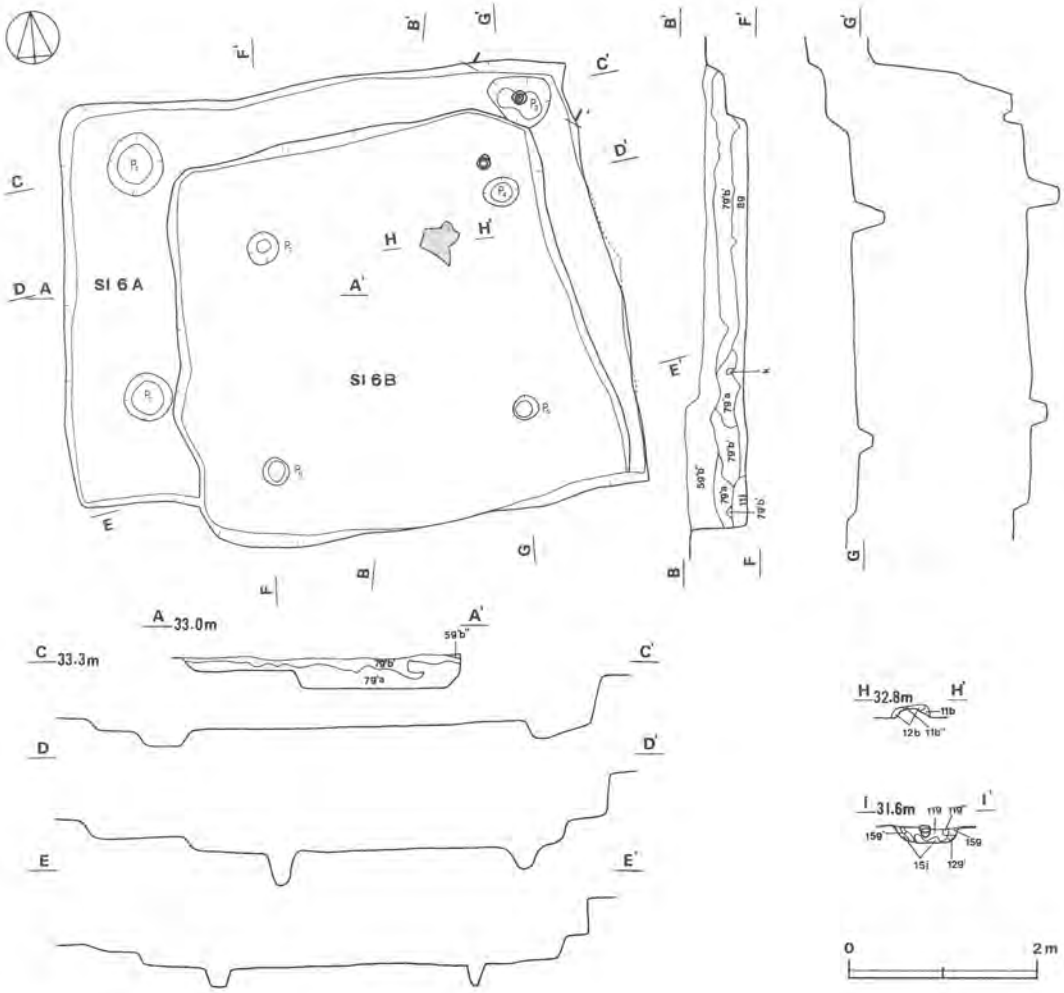
第6A号住居跡（第20図）

本跡は，遺跡南端部の$F2a_3$区を中心に確認されたもので，第4号住居跡の南東約10mに位置している。東・南側で第6B号住居跡と重複している。新旧関係は第6B号住居跡が本跡の床を切っており，重複部分に本跡の貼り床等の跡がないことから，本跡が第6B号住居跡よりも古いと考えられる。

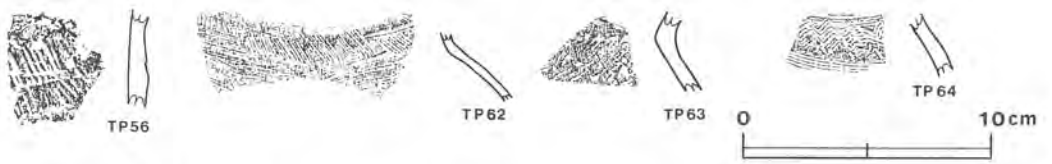
平面形は，長軸6.1m・短軸4.5mの長方形と思われ，長軸方向はN－87°－Eと考えられる。壁は重複のため，西・北側が残存しており，ソフトロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は10～20cmである。床も西・北側が残っておりソフトロームで平坦である。床面は踏み固められていない。柱穴はP_1・P_2の2か所で，その規模は径54・70cm，深さ16・17cmである。他の柱穴や炉は第6B号住居跡構築時に削平されたものと考えられる。P_3は貯蔵穴と考えられ，長径70cm・短径54cmの楕円形で，床を16cm埦状に掘りこんで構築され，その中央に土師器の小型甕を埋めこんで使用している。

覆土は6層からなり，主に暗褐色土，褐色土が自然堆積し，どの層もローム粒子を含み締まっている。

遺物は覆土の下層から甕形土器（P63），台付甕形土器（P64）が破片で，貯蔵穴底面から直立した形で小型甕形土器（P2）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。

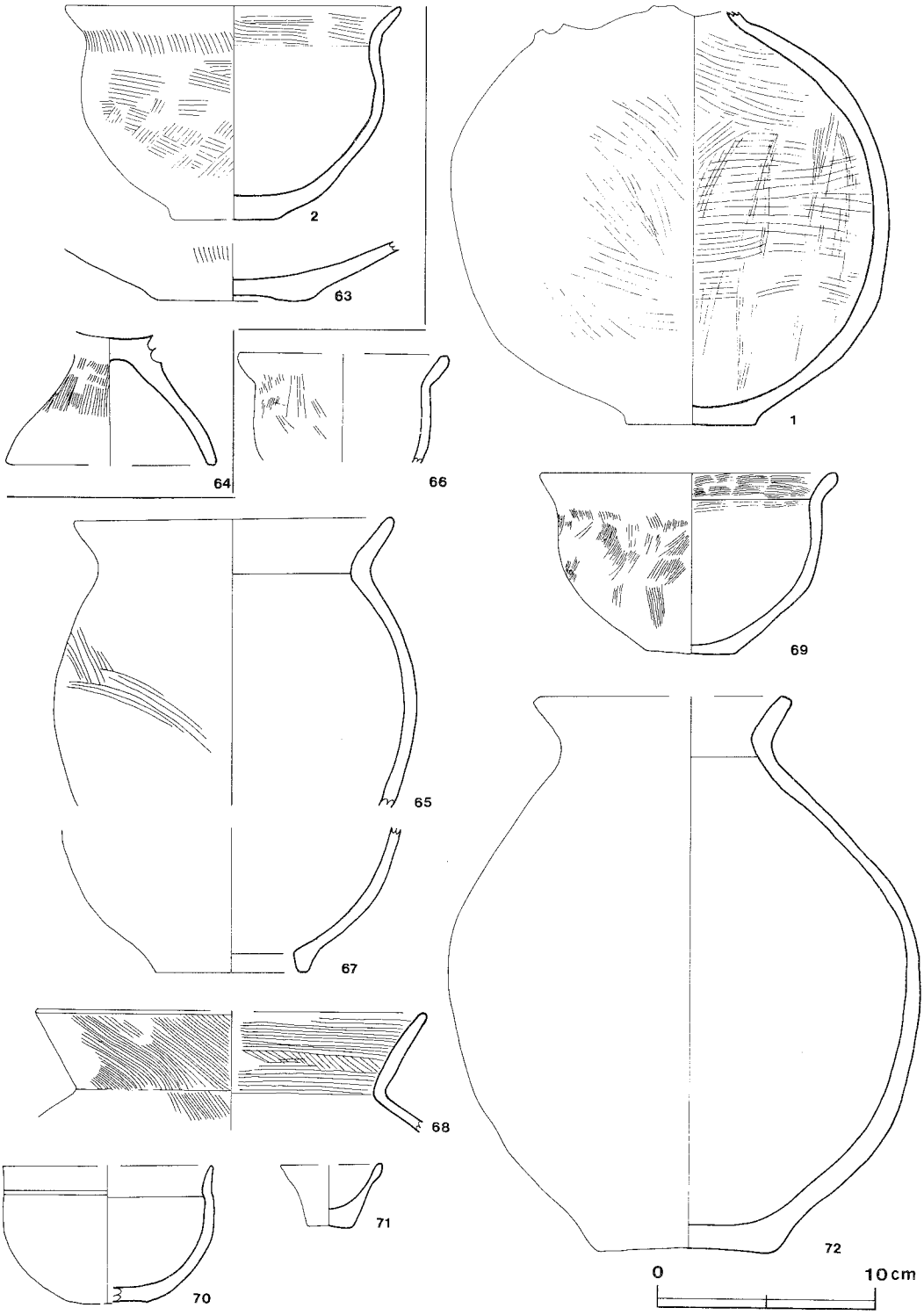


第20図　第６Ａ・Ｂ号住居跡実測図



第21図　第６Ａ号住居跡出土遺物拓影図

TP195は広口長胴壺の胴部片と思われ，羽状縄文を施している。弥生時代後期の二軒屋式と判断される。



第22図　第６Ａ・Ｂ号住居跡出土遺物実測図

第6A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 P2	小型甕形土器 土師器	A 15.0 B 10.3 C 3.9	底部は突出する平底。胴部は球形を呈し，口頸部は短く「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－ハケ目整形後なで 胴部外面－ハケ目整形	パミス・砂・スコリア にぶい黄橙色 普通	95%
P63	甕形土器 土師器	B(2.7) C 7.0	底部は突出し，やや上げ底。胴部は大きく外傾して立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	パミス・石英・砂 にぶい橙色 普通	30%
P64	台付甕形土器 土師器	B(6.1) D 9.6	台部は「ハ」の字状に下方に開き，端部は平坦な面をもつ。	外面－ハケ目整形 内面－なで	砂・パミス にぶい橙色 普通	20%

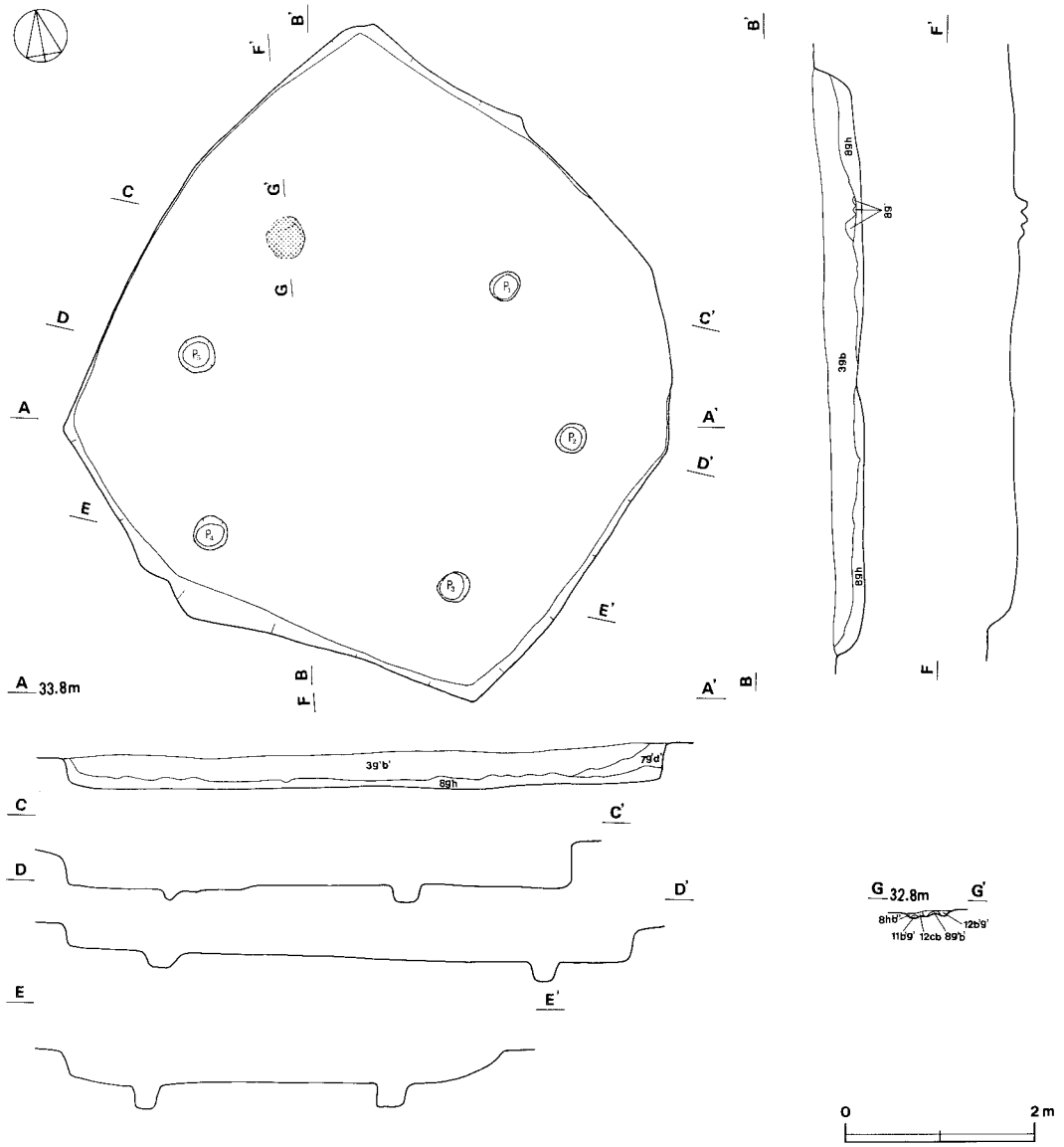
第6B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 P1	甕形土器 土師器	B(18.5) C 5.6	底部は平底で，胴部は球形を呈する。	外面－ハケ目整形後丁寧ななで	砂粒 明褐色 良好	65%
P65	甕形土器 土師器	A 14.5 B(13.3)	胴部は球形を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 胴部外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	石英・砂 にぶい橙色 普通	60% 胴部外面煤付着
P66	坩形土器 土師器	A 9.5 B(5.0)	胴部は外傾して立ち上がり，口頸部は器肉を厚くして「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	パミス・砂・スコリア 浅黄橙色 普通	10%
P67	甑形土器 土師器	B(6.7) 孔径 6.8	底部はやや突出し，筒抜けの孔を穿つ。胴部は球形状を呈する。	内・外面－なで	砂粒・パミス・礫 橙色 普通	15%
P68	甕形土器 土師器	A 17.8 B(5.5)	口頸部は鋭角な「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	パミス・砂・石英 浅黄橙色 普通	20%
P69	小型甕形土器 土師器	A 13.3 B 8.3 C 4.0	底部は平底。胴部は外傾して立ち上がった後中位で垂直ぎみになり，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面，胴部外面－ハケ目整形後軽いなで 胴部内面－なで	パミス・砂粒 浅黄橙色 普通	100%
P70	埦形土器 土師器	A 9.5 B 6.3 C 3.3	底部は小さい平底。胴部は器肉を減じながら立ち上がって球形を呈し，口縁部は内面に稜をつくり，垂直に立ち上がる。	外面－なで 内面－丁寧ななで	スコリア・パミス・砂 淡赤橙色 普通	20%
P71	ミニチュア土器 土師器	A 4.6 B 2.9 C 2.0	底部は器肉が厚く平底。体部で器肉を減じてくる。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面－なで	砂粒・石英 明褐灰色 普通	75%
P72	甕形土器 土師器	A 11.1 B 25.4 C 8.1	底部は平底。胴部は器肉を減じて扁平な球形を呈す。口頸部は短く「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－なで	スコリア・砂・石英 灰白色 普通	55%

第8号住居跡（第23図）

本跡は，遺跡南部のE1g₉区を中心に確認されたもので，第4号住居跡の北約3mに位置している。北側で第10号住居跡と重複している。新旧関係は土層堆積状況から，本跡が第10号住居跡よりも新しいと考えられる。

平面形は長軸5.6m・短軸5.4mの方形で，長軸方向はN－45°－Wである。壁は，重複のため北側の一部が欠損し，南側の一部が撹乱を受けてやや軟らかいが，他の壁はソフトロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は40～50cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はどの部分もよく踏み固められている。炉は北側に検出され，長径45cm・短径40cmの楕円形で，床を7cm掘り凹めた地床炉である。炉床は南側がよく焼けている。柱穴はP_1～P_5の5か所で，その規模は径35～39cm・深さ16～32cmである。中央を囲むように五角形に配列され，柱穴間は約2mと等間隔である。



第23図　第8号住居跡実測図

覆土は3層からなり，主に黒褐色土，暗褐色土が堆積している。南側の一部が撹乱を受けているが，他は自然堆積である。どの層もローム粒子を含み，締まっている。

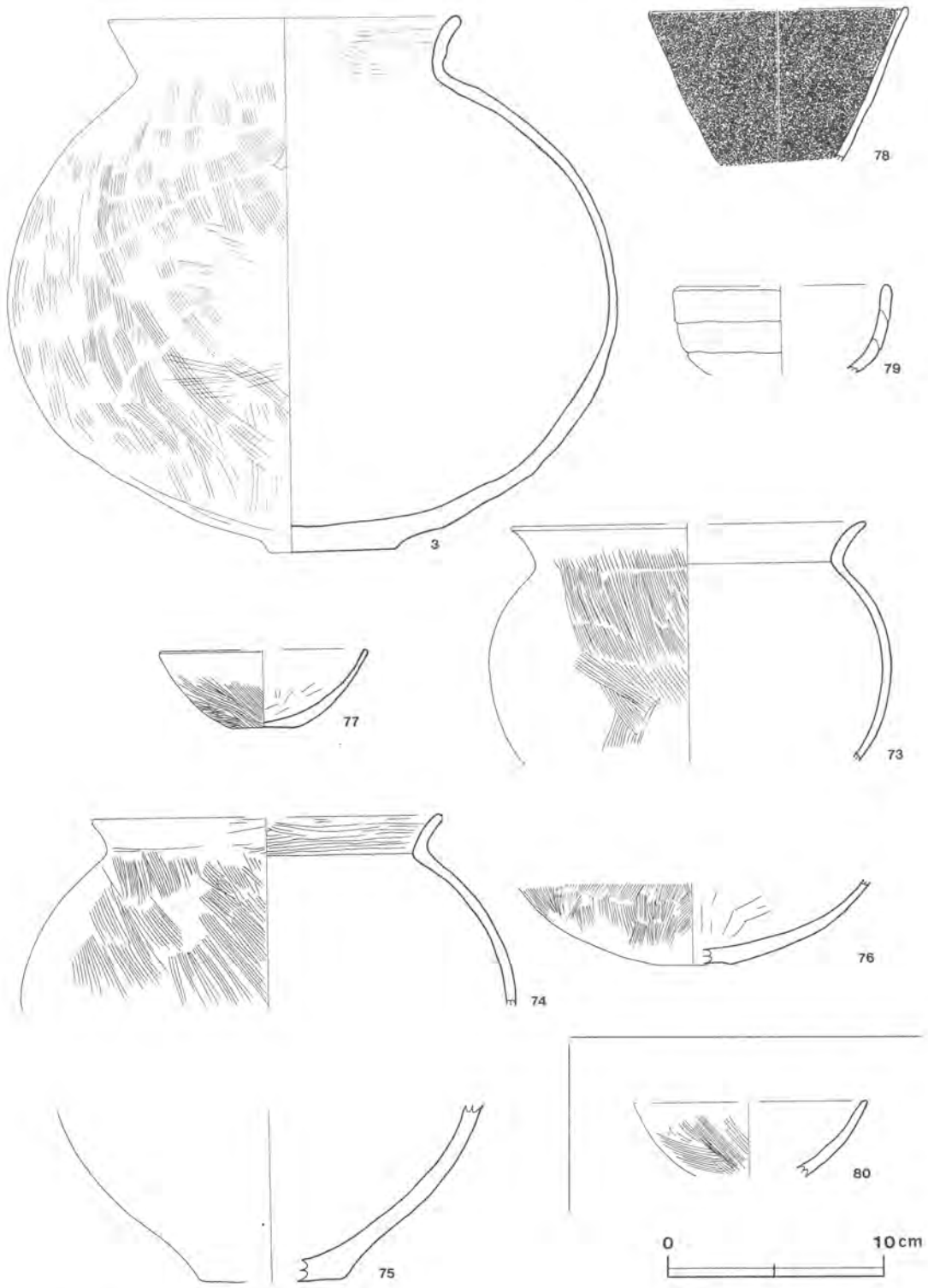
遺物は，覆土下層から甕形土器（P74～P76），坩形土器（P78），手づくね土器（P79），中央の床面から甕形土器（P3・P73），坏形土器（P77）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 P3	甕形土器 土師器	A 16.3 B 24.9 C 6.2	底部は小さな平底。胴部は扁平な球形を呈し，中位に最大径をもつ。口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形 口縁部内面－ハケ目整形後なで 胴部内面－なで	砂粒・礫 黒褐色 普通	80%
P73	甕形土器 土師器	A 16.4 B(11.3)	胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 口縁部内面－横なで 胴部内面－丁寧なで	砂・長石・パミス にぶい橙色 普通	15%
P74	甕形土器 土師器	A 16.3 B(9.0)	胴部は球形を呈し，口頸部は短く「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	パミス・砂・石英 にぶい黄褐色 普通	20%
P75	甕形土器 土師器	B(8.2) C 7.0	底部は突出した平底。胴部は外傾して立ち上がる。	内・外面－なで	長石・パミス にぶい褐色 普通	10%
P76	甕形土器 土師器	B(3.9) C 3.3	底部は小さな上げ底。胴部は器肉を減じながら球形を呈する。	外面－ハケ目整形 内面－なで	パミス・石英 にぶい赤褐色 普通	20% 胴部中位 外面煤付着
P77	坏形土器 土師器	A 9.6 B 3.7 C 2.8	底部は平底。体部は器肉を減じながら内彎して立ち上がる。	外面－ハケ目整形 内面－なで	礫・パミス・雲母 外－灰褐色 内－灰白色 良好	30%
P78	坩形土器 土師器	A 11.9 B(7.3)	口縁部は器肉を一定にして，外傾して立ち上がる。	内・外面－丁寧なで	パミス・石英・砂 赤褐色 普通	20% 内・外面 朱彩
P79	手づくね土器 土師器	A 9.6 B(4.2)	体部はゆるく外反したのち，垂直ぎみに立ち上がる。	外面－粘土紐輪積痕を残す 内面－なで	砂・パミス にぶい黄橙色 普通	20%

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 P80	器台形土器 土師器	A 10.7 B(3.5)	受部は器肉を減じながら外傾して立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	パミス・礫 にぶい黄褐色 普通	15%



第24図　第８・10号住居跡出土遺物実測図

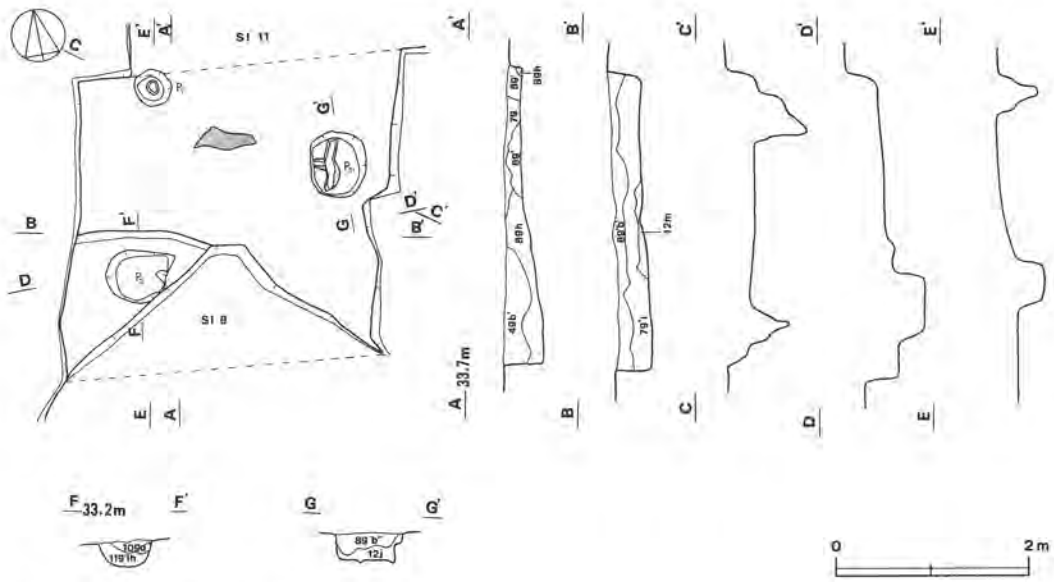
第10号住居跡（第25図）

本跡は，遺跡南部のE1f$_9$区を中心に確認されたもので，第４号住居跡の北約８mに位置している。南側で第８号住居跡と，北側で第11号住居跡と重複している。新旧関係は，土層堆積状況から，本跡が第８・11号住居跡よりも古いと考えられる。

平面形は，長軸3.5m・短軸3.2mの方形と思われ，長軸方向はN－84°－Wと考えられる。壁は重複により，東・西側だけ残っているが，ソフトロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は20～35cmである。床は南側の一部が削平されているが，残っている床はソフトロームで，平坦である。床面は踏み固められていない。中央に焼土層が確認されたが，床面から30cm以上の高いレベルにあり，焼土層下も覆土と同じ暗褐色土が堆積しているので炉ではなく，後世のものと考えられる。従って本跡では炉は検出されない。柱穴はP$_1$の１か所しか検出されておらず，その規模は径40cm・深さ44cmである。P$_2$は長径78cm・短径60cmの楕円形，P$_3$は長径72cm・短径60cmの楕円形でいずれも貯蔵穴と考えられ，床をそれぞれ29cm・21cm掘りこんで構築されている。貯蔵穴の断面はP$_2$が坑形，P$_3$が「U」形である。

覆土は３層からなり，すべて暗褐色土で自然堆積している。どの層もローム粒子を含み，締まっている。

遺物は，覆土の中層から器台形土器（P80）が破片で出土している。古墳時代の五領式に比定される。



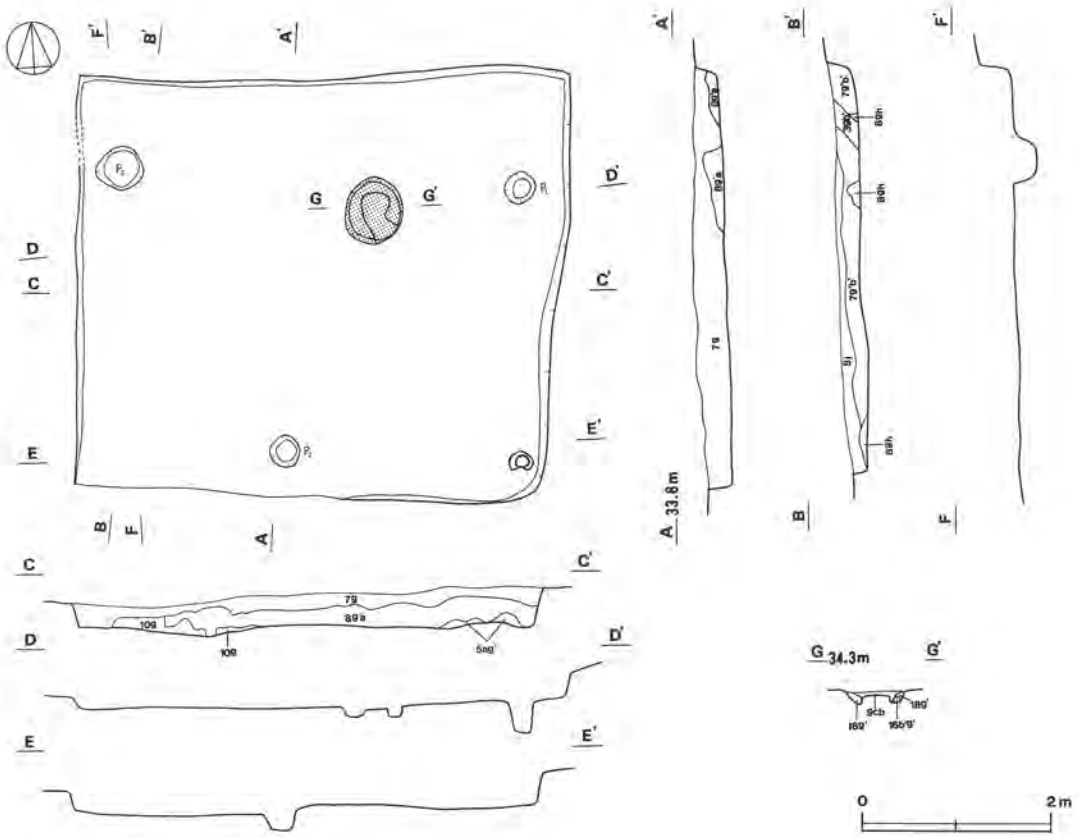
第25図　第10号住居跡実測図

第11号住居跡（第26図）

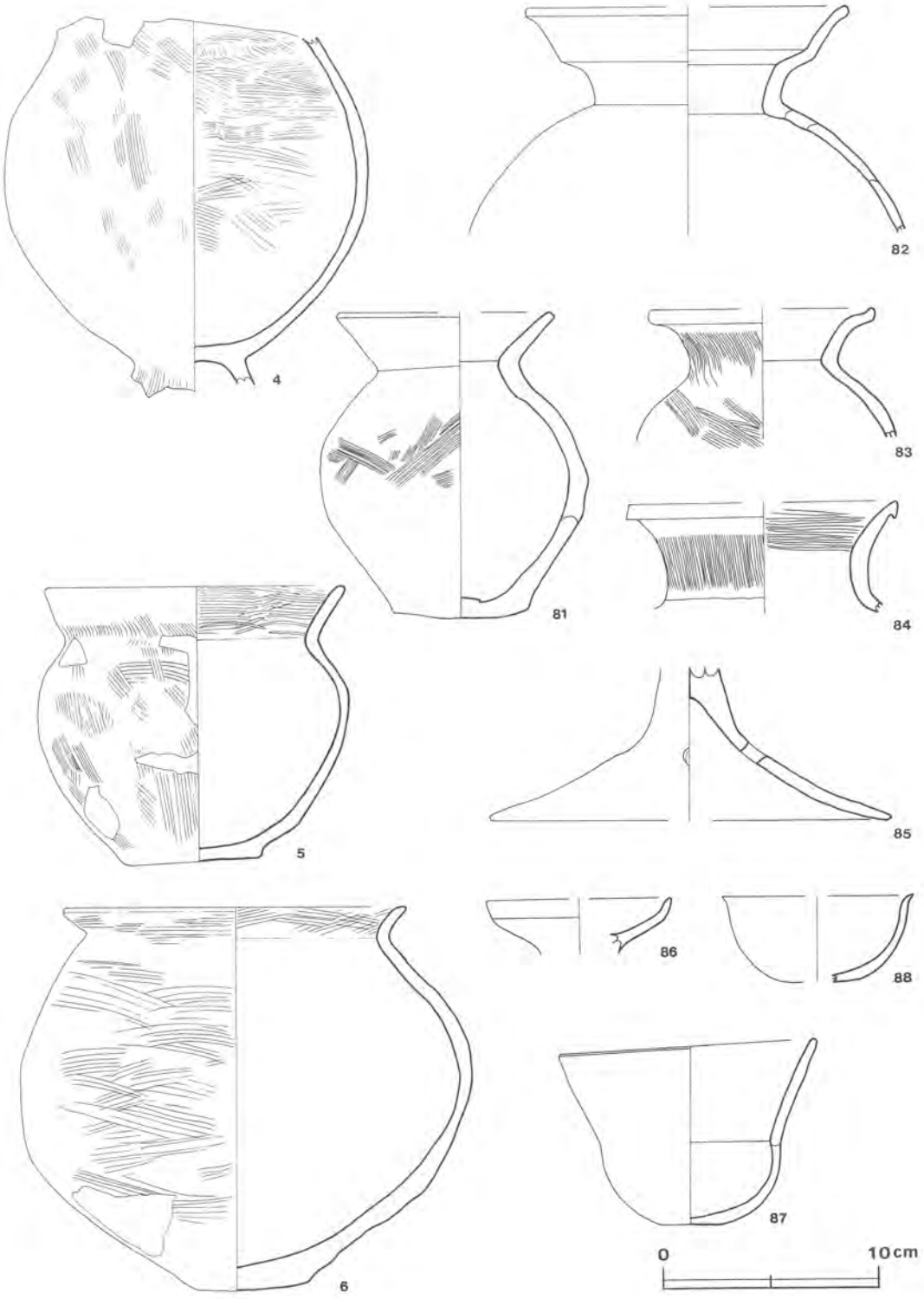
本跡は，遺跡南部のE1e$_0$区を中心に確認されたもので，第４号住居跡の北約11mに位置している。南側で第10号住居跡と，西側で第12号住居跡と重複している。新旧関係は，土層堆積状況から，本跡が第10・12号住居跡よりも新しいと考えられる。

平面形は，長軸5.2m・短軸4.6mの長方形で，長軸方向はN－87°－Wである。壁はソフトロームで，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は17～37cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はどの部分もよく踏み固められている。炉は北側に検出され，長径72cm・短径60cmの楕円形で，床を15cm掘り凹めた地床炉である。炉床は中央から南側がよく焼けて，レンガ状に硬化している。炉覆土は３層で暗褐色土，にぶい橙色土，明赤褐色土が堆積している。柱穴はP_1～P_3の３か所で，その規模は径35～51cm・深さ20～33cmである。柱穴間は約４mと等間隔である。

覆土は４層からなり，主に暗褐色土，褐色土，極暗褐色土が自然堆積している。どの層もローム粒子を含み，締まっている。



第26図　第11号住居跡実測図

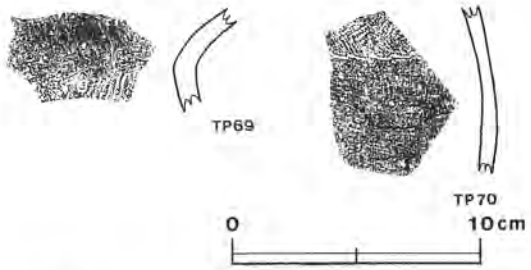


第27図　第11号住居跡出土遺物実測図

遺物は，覆土中層から壺形土器（P84），下層から壺形土器（P82・P83），器台形土器（P85・P86），坩形土器（P87），ミニチュア土器（P88），台付甕形土器（P4），小型甕形土器（P5），南東側コーナー部から正位で甕形土器（P6），東側コーナー部付近の床面から小型甕形土器（P81）が破片で出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 P4	台付甕形土器 土師器	B(19.9) D 9.1	台部は「ハ」の字状に下方に開く。胴部は長胴で，中位に最大径をもつ。	内・外面－ハケ目整形後軽いなで	砂粒 黒褐色 普通	65%
P5	小型甕形土器 土師器	A 13.4 B 12.2 C 6.2	底部は突出した平底。胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面・口頸部内面－ハケ目整形	砂粒・パミス 褐色 普通	70%
P6	甕形土器 土師器	A 16.3 B 16.7 C 4.6	底部は突出した小さい平底。胴部は扁平な球形を呈する。口頸部は短く「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形後なで 胴部内面－なで	砂粒・パミス 暗褐色 良好	70% 胴部外面上半煤付着
P81	小型甕形土器 土師器	A 9.6 B 14.4 C 6.2	底部は平底。胴部は扁平な球形を呈する。口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 胴部外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	スコリア・雲母 灰白色 良好	90%
P82	壺形土器 土師器	A 14.8 B(10.7)	胴部は球形を呈する。口縁部は垂直に立ち上がり，中位で段をつくり，外上方に開く。	外面・口縁部内面－丁寧ななで 胴部内面－なで	パミス 灰黄色 良好	10%
P83	壺形土器 土師器	A 10.2 B(6.0)	胴部は球形を呈し，口頸部は「コ」の字状に立ち上がる。口縁端部は外上方へ開く。	外面－ハケ目整形後弱いなで 口縁部内面－横なで 胴部内面－なで	パミス・石英 橙色 普通	40%
P84	壺形土器 土師器	A 12.5 B(5.2)	口頸部はゆるく外傾して立ち上がる。口縁端部は垂直に立ち上がり，尖る。	内・外面－ハケ目整形後なで	パミス・砂・礫 外－明褐灰色 内－浅黄橙色 普通	10%
P85	器台形土器 土師器	B(7.1) D 18.6	脚部はラッパ状に大きく下方に開く。脚部に4孔を穿つ。	外面－なで 内面－ハケ目整形後なで	スコリア・長石・礫 灰白色 普通	15%
P86	器台形土器 土師器	A 8.5 B(2.6)	受部は外傾する。口縁部との境で稜をつくり，口縁部は垂直に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－丁寧ななで	パミス・砂 浅黄橙色 普通	10%
P87	坩形土器 土師器	A 11.7 B 8.4 C 2.8	底部は小さく平底。体部は球形を呈し，口縁部との境内面に稜をつくる。口縁部は外傾して立ち上がる。	内・外面－丁寧ななで	スコリア・パミス 礫・砂 にぶい橙色 良好	97%
P88	ミニチュア土器 土師器	A 8.8 B 4.0 C 3.2	底部は平底で，体部は器肉を減じながら内彎して立ち上がる。口唇部は丸味をもち外へ開く。	内・外面－なで	砂 にぶい橙色 普通	40%

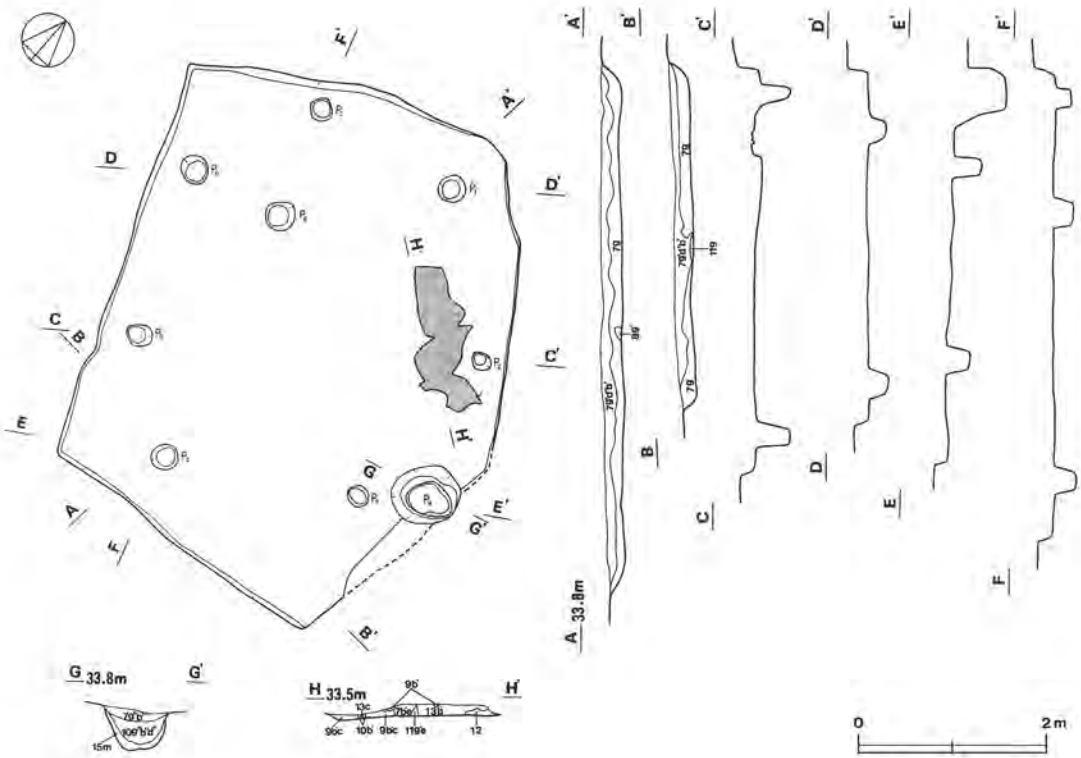


第28図　第11号住居跡出土遺物拓影図

第12号住居跡（第29図）

本跡は，遺跡南部のE1d$_9$区を中心に確認されたもので，第4号住居跡の北西約13mに位置している。東側で第11号住居跡と重複している。新旧関係は前述のとおりである。

平面形は，長軸4.6m・短軸4.4mの方形で，長軸方向はN－32°－Wである。壁は重複のため東側の一部が掘り込まれているが，他はソフトロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は15～25cmである。床も東側の一部が削平されており，床面はハードロームで，平坦であり，どの部分もよく踏み固められている。炉は検出されない。なお，北東壁際に広い範囲にわたって焼土層が認められ，付近の床から炭化材が検出されたことから，本跡は焼失家屋と考えられる。柱穴はP_1～P_7の7か所で，その規模は径22～32cm・深さ18～35cmである。中央を囲むように七角形に配列され，柱穴間はほぼ等間隔である。P_9は貯蔵穴と考えられ，長径73cm・短径60cmの楕円



第29図　第12号住居跡実測図

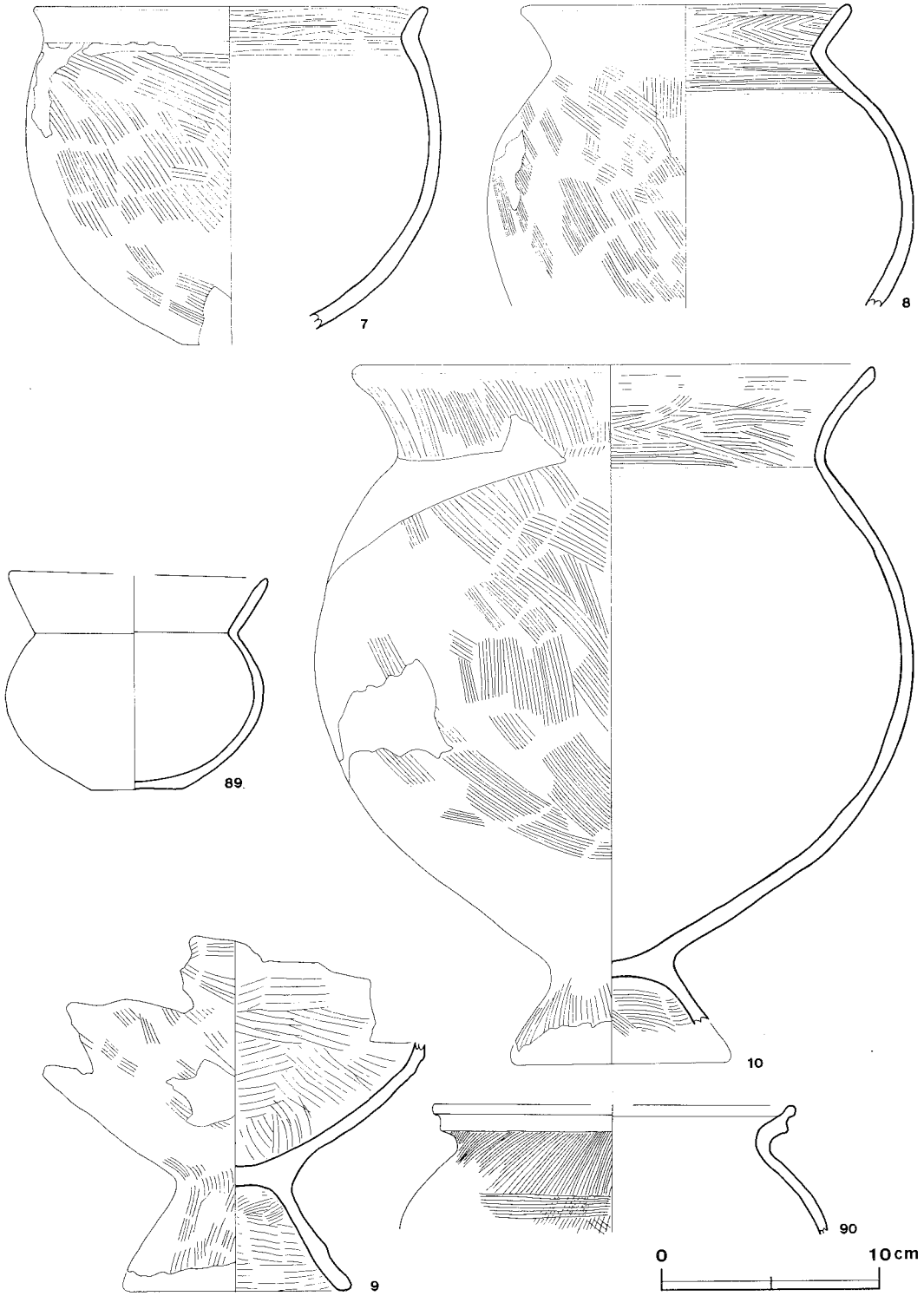
形で，床を45cm埦状に掘りこんで構築されている。

覆土は4層からなり，主に暗褐色土，褐色土が堆積している。北東側の一部を除いて自然堆積である。

遺物は，覆土の中層から坩形土器(P89・P108)，器台形土器(P110・P111)，壺形土器(P101・P106)，下層から台付甕形土器(P90・P94)，甕形土器(P91～P93・P95・P97～P99・P105)，壺形土器(P100・P104)，高坏形土器(P109)，器台形土器(P112)，北側に横位でミニチュア土器(P113・P114)，中央の床面からまとまって甕形土器(P7・P8)，台付甕形土器(P9・P10)，小型甕形土器(P96)，壺形土器(P102・P103・P107)が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。

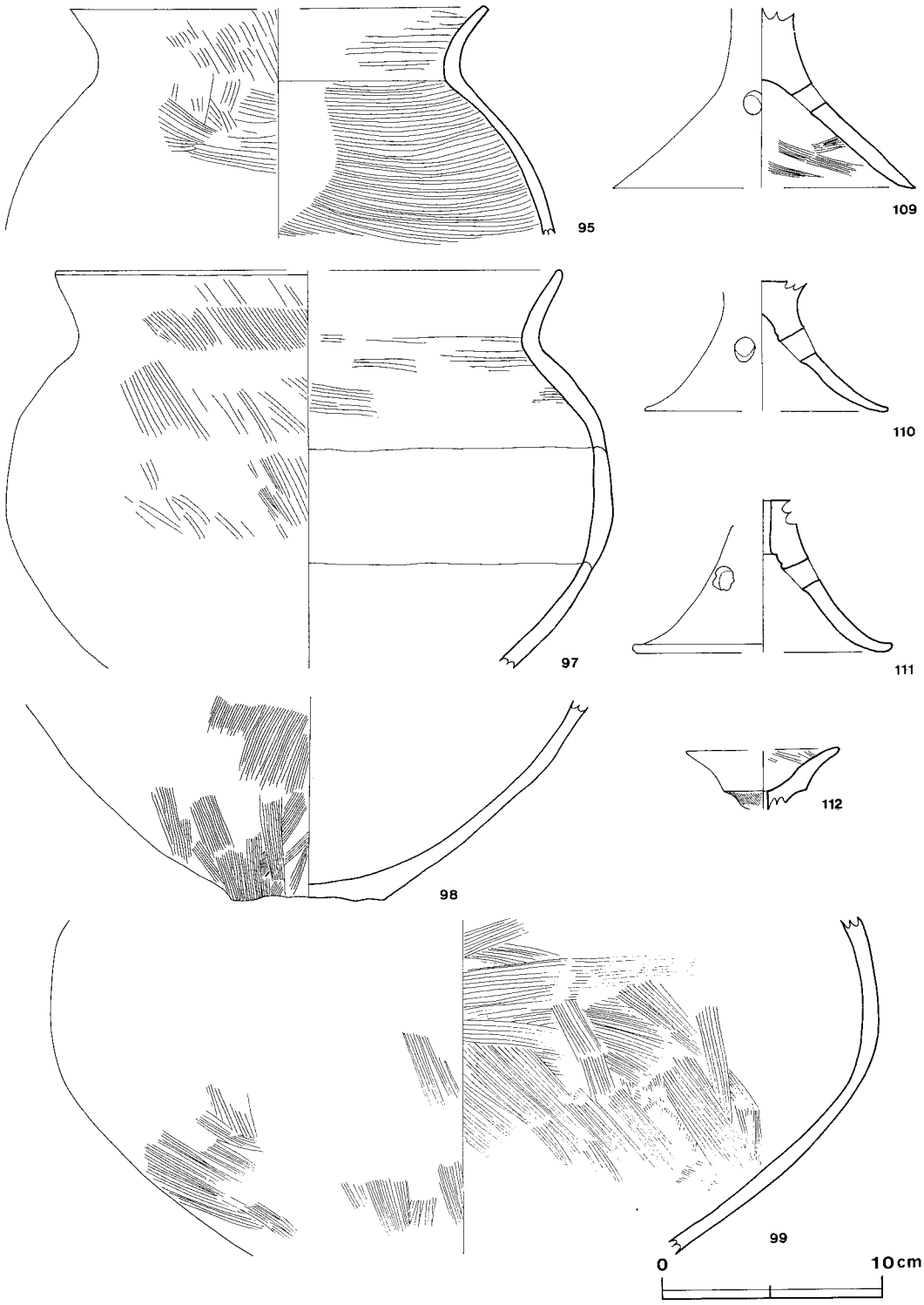
第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 P7	甕形土器 土師器	A 16.9 B(15.3)	胴部はやや長胴を呈する。口縁部は短く「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形 胴部内面－ハケ目整形後なで	パミス・砂粒 暗褐色 普通	75%
P8	甕形土器 土師器	A 15.2 B(13.2)	胴部は球形を呈すると思われ，口頸部は「コ」の字状に近い立ち上がりである。	口縁部内・外面－ハケ目整形後なで 胴部外面－ハケ目整形 内面－なで	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	65% 外面煤付着
P9	台付甕形土器 土師器	B(15.6) D 7.6	台部は「ハ」の字状に下方に開く。胴部は外傾して立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	砂粒・スコリア 黒褐色 良好	25%
P10	台付甕形土器 土師器	A 23.8 B 31.2 D 9.7	台部は小さく「ハ」の字状に下方に開く。胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面・脚部内面－ハケ目整形 胴部内面－なで	砂粒・パミス 灰褐色 普通	75% 胴部外面中位煤付着
P89	坩形土器 土師器	A 11.6 B 10.1 C 4.2	底部は平底で，胴部は扁平な球形を呈する。口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後なで	石英・砂 にぶい橙色 普通	80%
P90	台付甕形土器 土師器	A 16.5 B(6.0)	胴部は球形を呈すると思われる。口頸部は「S」字状に立ち上がる。	胴部外面－ハケ目整形 内面－なで	スコリア・砂粒・雲母 橙色 良好	10% 煤付着
第31図 P91	甕形土器 土師器	B(23.9) C 9.8	底部は突出した平底。胴部は球形を呈する。	外面－ハケ目整形後丁寧ななで 内面－ハケ目整形	礫・スコリア・砂粒・石英 橙色 普通	35%
P92	甕形土器 土師器	A 16.0 B(16.4)	胴部は球形を呈する。口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	礫・雲母・砂粒 浅黄橙色 普通	40%
P93	甕形土器 土師器	A 16.5 B(20.6)	胴部は球形を呈する。口頸部は鋭角な「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	30%
P94	台付甕形土器 土師器	B(11.1) D 10.0	台部は「ハ」の字状に下方へ開く。胴部は外傾して立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後なで	スコリア・パミス・長石・砂 にぶい橙色 普通	20%

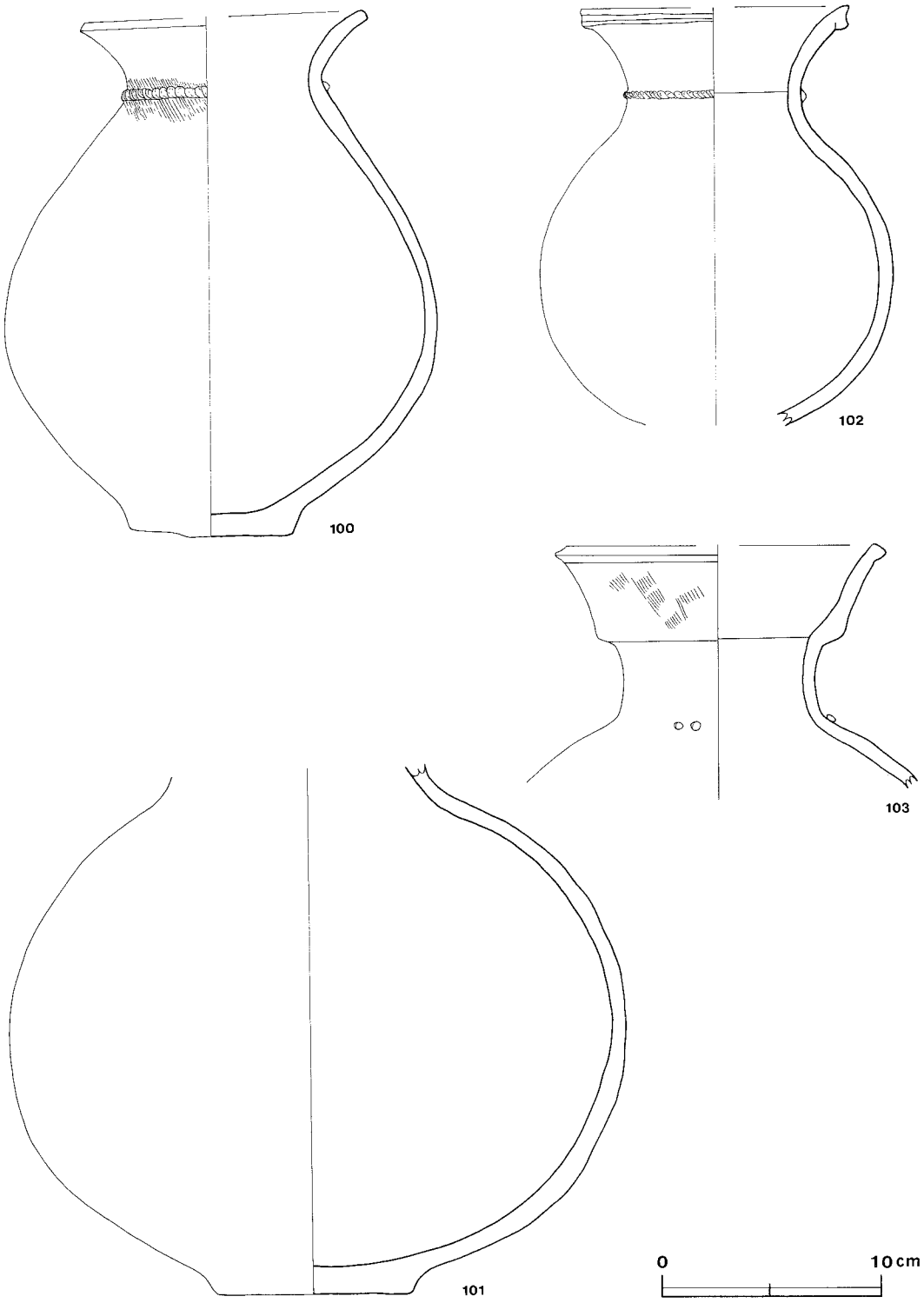


第30図　第12号住居跡出土遺物実測図（1）

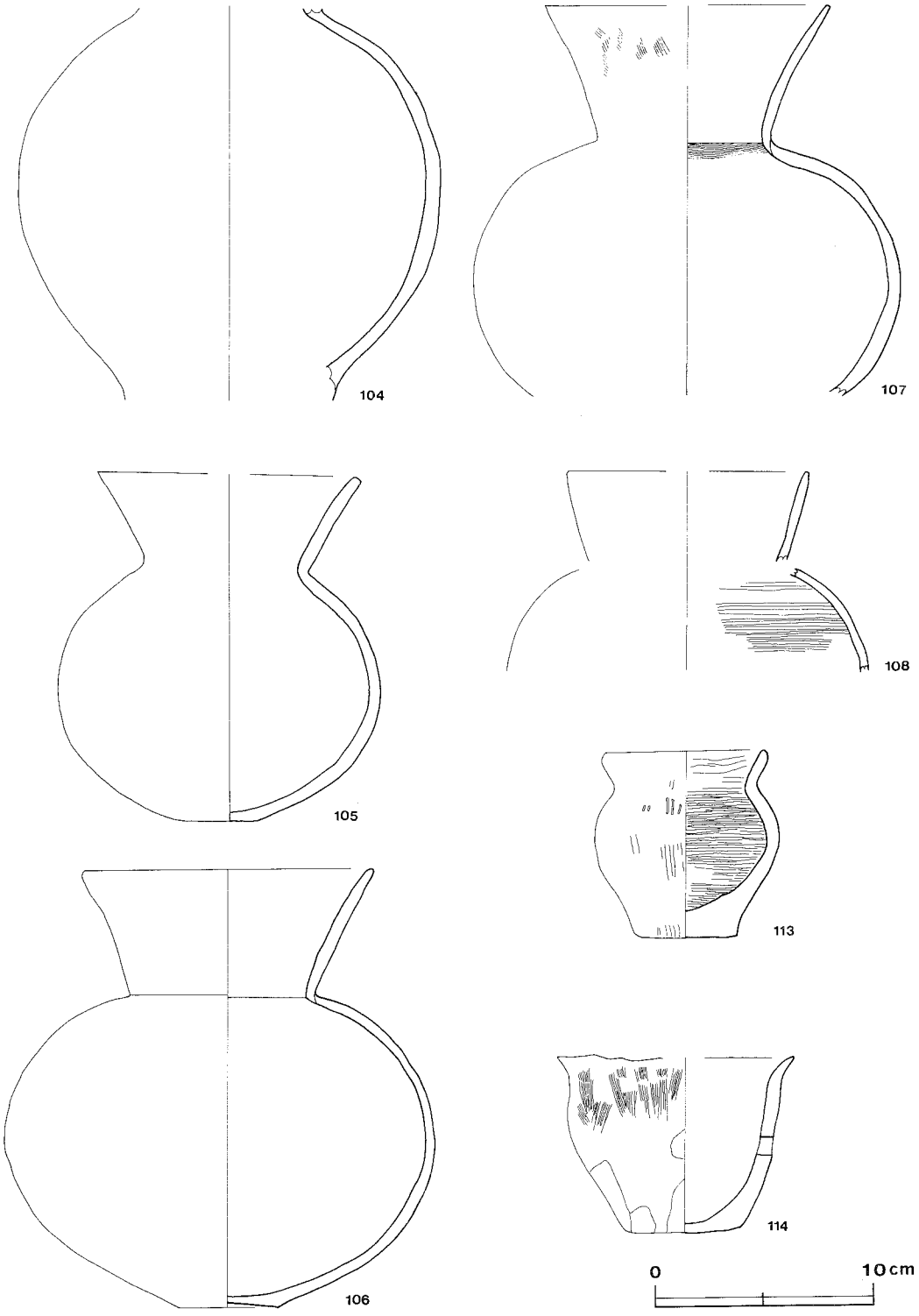
第31図　第12号住居跡出土遺物実測図（2）



第32図　第12号住居跡出土遺物実測図（3）



第33図　第12号住居跡出土遺物実測図（4）



第34図　第12号住居跡出土遺物実測図（5）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 P95	甕形土器 土師器	A 19.0 B(10.6)	胴部は球形を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	スコリア・石英・砂粒 黒褐色 普通	15%
第31図 P96	小型甕形土器 土師器	A 12.4 B(11.8)	胴部は球形を呈し，鋭角な「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形 内面－ハケ目整形後なで	スコリア・石英・砂粒 橙色 普通	20%
第32図 P97	甕形土器 土師器	A 23.5 B(18.5)	胴部は扁平な球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	スコリア にぶい橙色 普通	20% 胴下半に煤付着
P98	甕形土器 土師器	B(9.2) C 7.2	底部は小さい平底。胴部は外傾しながら立ち上がる。	外面－ハケ目整形 内面－なで	スコリア・石英・砂 にぶい橙色 普通	20%
P99	甕形土器 土師器	B(15.5)	胴部は扁平な球形で，下位に最大径をもつ。	内・外面－ハケ目整形	石英・砂粒 橙色 普通	25%
第33図 P100	壺形土器 土師器	A 12.8 B 24.4 C 7.6	底部は突出した平底。胴部は球形を呈し下半に最大径をもち，口頸部は「く」の字状に立ち上がる頸部に粘土紐を貼り付ける。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂・石英 にぶい橙色 普通	70%
P101	壺形土器 土師器	B(24.3) C 9.2	底部は突出した平底。胴部は球形を呈する。	外面－丁寧なで 内面－なで	礫・石英・雲母 浅黄橙色 普通	65%
P102	壺形土器 土師器	A 12.2 B(19.4)	胴部は球形を呈する。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反して立ち上がる。頸部に粘土紐貼り付け，口唇部に「S」字状凸帯を付ける。	内・外面－ハケ目整形後丁寧なヘラなで	石英・砂粒 浅黄橙色 普通	35%
P103	壺形土器 土師器	A 14.3 B(11.8)	頸部は垂直に立つ。口縁部は下半で段をつくり，外傾して立ち上がる。口縁端部は平坦な面をもつ。頸部に円形浮文を付ける。	内・外面－ハケ目整形後なで	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	10%
第34図 P104	甕形土器 土師器	B(18.2)	胴部は球形を呈する。	内・外面－なで	スコリア にぶい橙色 普通	40% 胴部中位外面煤付着
P105	壺形土器 土師器	A 11.5 B 16.0 C 3.5	底部は平底で，胴部は球形を呈する。口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－丁寧なで	砂・石英・礫 にぶい橙色 普通	70%
P106	壺形土器 土師器	A 13.3 B 20.2 C 4.6	底部はやや上げ底で，胴部は扁平な球形を呈する。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－丁寧なで 胴部外面－なで	スコリア・パミス・長石・砂 にぶい褐色 普通	65%
P107	壺形土器 土師器	A 13.0 B(18.0)	胴部は扁平な球形を呈す。口縁部は外傾して立ち上がる。	外面－ハケ目整形後丁寧なで 内面－丁寧なで	パミス・スコリア・石英 浅黄橙色 普通	55%
P108	坩形土器 土師器	A 10.8 B(9.2)	胴部は球形を呈し，口縁部は垂直ぎみに立ち上がる。	外面－丁寧なで 口縁部内面－なで 胴部内面－ハケ目整形	スコリア・パミス・砂 にぶい赤褐色 普通	20%

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第32図 P109	高坏形土器 土師器	B(8.4) D 13.9	脚部上半は柱状を呈し，下半は「ハ」の字状に下方に開く。	外面－丁寧なで 内面－ハケ目整形	スコリア・石英 にぶい橙色 普通	70%
P110	器台形土器 土師器	B(5.9) D 11.0	脚部はラッパ状に下方に開く。 脚部に3孔を穿つ。	内・外面－ハケ目整形後なで	スコリア・雲母・砂 浅黄橙色 普通	65%
P111	器台形土器 土師器	B(7.0) D 12.1 孔径 0.7	脚部は「ハ」の字状に開く。裾部はやや彎曲し，上方に上がる。 受部中央に単孔を穿つ。	外面－丁寧なで 内面－ハケ目整形後なで	砂粒・石英 赤色 普通	70%
P112	器台形土器 土師器	B(2.8) D 7.1	受部は中位で稜をつくり，外傾して立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後なで	パミス・スコリア・石英 橙色 普通	30%
第34図 P113	ミニチュア土器 土師器	A 7.3 B 8.7 C 4.8	底部は平底。胴部は器肉を減じながら外傾し，中位で内傾する。 口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－ハケ目整形	石英 にぶい橙色 普通	100%
P114	ミニチュア土器 土師器	A 11.0 B 8.1 C 5.7	底部は平底。胴部は器肉を減じながら垂直に立ち上がり，口縁部は外傾する。胴部に横位の単孔を穿つ。	外面－ハケ目整形後下半をヘラけずり 内面－なで	砂粒・石英 にぶい黄橙色 普通	70%

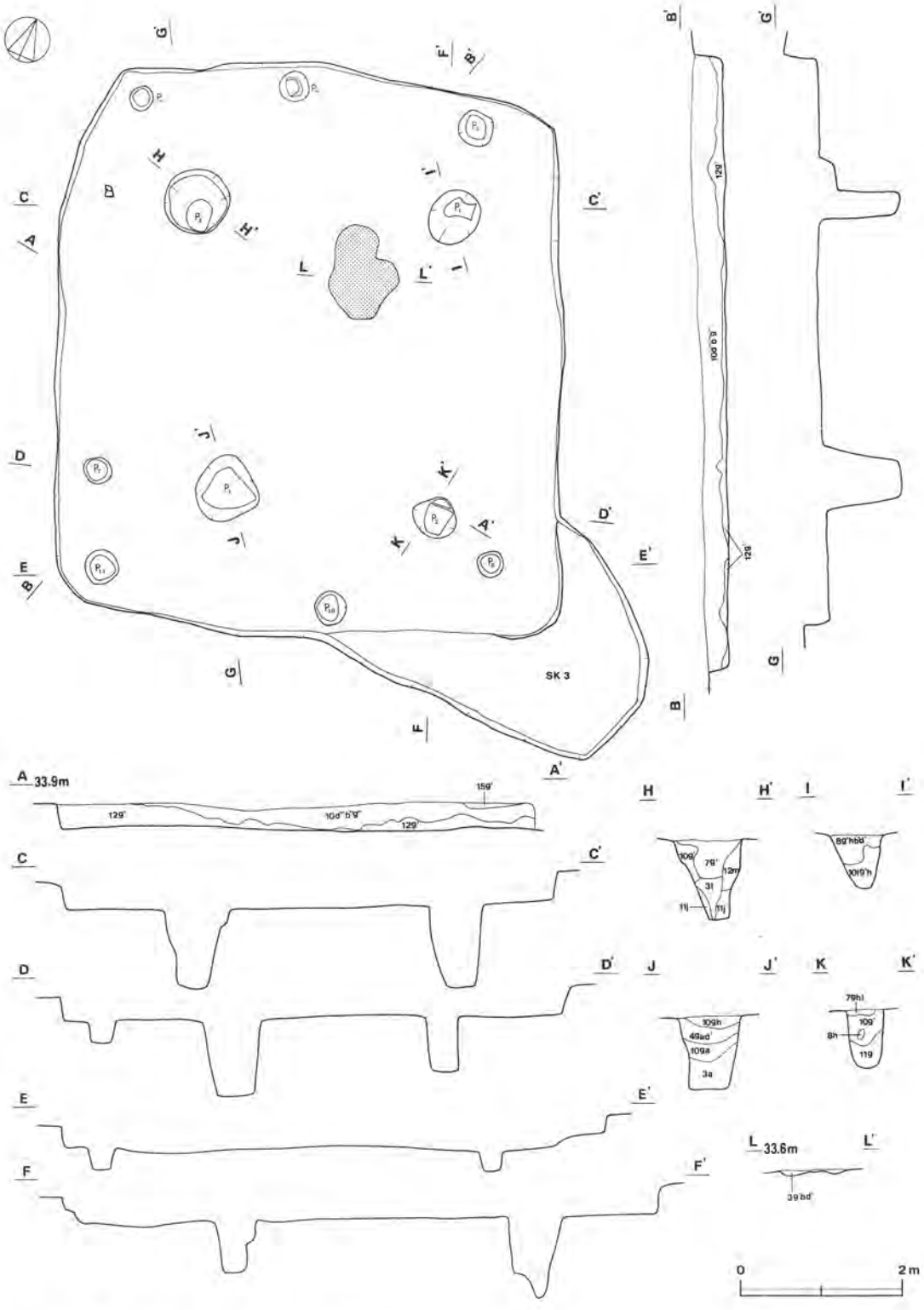
第14号住居跡（第35図）

本跡は，遺跡南部のE1c$_9$区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の北約3mに位置している。南東側で第3号土坑と，北側で第15B号住居跡と，北西側で第50号住居跡と重複している。新旧関係は，土層堆積状況から，本跡が第3号土坑よりも新しく，さらに本跡の炉下10cmに第50号住居跡の床面があるため，本跡が第50号住居跡よりも新しい。また本跡が第15B号住居跡の床を切り，重複部分に第15B号住居跡の貼り床がないことから，本跡が第15B号住居跡よりも新しいと考えられる。

平面形は，長軸7.0m・短軸6.3mの隅丸長方形で，長軸方向はN－21°－Wである。壁は上部がソフトローム，下部がハードロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は25～38cmである。床はハードロームで，平坦であり，床面はどの部分も踏み固められている。炉は中央に検出され，長径118cm・短径84cmの不整楕円形で床を7cm掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼けレンガ状に硬化している。炉の断面は皿形である。柱穴は，規模の大きいP$_1$～P$_4$の4か所，規模の小さいP$_5$～P$_8$の4か所あり，大規模の柱穴1本と小規模の柱穴1本を1組にして4か所配置している。P$_1$～P$_4$は径60～86cm・深さ69～100cmであり，P$_5$～P$_8$は径28～44cm・深さ13～29cmである。

覆土は3層からなり，すべて褐色土が自然堆積している。1層は焼土粒子・炭化粒子を含み，締まっていないが，2・3層はローム粒子を含み締まっている。

遺物は，覆土下層から壺形土器（P112），甕形土器（P116），台付甕形土器（P115），器台形土

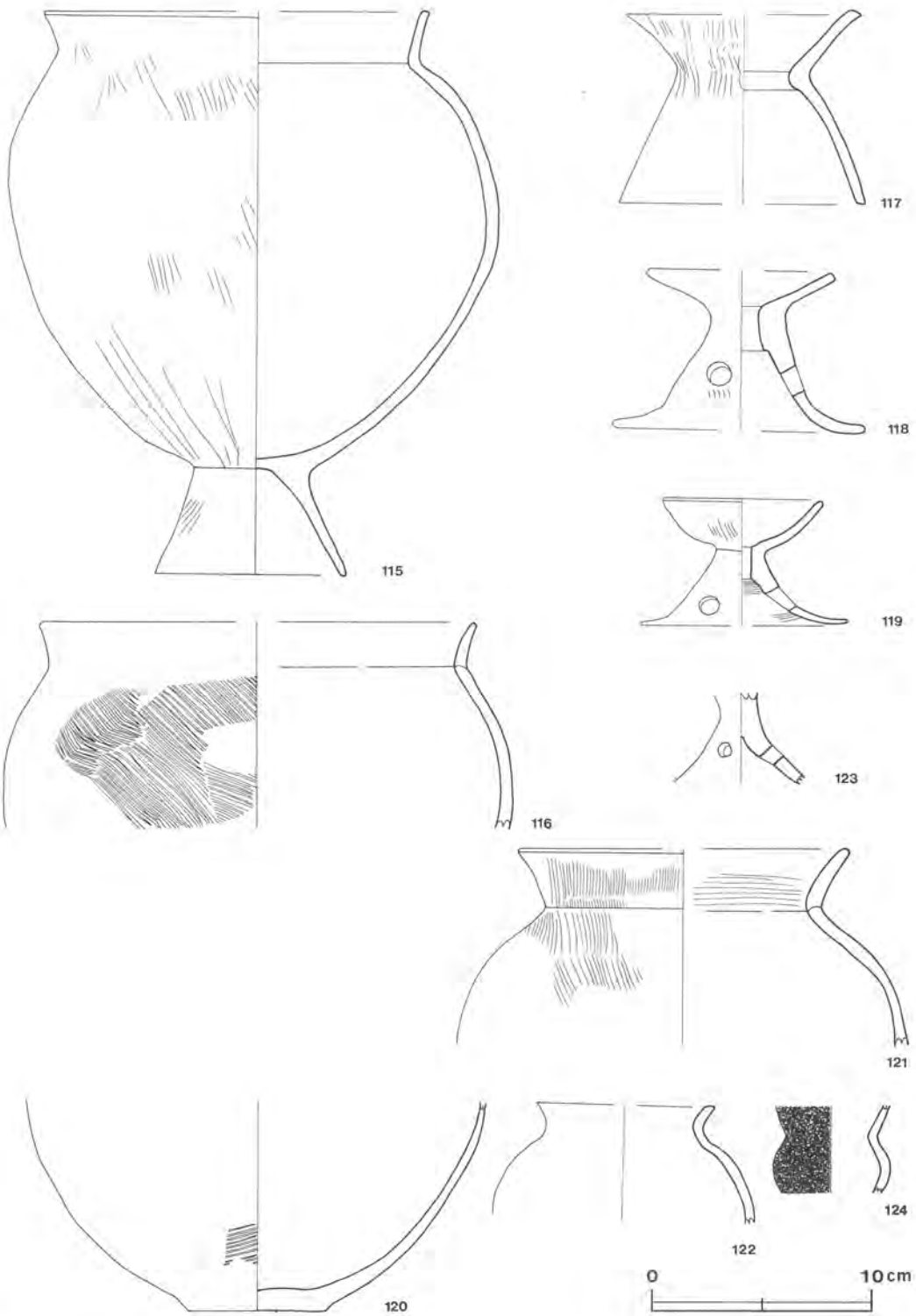


第35図　第14号住居跡・第３号土坑実測図

器（P117・P118・P123），ミニチュア土器（P124），北壁際や北側コーナー部の床面から甕形土器（P120・P121），器台形土器（P119）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。また，南東側コーナー部の覆土下層から勾玉が１点出土している。

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 P115	台付甕形土器 土師器	A 17.5 B 26.0 D 8.7	台部は「ハ」の字状に下方に開く。胴部は球形を呈し，口縁部は垂直に立ち上がる。	胴部外面上半－ハケ目整形 下半－ヘラなで	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	80%
P116	甕形土器 土師器	A 19.8 B(9.5)	口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 胴部外面－丁寧なハケ目整形	長石 浅黄橙色 普通	10%
P117	器台形土器 土師器	A 9.6 B 9.6 D 11.3	脚部は「ハ」の字状に下方に開く。受部は外傾して上方に開く。受部中央に単孔を穿つ。	外面－ハケ目整形後なで 内面－丁寧ななで	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	90%
P118	器台形土器 土師器	A 11.6 B(7.4)	受部は外傾して立ち上がり，上位で小さな稜をつくる。脚部に３孔を穿つ。	外面・受部内面－ハケ目整形後 丁寧ななで	長石・スコリア にぶい黄褐色 普通	60%
P119	器台形土器 土師器	A 7.2 B 5.8 D 9.4	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は皿状に開き，後垂直に立ち上がる。脚部に３孔を穿つ。	脚部外面－丁寧な縦のなで 内面－ハケ目整形	砂・スコリア・礫 ・長石 にぶい橙色 普通	80%
P120	甕形土器 土師器	B(9.7) C 6.3	底部は突出した平底。胴部は器肉を減じながら外傾して立ち上がる。	胴部外面下半－ヘラなで 内面－丁寧ななで	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	20%
P121	甕形土器 土師器	A 15.0 B(9.0)	口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部外面－横なで 内面・胴部外面－ハケ目整形	砂粒・パミス 外－にぶい黄褐色 内－明赤褐色 普通	10%
P122	壺形土器 土師器	A 8.1 B(5.3)	胴部は球形を呈すると思われ，口頸部は「コ」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－横なで	砂粒・長石・石英 橙色 普通	15%
P123	器台形土器 土師器	B(4.2)	脚部はラッパ状に下方に開くと思われる。脚部に３孔を穿つ。	外面－丁寧ななで	スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	50%
P124	ミニチュア土器 土師器	A 5.2 B(4.0)	胴部は内彎し，口縁部との境でくびれる。口縁部は内彎して立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂粒 外－にぶい赤褐色 内－橙色 良好	30% 外面朱彩



第36図　第14号住居跡出土遺物実測図

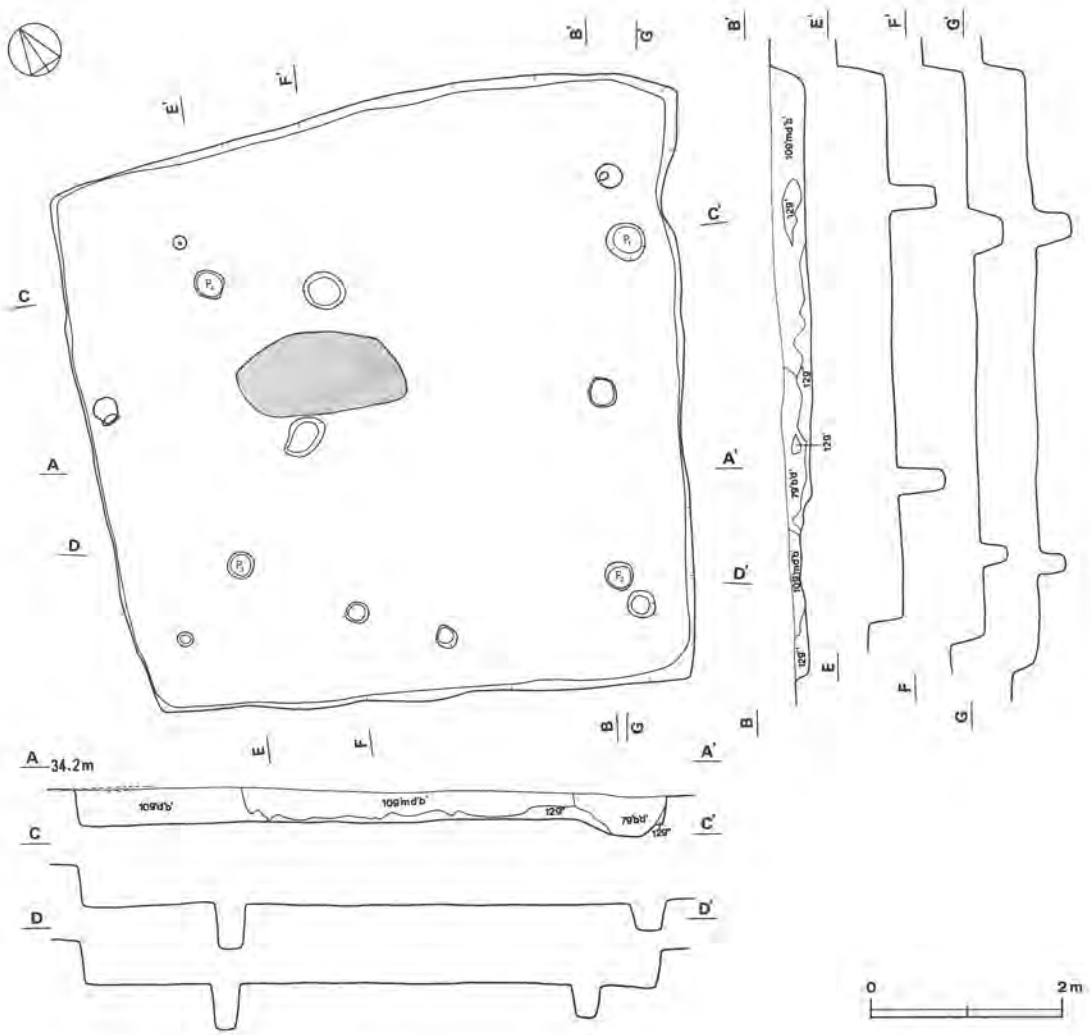
石製品（PL105）

勾玉　南東側コーナー部覆土下層から出土している。長さ2.7cm，最大幅2.2cm，厚さ3.5mm，重さ5.7g，孔径1.5mmである。完成品で，上・下を平たく研磨し左右側面も研磨している。

第15A号住居跡（第37図）

本跡は，遺跡中央のD1j$_8$区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の北約14mに位置している。南東側で第15B号住居跡と重複している。新旧関係は土層堆積状況から，本跡が第15B号住居跡よりも新しいと考えられる。

平面形は，長軸6.6m・短軸6.5mの方形で，長軸方向はN－29°－Eである。壁は上部がソフト



第37図　第15A号住居跡実測図

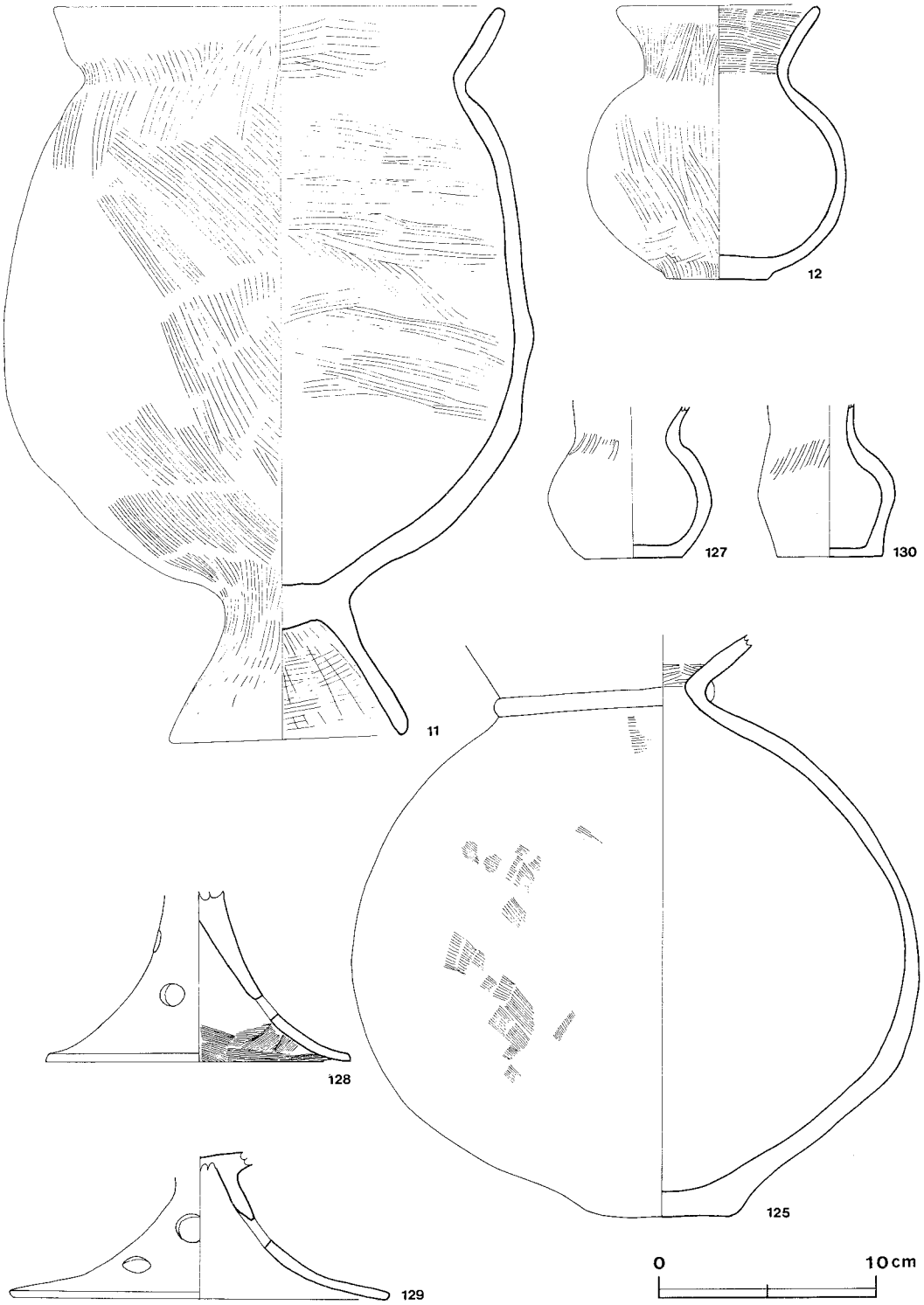
ローム，下部がハードロームでよく締まっており，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は30～34cmである。床はハードロームで平坦である。床面はどの部分も踏み固められている。炉は検出されない。柱穴はP_1～P_4の4か所で，その規模は径30～40cm・深さ32～52cmで，長方形状に配置されている。

覆土は4層からなり，主に暗褐色土，褐色土が自然堆積している。上層は焼土粒子・炭化粒子を含んでおり，全層とも締まっている。

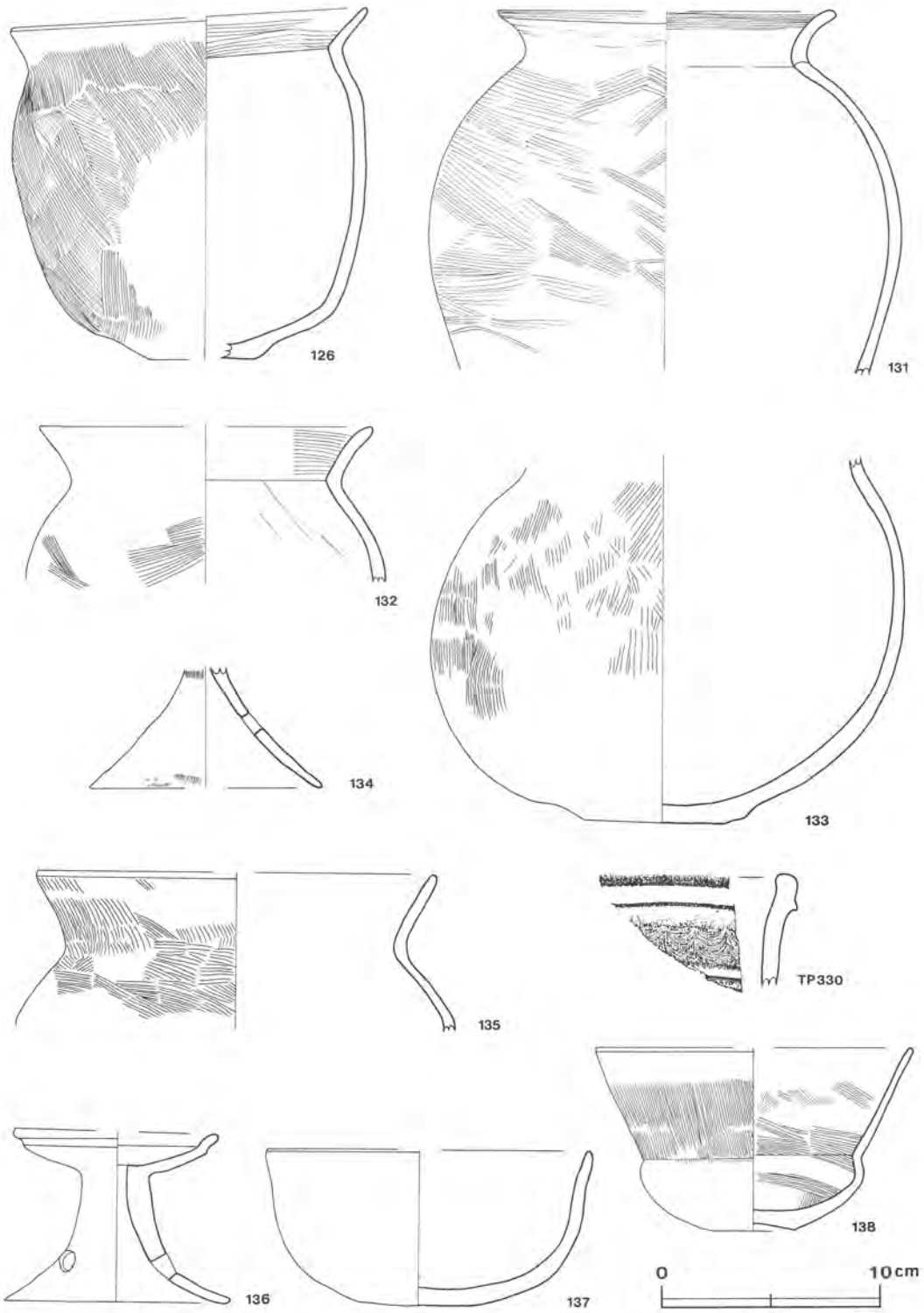
遺物は，覆土の下層から壺形土器（P125），台付甕形土器（P111），甕形土器（P126），小型甕形土器（P12），器台形土器（P128），ミニチュア土器（P127・P130），東壁際床面から甕形土器（P131・P132），中央の床面から器台形土器（P129）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。

第15A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 P11	台付甕形土器 土師器	A 19.7 B 33.1 C 10.4	台部は「ハ」の字状に下方に開く。胴部は長胴で，直立する部分が多い。口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形 胴部・脚部内面－ハケ目整形後なで	砂粒 にぶい褐色 普通	90%
P12	小型甕形土器 土師器	A 9.2 B 12.1 C 4.3	底部は突出した平底。胴部は球形を呈し，口頸部は「コ」の字状に近い立ち上がりである。	外面・口縁部，内面－ハケ目整形 胴部内面－なで	砂粒・パミス・礫 にぶい褐色 良好	98%
P125	壺形土器 土師器	B(27.0) C 7.0	底部は厚く突出した平底。胴部は扁平な球形を呈する。頸部に粘土紐を貼り付ける。	口縁部内・外面・胴部外面－ハケ目整形後なで 胴部内面－なで	砂・礫・長石 橙色 普通	90%
第39図 P126	甕形土器 土師器	A 16.2 B 16.9 C 5.0	底部は突出した平底。胴部はやや長胴で，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面・胴部外面－ハケ目整形 胴部内面－なで	砂・長石 褐灰色 普通	70%
第38図 P127	ミニチュア土器 土師器	A 5.3 B 7.0 C 4.4	底部は平底。胴部中位に最大径をもち，球形を呈する。口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	パミス・砂 にぶい橙色 普通	90%
P128	器台形土器 土師器	B(7.9) D 14.0	脚部はラッパ状に下方に開く。脚部に6孔を穿つ。	外面－丁寧なで 内面－ハケ目整形	砂・スコリア にぶい橙色 普通	70%
P129	器台形土器 土師器	B(6.8) D 17.5	脚部はラッパ状に下方に開き，裾部はほぼ水平になる。脚部に8孔を穿つ。	外面－丁寧なで 内面－なで	砂粒 浅黄橙色 普通	60%
P130	ミニチュア土器 土師器	A 3.9 B 7.0 C 4.3	底部は平底。胴部は垂直に立ち上がり，中位で内彎する。口縁部は垂直に立ち上がり，口縁端部は器肉を減ずる。	外面－ハケ目整形 内面－なで	スコリア・パミス にぶい赤褐色 普通	80%
第39図 P131	甕形土器 土師器	A 15.4 B(16.7)	胴部は球形を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面・胴部外面－ハケ目整形 胴部内面－なで	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	10%
P132	甕形土器 土師器	A 15.2 B(7.2)	胴部は内彎し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面・胴部外面－ハケ目整形	砂粒・礫・石英 浅黄橙色 不良	30%



第38図　第15Ａ号住居跡出土遺物実測図



第39図　第15A・B・16号住居跡出土遺物実測図

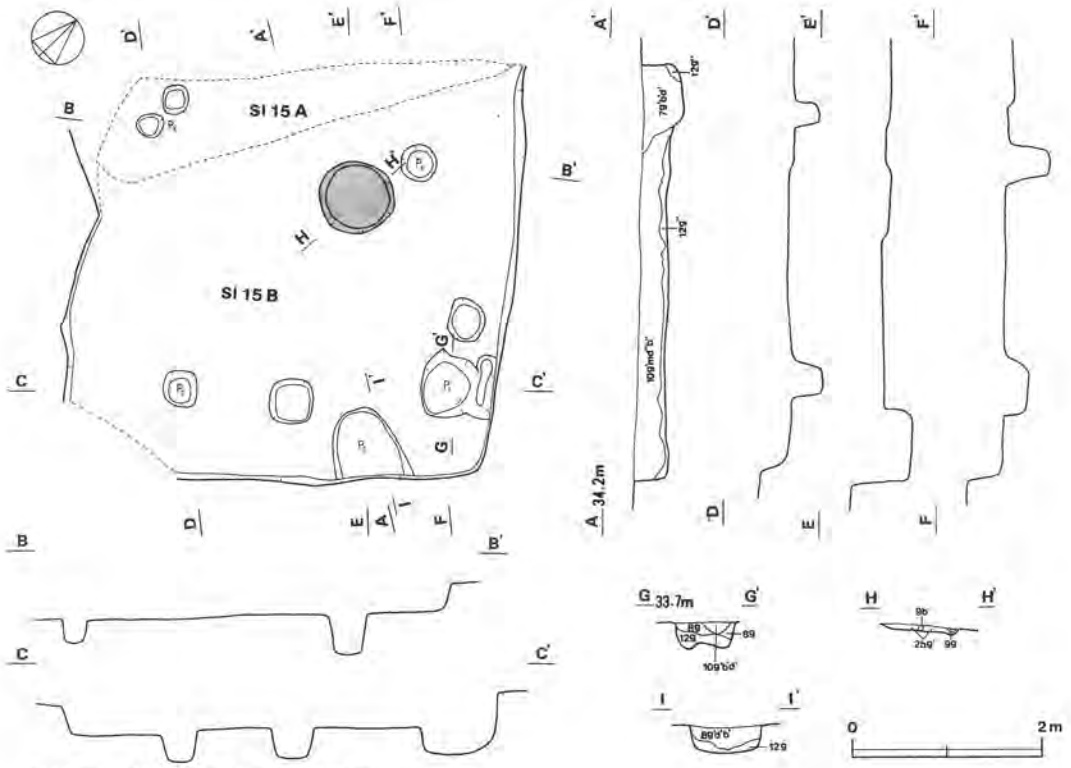
第15B号住居跡（第40図）

本跡は，遺跡南部のE1a$_9$区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の北約10mに位置している。南側で第14号住居跡と，南西側で第50号住居跡と，北西側で第15A号住居跡と重複している。新旧関係は，第14・50号住居跡が本跡の床を切り，重複部分に両住居跡の貼り床等の跡がないことから，本跡が両住居跡よりも古く，土層堆積状況から第15A号住居跡よりも古いと考えられる。

平面形は，長軸4.6m・短軸4.5mの方形で，長軸方向はN－45°－Eである。壁は重複のため北・東側だけ残っており，ソフトロームである。壁は床面から垂直に立ち上がり，壁高は30～34cmである。床は北西側と南側の一部が削平されているが，ハードロームで，平坦である。床面は硬いが踏み固められてはいない。炉は中央からやや北寄りに検出され，径80cmの円形で床を6cm掘り凹めた地床炉である。柱穴はP_1～P_4の4か所で，その規模は径30～40cm・深さ32～52cmである。各コーナー部に検出され，柱穴間は約2.5mと等間隔である。

覆土は4層からなり，すべて締まりのある褐色土で自然堆積している。上層は焼土粒子・炭化粒子を含み，下層はローム粒子を含んでいる。

遺物は，東側の床面から甕形土器（P133・P135），器台形土器（P134）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。



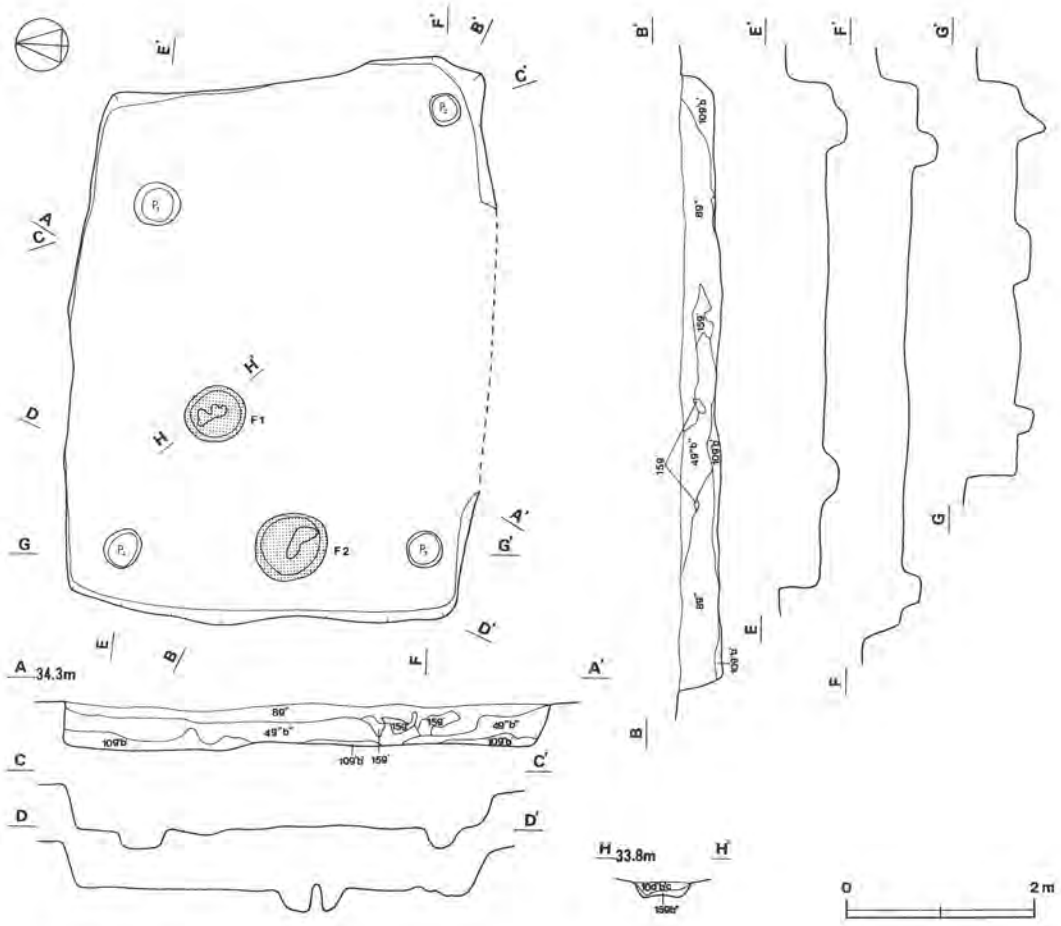
第40図　第15B号住居跡実測図

第15B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第39図 P133	甕形土器 土師器	B(17.8) C 6.3	底部は突出した平底で，胴部は球形を呈する。	胴部外面－ハケ目整形 内面－なで	スコリア・砂・雲母 にぶい橙色 普通	30%
P134	器台形土器 土師器	B(5.5) D 10.6 孔径 1.0	脚部はラッパ状に下方に開く。脚部に4孔，受部中央に単孔を穿つ。	外面－丁寧なヘラなで 内面－なで	パミス・砂粒 にぶい橙色 普通	30%
P135	甕形土器 土師器	A 18.2 B(7.2)	口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	パミス・砂 橙色 普通	15%

第16号住居跡（第41図）

本跡は，遺跡中央のD2j$_1$区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の北約15mに位置している。東側で第51号住居跡と重複している。新旧関係は，第51号住居跡の床の上に約10cmの厚さでロー



第41図　第16号住居跡実測図

ム土の貼り床があるので，本跡が第51号住居跡よりも新しいと考えられる。

平面形は，長軸6.0m・短軸4.4mの隅丸長方形で，長軸方向はN－0°である。壁は上部がソフトローム，下部がハードロームでよく締まっており，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は25～55cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はどの部分も踏み固められている。炉は中央に1基，西側に1基検出されている。中央のF1は長径66cm・短径60cmのほぼ円形で，床を10cm掘り凹めている。西側のF2は長径78cm・短径72cmのほぼ円形で，床を20cm掘り凹めている。両方とも地床炉で，炉床はF1の中央の一部しか焼けていない。F1の覆土は2層で赤褐色土，褐色土が堆積し，F2の覆土は3層で暗褐色土，褐色土，明褐色土が堆積している。F1・F2は約1m離れており，F1・F2の新旧は不明である。F1・F2とも断面は皿形である。柱穴はP_1～P_4の4か所で，その規模は径32～44cm・深さ18～28cmである。各コーナー部に検出され，長方形状に配列されている。

覆土は4層からなり，主に暗褐色土，褐色土が堆積している。南側で一部撹乱を受けているが，他は自然堆積である。4層ともローム粒子を含み，2・3層は焼土粒子を含んでいる。

遺物は，覆土上層から坩形土器（P138），鉢形土器（P137），中層から器台形土器（P136）が出土している。3点とも古墳時代の五領式に比定される。

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 P136	器台形土器 土師器	A 9.2 B 7.8 D 10.4	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は外傾し，上半で稜をつくり垂直に立ち上がる。脚部に3孔を穿つ。	受部内面・脚部外面－丁寧ななで	砂・石英 浅黄橙色 普通	90%
P137	鉢形土器 土師器	A 14.6 B 7.2	底部は丸底。体部は大きく内彎して立ち上がる。	外面－粗いヘラなで 内面－丁寧ななで	パミス・礫 外－にぶい褐色 内－褐灰色 普通	60%
P138	坩形土器 土師器	A 14.4 B 8.4 C 3.8	底部は上げ底。体部は内彎し，口縁部との境でくびれる。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面・器内面－ハケ目整形後なで 体部外面－丁寧ななで	砂・スコリア にぶい橙色 普通	55%　体部内面煤付着

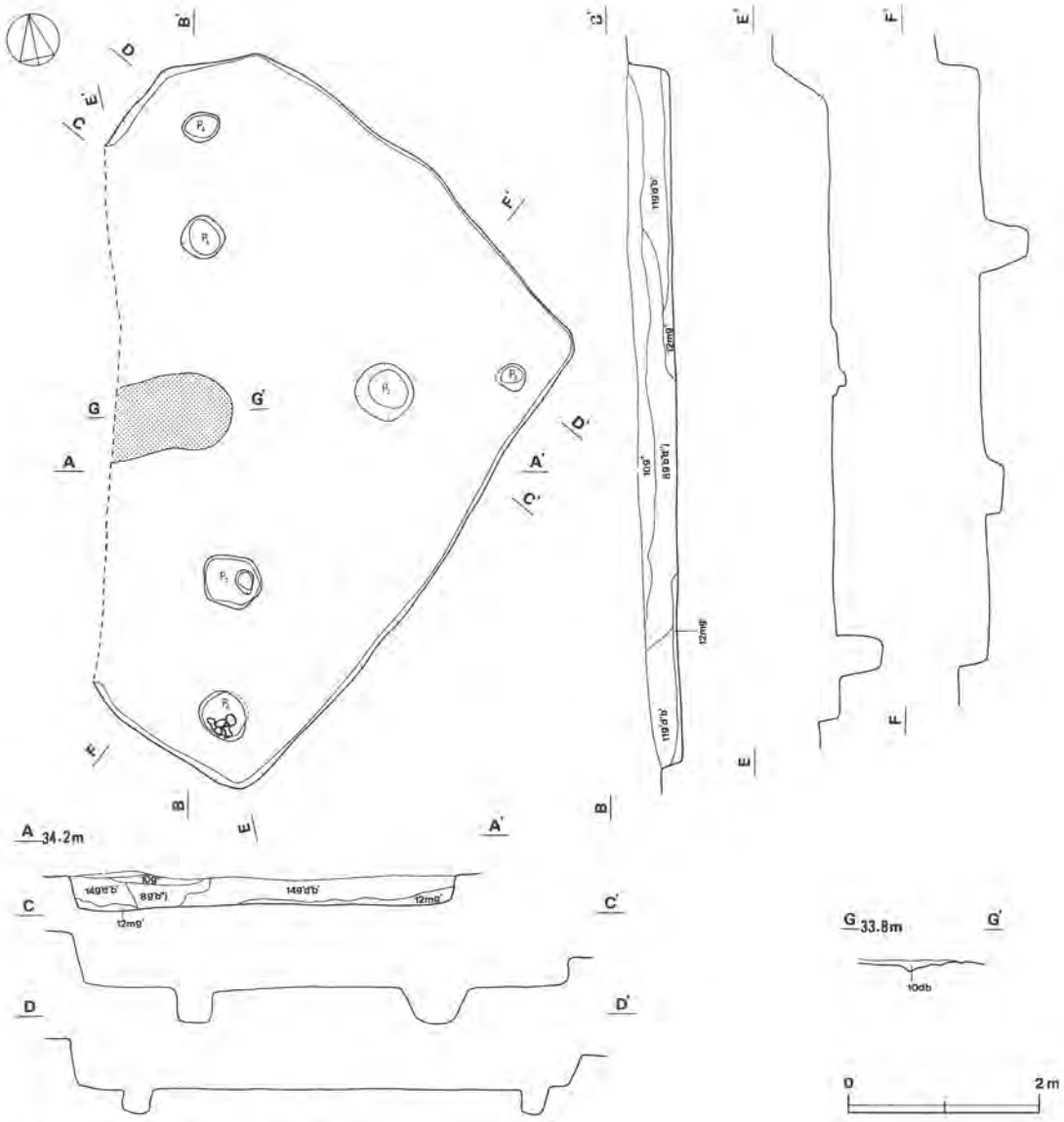
第17号住居跡（第42図）

本跡は，遺跡中央の$D1j_4$区を中心に確認されたもので，第11号住居跡との北西約24mに位置している。西側はエリア外のため調査できなかった。

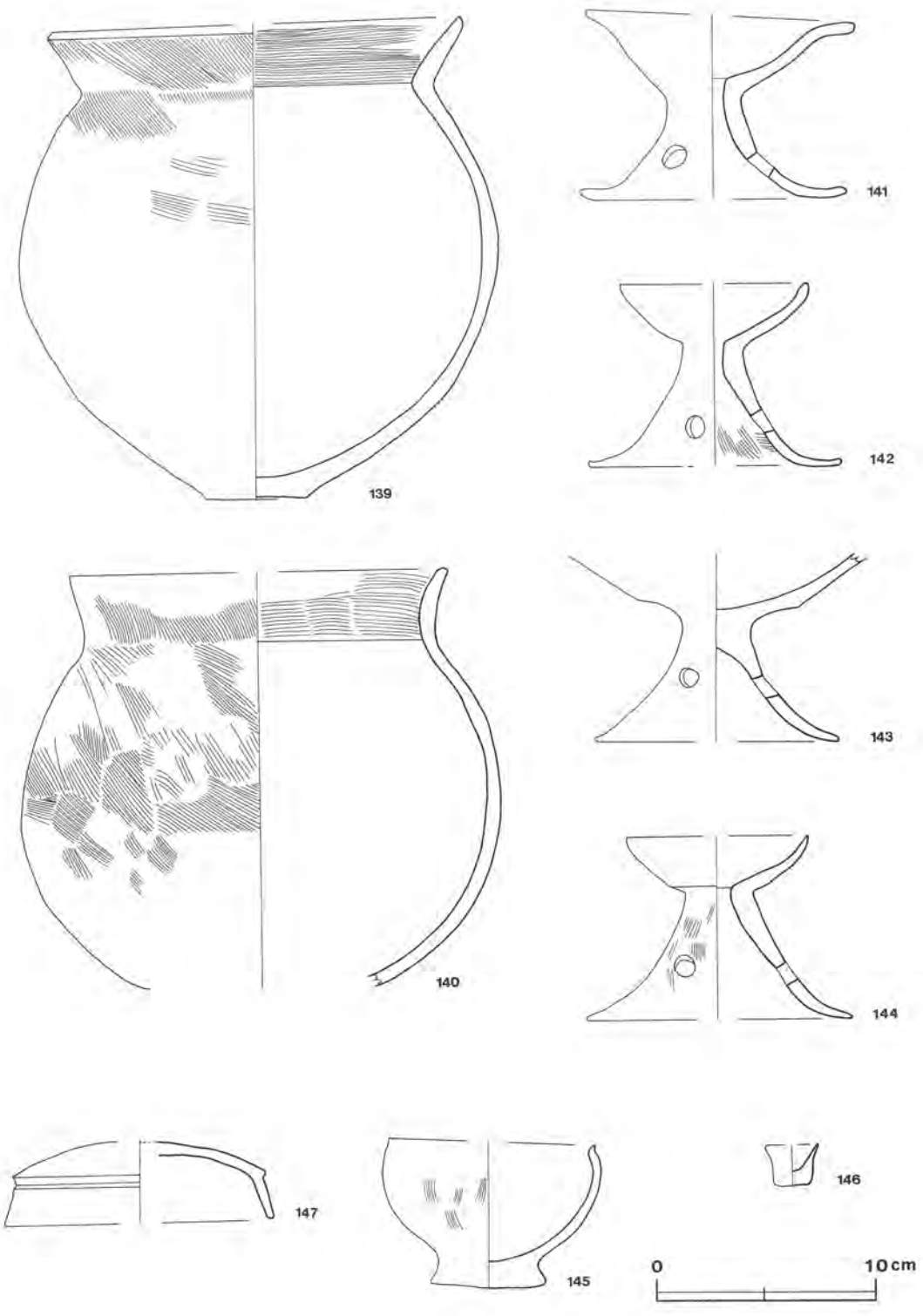
平面形は，長軸6.6m・短軸5.7mの隅丸方形と思われ，長軸方向はN－43°－Wを指すものと考えられる。壁は上部がソフトローム，下部がハードロームで，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は30～55cmである。床はハードロームで，平坦である。床面は踏み固められており，中央が特に硬くなっている。炉は住居跡の中央と思われる部分に検出され，長径123cm・短径80cmの楕円

形で，床を16cm掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼け，レンガ状に硬くなっている。炉覆土は1層で褐色土が堆積し，焼土粒子を含んでいる。主柱穴はP_1～P_3の3か所で，規模は径35～65cm・深さ25～55cmである。P_1・P_2間，P_2・P_3間は2.5mと等間隔である。また，P_4・P_5は支柱穴と考えられ，P_1・P_2のすぐ北側に検出されている。P_6は貯蔵穴と考えられ，径46cmの円形で，床を48cm掘りこんで構築され，断面は「U」形である。

覆土は4層からなり，主に暗褐色土，褐色土が自然堆積している。1・3層だけ締まっており，2～4層は焼土粒子を含んでいる。



第42図　第17号住居跡実測図



第43図　第17号住居跡出土遺物実測図

遺物は，覆土上層から須恵器の坏形土器（P147），下層から器台形土器（P142），ミニチュア土器（P146），北側の床面から破片で甕形土器（P139・P140），北側の床面から破片で高坏形土器（P143），貯蔵穴底面から横位で器台形土器（P139・P144），炉覆土から破片で埦形土器（P145）が出土している。須恵器は古墳時代の5世紀末のもので，流れこみと考えられるが，他はすべて五領式に比定される。

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 P139	甕形土器 土師器	A 19.1 B 22.0 C 4.8	底部は平底。胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	内面・胴部外面上半－ハケ目整形 胴部外面下半－ハケ目整形後ヘラなで	砂 暗褐色 普通	80%
P140	甕形土器 土師器	A 17.5 B(19.4)	胴部は球形を呈する。口縁部はあまりすぼまらず，やや垂直ぎみに立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	長石・パミス 黒褐色 普通	60%
P141	器台形土器 土師器	A 10.4 B 8.5 D 12.3	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は外傾して立ち上がり，口唇部で皿状に開く。脚部に3孔を穿つ。	内・外面－丁寧ななで	スコリア・砂粒 橙色 普通	70%
P142	器台形土器 土師器	A 8.7 B 8.5 D 11.7	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は小さく皿状に開き，口唇部で外傾して立ち上がる。脚部に3孔を穿つ。	外面－丁寧ななで 脚部内面－ハケ目整形	パミス・スコリア・砂粒・礫 浅黄橙色 普通	90%
P143	高坏形土器 土師器	B(8.7) D 11.2	脚部はラッパ状に下方に開く。坏部は皿状に開いた後稜をつくり，外傾して立ち上がる。脚部に3孔を穿つ。	内・外面－丁寧ななで 受部外面下半－粗いヘラなで	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	50%
P144	器台形土器 土師器	A 8.4 B 8.5 D 12.3	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は小さく外傾して立ち上がる。脚部に3孔を穿つ。	内・外面－丁寧ななで	スコリア・長石 浅黄橙色 普通	70%
P145	埦形土器 土師器	A 9.4 B 6.8 C 5.3	小型の埦。底部は器肉が厚く突出する。体部は内彎して立ち上がり，口縁上半はややくびれる。	口唇部内・外面－横なで 胴部外面－ハケ目整形後なで	スコリア・石英・長石 橙色 普通	80%
P146	ミニチュア土器 土師器	A 2.4 B 1.9 C 1.4	底部は器肉が厚い平底。体部は器肉を減じながら垂直に立ち上がる。	内・外面－なで	パミス 浅黄橙色 普通	60%
P147	坏（蓋） 須恵器	基部径12.4 稜 径11.7 口縁高 2.2	口縁部は内傾して立ち上がり天井部との境でくびれ後稜をつける。天井部は内彎する。	内・外面－ロクロ整形	石英 灰色 良好	30% 天井部外面灰釉

第18号住居跡（第44図）

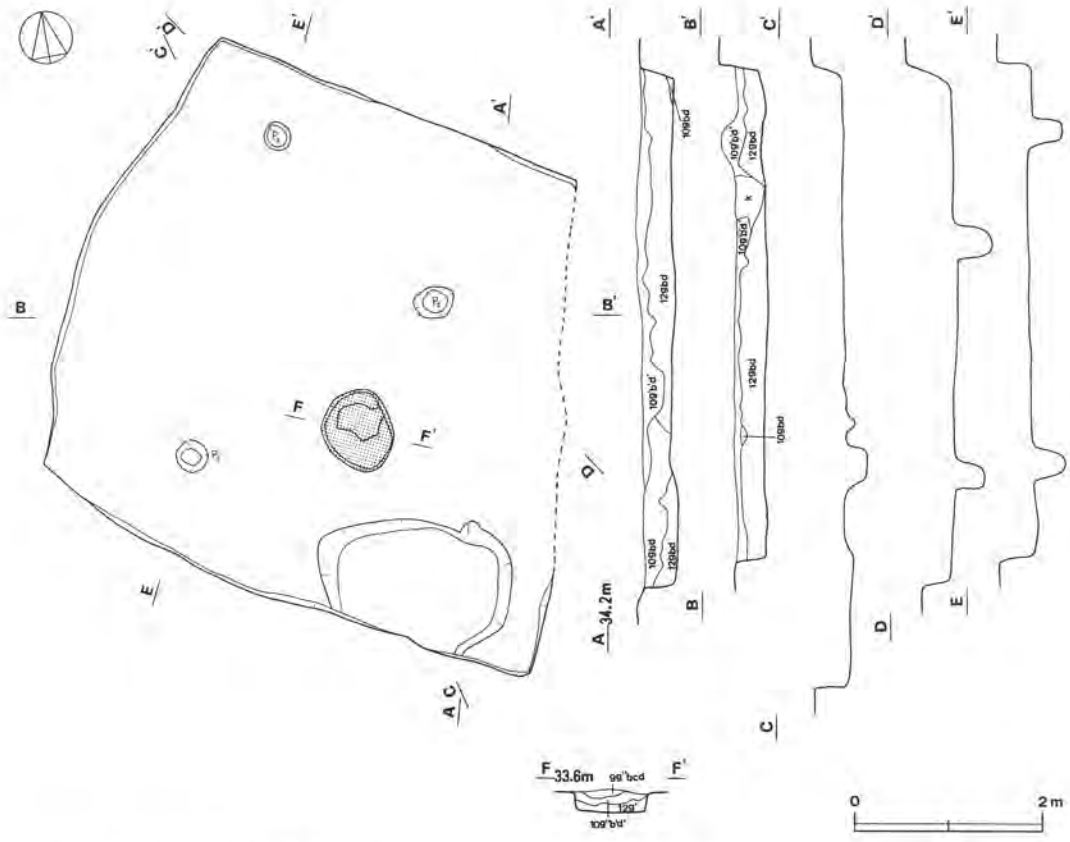
本跡は，遺跡南部の東端E2d$_4$区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の東約12mに位置している。東側はエリア外のため調査できなかった。

平面形は，長軸6.0m・短軸5.3mの長方形と思われ，長軸方向はN－56°－Wを指すものと考えられる。壁はソフトロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は30～35cmである。床はハードロームで，大部分は平坦である。撹乱のため南東コーナー部付近は10cm程凹んでいる。床面は

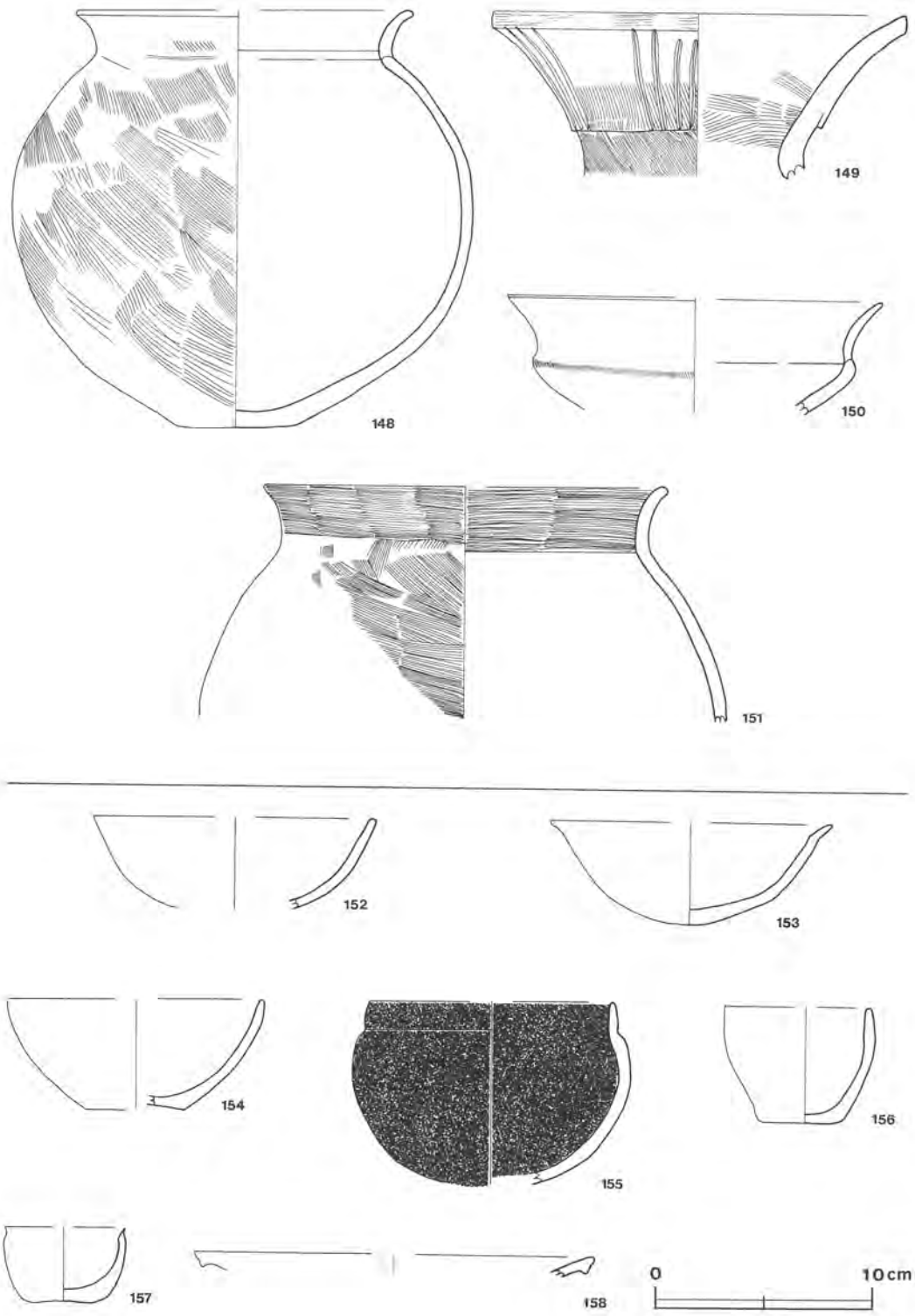
よく踏み固められている。炉は中央の南東側寄りに検出され，長径90cm・短径74cmの楕円形で，床を22cm掘り凹めた地床炉である。炉床はあまり焼けていない。炉覆土は4層で，極暗赤褐色土，褐色土が堆積している。柱穴はP_1～P_3の3か所で，その規模は径30～45cm・深さ32～45cmで，配置は三角形状である。

覆土は3層からなり，すべて暗褐色土が堆積している。南東側の一部は撹乱を受けているが，他は自然堆積である。どの層も焼土粒子・炭化粒子が含まれている。

遺物は，覆土下層から甕形土器（P148），坏形土器（P150），東側の床面から壺形土器（P149），北側の床面から甕形土器（P151）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。



第44図　第18号住居跡実測図



第45図　第18・19号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 P148	甕形土器 土師器	A 15.6 B 19.2 C 5.7	底部は平底。胴部は器肉を減じ，球形を呈する。口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部外面－ハケ目整形後横なで 胴部外面－ハケ目整形	砂粒・長石・石英 浅黄橙色 普通	70%
P149	壺形土器 土師器	A 18.8 B(7.6)	口縁部は下半に稜をつくり，垂直に立ち上がった後逆「ハ」の字状に開く。棒状線刻を付けている。	外面－ハケ目整形後4本・4本・3本の線刻を2対巡らす。 内面－なで	砂・パミス にぶい橙色 普通	10%
P150	坏形土器 土師器	A 17.4 B(5.4)	体部は内彎して立ち上がり，中位で角度を変え外上方へ開く。	内・外面－ハケ目整形後なで	砂・パミス 橙色 良好	20%
P151	甕形土器 土師器	A 18.5 B(10.9)	口頸部は「コ」の字状に立ち上がる。	内・外面－なで	砂粒・スコリア 灰白色 普通	20%

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 P152	坏形土器 土師器	A 13.2 B(4.2)	体部は器肉が一定で，大きく内彎しながら立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	砂 にぶい橙色 普通	30%
P153	鉢形土器 土師器	A 13.1 B 4.7	底部は丸底。体部は器肉を減じながら内彎して立ち上がり，口縁部は外上方に開く。	内・外面－ヘラなで	スコリア 外－灰褐色 内－にぶい橙色 普通	10%
P154	坏形土器 土師器	A 11.9 B 5.1	底部は平底で，体部はゆるく内彎しながら立ち上がり，口唇部ですぼまる。	口唇部内・外面－横なで 体部内・外面－ヘラなで	砂 浅黄橙色 普通	30%
P155	坏形土器 土師器	A 11.3 B(8.4)	体部は器肉が一定で，大きく内彎しながら立ち上がり，口縁部上半で垂直になる。	内・外面－丁寧なヘラなで	礫・スコリア 外－赤色 内－赤橙色 普通	30% 体部内外面朱彩
P156	手づくね土器 土師器	A 6.8 B 5.4 C 3.8	底部は突出した平底で，胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は垂直に立つ。	外面－ヘラなで 内面－ヘラおさえ	スコリア・石英 浅黄橙色 普通	95%
P157	ミニチュア土器 土師器	A 5.6 B 3.6 C 2.7	底部は上げ底で，胴部は器肉を減じながら垂直ぎみに立ち上がり，口縁上半で外上方に開く。	内・外面－ヘラなで 底部－ヘラけずり	雲母・砂 褐灰色 普通	40%
P158	坏形土器 須恵器	基部径18.5 B(8.9)	口縁部片。外上方に立ち上がり，口唇部直下で凸帯をつける。	内・外面－ロクロ整形	長石 灰色 普通	10% 内面に灰釉付着

第20号住居跡（第46図）

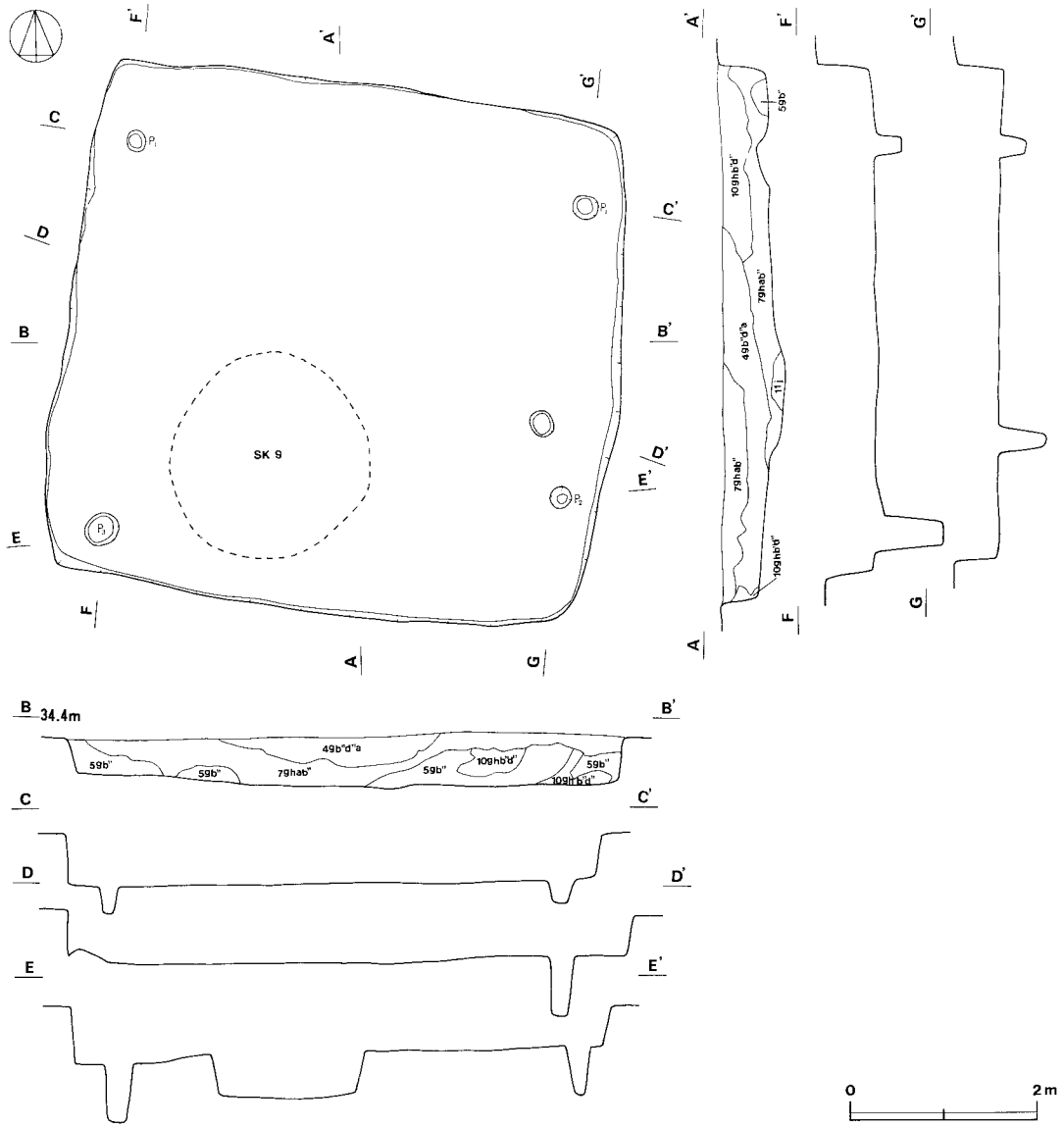
本跡は，遺跡中央のD1h$_8$区を中心に確認されたもので，第16号住居跡の北西約16mに位置している。南側で第9号土坑と重複している。新旧関係は，第9号土坑が本跡の床を切っており，重複部分に本跡の貼り床の跡がないことから，本跡が第9号土坑よりも古いと考えられる。

平面形は，長軸5.9m・短軸5.7mの隅丸方形で，長軸方向はN－89°－Wである。壁は上部がソフトローム，下部がハードロームで，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は45～65cmである。

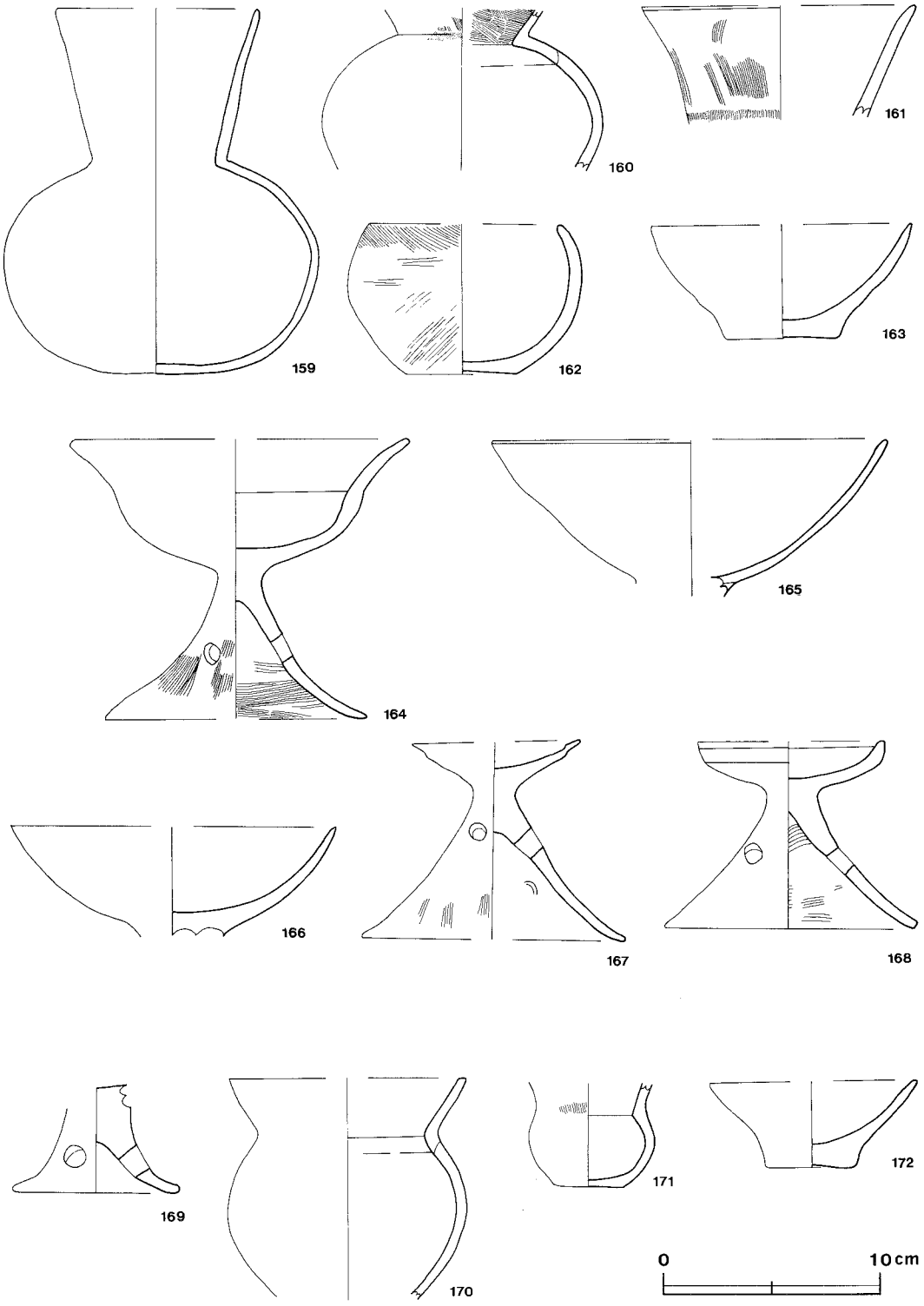
床はハードロームで，南側の一部が凹んでいるが，他は平坦である。床面はどの部分も踏み固められている。炉は検出されない。柱穴はP_1～P_4の4か所で，その規模は径23～37cm・深さ25～75cmである。各コーナー部に検出され，長方形状に配列されている。

覆土は4層からなり，主に暗褐色土，極暗褐色土，褐色土が自然堆積している。全層とも焼土粒子を含み，よく締まっている。

遺物は，覆土の上層から坏形土器（P163），小型甕形土器（P170），下層から坩形土器（P160），壺形土器（P159），器台形土器（P167～P169），鉢形土器（P162），ミニチュア土器（P171），手づ



第46図　第20号住居跡実測図



第47図　第20号住居跡出土遺物実測図

くね土器（P172），中央の床面から坩形土器（P161），北側の床面から高坏形土器（P164～P166）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。また，第９号土坑との重複部分付近から管玉が１点出土している。

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 P159	壺形土器 土師器	A 9.4 B(17.0)	底部は丸底で，体部はやや扁平な球形を呈する。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面－縦のなで 内面－横のなで 体部外面－丁寧ななで	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	50%
P160	坩形土器 土師器	B(7.5)	体部は扁平な球形を呈する。	外面－なで 内面－細かいハケ目整形	砂粒・パミス 灰白色 普通	20%
P161	坩形土器 土師器	A 12.7 B(5.3)	口縁部片。外傾して立ち上がる。	外面－細かいハケ目整形 内面－横なで	砂粒・パミス 浅黄橙色 普通	40%
P162	鉢形土器 土師器	A 8.8 B 5.0 C 7.0	底部は上げ底。体部は内彎して立ち上がる。	体部上半－ハケ目整形 下半・内面－丁寧ななで	長石・砂・スコリア 橙色 普通	90%
P163	坏形土器 土師器	A 12.0 B 5.3 C 5.3	底部は上げ底。体部は器肉を減じながら外上方に立ち上がる。	内・外面－丁寧ななで	砂 橙色 普通	30%
P164	高坏形土器 土師器	A 15.5 B 13.0 D 12.1	脚部はラッパ状に下方に開く。坏部は内彎し，上半で角度を変え，外反して上方に立ち上がる。	外面・脚部内面－ハケ目整形後軽いなで 坏部内面－丁寧ななで	スコリア・長石・雲母 灰赤色 良好	70%
P165	高坏形土器 土師器	A 18.0 B(7.3)	坏部は器肉を一定にして，内彎しながら立ち上がる。	内・外面－丁寧ななで	スコリア・石英 にぶい黄橙色 普通	60%
P166	高坏形土器 土師器	A 15.0 B(5.1)	坏部は器肉を減じながら内彎して立ち上がり，口唇部は外反してさらに器肉をうすくする。	内・外面－丁寧な縦のなで	スコリア・パミス・砂 にぶい褐色 普通	40%
P167	器台形土器 土師器	A 7.8 B 9.4 D 12.2	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は外傾して立ち上がり，口唇部で稜をつくる。脚部に６孔を穿つ。	内・外面－丁寧ななで 裾部内面－横なで	石英・砂・雲母 にぶい橙色 普通	60%
P168	器台形土器 土師器	A 8.6 B 8.7 D 11.5	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は内彎しながら立ち上がり，口唇部で直立する。脚部に３孔を穿つ。	外面・受部内面－縦のなで 脚部内面－ハケ目整形	石英・砂・雲母 にぶい橙色 普通	70%
P169	器台形土器 土師器	B(5.0) D 7.7	脚部は器肉を減じながらラッパ状に開き，裾部でさらに大きく広がる。	脚部外面－なで 内面－ハケ目整形後なで	砂・パミス・スコリア 橙色 普通	60%
P170	小型甕形土器 土師器	A 11.0 B(10.2)	胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 内・外面－丁寧ななで	パミス・砂粒 浅黄橙色 普通	40%
P171	ミニチュア土器 土師器	B(4.8) C 3.2	胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がると思われる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂粒・パミス 明褐灰色 普通	80%
P172	手づくね土器 土師器	A 9.6 B 4.2 C 4.0	底部は突出した平底。体部は器肉を減じながら外上方に立ち上がる。	内・外面－なで	スコリア・砂 外－淡黄色 内－浅黄色 普通	80%

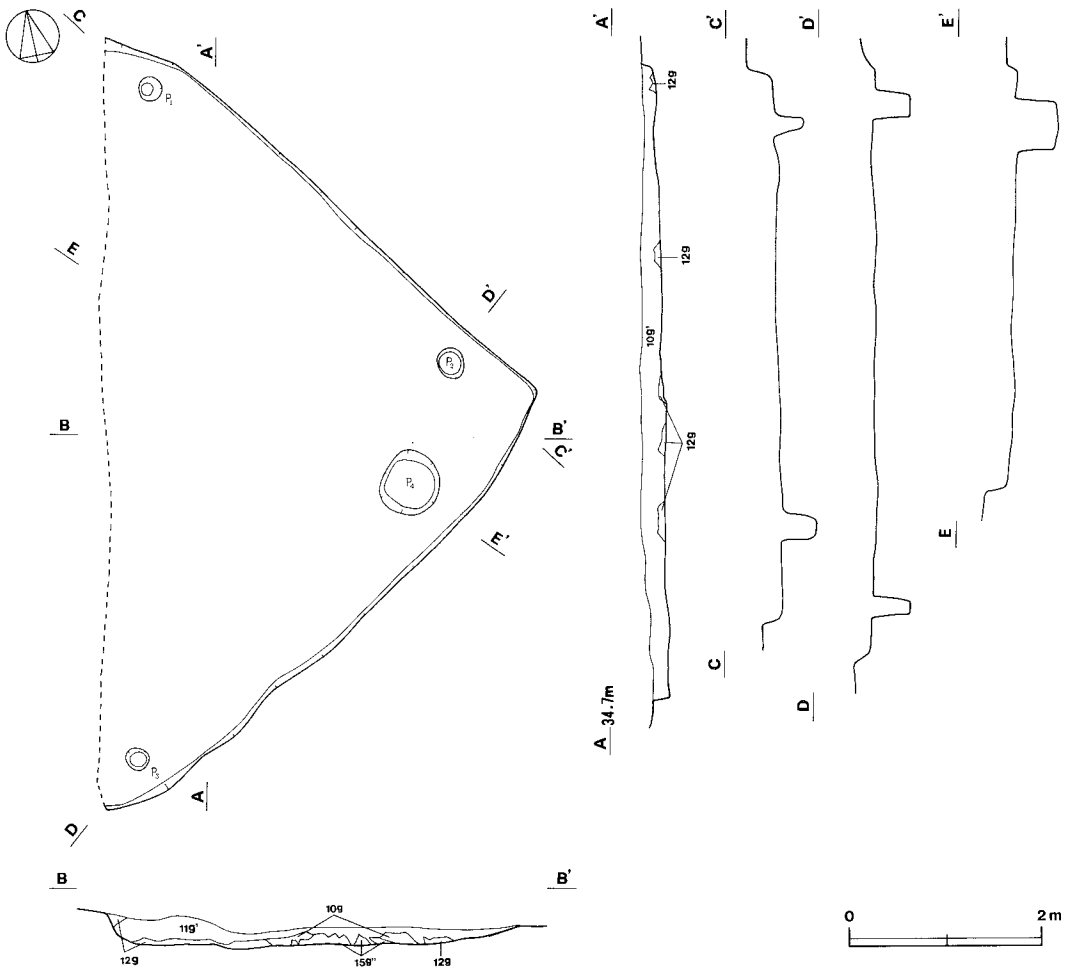
石製品（PL98）

管玉　南側の壁下の覆土下層から出土している。長さ2.4cm，径４㎜，孔径1.5㎜，重さ0.6gである。滑石製で表面をすべて研磨している。

第21号住居跡（第48図）

本跡は，遺跡中央のD1e$_6$区を中心に確認されたもので，第16号住居跡の北西約23mに位置している。西側はエリア外のため調査できなかった。

平面形は，長軸6.4m・短軸6.2mの方形と思われ，長軸方向はN－45°－Eを指すものと考えられる。壁はソフトロームで，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は20～25cmである。床はハードロームで，平坦である。床面は踏み固められていない。炉は検出されていない。柱穴はP$_1$～P$_3$

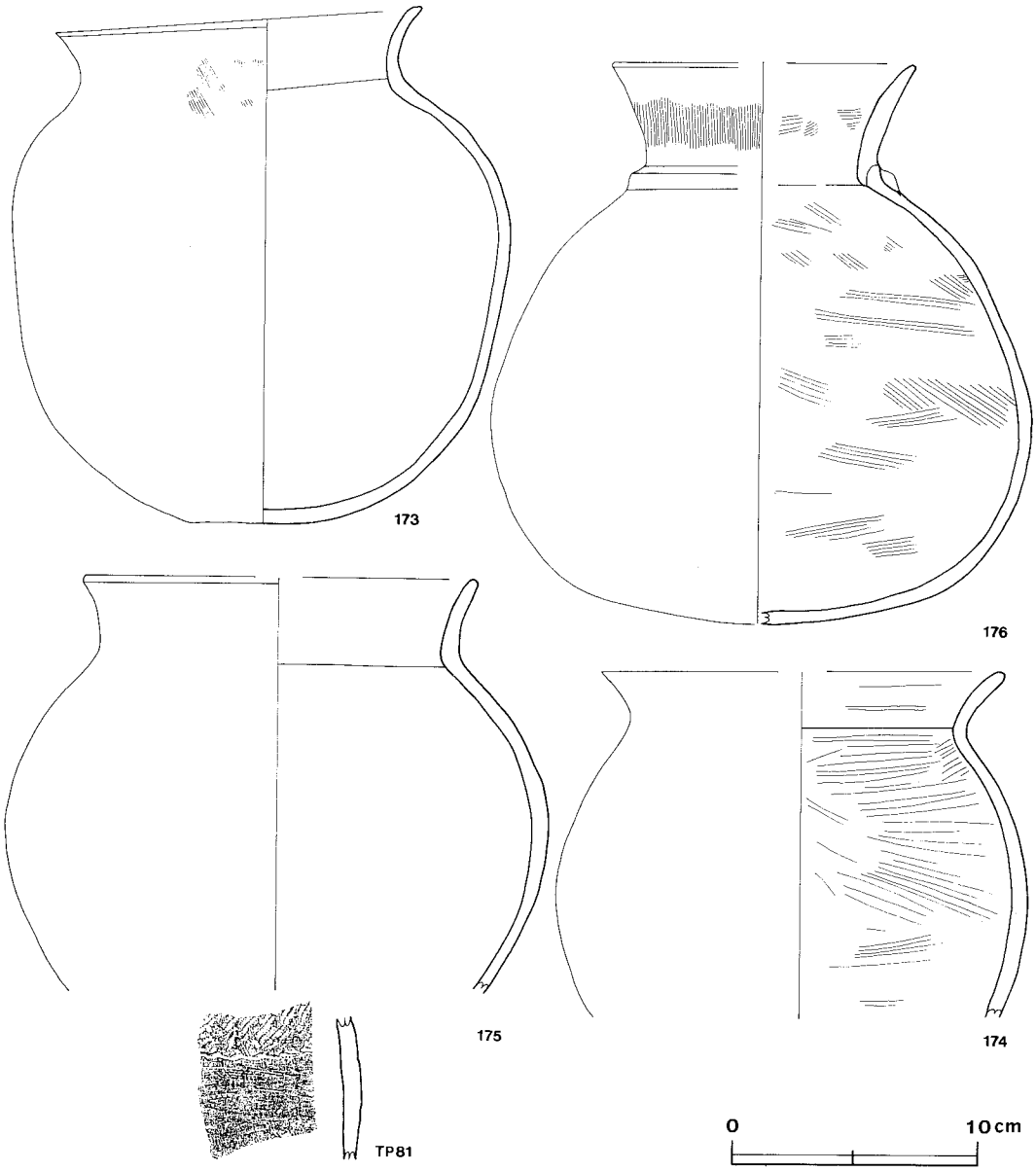


第48図　第21号住居跡実測図

の3か所で，その規模は径25～27cm・深さ35～40cmである。P_4は貯蔵穴と考えられ，径70cmの円形で，床を44cm掘りこんで構築されている。

覆土は4層からなり，すべて褐色土で自然堆積している。4層ともローム粒子を含み，1・2・4層は締まっている。

遺物は，覆土下層から壺形土器（P176），甕形土器（P173），東側コーナー部の床面から甕形土器（P174・P175）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。



第49図　第21号住居跡出土遺物実測図・拓影図

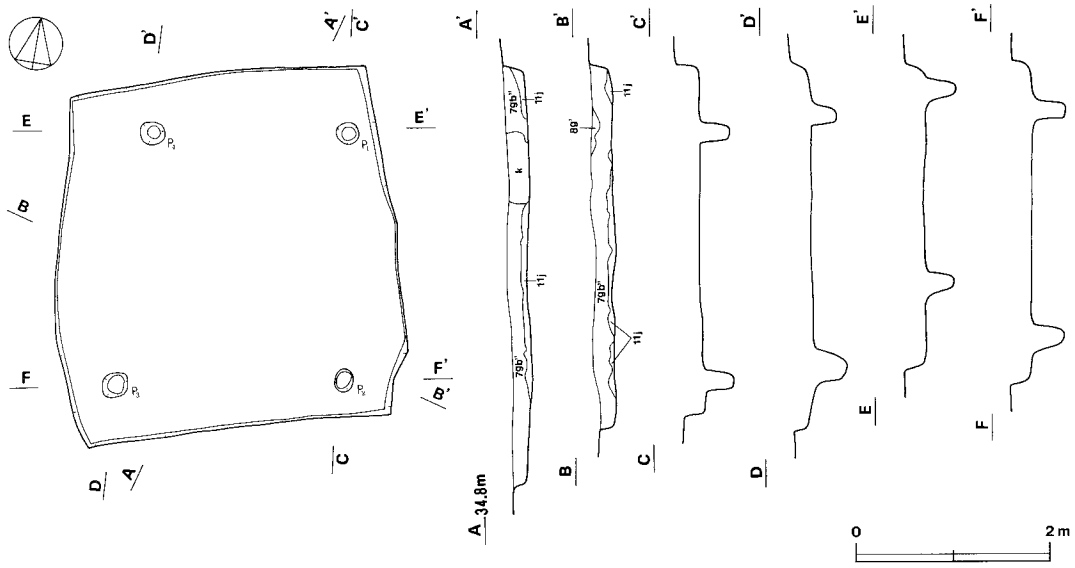
第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第49図 P173	甕形土器 土師器	A 17.0 B 21.5 C 5.1	底部はやや突出した平底。胴部は球形を呈し，最大径を上位にもつ。口縁部はゆるく外傾して立ち上がる。	内・外面－なで 頸部外面－ハケ目整形	スコリア・パミス・砂粒 橙色 普通	70%
P174	甕形土器 土師器	A 16.5 B(14.3)	胴部はやや長胴化し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	外面－なで 内面－ハケ目整形	石英・砂・パミス にぶい橙色 普通	50%
P175	甕形土器 土師器	A 15.4 B(17.3)	胴部は球形を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面・胴部内面－なで 胴部外面－ハケ目整形後なで	砂 外－黒色 内－にぶい橙色 普通	25%
P176	壺形土器 土師器	A 12.2 B(23.3)	胴部は扁平な球形を呈し，口縁部は外傾して立ち上がる。頸部に粘土紐を貼り付ける。	口縁部外面－ハケ目整形 胴部外面－ハケ目整形後なで 口縁部内面・胴部内面－なで	砂・スコリア・礫 明褐灰色 普通	40%

第22号住居跡（第50図）

本跡は，遺跡中央のD1c$_7$区を中心に確認されたもので，第16号住居跡の北西約26.6mに位置している。

平面形は，長軸3.8m・短軸3.6mの西側がやや張り出した不整方形で，西側は撹乱が入っていたためやや掘りすぎてしまったが，本来は方形を呈していたものと考えられる。長軸方向はN－13°－Wである。壁はハードロームブロック混じりの褐色土で，南側が木の根で撹乱されているためやや柔らかいが，他の壁は締まっており，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は15～20cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はどの部分もよく踏み固められている。炉は検出さ

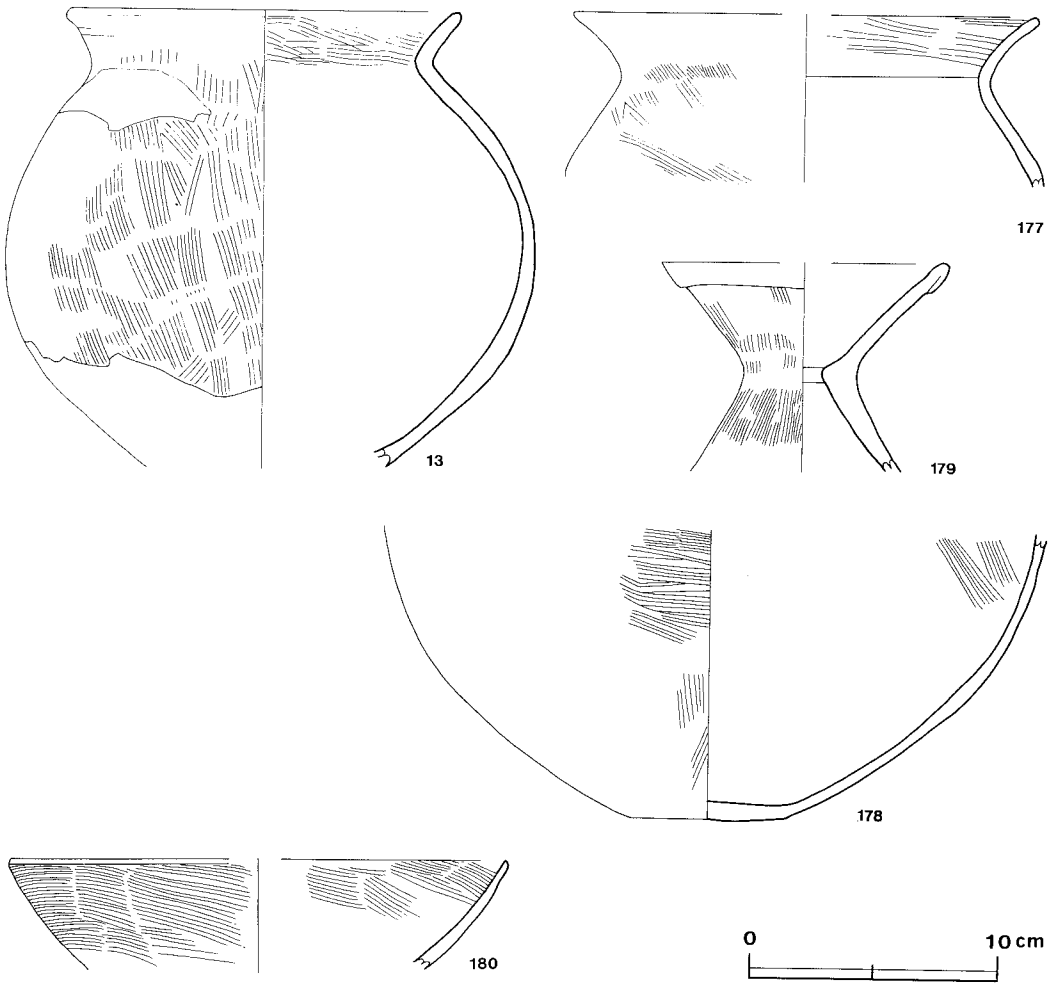


第50図　第22号住居跡実測図

れていない。柱穴はP_1～P_4の4か所で，規模は径25～35cm・深さ29～36cmである。各コーナー部に検出され，長方形状に配列されている。

覆土は4層からなり，主に暗褐色土，褐色土が堆積している。4層ともローム粒子を含み，1・2層は締まっている。北側の一部は撹乱を受けているが，他は自然堆積である。

遺物は，覆土下層から甕形土器（P177・P178），器台形土器（P179），北側の壁下の床面から甕形土器（P13）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。



第51図　第22・23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第51図 P180	高坏形土器 土師器	A 20.2 B(4.5)	坏部は器肉を減じながら大きく内彎して立ち上がる。	坏部外面－ハケ目整形 内面－ハケ目整形後なで	砂・パミス 灰褐色 普通	15%

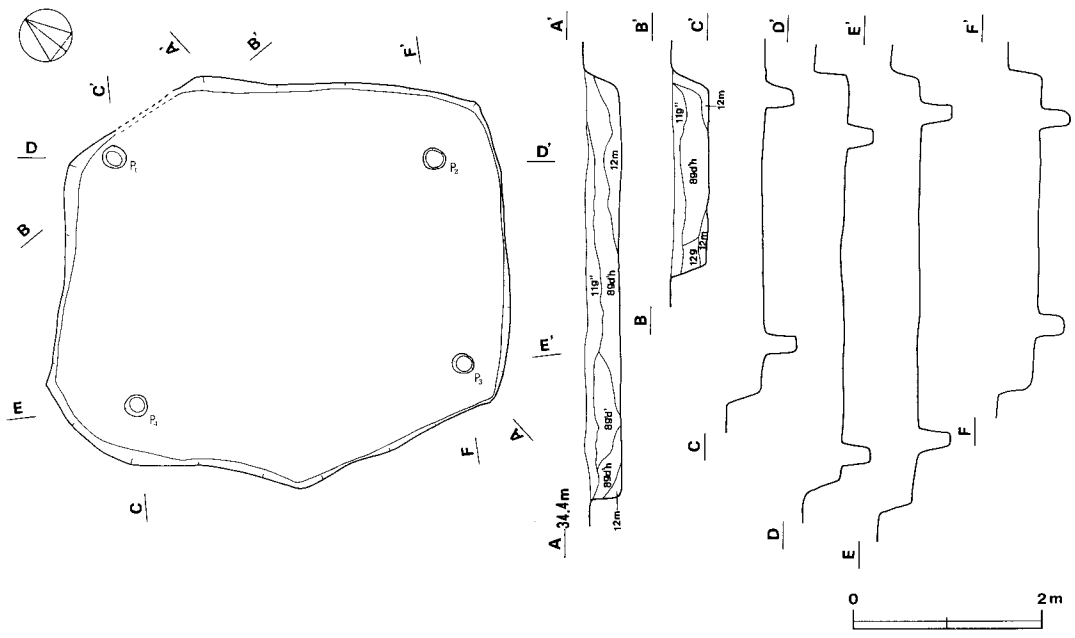
第22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第51図 P13	甕形土器 土師器	A 15.4 B(18.9)	胴部は球形を呈し,口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－ハケ目整形後横なで 胴部外面－全面ハケ目整形	砂粒・スコリア 褐灰色 普通	70%
P177	甕形土器 土師器	A 18.6 B(6.8)	口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－ハケ目整形後横なで 胴部外面－ハケ目整形	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	15%
P178	甕形土器 土師器	B(11.7) C 6.1	底部は平底。胴部は大きく内彎する。球形を呈すると思われる。	内・外面－ハケ目整形後なで	砂・礫・石英・スコリア にぶい橙色 普通	15%
P179	器台形土器 土師器	A 11.6 B(8.5)	受部・脚部が同じ高さと思われる。脚部は「ハ」の字状，受部は逆「ハ」の字状に開くと思われる。	外面－ハケ目整形 内面－ハケ目整形後横なで	パミス・砂 外－にぶい橙色 内－灰白色 普通	70%

第23号住居跡（第52図）

本跡は，遺跡中央のD1i$_0$区を中心に確認されたもので，第16号住居跡の北約２mに位置している。北側で第31号住居跡と重複している。新旧関係は，第31号住居跡が本跡の床を切り，重複部分に本跡の貼り床の跡等がないことから，本跡が第31号住居跡より古いと考えられる。

平面形は，長軸4.8m・短軸4.3mの南西側がやや張り出した不整長方形をしているが，南西側は壁がソフトロームで軟弱なため掘りすぎているものと考えられる。長軸方向はN－42°－Wである。



第52図　第23号住居跡実測図

壁は重複のため北側の一部が消失しているが，ソフトロームで軟らかく，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は30～40cmである。床はハードロームで，平坦である。床面は踏み固められてはいない。炉は検出されていない。柱穴はP_1～P_4の4か所で，規模は径23～25cm・深さ30～34cmである。各コーナー部に検出され，長方形状に配列されている。

覆土は5層からなり，主に暗褐色土，褐色土が自然堆積している。全層ともローム粒子を含み，よく締まっている。

遺物は，覆土の下層から高坏形土器（P180）が出土している。古墳時代の五領式に比定される。

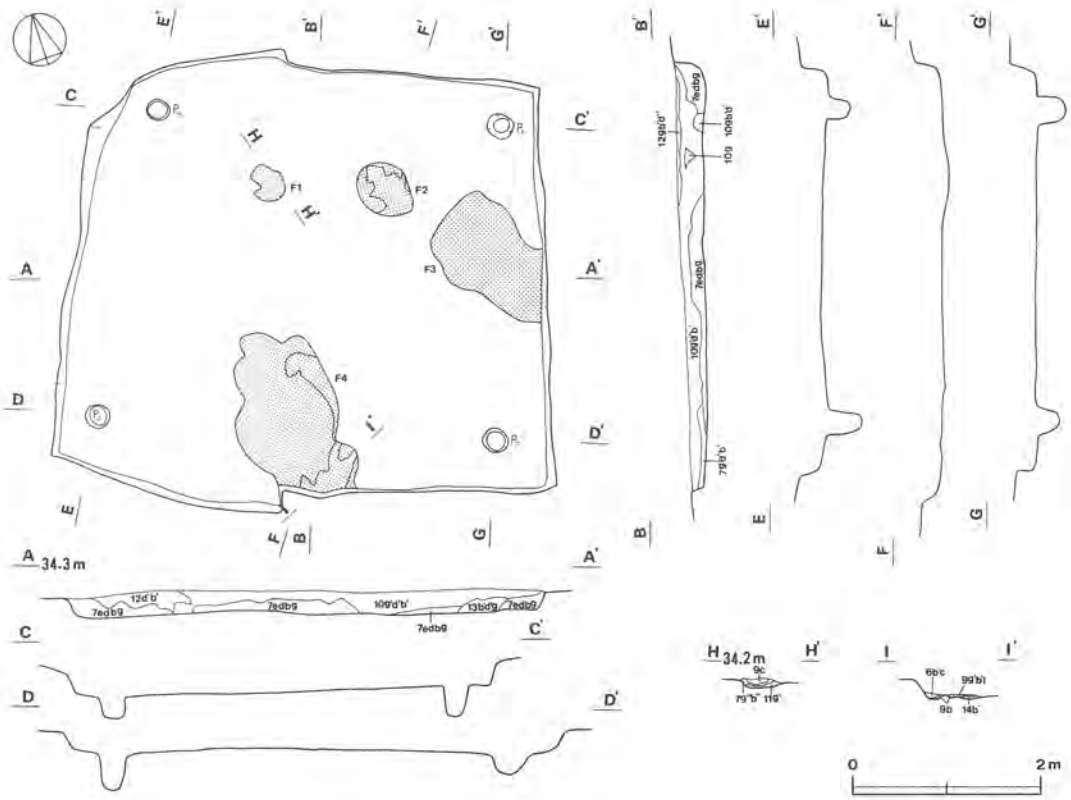
第25号住居跡（第53図）

本跡は，遺跡中央のD1i$_5$区を中心に確認されたもので，第16号住居跡の北東約10mに位置している。

平面形は，長軸5.0m・短軸4.4mの南側がやや張り出した不整長方形で，長軸方向はN－68°－Wである。壁は宅地跡のため撹乱され，部分的にしか残っていないが，ソフトロームで，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は25～30cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はよく踏み固められている。炉は4か所検出された。北側のF1は長径42cm・短径36cmの不整楕円形で，床を12cm掘り凹めている。中央のF2は長径68cm・短径54cmの楕円形で，床を8cm掘り凹めている。東側のF3は長径157cm・短径92cmの不整楕円形で，床面よりも1～2cm高いレベルに築かれている。F3の炉下は床と同じハードローム層なので，本跡の炉と判断した。南側のF4は長径192cm・短径112cmの不整楕円形で，床を5cm掘り凹めている。いずれの炉も炉床はよく焼け，硬くレンガ状を呈している。炉覆土は1～2層で，暗赤褐色土，極暗赤褐色土が堆積していた。F1～F4の断面はいずれも皿形である。柱穴はP_1～P_4の4か所で，その規模は径25～28cm・深さ23～39cmである。各コーナー部に検出され，柱穴間はほぼ等間隔である。

覆土は7層からなり，主に暗褐色土，褐色土，赤褐色土が堆積している。部分的に撹乱を受けている。上層は焼土粒子・炭化粒子を含みやや軟らかい。下層は締まっている。

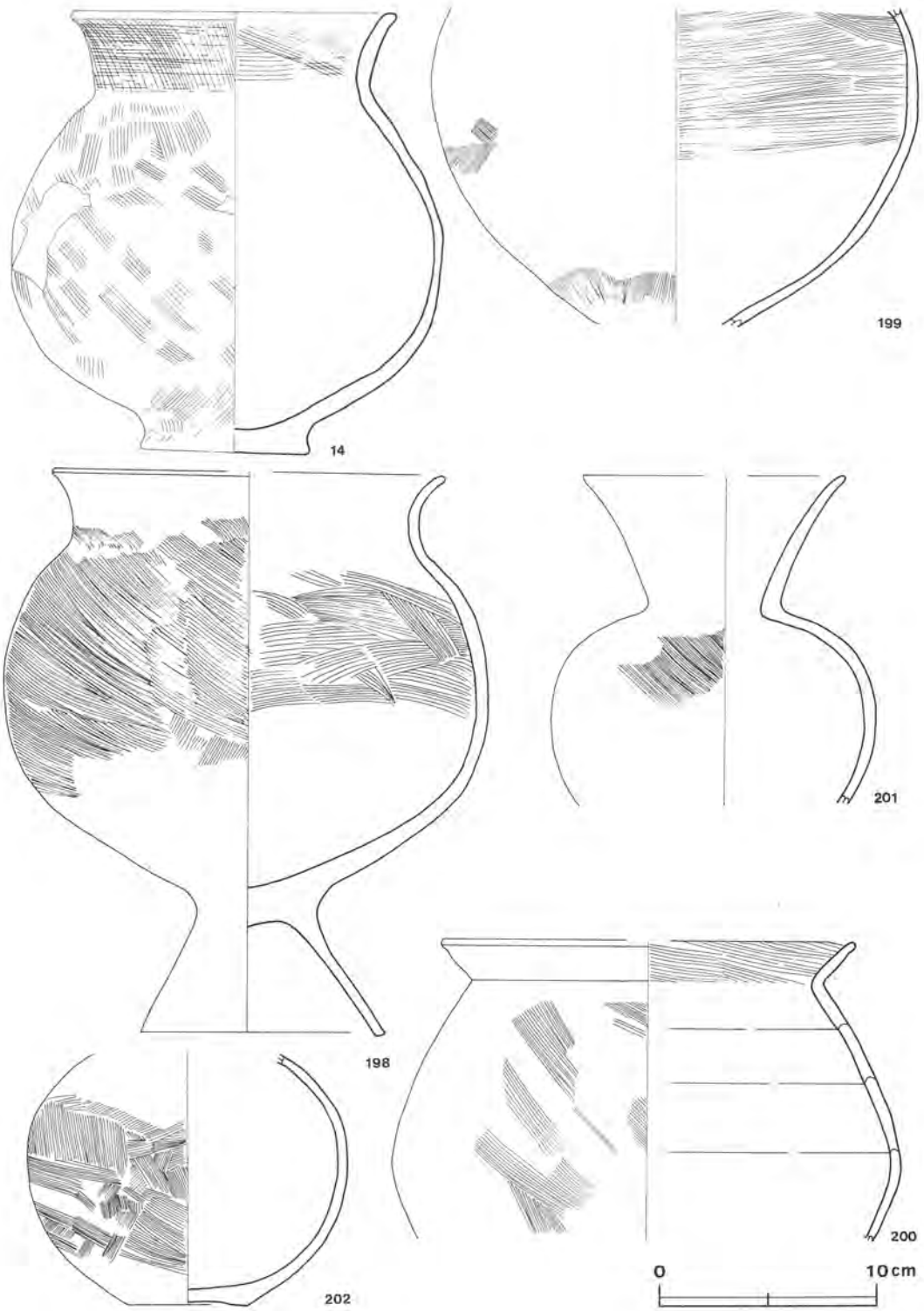
遺物は，覆土の下層から甕形土器（P200），小型甕形土器（P202），壺形土器（P201），高坏形土器（P206），西側の床面から台付甕形土器（P198・P199），F3近くの床面から小型甕形土器（P203），甕形土器（P14），北壁下の床面から装飾器台形土器（P204），南側の床面から高坏形土器（P205），坏形土器（P207），F1付近の床面からミニチュア土器（P208）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。



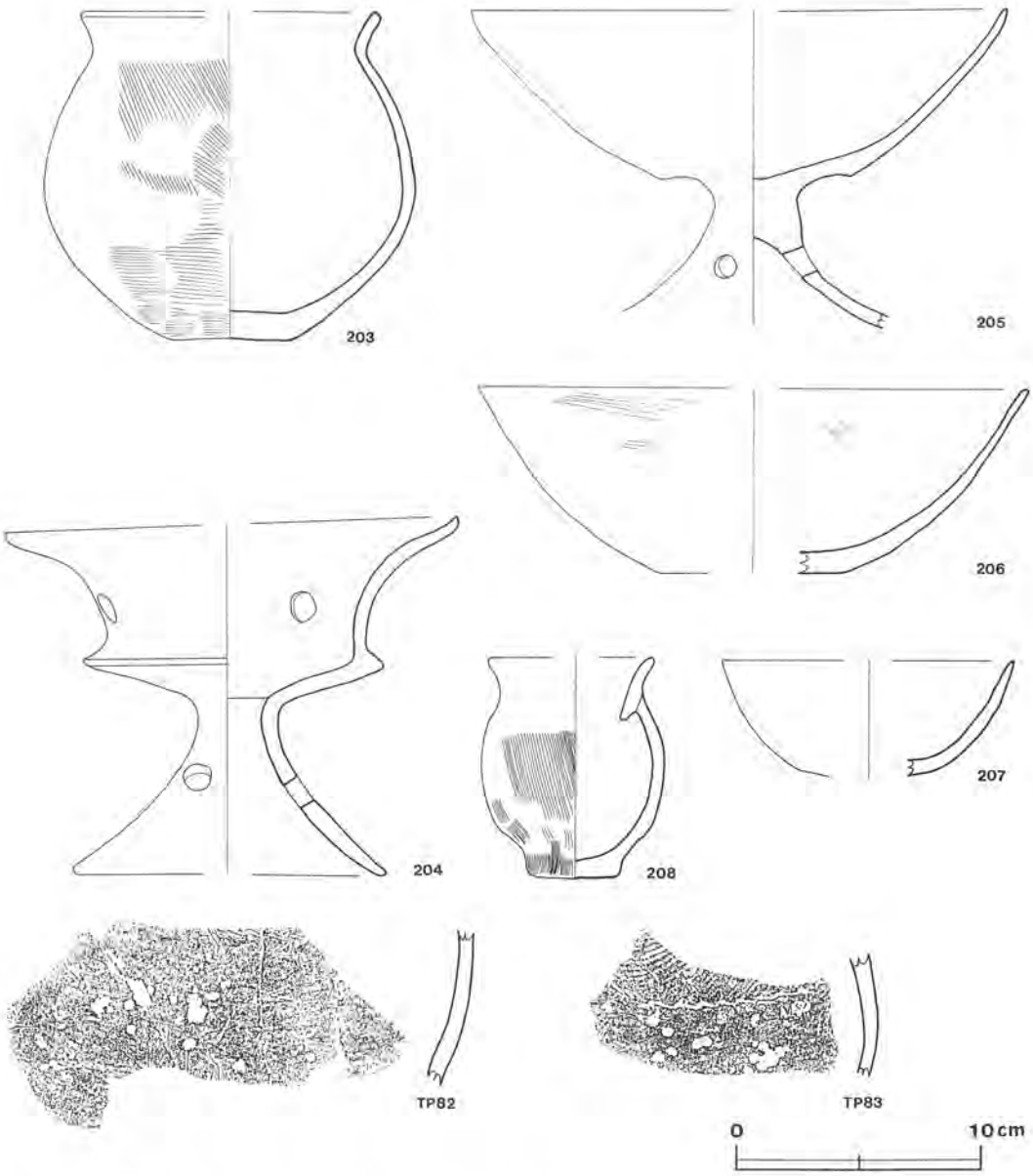
第53図　第25号住居跡実測図

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 P14	甕形土器 土師器	A 14.7 B 19.9 C 7.2	底部は突出する平底。胴部は球形を呈し，最大径を下半にもち，口縁部は垂直ぎみに立ち上がる。	口縁部外面－ハケ目整形後横なで 内面－ハケ目整形 胴部外面－ハケ目整形	砂・スコリア 黒褐色 普通	95%
P198	台付甕形土器 土師器	A 17.8 B 26.2 C 11.2	台部は「ハ」の字状に下方に開く。胴部は球形で，口頸部はやや「コ」の字状を呈して立ち上がる。	胴部外面－ハケ目整形	砂・長石 明褐灰色 普通	85%
P199	台付甕形土器 土師器	B(14.7) 胴部径22.4	胴部は球形を呈する。	胴部外面－ハケ目整形後弱いヘラなで 内面－ハケ目整形	パミス・砂・スコリア 橙色 普通	30% 胴部外面煤付着
P200	甕形土器 土師器	A 18.8 B(13.9)	胴部は扁平な球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面・胴部外面－ハケ目整形 胴部内面－なで	長石・砂 灰褐色 普通	20%
P201	壺形土器 土師器	A 13.2 B(15.2)	胴部は球形を呈する。口頸部は鋭角な「く」の字状に立ち上がり，長く上方へ開く。	口縁部内・外面－縦のなで 胴部外面－細いハケ目整形	パミス・砂粒 にぶい橙色 普通	20%
P202	小型甕形土器 土師器	B(11.7) C 5.4	底部は上げ底で小さく，胴部は球形を呈する。	胴部外面－ハケ目整形 内面－ハケ目整形後なで	パミス・砂 外－明赤褐色 内－にぶい黄褐色 普通	30%



第54図　第25号住居跡出土遺物実測図（1）



第55図　第25号住居跡出土遺物実測図・拓影図（2）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第55図 P203	小型壺形土器 土師器	A 11.8 B 13.5 C 5.0	底部は平底。胴部は扁平な球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 胴部外面－ハケ目整形	パミス・砂・礫 にぶい橙色 普通	30%
P204	装飾器台形土器 土師器	A 18.6 B 14.4 C 12.4	脚部はラッパ状に開く。受部は下半に稜をつくり外傾して立ち上がる。受部・脚部ともに3孔を穿つ。	内・外面－ヘラなで	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	85%

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第55図 P205	高坏形土器 土師器	A 22.0 B(13.2)	坏部は下半に稜をつくり，大きく内彎して立ち上がる。脚部に3孔を穿つ。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	スコリア・パミス・砂 橙色 普通	60%
P206	高坏形土器 土師器	A 7.4 B(7.7)	坏部は大きく外上方に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	パミス・砂粒 にぶい橙色 普通	20%
P207	坏形土器 土師器	A 12.0 B(4.8)	体部は器肉を減じながら内彎して立ち上がる。	内・外面－なで	パミス・砂 浅黄橙色 普通	30%
P208	ミニチュア土器 土師器	A 7.2 B 9.2 C 4.0	底部は突出する平底で，胴部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－なで 胴部外面－ハケ目整形	パミス・砂粒 にぶい橙色 普通	90%

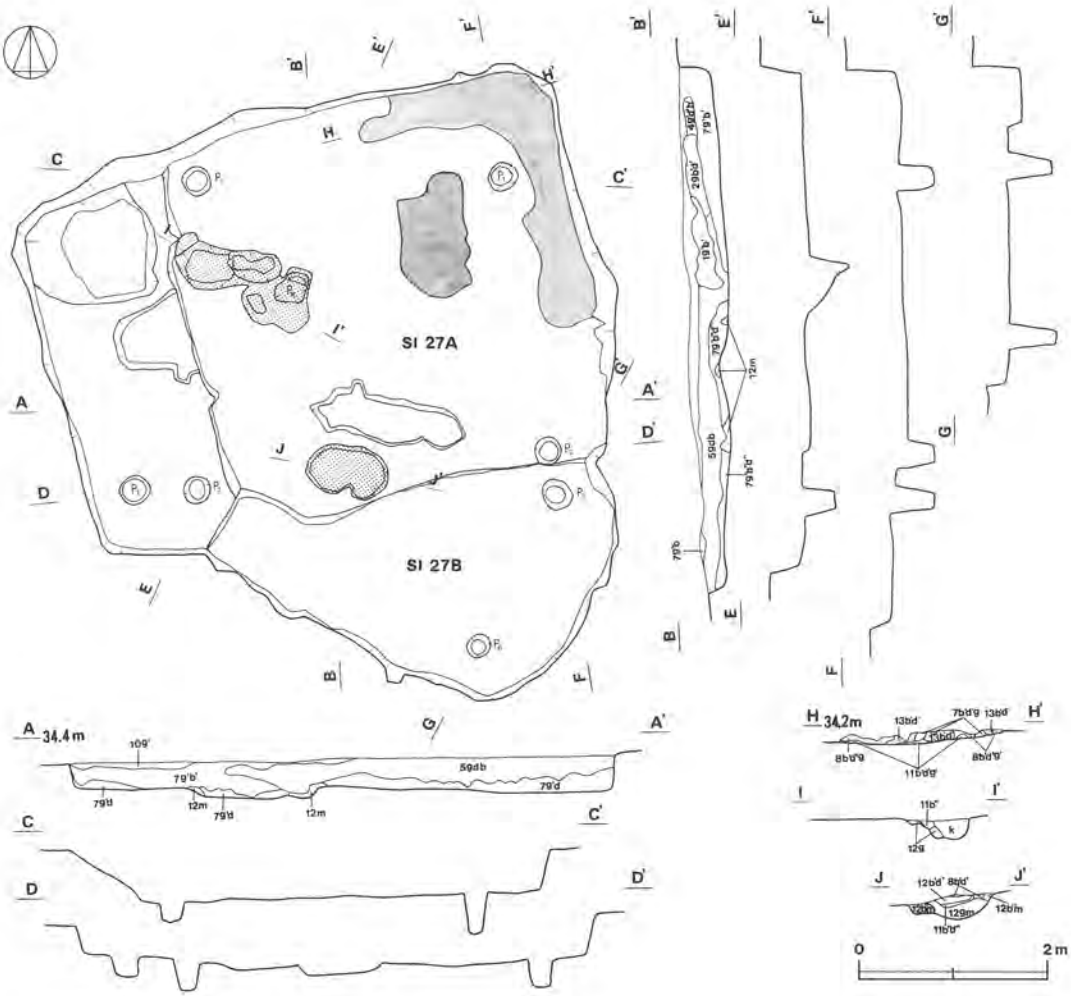
第27A号住居跡（第56図）

本跡は，遺跡中央のD1h$_9$区を中心に確認されたもので，第16号住居跡の北西約6.6mに位置している。南側で第27B号住居跡と重複している。新旧関係は，本跡の床上に第27B号住居跡の貼り床が認められるので，本跡は第27B号住居跡よりも古いと考えられる。

平面形は，長軸6.0m・短軸4.4mの長方形で，長軸方向はN－76°－Eである。壁は重複のため南壁が欠損しているが，他はソフトロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は23～55cmである。床はハードロームで，焼土粒子・炭化粒子が混じっており，平坦である。床面はどの部分もよく踏み固められている。炉は中央に検出され，長径80cm・短径72cmの不整楕円形で，床を12cm掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼け，レンガ状に硬化している。炉北側が第27B号住居跡のピットによって壊されている。炉の断面は椀形である。ピットは本跡に伴うものとしてP$_1$～P$_4$の4か所を検出した。規模は径30～34cm・深さ22～42cmで，配列がやや不規則ではあるが，規模等が一定なので，柱穴と考えられる。他のピットは電柱等による撹乱穴である。北東側の壁際に焼土層が確認され，床面からも炭化材が多く出土したため，本跡は焼失家屋と考えられる。

覆土は7層からなり，主に黒褐色土，極暗褐色土，暗褐色土，褐色土が自然堆積している。大部分の層が焼土粒子・ローム粒子を含み，よく締まっている。

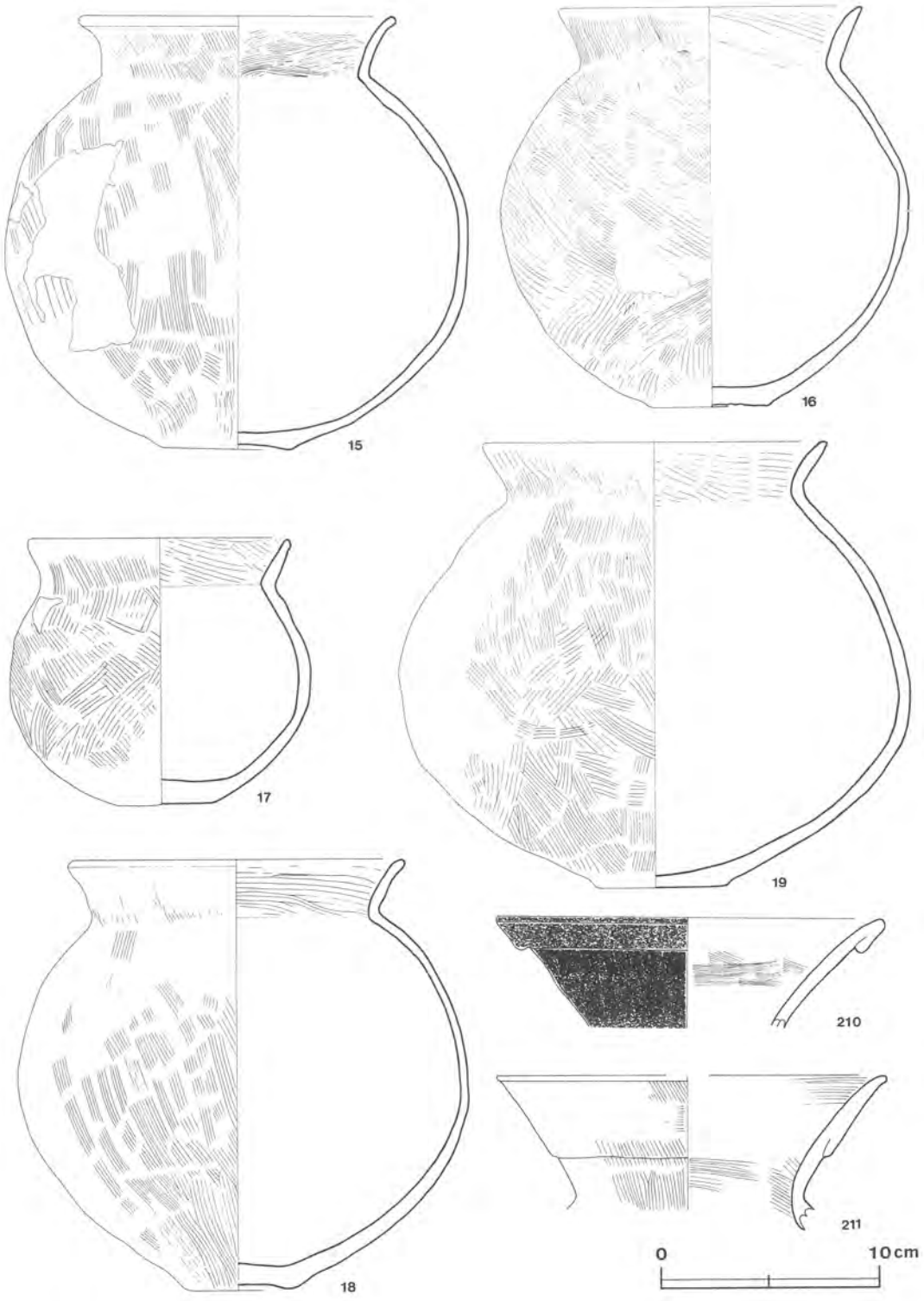
遺物は，覆土下層から壺形土器（P209～P211），甑形土器（P212～P214），坩形土器（P215・P216），器台形土器（P217～P220），ミニチュア土器（P221），東壁際の床面から甕形土器（P15・P16・P18・P19），小型甕形土器（P17）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。



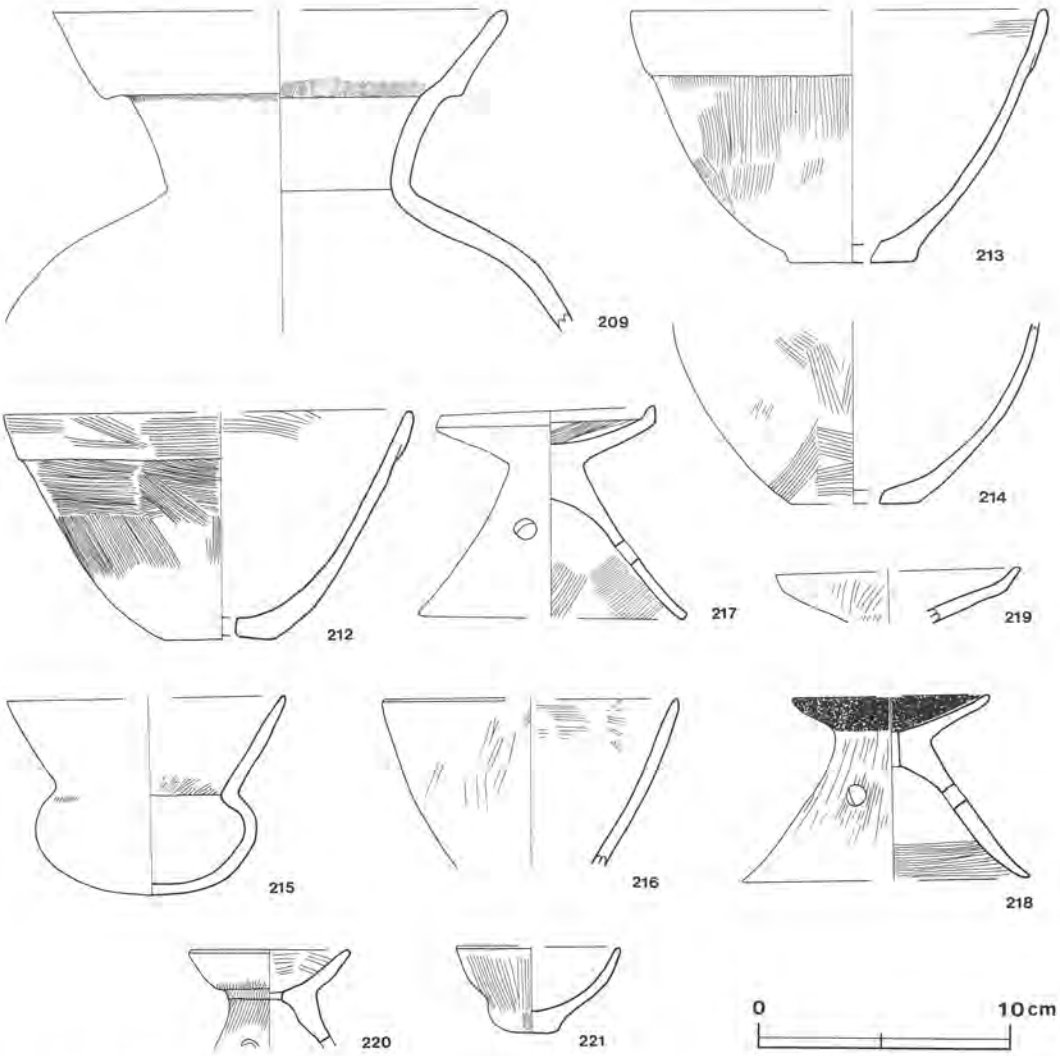
第56図　第27A・B号住居跡実測図

第27A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 P15	甕形土器 土師器	A 14.3 B 19.6 C 4.8	底部は小さな上げ底。胴部は球形を呈し，口頸部は「コ」の字状に近い立ち上がりである。	外面・口縁部内面－ハケ目整形 胴部内面－なで	砂粒・礫・パミス 黒褐色 良好	80%
P16	甕形土器 土師器	A 14.0 B 18.1 C 5.2	底部は小さくやや上げ底。胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形 内面－ハケ目整形後なで	礫・パミス・砂粒 にぶい赤褐色 良好	70%
P17	小型甕形土器 土師器	A 12.5 B(11.9)	底部は丸底。胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形 胴部内面－なで	砂粒・パミス にぶい橙色 良好	80%
P18	甕形土器 土師器	A 15.7 B 19.9 C 5.2	底部は小さな上げ底。胴部は球形を呈し，口頸部がゆるく「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形 後軽いなで 胴部内面－なで	砂粒・パミス 灰黄褐色 良好	90%



第57図　第27A号住居跡出土遺物実測図（1）



第58図　第27A号住居跡出土遺物実測図（2）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 P19	甕形土器 土師器	A 16.3 B 20.5 C 6.4	底部は小さな平底。胴部は扁平な球形を呈し，中位に最大径をもつ。口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面→口縁部内面ーハケ目整形後軽いなで 胴部内面ーなで	砂粒 にぶい黄橙色 良好	90%
第58図 P209	壺形土器 土師器	A 18.2 B(13.0)	口頸部は下半で「く」の字状を呈し，中位で稜をつくり，上半で外傾して立ち上がる。パレススタイル。	口縁部内・外面ーハケ目整形後なで 胴部外面ーなで	スコリア・パミス・砂 淡赤橙色 普通	30%
第57図 P210	壺形土器 土師器	A 18.0 B(5.2)	口縁部は下半で大きく外反して開き，上半で折り返し複合口縁となる。パレススタイル。	口縁部内・外面上半ー横なで 下半ーハケ目整形	パミス・スコリア 赤橙色 良好	20%　外面朱彩

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第57図 P211	壺形土器 土師器	A 17.8 B(6.2)	口頸部は「く」の字状に立ち上がり，上半で折り返し複合口縁となる。	口縁部内・外面－ハケ目整形	パミス・砂粒・石英 橙色 良好	10%
第58図 P212	甑形土器 土師器	A 16.5 B(8.2) C 4.4 孔径1.4	鉢形の甑。底部は平底。胴部は器肉を減じながら外傾して立ち上がり，口縁部は折り返し複合口縁となる。底部に単孔を穿つ。	口縁部内・外面・胴部外面－ハケ目整形 胴部外面－丁寧ななで	パミス・砂・礫 赤橙色 普通	95%
P213	甑形土器 土師器	A 16.6 B 10.3 C 5.2	浅鉢形の甑。底部は平底で，体部は外傾し，口縁部は折り返し複合口縁となる。底部に単孔を穿つ。	内・外面－ハケ目整形後なで	石英・パミス・砂 にぶい橙色 普通	40%
P214	甑形土器 土師器	B(7.3) C 5.1 孔径2.1	鉢形の甑。底部は平底。胴部は器肉を減じながら外傾して立ち上がる。底部に単孔を穿つ。	胴部外面－ハケ目整形 内面－なで	砂粒・パミス 灰白色 普通	20%
P215	坩形土器 土師器	A 11.2 B(7.9)	体部は扁平な球形で，口縁部は大きく外傾して立ち上がる。体部と口縁部は同じ高さと思われる。	口縁部内・外面－ハケ目整形後なで 体部内・外面－なで	スコリア・長石・石英 にぶい橙色 普通	85%
P216	坩形土器 土師器	A 11.8 B(6.8)	口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内面－ヘラみがき 外面－ハケ目整形後ヘラなで	パミス・砂 赤橙色 普通	20%
P217	器台形土器 土師器	A 8.2 B 10.4 D 8.4	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は皿状に開いた後稜をつくり，垂直に立ち上がる。脚部に3孔を穿つ。	受部内・外面・脚部外面－ハケ目整形後丁寧ななで 脚部内面－ハケ目整形	パミス・砂粒 橙色 良好	95%
P218	器台形土器 土師器	A 7.8 B 7.4 D 11.6 孔径0.8	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は皿状に開く。受部中央に単孔，脚部に3孔を穿つ。	受部内・外面－丁寧ななで 脚部外面－ハケ目整形 内面－ハケ目整形後なで	砂粒・パミス 橙色 普通	90%　受部内面 朱彩
P219	器台形土器 土師器	A 9.8 B(2.1)	受部は皿状に開き，口縁部との境で稜をつくり，口縁部は外傾して立ち上がる。	受部上半内・外面－横なで 下半外面－ハケ目整形 内面－なで	砂粒・パミス 橙色 普通	90%
P220	器台形土器 土師器	A 6.6 B(4.0) 孔径0.7	受部は小さく，外傾して立ち上がる。受部中央に単孔，脚部に3孔を穿つ。	受部外面下半・脚部外面－ハケ目整形 受部内面・外面上半－横なで	パミス・砂粒 暗赤褐色 普通	20%
P221	ミニチュア土器 土師器	A 6.6 B 3.6 C 1.8	底部は突出した平底。体部は器肉を減じながら内彎して立ち上がる。	外面－なで 内面－ハケ目整形	パミス にぶい黄橙色 普通	60%

第34号住居跡（第59図）

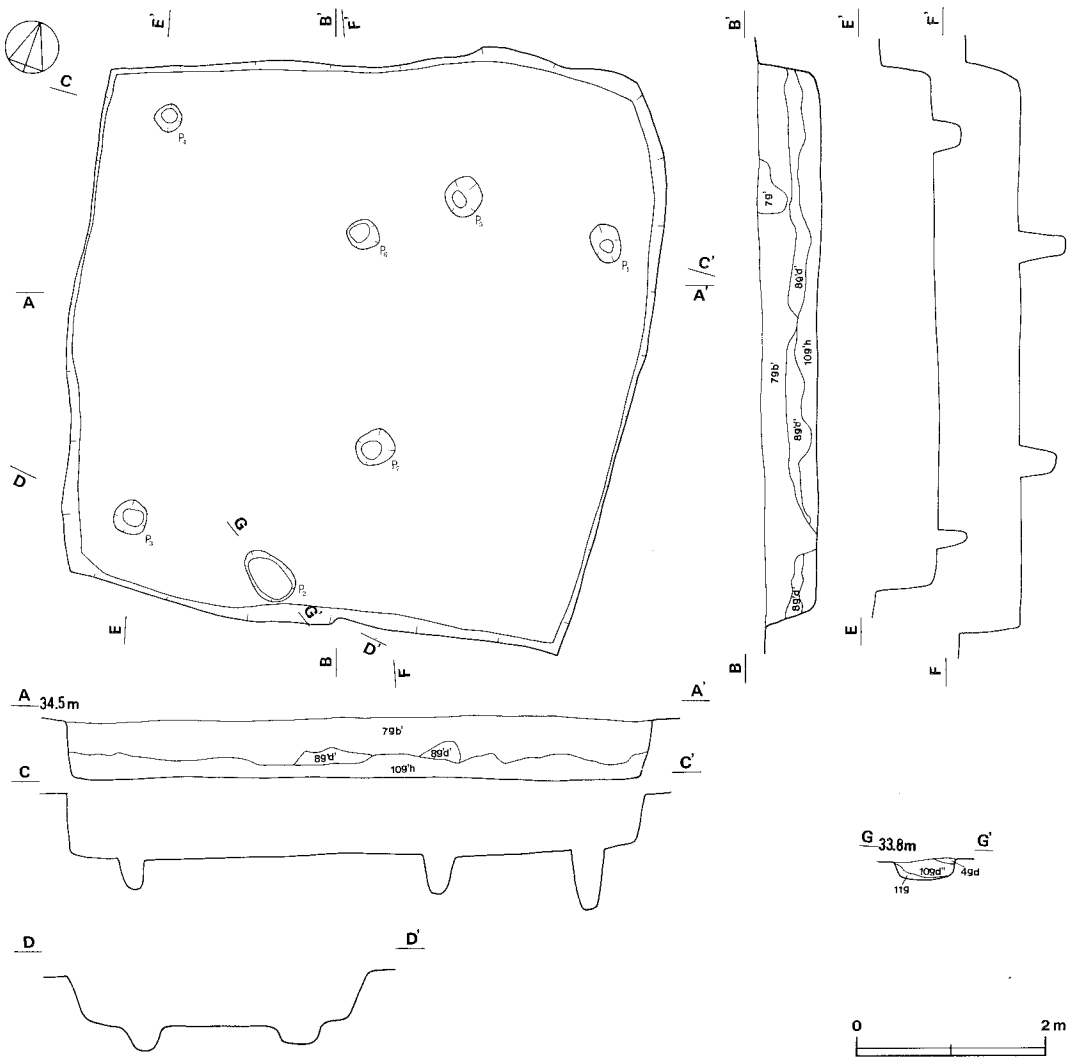
本跡は，遺跡中央のD2f$_4$区を中心に確認されたもので，第16号住居跡の北東約16mに位置している。

平面形は，長軸5.6m・短軸5.4mの方形で，北東コーナー部がわずかに張り出している。長軸方向はN－19°－Wである。壁は上部がソフトローム，下部がハードロームで床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は60～70cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はどの部分もよく踏み固められている。中央に，炉状の焼土層が検出された。径40cmの円形で厚さ6cmであるが，床面より約10cm高いレベルにあり，焼土層下には本跡の覆土と同じ暗褐色土が堆積している

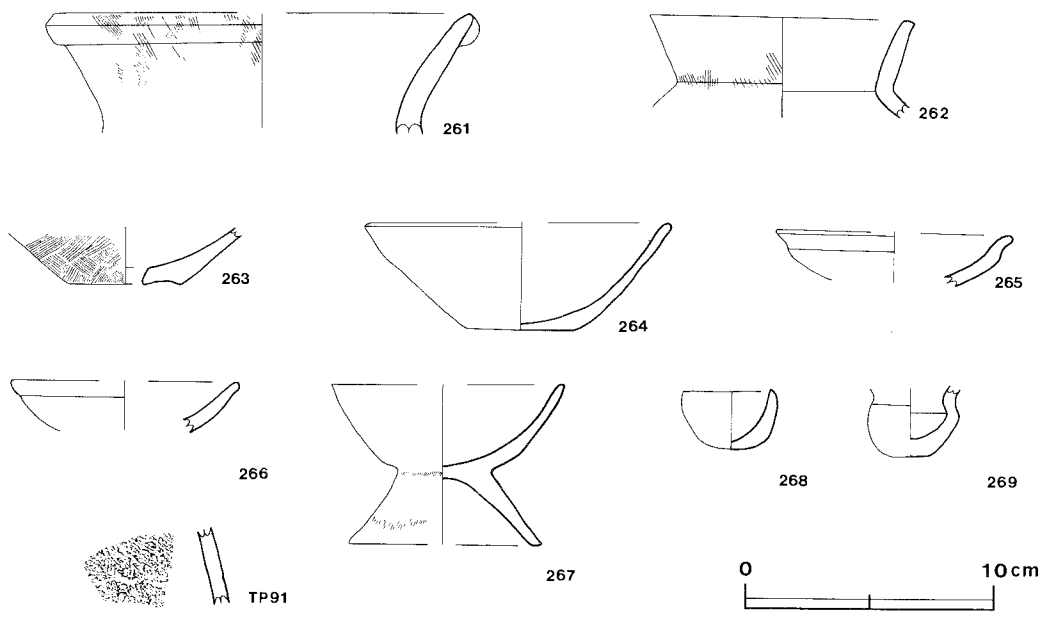
ため，炉とは断定できない。ピットはP_1～P_7の７か所検出された。規模は径30～42cm・深さ29～71cmであるが，配列が不規則で，深さがまちまちなため，主柱穴の判断はできない。

覆土は４層からなり，主に暗褐色土，褐色土が自然堆積している。全層ともローム粒子を含み，よく締まっている。

遺物は，覆土下層から小型甕形土器（P262），甑形土器（P263），坏形土器（P264），器台形土器（P265～P267），手づくね土器（P268・P269），東側コーナー部の床面から壺形土器（P261）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。



第59図　第34号住居跡実測図



第60図　第34号住居跡出土遺物実測図・拓影図

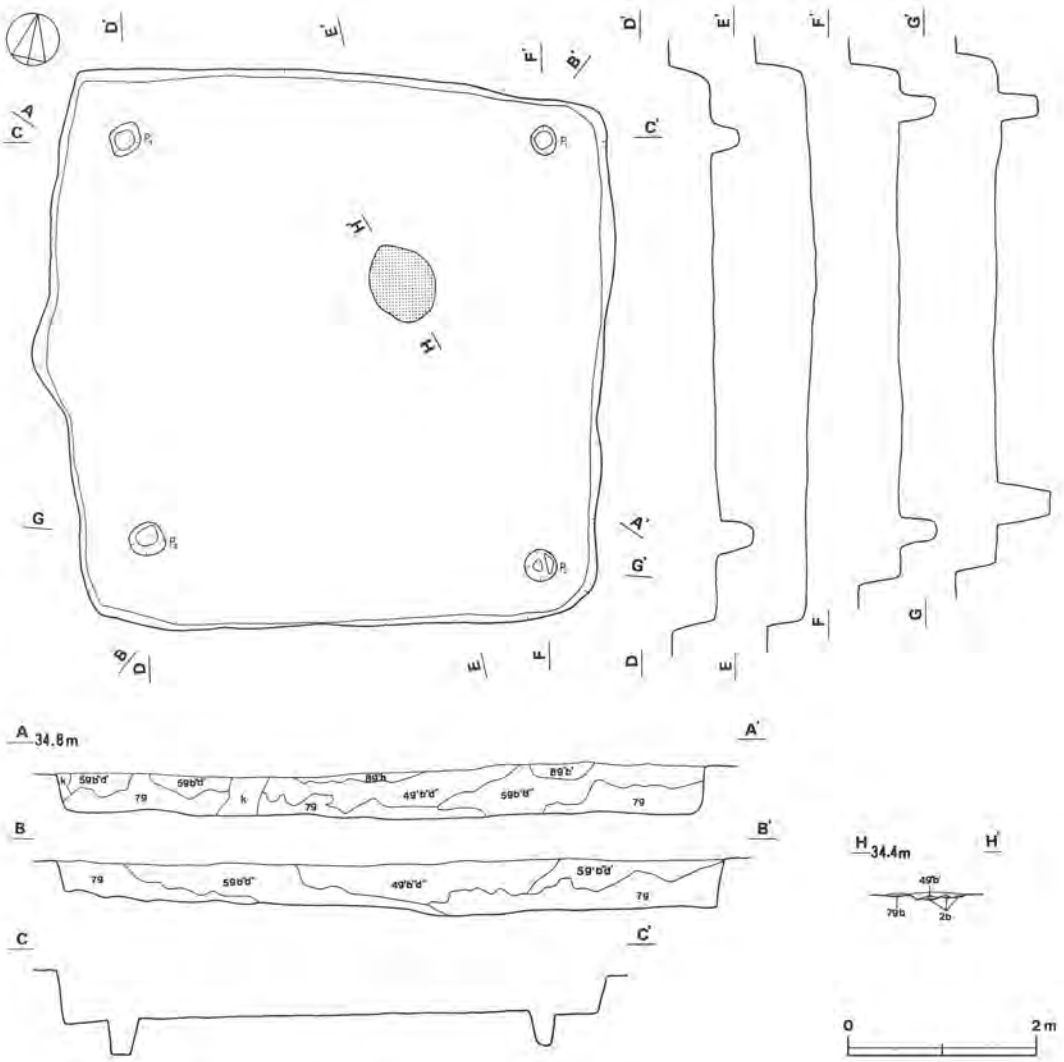
第34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第60図 P261	壺形土器 土師器	A 16.8 B(4.9)	口縁部は外傾して立ち上がり，上半で折り返し複合口縁となる。	口縁部上半内・外面－横なで 口縁部下半外面－ハケ目整形 内面－なで	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	30%
P262	小型甕形土器 土師器	A 10.5 B(4.0)	口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部外面－ハケ目整形後横なで 内面－横なで	パミス・砂粒・礫 浅黄橙色 普通	20%
P263	甑形土器 土師器	B(2.3) C 4.6 孔径1.7	浅鉢形の甑。底部は平底で中央に単孔を穿つ。胴部は器肉を減じながら外傾して立ち上がる。	外面－ハケ目整形 内面－粗いなで	パミス・スコリア にぶい橙色 普通	10%
P264	坏形土器 土師器	A 12.0 B 4.4 C 4.4	底部は器肉が薄く平底。体部は外傾して開き，口縁端部は丸味をもつ。	内・外面－なで	砂・スコリア・石英 にぶい橙色 普通	70%
P265	器台形土器 土師器	A 9.4 B(2.0)	受部は外傾して立ち上がり，口縁部との境で稜をつくり，口縁部は角度を変えて外上方に開く。	内・外面－ヘラなで	石英・砂粒 浅黄橙色 普通	15%
P266	器台形土器 土師器	A 9.0 B(2.0)	受部は外傾して立ち上がり，口縁部で器肉を減じながら外上方に開く。	内・外面－ヘラなで	パミス・砂粒 橙色 普通	10%
P267	器台形土器 土師器	A 9.4 B 6.5 D 7.7	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は内彎しながら立ち上がる。口縁端部は平坦な面をもつ。	受部内・外面・脚部内面－丁寧なで 脚部外面－ハケ目整形後なで	パミス・砂粒 橙色 良好	60%
P268	手づくね土器 土師器	A 3.4 B 2.4 C 1.4	体部は内彎しながら立ち上がる。	体部は手で粘土を引き伸ばした後なでる。外面に凹凸の面あり。	雲母 にぶい褐色 普通	95%
P269	手づくね土器 土師器	B(2.8) C 1.6	体部は内彎し，上半でくびれる。口縁部は外傾して立ち上がる。	体部・口縁部とも粘土を引き伸ばしている。	パミス・砂粒 橙色 普通	80%

第35号住居跡（第61図）

本跡は，遺跡中央のD1d$_9$区を中心に確認されたもので，第16号住居跡の北西約22.6mに位置している。

平面形は，長軸6.1m・短軸6.0mの隅丸方形で，長軸方向はN－73°－Eである。壁は上部がソフトローム，下部がハードロームで，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は40～50cmである。床はハードロームで，炉の付近がやや凹んでいるが，他は平坦である。床面はどの部分もよく踏み固められている。炉は北東側に検出され，長径87cm・短径68cmの楕円形で，床を7cm掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼け，レンガ状に硬化している。炉の断面は皿形である。柱穴はP_1～P_4の4か所で，その規模は径32～40cm・深さ32～57cmである。各コーナー部に検出され，



第61図　第35号住居跡実測図

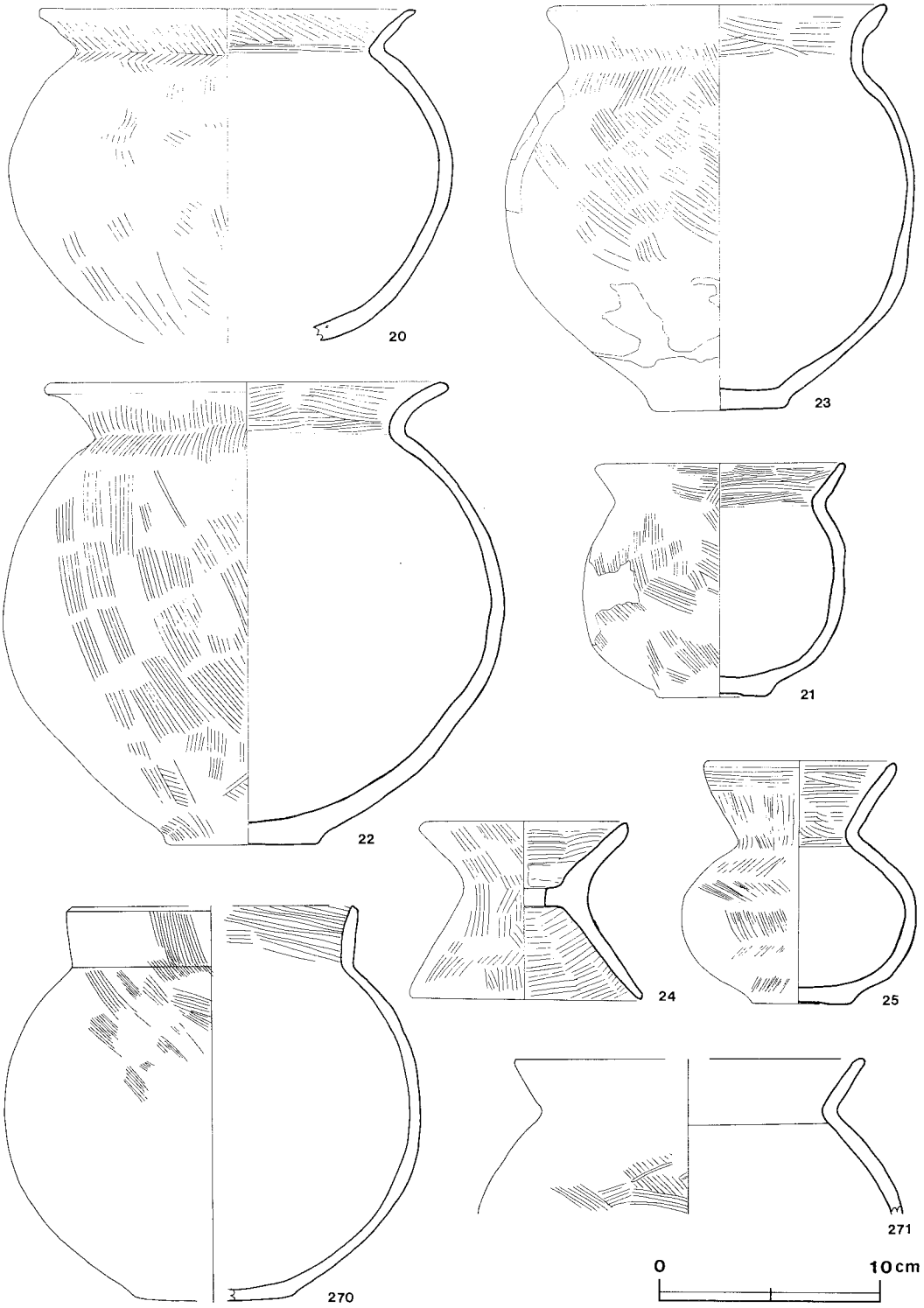
柱穴間は約2.2mと等間隔である。

覆土は5層からなり，主に黒褐色土，暗褐色土，極暗褐色土，褐色土が堆積している。西側は一部撹乱されているが，他は自然堆積である。上層は焼土粒子・炭化粒子を含み，また，全層とも締まっている。

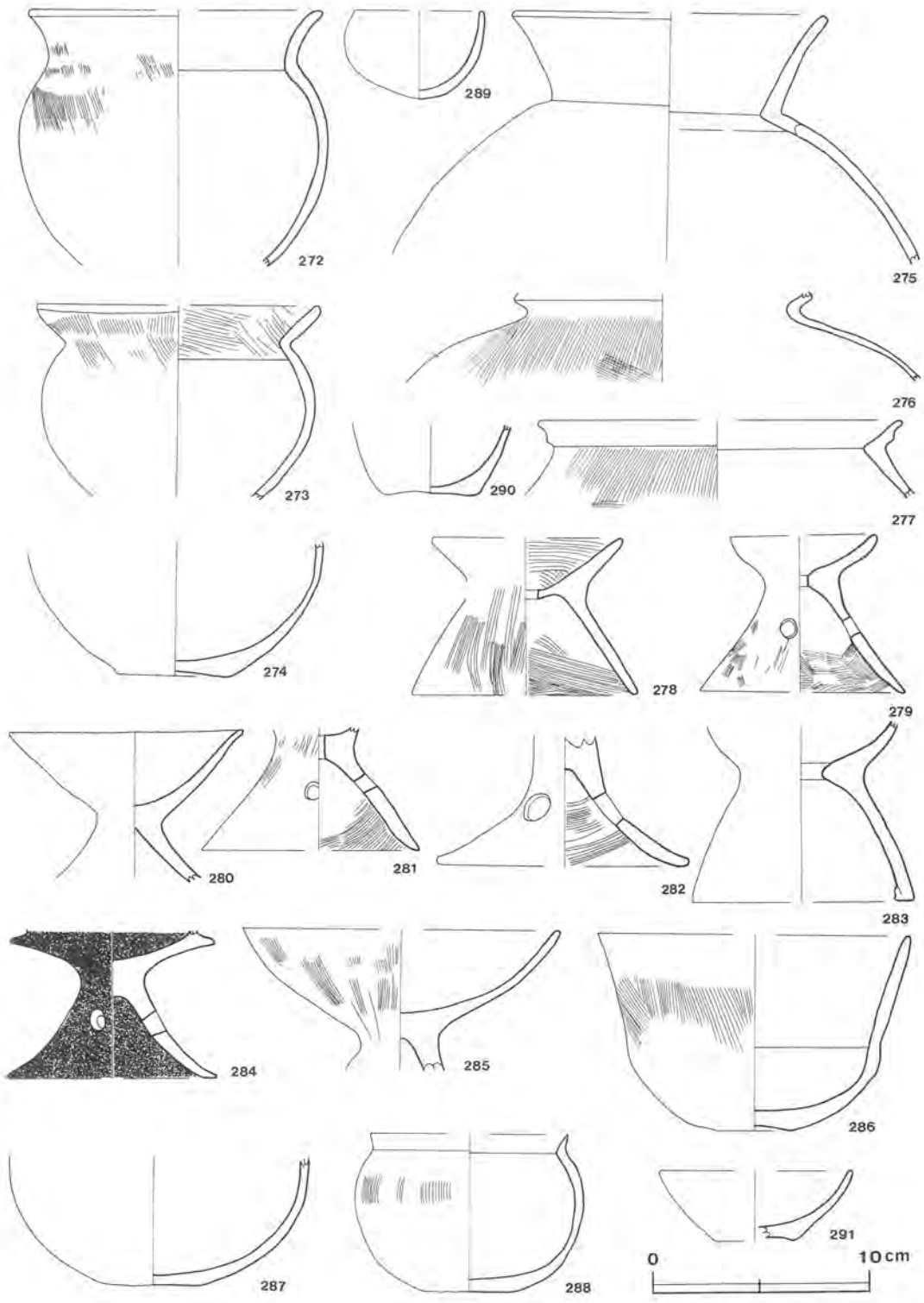
遺物は，覆土の中層から小型甕形土器（P274），甕形土器（P275），器台形土器（P280・P282・P284），下層から甕形土器（P270・P271），小型甕形土器（P272・P273），台付甕形土器（P276・P277），器台形土器（P279・P281・P283），坩形土器（P286），ミニチュア土器（P290・P291），手づくね土器（P289），北側の床面から横位で甕形土器（P20・P22・P23），破片で小型甕形土器（P21・P25・P287），中央の床面から横位で器台形土器（P24・P278），北側の床面から破片で鉢形土器（P288），中央の床面から破片で高坏形土器（P285）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。

第35号住居跡出土遺物観察表

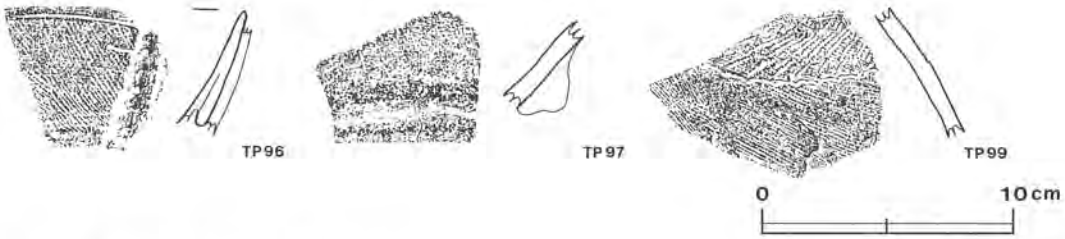
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 P20	甕形土器 土師器	A 16.9 B(15.8)	胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－ハケ目整形後なで 胴部外面－粗いなで 内面－なで	砂粒・パミス にぶい赤褐色 普通	75%　胴部外面下半煤付着
P21	小型甕形土器 土師器	A 11.3 B 10.1 C 4.5	底部は平底であるが中央が凹む。胴部は球形を呈し，口頸部は短く「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂粒 黒褐色 普通	50%
P22	甕形土器 土師器	A 17.7 B 20.8 C 7.7	底部は突出する平底。胴部は球形を呈し，口頸部は鋭角に「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－ハケ目整形後なで 胴部外面－ハケ目整形 内面－なで	砂粒・パミス・礫 黒褐色 良好	98%
P23	甕形土器 土師器	A 15.3 B 17.7 C 5.0	底部は突出した平底。胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－ハケ目整形後なで 胴部外面－ハケ目整形 内面－なで	パミス・砂粒 黒褐色 不良	65%　下半は剝落
P24	器台形土器 土師器	A 9.6 B 7.5 D 10.5	脚部は「ハ」の字状に下方に開く。受部は外傾して上方に立ち上がる。受部中央に単孔を穿つ。	外面・受部内面－ハケ目整形 脚部内面－なで	砂粒・パミス にぶい橙色 良好	80%
P25	小型甕形土器 土師器	A 8.7 B 10.8 C 4.2	底部は突出し，上げ底である。胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂粒・スコリア・礫 橙色 良好	95%
P270	甕形土器 土師器	A 12.8 B 18.3 C 7.2	底部は平底で，胴部は球形を呈する。口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面－ハケ目整形 胴部外面－ハケ目整形後なで 内面－丁寧ななで	砂・石英・長石 にぶい橙色 普通	25%
P271	甕形土器 土師器	A 16.0 B(7.1)	口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－なで 胴部外面－ハケ目整形 内面－丁寧ななで	スコリア・雲母・砂粒 にぶい橙色 普通	20%



第62図　第35号住居跡出土遺物実測図 (1)



第63図　第35号住居跡出土遺物実測図（2）



第64図　第35号住居跡出土遺物拓影図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第63図 P272	小型甕形土器 土師器	A 13.4 B(12.0)	胴部は球形を呈し，口縁部はゆるく外彎して立ち上がる。	口縁部内・外面－ハケ目整形後なで 胴部外面－ハケ目整形 内面－なで	石英・砂粒 にぶい橙色 普通	65%　外面煤付着
P273	小型甕形土器 土師器	A 13.1 B(9.1)	胴部は扁平な球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面・胴部外面－ハケ目整形 胴部内面－なで	パミス・砂粒 外－黒褐色 内－灰褐色 普通	30%
P274	小型甕形土器 土師器	B(6.4) C 5.3	底部は平底で，胴部は器肉を減じながら，球形を呈すると思われる。	器内外面－粗いなで	石英・砂粒 明褐灰色 普通	20%
P275	甕形土器 土師器	A 14.2 B(11.6)	胴部は球形を呈するものと思われ，口頸部は「く」の字状に鋭角に立ち上がる。	外面－丁寧ななで 内面－粗いなで	砂・石英 にぶい橙色 普通	30%
P276	台付甕形土器 土師器	B(4.2)	全体に器肉はうすく，胴部は球形を呈するものと思われ，口頸部はゆるやかな「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形 内面－なで	砂粒 灰褐色 普通	5%
P277	台付甕形土器 土師器	A 16.6 B(3.7)	口頸部片。口頸部はするどく「く」の字状に立ち上がる。「S」字状口縁。	口縁部外面－横なで 頸部外面－ハケ目整形 内面－丁寧ななで	砂粒 灰褐色 良好	5%
P278	器台形土器 土師器	A 8.6 B 7.4 D 10.4	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は直線的に外傾して立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	砂・パミス にぶい褐色 普通	85%
P279	器台形土器 土師器	A 6.8 B 7.4 D 9.4	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は小さく外傾して立ち上がる。中央に1孔，脚に3孔を穿つ。	内・外面－ハケ目整形後弱いなで	砂粒・雲母 灰白色 普通	85%
P280	器台形土器 土師器	A 10.8 B(6.8)	脚部はラッパ状に開く。受部は器肉を減じながら外傾して立ち上がる。	外面－なで，横なで 内面－なで	パミス・砂粒 にぶい橙色 普通	80%
P281	器台形土器 土師器	B(5.8) D 10.2 孔径0.7	脚部はラッパ状に下方に開く。中央に1孔，脚部に3孔を穿つ。	外面－ハケ目整形後なで 内面－ハケ目整形	パミス・砂粒・石英 橙色 普通	60%
P282	器台形土器 土師器	B(6.2) D 11.7	脚部は上半が柱状，下半が「ハ」の字状に下方に開く。脚部に3孔を穿つ。	外面－ヘラなで 内面－ハケ目整形後なで	パミス・砂・石英 にぶい橙色 普通	40%
P283	器台形土器 土師器	B(8.4) D 10.2 孔径1.8	脚部はラッパ状に下方に開き，端部で折り返す。受部は器肉を減じながら内彎すると思われる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－粗いなで	砂・パミス 橙色 普通	50%
P284	器台形土器 土師器	B(7.0) D 9.7	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は中位で幅広の稜をもつ。脚部に3孔を穿つ。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	スコリア・砂粒 赤色 普通	40%　内外面朱彩

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第63図 P285	高坏形土器 土師器	A 14.8 B 6.6	体部は大きく内彎しながら立ち上がる。	外面－ハケ目整形後丁寧ななで 内面－丁寧ななで	砂粒・石英 浅黄橙色 普通	60%
P286	坩形土器 土師器	A 14.5 B 9.2 C 3.4	底部は上げ底で，体部は内彎する。口縁部との境でややくびれ，口縁部は直線的に外傾する。	外面－ハケ目整形後ヘラみがき 内面－ヘラみがき	パミス・砂粒 外－明褐灰色 内－褐灰色 良好	50%
P287	小型甕形土器 土師器	B(6.0) C 4.7	底部は平底で，胴部は球形を呈する。	内・外面－粗いなで	スコリア・パミス・砂・礫 にぶい橙色 普通	20%
P288	鉢形土器 土師器	A 9.0 B 7.4 C 4.4	底部は平底で，体部は内彎して立ち上がる。口頸部は短く「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	スコリア・砂 にぶい褐色 普通	50%　体部上半に煤付着
P289	手づくね土器 土師器	A 5.9 B(4.1)	底部は丸く，体部は器肉が一定で外傾して立ち上がる。	内・外面－なで	パミス・スコリア・砂粒 橙色 普通	90%
P290	ミニチュア土器 土師器	B(3.2) C 4.4	底部は上げ底で，器肉はうすい。体部は器肉を減じながら外傾して立ち上がる。	内・外面－なで	スコリア・パミス・雲母・砂 にぶい橙色 普通	40%
P291	ミニチュア土器 土師器	A 9.0 B 3.3 C 3.6	底部は上げ底で，体部は器肉を減じながら外傾して立ち上がる。端部は平坦な面をもつ。	内・外面－なで	パミス・石英・雲母 灰褐色 普通	30%

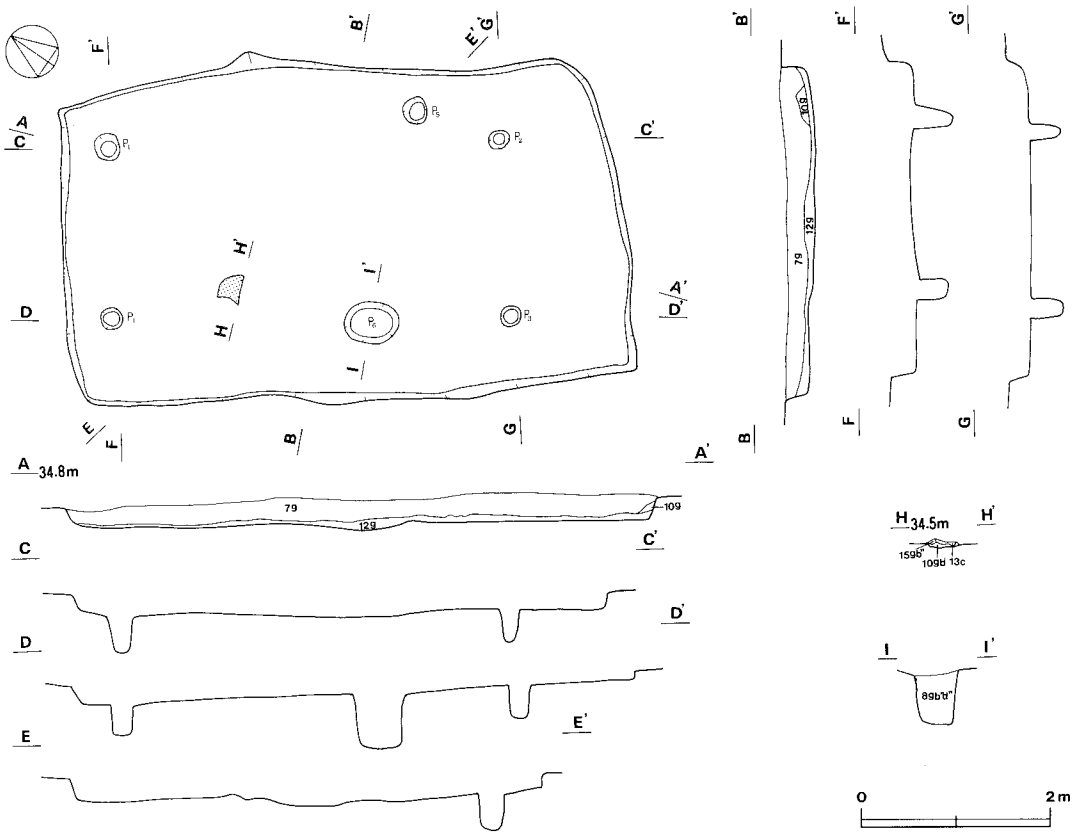
第36号住居跡（第65図）

本跡は，遺跡中央のD2d$_2$区を中心に確認されたもので，第35号住居跡の東側約16mに位置している。南東側で第61号住居跡と重複している。新旧関係は土層堆積の切り合いから，本跡が第61号住居跡よりも新しいと考えられる。

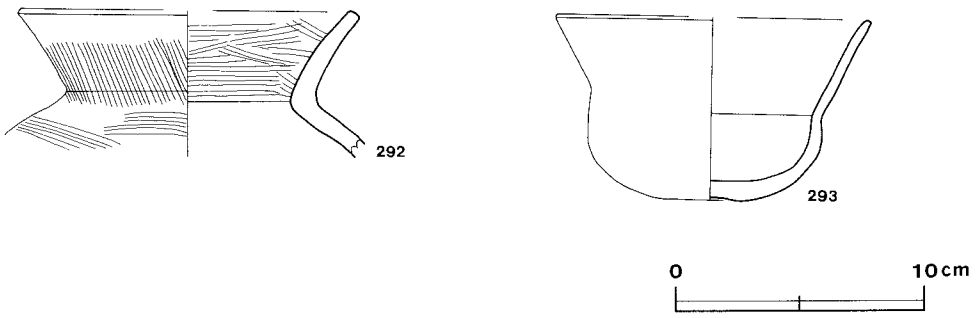
平面形は，長軸6.0m・短軸3.7mの南東コーナー部が丸味をもつ長方形で，長軸方向はN－36°－Wである。壁はローム混じりの褐色土で締まっており，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は10～25cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はどの部分も踏み固められている。炉は西側に検出され，長径48cm・短径42cmの楕円形で，床を10cm掘り凹めた地床炉である。炉床はあまり焼けていない。炉の覆土は3層で，赤褐色土，褐色土，明褐色土が堆積している。柱穴はP_1～P_4の4か所で，規模は径23～30cm・深さ34～41cmである。各コーナー部に検出され，長方形状に並んでいる。P_6は貯蔵穴と考えられ，長径55cm・短径45cmの楕円形で，床を59cm掘りこんで構築されている。貯蔵穴覆土は暗褐色土1層で，断面は「U」形である。

覆土は3層からなり，主に暗褐色土，褐色土が自然堆積している。全層ともローム粒子を含み，締まっている。

遺物は，覆土下層から坩形土器（P293），北側コーナー部の床面から甕形土器（P292）が出土している。両者とも古墳時代の五領式に比定される。



第65図　第36号住居跡実測図



第66図　第36号住居跡出土遺物実測図

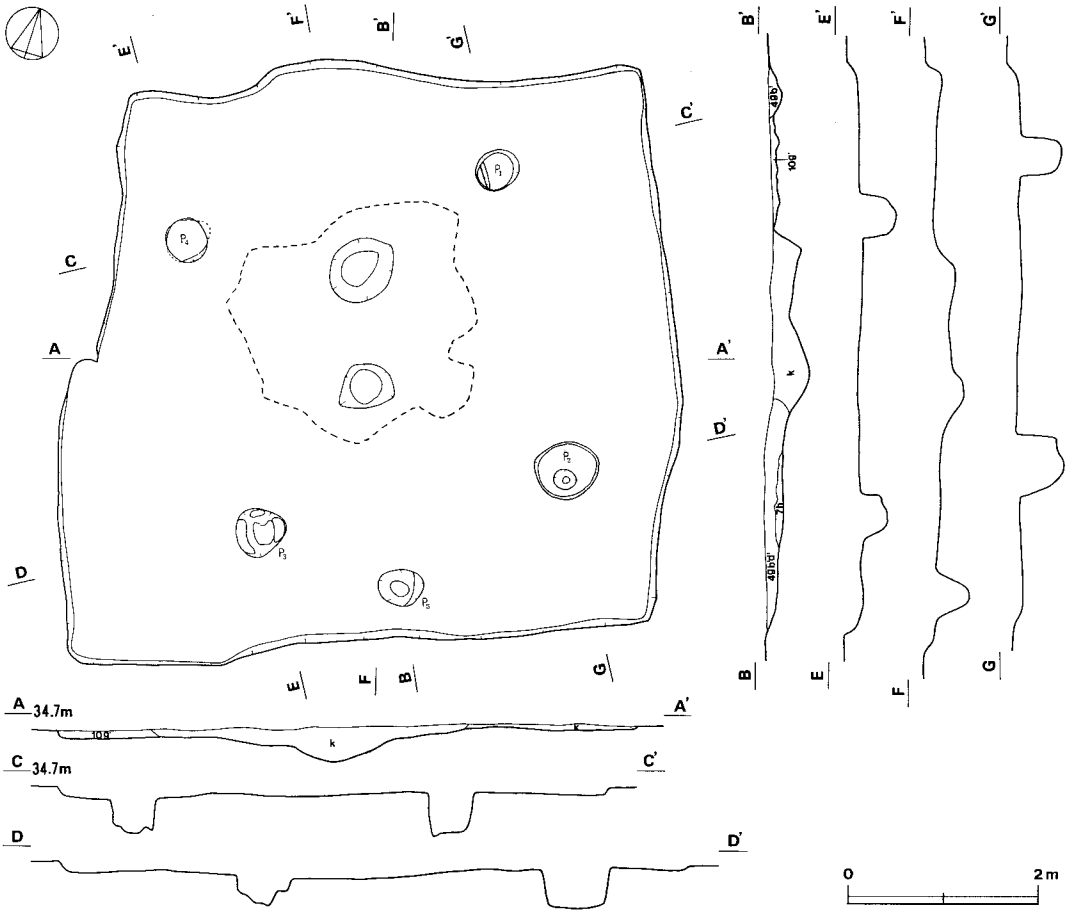
第36号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第66図 P292	甕形土器 土師器	A 13.2 B (5.9)	口頸部はするどく「く」の字状に立ち上がる。端部に平坦な面をもつ。	口縁部内・外面・胴部外面－ハケ目整形	砂・パミス にぶい橙色 普通	10%
P293	坩形土器 土師器	A 12.4 B 7.4 C 3.6	底部は小さい上げ底。体部は球形を呈し，口縁部は外傾して上方に立ち上がる。	内・外面－なで	砂・長石 橙色 普通	50%

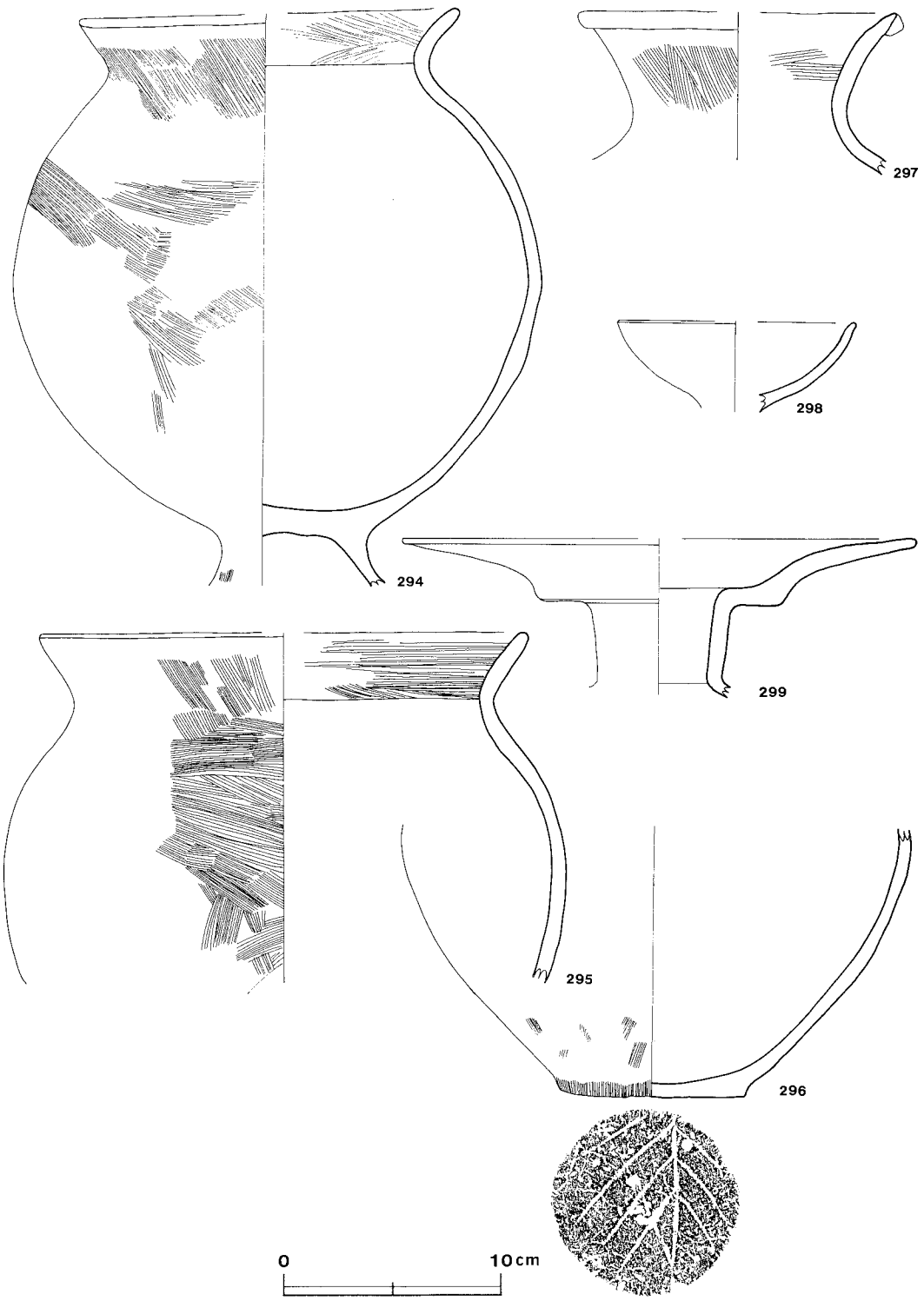
第37号住居跡（第67図）

本跡は，遺跡中央のD2b$_1$区を中心に確認されたもので，第35号住居跡の北東約3.5mに位置している。

平面形は，長軸6.0m・短軸5.8mの方形で，長軸方向はN－21°－Wである。壁はソフトロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は5～20cmである。床はソフトロームで，中央に木の



第67図　第37号住居跡実測図



第68図　第37号住居跡出土遺物実測図

根の撹乱による不定形の落ちこみがあるが，他は平坦である。床面はあまり踏み固められていない。炉は検出されない。柱穴はP_1～P_4の4か所で，規模は径48～66cm・深さ26～52cmである。各コーナー部に検出され，柱穴間は3.6mと等間隔である。P_5は支柱穴と考えられ，径48cm・深さ38cmで，P_2・P_3の中間に位置している。

覆土は6層からなり，主に褐色土，黒褐色土，暗褐色土が堆積している。大部分は大木の根があったため撹乱を受けている。どの層もローム粒子を含んでいる。

遺物は，覆土の下層から甕形土器（P296），壺形土器（P297），器台形土器（P298），西側の床面から台付甕形土器（P294），南側の床面から甕形土器（P295），壺形土器（P299）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。

第37号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第68図 P294	台付甕形土器 土師器	A 17.2 B(27.0)	台部は「ハ」の字状に開くと思われる。胴部は球形を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後軽いなで 内面－なで	スコリア・砂粒・石英 灰褐色 普通	40%
P295	甕形土器 土師器	A 22.2 B(16.3)	胴部は球形を呈すると思われ，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形 胴部内面－なで	スコリア・パミス 明褐灰色 普通	15%
P296	甕形土器 土師器	B(12.6) C 8.5	底部は突出した平底で，胴部は外傾しながら立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	パミス 灰褐色 普通	20%
P297	壺形土器 土師器	A 14.4 B (6.9)	口頸部片。内彎しながら立ち上がり，口縁端部を折り返し複合口縁となる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	スコリア・礫・パミス にぶい橙色 普通	15%
P298	器台形土器 土師器	A 10.8 B (4.2) 孔径 2.2	受部は外彎しながら立ち上がる。中央に孔を穿つ。	内・外面－なで	長石・石英・雲母 明褐灰色 普通	30%
P299	壺形土器 土師器	A 23.7 B (7.5)	口頸部片。垂直に立ち上がった後皿状に開き，段を付けた後外傾しながら開く。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	パミス・スコリア・砂粒 にぶい橙色 良好	30%

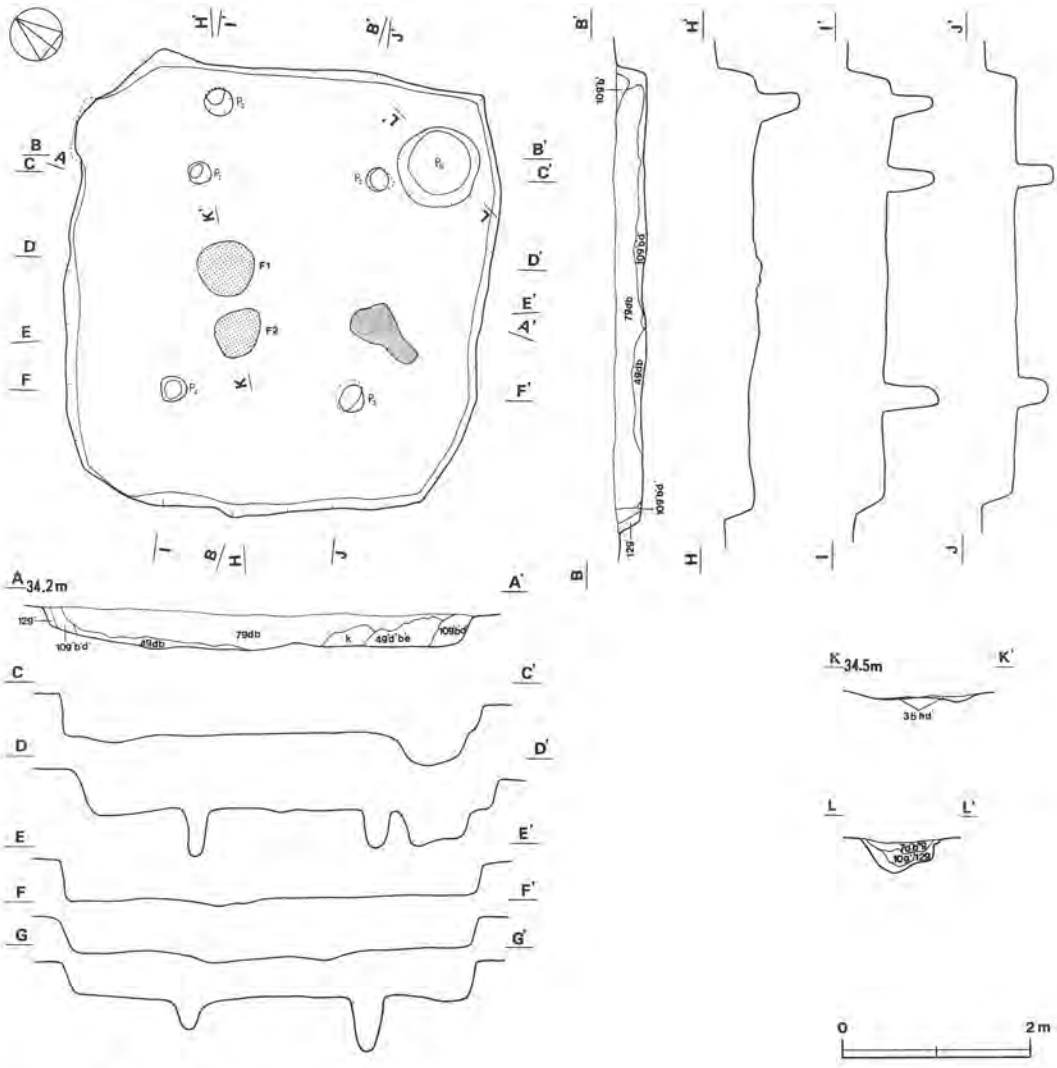
第38号住居跡（第69図）

本跡は，遺跡中央の$C1j_1$区を中心に確認されたもので，第35号住居跡の北東約10.6mに位置している。

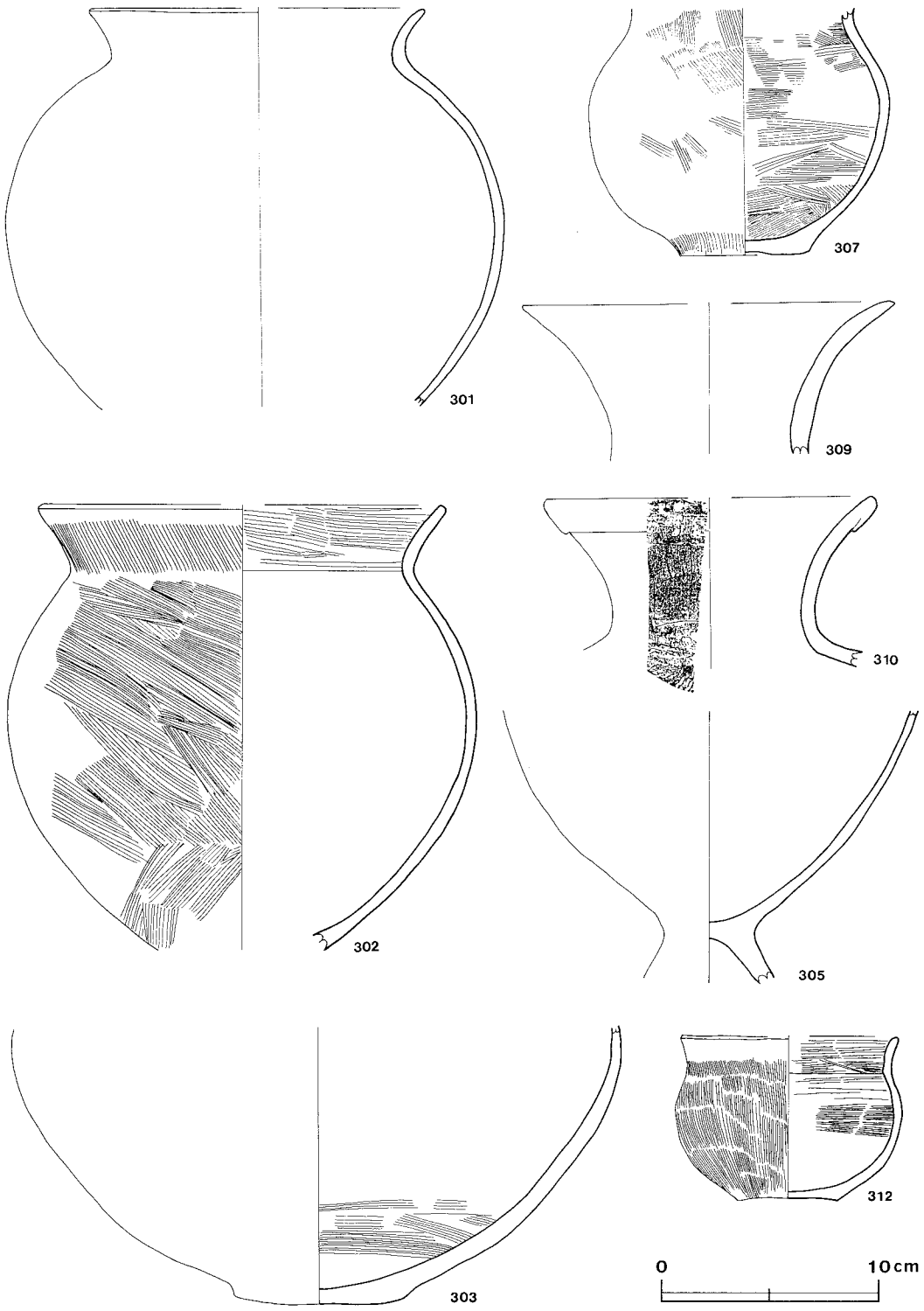
平面形は，長軸4.8m・短軸4.5mの隅丸方形で，長軸方向はN－57°－Eである。壁は上部がソフトローム，下部がハードロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は25～50cmである。床はハードロームで，平坦である。床面は中央の炉の周辺がよく踏み固められている。炉は中央に2か所検出された。F1は，径60cmの円形，F2は，長径60cm・短径48cmの楕円形で，それぞれ床

を6cm・2cm掘り凹めた地床炉である。炉床はF1はよく焼けているが，F2はあまり焼けていない。F1・F2の間隔は18cmと接近している。F1・F2の断面はいずれも皿状である。主柱穴はP_1～P_4の4か所で，その規模は径24～28cm・深さ33～62cmである。各コーナー部に検出され，長方形状に配列されている。P_5は支柱穴と考えられ，P_1の東側にあり，径30cm・深さ42cmである。P_6は貯蔵穴で，径88cmの円形を呈し，床を33cm埦状に掘りこんで構築されている。北側に2か所，西側・南側に1か所ずつ，計4か所焼土層が確認され，床にも炭化材が出土していることから，本跡は焼失家屋と考えられる。

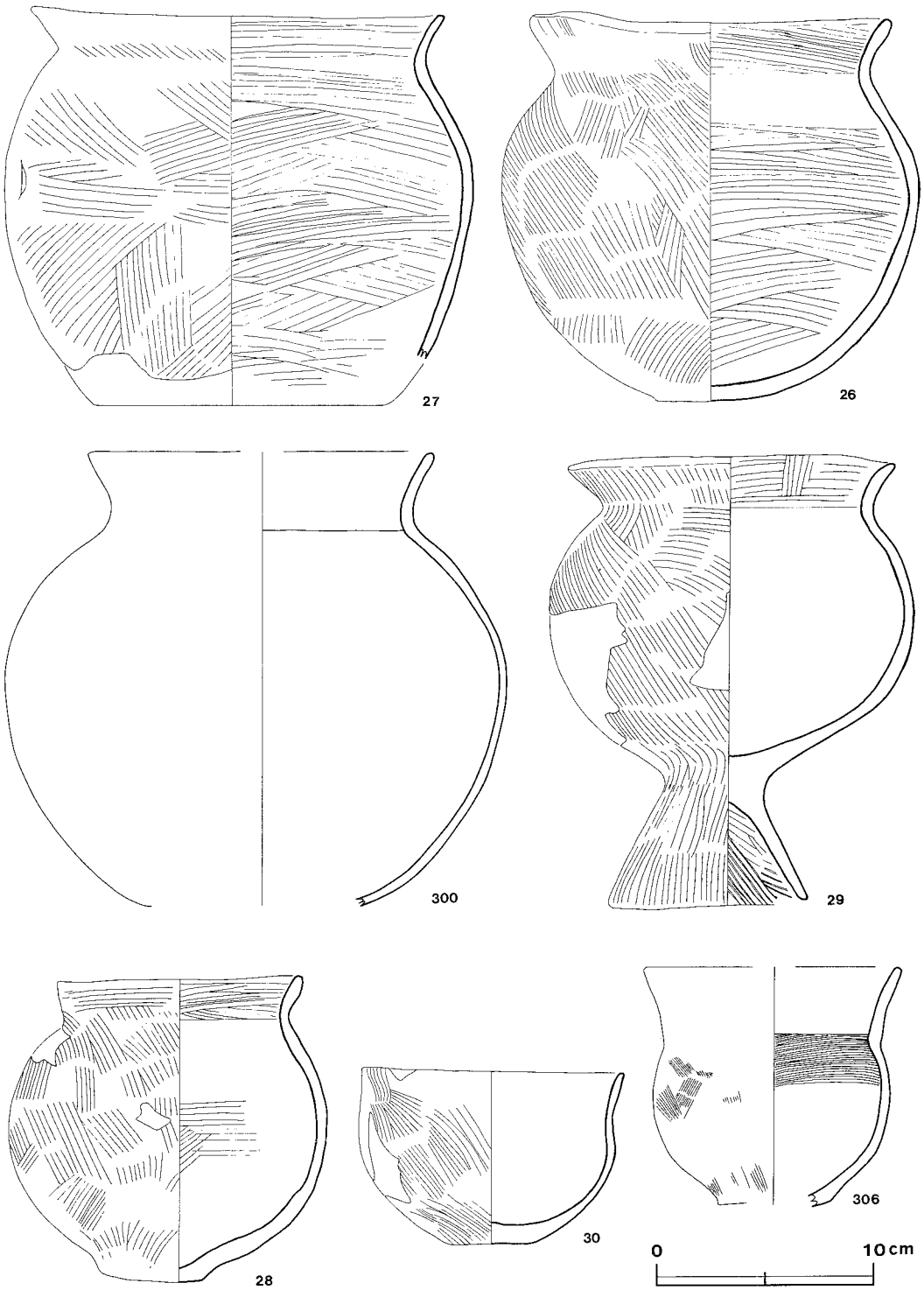
覆土は6層からなり，主に暗褐色土，黒褐色土，褐色土が自然堆積している。どの層も炭化粒子・焼土粒子を含み，締まっている。



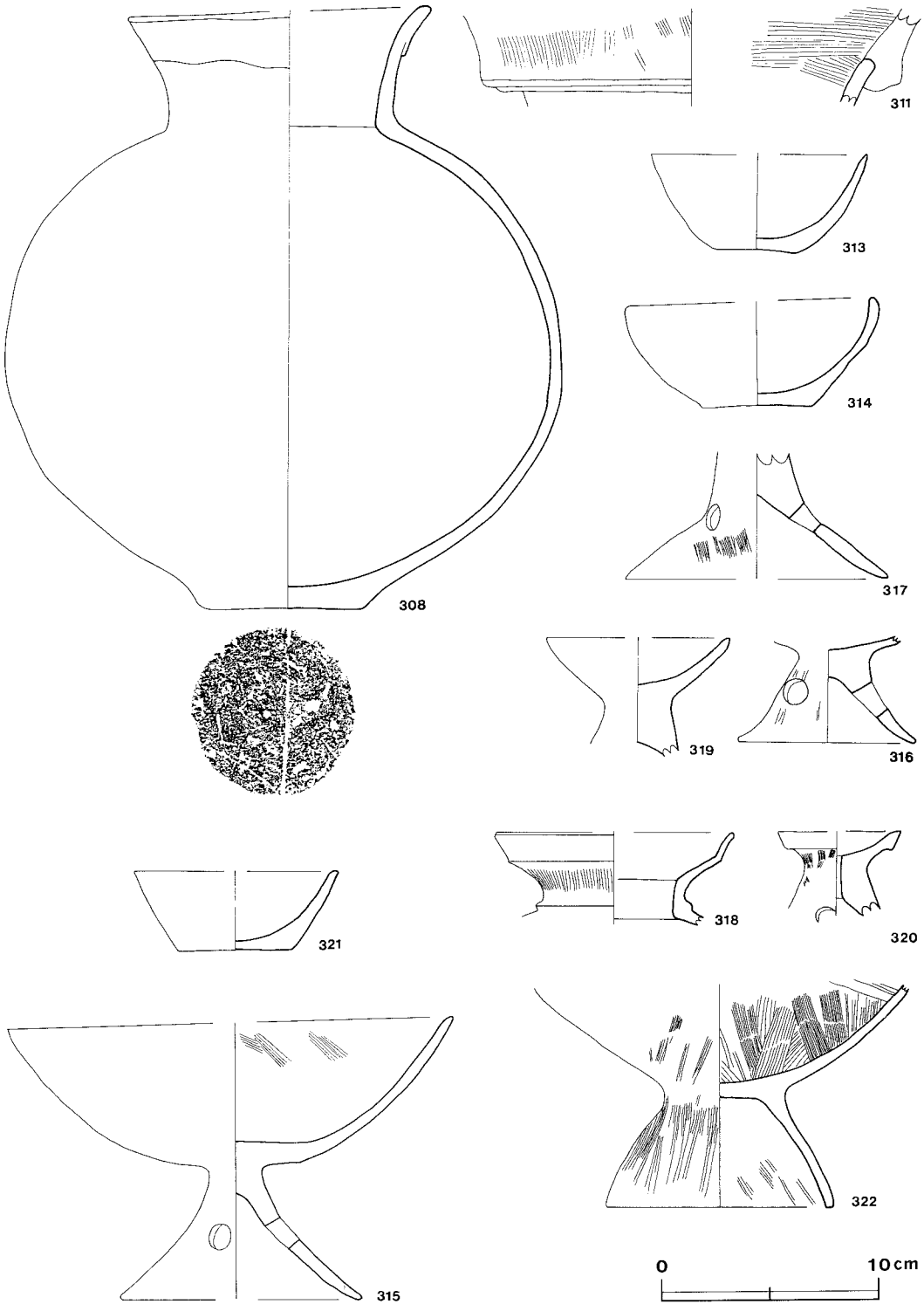
第69図　第38号住居跡実測図



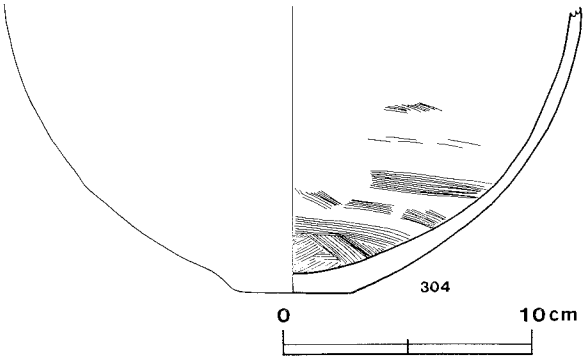
第70図　第38号住居跡出土遺物実測図（1）



第71図　第38号住居跡出土遺物実測図（2）



第72図　第38号住居跡出土遺物実測図（3）



第73図　第38号住居跡出土遺物実測図（4）

遺物は，覆土の上層から甕形土器（P300），坏形土器（P313・P314・P321），坩形土器（P318），器台形土器（P320），覆土下層から甕形土器（P304），小型甕形土器（P306・P307），壺形土器（P309～P311），埦形土器（P312），器台形土器（P316・P319），高坏形土器（P317），北西側コーナー部の床面から甕形土器（P26・P27・P301～P303），台付甕形土器（P29・P305・P322），小型甕形土器（P28），壺形土器（P308），鉢形土器（P30），高坏形土器（P315）が出土している。覆土上層から出土した坩形土器は古墳時代の鬼高式に比定され，流れこみと考えられるが，他はすべて五領式に比定される。

第38号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第71図 P26	甕形土器 土師器	A 16.5 B 17.2 C 5.2	底部は平底。胴部は内彎し，やや長胴で口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	砂粒 明褐色 普通	80%
P27	甕形土器 土師器	A 18.9 B(16.9)	胴部は内彎し，長胴を呈する。口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	砂粒・礫 灰褐色 普通	70%
P28	小型甕形土器 土師器	A 11.4 B 13.6 C 4.4	底部は突出した平底。胴部は球形を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形 胴部内面－ハケ目整形後なで	砂粒 黒褐色 普通	80%
P29	台付甕形土器 土師器	A 15.1 B 20.7 D 9.2	台部は「ハ」の字状に下方に開く。胴部は球形を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面・脚部内面－ハケ目整形 胴部内面－なで	パミス・砂粒 褐色 普通	50%
P30	鉢形土器 土師器	A 12.0 B 7.8 C 3.6	底部は器肉が厚く平底。体部は器肉を減じながら内彎し，口縁部との境でくびれる。口縁部は外傾して立ち上がる。	外面－ハケ目整形後軽いなで 内面－なで	砂粒・雲母・礫 にぶい褐色 良好	90%
P300	甕形土器 土師器	A 15.8 B(21.0)	胴部はほぼ球形を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	外面・胴部内面－なで 口縁部内面－ハケ目整形後なで	スコリア・石英 浅黄橙色 普通	45%
第70図 P301	甕形土器 土師器	A 15.2 B(18.5)	胴部は球形を呈し，口頸部は「コ」の字状に近い立ち上がりである。	内・外面－粗いヘラなで	パミス・砂 外－明褐灰色 内－にぶい橙色 普通	30%
P302	甕形土器 土師器	A 18.2 B(20.6)	胴部はほぼ球形を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形 胴部内面－なで	パミス・砂・スコリア にぶい褐色 普通	45%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 P303	甕形土器 土師器	B(12.8) C 7.9	底部は突出する平底で，胴部は大きな球形状を呈する。	外面－丁寧なで 内面－ハケ目整形後なで	砂・礫・スコリア にぶい褐色 良好	25%
第73図 P304	甕形土器 土師器	B(11.6) C 4.8	底部は突出する平底で小さく，胴部は球形状を呈する。	外面－なで 内面－ハケ目整形後なで	スコリア・石英・砂粒 にぶい黄褐色 普通	20%
第70図 P305	台付甕形土器 土師器	B(12.5)	台部は「ハ」の字状に開くと思われ，胴部は器肉を減じながら外傾して立ち上がる。	外面－なで 内面－丁寧なで	砂粒 褐灰色 普通	20%
第71図 P306	小型甕形土器 土師器	A 11.7 B 11.1 C 5.2	底部は平底で長胴化し，頸部でくびれる。口縁部は外傾して立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後なで	砂粒・石英 外－淡黄橙色 内－淡赤橙色 普通	55%
第70図 P307	小型甕形土器 土師器	B(11.4) C 6.0	底部は平底で，胴部は球形を呈する。	内・外面－ハケ目整形	パミス・砂 にぶい黄橙色 良好	30%
第72図 P308	壺形土器 土師器	A 13.5 B 27.8 C 7.2	底部は平底で，胴部は球形を呈する。口頸部は短く「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－なで	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	60%
第70図 P309	壺形土器 土師器	A 17.1 B (7.2)	口縁部は外彎しながら立ち上がる。	内・外面－なで	スコリア・礫・砂粒 橙色 普通	30%
P310	壺形土器 土師器	A 15.0 B (7.9)	口頸部片。口縁部は外彎しながら立ち上がり，口縁端部で折り返し複合口縁となる。	内・外面－ヘラなで 頸部に結節細縄文（LR）を施す	砂粒・礫 褐灰色 良好	10%
第72図 P311	壺形土器 土師器	B (4.6)	口頸部片。口縁部は中位まで折り返し，複合口縁となる。	外面－縦のハケ目整形 内面－横のハケ目整形	砂粒・礫・スコリア・パミス 浅黄橙色 普通	3%
第70図 P312	埦形土器 土師器	A 9.8 B 7.6 C 4.6	底部はやや上げ底で，体部はほぼ球形を呈し，口縁部との境でくびれ，口縁部は垂直に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	パミス 灰褐色 普通	30%
第72図 P313	坏形土器 土師器	A 10.0 B 4.6 C 3.8	底部は平底。体部は器肉を減じながら外傾して立ち上がる。	内・外面－なで	砂粒・石英 浅黄橙色 普通	80%
P314	坏形土器 土師器	A 11.2 B 4.9 C 5.1	底部はやや突出する平底。体部は内彎しながら立ち上がる。体部中位で器肉がうすくなる。	外面－なで 内面－粗いヘラなで	パミス・砂 にぶい黄橙色 普通	50%
P315	高坏形土器 土師器	A 20.5 B 13.0 D 11.0	脚部は「ハ」の字状に下方に開く。坏部は下方でゆるやかな稜をつくり，外傾して立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後なで	スコリア・石英 にぶい褐色 普通	80%
P316	器台形土器 土師器	B (4.9) D 8.1	脚部は器肉を減じながら，ややラッパ状に下方に開く。脚部に3孔を穿つ。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	スコリア・砂・石英 浅黄橙色 普通	70%
P317	高坏形土器 土師器	B (5.9) D 12.2	脚部は「ハ」の字状に下方に開く。脚部に3孔を穿つ。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	パミス・石英・砂粒・スコリア 橙色 普通	45%

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第72図 P318	坩形土器 土師器	A 10.8 B (4.3)	頸部は外面で稜をつくり，垂直に立ち上がる。口縁部は外傾した後，段をつくる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	パミス・砂 にぶい橙色 普通	5％
P319	器台形土器 土師器	A 8.4 B (5.2)	脚部上半は柱状，下半は「ハ」の字状に開くと思われる。坏部は外傾して立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	石英・パミス・砂 にぶい橙色 普通	15％
P320	器台形土器 土師器	A 5.6 B 3.8 孔径0.6	受部は皿状に開いた後，中位で垂直ぎみに立ち上がる。脚部に6孔を穿つと思われる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	石英・砂粒 明赤褐色 普通	45％
P321	坏形土器 土師器	A 9.2 B 3.6 C 5.3	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	内・外面－なで	スコリア・石英 にぶい褐色 普通	75％
P322	台付甕形土器 土師器	B(10.3) D 10.6	台部は「ハ」の字状に下方に開く。脚端部は平坦な面をもつ。胴部は大きく内彎して立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	パミス にぶい褐色 普通	25％　胴部内面煤付着

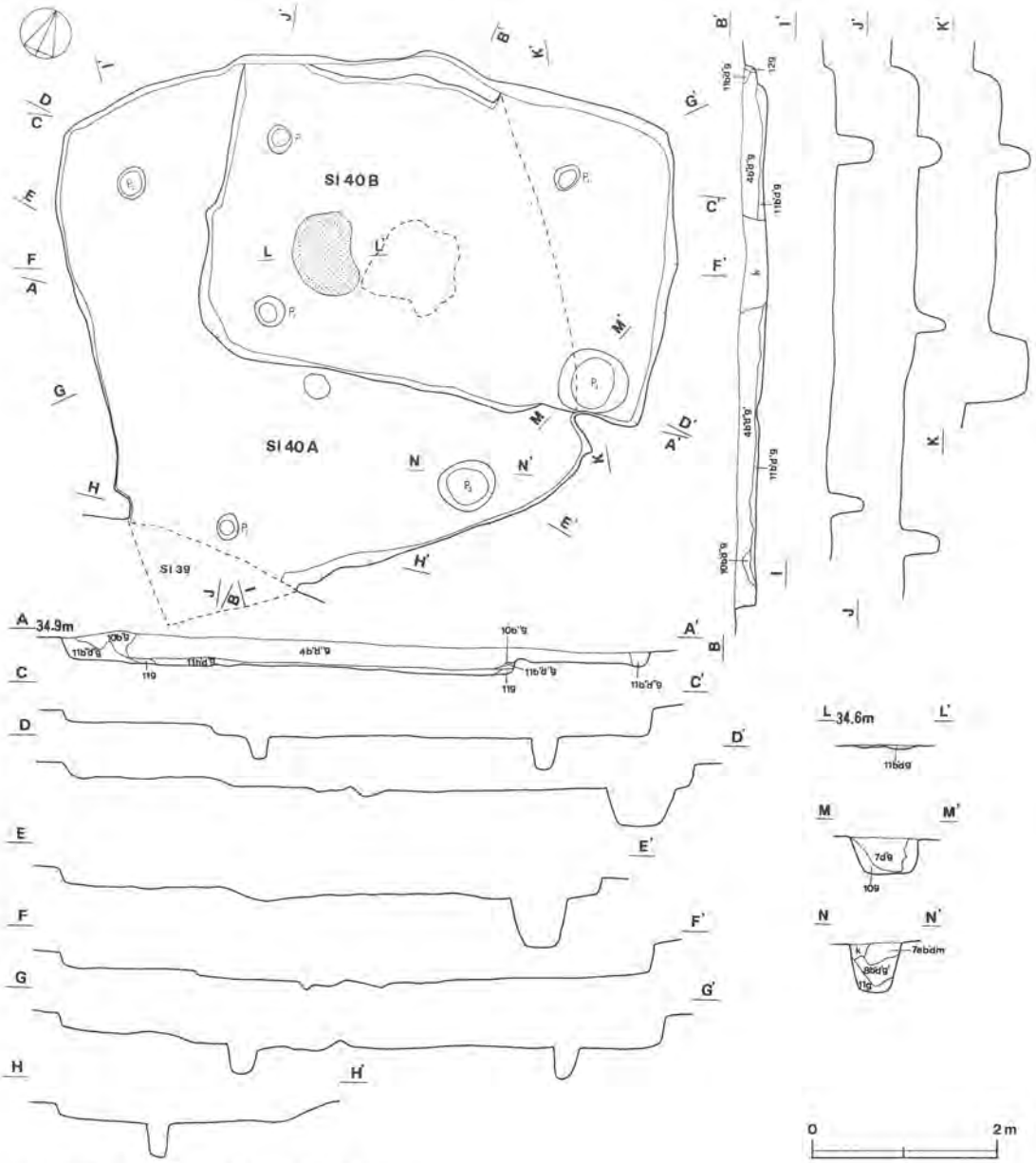
第40A号住居跡（第74図）

本跡は，遺跡中央のD1a$_9$区を中心に確認されたもので，第35号住居跡の北約4mに位置している。北東側で第40B号住居跡と，南側で第39号住居跡と重複している。新旧関係は，第39号住居跡とは前述のとおりであるが，第40B号住居跡とは，本跡の炉を壊して第40B号住居跡の床があるので，本跡が第40B号住居跡よりも古いと考えられる。

平面形は，長軸5.8m・短軸5.2mの隅丸長方形と思われ，長軸方向はN－39°－Wを指すものと考えられる。壁は東側と北・南側の一部が欠損しているが，残存壁はソフトロームで床面から垂直に立ち上がっており，壁高は10～25cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はよく踏み固められている。炉は検出されない。柱穴はP$_1$・P$_2$の2か所で，規模は径30～36cm・深さはそれぞれ38・41cmである。南コーナー部，北西コーナー部に検出されているので，他のコーナー部にもあったと思われるが，重複のため削平されたものと考えられる。P$_3$は貯蔵穴と考えられ，長径60cm・短径54cmのほぼ円形で，床を55cm「U」形に掘りこんで構築されている。貯蔵穴の覆土は4層で，暗褐色土，褐色土が堆積している。

覆土は5層からなり，主に褐色土，暗褐色土，黒褐色土が自然堆積している。大部分の層は焼土粒子・炭化粒子を含んでおり，全層とも締まっている。

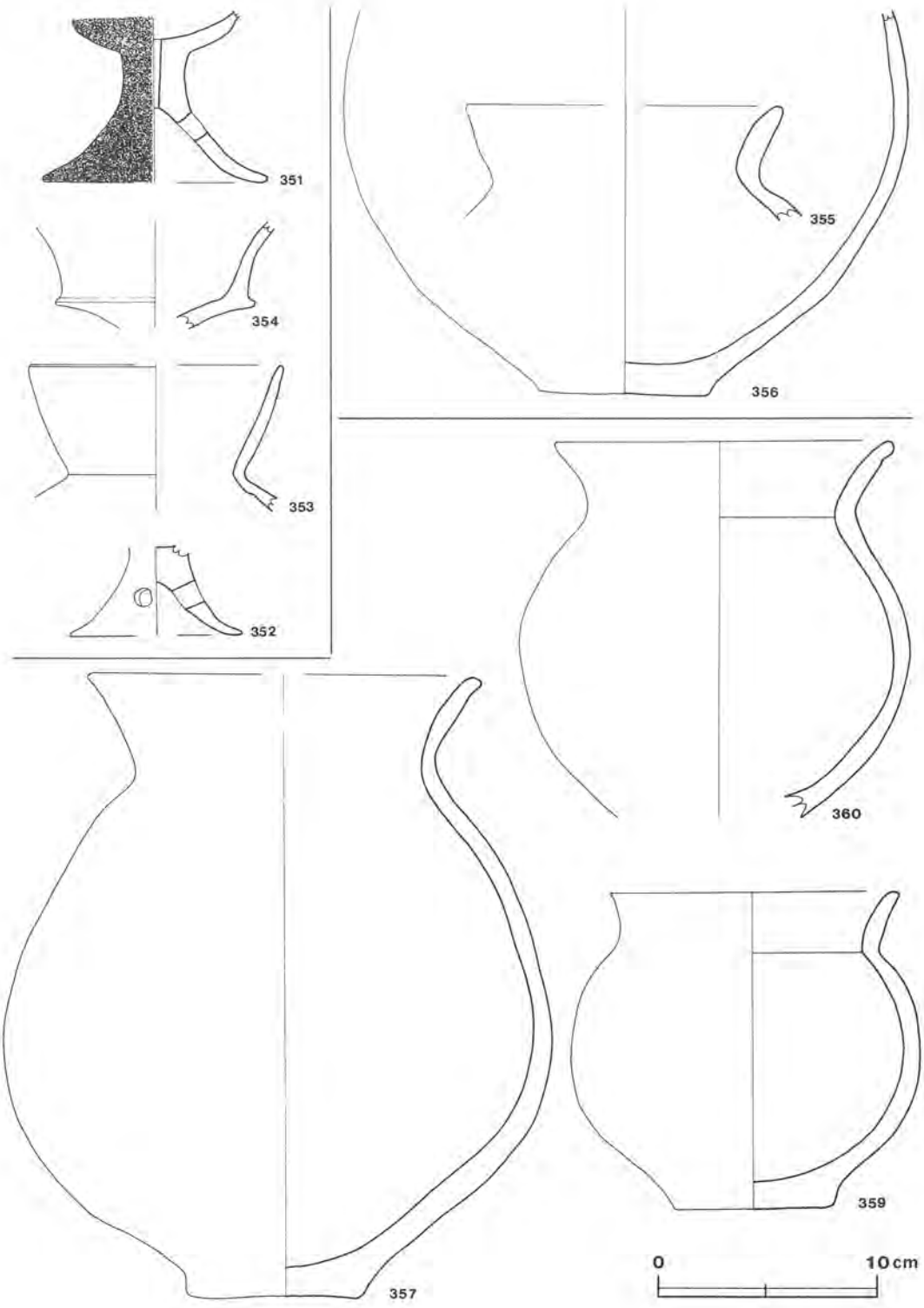
遺物は，覆土の上層から高坏形土器（P347・P348），南側の床面から甕形土器（P345），埦形土器（P346），東側の壁際の床面から高坏形土器（P349・P350）が出土している。すべて五領式に比定される。また，南側の覆土上層から滑石の原石が2点，西側の40B号住居跡との重複部分近くの床面から臼玉の未製品が2点出土している。未製品や原石は投棄されたものと考えられる。



第74図　第40A・B号住居跡実測図

第40B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第75図 P351	器台形土器 土師器	B (7.9) D 10.3 孔径1.2	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は内彎し，口縁部との境で稜をつくり，口縁部は垂直に立つと思われる。	外面－丁寧ななで 内面－なで	砂粒 赤色 普通	50%　器外面朱彩
P352	器台形土器 土師器	B (4.2) D 8.0	脚部は「ハ」の字状に下方に開き，裾部は横に水平に広がる。	外面－丁寧ななで 内面－なで	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	40%



第75図　第40Ｂ・41号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第75図 P353	坩形土器 土師器	A 11.4 B (6.8)	口頸部片。口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－なで	石英・砂 にぶい橙色 普通	15%
P354	装飾器台形土器 土師器	B (5.0)	坏部は皿状に開いた後段をつくり，その後外傾して立ち上がる。	外面－丁寧なで 内面－なで	礫・雲母・砂 橙色 普通	10%

第41号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第75図 P355	甕形土器 土師器	A 14.5 B (5.3)	口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後なで	礫・砂粒・パミス にぶい橙色 普通	10%
P356	甕形土器 土師器	B(17.8) C 7.8	底部は突出した平底で，胴部は球形状を呈する。	内・外面－なで	スコリア 灰褐色 普通	20%

第40B号住居跡（第74図）

本跡は，遺跡中央の$C1j_9$区を中心に確認されたもので，第35号住居跡の北約6.6mに位置している。南西側で第40A号住居跡と重複している。新旧関係は前述のとおりである。

平面形は，長軸5.2m・短軸3.7mの隅丸長方形で，長軸方向はN－77°－Eである。壁はソフトロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は15～35cmである。床はハードロームで，やや起伏がある。床面はあまり踏み固められていない。炉は西側に検出され，長径90cm・短径66cmの不整楕円形で，床面を5cm掘り凹めた地床炉である。炉床は，西側がよく焼けて硬化している。柱穴はP_1～P_3の3か所で，その規模は径32～34cm・深さ24～34cmである。P_4は貯蔵穴と考えられ，径80cmの円形で床を41cm「U」形に掘りこんで構築されている。

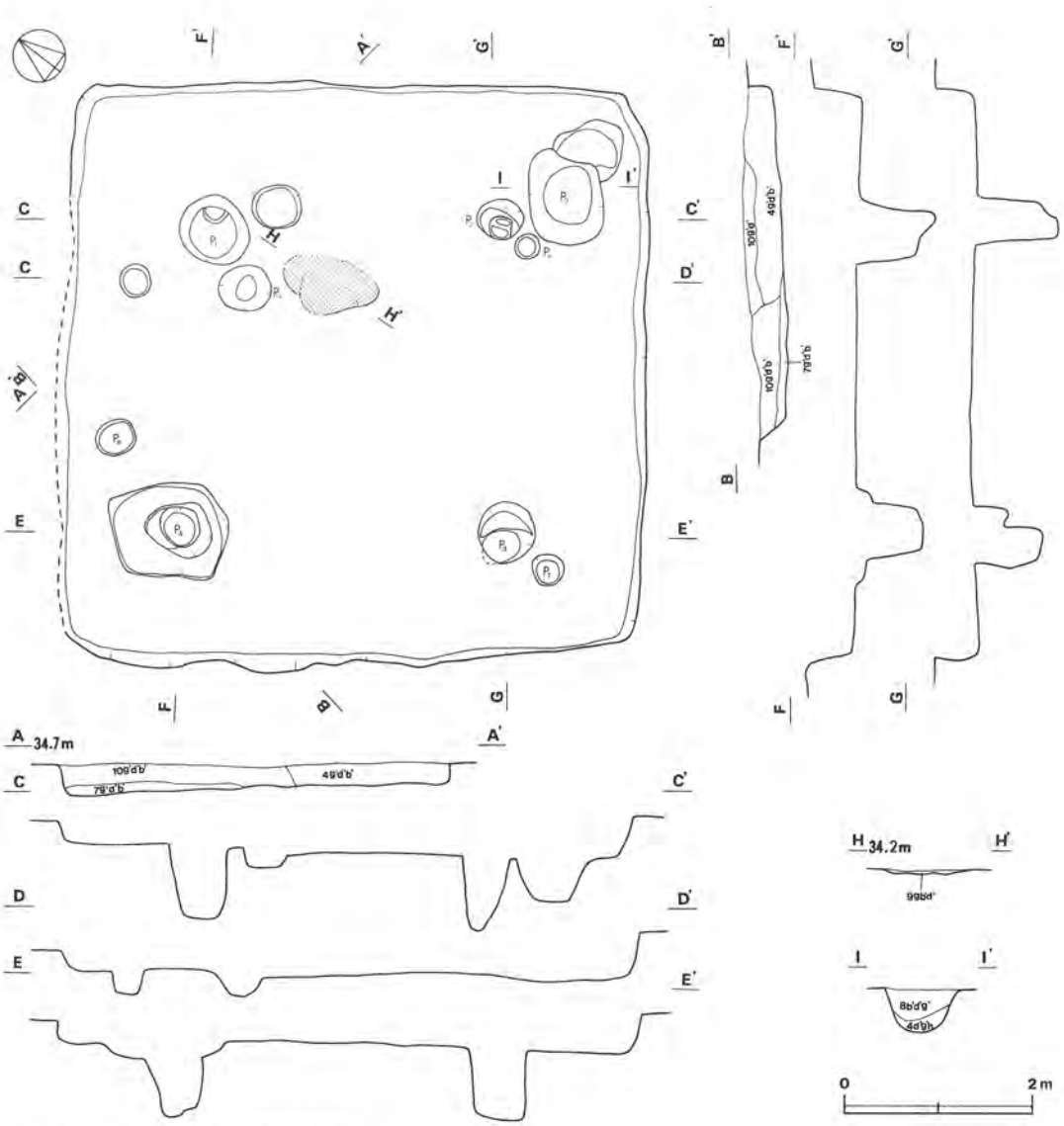
覆土は3層からなり，主に褐色土，暗褐色土が堆積している。中央が撹乱されているが，他は自然堆積である。全層ともよく締まっている。

遺物は，覆土の中層から坩形土器（P351），器台形土器（P353），下層から器台形土器（P352），南西側コーナー部の床面から装飾器台形土器（P354）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。また，中央の覆土上層からこぶし大の滑石の原石6点，南東側コーナー部の覆土下層からまとまって臼玉の未製品が10点出土している。石製品や原石は，投棄されたものと考えられる。

第43号住居跡（第76図）

本跡は，遺跡中央の$D2c_3$区を中心に確認されたもので，第35号住居跡の東約12mに位置している。北東側で第42号住居跡と重複している。新旧関係は前述のとおりである。

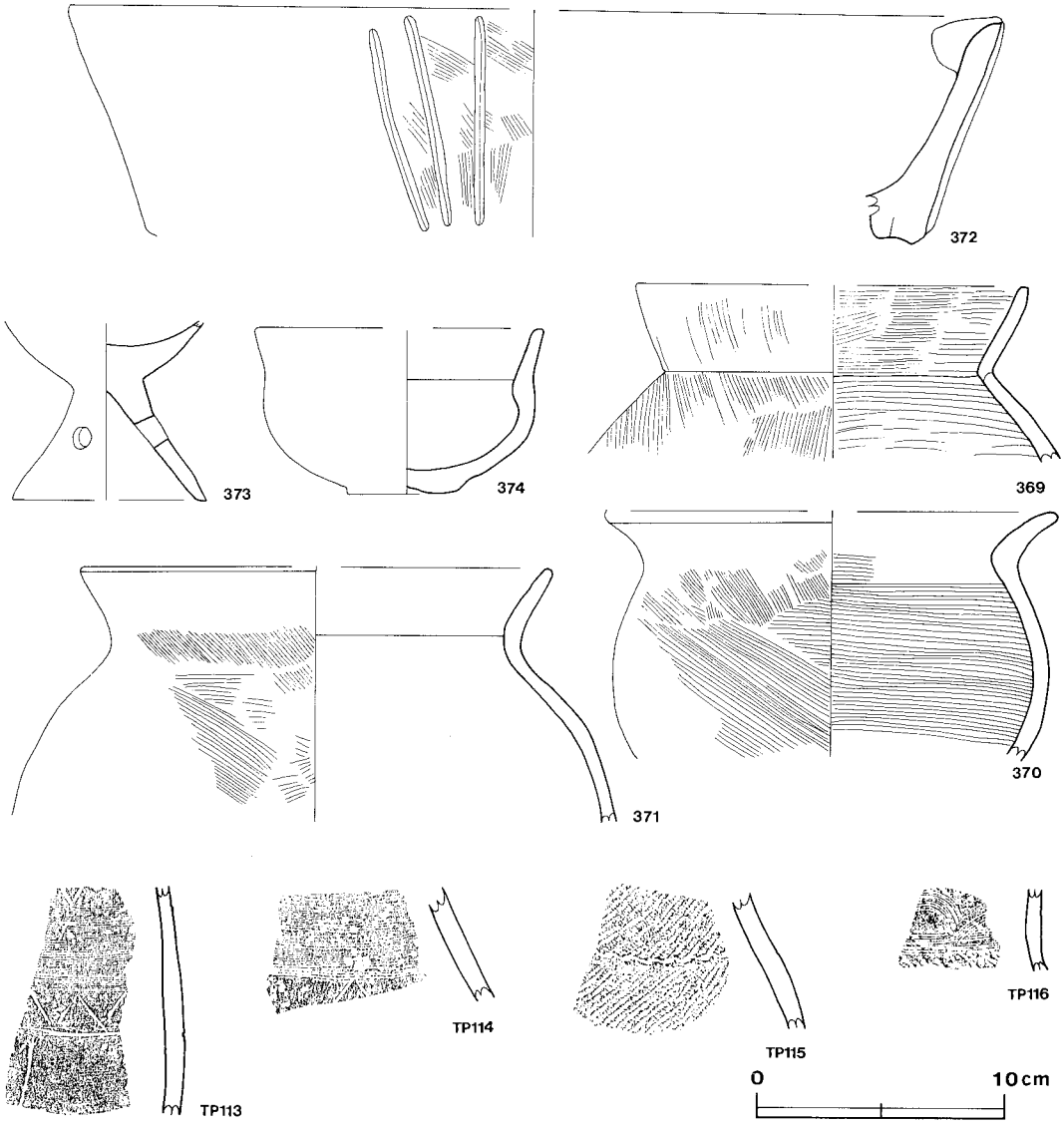
平面形は，長軸6.3m・短軸6.2mの隅丸長方形で，長軸方向はN－54°－Eである。壁は北壁の一部が消失しており，上部がソフトローム，下部がハードロームで床面から垂直に立ち上がって



第76図　第43号住居跡実測図

第43号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第77図 P369	甕形土器 土師器	A 15.8 B (7.0)	口頸部は鋭角に「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	砂粒・スコリア・礫 にぶい褐色 普通	10%
P370	甕形土器 土師器	A 18.0 B(10.0)	胴部は球形を呈すると思われ，口頸部は「く」の字状に立ち上がり，その後外傾ぎみに開く。	内・外面－ハケ目整形	砂粒・スコリア 淡橙色 普通	15%
P371	甕形土器 土師器	A 18.5 B(10.3)	胴部は球形を呈すると思われ，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形 内面－なで	スコリア・砂粒 にぶい褐色 普通	10%



第77図　第43号住居跡出土遺物実測図・拓影図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 P372	壺形土器 土師器	A 37.2 B (9.3)	口縁部は外傾して立ち上がり，端部で水平な面をもつ。口唇部内面に凸帯を付ける。外面に3本1対の棒状浮文を付ける。	外面－斜・縦のハケ目整形 内面－横のハケ目整形後なで	砂粒・礫 橙色 普通	10%
P373	器台形土器 土師器	B (7.2) D 7.8	脚部は「ハ」の字状に下方に開く。受部は内彎しながら立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後なで	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	10%
P374	鉢形土器 土師器	A 11.3 B 6.8 C 4.8	底部は突出した平底であるが中央が凹む。体部は内彎し，口縁部との境でくびれ，口縁部は外傾して立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後なで	パミス・砂粒 明赤褐色 普通	50%

いる。壁高は20～52cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はどの部分もよく踏み固められている。炉は東側に検出され，長径106cm・短径60cmの不整楕円形で，床面を22cm掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼け，レンガ状に硬化している。炉の覆土は1層で暗赤褐色土が堆積している。柱穴は，規模の大きいP_1～P_4の4か所，規模の小さいP_5～P_8の4か所，計8か所で，大規模の柱穴1本と小規模の柱穴1本を1組にして4か所配置されている。P_1～P_4は径50～74cm・深さ66～89cmであり，P_5～P_8は径28～52cm・深さ25～35cmである。P_5～P_8はそれぞれP_1～P_4の近くに掘られている。P_9は貯蔵穴と考えられ，長径100cm・短径80cmの楕円形で床を44cm埦状に掘りこんで構築されている。

覆土は4層からなり，主に黒褐色土，褐色土，暗褐色土が自然堆積している。どの層も焼土粒子・炭化粒子を含み締まっている。

遺物は，覆土の下層から甕形土器（P369），南側の床面から甕形土器（P370・P371），壺形土器（P372），北側の床面から器台形土器（P373），南側の床面から鉢形土器（P374）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。また，中央の覆土上層から滑石の原石が6点出土している。原石は投棄されたものと考えられる。

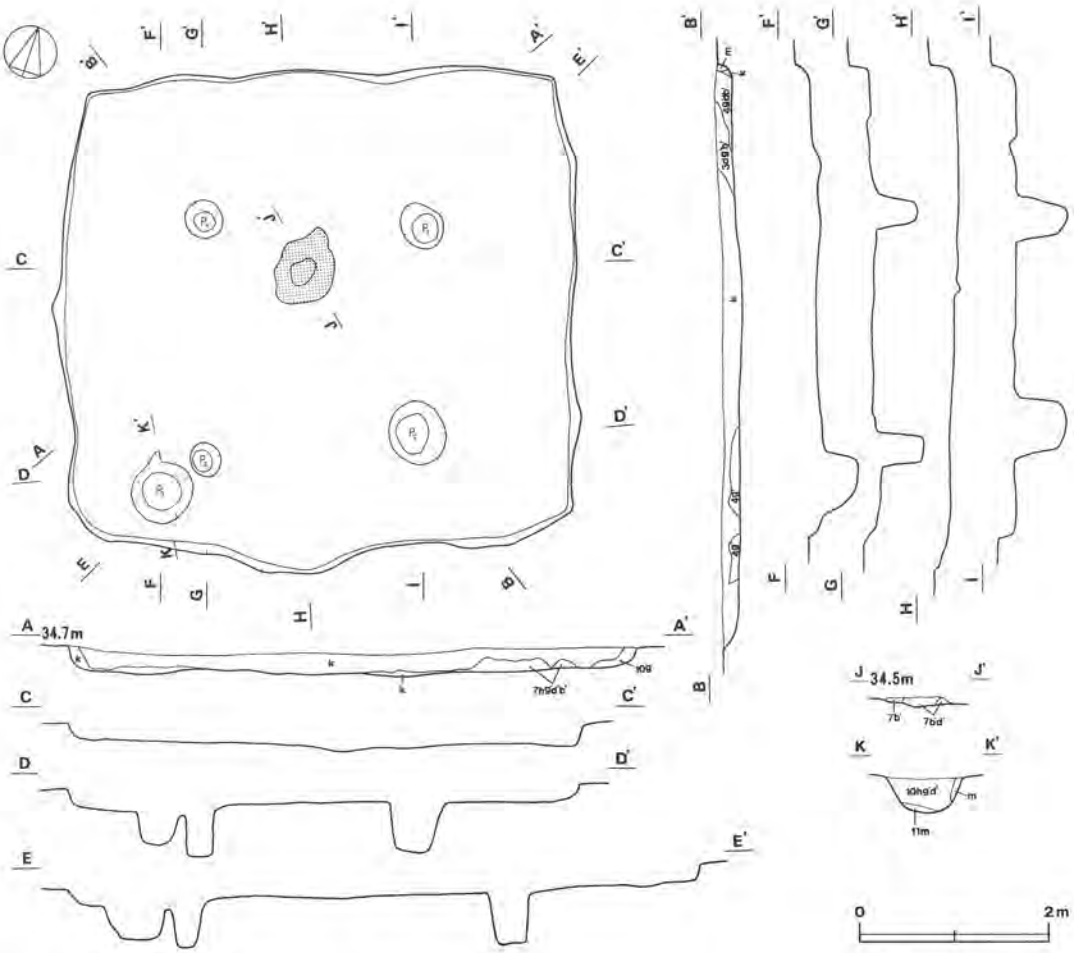
第44号住居跡（第78図）

本跡は，遺跡中央のD2a_4区を中心に確認されたもので，第35号住居跡の北東約15mに位置している。

平面形は，長軸5.2m・短軸5.0mの方形で，長軸方向はN－70°－Eである。壁はハードロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は15～25cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はどの部分もよく踏み固められている。炉は中央に検出され，長径86cm・短径60cmの不整楕円形で，床を8cm皿状に掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼け，赤くレンガ状に硬化している。柱穴はP_1～P_4の4か所で，規模は径36～68cm・深さ43～58cmである。各コーナー部に検出され，柱穴間は2.2mと等間隔である。P_5は貯蔵穴と考えられ，径70cmの円形で床を35cm埦状に掘りこんで構築されている。

覆土は8層からなり，主に黒褐色土，暗褐色土，褐色土が自然堆積している。上層は焼土粒子・炭化粒子を，下層はローム粒子・ロームブロックをそれぞれ含み，全層とも締まっている。

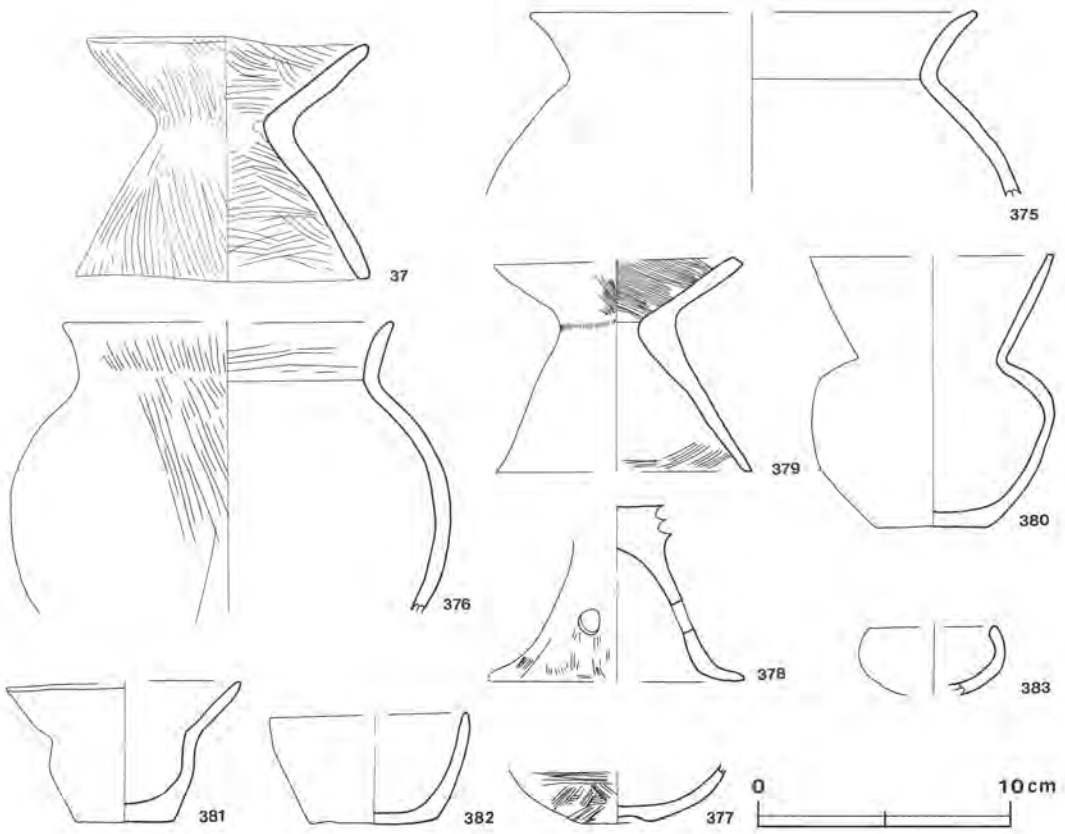
遺物は，覆土の下層から甕形土器（P376），西側の下層から横位に坩形土器（P380），ミニチュア土器（P381・P382），南西側コーナー部の床面から破片で甕形土器（P375），中央の床面から破片で坏形土器（P377），中央の床面から破片で高坏形土器（P378），東側の床面から横位で器台形土器（P37・P379），炉覆土から破片でミニチュア土器（P383）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。



第78図　第44号住居跡実測図

第44号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 P37	器台形土器 土師器	A 11.0 B 10.0 D 11.9	脚部は「ハ」の字状に下方に開く。受部は小さく外傾して上方に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形	砂粒・パミス にぶい褐色 良好	90%
P375	甕形土器 土師器	A 17.6 B (6.9)	胴部は球形を呈すると思われ，口頸部と「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－なで	石英・砂粒 暗赤褐色 普通	15%
P376	甕形土器 土師器	A 13.0 B(11.8)	胴部は球形を呈し，口頸部は短く「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形 胴部内面－なで	スコリア・砂粒 淡橙色 普通	15%
P377	坏形土器 土師器	B (2.3) C 2.3	底部は小さな上げ底である。体部は内彎しながら立ち上がる。	外面－ハケ目整形 内面－ハケ目整形後なで	砂粒・石英 灰褐色 普通	20%
P378	高坏形土器 土師器	B (7.1) D 10.2	脚部は「ハ」の字状に下方に開き，裾部は水平に広がる。	外面－ハケ目整形後軽いなで 内面－粗いなで	砂粒・雲母 橙色 普通	70%
P379	器台形土器 土師器	A 9.7 B 8.6 D 10.0 孔径 1.6	脚部は「ハ」の字状に下方に開き，受部は「く」の字状に立ち上がる。受部中央に孔を穿つ。	内・外面－ハケ目整形後なで	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	60%



第79図　第44号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 P380	坩形土器 土師器	A 9.4 B 11.0 C 4.4	底部は平底。体部は内彎し，上位に最大径をもつ。口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－粗いヘラなで	砂粒 浅黄橙色 普通	85%
P381	ミニチュア土器 土師器	A 9.2 B 5.7 C 4.0	底部はやや突出する平底。体部は垂直に立ち上がり，口縁部との境内面に稜をもつ。口縁部は外傾する。	外面・胴部内面－なで 口縁部内面－ハケ目整形	スコリア・砂粒・石英 浅黄橙色 普通	95%
P382	ミニチュア土器 土師器	A 7.8 B 4.2 C 4.9	底部は平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁端部は丸味をもつ。	内・外面－なで	砂粒 にぶい橙色 普通	50%
P383	ミニチュア土器 土師器	A 4.9 B (2.7)	体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内傾ぎみである。	内・外面－なで	砂粒 橙色 普通	25%

第45号住居跡（第80図）

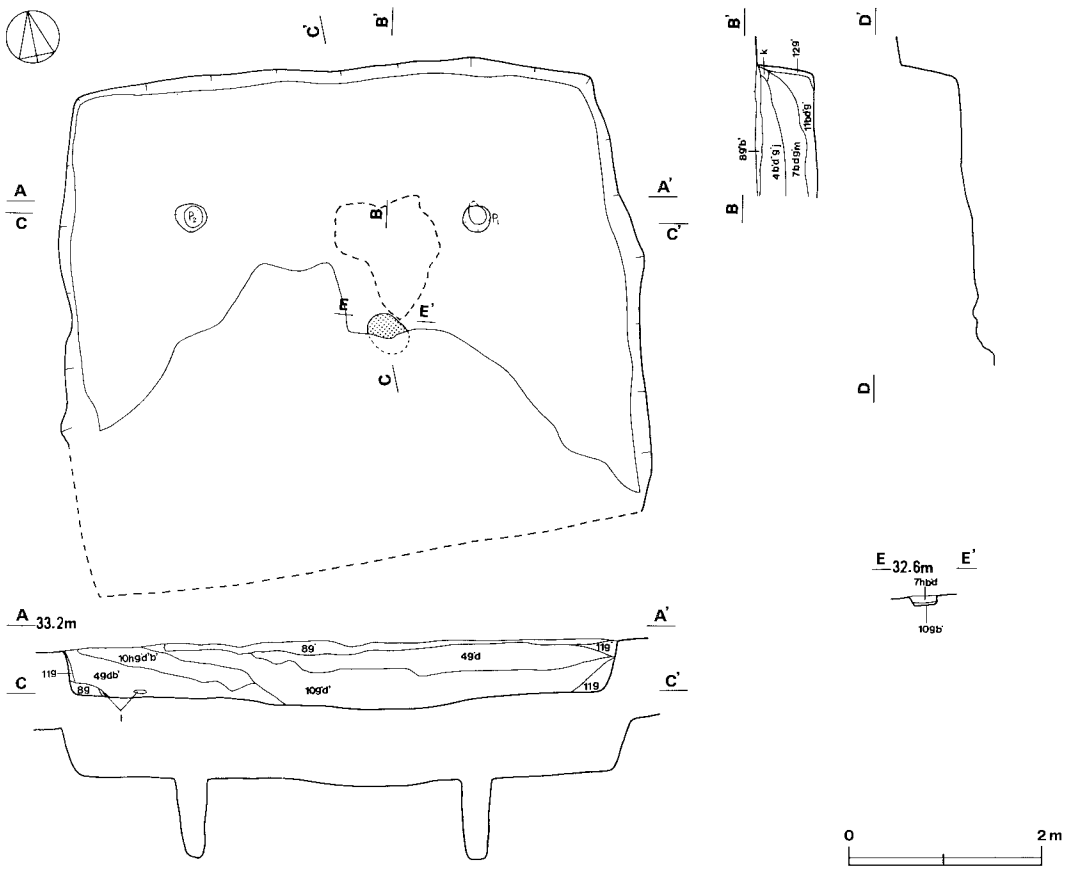
本跡は，遺跡南部のE1e$_4$区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の西約11.6mに位置している。南側約半分は土取りのため削平されている。

平面形は，長軸6.2m・短軸5.2mの長方形と思われ，長軸方向はN－8°－Wと考えられる。壁は南側が土取りで欠損しているが，残存壁はソフトロームで床面から垂直に立ち上がっている。

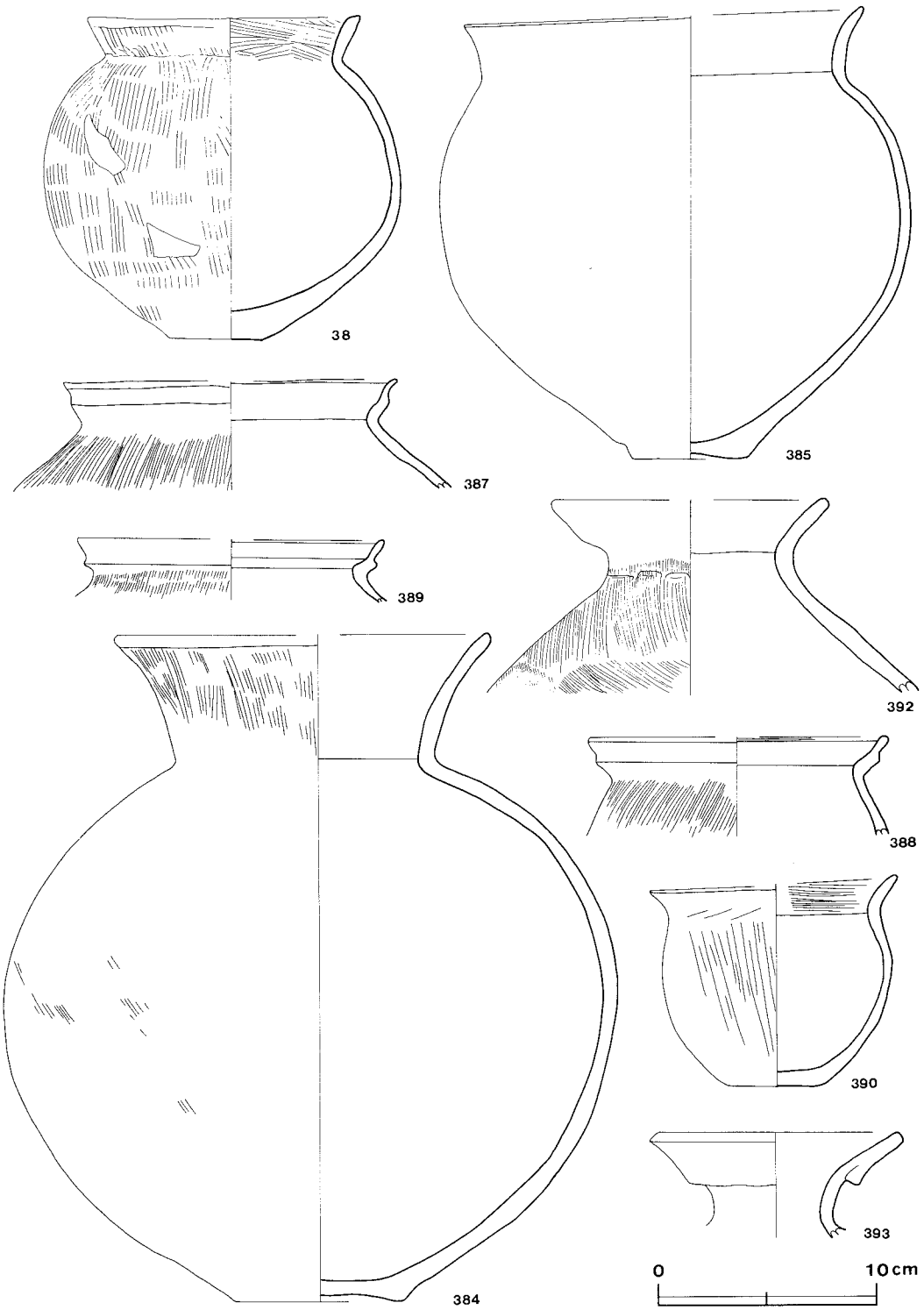
壁高は50～55cmである。床は土取りで約半分は削平されているが，残っている床はハードロームで，平坦である。床面はあまり踏み固められてはいない。炉は中央と思われる部分に検出され，長径44cm・短径26cmの楕円形で，南側は土取りのため一部が壊されている。床面を11cm皿状に掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼けている。炉覆土は4層で暗褐色土，褐色土が堆積し，どの層も焼土粒子を含んでいる。柱穴はP_1・P_2の2か所で，その規模はともに径32cm，深さ88cm・82cmである。他の柱穴は土取りによって削平されたものと考えられる。

覆土は9層からなり，主に暗褐色土，黒褐色土，褐色土が自然堆積している。上層は焼土粒子・炭化粒子を含み，全層とも締まっている。

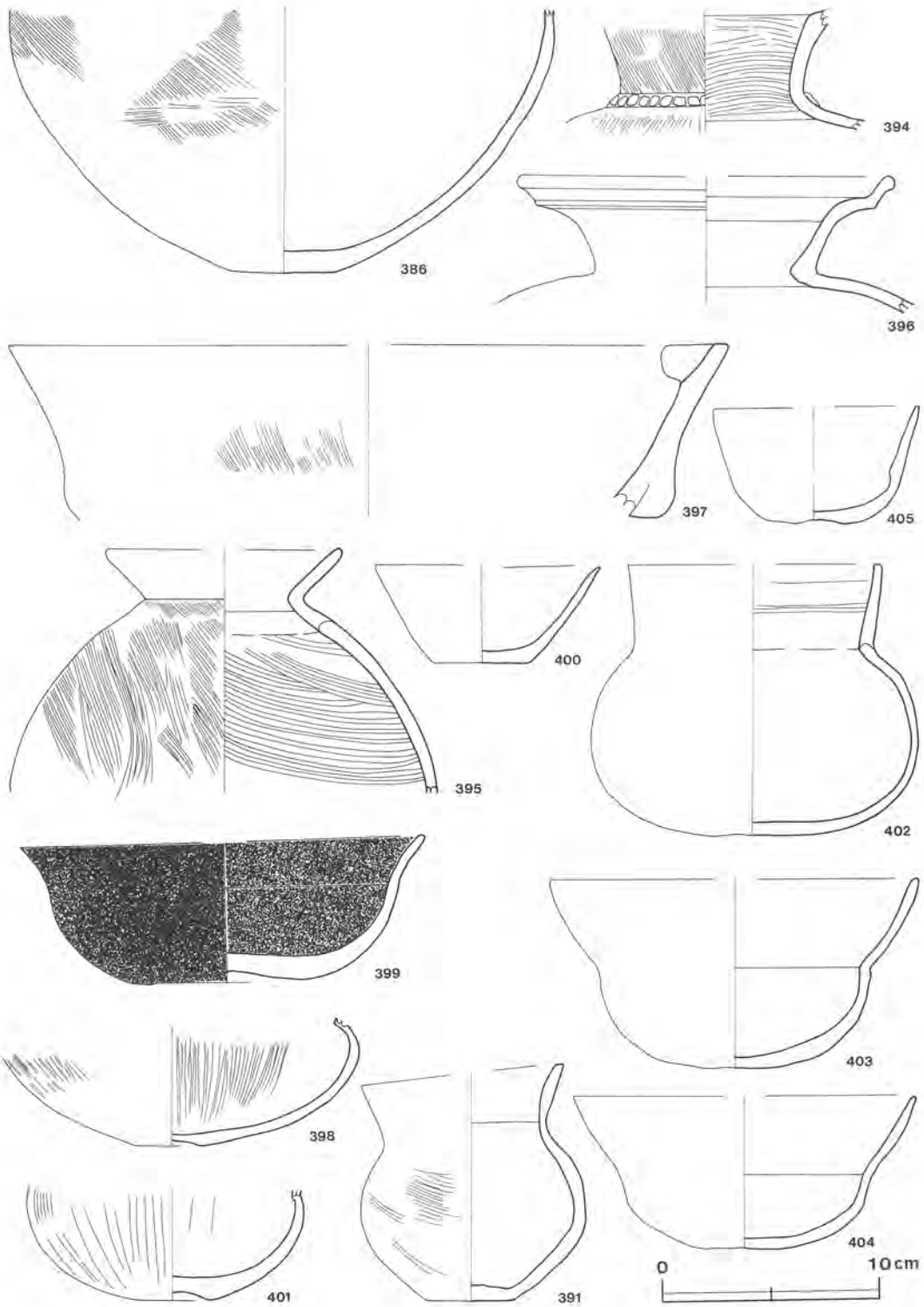
遺物は，覆土の上層から甕形土器（P384），坏形土器（P400），鉢形土器（P399・P401），坩形土器（P403～P405），高坏形土器（P406・P409），器台形土器（P412），須恵器坏形土器（P414）が出土している。すべて破片で，北，東側に集中している。覆土下層から甕形土器(P385・P386)，台付甕形土器（P387～P389），小型甕形土器（P390・P391），壺形土器（P392～P397），埦形土器（P398），坩形土器（P402），高坏形土器（P407・P408），器台形土器（P411），ミニチュア土器



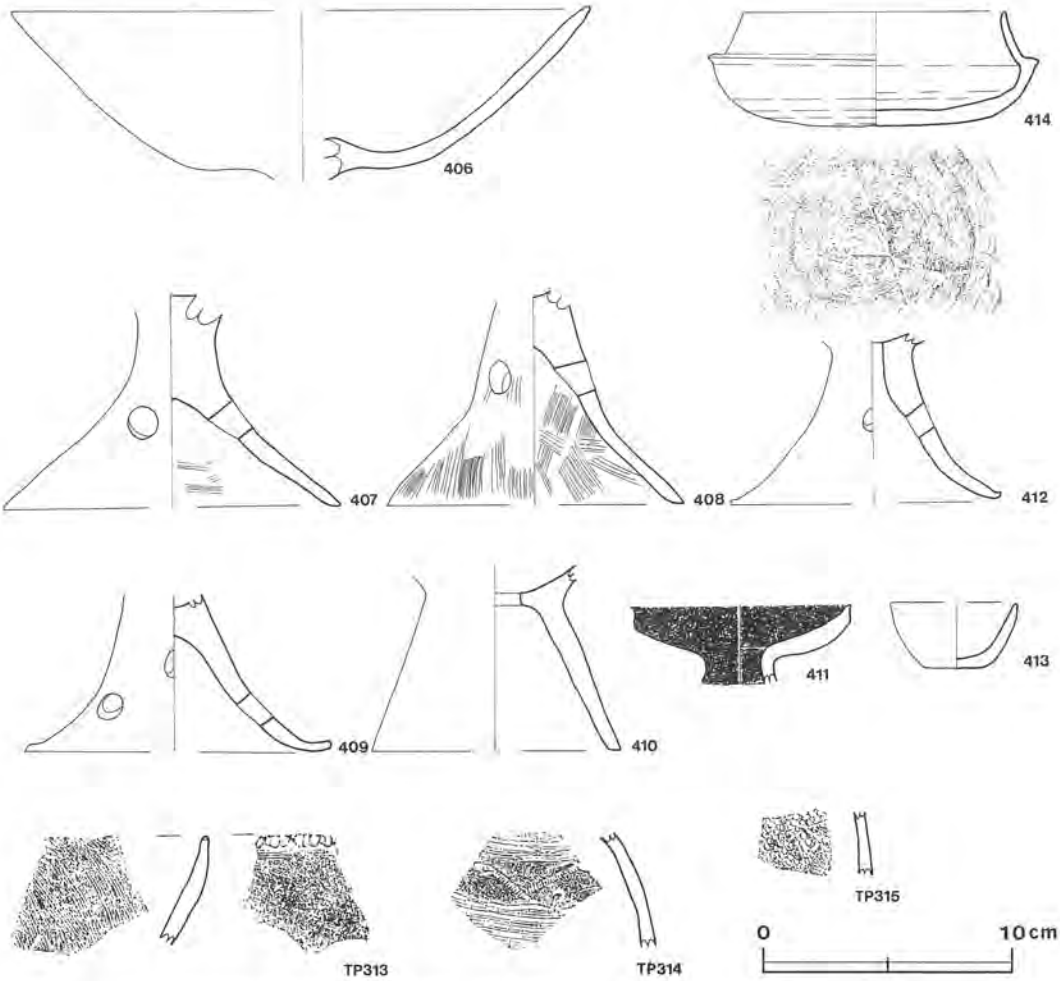
第80図　第45号住居跡実測図



第81図　第45号住居跡出土遺物実測図（1）



第82図　第45号住居跡出土遺物実測図（2）



第83図　第45号住居跡出土遺物実測図・拓影図（3）

第45号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 P384	甕形土器 土師器	A 17.0 B 30.3 C 7.8	底部はやや突出した上げ底で，胴部は球形を呈する。口縁部は外彎しながら立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	スコリア・砂粒・礫 浅黄橙色 普通	75%
P385	甕形土器 土師器	A 18.1 B 20.2 C 5.2	底部は平底であるが，中央がやや凹む。胴部はほぼ球形を呈し，口縁部はゆるく外彎する。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂粒・石英 灰赤色 普通	70%
第82図 P386	甕形土器 土師器	B(12.3) C 4.6	底部は小さく平底。胴部は球形を呈する。	内・外面－ハケ目整形後なで	砂粒 黒褐色 普通	25%
第81図 P387	台付甕形土器 土師器	A 15.2 B (5.0)	胴部は内傾し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。「S」字状口縁。	外面－ハケ目整形 内面－なで	砂粒・礫・スコリア 灰褐色 普通	10%

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第81図 P388	台付甕形土器 土師器	A 13.5 B (4.6)	胴部は内傾し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。「S」字状口縁。	外面－ハケ目整形 内面－なで	砂粒・石英・スコリア にぶい褐色 普通	5％
P389	台付甕形土器 土師器	A 14.0 B (2.8)	胴部は内傾し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。「S」字状口縁。	外面－ハケ目整形 内面－なで	スコリア・砂粒 黒褐色 普通	5％
P390	小型甕形土器 土師器	A 11.4 B 9.3 C 4.4	底部は平底で，胴部は外傾し，中位に最大径をもつ。口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	外面－粗いヘラなで 口縁部内面－ハケ目整形 胴部内面－なで	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	60%
第82図 P391	小型甕形土器 土師器	A 9.5 B 10.6 C 4.0	底部は平底で，胴部は球形を呈する。頸部で器肉を減じ，口縁部は外傾して立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後なで	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	90%
第81図 P392	壺形土器 土師器	A 12.4 B (9.0)	胴部は内傾し，口頸部はやや「コ」の字状に近い立ち上がりである。	胴部外面・口縁部内面－ハケ目整形 口縁部外面－なで	砂粒・礫・雲母 にぶい橙色 普通	20%
P393	壺形土器 土師器	A 10.8 B (4.8)	口頸部片。口頸部は「コ」の字状に立ち上がり，中位に段をつける。	内・外面－なで	スコリア・石英・砂粒 浅黄橙色 普通	30%
第82図 P394	壺形土器 土師器	B (5.6)	胴部は内傾し，口縁部は垂直ぎみに立ち上がる。頸部との境の外面に粘土紐を貼り付けている。	内・外面－ハケ目整形	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	20%
P395	壺形土器 土師器	A 10.5 B (11.3)	胴部は球形を呈すると思われ，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－ハケ目整形後なで 胴部内・外面－ハケ目整形	砂粒 灰白色 普通	20%
P396	壺形土器 土師器	A 16.7 B (5.9)	口頸部片。口頸部は「く」の字状に立ち上がり，中位で皿状に開く。上半で段をつくり，外傾して立つ。	内・外面－ハケ目整形後なで	砂粒・礫・スコリア 浅黄橙色 普通	10%
P397	壺形土器 土師器	A 33.2 B (8.0)	口縁部は外傾して立ち上がり，内面に凸帯をつけている。口縁部は平坦な面をもつ。	外面－ハケ目整形 内面－なで	砂粒 浅黄橙色 普通	7％
P398	塊形土器 土師器	B (5.5) C 2.5	底部は小さい上げ底。体部は内彎した後急激に丸味をもって立ち上がる。	外面－ハケ目整形後丁寧ななで 内面－ハケ目整形後なで	スコリア・石英・砂粒 橙色 普通	40%
P399	鉢形土器 土師器	A 18.3 B 6.0	底部は丸底であるが，中央がやや凹む。体部は器肉を減じながら内彎し，上半で外に開く。	内・外面－ハケ目整形後丁寧ななで	スコリア 赤色 普通	60%　器内外面朱彩
P400	坏形土器 土師器	A 10.2 B 4.5 C 4.4	底部は平底。体部は外傾して立ち上がる。	内・外面－なで	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	80%
P401	鉢形土器 土師器	B (5.2) C 3.0	底部は小さい上げ底。体部は器肉を減じながら内彎して立ち上がる。	外面－ハケ目整形後丁寧ななで 内面－なで	砂粒・スコリア・雲母 赤色 普通	60%
P402	坩形土器 土師器	A 11.6 B 10.5 C 5.5	底部は平底である。体部は扁平な球形を呈し，口縁部は外傾して立ち上がる。	内・外面－なで	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	45%
P403	坩形土器 土師器	A 16.8 B (8.8)	底部は丸底。体部は球形を呈し，口縁部との境内面に稜をもつ。口縁部は外傾して立ち上がる。	外面－ハケ目整形後丁寧ななで 内面－なで	スコリア・砂粒 淡橙色 良好	45%

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第82図 P404	坩形土器 土師器	A 16.0 B (7.0)	底部は丸底。体部は球形を呈し，口縁部との境で凹む。口縁部は外傾して立ち上がる。	外面－ハケ目整形後粗いヘラなで 内面－なで	砂粒・スコリア・礫 にぶい褐色 普通	40%
P405	坩形土器 土師器	A 9.4 B (5.2)	底部は丸底であるが，中央がやや凹む。体部は内彎し，口縁部は外傾する。	内・外面－ハケ目整形後なで	砂粒・石英 赤橙色 普通	75%
第83図 P406	高坏形土器 土師器	A 23.0 B (6.8)	坏部は大きく外傾して立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後なで	スコリア・石英・砂粒 橙色 普通	20%
P407	高坏形土器 土師器	B (8.6) D 13.5	脚部上半は柱状に立ち，下半はラッパ状に下方に開く。脚部に3孔を穿つ。	外面－丁寧なで 内面－ハケ目整形後なで	砂粒 橙色 普通	55%
P408	高坏形土器 土師器	B (8.4) D 12.0	脚部は上半で「ハ」の字状に，下半でラッパ状に下方に開く。脚部に3孔を穿つ。	外面－縦のハケ目整形後なで 内面－横のハケ目整形	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	50%
P409	高坏形土器 土師器	B (6.3) D 12.3	脚部はラッパ状に下方に開き，裾部はやや上方に上がる。脚部に6孔を穿つ。	内・外面－粗いヘラなで	スコリア・石英・砂粒 浅黄橙色 普通	60%
P410	器台形土器 土師器	B (7.5) D 10.0 孔径 2.1	脚部は「ハ」の字状に下方に開き，脚端部は平坦な面をもつ。中央に単孔を穿つ。	内・外面－ハケ目整形後粗いなで	砂粒・石英 にぶい褐色 普通	70%
P411	器台形土器 土師器	A 8.8 B (3.2) 孔径 1.7	受部は皿状に水平に開き，口縁部との境に稜をもち，後垂直に立ち上がる。受部中央に単孔を穿つ。	内・外面－なで	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	40%　器内外面朱彩
P412	器台形土器 土師器	B (6.6) D 10.7 孔径 0.8	脚部はラッパ状に下方に開き，裾部は少し水平に開く。受部中央に単孔を，脚部に3孔を穿っている。	外面－ハケ目整形後丁寧なヘラなで 内面－ハケ目整形後なで	砂粒 にぶい赤褐色 普通	40%
第81図 P38	甕形土器 土師器	A 12.4 B 14.7 C 4.6	底部は平底。胴部は球形を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形 胴部内面－なで	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	85%
第83図 P413	ミニチュア土器 土師器	A 5.2 B 2.6 C 2.5	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	内・外面－なで	雲母・砂粒 にぶい褐色 普通	70%
P414	坏形土器 須恵器	基部径10.3 受部径13.2 立上高 1.7	底部は丸底で，体部は内彎する。受部との境に突出した稜をもち，立ち上がりは内傾し，端部は丸い。	口縁部内・外面－ロクロなで 体部外面－回転ヘラけずり 底部内面－アテ具痕	砂粒・細砂 黄灰色 普通	90%　体部外面火襷，底部外面ヘラ書き文字「×」

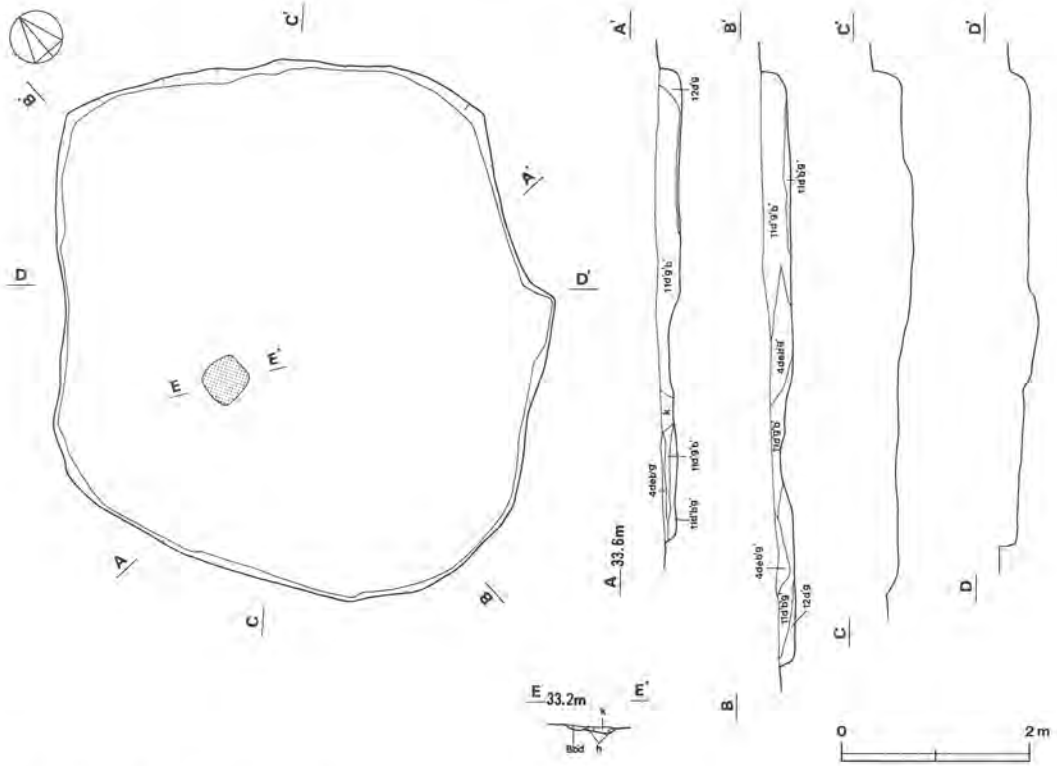
(P413) が出土している。破片で出土し，東側から多く出土している。また，東側コーナー部の床面から甕形土器 (P38)，器台形土器 (P410) が破片で出土している。上層から出土した坩形土器は和泉式に比定され，須恵器坏形土器は古墳時代の5世紀末のもので，投棄されたものと考えられるが，他はすべて五領式に比定される。

第46号住居跡（第84図）

本跡は，遺跡南部のE1e$_7$区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の西約6.6mに位置している。

平面形は，長軸4.8m・短軸4.6mの方形で，長軸方向はN－45°－Eである。壁はソフトロームで，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は10～30cmである。床はソフトロームで，やや起伏がある。床面は硬く，よく踏み固められている。炉は中央に検出され，径40cmの円形で，床を9cm掘り凹めた地床炉である。炉床はあまり焼けていない。柱穴は検出されない。

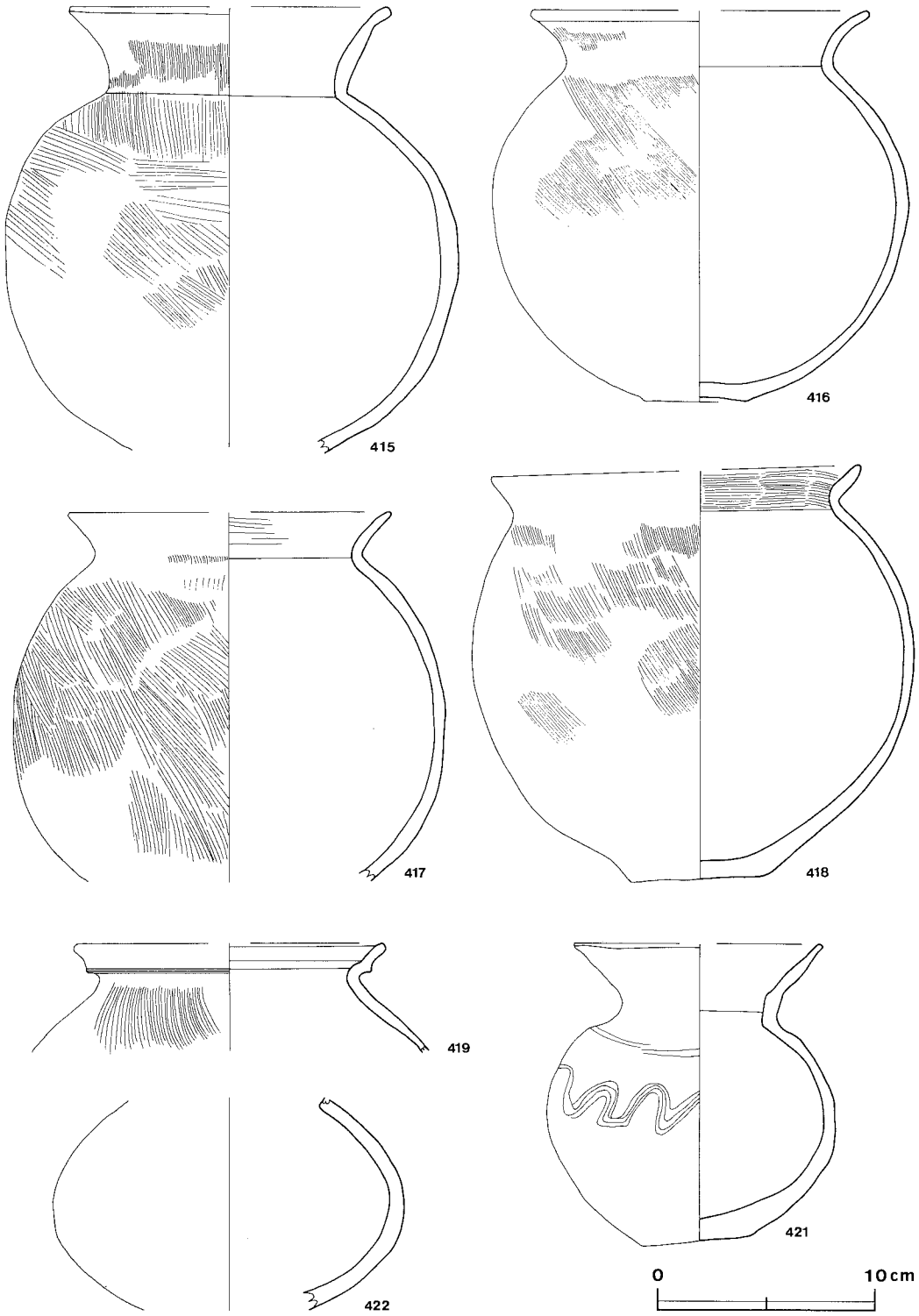
覆土は4層からなり，主に黒褐色土，褐色土が堆積している。中央は攪乱されているが，他は



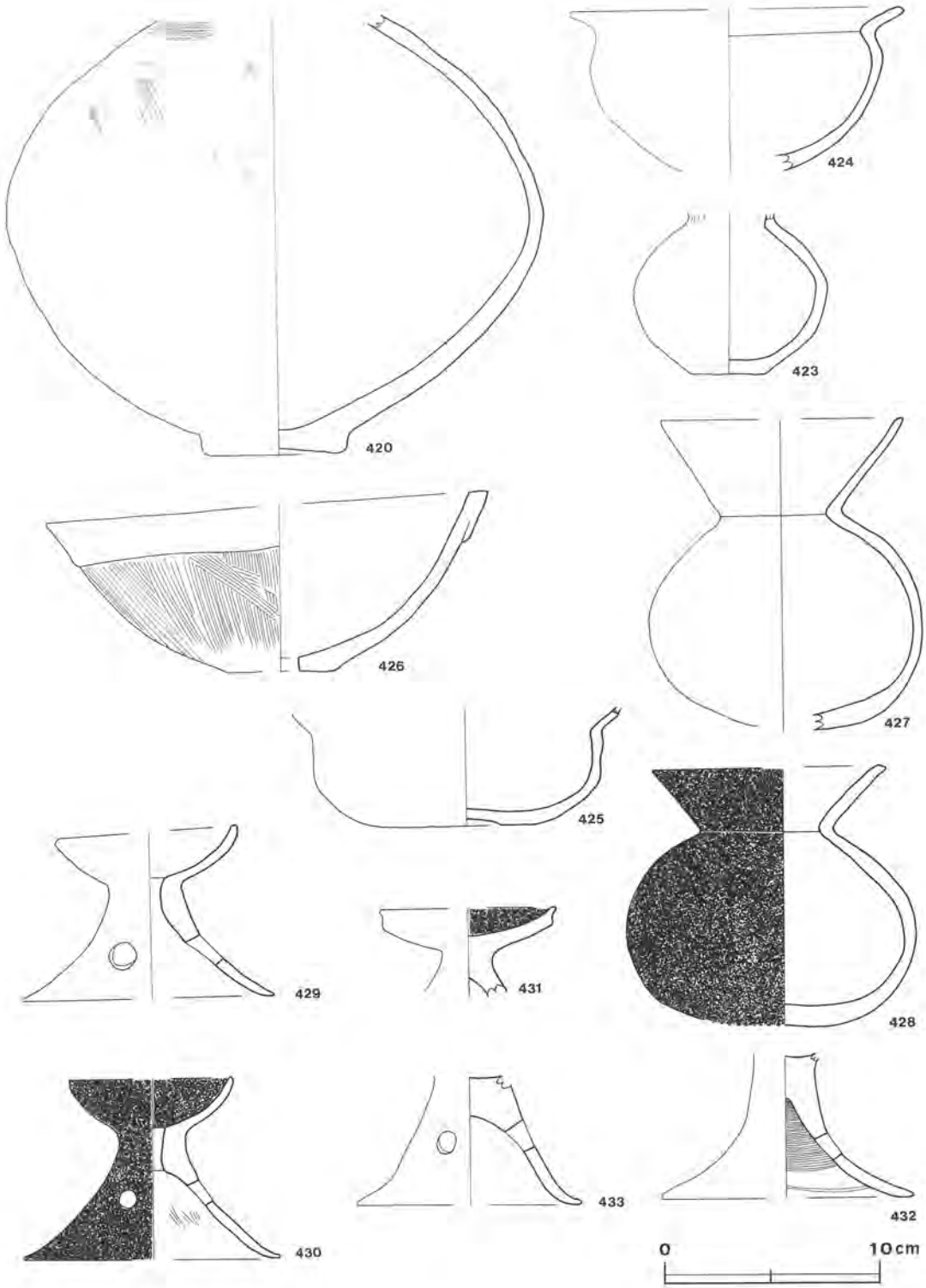
第84図　第46号住居跡実測図

第46号住居跡出土遺物観察表

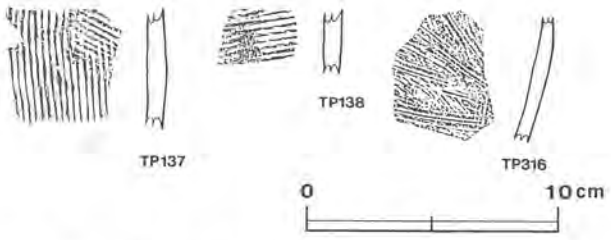
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第85図 P415	甕形土器 土師器	A 14.6 B (20.5)	胴部は球形を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がり，口唇部は角度を変えて外傾する。	外面－ハケ目整形 口縁部内面－ハケ目整形後なで	砂粒・礫 灰褐色 普通	70%
P416	甕形土器 土師器	A 15.2 B 17.8 C 4.6	底部は小さく上げ底。胴部は球形を呈し，口頸部は外彎しながら「コ」の字状に近い立ち上がりをする。	内・外面－ハケ目整形後なで	砂粒・石英 橙色 普通	35%



第85図　第46号住居跡出土遺物実測図（1）



第86図　第46号住居跡出土遺物実測図（2）



第87図　第46号住居跡出土遺物拓影図

自然堆積である。全層とも焼土粒子・炭化粒子を含んでいる。上層は締まっている。

遺物は，覆土中層から台付甕形土器（P419），壺形土器（P421），坩形土器（P422・P428），

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第85図 P417	甕形土器 土師器	A 14.6 B(17.0)	胴部は球形を呈し，口頸部は短く「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形後なで 胴部内面－なで	砂粒・石英 明褐灰色 普通	35%
P418	甕形土器 土師器	A 16.8 B 18.8 C 6.3	底部は突出する平底。胴部は球形を呈する。口頸部は器肉を厚くして「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内面・胴部外面－ハケ目整形 口縁部外面－ハケ目整形後なで	礫・スコリア 浅黄橙色 普通	50%
P419	台付甕形土器 土師器	A 14.3 B (5.0)	胴部は内傾し，口縁部の下位で稜をもつ。口頸部は短い「S」字状口縁。	胴部外面－ハケ目整形 口縁部外面・内面－なで	スコリア 褐灰色 普通	5%
第86図 P420	壺形土器 土師器	B(20.4) C 6.6	底部は突出する平底で，胴部は器肉を減じながら，扁平な球形を呈する。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂粒・石英 外－にぶい橙色 内－黒褐色 普通	70%
第85図 P421	壺形土器 土師器	A 10.6 B 13.6 C 4.9	底部は平底。胴部は球形を呈する。口縁部は垂直になり，後外傾して立ち上がる。口縁端部は平坦な面をもつ。	内・外面－ハケ目整形後なで	砂粒・石英・スコリア にぶい褐色 普通	40% 胴部中位に櫛波状沈線による波形文を付ける。
P422	坩形土器 土師器	B (9.8)	体部は扁平な球形を呈する。	外面－丁寧なヘラなで 内面－ハケ目整形後なで	砂粒・石英 橙色 普通	35%
第86図 P423	坩形土器 土師器	B (7.6) C 3.8	底部は平底。体部は球形を呈するがやや扁平である。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂粒 にぶい橙色 普通	40%
P424	鉢形土器 土師器	A 15.6 B 7.6	体部は内彎し，頸部で内傾する。口頸部は鋭角な「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－丁寧なヘラなで	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	60%
P425	鉢形土器 土師器	A 15.3 B 5.5 C 3.1	底部は丸底であるが，中央が小さく凹む。体部は皿状に開き，内彎した後垂直に立ち上がり，口縁部に至る。	内・外面－丁寧なヘラなで	石英・砂粒 暗赤褐色 普通	40%
P426	甑形土器 土師器	A 20.7 B 7.9 C 4.8 孔径 1.8	浅鉢形の甑。底部は平底で，体部は大きく外傾して開く。口縁部上半は折り返され複合口縁とし，口縁端部は平坦な面をもつ。	外面－ハケ目整形後粗いなで 内面－丁寧ななで	砂粒・石英・礫 にぶい橙色 普通	90%
P427	坩形土器 土師器	A 11.2 B(14.5)	体部は球形を呈し，口頸部は鋭角な「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後丁寧なで	砂粒・雲母 橙色 普通	75%
P428	坩形土器 土師器	A 10.5 B 12.0 C 4.0	底部は小さい平底。体部は扁平な球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－なで	砂粒 赤色 普通	70% 外面朱彩
P429	器台形土器 土師器	A 8.1 B 8.1 D 11.2	脚部はラッパ状に下方に開き，受部は外傾して立ち上がる。受部中央に単孔，脚部に3孔を穿つ。	内・外面－なで	石英・砂粒 にぶい橙色 普通	85%

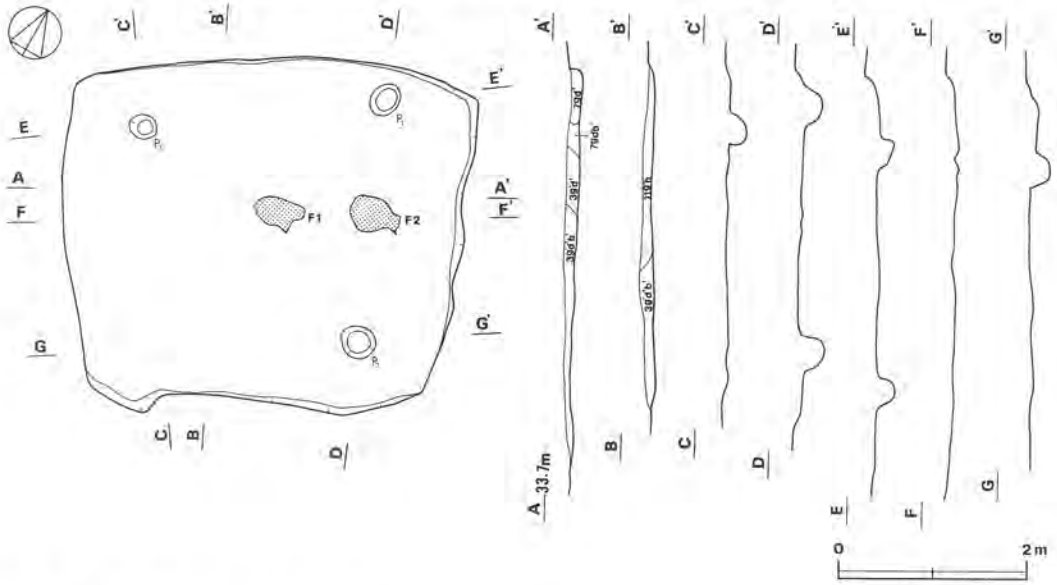
鉢形土器（P424・P425），器台形土器（P431）が出土している。覆土下層から甕形土器（P415～P418），壺形土器（P420），甑形土器（P426），坩形土器（P423・P427），器台形土器（P429・P430・P432・P433）がすべて破片で出土し，中央の炉の南側に集中している。すべて古墳時代の五領式に比定される。

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 P430	器台形土器 土師器	A 7.5 B 8.6 D 11.8	脚部はラッパ状に下方に開き，裾部は水平に開く。受部は外傾して立ち上がる。脚部に3孔を穿つ。	外面・受部内面－丁寧ななで 脚部内面－なで	スコリア・雲母・砂粒 赤色 普通	75% 外面・受部内面朱彩
P431	器台形土器 土師器	A 8.3 B (4.2)	受部は皿状に開き，口縁部との境に稜をつくり，口縁部は垂直に立ち上がる。	外面－なで 受部内面－丁寧ななで	砂粒・石英 橙色 普通	30% 受部内面朱彩
P432	器台形土器 土師器	B (6.8) D 11.0	脚部はラッパ状に下方に開く。脚部に3孔を穿つ。	外面－なで 内面－ハケ目整形後なで	砂粒 にぶい赤褐色 普通	60%
P433	器台形土器 土師器	B (6.0) D 10.0	脚部はラッパ状に下方に開く。脚部に3孔を穿つ。	外面－丁寧ななで 内面－なで	石英・砂粒 にぶい橙色 普通	60%

第47号住居跡（第88図）

本跡は，遺跡南部のE1c$_6$区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の西約10mに位置している。

平面形は，長軸4.3m・短軸3.9mの隅丸長方形で，長軸方向はN－61°－Eである。壁はソフトロームで床面から外傾して立ち上がっている。壁高は東側で17cmである。西側は削平のため，壁高は低くなっている。床はソフトロームで，平坦である。床面は中央の，炉の周辺が踏み固めら



第88図　第47号住居跡実測図

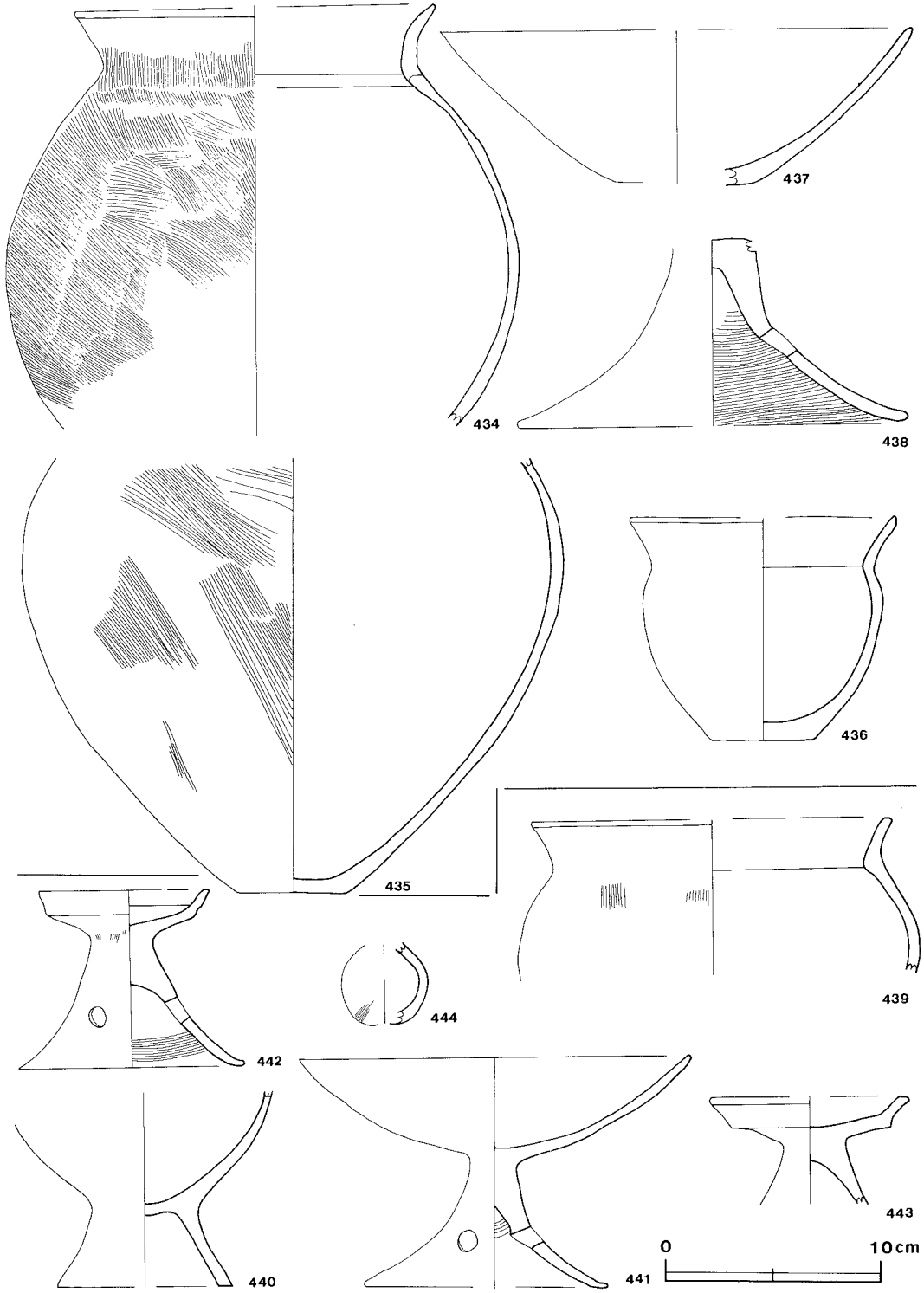
れている。炉は2か所検出され，中央のF1は長径54cm・短径28cmの不整楕円形，東側のF2は，長径54cm・短径38cmの不整楕円形である。両者とも床を3cm・5cm掘り凹めた地床炉である。両炉とも炉床はよく焼け，赤くレンガ状に硬化している。F1とF2の間は48cmと接近しているので同時使用とは考えられないが新旧関係は不明である。柱穴はP_1～P_3の3か所で，規模は，径30～38cm・深さ20～25cmである。P_1～P_2，P_2～P_3間は2.6mと等間隔である。

覆土は5層からなり，主に暗褐色土，黒褐色土，褐色土が自然堆積している。全層とも炭化粒子を含み，締まっている。

遺物は，覆土下層の西側の壁際にかたまって甕形土器（P434・P435），小型甕形土器（P436），高坏形土器（P437），器台形土器（P438）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。

第47・48号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第89図 P434	甕形土器 土師器	A 16.8 B(19.8)	胴部は球形を呈し，口頸部はゆるく「コ」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面・胴部外面－ハケ目整形 胴部内面－なで	砂粒・スコリア 明褐灰色 普通	30%
P435	甕形土器 土師器	B(20.3) C 4.8	底部は小さく平底。胴部は長胴を呈すると思われ，上位に最大径をもつ。	内・外面－ハケ目整形後なで	粘土粒・砂粒 灰褐色 普通	40%
P436	小型甕形土器 土師器	A 12.4 B 10.4 C 4.1	底部は平底。胴部は内彎し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面－粗いなで 内面－なで	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	30%
P437	高坏形土器 土師器	A 21.7 B (7.2)	坏部は外傾して外上方に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－丁寧なで	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	50%
P438	器台形土器 土師器	B (8.8) D 18.0	脚部はラッパ状に下方に開く。 脚部に4孔を穿つ。	外面－縦のなで 内面－ハケ目整形後なで	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	55%
P439	甕形土器 土師器	A 16.8 B (7.3)	胴部は球形を呈すると思われ，口頸部は短く「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂粒・スコリア・粘土粒 灰褐色 普通	15% 外面煤付着
P440	台付甕形土器 土師器	B (9.1) D 8.2	台部は「ハ」の字状に下方に開き，脚端部は平坦な面をもつ。胴部は内彎して立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後なで	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	20%
P441	高坏形土器 土師器	A 18.1 B 10.7 D 11.4	脚部はラッパ状に下方に開く。坏部は大きく内彎して立ち上がる。脚部に3孔を穿つ。	外面－なで 坏部内面－丁寧なで 脚部内面－ハケ目整形後なで	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	95%
P442	器台形土器 土師器	A 7.7 B 8.3 D 10.2	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は皿状に開き，口縁部との境に稜をつくり，口縁部は外傾して立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後なで	パミス・砂粒 にぶい赤褐色 普通	95%



第89図　第47・48号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第89図 P443	器台形土器 土師器	A 9.4 B (5.0)	受部は皿状に開き，口縁部との境に稜をつくり，口縁部は外傾して立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－丁寧ななで	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	70%
 P444	手づくね土器 土師器	B (3.7)	胴部は扁平な球形を呈する。	胴部外面下半－ハケ目整形後なで 上半・内面－なで	砂粒 上部－にぶい黄橙色 下部－灰白色 普通	40%

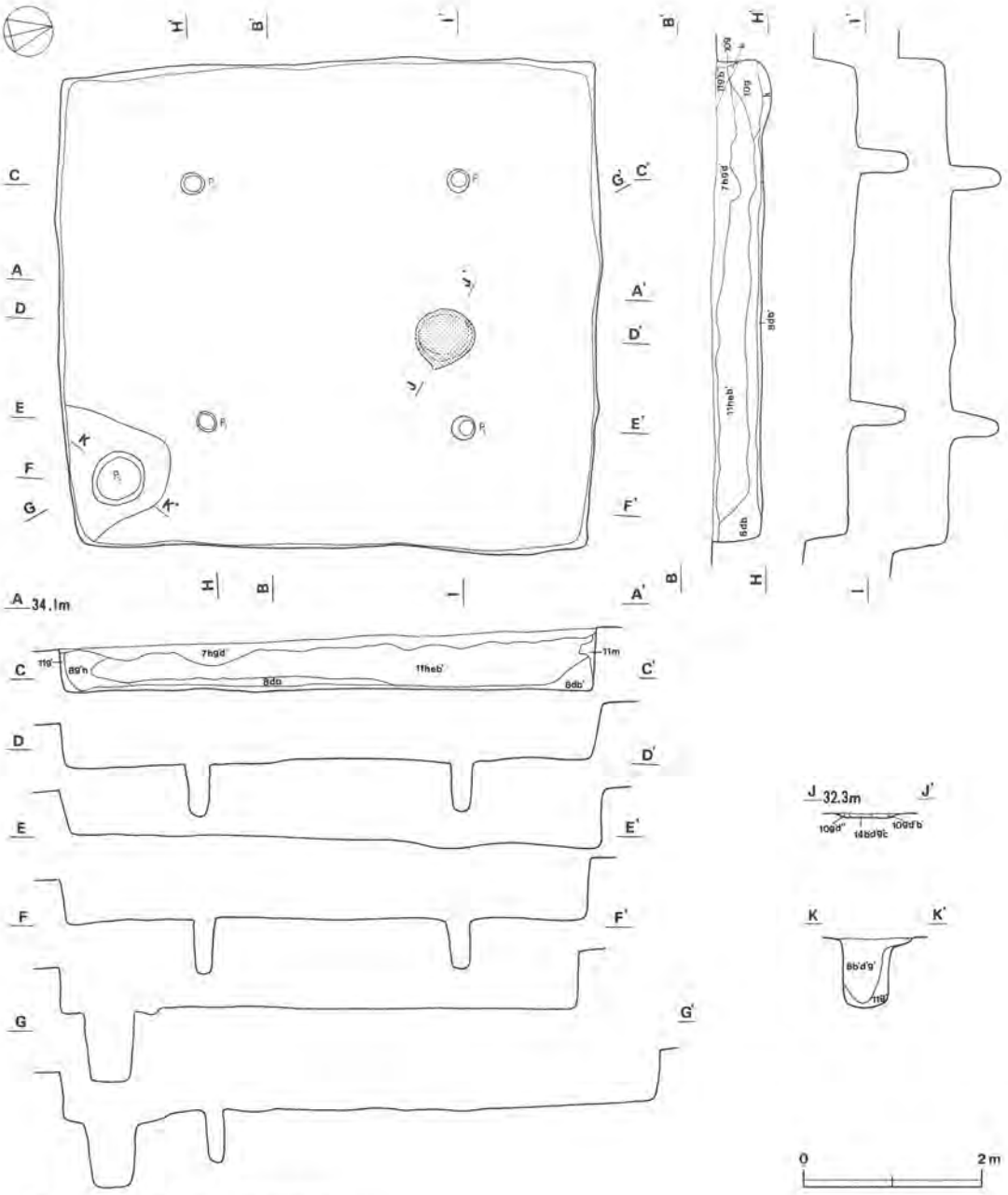
第48号住居跡（第90図）

本跡は，遺跡南部のE1b$_7$区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の北西約13mに位置している。

平面形は，長軸6.1m・短軸5.6mの方形で，長軸方向はN－16°－Eである。壁は上部がソフトローム，下部がハードロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は48～65cmである。床はハードロームで平坦であり，床面はどの部分もよく踏み固められている。炉は北側に検出され，長径70cm・短径62cmの楕円形で，床面を4cm皿状に掘り凹めている。炉床はよく焼け，レンガ状に硬化している。柱穴はP$_1$～P$_4$の4か所で，規模は，径24～30cm・深さ56～61cmである。各コーナー部に検出され，柱穴間は2.8mと等間隔である。P$_5$は貯蔵穴と考えられ，長径66cm・短径54cmで床を76cm「U」形に掘りこんで構築されている。貯蔵穴の覆土は1層が暗褐色土，2層が褐色土で，2層とも締まりが弱い。

覆土は12層からなり，主に暗褐色土，褐色土が自然堆積している。上層は締まっているが，下層は締まりが弱い。中層は焼土粒子・炭化粒子を含んでいる。

遺物は，中央の覆土下層から横位で器台形土器（P442）が出土したほか，破片が一面に散在したかたちで甕形土器（P439），台付甕形土器（P440），器台形土器（P443），手づくね土器（P444）が出土している。また，北西側コーナー部の床面から高坏形土器（P441）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。



第90図　第48号住居跡実測図

第49号住居跡（第91図）

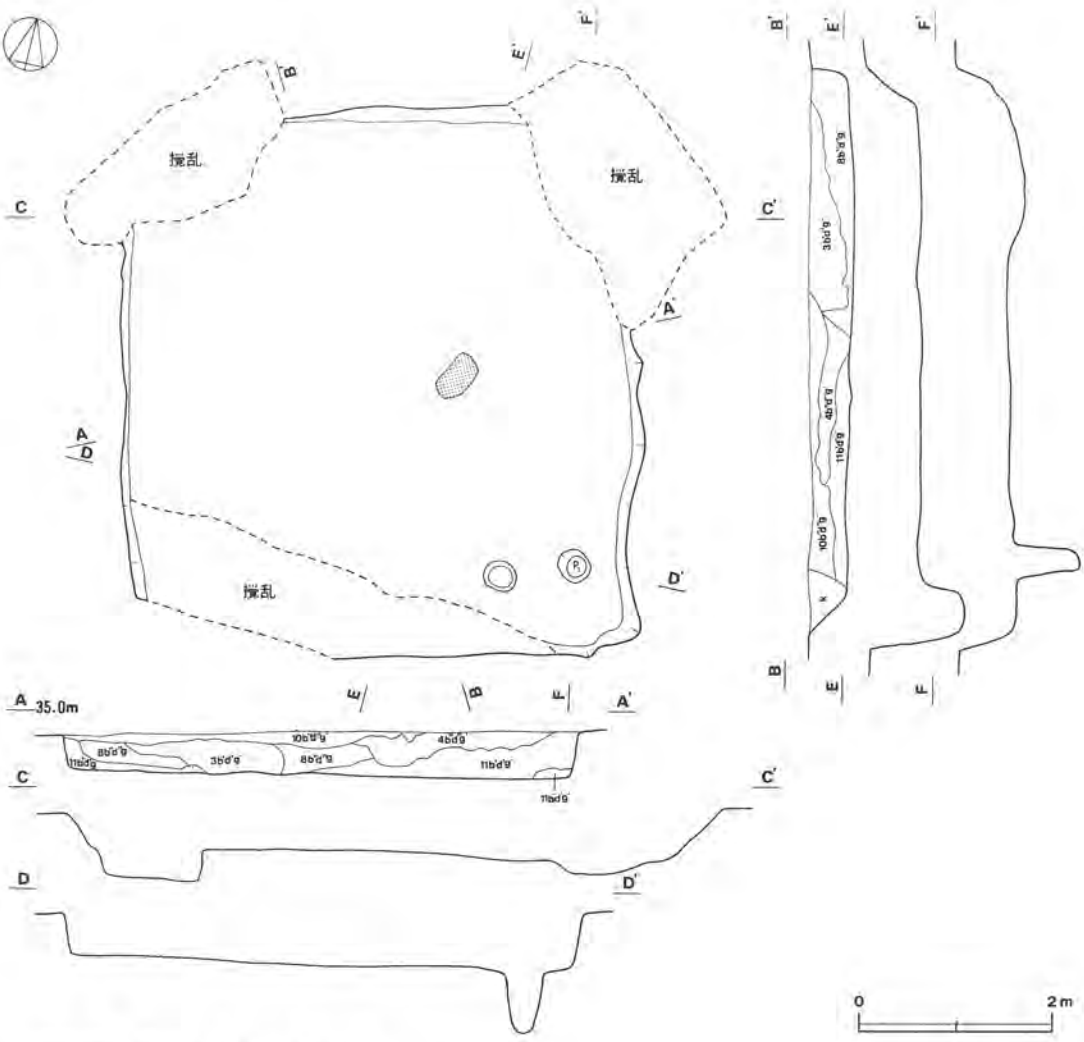
本跡は，遺跡中央のC2h₂区を中心に確認されたもので，第35号住居跡の北東約18.6mに位置している。北東・北西・南西側が撹乱のため，壁・床の一部が不明である。

平面形は，長軸5.8m・短軸5.4mの方形で，長軸方向はN－16°－Wである。壁は上部がソフトローム，下部がハードロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は44～60cmである。床は

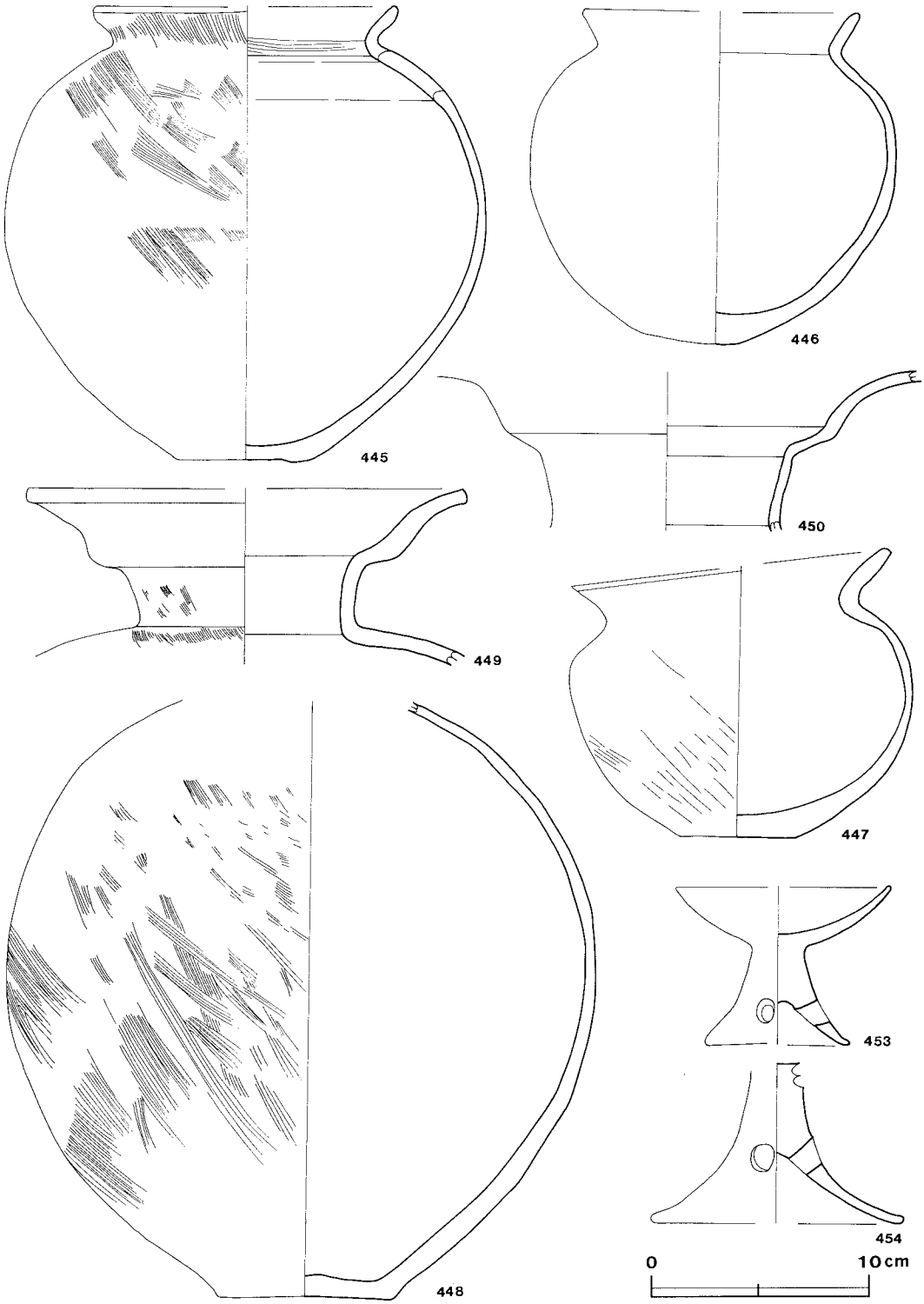
ハードロームで，やや起伏がある。床面はよく踏み固められている。炉は中央に検出され，長径52cm・短径28cmの楕円形で，床を2cm掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼け，赤くレンガ状に硬化している。柱穴は南東側のP_1の1か所で，規模は径33cm・深さ65cmである。他の柱穴は撹乱を受けて削平されたものと考えられる。

覆土は6層からなり，主に褐色土，黒褐色土，暗褐色土が堆積しており，撹乱部分を除いて自然堆積である。どの層も焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を含み，締まっている。

遺物は，中央の覆土下層から破片で甕形土器(P445・P446)，北側の覆土下層からかたまって壺形土器(P448～P451)，台付甕形土器(P452)，器台形土器(P454・P455)，ミニチュア土器(P456)

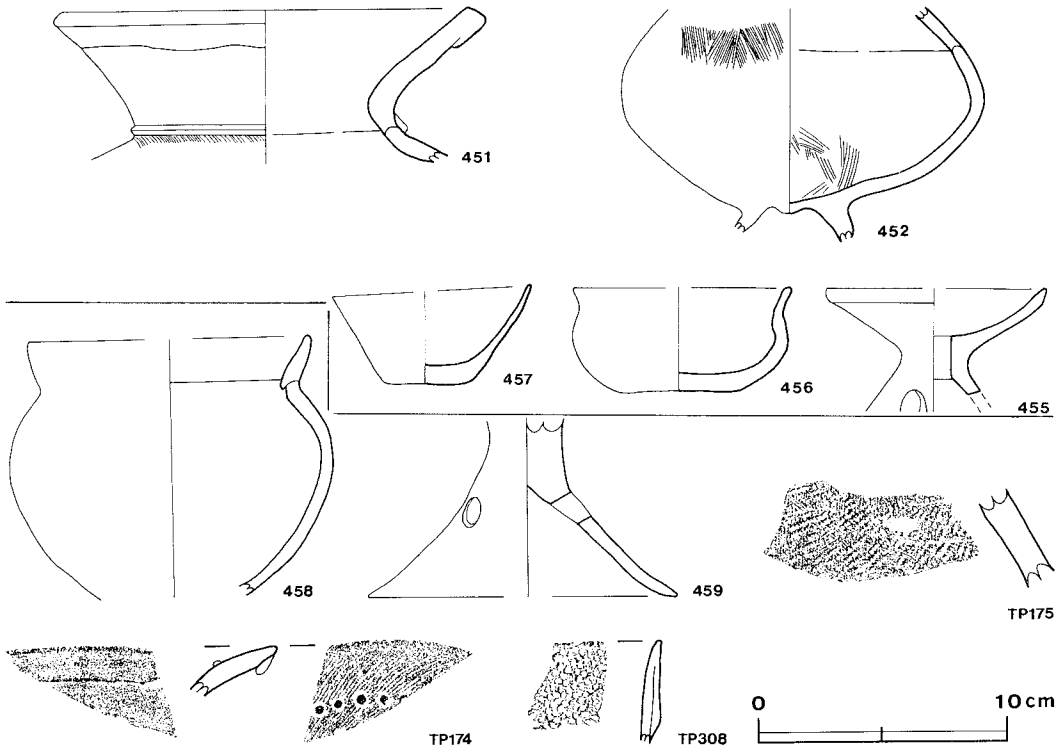


第91図　第49号住居跡実測図



第92図　第49号住居跡出土遺物実測図（1）

が破片で出土している。また，北側の床面から横位で器台形土器（P453）が，中央の床面から破片で小型甕形土器（P447），ミニチュア土器（P457）が出土している。すべて古墳時代の五領式に比定される。



第93図　第49・50号住居跡出土遺物実測図・拓影図（2）

第49号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第92図 P445	甕形土器 土師器	A 13.7 B 21.0 C 6.4	底部は平底。胴部は器肉を減じながら球形を呈し，口頸部は短く「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形 胴部内面－なで	スコリア・石英・砂粒 にぶい褐色 普通	50%
P446	甕形土器 土師器	A(12.5) B 15.5 C 4.7	底部は小さい平底。胴部は球形を呈し，口頸部は短く「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	石英 褐色 普通	55%
P447	小型甕形土器 土師器	A 14.7 B 12.6 C 4.9	底部は平底。胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形後なで 胴部内面－なで	砂粒・スコリア・礫 にぶい橙色 普通	80%
P448	壺形土器 土師器	B(27.6) C 8.1	底部は平底で，胴部は器肉を減じながらやや長胴化する。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	80%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第92図 P449	壺形土器 土師器	A(20.1) B (8.2)	口頸部片。口縁部は垂直に立ち上がり，後皿状に開き，さらに外傾する。パレススタイル。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	30%
P450	壺形土器 土師器	B (7.5)	口縁部は垂直に立ち上がり，後皿状に開き，さらに外傾する。パレススタイル。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	礫・砂粒・石英 橙色 普通	25%
第93図 P451	壺形土器 土師器	A 16.3 B (6.2)	口頸部は大きく「く」の字状に立ち上がる。口縁端部で折り返し複合口縁となる。端部は平坦な面をもつ。	外面－ハケ目整形後なで，頸部との境に凸帯 内面－なで	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	20%
P452	台付甕形土器 土師器	B (9.5)	台部は「ハ」の字状に開くと思われ，胴部は扁平な球形を呈する。	内・外面－ハケ目整形後なで	礫・砂粒・石英 にぶい褐色 普通	60%
第92図 P453	器台形土器 土師器	A 9.7 B 7.3 D 6.5	脚部は小さくラッパ状に下方に開く。受部は外傾して立ち上がる。脚部に3孔を穿つ。	内・外面－丁寧なで	砂粒 橙色 普通	80%
P454	器台形土器 土師器	B (7.4) D 11.2	脚部はラッパ状に下方に開く。脚部に3孔を穿つ。	外面－丁寧なで 内面－なで	石英・砂粒 橙色 普通	55%
第93図 P455	器台形土器 土師器	A (8.8) B (5.0)	脚部はラッパ状に開くと思われ，受部は外傾した後口縁部との境に稜をつくり，口縁部は垂直に立ち上がる。	外面－なで	砂粒・スコリア 灰白色 普通	70%
P456	ミニチュア土器 土師器	A 8.5 B 4.2 C 4.8	底部は平底。体部は外彎し，口縁部との境でくびれる。口縁部は外傾して立ち上がる。	内・外面－なで	砂粒・礫・石英 橙色 普通	100%
P457	ミニチュア土器 土師器	A 8.0 B 3.8 C 3.2	底部は平底。体部は器肉を減じながら外傾して立ち上がる。	外面－粗いなで 内面－なで	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	98%

第50号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第93図 P458	小型甕形土器 土師器	A(11.1) B(10.4)	胴部は球形を呈し，口頸部は器肉を厚くし，短く「く」の字状に立ち上がる。	外面－丁寧なで 内面－なで	スコリア・石英 にぶい褐色 普通	30%
P459	器台形土器 土師器	B (7.2) D(12.1)	脚部はラッパ状に下方に開く。脚部に3孔を穿つ。	内・外面－なで	砂粒 浅黄橙色 普通	30%

TP308は壺形土器の口縁部片と思われ，斜行する粗い縄文を施している。弥生時代後期のものと判断される。

第50号住居跡（第94図）

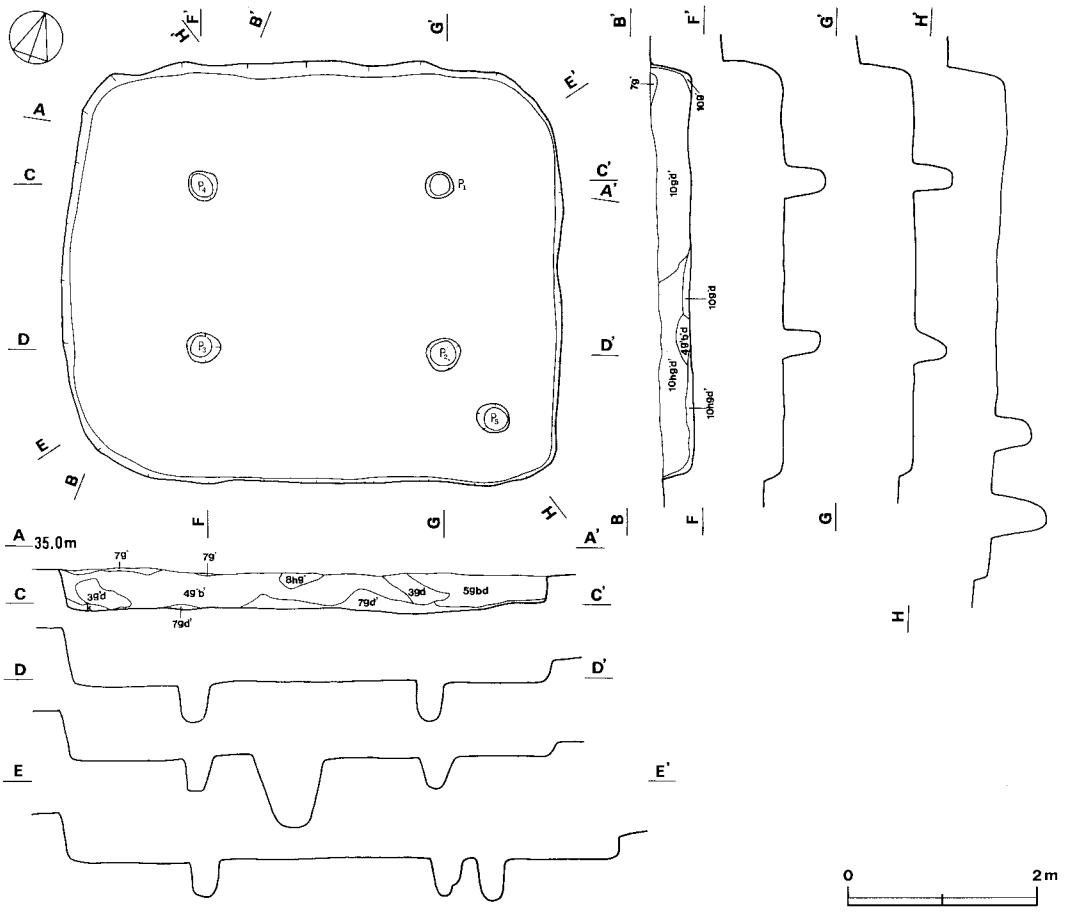
本跡は，遺跡南部のE1b$_9$区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の北西約8mに位置している。東・南側で第14号住居跡と，北東側で第15B号住居跡と重複している。新旧関係は，第14号住居跡の炉が本跡の覆土中に築かれていることから本跡が第14号住居跡よりも古く，本跡が第15B

号住居跡の床を切り，重複部分に第15B号住居跡の貼り床の跡がないことから，本跡が第15B号住居跡よりも新しいと考えられる。

平面形は，長軸5.3m・短軸4.5mの隅丸長方形で，長軸方向はN－70°－Eである。壁は重複のため，北・西側だけが残っており上部がソフトローム，下部がハードロームで，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は14～64cmである。床はハードロームで，やや起伏がある。床面はよく踏み固められている。炉は検出されない。柱穴はP_1～P_4の4か所で，規模は径30～36cm・深さ35～43cmである。各コーナー部に検出され，長方形に配列されている。P_5は支柱穴と考えられ，径36cm・深さ53cmで，P_2付近に検出されている。

覆土は18層からなり，主に暗褐色土，黒褐色土，褐色土が堆積している。上層は撹乱されているが，下層はローム粒子・ロームブロックを含み，自然堆積で，よく締まっている。

遺物は，覆土下層から北西側に散在して小型甕形土器（P458），器台形土器（P459）が出土している。古墳時代の五領式に比定される。

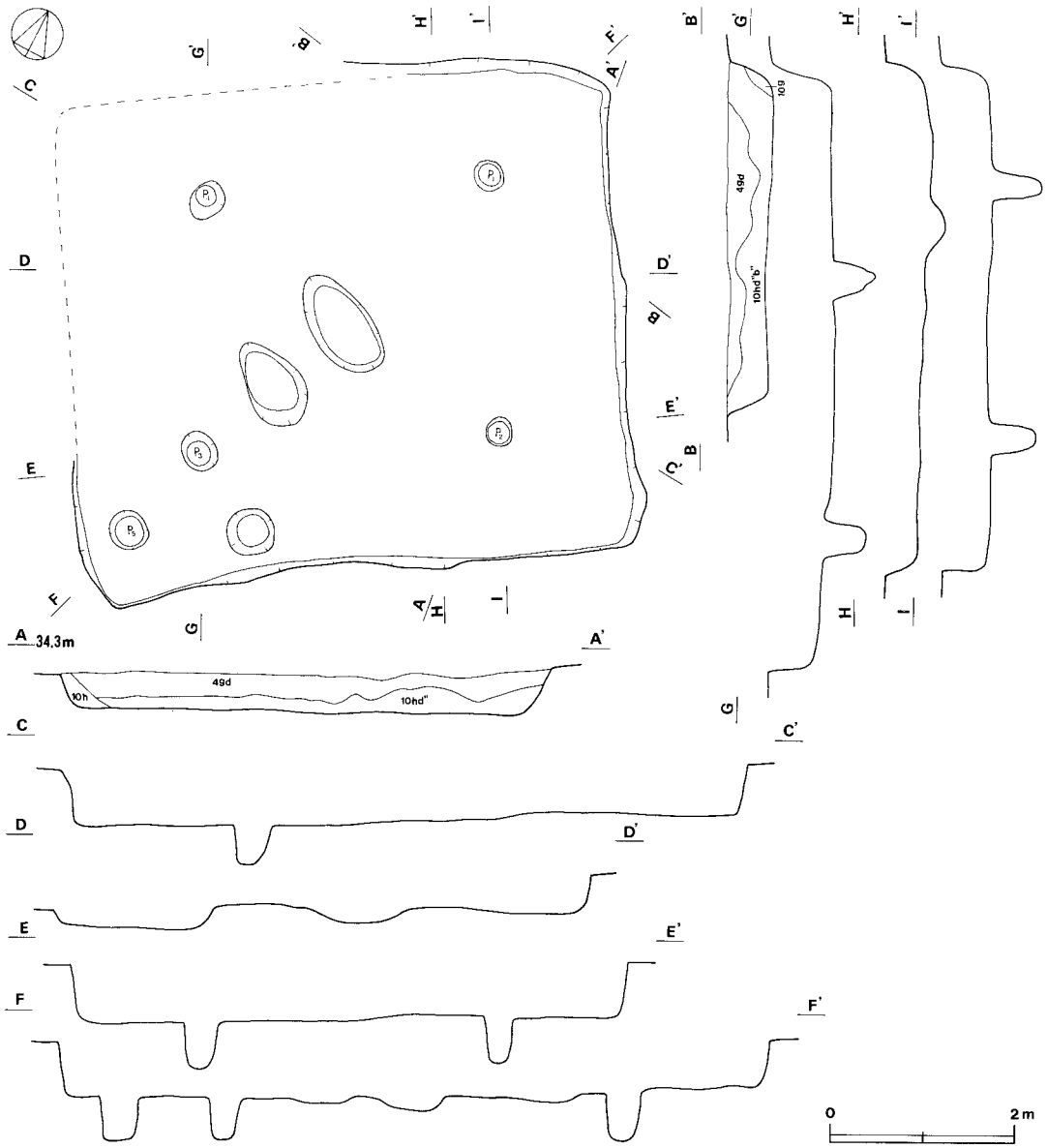


第94図　第50号住居跡実測図

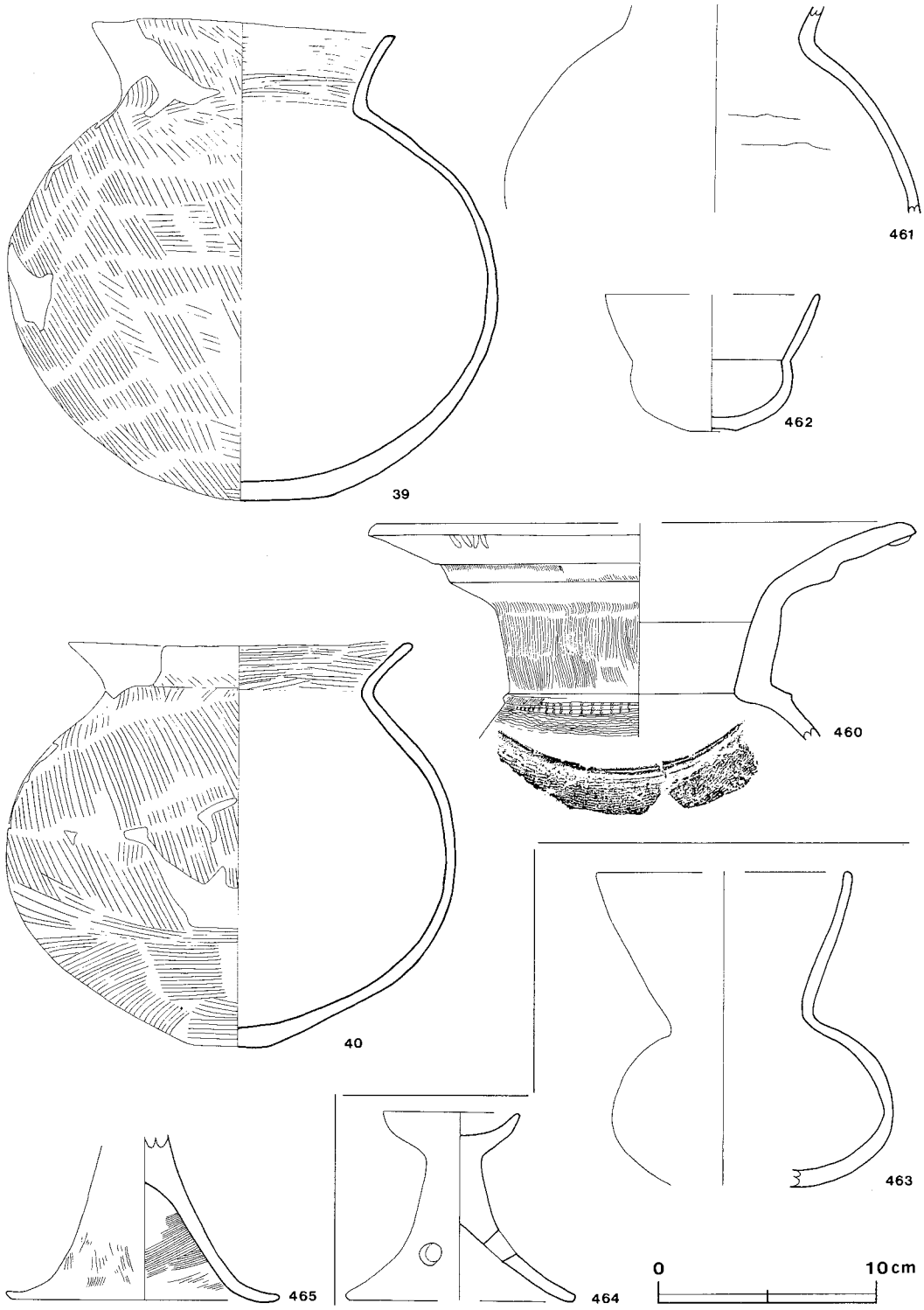
第51号住居跡（第95図）

本跡は，遺跡中央のD2j$_1$区を中心に確認されたもので，第11号住居跡の北約12mに位置している。西側で第16号住居跡と重複している。新旧関係は，本跡の床上に第16号住居跡の貼り床が確認されたので，本跡が第16号住居跡よりも古いと考えられる。

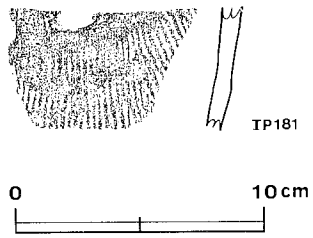
平面形は，長軸6.0m・短軸5.5mの隅丸方形で，長軸方向はN－57°－Eである。壁は西壁が消失しており，上部がソフトローム，下部がハードロームで，床面から垂直に立ち上がっている。



第95図　第51号住居跡実測図



第96図　第51・52・53号住居跡出土遺物実測図（1）



第97図　第51号住居跡出土遺物拓影図

壁高は22～50cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はどの部分もよく踏み固められている。炉は検出されない。主柱穴はP_1～P_4の4か所で，規模は径32～42cm・深さ35～57cmである。各コーナー部に検出され，柱穴間は約3mと等間隔である。P_5は支柱穴と考えられ，径44cm・深さ65cmで，P_3の近くに検出された。貯蔵穴は検出されない。

覆土は4層からなり，主に黒褐色土，褐色土が自然堆積している。全層ともローム粒子・ロームブロックを含み，締まっている。

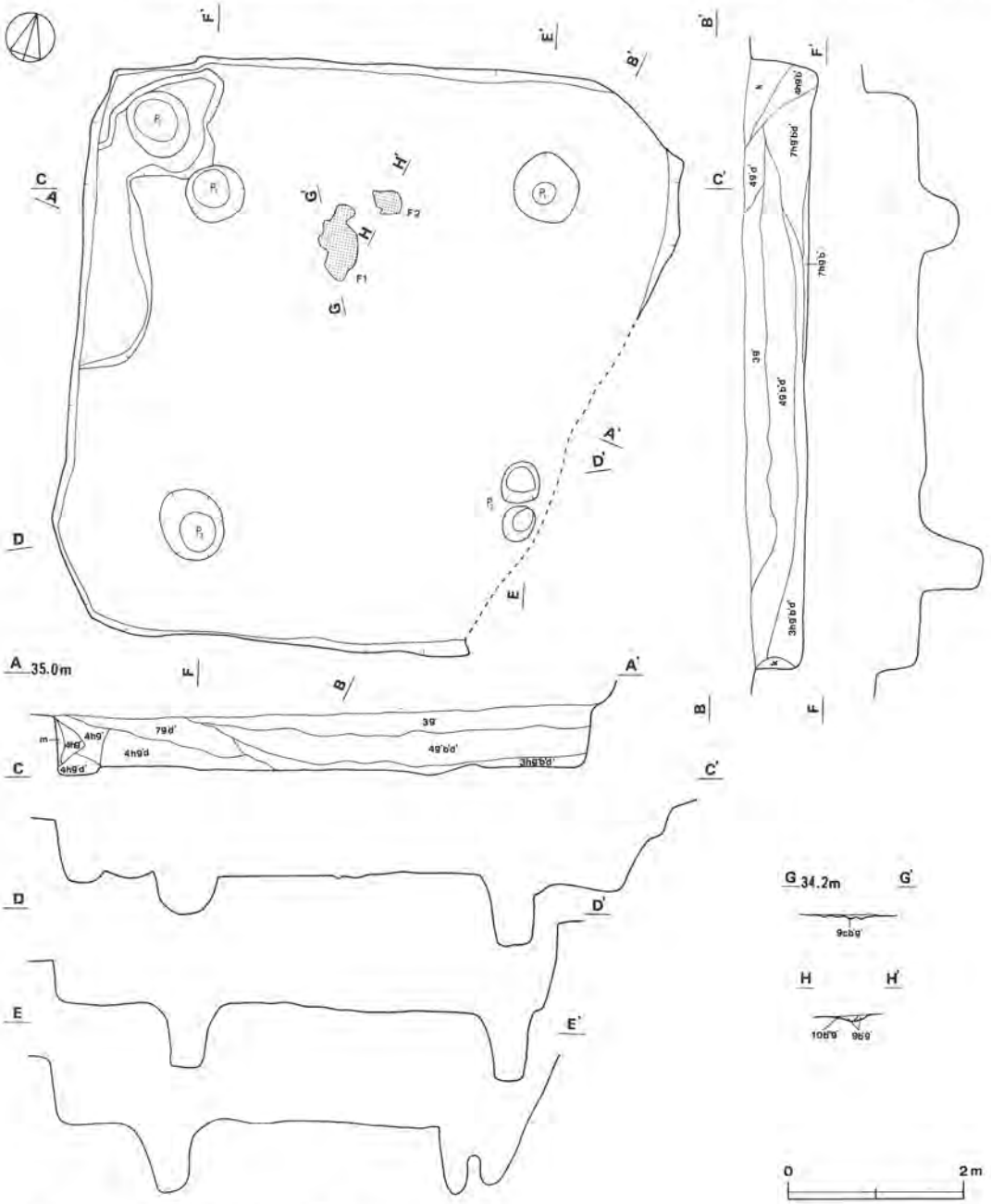
遺物は，北東側コーナー部の覆土下層から壺形土器（P460・P461），P_1近くの床面から坩形土器（P462），甕形土器（P39・P40）が破片で出土している。古墳時代の五領式に比定される。

第51・52・53号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 P39	甕形土器 土師器	A 13.7 B 22.7 C 4.6	底部は小さく平底。胴部は球形を呈する。口頸部は「く」の字状に立ち上がり，後外上方に長く外傾する。	外面・口縁部内面－ハケ目整形 胴部内面－なで	砂粒 黒褐色 良好	70%
P40	甕形土器 土師器	A 15.7 B 18.5 C 3.3	底部は小さく平底。胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形 胴部内面－なで	砂粒 黒褐色 良好	75%
P460	壺形土器 土師器	A(24.2) B(10.0)	頸部は内傾し，中位に稜をもつ。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり，中位で角度を変えて外傾する。	外面－ハケ目整形，口縁部上位に4本の棒状浮文，頸部に連簾文を付ける。 内面－なで	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	25%
P461	壺形土器 土師器	B (9.6)	胴部は球形を呈すると思われる。	内・外面－なで 頸部に連簾文を付ける。	砂粒・石英 浅黄橙色 普通	45%
P462	坩形土器 土師器	A 9.7 B 6.2 C 2.2	底部は小さく上げ底。体部は内彎し，口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部と体部は同じ長さである。	内・外面－なで	石英・砂粒 明赤褐色 普通	35%
P463	坩形土器 土師器	A(11.4) B(14.5)	体部は扁平な球形を呈し，口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部と体部は同じ長さである。	外面－丁寧な縦のなで 内面－なで	砂粒 にぶい褐色 普通	50%
P464	器台形土器 土師器	A 6.2 B 8.7 D(10.3)	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は外傾し，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立して立ち上がる。	外面－丁寧な縦のなで 受部内面－なで 脚部内面－ハケ目整形後なで	石英・砂粒 上部－橙色 下部－黒褐色 普通	98%
P465	高坏形土器 土師器	B (7.5) D(12.0)	脚部はラッパ状に下方に開き，裾部は水平に開いた後反転ぎみに上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－ハケ目整形	砂粒・礫 にぶい黄橙色 普通	40%

第52号住居跡（第98図）

本跡は，遺跡中央のD2a$_6$区を中心に確認されたもので，第49号住居跡の南東約14mに位置している。東側の一部はエリア外のため調査できなかった。また，北西側は撹乱を受けている。西側で第58号住居跡と，北東側で第１号堀と重複している。新旧関係は，本跡が第58号住居跡の床を切り，重複部分に第58号住居跡の貼り床の跡がないことから，本跡が第58号住居跡よりも新しく，



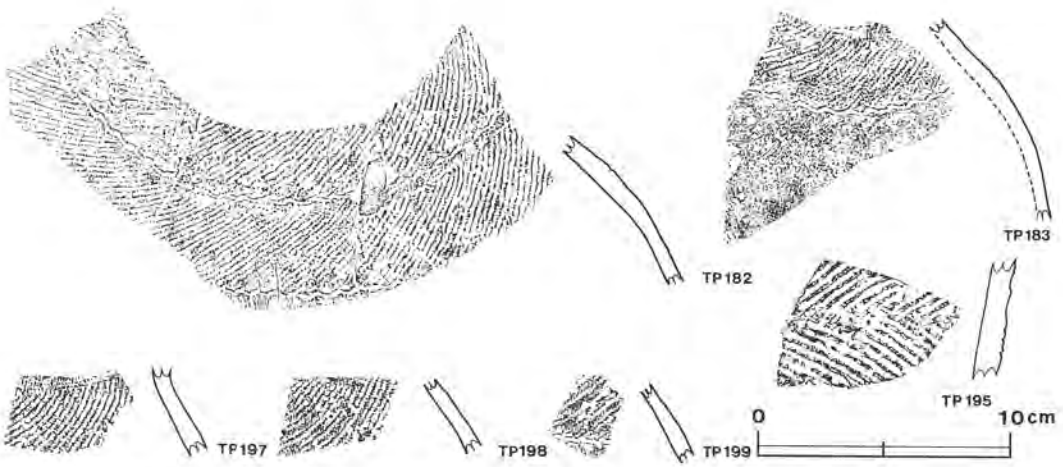
第98図　第52号住居跡実測図

土層堆積状況から本跡が第1号堀よりも古いと考えられる。

平面形は，長軸6.8m・短軸6.7mの隅丸方形と思われ，長軸方向はN－75°－Eを指すものと考えられる。壁は上部がソフトローム，下部がハードロームで，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は48～102cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はどの部分もよく踏み固められている。炉は北側に2か所検出された。F1は長径88cm・短径44cmの不整楕円形で，床を5cm掘り凹めている。F2は長径36cm・短径30cmの不整楕円形で，床を6cm掘り凹めている。どちらも地床炉で，炉床はよく焼けて硬化している。F1とF2の間は24cmと接近している。F1・F2とも断面は皿状である。柱穴はP_1～P_4の4か所で，規模は径66～84cm・深さ39～80cmである。各コーナー部に検出され，柱穴間は3.6mと等間隔である。P_5は貯蔵穴と考えられ，長径80cm・短径68cmの楕円形で，床を66cm掘りこんで構築されている。貯蔵穴の覆土は暗褐色土の1層で，よく締まっている。

覆土は16層からなり，主に黒褐色土，暗褐色土，明褐色土が堆積している。北西側が撹乱されているが他は自然堆積である。上層から中層にかけて焼土粒子・炭化粒子を含み，締まっている。下層はローム粒子・ロームブロックを含み，締まっている。

遺物は，覆土下層から破片が中央にややかたまって坩形土器（P463），器台形土器（P464）が出土している。古墳時代の五領式に比定される。



第99図　第52号住居跡出土遺物拓影図

TP182・183・199は単節縄文にS字状結節文が，TP195は付加条縄文で羽状縄文に施されている。いずれも壺形土器の頸部から胴部にかけての破片と思われる。

第57号住居跡（第100図）

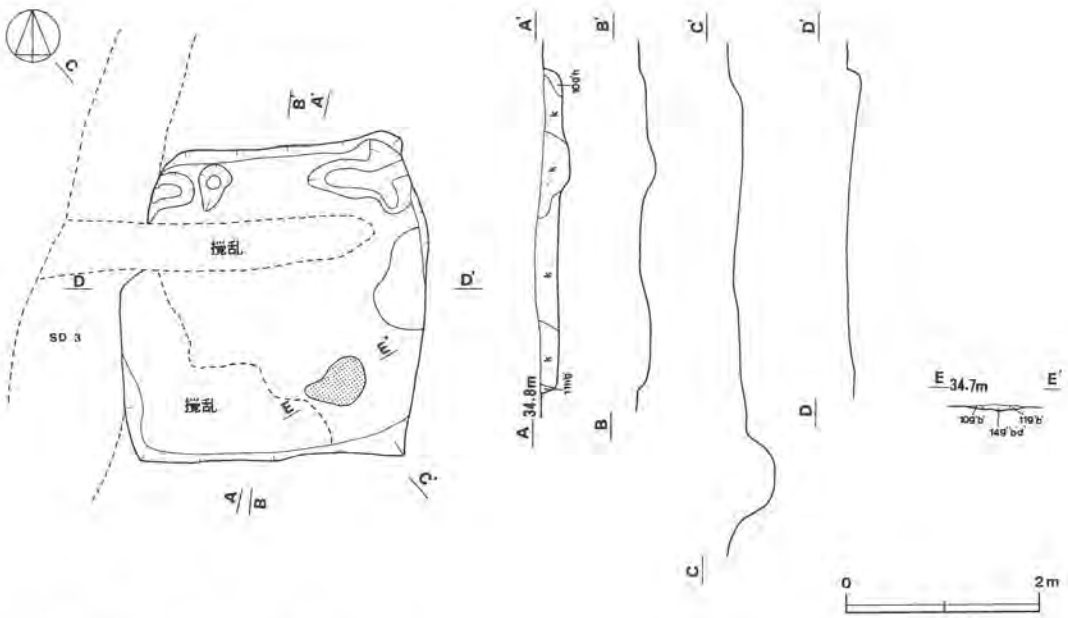
本跡は，遺跡中央のC2h_7区を中心に確認されたもので，第49号住居跡の東約16mに位置してい

る。西側で第３号溝と重複している。新旧関係は，本跡の床が第３号溝に切られ，重複部分に本跡の貼り床の跡がないことから，本跡が第３号溝よりも古いと考えられる。東側の一部はエリア外のため調査できなかった。

平面形は，長軸3.4m・短軸3.2mの方形と思われ，長軸方向はＮ－３°－Ｗを指すものと考えられる。壁は西側が消失しているが残存壁はソフトロームで床面から外傾して立ち上がっている。壁高は９～18cmである。床はハードロームで，重複や撹乱のため起伏がある。床面は中央が踏み固められている。炉は南東コーナー部に検出され，長径64cm・短径44cmの不整楕円形で，床を５cm皿状に掘り凹めた地床炉である。炉床はあまり焼けていない。炉の覆土は１層で，にぶい赤褐色土である。柱穴は検出されていない。

覆土は６層からなり，主に黒褐色土，褐色土が堆積している。大部分が撹乱を受けている。全層ともローム粒子・ロームブロックを含んでいる。

遺物は，南側の床面から破片で高坏形土器（P472），装飾器台形土器（P473）が出土している。２点とも古墳時代の五領式に比定される。



第100図　第57号住居跡実測図

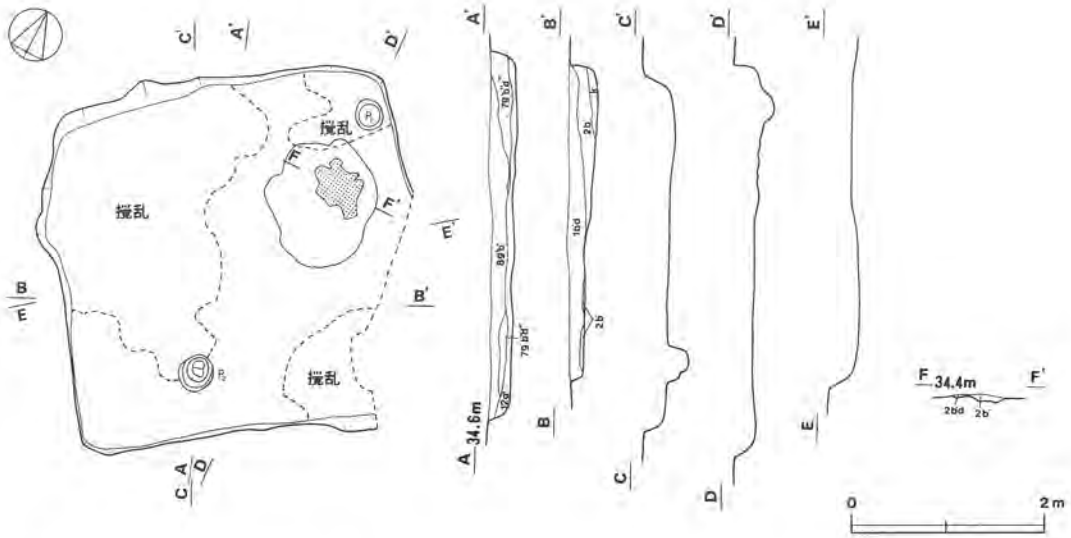
第58号住居跡（第101図）

本跡は，遺跡中央のD2b$_5$区を中心に確認されたもので，第49号住居跡の南東約14mに位置している。東側で第52号住居跡と重複している。新旧関係は，第52号住居跡が本跡の床を切り，重複部分に本跡の貼り床の跡がないことから，本跡が第52号住居跡よりも古いと考えられる。

平面形は，長軸4.0m・短軸3.9mの隅丸方形と思われ，長軸方向はN－51°－Eと考えられる。壁は東壁が消失しており，ソフトロームで，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は20～30cmである。床はハードロームで，やや起伏がある。床面は中央がよく踏み固められている。炉は北側に検出され，長径66cm・短径46cmの不定形で，床を7cm掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼け，硬化している。炉の周辺には径1.4mほどの円形に焼土が散乱している。柱穴はP_1・P_2の2か所で，径34・40cm，深さ13・27cmである。他の柱穴は重複のため削平されたものと考えられる。

覆土は3層からなり，主に暗褐色土，褐色土が堆積している。部分的に数か所撹乱を受けている。上層は焼土粒子・炭化粒子を含み，3層とも締まっている。

遺物は，土師器片が覆土から6点，床面から2点出土しているが器形を窺えるものはない。土師器片は古墳時代の五領式に比定される。



第101図　第58号住居跡実測図

第59号住居跡（第102図）

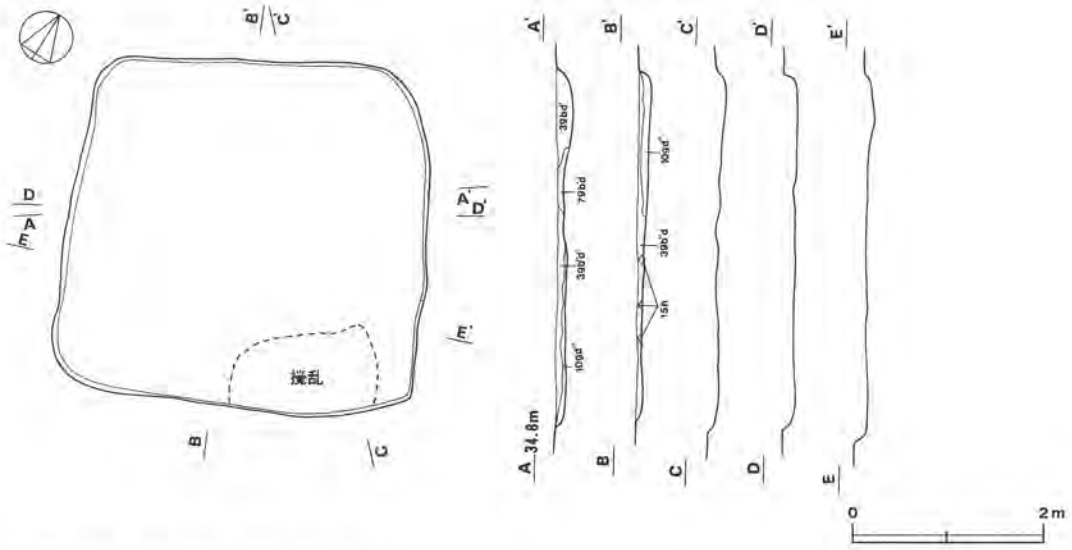
本跡は，遺跡中央のC2j_5区を中心に確認されたもので，第49号住居跡の南東約8mに位置している。

平面形は，長軸3.9m・短軸3.8mの隅丸方形で，長軸方向はN－64°－Eである。壁はソフトロームで床面から外傾して立ち上がっている。壁高は6～12cmである。床はハードロームで，平坦である。床面は中央から南にかけてよく踏み固められている。炉や柱穴は検出されない。

覆土は5層からなり，主に黒褐色土，暗褐色土，褐色土，明褐色土が堆積している。部分的に撹乱を受けている。1層の黒褐色土，4層の褐色土が大部分を締める。大部分の層は炭化粒子を

含んでおり，全層ともよく締まっている。

遺物は，土師器片が覆土から6点，床面から4点出土しているが器形を窺えるものはない。土師器片は古墳時代の五領式に比定される。



第102図　第59号住居跡実測図

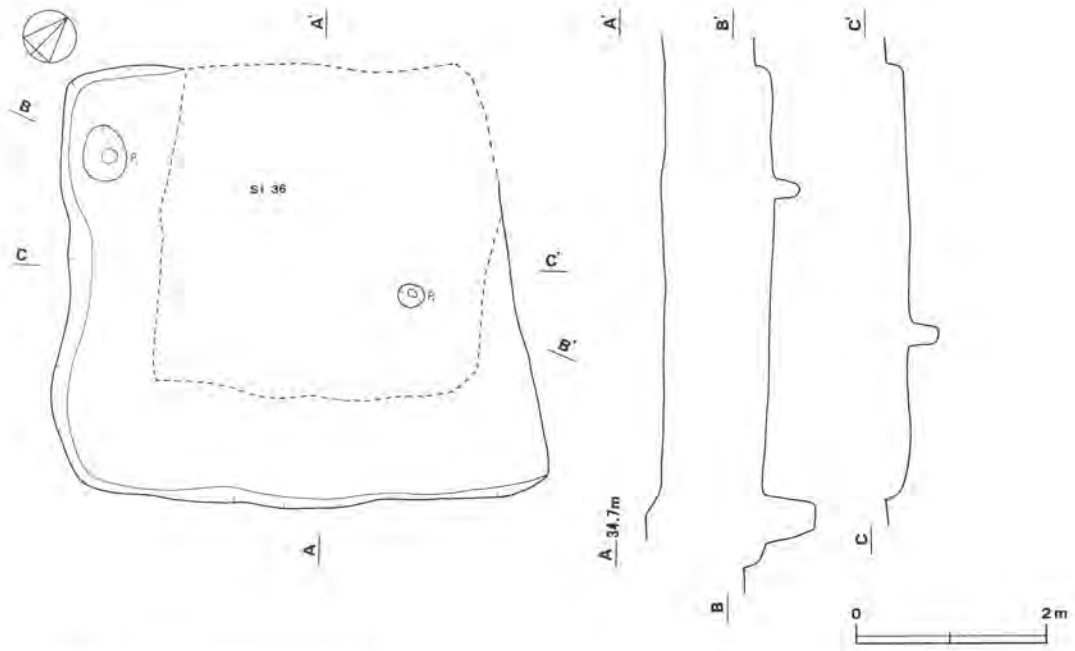
第61号住居跡（第103図）

本跡は，遺跡中央のD2e₂区を中心に確認されたもので，第35号住居跡の東側約7mに位置している。北西側で第36号住居跡と重複している。新旧関係は，土層の堆積状況から本跡が第36号住居跡よりも古いと考えられる。

平面形は，長軸4.7m・短軸4.6mの方形と思われ，長軸方向はN－46°－Eを指すものと考えられる。壁は北壁，東壁の一部が消失しており，ソフトロームで床面から外傾して立ち上がっている。壁高は12～25cmである。床はハードロームで，平坦である。床面は南側が踏み固められている。炉は検出されない。柱穴は東側のP_1の1か所で，径26cm・深さ29cmの規模である。他の柱穴は重複のため削平されたものと考えられる。P_2は貯蔵穴と考えられ，長径60cm・短径50cmの楕円形で，床を58cm掘りこんで構築されている。貯蔵穴の覆土は，暗褐色土，褐色土の2層が堆積している。

覆土は3層からなり，主に暗褐色土，褐色土が自然堆積している。全層ともローム粒子を含み締まっている。

遺物は，土師器片が覆土から8点出土しているが器形を窺えるものはない。土師器片は古墳時代の五領式に比定される。



第103図　第61号住居跡実測図

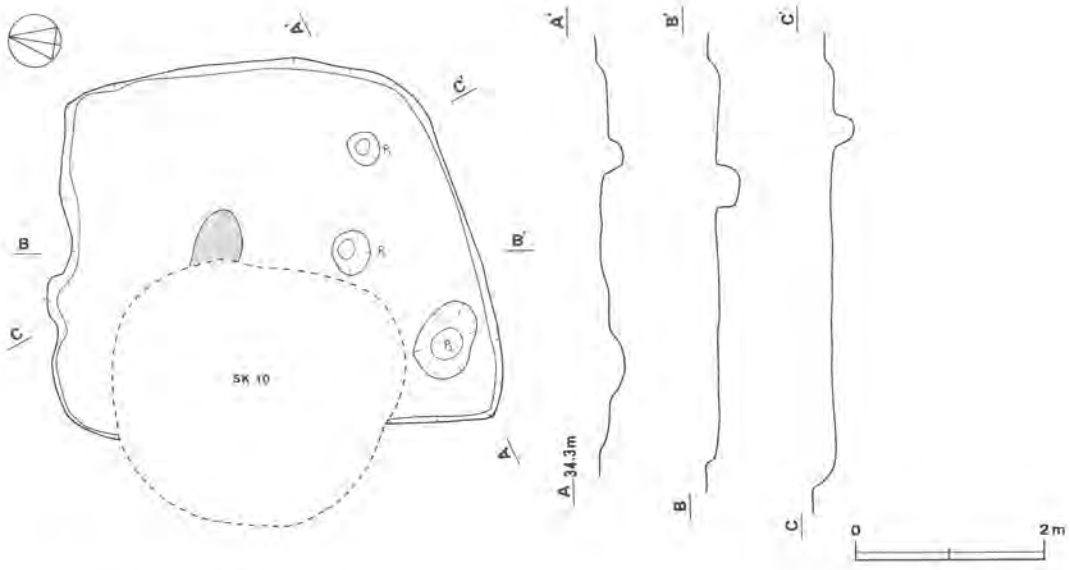
第62号住居跡（第104図）

本跡は，遺跡中央のD2i₂区を中心に確認されたもので，第16号住居跡の北約1.7mに位置している。西側で第10号土坑と重複している。新旧関係は土層の堆積状況から，本跡が古いと考えられる。

平面形は，長軸4.7m・短軸4.0mの長方形で，長軸方向はN－11°－Wである。壁は西壁が消失しており，ソフトロームで床面から外傾して立ち上がっている。壁高は8～26cmである。床はソフトロームで，平坦である。床面は踏み固められていない。炉は検出されないが，中央に焼土層が確認された。床面より20cm程高いレベルにあり，炉下に本跡の覆土と同じ暗褐色土が堆積しているため，後世のものと考えられる。ピットはP_1～P_3の3か所で，規模は径36～84cm・深さ19～24cmである。配列がふぞろいで規模がまちまちなため，主柱穴の判別はできない。

覆土は3層からなり，主に暗褐色土，褐色土が堆積している。部分的に数か所撹乱を受けている。全層とも焼土粒子・炭化粒子を含み，1・2層は締まっている。

遺物は，土師器片が覆土から2点出土しているがともに器形は窺えない。土師器片は古墳時代の五領式に比定される。



第104図　第62号住居跡実測図

(2)　古墳時代中期

第６Ｂ号住居跡（第20図）

本跡は，遺跡南端部のF2a$_3$区を中心に確認されたもので，第４号住居跡の南東約11mに位置している。西・北側で第6A号住居跡と重複している。新旧関係は前述のとおりである。

平面形は，長軸4.6m・短軸4.2mの方形で，長軸方向はＮ－89°－Ｅである。壁はソフトロームで，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は西・北側が重複のため15cm，他の壁は20cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はどの部分もよく踏み固められている。北東側に最大幅50cm・最小幅40cmの不定形の焼土層が確認され，炉と思われたが，床面よりも15cm高いレベルにあるので炉ではなく後世のものと考えられる。柱穴はP$_4$～P$_7$の４か所で，その規模は径28～40cm・深さ17～34cmである。各コーナーに検出され，柱穴間は約2.6mと等間隔である。

覆土は６層からなり，主に暗褐色土，褐色土が自然堆積し，上層は焼土粒子を含み，下層はローム粒子を含み，６層とも締まっている。

遺物は，覆土の上層から埦形土器(P70)，甑形土器(P67)，下層から甕形土器(P65・P68・P72)，坩形土器(P66)，ミニチュア土器(P71)，北東側の床面から小型甕形土器(P69)，甕形土器(P1)が出土している。小型甕形土器と甕形土器１点，ミニチュア土器は古墳時代の五領式に比定され，他の５点は和泉式に比定される。

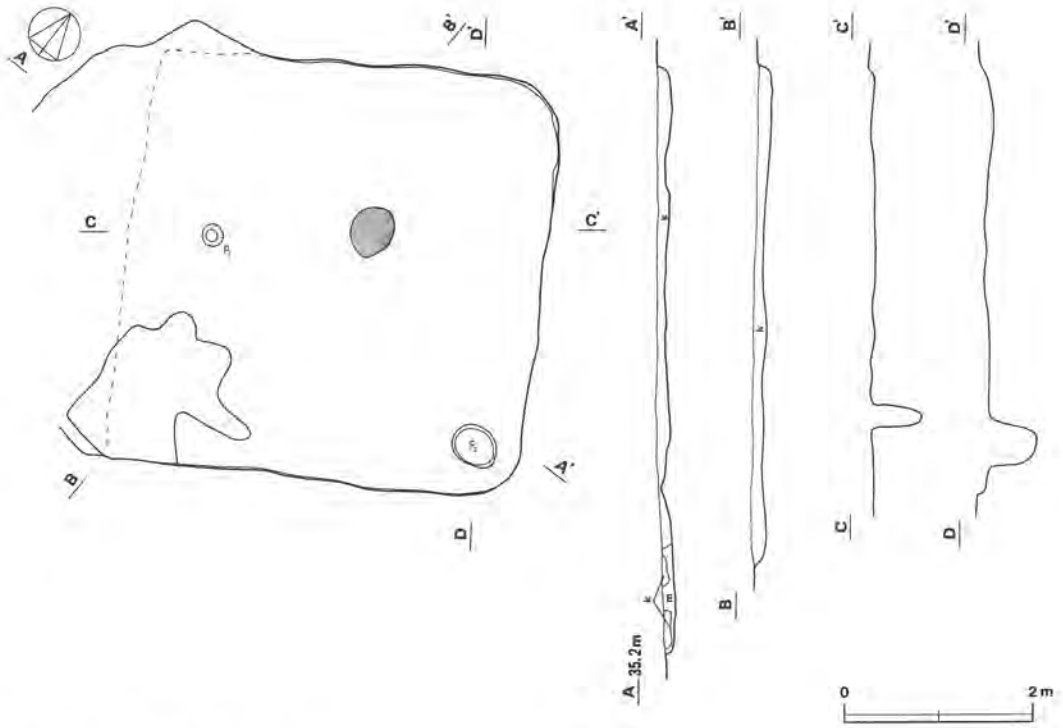
第53号住居跡（第105図）

本跡は，遺跡中央のC2d$_2$区を中心に確認されたもので，第49号住居跡の北約17mに位置している。北側から西側一帯にかけて宅地跡のため撹乱を受けている。

平面形は，長軸4.5m・短軸4.4mの隅丸方形と思われ，長軸方向はN-33°-Wを指すものと考えられる。残存壁はソフトロームで，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は南側で16cmである。床はソフトロームで，平坦である。床面は踏み固められていない。炉は北側に位置していたと思われるが，撹乱のため壊されたらしく，焼土ブロック層が中央の覆土の上層に堆積し，長径56cm・短径44cmの楕円形の範囲で確認された。柱穴は南側のP_1の1か所で，径24cm・深さ54cmである。他の柱穴は撹乱のため削平されたものと思われる。P_2は貯蔵穴と考えられ，南東コーナー部に検出された。長径52cm・短径42cmで，床を54cm掘りこんで構築されている。貯蔵穴の覆土は褐色土の1層で，上部から土師器の器台が出土している。

覆土はなかったが，宅地跡のため移動された褐色土が堆積しており，非常に硬く締まっている。

遺物は，土師器片が覆土から高坏形土器(P465)，床面から2点出土している。高坏形土器は古墳時代の和泉式に比定される。



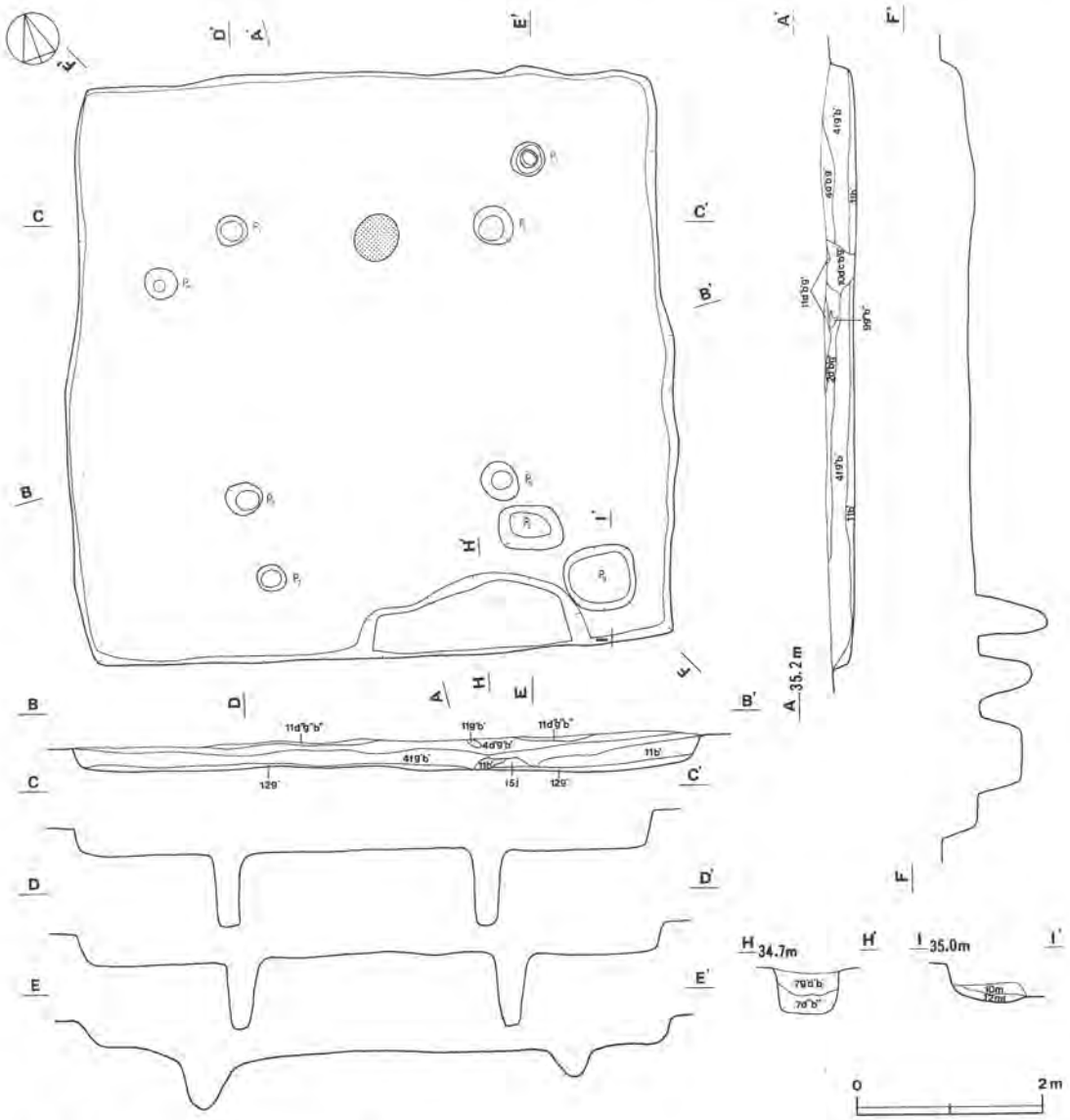
第105図　第53号住居跡実測図

(3) 古墳時代後期

第1号住居跡（第106図，石製品製作跡）

本跡は，遺跡中央のC1b$_9$区を中心に確認されたものであり，住居跡群の中では最も北側に位置している。

平面形は，長軸6.6m・短軸6.5mの方形で，長軸方向はN－66°－Wである。壁はハードロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は28～40cmである。床はハードロームで，平坦である。



第106図　第1号住居跡実測図

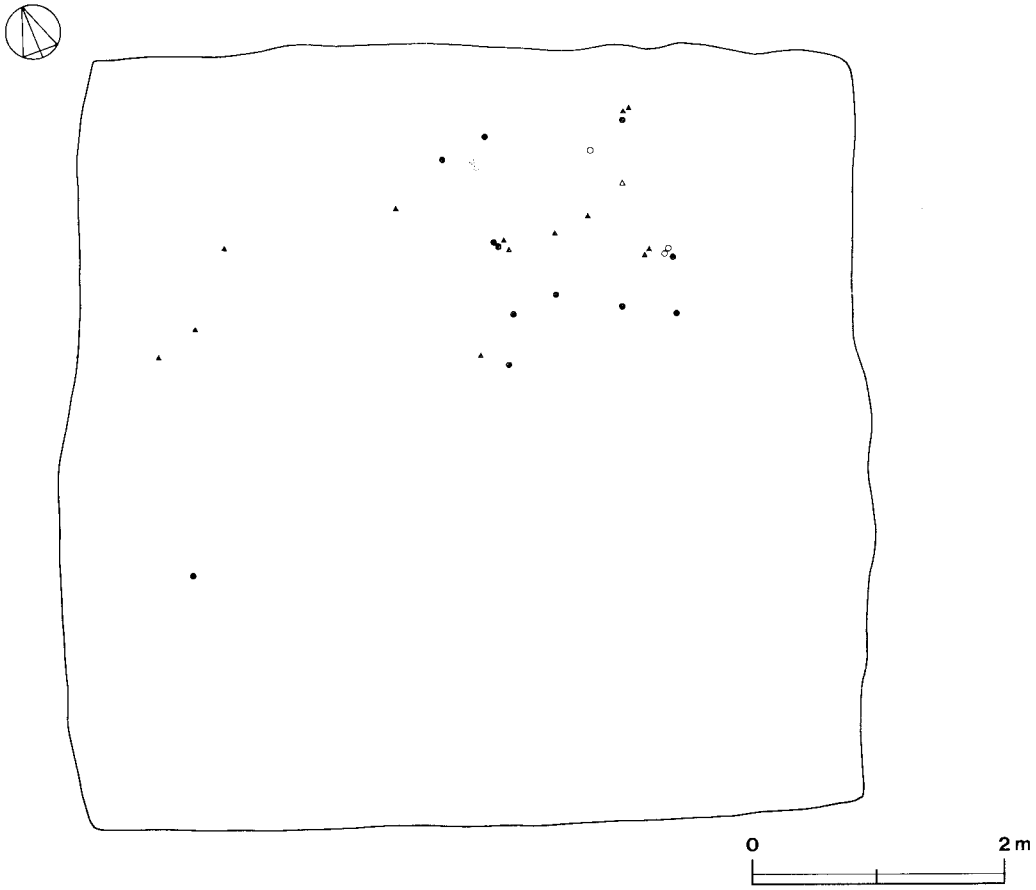
床面は硬いが踏み固められてはいない。炉は北側に検出され，長径50cm・短径44cmで，床を3cm皿状に掘り凹めた地床炉である。炉床はあまり焼けていない。柱穴はP_1～P_8の8か所で，P_1～P_4が主柱穴，P_5～P_8が支柱穴と考えられる。主柱穴の規模は径34～68cm・深さ65～84cmと深く，支柱穴の規模は径30～44cm・深さ30～68cmである。P_2は長径68cm・短径48cmの楕円形になっている。P_1～P_4の柱穴間は約3mと等間隔であり，P_5～P_8はそれぞれP_1～P_4の近くに掘られている。P_9は貯蔵穴と考えられ，長径82cm・短径68cmの不整楕円形で，床を46cm掘りこんで構築されている。貯蔵穴の断面は「U」状である。

覆土は7層からなり，主に褐色土，黒褐色土，明褐色土が堆積している。宅地跡のために1層の褐色土は他の場所から運ばれて，積み上げられたものである。2層以下は，北側の一部が撹乱されているが，大部分が自然堆積である。大部分の層がローム粒子・焼土粒子を含み，全層とも硬く締まっている。

遺物は，覆土中層から甕形土器（P41），坏形土器（P46～P51），甑形土器（P44），下層から甕形土器（P42・P43），鉢形土器（P45），東側の床面から甕形土器（P53），南側の床面から須恵器の高坏形土器（P52）が出土している。須恵器の高坏形土器は5世紀末のもの，他はすべて古墳時代の鬼高式に比定される。また，中央から北東側にかけて円板，剣形品，勾玉，臼玉，管玉の石製品が覆土下層から55点，床面から128点出土している。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 P41	甕形土器 土師器	A(17.6) B(10.5)	胴部はやや長胴で，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部外面－横なで	パミス・砂・石英 にぶい黄橙色 良好	15%
P42	甕形土器 土師器	B (5.5) C 7.7	底部は突出した平底で，胴部は器肉を減じながら外傾して立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	砂・パミス 橙色 普通	10%　外面朱彩
P43	甕形土器 土師器	A 16.0 B (8.2)	胴部は球形を呈すると思われ，口頸部は「コ」の字状に立ち上がる。	口縁部外面－横なで 胴部外面・内面－ヘラなで	砂・礫 橙色 普通	10%
P44	甑形土器 土師器	B (7.0) 孔径 8.2	底部に突抜けの孔を穿つ。胴部は大きく外傾して立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	砂・石英 にぶい黄橙色 普通	20%
P45	鉢形土器 土師器	A 11.5 B (4.7)	体部は内彎して立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	パミス・砂 にぶい橙色 普通	15%
P46	坏形土器 土師器	A 13.5 B (5.9)	体部は内彎し，口縁部との境で稜をつくる。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 体部外面－粗いヘラなで 内面－丁寧なヘラなで	砂粒・石英 橙色 普通	30%
P47	坏形土器 土師器	A 16.0 B (6.4)	体部は内彎する。口縁部境内面で稜をつくり，口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 体部内・外面－粗いヘラなで	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	35%　体部外面煤付着



第107図　第１号住居跡（第１号製作跡）石製品出土状況図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 P48	坏形土器 土師器	A 16.0 B (5.0)	体部は器肉を減じながら内彎して立ち上がる。	外面－粗いヘラなで 内面－丁寧なヘラなで	スコリア・礫 橙色 普通	30%
P49	坏形土器 土師器	A 15.0 B (5.4)	体部は内彎する。口縁部は体部との境で角度を変え，外傾ぎみに立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 体部外面－ヘラなで 内面－丁寧なヘラなで	砂・パミス 明赤褐色 普通	25%
P50	坏形土器 土師器	A 16.5 B (5.6)	体部は内彎し，口縁部との境で小さな稜をつくる。口縁部は垂直に立ち上がる。	外面－丁寧なヘラなで 内面－ヘラなで	砂粒・石英 にぶい赤褐色 普通	30%
P51	坏形土器 土師器	B (3.6)	底部は丸底と思われ，体部は内彎する。口縁部との境で稜をつくり，口縁部は垂直に立つと思われる。	外面－ヘラなで 内面－丁寧なヘラなで	パミス にぶい赤色 普通	30% 内・外面 朱彩
P52	高坏形土器 須恵器	A(16.7) B(5.7)	坏部は内彎し，上半で稜を２本つくる。口縁部は器肉を減じながら垂直に立ち上がる。	口唇部外面・器内面－ロクロ水挽き 体部外面－同心円文	礫 灰色 普通	15%

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第108図 P53	甕形土器 土師器	B(12.5) C 6.8	底部は突出した平底で，胴部はやや長胴を呈する。	内・外面ーヘラなで	パミス・礫・砂・スコリア にぶい橙色 普通	25%

石製品（PL95～99）

剣形品　床面一帯から総数95点出土している。未製品90点，破損品４点，完成品１点で，未製品の内訳は荒割り品53点，形割り品８点，研磨品６点，穿孔品23点である。荒割り品は原石から剣形品に必要な量だけ打ち欠いたもので，長さ1.6～8.5cm，重さ0.5～29.6gである。形割品は荒割り品の形を整えたもので，特に両側面を調整している。長さ２～3.5cm，重さ0.7～15.0gである。研磨品は形割品の上・下面を研磨したもので，長さ1.7～3.9cm，重さ0.7～14.2gである。穿孔品は研磨品に孔を穿ったもので，長さ1.4～4.5cm，重さ0.8～7.0gである。双孔を穿ったものが４点，単孔のものが19点である。未製品の大部分は滑石製であるが，雲母片岩製が２点含まれている。完成品が１点だけ出土し，滑石製で，長さ2.1cm，幅1.1cm，厚さ2.5㎜，孔径1.5㎜，重さ1.2gである。柄部に単孔を穿ち，上・下面は扁平に研磨されている。実測図は完成品のみ掲載し，他は写真で掲載した。

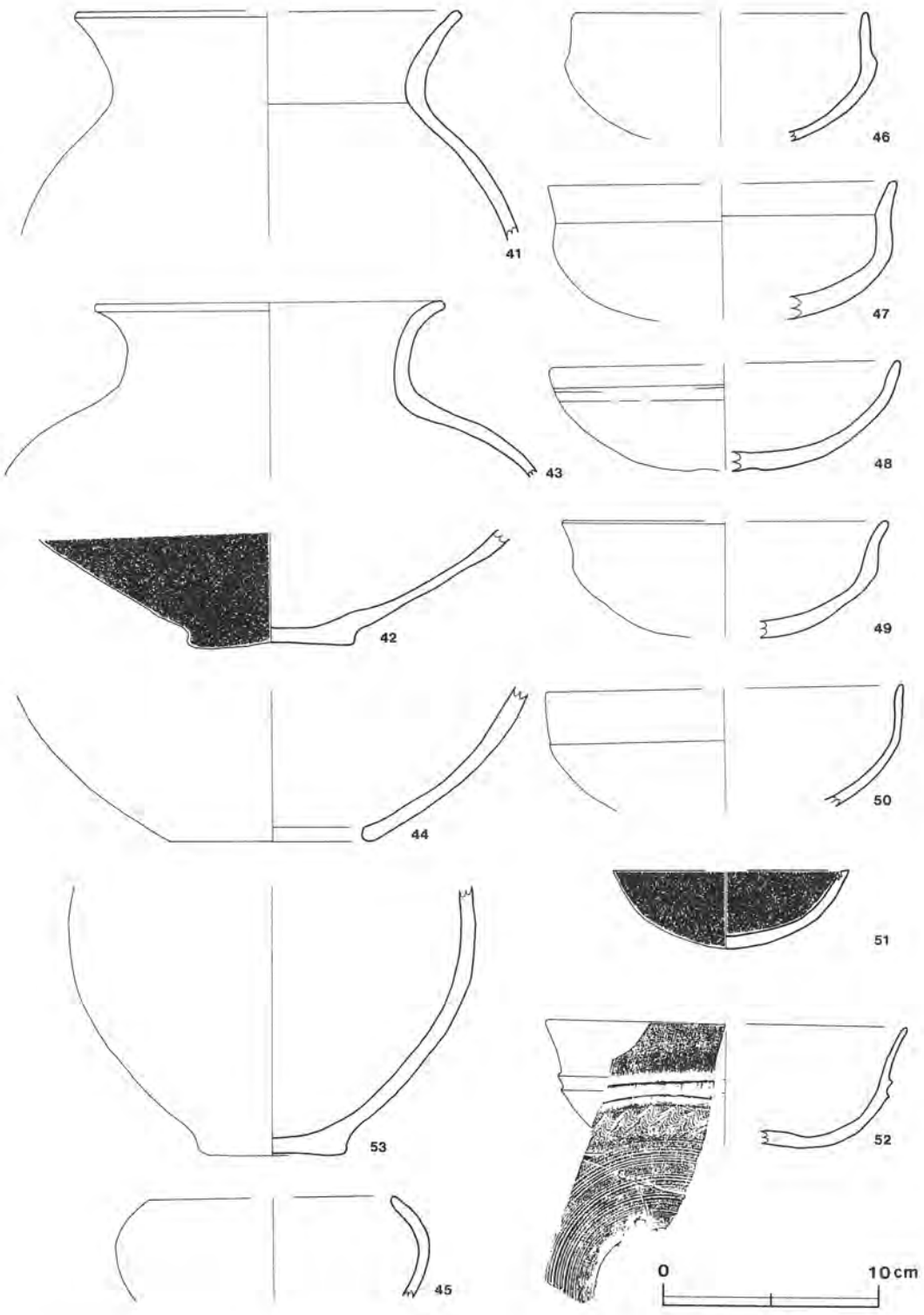
円　板　床面一帯から総数44点出土している。未製品38点，破損品５点，完成品１点である。未製品はすべて滑石製で，幅1.7～3.9cm，重さ1.1～15.4gである。穿孔されたものの中で，単孔のものが４点，双孔のものが21点である。完成品は，長さ２cm，最大幅2.3cm，厚さ５㎜，孔径1.5㎜，重さ4.5gで滑石製である。実測図は完成品のみ掲載し，他は写真で掲載した。

勾　玉　北側の床面から７点出土している。７点とも未製品で滑石制である。長さ2.1～3.5cm，重さ1.3～8.5gで，穿孔されたもの１点が含まれており，写真で掲載した。

臼　玉　北側の床面から24点出土している。未製品18点，破損品５点，完製品１点で，すべて滑石製である。未製品は，径５～９㎜，厚さ３～７㎜，重さ0.1～0.5gである。完成品は径５㎜，厚さ６㎜，重さ0.1g，孔径1.5㎜である。実測図は完成品のみ掲載し他は写真で掲載した。

管　玉　北側の床面から２点出土している。２点とも完成品で滑石製である。長さ1.4cm，径5.5～６㎜，重さ0.9g，孔径２㎜である。

他にこぶし大の滑石の原石が24点，床面一帯から出土している。

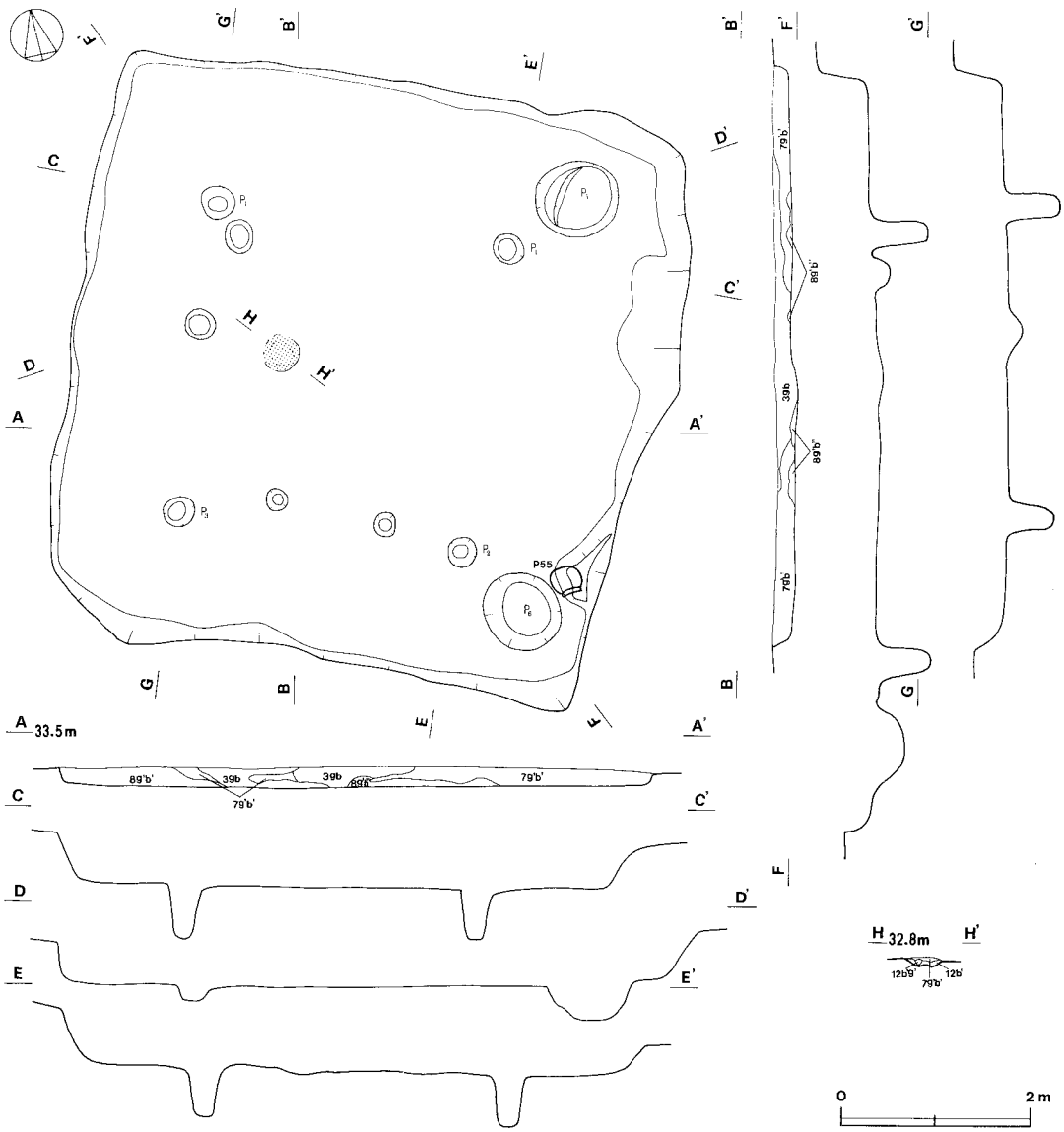


第108図　第１号住居跡出土遺物実測図

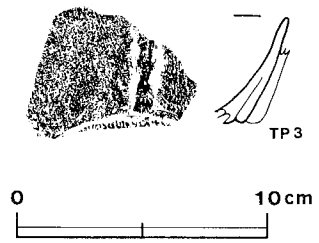
第３号住居跡（第109図）

本跡は，遺跡南部のE2i$_2$区を中心に確認されたもので，第１号溝の北東約4.5mに位置している。

平面形は長軸6.4m・短軸6.3mの隅丸方形で，長軸方向はN－62°－Wである。壁はハードロームで床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は24～54cmである。床はハードロームで，平坦である。床面は硬いが踏み固められてはいない。炉は西側に検出され，径40cmの円形で，床を11cm掘り凹めた地床炉である。炉床はあまり焼けていない。炉覆土は３層で暗褐色土，褐色土が堆



第109図　第３号住居跡実測図



第110図　第３号住居跡出土遺物拓影図

積している。主柱穴はP_1～P_4の４か所で，その規模は径32～36cm・深さ48～60cmである。各コーナー部に検出され，柱穴間は3.2mと等間隔である。P_5・P_6は貯蔵穴と考えられ，どちらも径約80cmの円形で，P_5は北東コーナー部，P_6は南東コーナー部に位置している。床面をそれぞれ41・36cm掘りこんで構築している。

覆土は３層からなり，主に黒褐色土，暗褐色土が自然堆積している。どの層も，ローム粒子・焼土粒子を含み，締まっている。

遺物は，覆土下層から坏形土器（P54），東側壁下の床面から横位で甕形土器（P55）が出土している。両者とも古墳時代の鬼高式に比定される。

TP3は，折返し口縁部片で，縦位に粘土紐が貼り付けられている。

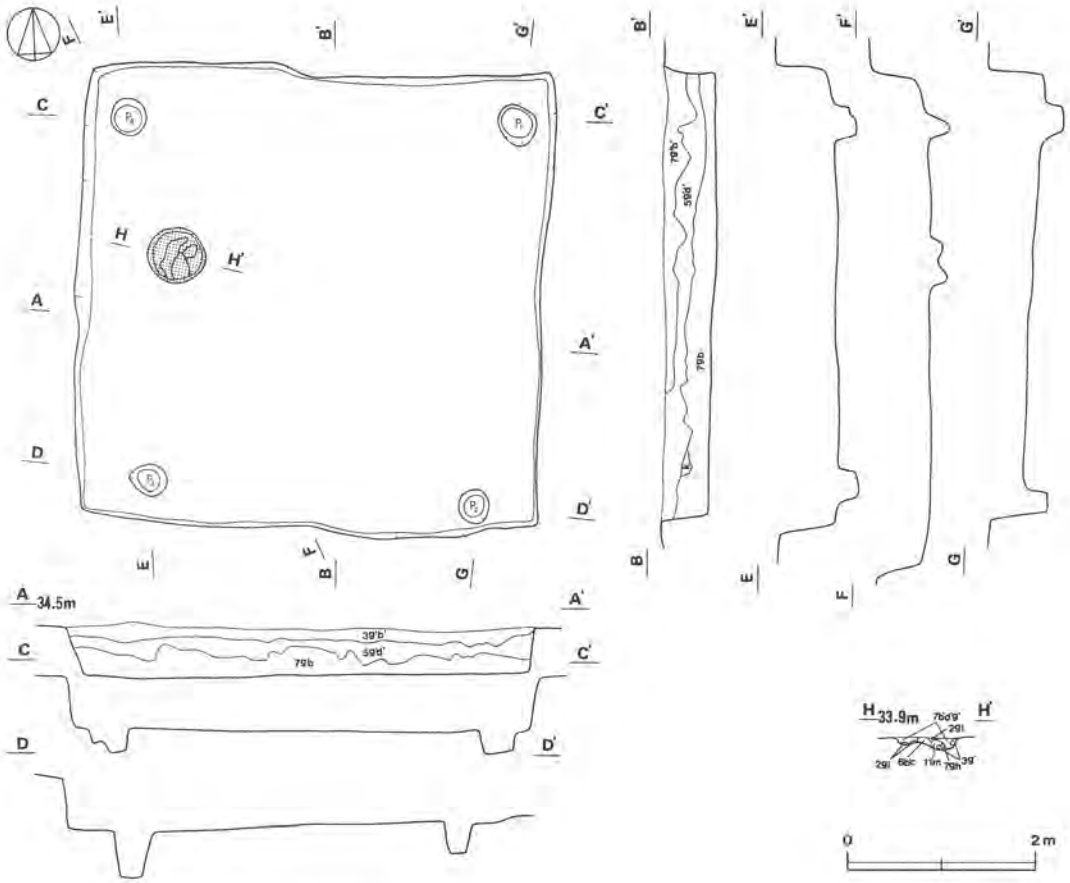
第19号住居跡（第111図）

本跡は，遺跡中央のD2g_1区を中心に確認されたもので，第３号住居跡の北約44mに位置している。下層に第29号住居跡が重複しており，本跡は第29号住居跡の覆土内に構築されたと考えられる。

平面形は，長軸5.0m・短軸4.9mの方形で，長軸方向はN－87°－Wである。壁は暗褐色土であるが，比較的締まっており，床面からは垂直に立ち上がっている。壁高は40～63cmである。床は暗褐色土混じりの褐色土で，平坦であるが，それほど床面は踏み固められていない。炉は西側に確認され，径58cmの円形で，床を13cm掘り凹めた地床炉である。炉床は中央がよく焼けて硬化している。炉覆土は６層で，暗褐色土，極暗赤褐色土，黒褐色土，褐色土が堆積している。柱穴はP_1～P_4の４か所で，その規模は径35～45cm・深さ25～48cmである。各コーナー部に検出され，柱穴間は約3.8mと等間隔である。

覆土は４層からなり，主に黒色土，極暗褐色土，黒褐色土が自然堆積している。１～３層は焼土粒子・炭化粒子を含み，締まっている。

遺物は，覆土の上層から坏形土器（P154），手づくね土器（P156），ミニチュア土器（P157），下層から坏形土器（P152・P155），須恵器の坏形土器（P158），西側の床面から鉢形土器（P153）が出土している。上層の手づくね土器は古墳時代の五領式に比定される。他はすべて鬼高式に比定される。



第111図　第19号住居跡実測図

第24号住居跡（第112・113図）

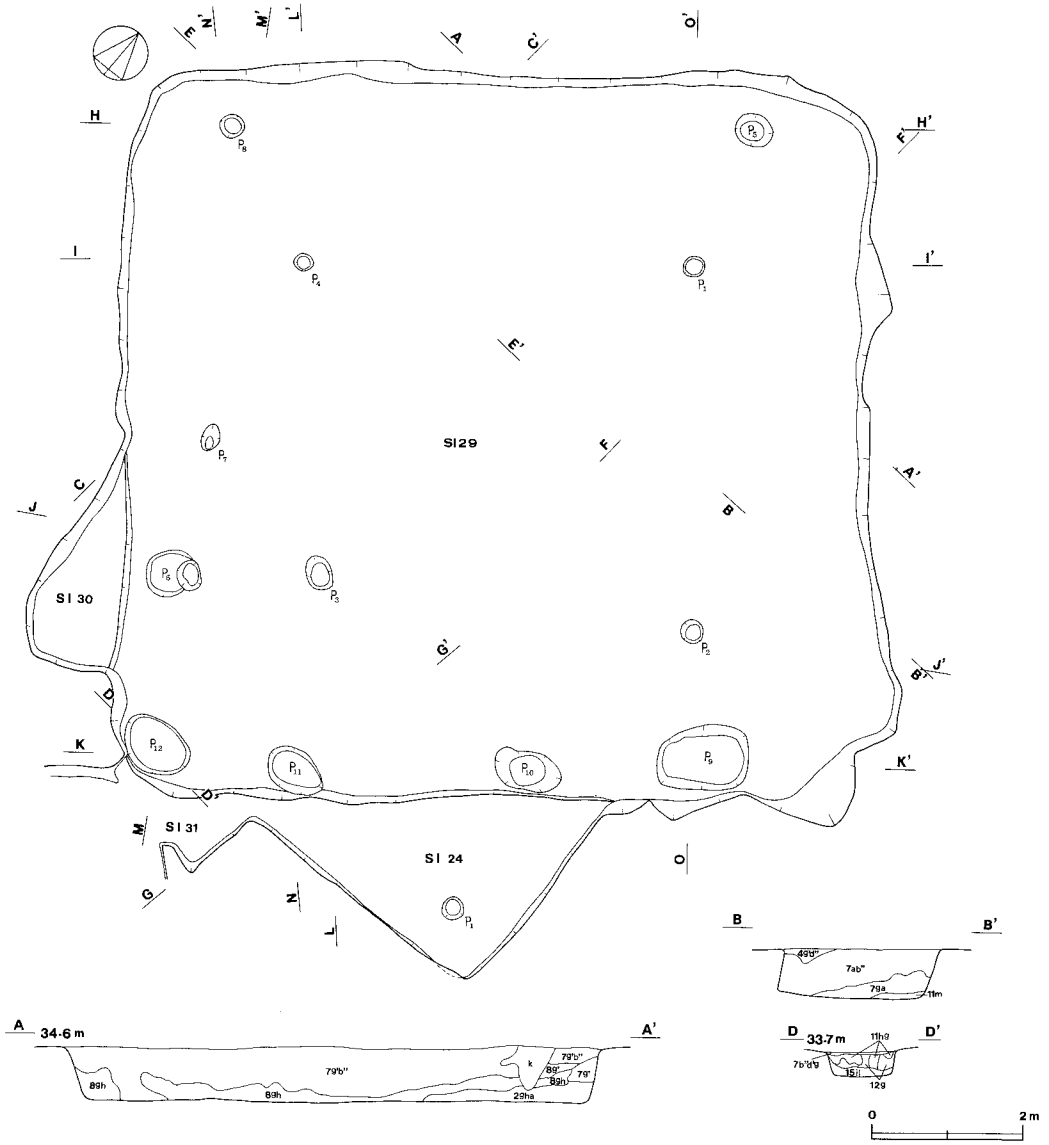
本跡は，遺跡中央のD2g$_1$区を中心に確認されたもので，第３号住居跡の北約42mに位置している。西側で第30・31号住居跡と，北側で第29号住居跡と重複している。新旧関係は，第30・31号住居跡とは不明であるが，第29号住居跡が本跡の床を切り，重複部分に本跡の貼り床の跡等がないことから，本跡が第29号住居跡よりも古いと考えられる。

平面形は，長軸4.3m・短軸4.2mの方形と思われ，長軸方向はN－90°－Wと考えられる。壁は東・南側だけ残っている。ソフトロームで，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は34～36cmである。炉は検出されない。床はソフトロームで，平坦である。第29号住居跡との重複のため削平されている。北側の部分を除いては床面はよく踏み固められている。柱穴は南東コーナー部にあるP$_1$の１か所だけ検出された。規模は径30cm・深さ43cmである。他のコーナー部にもあったと思われるが，重複のため壊されたと考えられる。

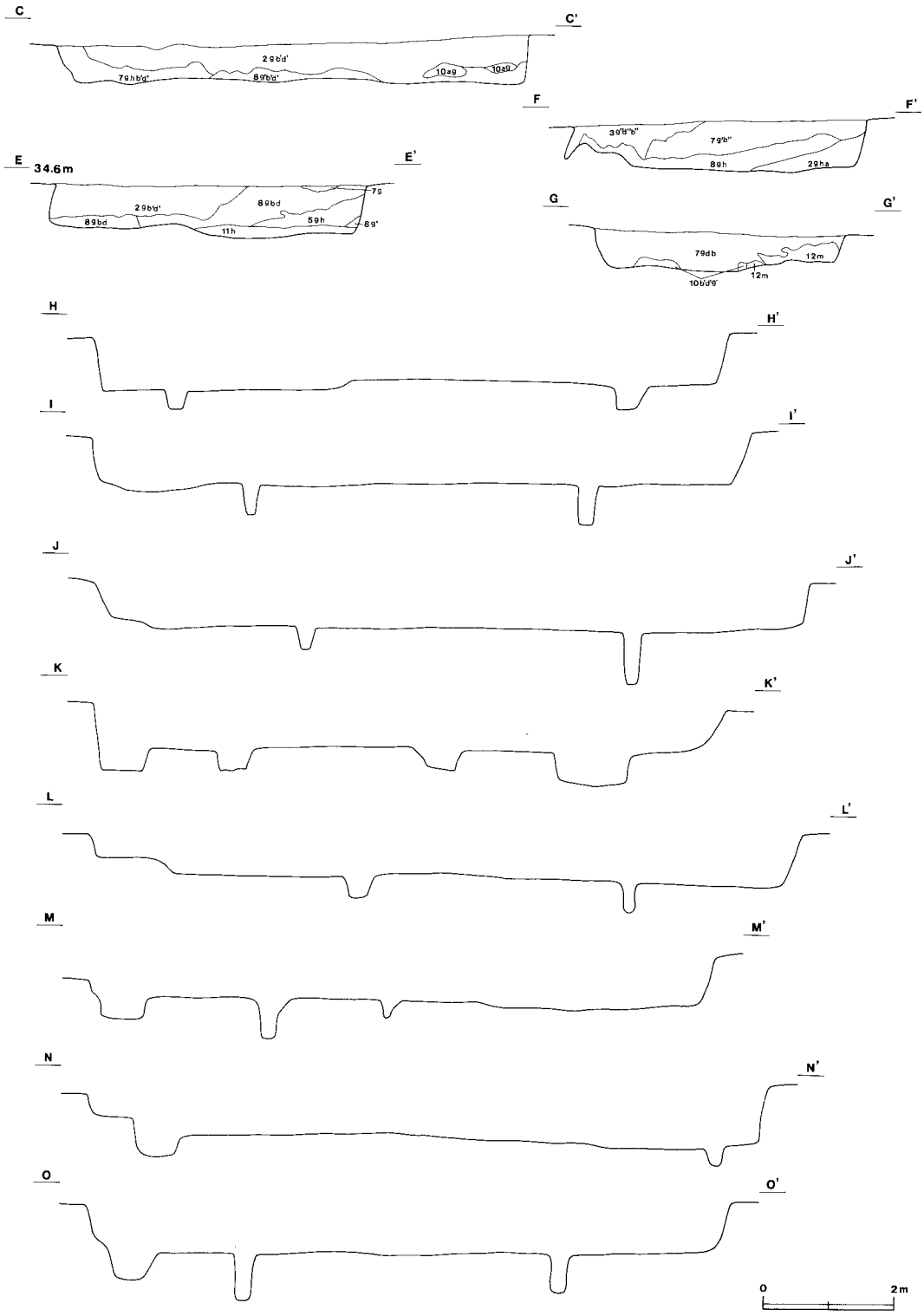
覆土は３層からなり，すべて暗褐色土で自然堆積している。１・２層は焼土粒子・炭化粒子を

含み，全層ともよく締まっている。

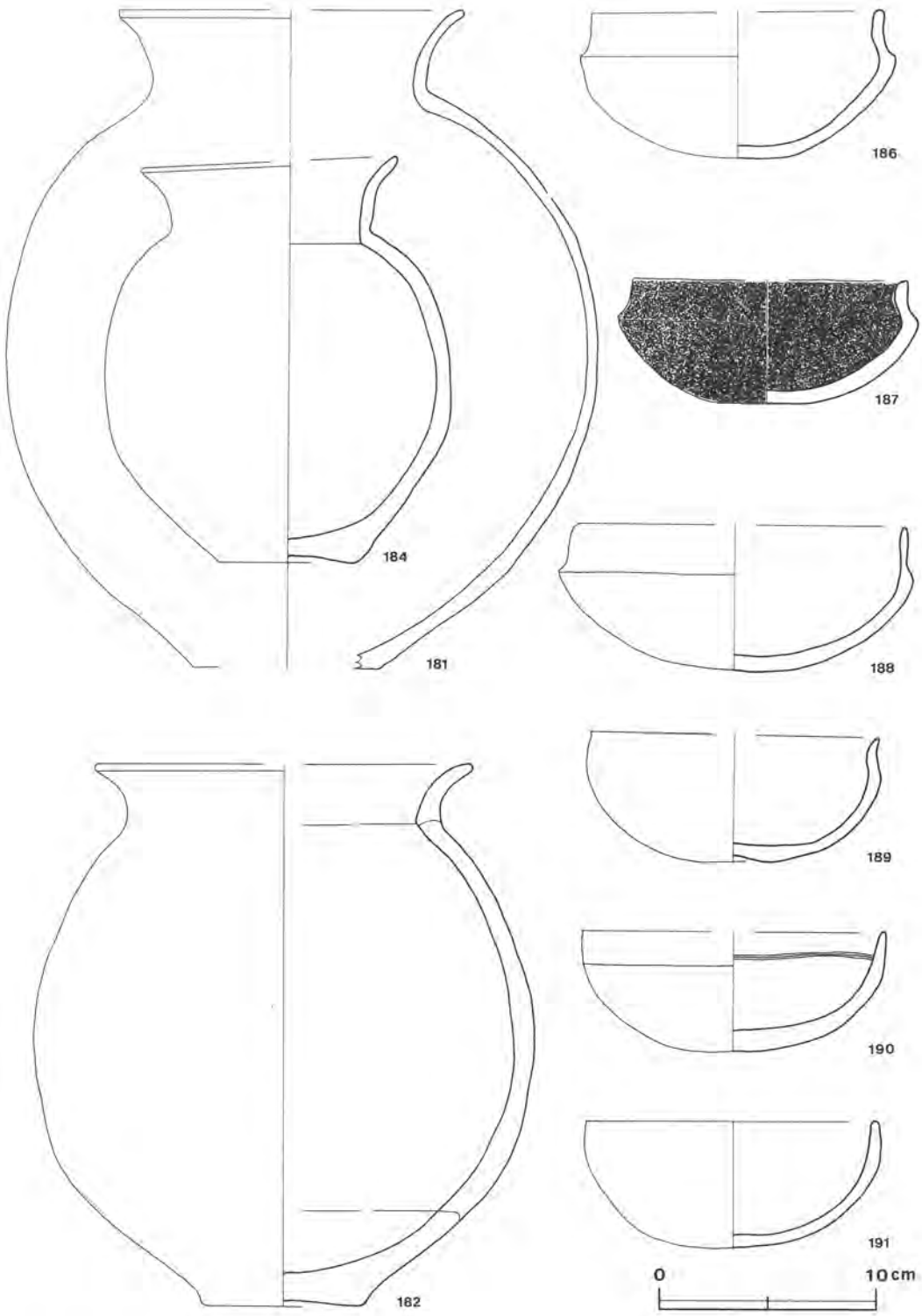
遺物は，覆土の上層から坩形土器（P197），下層から甕形土器（P181・P183），坏形土器（P186・P187・P189～P191・P194・P196），鉢形土器（P195），埦形土器（P193），甑形土器（P185），中央の床面から甕形土器（P182・P184），南側の床面から坏形土器（P188・P192）が出土している。ミニチュア土器は古墳時代の五領式に比定され，流れこみと考えられる。甑形土器は和泉式に比定され，他はすべて鬼高式に比定されている。また，中央の床面から剣形品，円板，臼玉の石製品が164点出土しており，東側の床面からは本県でも類例の少ない線刻のある紡錘車が出土している。24点の石製品は第29号住居跡からの流れこみと考えられる。



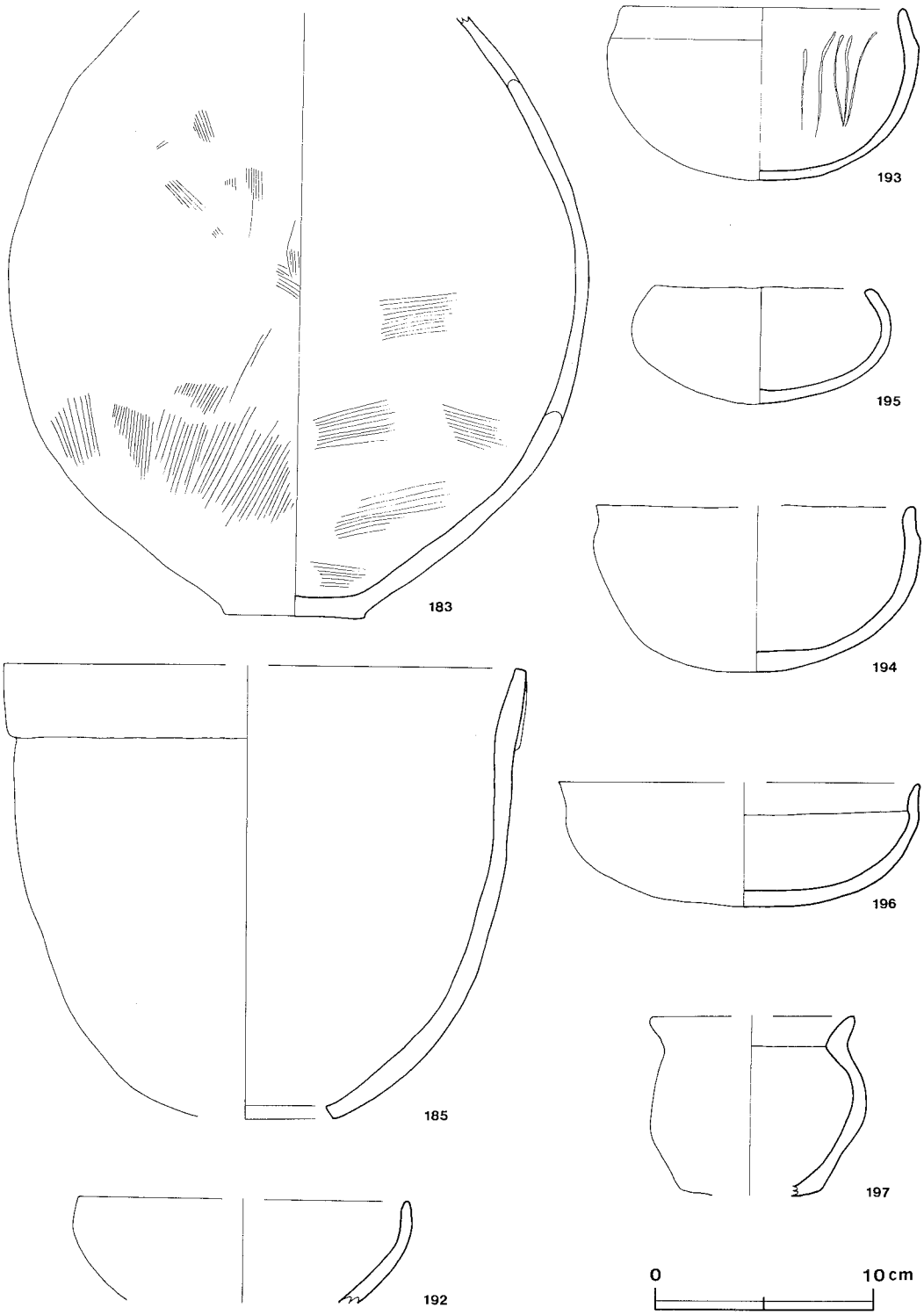
第112図　第24・29・30・31号住居跡実測図（1）



第113図　第24・29・30・31号住居跡実測図（2）



第114図　第24号住居跡出土遺物実測図（1）



第115図　第24号住居跡出土遺物実測図（2）

第24号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 P181	甕形土器 土師器	A 15.8 B 30.4 C 8.5	底部は平底。胴部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。口頸部は「く」の字状に開く。	口縁部外面・胴部外面－ハケ目整形後ヘラなで 口縁部内面－ヘラなで	パミス・砂・スコリア 橙色 普通	65%
P182	甕形土器 土師器	A 17.2 B 25.1 C 7.4	底部は突出した平底。胴部は下ぶくれした球形を呈する。口頸部は頸部との境で鋭角な「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－ハケ目整形後横なで 胴部内・外面－ハケ目整形後ヘラなで	パミス・礫・砂粒 にぶい橙色 普通	40%
第115図 P183	甕形土器 土師器	B(27.7) C 6.5	底部は突出した平底。胴部は長胴で，最大径を中位にもつ。	内・外面－ハケ目整形後ヘラなで	砂・パミス・礫 浅黄橙色 普通	60%
第114図 P184	甕形土器 土師器	A 11.6 B 18.6 C 6.4	底部は突出した平底。胴部は長胴で，口頸部は垂直に立ち上がる面をもち「コ」の字状に近い。	口縁部内・外面－横なで 胴部内・外面－丁寧なヘラなで	パミス・砂・雲母 にぶい橙色 普通	95%
第115図 P185	甑形土器 土師器	A 24.0 B(20.9) 孔径 7.6	深鉢形の甑。底部は突抜け。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は外に折り返す。	口唇部外面－指頭圧痕 内面・胴部外面－ヘラなで	スコリア・パミス・砂 浅黄橙色 普通	95% 胴部外面煤付着
第114図 P186	坏形土器 土師器	A 13.5 B 6.7	底部は丸底で，体部は内彎し，口縁部との境で稜をつくり，口縁部は垂直に立ち上がる。	口唇部外面－横なで 内面・体部外面－ヘラなで	砂・パミス・礫 浅黄橙色 普通	90%
P187	坏形土器 土師器	A 12.6 B 5.7	底部は丸底で，体部は内彎し，口縁部との境で稜をつくり，口縁部は垂直に立ち上がる。	口唇部外面－横なで 内面・体部外面－ヘラなで	パミス・砂・石英 橙色 普通	90% 器全体朱彩
P188	坏形土器 土師器	A 15.5 B 6.7	底部は丸底。体部は内彎し，口縁部との境に稜をつくり，口縁部は垂直に立ち上がる。	外面－ヘラなで 内面－丁寧なヘラなで	パミス・礫 外－にぶい黄橙色 内－にぶい褐色 普通	70%
P189	坏形土器 土師器	A 13.4 B 6.0	底部は小さい上げ底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に凹みをつける。	口唇部内・外面－横なで 体部内・外面－ヘラなで	パミス・スコリア・砂 橙色 普通	95%
P190	坏形土器 土師器	A 14.0 B 5.5	底部は丸底。体部は内彎し，口縁部との境で稜をつくり，口縁部は垂直に立ち上がる。	口唇部内・外面－横なで 体部内・外面ヘラなで	パミス・砂・礫 にぶい橙色 不良	80%
P191	坏形土器 土師器	A 13.4 B 5.7	底部は丸底で，体部は大きく内彎して立ち上がる。	外面－ヘラけずり後ヘラなで 内面－ヘラなで	砂・パミス 外－にぶい橙色 内－褐灰色 普通	98%
第115図 P192	坏形土器 土師器	A 16.2 B 5.0	底部は欠損。体部は大きく内彎し，口縁部は垂直に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	砂粒 にぶい褐色 普通	50%
P193	埦形土器 土師器	A 13.0 B 8.1	底部は丸底で，体部は内彎し，口縁部との境に稜をつくり，口縁部は内反する。	口唇部内・外面－横なで 体部外面－横のヘラなで 内面－ヘラみがき	砂粒 赤褐色 普通	95%
P194	坏形土器 土師器	A 14.6 B 7.6	底部は丸底。体部は器肉を減じながら大きく内彎し，口縁部との境に稜をつくり，口縁部は垂直に立ち上がる。	口唇部内・外面－横なで 体部内・外面－丁寧なヘラなで	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	70%
P195	鉢形土器 土師器	A 10.0 B 5.4	底部は丸底で，体部は内彎して立ち上がり，口縁部は少し内反する。	内・外面－ヘラなで	砂粒・パミス 明褐色 普通	100%

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第115図 P196	坏形土器 土師器	A 16.6 B 5.7	底部は丸底。体部は内彎し，口縁部との境に稜をつくり，口縁部は垂直に立ち上がる。	口唇部内・外面－横なで 体部外面－ヘラなで 内面－丁寧なヘラなで	パミス・砂粒 にぶい黄橙色 普通	75%
P197	ミニチュア土器 土師器	A 9.1 B 8.3 C 3.6	底部は平底。胴部は扁平な球形を呈する。口頸部は器肉を厚くして「く」の字上に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	パミス・砂 明赤褐色 普通	65%　胴部外面上半煤付着

石製品（PL106・107）

石製品の出土位置は第29号住居跡との重複部分であり，本跡の床面より低いレベルから出土したため，第29号住居跡の遺物と考えられるが，本跡の遺物として取り上げたためこの欄で掲載した。

剣形品　北西側床面から2点出土している。未製品で滑石製である。写真で掲載した。

円　板　北西側床面から2点出土している。2点とも未製品で滑石製である。写真で掲載した。

臼　玉　中央から北西側にかけての床面から出土している。総数160点で，未製品100点，破損品59点，完成品1点である。完成品は径5.5㎜，厚さ2.5㎜，重さ0.2gで滑石製である。中央に径1.5㎜の孔を穿っている。実測図は完成品のみ掲載し，他は写真で掲載した。

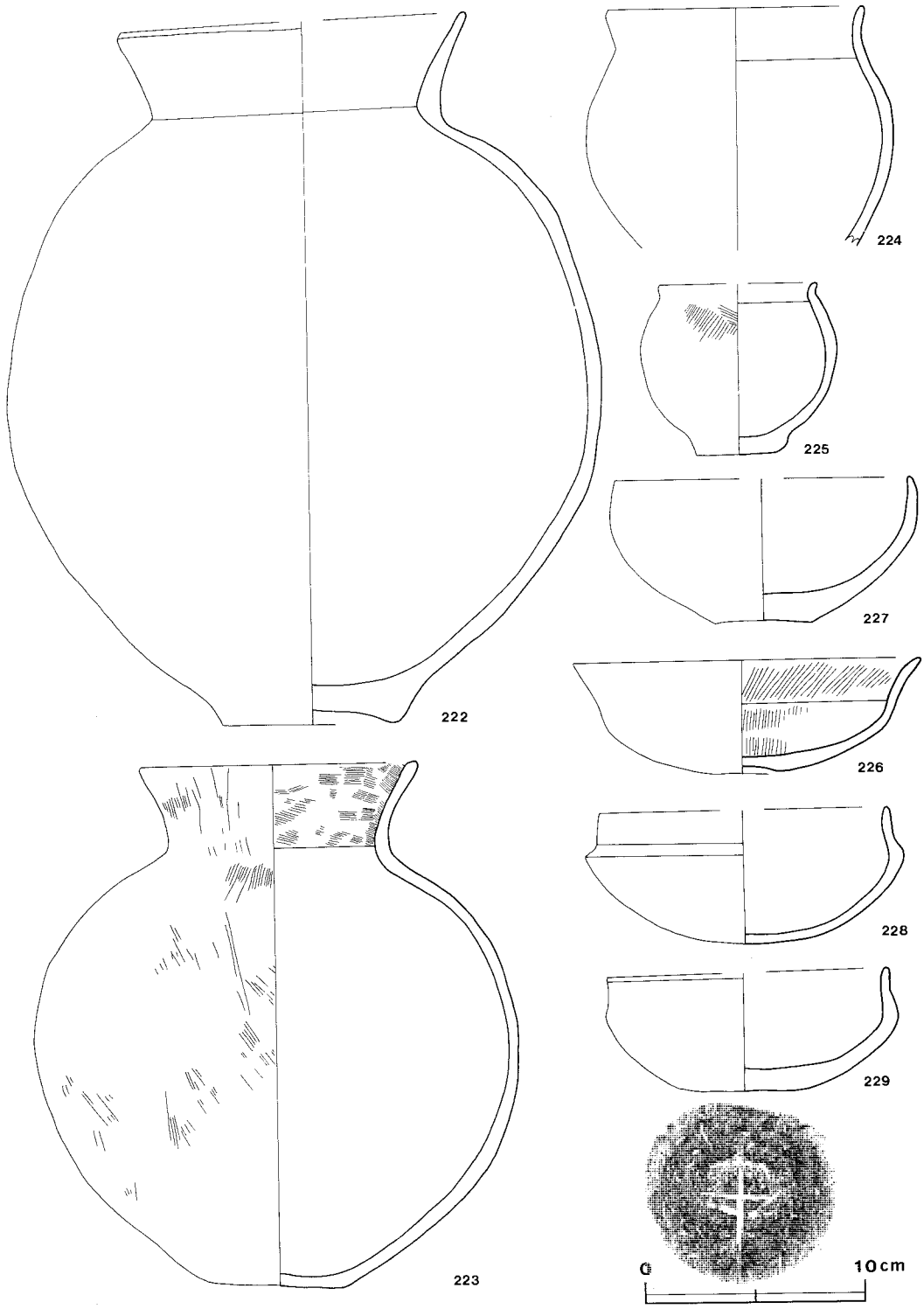
紡錘車　東側の床面から出土している。截頭円錐形で，上下側面とも丁寧に研磨されている。径4.3cm，厚さ1.1cm，重さ38g，孔径7.5㎜で滑石製である。上下面に線刻で同心円を画き，円内に直弧文の文様をうめている。

他に，こぶし大の滑石の原石が1点中央の床面よりも低いレベルから出土している。

第27B号住居跡（第56図）

本跡は，遺跡中央のD1i$_9$区を中心に確認されたもので，第19号住居跡の南西約7mに位置している。北側で第27A号住居跡と重複している。新旧関係は前述のとおりである。

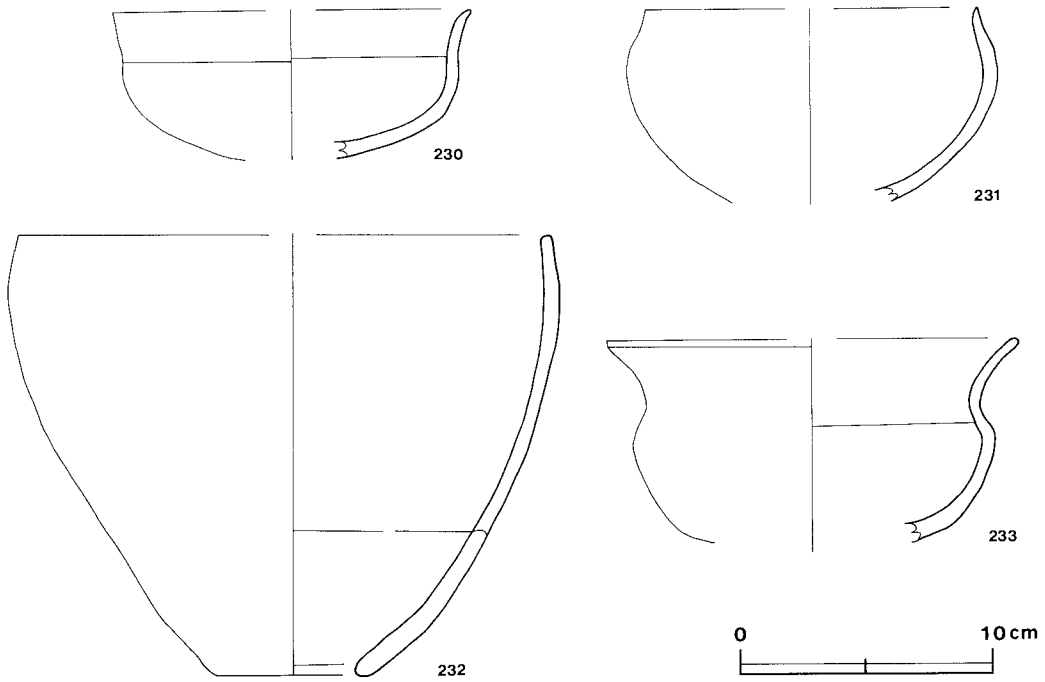
平面形は，長軸5.0m・短軸3.4mの長方形と思われ，長軸方向はN－51°－Wを指すものと考えられる。壁はソフトロームで床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は22～36cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はどの部分もよく踏み固められている。第27A号住居跡との重複部分には，約10cmの厚さでハードロームの貼り床がしてある。炉は住居跡中央部と思われる部分に検出され，長径90cm，短径50cmの楕円形である。床を16cm椀状に掘り凹めた地床炉である。炉床は中央が焼けて硬くなっている。炉覆土は5層で暗褐色土・褐色土が堆積している。どの層も焼土粒子を含んでいる。柱穴はP$_5$～P$_8$の4か所で，規模は径28～36cm・深さ34～51cmである。P$_8$は第27A号住居跡の炉の一部を壊して築かれている。



第116図　第27Ｂ号住居跡出土遺物実測図（1）

覆土は2層からなり，極暗褐色土，暗褐色土が自然堆積している。2層とも炭化粒子を含み，よく締まっている。

遺物は，覆土下層から破片でミニチュア土器（P225），破片で坏形土器（P228），東側の床面から横位で甕形土器（P222・P223），東側の床面から破片で小型甕形土器（P224），西側の床面から破片で椀形土器（P227・P321），西側の床面に正位で2点重なって，また，東側の床面に正位で坏形土器（P226・P229・P230），中央の床面から破片で甑形土器（P232），西側の床面から破片で鉢形土器（P233）が出土している。甕形土器，甑形土器は和泉式に比定され，他はすべて古墳時代の鬼高式に比定される。このほか，覆土上層からは五領式に比定される土師器が5点出土しているが，第27A号住居跡の遺物が流れこんだと思われるので，解説は割愛した。



第117図　第27B号住居跡出土遺物実測図（2）

第27B号住居跡出土遺物観察表

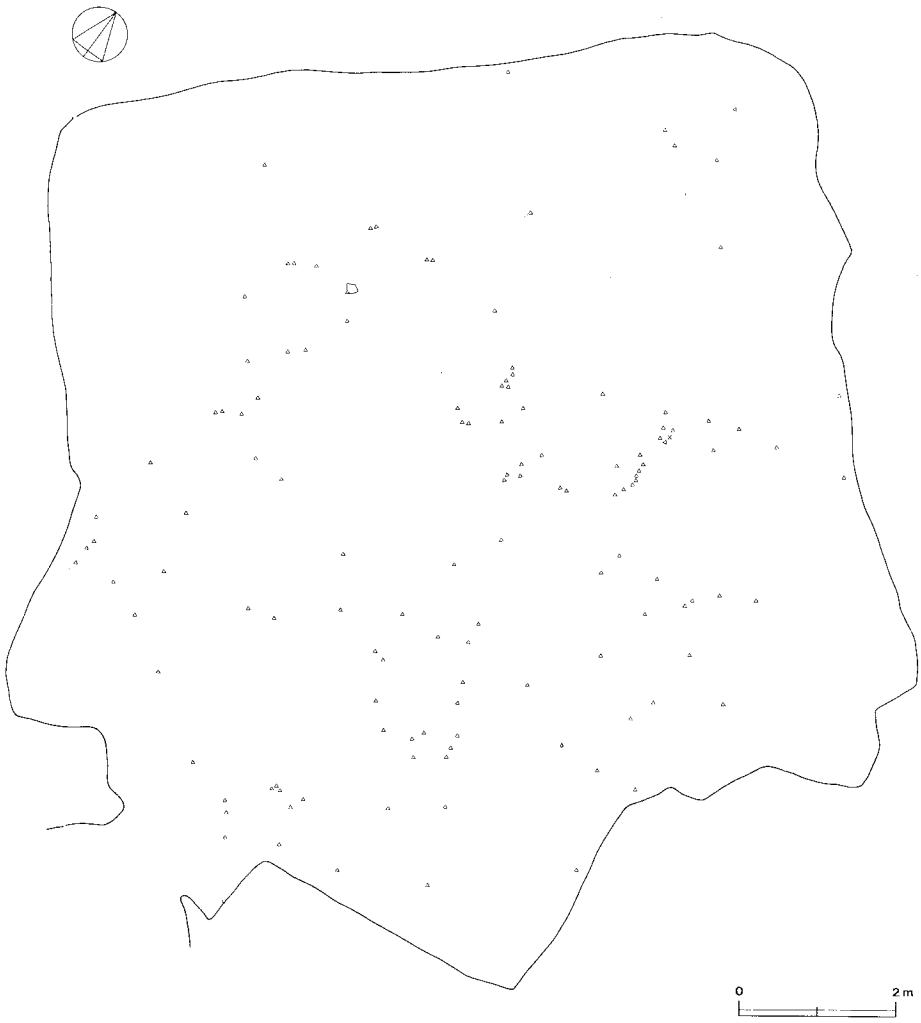
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 P222	甕形土器 土師器	A 15.9 B 33.6 C 8.3	底部は小さく上げ底。胴部はやや長胴で，口頸部「く」の字状に立ち上がる。	内・外面一ヘラなで	パミス・砂・石英にぶい橙色 普通	90%　胴部外面煤付着

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第116図 P223	甕形土器 土師器	A 12.5 B 24.3 C 4.4	底部は小さく平底。胴部は球形を呈する。口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内面－ハケ目整形 外面・胴部外面－なで	パミス・スコリア・砂 にぶい橙色 普通	90%
P224	小型甕形土器 土師器	A 11.5 B(11.1)	胴部は球形を呈すると思われ，口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 胴部外面－ヘラなで	パミス・砂・スコリア 明赤褐色 普通	80%　胴部下半煤付着
P225	ミニチュア土器 土師器	A 7.2 B 7.8 C 4.1	底部は突出する平底。胴部は長胴化し，口頸部は短く「く」の字状に立ち上がる。	胴部外面－ハケ目整形 内面－なで	パミス・砂粒 にぶい橙色 普通	60%
P226	坏形土器 土師器	A 16.1 B 5.2 C 3.1	底部は小さく上げ底。体部は大きく開き，口縁部との境で稜をつくり，口縁部は外傾して立ち上がる。	内・外面－ヘラみがき	パミス・石英 赤色 良好	98%　体部内面煤付着
P227	埦形土器 土師器	A 13.6 B 6.7 C 4.4	底部は上げ底で，体部は内彎して立ち上がる。	外面－ヘラけずり後ヘラなで 内面－ヘラなで	パミス・砂粒 褐灰色 普通	60%
P228	坏形土器 土師器	A 13.0 B 6.2	底部は丸底，体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜をつくり，口縁部はやや内反する。	口縁部外面－横なで 体部外面－ヘラなで 内面－なで	パミス・砂・長石 明褐灰色 普通	90%
P229	坏形土器 土師器	A 12.9 B 4.6 C 4.6	底部は丸底に近い平底。体部は内彎し，口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 体部外面－ヘラけずり後丁寧なヘラなで	スコリア・パミス・砂 にぶい橙色 普通	90%　底部にヘラ切り文字
第117図 P230	坏形土器 土師器	A 14.4 B 6.0	底部は丸底と思われる。体部は内彎した後垂直に立ち上がり，口縁部との境でややくびれ，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面－横なで 体部内・外面－ヘラなで	スコリア・砂粒 橙色 普通	70%
P231	埦形土器 土師器	A(13.2) B (7.9)	体部は内彎すると思われ，口縁部は器肉を減じながら内反して立ち上がる。	外面－粗いヘラなで 内面－丁寧なヘラなで	パミス・スコリア・砂 灰褐色 普通	30%
P232	甑形土器 土師器	A 21.5 B 17.9 C 6.1 孔径 4.6	深鉢形の甑。底部は突き抜けで，胴部はゆるく内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。	内・外面－粗いヘラなで	パミス・砂 にぶい橙色 普通	60%
P233	鉢形土器 土師器	A 16.5 B (8.2)	体部は扁平な球形を呈し，口縁部は大きく内彎して立ち上がる。	内・外面－丁寧な縦のヘラなで	パミス・砂粒 明赤褐色 普通	45%

第29号住居跡（第112・113図，石製品製作跡）

本跡は，遺跡中央の$D1f_0$区を中心に確認されたもので，第1号住居跡の南約46mに位置している。中央で第19号住居跡と，南東側で第24号住居跡と，南側で第30・31号住居跡と重複している。新旧関係は，第19号住居跡とは土層堆積の切り合いから本跡が古く，第30号住居跡とは土層堆積の切り合いから本跡が新しく，第24・第31号住居跡とは本跡が両住居跡の床を切り，重複部分に両住居跡の貼り床等がないので，本跡が新しいと考えられる。

平面形は，長軸10.6m・短軸9.8mの方形で，長軸方向はN－53°－Eである。壁は上部がソフトローム，下部がハードロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は64～90cmである。床

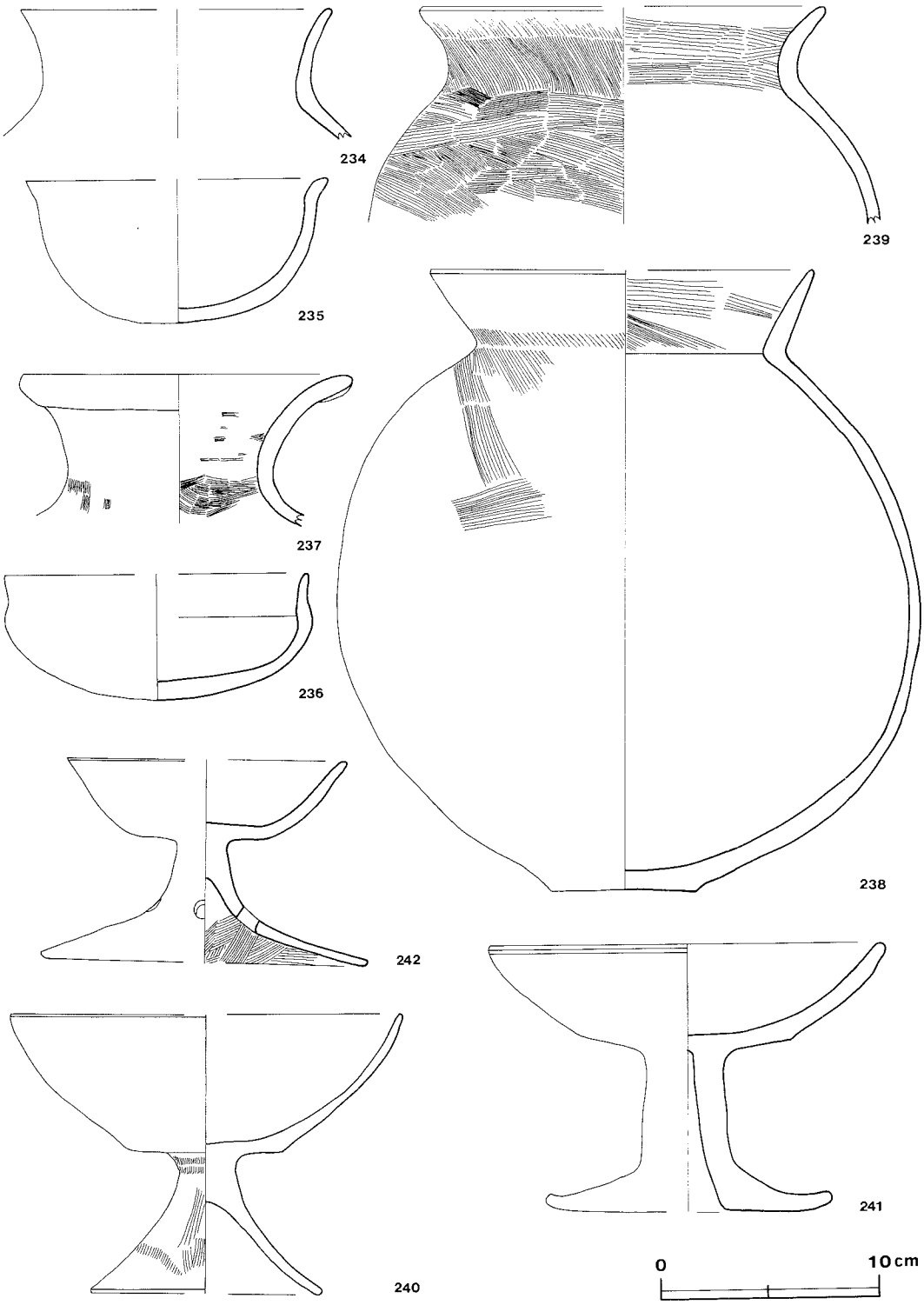


第118図　第29号住居跡（第２号製作跡）石製品出土状況図

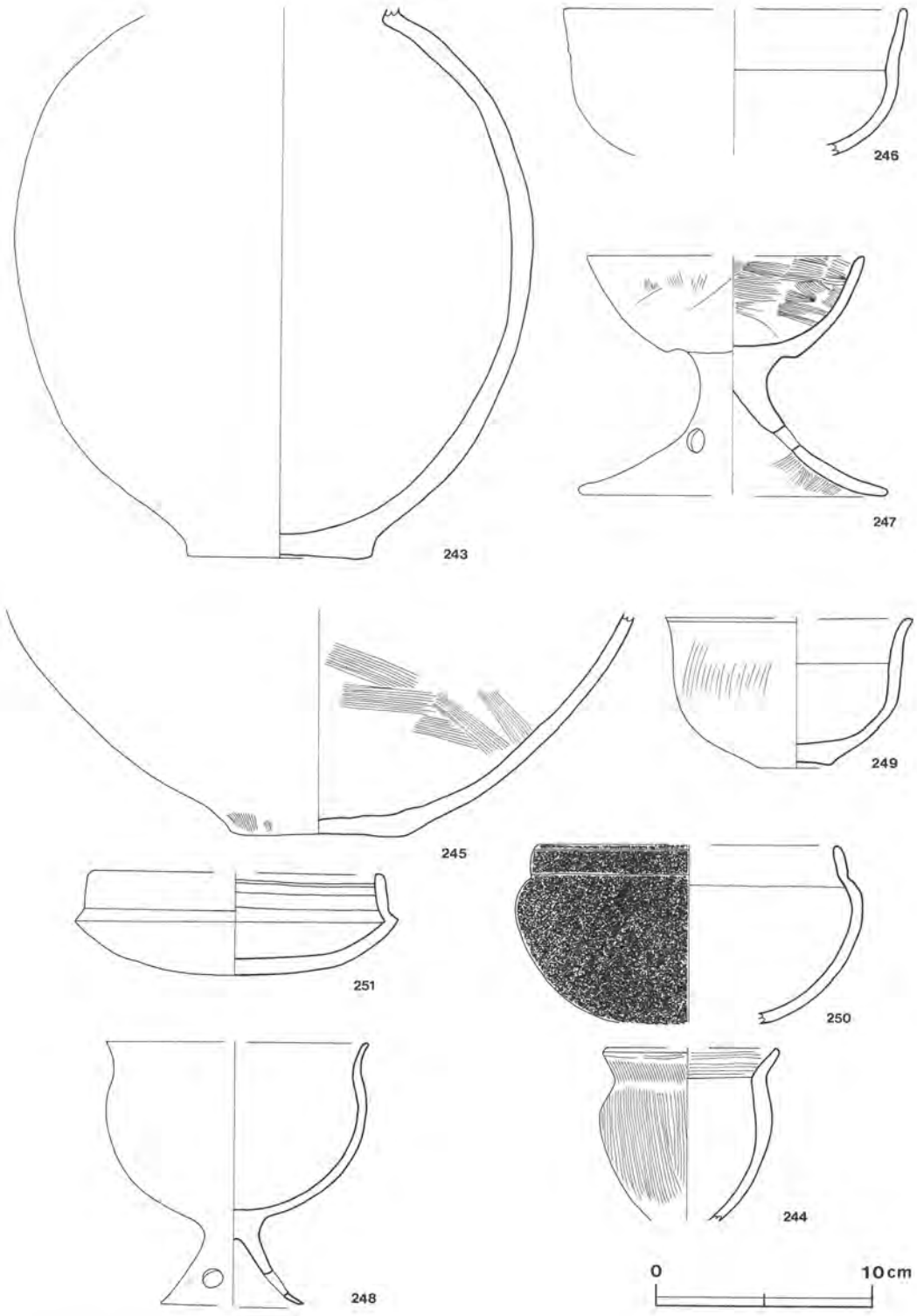
はハードロームで，やや小さい起伏がある。床面はよく踏み固められていて硬い。炉は検出されない。ピットは本跡に伴うものとして，P_1～P_{12}の12か所が検出された。主柱穴はP_1～P_4の４か所で，その規模は径30～50cm・深さ38～78cmである。P_5～P_8は支柱穴と考えられる。径は主柱穴とほぼ同じであるが，深さはずっと浅く15～30cmである。P_9は貯蔵穴と考えられ，規模は長径120cm・短径90cmの楕円形で床を50cm「U」状に掘りこんで構築している。

覆土は７層からなり，主に黒褐色土，暗褐色土，褐色土が自然堆積している。黒褐色土，暗褐色土の層は焼土粒子・炭化粒子を含んでいる。全層とも締まっている。

遺物は，覆土上層から甕形土器（P239・P245），高坏形土器（P241・P242），ミニチュア土器（P244），中・下層から甕形土器（P234・P238），壺形土器（P237），埦形土器（P250），鉢形土器（P246），北側の床面から正位で坏形土器（P235・P236・P251），甕形土器（P243），高坏形土器



第119図　第29号住居跡出土遺物実測図（1）



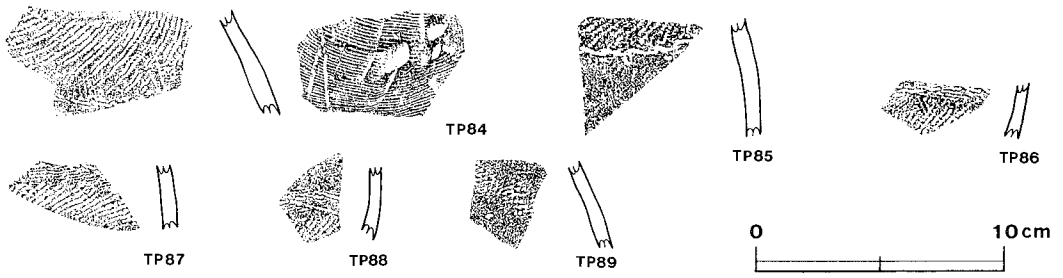
第120図　第29号住居跡出土遺物実測図（2）

(P240・P247)，器台形土器 (P248)，鉢形土器 (P249) が出土している。覆土上層から出土した遺物5点は古墳時代の五領式に比定され，流れこみと考えられる。床面から出土した遺物のうち高坏形土器は和泉式に，他はすべて鬼高式に比定される。また，中央から東側にかけての床面から，剣形品・勾玉・臼玉・管玉の石製品が442点出土している。

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 P234	甕形土器 土師器	A(14.3) B (6.0)	口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－ヘラなで後横なで	パミス・砂粒 褐灰色 普通	10%
P235	坏形土器 土師器	A(13.8) B 6.7	底部は丸底。体部は大きく内彎し，口縁部との境に稜をつくり，口縁部は外反して立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	スコリア にぶい橙色 普通	20%
P236	坏形土器 土師器	A(14.0) B 5.9	体部は直線的に外傾し，口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 体部内・外面－ヘラなで	パミス・砂・石英 にぶい橙色 良好	55%
P237	壺形土器 土師器	A 14.8 B (7.0)	口縁部はゆるく外彎して立ち上がり，口縁端部は折り返し複合口縁である。	口縁部外面－ハケ目整形後ヘラなで 内面－ヘラみがき	スコリア・パミス・砂 浅黄橙色 普通	30%
P238	甕形土器 土師器	A 17.4 B 29.0 C 6.8	底部は突出した平底。胴部はやや長胴を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部外面－ヘラなで後横なで 内面－ハケ目整形後なで 胴部外面－ハケ目整形後ヘラなで	砂・パミス 外－にぶい黄橙色 内－黒褐色 普通	60%
P239	甕形土器 土師器	A(17.1) B (6.3)	胴部は内彎し，口頸部は短かく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 胴部外面－縦横のハケ目整形 胴部内面－なで	砂 にぶい橙色 普通	15% 胴部外面煤付着
P240	高坏形土器 土師器	A 18.2 B 23.0 D(10.8)	脚部はラッパ状に下方に開く。坏部は皿状に開き，下半に稜をつくり，その後内彎して立ち上がる。	坏部内・外面－ヘラなで 脚部内・外面－ハケ目整形後ヘラなで	パミス・石英 にぶい黄橙色 普通	70%
P241	高坏形土器 土師器	A 18.0 B 12.5 D(13.3)	脚部は上半が柱状を呈し，下半がラッパ状に開く。坏部は皿状に開き，下半で稜をつくり，その後内彎して立ち上がる。	坏部内・外面・脚部外面－ヘラなで 脚部内面－丁寧なヘラなで	パミス・砂粒・礫 浅黄橙色 普通	95%
P242	高坏形土器 土師器	A 13.0 B 9.5 D(15.2)	脚部はラッパ状に開き，裾部は更に開く。坏部は内彎して立ち上がる。脚部に4孔を穿つ。	外面・坏部内面－なで 脚部内面－ハケ目整形	パミス・スコリア・石英・礫 にぶい橙色 良好	80%
第120図 P243	甕形土器 土師器	B(25.5) C 8.6	底部は突出した平底。胴部は球形状に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	砂・パミス・スコリア 灰褐色 普通	70%
P244	ミニチュア土器 土師器	A 8.2 B 8.0	胴部はゆるく内彎した後ほぼ垂直になり，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後ヘラなで	雲母・砂・石英 にぶい黄橙色 普通	65%

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第120図 P245	甕形土器 土師器	B(10.5) C 8.0	底部は平底で，胴部は大きく内彎して立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後ヘラなで	パミス・砂・礫 にぶい橙色 普通	25%
P246	鉢形土器 土師器	A(15.6) B (6.7)	胴部は内彎し，口縁部との境に稜をつくり，口縁部は外傾して立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	パミス・砂粒 橙色 普通	30%
P247	高坏形土器 土師器	A 12.8 B 11.1 D 14.0	脚部はラッパ状に下方に開く。受部は皿状に開いた後内彎して立ち上がる。	坏部内・外面・脚部内面－ハケ目整形後ヘラなで 脚部外面－丁寧なヘラなで	砂粒 明赤褐色 普通	98%
P248	器台形土器 土師器	A(12.1) B 10.6 D (6.6)	脚部は小さくラッパ状に下方に開く。坏部は外傾して立ち上がり，口縁部との境で稜をつくり，口縁部は外反する。	内面－ヘラなで 外面－ヘラみがき	スコリア 橙色 普通	30%
P249	鉢形土器 土師器	A 11.3 B 7.0 C 3.3	底部は小さく上げ底。体部は外傾した後上半でほぼ垂直に立ち，口縁部との境で稜をつくる。	口縁部内・外面－横なで 体部内面－ヘラなで 外面－ハケ目整形後ヘラなで	砂粒 浅黄橙色 普通	70%
P250	塊形土器 土師器	A 16.0 B (8.2)	体部は内彎して立ち上がり，口縁部との境に稜をつくる。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面－横なで 体部外面－丁寧なヘラなで 内面－ヘラなで	パミス・砂 にぶい赤褐色 普通	40%　外面朱彩
P251	坏形土器 土師器	A 13.6 B 4.7	底部は丸底。体部は内彎し，口縁部との境に稜をつくり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面－横なで 体部外面－ヘラなで 内面－丁寧なで	パミス・砂 にぶい橙色 普通	85%



第121図　第29号住居跡出土遺物拓影図

TP84～89は壺形土器の頸部から胴部にかけての破片で，単節縄文とS字状結節文が施されている。

石製品（PL100・105・106・109）

剣形品　中央から東側にかけての床面から出土している。未製品18点，破損品2点，完成品1点で，すべて滑石製である。完成品の大きさは，長さ4.4cm，幅1.8cm，厚さ5.5㎜，重さ6.4gで，上下側面を平たく研磨してある。実測図は完成品のみ掲載し，他は写真で掲載した。

勾　玉　東側の床面から5点出土している。滑石製で，未製品4点，完成品1点である。完成

品は長さ2.0cm，最大幅1.7cm，厚さ4㎜，重さ4.3gである。頭部に径1.5㎜の孔を穿っている。実測図は完成品のみ掲載し他は写真で掲載した。

臼　玉　中央から東側の床面，覆土下層から出土している。総数410点で，未製品244点，破損品154点，完成品12点ですべて滑石製である。未製品の内訳は面取り品121点，穿孔品121点，研磨品2点である。面取り品は五～八角形に割り出されたもので，径8～10㎜，重さ0.2～0.6ｇである。穿孔品は，面取り品の中央に孔を穿ったもので，径4～8㎜，孔径1～2㎜，重さ0.05～0.1ｇである。研磨品は穿孔品の側面を研磨したもので，完成品に近くなってくるが，上下の面はまだ研磨されていない。径5㎜，厚さ5㎜，重さ0.1ｇである。完成品は12点出土し，径4～6㎜，厚さ2～4㎜，重さ0.05～0.3ｇである。中央に径1～2㎜の孔を穿っている。実測図は完成品のみ掲載し，他は写真で掲載した。

管　玉　中央の床面から1点出土している。完成品で，長さ1.5cm，径5.5㎜，重さ0.6gの滑石製である。中央に径1.5㎜の孔を貫通させている。

他に手のひら大の滑石の原石が47点中央の床面から出土している。

第30号住居跡（第112・113図）

本跡は，遺跡中央のD1g$_0$区を中心に確認されたもので，第3号住居跡の北西約42mに位置している。東側で第24・31号住居跡と，東と北側で第29号住居跡と重複している。新旧関係は第24・31号住居跡とは不明であるが，土層堆積の切り合いから本跡が第29号住居跡よりも古いと考えられる。

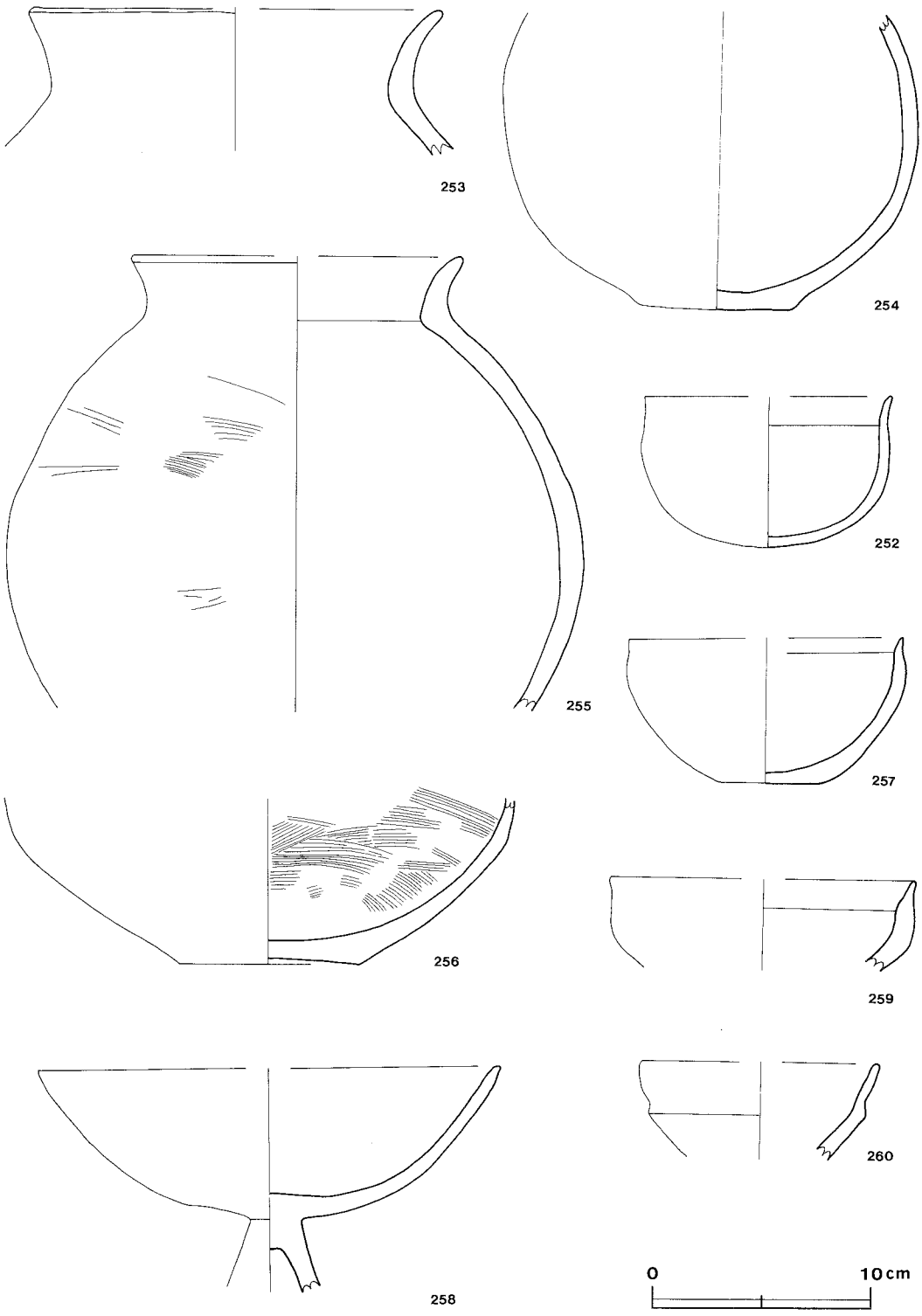
平面形は，長軸5.0m・短軸4.2mの長方形と思われ，長軸方向はN－62°－Eを指すものと考えられる。壁は重複のため，南・西側の一部しか残っていないが，上部がソフトローム，下部がハードロームで締まっており，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は52cmである。床も西側の一部しか残っていないが，ハードロームで，平坦である。床面はよく踏み固められている。炉，柱穴などは重複のため残っていない。

覆土は5層からなり，主に黒褐色土，極暗褐色土，暗褐色土，褐色土が自然堆積している。

遺物は，覆土下層から鉢形土器（P252）が出土している。古墳時代の鬼高式に比定される。また，中央の床面から，臼玉の石製品が13点出土しているが，第29号住居跡からの流れこみと考えられる。

第31号住居跡（第112・113図）

本跡は，遺跡中央のD1ho区を中心に確認されたもので，第3号住居跡の北西約42mに位置して



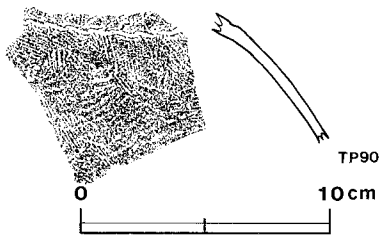
第122図　第30・31号住居跡出土遺物実測図 (1)

いる。東側で第24号住居跡と，西側で第31号住居跡と，北側で第29号住居跡と重複している。新旧関係は第24・30号住居跡とは不明であるが，第29号住居跡が本跡の床を切っており，重複部分にも本跡の貼り床の跡がないことから，本跡が第29号住居跡よりも古いと考えられる。

平面形は，長軸4.4m・短軸3.5mの長方形と思われ，長軸方向はN－30°－Eを指すものと考えられる。壁は重複のため南側の一部しか残っていないが，ソフトロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は24cmである。床も南側の一部しか残っていない。ソフトロームで，平坦である。床面は硬いが踏み固めた様子はみられない。炉・柱穴などは重複のため残っていない。

第30・31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第122図 P252	鉢形土器 土師器	A(11.3) B 7.1	底部は丸底。体部は器肉が一定で内彎し，口縁部との境に稜をつくり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面－横なで 体部外面－ヘラなで 内面－ヘラみがき	砂・パミス にぶい橙色 普通	20%
P253	甕形土器 土師器	A(19.0) B (6.5)	口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部外面－ヘラなで 内面－横のヘラなで	パミス・砂 橙色 普通	10%
P254	甕形土器 土師器	B(13.8) C 7.0	底部は平底でやや突出ぎみ。胴部は球形を呈する。	内・外面－ヘラなで	パミス・砂 橙色 普通	50%
P255	甕形土器 土師器	A(15.2) B(21.5)	胴部は長胴化し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－丁寧なヘラなで 胴部内・外面－ヘラなで	パミス・砂・雲母 外－明赤褐色 内－にぶい橙色 普通	20%
P256	甕形土器 土師器	B (7.7) C 8.2	底部は平底で，胴部は大きく内彎して立ち上がる。	胴部内面上半・外面－丁寧なヘラなで 胴部内面下半－ハケ目整形	砂・雲母 にぶい橙色 普通	15%
P257	鉢形土器 土師器	A 12.5 B 6.8 C 4.5	底部は器肉がうすく平底。体部は内彎し，口縁部との境でややくびれる。口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 体部外面－ヘラみがき 内面－ヘラなで	礫・パミス 外－灰褐色 内－にぶい橙色 良好	98% 体部外面煤付着
P258	高坏形土器 土師器	A 21.2 B(10.4)	坏部は大きく内彎しながら外上方に立ち上がる。	内・外面－丁寧なヘラなで	砂・スコリア にぶい橙色 良好	70%
P259	坏形土器 土師器	A 13.8 B (4.1)	体部は器肉が厚く，内彎して立ち上がり，口縁部で垂直になる。口縁端部は尖る。	口縁部内・外面－横なで 体部内・外面－ヘラなで	石英・砂粒 橙色 普通	30%
P260	坩形土器 土師器	A 10.8 B (4.5)	口縁部は外傾して立ち上がり，口縁部との境に稜をつくり，口縁部は器肉を減じながら垂直に立ち上がる。	外面－丁寧なヘラなで後横なで 内面－丁寧なヘラなで	砂粒 赤色 良好	40%



第123図 第31号住居跡出土遺物拓影図

覆土は3層からなり，すべて黒褐色土が自然堆積している。3層とも焼土粒子・炭化粒子を含み締まっている。

遺物は，覆土の下層から甕形土器（P253・P254・P256），鉢形土器（P257），坏形土器（P259），高坏形土器（P258），坩形土器（P260），南側の床面から横位

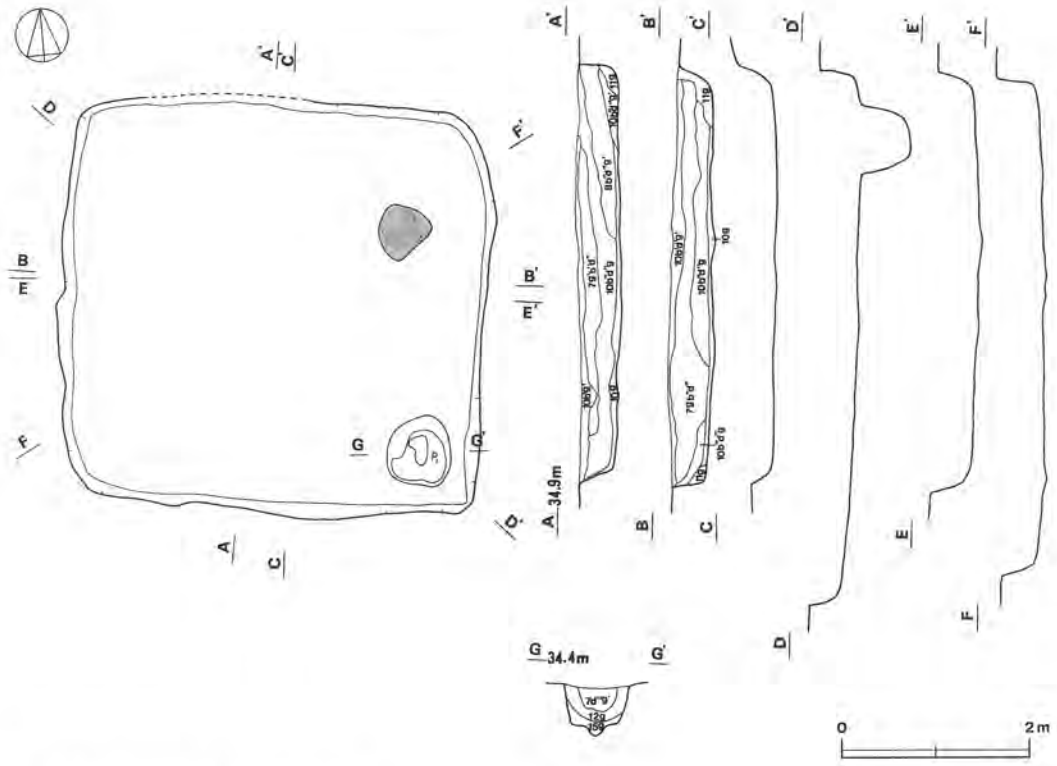
で甕形土器（P255）が出土している。高坏形土器，坩形土器は和泉式に比定され，すべて古墳時代の鬼高式に比定される。また，中央の床面から臼玉の石製品が4点出土しているが，第29号住居跡からの流れこみと考えられる。

TP90は，壺形土器の頸部から胴部にかけての破片で，単節のLR縄文下にS字状結節文が施されている。

第39号住居跡（第124図，石製品製作跡）

本跡は，遺跡中央のD1b$_9$区を中心に確認されたもので，第1号住居跡の南約34mに位置している。北側で第40A号住居跡と重複している。新旧関係は，本跡が第40A号住居跡の床を切り，重複部分に第40A号住居跡の貼り床の跡がないことから，本跡が第40A号住居跡よりも新しいと考えられる。

平面形は，長軸2.3m・短軸2.2mの隅丸方形で，長軸方向はN－0°である。壁は上部がソフトローム，下部がハードロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は25～45cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はよく踏み固められている。特に，北側には焼土まじりの黒褐色



第124図　第39号住居跡実測図

土が床面よりも2～3cm高く踏み固められており，出入口かと考えられる。炉・柱穴は検出されない。南コーナー部に検出されたP$_1$は貯蔵穴と考えられ，径75cmの円形で，床を57cm掘りこんで構築されている。貯蔵穴の覆土は3層で，暗褐色土，褐色土，明褐色土が堆積しており，断面は「└┘」である。

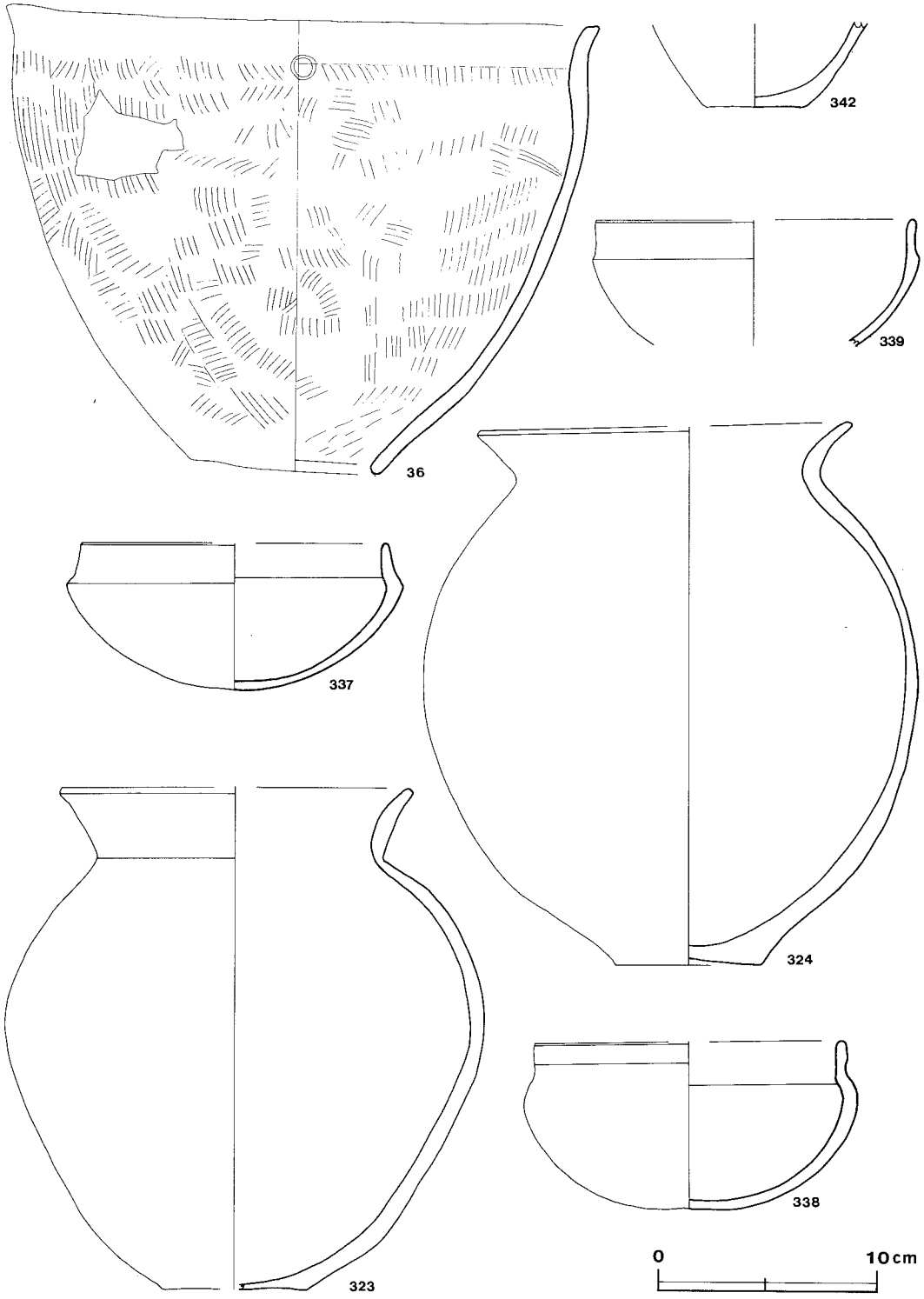
覆土は5層からなり，主に暗褐色土，褐色土が自然堆積している。上層は焼土粒子・炭化粒子を含み，全層とも締まっている。

遺物は，覆土の上層から壺形土器（P331），中層から甕形土器（P323・P329・P330），坏形土器（P342），下層から坏形土器（P332～P334・P336・P337），北東側コーナー部床面から破片で甕形土器（P31・P32・P34・P324・P328），南東側コーナー部の床面から横位で，甕形土器（P33・P325・P326），貯蔵穴覆土中層から破片で甕形土器（P35・P327），甑形土器（P36）貯蔵穴覆土下層から破片で，坏形土器(P338・P339)，埦形土器(P335)，北壁下の床面から横位で，甑形土器(P340)，南東側コーナー部の床面から逆位で，鉢形土器（P341），北壁下の床面から破片で，坩形土器（P333・P334）が出土している。上層から出土した壺形土器は古墳時代の五領式に比定され，流れこみと考えられる。床面から出土した坩形土器は和泉式に比定され，他はすべて鬼高式に比定される。和泉式の土器は鬼高式と一緒に使用されたものと考えられる。また，北西側から，西側・南西側にかけて，一面に覆土下層から臼玉の石製品が14点，東・北側の床面から勾玉，臼玉の石製品が350点出土している。

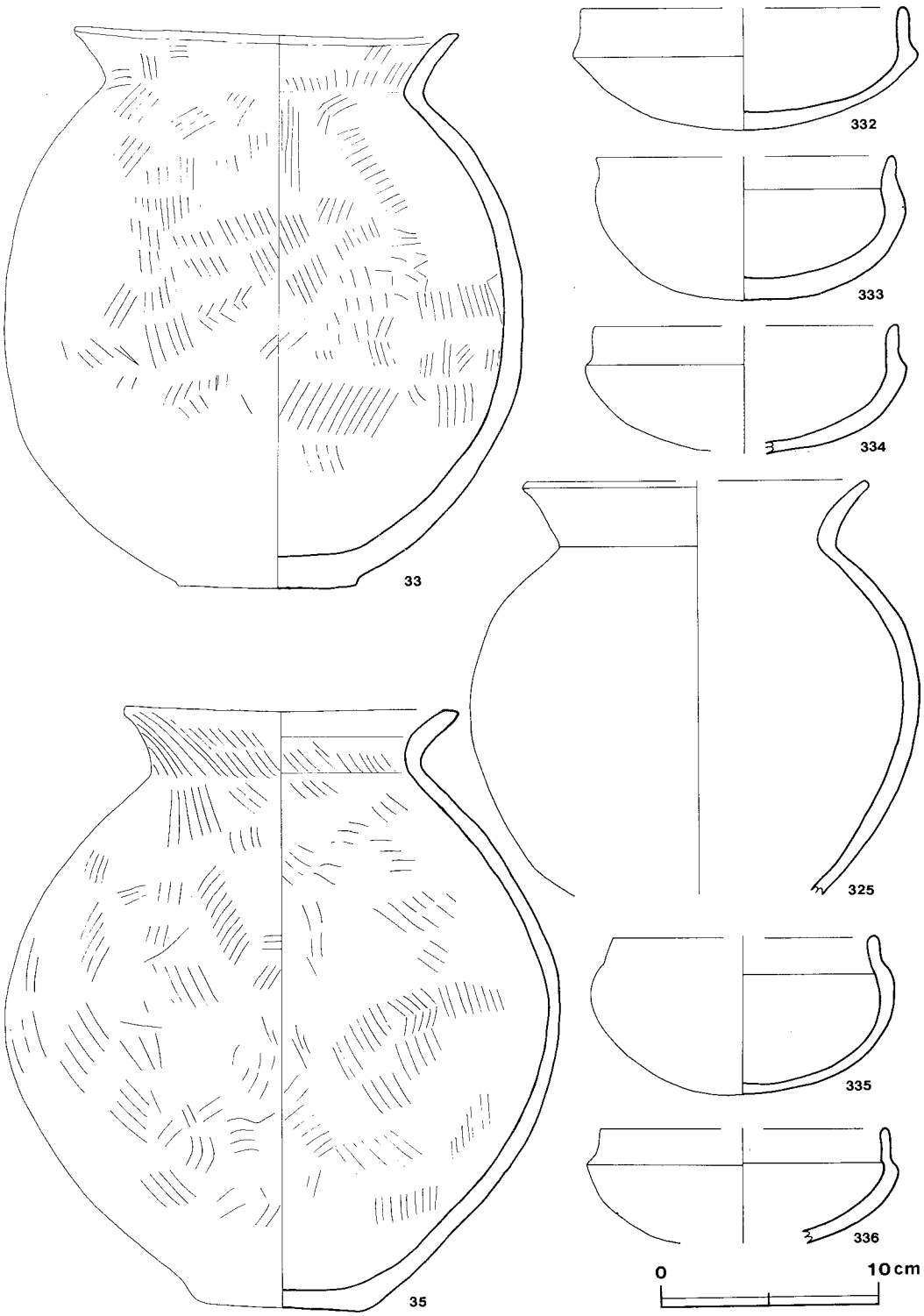
第39号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第127図 P31	甕形土器 土師器	A 17.6 B 25.9 C 6.2	底部は突出する平底。胴部は球形を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	外面－ヘラなで 内面－なで	砂粒・スコリア 暗褐色 良好	90%
P32	甕形土器 土師器	A 16.3 B 25.9 C 7.9	底部は平底。胴部は長胴で，中位に最大径をもつ。口頸部は「コ」の字状に近い立ち上がりである。	外面－ヘラなで 内面－なで	砂粒 にぶい褐色 良好	80% 胴部下半 外面煤付着
第126図 P33	甕形土器 土師器	A 17.5 B 25.4 C 8.2	底部は突出する平底。胴部は球形を呈するが長胴に近くなり，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	砂粒・スコリア 灰褐色 良好	90%
第127図 P34	甕形土器 土師器	A 13.6 B 18.0 C 6.6	底部は突出する平底。胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面－粗いヘラなで 内面－なで	砂粒・パミス 灰褐色 良好	90%
第126図 P35	甕形土器 土師器	A 15.3 B 27.1 C 7.7	底部は突出した平底。胴部は球形を呈し，中位に最大径をもつ。口頸部は「コ」の字状に近い立ち上がりである。	外面－粗いヘラなで 内面－なで	砂粒・石英・長石・礫 褐色 良好	98%
第125図 P36	甑形土器 土師器	A 27.2 B(20.2) 孔径 8.1	深鉢形の甑。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部との境でややくびれる。底部は突き抜け。	内・外面－ヘラなで	砂粒・パミス・礫 にぶい褐色 良好	85%

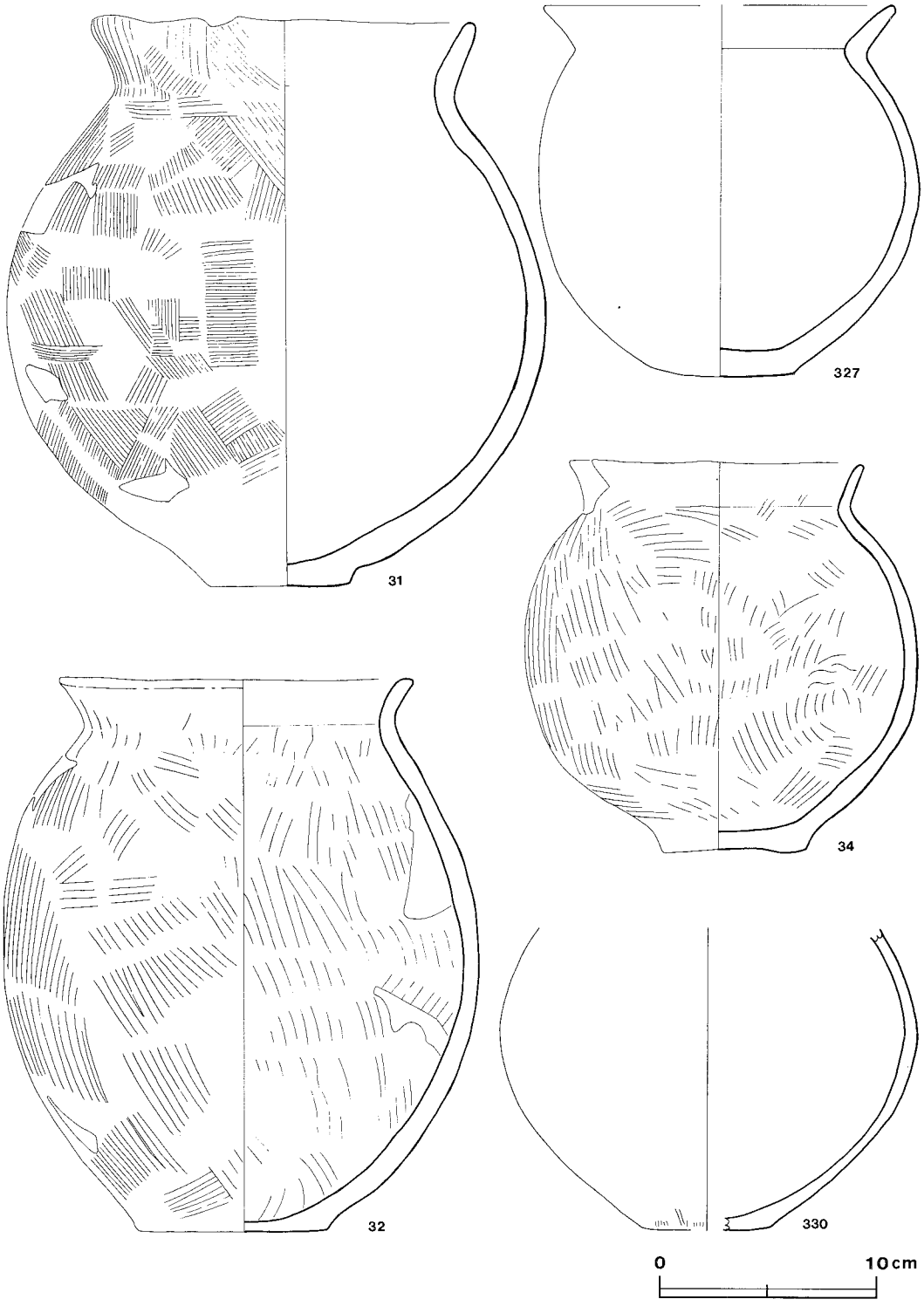
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第125図 P323	甕形土器 土師器	A 16.0 B 23.4 C 6.8	底部は器肉がうすく平底である。胴部は長胴化し，口頸部は器肉が厚く，ゆるい「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ヘラなで 胴部内面－なで	パミス・砂・礫・スコリア にぶい橙色 普通	90%
P324	甕形土器 土師器	A 16.9 B 25.3 C 6.8	底部は突出し，やや上げ底である。胴部は長胴化し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	スコリア・礫・パミス 明褐灰色 普通	90%
第126図 P325	甕形土器 土師器	A 15.4 B(19.1)	胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	礫 明褐灰色 普通	70%
第128図 P326	甕形土器 土師器	A 15.5 B 23.9 C 6.8	底部は突出した平底で，胴部は長胴である。口縁部はゆるく外傾して立ち上がる。	外面・胴部内面－ヘラなで 口縁部内面－横なで	スコリア・石英・砂粒 橙色 普通	100% 胴部下半煤付着
第127図 P327	甕形土器 土師器	A 16.0 B 17.1 C 7.0	底部は器肉が厚く平底である。胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	スコリア・砂粒 にぶい赤褐色 普通	60%
第128図 P328	甕形土器 土師器	A 14.4 B(15.6)	胴部は長胴化し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。胴部内面に輪積痕を残す。	内・外面－なで	スコリア・パミス・礫・長石・石英 にぶい橙色 普通	50%
第129図 P329	甕形土器 土師器	B(12.6) C 7.4	底部は突出し，わずかにあげ底である。胴部は長胴化すると思われる。	内・外面－なで	礫・長石・スコリア にぶい橙色 不良	30%
第127図 P330	甕形土器 土師器	B(14.0) C (6.0)	底部は平底で，胴部は球形を呈する。	内・外面－ハケ目整形後なで	スコリア・砂・石英 にぶい橙色 普通	25%
第128図 P331	壺形土器 土師器	A(30.6) B(10.5)	口縁部は頸部から外彎して立ち上がった後皿状に開き，さらに外傾して立ち上がる。口縁端部は水平な面をもち，内面凸帯を付ける。	口縁部外面－縦のハケ目整形 4本の棒状浮文を一対にして4対巡らす。 内面－横のハケ目整形	砂・礫 にぶい黄橙色 普通	20% 口縁部内面煤付着
第126図 P332	坏形土器 土師器	A 14.7 B 5.6	底部は丸底。体部は外傾し，口縁部との境で段をつくる。口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面－ヘラなで 体部内・外面－粗いヘラなで	スコリア・砂粒・石英 橙色 普通	98%
P333	坏形土器 土師器	A 13.5 B 6.6	底部は丸底。体部は内彎し，口縁部との境でくびれる。口縁部は垂直に立ち上がり，口縁端部は尖る。	内・外面－粗いヘラなで	スコリア・石英・パミス 橙色 普通	95%
P334	坏形土器 土師器	A 13.8 B 5.9	底部は丸底で，体部は内彎し，口縁部との境で稜をつける。口縁部は垂直に立ち上がる。	外面－ヘラなで 内面－粗いヘラなで	スコリア 赤褐色 普通	95%
P335	埦形土器 土師器	A 12.0 B 7.3	底部は丸底で，体部は内彎し，口縁部との境でくびれる。口縁部は内傾して立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	スコリア・砂粒・石英 橙色 普通	85%
P336	坏形土器 土師器	A 13.1 B 5.2	底部は丸底で，体部は内彎し，口縁部との境で段をつける。口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面・体部内面－ヘラなで 体部外面－粗いヘラなで	スコリア・雲母 橙色 普通	60%
第125図 P337	坏形土器 土師器	A 14.0 B 6.8	底部は丸底で，体部は内彎し，口縁部との境で段をもつ。口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面・体部内面－ヘラなで 体部外面－粗いヘラなで	スコリア・礫・砂 にぶい橙色 普通	45%



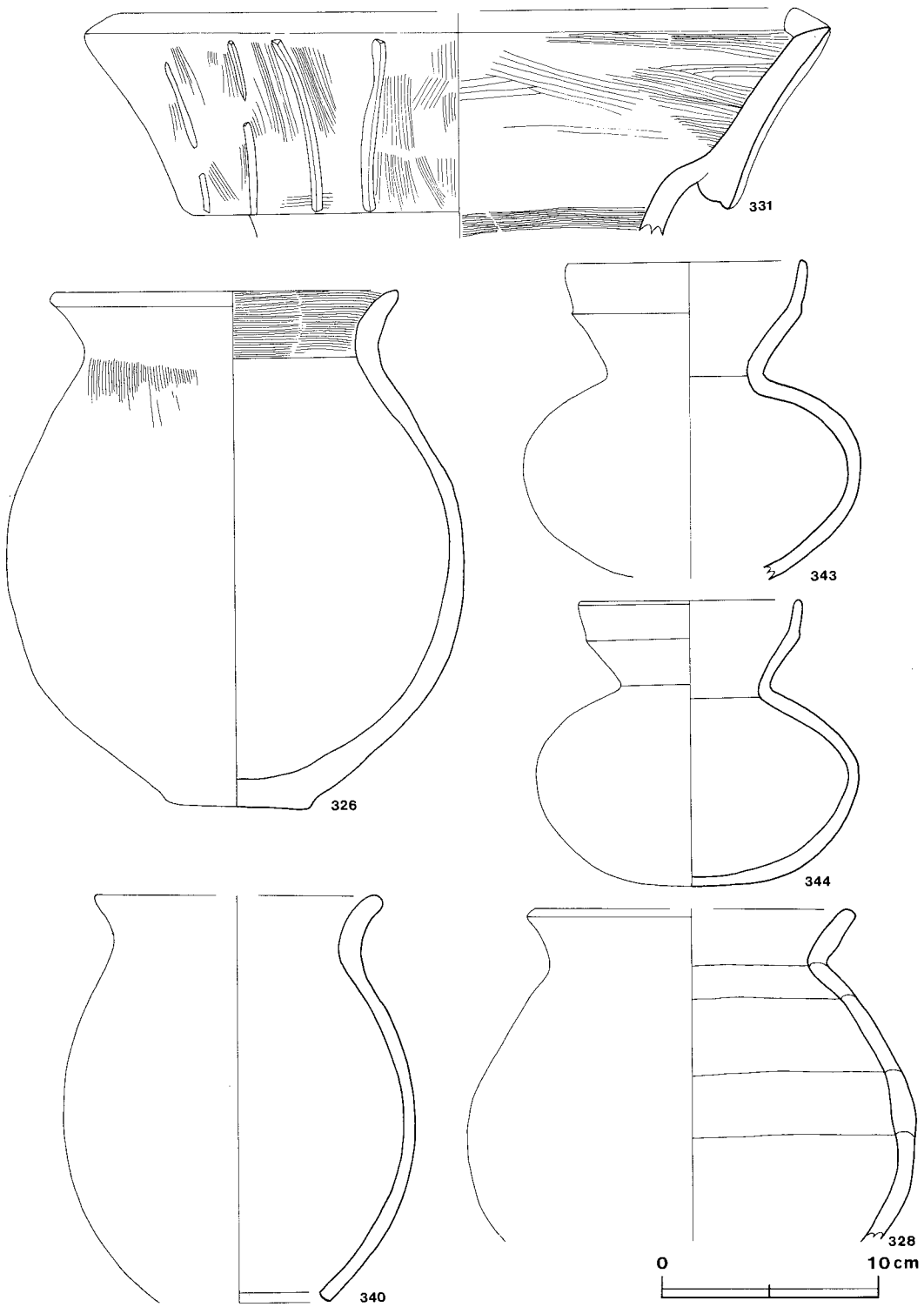
第125図　第39号住居跡出土遺物実測図（1）



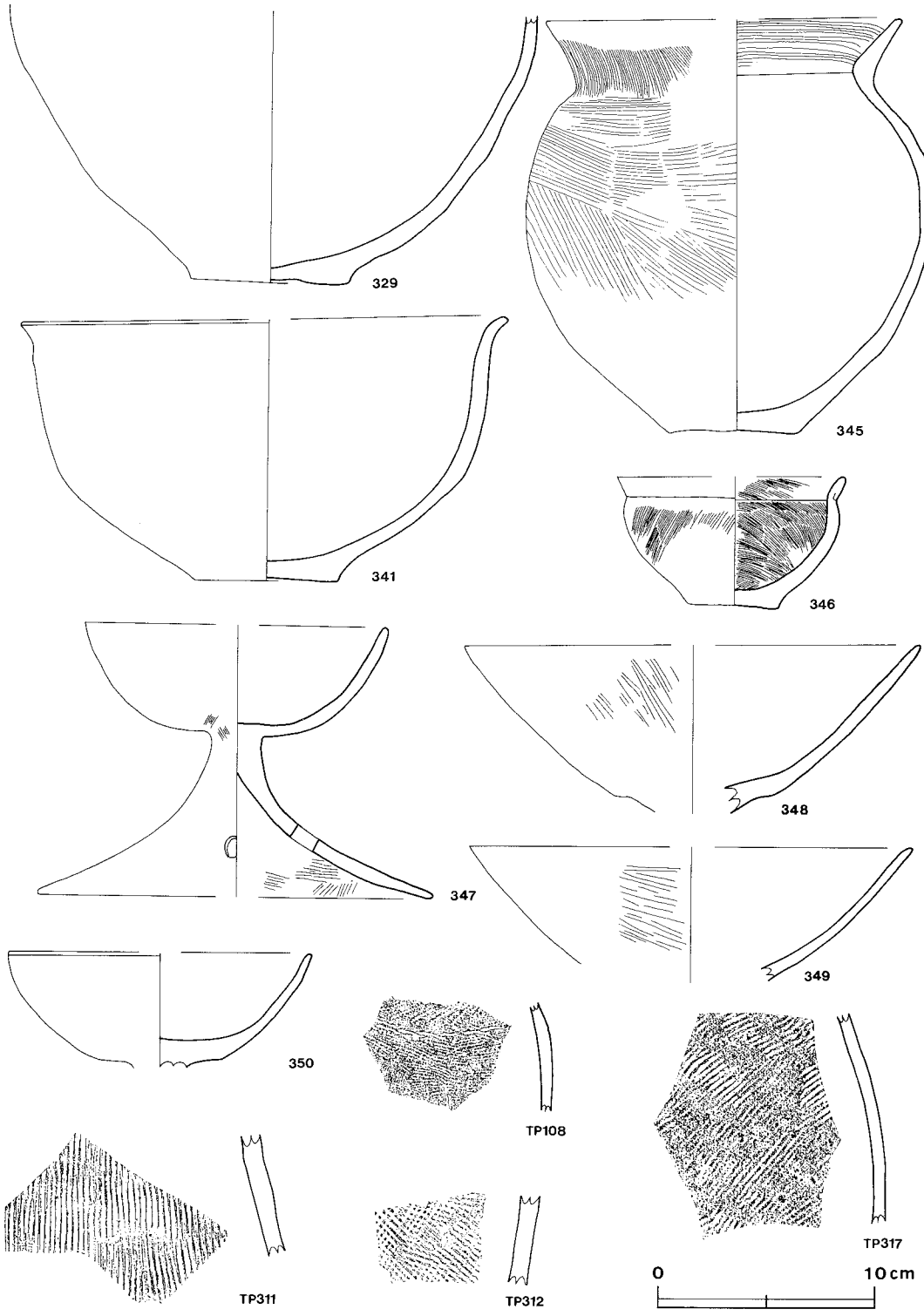
第126図　第39号住居跡出土遺物実測図（2）



第127図　第39号住居跡出土遺物実測図（3）



第128図　第39号住居跡出土遺物実測図（4）



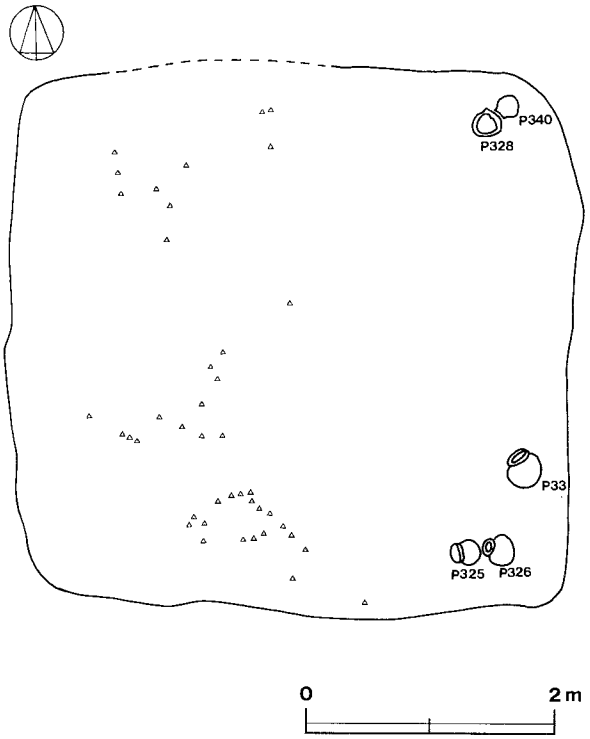
第129図　第39・40Ａ号住居跡出土遺物実測図・拓影図（5）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第125図 P338	坏形土器 土師器	A 14.2 B 7.8	底部は丸底で，体部はやや内彎し，口縁部との境でくびれ，口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面・体部内面－ヘラなで 体部外面－粗いヘラなで	砂・雲母・礫 明赤褐色 普通	30%
P339	坏形土器 土師器	A(14.6) B (5.8)	体部は内彎し，口縁部との境に稜をつける。口縁部は垂直に立ち上がり，口縁端部は丸味をもつ	内・外面－粗いヘラなで	砂 橙色 普通	15%
第128図 P340	甑形土器 土師器	A 12.8 B(19.2) 孔径 7.5	胴部は長胴で，口縁部は外彎しながら立ち上がる。孔は突き抜け状に穿つ。	内・外面－ヘラなで	スコリア・パミス・石英・砂粒 淡赤橙色 普通	95%
第129図 P341	鉢形土器 土師器	A 22.2 B 12.5 C 6.6	底部は突出し，平底である。体部は外傾し，中位で垂直ぎみとなる。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 体部内・外面－粗いヘラなで	礫・砂・パミス 橙色 良好	95%
第125図 P342	坏形土器 土師器	B (3.8) C 4.6	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	雲母・石英・スコリア 橙色 普通	50%
第128図 P343	坩形土器 土師器	A 11.0 B(14.7)	体部は扁平な球形を呈し，口頸部は「く」の字状になり，後中位で垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面・体部外面－丁寧なヘラなで 体部内面－ヘラなで	パミス・雲母・砂粒 橙色 良好	65%
P344	坩形土器 土師器	A 10.0 B 13.3	体部は扁平な球形を呈し，口頸部は「く」の字状になり，後中位で垂直に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	砂・礫・スコリア・パミス にぶい赤褐色 普通	100%

TP108は，壺形土器の胴部片で，S字状結節文が施されている。TP311・312・317は，須恵器の甕形土器の胴部片と思われる。外面には，平行叩きが認められる。

第40A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第129図 P345	甕形土器 土師器	A 16.3 B 19.2 C 6.0	底部は平底で，胴部はやや球形状を呈する。口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面・口縁部内面－ハケ目整形 胴部外面－なで	砂粒 赤褐色 普通	70%
P346	埦形土器 土師器	A 10.4 B 6.0 C 4.2	底部は平底で，体部は内彎し，内面中位に稜をつくる。口縁部は外傾して立ち上がり，口縁端部で折り返す。	内・外面－ハケ目整形	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	95%
P347	高坏形土器 土師器	A 14.0 B 12.6 D 18.3	脚部はラッパ状に大きく下方に開く。坏部は内彎して立ち上がる。脚部に4孔を穿つ。	内・外面－ハケ目整形後なで	スコリア・石英・砂粒 橙色 普通	85%
P348	高坏形土器 土師器	A 20.9 B (7.8)	坏部は下半で稜をつくり，その後直線的に外傾して立ち上がる。	外面－ハケ目整形後粗いヘラなで 内面－なで	パミス・石英・礫 橙色 普通	25%
P349	高坏形土器 土師器	A 20.4 B (6.2)	坏部は直線的に外傾して立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂粒・礫・石英 にぶい赤褐色 普通	30%
P350	高坏形土器 土師器	A 13.8 B (5.3)	坏部は皿状に開いた後下半で稜をつくり，その後外傾して立ち上がる。	内・外面－丁寧ななで	礫・パミス にぶい橙色 普通	30%



第130図　第39号住居跡（第３号製作跡）石製品出土状況図

石製品（PL101・105）

勾　玉　東側壁下の床面から１点出土している。長さ3.3cm，最大幅1.6cm，厚さ4.5㎜，重さ31gで，頭部に径２㎜の孔を穿っている。腹背両側面に波形の稜をもち，竜の落し子を思わせる子持勾玉である。上下側面を丁寧に研磨している。

臼　玉　北側に床面一帯に総数363点出土している。未製品290点，破損品66点，完成品７点で，すべて滑石製である。完成品は径4.5～5.5㎜，厚さ1.5～4.0㎜，重さ0.05～0.1gで，中央に径1.5～２㎜の孔を穿っている。実測図は完成品のみ掲載し，他は写真で掲載した。

他にこぶし大の滑石の原石が，北側一帯の床面から18点出土している。

第41号住居跡（第131図・石製品製作跡）

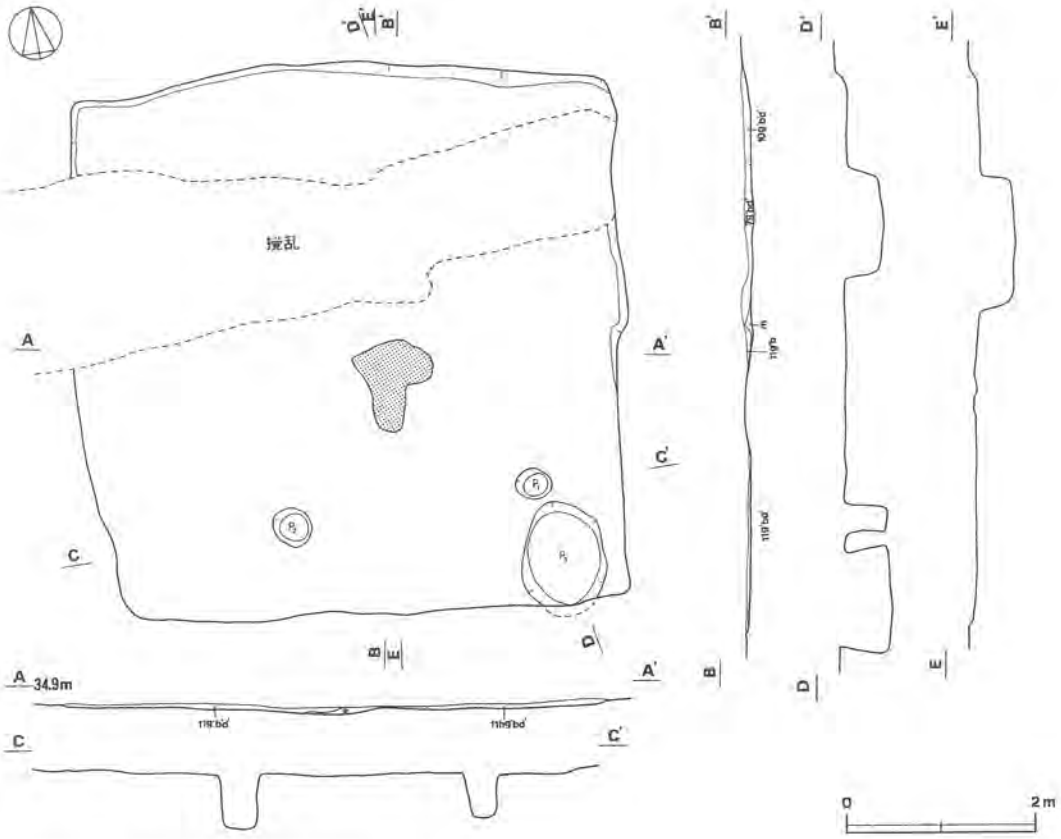
本跡は，遺跡中央のC1i_0区を中心に確認されたもので，第１号住居跡の北約20mに位置している。西側から東側にかけて横に細長い撹乱穴が掘られている。

平面形は，長軸5.9m・短軸5.7mの方形で，長軸方向はN－7°－Eである。壁はソフトロームで床面から外傾して立ち上がっている。壁高は２～12cmである。床はソフトロームでやや起伏がある。床面は部分的に踏み固められている。炉は中央に検出され，最大幅98cm・最小幅88cmの不定形で，床面を２cm掘り凹めた地床炉である。炉床は赤く焼け，レンガ状に硬化している。柱穴はP_1・P_2の２か所で，その規模は径36・41cm，深さ50・57cmである。他の柱穴は撹乱のため削平されたものと考えられる。P_3は貯蔵穴と考えられ，長径98cm・短径76cmの楕円形で，床を49cm掘りこんで構築されている。形状は袋状に掘りこまれている。貯蔵穴の覆土は暗褐色土１層が堆積し

ている。

覆土は7層からなり，主に暗褐色土，褐色土が堆積している。南側が撹乱を受けているが，他は自然堆積である。どの層もローム粒子・炭化粒子を含み締まりはない。

遺物は，覆土の下層から破片で甕形土器(P355)，南東側コーナー部の床面および貯蔵穴覆土中層から破片で，甕形土器（P356）が出土している。両者とも古墳時代の鬼高式に比定される。また，中央から南側一帯にかけて，覆土下層から臼玉の石製品が15点，床面から臼玉，剣形品，円板，紡錘車の石製品が13点出土している。



第131図　第41号住居跡実測図

石製品（PL102・106・107）

剣形品　中央の床面から1点出土している。未製品で，滑石製である。写真で掲載した。

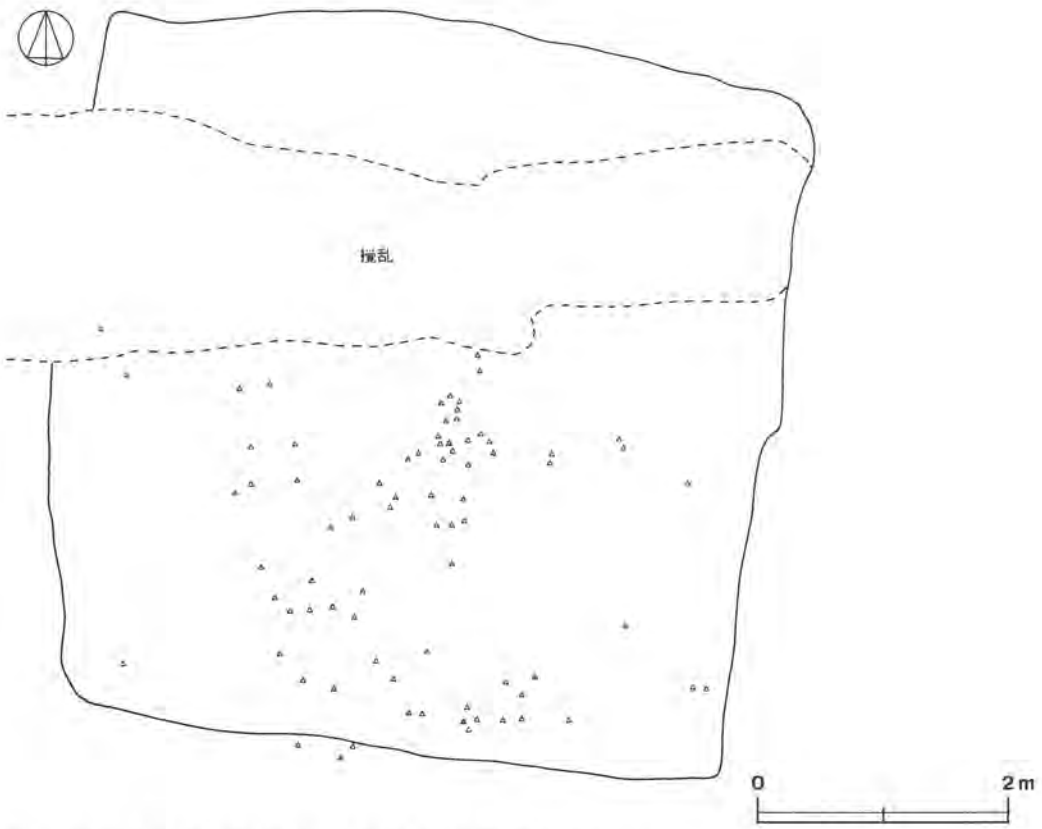
円　板　中央の床面から2点出土している。未製品1点，破損品1点で，ともに滑石製である。写真で掲載した。

臼　玉　北側を除く床面一帯から総数146点出土している。未製品142点，完成品4点で滑石製

である。完成品は径4.5～5㎜，厚さ2～3㎜，重さ0.05～0.1gで，中央に径1～1.5㎜の孔を穿っている。実測図は完成品のみ掲載し，他は写真で掲載した。

紡錘車　西側の床面から1点出土している。形割品で，上下側面を彫刻刀状のもので截頭円錐形に削り出している。最大径5.2cm，厚さ1.95cm，重さ74.3gで滑石製である。

他にこぶし大の滑石の原石が3点中央・西側の床面から，手のひら大の砂岩砥石が11点中央の床面から出土している。



第132図　第41号住居跡（第4号製作跡）石製品出土状況図

第42号住居跡（第133図）

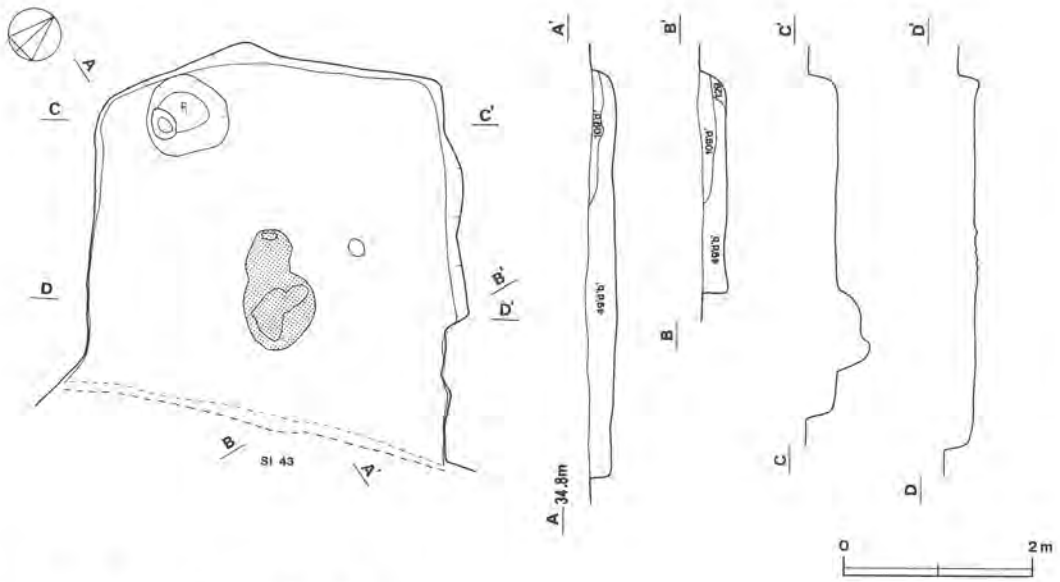
本跡は，遺跡中央のD2c$_3$区を中心に確認されたもので，第19号住居跡の北西約12mに位置している。南東側で第43号住居跡と重複している。新旧関係は，土層堆積状況と貼り床から本跡が第43号住居跡よりも新しいと考えられる。

平面形は，長軸5.7m・短軸4.0mの長方形で，長軸方向はN－47°－Wである。壁はソフトロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は25～40cmである。床はハードロームでやや起伏が

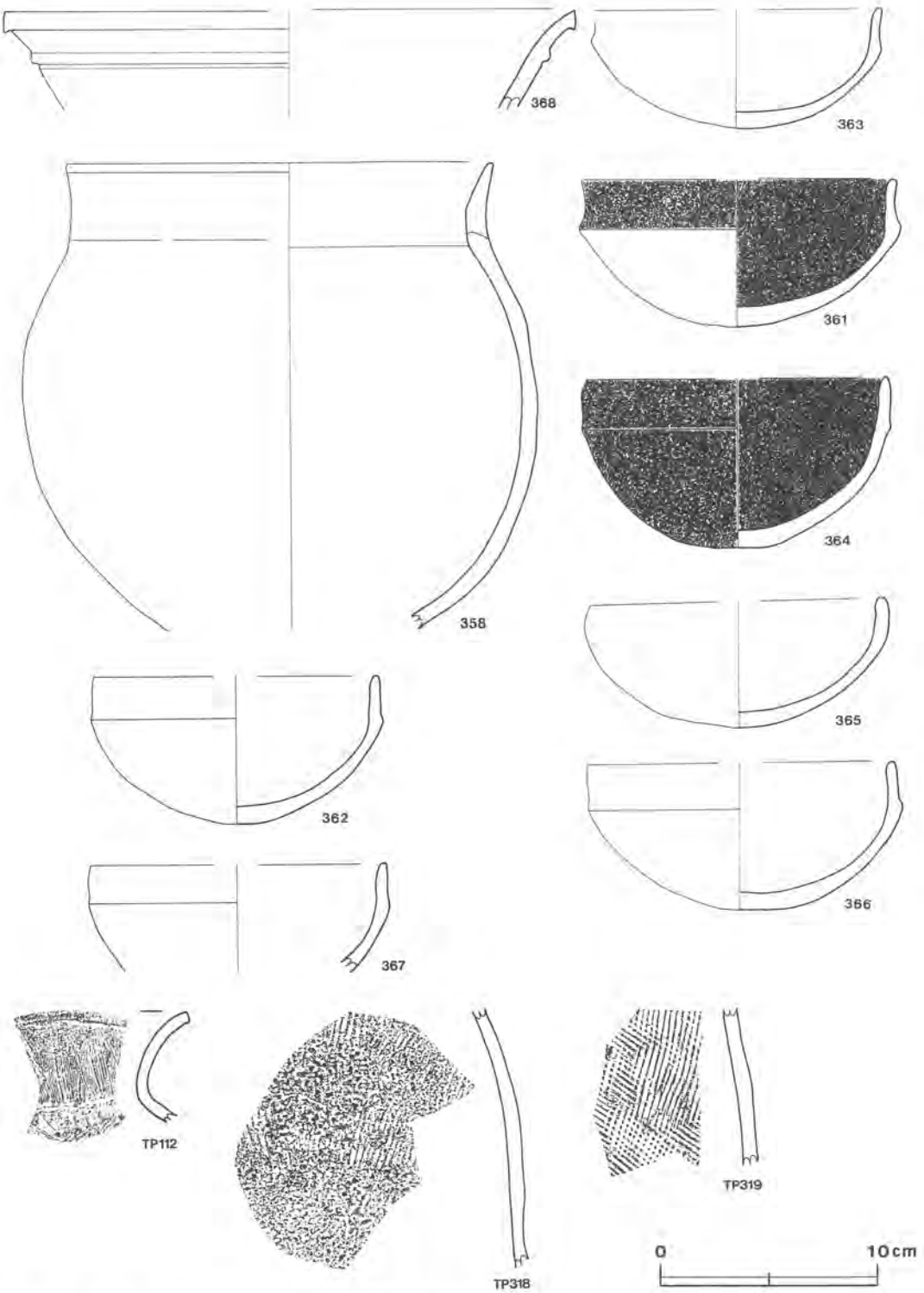
ある。床面はどの部分もよく踏み固められている。南東側の第43号住居跡との重複部分には，約20cmの厚さでハードローム層の貼り床がしてある。炉は中央に検出され，長径126cm・短径74cmの不整楕円形で，床を4cm掘り凹めた地床炉である。炉床は南東側がよく焼けており，レンガ状に硬化している。柱穴は検出されない。P_1は貯蔵穴と考えられ，径84cmの円形で床を39cm掘りこんで構築している。

覆土は2層からなり，褐色土，黒褐色土が自然堆積している。2層とも焼土粒子・炭化粒子を含み，締まっている。

遺物は，覆土の中層から須恵器の甕形土器（P368），覆土下層から甕形土器（P358），坏形土器（P361～P363・P367），北東側コーナー部の床面から逆位で甕形土器(P357)，横位で小型甕形土器（P359），甕形土器（P360），南東側コーナー部の床面から正位で重なって埦形土器（P364），坏形土器（P365・P366）が出土している。また，勾玉，臼玉の石製品や原石が北西・北東側コーナー部から出土している。土器はすべて古墳時代の鬼高式に比定される。また，北西側コーナー部の床から勾玉2点，北東側コーナー部から臼玉5点の石製品が出土している。



第133図　第42号住居跡実測図



第134図　第42号住居跡出土遺物実測図・拓影図

第42号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第75図 P357	甕形土器 土師器	A 17.5 B 29.0 C 8.0	底部は突出した平底。胴部は下位に最大径をもち下ぶくれ状。口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	砂粒 にぶい橙色 普通	98% 外面煤付着
第134図 P358	甕形土器 土師器	A 20.0 B (21.8)	胴部は球形を呈し，口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内・外面－丁寧な横なで 胴部外面－縦のヘラなで 内面－横のヘラなで	砂粒・長石 外－褐灰色 内－浅黄橙色 良好	85% 胴部外面下半煤付着
第75図 P359	小型甕形土器 土師器	A 13.2 B 15.0 C 7.5	底部は突出した平底。胴部は球形を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	外面－粗いヘラなで 内面－ヘラなで	砂粒・長石 外－にぶい褐色 内－にぶい橙色 良好	100% 外面煤付着
P360	甕形土器 土師器	A 15.4 B (17.5)	胴部は球形を呈し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－丁寧な横なで 胴部内・外面－ヘラなで	砂粒 外－淡赤橙色 内－赤灰色 良好	80%
第134図 P361	坏形土器 土師器	A 14.3 B (6.9)	底部は丸底。体部は内彎し口縁部との境に稜をもつ。口縁部は垂直に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	砂・礫 明赤褐色 普通	98% 口縁部外面・内面朱彩
P362	坏形土器 土師器	A 13.2 B 7.0	底部は丸底。体部は内彎し，口縁部との境に小さな稜をもつ。口縁部は垂直に立ち上がる。	外面－ヘラなで 内面－丁寧なヘラなで	砂・長石・スコリア 赤色 普通	98%
P363	坏形土器 土師器	A 13.1 B 5.5	底部は丸底。体部は内彎し，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は垂直に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	砂粒 外－赤色 内－橙色 普通	100%
P364	埦形土器 土師器	A 13.8 B 7.7	底部は丸底。体部は内彎し，口縁部との境に小さな稜をもつ。口縁部は直立し，口縁端部は尖る。	口縁部外面－横なで 内面・胴部外面－ヘラなで	砂粒・長石・石英 赤色 良好	98% 内・外面朱彩
P365	坏形土器 土師器	A 13.5 B 5.8	底部は丸底。体部は内彎し，口縁部はやや内傾して立ち上がる。	外面－ヘラなで 内面－丁寧なヘラなで	砂粒 赤色 普通	90%
P366	坏形土器 土師器	A 14.4 B 7.0	底部は丸底。体部は内彎し，口縁部との境に稜をもつ。	内・外面－ヘラなで	砂粒・スコリア・長石 赤色 普通	80%
P367	坏形土器 土師器	A 13.8 B (5.0)	体部は内彎すると思われ，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部外面－横なで 胴部外面－粗いヘラなで 内面－ヘラなで	砂粒・石英 外－にぶい橙色 内－褐灰色 普通	25%
P368	甕形土器 須恵器	A (26.6) B (5.2)	口縁部片。外傾して立ち上がり中位に1本の凸帯をつける。口縁端部は尖り，下方に稜をもつ。	内・外面－ロクロ整形痕	細砂・長石 灰色 良好	5% 外面灰釉付着

TP112は，甕形土器の口縁部片である。TP318・19は，須恵器で甕形土器の胴部片である。外面に平行叩きが認められる。

石製品（PL105）

勾　玉　北西側コーナー部の床面から2点出土している。未製品1点，完成品1点でともに滑

石製である。完成品は長さ3.3cm，最大幅２cm，厚さ６mm，重さ6.2gで，頭部に径２mmの孔を穿っている。実測図は完成品のみ掲載し，他は写真で掲載した。

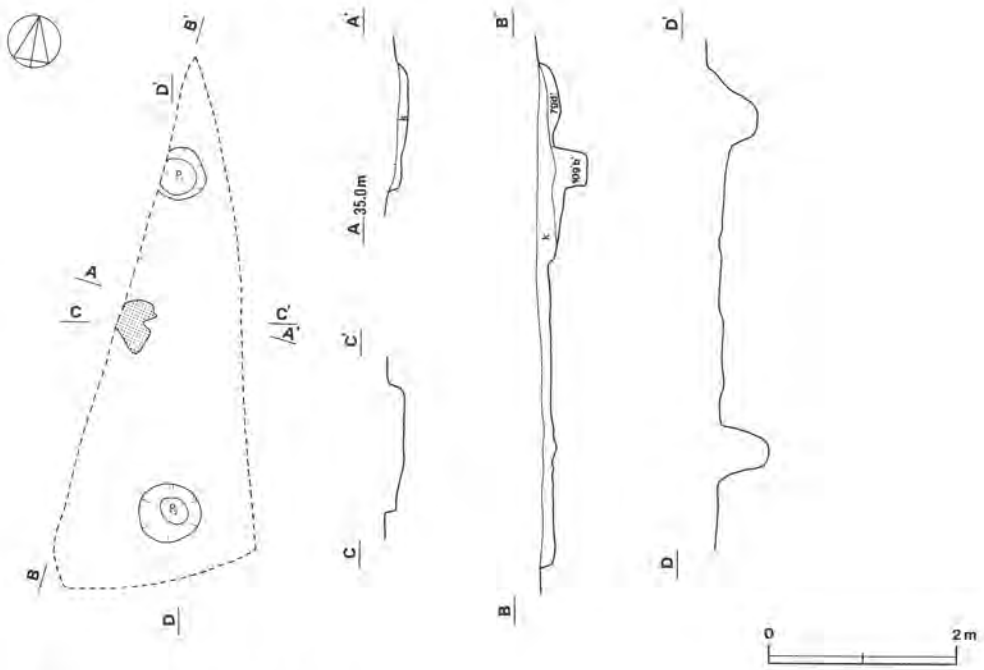
臼　玉　北東側コーナー部の床面から５点出土している。未製品４点，破損品１点で，滑石製である。写真で掲載した。

他に，こぶし大の滑石の原石が３点北東側コーナーの床面から出土している。

第54号住居跡（第135図）

本跡は，遺跡中央のC1d$_8$区を中心に確認されたもので，第19号住居跡の北西約46mに位置している。北・西側の大部分はエリア外のため調査はできなかった。

平面形は，長軸5.6m・短軸4.8mの長方形と思われ，長軸方向はN－15°－Wを指すものと考えられる。壁はハードロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は８～20cmである。床はハードロームで，平坦である。床面はどの部分も硬く踏み固められている。覆土は撹乱を受けていたが，遺存状態はよく，炉・柱穴などはよく残っている。炉は東側に検出され，長径58cm・短径34cmの不整楕円形である。床を４cm掘り凹めた地床炉で，炉床はよく焼け，赤くレンガ状に硬化している。柱穴はP_1・P_2の２か所で，規模は径54・61cm，深さ31・53cmである。東・西コーナー部に検出されている。



第135図　第54号住居跡実測図

覆土は2層からなり，褐色土，暗褐色土が堆積している。大部分は撹乱を受けている。2層とも非常に硬く締まっており，1層は焼土粒子，2層は炭化粒子を含んでいる。

遺物は，土師器片が1点，石製品が1点覆土から出土している。土師器片は古墳時代の鬼高式に比定される。

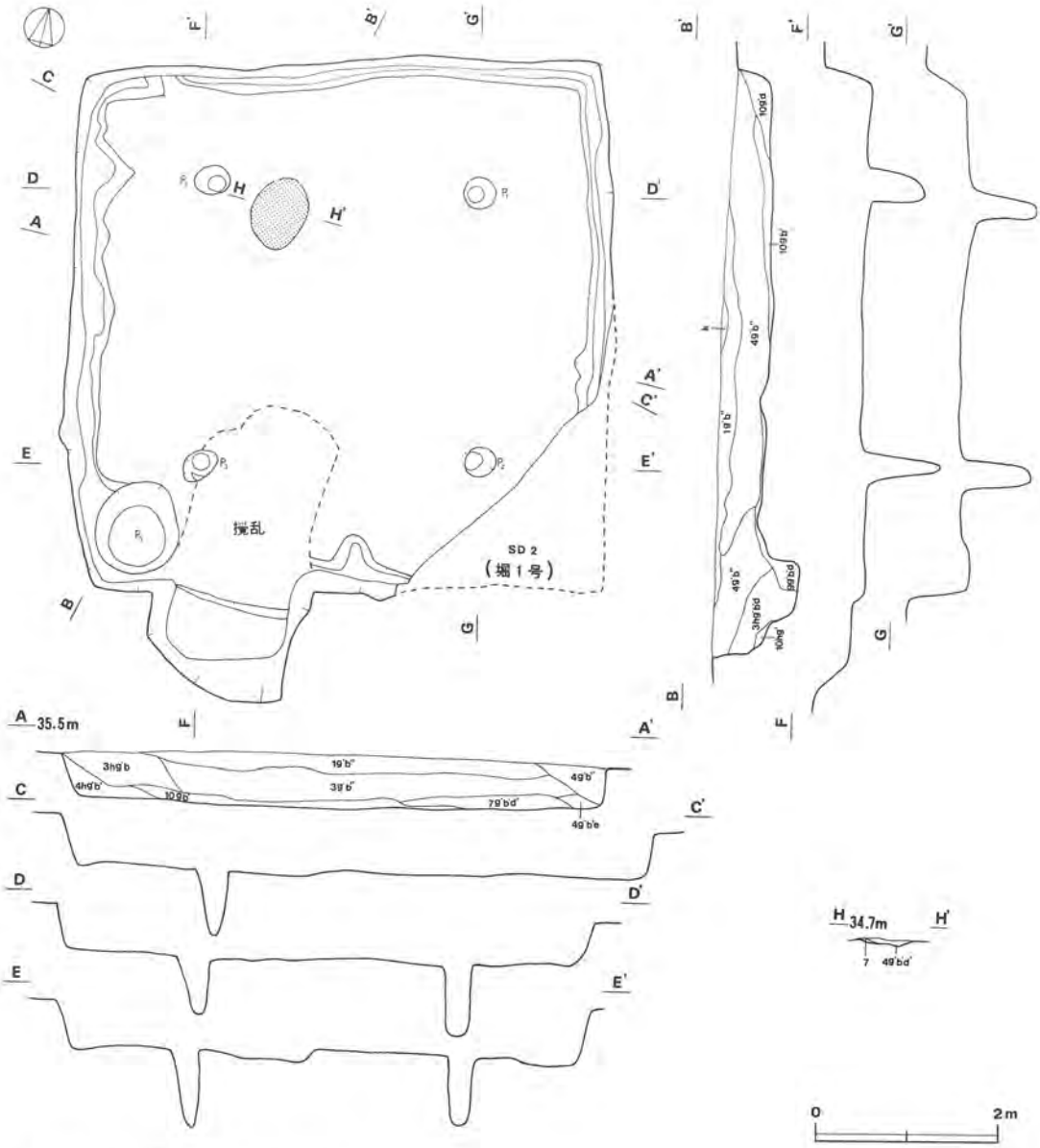
第55号住居跡（第136図，石製品製作跡）

本跡は，遺跡中央のC2c_5区を中心に確認されたもので，第1号住居跡の東約16mに位置している。東側で第1号堀と，南側の一部で撹乱穴と重複している。新旧関係は，土層堆積状況から本跡が第1号堀よりも古いと考えられる。

平面形は，長軸5.9m・短軸5.8mの方形で，長軸方向はN－15°－Wである。壁は南側の一部が重複や撹乱穴のため欠損している。残存壁はハードロームで床面から垂直に立ち上がっている。壁高は46～62cmである。床は南側の一部が撹乱のため削平されているが，残っている床はハードロームで，平坦である。床面はどの部分もよく踏み固められている。特に東側の壁際一部が径1mの円形の範囲で硬く，ここが出入口かと思われる。壁下に幅22cm・深さ8cmの壁溝が一周している。炉は北西側に検出され，長径80cm・短径60cmの楕円形で床を7cm掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼け，硬くなっている。柱穴はP_1～P_4の4か所で，その規模は径34～42cm・深さ62～85cmである。各コーナー部に検出され，柱穴間は約3mと等間隔である。P_5は貯蔵穴と考えられ，長径102cm・短径90cmの楕円形で，床を52cm掘りこんで構築されている。貯蔵穴の覆土は黒褐色土，暗赤褐色土が主に堆積している。また，貯蔵穴の断面は皿状である。

覆土は13層からなり，主に黒色土，黒褐色土，暗褐色土，極暗褐色土が堆積している。南西・南東側の一部が撹乱を受けているが，他は自然堆積である。全層ともローム粒子・焼土粒子を含み締まっている。

遺物は，覆土上層から甕形土器（P466），南側の覆土下層から須恵器の坏形土器（P470），甕形土器（P467），貯蔵穴覆土から破片で鉢形土器（P469），南西側コーナー部の床面から破片で坏形土器（P468）が出土している。また，西・南側の床面から剣形品，西側の覆土下層から円板，床面一帯から臼玉の石製品が出土している。土器の中で，覆土上層から出土した甕形土器は古墳時代の五領式に，他はすべて鬼高式に比定される。

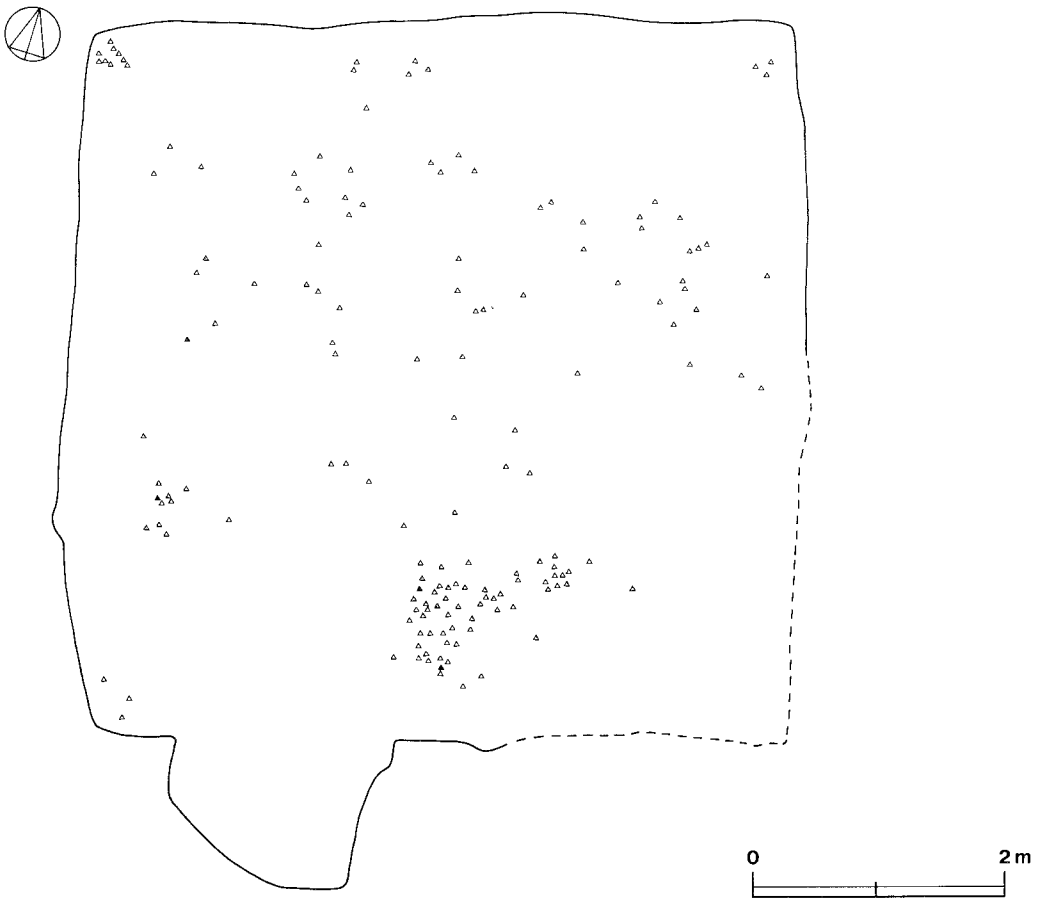


第136図　第55号住居跡実測図

第55号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第138図 P466	甕形土器 土師器	A(15.6) B (7.0)	胴部は内傾し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	砂粒 にぶい赤褐色 普通	15%
P467	甕形土器 土師器	A(15.0) B (6.0)	胴部は内傾し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がり，口縁端部は丸味をもつ。	内・外面－ヘラなで	スコリア・砂粒 にぶい赤褐色 普通	10%

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第138図 P468	坏形土器 土師器	A(13.0) B (4.7)	体部は内彎し，口縁部との境に稜をもつ。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	砂粒・石英 明赤褐色 普通	15%
P469	鉢形土器 土師器	A(14.1) B (6.8)	体部は内彎すると思われ，口頸部は短かく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 体部外面－なで 内面－ヘラなで	砂粒・石英 浅黄橙色 普通	15%
P470	坏　(蓋) 須恵器	A 12.1 B 3.0	口縁部はほぼ垂直に立ち上がり，天井部との境でくびれ，後稜をつける。天井部は内彎する。	外面－ロクロ整形，回転ヘラ切り離し 内面－ロクロ整形	細砂・礫 灰色 普通	35%



第137図　第55号住居跡（第５号製作跡）石製品出土状況図

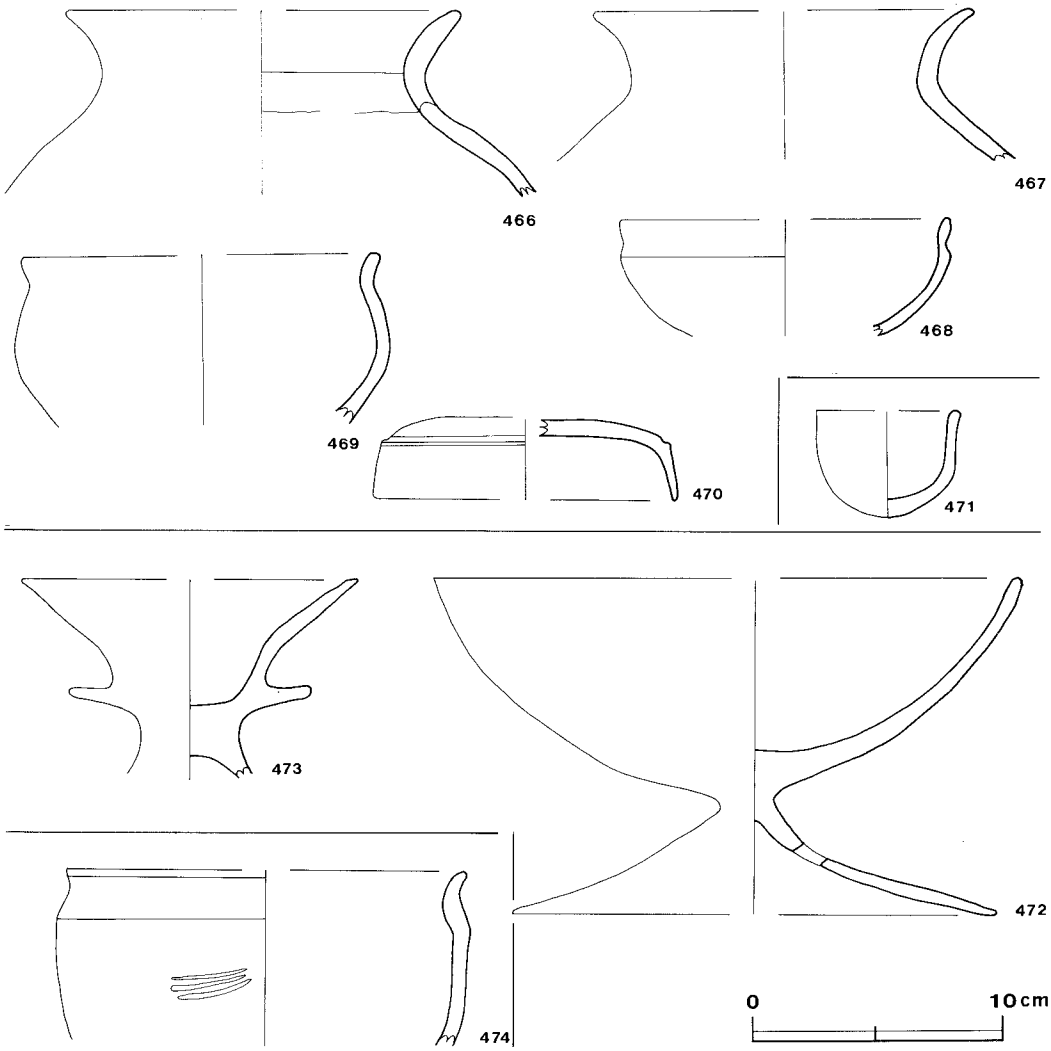
石製品（PL103・106）

剣形品　西・南側の床面から７点出土している。未製品３点，破損品１点，完成品３点で，すべて滑石製である。完成品は長さ2.0～3.1cm，幅1.1～1.4cm，厚さ２～３㎜，重さ1.1～2.6gである。３点とも柄部に径1.5～３㎜の２孔を穿っている。実測図は完成品のみ掲載し，他は写真で掲載した。

円　板　西側の覆土下層から10点出土している。滑石製で未製品８点，破損品１点，完成品１点である。完成品は長さ1.4cm，最大幅1.7cm，厚さ2.5mm，重さ1.6gである。実測図は完成品のみ掲載し，他は写真で掲載した。

臼　玉　床面一帯から840点出土している。未製品687点，破損品137点，完成品16点で，すべて滑石製である。完成品は径4.5～5.5mm，厚さ1.5～３mmで重さはすべて0.05gである。中央に径1.5～2.5mmの孔を穿っている。実測図は完成品のみ掲載し，他は写真で掲載した。

他に，手のひら大の滑石の原石が16点床面一帯から出土している。



第138図　第55・56・57・60号住居跡出土遺物実測図

第56・57・60号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第138図 P471	手づくね土器 土師器	A 5.5 B (4.3)	底部は丸底。体部は内彎した後垂直に立ち上がり，口縁端部は丸味をもつ。	外面－なで 内面－横なで	スコリア・石英・砂粒 にぶい橙色 普通	95%
P472	高坏形土器 土師器	A(23.3) B 13.5 D(19.4)	脚部は大きく「ハ」の字状に下方に開く。坏部は大きく内彎して立ち上がる。脚部に3孔を穿つ。	内・外面－なで	砂粒 橙色 普通	75%
P473	装飾器台形土器 土師器	A(13.2) B (8.0)	受部は下半で段をつくり，後外傾して立ち上がる。	外面－丁寧なで 内面－なで	砂粒 橙色 普通	50%
P474	甕形土器 土師器	A(16.0) B (7.1)	胴部は下半で内彎すると思われ，上半は直立する。口縁部との境でくびれ，口縁部は短かく外傾して立ち上がる。	口縁部外面－横なで 胴部外面－ヘラなで 内面－丁寧なヘラなで	砂粒・スコリア 橙色 普通	40%

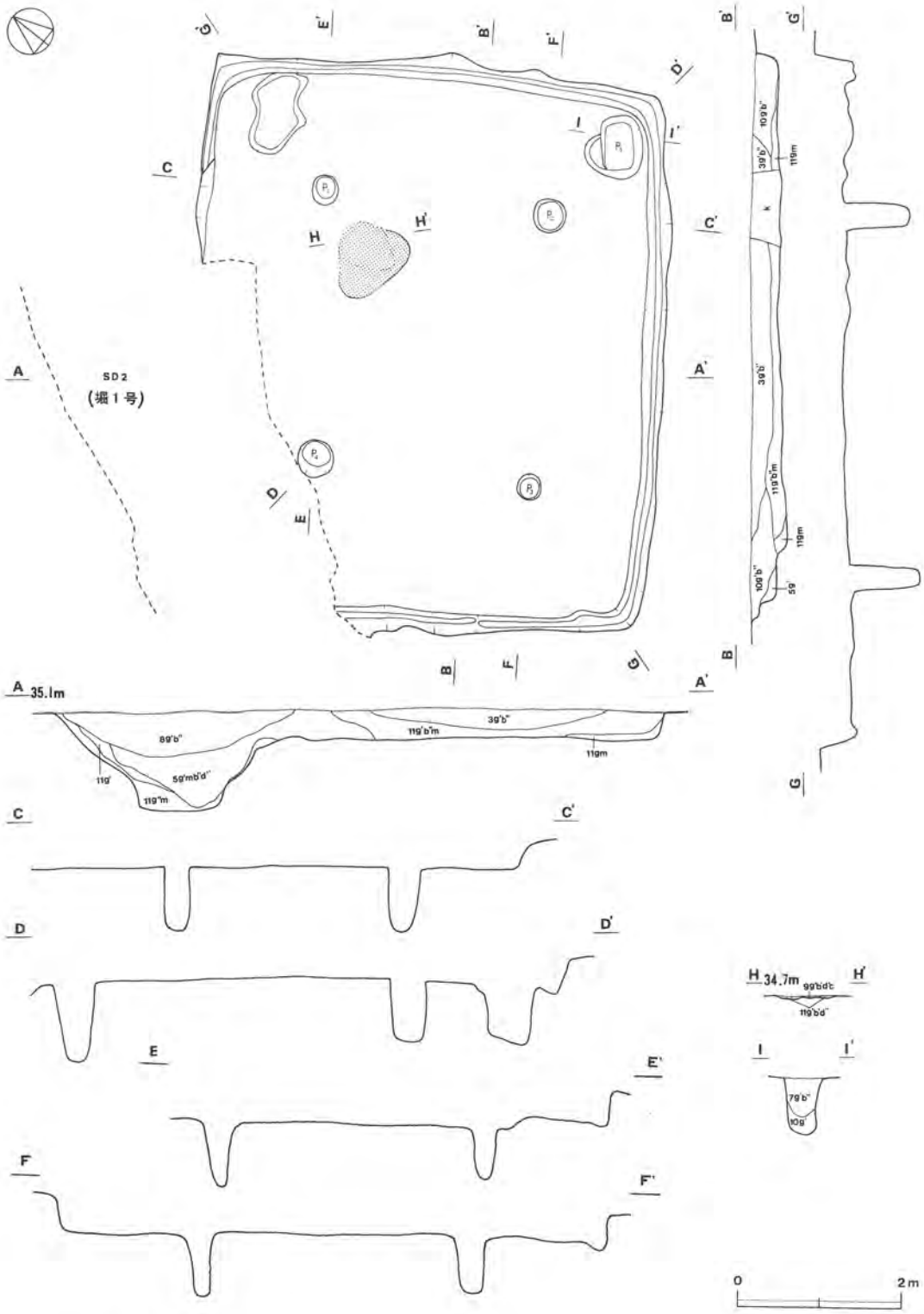
第56号住居跡（第139図）

本跡は，遺跡中央のC2e$_5$区を中心に確認されたもので，第19号住居跡の北東約42mに位置している。北西側で第1号堀と重複している。新旧関係は，土層堆積状況から本跡が第1号堀よりも古いと考えられる。

平面形は，長軸7.1m・短軸5.8mの長方形で，長軸方向はN－50°－Eである。壁は北西側が第1号堀に切られている。残存壁はハードロームで，床面から垂直に立ち上がっている。壁高は36～44cmである。床は重複のため北西側が削平されている。残存する床はハードロームで，平坦である。床面はあまり踏み固められていない。壁下に幅10cm・深さ10cmの壁溝が一周している。炉は北側に検出され，長径70cm・短径58cmの不整楕円形で，床を4cm掘り凹めた地床炉である。炉床はよく焼け，硬化している。柱穴はP$_1$～P$_4$の4か所で，規模は径34～46cm・深さ78～101cmである。各コーナー部に検出され，長方形状に配列されている。P$_5$は貯蔵穴と考えられ，径70cmの不整円形で，床を74cm掘りこんで構築されている。貯蔵穴覆土は暗褐色土，褐色土が堆積しており，断面は「U」状である。

覆土は6層からなり，主に黒褐色土，褐色土，極暗褐色土，暗褐色土が堆積している。北西側は重複のため撹乱されているが，他は自然堆積である。大部分の層は焼土粒子・炭化粒子を含んでおり，全層とも締まっている。

遺物は，北西側の覆土下層から手づくね土器(P471)，西・北側から多量の土師器片が出土している。また，北西側の第1号堀との重複部分から円板・臼玉の未完成の石製品が66点出土している。手づくね土器や土師器片の大半は古墳時代の五領式に比定され，残りの土師器片は鬼高式に比定される。石製品は第1号堀を通じて，第55号住居跡の遺物が流れこんだものと考えられる。



第139図　第56号住居跡実測図

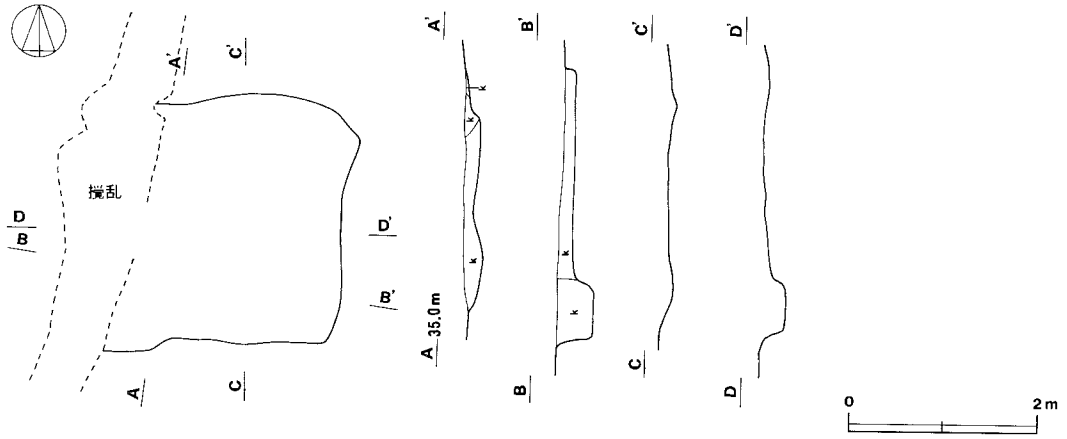
第60号住居跡（第140図）

本跡は，遺跡中央のC2d$_7$区を中心に確認されたもので，第49号住居跡の北東約21mに位置している。東・西側が撹乱されている。

平面形は，長軸2.6m・短軸2.4mの方形と思われ，長軸方向はN－85°－Eを指すものと考えられる。壁は北・南側が残っており，ハードロームで床面から外傾して立ち上がっている。壁高は4～8cmである。床は西側と中央の一部が削平されているが，残っている床はハードロームで，平坦である。床面は中央付近がよく踏み固められている。炉や柱穴は検出されない。

覆土は2層からなり，ともに黒褐色土が堆積しているが，大部分撹乱を受けている。2層とも焼土粒子・炭化粒子を含み，締まっている。

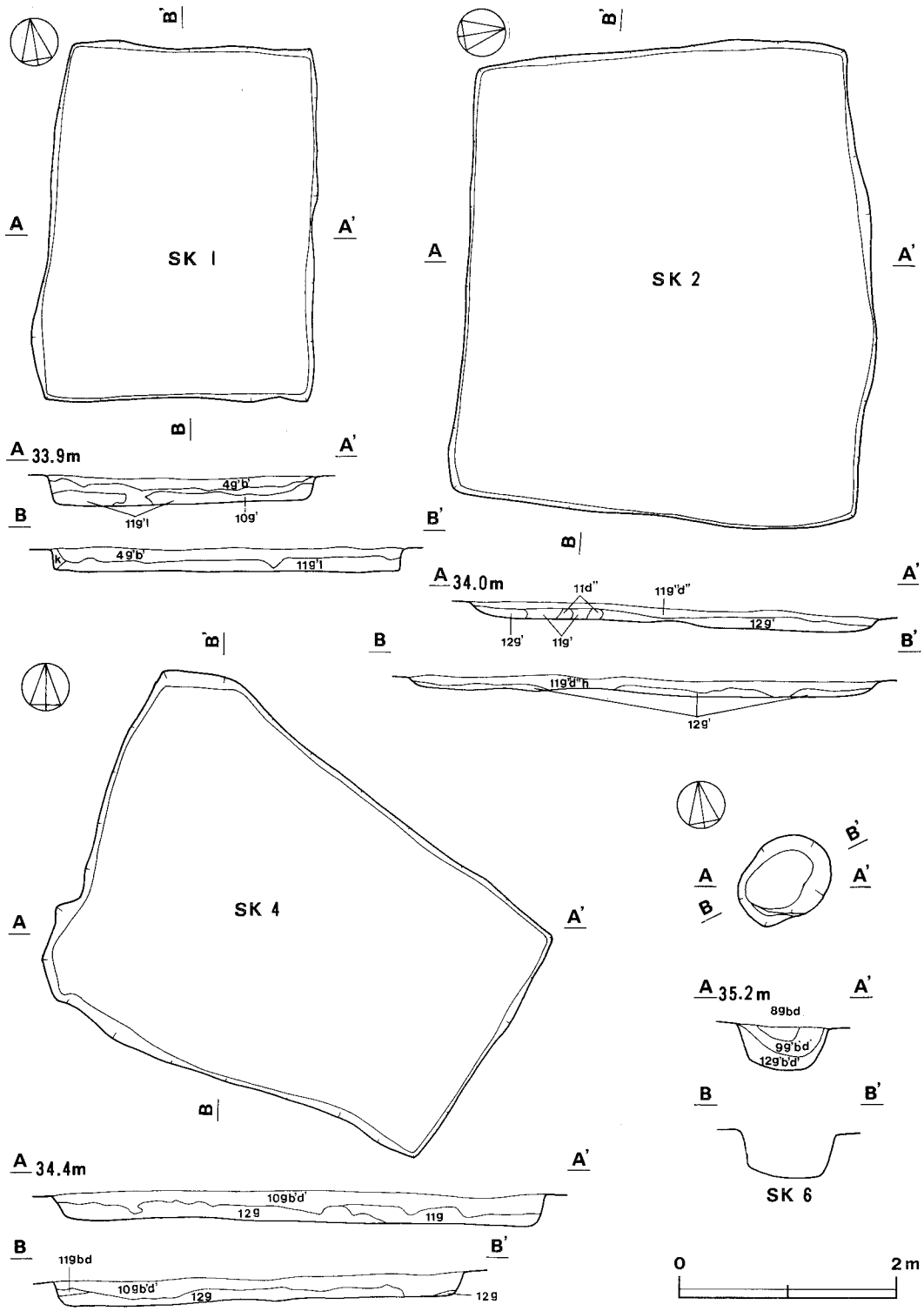
遺物は，中央の覆土から破片で甕形土器（P474）が出土している。古墳時代の鬼高式に比定される。



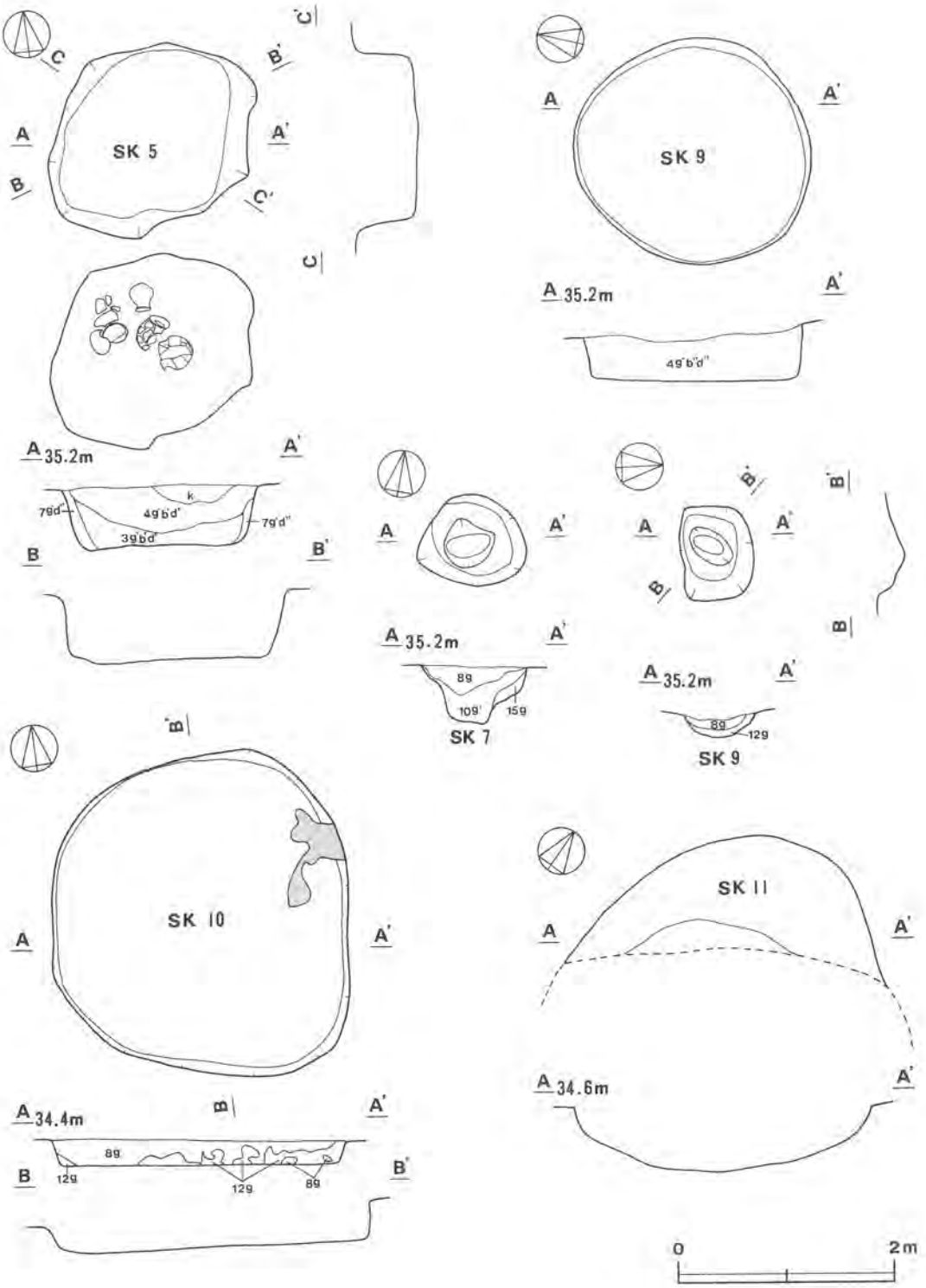
第140図　第60号住居跡実測図

2　土　坑（第35・141・142図）

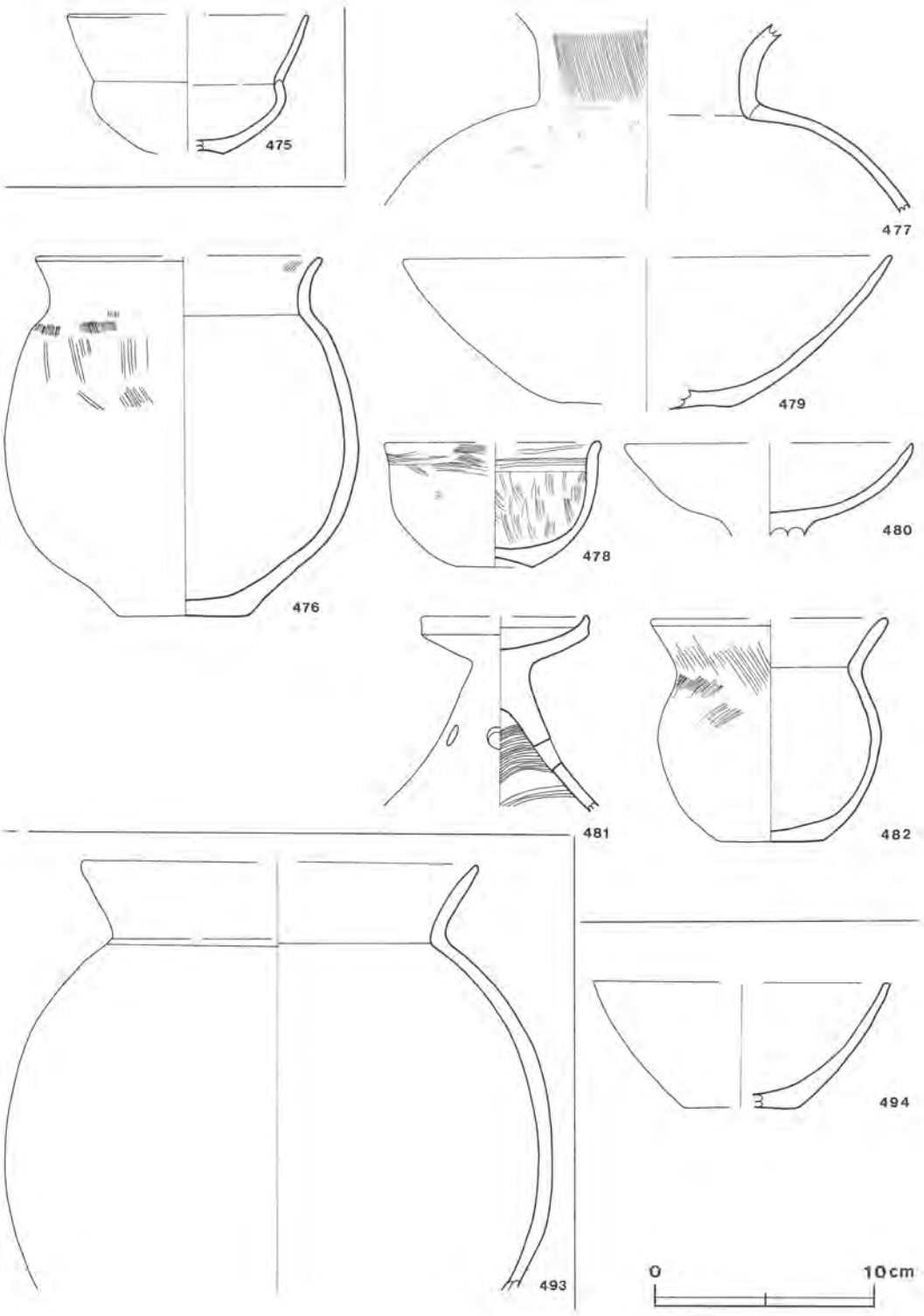
当遺跡から検出された土坑は11基である。C2区に4基，D1区に2基，D2区に2基，E1区に1基，E2区に2基であり，住居跡と同じく，A，B，F区には検出されていない。出土遺物は第7・11号土坑を除いて9基の土坑から土師器・土師器片が出土している。第1，4～6，10号土坑からは，完形品および接合して形状を窺えるまでになった土器が出土している。他の4基から出土した土器は接合できなかった。



第141図　土坑実測図（第1・2・4・6号）



第142図　土坑実測図（第5・7・9・10・11号）



第143図　第1・4・6・10号土坑出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第143図 P475	坩形土器 土師器	A(11.0) B 6.4 C 3.1	底部は小さく上げ底。体部は内彎し，口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部と体部は同じ長さである。	内・外面－なで	砂粒・礫・長石 橙色 普通	30%

第4号土坑出土遺物観察表

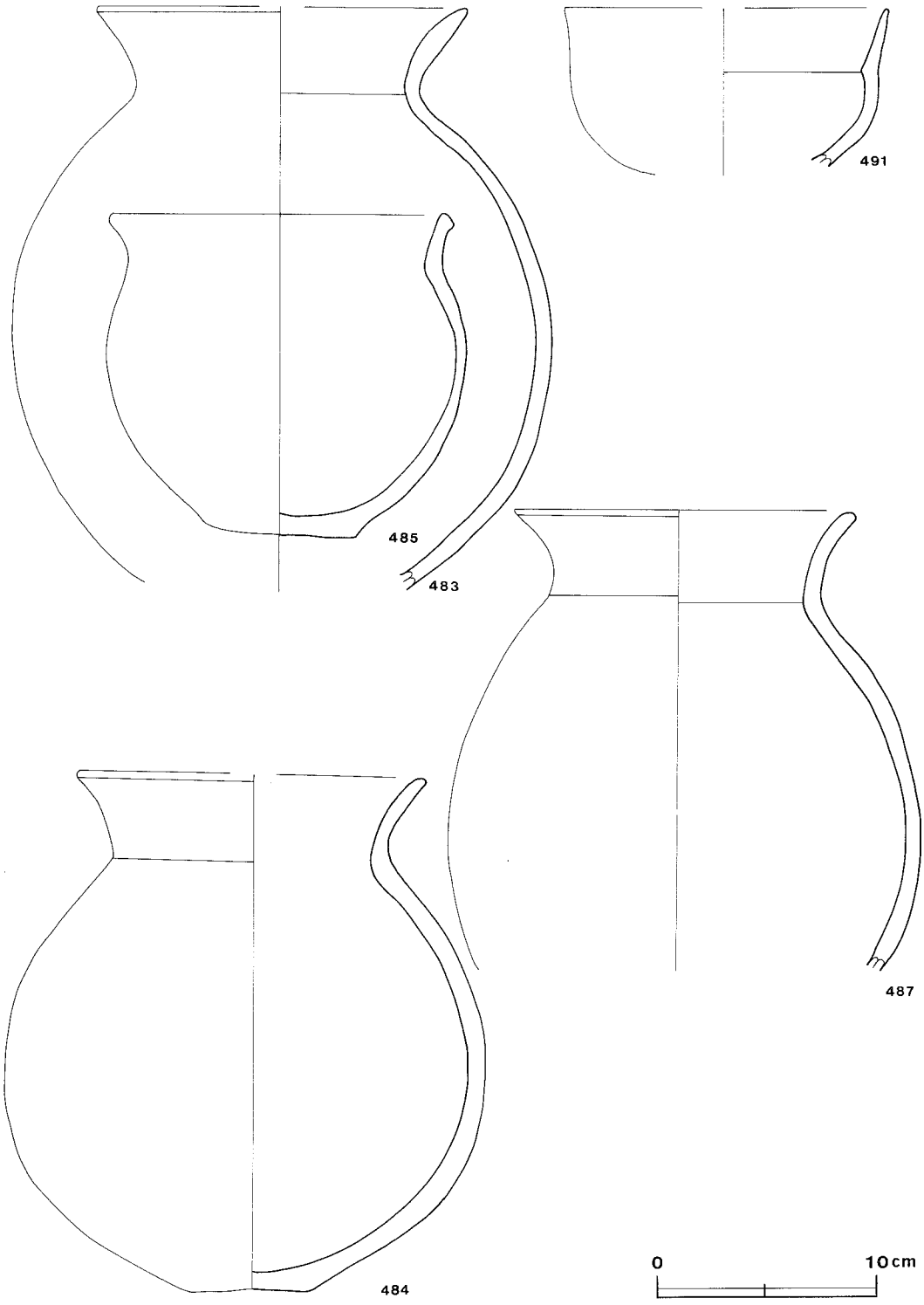
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第143図 P476	甕形土器 土師器	A(13.2) B 16.7 C 6.3	底部は平底。胴部は球形を呈し，口頸部は短かく「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂・パミス にぶい褐色 普通	50%
P477	壺形土器 土師器	B (9.3) 頸径(10.0)	胴部は球形を呈し，頸部ですぼまる。口頸部は垂直に立ち上がり，「コ」の字状に近い立ち上がりである。	口縁部外面－ハケ目整形 胴部外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂・パミス・礫 にぶい橙色 普通	15%
P478	鉢形土器 土師器	A 10.1 B 5.7 C 3.0	底部は上げ底。体部は器肉を減じて内彎し，口縁部との境に稜をもち，口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面－ハケ目整形後横なで 胴部外面－ハケ目整形後なで	砂粒・石英 橙色 普通	75%
P479	高坏形土器 土師器	A(22.2) B (7.1)	坏部は下半で皿状に開いた後稜をつくり，外上方に大きく立ち上がる。	内・外面－なで	砂 にぶい橙色 普通	50%
P480	高坏形土器 土師器	A(13.0) B (4.3)	坏部はゆるく外上方に立ち上がる。	内・外面－丁寧ななで	スコリア・砂 にぶい橙色 普通	30%
P481	器台形土器 土師器	A 7.8 B (9.5)	脚部は「ハ」の字状に下方に開く。脚部に4孔を穿つ。受部は口縁部で垂直に立ち上がる。	外面－なで 脚部内面－ハケ目整形後なで	スコリア・パミス・砂 橙色 普通	80%
P482	小型甕形土器 土師器	A(10.6) B 10.3 C 4.6	底部は平底で，胴部は球形を呈する。口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂粒・パミス・礫 にぶい橙色 普通	40%

第6号土坑出土遺物観察表

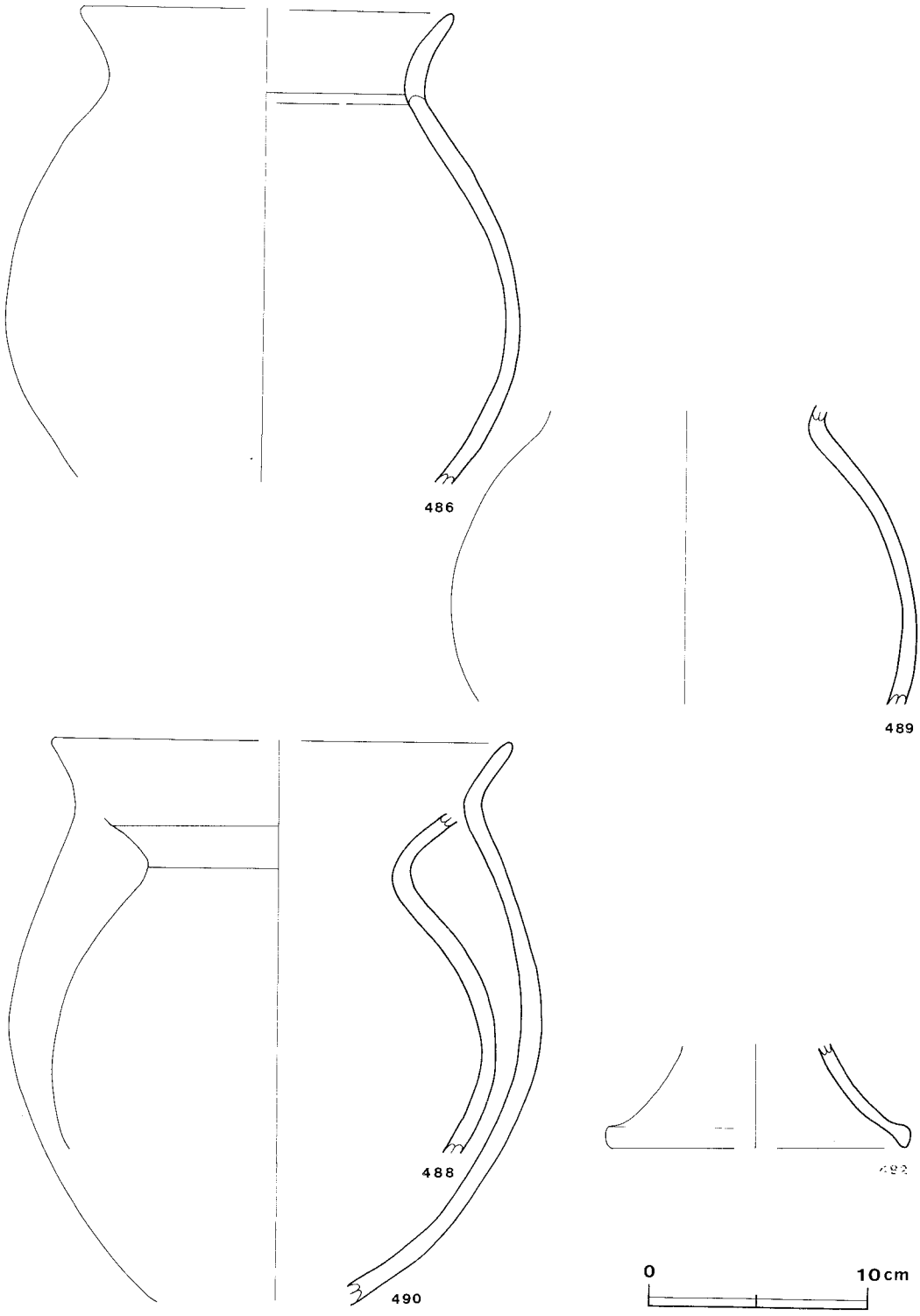
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第143図 P493	甕形土器 土師器	A(18.4) B(19.8)	胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	口縁部外面－横なで 胴部外・内面－ヘラなで	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	15%

第10号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第143図 P494	鉢形土器 土師器	A(13.4) B 5.8 C (5.2)	底部は平底。体部は器肉を減じながら外傾して立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	外面－丁寧ななで 内面－なで	パミス・砂 浅黄橙色 普通	10%



第144図　第5号土坑出土遺物実測図（1）



第145図　第 5 号土坑出土遺物実測図 (2)

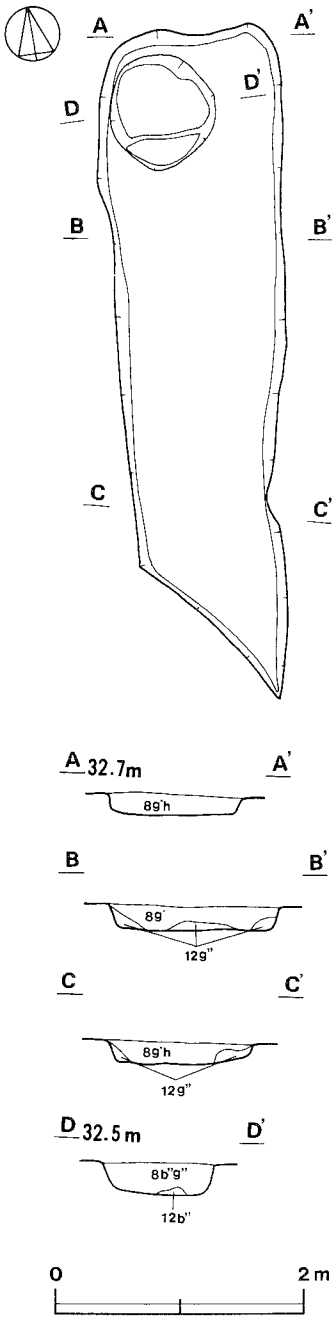
第5号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 P483	甕形土器 土師器	A 17.0 B(27.0)	胴部は長胴化し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 胴部外面－ヘラなで 内面－なで	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい褐色 良好	90% 胴部外面煤付着
P484	甕形土器 土師器	A 16.0 B 24.0 C 5.7	底部はやや突出した平底。胴部は球形を呈する。口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 胴部外面－ヘラなで 内面－なで	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 良好	90%
第145図 P485	甕形土器 土師器	A 15.3 B 14.8 C 7.0	底部は平底。胴部は器肉を減じながら球形を呈する。口頸部は短かく「く」の字状に立ち上がる。	内・外面－ヘラなで	長石・砂 褐色 普通	100% 外面煤付着
P486	甕形土器 土師器	A 17.0 B(21.7)	胴部は下位に最大径をもち，下ぶくれ状。口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 胴部内・外面－粗いヘラなで	砂粒・長石・スコリア にぶい黄橙色 良好	75%
第144図 P487	甕形土器 土師器	A 15.4 B(21.3)	胴部は下位に最大径をもち下ぶくれ状。口頸部は「コ」の字状に近い立ち上がりである。	口縁部内・外面－横なで 胴部内・外面－粗いヘラなで	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	65%
第145図 P488	甕形土器 土師器	B(15.3)	胴部は球形を呈し，口頸部は「く」の字状に立ち上がると思われる。	口縁部外面－横なで 胴部外・内面－ヘラなで	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	40%
P489	甕形土器 土師器	B(13.5)	胴部は球形を呈すると思われる。	内・外面－粗いヘラなで	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	30%
P490	甑形土器 土師器	A 20.8 B 20.0	胴部は長胴で，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。底部は欠損している。	外面・口縁部内面－ヘラなで 胴部内面－なで	長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	90% 口縁部外面煤付着
第144図 P491	埦形土器 土師器	A 14.8 B (7.7)	体部は内彎し，口縁部との境外面でくびれ，また内面に稜をもつ。口縁部は器肉を減じて外傾する。	内・外面－丁寧なヘラなで	砂粒・長石・スコリア・石英 赤色 良好	85%
第145図 P492	高坏形土器 須恵器	B (5.5) 基部径11.2	脚部は「ハ」の字状に下方に開き，脚端部は丸味をもった隆帯を付ける。4個の一段透しをつけると思われる。	内・外面－ロクロ整形 透し窓ヘラ切り	細砂 灰色 良好	10%

表3　土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径(辺)×短径(辺)(m)	規模 深さ(cm)	壁面	坑底	覆土・状態	出土遺物	備考
1	$E2g_3$	N－22°－E	長方形	3.3 × 2.6	17～28	垂直	平坦	3層・自然	土師器坩　1点	
2	$E2e_3$	N－77°－W	長方形	4.5 × 3.8	10～12	垂直	平坦	4層・自然	土師器片　11点	
3	$E1c_0$	N－66°－W	楕円形	3.1 × 2.7	17～22	垂直	平坦	6層・撹乱	土師器片　4点	
4	$D2g_5$	N－56°－W	不整長方形	4.3 × 3.3	20～30	垂直	平坦	4層・自然	土師器甕等7点	
5	$C2c_7$	N－63°－E	楕円形	2.2 × 1.7	52～54	垂直	平坦	3層・自然	土師器甕等10点	
6	$C2c_7$	N－65°－E	楕円形	0.9 × 0.7	24～38	垂直	平坦	3層・自然	土師器甕　1点	
7	$C2c_7$	N－86°－E	楕円形	1.0 × 0.8	50	垂直	平坦	3層・自然	——	
8	$C2d_7$	N－90°－E	不整長方形	0.8 × 0.6	16～20	外傾	皿状	2層・自然	土師器片　5点	
9	$D1g_7$	——	円形	2.2 × 2.1	37～45	垂直	平坦	1層・自然	土師器片　20点	S1－20と重複

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	坑底	覆土・状態	出土遺物	備考
				長径(辺)×短径(辺)(m)	深さ(cm)					
10	$D2i_2$	N－1°－E	楕円形	3.1 × 2.7	22～37	垂直	平坦	3層・自然	土師器鉢　1点	S1－62と重複
11	$D1e_0$	N－58°－E	楕円形	3.2 × 2.1	24～25	外傾	皿状	1層・自然	——	S1－29と重複



第146図　第1号溝実測図

3　溝

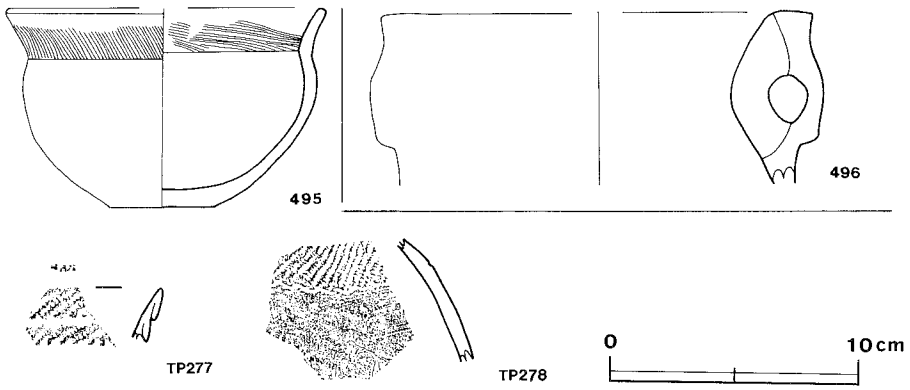
第1号溝（第146図）

本跡は，遺跡南部の$F1a_0$区に確認され，$F1a_0$区から南へ直線的に延び，$F1b_0$区で調査区域外へ続いている。調査した全長は5.5mである。

溝の幅は，上幅が110～150cm・下幅が100～144cmで，確認面からの深さは14～54cmである。壁はハードロームで硬く締まっており，溝底面からほぼ垂直に立ち上がっている。溝底はハードロームで硬く，ほぼ平坦である。北側の溝の底面にピット状の落ちこみが1か所確認され，その規模は径90cmの円形で，深さは34cmである。溝の断面はほぼ「U」字形をしている。溝底面のレベルはAで32.36m，Bで32.24m，Cで32.14mで北側が高く，南側が低くなっている。ピット底面のレベルは32.04mである。

覆土は2層からなり，暗褐色土，褐色土が自然堆積している。2層ともローム粒子を含み，締まっている。

遺物は，溝の底面近くの覆土から小型甕形土器（P495）が出土している。古墳時代の五領式に比定される。



第147図　第１号溝・１号堀出土遺物実測図・拓影図

第１号溝出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第147図 P495	小型甕形土器	A 12.5 B 8.1	底部は平底。胴部は内彎し，口縁部との境でくびれる。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ーハケ目整形 胴部外面上半ーハケ目整形後なで 下半ーなで	石英・パミス・砂 浅黄橙色	85%
	土師器	C 4.2			普通	

TP277は壺形土器の口縁部片と思われ，口縁部中位まで折り返して複合口縁とし，上・下位とも下方にキザミ目を連続して付け，口縁部全体に斜行する縄文を施している。弥生時代後期の二軒屋式と判断される。

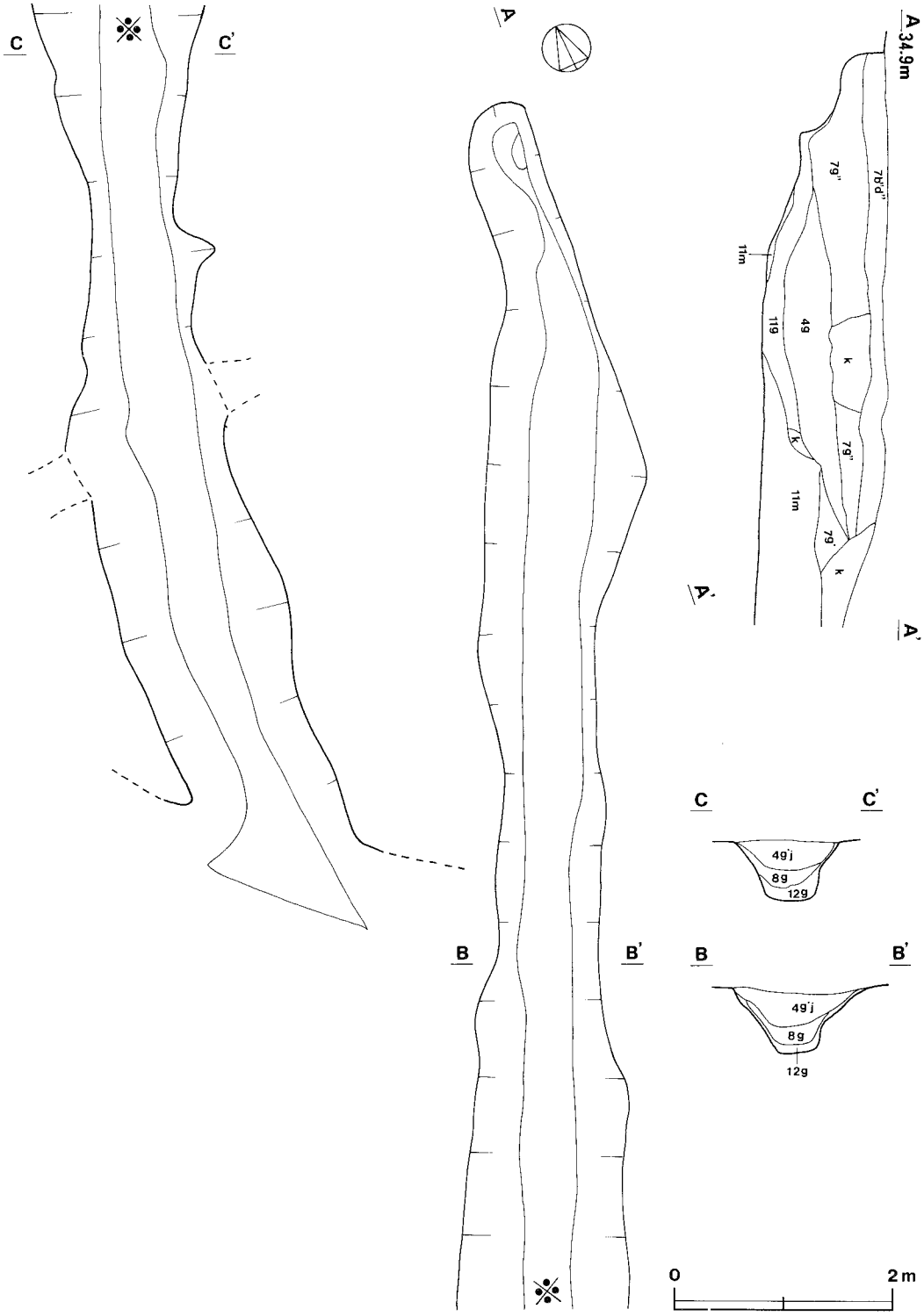
第２号溝（第148図・ＳＤ-３）

本跡は，遺跡東側のエリア外から延びC2e_8区からC2h_7区まで直線的に南下し，C2h_7区からやや方向を変えてC2i_6区まで直線的に延び，同区で第１号堀と合流して消滅する。検出された長さはC2e_8区からC2h_7区まで12m，C2h_7区からC2i_6区まで5.3mあり，総延長17.3mである。

溝の幅は，上幅が72～156cm・下幅が34～60cmである。壁はハードロームでよく締まっており，溝底面から外傾して立ち上がっている。溝底はハードロームで，よく締まっており平坦である。確認面からの深さは58～70cmである。断面は「∟」状を呈している。溝底面のレベルは，Ａで34.13m，Ｂで34.09m，Ｃで34.06mと北側が高く，南側がやや低く，南の第１号堀に向かうほど低くなってくる。

覆土は４層からなり，主に黒褐色土，暗褐色土，褐色土の順で自然堆積している。４層ともローム粒子を含み，第１層だけ締まっている。

遺物は出土していない。



第148図　第２号溝実測図

4　堀

第1号堀（第149図・SD-2）

本跡は，遺跡北側のB2c_0区から南西方向に直線的に延び，C2g_4区で南東方向に向きを変え，直線的に延びている。両端部とも東側の調査区域外へ続いている。B2c_0区からC2g_4区まで56.4m，C2g_4区からC2j_7区まで18.4mあり，総延長は74.8mである。C2c_6区で第55号住居跡と，C2e_5区で第56号住居跡と重複している。新旧関係は，土層堆積状況から本跡が両住居跡より新しいと考えられる。

上幅は240～328cm，底面幅は80～134cmで，確認面からの深さは104～140cmである。壁はハードロームで硬く締まっており，底面から約30cm垂直に立ち上がり，その後35～55°の角度で外傾して立ち上がっている。断面は「⌝⌜」状を呈し，箱薬研堀である。底面もハードロームで硬く締まっている。C2g_4区のコーナー部とC2j_7区には長方形の落ちこみがある。深さは約20cmで底面の幅と同じ幅に掘られ，長さはC2g_4区で8.9m，C2j_7区で3.5mである。底面のレベルはB2g_9区で33.84m，C2b_7区で33.83m，C2g_4区で33.63m，C2i_6区で33.34mである。北から南へ徐々に低くなっている。

覆土はどのベルトも8層からなり，主に暗褐色土，黒褐色土，褐色土が堆積している。C2j_7区で一部撹乱を受けていたが，他の土層は自然堆積である。上層は炭化粒子を含み，下層にゆくほど締まりは弱くなっている。

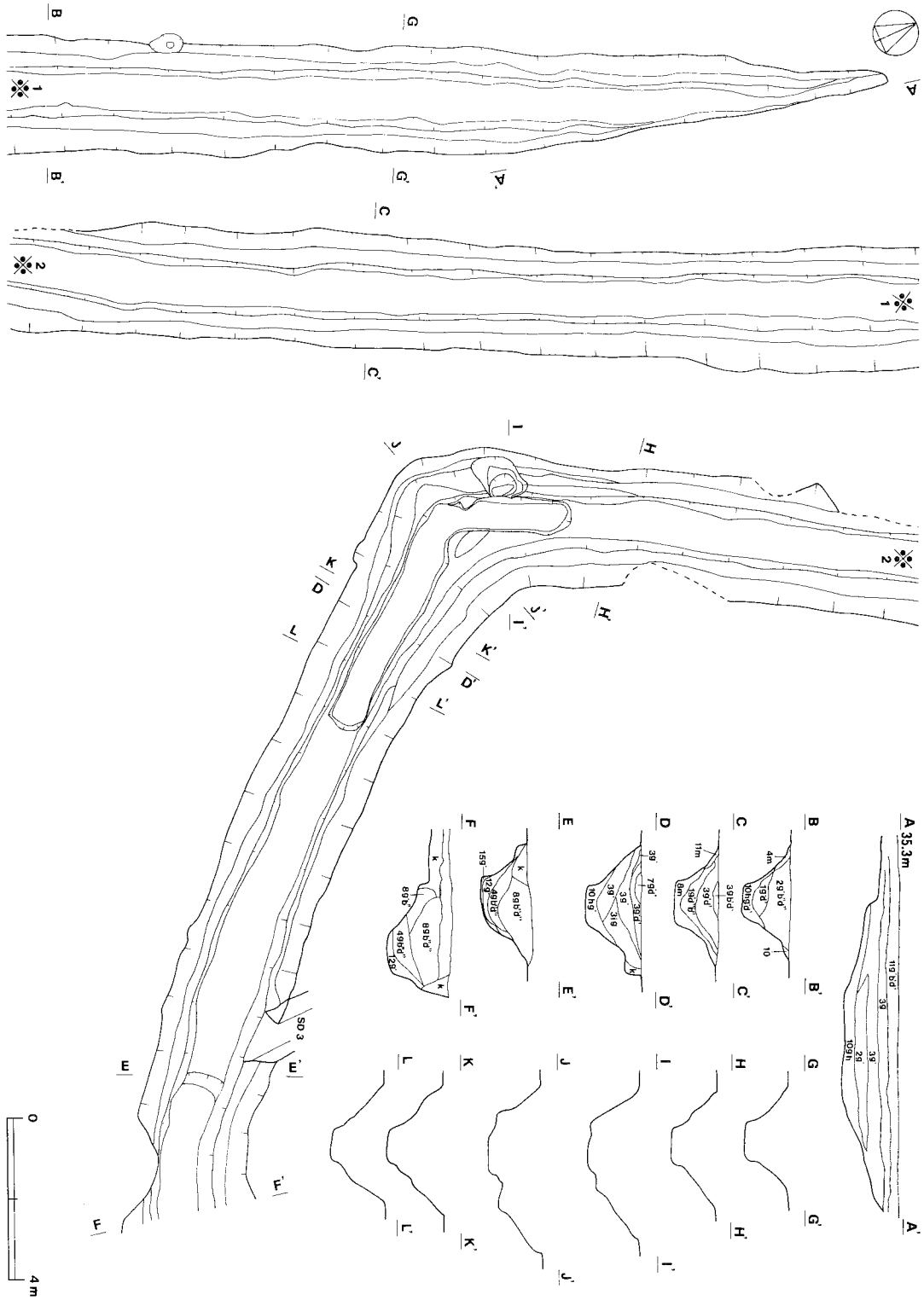
遺物は，覆土や底面から土師器片が8点，剣形品，円板，勾玉，臼玉，紡錘車の石製模造品が8点，内耳土器が，覆土の中層から1点出土している。土師器片や石製模造品は，第55号住居跡を切りこんだ際の流れこみと考えられる。従って本跡に伴う遺物は内耳土器（P496）と考えられる。

第1号堀出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第147図 P496	内耳土器 土師質土器	A(17.2) B (6.9)	体部は垂直に立ち上がると思われ，口縁部で内彎する。口縁端部は平坦な面をもつ。	外面－粗いなで 内面－なで	雲母・砂粒 にぶい褐色 普通	5％　外面鍋墨 付着

石製品（PL105・106・107）

剣形品　C2d_5区の覆土から1点出土している。滑石製の完成品で，長さ6.6cm，幅2.3cm，厚さ4.5mm，孔径3mm，重さ10.4gである。第55号住居跡との重複部分なので，同住居跡の遺物である可能性が強い。



第149図　第１号堀実測図

円　板　C2d$_5$区の覆土から１点出土している。滑石製の未製品で，写真で掲載した。剣形品と同じく第55号住居跡の遺物である可能性が強い。

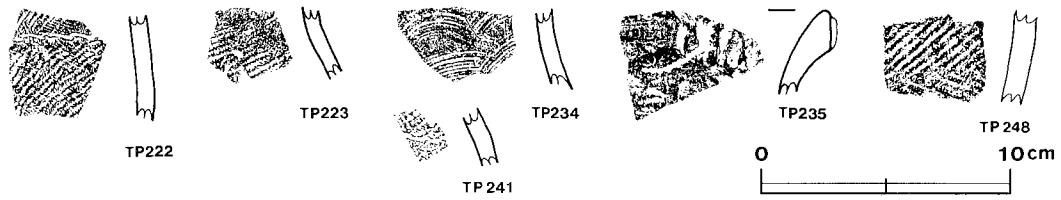
勾　玉　C2d$_5$区の覆土から２点出土している。滑石製の未製品で，写真で掲載した。第55号住居跡の遺物である可能性が強い。

臼　玉　C2d$_5$区の覆土から４点出土している。未製品３点，完成品１点で，滑石製である。完成品は径4.5㎜，厚さ3.5㎜，重さ0.05gで，中央に径２㎜の孔を穿っている。実測図は完成品のみ掲載し，他は写真で掲載した。同じく第55号住居跡の遺物である可能性が強い。

紡錘車　C2d$_5$区の覆土から１点出土している。形割り品で，上・下面を彫刻刀状のもので削り出している。最大径5.5cm，厚さ2.5cm，重さ80.7gで滑石製である。第55号住居跡の遺物である可能性が強い。

5　遺構外の出土遺物

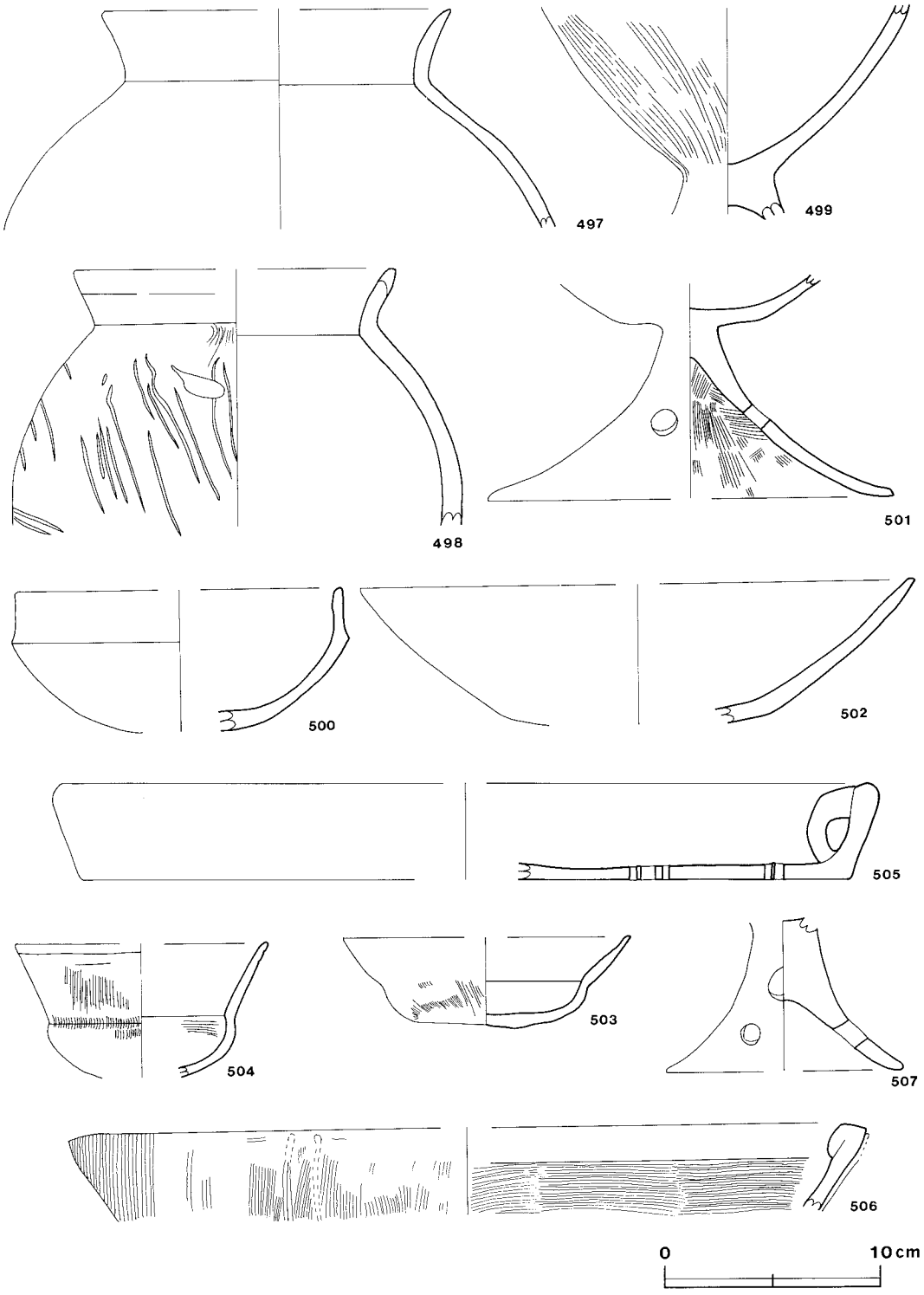
遺跡清掃中に表面採取された土器（土師器，内耳土器），土器片（弥生式）１点，グリッド発掘で出土した土器（土師器）６点，遺構確認中に採取された土器（土師器）３点を掲載した。住居跡等の出土遺物と同様に解説表で記し，備考欄に小グリッド名，大グリッド名などを記入した。



第150図　グリッド出土遺物拓影図

TP234は壺形土器の胴部片と思われ，櫛描きで連弧文を２段に施している。弥生時代後期の二軒屋式と判断される。

TP248は広口長胴壺の胴部片と思われ，羽状縄文を施している。同じく弥生時代後期の二軒屋式と判断される。



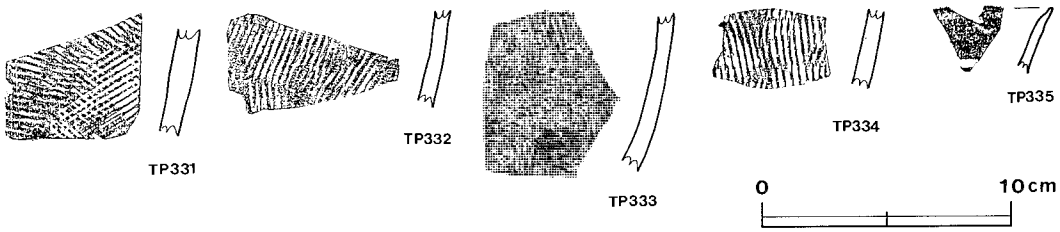
第151図　グリッド・表採出土遺物実測図

グリッド表採出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第151図 P497	甕形土器 土師器	A(16.0) B(10.2)	胴部上半は内傾し，口頸部はゆるく「く」の字状に立ち上がる。	口縁部内・外面－横なで 胴部内・外面－ヘラなで	砂粒・長石 外－灰褐色 内－にぶい橙色 普通	15%　胴部外面 煤付着 C2a_3区
P498	甕形土器 土師器	A(14.8) B(12.0)	胴部は球形を呈すると思われ，口頸部は「く」の字状に立ち上がる。	外面－ヘラなで 内面－粗いヘラなで	砂粒・スコリア・長石・石英 にぶい橙色 良好	15% D1j_6区
P499	台付甕形土器 土師器	B (9.8)	胴部下半は外傾して立ち上がる。	外面－ハケ目整形 内面－なで	砂粒・長石・石英 灰白色 不良	30% D2i_2区
P500	坏形土器 土師器	A(14.8) B 6.7	底部は丸底と思われる。体部は内彎し，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面－丁寧なヘラなで 体部外面－粗いヘラなで	砂粒 にぶい橙色 普通	40% D2区
P501	高坏形土器 土師器	B(10.0) D(18.7)	脚部は大きくラッパ状に下方に開く。坏部は口縁部との境に稜をもち，口縁部は外傾すると思われる。	外面－ヘラなで 内面－ハケ目整形後ヘラなで	砂粒・スコリア・長石 外－にぶい褐色 内－にぶい橙色 普通	35% C2c_2区
P502	高坏形土器 土師器	A(25.5) B (6.5)	坏部は口縁部との境に稜をもち，口縁部は大きく外傾して立ち上がる。	内・外面－丁寧なで	スコリア・砂粒 橙色 普通	30% E区
P503	坩形土器 土師器	A(13.2) B 4.1 C 3.1	底部は上げ底。体部は皿状に開いた後内彎する。口縁部は外傾して立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂粒 浅黄橙色 普通	30% E1c_9区
P504	坩形土器 土師器	A(13.2) B (6.2)	体部は内彎し，口縁部は外傾して立ち上がる。	外面－ハケ目整形後なで 内面－なで	砂粒・長石 浅黄橙色 不良	35% D2e_1区
P505	内耳土器 土師質土器	A(37.4) B 4.5	体部は低く，ほぼ垂直に立ち上がり，口縁端部は丸味をもつ。耳は3か所と思われる。	内・外面－ロクロ整形	細砂 褐灰色 普通	60%　外面鍋墨 付着 D区

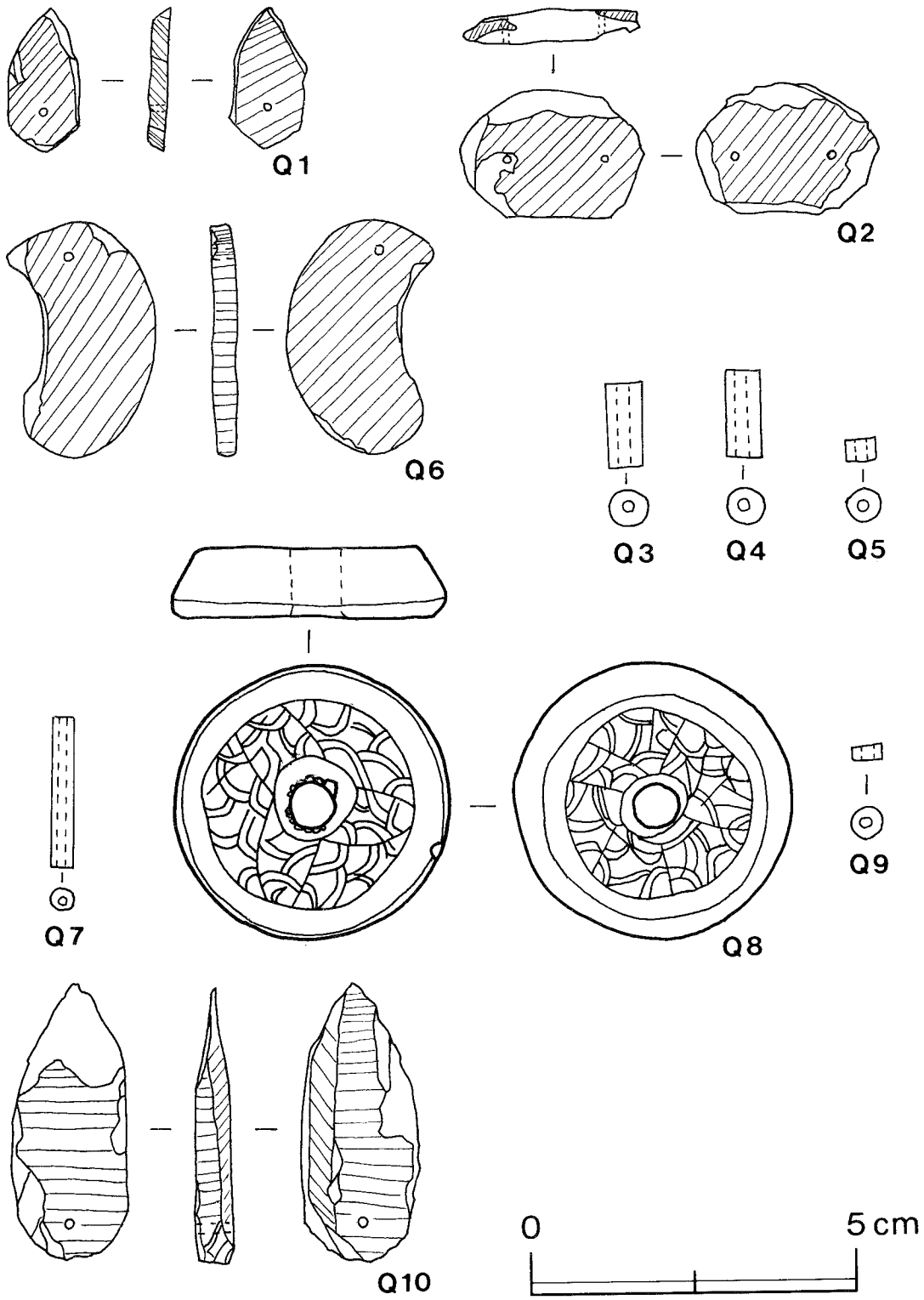
表採出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第151図 P506	壷形土器 土師器	A(37.2) B (3.9)	口縁部は外傾して立ち上がり，口縁端部は平坦な面をもち，内面に凸帯をつける。	内・外面－ハケ目整形 外面に2本の棒状浮文をつける。	砂・長石 にぶい橙色 良好	20% 表採
P507	器台形土器 土師器	B (7.0) D 11.0	脚部はラッパ状に下方に開く。脚部に6孔を穿つ。	外面－ハケ目整形後丁寧なで 内面－丁寧なで	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	65% 表採

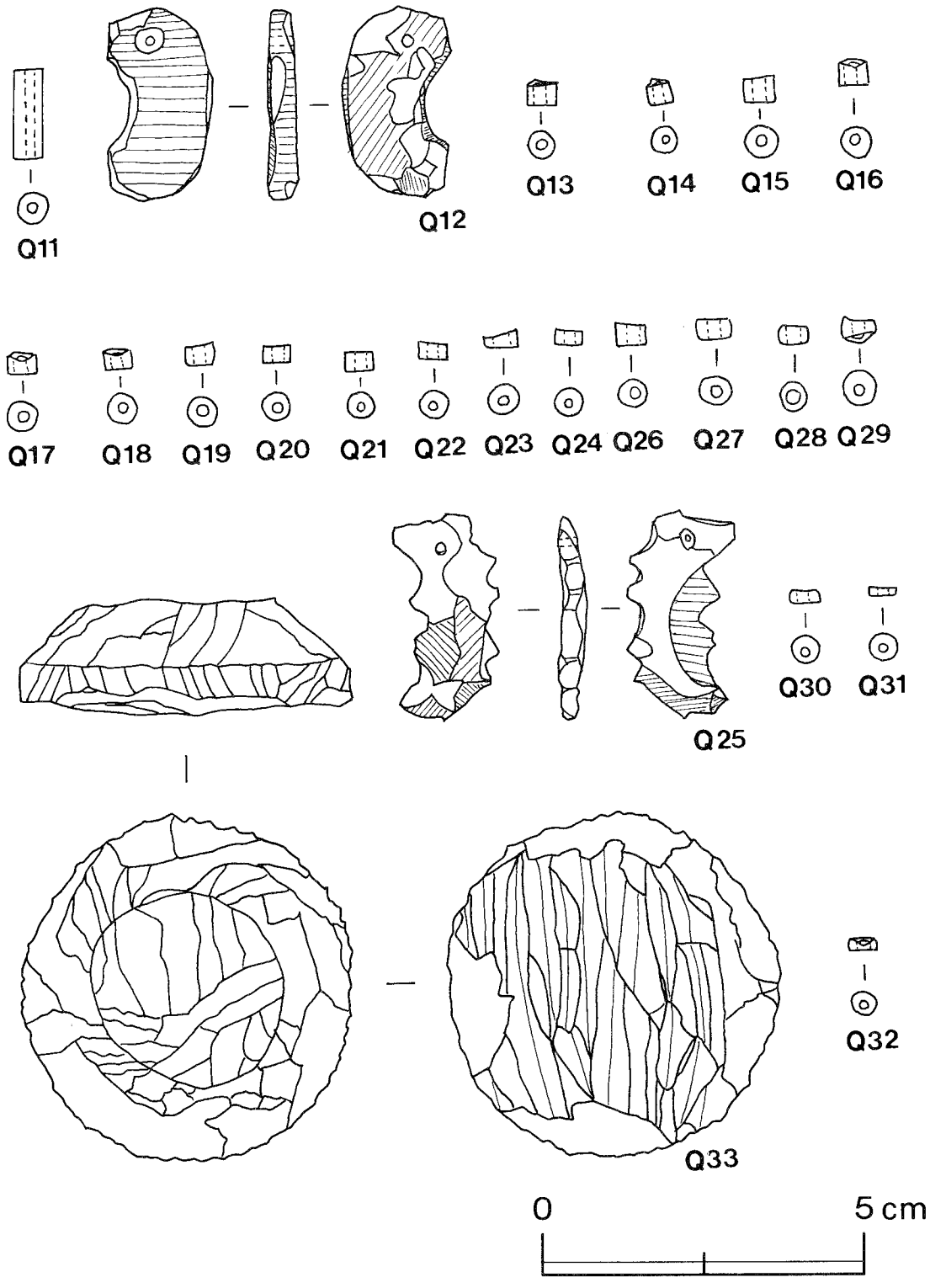


第152図　表採出土遺物拓影図

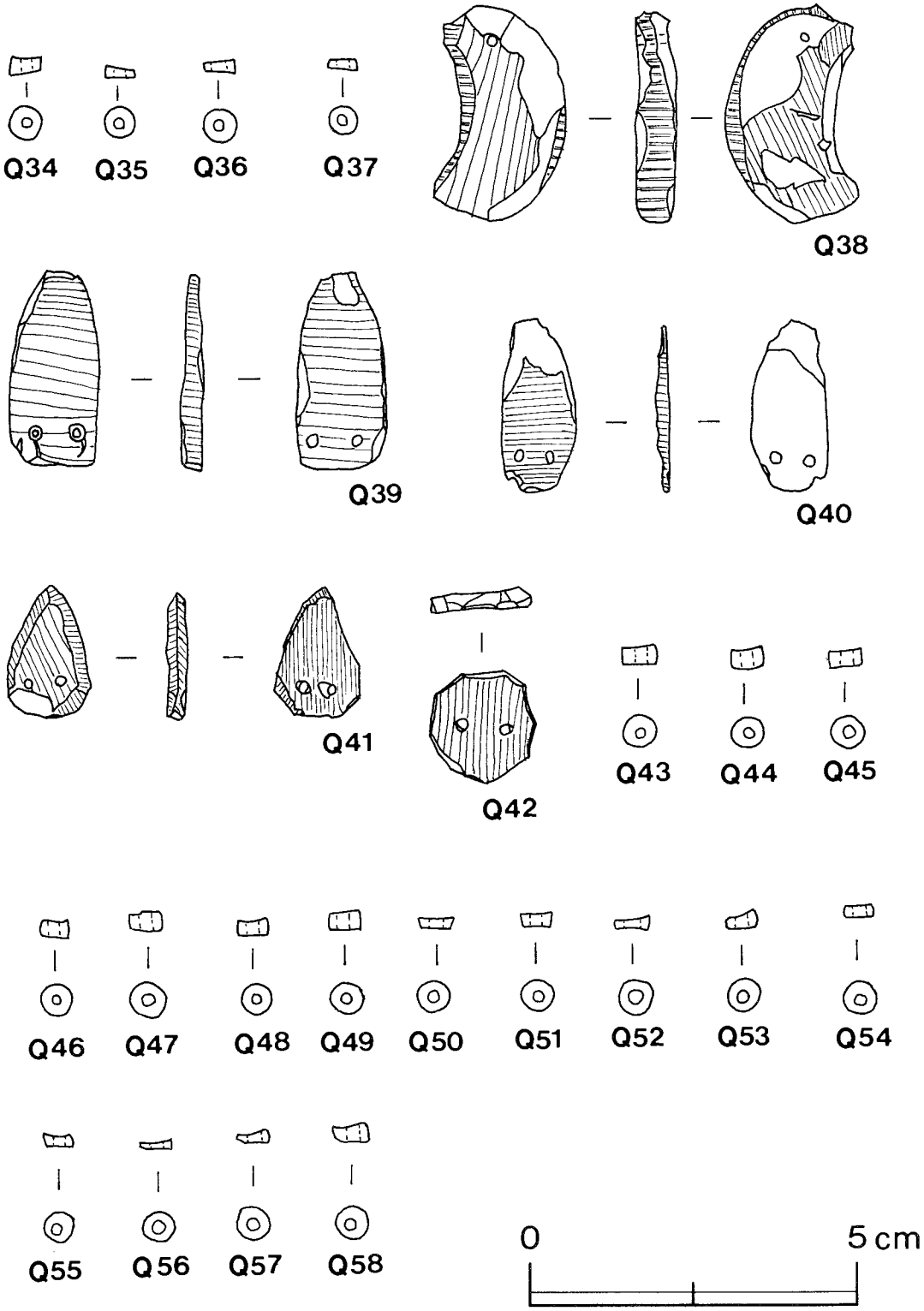
TP331～334は，甕形土器の胴部片で，TP335は，口縁部と思われる。いずれも須恵器である。



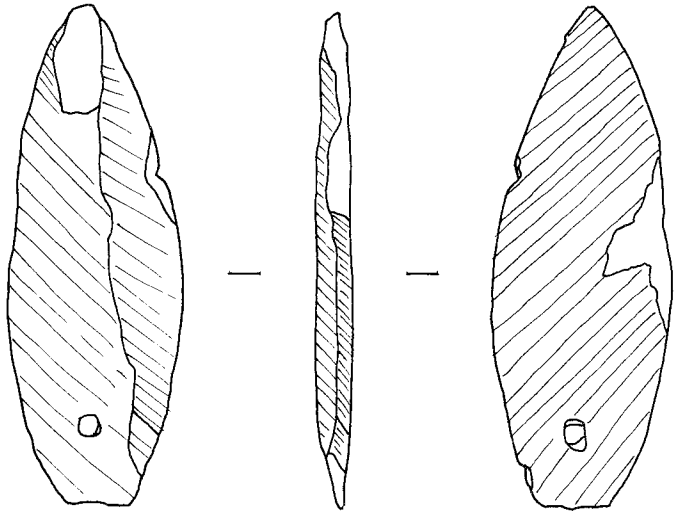
第153図　石製品実測図 (1)

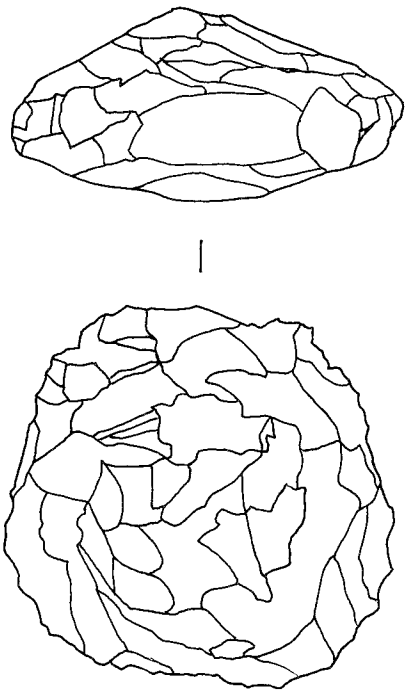


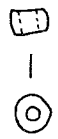
第154図　石製品実測図 (2)

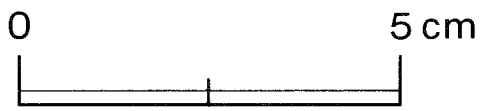


第155図　石製品実測図 (3)









第156図　石製品実測図（4）

第4節　ま　と　め

1　出土土器について

当遺跡からは，弥生時代後期から古墳時代後期にかけて位置づけられる土器や土器片が多数出土しているが，本項では，これらの土器を器形や整形技法に基づいて時期別・器種別に分類し，それぞれの土器のもつ全体的な特徴をそれらに従って概要を記述して行きたい。なお，概要を述べるにあたりそれぞれの土器をひとつひとつ掲図しながら説明を加えるべきところであるが，前節で紹介していることやスペース等の関係から，時期別・器種別ごとの代表的な土器を掲図してそれに代えたい。

(1)　弥生時代後期

当遺跡では弥生時代に位置づけられる遺構は検出されていないが，わずかに該期の土器片が5点（TP195・234・248・277・313）出土している。いずれも土器片のため正確な器形を窺うことはできないが，底部は平底で，胴部は下ぶくれ状を呈し，頸部はくびれ，口縁部は中位に稜をもち外傾しながら立ち上がり，器面には細かな縄文や櫛描き文様を施している壺形土器と思われる。おそらく，栃木県二軒屋遺跡を中心にして出土した二軒屋式に比定される土器と思われ，北関東地方の弥生時代後期に位置づけられるものと考えられる。

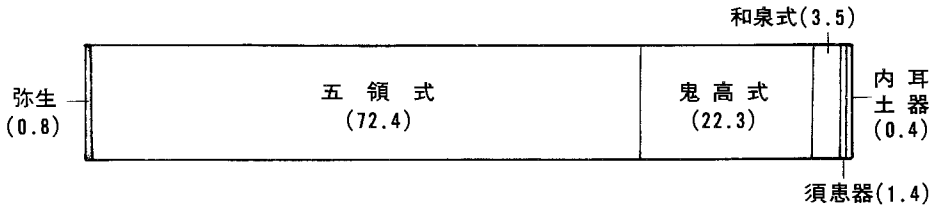
(2)　古墳時代前期（五領式期）

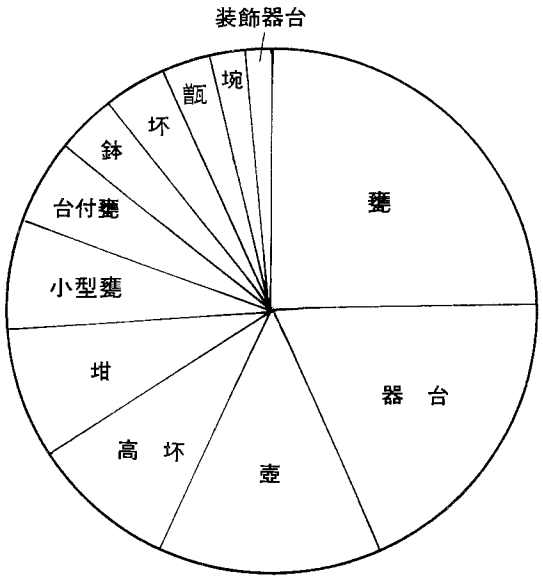
当遺跡から検出された該期に比定されると思われる土器は348点にのぼり，器種も豊富で，甕・小型甕・台付甕・壺・坩・坏・高坏・埦・鉢・甑・器台・装飾器台等がある。これらの土器は，器形や整形技法等の特徴から，埼玉県五領遺跡[(1)]出土の土器を標式として区分された五領Ⅰ式，五領Ⅱ式，及び五領Ⅲ式に対比して位置づけることが可能である。本項では前述のように，時期別，及び器種別にそれらの特徴を記してみたい。なお，当遺跡から古墳時代前期に位置づけられると思われる「S字状口縁台付甕」と「棒状浮文壺」が出土しており，本項の中で特に別項を設けて後述した。

五領Ⅰ式

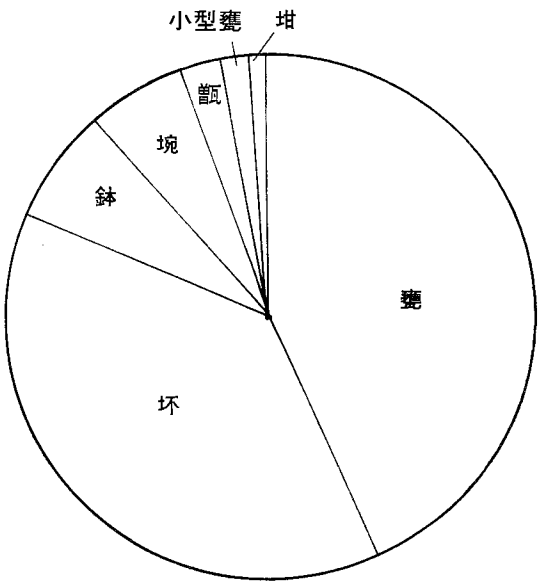
当遺跡から出土した五領Ⅰ式に比定される土器は，甕・小型甕・台付甕・壺・高坏・器台・装飾器台・坩等がある。それぞれの器形や整形技法等の特徴は，次のとおりである。

〈　甕　〉　19点出土し，底部は平底か，あるいはやや突出した平底で，胴部は長胴のもの1点（第





五領式土器



鬼高式土器

第157図　出土土器時期別内訳・器種別内訳

158図P126）を除き，球形を呈している。口頸部はすべて「く」の字状を呈し，大部分のものが胴部下半までハケ目整形が行われている。

〈小型甕〉　4点出土し，底部はやや突出した平底で，胴部は球形を呈している。口頸部は「く」の字状を呈し，ハケ目整形は胴部中位まで施すもの（第160図P495）と，下半までのもの（第160図P12）とが見られる。

〈台付甕〉　5点出土し，脚部はいずれも「ハ」の字状に下方に開き，胴部は長胴のもの1点（第160図P11）を除き，他は球形を呈している。口頸部は「く」の字状を呈し，ハケ目整形は胴部下半及び脚部内面まで施されている。

〈　壺　〉　11点出土し，底部は平底，または突出した平底で，最大径を胴部下半にもつものが4点（第160図P100）ある。頸部と口縁部の境に連続のキザミ目を施した粘土紐を貼付し，口縁部は外傾している。ハケ目整形は口縁部だけ施されているものが多い。

〈高　坏〉　2点出土し（第162図P472），いずれも脚部はラッパ状に開き，裾部は水平に近い。坏部は大きく内彎し，器高は低く，脚部には3孔が穿たれ，器面はなでられている。

〈器　台〉　9点出土し，脚部はラッパ状に下方に開く。受部は内彎するものや，外傾するもの（第162図P112），及び外傾した後直立するもの等がある。脚部の穿孔は，3孔・4孔，及び7孔のものがあり，器面はなでられたものが多い。

〈装飾器台〉　1点出土し（第163図P473），脚部は欠損しているがラッパ状に開くものと思われる。受部は下位で段を付けた後，外傾し，さらに中位で外傾の角度を変えている。器面はなでられている。

〈　坩　〉　5点出土し，いずれも小さな平底で，胴部は球形を呈している。口縁部は外傾し，器面はなでられている。

五領II式

当遺跡から出土した五領II式に比定される土器は，甕・小型甕・台付甕・壺・高坏・坏・鉢・器台・装飾器台・坩・甑等があり，器形や整形技法の上で，次の様な特徴が見られる。

〈　甕　〉　該期の中で出土点数が最も多く，34点出土している。底部は平底及びやや突出した平底のほかに，上げ底のもの（第158図P18）が見られる。器形の特徴及び器外面におけるハケ目整形技法は五領Ⅰ式と同様であるが，胴部内面にハケ目整形が施されているものが少数みられる。

〈小型甕〉　17点出土し，底部は五領Ⅰ式に見られた突出した平底に加え，平底のものが見られる。器形の特徴は五領Ⅰ式と同様な形状を呈するが，ハケ目整形が胴部下半まで施される例が多い。

〈台付甕〉　11点出土し，脚部は五領Ⅰ式と同様，「ハ」の字状に下方に開く。胴部は正球形を呈して最大径を中位にもつものと，最大径を上位にもつものの2種に分かれる。ハケ目整形は五領Ⅰ式が中位または下半まで施されるのに対し，該期のものは下半まで施される例が多い。

〈　壺　〉　該期の中で，甕・器台に次いで出土点数が多く，27点出土している。底部は五領Ⅰ式同様平底，または突出した平底で，胴部は球形を呈するものが多い。口縁部は五領Ⅰ式が外傾を呈するのに対し，該期では種々のものがみられる。直立後外傾するもの(第160図P299)，外傾し口縁部中位まで折り返すもの，外傾した口縁部に棒状線刻を施すもの(第160図P149)，同じく棒状浮文を貼付するもの(第160図P331)等がある。ハケ目整形は五領Ⅰ式同様口縁部に施されているものが多いが，まれに胴部中位まで施されるもの（第160図P395）もある。

〈　坏　〉　当遺跡では，五領Ⅰ式に比定される本器種の出土例は見られなかったが，該期のものとして位置づけることのできる坏が7点出土している。底部はいずれも平底で，体部は内彎するもの（第161図P314）と，外傾するもの（第161図P321）とが見られる。器面はすべてなでられている。

〈　埦　〉　埦も坏同様該期において検出されたもので，3点出土している。底部は平底で，体部は内彎するものと，内彎した後口縁部との境でくびれるもの（第161図P312）とがある。器面はなでられているものと，ハケ目整形のものとが見られる。

〈　鉢　〉　鉢も前2者同様該期において検出されたもので，8点出土している。底部が平底のもの2点，上げ底のもの6点となっており，体部はいずれも内彎している。口縁部は大部分が短かく外傾し，器面はハケ目整形を施すものと，なでられているものの2種が見られる。

〈高　坏〉　五領Ⅰ式の2点に比べ，該期では19点出土している。脚部は五領Ⅰ式のようにラッパ状のものと，あまり開かない「ハ」の字状のものとの2種に分かれ，前者が4点，後者が5点である。他の10点は坏部だけで脚部はない。坏部は内彎するものが多く，内彎する角度が変わるものが1点(第162図P164)出土している。脚部の穿孔は五領Ⅰ式同様3孔のものが大部分で，そのほか6孔のものも1点見られる。器面はほとんどがハケ目整形後なでられている。

〈器　台〉　本器種は該期の中で甕に次いで多く，32点出土している。脚部は五領Ⅰ式同様ラッパ状に下方に開くものが大部分であるが，「ハ」の字状に開くものが3点（第162図P453）出土している。なお，両者とも裾があまり広がらないものが多い。受部の器形は五領Ⅰ式に比べ豊富で，器形の窺える25点のうち，皿状に開いた後垂直に立ち上がるもの（第

162図P217）2点，同じく皿状に開いた後外傾するもの（第162図P136）4点，外傾して開いた後垂直に立ち上がるもの14点，外傾した後さらに角度を変えて外傾するもの（第162図P167）2点，及び内彎して立ち上がるもの（第162図P267）3点となっている。脚部の穿孔は，施されていないもの（第162図P167），3孔・4孔・6孔等を施すものとがあり，中でも3孔の例が多い。さらに，受部中央に比較的大きな孔を穿っているもの（第162図P136）が10点出土している。器面はなでられているものが多く，次いでハケ目整形後なでられているもの，ハケ目整形を施しているものの順となっている。

〈装飾器台〉 4点出土し，脚部は五領Ⅰ式同様ラッパ状に開き，受部は下位で段を付けた後外傾して立ち上がる。脚部にいずれも3孔が穿たれ，受部にも3孔（第163図P59），または4孔（第163図P204）を穿つものが見られる。器面は五領Ⅰ式同様なでられている。

〈 坩 〉 18点出土し，底部は平底が多いが，五領Ⅰ式では検出されなかった上げ底や丸底のものが見られる。体部は扁平な球形を呈するもの1点（第163図P380）を除き，他はすべて球形を呈している。口縁部は外傾し，直線的に長く上方に伸びるものが大部分である。器面は五領Ⅰ式がなでられているのに対し，ハケ目整形後なでられているものが半数はある。また朱彩のものが1点出土している。

〈 甑 〉 五領Ⅰ式では見られなかったが，該期に比定されるもの（第163図P212）が5点出土している。いずれも浅鉢形の甑で，底部は平底であり，胴部は外傾し，口縁部は折り返された複合口縁である。底部中央に単孔を穿ち，器面はハケ目整形後なでられている。

五領Ⅲ式

当遺跡から出土した五領Ⅲ式に比定される土器は，甕・小型甕・台付甕・壺・坏・埦・鉢・高坏・器台・坩・甑等であり，五領Ⅰ・Ⅱ式にみられた装飾器台は出土していない。

〈 甕 〉 該期の中で五領Ⅱ式同様出土点数が最も多く，30点出土している。底部は平底か，あるいはやや突出した平底で，口頸部は「く」の字状を呈するが，その角度がゆるくなり，直立に近いもの（第158図P270）が数点見られる。器面に残るハケ目整形は胴下半に達するものが少なく，部分的なもの（第158図P238）が多い。

〈小型甕〉 5点出土し，底部は五領Ⅱ式でみられた突出した平底のものはなく，いずれも平底である。胴部や，口頸部の器形は五領Ⅰ式同様球形及び「く」の字状を呈するが，やや口頸部の立ち上がりはゆるやかで，ハケ目整形は胴中位までである。

〈台付甕〉 五領Ⅰ・Ⅱ式に比べ出土点数は少なく，わずかに1点（第160図P115）である。脚部は小さく，「ハ」の字状に下方に開き，胴部・口頸部は五領Ⅰ・Ⅱ式同様球形及び「く」の字状を呈するが，やや口頸部の形状はゆるやかとなる。ハケ目整形も，Ⅰ・Ⅱ式が下半

まで及ぶのに対し，胴部中位までである。

〈 壺 〉 五領Ⅰ式で11点，同Ⅱ式で27点の出土に対し，該期では５点である。底部欠損のものが多く形状を把握できるものが少ないが，五領Ⅰ・Ⅱ式で見られた突出した平底のものが１点出土している。胴部は該期以前で見られた下ぶくれ状のものは認められず，すべて球形を呈している。口頸部は五領Ⅱ式のように種々な形状が見られなくなり，ほとんどが外傾して立ち上がっている。なお，１点であるが口縁部上位まで折り返しているものがある。器面は五領Ⅰ・Ⅱ式で見られた明瞭なハケ目整形痕が見られず，なでられているか，またはハケ目整形後なでられている。

〈 坏 〉 出土点数は少なく，３点である。平底は２点で，上げ底が１点である。体部は五領Ⅱ式同様内彎するもの（第161図P77）と，外傾するものがある。器面は五領Ⅱ式ですべてなでられていたのに対し，該期ではハケ目整形が２点施されている。

〈 鉢 〉 ４点出土し，底部は五領Ⅱ式同様平底，または上げ底で，体部も内彎している。器高の高いものは内彎した後口縁部が外傾する。器面は五領Ⅱ式のようなハケ目整形を残すものが見られず，なでられたもの２点，ハケ目整形後なでられたもの（第161図P145）２点である。

〈高 坏〉 ９点出土し，脚部は五領Ⅰ・Ⅱ式同様ラッパ状，または「ハ」の字状を呈するが，坏部は皿状に広がり，小さな稜を付けた後外傾して立ち上がるもの（第162図P240）が主である。脚部の穿孔は五領Ⅰ・Ⅱ式でみられた３孔のほか，４孔のもの（第162P247）が見られる。器面はすべてなでられている。

〈器 台〉 該期の中で甕に次いで出土点数が多く，23点出土している。脚部は五領Ⅰ・Ⅱ式同様ラッパ状に開くものが多く，「ハ」の字状のものは少ない。受部は五領Ⅰ・Ⅱ式に見られた皿状に開いた後直立するものは見られず，外傾するもの（第162図P37），外傾した後さらに角度を変えて外傾するもの（第162図P141），内彎するもの（第162図P119）などがある。脚部は３孔を穿つものが多く，五領Ⅰ・Ⅱ式で見られた４孔・６孔・７孔のうち４孔のもの（第162図P117）がわずかに１点見られるのみである。器面は五領Ⅰ・Ⅱ式同様なでられているものが大部分で，ハケ目整形のものは２点である。

〈 坩 〉 五領Ⅱ式に比べ出土点数は少なく，４点である。底部は平底だが，底は小さく丸底に近くなってくる。胴部は五領Ⅱ式で球形を呈するものが主であるのに対し，該期では扁平化（第163図P428）している。口縁部は五領Ⅰ・Ⅱ式同様外傾し，器面はすべてなでられている。

〈 甑 〉 浅鉢形のものが１点（第163図P426）出土している。器形の特徴は五領Ⅱ式とほぼ同様であるが，口唇部に平坦な面をもつ点で異っている。器面は胴部にハケ目が残り，他の

部位はハケ目整形後なでられている。

「S」字状口縁台付甕

当遺跡において，8点出土している。「S」字状口縁台付甕は，口縁部下半が「く」の字状でさらに口縁部上半でもう一度「く」の字状を呈し，あたかも「S」字状に似た立ち上がりを有することから呼称されているもので，祖形は三重県納所遺跡[2]から出土した受口状甕に求められる。この甕は弥生時代の畿内第4様式に比定され，胴部下半に細かい縦のハケ目を施し，頸部には横のハケ目を付け，胴部上半に刺突文，平行線文，波状文などが施されている。また，一般に器肉は薄く，脚部は単口縁の台付甕（S字状口縁以外の台付甕）よりも小さい。

当遺跡から出土したS字状口縁台付甕も器肉は他の土器と比べて薄く，胴部に細かい縦のハケ目を施している。胴部上半以上の破片であるため脚部は不明であるが，小さい脚部で器重をささえることは可能である。

茨城県内における出土例は，勝田市三反田遺跡[3]，新治村梶の宮遺跡[4]，鹿島町木滝台遺跡[5]，那珂湊市富士の上遺跡[6]などがあり，当遺跡のものは三反田，富士の上遺跡出土のものに類似している。

「S」字状口縁台付甕の分類は，昭和55年に調査された群馬県元島名将軍塚古墳[7]の報告で行われ，それによるとI～VI期に分けられ，I期を3世紀末，II期を4世紀前半，III期を4世紀中葉，IV期を4世紀後半，V期を4世紀終末から5世紀初頭，VI期を5世紀前半に位置づけている。これらの時期区分に基づいて当遺跡出土のものを位置づけると，P90はII期（五領I式期），P277・P387～P389はIII期（五領II式期），P276・P419はIV期（五領III式期）に該当するものと考えられる。なお，TP62は小破片のため時期は不明である。

棒状浮文壺

当遺跡において，5点出土している。棒状浮文壺は，主として有段をもつ壺の口縁部に棒状の隆起文を施す手法からこのように呼称され，弥生時代後期から出現し，愛知県高蔵式[8]，静岡県二本松式[9]，南関東の久が原式[8]などの土器に見られる。壺の形状はパレススタイル型，広口壺の形を呈し，平底で，胴部は球形であり，頸部がくびれるか，またはやや長く立ち上がり，口縁部は外傾し，口縁部中位まで複合口縁化している。

当遺跡出土の棒状浮文壺は5点とも口頸部片である。形状は頸部から外傾し，口縁部下半で段をもち，後外傾して立ち上がる。口唇部に平坦な面を付け，内面に折り返して内凸の形をとる。口縁部外面に縦のハケ目を施し，2～4本の断面三角形の棒状隆起文を付けている。

茨城県内における出土例は，千代田村志筑遺跡[10]，鹿島町木滝台遺跡[5]，神栖町ふたご塚遺跡[11]，勝田市三反田遺跡[3]，谷田部町境松遺跡[12]，竜ヶ崎市南三島遺跡[13]などがあり，県外では，当遺跡とほぼ

同様なものが静岡県下野遺跡[14]，同飯田遺跡（久保田，向原地点[15]）にその出土例が見られる。

当遺跡の棒状浮文壺は，静岡県東部の土師器集成[16]に基づいて対比すると，静岡県漆畑遺跡[17]，同藤井原遺跡[18]出土の古墳時代初頭の大廓式と，同広池遺跡[19]などで出土した古墳時代中期の直前にあたる広池式の中間に位置すると思われる。従って，当遺跡で分類した五領II式の時期に該当するものと考えられる。

(3) 古墳時代中期（和泉式期）

当遺跡から検出された該期に比定されると思われる土器は18点であり，器種は，甕・坏・埦・高坏・器台・坩・甑などである。五領式期に比べて全体的に出土量は少ないが，これは該期にあたる遺構数が少ないことによるものである。和泉式土器については，周知のとおり，昭和15年に調査された東京都和泉遺跡[20]出土の土器を標式として命名されたものであり，古墳時代の中期に位置づけられるものである。当跡における該期の土器は，器形や整形技法等の特徴から，いずれも中期後半に位置づけられるものと思われる。

〈 甕 〉 4点出土し，底部はやや突出した平底である。胴部が球形のもの（第159図P1） 2点，長胴のもの（第159図P72） 2点で，口頸部はいずれも「く」の字状を呈するが，五領式に比べずっと緩やかになる。器面はハケ目整形後なでられている。

〈 坏 〉 1点出土し（第161図P226），上げ底で，体部は内彎している。器面はハケ目整形後ヘラなでされている。

〈 埦 〉 1点出土し，平底で，体部は内彎した後口縁部が直立している。器面はヘラなでされている。

〈高 坏〉 3点出土し，脚部はラッパ状で裾部が水平に開いた後上方にはね上がるもの（第162図P241）と，脚部下半が「ハ」の字状に開くものとがある。坏部はいずれも大きく内彎し，器面はヘラなでか，ハケ目整形後ヘラなでされている。

〈器 台〉 1点出土し（第162図P248），脚部は小さくラッパ状に下方に開くが，受部は内彎して立ち上がり，上半でくびれた後短かく外傾する。あたかも受部は鉢をのせたような様相を呈している。器面はヘラなでされている。

〈 坩 〉 4点出土し，体部は完全に扁平化する。口縁部は外傾し中位で直立する。底部はすべて平底と思われ，器面はヘラなでされている。

〈 甑 〉 4点出土し（第163図P232），いずれも深鉢形である。底部孔は突き抜け，胴部はゆるやかに内彎している。1点だけであるが口縁部が折り返された複合口縁をもつものが見られる。器面はいずれも粗いヘラなでが施されている。

(4) 古墳時代後期（鬼高式期）

当遺跡から検出された該期に比定される土器は，113点出土している。器種は，甕・小型甕・坏・埦・鉢・坩・甑などである。これらの土器は，器形や整形技法等の特徴から，千葉県鬼高遺跡[21]出土の土器を標式として区分された古墳時代後期の鬼高Ⅰ式，同Ⅱ式に対比して位置づけることができる。

鬼高Ⅰ式

当遺跡から出土した該期に比定される土器は，甕・小型甕・坏・埦・鉢・甑などがあり，そのほか，口縁部片であるが坩も1点出土している。

〈 甕 〉 該期の中で最も多く，48点出土している。底部は平底のものが圧倒的に多く，上げ底のもの（第159図P222）はわずかに2点である。胴部も長胴のもの（第159図P184）が多く，球形を呈するものは少ない。口頸部の形状は3種類が認められ，「く」の字状のもの17点，「コ」の字状のもの（第159図P43）16点，垂直に立ち上がるもの（第159図P358）2点となっている。なお，他は欠損のため形状不明である。器面はほとんどがヘラなでされている。

〈小型甕〉 2点出土し，底部はやや突出した平底で，胴部は球形に近いが，五領式に比べやや長胴である。口頸部は五領式で見られた「く」の字状を呈するものと，五領式に見られなかった口頸部の直立するもの（第160図P224）がある。器面はいずれもヘラなでである。

〈 坏 〉 甕に次いで出土点数が多く，42点である。底部は丸底が圧倒的に多く，平底のもの（第161図P48）2点，上げ底のもの1点で，平底や上げ底は少ない。体部から口縁端部にかけての器形上の相違から4種類に分けることができ，外傾するもの（第161図P153），内彎するもの（第161図P365），内彎した後口縁部との境で稜をもち口縁部が直立するもの（第161図P362），同じく稜をもち口縁部が内傾するもの（第161図P251）等がある。このうち，稜をもち口縁部が直立するものが約半数を占めて最も多い。器面はヘラなでされているものが多く，底部はヘラけずりが施されている。

〈 埦 〉 7点出土し，そのうち五領・和泉式期で見られなかった丸底のものが6点で，他の1点が平底である。体部はすべて内彎し，口縁部との境で形状を変え，内傾する（第161図P193）か，または直立して立ち上がっている。器面はヘラなでやヘラけずりがなされている。

〈 鉢 〉 8点出土し，底部は丸底が多く，平底は1点である。体部は内彎し，口縁部で短く外傾するもの（第161図P341）と，内傾するもの（第161図P195）の2種類がある。器面は

ヘラなでされており，さらに内面がヘラ磨きされているものも２点認められる。

〈 坩 〉 口縁部片であるが１点（第163図P318）出土している。口縁部下位は直立し，中位で外傾した後上位でさらに角度を変えて外傾している。和泉II式の様相が残るが，それよりも器肉が薄い。口縁部中位でハケ目整形を残すが，他の部位はヘラなでされている。

〈 甑 〉 ３点出土し，いずれも深鉢形のもの（第163図P340）で，底部に突き抜けの孔を穿ち，胴部は長胴を呈する。口頸部は角度のゆるい「く」の字状を呈し，甕と同じ様相である。器面はいずれもヘラなでされている。

鬼高II式

該期に比定される土器の出土点数は少なく，甕と坏がそれぞれ１点ずつである。

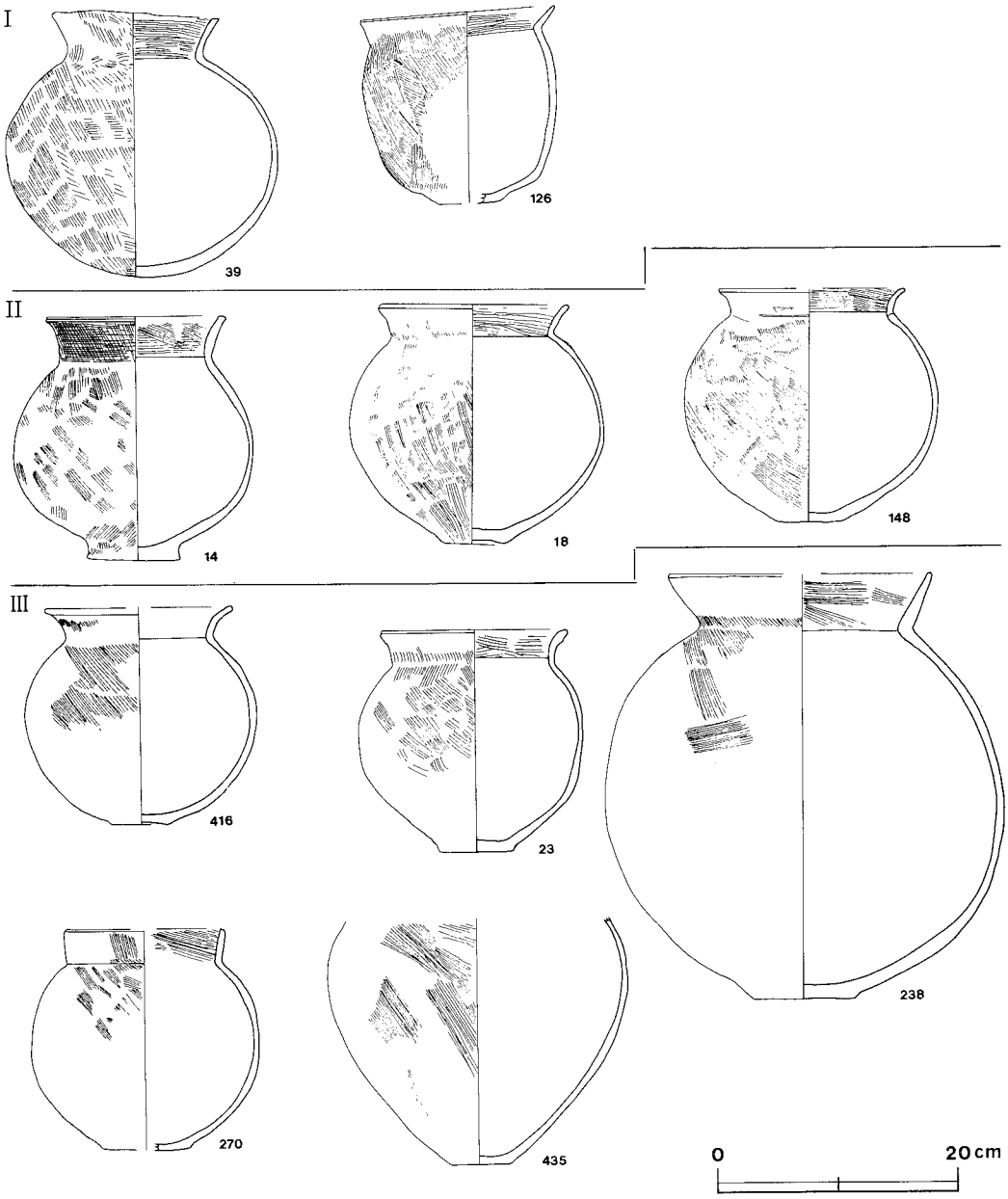
〈 甕 〉 底部は平底で，胴部は鬼高Ｉ式よりも長胴化し（第159図P55），口頸部は「く」の字状を呈する。器面はヘラなでがなされている。

〈 坏 〉 体部は内彎し，口縁部との境に稜をもち（第161図P54），口縁部は鬼高Ｉ式にみられたように直立しているが，口縁部の器肉が薄く，器高が高い点で異なり，この点が特徴的である。

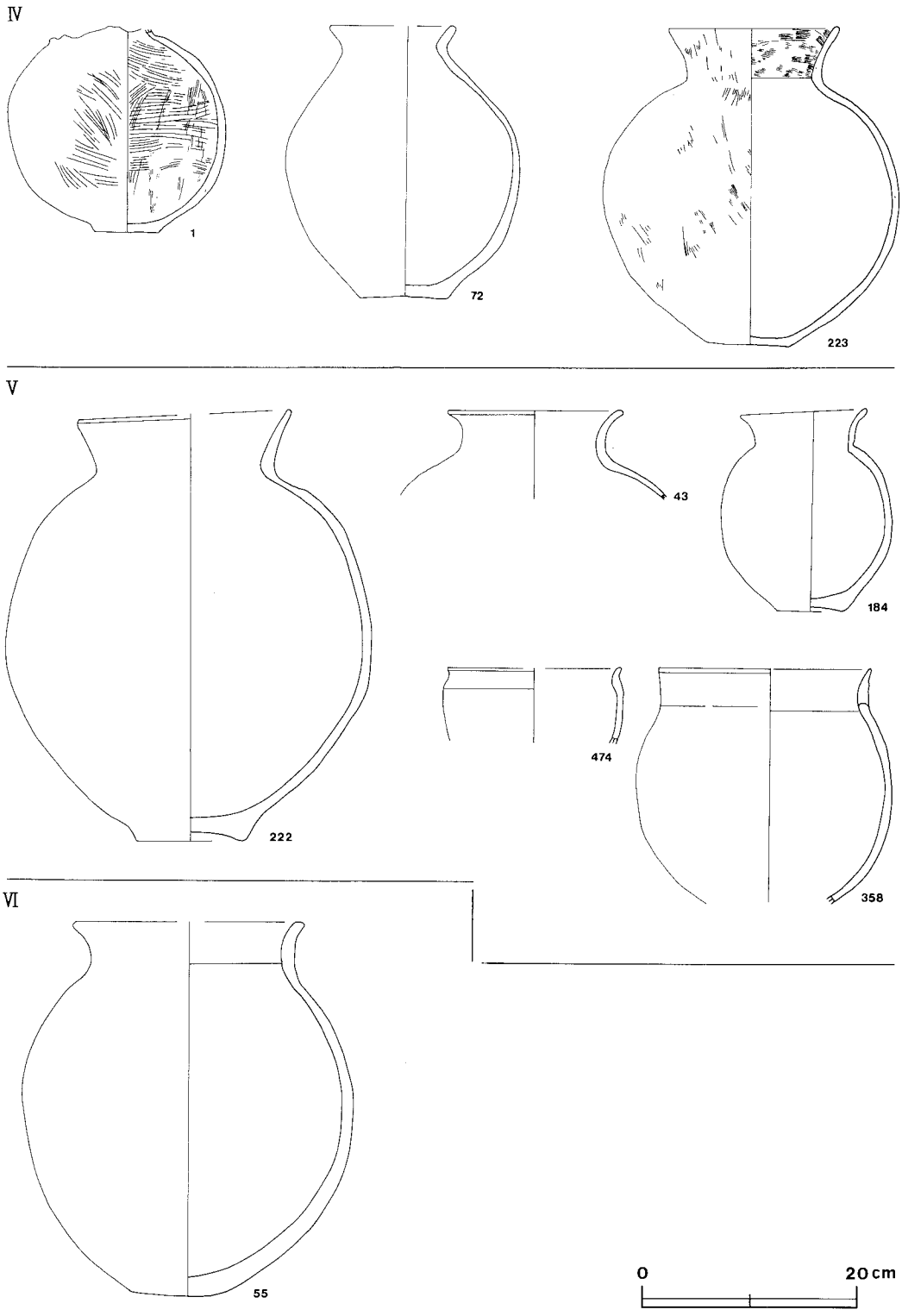
２ 集落の変遷

第１節でのべたように，当遺跡から出土した土器は弥生時代，古墳時代前期から後期，及び中世に該当するものであるが，本項では，土器片３片だけの出土で該期遺構の検出されなかった弥生時代のものや，中世の溝を除き，古墳時代の遺構を前項の土器分類に基づいてＩ～VI期に区分し，各時期ごとに遺構の形態，配置等を考えながら集落の変化を追ってみたい。しかし，一時期の年数幅は30～50年あり，一時期内においても遺構が重複していることから，当該期の遺構がすべて同時期に存在したとは考えられない。

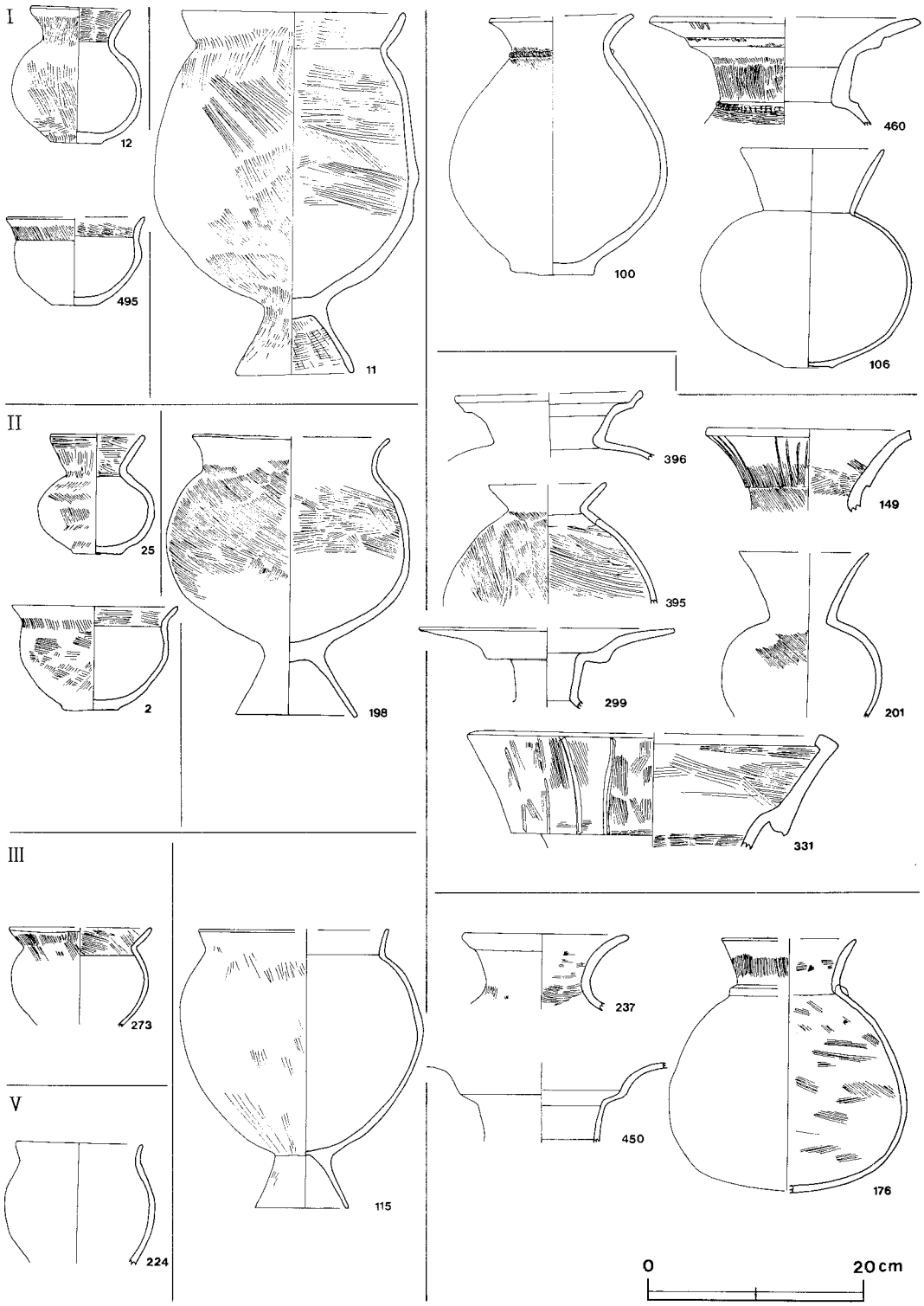
当遺跡は，北から南西に延びてくる標高19～21mの平坦な台地の南西部の緩斜面に立地しており，調査区域は幅約40m，長さ約180mで北東－南西方向に細長い範囲であり，住居跡が検出されたのは，調査区のＣ～Ｆ区で，北側のＡ・Ｂ区に存在せず，また，Ｆ区の南側は水田で，しかも標高が２m程低く，やはり当遺跡と同時期の遺構の存在は薄く，集落の南北範囲はＣ～Ｆ区内におさまるものと考えられるが，東西にはその分布の状況から広がるものと考えられる。従って，検出された住居跡は，当然調査区域外の東西に存在すると思われる住居跡と関わるはずであり，本項における集落の変化を正確に追うことは困難であるので，主に該期遺構の特徴を総括しながら，変遷のあり方に触れていきたい。



第158図　土器編年図（1）　甕

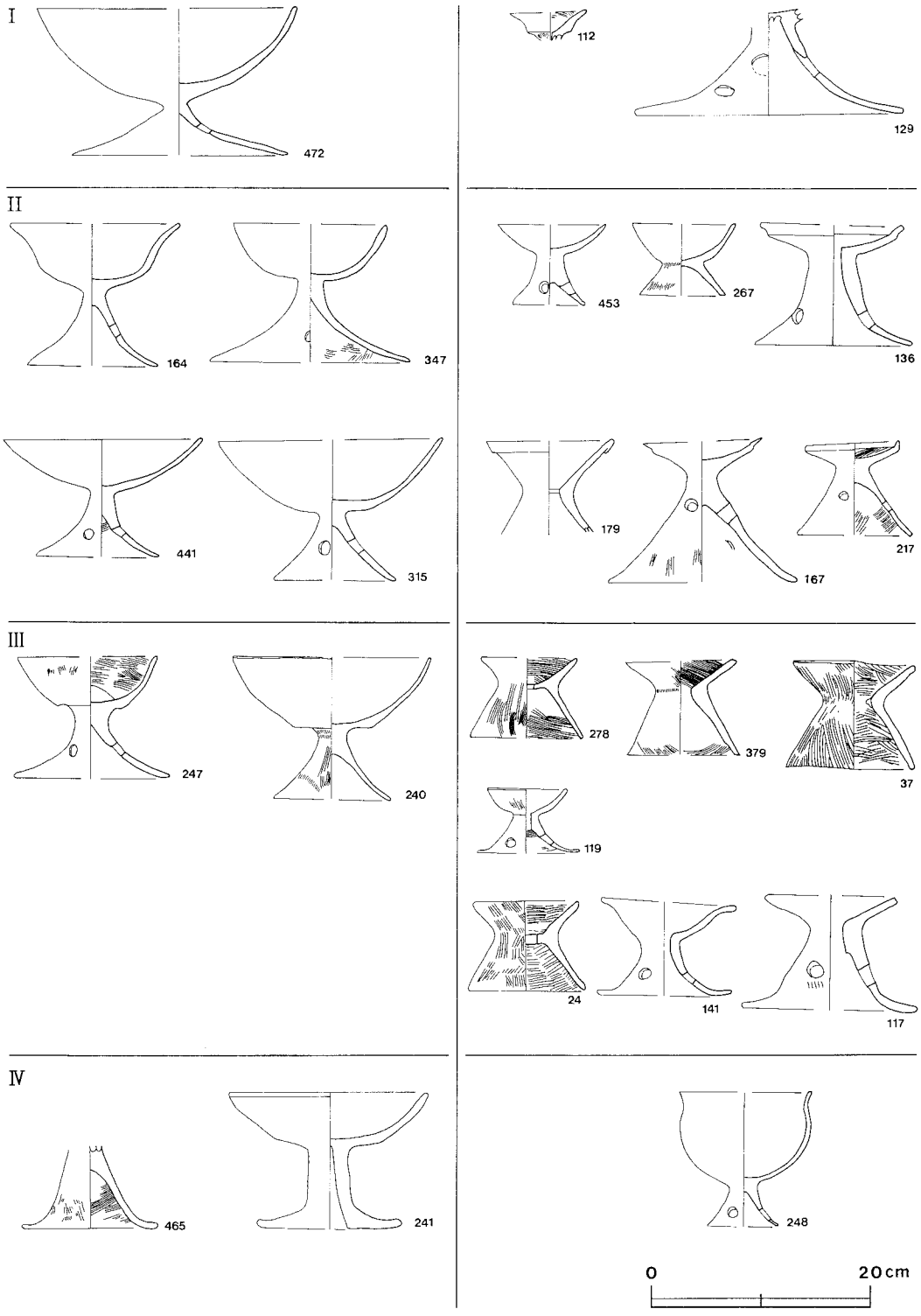


第159図　土器編年図（2）　甕

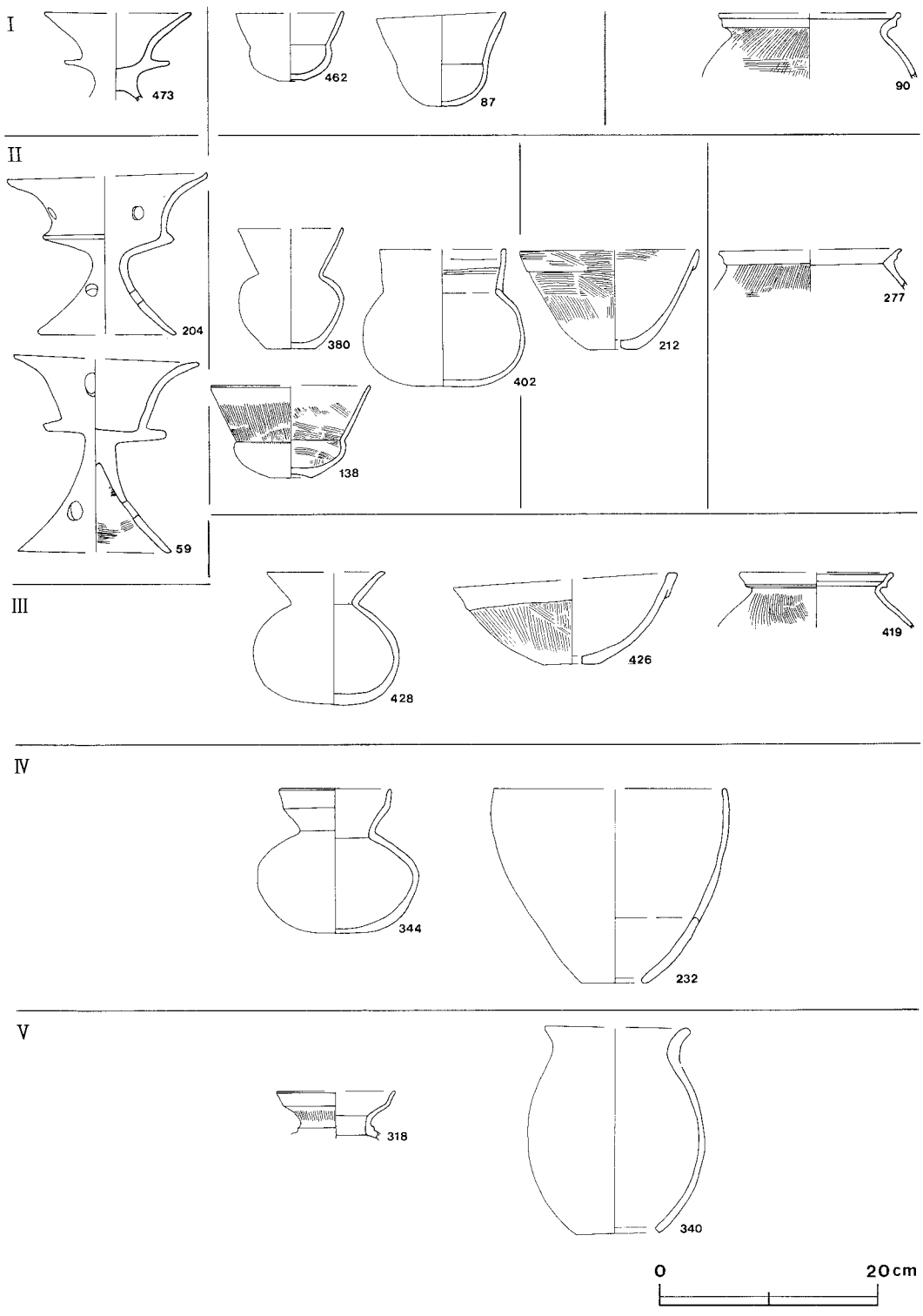


第160図　土器編年図（3）　小型甕・台付甕・壺

第161図　土器編年図 (4)　坏・埦・鉢



第162図　土器編年図（5）　高坏・器台



第163図　土器編年図（6）　装飾器台・坩・甑

I期（4世紀前葉－五領I式）

本期に属する遺構は，第10～12・15A・15B・51・57～59・61号住居跡の10軒である。

住居跡の長軸方向は，N－29°～64°－Eが6軒，N－3°～87°－Wが4軒である。規模は長軸3.4～6.6m，短軸3.2～6.5mで，長軸（推定も含む）3.5m未満1軒（第57号），3.5m以上4m未満2軒（第10・59号），4m以上4.5m未満1軒（第58号），4.5m以上5m未満3軒（第12・15B・61号），5m以上3軒（第11・15A・51号）である。形状は長方形が1軒（第11号）で，他は方形または隅丸方形である。炉を有するものは3軒で，北側及び南東側に配されている。

遺構配置は南側の6軒（第10～12・15A・15B・51号）と，北側の4軒（第57～59・61号）の二グループに分かれ，いずれも調査区域の南北中央ラインから東側に偏って位置しており，さらにそれらは円弧状に並んでいる。従って，東側のエリア外に円形もしくは円弧状に広がるものと考えられる。規模が6mを超える第15A・51号住居跡を除くと，概して小型の住居跡が多い。

なお，第11号住居跡は第10・12号住居跡と，第15A号住居跡は第15B号住居跡と重複しており，本期はさらに新旧に分けることが可能である。

II期（4世紀中葉－五領II式）

本期に属する遺構は，第4～6A・16・18・20・22・23・25・27A・34・36～38・40A・40B・43・45・48～50・52・62号住居跡の23軒である。

住居跡の長軸方向は，N－16°～77°－Eが8軒，N－0°～89°－Wが15軒で，様々な方向を示し，一定していない。規模は長軸3.8～6.8m，短軸3.6～6.7mの間で，大小の住居跡が見られる。長軸が4m未満のもの1軒（第22号），4m以上5m未満3軒（第23・38・62号），5m以上5.5m未満5軒（第4・5・25・40B・5号），5.5m以上6m未満4軒（第20・34・40A・49号）で，他の10軒は6mを超え，該期の中で最も多く，住居跡の規模は五領I式に比べやや大型化の傾向が見られる。形状は方形を呈するもの5軒，隅丸方形が4軒，長方形が9軒，隅丸長方形が4軒，楕円形が1軒（第5号）である。炉を有する住居跡は，約半数の12軒で，その位置も様々である。床面の状態が硬く踏み固められた住居跡は14軒で，柱穴が4か所以上検出された住居跡は16軒である。

これらの遺構は，F区の一部と，C～E区の全域に点在して検出されており，しかも当期の遺構が最も多く検出されていることから，当遺跡において最も集落が拡大した時期と思われる。ただ当期の遺構の中で，重複（第40A・40B号）ないし，近接（第20・23・27・36・37号）しているものがあり，これらを考慮すればさらに本期を細分することが可能である。しかし，いずれにせよ該期の住居跡は他時期に比べ密集しており，該期集落の隆盛を窺うことができる。

なお，これらの住居跡から，五領II式に比定される土器が出土していることから，本期は4世

紀中葉にあたるものと考えられる。

III期（4世紀後葉－五領III式）

本期に属する遺構は，第8・14・17・21・35・44・46・47号住居跡の8軒である。

住居跡の長軸方向は，N－21°～45°－Wが3軒（第8・14・17号）で，他の5軒はN－45～73°－Eである。なお，前者は遺跡の南側部分に検出されている。規模は長軸4.3～7.0m，短軸3.9～6.3mで，長軸4.5m未満が1軒（第47号），4.5m以上5m未満1軒（第46号），5m以上5.5m未満1軒（第44号），5.5m以上6m未満1軒（第8号），6m以上が4軒である。規模は概して大きく，5m以上が8軒中6軒である。形状は方形のもの4軒，隅丸方形のもの1軒，隅丸長方形のもの3軒である。これらの住居跡は，いずれも床が硬く，炉を有しているものが多い。しかし，第21号住居跡については，遺構がエリア境界に位置するため半分以上が調査できず，炉の検出に至っていない。柱穴は撹乱のため検出できなかった第46号住居跡を除き，他の住居跡は3か所以上の柱穴が検出されている。

以上のように，当遺跡における該期の住居跡は，I期・II期のものに比べ床面もしっかりし，柱穴も形状，配列等が規則的であり，炉も設けられ，住居跡としての諸要件を満すしっかりした住居跡群といえる。

これらの遺構の分布状況は，おおむねI期の住居跡を取り囲む形で位置し，さらにエリア西側に延びる様相を示している。

なお，互いに近接する住居跡（第46・47号）が存在していることから，該期においても，さらに時期の細分ができるのかも知れない。

IV期（5世紀後半－和泉II式）

本期に属する遺構は，第6B・53号住居跡の2軒だけである。

長軸方向は，N－33°－WとN－89°－Eである。規模は長軸4.5mと4.6mで，五領II・III式の大形住居跡に比べ小形である。形状は方形と隅丸方形を呈し，炉は第53号住居跡で検出されている。この2軒の住居跡は，約100m離れて存在し，C区とF区で検出されている。

なお，これらの遺構が，当遺跡におけるIII期以降本期のIV期に至るまでの50～60年の空白期間を経て，集落形成という形で突如として現れたことは，次への時期，即ちV期の前哨として，以後の集落の変遷を追う上で，貴重な遺構であると考えられる。

V期（6世紀前半－鬼高I式）

本期に属する遺構は，第1・24・27B・29～31・39・41・42・54～56・60号住居跡の13軒である。

住居跡の長軸方向は，N－62°－E～N－90°－Wと多方向を示し，一定でない。規模は長軸2.3～10.6m，短軸2.2～9.8mで，長軸3.5m未満2軒（第39・60号），4m以上4.5m未満2軒（第24・31号），5m以上5.5m未満2軒（第27B・30号），5.5m以上6m未満4軒（第41・42・54・55号），6.5m以上3軒である。特に，第29号住居跡は10.6×9.8mと当遺跡中最大である。形状は，方形が5軒，隅丸方形が2軒，長方形が6軒である。床の状態が硬いものは7軒で，炉を有するものも7軒である。13軒の住居跡のうち，第1・29・39・41・55号住居跡の5軒は石製品製作跡であり，いずれも方形で，床面の状態も硬い。

遺構の分布は，すべてC・D区に存在し，五領期に比べ，集落の形成は北側へと移っている。また，石製品製作跡の第1号住居跡と第54号住居跡，同じく29号と27B号，39号と30号（あるいは24号か31号），55号と56号というように，石製品製作跡の近くに約3.5～6m離れて他の住居跡が配置されている。

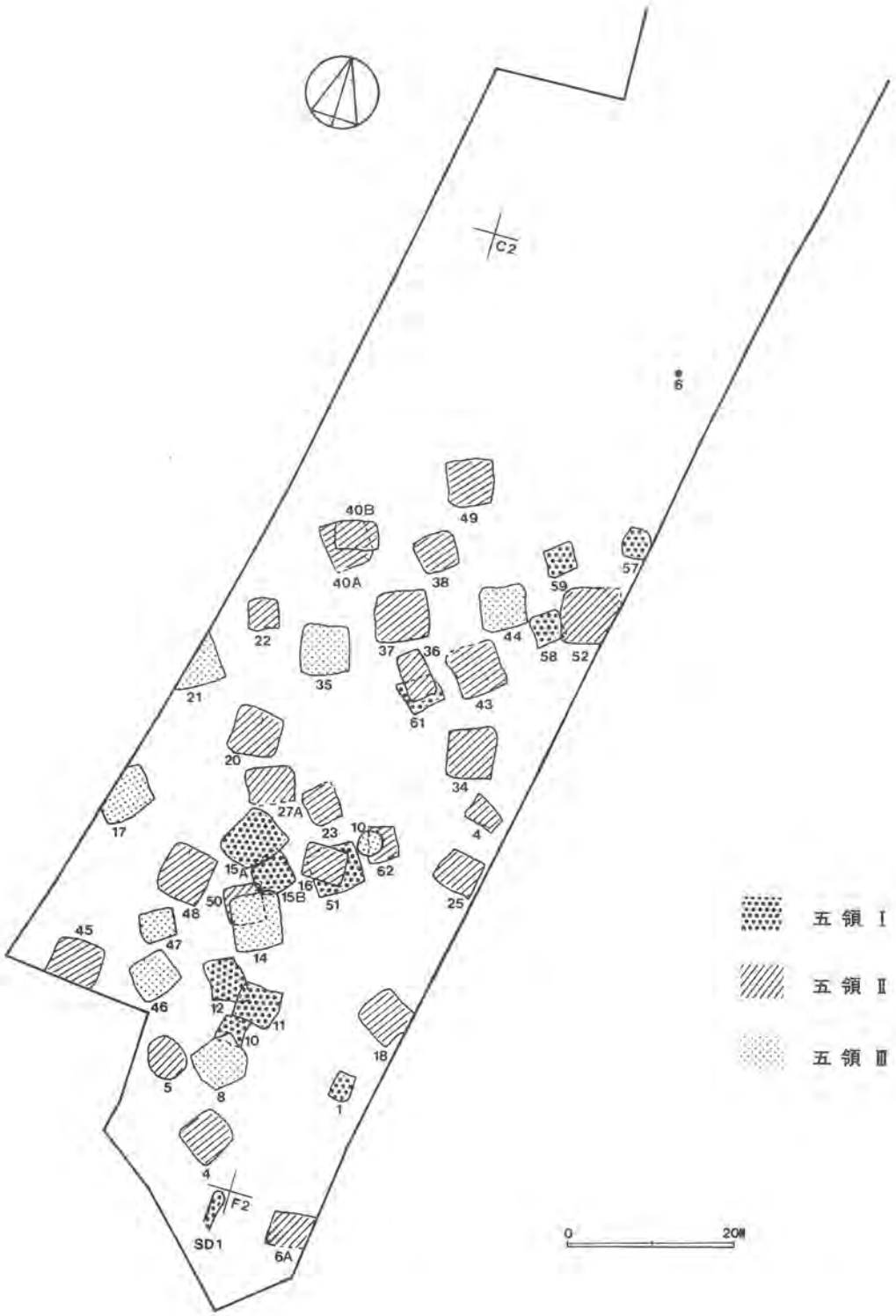
これらの13軒の住居跡の時期については，それぞれの住居跡から鬼高Ⅰ式に比定される土器が出土していることから，6世紀前半に位置づけられるものと思われる。なお，該期の中で，第24・29～31号住居跡が重複していることから，さらに2～3段階の時期に分けることが可能である。

VI期（6世紀後半－鬼高II式）

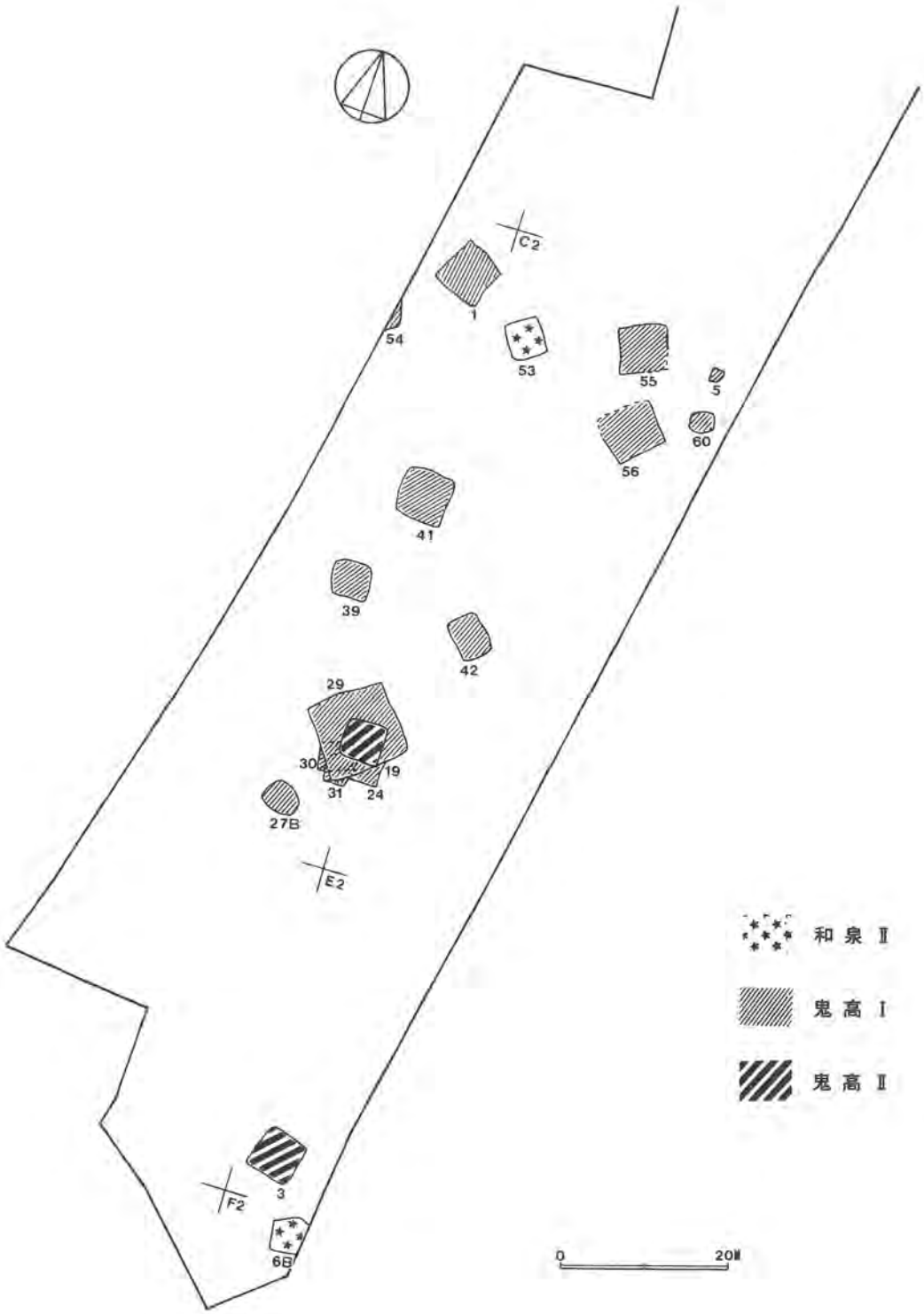
本期に属する遺構は，第3・19号住居跡の2軒である。

第3号住居跡は，N－67°－Wで，長軸6.4m，短軸6.3mの隅丸方形を呈し，規則的な柱穴4か所と炉を西寄りに有している。第19号住居跡は，N－87°－Wで，長軸5.0m，短軸4.9mの方形を呈し，やはり規則的な柱穴を4か所と，炉を西寄りに有している。壁高は両者ともやや高く，比較的類似性をもった住居跡である。

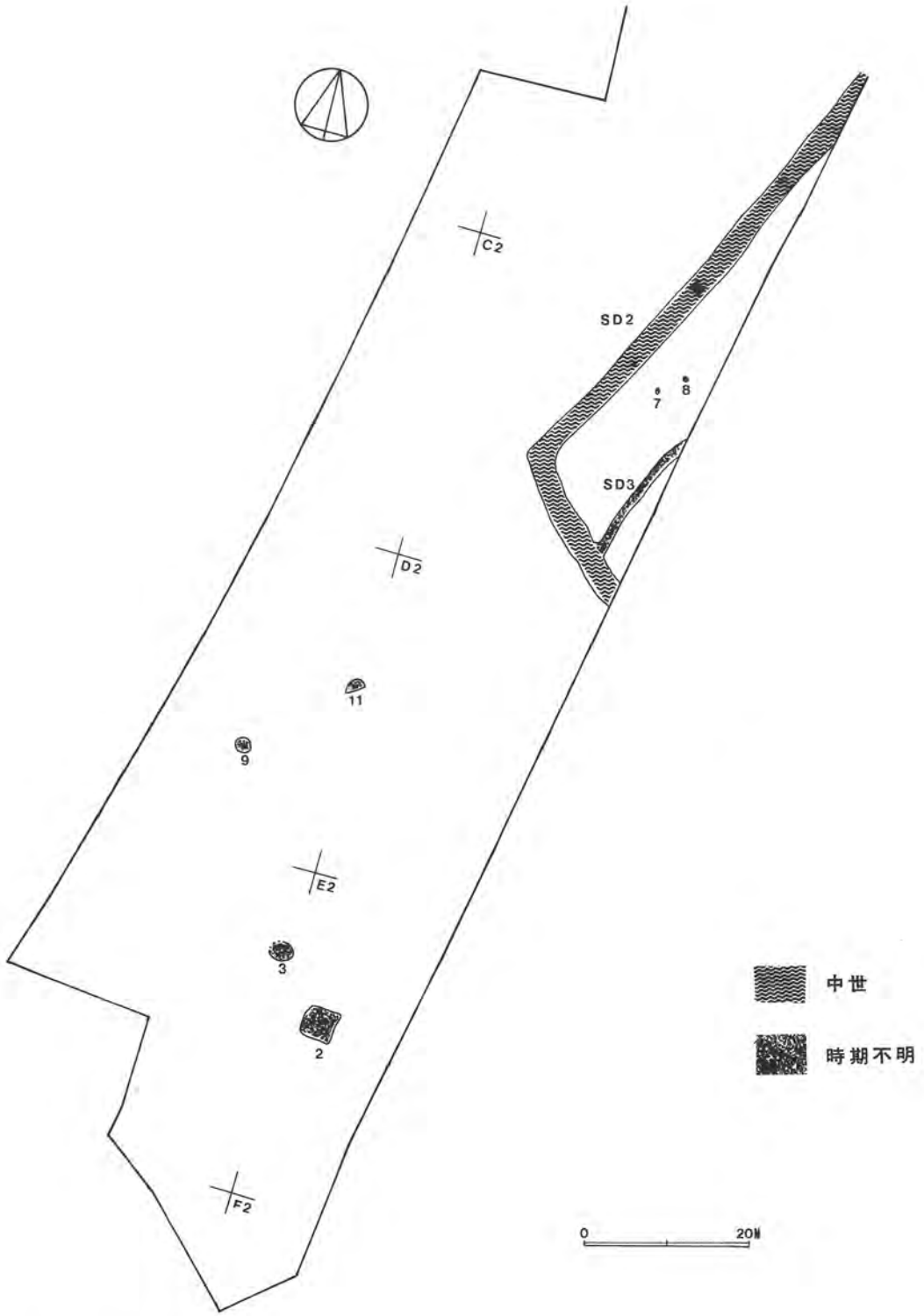
この2軒の住居跡は，約44m離れてD区とE区から検出されたものであるが，V期と比べて当期の遺構も少ないことから，集落の規模は当期に至って縮小化し，さらに当期以降の遺構が検出されていないことから，当期を最後に集落は衰退していったものと考えられる。



第164図　時期別遺構配置図（1）



第165図　時期別遺構配置図（2）



第166図　時期別遺構配置図（3）

表 4　住居跡一覧表

住居番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	柱穴数	炉	覆土・状態	出土遺物	時期	備考
1	C1b$_9$	N－66°－W	方形	6.6 × 6.5	28～40	普通	8	北側	7層 自然	土師器甕等12点，須恵器坏1点，石製品184点	鬼高	
3	E2i$_2$	N－62°－W	隅丸方形	6.4 × 6.3	24～54	普通	4	西側	3層 自然	土師器坏等2点	鬼高	
4	E1i$_9$	N－39°－E	隅丸方形	5.3 × 5.1	40～60	硬い	4	——	2層 一部撹乱	土師器小型甕等5点	五領	
5	E1g$_8$	N－46°－W	楕円形	5.2×4.3(径)	7～27	硬い	6	——	3層 自然	土師器甕等2点	五領	
6A	F2a$_3$	N－87°－E	長方形	(6.1)× 4.5	10～20	やや軟	2	——	6層 自然	土師器小型甕等3点	五領	S1－6Bと重複
6B	F2a$_3$	N－89°－E	方形	4.6 × 4.2	15～20	硬い	4	——	6層 自然	土師器甕等9点	和泉	S1－6Aと重複
8	E1g$_9$	N－45°－W	方形	5.6 × 5.4	40～50	硬い	5	北側	3層 一部撹乱	土師器甕等8点	五領	S1－10と重複
10	E1f$_9$	N－84°－W	方形	(3.5)× 3.2	20～35	やや軟	1	——	3層 自然	土師器器台1点	五領	S1－8・11と重複
11	E1e$_0$	N－87°－W	長方形	5.2 × 4.6	17～37	硬い	3	北側	4層 自然	土師器台付甕11点	五領	S1－10・12と重複
12	E1d$_9$	N－32°－W	方形	4.6 × 4.4	15～25	硬い	7	——	4層 自然	土師器甕等30点	五領	S1－11と重複
14	E1c$_9$	N－21°－W	隅丸長方形	7.0 × 6.3	25～38	硬い	8	中央	3層 自然	土師器台付甕等10点 勾玉1点	五領	S1－15B・50 SK－3と重複
15A	D1j$_9$	N－29°－E	方形	6.6 × 6.5	30～34	硬い	4	——	6層 自然	土師器台付甕等10点	五領	S1－15Bと重複
15B	E1a$_9$	N－45°－E	方形	4.6 × 4.5	30～34	普通	4	——	4層 自然	土師器甕等3点	五領	S1－14・15A・50と重複
16	D2j$_1$	N－0°	隅丸長方形	6.0 × 4.4	25～55	硬い	4	中央・西側	4層 一部撹乱	土師器器台等3点	五領	S1－51と重複
17	D1j$_4$	N－43°－W	隅丸長方形	(6.6)× 5.7	30～55	硬い	5	中央	4層 自然	土師器甕等8点 須恵器坏1点	五領	
18	E2d$_4$	N－56°－W	長方形	6.0 ×(5.3)	30～35	硬い	3	中央	3層 一部撹乱	土師器甕等4点	五領	
19	D2g$_1$	N－87°－W	方形	5.0 × 4.9	40～63	やや軟	4	西側	4層 自然	土師器坏等13点 須恵器坏1点	鬼高	S1－24・29・30と重複
20	D1h$_8$	N－89°－W	隅丸方形	5.9 × 5.7	45～65	硬い	4	——	4層 自然	土師器坩等14点 管玉1点	五領	SK－9と重複
21	D1e$_6$	N－45°－E	方形	6.4 ×(6.2)	20～25	やや軟	3	——	4層 自然	土師器甕等4点	五領	
22	D1c$_7$	N－13°－W	方形	3.8 × 3.6	15～20	硬い	4	——	4層 一部撹乱	土師器甕等4点	五領	
23	D1i$_0$	N－42°－W	長方形	4.8 × 4.3	30～40	やや軟	4	——	5層 自然	土師器　高坏1点	五領	S1－31と重複
24	D2g$_1$	N－90°－W	方形	(4.3)× 4.2	34～36	やや軟	1	——	3層 自然	土師器甕等17点 紡錘車・石製品165点	鬼高	S1－19・29・30・31と重複
25	D2i$_5$	N－68°－W	長方形	5.0 × 4.4	25～30	やや軟	4	北側・中央 東側・南側	7層 撹乱	土師器甕等12点	五領	
27A	D1h$_9$	N－76°－W	長方形	6.0 × 4.4	23～55	やや軟	4	東側	7層 自然	土師器甕等18点	五領	S1－27Bと重複
27B	D1i$_9$	N－51°－W	長方形	(5.0)× 3.4	23～36	硬い	4	中央	2層 自然	土師器甕等12点	鬼高	S1－27Aと重複
29	D1f$_0$	N－53°－E	隅丸方形	10.6 × 9.8	64～90	硬い	8	——	7層 自然	土師器甕等18点 石製品436点	鬼高	S1－19・24・30・31と重複
30	D1g$_0$	(N－62°－E)	長方形	(5.0)×(4.2)	52	硬い	－	——	5層 自然	土師器鉢1点	鬼高	S1－19・24・29・31と重複
31	D1h$_0$	(N－30°－E)	長方形	(4.4)×(3.5)	24	普通	－	——	3層 自然	土師器甕等8点	鬼高	S1－23・24・29・30と重複
34	D2f$_4$	N－19°－W	方形	5.6 × 5.4	60～70	硬い	7	——	4層 自然	土師器甕等9点	五領	
35	D1d$_9$	N－73°－E	隅丸方形	6.1 × 6.0	40～50	硬い	4	北東側	5層 一部撹乱	土師器甕等28点	五領	
36	D2d$_2$	N－36°－W	長方形	6.0 × 3.7	10～25	硬い	4	西側	3層 自然	土師器甕等2点	五領	S1－61と重複
37	D2b$_1$	N－21°－W	方形	6.0 × 5.8	5～20	普通	5	——	6層 撹乱	土師器台付甕等6点	五領	
38	C1j$_1$	N－57°－E	隅丸方形	4.8 × 4.5	25～50	普通	5	中央2	6層 自然	土師器甕等28点	五領	
39	D1b$_9$	N－0°	隅丸方形	4.6 × 4.4	25～45	硬い	－	——	5層 自然	土師器甕等28点 石製品364点	鬼高	S1－40Aと重複
40A	D1a$_9$	N－39°－W	隅丸長方形	5.8 ×(5.2)	10～25	硬い	2	——	5層 自然	土師器甕等6点	五領	S1－39・40Bと重複
40B	C1j$_9$	N－77°－E	隅丸長方形	5.2 × 3.7	15～35	やや軟	3	西側	3層 一部撹乱	土師器器台等4点	五領	S1－40Aと重複
41	C1i$_0$	N－7°－E	方形	5.9 × 5.7	2～12	普通	2	中央	7層 自然	土師器甕等2点 石製品150点	鬼高	
42	D2c$_3$	N－47°－W	長方形	5.7 × 4.0	25～40	硬い	－	中央	2層 自然	土師器甕等13点，石製品7点，須恵器甕1点	鬼高	
43	D2c$_3$	N－54°－E	隅丸方形	6.3 × 6.2	20～52	硬い	8	東側	4層 自然	土師器甕等6点	五領	

住居番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	柱穴数	炉	覆土・状態	出土遺物	時期	備考
44	D2a$_4$	N－70°－E	方形	5.2 × 5.0	15～25	硬い	4	中央	8層 自然	土師器器台等10点	五領	
45	E1e$_4$	N－8°－W	長方形	(6.2)× 5.2	50～55	やや軟	2	中央	9層 自然	土師器甕等31点 須恵器坏1点	五領	鬼高式の土器は流れこみ
46	E1e$_7$	N－45°－E	方形	4.8 × 4.6	10～30	硬い	－	中央	4層 一部撹乱	土師器甕等19点	五領	
47	E1c$_8$	N－61°－E	隅丸長方形	4.3 × 3.9	0～17	硬い	3	中央東側	5層 自然	土師器甕等5点	五領	
48	E1b$_7$	N－16°－E	方形	6.1 × 5.6	48～65	硬い	4	北側	12層 自然	土師器甕等6点	五領	
49	C2h$_2$	N－16°－W	方形	5.8 × 5.4	44～60	硬い	1	中央	6層 一部撹乱	土師器甕等13点	五領	
50	E1b$_8$	N－70°－E	隅丸長方形	5.3 × 4.5	14～64	硬い	4	――	18層 自然	土師器坩等2点	五領	S1－14・15Bと重複
51	D2j$_1$	N－57°－E	隅丸方形	6.0 × 5.5	22～50	硬い	5	――	4層 自然	土師器甕等5点	五領	S1－16と重複
52	D2a$_6$	N－73°－E	隅丸方形	6.8 × 6.7	48～102	硬い	4	北側2	16層 一部撹乱	土師器坩等2点	五領	S1－58と重複
53	C2d$_2$	N－33°－W	隅丸方形	(4.5)× 4.4	0～16	やや軟	1	北側	1層 撹乱	土師器高坏1点	和泉	
54	C1e$_3$	N－15°－W	長方形	5.6 × 4.8	8～20	硬い	2	東側	2層 撹乱	土師器片1点	鬼高	
55	C2c$_5$	N－15°－W	方形	5.9 × 5.8	46～62	硬い	4	北西側	13層 一部撹乱	土師器甕等4点,石製品857点,須恵器坏1点	鬼高	壁溝あり, SD－2と重複
56	C2e$_5$	N－50°－E	長方形	7.1 × 5.8	36～44	やや軟	4	北側	6層 一部撹乱	土師器手づくね土器1点	鬼高	壁溝あり, SD－2と重複
57	C2h$_7$	N－3°－W	方形	(3.4)× 3.2	9～18	普通	－	南東側	6層 撹乱	土師器高坏等2点	五領	SD－3と重複
58	D2b$_5$	N－51°－E	隅丸方形	4.0 ×(3.9)	20～30	普通	2	北側	3層 撹乱	土師器片8点	五領	S1－52と重複
59	C2j$_5$	N－64°－E	隅丸方形	3.9 × 3.8	6～12	普通	－	――	5層 撹乱	土師器片10点	五領	
60	C2d$_7$	N－85°－E	方形	2.6 × 2.4	4～8	普通	－	――	2層 撹乱	土師器甕1点	鬼高	
61	D2e$_2$	N－46°－E	方形	4.7 ×(4.6)	12～25	普通	1	――	3層 自然	土師器片8点	五領	S1－36と重複
62	D2i$_2$	N－11°－W	長方形	4.7 × 4.0	8～26	やや軟	3	――	3層 撹乱	土師器片2点	五領	SK－10と重複

3　石製品について

(1)　石製品製作跡

石製品製作跡としての決め手となるのは，生産に必要な工作用施設をもち，生産において必然的に伴う工作道具を保有し，完成された製品あるいは製作途上の遺物を出土することと考えられる。生産品である石製品およびその過程を示す未製品，あるいはそれらに付帯すべき滑石の原石，砥石および工作用ピットが必要である。このほか，製作跡としての規定の条件は工作用の諸施設を有機的関係の下に敷設し，それを空間的に限定された範囲内に設置するひとつのまとまり，すなわち，広がりの単位を有することも必要である。また，そこには同時に日常生活に必要な遺物（土器類）が検出され，製作跡は「生産の場」であると同時に「日常生活の場」をも意味しているものと考えられる[22]。

善長寺遺跡における石製品製作跡は，工作用施設が明確にとらえられず，生産に必要な工作道具(石錐，のみやたがね等の鉄製品)さえも検出されなかった。しかし，完成石製品，製作途上の未製品，及び「日常生活の場」を示す土器類が出土しているが，上記の石製品製作跡としての諸条件を必ずしも満たすものではないが，出土した石製品の様相から製作跡として考えることができる。

石製品製作跡として考えられるのは，第１号住居跡（第１号製作跡），第29号（第２号同），第39号（第３号同），第41号（第４号同），第55号（第５号同）の５軒である。他に，第３・24・56・57号住居跡から石製品が出土し，その可能性を窺わせるが，完成石製品が出土していないこと，未製品の出土が上層からであったりしていること等から，投棄または流れ込みと考えて製作跡から除外した。

５軒の製作跡は，ほぼ遺跡の中央のＣ・Ｄ区から検出され，規模は最大が第２号製作跡で10.6×9.8m，最小が第３号製作跡で2.3×2.2m，他の３軒は長軸5.9～6.6m，短軸5.7～6.5mである。形状は方形（第１・４・５号），または隅丸方形である。長軸方向は，Ｎ－53°－Ｅ～Ｎ－66°－Ｗの間にあり，炉は３軒（第１・４・５号）が有している。柱穴は第１・２号が８か所，第４号が２か所，第５号が４か所で，第３号では検出されなかった。覆土状況は第５号で一部撹乱が認められるものの，いずれも自然堆積である。以上から判断すると，当遺跡における石製品製作跡は，一般的な住居跡と違った点は認められない。

他県の石製品製作跡の例では，工作用ピットと呼ばれる大形のピットを有しており，そのピットの覆土や底面から完成品，未製品，及び石屑などが出土しているが，当遺跡の製作跡では，これに類するピットは検出されていない。ただ，いずれの製作跡からも大形のピットが検出されているが，これらは石製品が多く検出された位置からは遠く離れており，しかも覆土や底面からそれらの石製品が見られず，単なる住居跡の貯蔵穴と判断した。

(2) 製作跡の時期

５軒の製作跡の時期については，第４節２項のⅤ期でも触れたとおり，出土遺物等から鬼高Ⅰ式期に位置づけられるものと思われる。当遺跡は祭祀遺跡ではないが，亀井正道氏の祭祀遺跡の研究[23]によれば，４世紀末から７世紀中葉までを６期に区分し，第１期を４世紀末から５世紀前半，第２期を５世紀中葉，第３期を５世紀末から６世紀初頭，第４期を６世紀前半から中葉，第５期を６世紀後半から７世紀初頭，第６期を７世紀前半から中葉としている。この６期の区分にあてはめてみると，当遺跡の製作跡は鬼高Ⅰ式期であることから，第３～４期にあたり，中でも６世紀の第２四半期と考えられる。

(3) 出土石製品

当遺跡で製作された石製品の種類は剣形品（双孔・単孔），有孔円板（双孔・単孔），勾玉，臼玉，管玉，紡錘車である。これらの石製品の出土は，製作跡によりその種類が異なり，次のようになっている。第１・２号では紡錘車を除き５種が，第３号が臼玉，第４号が勾玉・管玉を除く４種，第５号が管玉・紡錘車を除く４種が出土している。

○印が当該遺構からの出土である。

	剣形品	有孔円板	勾玉	臼玉	管玉	紡錘車
第1・2号	○	○	○	○	○	−
第3号	−	−	−	○	−	−
第4号	○	○	−	○	−	○
第5号	○	○	○	○	−	−

剣形品

石製模造品の中で最も典型的な遺物で，鉄製品の剣を模して，作られている。身幅よりも刀長が長く，柄部には刀剣の目釘孔を表したとされている単孔を穿つ場合が多いと一般的にいわれている[23]。当遺跡出土の剣形品で双孔のものは9点出土し，単孔のものは29点である。

有孔円板

銅製品の鏡を模して作られた祭祀品で，双孔のもの，中央に単孔を穿つもの，無孔のものの3種がある。なお，鏡を模した説の他に，中央に単孔を穿つものは紡錘車を模し，無孔のものは双孔，単孔円板の未製品と考える説[23]がある。当遺跡出土の有孔円板は，双孔のもの19点，単孔のもの4点で，無孔のものは出土していない。

勾玉

一般的に，玉類の中では臼玉について多く出土し，硬玉，碧玉，メノウのような玉製のものは，断面が丸く，形が良く整い，丁寧なつくりであるが，石製模造品は扁平な板状である。当遺跡出土の勾玉は扁平な板状のものである。

臼玉

一般的に，石製模造品の中で最も数多く出土する。大きさはほぼ一定で，両面を平坦に磨き，側面中央に稜をつけるソロバン玉に丸味をもたせたような形のものや，あるいは稜がなく側面が丸味をもち，太鼓胴になった形のものが多く，この他に，円筒形で，管玉を切断して作ったような形のものがあり，工作上では雑なつくりの部類に属する[23]といわれている。当遺跡のものは，円筒形で，管玉を切断して作ったような雑な形のものが多い。

管玉

管玉は，一般的に出土点数が少なく，また，未製品や破損品も少ない。これは穿孔の困難さが原因と思われ，未製品は大事に扱い，破損品は臼玉に使用されたものといわれている[23]。当遺跡では完成品4点が出土している。

紡錘車

一般的に，実用品として使用することも可能なものが多く，紡錘車の模造品と思われる小型品あるいは扁平品は少数出土している[23]といわれている。当遺跡からは3点出土しており，実用品として使用することも可能なものは1点である。完成品は1点だけで第24号住居跡から出土している。

(4) 石製品の製作工程

当遺跡から出土した石製模造品の中には，製作工程を示すそれぞれの段階の出土品があり，これらの出土品から製作工程を窺い知ることができる。

剣形品

剣形品は，第1号住居跡の出土石製品の欄で記したように，荒割り→形割り→研磨→穿孔→完成の順で製作工程が進められたと考えられる。

荒割り品は，滑石の原石から剣形品に必要な分だけを打ち割ったもので，種々雑多な形をしているが，先端部が剣形のように細くなっている。(PL95)

形割り品は，荒割り品をより剣形品に近く形を整えたもので，さらに板状に近くなり，また側面を細かく打ち欠いで形を整えている。(PL95)

研磨品は，形割り品を砥石で研磨したもので，側面だけ研磨したもの，側面のほかに両面を研磨したものがある。これらのことから，研磨工程は側面→両面の順で行われていたものと考えられる。(PL96)

穿孔品は，研磨品に孔を穿ったもので，すべて柄部に穿孔され，身の部分に穿孔されたものはない。穿孔は単孔と2孔があり，単孔の場合は柄の中央に，2孔の場合は柄の両側寄りにバランスよく穿たれている。(PL96)

完成品は，穿孔品をさらに研磨して仕上げたもので，6点（第156図Q59）出土している。完成されたものは製品として製作跡の外へ運ばれることを考えれば，出土点数が少なくても当然かも知れない。

破損品は，穿孔中に孔の部分が破壊してしまったもの（PL96）1点，研磨の途中で身の部分が折れてしまったもの（PL96）3点である。身の部分が柄の部分よりも細いため割れやすいと考えられる。

有孔円板

有孔円板も，第1号住居跡の出土石製品の欄で記したように，形割り→研磨→穿孔→完成の順で製作工程が進められたものと考えられる。剣形品と同様に荒割りの工程があると思われるが，当遺跡の製作跡から荒割り品は出土せず，その状況は不明である。

形割り品は，形を円板状に整え，研磨を行わないで打撃だけで形を整えている。(PL99)

研磨品は，形割り品を研磨したもので，両面を研磨したもの(PL99)，両面の他にさらに側面を研磨したもの（PL99）に分けられ，側面のみ研磨したものが見られないことから，研磨工程は，まず両面を研磨し，ある程度扁平にした後側面を研磨したと思われる。従って，剣形品の研磨工程とは逆な方法で研磨が行われていることになる。

穿孔品は，研磨品に孔を穿ったもので，双孔（PL97）と単孔（PL97）がある。双孔のものが19点，単孔のものが4点出土しており，双孔のものが圧倒的に多い。双孔のものは円板の両端に穿孔し，孔と両端のバランスがよくとれている。単孔のものは，円板の中央に穿孔したものが2点で，そのほか，円板の一端のみに孔を穿ち，他の一端にこれから穿孔をしようと思われるもの(PL97) 2点である。全体にまだ粗雑な面が多く，研磨を必要とする部分が多い。

完成品は，穿孔品の両面，及び側面全体を丁寧に研磨して仕上げたもので，第1・5号製作跡から1点ずつ計2点（第153図Q2・第155図Q42）出土している。出土点数が少ないのは，剣形品の完成品と同様，同じような理由によるものと思われる。

破損品は，穿孔後に孔を中心に横に割れたもの（PL97）2点，穿孔後に中央から縦に割れたもの（PL97）2点，研磨中に中央から縦に割れたもの（PL97）1点である。孔を穿つ作業とその後の研磨作業が困難であったことが窺える。

勾　　玉

勾玉は，1軒の製作跡からの出土点数が少数のためその製作工程をつかみ得ないが，第2号製作跡や第42号住居跡出土の勾玉から総合的に判断すると，形割り→研磨→穿孔→完成の順で製作工程が進められたと思われる。剣形品と同様に荒割りの工程があると思われるが，当遺跡から荒割りの工程を示す勾玉は出土しなかった。

形割り品は，円形または楕円形にしたもの，即ち荒割り品に腹部の「えぐり」と思われる「く」の字状の切り込みを入れたもので，当遺跡のものは彫刻刀状の鉄製品で削り取ったような鋭利な痕を残している(PL105)。第1号製作跡で6点，第2号製作跡で4点，第5号製作跡で1点出土し，そのほか，製作跡以外の第1号堀から1点出土している。

研磨品は，全体で1点だけ出土している。形割り品の両面，及び側面を研磨したもので，第42号住居跡から，「えぐり」の部分を含めどの部位も丁寧に研磨された勾玉が（PL105）出土している。その他のものは出土していないので，研磨工程は明確でない。

穿孔品は，研磨品に単孔を穿ったものと思われるが，当遺跡からはその工程段階のものは出土していないため，不明である。おそらく，剣形品や有孔円板と同じ様に充分な研磨をしないうちに穿孔したものと思われる。しかし，前出の第42号住居跡出土の研磨品を観察すると，穿孔だけを施せば完成品となるため、研磨後に穿孔する工程と，穿孔後さらに研磨して仕上げる工程の両者があったものと考えられる。

完成品は，穿孔品をさらに研磨したもので，第14・42号住居跡，第2・3製作跡からそれぞれ1点ずつ計4点出土している。第3号製作跡出土の勾玉は子持勾玉である。

臼　　玉

臼玉は最も多く出土し，他の石製品と比べその数量は群を抜いている。当遺跡でも，各製作跡

から出土した石製品のうち臼玉が最も多く，全体の90％を占めている。臼玉の製作工程については，第２号製作跡にあたる第29号住居跡の出土石製品のところで記したように，面取り→穿孔→研磨→完成の順で進められたものと考えられる。しかし，剣形品と同様に荒割りの工程があるものと思われるが，それらの工程を示す臼玉は見られなかった。

面取り品は，原石から割り出したもの（荒割り品）を５～７角形に調整したもので，両面は凹凸な面を残すが，側面を５～７角形に研磨している。なお，剣形品や有孔円板に見られる形割りの段階と穿孔前の研磨の段階を併せて，ここでは面取りという工程にした。また，面取り品の中に８点ほど穿孔途中のものがあるが，孔が貫通してないので面取り工程として扱かった。

穿孔品は，面取り品の中央に孔を穿ったもので，この穿孔方法は，穿孔途中の未製品の状態から，上面から中ほどまであけた後，さかさまの下面から残りの部分を逆方向にあけたと考えられる。

研磨品は，穿孔品の側面を研磨したもので，かなりの容量を研磨するらしく，穿孔品の半分以下の太さまで円形に磨り落としている（PL98･PL100～PL104参照）。しかし，両面はまだ研磨されていない。剣形品，有孔円板，及び勾玉の石製品と比較すると，研磨→穿孔の順が臼玉だけ逆の工程で進められている。小さな石製品に孔を穿つ工作が困難であることや，研磨後の穿孔過程の失敗による研磨労力を無駄を無くすため，他の石製品とは逆の工程を生んだのではないかと判断される。

完成品は，研磨品の両面を研磨して仕上げたもので，40点出土している。製品の厚さは一様でなく，２～４㎜となっている。完成品の数は，他の石製品と同じ様に未製品に比べて非常に少ない。

破損品は，穿孔中に孔を中心にして半分割れたもの（PL98･PL100～PL104）121点，研磨中に割れたもの33点である。臼玉は他の石製品と違い小さな製品であるため，穿孔にしても，穿孔後の研磨にしても割れやすく，製作上での困難さが窺える。

管　　玉

当遺跡から出土した管玉は４点（PL98）と少なく，しかもすべて完成品であるため，管玉の製作工程を把握することはできない。

４点の管玉は，第１号製作跡（２点），第２号製作跡（１点），及び製作跡以外の第20号住居跡（１点）から出土しており，前述のようにいずれも完成品で，長さ1.4～2.4cm，直径４～６㎜，孔径1.5～２㎜，重さ0.6～0.9gである。両面及び側面を丁寧に研磨し，孔は貫通している。

なお，第20号住居跡から出土した管玉は，第20号住居跡と重複する第９号土坑からの流れ込みとも考えられる。また，これらの管玉は，それ以外に製作工程を示す未製品の出土が見られないことから，他の製作地から運ばれてきたとの考え方をもつこともできる。

紡　錘　車

製作跡からの紡錘車の出土は，第4号製作跡からの1点(PL107)で，他は第24号住居跡の1点(PL107)，第1号堀の1点(PL107)である。このうち，第1号堀からの出土紡錘車は，堀と第5号製作跡が重複していることから，第5号製作跡に属する可能性が高い。

製作工程については，第24号住居跡出土のものが完成品であり，他の2点は未製品であるものの1製作跡からの出土ではないため正確に把握できないが，この3点を比較するとある程度の工程順をつかむことができ，荒割り→形割り→穿孔→研磨→完成の順で進められたものと考えられる。

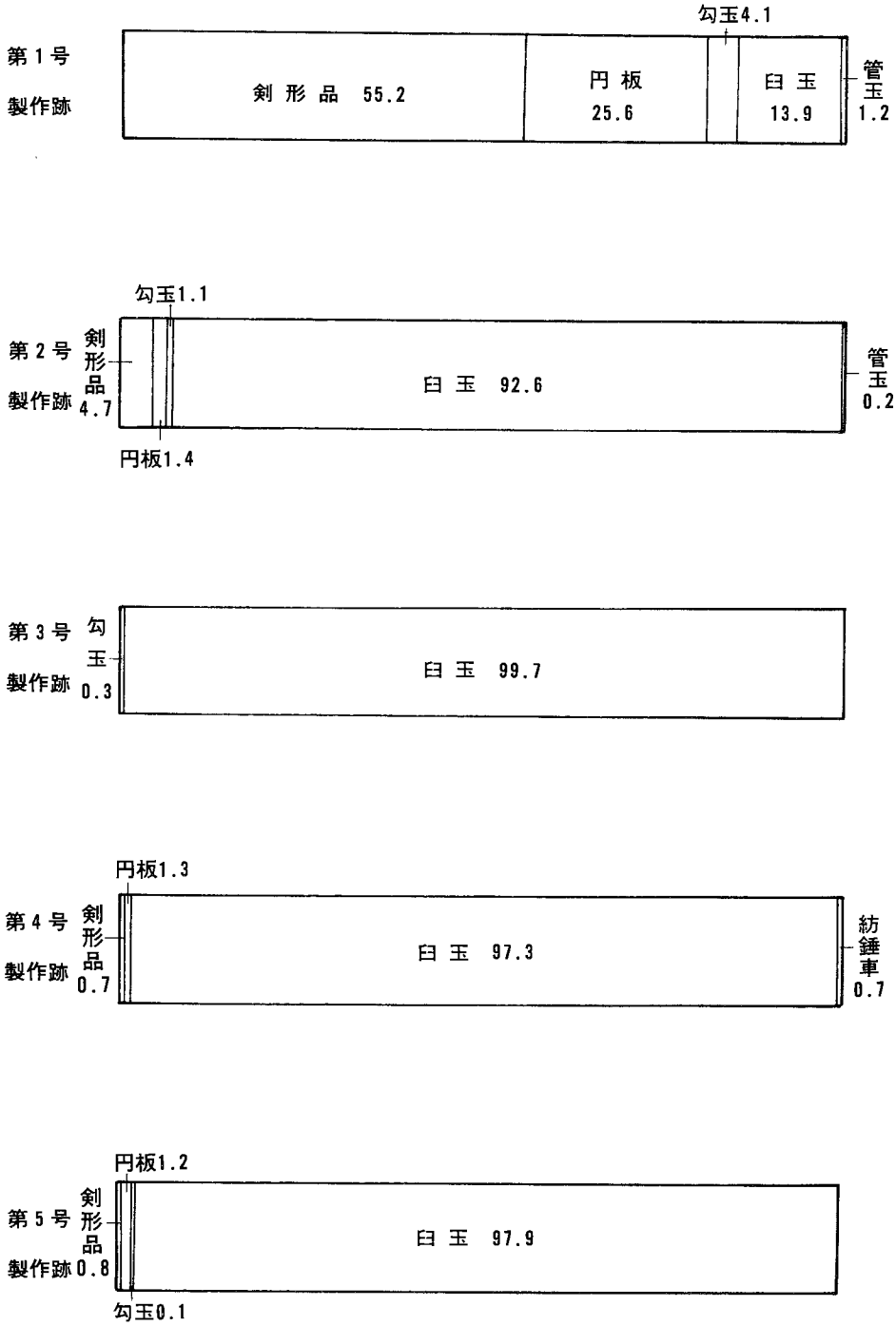
荒割り品は，原石から中央が盛り上がった円板状のものを作り出し(PL107，第1号堀出土)，彫刻刀状の鉄製品で両面を鋭利に削り落としている。

形割り品は，荒割り品の盛り上がった中央を平たく削り，同時に側面を斜めに削り落として截頭円錐形にする(PL107，第4号製作跡出土)。やはり鉄製品を使用して各方向から鋭利に削っている。その後，穿孔→研磨の工程を経て完成するものと思われる。

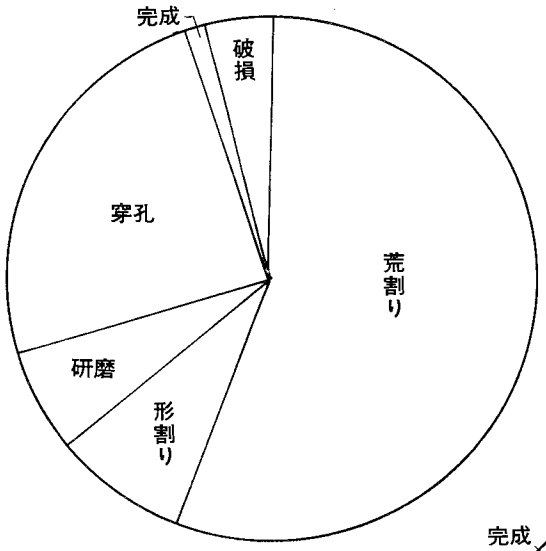
紡錘車の出土は3点と少ないが，製作工程を示す出土品があることから，当遺跡の製作跡の中で紡錘車の製作が行われた可能性も考えられる。

(5)　石製品の出土割合

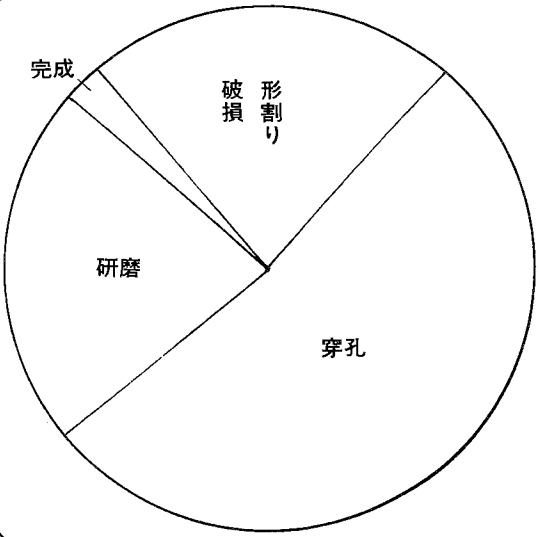
各製作跡から出土した石製品を種類ごとに分けたものが第167図である。これによると，第1号製作跡からの出土品の割合は剣形品55.2%，有孔円板25.6%，臼玉13.9%，勾玉4.1%，管玉1.2%で，剣形品や有孔円板が多い。これに対し，他の第2～5号製作跡では圧倒的に臼玉が多い。このことは，各製作跡ごとの器種別生産量の分担が存在していたのかも知れないが，各製作跡における完成品の搬出による遺存量のちがいや，生産技術の高低による未製品・破損製品等の遺存量の相違により，必ずしも断定できない。ただ，臼玉の生産においては，生産工程の困難さからくる未製品・破損品がかなり生じるはずであろうから，第1号製作跡から臼玉の出土が他に比べ少ないことは，その生産が低かったものと考えられる。



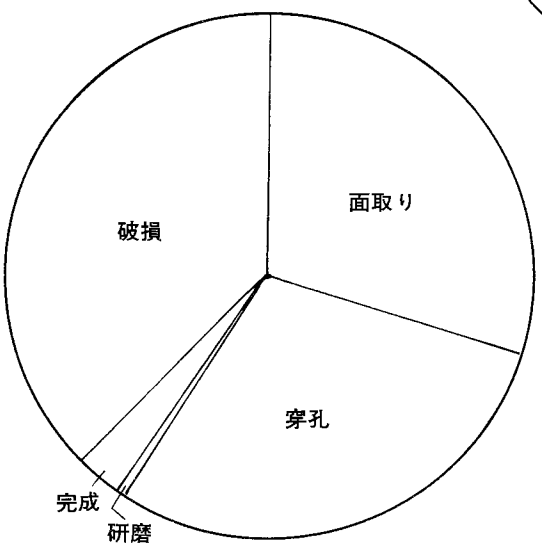
第167図　石製品製作種類内訳



第１号製作跡
剣形品

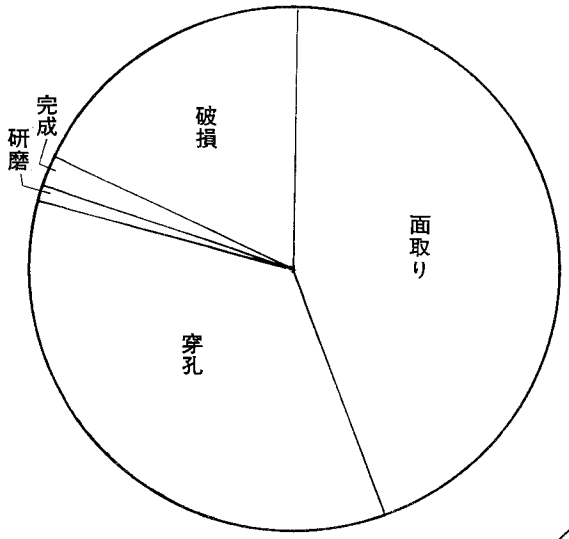


第１号製作跡
円　板

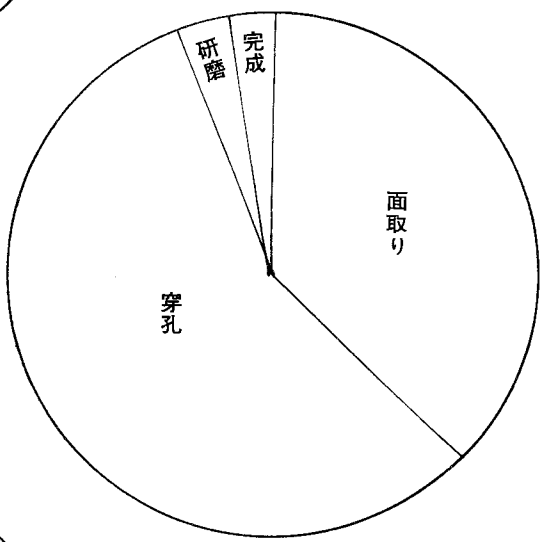


第２号製作跡
臼　玉

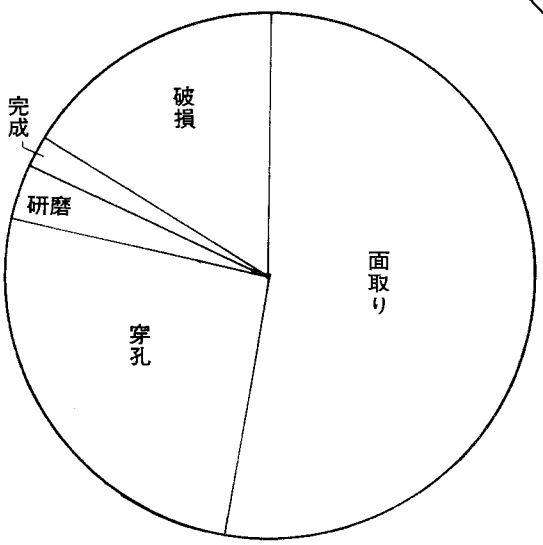
第168図　第１・２号製作跡製作工程内訳



第 3 号製作跡
臼玉内訳



第 4 号製作跡
臼玉内訳



第 5 号製作跡
臼玉内訳

第169図　第 3・4・5 号製作跡製作工程内訳

4　土坑・溝・堀について

(1) 土　　坑

当遺跡から検出された土坑は11基である。検出位置は第3節の遺構の項で述べたとおり，C2区に4基，D1区に4基，E2区に3基である。形状・規模は楕円形が6基，長方形が4基，円形が1基で，長径ないし長軸が1m未満のものが2基，1m以上2m未満が1基，2m以上のものが8基である。長径軸方向はN－76°－W～N－90°－Eの間にあり，特性，規則性はみられない。壁や底面の状況は壁が垂直に立ち上がるもの9基，外傾して立ち上がるのが2基で，壁高が50cm未満が9基，50cm以上が2基，底面が平坦なものが9基，皿状が1基，埦状が1基である。

遺物が出土し，時期が判明しているものは第1，4～6，10号土坑の5基で，第1号土坑が五領I式，第4号土坑が五領II式，第5号土坑が鬼高I式，第6・10号土坑が五領III式の土器をそれぞれ底面から出土しているため，土坑構築の時期も出土土器の時期と大差はないと思う。残りの6基で大まかに時期が判明するのは第3・9・11号土坑の3基で，第3号土坑は第14号住居跡によって切られているので五領III期よりも古く，第9号土坑は第20号住居跡を切っているため五領II期より新しく，第11号土坑は第29号住居跡によって切られているため鬼高I期よりも古いと考えられる。

用途はほとんど不明であるが，第5号土坑の遺物出土状況が底面一面に置かれているような状態であるため，鬼高I期の貯蔵穴か使用済の土器を捨てた場所と考えられる。

(2) 溝

当遺跡で検出された溝は2条である。検出位置は遺跡南部のE1区に第1号溝，遺跡中央のC2区に第2号溝である。規模・形状は第1号溝が上幅110～150cm，下幅100～144cm，長さ5.5m，深さ14～54cmで壁は底面から垂直に立ち上がっている。第2号溝は上幅72～156cm，下幅34～60cm，長さ17.3m，深さ58～70cmで壁は底面から外傾して立ち上がっている。第1号溝には北側にピットを有し，第1・2号溝とも南側に向かうほど底面のレベルが低くなっている。

出土遺物は第1号溝から五領I式の小型甕が出土しているが，第2号溝は皆無である。時期は第1・2号溝とも不明である。

用途は2条とも定かではないが，第2号溝は第1号堀につながって消滅するため堀の付属施設か，堀を利用した後世の排水路と考えられる。

(3) 堀

当遺跡から検出された堀は１条である。検出位置は北側のB2区から中央のC2区にかけて「Ｌ」字状に彎曲して検出されている。上幅が240～328cm，底面幅80～134cm，深さ104～140cm，長さ74.8mで，箱薬研状に掘られている。

出土遺物はB2f_9区の覆土から内耳土器が出土しており，唯一の時期判定遺物である。中世の内耳土器であることから，堀の時期も中世と判断される。

１点の遺物と堀の規模・形状から判断すると，北東側エリア外に存在する中世の館か寺院を中心に囲んだ堀の一部が，当遺跡に検出されたものと考えられるが，推定の域を出ない。

注

(1) 「土師式土器集成」本編１　東京堂出版　1971年

(2) 三重県教育委員会「納所遺跡」－遺構と遺物－　1980年

(3) 三反田遺跡群調査会・勝田市教育委員会「三反田遺跡調査報告書」（第３次）　1979年

(4) 鹿島町教育委員会「木滝台遺跡桜山古墳埋蔵文化財発掘調査報告書」　1978年

(5) 西宮一男「新治郡新治村梶の宮の土師器」（茨城県の土師集成第２集）　1968年

(6) 井上義安「那珂湊市富士の上警察署敷地の土師器」（茨城県の土師集成第１集）　1967年

(7) 高崎市教育委員会「元島名将軍塚古墳」　1981年

(8) 「弥生土器・須恵器」日本原始美術大系２　講談社　1978年

(9) 「沼津市二本松遺跡発掘調査概報」　沼津市教育委員会　1968年

(10) 茨城県教育財団「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」　1980年

(11) 鹿島町教育委員会「第三回茨城県考古学協会発表会－鹿島町案内」　1979年

(12) 茨城県教育財団「境松遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第41集　1987年

(13) 茨城県教育財団「南三島遺跡３・４区(Ⅰ)」茨城県教育財団文化財調査報告第44集　1987年

(14) 建設省・静岡県教育委員会・清水市教育委員会「下野遺跡」　1985年

(15) 建設省・静岡県教育委員会・清水市教育委員会「飯田遺跡」（久保田・向原地点）　1984年

(16) 小野真一編「静岡県東部の土師器集成」加藤学園考古学研究所　1983年

(17) 沼津市教育委員会「目黒身」　1970年

(18) 沼津市教育委員会「藤井原遺跡発掘調査概報」　1975年

(19) 建設省・静岡県教育委員会・沼津市教育委員会「駿河広池」　1971年

(20) 神林淳雄・杉原荘介「武蔵和泉遺跡調整概報」（考古学第11巻第５号）　1940年

(21) 杉原荘介・佐藤吉彦「下総鬼高遺跡調査概報」(人類学雑誌第53巻第11号) 1938年

(22) 「神道考古学講座」 －第五巻祭祀遺跡特説－雄山閣 1971年

(23) 「神道考古学講座」 －第三巻原始神道期二－雄山閣 1971年

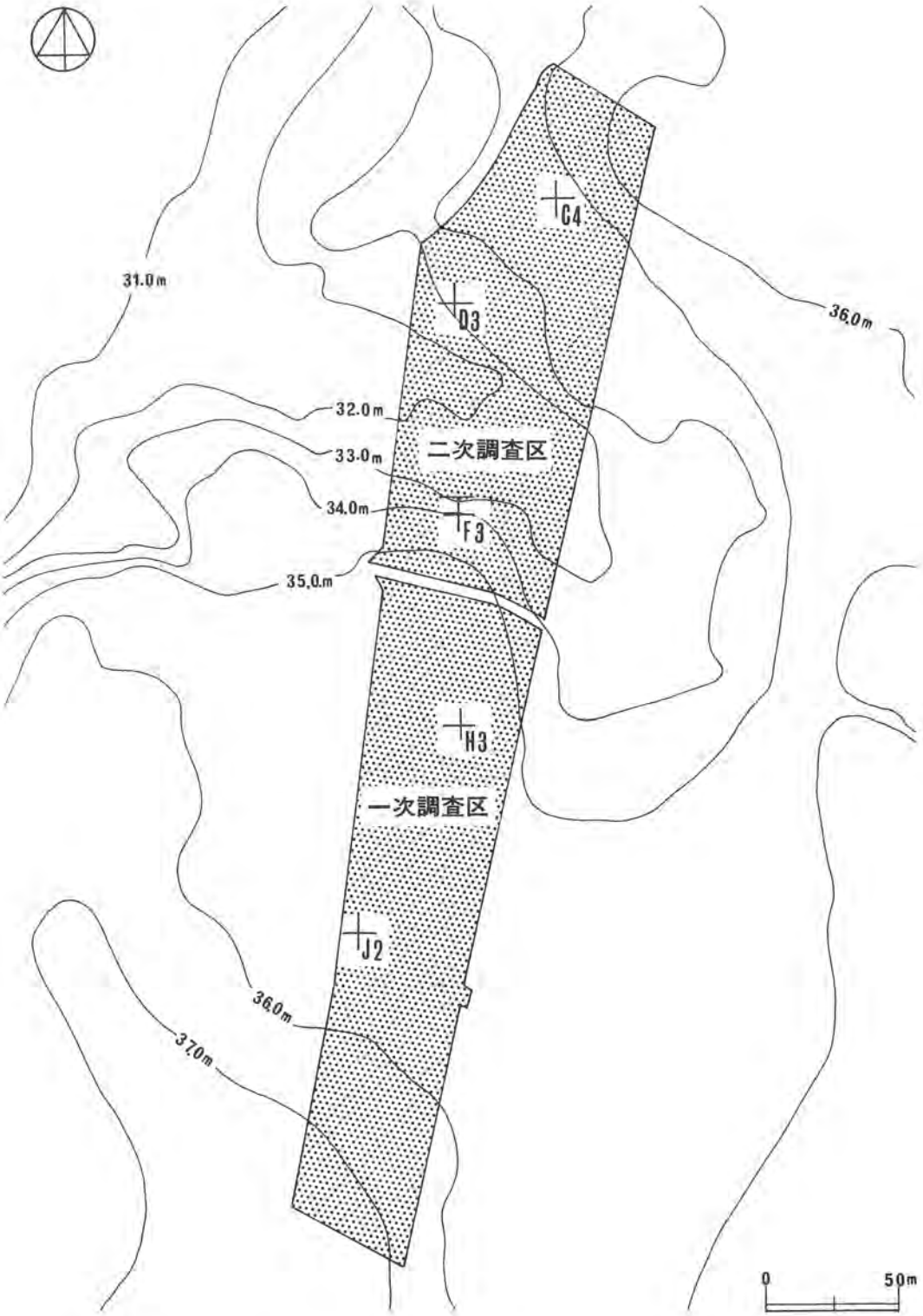
第7章　小田林遺跡

第1節　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県結城市小田林字二ッ家1,518の2ほかに所在し，面積は23,507m²である。現況は畑と果樹園，及び，水田と一部に宅地も含まれている。当遺跡は結城市の北西部にあたり，JR水戸線小田林駅の南西約1㎞，市域を東西に走る国道50号線と新4号バイパスの交点より南へ約500mに位置している。西方約500mには，栃木県との県境をなす江川が南流し，江川に沿った沖積地には水田が開けている。当遺跡はこの水田に面する台地の西縁辺部に立地しており，標高は33～37mである。また，当遺跡を分断する様に，江川からの小支谷が調査区のほぼ中央付近に西から東に入り込み，幅約25mの谷津田を形成している。遺跡は幅東西約40～75m，長さ南北約460mと南北に長く，北と南から遺跡内の谷津田へなだらかに傾斜している。谷津田との比高差は遺跡の南部で約4m，北部で約2mとなっている。新4号バイパス路線上には，国道50号線を挟んで当遺跡の北方約150mに，古墳時代の住居跡が検出された本田遺跡，南方約300mには古墳時代の集落跡が検出された善長寺遺跡がそれぞれ所在している。

当遺跡からは縄文時代の住居跡2軒，古墳時代の住居跡37軒，竪穴遺構2基，土坑85基，炉穴15基，井戸3基，溝6条，堀4条が検出され，遺物が土器収納箱に約110箱出土している。また，これらの遺構は，遺跡の西から東に入り込む小支谷を挟み合うように，調査区の中央付近に検出された古墳時代前期の遺跡群と，南側に検出された縄文時代前期の遺構群とに大別できる。

なお，小田林遺跡の中央部を東西に走る市道を境として，便宜上，その南側を1次調査区（昭和61年度，11,336m²），北側を2次調査区（昭和62年度，12,171m²）と呼称することにした。



第１図　小田林遺跡地形図

第2節　調査経過

小田林遺跡は，昭和61年9月1日に発掘調査を開始し，昭和62年10月31日をもってすべての調査を完了した。以下，1年4か月にわたる発掘調査の経過について，月ごとに記述する。

昭和61年度

9　月　1次調査区内の桑木，雑木の伐開及び上物の除去作業を行い，調査区を設定した。8分の1のトレンチ発掘を実施したが，F3・G2・G3・H2・H3・I2・I3区は，土取りが行われており，遺構もG2・G3区に数軒確認しただけであった。

10　月　遺構が希薄で，遺物も少ないため，さらに4分の1のトレンチ発掘を実施した結果，新たにG2・G3・H2・H3区を中心に住居跡と思われる落ち込みを検出し，主に古墳時代の前期に属する土器が出土した。また，L1・L2区を中心に住居跡と思われる落ち込みを検出し，縄文時代の前期に属する土器が出土した。I2・I3・J2・K2区からは遺構は検出されず，遺物も表土層から極少量しか出土しなかった。中旬から遺構が確認されたF2・F3・G2・G3・H2・H3区について重機による表土除去を実施し，住居跡20軒，土坑27基，炉穴5基，溝1条を確認した。

11　月　F2・G2・H2区の遺構調査を開始し，住居跡8軒，土坑4基，炉穴2基の調査を実施した。この調査区は造園業者が使用していたため，遺構の大半は，土取りやゴミ穴によって撹乱や削平をうけており，壁の確認ができない遺構も見られた。

12　月　F3・G3区の遺構調査を進め，住居跡7軒，土坑16基，炉穴3基の調査を実施した。土坑の大半は出土遺物もなく時期不明であったが，第6号土坑の底面直上から石棒が出土した。また，炉穴から縄文時代の早期に属する土器片が出土した。

1　月　G3・H3区の遺構調査を進め，住居跡5軒，土坑10基，井戸3基，溝1条の調査を実施した。下旬より並行して，L1・M1区を手掘りによる表土除去を開始した。

2　月　先月に引き続きL2・M2区について手掘りによる表土除去を実施するかたわら，F3・G3・H3区の遺構調査を行い，土坑7基，溝1条の調査を実施した。9日には，埼玉県県民部県史編纂室係長増田逸朗氏を招いて班内研修会を開いた。

3　月　L1・L2・M1・M2区の遺構調査を進め，住居跡2軒，土坑20基，溝1条の調査を実施し，第1次調査区について調査を終了した。遺構の多くは，調査区中央の谷津田寄りのG2・G3区に集中していることが判明した。

昭和62年度

4　月　第2次調査区のうち神明神社境内であったC3・C4・D3・D4区の雑木の伐開及び上物の除去作業を実施した。下旬よりE2・E3・F2・F3区について8分の1のトレンチ発掘を開

始した。

5　月　先月に引き続きA3・B3・B4・C3・C4・D2～D4区についてトレンチ発掘を実施した。調査区の北側部は土取りによる削平を受けており遺構もなく遺物も希薄であったために，さらに4分の1のトレンチ発掘を行った。その結果，C4・D2・D3・D4・F2・F3区を中心に古墳時代の前期に属する土器片が出土し，竪穴住居跡が検出された。

6　月　F2・F3区は，土層が10～15cmと浅く重機による表土除去は困難と判断し，手掘りによる表土除去を開始するかたわら，表土の厚いC4・D2～D4区は重機によって表土除去を実施した。この結果，住居跡23軒，土坑29基，溝3条を確認した。また，D3区の北側部は土取りされ，D3・D4区には，大きな抜根跡が数か所あることも判明した。

7　月　F2・F3区の遺構調査を進め，住居跡8軒，土坑20基，炉穴7基，溝1条の調査を実施した。また，F2・F3区の北側部は削平されており，土層の観察と土器の出土状況から，その土がE3区に盛土されて陸田に利用されていたことも判明した。C3・D3・D4区の神明神社境内であったところには，大きな木株が多く取り残されており除去するのが困難であった。

8　月　C3・C4・D3・D4区の遺構調査を進め，住居跡9軒，土坑14基，溝3条の調査を実施した。住居跡の多くは，木の根や土取りによってこわされ，遺存状態はよくなかったが，第36号住居跡から完形に復元できた土師器の大型壺形土器が出土した。

9　月　先月に引き続いてC3・C4区の遺構調査を進め，土坑2基，堀4条，炉穴1基の調査を実施した。堀4条は溝として確認したものであったが，調査によって神明神社を囲むように北東側と南西側に検出された。また，調査区のE3区を中心とした谷津田部は水田跡の存在が予想されたため，層位ごとに重機による表土除去を行った。しかし，泥炭層，砂層，粘土層を確認しただけで，水田部は検出できなかった。

10　月　補足調査を実施する一方，20日に航空写真撮影，24日に現地説明会を行い，30日には小田林遺跡のすべての調査を終了した。

第 2 図　小田林遺跡周辺図

第3節　遺構と遺物

当遺跡で検出した遺構は，住居跡39軒，竪穴遺構2基，土坑85基，炉穴15基，溝6条，堀4条，井戸3基である。

住居跡は遺跡の中央部に入り込んだ谷津田を，南側と北側から挟むように形成された台地縁辺部のC～G区にかけてと，南端のL区から検出され，北側のA・B区，南側のH・J・K・L区からは検出されなかった。調査区域が南北に細長く，エリア外にかかる住居跡もあることから，遺跡の分布（集落の範囲）は，さらに東西に広がるものと思われる。なお，古墳時代の住居跡が検出された調査区を中心に，土取りやゴミ穴，抜根跡が数多くあり，遺構・遺物の遺存状態は悪く，一部は壁の確認ができない住居跡もあった。住居跡の時期は縄文時代前期2軒，古墳時代前期36軒，時期不明1軒である。なお，住居跡番号（竪穴遺構を含む）は41号まで付したが，第38・41号住居跡は，遺物の出土もほとんどなく，炉，柱穴も検出されなかったため，竪穴遺構とした。また，C3・C4区を中心とする地区にも遺構の検出が予想されたが，後世の土取りによって削平されており，遺構の確認はできなかった。

土坑はC～H区・L区を中心に検出され，縄文時代早期の炉穴はF2・F3・G2・G3区を中心に検出された。溝と堀はC～I区・L2区に検出されている。井戸はF2・H2・H3区に各1基ずつ検出されている。土坑，溝，井戸については，遺構に伴うと思われる遺物の量は少なく，しかもほとんどが破片で，その時期や性格を判断することはできない。

遺物は，ほとんどが住居跡から出土したもので，土師器，石製品，土製品などである。土師器には，甕形土器，壺形土器，坏形土器，埦形土器，甑形土器，器台形土器，坩形土器，高坏形土器，ミニチュア土器などがある。その他，土坑から縄文式土器の深鉢形土器や石棒が出土している。

第3図　小田林遺跡遺構全体図

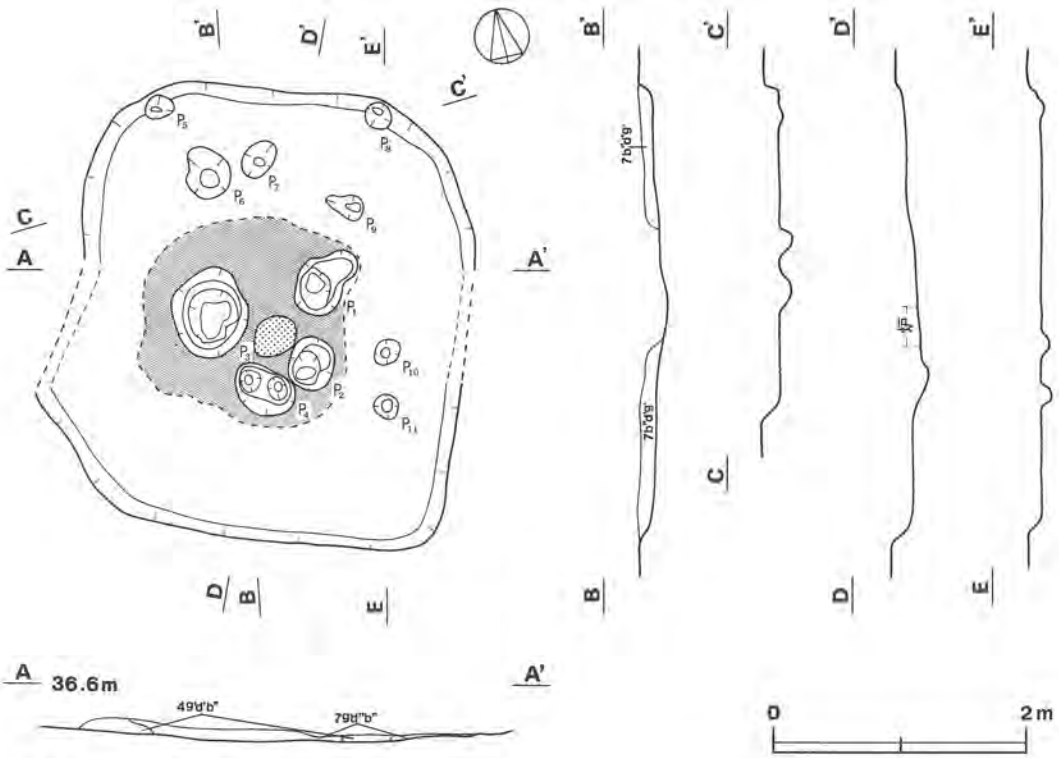
1　住　居　跡

〔1〕 縄文時代前期

第22号住居跡（第4図）

本跡は，当遺跡の南部のL1g$_8$区を中心に確認され，遺構の中では最も南側で，第23号住居跡の南側約11mに位置している。

平面形は，南東コーナー部を掘り過ぎたため，不整長方形を呈しているが，本来は長軸3.64m，短軸3.16mの隅丸長方形で，長軸方向はN－21°－Eであったものと思われる。壁はロームで締まっており，外傾しながら立ち上がっている。壁高は8～22cmである。西壁から南壁にかけては掘り込みが浅く，遺存状態が悪い。東壁と西壁は，幅1mにわたって，試掘のため削平されている。床面は，中央がわずかに低くなっているため，緩やかに傾斜しており，全体的に締まっている。炉は，中央に位置し，長径36cm，短径31cmの楕円形状に焼土が検出された地床炉であり，焼土が2～3cmの厚さに堆積していただけである。炉床は熱により赤変硬化している。ピットは11か所検出され，規模や配列からP$_6$・P$_7$・P$_9$・P$_{11}$が柱穴と思われる。柱穴の規模は径17～35cm，深さ10～15cmである。P$_1$～P$_4$の規模は，径38～61cm，深さ33～59cmであるが，炉を中心として径80cm

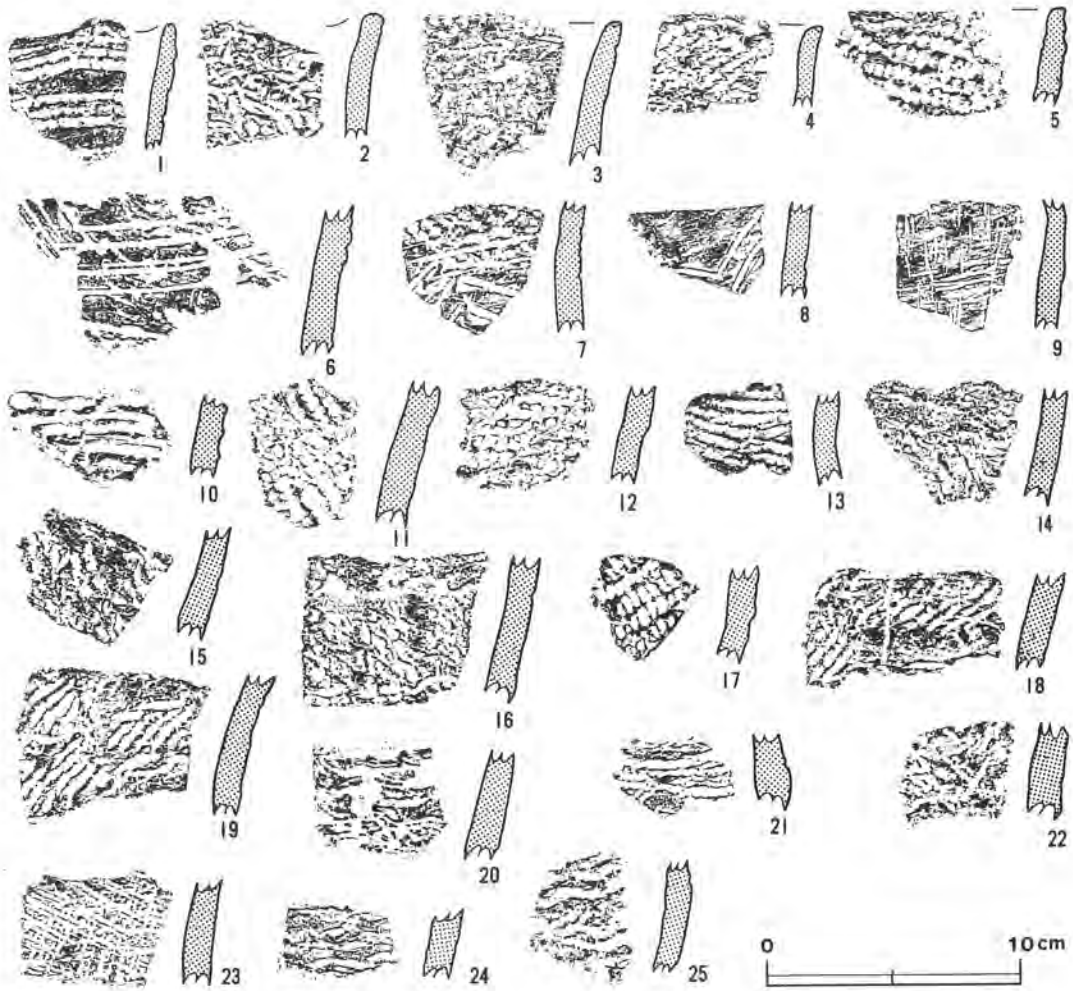


第4図　第22号住居跡実測図

の内側に位置しており，柱穴としては炉に近すぎて疑問が残る。P_5・P_8は北壁下に検出され，規模，形状から推察して，木根跡の可能性が強い。

覆土は１層で，ローム粒子，炭化粒子，焼土粒子を微量含む暗褐色土が堆積し，締まっている。

遺物は，住居跡の南側の床面や覆土下層から縄文時代前期黒浜式の土器片が77片出土し，そのほか磨石１点，チャートの剝片１点が出土している。



第５図　第22号住居跡出土遺物拓影図

出土土器

第５図１～25は，第22号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。１～５は口縁部片である。１・２は波状口縁を呈し，１は口縁が薄く，口唇を丸くおさめ外面に３本１単位の押引文が２列横位に施されている。２は２本組の撚糸文が雑に施されている。３は口唇に押圧，４は

口唇にキザミが施され，3・5は外面に単節RLの縄文を斜位に，4は外面に縄文が雑に施されている。

6～25は胴部片で，6～8は半截竹管による沈線文が施され，菱形に構成された一部が窺われる。9は短沈線を縦位に，10は太い沈線が横位に施されている。11～19は縄文が施されている。11～16は単節RLの縄文，17は単節LRの縄文，18・19は無節Rの縄文が斜位に施されている。20～25は撚糸文が施されている。20は2本組の撚糸文が斜位に，21は横位に，22は雑に，23は単節RLの縄文を施した後，更に，交差するように撚糸文が施されている。色調は褐色，にぶい褐色が多く，胎土に繊維が多量に含まれている。焼成はやや不良である。

第23号住居跡（第6図）

本跡は，当遺跡の南側L1d_7区を中心に確認され，第22号住居跡の北側約11mに位置している。北西側で第46号土坑と重複しているが，本跡の床面を掘り込んでいることから本跡の方が古い。

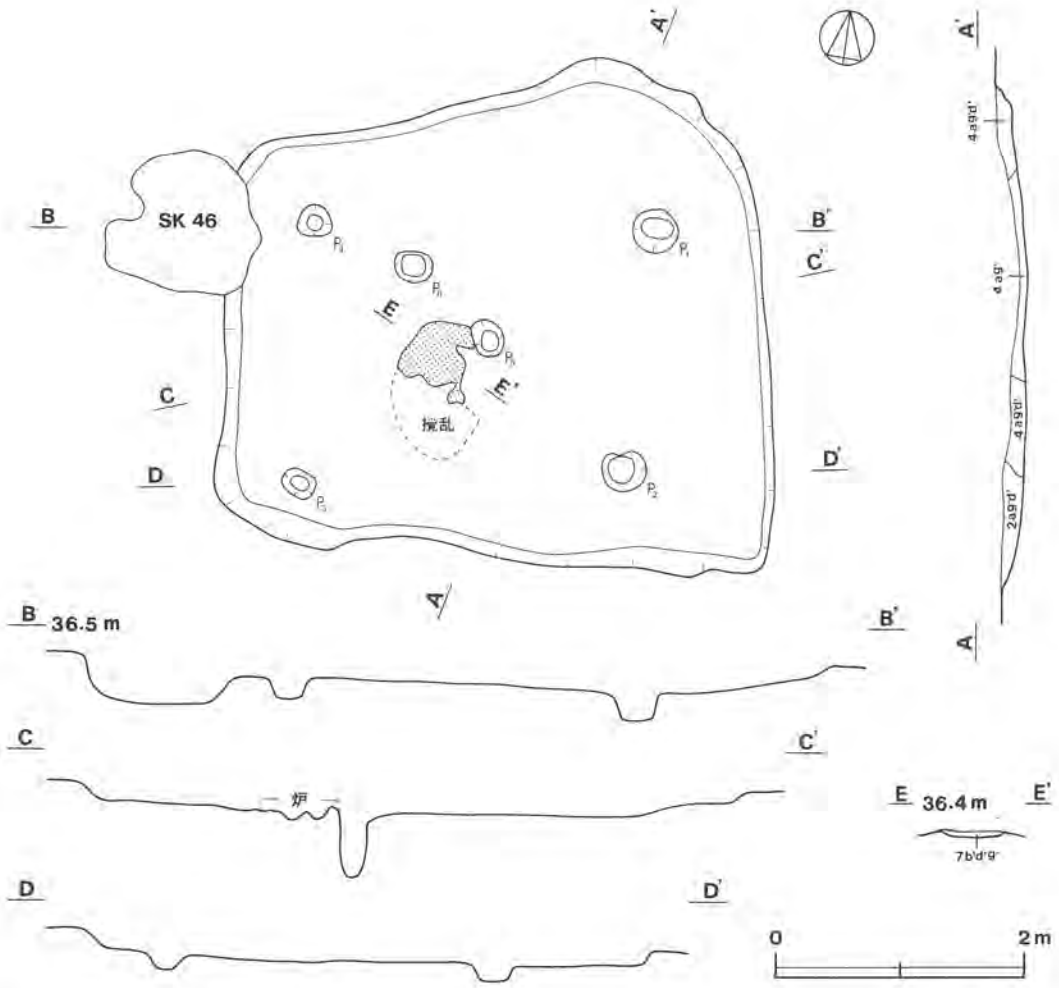
平面形は，長軸4.38m，短軸3.25mのやや西側の幅が狭くなる隅丸長方形で，長軸方向はN－75°－Eである。壁はロームで締まっており，北壁，西壁，南壁は外傾して，東壁はやや掘り過ぎたためごく緩やかな弓状を呈しているが，本来は他の壁と同じように外傾していたものと思われる。壁高は6～18cmである。北東コーナーは，他のコーナー部より緩やかな曲線を呈している。床面は平坦で，全体的に締まっている。炉は中央からやや西寄りに位置し，南側は撹乱坑によって切られ，長径53cm，短径50cmの不定形を呈しているが，本来は長径80cm，短径50cmの楕円形状を呈していたものと思われる。深さは5cmほど皿状に掘りくぼめられた地床炉である。炉内には，焼土粒子，炭化粒子を少量含む暗褐色土が堆積し，炉床は赤変硬化しブロック状にゴツゴツしている。ピットは6か所検出され，柱穴はP_1～P_4・P_6が考えられ，規模や配列からP_1～P_4が主柱穴と思われる。主柱穴の規模は径29～36cm，深さ14～29cmである。主柱穴はほぼ対角線上に位置し，柱間の長さは，東西2.30～2.46m，南北1.60～1.80mである。P_5の規模は，径34cm，深さ48cmで，炉の北側をわずかに切り込んでいることから，本跡に伴うものとは考えられない。P_6は炉の北側約30cmに位置し，規模は径32cm，深さ55cmである。

覆土は1層で，ローム粒子，炭化粒子を少量含む黒褐色土が堆積し，締まっている。

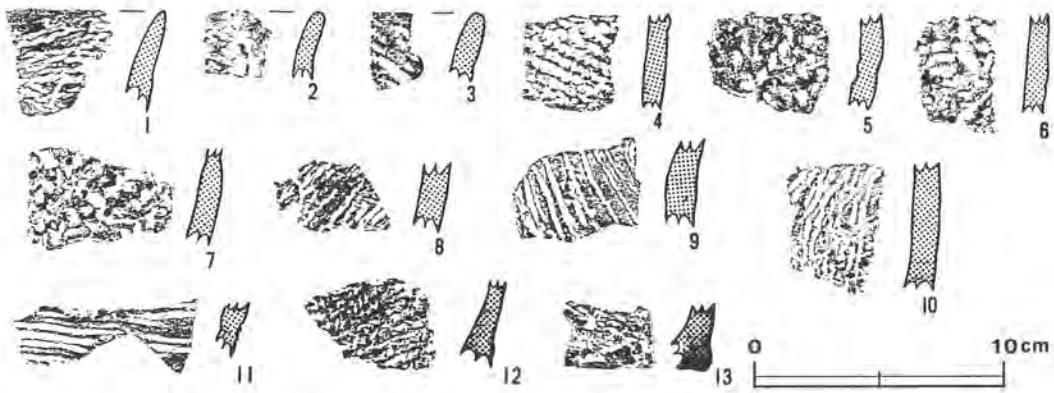
遺物は，住居跡の東側の床面や覆土下層から縄文時代前期黒浜式の土器片が30片，軽石1点が出土している。接合できた土器片はない。

出土土器

第7図1～13は，第23号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。1～3は口縁部片で，1は2本組の撚糸文，2・3は単節RLの縄文が斜位に施されている。



第 6 図　第23号住居跡実測図



第 7 図　第23号住居跡出土遺物拓影図

4～11は胴部片である。4～7は単節の縄文が施されている。4は単節RLの縄文が斜位に，5は単節LRの縄文が斜位に，6・7は斜位に施した縄文が雑に認められる。8～10は撚糸文が斜位に施されている。11は沈線が施されている。

12・13は底部片である。12は単節LRの縄文が斜位に，13は斜位に施された縄文がわずかに認められる。色調は褐色，にぶい褐色が多く，胎土は多量の繊維を含み，焼成はやや不良である。

表1　縄文時代前期住居跡一覧表

住居跡番号	位置	長軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット数(主柱穴数)	炉	覆土	出土遺物	時期	備考
22	$L1g_8$	N－21°－E	隅丸長方形	3.64×3.16	8～22	平坦	11	中央	自然	土器片77片・磨石1点・チャート剝片1点	縄文前期	
23	$L1d_7$	N－75°－E	隅丸長方形	4.38×3.25	6～18	平坦	6(4)	西寄り	自然	土器片30片 軽石1点	〃	SK-46と重複

〔2〕 古墳時代前期

第1号住居跡（第8図）

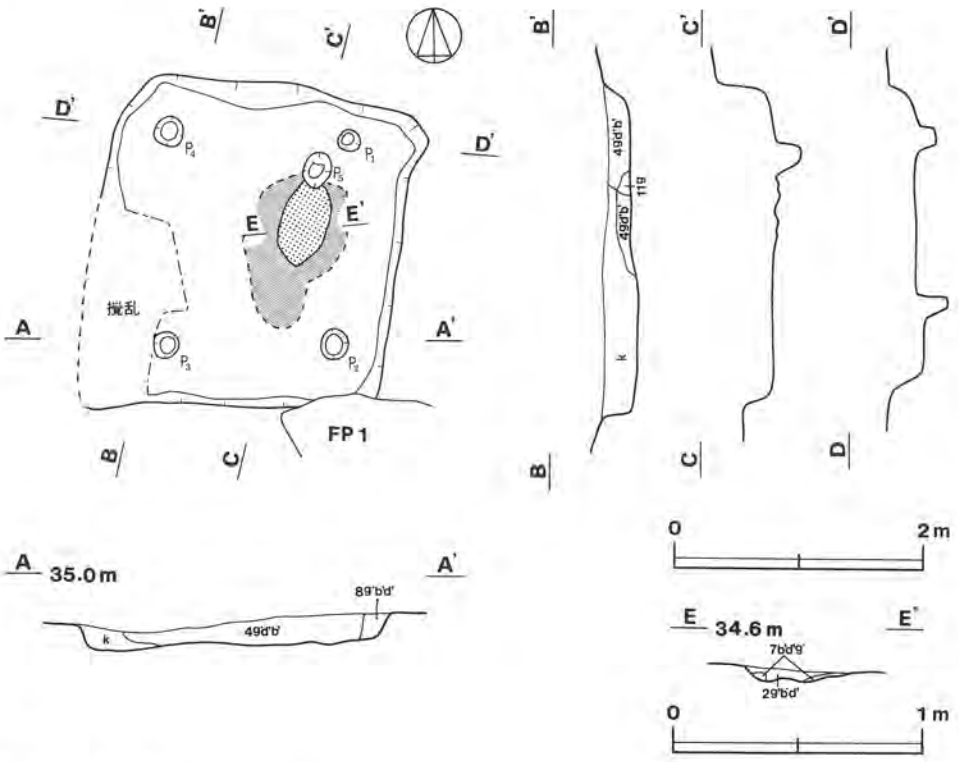
本跡は，$F2g_8$区を中心に確認され，第2号住居跡の東側約2mに位置している。本跡の南東側に位置する縄文時代早期の第1号炉穴と重複しているが本跡が壁を掘り込んでいることから，本跡が新しい。本跡は，当遺跡の中央部を東から西に横切る市道が北側に存在しているため，北東コーナー部は境界杭によって，径30cmの穴があいている。

平面形は，長軸2.65m，短軸2.48mの隅丸方形で，長軸方向はN－11°－Eであったものと考えられる。壁はロームで硬く締まり，外傾して立ち上がっている。壁高は15～35cmである。西壁から南西コーナーにかけての壁は，後世のゴミ穴による撹乱のため検出されない。床面は，ほぼ平坦で踏み固められて，硬く締まっている。南西コーナー部付近は，撹乱を受けて存在しない。炉は，中央部から北東寄りに位置し，長径55cm，短径38cmの楕円形を呈し，床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉内には，焼土粒子多量，炭化粒子少量を含む黒褐色土が堆積し，炉床は赤色に焼けゴツゴツしている。ピットは5か所検出されているが，規模や配列からP_1～P_4が主柱穴と思われる。主柱穴の規模は径19～20cm，深さ20～23cmである。P_5は炉の北側で接し，規模は，径30cm，深さ23cmであるが，本跡に伴うものかどうかを明確にすることはできなかった。

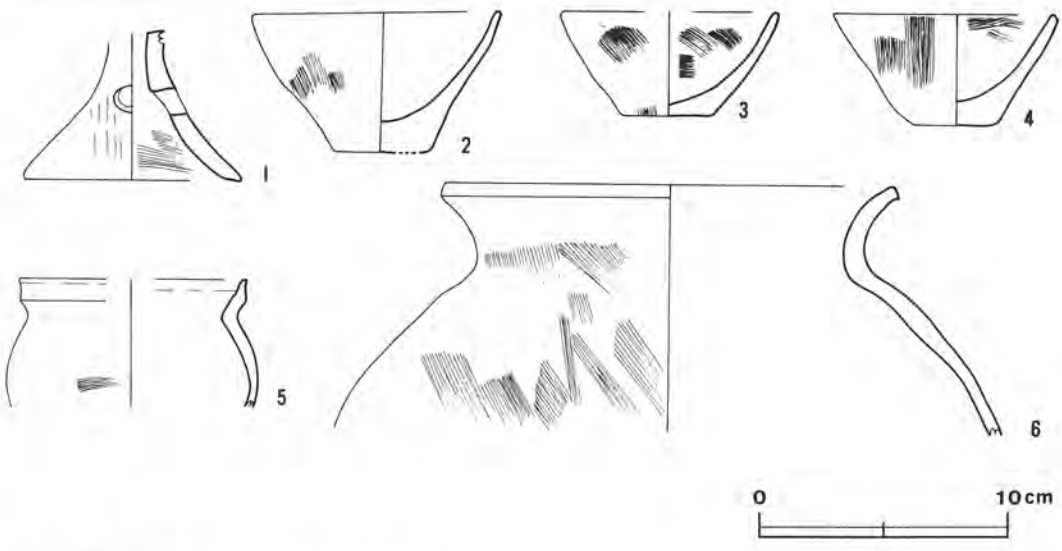
覆土は2層で，ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子を少量含む黒褐色土が，西壁際には焼土粒子，炭化粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積し，締まっている。

遺物は，炉の西側の床面から半完形の埦形土器(P2)が斜位の状態で，その北側に埦形土器(P3)の上に完形の埦形土器（P4）が正位の状態で重なって出土した。また，炉の東側の床面から器台

形土器（P6）の脚部が横位の状態で，東壁際の覆土下層から甕形土器（P1）の口縁部が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。



第8図　第1号住居跡実測図



第9図　第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

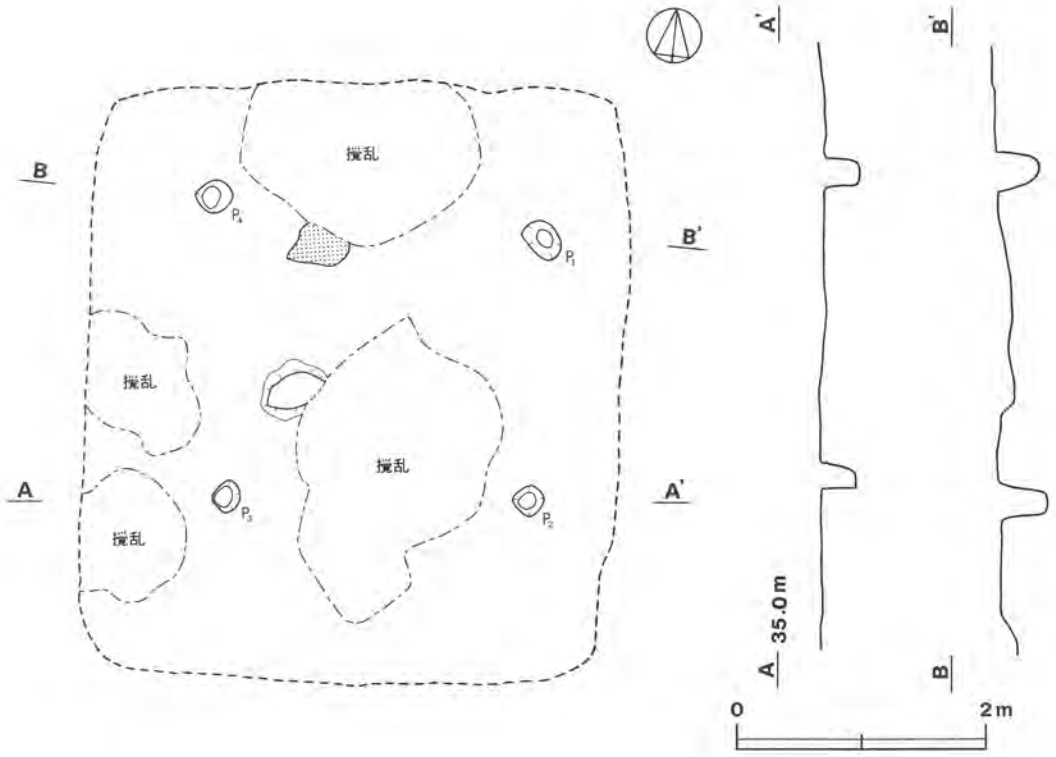
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	器台形土器 土師器	D 8.8 E (6.0)	脚部は「ハ」の字状に開き，上位に3孔，接合部に中央孔がある。	脚部外面－縦位のヘラ磨き，脚部内面－上位に横位のヘラナデ，下位にハケ目整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	40% P6
2	埦形土器 土師器	A 9.8 B 5.7 C 3.8	体部は底部から内彎して立ち上がり，口縁部でやや外傾して開く。底部は平底である。	口縁部内・外面－横位のナデ。体部外面－ヘラ削り。	スコリア・砂粒 にぶい褐色 普通	60% P2
3	埦形土器 土師器	A (8.5) B 4.2 C 3.6	体部は底部からやや内彎して立ち上がり，口縁部で直立して開く。底部は平底である。	口縁部外面－横位のナデ。体部外面－ハケ目整形後ナデ，体部内面－ハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	60% P3
4	埦形土器 土師器	A 8.7 B 4.5 C 3.3	体部は底部から内彎して立ち上がり，口縁部はやや外傾して開く。底部は平底である。	口縁部・体部外面－縦位のハケ目整形。口縁部内面－横位のハケ目整形。体部内面－縦位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	95% P4
5	小型甕形土器 土師器	A (9.0) B (5.2)	頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁部は垂直に立ち上がり，口縁端部は外反して開く。胴部は中位に最大径を有すると思われる。	口縁部内・外面－横位のナデ。胴部外面－ハケ目整形。	スコリア・砂粒 にぶい赤褐色 普通	10% P5
6	甕形土器 土師器	A 18.0 B (10.0)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がる。胴部は球形を呈するものと思われる。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ。胴部外面－ハケ目整形。口縁部・胴部内面－横位のナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P1

第2号住居跡（第10図）

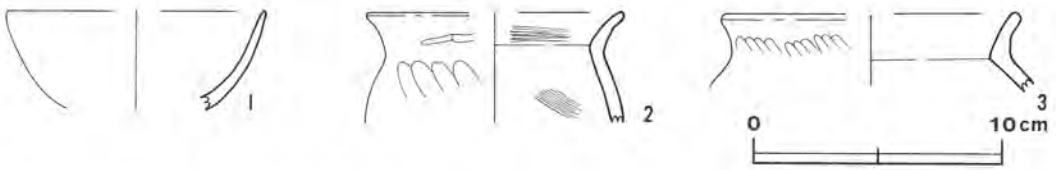
本跡は，当遺跡の中央部F2h_6区を中心に確認され，第1号住居跡の西側約2mに位置している。本跡が確認された地区は，削平と撹乱のため，覆土はなく，壁及び床の大部分は明確でない。しかし精査した結果，わずかに残る床と炉の周囲に，ほぼ等間隔に柱穴と思われる落ち込みが検出されたことから住居跡として取り扱った。

平面形及び規模は，削平や撹乱により壁が残存しておらず，プランをとらえることはできなかったため不明であるが，検出された柱穴の配列から，長軸5.00m，短軸4.30mほどの長方形を呈する住居跡であったものと推定される。床面の一部が，長径34cm，短径12cmの楕円形状に残り，踏み固められたように締まっている。炉は，推定プランの中央部からやや北寄りに位置し，長径30cm，短径15cmの楕円形状を呈し，炉床は床面を使用したらしく床面が赤変硬化している。ピットは4か所検出した。規模や配列からP_1～P_4が主柱穴と思われ，主柱穴の規模は，径26～34cm，深さ28～34cmである。主柱穴はほぼ対角線状に位置し，柱穴間の長さは，東西で2.2～2.4m，南北1.8～2.4mである。

遺物は，覆土が削平されているため，南東コーナー部付近の床面から，埦形土器の口縁部片（P8），甕形土器の口縁部片（P9）が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。なお，南東コーナー部付近に石鏃（黒曜石，Q1）1点が，P2の上面からチャート片1点が出土しているが，いずれも流れ込みと思われる。



第10図　第２号住居跡実測図



第11図　第２号住居跡出土遺物実測図

第２号住居跡出土遺物観察表

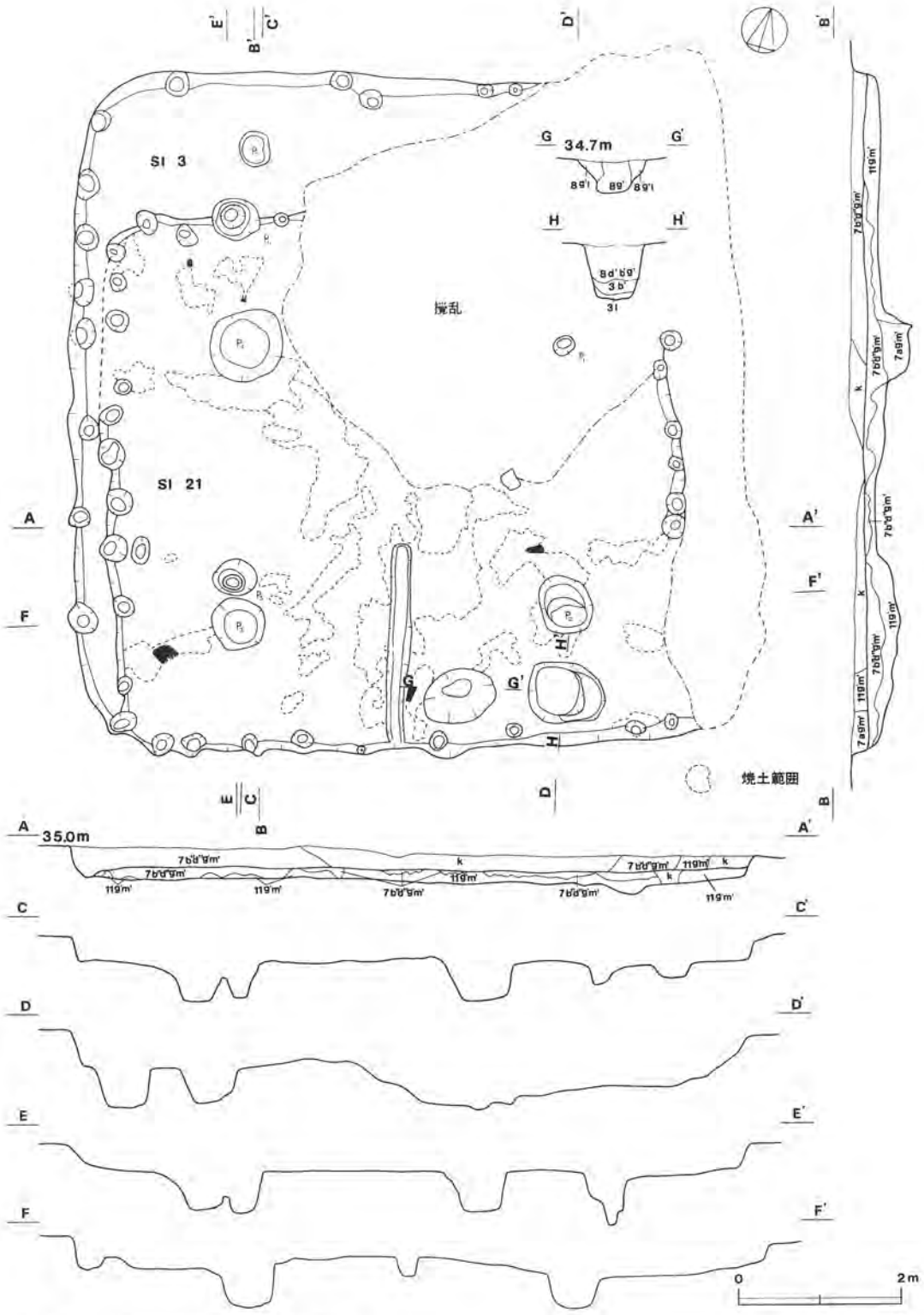
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	埦形土器 土師器	A(10.3) B (4.0)	体部下位から内湾しながら開いて立ち上がる。口縁部先端は丸味をおびる。底部欠損。	口縁部外面－横位のナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	10% P8
2	甕形土器 土師器	A(10.2) B (4.5)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し，やや外反しながら立ち上がる。	頸部外面－ハケ目整形。口縁部内面－横位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 にぶい褐色 普通	5% P9
3	甕形土器 土師器	A(11.8) B (2.9)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し，外反しながら立ち上がる。	頸部外面－斜位のヘラナデ。口縁部内面－横位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 にぶい褐色 普通	5% P10

第3号住居跡（第12図）

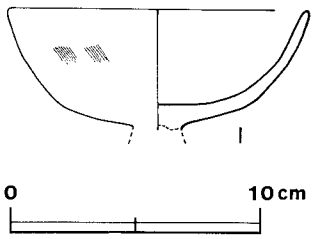
本跡は，当遺跡の中央部G2a$_5$区を中心に確認され，第4号住居跡の北側約2mに位置し，北西側約2mに第1号土坑が隣接している。本跡は第21号住居跡と重複しているが，第21号住居跡によって床面の大部分を掘りこまれていることから本跡の方が古い。本跡の確認された地区はゴミ穴による撹乱を受けており，遺構の遺存が悪い地区である。当初一軒の住居跡を想定し調査を進めていたが，床面を調査していく過程で，本跡の床面を掘り込んでよく踏み固められた良好な床を確認した。床を調査したところ，踏み固められたロームが3～15cmほどの厚さで貼られていることが判明した。さらに床を周回するように壁柱穴を検出したので，第21号住居跡と命名した。この結果，本跡の南壁と第21号住居跡の南壁が一致し，本跡の上に第21号住居跡が構築されたため，本跡の床面の4分の3ほど破壊されていることが判明した。

平面形は，長軸8.25m，短軸8.10mの隅丸方形で，長軸方向はN－17°－Wである。当遺跡から検出された住居跡としては，最も規模が大きい。壁はロームで締まっており，外傾しながら立ち上がっている。壁高は24～36cmである。北壁の東側半分と東壁は撹乱により破壊されている。壁には，壁をわずかに掘り込んだ壁柱穴が検出され，間隔は不統一であるが，残存している南壁，西壁，北壁の西側に周回している。規模は径22～26cm，深さ20～26cmほどのものが多い。南壁を切り込んだ壁柱穴は，本跡及び第21号住居跡のどちらに伴うものなのか判断することができなかった。床面は平坦でやや軟弱である。床面の大半が第21号住居跡によって切られており，北西コーナー部付近と西壁にそった幅15～20cmが残存しているだけである。また，南壁下の中央付近から北側に向かって1条の溝が検出されている。規模は上幅20～24cm，下幅8～16cm，深さ10cm，長さ241cmである。これは第3号住居跡に伴う間仕切り的な機能をもつものと考えられる。炉は検出できなかった。ピットは7か所検出されたが，本跡に伴うと思われるものは，P_5・P_6・P_7である。また，P_5は第21号住居跡の貼り床を取り除いた後，検出したもので，P_6とP_7は残存した床面から検出した。P_5・P_6・P_7は柱穴と考えられ，規模と配列から主柱穴はP_5・P_6と思われる。主柱穴の規模は径55～60cm，深さ50～60cmである。P_7はP_6に近接しており，補助的な柱穴と考えられる。貯蔵穴は，南壁の中央からやや東側の南壁下に位置し，開口部は長径90cm，短径66cmの楕円形を呈し，深さ43cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面は平坦である。貯蔵穴の覆土は，ローム粒子，鹿沼土を微量に含む暗褐色土が自然堆積している。

覆土は自然堆積の状態を呈している。大きくみると2層から成っており，中央部付近の撹乱を除いて，ローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子多量を含む暗褐色土，壁際には，ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子少量を含む黒褐色土が自然堆積している。



第12図　第３・21号住居跡実測図



第13図　第3号住居跡出土遺物実測図

遺物は，第21号住居跡に掘り込まれているため，破壊をまぬかれた北西コーナー部付近の覆土下層から，高坏形土器（P11）の坏部が正位の状態で出土し，ほかに土師器片1片が出土しただけである。それらは，すべて五領式に比定される。

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第13図 1	高坏形土器 土師器	A 11.9 B (4.8)	坏部は接合部から内彎しながら立ち上がる。端部に最大径を有する。脚部欠損。	体部外面－細いハケ目整形。口縁部内・外面－横位のナデ。	スコリア・小礫・砂粒 橙色 普通	70% P11 二次焼成

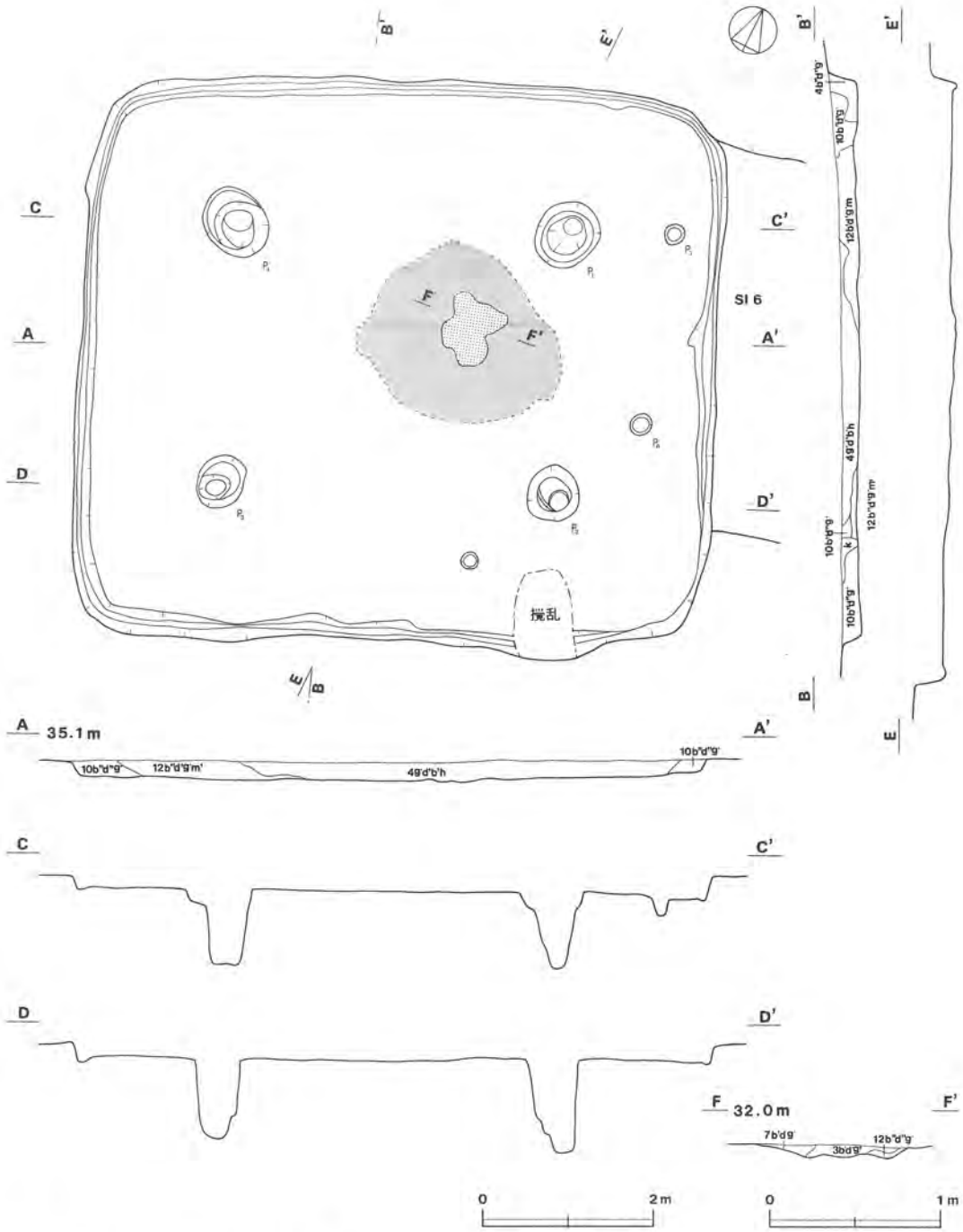
第4号住居跡（第14図）

本跡は，当遺跡の中央部G2c$_6$区を中心に確認され，本跡の北側に第3号住居跡，西側に第8号住居跡，南側に第7号住居跡がそれぞれ0.5～2mの間を置いて近接している。さらに，東側に第6号住居跡が重複しているが，本跡の床面を掘り込んでいることから，本跡の方が古い。

平面形は，長軸7.50m，短軸6.55mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－63°－Eである。壁はロームで締まっており，全壁とも外傾しながら立ち上がっている。壁高は28～40cmである。壁下には，壁溝が南東コーナー部を除いて上幅22cm，下幅8cm，深さ4～6cmの規模で周回している。断面形は，「U」字状を呈している。床面は平坦で硬く締まっている。特に主柱穴の内側は，よく踏み固められている。炉は，中央部からやや北東寄りに位置し，長径65cm，短径57cmの楕円形を呈し，床面を皿状に8cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には，ローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子多量を含む黒褐色土が自然堆積し，炉床は，赤く焼けゴツゴツしている。炉床直上から土器片2点が出土している。ピットは6か所検出され，規模や配列からP_1～P_4が主柱穴と思われる。主柱穴の規模は径61～65cm，深さ88～109cmである。柱穴壁のうち南壁に向かっている側を除いては，垂直に掘られ，断面形は「⌊⌋」状を呈し，柱穴の底面は径20～21cmの円形を呈し，平坦で締まっている。P_5・P_6は，東側で重複している第6号住居跡の主柱穴と思われる。貯蔵穴は検出されなかった。

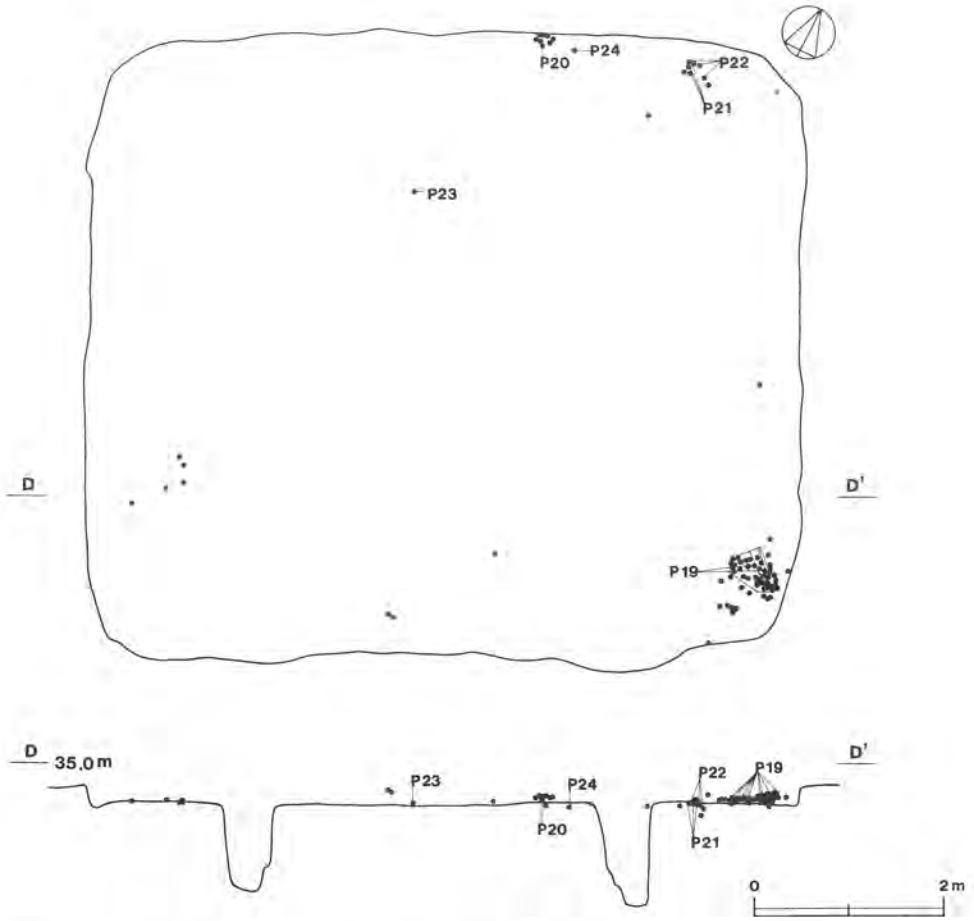
覆土は3層で，重複している上層にローム粒子，ロームブロック，焼土粒子多量，炭化粒子少量を含む黒褐色土，壁際はローム粒子多量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む褐色土が堆積している。床面の中央部，東壁下，北西コーナー部に焼土域が6か所と，P_3・P_4の付近に炭化材が中央にのびて検出された。炭化材などの出土状況から，本跡は火災に遭ったものと思われる。

遺物は，東コーナー部壁下の床面から，復元できた甕形土器（P19）が出土し，北西壁際中央部から壺形土器（P20）の口縁部が正位の状態で，北コーナー部付近の床面から甕形土器（P21・P22）の底部がまとまって出土している。そのほか，炉の西側の床面から弥生式土器の底部に木



第14図　第4号住居跡実測図

葉痕を有する甕形土器(P23)が正位の状態で，また，南側の覆土下層から石鏃と砥石が出土している。なお，土器片は床面や覆土中から139片出土しており，それらは，すべて五領式に比定される。

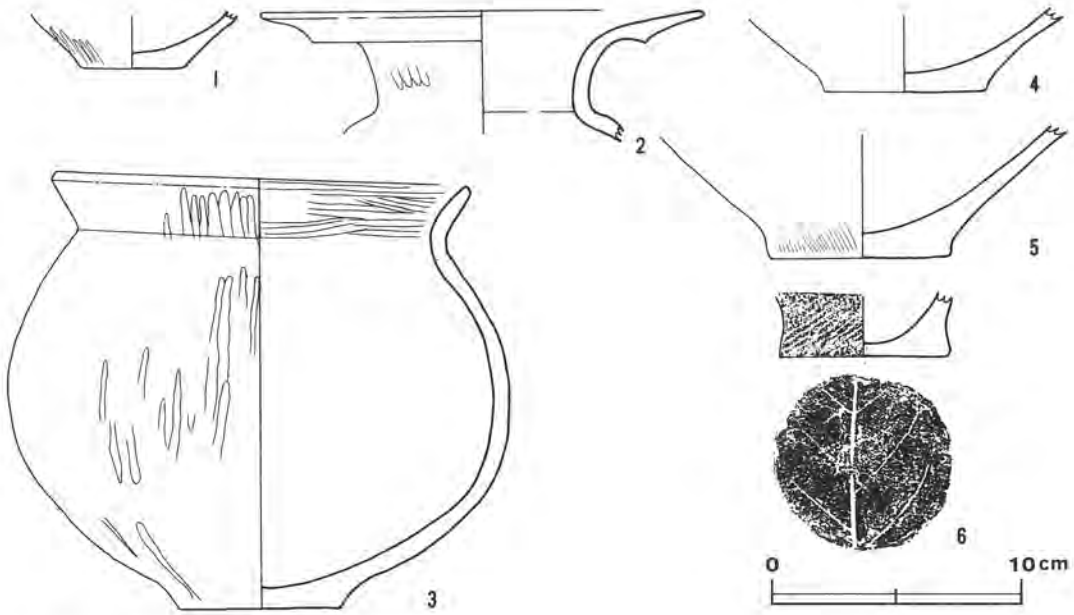


第15図　第4号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	甕形土器 土師器	B (2.1) C 4.2	底部よりやや内彎して立ち上がる。底部は平底である。	胴部外面－ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P24
2	壺形土器 土師器	A 17.6 B (5.0)	頸部はゆるく屈曲した後，ほぼ垂直に立ち上がり，外反して口縁部に至る。口縁部は外傾して大きく開き，複合口縁を呈す。	口縁部外面－横位のナデ，口縁部内面－ヘラ磨き。頸部外面－ヘラ磨き，内面－ヘラナデ。	スコリア・小礫・砂粒 明褐色 普通	25% P20 二次焼成

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第16図 3	甕形土器 土師器	A 16.5 B 17.4 C 6.4	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し外傾して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，胴部中位のやや下側に最大径を有する。	口縁部外面－縦位のハケ目整形後縦位のヘラ磨き，口縁部内面－横位のハケ目整形後横位のナデ。胴部外面－縦位のハケ目整形後縦位のヘラ磨き。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	90% P19 外面煤付着
4	甕形土器 土師器	B (3.0) C 6.5	底部片で底部は平底を呈し，器厚は0.7cmほどである	胴部内・外面－ヘラナデ。	スコリア・砂粒 褐色 普通	15% P21
5	甕形土器 土師器	B (5.0) C 7.3	底部は平底で，胴部下位は底部よりやや内彎しながら開いて立ち上がる。	胴部内・外面－ハケ目整形後ヘラナデ。	スコリア・パミス・砂粒 明褐色 普通	15% P22 外面煤付着
6	壺形土器 弥生式土器	B (2.5) C 6.9	底部片である。底部は平底で，胴部は底部から内彎気味に立ち上がる。	胴部下位外面－細い単節LR縄文。底部底面－木葉痕。	砂粒 褐色 普通	10% P23

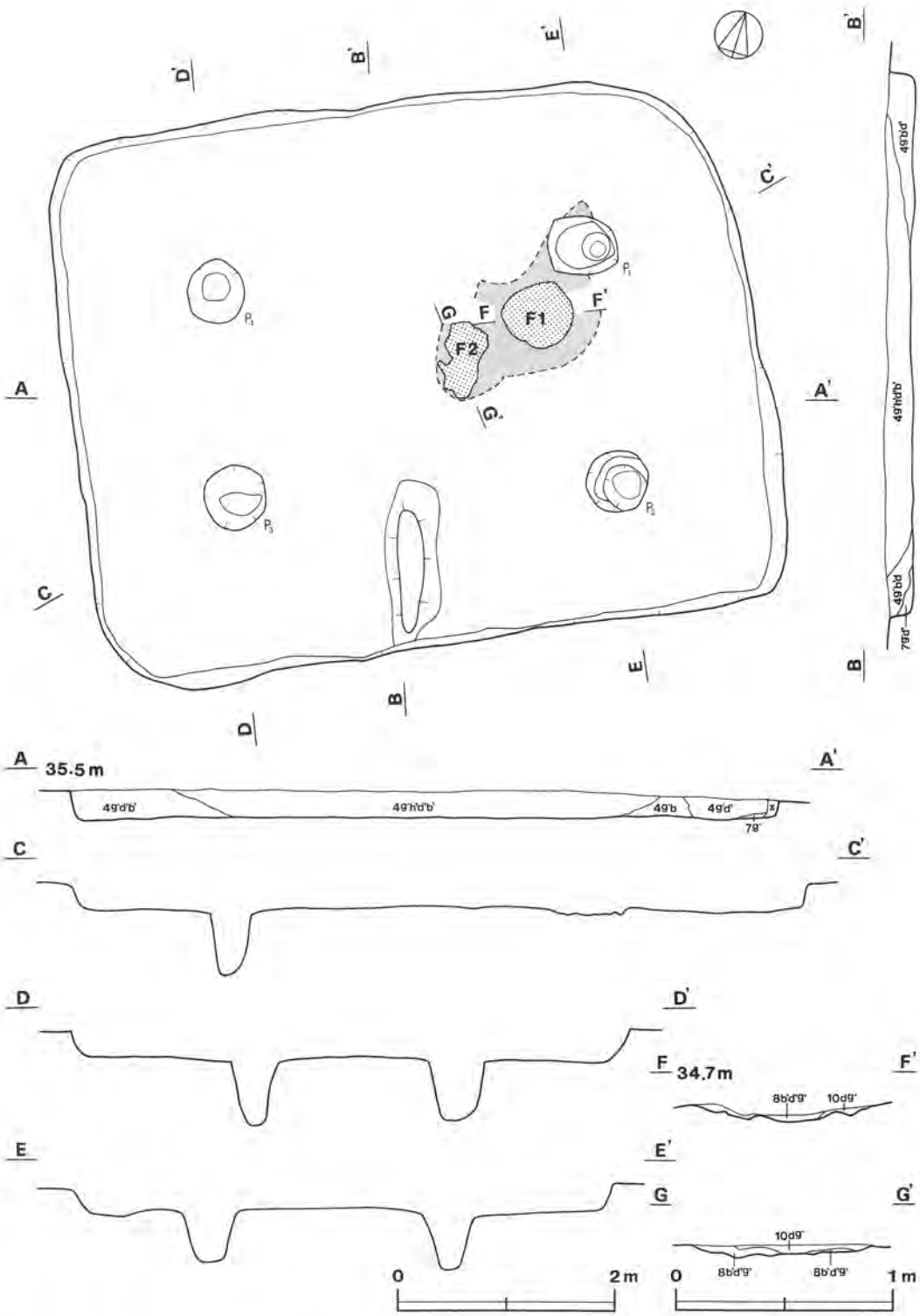


第16図　第4号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡（第17図）

本跡は，当遺跡の中央部F2j$_9$区を中心に確認され，第3号住居跡の東側約8m，第2号溝の西側0.4mに位置し，南西コーナー部に存在する縄文時代早期の第2号炉穴と重複している。

平面形は，長軸6.33m，短軸5.02mの隅丸長方形で，長軸方向はN－66°－Eである。壁はロームで硬く締まっており，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は20～30cmである。東コーナーは大きく丸味を帯びている。床面は平坦で，全体的に硬いロームで，特に炉の周辺は踏み固められてお



第17図　第5号住居跡実測図

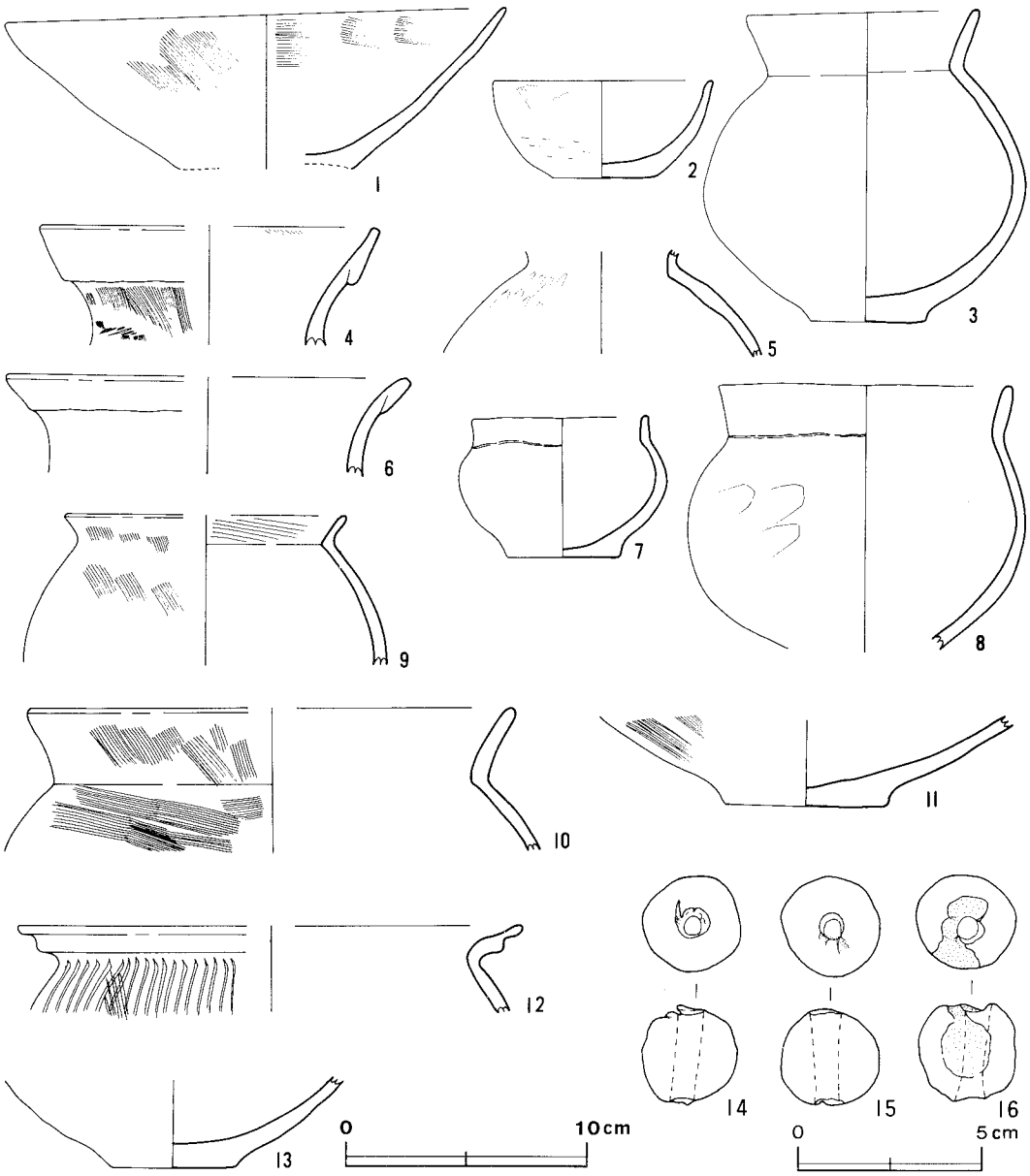
り，壁周辺の床面より硬く締まっている。ピットは4か所検出され，位置や規模からP_1～P_4は主柱穴と思われる。主柱穴はやや中央部に寄って配列され，規模は径55～63cm，深さ51～56cmである。主柱穴はほぼ対角線上に位置し，柱間の長さは東西2.8～3.0m，南北1.3～1.6mである。南壁下の中央から北に向かってローム質で踏み固められてかたく締まった土が細長く盛り上がっている。規模は上幅16～24cm，下幅40～52cm，高さ5cmであるが，出入口の施設に伴うものかどうか明確にすることはできなかった。炉は，2か所検出され，北東側のF1は，長径60cm，短径58cmの楕円形で，南西側のF2は，長径64cm，短径28cmの不整楕円形を呈し，床面を皿状にそれぞれ3cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には焼土粒子，炭化粒子多量を含む暗褐色土が自然堆積し，炉床は赤変硬化しゴツゴツしている。貯蔵穴は検出されない。

覆土は，3層から成り，主にローム粒子多量，焼土粒子，炭化粒子を少量含む黒褐色土が，壁際には，ローム粒子多量，焼土粒子，炭化粒子少量を含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，中央からやや北西側の床面から完形の壺形土器（P38）が，口縁を東に向けて斜位の状態で出土し，西コーナー部付近の壁際の床面直上から，小型甕形土器（P27）がつぶれた状態で出土している。また北西壁際の床面から完形の椀形土器（P28）が破片で，北コーナー付近の床面から高坏形土器（P29）の坏部が倒立の状態で，壺形土器（P30）の頸部が破片で，南東壁際の床面から球状土錘3点が出土している。そのほか，覆土の中・下層から土器片が出土している。なお，その中にS字口縁を有する台付甕形土器（P31）の口縁部の破片が1片含まれている。それらは，すべて五領式に比定される。

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	高坏形土器 土師器	A 20.6 B (6.7)	坏部で，接合部から大きく内彎しながら口縁部に至る。	口縁部外面－ハケ目整形後ナデ，内面－横位のハケ目整形。体部内・外面－ハケ目整形後ナデ。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	50% P29 内・外面煤付着
2	椀形土器 土師器	A 8.9 B 4.0 C 4.3	体部は底部から内彎して立ち上がり，口縁端部で最大径を有する。底部は平底である。	口縁部外面－横位のナデ。体部外面－ハケ目整形後下位に横位のヘラナデ，体部内面－ナデ。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	90% P28
3	壺形土器 土師器	A 9.5 B 13.0 C 4.8	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し，外反気味に開き口唇部に至る。胴部中位に最大径を有する。	口縁部外面－ハケ目整形。口縁部内面，胴部内・外面－ナデ。	砂粒・小礫 明赤褐色 普通	95% P38 二次焼成
4	壺形土器 土師器	A (16.4) B (4.1)	口縁部は複合口縁で，頸部より外反して立ち上がる。	口縁部内・外面－ハケ目整形後ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	5% P33 外面煤付着
5	壺形土器 土師器	B (4.2)	口縁部は頸部直上を除いて欠損している。胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有すると思われる。	胴部外面－ヘラ磨き。	スコリア・砂粒 明褐色 普通	20% P30
6	壺形土器 土師器	A (13.7) B (5.0)	口縁部は複合口縁で，頸部より外反して立ち上がる。	口縁部内・外面－横位のナデ，下位はハケ目整形。	スコリア・砂粒 灰褐色 普通	5% P34



第18図　第5号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第18図 7	小型甕形土器 土師器	A 7.2 B 5.9 C 4.7	口縁部は短く，垂直に立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。底部は平底である。	胴部外面－ハケ目整形後ナデ，胴部内面－ナデ。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	95% P27
8	甕形土器 土師器	A 12.1 B(11.0)	口縁部は頸部から外傾気味に立ち上がり，胴部中位に最大径を有する。	口縁部・胴部の内・外面－横位のヘラナデ。	砂粒・小礫・石英 暗褐色 普通	50% P26

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第18図 9	甕形土器 土師器	A(11.4) B (6.2)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し,外反して立ち上がる。	口縁部・胴部外面－斜位のハケ目整形。口縁部・胴部内面－横位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 にぶい褐色 普通	5％ P32
10	甕形土器 土師器	A(19.9) B (6.0)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がる。	口縁部外面－斜位のハケ目整形。口縁部内面－ハケ目整形後ヘラナデ。胴部外面－横位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 明赤褐色 普通	5％ P35
11	甕形土器 土師器	B (3.5) C 6.7	底部より緩やかに内彎して立ち上がる。底部は平底である。	胴部外面－ヘラナデ	砂粒 褐色 普通	10% P37
12	台付甕形土器 土師器	A(20.7) B (3.6)	口縁部片で,「S」字状を呈する。	口縁部内・外面－横位のナデ。胴部上位外面－斜位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 褐色 普通	5％ P31
13	甕形土器 土師器	B (3.6) C 5.0	底部よりやや内彎して立ち上がる。底部は平底である。	胴部外面－ヘラナデ	砂粒 明赤褐色 普通	10% P36

球状土錘（第18図14・15・16）

球状土錘は，3点出土し，いずれもややゆがんだ球形を呈している。14・15の2点は完形で，16は一部欠損しており，孔の一方の縁には粘土がはみ出ており，孔は一方から穿たれたものと思われる。作りはやや雑である。色調は，橙色，にぶい褐色で，胎土は砂粒を含み，焼成は良好である。法量は14が長さ2.6cm，幅2.6cm，孔径6～8㎜，重さ19.2g，15が長さ2.7cm，幅2.7cm，孔径8～9㎜，重さ15.9g，16が長さ2.5cm，幅2.7cm，孔径8㎜，重さ15.3gである。

第6号住居跡（第19図）

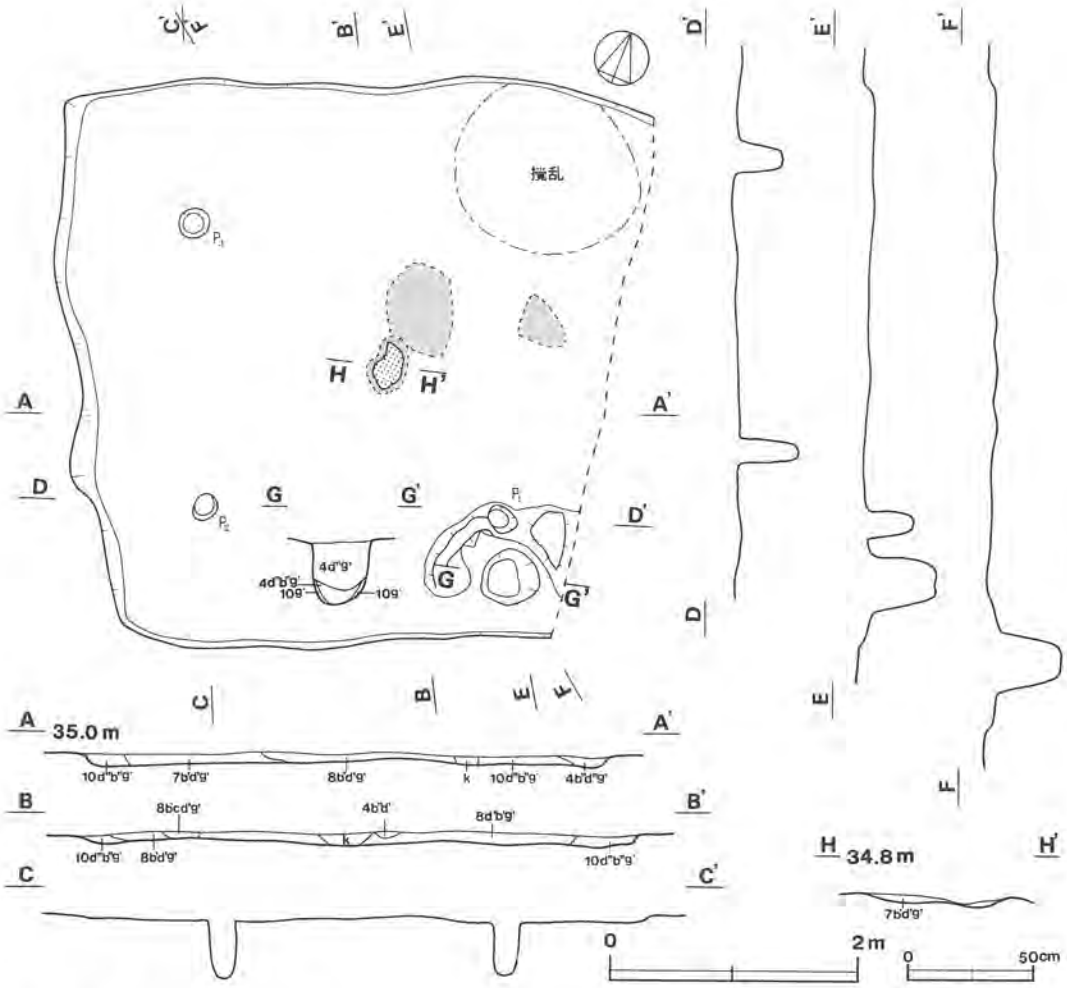
本跡は，当遺跡の中央部G2c_7区を中心に確認され，第3号住居跡の南東側約2.6m，第7号住居跡の北側約4mに位置し，第4号住居跡と西側で重複している。本跡の貼り床が第4号住居跡の上に構築されていることから，本跡の方が新しい。本跡東壁は，新しい溝により削り取られ破壊されている。

平面形は，長軸4.60m，短軸4.50mの隅丸方形状で，長軸方向はN－70°－Eと推定される。壁は上部が耕作によって削平され撹乱を受けているため遺存状態は良くない。削平された東壁を除いてわずかに数cm残存しているだけで，北東コーナー部は撹乱を受けて不明瞭である。床面は，撹乱をうけている北東コーナー部付近を除いては平坦であり，炉の周辺はよく踏み固められ硬く締まっている。炉は，住居跡のほぼ中央部に位置し，長径30cm，短径22cmの楕円形を呈し，床面を4cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には，ローム粒子少量，炭化粒子，焼土粒子を多量に含む暗褐色土が自然堆積し，炉床は赤変硬化しゴツゴツしている。ピットは3か所検出さ

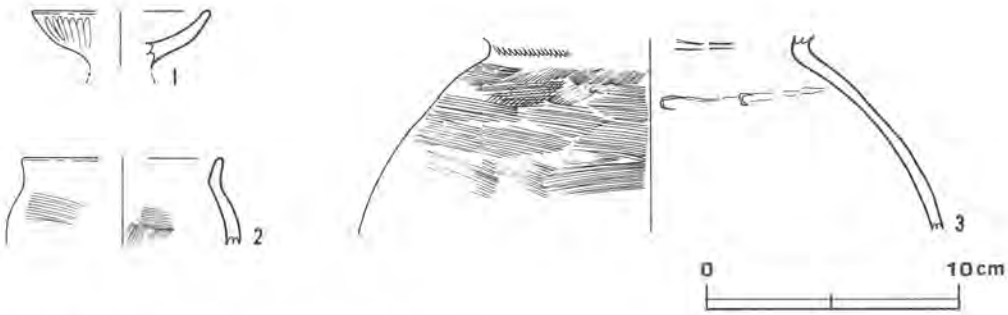
れ，P_1～P_3が配列や規模から主柱穴と思われる。規模は径21～25cm，深さ37～48cmである。貯蔵穴は，南東コーナー部付近に位置し，開口部は径48cm，深さ46cmのほぼ円形を呈し，壁は外傾して立ち上がり，底面は皿状である。貯蔵穴の覆土は3層からなり，ローム粒子小量，炭化粒子，焼土粒子微量を含む褐色土が堆積し締まっている。

覆土は部分的に撹乱を受けているが主に2層からなり，上層はローム粒子，焼土粒子，炭化粒子を少量含む暗褐色土が，壁際にはローム粒子多量，焼土粒子，炭化粒子極少量を含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，中央の床面から甕形土器（P41）の胴部片が横位の状態で，P_1の覆土上層から器台形土器（P39）の器受部が出土している。そのほか，削平され残存した覆土下位から土師器片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。



第19図　第6号住居跡実測図



第20図　第 6 号住居跡出土遺物実測図

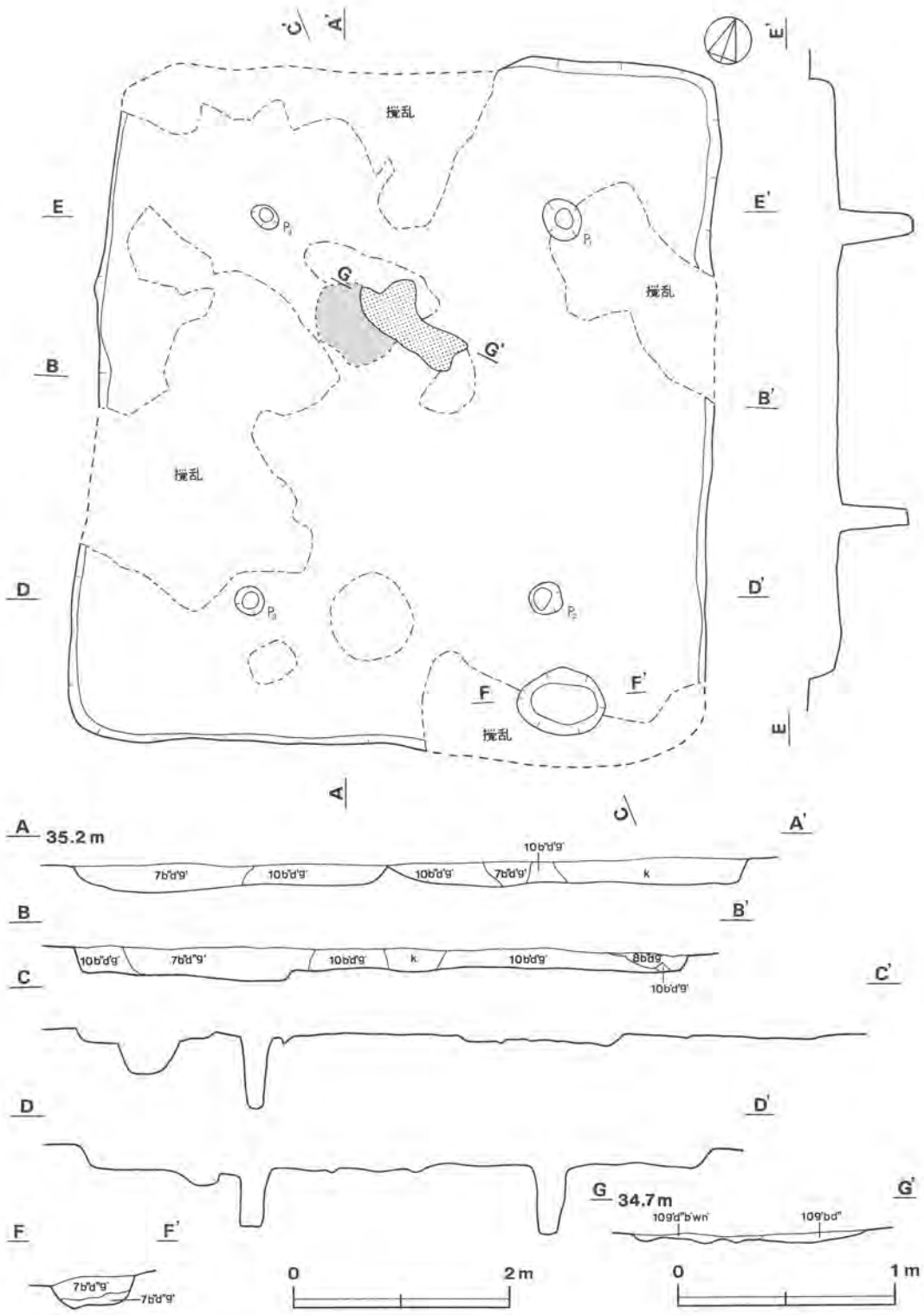
第 6 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第20図 1	器台形土器 土師器	A (7.0) B (2.2)	器受部は接合部から緩やかに内彎して立ち上がる。	器受部外面－殻位のヘラ磨き，内面－横位，斜位のヘラ磨き。	スコリア・砂粒 橙色 普通	10% P39
2	甕形土器 土師器	A (7.9) B (3.5)	口縁部は頸部から緩やかに屈曲し，外反気味に立ち上がる。胴部中位に最大径を有すると思われる。	口縁部内・外面－横位のナデ。胴部内・外面－斜位のハケ目整形。	砂粒 灰褐色 普通	5% P40
3	甕形土器 土師器	B (7.9)	口縁部は頸部直上を除いて欠損している。胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有すると思われる。	胴部外面－斜位のハケ目整形，内面－横位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	15% P41 二次焼成

第 7 号住居跡（第21図）

本跡は，当遺跡の中央部G2e$_7$区を中心に確認され，第 4 号住居跡の南側約 2 m，第 9 号住居跡の北東約 3 mに位置している。

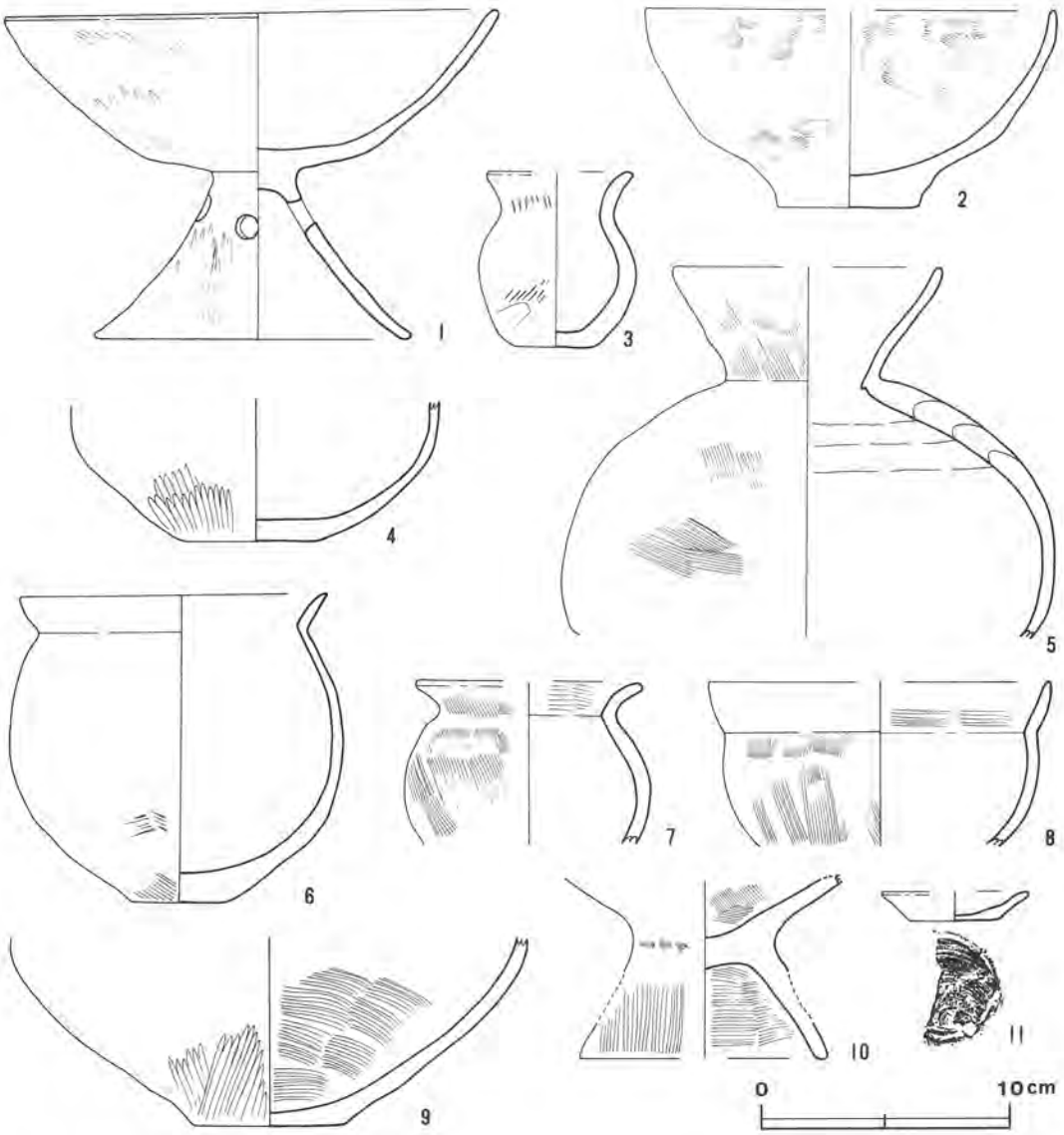
平面形は，長軸6.60m，短軸5.84mの隅丸長方形で，長軸方向はN－18°－Wである。壁はロームで硬く締まり，外傾して立ち上がっている。壁高は12～25cmである。東・西・南・北のいずれの壁にも幅1.2～2.3mにわたって床面までえぐりとられる撹乱があり破壊されている。撹乱を受けなかった床面はほぼ平坦で，中央部は踏み固められて硬く締まっている。炉は中央部からやや北寄りに位置し，北側は撹乱を受けており，残存した部分は長径108cm，短径40cmの楕円形を呈し，床面を約 4 cm掘りくぼめた地床炉である。炉内には，焼土粒子多量，炭化粒子少量を含む褐色土が硬く自然堆積し，炉床は赤変硬化しゴツゴツしている。ピットは，4 か所検出され，壁は垂直に掘られ，底面は平坦である。規模や配列からP_1～P_4が主柱穴と思われる。対角線上に位置し，規模は径29～42cm，深さ53～67cmである。貯蔵穴は，南東コーナー部付近の南壁下に位置し，上面は撹乱を受けている。開口部は長径83cm，短径64cmの楕円形を呈し，深さは29cmである。壁は外傾しながら立ち上がり，底面は垜状である。



第21図　第７号住居跡実測図

覆土は部分的に撹乱を受けているが2層から成り，上層はローム粒子多量，焼土粒子，炭化粒子少量を含む褐色土，下層はローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む暗褐色土がほぼ自然堆積している。

遺物は，南東コーナー部付近の床面からほぼ完形に復元できた高坏形土器（P46），中央の床面から台付甕形土器（P53）の台部が倒立の状態で出土している。また，北西コーナー部付近の覆土中・下層から小型壺形土器（P45）や埦形土器（P50）の破片がまとまった状態で出土し，南東側の覆土下層から甕形土器（P44）がつぶれた状態で出土している。なお，中央からやや北西の床面



第22図　第7号住居跡出土遺物実測図

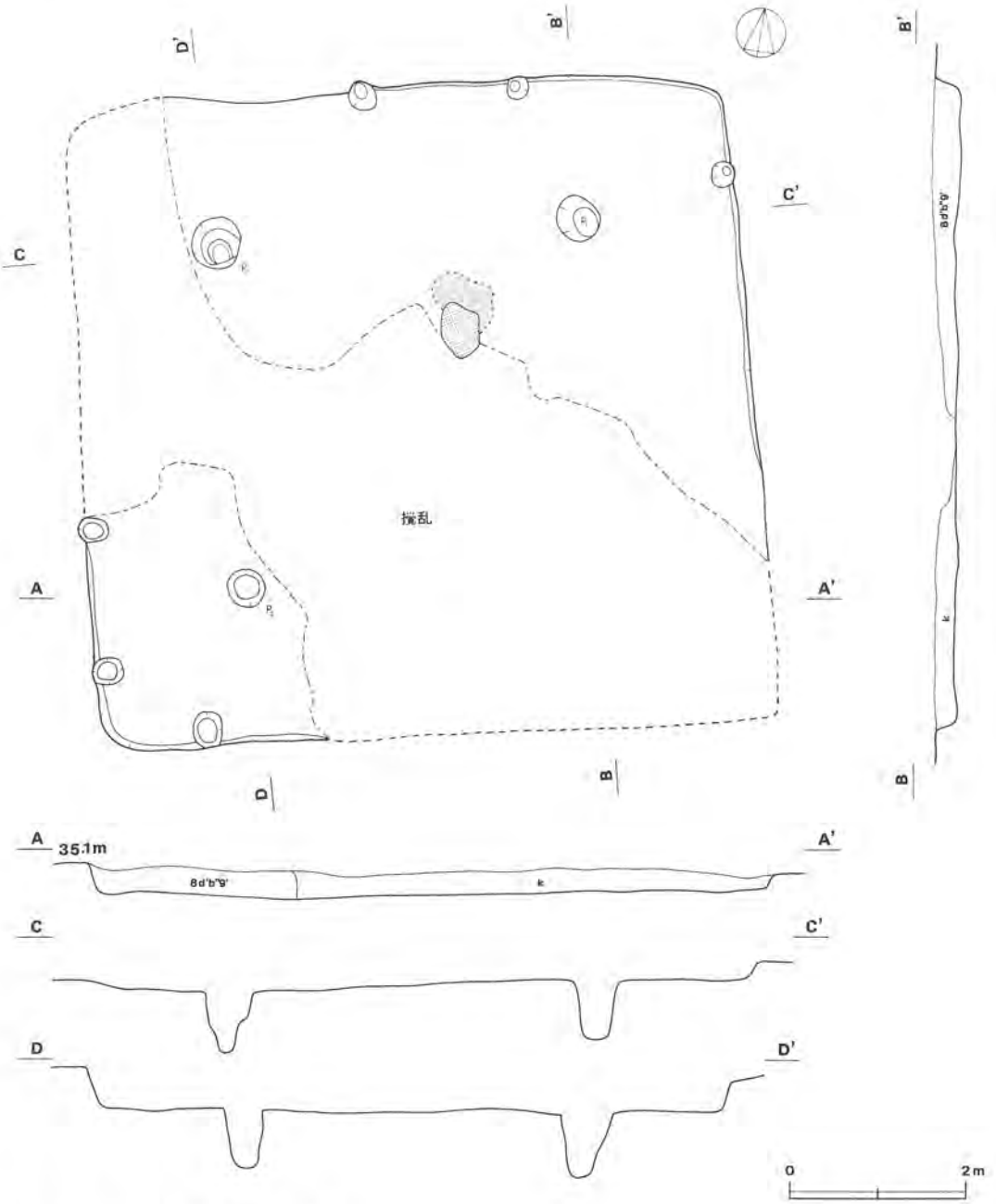
から朱彩された壺形土器（P52）の底部が正位の状態で出土している。そのほか，覆土中から土師器片が出土しているが，それらは，すべて五領式に比定される。なお，第22図11は，土師質土器の皿である。第7号住居跡の撹乱部分から出土したもので，本跡に伴うものではない。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 1	高坏形土器 土師器	A 19.7 B 13.1 D 12.5 E 6.7	坏部は接合部から内彎気味に立ち上がり大きく開く。脚部は「ハ」の字状に大きく開いて裾部に至る。脚部上位に4孔を有する。	坏部外面－斜位のハケ目整形後部分的に縦位のヘラ磨き，坏部内面－縦位のヘラナデ。脚部外面－斜位のヘラナデ，脚部内面－ナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	95% P46
2	塊形土器 土師器	A(16.4) B 8.0 C 5.8	体部下位は底部から外反し，中位から緩やかに内彎して立ち上がる。口縁端部はやや垂直気味に開く。	内・外面－斜位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	60% P50
3	小型壺形土器 土師器	A (5.6) B 7.1 C 3.0	口縁部は頸部から外反しながら立ち上がる。胴部はほぼ球形で，中位に最大径を有する。底部は平底である。	口縁部・胴部外面－ハケ目整形後ヘラナデ。口縁部内面－横位のヘラナデ。胴部内面－押圧。	砂粒 にぶい橙色 普通	70% P45
4	壺形土器 土師器	B (5.7) C 5.4	胴部は底部から内彎して立ち上がる。底部は平底である。	胴部外面－ヘラ磨き。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	15% P52 外面朱彩
5	壺形土器 土師器	A(10.7) B(15.0)	口縁部は頸部から屈曲し，内彎気味に立ち上がる。胴部はややつぶれた球形を呈し，中位に最大径を有する。	口縁部内・外面－ハケ目整形。胴部内・外面－ハケ目整形後ヘラナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	50% P55
6	甕形土器 土師器	A 12.2 B 12.6 C 3.8	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がる。胴部中位に最大径を有する。	口縁部内・外面－横位のナデ。胴部外面－ハケ目整形後ヘラナデ。	スコリア・砂粒・小礫 褐色 普通	95% P44 二次焼成
7	甕形土器 土師器	A (8.8) B (6.6)	口縁部は頸部から強く屈曲し，外反しながら立ち上がる。胴部中位に最大径を有する。	口縁部外面－ハケ目整形後横位のナデ，口縁部内面－横位のハケ目整形。胴部外面－斜位のハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	60% P49
8	甕形土器 土師器	A(13.6) B (6.7)	口縁部は頸部からゆるやかに屈曲し，外傾気味に立ち上がり，端部はやや垂直に開く。	口縁部内面－横位のハケ目整形。胴部外面－縦位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 褐色 普通	10% P47
9	甕形土器 土師器	B (7.6) C 6.2	胴部は底部からゆるやかに内彎気味に立ち上がる。胴部中位に最大径を有すると思われる。	胴部外面－ハケ目整形後ヘラナデ，胴部内面－ハケ目整形。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	10% P51
10	台付甕形土器 土師器	B (7.2) D(10.0) E 3.6	台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	内・外面－横位，縦位のハケ目整形。	砂粒 浅黄橙色 普通	20% P53 外面煤付着
11	皿 土師質土器	A (5.8) B 1.2 C 3.6	全体的に小さく，薄手，体部は外傾し，内面底部中央は凹む。	水挽き成形。横ナデ，底部回転糸切り。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	50% P48

第 8 号住居跡（第23図）

本跡は，当遺跡の中央部G2d$_4$区を中心に確認され，西側の調査エリア境界付近に存在している。また，第 4 号住居跡の西側約0.4mに近接している。本跡の 3 分の 2 は後世のゴミ穴によって破壊されており，不明な部分が多い。

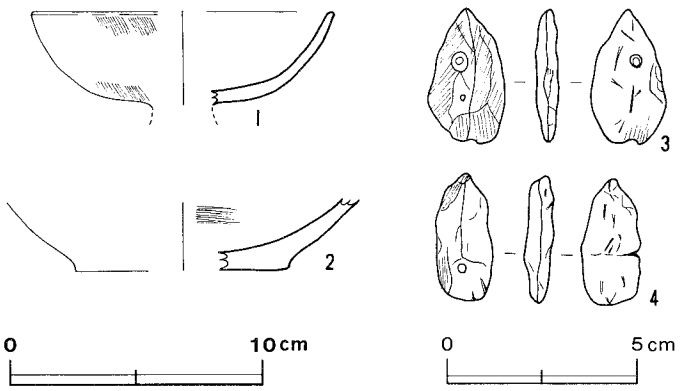


第23図　第 8 号住居跡実測図

調査できた部分から推定すると，平面形は，長軸7.62m，短軸7.34mの隅丸方形状で，長軸方向はN－79°－Eを指すものと思われる。壁は東壁の一部と南西コーナー部を除いて，撹乱と削平によって破壊されているが，残存している壁はロームで締まり，垂直に立ち上がっており，壁高は22～47cmである。壁柱穴は，径28～38cm，深さ23～32cmの円筒形状を呈し，壁をわずかに掘り込む様に1.3～1.5mの間隔で，残存する壁下全体に回っている。床はほぼ平坦で炉を中心に踏み固められているが，全体の4分の1ほどが残っていただけである。炉は，中央から北寄りに位置し，南側は撹乱を受けている。長径55cm，短径42cmの楕円形を呈し，炉床は中央がわずかに凹み，赤変硬化している。ピットは3か所検出され，規模と配列からP_1～P_3は主柱穴と思われ，規模は46～59cm，深さ68～71cmで，しっかりと掘られている。P_3は北側が途中まで広く掘られている。貯蔵穴は検出できなかった。

覆土は1層のみで，ほとんど撹乱を受け，北壁に近い部分だけが残存し，ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子少量を含む暗褐色土が自然堆積の様相を示している。

遺物は，撹乱を受けなかった北東コーナー付近と，南西コーナー付近に出土している。P_1の覆土内から甕形土器（P58）の底部が出土し，また，北壁近くの覆土下層から高坏形土器（P57）の坏部が斜位の状態で出土している。そのほか，覆土中・下層から土器片168片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。なお，撹乱部分から石製模造品の剣形品が2点が出土している。



第24図　第8号住居跡出土遺物実測図

石製剣形品（第24図3・4）

剣形品は2点とも滑石製で，表・裏面および側縁には擦痕が認められ，滑らかになっている。3は長さ3.3cm，幅1.5cm，厚さ0.7cm，重さ4.6gであるが一部欠損している。孔は柄部に途中まで穿った跡がある。4は長さ3.5cm，幅1.9cm，厚さ0.5cm，重さ3.9gで完成品である。孔径は0.3～0.35cmである。

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 1	高坏形土器 土師器	A(11.8) B(3.7)	坏部は坏底部から内彎して立ち上がる。脚部は欠損している。	外面－斜位のハケ目整形，内面－横位のナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	20% P57
2	甕形土器 土師器	B(2.8) C(8.4)	胴部は底部から内彎して立ち上がる。底部は平底である。	胴部内・外面－ヘラナデ	スコリア・砂粒 にぶい赤褐色 普通	5% P58

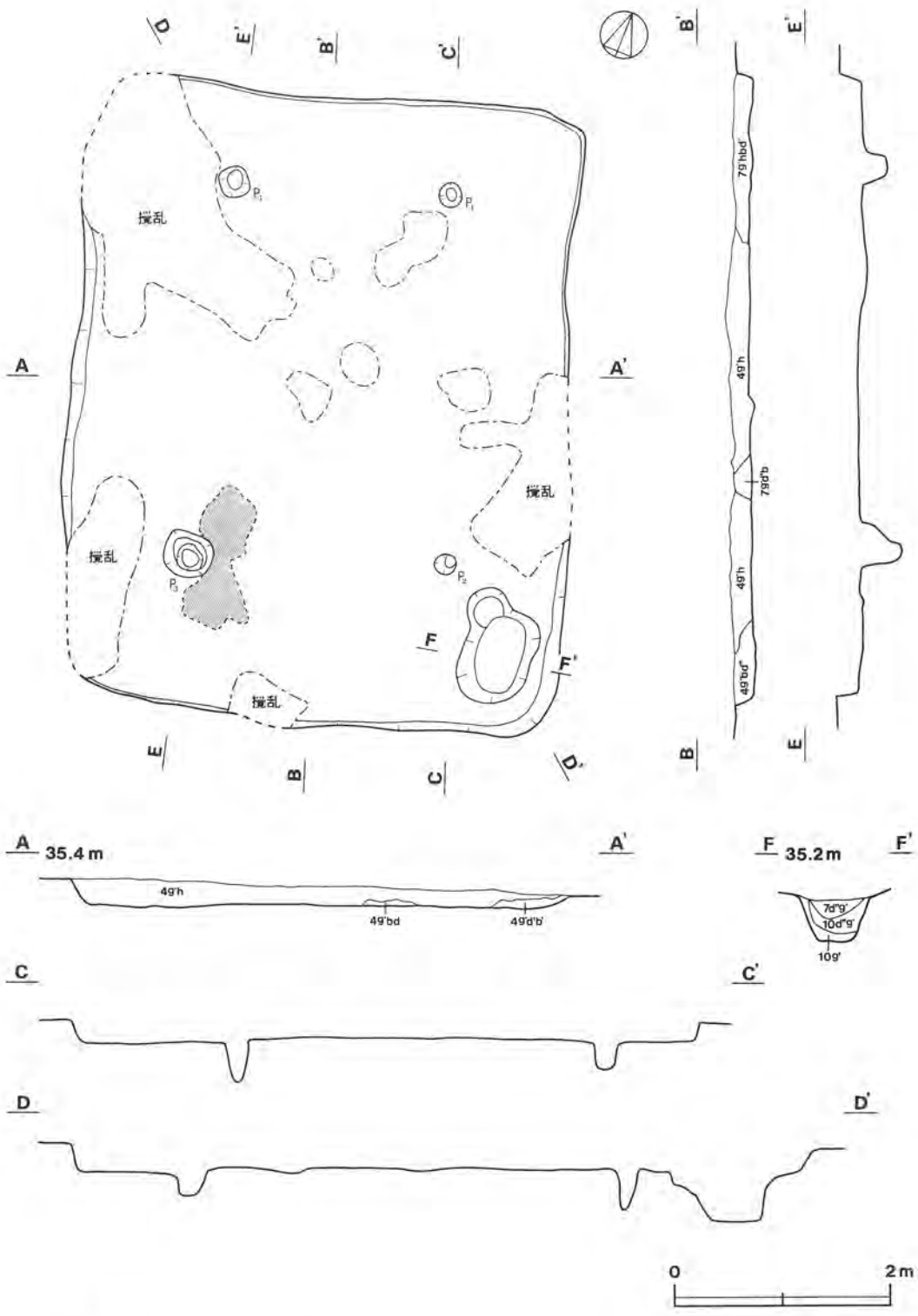
第9号住居跡（第25図）

本跡は，当遺跡の中央部G2g$_5$区を中心に確認され，第7号住居跡の南西側約3m，第21号土坑の北側約0.4mに位置している。この地域は，ゴミ穴の撹乱が多数確認されており，本跡も撹乱を受けている。

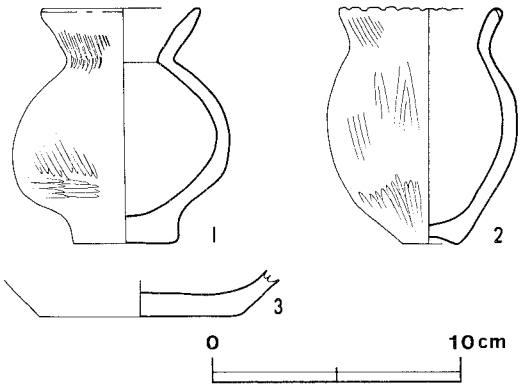
平面形は，長軸5.82m，短軸4.62mの隅丸方形で，長軸方向はN－18°－Wである。壁はロームで硬く締まり，垂直に立ち上がっている。壁高は18～26cmである。壁は，北西コーナー，南西コーナー，南壁と東壁の一部は撹乱を受けている。炉は検出されない。ピットは4か所検出され，規模や配列からP$_1$～P$_4$は主柱穴と思われる。規模は径20～49cm，深さ23～40cmである。P$_3$は，北側の深さ約22cmのところに段を有している。床面はロームで平坦であり，主柱穴を結ぶ線の内側は，踏み固められ硬く締まっている。貯蔵穴は，南東コーナー部に位置し，開口部は長径92cm，短径66cmの楕円形を呈し，深さ45cmである。壁は外傾しながら立ち上がり，底面は平坦である。覆土は上層が暗褐色土，下層は炭化粒子を多量に含む褐色土が自然堆積している。

覆土は，10～30cmで，東壁は壁の上面が削平されているため浅い。大部分撹乱で，部分的に自然堆積の状態を示している。炭化粒子，焼土粒子少量を含む暗褐色土，黒褐色土が堆積している。P$_3$の東側床面に焼土が，南北約1.3mにわたって瓢箪状に3～5cmほど堆積している。

遺物は，南壁近くの床面から小型壺形土器（P60）が横位の状態で，その西側の覆土中から小型甕形土器（P61）が倒立の状態で出土している。また，撹乱を受けた北西コーナーの覆土中から，甕形土器（P59）の破片がまとまった状態で出土したが復元することはできなかった。そのほか中央付近の床面から砥石が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。



第25図　第 9 号住居跡実測図



第26図　第９号住居跡出土遺物実測図

第９号住居跡出土遺物観察表

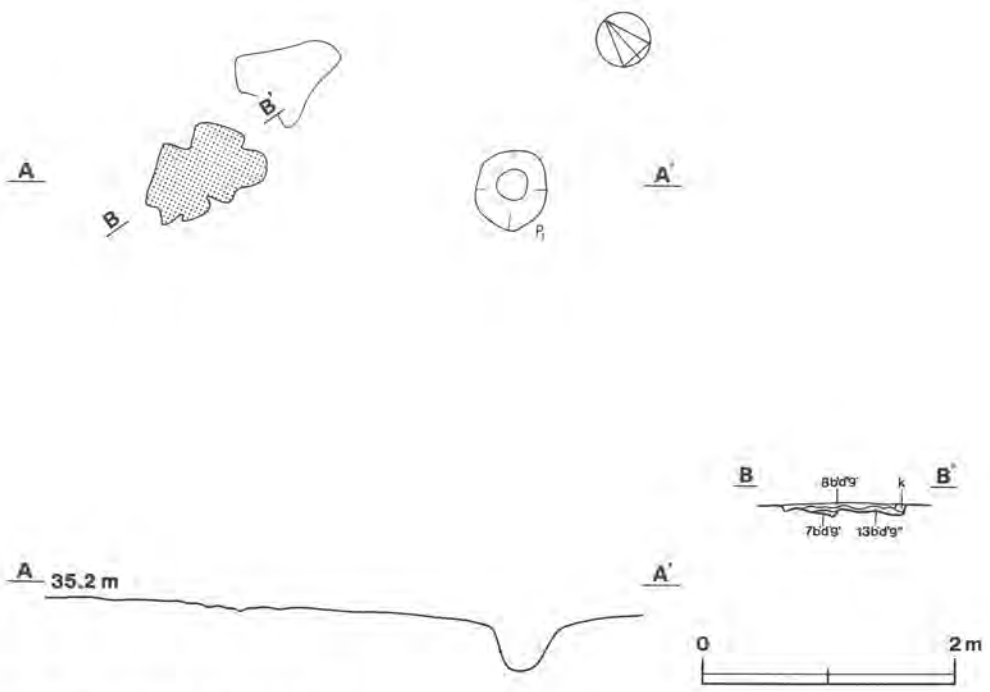
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第26図 1	小型壺形土器 土師器	A 6.2 B 9.5 C 4.2	口縁部は「く」の字状に屈曲し，内彎気味に立ち上がる。胴部はやや横に張った球形を呈し，下ぶくれ状で，中位のやや下側に最大径を有する。	口縁部内・外面－横位のヘラナデ。胴部外面－縦位のハケ目整形後横位のナデ。	スコリア・砂粒 にぶい褐色 普通	100% P60
2	小型甕形土器 土師器	A 6.4 B 9.5 C 2.3	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。底部中央は凹む。	口唇部－キザミ目を施す。外面－ハケ目整形後ヘラナデ。内面－横位のナデ。	スコリア・砂粒 にぶい褐色 普通	100% P61 外面煤付着
3	甕形土器 土師器	B (1.5) C 8.0	胴部は底部から外傾気味に立ち上がる。底部は平底である。	外面－ナデ。	砂粒・石英 橙色 普通	10% P59 表面剝離

第10号住居跡（第27図）

本跡は，当遺跡の中央部G2g_3区を中心に確認され，本跡の西側部分は調査エリア外に延びているため未調査である。第８号住居跡の南西約５m，第９号住居跡の西側約４mに位置している。本跡の東側は耕作とゴミ穴による撹乱を受け，壁及び床の大部分はすでに破壊されている。確認調査の過程で，炉床と床の一部と思われる焼土塊と硬化したロームを検出したため，プランは不明であるが住居跡として調査を進めた。

壁はすでに破壊されており，平面形や規模については不明である。床面は，重機による削平痕が南北に入り込んだ間にわずかに床面と思われる締まったロームが認められたにすぎない。炉は，わずかに残った床面から西側約30cmに位置し，規模は南北60cm，東西92cmの不定形を呈している。床面を約10cm掘りくぼめた地床炉で，炉内には暗褐色土，褐色土が自然堆積し，下層には焼土粒子を多量に含んでいる。炉床は赤変硬化しゴツゴツしている。ピットは，１か所だけ検出され，炉から南東側1.6mに位置し，規模は径65cm，深さ35cmである。上面は削平され，撹乱を受けているが，壁は垂直で底面は平坦である。柱穴かどうか明確にすることはできなかった。

遺物は，わずかに残った覆土中から土器片が12片出土したが，接合，復元できたものはなかった。それらは，すべて五領式に比定される。



第27図　第10号住居跡実測図

第11号住居跡（第28図）

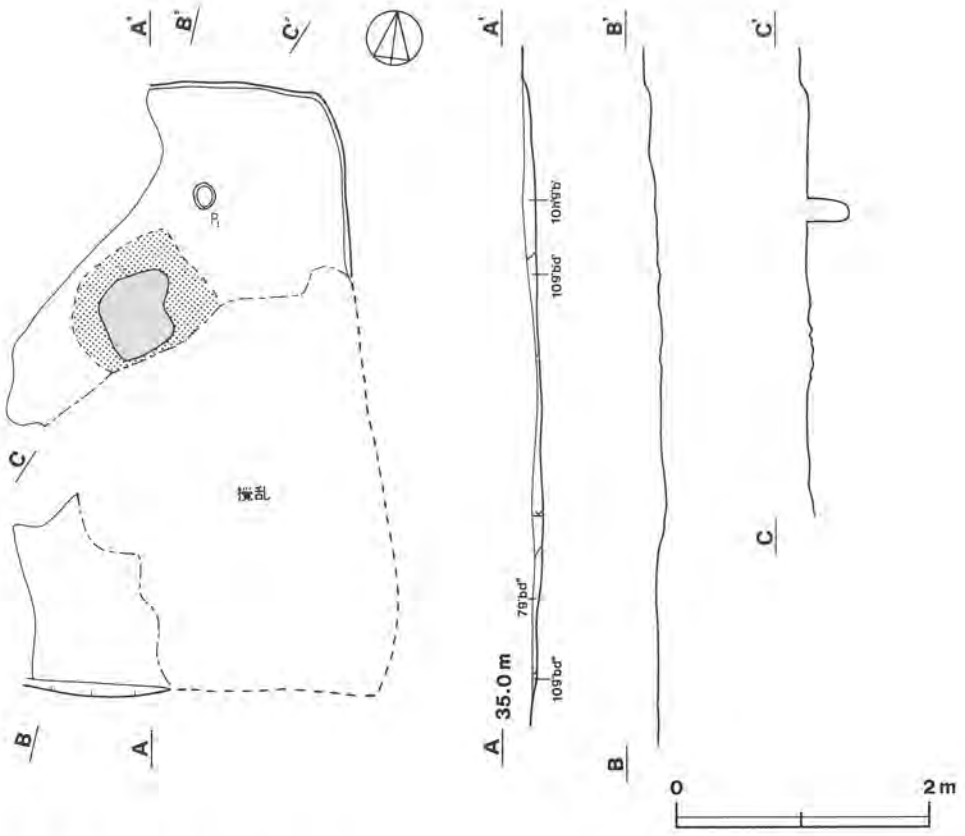
本跡は，当遺跡の中央部G2h$_8$区を中心に確認され，第７号住居跡の南東側約3.4m，第２号溝の西側約1.4mに位置している。本跡の西側と南東側はゴミ穴と耕作による撹乱を受け，壁及び床の４分の３はすでに破壊されている。

平面形や規模等の詳細は不明である。調査できた部分から推定すると，平面形は隅丸方形または隅丸長方形と思われる。壁はロームで，外傾して立ち上がっている。壁高は約５～７cmである。検出できたのは，南壁の一部と，北東コーナー部付近で，この部分から，本跡の主軸長は約4.85mと推定される。床面はロームで平坦である。北東部は硬く締まっているが，西側はゴミ穴によって切られ，南東コーナーは削平されて不明である。炉は推定で中央から北東寄りに位置し，床面を炉床とした地床炉で，規模は長径65cm，短径50cmの楕円形状を呈し，炉床は赤変硬化しゴツゴツしている。ピットは１か所北東部に検出され，柱穴と思われる。規模は径21cm，深さ33cmである。主柱穴とは判断できなかった。

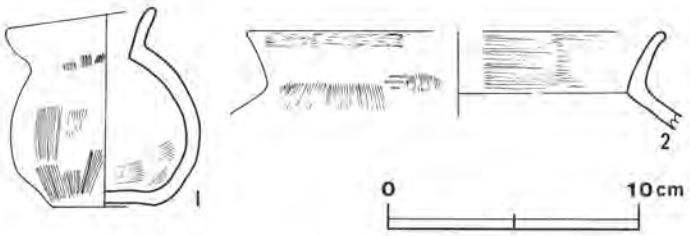
覆土は１層で，中央部の撹乱を除いて主に褐色土が南・北の壁際に堆積しており，いわゆる三

角堆積の一部かと思われる。

遺物は，東壁下の床面から，小型壺形土器（P63）が横位の状態で出土している。そのほか床面から土器片9片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。



第28図　第11号住居跡実測図



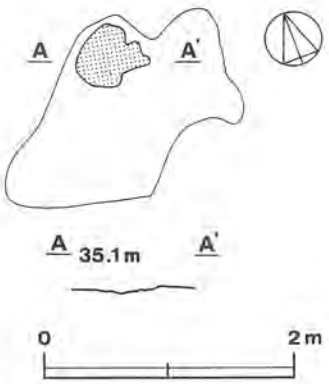
第29図　第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 1	小型壺形土器 上師器	A 5.8 B 8.0 C 4.2	口縁部は頸部から外傾して立ち上がり，胴部は底部から内湾して立ち上がる。底部は平底である。	口縁部内・外面一横位のナデ。胴部内・外面一ハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	95% P63
2	壺形土器 上師器	A(16.5) B (3.4)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し，外反気味に立ち上がり，口縁端部で外傾して開く。	口縁部内・外面一横位のナデ。胴部外面一ハケ目整形。	スコリア・砂粒 にぶい褐色 普通	5% P62 外面煤付着

第12号住居跡（第30図）

本跡は，当遺跡の中央部G2i$_7$区を中心に確認され，第11号住居跡の南西側約4.8m，第2号溝の西側約4.4mに位置している。本跡周辺はゴミ穴と耕作による撹乱と削平を受け，壁及び床の大部分はすでに破壊されている。確認調査の過程で，焼土と硬いロームを検出したため，プランは不明であるが住居跡として調査を進めた。



第30図　第12号住居跡実測図

平面形や規模については，壁が残存しておらずプランをとらえることができなかったため不明である。床面は東西2m，南北約1.4mの不定形に残存し，ロームで締まっている。残存している床面の北側寄りに長径55cm，短径40cmの楕円形状に焼土が広がっており，炉と推定される。焼土は3cmほど皿状に掘りくぼめられた中に堆積し，炉床は赤変硬化しゴツゴツしている。

遺物は，わずかに残った覆土中から土器片が14片出土している。それらは，すべて五領式に比定される。

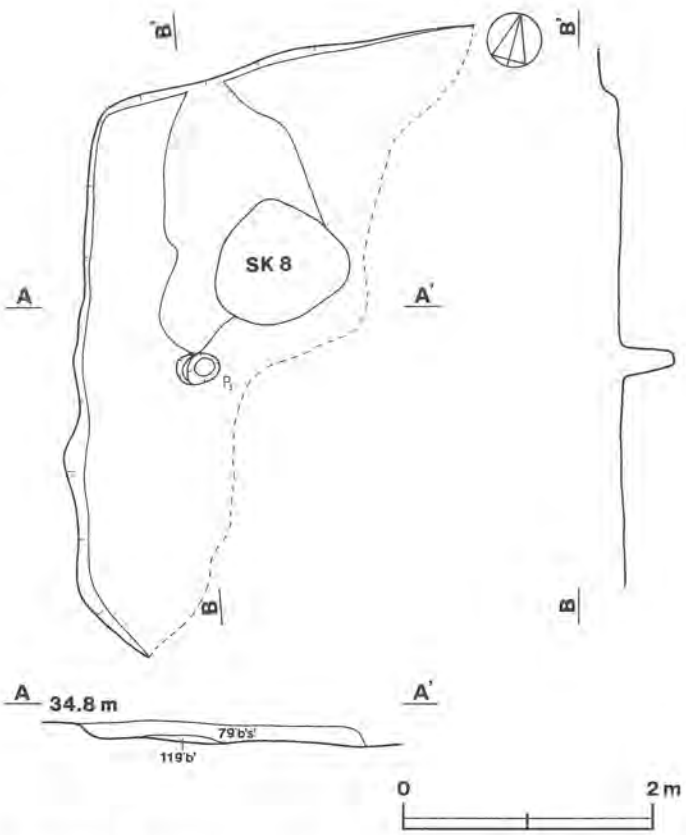
第13号住居跡（第31図）

本跡は，当遺跡の中央部G3a$_2$区を中心に確認され，第4号炉穴の東側約0.6mに位置し，第8号土坑と重複している。また，本跡は土取りによって掘削を受け，北壁及び西壁を除いてすべて破壊されている。

平面形や規模等の詳細は不明である。平面形は調査できた部分から推定すると，隅丸方形または隅丸長方形と思われる。壁はロームで硬く締まり，北壁は外傾，西壁は垂直に立ち上がっている。壁高は約14cmである。壁の残存状況は，北側で3.0m，西側で4.4mである。残存している床面はロームで踏み固められ平坦である。炉は検出されない。ピットは，西壁の中央付近に1か所検出され，柱穴と思われる。規模は径35cm，深さ42cmである。

覆土は2層から成り，自然堆積である。上層から暗褐色土，褐色土の順に堆積し，上層の上面は，ローム粒子を多量に含みやや締まっている。下層は焼土粒子を少量含んでいる。

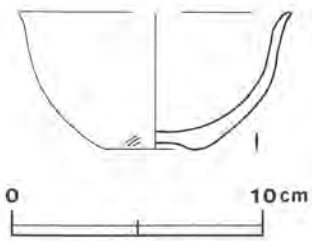
遺物は，北西壁付近の覆土下層から埦形土器（P64）が斜位の状態で出土している。そのほか，南西壁付近の床面，覆土下層から土器片10片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。



第31図　第13号住居跡実測図

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 1	埦形土器 土師器	A(10.8) B 5.5 C 4.0	体部は底部から内彎しながら立ち上がり，口縁部はやや外反する。底部は平底である。	口縁部内・外面－横位のナデ。胴部外面－ハケ目整形後ヘラナデ。	スコリア・砂粒・小礫 にぶい橙色 普通	60% P64 二次焼成 外面煤付着



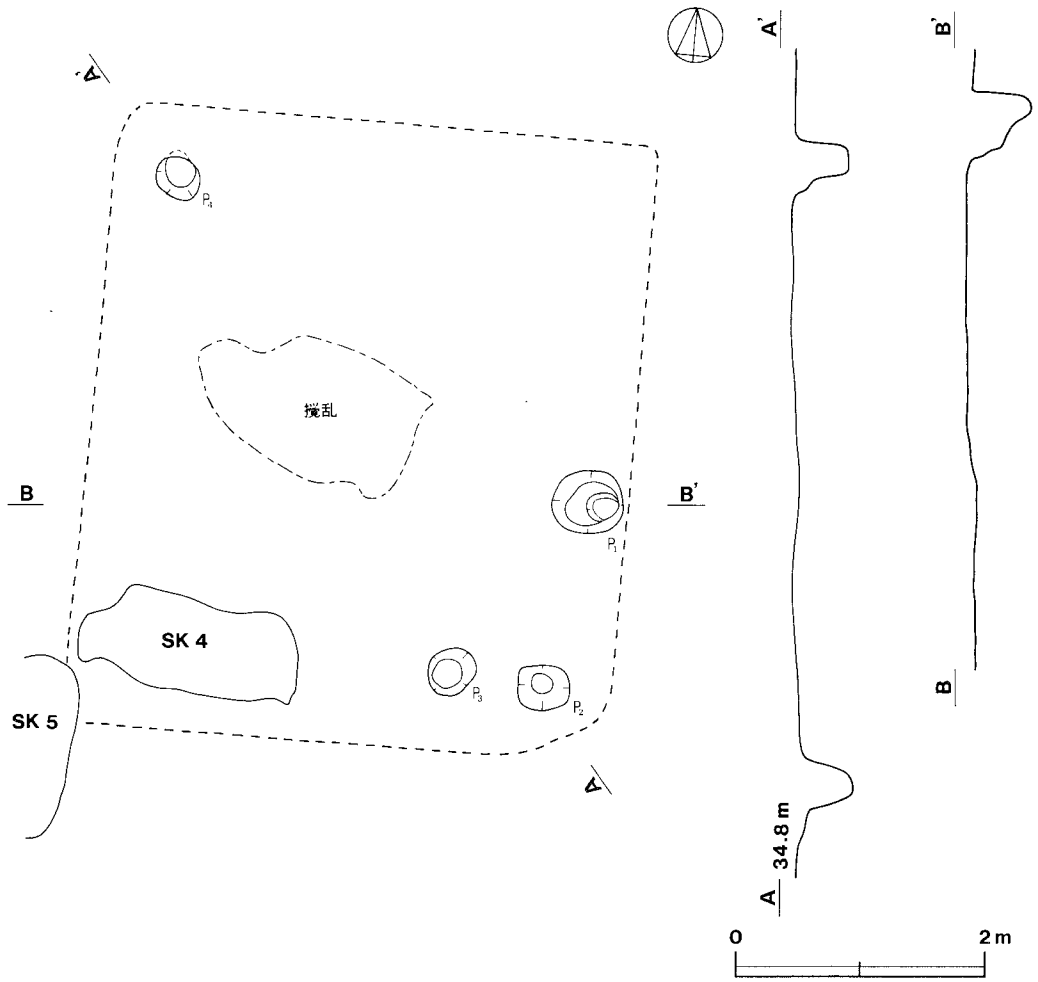
第32図　第13号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡（第33図）

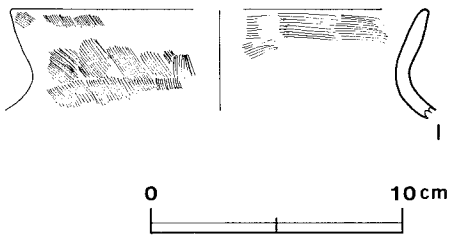
本跡は，当遺跡の中央部G3c$_1$区を中心に確認され，第13号住居跡の南西側約3m，第2号溝の東側約2.8mに位置している。本跡は第4・5号土坑と南西コーナーで重複しており，第4・5号土坑に床面を掘り込まれていることから，本跡の方が古い。また，本跡は，掘削を受け，壁と床は破壊されている。確認調査の過程で，柱穴と思われる落ち込みを検出したため，住居跡として調査を進めた。

平面形や規模については，不明である。検出された柱穴の位置から推定すると，長軸約4.6m，短軸約４mの長方形状を呈し，北に長軸方向を持つ住居跡であったものと思われる。床面は，中央部に撹乱が大きく深く入り込んでいるため，わずかに床面と思われるやや踏み固められたロームが認められたに過ぎない。炉は検出されない。ピットは４か所検出され，規模や配列等からP_2・P_4が主柱穴と思われ，主柱穴の規模は，径36～43cm，深さ40～43cmである。またP_2・P_4は対角線上に位置している。P_3はP_2の西側約36cmに位置し，支柱穴と思われる。P_1は推定プランの東側に位置し，深さ約25cmのところに段を有し，この段はピット内壁の西側に認められる。

遺物は，北壁付近の床面から甕形土器の口縁部片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。



第33図　第14号住居跡実測図



第34図　第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第34図 1	甕形土器 土師器	A(16.6) B (4.1)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し，外傾して立ち上がる。	口縁部外面－ハケ目整形後横位のナデ，内面－横位のハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	5％ P65 外面煤付着

第15号住居跡（第35図）

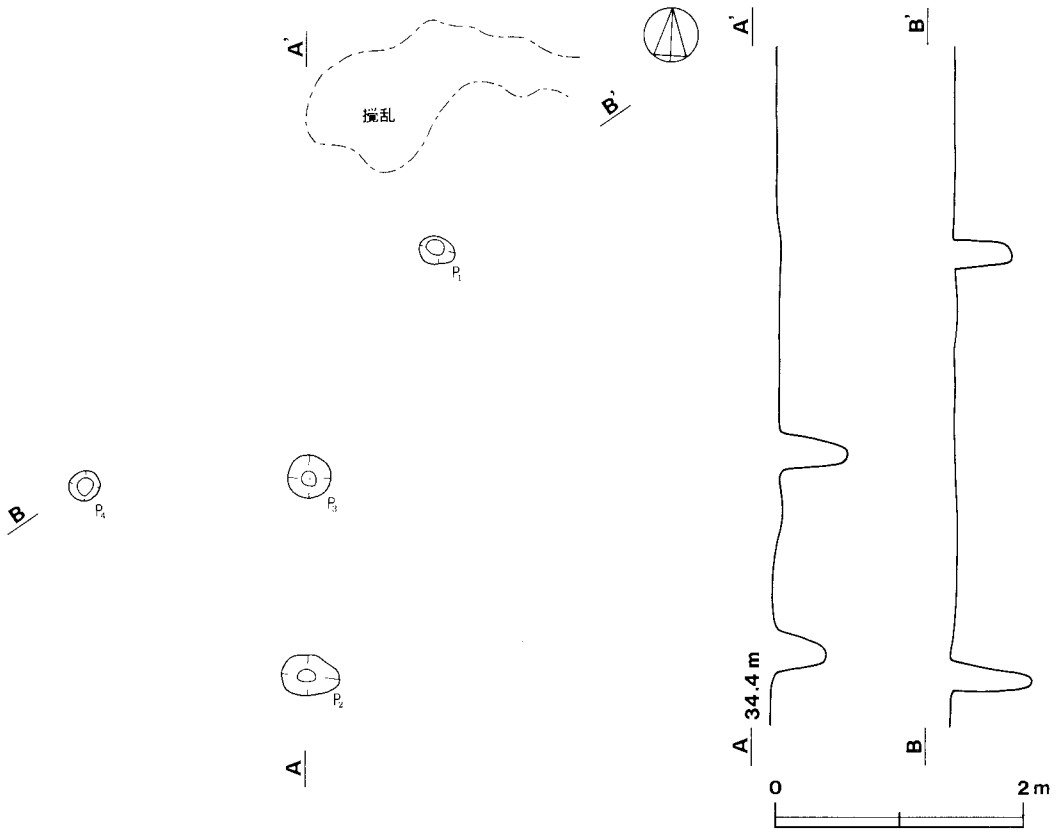
本跡は，当遺跡の中央部G3d$_6$区を中心に確認され，第18号住居跡の北東側約5mに位置している。本跡の西側は土取りにより掘削を受け，壁・床とも破壊されている。確認調査の段階で床の一部と柱穴と思われる落ち込みを確認したため，住居跡として調査を進めた。

平面形や規模については，不明である。検出された柱穴の位置等から推定すると，長軸5m，短軸4mの長方形状を呈し，N－45°－Eに長軸方向を持つ住居跡であったものと思われる。床面は，土取りによる掘削跡や木の根による撹乱が入り込み，その間にわずかに床面と思われる硬く締まったロームが検出されただけである。炉は検出できなかった。ピットは4か所推定床面上に検出され，規模や配列等からP_1・P_2・P_4が主柱穴と思われる。主柱穴の規模は径25～50cm，深さ47～65cmである。柱穴の間隔はP_1とP_4が3.2m，P_2とP_4が2mである。

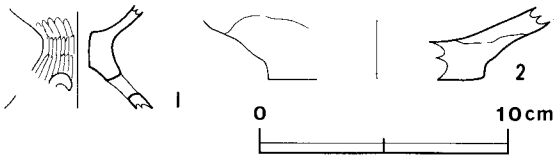
遺物は，中央からやや北に寄った床面から，器台形土器（P66）の脚部が正位の状態で出土している。そのほか，覆土中から土師器片25片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第36図 1	器台形土器 土師器	B (3.9) E (2.3)	接合部片である。器受部はやや内彎して，脚部は「ハ」の字状に開くと思われる。脚部上位に4孔，接合部に中央孔が穿たれている。	器受部内・外面－縦位のヘラ磨き。脚部外面－ヘラ磨き，内面－ヘラナデ。	スコリア・砂粒 明赤褐色 良好	30% P66
2	甕形土器 土師器	B (2.4) C (8.7)	胴部は底部から内彎気味に立ち上がる。底部は平底である。	胴部外面－ナデ。	砂粒 明褐灰色 普通	5％ P67



第35図　第15号住居跡実測図



第36図　第15号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡（第37図）

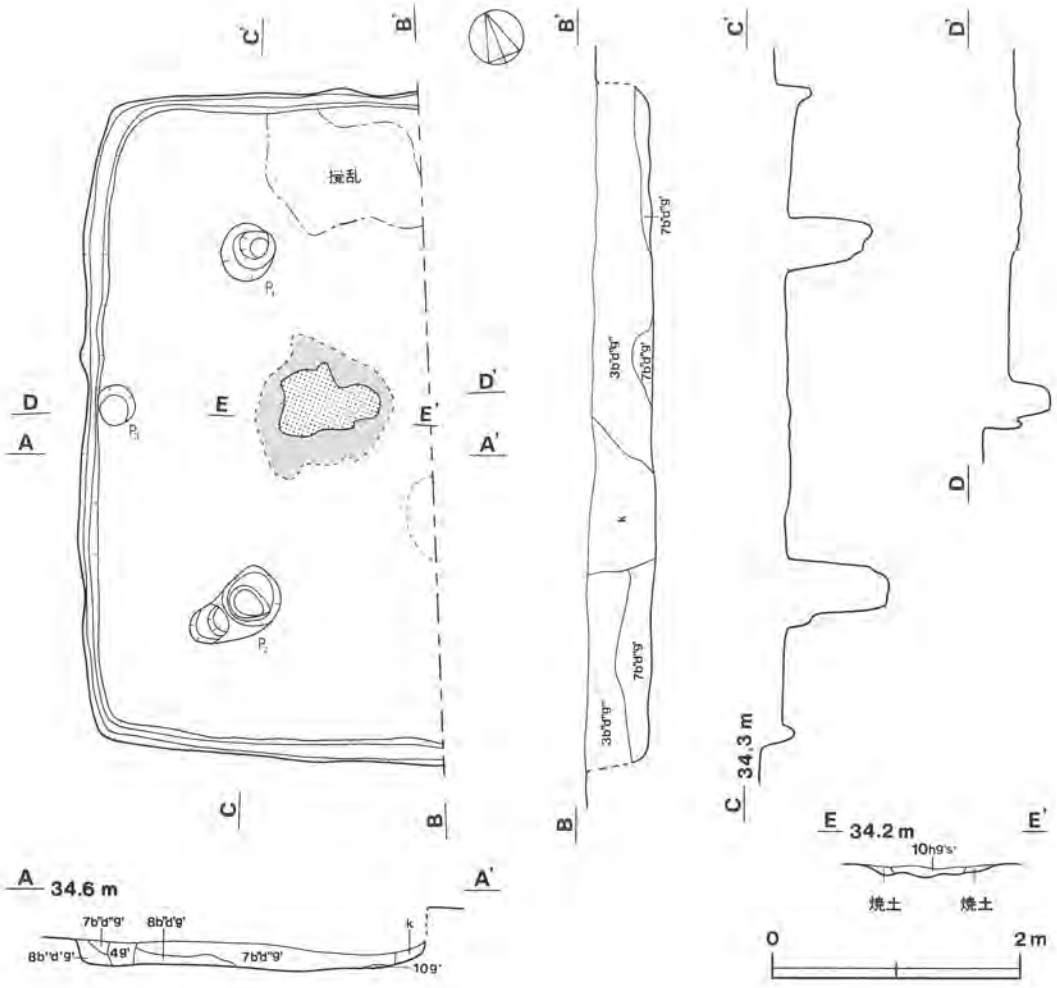
本跡は，当遺跡の中央部G3h$_6$区を中心に確認され，第18号住居跡の南東側約６mに位置している。東側は調査エリア外に延びている。

平面形や規模等の詳細は不明である。調査された部分から推定すると，平面形は隅丸方形または隅丸長方形状を呈するものと思われ，北西壁の方向はN－22°－Eである。北西壁の長さは5.33mである。残存している壁はロームで硬く締まり，各壁ともほぼ垂直に立ち上がっており，壁高は20～26cmである。床面はロームで全体的に平坦であり，壁下周辺を除いて踏み固められて硬く締

まり，特に炉の周辺は非常に締まっている。残存している西側部分には，壁溝が上幅16cm，下幅6cm，深さ5～7cmの規模で周回している。炉は，やや北西寄りに位置し，長径81cm，短径51cmの不整楕円形を呈し，床面をほぼ皿状に7cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内にはローム粒子，炭化粒子少量を含む褐色土が自然堆積し，炉床は赤変硬化しゴツゴツしている。ピットは3か所検出されたが，規模や配列からP_1・P_2が主柱穴と思われる。主柱穴の規模は径42～58cm，深さ68～83cmである。P_3は北西側の壁溝に近接しており，径33cm，深さ22cmである。性格は不明である。

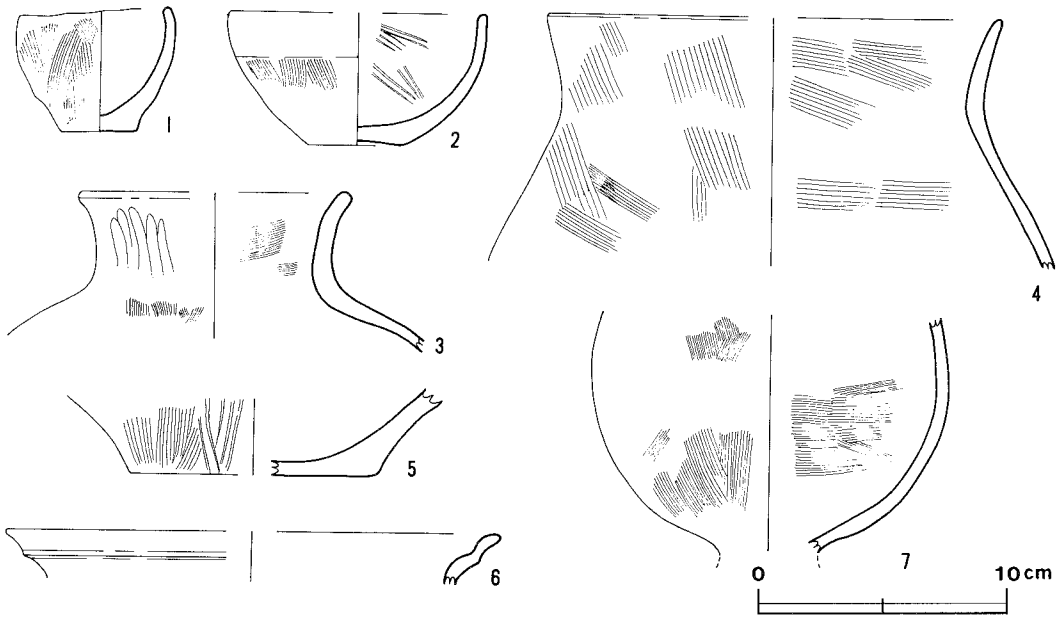
覆土は，一部床面に達する撹乱を受けているものの2層からなり，主にローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子を微量に含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，中央付近の覆土下層からほぼ完形の埦形土器（P68）が斜位の状態で，さらに小型台付



第37図　第16号住居跡実測図

甕形土器（P70）の胴部が出土している。また，南西壁付近の覆土下層から，完形の手捏土器（埦形土器）（P69)が横位の状態で出土している。そのほか，覆土中・下層から土器片が100片出土している。なお，その中にS字口縁を有する台付甕形土器（P73）の口縁部の破片が1片含まれている。それらは，すべて五領式に比定される。



第38図　第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表

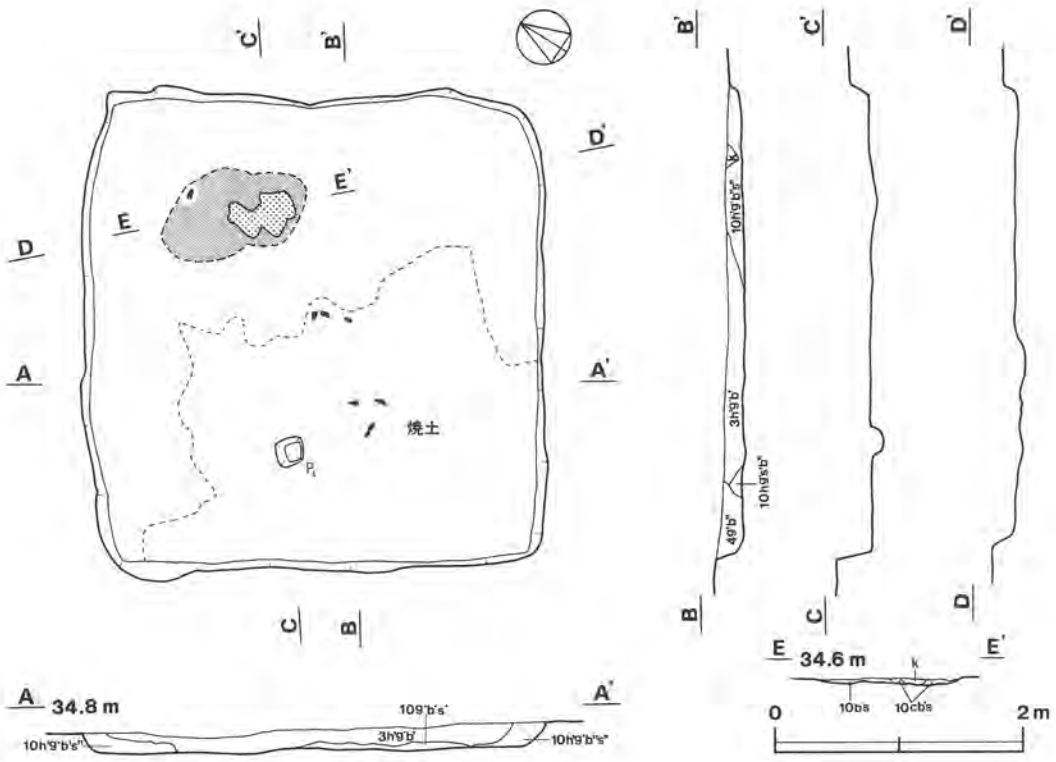
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 1	手捏土器 (埦形土器) 土師器	A 6.0 B 5.1 C 3.1	胴部は内彎気味に立ち上がっている。底部は平底である。	体部外面－縦位のハケ目整形，内面－縦位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	100% P69
2	埦形土器 土師器	A(10.2) B 5.4 C 3.9	体部は底部から内彎して立ち上がり，口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。底部は平底である。	口縁部外面－横位のナデ。胴部外面－ハケ目整形後ヘラナデ，内面－ヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	80% P68
3	壺形土器 土師器	A(10.7) B (5.9)	口縁部は，頸部から屈曲し，外反して立ち上がる。胴部は頸部から大きく開く。	口縁部外面－縦位のヘラナデ，内面－横位のハケ目整形。胴部外面－ハケ目整形後横位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 明赤褐色 普通	10% P71
4	甕形土器 土師器	A(18.2) B(10.0)	口縁部は頸部からゆるやかに屈曲し，外反しながら立ち上がる。胴部上位がやや内彎している。	外面－斜位のハケ目整形，内面－横位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	10% P72
5	甕形土器 土師器	B (3.1) C (9.9)	胴部は底部から内彎しながら立ち上がる。胴部中位に最大径を有すると思われる。	外面－縦位のハケ目整形，内面－ナデ。	スコリア・砂粒・ 石英・小礫 にぶい橙色 普通	5% P74

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第38図 6	台付甕形土器 土師器	A(19.8) B (2.0)	「S」字状を呈する口縁部片である。	内・外面－横位のナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	5％ P73
7	台付甕形土器 土師器	B (9.5)	胴部は内彎して立ち上がり，胴部中位に最大径を有する。口縁部，台部欠損。	外面－縦位のハケ目整形後ナデ，内面－横位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	30％ P70

第17号住居跡（第39図）

本跡は，当遺跡の中央部G3f$_2$区を中心に確認され，第18号住居跡の北西側約6mに位置している。

平面形は，長軸3.84m，短軸3.77mの隅丸方形で，長軸方向はN－57°－Eである。壁はロームで締まり，外傾しながら立ち上がっている。壁高は10～28cmで，北東壁から，東コーナー，南東壁にかけて削平され浅い。床面は，ほぼ平坦で硬いロームであり，炉の南西側は踏み固められて特に硬く締まっている。炉は，中央から北寄りに位置し，長径48cm，短径28cmの不定形を呈し，床面を皿状に4cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には，焼土ブロック中量，焼土粒子多量，炭化粒子中量を含む褐色土が自然堆積している。炉床はレンガ状に硬く焼けている。ピットは，中

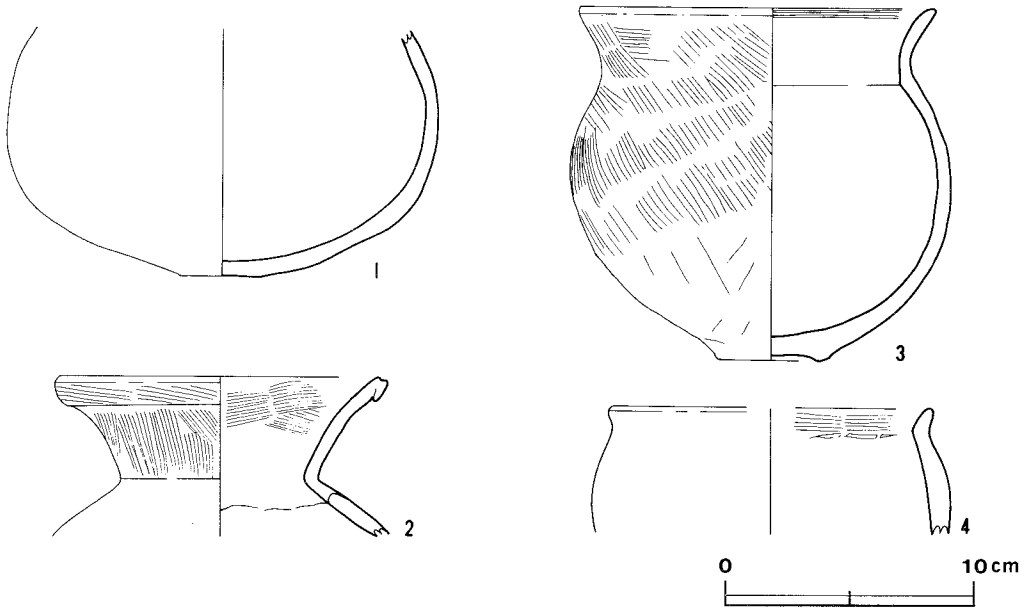


第39図　第17号住居跡実測図

央からやや南西側に寄って1か所検出された。規模は径23cm，深さ9cmであり，性格は不明である。

覆土は2層から成り，上層にはロームブロック少量，ローム粒子多量を含む黒褐色土，下層は，ローム粒子，焼土粒子多量，炭化粒子多量を含む黒褐色土が自然堆積している。中央部から南西壁にかけての床面には貼りついたように焼土粒子，炭化粒子が薄く堆積し，さらに焼土に炭化材も混入している地域が2か所あり，火災に遭ったものと思われる。

遺物は，北コーナー付近の床面から甕形土器(P76)が正位の状態で，西コーナー付近の床面直上から壺形土器(P79)の底部が斜位の状態で出土している。また，炉内から土師器片が4片出土している。そのほか覆土中・下層から土器片51片が出土しており，それらは，すべて五領式に比定される。



第40図　第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物観察表

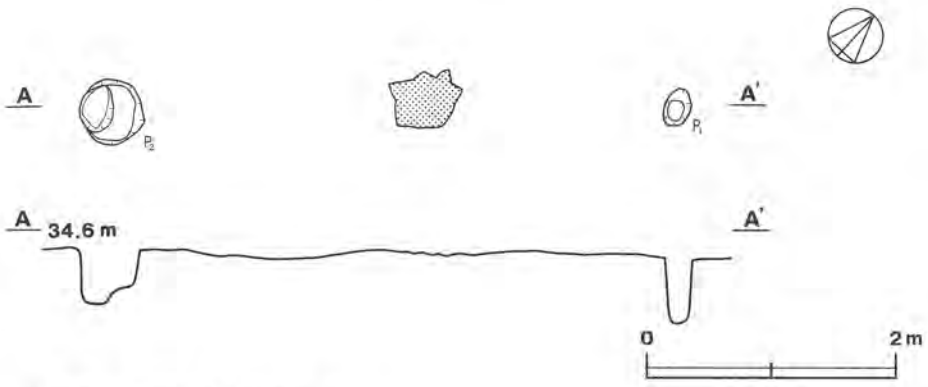
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 1	壺形土器 土師器	B(10.0) C 3.3	胴部は底部から内彎しながら立ち上がり，胴部中位に最大径を有する。底部は平底である。	内・外面ーハケ目整形後横位のナデ。	砂粒 橙色 普通	50% P79 外面煤付着

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第40図 2	壺形土器 土師器	A 12.8 B (6.3)	口縁部は複合口縁を呈し，頸部から屈曲し，外反して立ち上がっている。	口縁部外面－縦位のハケ目整形，口縁部内面－横位のハケ目整形後ヘラナデ。口唇部横位のハケ目整形。胴部外面－ハケ目整形後ヘラナデ。	スコリア・砂粒 小礫 褐色 普通	30% P77
3	甕形土器 土師器	A 14.3 B 14.3 C 4.2	口縁部は頸部から外反気味に立ち上がる。胴部は球形を呈し，胴部中位に最大径を有する。底部は平底である。	口縁部，胴部中位までの外面－ハケ目整形，以下ヘラ削り後ナデ。口縁部内面－横位のナデ。胴部内面－斜位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	100% P76 外面煤付着
4	甕形土器 土師器	A(12.8) B (5.1)	口縁部はゆるやかに外傾し，短い。胴部はほぼ球形を呈し，上位に最大径を有する。	口縁部外面－ヘラ磨き，口縁部内面－横位のハケ目整形。胴部外面－縦位のヘラ磨き，内面－ヘラナデ。	砂粒 灰褐色 普通	10% P78

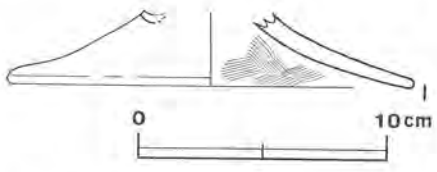
第18号住居跡（第41図）

本跡は，当遺跡の中央部G3g$_4$区を中心に確認され，第16号住居跡の北西側約６mに位置している。本跡周辺はゴミ穴と土取りによる撹乱と削平を受け，壁及び床はすでに破壊されている。確認調査の過程で，破砕された高坏の脚部が焼土と硬いロームに貼り付いた状態で出土したため，プランは不明であるが住居跡として調査を進めた。

平面形や規模については，削平されているため壁が残存しておらず，プランをとらえることができなかった。炉の南西側約70cmに長径50cm，短径45cmのほぼ円形状にロームが踏み固められたように硬く締まっており，床面と考えられる。残存している床面と考えられる地点の北東側0.7mに，北側が削平されているが長径50cm，短径45cmの不定形状に焼土が堆積しており，断面は，皿状を呈しており，深さは４cmであり，炉と考えられる。炉床と推定される部分は赤色硬化している。ピットは２か所検出され，P$_1$は炉の北東側約1.9mに位置し，主柱穴と思われる。規模は，径30cm，深さ55cmである。P$_2$の規模は径50cm，深さ46cmで，上端から30cmほどのところに段を有しているが，性格は不明である。



第41図　第18号住居跡実測図



第42図　第18号住居跡出土遺物実測図

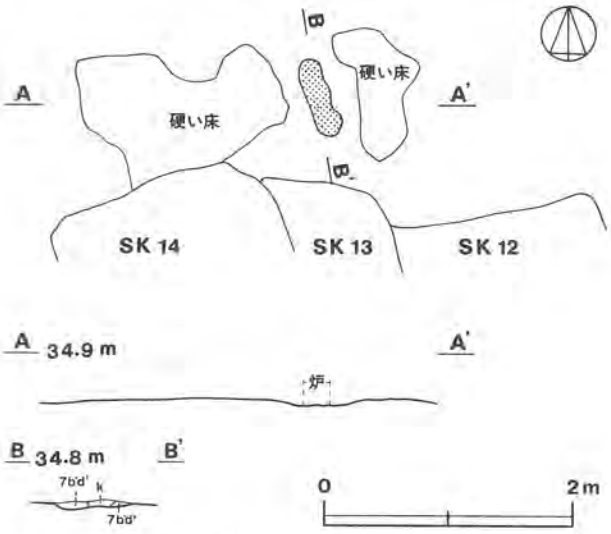
遺物は，覆土が削平されているためわずかな出土量である。また，P_2の北側の床面に貼りつくように高坏形土器（P80）の裾部が正位の状態で出土している。それらは，すべて五領式に比定される。

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第42図 1	高坏形土器 土師器	D 16.2 E (3.0)	脚部はゆるやかに開きながら裾部に至る。脚部上位に3孔を有する。	脚部外面－縦位のヘラ磨き，内面－上位ヘラナデ，中位から下位にかけてハケ目整形。	スコリア・砂粒 橙色 普通	30% P80 内面下位に煤付着

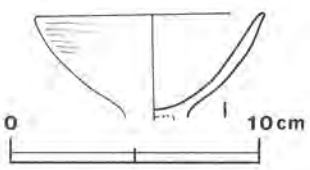
第20号住居跡（第43図）

本跡は，当遺跡の中央部H3a$_1$区を中心に確認され，第19号住居跡の南西約2mに位置している。本跡は南と北に位置する第12・13・14・15号土坑に掘り込まれている。また，本跡は耕作による攪乱を受け壁はなく，床の大部分は破壊されている。確認調査の過程で床の一部と炉を確認したため，住居跡として調査を進めた。



第43図　第20号住居跡実測図

平面形や規模については不明である。床面はロームで，ほぼ平坦であったと思われる。特に硬く締まった部分は，炉を挟むように東側に0.4×1m，西側に1×1.3mの範囲に不定形に認められる。炉は，長径68cm，短径20cmの南北に細長い楕円形を呈し，床面をわずかに掘り込んだ地床炉である。炉内には，焼土粒子多量，炭化粒子少量を含む暗褐色土が自然堆積し，炉床は赤変硬化している。



第44図　第20号住居跡出土遺物実測図

遺物は，覆土は削平されていたが土師器片31片が出土している。また，炉の北側の床面から高坏形土器（P81）の坏部が倒立の状態で出土している。それらは，すべて五領式に比定される。

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第44図 1	高坏形土器 土師器	A 9.2 B (4.1)	坏部は坏底部から内彎しながら立ち上がり，口縁部に至る。端部は丸味をおびている。脚部欠損。	内・外面－横位のナデ。	パミス・スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	50% P81

第21号住居跡（第12図）

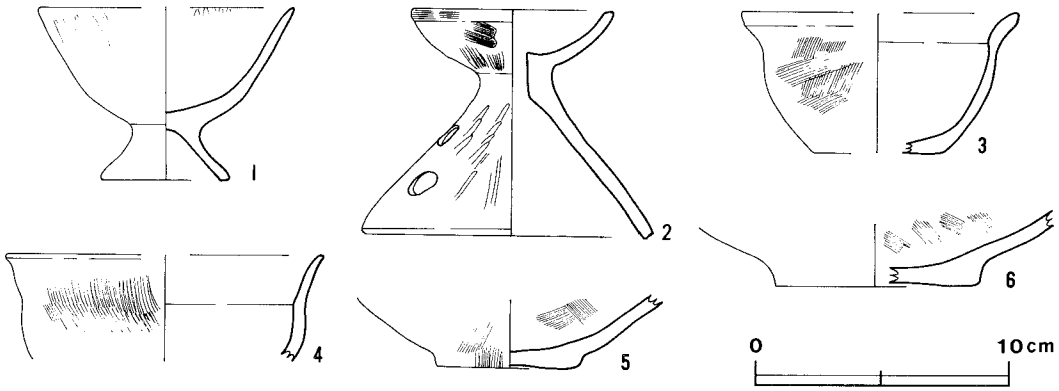
本跡は，当遺跡の中央部G2a_5区を中心に確認され，第4号住居跡の北側約2mに位置し，第3号住居跡と重複し，3号住居跡を4分の3ほどを掘り込んでいる。確認された経緯については，第3号住居跡の項で前述したとおりである。

平面形は，長軸7.10m，短軸6.60mの隅丸方形で，長軸方向はN－73°－Eである。南壁は第3号住居跡の南壁と一致しており，比較的遺存が良いが，東壁と北壁の東側半分は撹乱のため破壊され，西壁と北壁の大半は第3号住居跡を調査中に覆土の一部として掘り込んでしまったため，明瞭な壁は検出されなかった。壁はロームで締まっており，壁高は18cmである。壁柱穴は掘削された北壁の東半分と南東コーナー付近を除いて間隔は不統一であるが検出された。なお，壁柱穴のうち南壁にあるものを除いて壁がないことから，壁柱穴の下部のみが残存したものと思われる。下部の規模は径20～28cm，深さ12～28cmである。北東コーナー付近から内側にかけてゴミ穴として掘り込まれているため，床面の3分の1は破壊されている。残存する部分はロームを5～8cmほど掘り込み，ロームにロームブロックと黒色土少量を加えた混合土を敷いた3～5cmの貼り床であり，ほぼ平坦で踏み固められて硬く締まっている。炉の北側部分は撹乱で破壊されているが，炉は中央部からやや東側に位置し，長軸24cm，短軸20cmの長方形状に残存し，床面を利用した掘り込みの無い地床炉である。炉床は赤変硬化している。ピットは4か所検出され，規模と配列から主柱穴はP_1～P_4であると思われる。P_1は撹乱坑の覆土を取り除いた後に検出されたもので，主柱穴の底部付近が残っていたものである。その規模は径28cm，深さ5cmである。他の主柱穴P_2～P_4の規模は径67～88cm，深さ43～48cmである。いずれも各コーナーのやや内側に配列されている。貯蔵穴は南東コーナー部付近の南壁下に位置し，開口部は長径90cm，短径68cmの楕円形を呈し，深さは64cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面はほぼ平坦である。覆土は上層に暗褐色土，下層に黒褐色土で自然堆積の状態を示している。

覆土は暗褐色土を主体とする土層で自然堆積を示しているが，土層の上面は撹乱を受けており，特に北東側はゴミ穴のため撹乱が激しい。覆土は上層から焼土粒子，炭化粒子多量を含む黒褐色

土，下層には撹乱坑を除いて，焼土域が床面全域に検出されている。また，炭化材が焼土に混って多数検出されている。炭化材は大きいもので長さ30cm，幅20cmほどあり，床面の中央部を向いているものも認められた。土層の状況，炭化材の出土状況から，本跡は火災に遭ったものと思われる。

遺物は，貯蔵穴の東側の床面から，半完形の埦形土器（P12）が横位の状態で，完形の器台形土器（P15）が斜位の状態で出土している。また，貯蔵穴の底面から高坏形土器（P14）の破片が出土している。ほかに，覆土中から土師器片363片が出土している，それらは，すべて五領式に比定される。



第45図　第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表

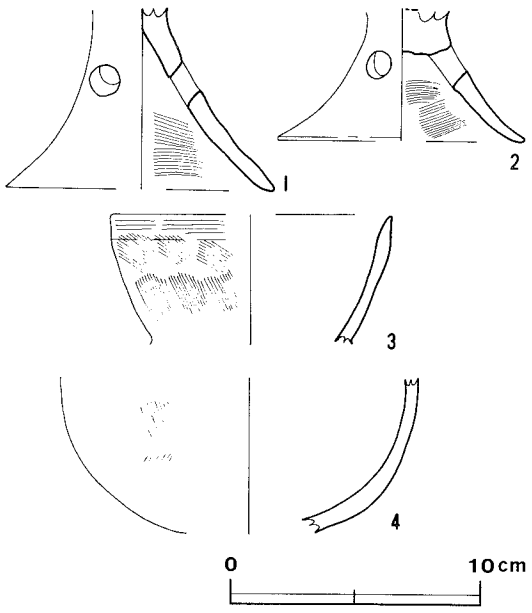
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	高坏形土器 土師器	A(10.3) B 7.0 D 5.2 E 2.3	坏部は下位からゆるやかに内彎し，中位から外傾気味に立ち上がる。脚部は短く「ハ」の字状に開く。	内・外面－縦位のナデ。	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	60% P14
2	器台形土器 土師器	A 8.0 B 9.2 D 11.6 E 6.5	器受部は接合部から内彎して立ち上がり，先端部は平坦である。脚部は「ハ」の字状に開き，裾部でやや内彎する。脚部上位に3孔，下位に3孔，器受部中央に1孔がある。	器受部・脚部外面－斜位のハケ目整形後ヘラ磨き。器受部内面－ヘラ磨き。脚部内面－横位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 橙色 普通	90% P15 外面煤付着
3	埦形土器 土師器	A(10.9) B 5.7 C (5.0)	口縁部は頸部から外反気味に開いて立ち上がる。胴部は平底の底部から内彎しながら立ち上がる。	外面－斜位のハケ目整形後口縁部横位のヘラナデ，内面－横位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	40% P12
4	埦形土器 土師器	A(12.6) B (4.2)	口縁部は頸部から外傾して立ち上がり，端部でやや外反して開く。	口縁部・胴部外面－ハケ目整形後横位のナデ，口縁部内面－横位のナデ。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	10% P13

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第45図 5	甕形土器 土師器	B (2.8) C 5.9	胴部は底部からゆるやかに内彎して立ち上がる。底部は平底であるが，中央がくぼんでいる。	胴部内・外面ーハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	10% P16 内面煤付着
6	甕形土器 土師器	B (2.5) C (8.0)	胴部は底部からゆるやかに内彎して立ち上がる。底部は平底である。	胴部外面ーヘラナデ，内面ーハケ目整形。	スコリア・砂粒 灰褐色 普通	10% P17

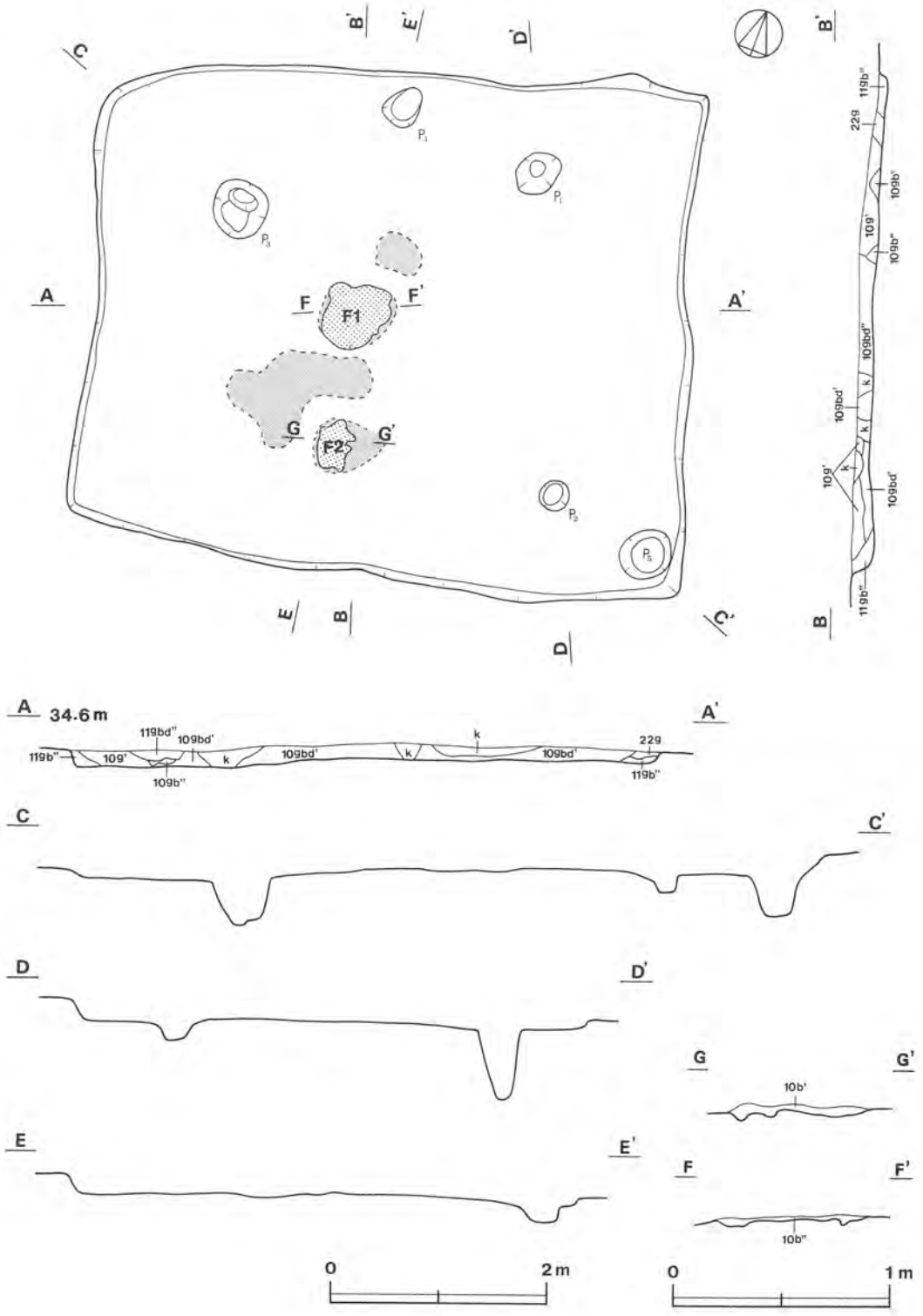
第24号住居跡（第47図）

本跡は，当遺跡の中央部F2c$_7$区を中心に確認され，第25号住居跡の北西約２m，第29号住居跡の南西約2.2mに位置している。

平面形は，長軸5.43m，短軸4.74mのやや南西側が幅の狭くなる長方形で，長軸方向はN－66°－Eである。北西コーナーは丸味を帯びている。壁はロームで締まっており，全壁ともほぼ外傾して立ち上がっている。壁高は約20cmであるが，北壁，東壁側では５～８cmと浅い。これは本跡の北側が，耕作による削平と小支谷が入り込み，遺構確認面が北西に向かって傾斜しているためと思われる。床面はロームで全体的に凹凸状を呈し，中央部は壁際にくらべ踏み固められ特に硬く締まっている。炉は中央（F1）と中央から南側（F2）の２か所に検出され，北側のF1は長径65cm，短径58cmの不整楕円形を呈し，南側のF2は長径45cm，短径30cmの楕円形状を呈し，床面をそれぞれ５cm，４cm掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子少量を含む褐色土が自然堆積し，炉床は双方ともレンガ状に硬く焼けている。また，F1・F2は切り合いもないため新旧関係は不明である。ピットは５か所検出され，規模や配列からP$_1$～P$_3$が主柱穴と思われる。P$_1$は径41cm，深さ67cm，P$_2$は小規模で径26cm，深さ17cm，P$_3$は径50cm，深さ46cmである。この３か所が北・東・西の各コーナー付近に位置していることから，南コーナーにもピットが存在する可能性があると考えたが，確認することはできなかった。P$_4$は北西壁際の中央付近に位置し，規模は径40cm，深さ23cmで，出入口に伴うものかどうかは断定することができなかった。貯蔵穴P$_5$は東コーナー部壁下に位置し，平面形は47cmの円形を呈し，深さは35cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，



第46図　第24号住居跡出土遺物実測図



第47図　第24号住居跡実測図

底面は平坦である。

覆土は耕作による撹乱を受けているが，15～20cmの厚さで自然堆積し，3層から成っている。上層はローム粒子中量，焼土粒子，炭化粒子を含んでいる。特に床面の中央付近の覆土下層には焼土粒子や炭化材を多量に含んでいることから，本跡は火災に遭ったものと思われる。

遺物は，南西壁付近の床面直上から壺形土器（P86）の胴部が破片で出土し，中央からやや南東側の覆土下層から高坏形土器（P87）の脚部が倒立の状態で出土している。また，北コーナー付近の覆土下層から甕形土器の胴部片が出土し，そのほか，覆土中から土師器片259片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。

第24号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第46図 1	高坏形土器 土師器	D(10.9) E 7.3	脚部は「ハ」の字状に開き，脚部上位に径1.3cmほどの孔が3か所に穿たれている。	脚部外面－縦位のヘラ磨き，脚部内面－横位のハケ目整形。	砂粒・小礫 浅黄橙色 普通	50% P87
2	高坏形土器 土師器	D (9.9) E 5.3	脚部は「ハ」の字状に開いて裾部に至る。脚部上位に3孔が穿たれている。	脚部外面－ハケ目整形後縦位のヘラ磨き，脚部内面－横位のハケ目整形	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	40% P88
3	坩形土器 土師器	A(11.3) B (5.3)	口縁部は頸部から外上方へ立ち上がる。先端部はほぼ直立する。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後先端部ヘラナデ，口縁部内面－ヘラナデ。	スコリア・砂粒 にぶい赤褐色 普通	10% P89
4	壺形土器 土師器	B (6.4)	胴部は球形を呈し，胴部中位に最大径を有する。底部は欠損している。	外面－ハケ目整形後ナデ，内面－斜位のナデ。	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	40% P86

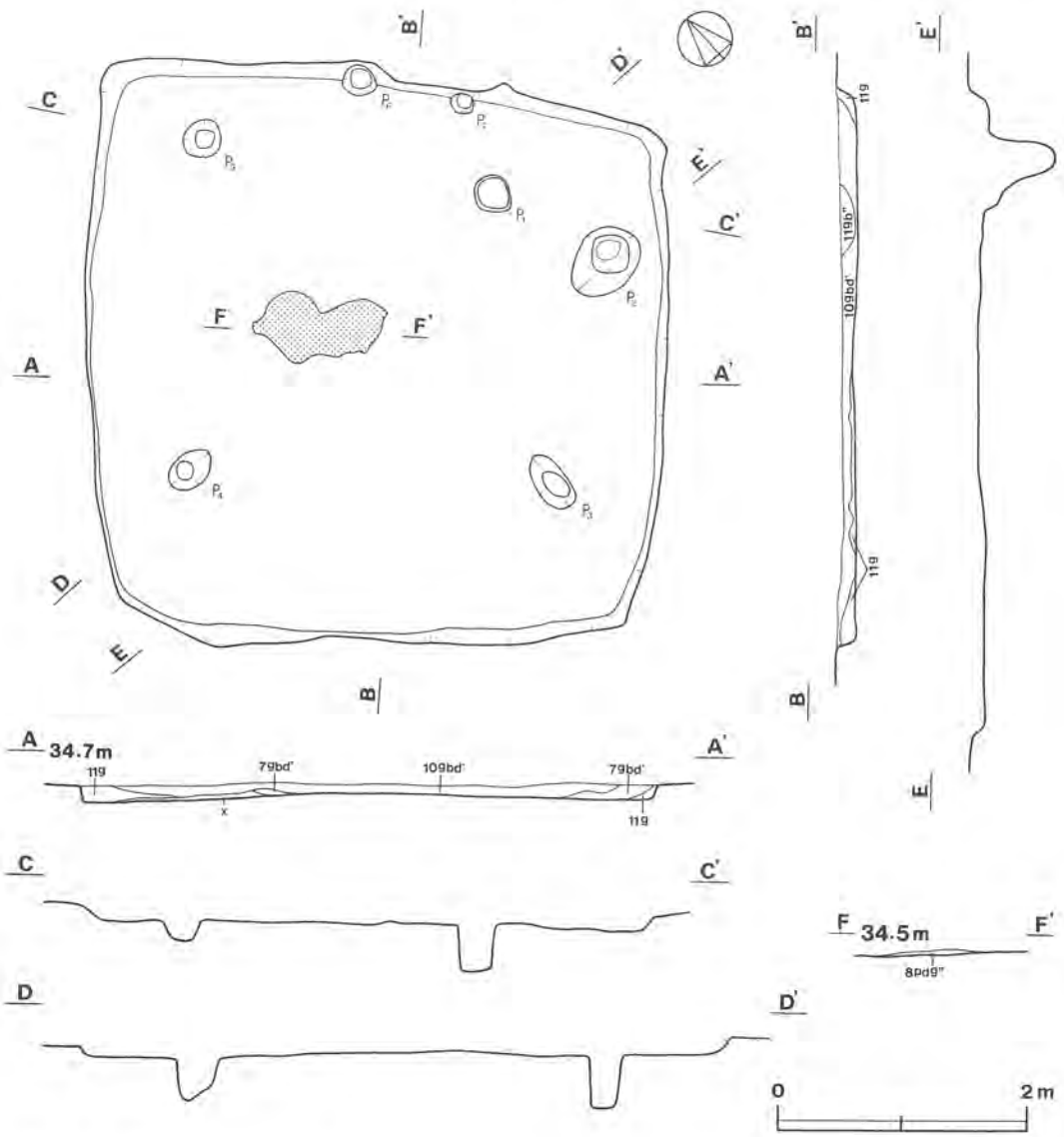
第25号住居跡（第48図）

本跡は，当遺跡の中央部F2e$_8$区を中心に確認され，調査エリアを東西に横切っている道路近くに存在している。第24号住居跡の南東側約2m，第27号住居跡の北西側約4mに位置している。

平面形は，長軸4.62m，短軸4.46mの隅丸方形で，長軸方向はN－48°－Eである。壁はロームで締まっており，北西壁中央部と南西壁中央部はほぼ垂直，その他の壁はほぼ外傾して立ち上がり壁高は6～14cmと浅い。これは耕作による削平と南から北へ傾斜する台地縁辺部に位置しているためと思われる。床面はロームで中央部は壁際よりわずかに高く，緩やかな凹凸状を呈し，炉周辺は特に踏み固められて硬く締まっている。炉は中央からやや北西側に検出され，長径105cm，短径43cmの東側に大きく張り出す不整楕円形状を呈している。床面をわずかに掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子，炭化粒子を含む暗褐色土が自然堆積し，炉床は硬く焼土化している。ピットは7か所検出され，規模や配列からP_1・P_3～P_5が主柱穴と思われる。主柱穴は各コーナー部のやや内側に配列され，規模は径28～48cm，深さ16～40cmである。比較的小規模な柱穴である。P_2は南東壁際の東コーナー部近くに位置する貯蔵穴である。開口部は長軸60cm，短軸48cm，

深さ55cmの楕円形を呈し，内壁の西側に深さ約18cmほどのところに段を有し，他の壁はほぼ垂直に掘り込まれ，底面は埦状を呈している。P_6・P_7は北東壁の下に位置し，間隔は0.6mである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，底面は埦状を呈している。規模は径12～18cm，深さ26～29cmである。P_6・P_7の性格について，入口の施設に伴うものと考えることも可能であるが，断定はできなかった。

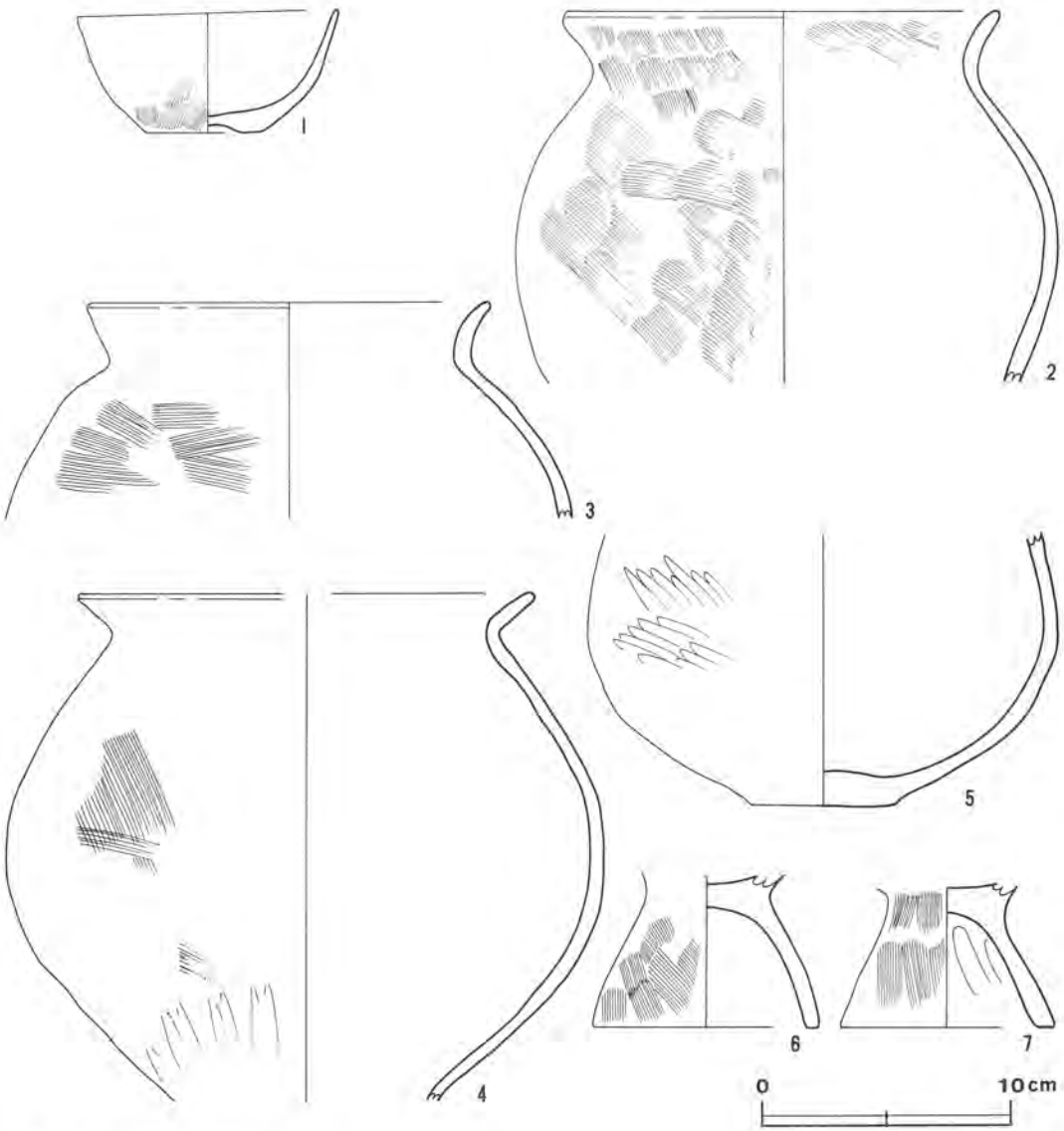
覆土は3層から成り，上層はローム粒子中量，焼土粒子微量を含む褐色土，下層はローム粒子中量，焼土粒子微量を含む褐色土が堆積し，壁際はローム粒子中量，焼土粒子，炭化粒子少量を



第48図　第25号住居跡実測図

含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，炉の北側の床面や床面直上から半完形の甕形土器（P90・P91）がつぶれた状態でまとまって出土している。また，炉付近の床面から甕形土器（P92）の口縁部がつぶれた状態で，炉の30cm南側の覆土下層から台付甕形土器（P98）の台部が横位の状態で出土している。さらに，北西壁付近の覆土下層から甕形土器（P94）の底部が正位の状態で出土している。そのほか，覆土中から土師器片352片が出土している。なお，その中にほぼ完形の埦形土器（P95）が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。



第49図　第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表

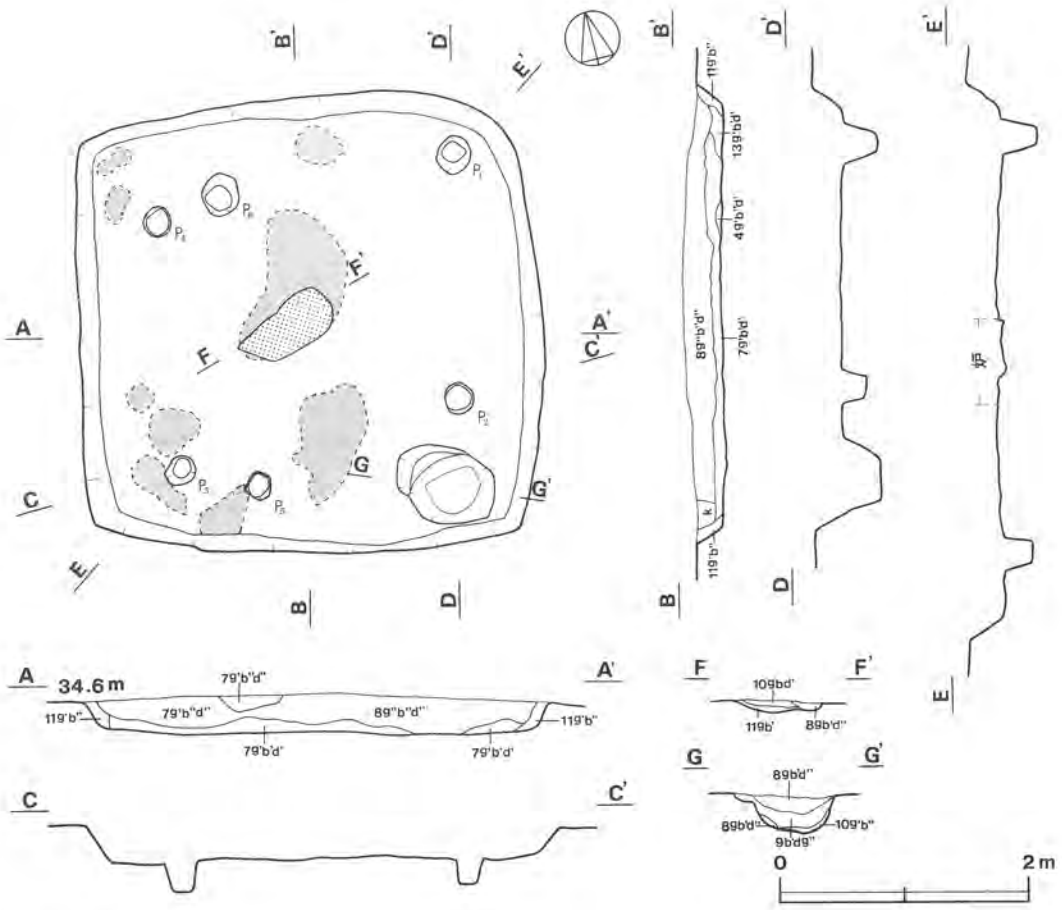
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 1	埦形土器 土師器	A 10.4 B 4.9 C 4.5	体部は底部から内彎しながら立ち上がり，口縁部でやや外傾し，端部に最大径を有する。底部は平底で，中央がやや凹む。	口縁部外面－ハケ目整形後横位のナデ。体部外面－ハケ目整形。口縁部・体部内面－横位のナデ。	砂粒・小礫 灰褐色 普通	80% P95
2	甕形土器 土師器	A 17.4 B(15.1)	口縁部は頸部からゆるく外反して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈する。	口縁部内・外面－斜位のハケ目整形。胴部外面－斜位のハケ目整形，内面－ナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	40% P90
3	甕形土器 土師器	A 16.1 B (8.7)	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。胴部は球形を呈するものと思われる。	口縁部内・外面－横位のハケ目整形後横位のナデ。胴部内・外面－横位のハケ目整形。	砂粒・小礫 にぶい橙色 普通	30% P92 外面煤付着
4	甕形土器 土師器	A(18.3) B(20.5)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がる。胴部中位に最大径を有する。	口縁部内・外面－横位のナデ。胴部外面－ハケ目整形後斜位・縦位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	20% P91 外面煤付着
5	甕形土器 土師器	B(11.0) C 5.9	胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部中位に最大径を有する。	胴部内・外面－斜位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	30% P94 外面煤付着
6	台付甕形土器 土師器	B (6.2) D 9.1 E 4.9	台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	外面－ハケ目整形，内面－ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% P97
7	台付甕形土器 土師器	B (5.7) D 8.6 E 4.7	台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	外面－斜位のハケ目整形，内面－指頭による縦位のナデ。	スコリア・砂粒 明褐色 普通	20% P98

第26号住居跡（第50図）

本跡は，当遺跡の中央部F3d$_1$区を中心に確認され，第27号住居跡の北東約３m，第41号住居跡の南東約2.2mに位置している。

平面形は，長軸3.74m，短軸3.68mの隅丸方形で，長軸方向はN－81°－Wである。壁はロームで硬く締まっており，外傾して立ち上がっている。壁高は20～30cmである。床面はほぼ平坦で全体的に硬いロームである。主柱穴に囲まれた内側は，踏み固められて硬く，特に炉周辺は硬く締まっている。炉は中央に検出され，長径70cm，短径36cmの楕円形を呈し，床面を皿状に８cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子，炭化粒子少量を含む暗褐色土が自然堆積し，炉床はレンガ状に硬く焼けゴツゴツしている。ピットは６か所検出され，規模や配列からP$_1$～P$_4$，またはP$_1$・P$_2$・P$_5$・P$_6$が主柱穴と思われる。規模は径22～28cm，深さ20～30cmである。P$_5$はP$_3$の南東側約42cm，P$_6$はP$_4$の北東側約30cmに位置し，いずれかが補助的な役割をしていた柱穴であったものと思われる。貯蔵穴は南東コーナー付近に位置し，開口部は長径85cm，短径80cm，深さ33cmの楕円形を呈し，壁は外傾して立ち上がっており，底面は平坦である。貯蔵穴の覆土は，自然堆積を示す３層からなり，上層は暗褐色土で締まっており，中層は暗赤褐色土で焼土粒子を多量に含んでいる。また，下層は硬く締まっている暗褐色土で焼土粒子，炭化粒子微量を含んでいる。

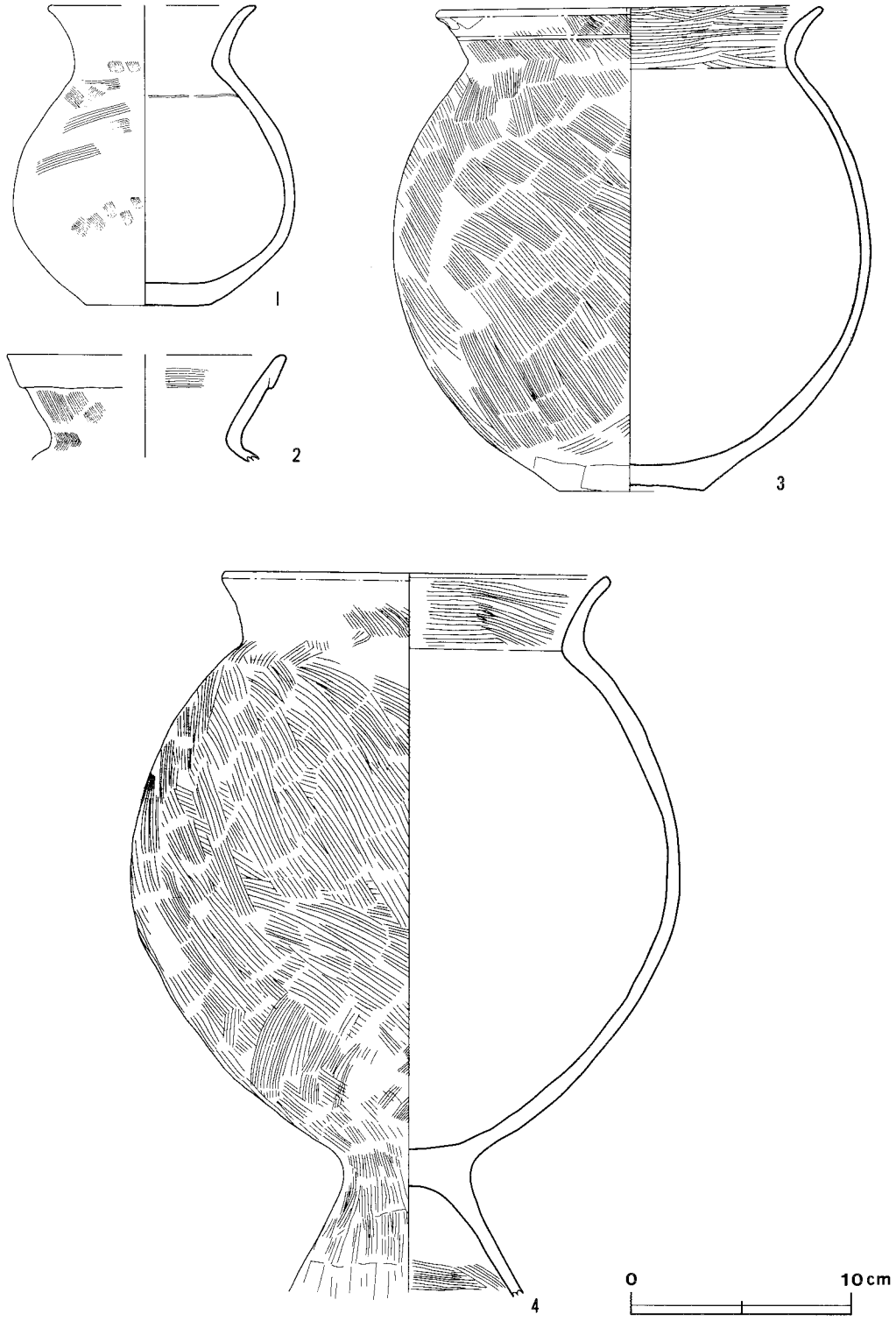
覆土は３層から成り，１・２層が暗褐色土，３層が赤褐色土で，焼土粒子，炭化粒子微量を含んでいる。床面の中央から西側部に炭化材の混入した焼土域が８か所検出された。焼土，炭化材



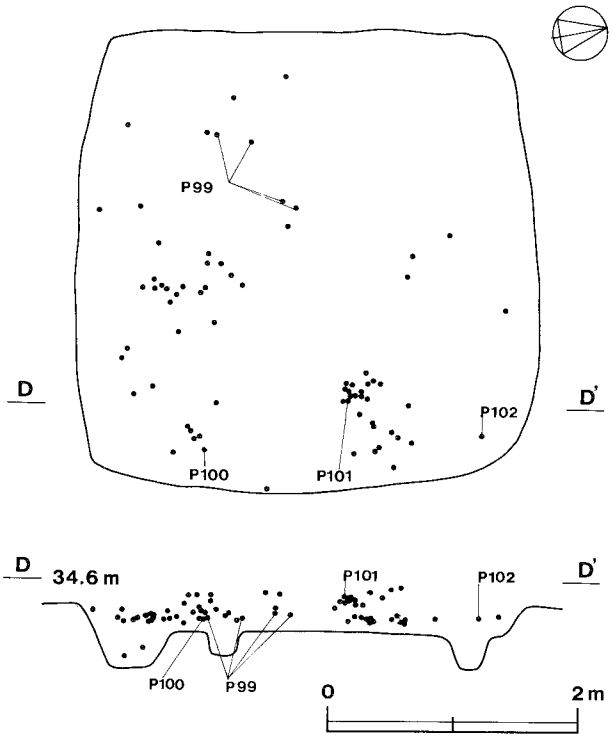
第50図　第26号住居跡実測図

第26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第51図 1	壺形土器 土師器	A (9.4) B 13.8 C 5.6	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。胴部は底部から内彎し，中位のやや下側に最大径を有する。底部は平底である。	口縁部外面－横位のナデ。胴部外面－横位のハケ目整形後ナデ。	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	90% P101
2	壺形土器 土師器	A(12.8) B (4.7)	口縁部は複合口縁で，頸部より外反して立ち上がる。	口縁部外面上位＝横位のナデ，下位－ハケ目整形，口縁部内面－横位のナデ。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	5% P102
3	甕形土器 土師器	A 17.5 B 22.3 C 6.5	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。底部は平底である。	口縁部外面－斜位のハケ目整形，内面－横位のハケ目整形。胴部内面－ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	95% P100 外面煤付着
4	台付甕形土器 土師器	A 17.7 B(32.6) E (4.9)	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。台部は「ハ」の字状を呈して開く。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後ヘラナデ，内面－横位のハケ目整形。胴部・台部外面－斜位のハケ目整形，胴部内面－ヘラナデ。	砂粒＊小礫 橙色 普通	95% P99 二次焼成



第51図　第26号住居跡出土遺物実測図



の出土状況から，本跡は火災に遭ったものと思われる。

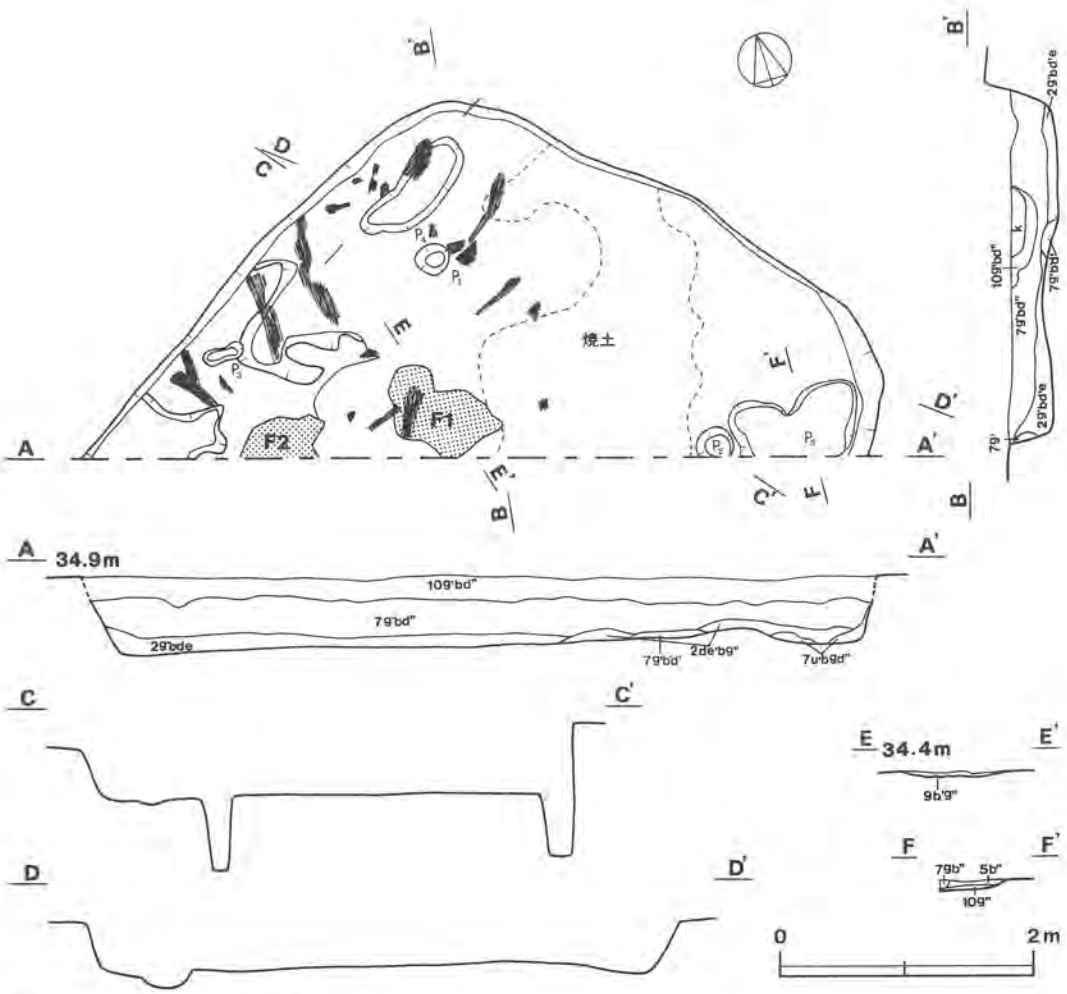
遺物は，炉の南西側の床面から，完形の台付甕形土器（P99）が横位の状態で出土している。また，中央のやや東側の覆土下層から完形の壺形土器（P101）が正位の状態で，東壁際の床面から甕形土器（P100）が斜位の状態で出土している。そのほか，貯蔵穴の覆土中・上層から，土師器片287片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。

第52図　第26号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

第27号住居跡（第53図）

本跡は，当遺跡の中央部F2f$_0$区を中心に確認され，第26号住居跡の北東約３mに位置している。本跡の南側部分は遺跡を東西に横切る市道下に延びており調査できなかった。

平面形や規模等は，調査された部分から推定すると，平面形は隅丸長方形または隅丸方形を呈するものと思われ，北東壁の方向はN－45°－Wである。規模は北東壁の長さが4.70mである。壁は南西壁，南東壁を除いてロームで硬く締まり，外傾して立ち上がっており，壁高は30～42cmである。床面はロームで，柱穴を結んだ線の南西側は踏み固められて硬く締まり，全体に凹凸が見られる。さらに，踏み固められて硬く締まったロームが北西壁直下から中央部の炉にかけて不定形に盛り上がっている。壁直下と盛り上がった最も高い部分との地高差は約８cmである。炉は調査した部分の中央からやや北西寄り（F1）と，さらに西側約50cm寄りのところ（F2）と２か所検出され，F1は長径90cm，短径55cmの不整楕円形を呈し，床面を皿状に約10cm掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子，炭化粒子多量を含む暗褐色土が自然堆積し，炉床は赤変硬化しブロック状にゴツゴツしている。西側のF2は半分以上が市道下にかかっていると思われ，平面形，規模は不明である。また，２つの炉の新旧関係は切り合っていないため不明である。床面への掘り込



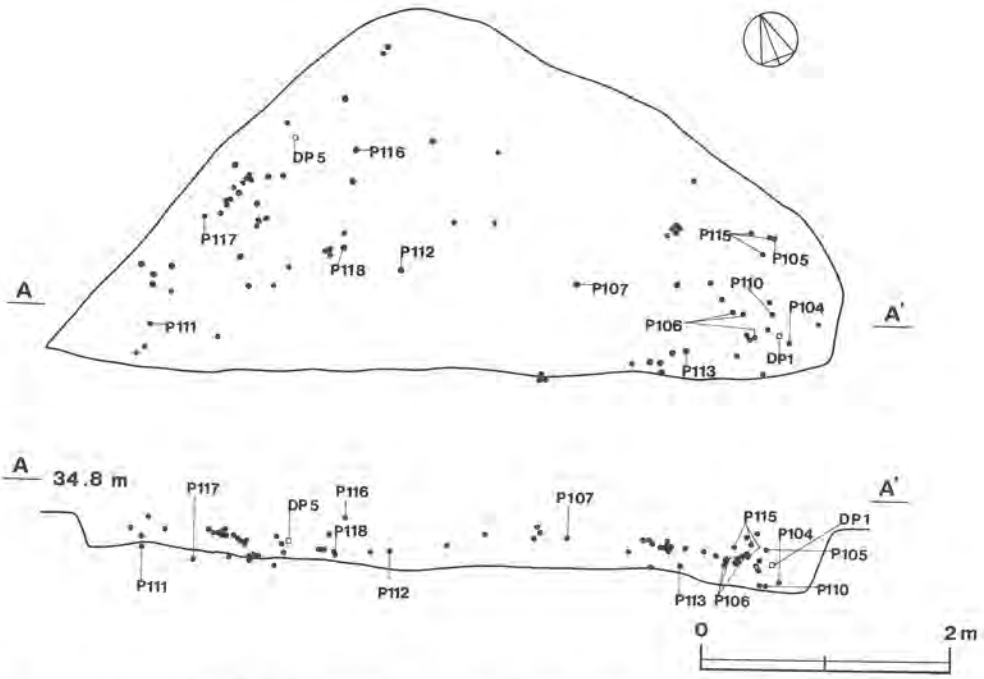
第53図　第27号住居跡実測図

みはなく，炉床と思われる部分は平坦で，赤変硬化し長く熱を受け続けたことがわかる。ピットは5か所検出され，規模と配列からP_1・P_2は主柱穴と思われる。主柱穴は北と東コーナー部から約1m内側に配列され，規模はP_1が径27cm，深さ61cm，P_2が径30cm，深さ47cmである。P_4は北コーナー部に位置し，長径100cm，短径38cmの不整楕円形を呈し，深さ10cmである。壁はほぼ外傾して立ち上がり，底面は平坦であるが北西壁がやや低い。また，P_3は北西壁近くに位置し，径30cm，深さ10.5cmと掘り込みも浅いことからP_5と同様，貯蔵穴とも考えられるが明確にはできなかった。P_5は貯蔵穴と考えられ，東コーナー部に位置し，南側部分は市道下にかかり，平面形・規模は不明である。調査できた壁は，北西側と北東側に張り出して，ほぼ垂直に立ち上がっている。深さは12cmと浅く，底面はやや丸味を帯びている。

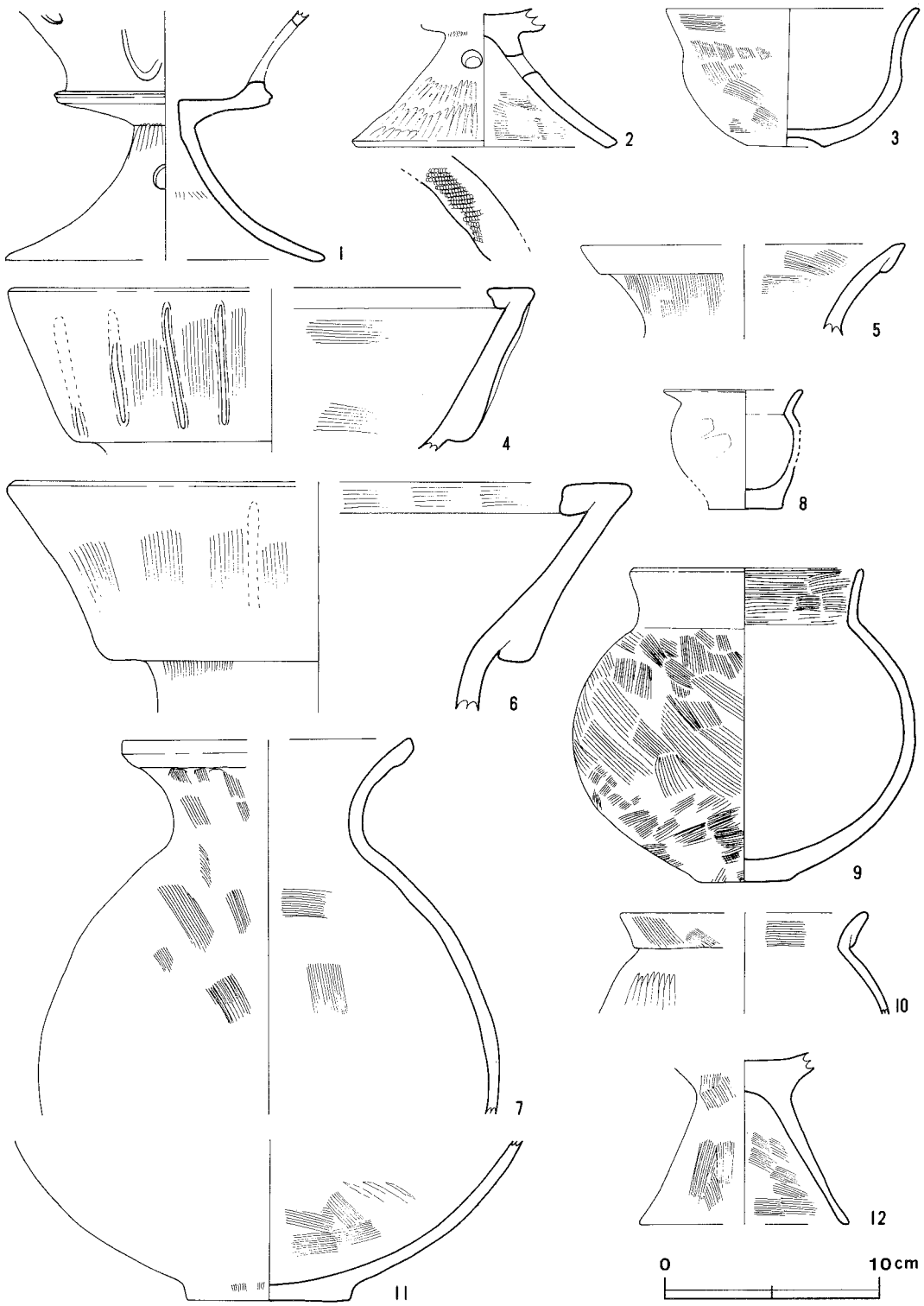
覆土は2層から成り，上層にはローム粒子，焼土粒子，炭化粒子少量を含む暗褐色土，下層は

ローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子多量を含む黒褐色土が自然堆積している。下層は10～20cmの厚みがあり，焼土粒子，および炭化材が特に多く含まれている。床面には径９cmほどの炭化材が放射状に横たわっており，長いもので１mもある。炭化材はもろく丸太で自然木のように思われた。焼土域が中央部付近を除いた全域にわたって検出された。覆土や炭化材の状況から，本跡は火災に遭ったものと思われる。P_4の西側20cmの北壁に寄った床面に径12cmの球形状のにぶい浅黄色の粘土塊，また，P_5の北壁の上面に貼りついた様に粘土塊が出土している。

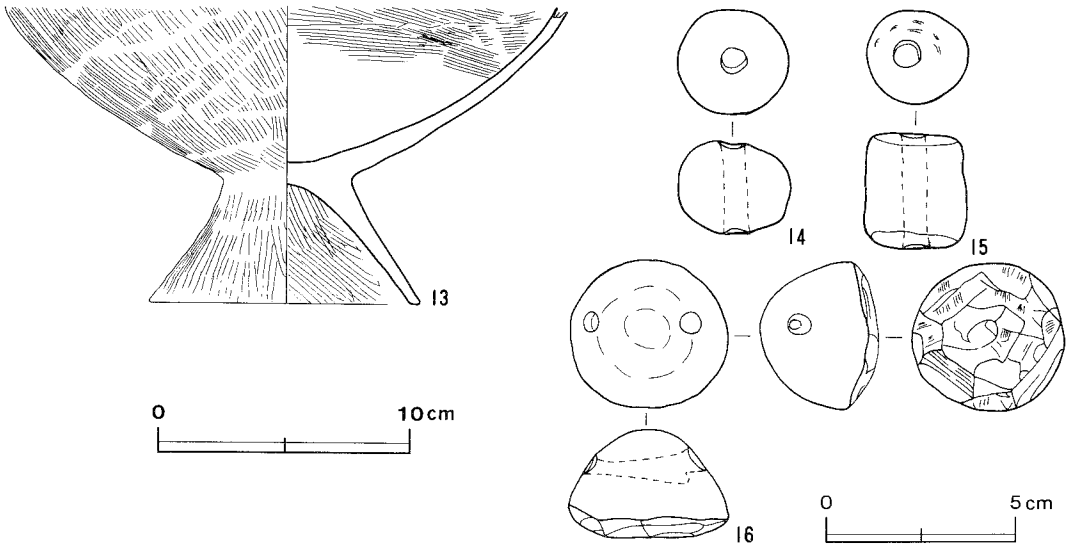
遺物は，東コーナー部の壁際や南東壁際から完形の甕形土器（P104），小型甕形土器（P105）が横位の状態で，壺形土器（P110）が正位の状態で，台付甕形土器（P115）が倒立の状態で完形に復元できた埦形土器（P106）が破片の状態で出土している。また，中央からやや東側の覆土下層から，装飾器台形土器（P107）が正位の状態で，F1の北側の覆土下層から高坏形土器（P118）が倒立の状態で出土している。そのほか，貯蔵穴や覆土中・下層から土師器片217片が出土しており，棒状浮文壺の口縁部２点（P113・P112），球状土錘（DP1）１点，管状土錘（DP5）１点，石製品（Q164）１点が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。



第54図　第27号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図



第55図　第27号住居跡出土遺物実測図(1)



第56図　第27号住居跡出土遺物実測図(2)

第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第55図 1	装飾器台形土器 土師器	B (11.6) D (14.8) E 6.3	器受部は脚部から強く外反し，器受部下位の装飾用の段に至り再び外反しながら立ち上がる。脚部は「ハ」の字状に大きく開き，裾部に至る。器受部中位に4孔，下位に飾り窓4孔，中央に単孔，脚部中位に3孔，下位に3孔を有する。	器受部・脚部外面一斜位のハケ目整形後ヘラ磨き，器受部内面－ヘラ磨き，脚部内面－ハケ目整形後ヘラナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	50% P107
2	高坏形土器 土師器	B (6.2) D 12.4 E 5.3	脚部は「ハ」の字状に大きく開き裾部に至る。上位に3孔を有する。坏部は欠損している。	外面－ハケ目整形後縦位のヘラ磨き。内面－横位のハケ目整形後下位ヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 良好	50% P118
3	塊形土器 土師器	A 11.7 B 6.4 C 3.6	口縁部は頸部から外反しながら立ち上がる。体部は底部から内彎して立ち上がる。底部は凹む。	口縁部内・外面－横位のナデ。体部外面－ハケ目整形。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	90% P106
4	壺形土器 土師器	A (24.3) B (7.7)	口縁部は複合口縁で，外傾して立ち上がる。口唇部は水平な面を持ち，内面凸帯を付ける。	口縁部外面－縦位のハケ目整形，口縁部内面－横位のハケ目整形。4本の棒状浮文を付ける。	スコリア・砂粒・長石 浅黄橙色 普通	5% P112 内・外面煤付着
5	壺形土器 土師器	A (15.0) B (4.3)	口縁部は複合口縁で，頸部から外反して立ち上がる。	口縁部外面上位－横位のナテ，下位－縦位のハケ目整形，口縁部内面－横位のハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	5% P108
6	壺形土器 土師器	A (28.8) B (10.7)	口縁部は複合口縁で，頸部から外反して立ち上がった後，皿状に開き，さらに外傾して立ち上がる。口縁端部は水平な面をもち，内面凸帯を付ける。	口縁部外面－縦のハケ目整形。棒状浮文を付ける。	スコリア・砂粒・長石 浅黄橙色 普通	10% P113 口縁部内面煤付着
7	壺形土器 土師器	A (13.4) B (17.5)	口縁部は複合口縁で，頸部から外反し立ち上がっている。胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。	内・外面－斜位のハケ目整形後横位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	40% P110

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第55図 8	小型甕形土器 土師器	A 6.5 B 5.6 C 3.4	口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。胴部は底部から内彎しながら立ち上がる。胴部中位からやや上側に最大径を有する。	内・外面－横位のナデ。	砂粒 橙色 普通	100% P105 外面に剝離痕
9	甕形土器 土師器	A 10.8 B 14.7 C 4.2	口縁部は頸部から直立気味に外反して立ち上がる。胴部は球形を呈し，胴部中位に最大径を有する。底部は平底である。	口縁部内・外面－ハケ目整形，後横位のナデ。胴部外面－斜位のハケ目整形，胴部内面－ナデ。	砂粒 橙色 普通	100% P104 外面煤付着
10	甕形土器 土師器	A(11.4) B (4.7)	口縁部は複合口縁で，「く」の字状に屈曲し開く。胴部は球形を呈すると思われる。	口縁部外面－ハケ目整形後横位のナデ，内面－ハケ目整形後ヘラナデ。胴部外面－縦位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 にぶい赤褐色 普通	10% P111
11	甕形土器 土師器	B (7.5) C 7.6	胴部は平底の底部から内彎しながら立ち上がる。	内・外面－ハケ目整形後ヘラナデ。	スコリア・砂粒・小礫 にぶい黄橙色 普通	10% P116
12	台付甕形土器 土師器	B (7.7) D (9.7) E 6.1	台部は，「ハ」の字状に開き裾部に至る。	内・外面－ハケ目整形。	スコリア・砂粒・長石 にぶい褐色 普通	20% P117
第56図 13	台付甕形土器 土師器	B(12.0) D(10.8) E 4.8	胴部は台部から内彎しながら外上方に立ち上がる。台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	胴部・台部外面・脚部内面－斜位のハケ目整形，胴部内面－横位のハケ目整形。	砂粒 明赤褐色 普通	50% P115 外面煤付着

球状・管状土錘（第56図14・15）

球状土錘・管状土錘の2点とも完形品であり，14は長さ2.3cm，幅2.9cmのややゆがんだ球形を呈し，孔径が6㎜ほどで，重さ19.2gである。15は長さ3.1cm，幅2.8cmの管状を呈し，孔径が6㎜ほど，重さは23.9gでていねいな作りである。2点とも，孔は一方向から穿たれており，色調はにぶい褐色を呈し，胎土は細砂粒を含み，焼成は良好である。

石製品（第56図16）

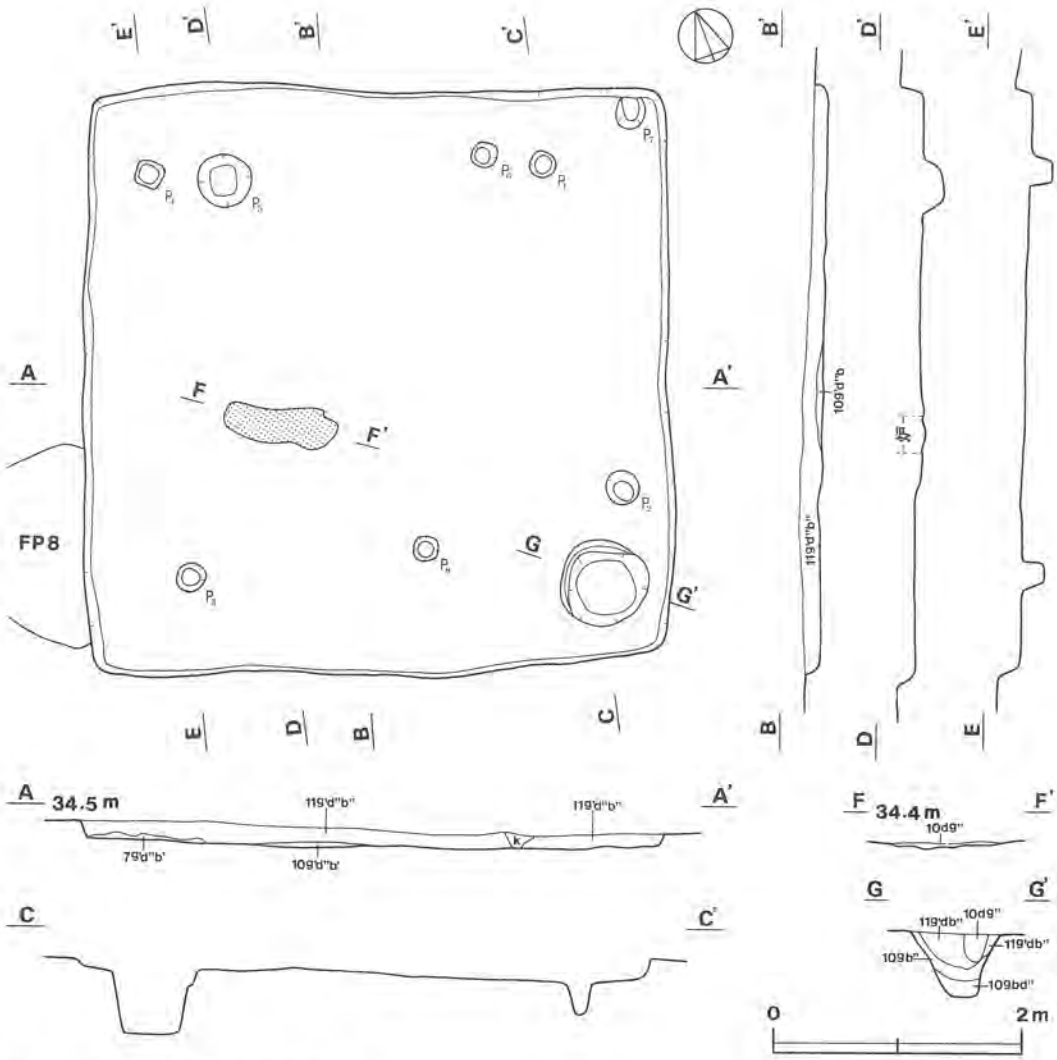
石製品は滑石製で，半球形状を呈している。表面は研磨され，底面には周縁から中央に向かうように擦り切った痕と折り取った痕が残っている。丸くなった先端近くには，孔が穿孔されている。孔の穿孔方法は，片面から残りの片面（反対側の面）に近くなる所まで底面とほぼ水平になるように穿孔してゆき，更に，残った面から穿孔して貫通させている。高さ3.9cm，幅4.1cm，重さ54.7g，孔径0.7～0.8cmである。類例がなく用途不明である。

第28号住居跡（第57図）

本跡は，当遺跡の中央部F3e$_3$区を中心に確認され，第32号住居跡の西側1.8mに位置し，南西コーナー付近で，縄文時代早期の第8号炉穴と重複している。

平面形は，長軸4.72m，短軸4.68mの方形で，長軸方向はN－20°－Eである。壁はロームで硬く締まり，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は14～20cmである。耕作による削平を受け，南東コー

ナー付近の壁高は6～7cmと遺存状態が悪い。床面は平坦であるが，北東コーナーに向かってやや傾斜している。炉の周辺はロームが踏み固められて硬く締まり，こぶ状にゴツゴツしている。炉は中央からやや西側に検出され，長径88cm，短径27cmの不整楕円形を呈し，床面を皿状に4cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内は焼土粒子中量を含む褐色土が堆積し，炉床はレンガ状に焼けゴツゴツしている。ピットは8か所検出され，規模や配列からP_1～P_4が主柱穴と思われる。主柱穴の規模は径21～23cm，深さ18～30cmの円筒状で，比較的浅い柱穴である。P_6・P_8は支柱穴と考えられる。P_5・P_7は規模や位置から性格は不明確である。貯蔵穴は南東コーナー部に位置し，開口部は長径72cm，短径68cm，深さ54cmの円形状を呈し，南東側は垂直に立ち上がっている。

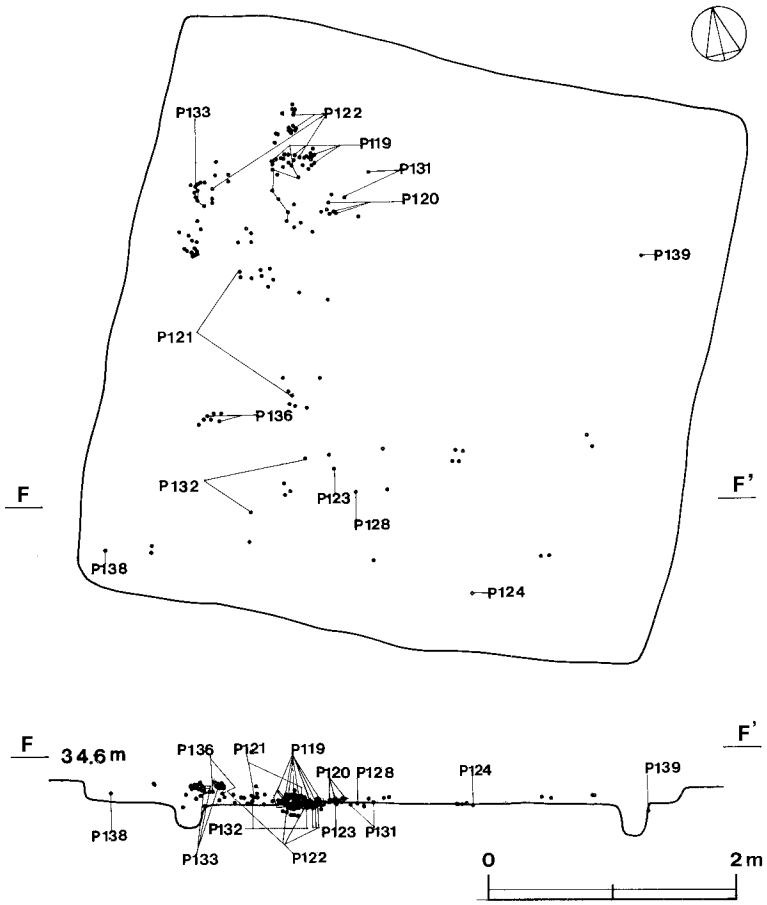


第57図　第28号住居跡実測図

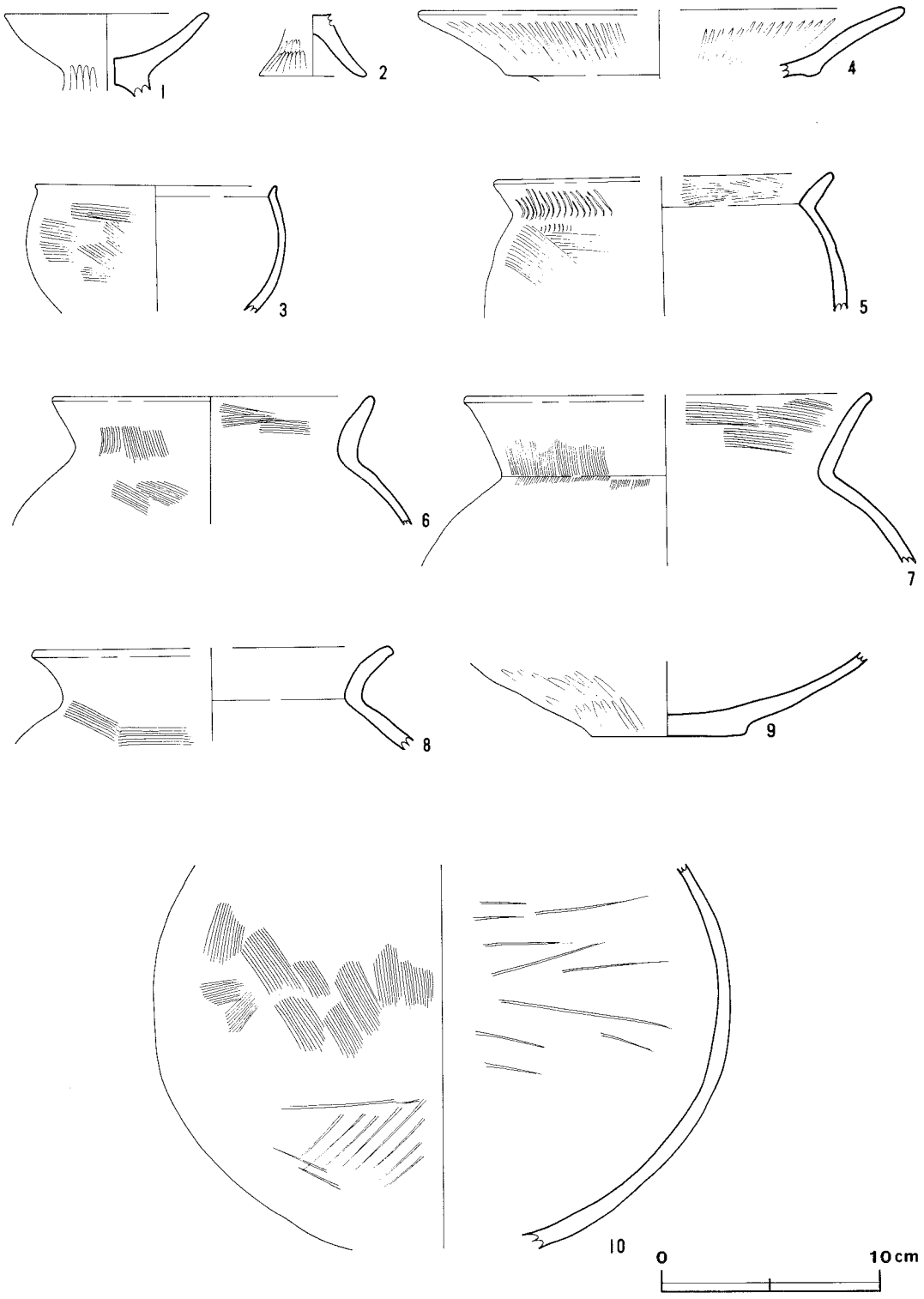
北西壁側は上端から約16cmのところに段をつくっている。底面は平坦である。貯蔵穴の覆土は3層からなり，ローム粒子少量，焼土粒子微量，炭化粒子微量を含む褐色土が主体で，レンズ状に硬く締まっている。

覆土は2層から成り，上層はローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む褐色土が主体で，下層はローム粒子，焼土粒子，炭化粒子微量を含む暗褐色土が4cmほど自然堆積している。

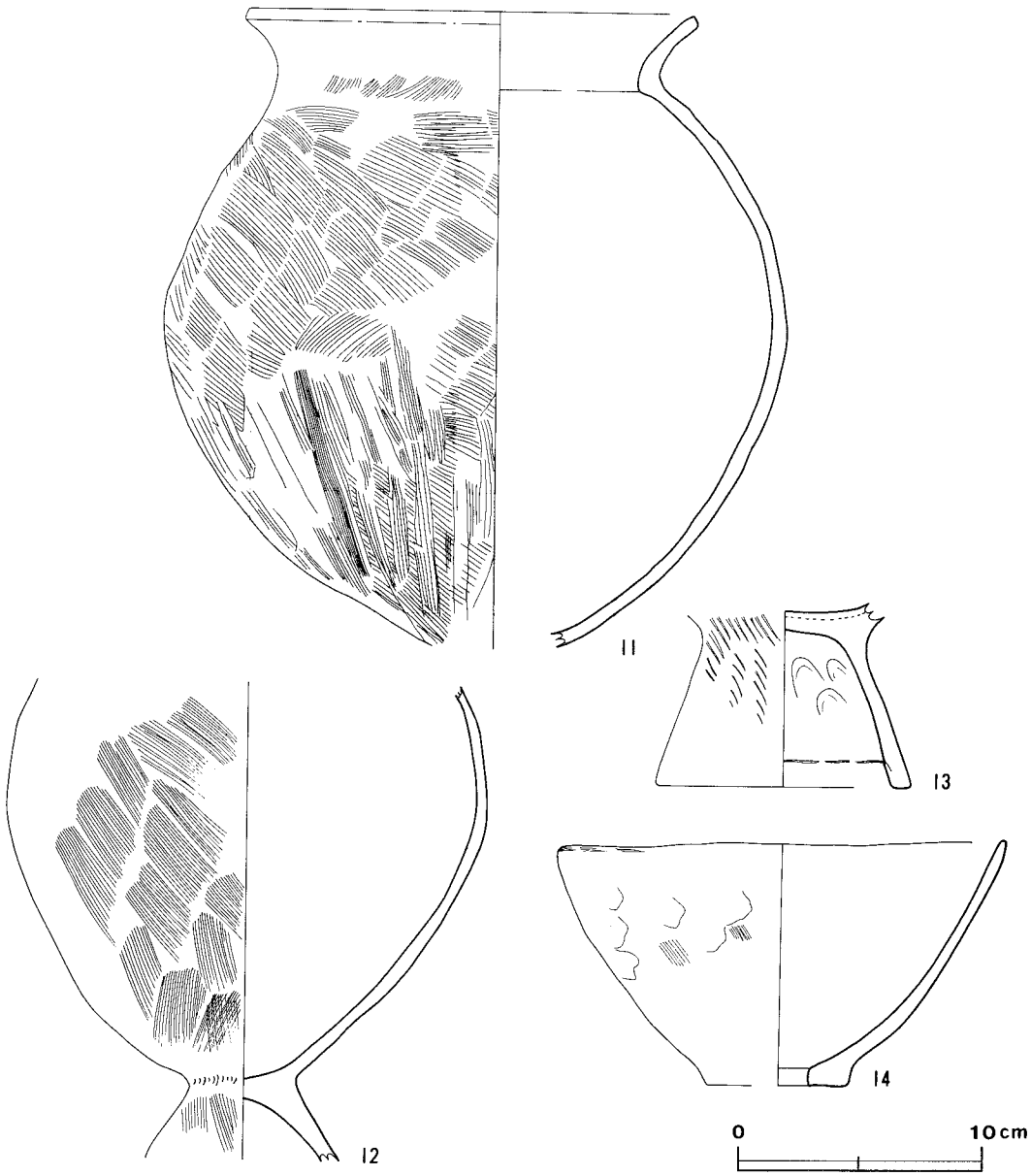
遺物は，北東コーナー付近の床面から台付甕形土器（P119）の破片がまとまった状態で，完形の甑形土器（P120）がつぶれた状態で，器台形土器の器受部が正位の状態で出土している。また，同所の覆土下層から甕形土器の口縁部・胴部がまとまって出土している。炉の南側の床面から半完形の台付甕形土器（P132）が横位の状態で出土している。さらに，東コーナー部付近の床面から高坏形土器（P139）の脚部が倒立の状態で出土している。そのほか，覆土中・下層から土師器片483片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。なお，覆土上層から縄文式土器片が少量出土している。



第58図　第28号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図



第59図　第28号住居跡出土遺物実測図(1)



第60図　第28号住居跡出土遺物実測図(2)

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第59図 1	器台形土器 土師器	A 9.5 B (3.6) E (0.7)	器受部は接合部からやや内彎して開いて立ち上がり，接合部に中央孔がある。脚部は欠損する。	器受部内・外面－ナデ。接合部外面－縦位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 にぶい褐色 普通	50% P131 外面煤付着
2	高坏形土器 土師器	D 5.0 E 2.9	脚部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。坏部は欠損している。	脚部外面－ハケ目整形後丁寧な縦位のヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	50% P139

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 3	坩形土器 土師器	A(11.3) B (6.0)	わずかに残った口縁部の下位はゆるく外反する。胴部はほぼ球形を呈し，薄手なつくりである。	口縁部外面－ハケ目整形後ナデ。胴部外面－ハケ目整形，内面－ナデ。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	20% P134
4	壺形土器 土師器	A(22.6) B (3.2)	口縁部は複合口縁で，ゆるやかに外傾して立ち上がる。	内・外面－ヘラ磨き。	スコリア・砂粒 明赤褐色 普通	5% P128
5	甕形土器 土師器	A(15.8) B (6.5)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し，外反して立ち上がる。	口縁部内・外面－ハケ目整形。胴部外面－ハケ目整形，内面－ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	5% P124
6	甕形土器 土師器	A 15.0 B (6.0)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し，外反して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈すると思われる。	口縁部外面－ハケ目整形後横位のナデ。胴部外面－ハケ目整形。口縁部・胴部内面－ヘラナデ。	砂粒 灰褐色 普通	20% P121
7	甕形土器 土師器	A(18.9) B (8.0)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し，外反して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈すると思われる。	口縁部外面－ハケ目整形後横位のナデ。胴部外面－ハケ目整形。口縁部・胴部内面－ヘラナデ。	砂粒 褐色 普通	10% P122 外面煤付着
8	甕形土器 土師器	A(16.7) B (4.4)	口縁部は頸部から強く外反して開く。	口縁部外面－ハケ目整形後横位のナデ。胴部外面－ハケ目整形。口縁部・胴部内面－ヘラナデ。	スコリア・砂粒 にぶい褐色 普通	5% P123
9	甕形土器 土師器	B (3.5) C 7.2	胴部下位は平底の底部からやや内彎して開く。	胴部外面－ヘラナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	10% P136 外面煤付着
10	甕形土器 土師器	B(18.0)	胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。	内・外面－ハケ目整形後ヘラナデ。	砂粒・スコリア 明褐色 普通	30% P133 外面煤付着
第60図 11	台付甕形土器 土師器	A 18.5 B(26.5)	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。台部は欠損する。	口縁部・胴部外面－斜位のハケ目整形。口縁部内面－横位のハケ目整形。胴部内面－ヘラナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	70% P119 外面煤付着
12	台付甕形土器 土師器	B(19.8) E (2.5)	胴部は接合部から内彎しながら立ち上がり，胴部中位に最大径を有する。台部は「ハ」の字状に開く。口縁部は欠損する。	胴部外面－斜位のハケ目整形。台部外面－縦位のハケ目整形。胴部・台部内面－ヘラナデ。	砂粒 明褐色 普通	40% P132
13	台付甕形土器 土師器	B (7.4) D 10.6 E 6.6	台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。裾部を内面に折り返している。	台部外面－粗いハケ目整形後指頭による縦位のナデ，台部内面－指頭による押圧。	砂粒 にぶい褐色 普通	20% P138 外面煤付着
14	甑形土器 土師器	A 18.5 B 10.1 C 5.9	胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁端部に至る。底部には径2cmほどの孔がある。	外面－ヘラナデ，内面－ナデ。	スコリア・砂粒 褐色 普通	100% P120 外面煤付着

第29号住居跡（第61図）

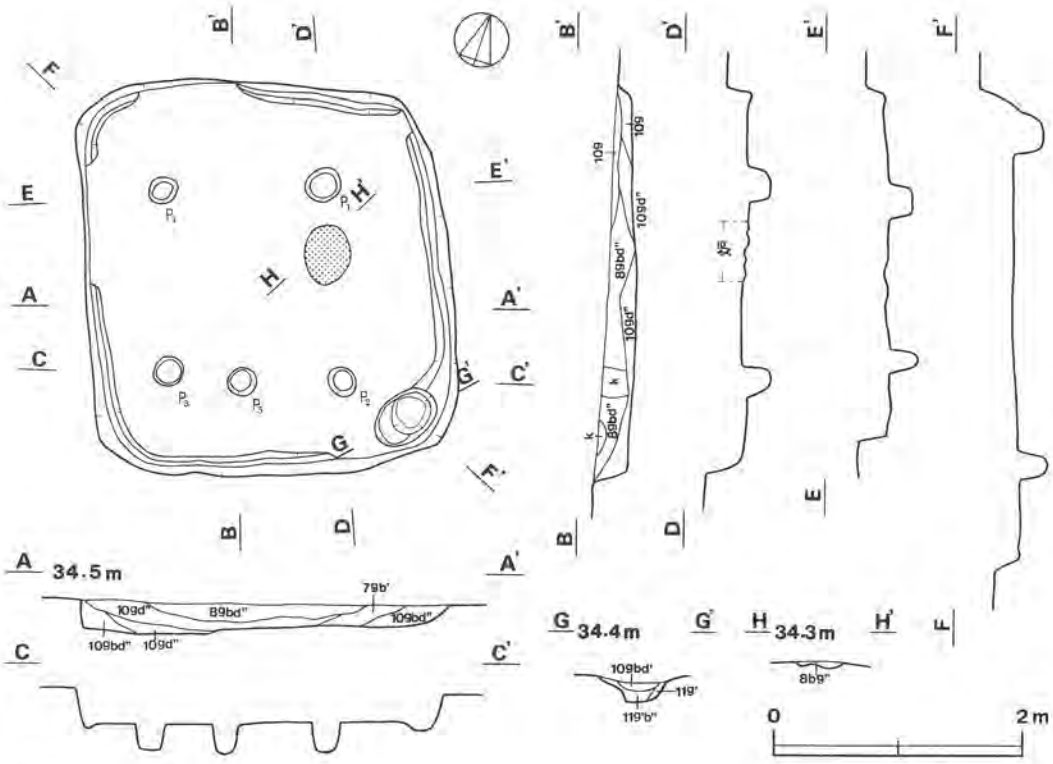
本跡は，当遺跡の中央部F2b$_8$区を中心に確認され，第20号住居跡の南側約4m，第24号住居跡の北東側約4.2mに位置している。

平面形は，長軸3.20m，短軸2.93mの隅丸方形で，長軸方向はN－23°－Wである。壁はロームで硬く締まり，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は16～30cmである。本跡は南から北へ傾斜する台地縁辺部に位置するため，本跡の北壁は低くなっている。壁下には壁溝が北壁，西壁の一部を除いて，上幅17cm，下幅4cm，深さ4cmの規模で周回している。断面形は，「U」状を呈してい

る。床面はロームでほぼ平坦であり，柱穴を線で結んだ内側は，踏み固められて非常に硬く締まっている。炉は中央からやや東側に検出され，平面形は長径46cm，短径30cmの楕円形を呈し，掘り込みの無い地床炉である。炉床は赤変硬化している。ピットは5か所検出され，規模や配列からP_1～P_4が主柱穴と思われる。主柱穴は各コーナーの内側に位置し，規模は23～28cm，深さ15～20cmである。貯蔵穴は南東コーナー壁下に位置し，開口部は長径55cm，短径34cmの楕円形を呈しているが，南西壁の深さ8cmの所に段を有している。壁は硬く外傾して立ち上がり，底面は平坦である。貯蔵穴の覆土は3層から成り，上層にローム粒子，焼土粒子，炭化粒子少量を含む褐色土，下層はローム粒子少量，焼土粒子微量を含む褐色土が堆積し締まっている。

覆土は3層からなり，部分的に攪乱を受けているが，レンズ状に自然堆積している。上層はローム粒子中量，焼土粒子，炭土粒子微量を含む暗褐色土，中・下層は褐色土が堆積し，壁際はローム粒子，焼土粒子微量を含む暗褐色土が堆積している。

遺物は，土師器片が覆土中・下層から93片出土したが接合はできなかった。床面出土の土器片は5片である。それらは，すべて五領式に比定される。



第61図　第29号住居跡実測図

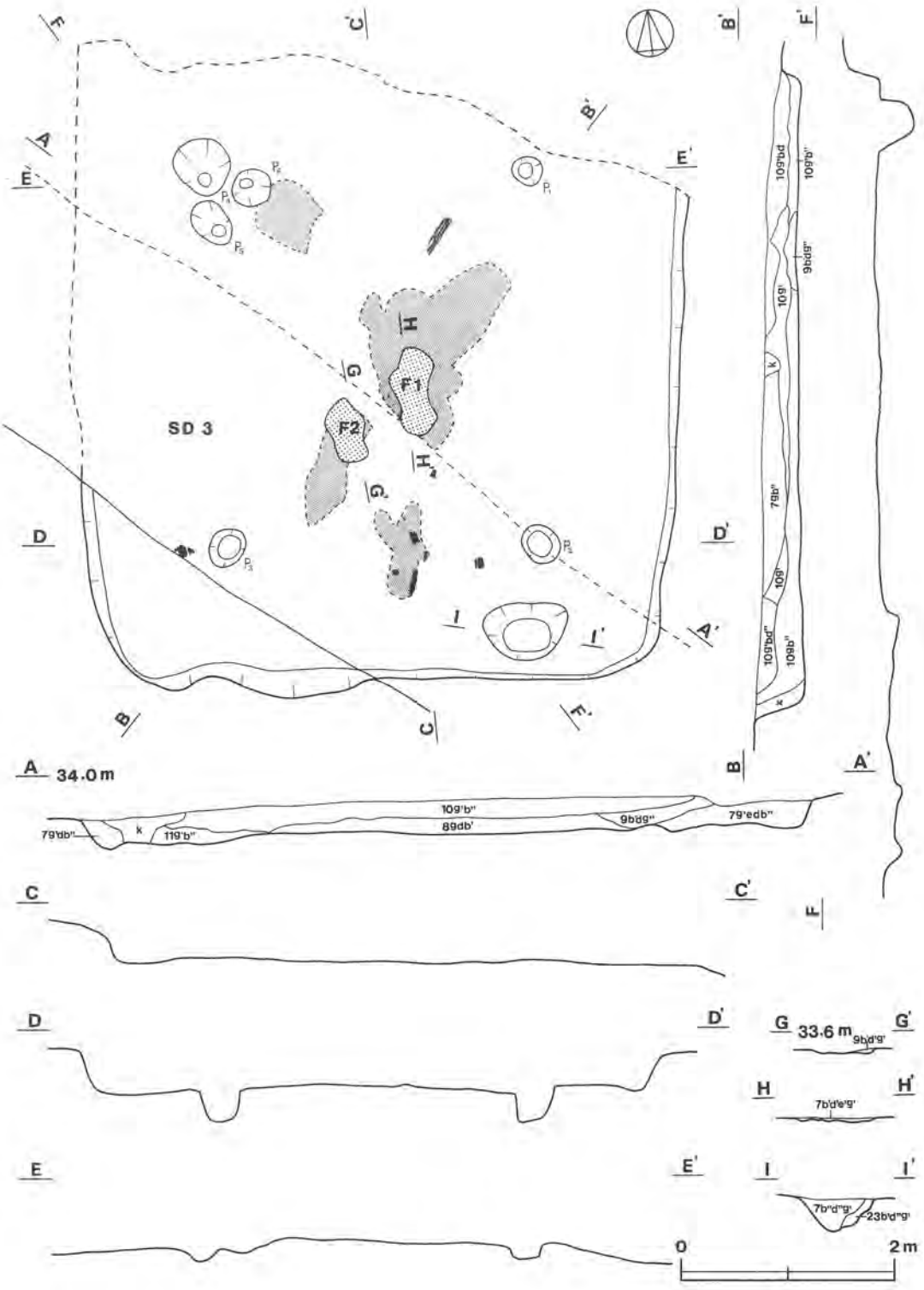
第30号住居跡（第62図）

本跡は，当遺跡の中央部F2a$_9$区を中心に確認され，第29号住居跡の北側約2mに位置している。南側では第３号溝と重複しており，溝が本跡の南壁，西壁を掘り込んでいることから，本跡の方が古い。また，本跡周辺は北側の小谷津田に向かって傾斜する台地縁辺部で，谷津田を陸田にするために土取りされた地域である。本跡の北側部分は土取りによる削平を受けている。

平面形や規模については，検出された柱穴の位置等から推定すると，長軸6.00m，短軸5.58mほどの隅丸方形または隅丸長方形を呈し，N－3°－Eに長軸方向を持つ住居跡であったものと思われる。東壁の一部と南西コーナー部の壁を除いて，壁の大部分は破壊されている。残存壁はロームで硬く締まり，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は30～40cmである。床面はほぼ平坦で，主柱穴を線で結んだ内側は踏み固められて硬く締まっている。また，P$_1$とP$_6$を結んだ線の付近から北側に向って削平されているため，北側の壁周辺はやや軟弱なロームである。炉は中央（F1）とやや南西側（F2）の２か所に検出され，北側のF1は長径85cm，短径37cmの不整楕円形，南側のF2は長径62cm，短径34cmの不整楕円形を呈し，床面をそれぞれわずかに掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子，炭化粒子少量を含んだ暗褐色土が堆積し，炉床は双方とも赤変硬化している。また，F1・F2は約40cmと近接しているため同時に使用していたと思われる。ピットは６か所検出され，規模と配列からP$_1$～P$_4$が主柱穴と思われる。主柱穴のP$_2$・P$_3$の規模は径32～37cm，深さ23～30cmである。P$_1$は上位を削平され，P$_4$は北壁側が撹乱を受けている。P$_5$・P$_6$はP$_4$に近接しているが，深さ13～14cmと浅く，本跡に伴うものか明確でない。貯蔵穴は，南東コーナー部からやや西側に位置し，開口部は長径76cm，短径52cm，深さ34cmの不整楕円形を呈している。壁の北側が外傾し，南側はほぼ垂直に立ち上がり，底面は皿状を呈している。覆土は２層から成り，上層は焼土粒子，炭化粒子微量を含む暗褐色土，下層は焼土粒子，炭化粒子微量を含む粘性のある灰褐色土が，西壁にそって流れ込んだように堆積している。

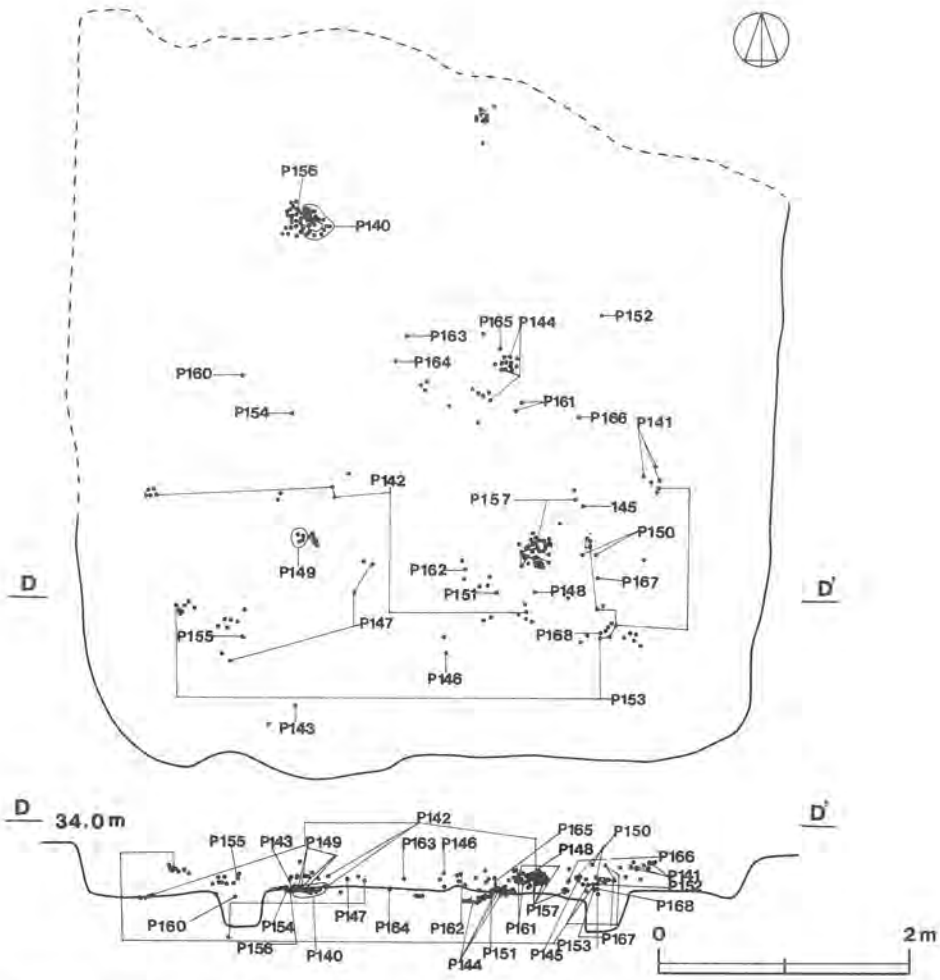
覆土は，北西部を中心に撹乱を受けているがほぼ２層から成り，レンズ状に自然堆積している。褐色土が主体で，第３号溝の覆土でもある上層には，ローム粒子，焼土粒子微量を含む褐色土，下層にはローム粒子少量，炭化粒子，炭化材微量を含む暗褐色土が堆積している。また，床面に焼土や炭化材が多く検出されたことや，覆土下層に焼土粒子，炭化材が含まれていることから，本跡は，火災に遭ったものと思われる。

遺物は，北西コーナー部付近の覆土下層から復元できた台付甕形土器（P140）がまとまった状態で出土し，また，F1の南東側付近の覆土下層から完形に復元できた甕形土器（P157）がつぶれた状態で，同所から半完形の壺形土器（P145）が倒立の状態で出土している。また，東壁側の覆土下層から壺形土器（P141）がつぶれた状態で，南西コーナー部付近の床面から高坏形土器（P143）の坏部が倒立の状態で出土している。さらに，中央部付近の床面や覆土下層から，高坏形



第62図　第30号住居跡実測図

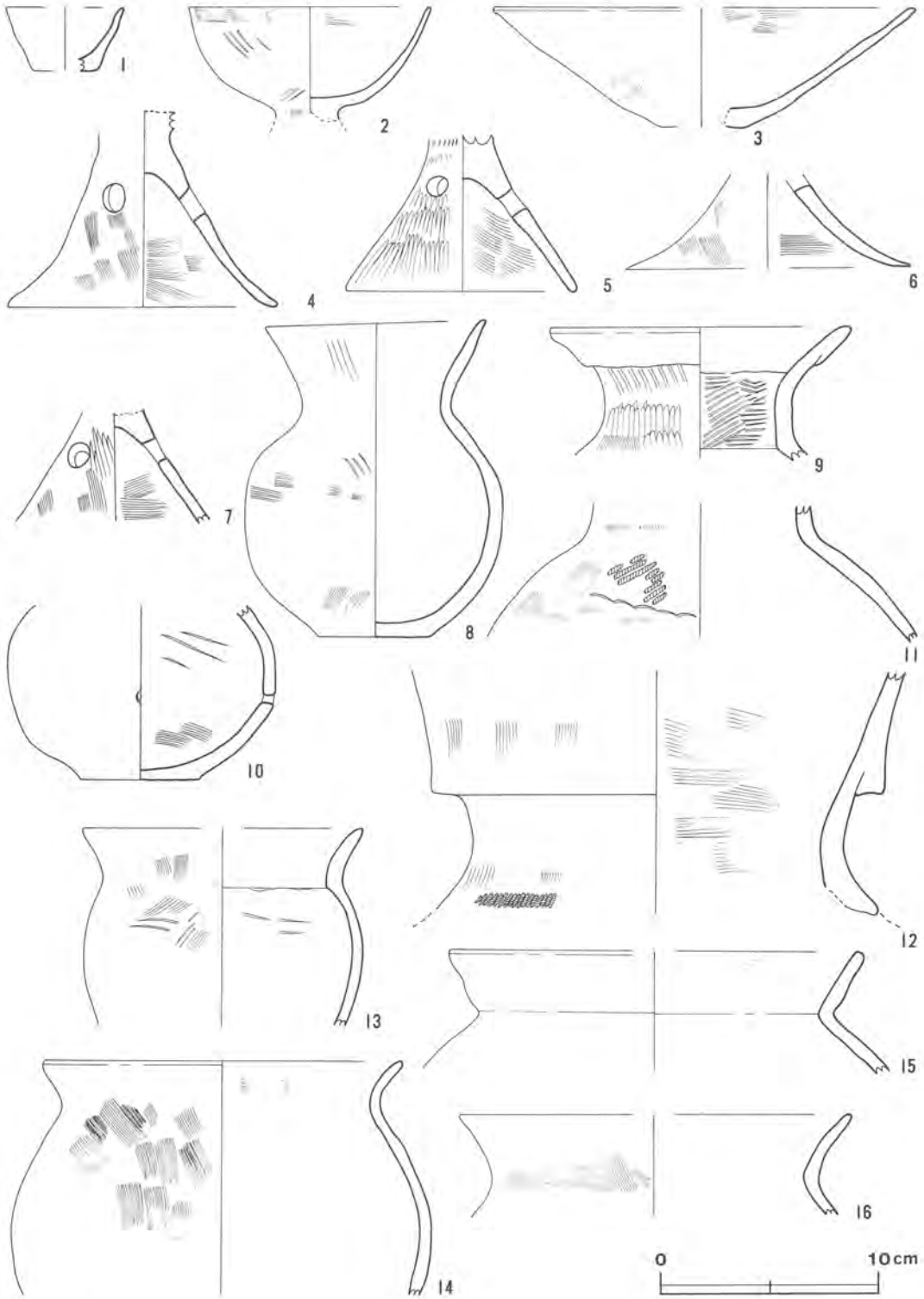
土器（P164）の脚部と半完形の台付甕形土器（P142）が斜位や横位の状態で出土している。そのほか，覆土中から土師器片252片が出土しており，この中には壺形土器（P151）の頸部片も含まれている。それらは，すべて五領式に比定される。なお，縄文式土器片が，覆土上層から少量出土している。



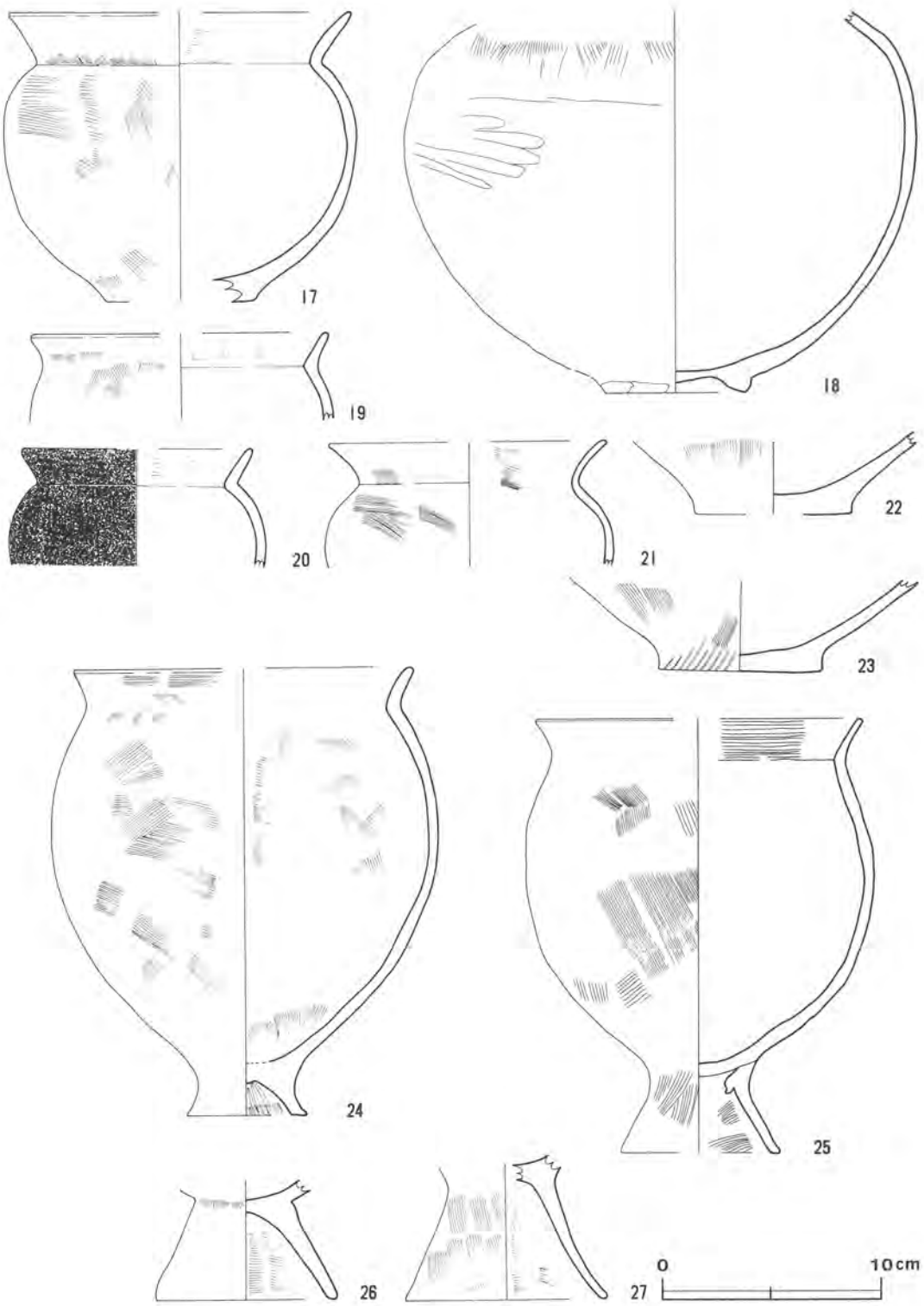
第63図　第30号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第64図 1	ミニチュア土器 (壺形土器) 土師器	A (5.4) B 3.0 C (2.8)	体部は底部から外反気味に立ち上がり，口縁部にかけてやや内彎する。	体部内・外面－ヘラナデ。	砂粒 黒褐色 普通	40% P168
2	高坏形土器 土師器	A 11.1 B (5.2)	坏部は坏底部から内彎気味に立ち上がり，器肉の薄い口縁部に至る。脚部は欠損している。	口縁部内・外面－横位のナデ。 体部外面－ハケ目整形後ヘラ磨き。	砂粒 にぶい褐色 普通	50% P143 内面斑点状剝離



第64図　第30号住居跡出土遺物実測図(1)



第65図　第30号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第64図 3	高坏形土器 土師器	A(19.6) B (5.5) C (4.0)	坏部は坏底部から外傾して立ち上がる。坏底部の中央には接合する時に穿たれたと思われる孔の一部が認められる。	体部内・外面－ハケ目整形後ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	10% P150
4	高坏形土器 土師器	D 12.6 E 9.1	脚部は「ハ」の字状を呈し，裾部でさらに開いている。脚部上位に3孔を有する。坏部は欠損している。	脚部外面－斜位のハケ目整形後ヘラナデ，内面－斜位のハケ目整形。	砂粒・小礫 橙色 普通	50% P164
5	高坏形土器 土師器	D 10.8 E 7.3	脚部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。脚部上位に3孔を有する。坏部は欠損している。	脚部外面－縦位のハケ目整形後縦位のヘラ磨き，内面－斜位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	50% P163
6	高坏形土器 土師器	D(13.2) E (4.5)	脚部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。上位に孔を穿つ。坏部は欠損している。	脚部外面－縦位のハケ目整形後縦位のヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	10% P162
7	高坏形土器 土師器	E (5.1)	脚部は「ハ」の字状に開き，脚部上位に3孔を有する。坏部，裾部は欠損している。	脚部外面－縦位のハケ目整形後ヘラ磨き，内面－斜位のハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	30% P166
8	壺形土器 土師器	A 10.2 B 14.8 C 5.2	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。	外面－ハケ目整形後ヘラナデ，内面－ヘラナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	85% P141
9	壺形土器 土師器	A 14.0 B (6.0)	口縁部は外傾する複合口縁である。頸部からゆるく屈曲した後，ほぼ垂直に立ち上がり，外反して複合口縁に至る。	口縁部内・外面－ハケ目整形後横位のナデ。頸部外面－ハケ目整形後ヘラナデ，内面－ハケ目整形。	砂粒 浅黄橙色 普通	20% P146
10	壺形土器 土師器	B (8.1) C 5.6	胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。胴部中位やや下側に径0.3cmの孔を穿つ。口縁部は欠損している。	胴部外面－ハケ目整形後ヘラ磨き，内面－ハケ目整形後ヘラナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	60% P145
11	壺形土器 土師器	B (6.2)	頸部はゆるやかに屈曲し，胴部上半が内彎している。	胴部外面－LRの単節縄文を施した後斜位のハケ目整形，内面－ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	10% P153 磨滅している
12	壺形土器 土師器	B(11.3)	口縁部は外傾する複合口縁であり，頸部からゆるく屈曲した後外反して立ち上がり複合口縁に至る。口唇部は欠損している。	口縁部・頸部外面－縦位のハケ目整形，口縁部・頸部内面－横位のハケ目整形。肩部－RLの単節縄文を施す。	砂粒・スコリア・長石 浅黄橙色 普通	10% P151 内面煤付着
13	甕形土器 土師器	A(13.0) B (9.2)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。	口縁部内・外面－ハケ目整形後横位のナデ。胴部外面－ハケ目整形後ヘラナデ，内面－ナデ。	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	40% P147
14	甕形土器 土師器	A 16.8 B(10.9)	口縁部は頸部から「く」の字状を呈して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。	口縁部内・外面－横位のナデ。胴部外面－斜位のハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	40% P144
15	甕形土器 土師器	A(19.2) B (5.6)	口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。胴部上半が内彎している。	内・外面－横位のヘラナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	5% P154
16	甕形土器 土師器	A(18.2) B (4.7)	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。	口縁部外面－斜位のハケ目整形，内面－横位のハケ目整形後ナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	5% P155
第65図 17	甕形土器 土師器	A(16.0) B(13.5)	口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，内面－横位のハケ目整形。胴部外面－横位のハケ目整形，内面－ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P152 外面煤付着

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第65図 18	甕形土器 土師器	B(17.9) C 6.6	胴部は底部から内彎しながら立ち上がり，胴部中位からやや上に最大径を有する。底部は平底で，中央が凹む。	胴部外面－斜位のハケ目整形後斜位のヘラナデ，胴部内面－横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	80% P157 外面煤付着
19	甕形土器 土師器	A(13.9) B (4.1)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈すると思われる。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，内面－横位のハケ目整形。胴部外面－縦位のハケ目整形，内面－ナデ。	砂粒 橙色 普通	10% P156
20	甕形土器 土師器	A(10.8) B (5.5)	口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。胴部は球形を呈していると思われる。	内・外面－ヘラナデ。	砂粒・小礫 浅黄橙色 普通	20% P148 胴部内面を除き朱彩
21	甕形土器 土師器	A(12.8) B (5.8)	口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。胴部は球形を呈していると思われる。	口縁部内・外面－ハケ目整形。胴部外面－ハケ目整形。	砂粒 浅黄橙色 普通	20% P149 胴部内面斑点状剝離
22	甕形土器 土師器	B (3.4) C (7.2)	胴部は底部からゆるやかに開きながら立ち上がる。底部は平底である。	胴部外面－縦位のハケ目整形。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	5% P160 内・外面斑点状剝離
23	甕形土器 土師器	B (4.3) C 7.5	胴部は底部からゆるやかに開きながら立ち上がる。底部は平底である。	胴部外面－ハケ目整形後ヘラナデ，内面－ヘラナデ。	砂粒・小礫 赤褐色 普通	20% P161
24	台付甕形土器 土師器	A(15.8) B 20.8 D 5.6 E 1.5	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。台部は短く「ハ」の字状に開き裾部に至る。	口縁部内・外面－ハケ目整形後ナデ。胴部内・外面－ハケ目整形。台部内・外面－ヘラナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	60% P142
25	台付甕形土器 土師器	A(15.1) B 20.3 D (7.3) E 3.5	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後ヘラナデ，内面－横位のハケ目整形。	砂粒 明赤褐色 普通	85% P140
26	台付甕形土器 土師器	B (5.6) D 8.4 E 4.1	台部は接合部から「ハ」の字状に開き裾部に至る。	台部外面－斜位のハケ目整形後ヘラナデ，内面－横位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 橙色 普通	30% P167
27	台付甕形土器 土師器	B (6.3) D 9.4 E 5.6	台部は接合部から「ハ」の字状に開き裾部に至る。	台部内・外面－斜位のハケ目整形	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	30% P165

第31号住居跡（第66図）

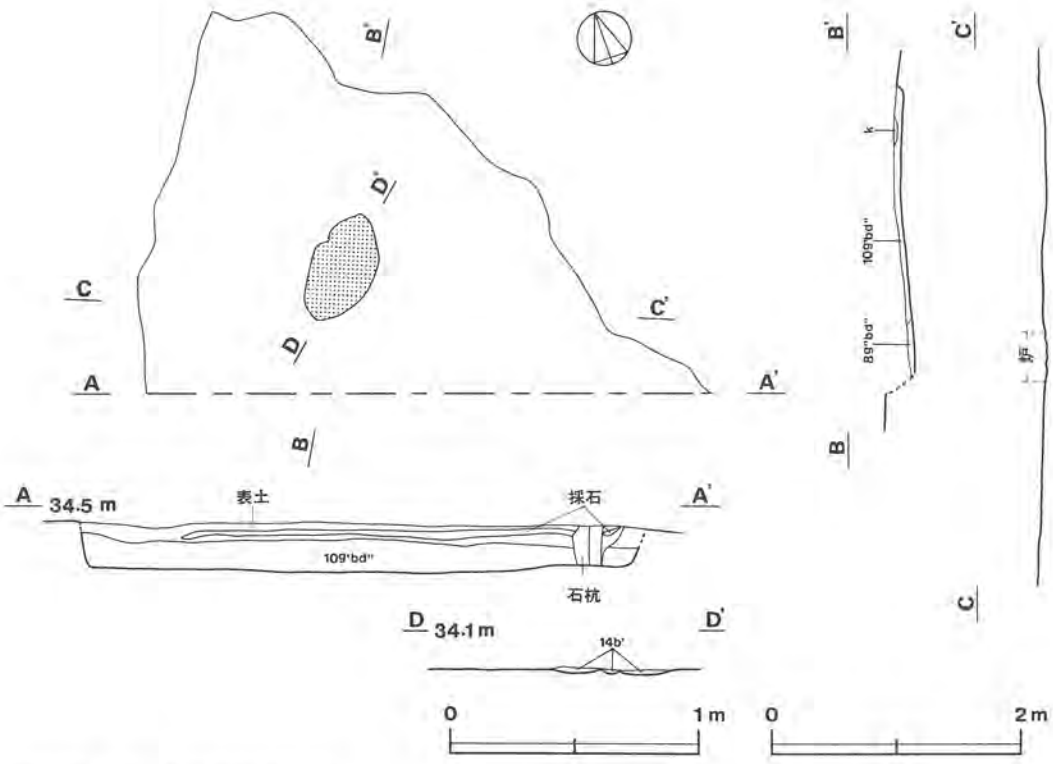
本跡は，当遺跡の中央部F3h$_5$区を中心に確認され，第32号住居跡の南側約3.6mに位置している。市道が当遺跡を横切っているため，本跡の南側部分は，当遺跡を東西に横切っている市道下に延びており調査できなかった。また，本跡の調査できた部分は，耕作と北東側の農道によって削平と撹乱を受け，壁及び床の大部分はすでに破壊されている。確認調査の過程で，踏み固められた床面と赤色した炉を検出したため，住居跡として調査した。

平面形や規模については，削平されているため，プランをとらえることができなかった。調査した南側部分のA－A′のセクション図から推定する軸長は約5mである。壁はロームで，壁高は東

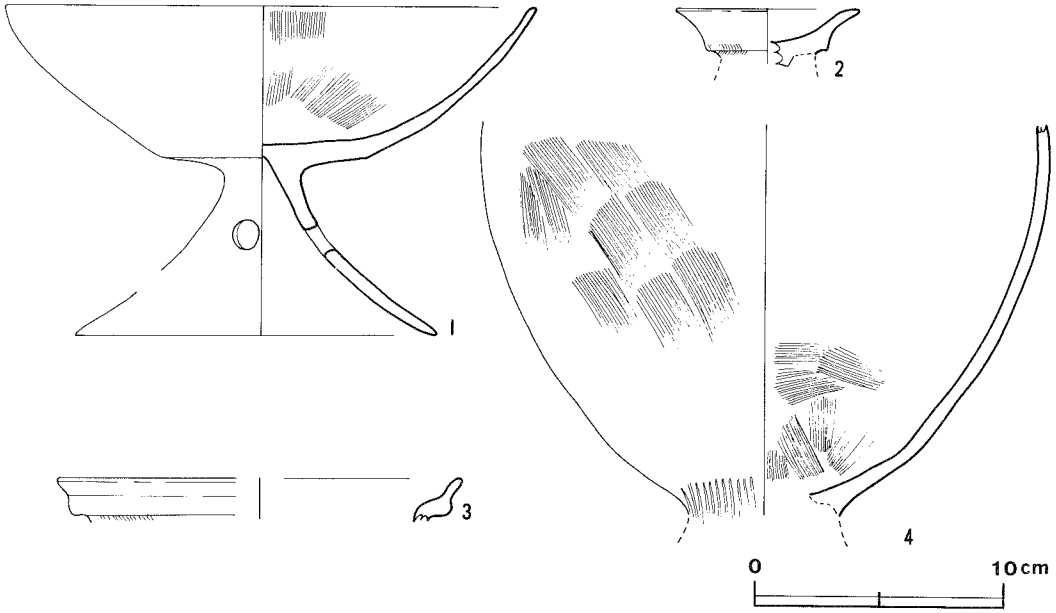
側で14cm，西側で30cmである。床面はロームで踏み固められて硬く締まり，炉の周囲は，緩やかな起伏を呈している。炉は検出された床面の中央からやや南側に位置し，長径80cm，短径53cmの楕円形を呈し，床面が赤く焼土化した地床炉である。焼土粒子を含む赤褐色土が厚いところで2cmほど堆積している。ピットと貯蔵穴は検出されていない。

覆土は1層でA－A′のセクションを見ると，焼土粒子，炭化粒子微量を含む褐色土が堆積している。

遺物は，炉の1.5m北側の床面から，ほぼ完形の高坏形土器（P173），台付甕形土器（P174）の胴部片，器台形土器（P169）の器受部がまとまった状態で出土している。そのほか，床面上から土師器片129片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。



第66図　第31号住居跡実測図



第67図　第31号住居跡出土遺物実測図

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第67図 1	高坏形土器 土師器	A 21.5 B 13.3 D 14.7 E 6.6	坏部は内彎気味に大きく開き，口縁部に至る。坏底部に外稜を有する。脚部は「ハ」の字状に大きく開き裾部に至る。脚部上位に3孔，下位に3孔を有する。	坏部内・外面－ヘラ磨き。脚部外面－ヘラナデ，脚部内面－斜位のハケ目整形後横位のナデ。	砂粒 赤褐色 普通	80% P173
2	器台形土器 土師器	A 7.4 B (2.2)	器受部は接合部から外反して開いている。脚部は欠損している。	器受部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，内面－横位のナデ。	砂粒 黒褐色 普通	40% P169
3	台付甕形土器 土師器	A (16.4) B (1.6)	口縁部片で，「S」字状を呈する。	口縁部内・外面－横位のナデ。	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	3% P172
4	台付甕形土器 土師器	B (15.7)	胴部は接合部から外上方に大きく内彎する。胴部中位に最大径を有する。台部は欠損している。	胴部内・外面－斜位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	30% P174 内面煤付着

第32号住居跡（第68図）

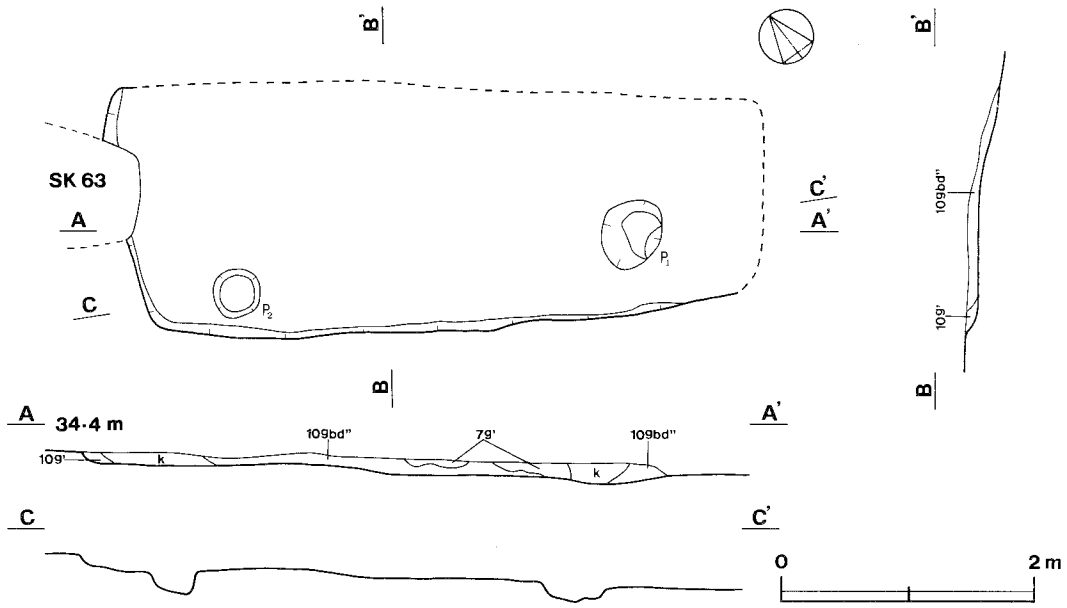
本跡は，当遺跡の中央部F3f$_5$区を中心に確認され，第28号住居跡の東側約2mに位置している。西コーナー付近では，第63号土坑と重複しており，本跡の北西壁を掘り込んでいることから，本跡の方が古い。また，本跡の北側部分の大半は土取りのため破壊されている。

平面形や規模について，調査された部分から推定すると，平面形は隅丸方形または隅丸長方形と思われる。わずかに残存する西コーナー付近と南西壁は，ロームで外傾して立ち上がり，壁高

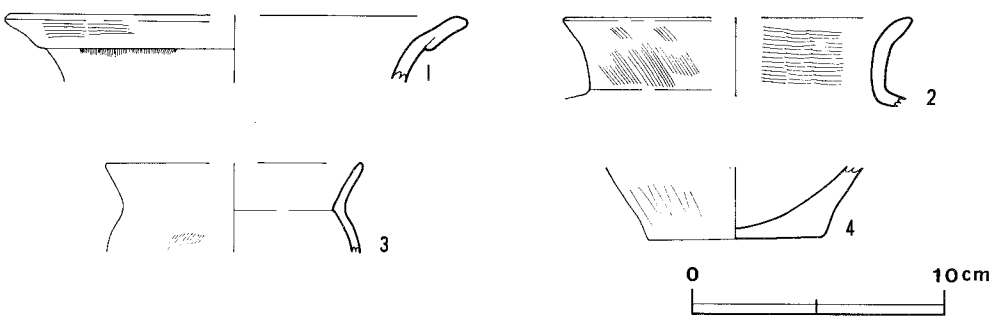
は約10cmである。残存する床面はロームでやや軟弱である。北東側に緩やかに傾斜しており，南東コーナーを含む北東側は，土取りによって削平されている。炉は検出されない。ピットは2か所検出され，規模と配列から，P_1・P_2は主柱穴と思われる。主柱穴は南東コーナーと南西コーナー付近に位置し，規模は径40～57cm，深さ15～17cmで，比較的浅い柱穴である。

覆土は3層からなり，上層はローム粒子微量を含む暗褐色土，下層はローム粒子，焼土粒子，炭化粒子微量を含む褐色土が堆積している。南西壁際付近には褐色土が堆積している。

遺物は，南西壁付近の床面や覆土下層から壺形土器（P175）の口縁部片，甕形土器（P177）の一部が出土している。そのほか，土師器片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。



第68図　第32号住居跡実測図



第69図　第32号住居跡出土遺物実測図

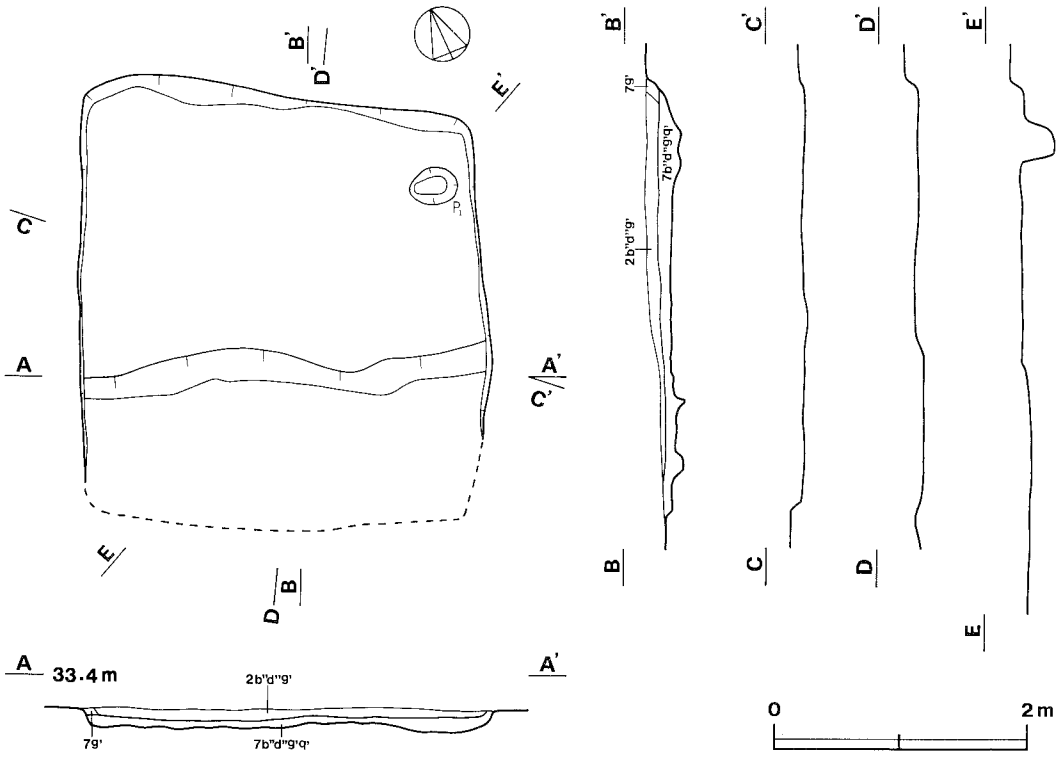
第32号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第69図 1	壺形土器 土師器	A(18.6) B (2.7)	口縁部は複合口縁で，頸部から外反して立ち上がる。	口縁部内・外面－横位のハケ目整形後横位のナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	3% P175
2	甕形土器 土師器	A(14.0) B (3.2)	口縁部は頸部からほぼ垂直に立ち上がり，さらに口縁端部で外傾する。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，口縁部内面－横位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	3% P176
3	甕形土器 土師器	A(10.4) B (3.6)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈すると思われる。	口縁部内・外面－横位のナデ。胴部内・外面－斜位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	15% P177
4	甕形土器 土師器	B (2.9) C　7.2	胴部は底部から内彎気味に立ち上がる。底部は平底で，中央部は器厚が薄い。	胴部内・外面－ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	20% P178

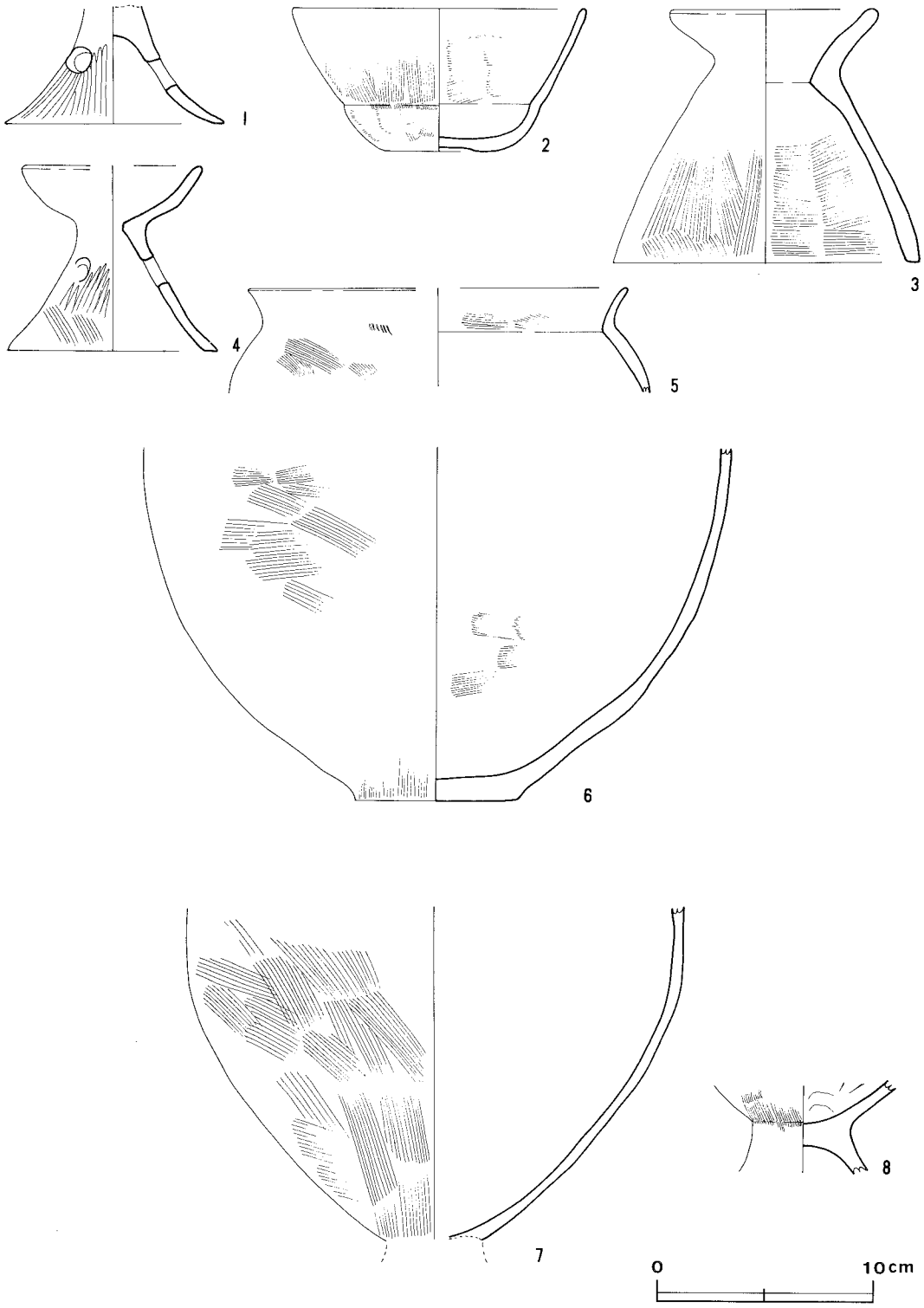
第33号住居跡（第70図）

本跡は，当遺跡の北部D3b$_2$区を中心に確認され，第34号住居跡の南西側約2.2mに位置している。本跡が検出された台地の縁辺部は，土取りによる削平と撹乱を受けている地区である。

平面形や規模について，検出された東・西・北壁から推定すると，長軸4.00m，短軸3.28mほど



第70図　第33号住居跡実測図



第71図　第33号住居跡出土遺物実測図

の隅丸方形または隅丸長方形を呈し，N－23°－Eに長軸方向を持つ住居跡であったものと思われる。壁の上面はほとんど削平され，南壁は破壊され残存しない。東壁，西壁は4～10cmで南側に向って次第に低くなる。床面はロームを10～20cmほど掘り込み，黒色土とロームの混合土を貼った貼り床である。残存した北側の床面は緩やかに起伏しており，硬く締まっている。南側の床面は削平され検出できなかった。炉は検出されない。ピットは1か所検出された。P_1は貯蔵穴と考えられ，東コーナー部に位置し，長径38cm，短径30cm，深さ26cmの円形状を呈している。壁は南東側がやや外傾し，他の壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面は平坦である。

覆土は1層だけで，ローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子を含む黒褐色土が堆積している。

遺物は，中央付近の床面や覆土下層から復元できた器台形土器（P181・P182）が，まとまった状態で出土している。北コーナー部付近の床面や覆土下層から甕形土器（P183）の胴部，高坏形土器（P187）の脚部が横位や斜位の状態で出土している。東コーナー部の覆土上層から台付甕形土器（P184）の胴部の一部が横位の状態で出土している。また，南コーナー部の床面から坩形土器（P180）が横位の状態で出土している。そのほか，土師器片144片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。

第33号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 1	高坏形土器 土師器	D 10.2 E 5.4	脚部は接合部から「ハ」の字状に開き裾部に至る。脚部中位に3孔を有する。坏部は欠損する。	脚部外面－縦位のヘラ磨き，脚部内面－縦位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 明赤褐色 普通	50% P187
2	坩形土器 土師器	A 13.4 B 6.6 C 5.0	口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。体部は底部から内彎して立ち上がる。底部は平底で，中央部が凹む。	口縁部内・外面－斜位のハケ目整形後先端部を横位のナデ。体部外面－斜位のハケ目整形，体部内面－ヘラナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	70% P180
3	器台形土器 土師器	A 9.6 B 11.8 D 14.2 E 9.5	器受部は接合部から内彎気味に開いて立ち上がる。脚部は「ハ」の字状を呈し，裾部でやや内彎する。器受部中央に孔を有する。	器受部内・外面－横位のナデ。脚部外面－縦位のハケ目整形，内面－横位のハケ目整形。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	85% P182
4	器台形土器 土師器	A (8.4) B 8.7 D 9.8 E 5.9	器受部は接合部から内彎気味に開いて立ち上がる。脚部は「ハ」の字状を呈し，裾部でやや開く。脚部上位に3孔，器受部中央に孔を有する。	器受部内・外面－ヘラ磨き。脚部外面－ハケ目整形後ヘラ磨き，脚部内面－ヘラナデ。	砂粒 赤褐色 普通	70% P181
5	甕形土器 土師器	A (17.6) B (4.6)	口縁部は「く」の字状に屈曲している。胴部はほぼ球形を呈していると思われる。	口縁部外面－横位のナデ，内面－横位のハケ目整形後横位のナデ。胴部外面－斜位のハケ目整形。	砂粒 にぶい褐色 普通	3% P185
6	甕形土器 土師器	B (16.5) C 7.6	胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部中位に最大径を有すると思われる。	胴部外面－斜位のハケ目整形後ヘラナデ，内面－横位のヘラナデ。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	30% P183

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第71図 7	台付甕形土器 土師器	B(15.6)	胴部は接合部から内彎気味に立ち上がる。胴部中位に最大径を有する。台部は欠損する。	胴部外面－斜位のハケ目整形，内面－横位のヘラナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	30% P184
8	台付甕形土器 土師器	B (4.0) E (1.2)	胴部は接合部から内彎気味に開き，台部は「ハ」の字状を呈すると思われる。	胴部・台部外面－縦位のハケ目整形，胴部・台部内面－ヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	10% P186

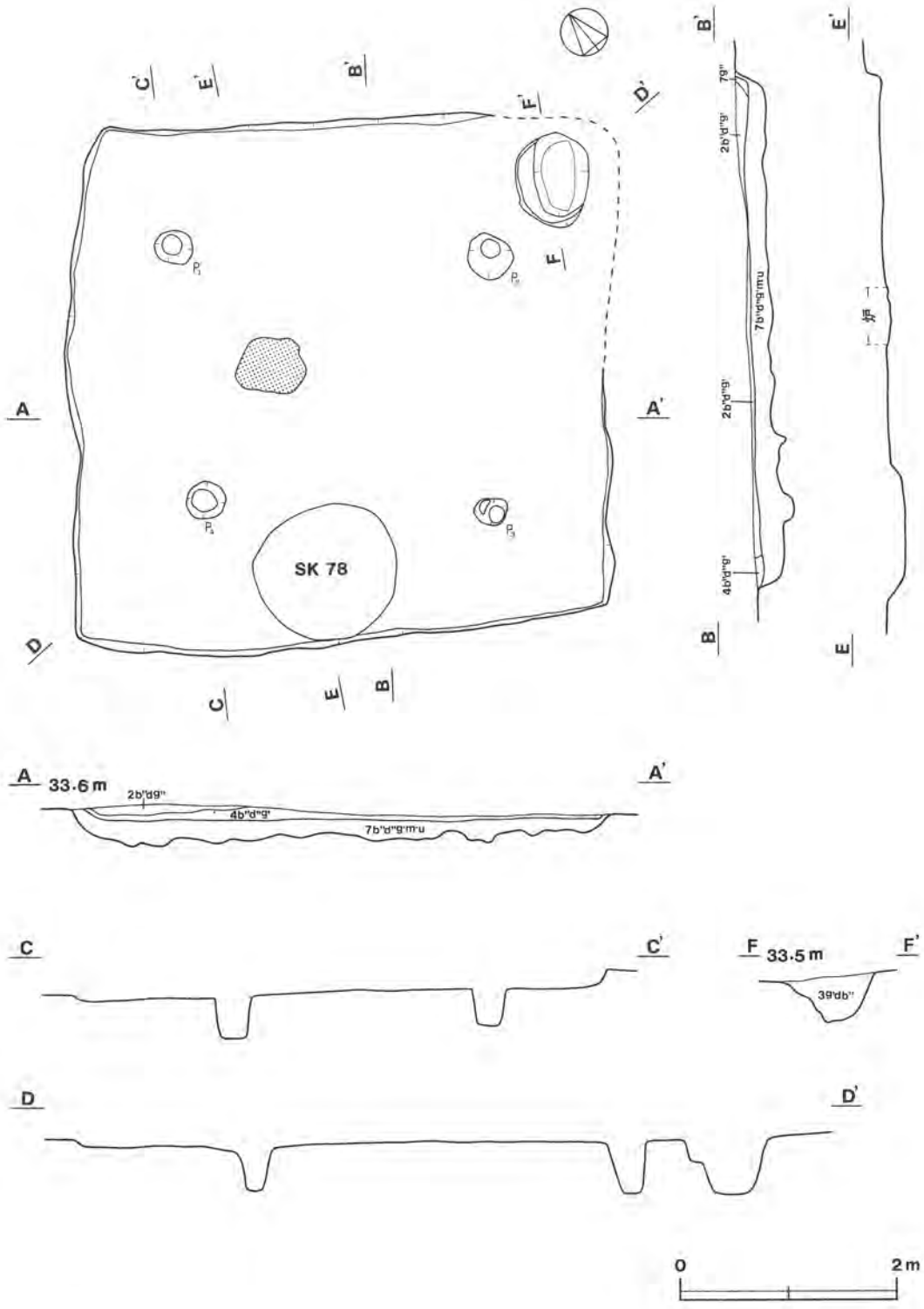
第34号住居跡（第72図）

本跡は，当遺跡の北部D3a$_3$区を中心に確認され，第33号住居跡の北東側約2.2mに位置し，南西側で第78号土坑と重複しており，本跡の床面を掘り込んでいることから，本跡の方が古い。本跡が検出された台地は，第33号住居跡で述べたとおりであり，本跡も東コーナー部と南東壁の北側が検出できないことから，削平を受けたものと思われる。

平面形は，長軸4.98m，短軸4.80mの方形で，長軸方向はN－54°－Wである。壁はロームで締まり，全壁ともほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は3～14cmであるが，東コーナー部と南東壁の北側半分は存在しない。床面はロームを12～20cmほど掘り込み，黒色土，ローム，ロームブロックの混合土の貼り床が施され，炉を中心に緩やかな起伏がみられる。柱穴の内側は踏み固められて硬く締まっている。炉は中央からやや北西側に検出され，長径65cm，短径50cmの不整楕円形を呈し，床面を皿状に5cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子少量を含むにぶい赤褐色土が堆積し，炉床は赤変硬化しゴツゴツしている。ピットは4か所検出され，規模と配列からP$_1$～P$_4$が主柱穴と思われる。主柱穴は各コーナーのやや内側に配列され，規模は径27～38cm，深さ39～47cmである。貯蔵穴は，東コーナー部に位置し，開口部は長径84cm，短径68cm，深さ52cmの楕円形を呈し，壁の西側は深さ約22cmほどのところに段を有し，他の壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。貯蔵穴の覆土はローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む褐色土の単一層である。

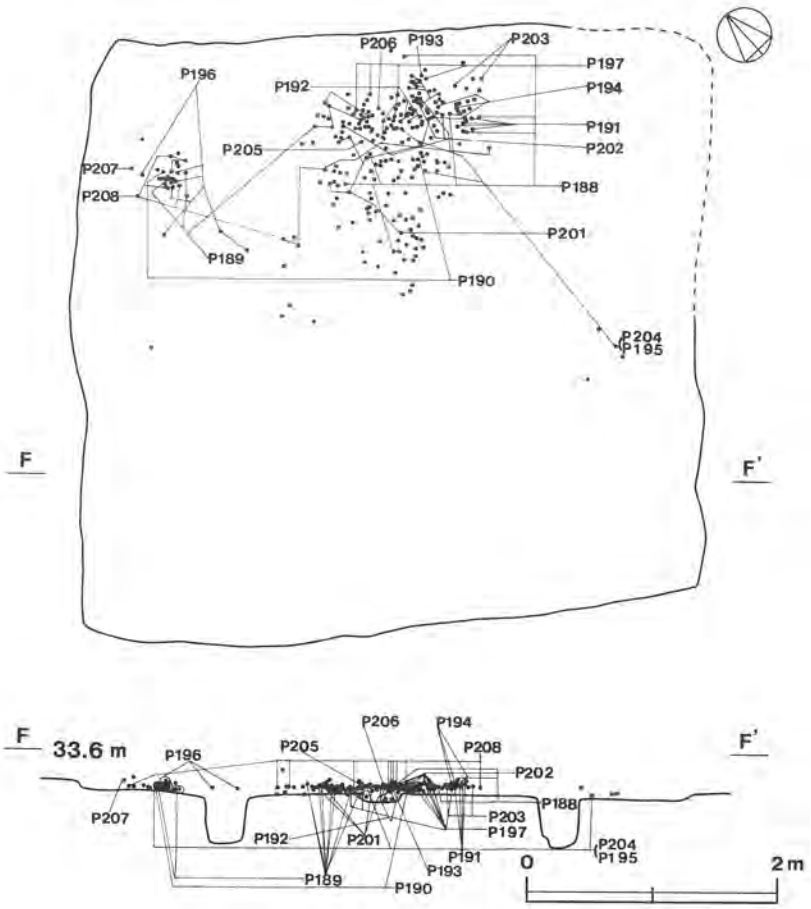
覆土は2層からなり，上層はローム粒子，焼土粒子，炭化粒子微量を含む黒褐色土が，下層はローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物は，炉の北東側0.4mの床面，長径1.9m，短径1.4mほどの楕円形状の範囲から台付甕形土器（P188），甕形土器（P190・P196・P202），甑形土器（P192）の破片が散らばった状態で，甕形土器（P189・P195），坩形土器（P191），坏形土器（P194）の破片が，まとまった状態で出土し，完形や半完形に復元できた遺物が多数ある。北コーナー付近の床面から高坏形土器（P207）の脚部が正位の状態で，口縁部を除いてほぼ完形に復元された甕形土器（P208）がつぶれた状態で出土している。また，貯蔵穴の覆土下層からほぼ完形の埦形土器（P193）が正位の状態で出土したが，これに接合する破片3片が，土器片の集中して出土した地点に散らばっていた。そのほ



第72図　第34号住居跡実測図

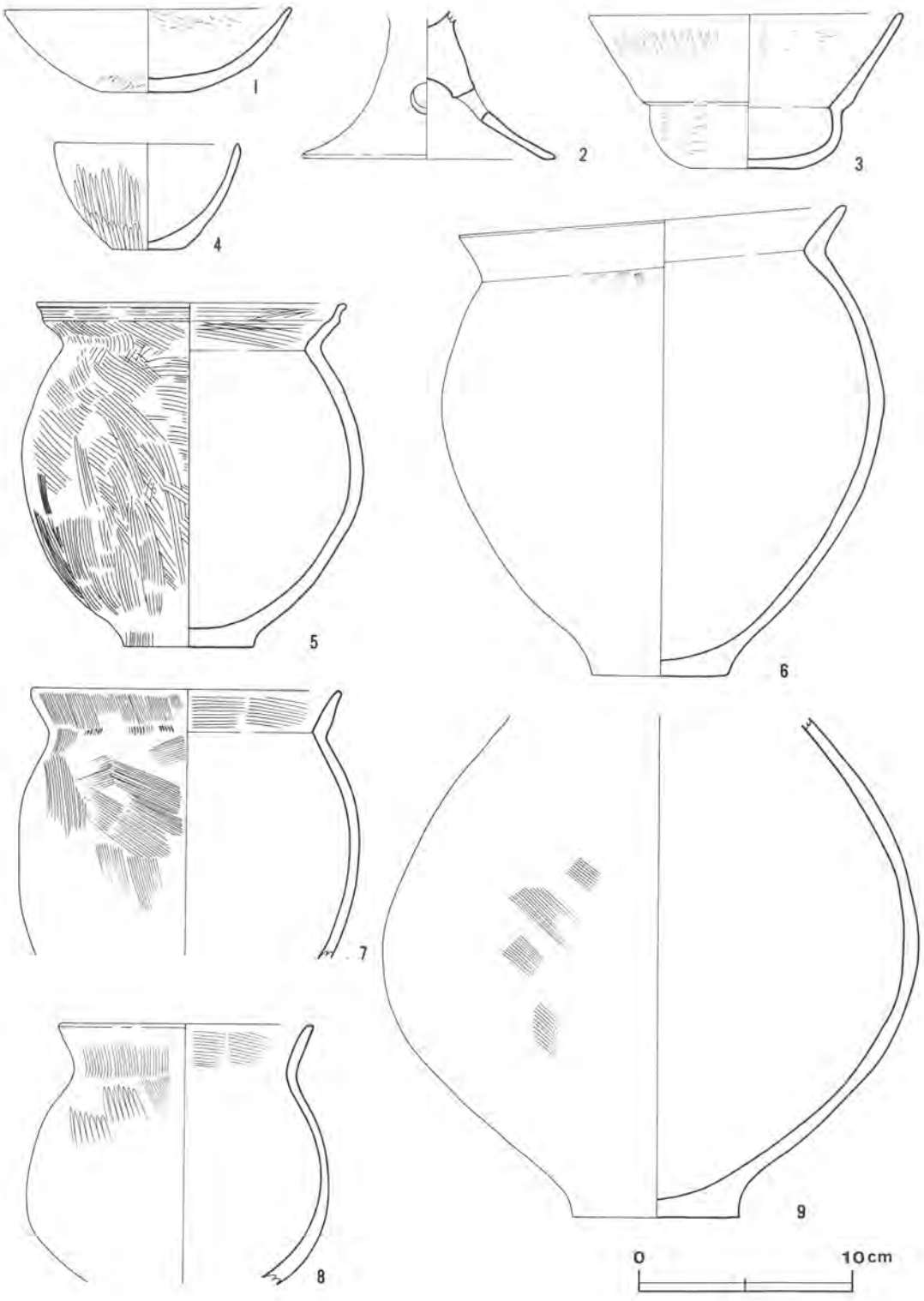
か，覆土中から土師器片144片が出土している。なお，復元された土器の中には二次焼成を受けた土器片だけで復元された土器（P192）もある。それらは，すべて五領式に比定される。



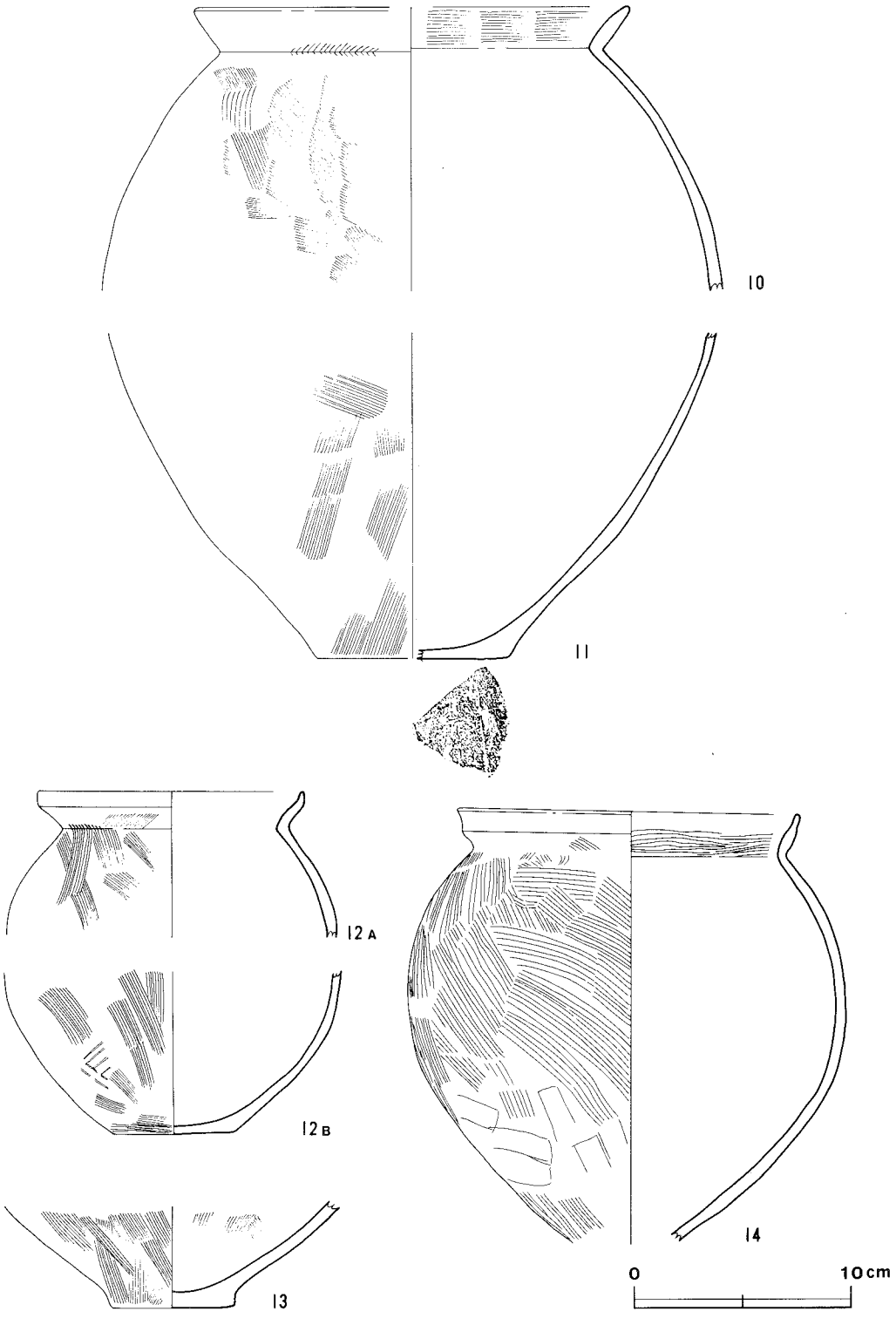
第73図　第34号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

第34号住居跡出土遺物観察表

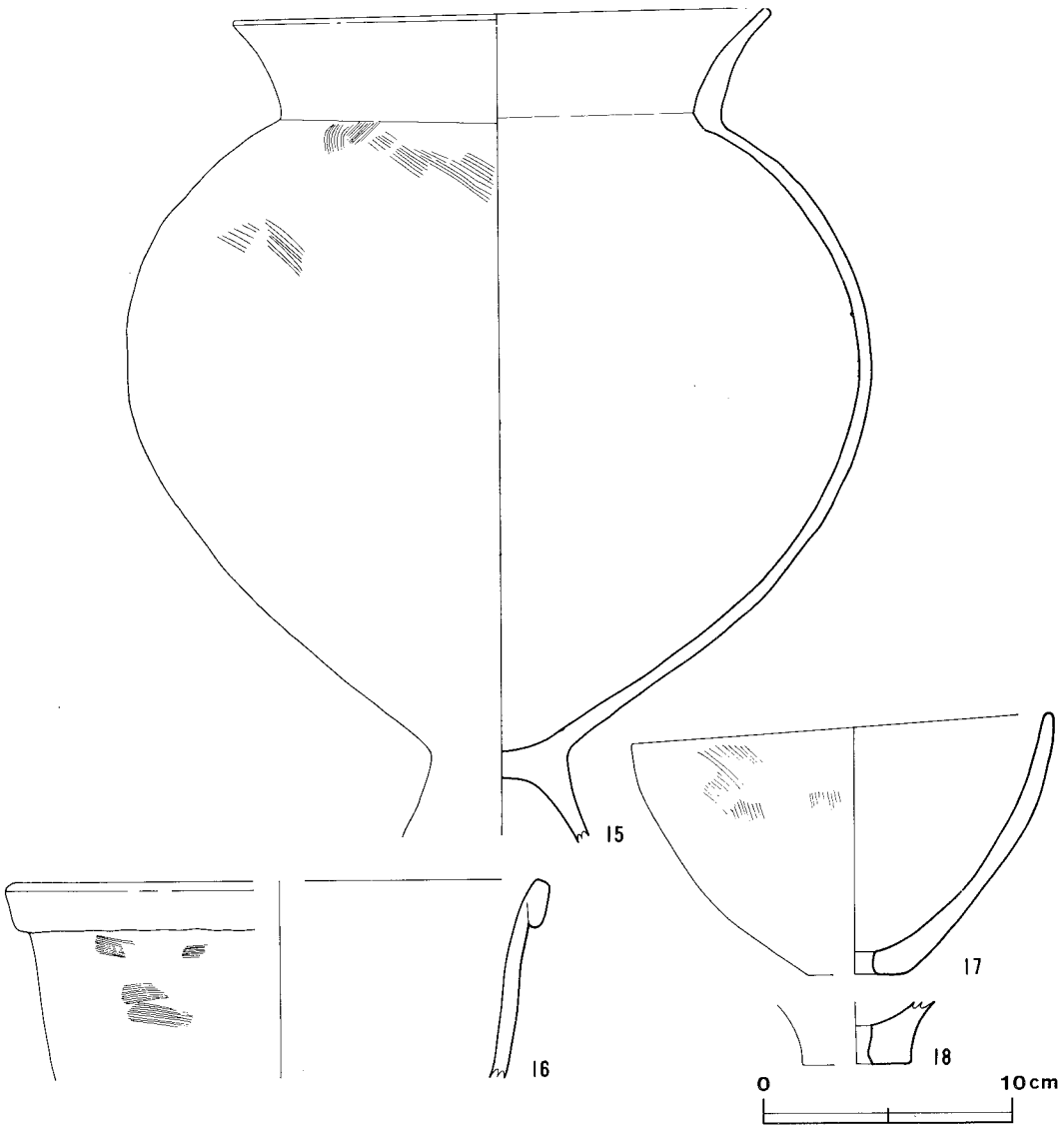
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	坏形土器 土師器	A 13.5 B 3.9 C 4.0	体部は底部から内彎しながら大きく開く。底部は平底である。	体部外面－ヘラナデ後横位のヘラ磨き，体部内面－横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	80% P194 外面煤付着
2	高坏形土器 土師器	D 11.8 E 6.5	脚部は接合部から外反しながら裾部に至る。脚部中位に3孔を有する。坏部は欠損している。	脚部外面－斜位のハケ目整形後縦位のヘラナデ，脚部内面－横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	50% P207
3	坩形土器 土師器	A 14.8 B 7.4 C 5.0	口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。胴部は底部から内彎して立ち上がり，口縁部との境は凹む。底部は平底である。	口縁部外面－ハケ目整形後縦位のヘラ磨き，内面－横位のヘラ磨き。体部外面－ハケ目整形後横位のヘラ磨き，内面－横位のヘラ磨き。	スコリア・砂粒 明赤褐色 普通	70% P191 二次焼成



第74図　第34号住居跡出土遺物実測図(1)



第75図　第34号住居跡出土遺物実測図(2)



第76図　第34号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 4	埦形土器 土師器	A 8.7 B 5.0 C 3.1	体部は底部から内彎して立ち上がり，底部は平底である。	口縁部外面－横位のヘラ磨き，口縁部内面－横位のナデ。胴部外面－斜位のハケ目整形後縦位のヘラ磨き，内面－縦位のヘラ磨き。	砂粒 赤褐色 普通	70% P193
 5	甕形土器 土師器	A 14.5 B 16.2 C 6.1	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がり，中位で外反して端部に至る。胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。底部は平底である。	口縁部内・外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ。胴部外面－斜位のハケ目整形，胴部内面－ヘラナデ。	砂粒 褐色 普通	98% P189 外面煤付着

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第74図 6	甕形土器 土師器	A 18.1 B 22.3 C 6.3	口縁部は，頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，胴部中位に最大径を有する。底部は平底である。	口縁部内・外面－横位のナデ。胴部外面－斜位のハケ目整形後斜位のヘラナデ，内面－縦位のヘラナデ。	砂粒 褐色 普通	60% P190
7	甕形土器 土師器	A 14.6 B(12.5)	口縁部は，頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がる。胴部は球形を呈し，胴部中位に最大径を有する。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，口縁部内面－横位のハケ目整形。胴部外面－斜位のハケ目整形，胴部内面－横位のナデ。	砂粒 暗褐色 普通	50% P196
8	甕形土器 土師器	A 12.0 B(12.2)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がる。胴部は球形を呈し，胴部中位に最大径を有する。	口縁部・胴部外面－斜位のハケ目整形後縦位のヘラナデ。口縁部内面－横位のハケ目整形。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	60% P202 二次焼成，外面煤付着
9	甕形土器 土師器	B(23.6) C 8.0	胴部は底部から内彎して立ち上がり，胴部中位に最大径を有する。底部は平底である。	胴部外面－斜位のハケ目整形後斜位のヘラナデ，胴部内面－横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	60% P208
第75図 10	甕形土器 土師器	A(19.9) B(13.1)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し，外傾して立ち上がる。胴部は球形を呈し，胴部中位に最大径を有すると思われる。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，口縁部内面－横位のハケ目整形。胴部外面－斜位のハケ目整形，胴部内面－横位のナデ。	砂粒 黒褐色 普通	10% P197
11	甕形土器 土師器	B(15.1) C (8.8)	胴部は底部から内彎気味に立ち上がる。底部は平底で，木葉痕を有する。	胴部外面－斜位のハケ目整形，内面－横位のヘラナデ。	砂粒 赤褐色 普通	15% P203
12A	甕形土器 土師器	A 12.2 B (6.8)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がり，口縁部の先端部でやや垂直になる。胴部はほぼ球形を呈し，胴部中位に最大径を有する。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，口縁部内面－横位のハケ目整形後横位のナデ。胴部外面－斜位のハケ目整形，胴部内面－横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P195 P204と同一個体 外面煤付着
12B	甕形土器 土師器	B (7.5) C 5.5	胴部は底部から内彎しながら立ち上がる。胴部中位に最大径を有すると思われる。底部は平底である。	胴部外面－全体にハケ目整形，内面－横位のナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P204 P195と同一個体 外面煤付着
13	甕形土器 土師器	B (4.7) C 5.6	胴部は底部から内彎して立ち上がり，底部は平底である。	胴部外面－斜位のハケ目整形，胴部内面－ハケ目整形後ヘラナデ。	砂粒 褐色 普通	15% P205 外面煤付着
14	台付甕形土器 土師器	A 15.7 B(20.0)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がり，中位で外反して端部に至る。胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。台部は欠損している。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，口縁部内面－横位のハケ目整形後横位のナデ。胴部外面－斜位のハケ目整形後胴部下位－ヘラ削り。	砂粒 にぶい褐色 普通	90% P201 外面煤付着
第76図 15	台付甕形土器 土師器	A 21.5 B(33.2) E (2.3)	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。台部は「ハ」の字状に開く。	口縁部内・外面－横位のナデ。胴部・脚部外面－斜位のハケ目整形後斜位のヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	90% P188 外面煤付着
16	甑形土器 土師器	A(21.9) B (8.0)	口縁部は複合口縁で，胴部上位は外傾して口縁部に至る。口唇部は平坦である。	口縁部外面－横位のハケ目整形後横位のナデ。胴部外面－横位のハケ目整形。口縁部・胴部内面－横位のハケ目整形後横位のナデ。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	5% P200
17	甑形土器 土師器	A 17.0 B 10.5 C 4.0	口縁部はやや垂直に立ち上がり，口縁端部に最大径を有する。胴部は底部から内彎しながら外側に開く。底部は平底で，底部中央に孔を有する。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，内面－横位のナデ。胴部外面－斜位のハケ目整形後斜位のヘラナデ，内面－横位のヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	97% P192 二次焼成

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第76図 18	甕形土器 土師器	B (2.5) C 4.3	胴部下位は，平底の底部から外反して立ち上がる。底部中央に径1.6cmの孔を有する。	胴部内・外面一縦位のヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	5％ P206

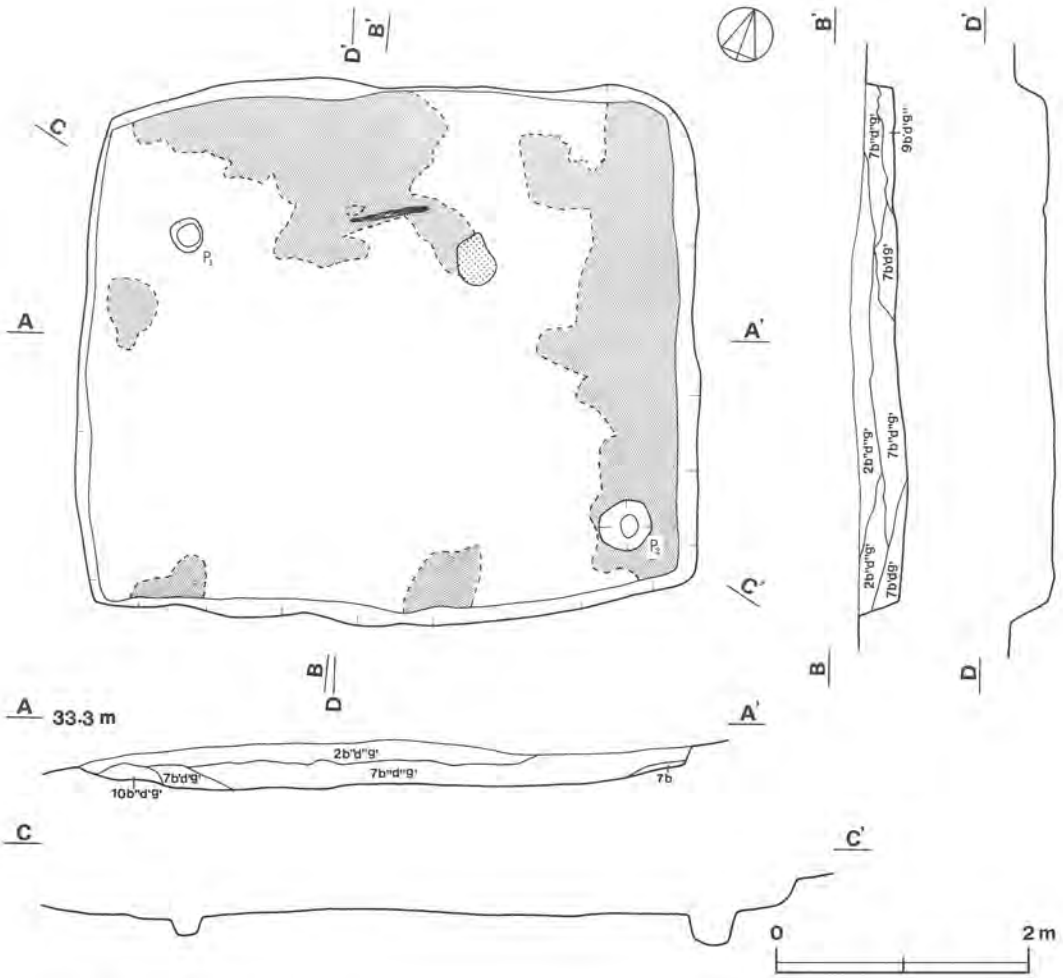
第35号住居跡（第77図）

本跡は，当遺跡の北部D3i$_9$区を中心に確認され，第36号住居跡の南側約16mに位置している。また，本跡が検出された地区は，南側の谷津田に向って傾斜する台地の縁辺部にある。

平面形は，長軸4.94m，短軸4.38mの隅丸長方形で，長軸方向はN－72°－Eである。壁はロームで硬く締まり，外傾して立ち上がっている。壁高は24～30cmである。南西壁は削平を受けてかなり低くなっておりわずかに残存している。床面はロームで，南コーナー部を除いてほぼ平坦であるが，南東壁に向ってごく緩やかに傾斜し，硬く締まっている。特に炉の周辺はよく踏み固められている。炉は中央からやや北東側に位置し，長径40cm，短径30cmの不整楕円形を呈し，床面を利用した地床炉である。炉床は焼けて硬化している。ピットは2カ所検出され，P$_1$は西コーナー付近に位置し，規模は径27cm，深さ16cmで，本跡の主柱穴と思われる。主柱穴が1カ所西コーナー付近に検出できたことから，北・東・南の各コーナーにも存在するものと考え，調査したが，確認することはできなかった。P$_2$は東コーナーで，ほぼP$_1$の対角線上に位置しているため，当初柱穴と考えられたが，規模と配列から貯蔵穴とした。開口部は径41cm，深さ29cmの円筒状を呈し，壁は外傾ぎみに立ち上がり，底面はほぼ平坦である。

覆土は2層から成り，上層にはローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む黒褐色土，下層には焼土粒子，炭化粒子多量を含む暗褐色土が自然堆積している。また，焼土域が各壁際に検出され，炭化材も床面に確認されていることから，火災に遭ったものと思われる。

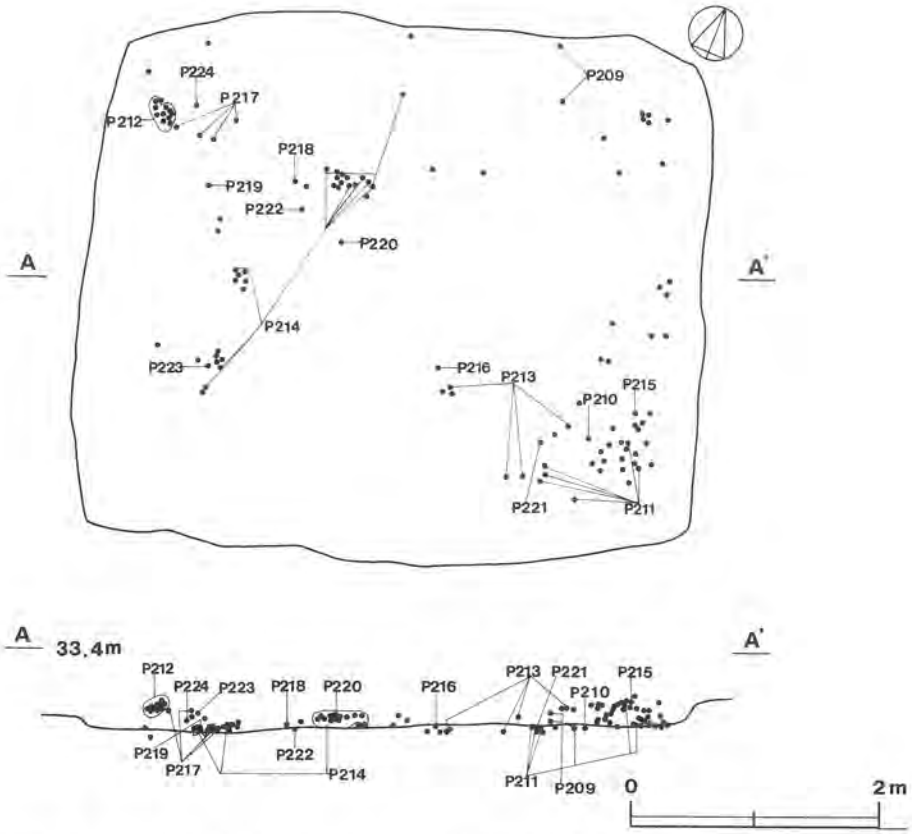
遺物は，東コーナー部の床面から完形やほぼ完形に復元できた甕形土器（P210・P211）が口縁部を南に向けまとまった状態で出土し，また，同所から甕形土器（P213・P215・P216）の口縁部が散らばった状態で，器台形土器（P221）の器受部が倒立の状態で出土している。西コーナー部の床面や覆土下層から，完形や半完形に復元できた椀形土器（P224）や甕形土器（P212）の破片がまとまった状態で，器台形土器（P219）の脚部が正位の状態で出土している。北コーナー部の床面から台部の一部を欠損した台付甕形土器（P209）が口縁を西に向けて横位の状態で出土している。また，中央部の床面から高坏形土器（P220）の脚部や台付甕形土器（P222）の台部が正位や倒位の状態で出土している。そのほか，土師器片238片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。



第77図　第35号住居跡実測図

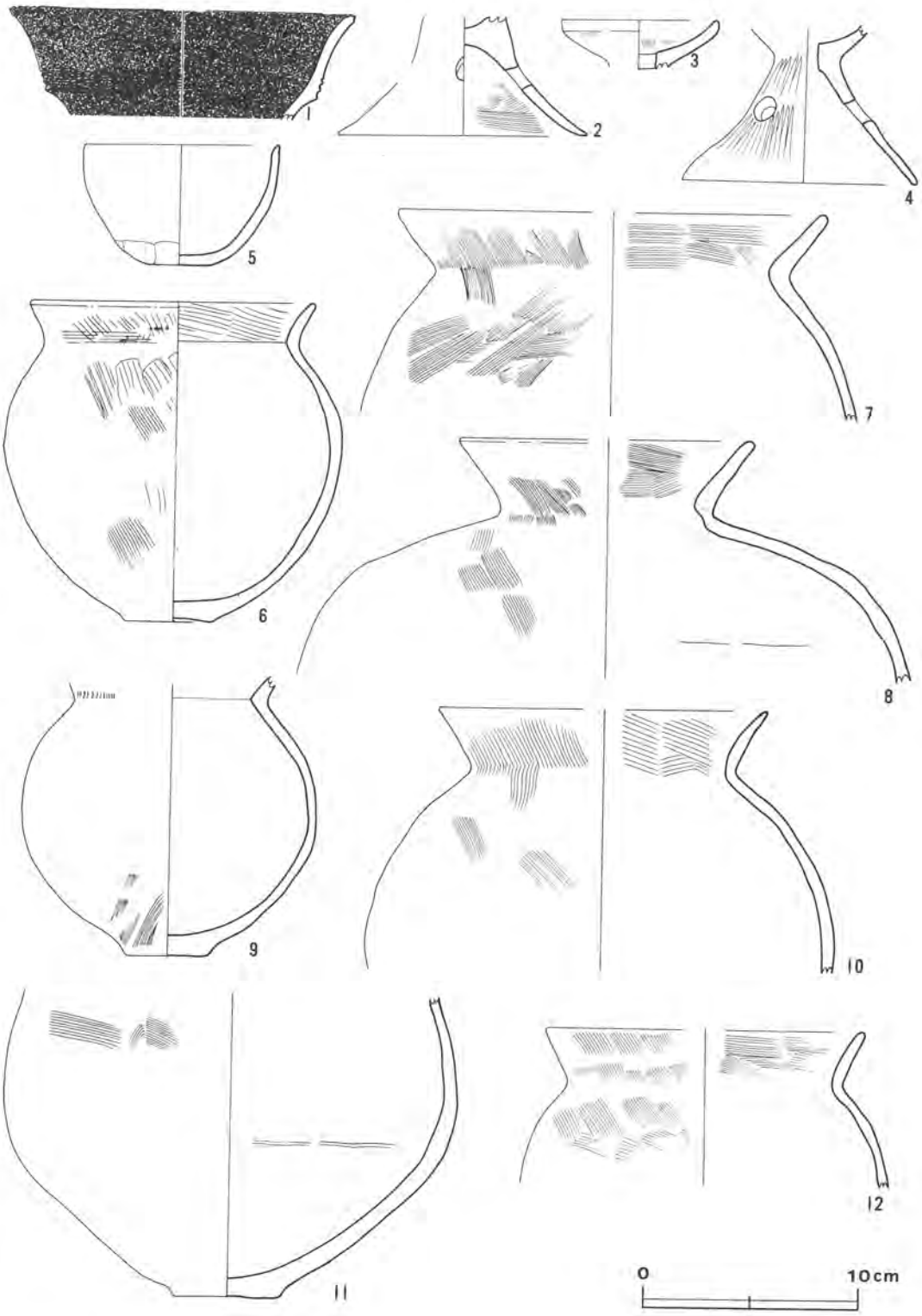
第35号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第79図 1	高坏形土器 土師器	A (16.1) B (5.0)	外反する坏部片で，坏部下位の外面には横走りする3条の沈線とその下側に稜を有する。口唇部と稜にキザミを付している。	口縁部内・外面－横位のヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	3% P218 内・外面朱彩
2	高坏形土器 土師器	D 11.4 E 5.6	脚部は接合部から外反しながら裾部に至る。脚部中位に4孔を有する。坏部は欠損している。	脚部外面－縦位のヘラ磨き，脚部内面－斜位のハケ目整形。	砂粒 赤褐色 普通	50% P220 二次焼成
3	器台形土器 土師器	A 7.3 B (2.2)	器受部は，やや内彎して立ち上がり，口縁端部でやや垂直に立ち上がる。器受部・底部に孔を有する。	器受部内・外面－縦位のハケ目整形後斜位のヘラナデ。口縁部内・外面－横位のナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	40% P221
4	器台形土器 土師器	B (7.2) D 10.8 E 5.8	脚部は接合部から「ハ」の字状に開き，裾部に至る。脚部中位に3孔，接合部中央に孔を有する。	脚部外面－縦位のヘラ磨き，脚部内面－横位のナデ。	砂粒 赤褐色 普通	50% P219 二次焼成

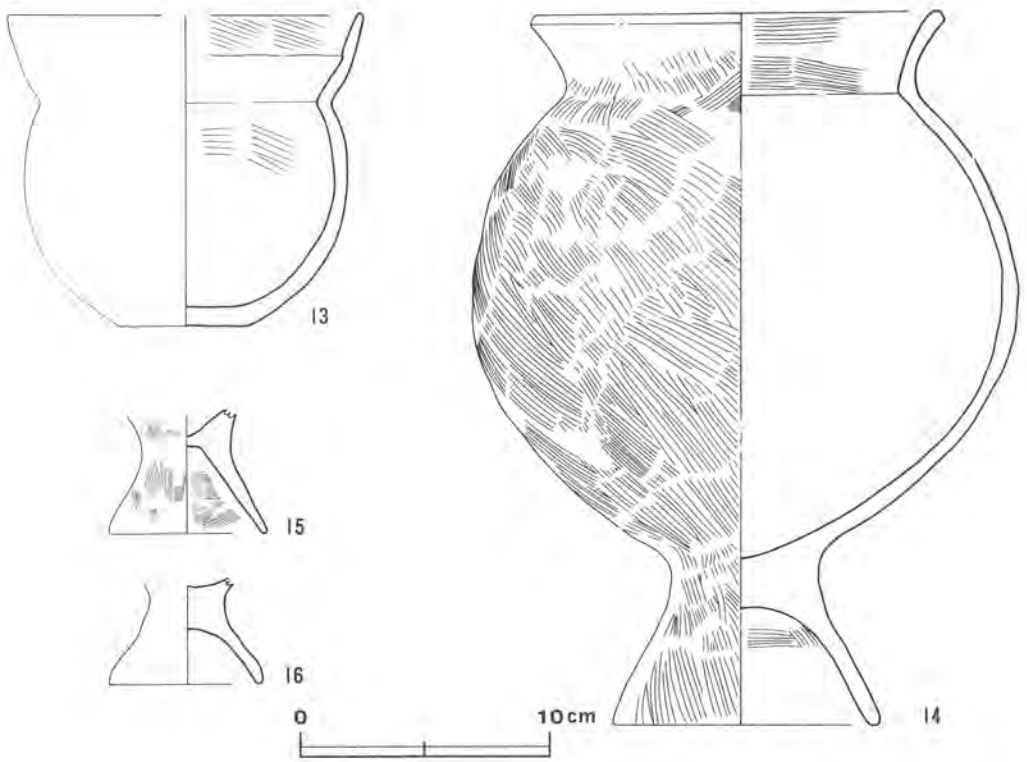


第78図　第35号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 5	塊形土器 土師器	A 9.0 B 5.8 C 3.0	体部は底部から内彎しながら立ち上がり，器厚の薄い口縁部に至る。底部は平底である。	口縁部内・外面－横位のヘラナデ。体部外面－斜位のハケ目整形後ヘラナデ。	砂粒・スコリア きぶい橙色 普通	98% P224
6	甕形土器 土師器	A 13.3 B 15.0 C 4.1	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がる。胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。底部は平底である。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，口縁部内面－斜位のハケ目整形。胴部外面－斜位のハケ目整形後斜位のヘラナデ，胴部内面－横位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	100% P210
7	甕形土器 土師器	A(20.0) B (9.6)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がる。胴部は球形を呈している。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，口縁部内面－横位のハケ目整形。胴部外面－斜位のハケ目整形。	砂粒 明褐色 普通	20% P216 外面煤付着
8	甕形土器 土師器	A(13.7) B(11.2)	口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。胴部はやや横長の球形を呈し，胴部中位のやや上側に最大径を有すると思われる。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，口縁部内面－横位のハケ目整形。胴部外面－斜位のハケ目整形，胴部内面－横位のヘラナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	20% P213 二次焼成
9	壺形土器 土師器	B(12.7) C 4.0	頸部は「く」の字状に屈曲する。胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部中位に最大径を有する。底部は平底である。	胴部外面－斜位のハケ目整形後ヘラナデ，胴部内面－横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	75% P212



第79図　第35号住居跡出土遺物実測図(1)



第80図　第35号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 10	甕形土器 土師器	A(15.3) B(12.2)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がる。胴部は球形を呈し，胴部中位に最大径を有する。	口縁部内・外面－斜位のハケ目整形。胴部外面－斜位のハケ目整形後斜位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	20% P217
11	甕形土器 土師器	B(14.2) C 5.0	胴部は底部から内彎して立ち上がる。胴部中位のやや下側に最大径を有する。	胴部外面－斜位のハケ目整形後斜位のヘラナデ，胴部内面－横位のナデ。	砂粒 赤褐色 普通	40% P215 外面煤付着
12	甕形土器 土師器	A(14.8) B (7.3)	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲して立ち上がる。胴部は球形を呈し，胴部中位に最大径を有する。	口縁部・胴部外面－斜位のハケ目整形。口縁部内面－横位のハケ目整形。胴部内面－縦位のヘラナデ。	砂粒・スコリア 灰褐色 普通	20% P214 二次焼成
第80図 13	甕形土器 土師器	A(14.2) B 12.7 C 5.0	口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し，外傾して立ち上がる。胴部は球形を呈し，胴部中位に最大径を有する。底部は平底である。	口縁部外面－横位のナデ，口縁部内面－1段の輪積痕が残り斜位のハケ目整形。胴部外面－斜位のヘラナデ，胴部内面－斜位のハケ目整形。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	70% P211 二次焼成
14	台付甕形土器 土師器	A 16.3 B 28.8 D 10.7 E 4.7	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，口縁部内面－横位のハケ目整形。胴部・台部外面－斜位のハケ目整形。胴部内面－横位のヘラナデ。	砂粒・小礫 にぶい褐色 普通	95% P209 外面煤付着
15	台付甕形土器 土師器	B (4.8) D 6.4 E 3.5	台部は接合部から「ハ」の字状に開き裾部に至る。胴部は欠損している。	台部外面－斜位のハケ目整形，台部内面－横位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 褐灰色 普通	30% P222

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第80図 16	台付甕形土器 土師器	B (4.0) D 6.2 E 2.2	台部は接合部から「ハ」の字状に開き，裾部でやや内彎する。胴部は欠損している。	台部外面－斜位のハケ目整形後縦位のヘラナデ，台部内面－横位のナデ。	スコリア・砂粒にぶい褐色 普通	30% P223

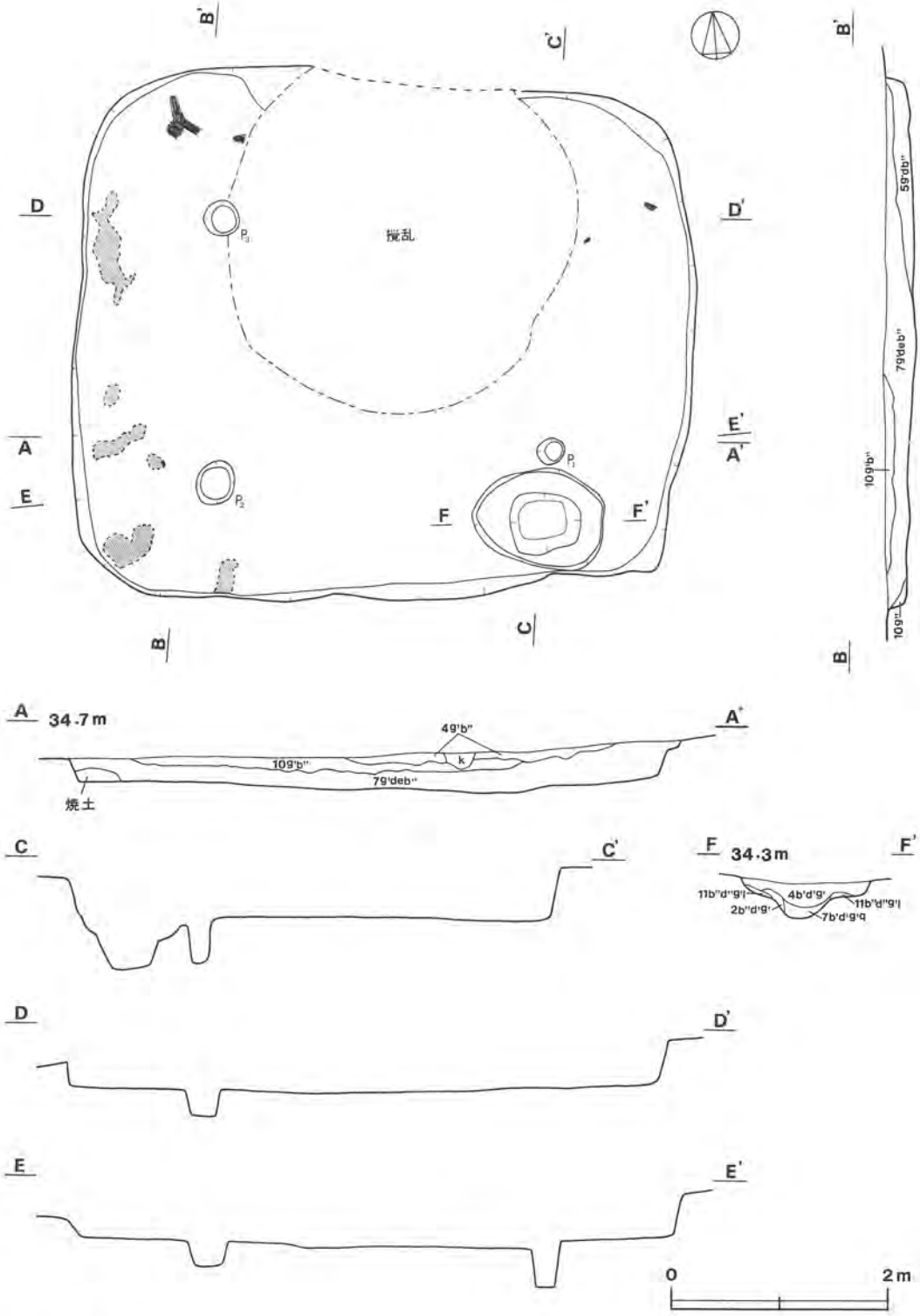
第36号住居跡（第81図）

本跡は，当遺跡の北部D4d$_1$区を中心に確認され，第37号住居跡の西側約6m，第3号堀の東側2.2mに位置している。本跡の検出された地区は，神明神社境内があった所で，現在も大きな切り株や抜根跡が残っている。本跡の3分の1が抜根跡によって破壊されている。

平面形は，長軸5.70m，短軸4.92mの隅丸長方形で，長軸方向はN－85°－Wである。壁はロームで硬く締まり，垂直に立ち上がっている。壁高は20～40cmである。南東コーナー部付近の壁は大木の根の除去のため一部崩れ落ちた。北側床面の3分の1は直径約3.4mの抜根跡のために破壊されているが，その部分を除くと，床面はほぼ平坦で，全体的に硬いロームである。炉は抜根跡によって消滅したか，あるいは元来なかったのか不明である。ピットは3ヵ所検出され，規模と配列からP_1～P_3は主柱穴と思われる。主柱穴は南東・南西・北西のコーナー部の内側に位置し，規模は径26～35cm，深さ26～41cmである。北東コーナーにも検出される可能性が高いと考え精査をしたが，確認することはできなかった。撹乱によって消滅したと考えられる。貯蔵穴は南東コーナー部からやや西側に寄った南壁下に位置し，開口部は長径120cm，短径90cmの楕円形を呈し，深さは45cmである。さらに開口部から深さ13cmのところで長軸66cm，短軸54cmの長方形状に掘り込まれている。底面は丸味を帯びている。貯蔵穴の覆土はローム粒子，焼土粒子，炭化粒子少量を含む黒褐色土，暗褐色土が自然堆積している。

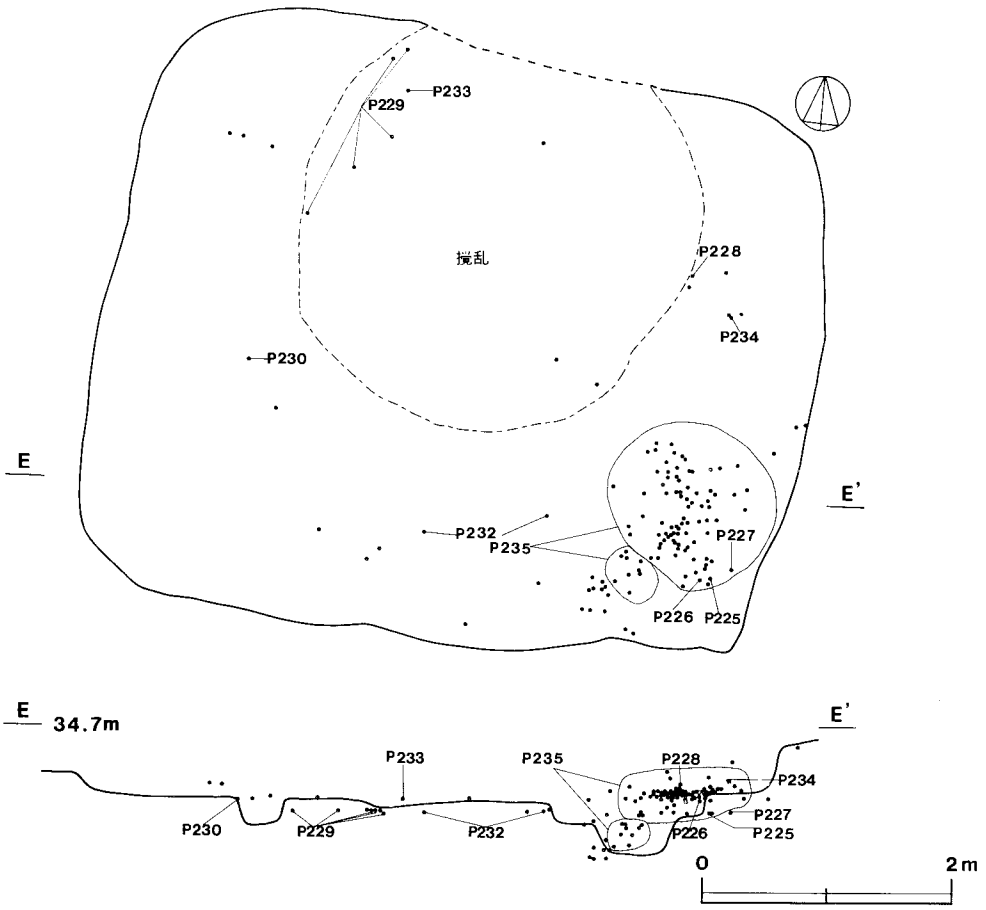
覆土は3層から成り，上層，中層にはローム粒子少量，焼土粒子微量を含む黒褐色土及び暗褐色土，下層には焼土粒子，炭化粒子少量を含む極暗褐色土が自然堆積している。床面の西壁際，南壁際から焼土域が6ヵ所検出された。焼土内には炭化材が含まれており，焼土と炭化材の出土状況から，本跡は火災に遭ったものと思われる。

遺物は，南東コーナー部の貯蔵穴の北側の床面から，破片142点が接合して復元できた大型壺形土器（P235）が出土した。これらの破片は，第82図のように径1.4mほどの範囲に内面を上向きにし，つぶれたように散らばっていた。南側ほどバラバラに散らばり小さい破片のものが多く，流れて重なったような状態のものもあった。出土範囲の北端から胴部下位にあたる長さ60cm，幅40cmの丸味を帯びた最大破片が正位の状態で出土している。また，この破片は，輪積痕にそって割れており，4片が接合して完形になった底部の上に重なっていた。出土範囲の南端から，口唇部を欠損した口縁部が開口部を西に向け横位の状態で出土している。さらに，貯蔵穴の覆土中からも大型壺形土器の胴部片9片が流れ込んだ状態で出土している。大型壺形土器の口縁部が出土し

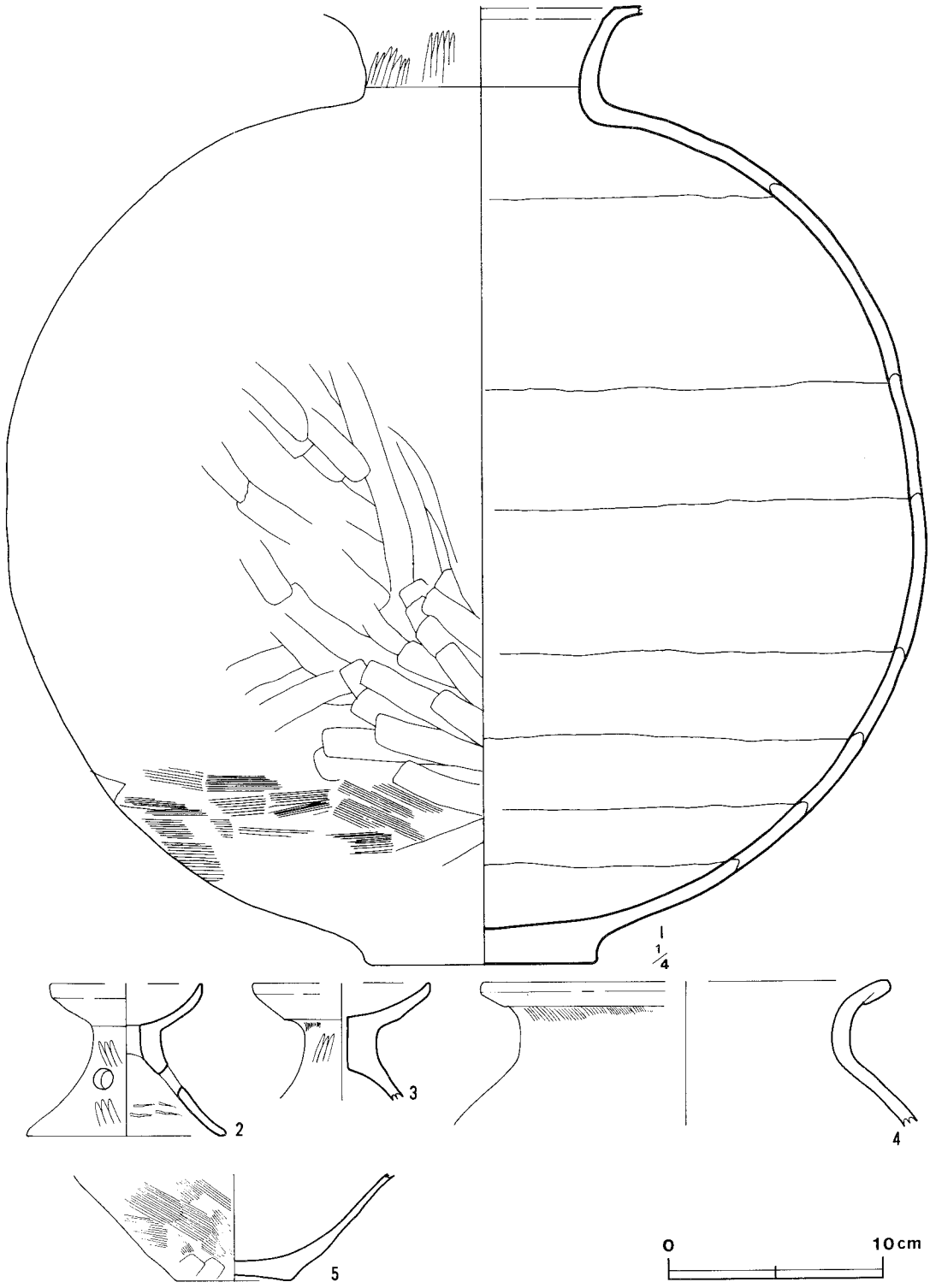


第81図　第36号住居跡実測図

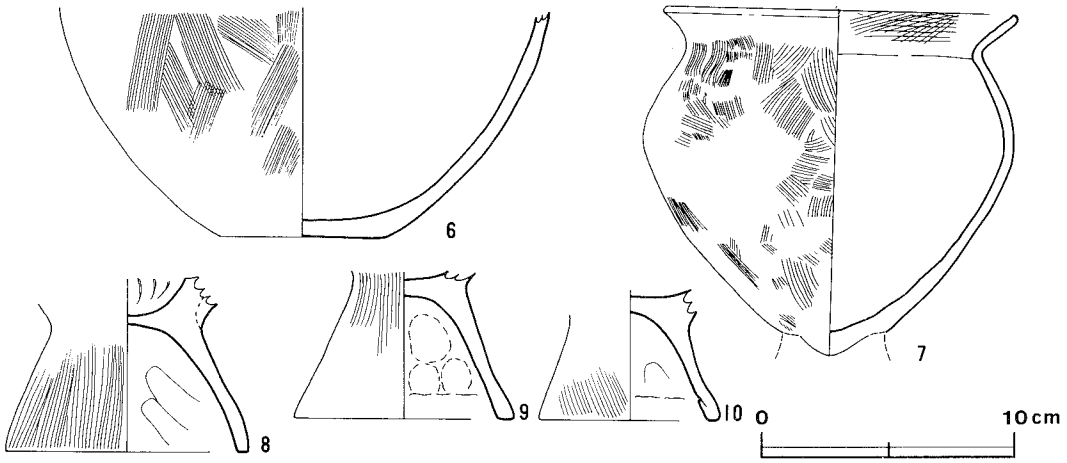
た北側の床面から，完形の器台形土器（P226）が器受部を上向きにしてやや斜位の状態で出土し，それを東から覆うように，台部を欠損した台付甕形土器（P225）が接合部を上向きにして斜位の状態で出土している。さらに，その東側10cmほどの床面から裾部を欠損した器台形土器（P227）が，北西に向けた器受部を下向きにし斜位の状態で出土している。抜根跡内やその周辺の床面や覆土下層から甕形土器（P228・P229・P230）の底部や口縁部，台付甕形土器（P232・P234）が破片で出土している。そのほか，土師器片152片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。なお，覆土上層・中層から縄文式土器片が少量出土している。



第82図　第36号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図



第83図　第36号住居跡出土遺物実測図(1)



第84図　第36号住居跡出土遺物実測図(2)

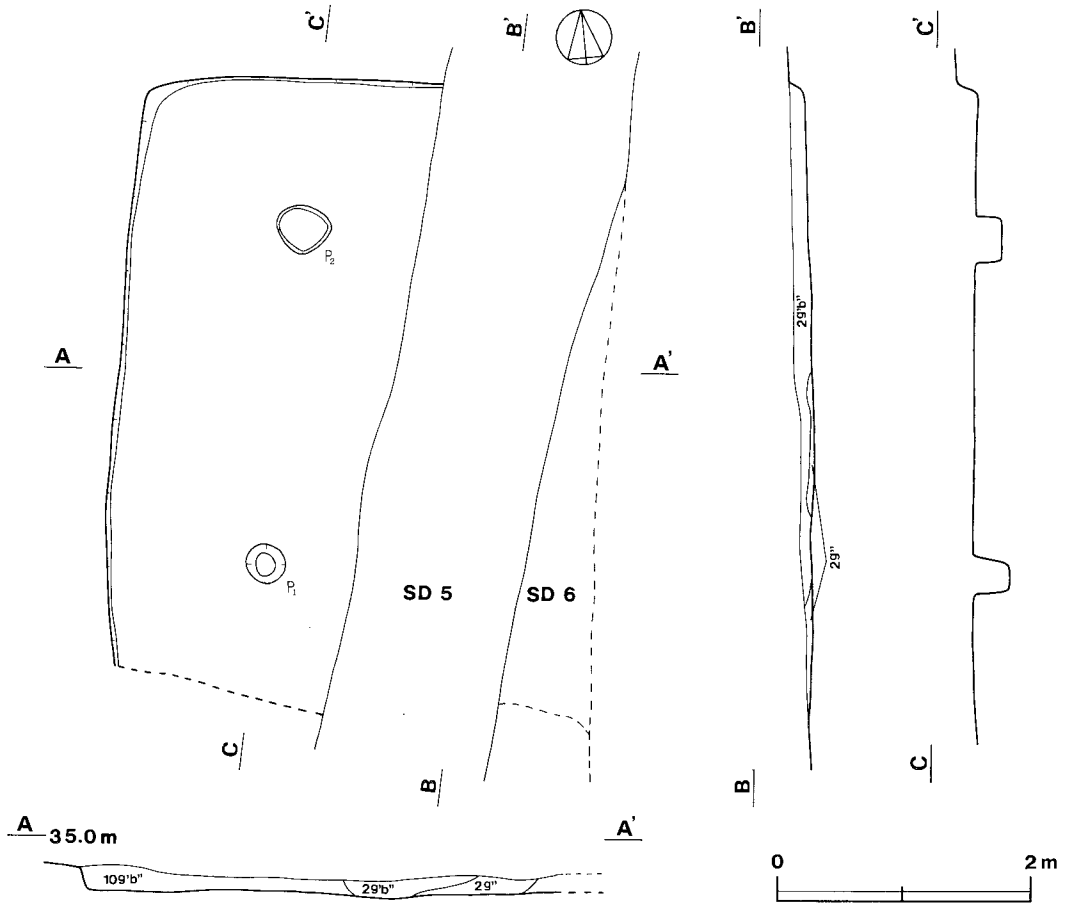
第36号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 1	壺形土器 土師器	B(59.4) C 14.2	口縁部は頸部で屈曲し，外反気味に外上方へ立上がり，上位で水平に開く。胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。底部は平底である。	口縁部外面－ヘラ磨き。口縁部・胴部内面－ヘラナデ。胴部外面－斜位のハケ目整形後上位にヘラ磨き，中位以下にヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	95% P235 内面剝離 口縁部内・外面煤付着
2	器台形土器 土師器	A (7.1) B 7.2 D 9.4 E 5.0	器受部は内彎しながら立ち上がり，口縁部先端でやや外反して開く。脚部は「ハ」の字状を呈し裾部に至る。脚部中位に3孔，器受部中央に単孔を有する。	器受部内・外面－横位のヘラナデ。脚部外面－縦位のヘラナデ後部分的ヘラ磨き，脚部内面－横位のヘラナデ。	砂粒 褐色 普通	98% P226
3	器台形土器 土師器	A (8.3) B (5.6) E (3.4)	器受部は外傾して立ち上がり，口縁端部でほぼ直立する。脚部は，中位までほぼ円筒形状を呈し，その後「ハ」の字状に開く。器受部中央に単孔を有する。器受部下位に外稜を有する。	器受部内・外面－横位のヘラナデ。脚部内・外面－縦位のハケ目整形後縦位のヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	50% P227
4	壺形土器 土師器	A(19.2) B (6.7)	口縁部は複合口縁で，頸部から外反して立上がり，口縁部に至る。胴部は球形を呈していると思われる。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のヘラナデ，口縁部内面－横位のハケ目整形後横位のヘラナデ。胴部外面－縦位のヘラナデ，胴部内面－横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	10% P228
5	甕型土器 土師器	B (5.0) C 5.4	胴部は底部から外傾して外上方へ立ち上がる。底部は平底で，中央が凹む。	胴部外面－斜位のハケ目整形後胴部下位ヘラ削り，胴部内面－縦位のヘラナデ。	砂粒 灰褐色 普通	15% P230
第84図 6	甕形土器 土師器	B (9.3) C 6.6	胴部は底部から内彎しながら立ち上がる。底部は平底である。	胴部外面－斜位のハケ目整形，胴部内面－横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	15% P229
7	台付甕形土器 土師器	A 14.1 B(14.0)	口縁部は頸部で屈曲し外傾して立ち上がる。胴部は接合部から内彎しながら立ち上がり，中位のやや上方に最大径を有する。台部は欠損している。	口縁部外面－縦位のハケ目整形後横位のナデ，内面－斜位のハケ目整形。胴部外面－斜位のハケ目整形，胴部内面－横位のヘラナデ。	砂粒 赤褐色 普通	80% P225 外面煤付着

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第84図 8	台付甕形土器 土師器	B (7.0) D 9.8 E 5.1	台部は接合部から「ハ」の字状に開き，裾部でやや内彎する。	台部外面－斜位のハケ目整形，台部内面－指頭による斜位のナデ。	砂粒 明褐色 普通	20% P232
9	台付甕形土器 土師器	B (6.0) D 8.8 E 5.1	台部は接合部から「ハ」の字状に開き裾部に至る。	台部外面－斜位のハケ目整形後指頭による縦位のナデ，台部内面－指頭による押圧後横位のナデ。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	20% P233
10	台付甕形土器 土師器	B (5.3) D 7.3 E 4.4	台部は接合部から「ハ」の字状に開き裾部に至る。裾部は内側に折り返しを有する。	台部外面－斜位のハケ目整形，台部内面－指頭による押圧後横位のナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% P234

第37号住居跡（第85図）

本跡は，当遺跡の北部D4c$_3$区を中心に確認され，第36号住居跡の東側約6mに位置している。東側で第5号溝，第6号溝と重複しており，本跡の床面を掘り込んでいることから本跡の方が古い。また，土取りにより南側の床の一部と南壁は破壊されている。確認調査の過程で本跡の東側



第85図　第37号住居跡実測図

部は弧状に張り出した神明神社の盛土下に延びていることが判明した。従って，盛土が崩落しないよう注意深く掘削して調査したところ，本跡の東側の床面を2条の溝が切っていることが明確になり，西側を第5号溝，東側を第6号溝と命名した。この結果，本跡は、2条の溝と重複し，その3分の2ほどがすでに破壊されていることが判明した。第6号溝の東側は盛土下のため調査できなかった。

平面形や規模については，調査された部分から推定すると，平面形は方形または長方形で，規模は不明である。壁はロームで硬く締まり，ほぼ垂直に立ち上がっている。北壁と西壁の壁高は15～20cmである。残存する床面はロームで平坦であり，壁際を除いて踏み固められて締まっている。炉は溝によって破壊されたが元来なかったのか不明である。ピットは2か所検出され，規模と配列から，P_1・P_2は主柱穴と思われる。主柱穴は北西コーナーと南西コーナーの内側に位置し，規模はP_1が径32cm，深さ30cm，P_2が径44cm，深さ23cmで，どちらも円形状を呈している。

覆土は2層から成り，上層にはローム粒子少量，焼土粒子微量を含む褐色土，下層にはローム粒子微量を含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物は，床面や覆土中から土師器片36片が出土しているが，接合できるものはなかった。それらは，すべて五領式に比定される。なお，土師質土器片，弥生式土器片が各々1片出土している。

第38号住居跡（第86図）

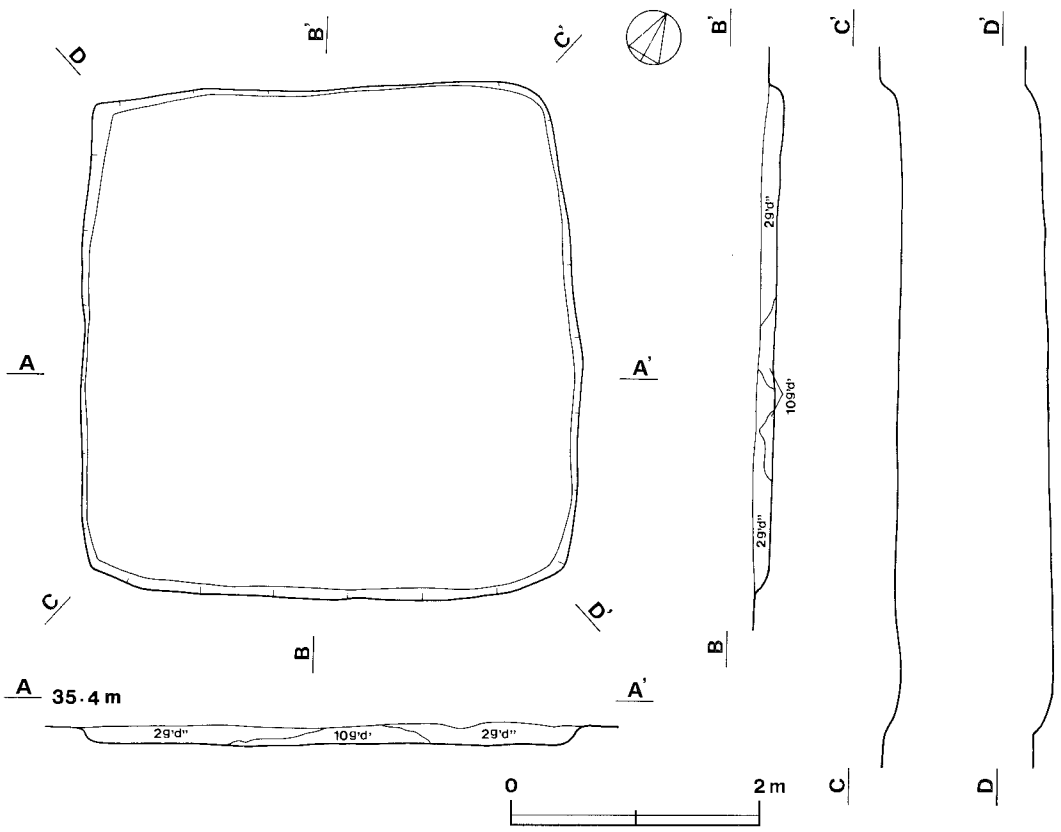
本跡は，当遺跡の北部C4i_3区を中心に確認され，第39号住居跡の南西側6m，第84号土坑の南西側0.4mに位置している。

平面形は，長軸4.10m，短軸3.96mの隅丸方形で，長軸方向はN－27°－Wである。壁はロームで硬く締まっている。西コーナー部と東コーナー部は緩やかに立ち上がっているが，他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は約10cmである。床面はロームでほぼ平坦であり，壁際と中央部付近を除いて踏み固められて締まっている。炉とピットは検出されなかった。

覆土は2層からなり，上層はローム粒子，炭化粒子少量を含む褐色土が，下層は中央部にローム粒子少量，炭化粒子微量を含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物は，床面や覆土下層から土師器片24片が出土しているが，接合できるものはなかった。それらは，すべて五領式に比定される。なお，縄文式土器片4片，黒曜石片1片が出土している。

本跡は，柱穴が不明であること，炉が検出されないこと，遺物の出土がほとんどないことなどから他の住居跡とは異なるため，本跡を竪穴遺構とした。

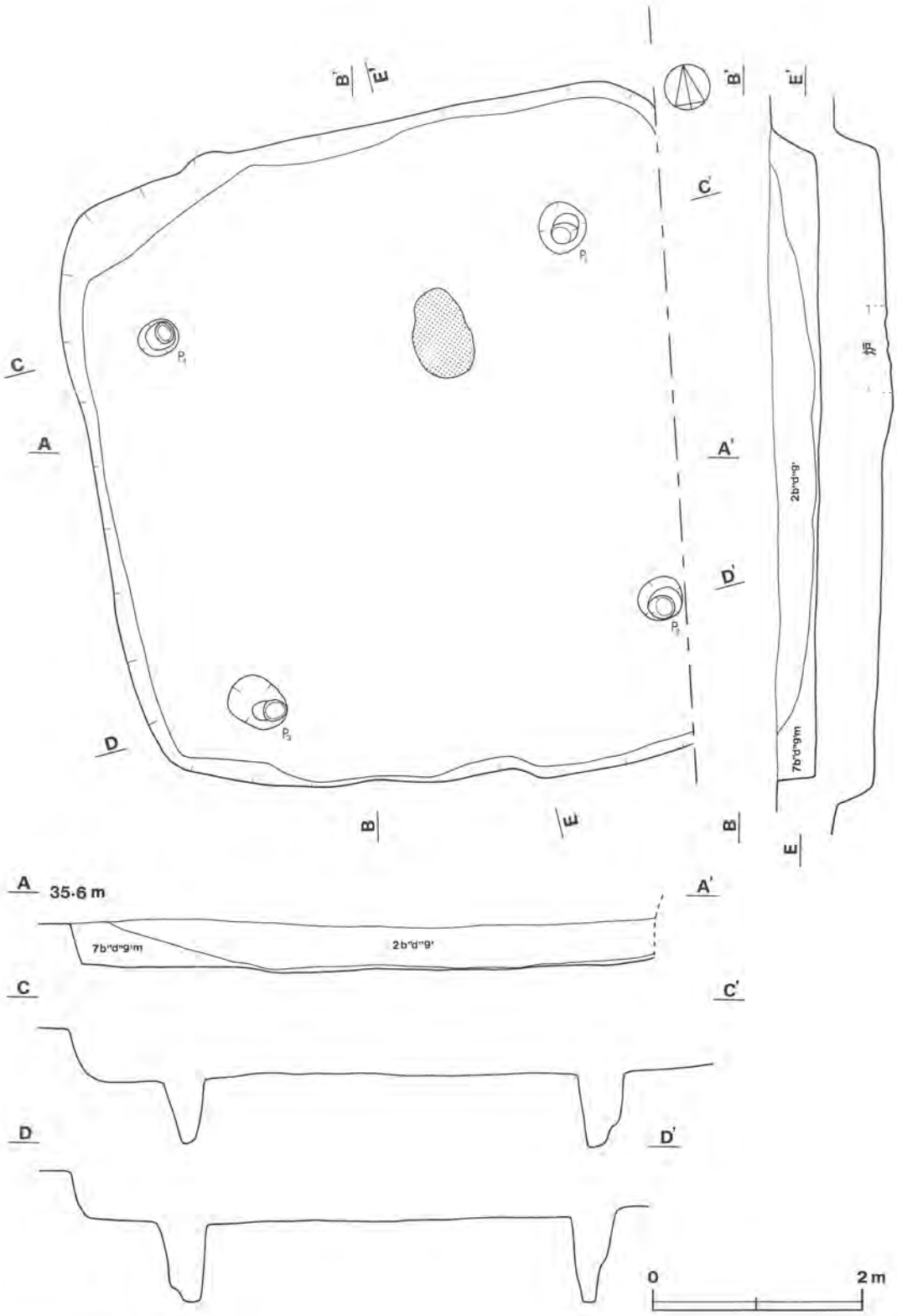


第86図　第38号住居跡実測図

第39号住居跡（第87図）

本跡は，当遺跡の北部C4h$_5$区を中心に確認され，第40号住居跡の南西側約７mに位置している。東側部分は調査エリア外に延びている。試掘調査の結果，本跡が確認された付近は，腐植土と暗褐色土が60～90cmほど自然堆積している。確認調査の過程では壁が明瞭でなかった。

平面形は，推定で長軸6.54m，短軸5.60mの隅丸長方形で，長軸方向はN－5°－Eと思われる。壁の上位はやや軟弱な暗褐色土，下位は硬く締まったロームがほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は35～42cmである。東壁の一部はエリア外のため調査はできなかった。床面はごく緩やかな起伏を帯びた中央付近を除いて平坦で，全体的にやや軟弱である。炉は中央から北東側に位置し，長径95cm，短径55cmの楕円形を呈し，床面を皿状に約４cm掘り込んだ地床炉である。炉内にはローム粒子，焼土粒子，炭化粒子微量を含む黒褐色土，暗赤褐色土が堆積している。炉床は長く使用しなかったのか，わずかに硬くなったロームが焼土化している。ピットは４か所検出され，規模や配列からP$_1$～P$_4$が主柱穴と思われる。主柱穴の規模は径39～58cm，深さ60～85cmである。P$_1$は深さ約40cm，P$_2$は深さ50cmのところにそれぞれ段を有している。この段はP$_1$・P$_2$ともピット内壁

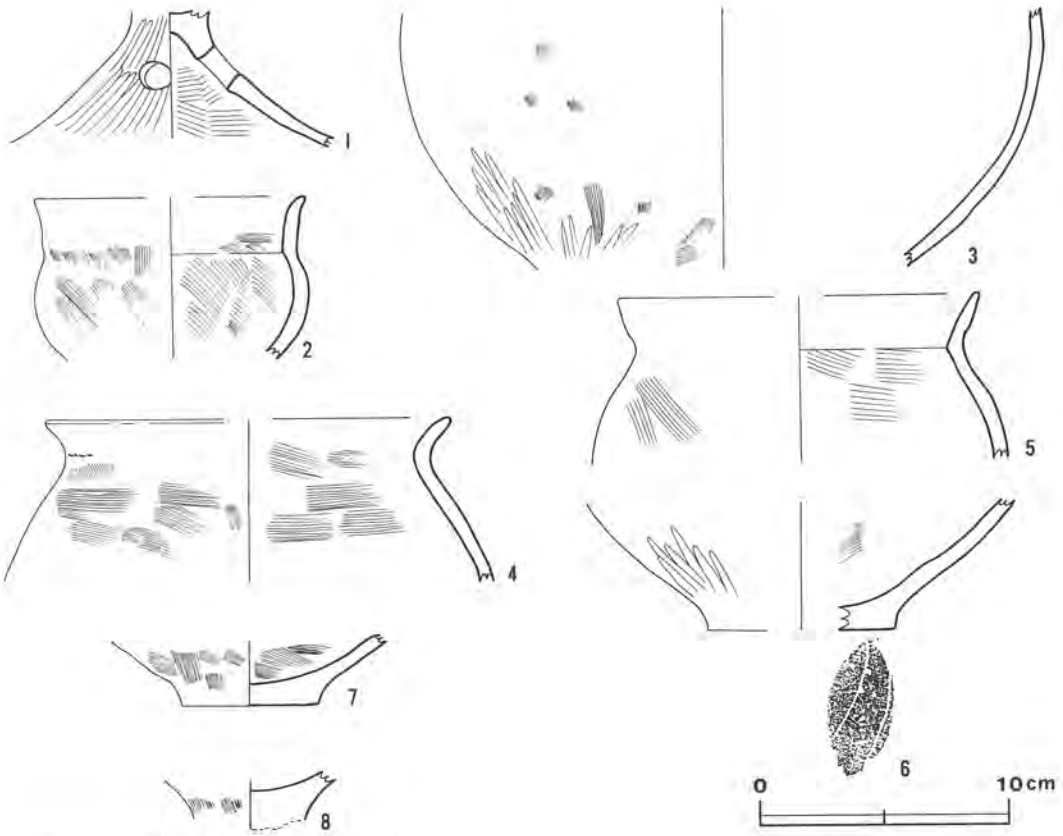


第87図　第39号住居跡実測図

の北東側に認められる。P_3は深さ約60cm，P_4は深さ約30cmのところに段を有している。段の位置は，いずれもピット内壁の南西側である。この段の性格については不明である。

覆土は2層から成り，上層は黒褐色土，下層は暗褐色土が自然堆積し，ローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含んで締まっている。

遺物は，北東コーナー壁下の床面や床面直上から，高坏形土器（P246）の脚部が倒立の状態で，甕形土器（P241）の胴部の一部が正位や倒立の状態でまとまって出土している。炉の北西側の覆土下層から坩形土器（P240）の口縁部の一部が正位の状態で出土している。なお，覆土中層から下層にわたって，土師器片288片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。



第88図　第39号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡出土遺物観察表

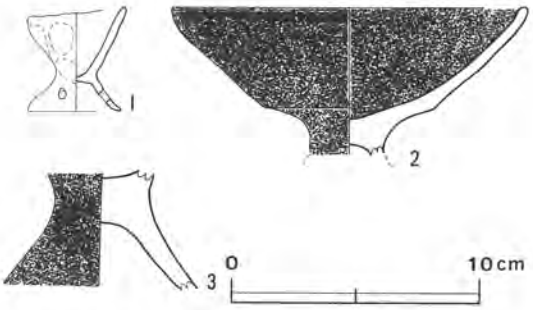
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第88図 1	高坏形土器 土師器	E (5.2)	脚部は接合部からゆるやかに大きく開く。脚部上位に3孔を有する。坏部・裾部を欠損している。	脚部外面－縦位の丁寧なヘラ磨き，内面－粗いハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	40% P246
2	坩形土器 土師器	A (10.8) B (6.6)	口縁部は直立気味に立ち上がり，上位でやや外反する。頸部内面に稜を有する。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，内面－横位のハケ目整形後横位のナデ。胴部内・外面－斜位のハケ目整形。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	15% P240
3	甕形土器 土師器	B (10.5)	球形を呈する胴部片で，胴部中位に最大径を有する。口縁部と底部は欠損している。	胴部外面－斜位のハケ目整形後斜位のヘラナデ，胴部内面－横位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	40% P241
4	甕形土器 土師器	A (16.3) B (6.6)	口縁部から胴部にかけての破片で，口縁部はやや外反して立ち上がる。	口縁部外面－縦位のハケ目整形後横位のナデ，口縁部内面－横位のハケ目整形。胴部内・外面－横位のハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	5% P238
5	甕形土器 土師器	A (14.6) B (6.7)	口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈すると思われる。	口縁部内・外面－横位のナデ。胴部外面－斜位のハケ目整形，胴部内面－横位のハケ目整形後ナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	10% P239
6	甕形土器 土師器	B (5.2) C (7.6)	胴部は底部から内彎して外上方に開く。底部は平底で，木葉痕を有する。	胴部外面－縦位のハケ目整形後縦位のヘラ磨き，内面－斜位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 橙色 普通	10% P243
7	甕形土器 土師器	B (2.6) C 5.6	胴部は底部から内彎気味に外上方に開く。底部は平底である。	内・外面－斜位のハケ目整形。	砂粒 浅黄橙色 普通	10% P244
8	台付甕形土器 土師器	B (2.0)	接合部片で，甕の底部内面は埦状に凹んでいる。	内・外面－斜位のハケ目整形。	砂粒 灰褐色 普通	5% P245

第40号住居跡（第90図）

本跡は，当遺跡の北部C4e$_6$区を中心に確認され，第39号住居跡の北東約7mに位置し，調査区の中では，最も北側に存在している。東側部分は，調査エリア外に延びているため，調査できなかった。

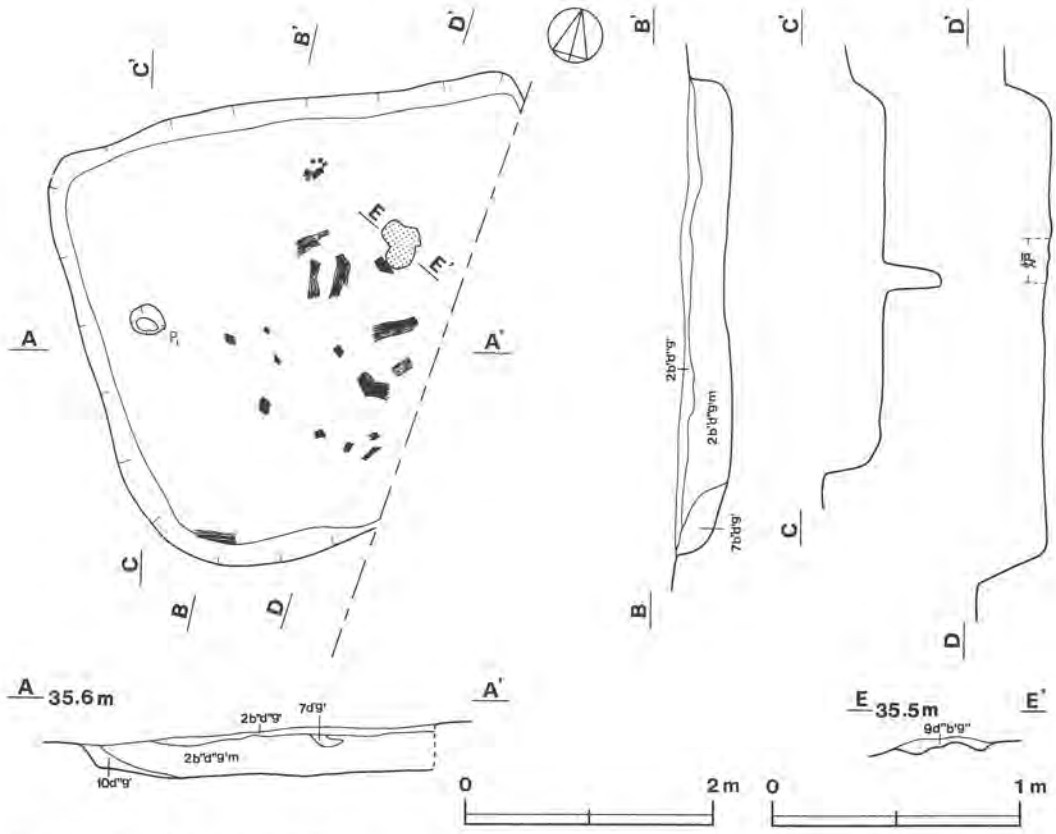
平面形は推定で，長軸3.84m，短軸3.70mの隅丸方形で，長軸方向はN－59°－Eと思われる。壁は調査できない南東壁から東コーナーを除いて，ロームで硬く締まり，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は22～38cmである。木の根のあった南コーナー部付近は撹乱を受け，不明瞭であったため掘り過ぎてしまった。床面はロームで全体的に起伏を帯びているが，炉の周辺は比較的平坦で硬く踏み固められている。炉は中央から，やや北コーナーに位置し，長径35cm，短径30cmの不整楕円形を呈し，床面をわずかに掘り込んだ地床炉である。炉内にはローム粒子，焼土粒子，炭化粒子微量を含む暗赤褐色土が堆積している。ピットは1か所検出された。P$_1$は南西壁近くに位置し，規模は径22cm，深さ46cmの楕円形状を呈している。本跡に伴うものかどうかは不明である。貯蔵穴は確認できなかった。

覆土は2層から成り，上層はローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む黒褐色土，下層は，焼土粒子，ロームブロック微量，炭化粒子少量を含む黒褐色土が自然堆積している。また，床面に横たわった炭化材が多数検出され，覆土下層に炭化粒子が多く見られることから，本跡は火災に遭ったものと思われる。



第89図　第40号住居跡出土遺物実測図

遺物は，南西壁下の床面直上から，完形の高坏形土器のミニチュア土器(P248)が坏部を東に向けて横位の状態で出土している。南コーナー壁際の床面から，高坏形土器（P249）の脚部が斜位の状態で，炉の北側の床面から，朱彩された高坏形土器（P250）の坏部が伏せたように斜位で出土している。そのほか土師器片36片が出土している。それらは，すべて五領式に比定される。



第90図　第40号住居跡実測図

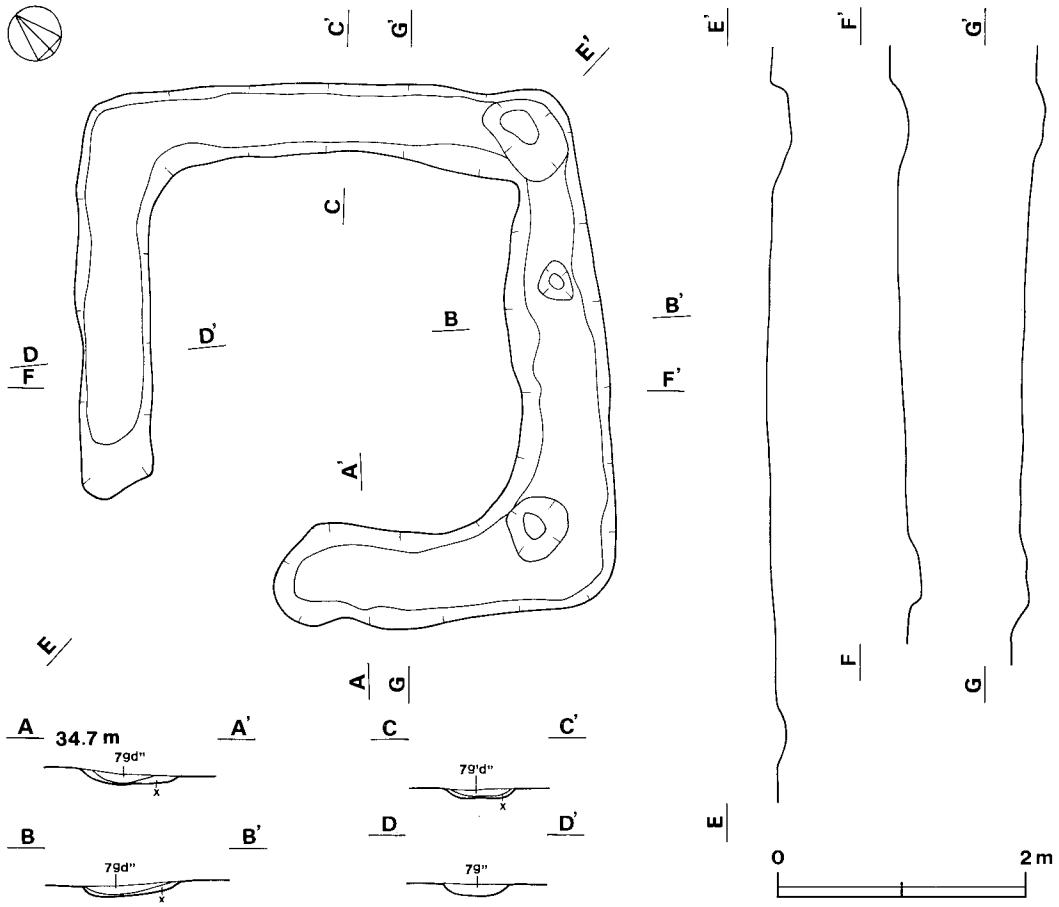
第40号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第89図 1	ミニチュア土器 (高坏形土器) 土師器	A 4.0 B 4.3 D 3.8 E 1.5	坏部は接合部から外傾して立ち上がる。脚部は接合部から外反して開く。脚部中位に径0.5cmの孔を3孔有する。	内・外面－指頭による押圧。	砂粒 灰褐色 普通	100% P248
2	高坏形土器 土師器	A 14.2 B (5.9) E (1.2)	坏部は接合部から内彎気味に開きながら口縁部に至る。坏底部に外稜を有する。脚部は欠損している。	坏部内・外面－横位のナデ後，縦位のヘラ磨き。口縁部外面－細いハケ目の文様帯を施している。	砂粒 明赤褐色 良好	50% P250 朱彩 内・外面煤付着 斑点状剝離
3	高坏形土器 土師器	B (4.6) E (3.9)	脚部片で，接合部から「ハ」の字状に開く。上位に3孔を有している。	外面－縦位の丁寧なヘラ磨き，内面－横位のヘラナデ。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	10% P249 朱彩 外面煤付着

第41号住居跡（第91図）

本跡は，当遺跡の中央部F2C$_0$区を中心に確認され，第26号住居跡の北西側約2.4m，第29号住居跡の南東側約2.4mに位置している。本跡が確認された地区周辺は，第30号住居跡等で前述しているように，北側に傾斜する台地縁辺部に位置し，耕作土が約10～15cmと堆積している。また，いたる所に穴を掘って木等を焼却し，炭化材や灰が残っていた所である。当初は，溝が方形に周回する性格不明の遺構として調査を進めた。しかし，調査する過程で周辺の住居跡も比較的残存部分が少ないこともあり，遺構・遺物の検出状況，他の遺構との位置的関係等を合わせて検討した結果，本跡も比較的浅い掘り込みであったために，後世の耕作等により床面まで削平されてしまい，壁溝が残存したものと判断した。

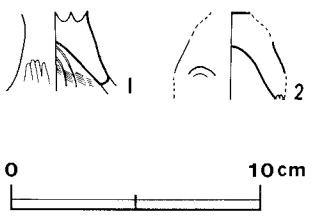
平面形や規模については，検出された壁溝から推定すると，長軸4.5m，短軸4.3mの隅丸方形を呈し，N－42°－Eに長軸方向を持った住居跡であったものと思われる。壁は検出できなかった。床面はロームで平坦であるが，北側に向って緩やかに傾斜している。これは本跡の北側に小谷津田が入り込み，遺構確認面が北に向って傾斜しているためと思われる。また，床面が踏み固められた様相を呈していないのは壁，床面ともに削平されてしまったものと思われ，壁溝だけが残存したものと思われる。壁溝は西コーナー付近を除き，上面を削平された床面を周回している。また，西コーナー付近に壁溝が検出されなかったのは，浅かったため床と同様削平されたためと思われる。壁溝の外辺，内辺とも直線を呈しているが，東コーナー付近の内面にふくらみがみられる。各コーナーは隅丸形を呈し，南コーナー部の内面は特に丸味を帯びている。壁溝の上幅は50～78cm，下幅32～49cm，深さ8～18cmである。南コーナー付近が最も幅が広い。壁面は外側が外傾ぎみで，内側がごく緩やかに立ち上がり硬く締まっている。底面は，セクションC－C′付近の平坦な部分を除いて，凹凸のあるやや丸味を帯びた底面である。また東コーナー，南コーナーはやや深くなり皿状に凹んでいる。



第91図　第41号住居跡実測図

溝内の覆土は１層で，ローム粒子，炭化粒子微量を含む暗褐色土が堆積しており，締まりのある土層である。

遺物は，壁溝の底面や覆土中から土師器片37片が出土しているが，接合できたものはなかった。それらは，すべて五領式に比定される。なお，高坏形土器（P301・P302）の接合部や縄文式土器片３片が壁溝の覆土下層より出土している。



第92図　第41号住居跡出土遺物実測図

本跡は，柱穴が不明であること，炉が検出されないこと，遺物の出土がほとんどないことなどからの他の住居跡とは異なるため，本跡を竪穴遺構とした。

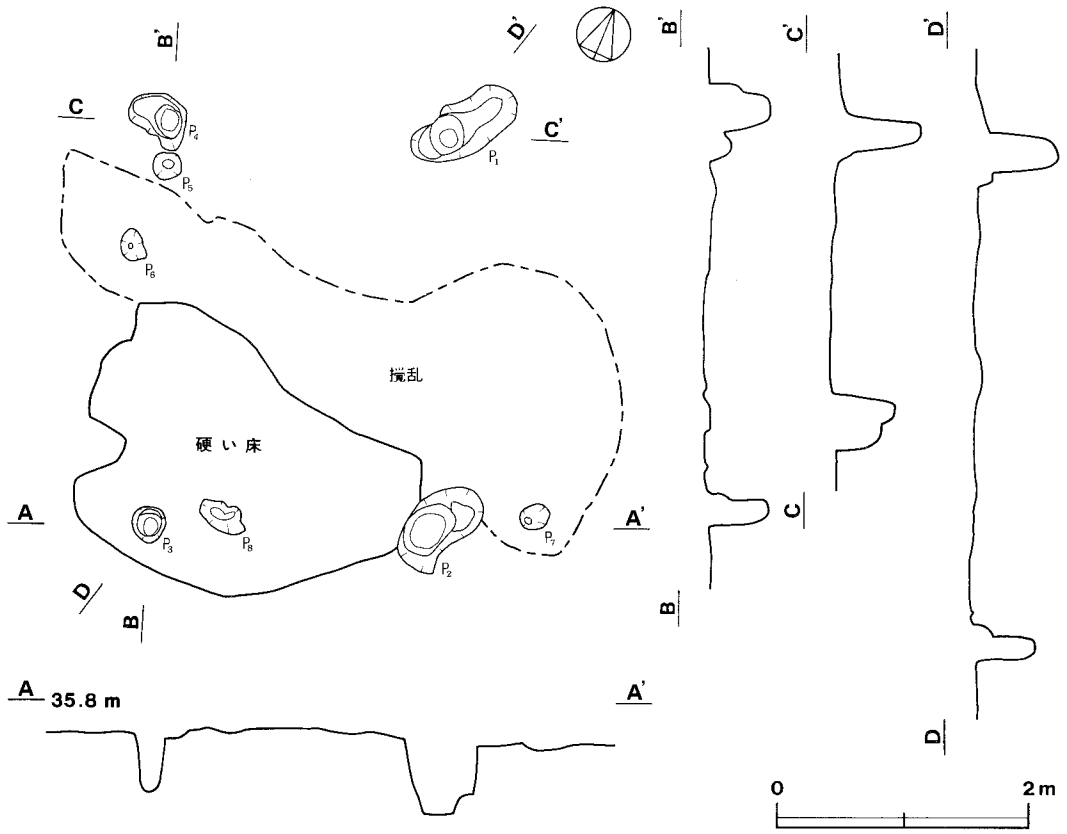
第41号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第92図 1	高坏形土器 土師器	E (3.2)	脚部片で，上位に孔を穿っているのが窺える。	脚部外面－縦位のヘラ磨き，内面－斜位のハケ目整形。	砂粒・スコリア 橙色 普通	15% P301
2	高坏形土器 土師器	E (3.5)	脚部片で，上位に4孔を有している。	脚部外面－縦位のヘラナデ，脚部内面－横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P302

〔3〕 時期不明

第19号住居跡（第93図）

本跡は，当遺跡の中央部H3a$_2$区を中心に確認され，第17号住居跡の南側約10m，第20号住居跡の北東約2mに位置している。本跡は耕作による撹乱を受け，壁及び床の大部分はすでに破壊されている。確認調査の過程で，硬化した床とピット状の落ち込みを確認したため，住居跡として調査を進めた。



第93図　第19号住居跡実測図

平面形や規模については，検出された柱穴の位置等から推定すると，長軸5m，短軸4mほどの長方形状を呈し，N－34°－Wに長軸方向を持つ住居跡であったものと思われる。床面は，東西方向に床をえぐるように撹乱が深く入り込んでいるため，中央から南側に寄ってわずかに床面と思われる硬く締まったロームが認められただけである。炉は検出されない。ピットは8か所検出され，規模と配列からP_1～P_4が主柱穴と思われる。主柱穴の規模は径45～63cm，深さ30～62cmである。また柱穴の間隔はP_1とP_2，P_3とP_4間が2.8～2.9m，P_2とP_3，P_1とP_4間が1.90～1.95mであり，主柱穴は長方形状に規則的に配列されている。P_5～P_8は径22～40cm，深さ11～20cmであり，本跡に伴うものではないと思われる。

遺物は，覆土を削平されていたため出土していない。

表2　古墳時代前期住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット数(主柱穴数)	炉	置土	出土遺物	時期	備考
1	F2g$_8$	N－17°－E	隅丸方形	2.65 × 2.48	15～35	平坦	5(4)	北東寄り	自然	埦・器台・甕 土器片65片	五領期	FP-1と重複
2	F2h$_6$	——	長方形	(5.00)×(4.30)	——	平坦	4(4)	北寄り	——	甕・土器片43片 石鏃・チャート片各1片	五領期	
3	G2a$_5$	N－17°－W	隅丸方形	8.25 ×(8.10)	24～36	平坦	7(2)	不明	自然	高坏・土器片1片	五領期	SI-21と重複 貯蔵穴
4	G2c$_6$	N－63°－E	隅丸長方形	7.50 × 6.55	28～40	平坦	6(4)	北東寄り	自然	甕・壺・土器片139片 石鏃・砥石	五領期	SI-6と重複 焼失家屋
5	F2j$_9$	N－66°－E	隅丸長方形	6.33 × 5.02	20～30	平坦	4(4)	北東側 南西側	自然	壺・小型甕・埦・高坏・甕 球状土錘3点・土器片283片	五領期	FP-2と重複
6	G2c$_7$	N－70°－E	隅丸方形	(4.60)× 4.50	4～10	平坦	3(3)	中央	自然	甕・器台 土師器片123片	五領期	SI-4と重複
7	G2e$_7$	N－18°－W	隅丸長方形	6.60 × 5.84	12～25	平坦	4(4)	北寄り	自然	高坏・台付甕・壺・鉢 小型甕・土器片346片	五領期	貯蔵穴
8	G2d$_4$	N－79°－E	隅丸方形	7.62 × 7.34	22～47	平坦	3(3)	北寄り	自然	甕・高坏・土器片168片 剣形品2点	五領期	
9	G2g$_5$	N－18°－W	隅丸方形	5.82 × 4.62	18～26	平坦	4(4)	——	自然	小型壺・小型甕・甕 土器片90片・砥石	五領期	貯蔵穴
10	G2g$_3$	——	——	——	——	——	1	西側	——	土器片12片	五領期	
11	G2h$_8$	——	隅丸方形又は隅丸長方形	(4.85)	5～7	平坦	1	北東寄り	自然	小型壺・土器片19片	五領期	
12	G2i$_7$	——	——	——	——	——	——	北側	——	土器片14片	五領期	
13	G3a$_2$	——	隅丸方形又は隅丸長方形	——	14	平坦	1	——	自然	埦・土器片52片	五領期	SK-8と重複
14	G3c$_1$	——	長方形	(4.60)×(4.00)	——	——	4(2)	——	——	甕・土器片22片	五領期	SK-4・5と重複
15	G3d$_6$	N－45°－E	長方形	(5.00)×(4.00)	——	——	4(3)	——	——	小型器台・土器片25片	五領期	
16	G3h$_6$	N－22°－E	隅丸方形又は隅丸長方形	5.33	20～26	平坦	3(2)	北西寄り	自然	埦・小型台付甕・ミニチュア土器・土器片100片	五領期	
17	G3f$_2$	N－57°－E	隅丸方形	3.84 × 3.77	10～28	平坦	1	北寄り	自然	甕・土器片51片	五領期	焼失家屋
18	G3g$_4$	——	——	——	——	——	2(1)	北東側	——	高坏・土器片23片	五領期	
20	H3a$_1$	——	——	——	——	平坦	——	不明	——	高坏・土器片31片	五領期	一部床のみ
21	G2a$_5$	N－73°－E	隅丸方形	7.10 × 6.60	18	平坦	4(4)	やや東側	自然	小型甕・器台・埦 土器片363片	五領期	SI-3と重複，貯蔵穴，焼失家屋
24	F2C$_7$	N－66°－E	長方形	5.43 × 4.74	20	凹凸	5(3)	中央・南側	自然	高坏・甕・土器片259片	五領期	貯蔵穴 焼失家屋
25	F2e$_8$	N－48°－E	隅丸方形	4.62 × 4.46	6～14	凹凸	7(4)	北西側	自然	甕・台付甕・埦 土器片352片	五領期	貯蔵穴
26	F3d$_1$	N－81°－W	隅丸方形	3.74 × 3.68	20～30	平坦	6(4)	中央	自然	台付甕・壺・甕 土器片287片	五領期	貯蔵穴 焼失家屋
27	F2f$_0$	N－45°－W	隅丸長方形又は隅丸方形	4.70	30～42	凹凸	5(2)	北西側 南側	自然	甕・ミニチュア土器・台付甕・壺・埦・装飾器台・高坏・土器片217片・管状土錘・石製品	五領期	貯蔵穴 焼失家屋
28	F3e$_3$	N－20°－E	方形	4.72 × 4.68	14～20	平坦	8(4)	西側	自然	台付甕・甑・器台・甕・ミニチュア土器・土器片483片	五領期	FP-8と重複 貯蔵穴

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット数(主柱穴数)	炉	覆土	出土遺物	時期	備考
29	$F2b_8$	N－23°－W	隅丸方形	3.20 × 2.93	16～30	平坦	5(4)	東側	自然	土器片93片	五領期	貯蔵穴
30	$F2a_9$	N－3°－E	隅丸方形又は隅丸長方形	(6.00)×(5.58)	30～40	平坦	6(4)	中央・南西側	自然	台付甕・甕・小型壺・壺・高坏・広口壺・土器片252片	五領期	SD-3と重複 貯蔵穴
31	$F3h_5$	——	——	(5.00)	14～30	緩い起伏	——	南側	自然	高坏・台付甕・器台 土器片129片	五領期	
32	$F3f_5$	——	隅丸方形又は隅丸長方形	——	10	——	2(2)	——	自然	壺・小型甕 土器片104片	五領期	SK-63と重複
33	$D3b_2$	N－23°－E	隅丸方形又は隅丸長方形	(4.00)×(3.28)	8	緩い起伏	1	——	自然	器台・壺・高坏・台付甕 坩・土器片144片	五領期	貯蔵穴
34	$D3a_3$	N－54°－W	方形	4.98 × 4.80	3～14	緩い起伏	4(4)	北西側	自然	甕・甑・坩・坏・高坏 土器片144片	五領期	SK-78と重複 貯蔵穴
35	$D3i_9$	N－72°－E	隅丸長方形	4.94 × 4.38	24～30	平坦	2(1)	北東側	自然	甕・器台・埦・台付甕 高坏・土器片238片	五領期	貯蔵穴 焼失家屋
36	$D4d_1$	N－85°－W	隅丸長方形	5.70 × 4.92	20～40	平坦	3(3)	——	自然	大型壺・器台・台付甕 甕・土器片152片	五領期	貯蔵穴 焼失家屋
37	$D4c_3$	——	方形又は長方形	——	15～20	平坦	2(2)	——	自然	土器片38片	五領期	SD-5・6と重複
38	$C4i_3$	N－27°－W	隅丸方形	4.10 × 3.96	10	平坦	——	——	自然	土器片28片 黒曜石片1片	五領期	竪穴遺構
39	$C4h_5$	N－5°－E	隅丸長方形	6.54 ×(5.60)	35～42	平坦	4(4)	北東側	自然	高坏・甕・坏 土器片288片	五領期	
40	$C4e_8$	N－59°－E	隅丸方形	3.84 ×(3.70)	22～38	平坦	1	北コーナー	自然	高坏・ミニチュア土器 土器片36片	五領期	焼失家屋
41	$F2c_0$	N－42°－E	隅丸方形	(4.50)×(4.30)	——	平坦	——	——	自然	高坏・土器片40片	五領期	竪穴遺構

表 3　時期不明住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	ピット数(主柱穴数)	炉	覆土	出土遺物	時期	備考
19	$H3a_2$	N－34°－W	長方形	(5.00)×(4.00)	——	——	8(4)	——	——	——	不明	

2　炉　　穴

当遺跡において検出された炉穴は，15基である。このうち14基は，調査区F・G区に位置し，遺跡の中央部に形成されていた小支谷の南側の台地斜面部に分布しているため表土が流出しており，壁等が耕作のため削平されているものが多い。また，複数の炉跡を有する炉穴が3基検出されている。

第1号炉穴（第94図）

本跡は，当遺跡の中央部$F2h_8$区を中心に確認され，第1号住居跡の南東コーナーによって北西壁がわずかに切り込まれている。

平面形は，長径3.30m，短径2.28mの不定形で，長径方向はN－55°－Wである。壁は外傾して立ち上がっており，壁高は25～40cmである。

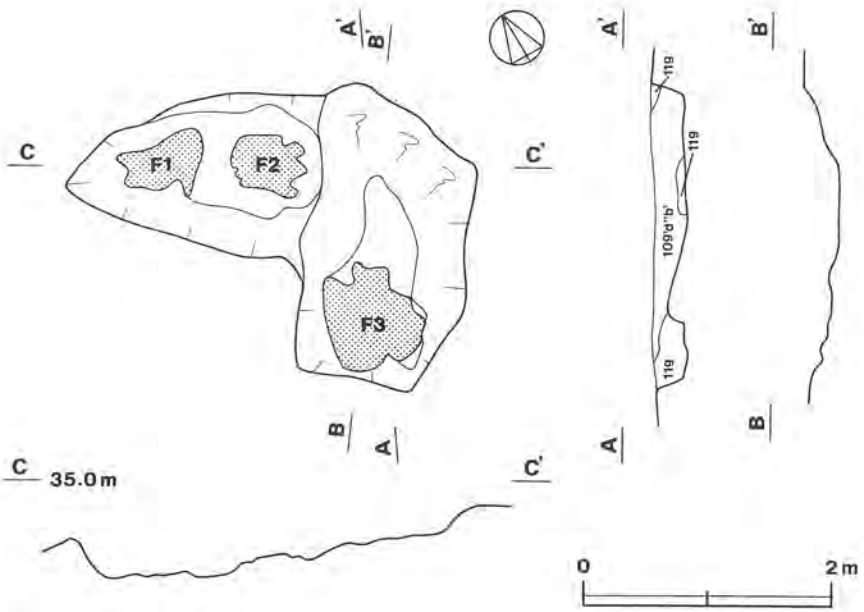
本跡からは炉が3基検出され，北西壁下に位置する炉をF1，底面中央部よりやや北西に位置する炉をF2，南西壁下に位置する炉をF3とする。

F1・F2の炉床は，南東から北西に緩やかに傾斜する底面の北西壁際と底面中央部に設れられて

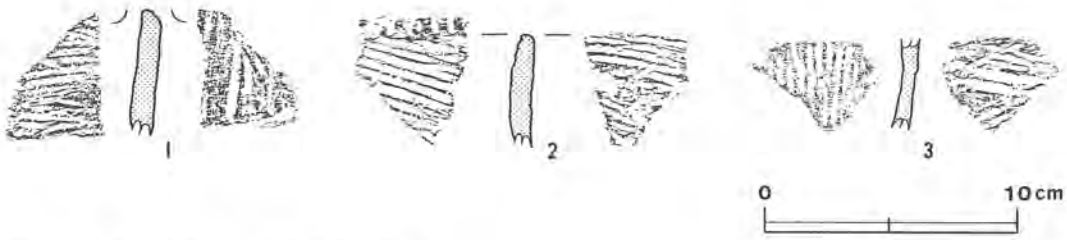
いる。F1の炉床は，焼土が長径60cm，短径40cmの不定形に４cmほど堆積している。炉床は，凹凸で全体的に皿状にくぼんでおり，表面は赤く硬く焼けている。炉床の北西側の壁は内彎ぎみに立ち上がっているが，上面は第１号住居跡の南東コーナーによって削平されている。足場は，炉床の南東側に位置していたことも考えられるがF2がF1の南東側24cmに設けられていることもあり，F1とF2の間にある幅24cmの平坦な部分が足場であったかどうか確認することはできなかった。F2の炉床は，F1の炉床より南東側に24cm離れた中央部のやや北西に位置している。炉床はF1の炉床より８cmほど高く，焼土は長径60cm，短径40cmの不定形に３cmほど堆積していた。炉床は凹凸で，表面は赤く焼けている。炉床の周囲には，F1で述べた平坦部分だけで足場は確認することはできなかった。

F3の炉床は，南西壁際の１段高くなった所に設けられており，焼土が長径90cm，短径75cmの不定形に，厚さ５cmほど堆積している。炉床は皿状にややくぼんでおり，表面は赤色に硬く焼けている。炉床の北東側は６cmほど平坦に低くなっており，足場であったと思われる。炉床の南西側の壁は削平のため撹乱を受けているが，外傾して立ち上がっている。３基の炉の新旧関係は確認できなかった。覆土は一部撹乱を受けていたものの，焼土粒子，炭化粒子を含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，覆土上・中層から縄文時代早朝の野島式に比定される深鉢形土器の土器片28片が出土している。



第94図　第１号炉穴実測図



第95図　第１号炉穴出土遺物拓影図

出土土器

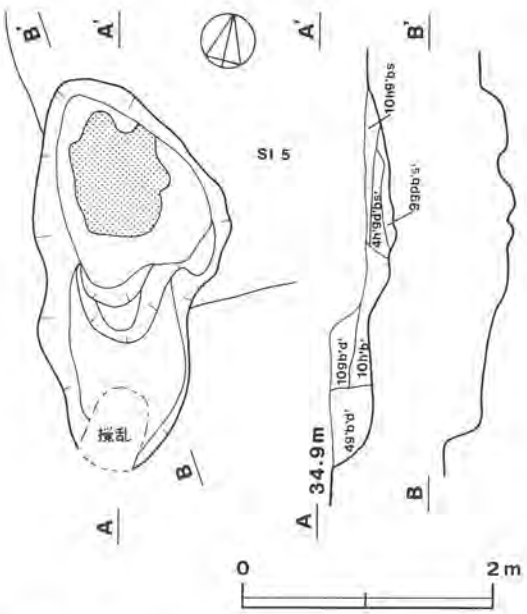
第95図１～３は，第１号炉穴から出土した縄文式土器片の拓影図である。１・２は口縁部片で，内・外面に斜位に条痕文が施されている。２は口唇部に刻み目を有している。３は胴部片で，内・外面に斜位に条痕文が施されている。１～３の色調は内・外面とも橙色で胎土は繊維を含み，焼成は普通である。

第２号炉穴（第96図）

本跡は，当遺跡の中央部G2a$_9$区を中心に確認され，第５号住居跡の南コーナーと炉穴の北側の部分が重複している。

平面形は長径3.18m，短径1.56mの楕円形で，長径方向はN－15°－Wである。壁は，第５号住居跡の南コーナーによって上面を削平されている北東側と，撹乱を受けた南側の壁を除いて，外傾して立ち上がっており，壁高は13～50cmである。炉床は南から北へ緩やかに傾斜する底面の北壁に設けられており，焼土が長径104cm，短径70cmの不定形に厚さ６cmほど堆積している。炉床は凹凸で皿状にややくぼんでおり，表面は赤く焼けていたが木根による撹乱のため軟弱であった。炉床の南側底面は，緩やかに４cmほどくぼんでおり，足場と思われる。炉床の北東側はわずかに外傾して立ち上がる壁であるが，第５号住居跡によって削平されて残存した部分である。

覆土は撹乱を受けていたものの，焼土粒子，炭化粒子を少量含む褐色土が自然堆積している。

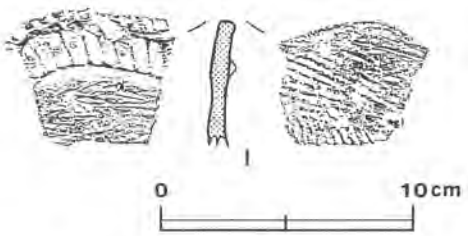


第96図　第２号炉穴実測図

遺物は，覆土上・中層から縄文時代早期の野島式に比定される深鉢形土器の土器片８片が出土している。

出土土器

第97図１は，第２号炉穴から出土した縄文式土器片の拓影図である。１は外反する波状口縁部片で，条痕文を地文とし，横位の微隆起線で口縁部文様帯を区画し，内部を縦位の微隆起線で充填している。色調は内・外面ともにぶい橙色で，断面が暗褐色である。胎土は繊維を含み，焼成は普通である。



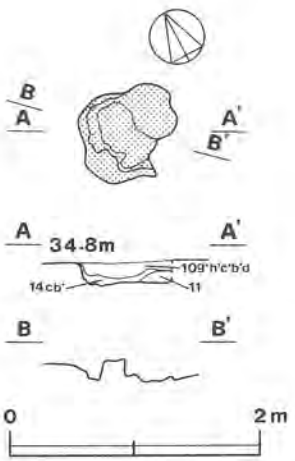
第97図　第２号炉穴出土遺物拓影図

第３号炉穴（第98図）

本跡は，当遺跡の中央部G3a$_1$区に確認され，第６号炉穴の東側1.6m，第４号炉穴の西側0.5mに位置している。本跡を含めた周辺地域は土取りによる削平と撹乱を受けており，本跡は炉床のみが残存していた。

炉床は，焼土が長径90cm，短径60cmの楕円形状に２層に堆積し，15cmほどである。上層は，ローム粒子多量，焼土ブロック，焼土粒子，炭化粒子少量を含む褐色土，下層は，焼土ブロック，焼土粒子中量を含む赤褐色土である。炉床は凹凸で，中央がくぼんでおり表面は赤く硬く焼けている。

遺物は出土しなかった。

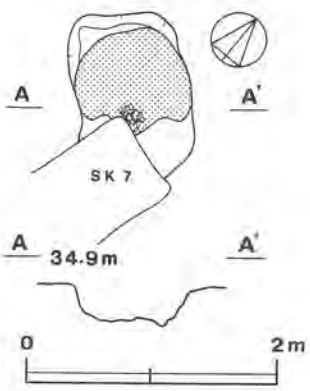


第98図　第３号炉穴実測図

第４号炉穴（第99図）

本跡は，当遺跡の中央部G3a$_1$区を中心に確認され，第３号炉穴の東側0.5m，第13号住居跡の西側0.5mに位置している。本跡の南東側は，第７号土坑によって掘り込まれている。なお，本跡を含む周辺は，土取りによる削平を受けている。

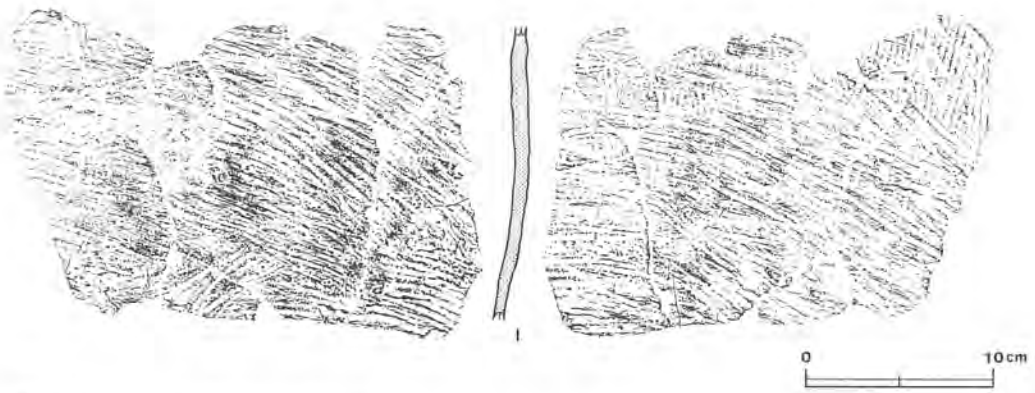
平面形は，わずかに残存している壁から，長径1.34m，短径0.96mほどの楕円形で，長径方向はN－50°－Wであったものと推定される。残存している壁は外傾して立ち上がり，壁高は10～20cmで，南西側が高くなっている。炉床は，北



第99図　第４号炉穴実測図

西から南東へ傾斜する底面の北西壁際に設けられており，焼土が径80cmの円形に５cmほど堆積している。炉床は凹凸で，表面は赤く焼けている。足場は炉床の南側が第７号土坑によって掘り込まれているために，煙道は壁のほとんどか削平されているためにいずれも確認できなかった。本跡の覆土は，ローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む褐色土が堆積している。

遺物は焼土の上面から，縄文時代早期の野島式に比定される深鉢形土器の胴部片１片が出土している。



第100図　第４号炉穴出土遺物拓影図

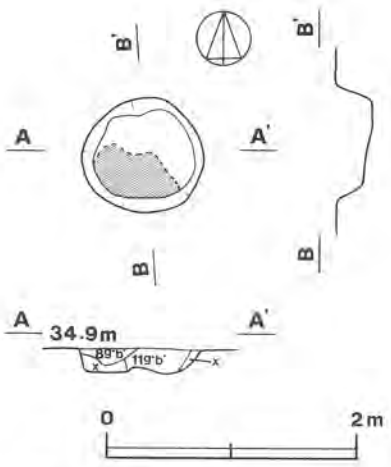
出土土器

第100図１は，第４号炉穴から出土した縄文式土器片の拓影図である。１は大きな胴部片で，外面は条痕文が斜位に，内面は条痕文が縦位，斜位に施されている。胎土は繊維・小礫を含み，焼成は普通である。

第５号炉穴（第101図）

本跡は，当遺跡の中央部G2a$_9$区に確認され，第５号住居跡の南側約0.6m，第２号炉穴の東側0.4mに位置している。

平面形は，長径0.98m，短径0.93mの円形である。壁は外傾して立ち上がっており，壁高は22～28cmである。炉床は，南壁から北へわずかに傾斜している底面の南西壁際に設けられており，焼土は長径50cm，短径38cmの楕円形に２cmほど堆積している。炉床は平坦で，底面は赤く焼けているが，軟弱である。炉床の北東側の底面は６cmほどくぼんでおり，足場と思われる。炉床



第101図　第５号住居跡実測図

の南西側は外傾して立ち上がる壁で，この部分に煙道があったと思われるが確認できなかった。本跡の覆土は，ローム粒子少量，焼土粒子多量を含む褐色土が堆積している。

遺物は出土していない。

第6号炉穴（第102図）

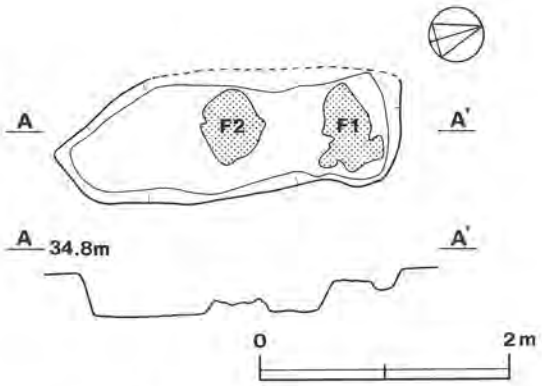
本跡は，当遺跡の中央部G2a$_0$区を中心に確認され，第3号炉穴の西側約1.6mに位置している。本跡の南西壁の一部は第2号溝によって掘り込まれている。

平面形は，長径2.80m，短径1.02mの楕円形で，長径方向はN－11°－Eである。南西壁の一部が第2号溝によって掘り込まれているが，残存した壁は外傾して立ち上がっており，壁高は12～34cmで，北東壁側が高くなっている。

本跡からは炉が2基検出され，北東壁に位置する炉をF1，底面中央部に位置する炉をF2とする。

F1の炉床は北東壁の一段高くなった所に設けられており，焼土が長径60cm，短径30cmの不定形に，厚さ4cmほど堆積している。炉床は凹凸で，表面は赤く焼けている。炉床の南西側の底面は平坦で足場であったと思われる。炉床の東側の壁は外傾して立ち上がっており，壁高は12cmほどで削平を受けたと思われ，煙道は確認できなかった。

F2の炉床は掘り込みの中央部に位置しており，焼土が長径46cm，短径40cmの不定形に7cmほど堆積している。炉床は凹凸で，底面は赤く焼けている。炉床の南西側は，炉床より6cmほど皿状にくぼんでおり，足場であったと思われる。覆土はローム粒子，焼土粒子，炭化粒子少量を含む褐色土が堆積している。

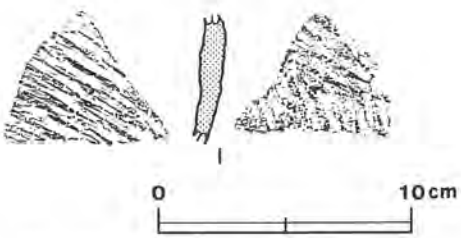


第102図　第6号炉穴実測図

遺物は，覆土中から縄文時代早期の野島式に比定される深鉢形土器の胴部片1片が出土している。

出土土器

第103図1は，第6号炉穴から出土した縄文式土器片の拓影図である。1は胴部片で，内・外面は斜位に条痕文が施されている。胎土には繊維と細砂を含み，焼成はやや不良である。



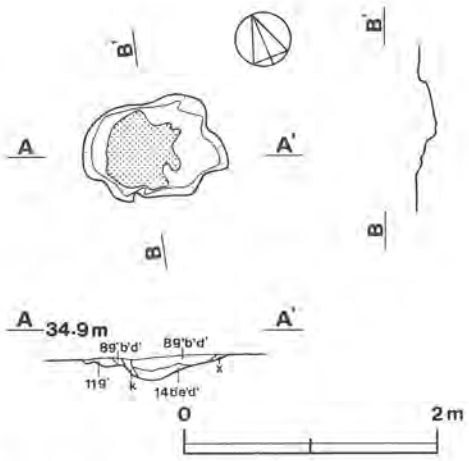
第103図　第6号炉穴出土遺物拓影図

第7号炉穴（第104図）

本跡は，当遺跡の中央部G3f$_1$区に確認され，第17号住居跡の西側0.6mに位置している。本跡を含む周辺は土取りによる削平を受けている地域であり，本跡は炉床のみが残存していた。

炉床は北西側が撹乱を受けていたものの，焼土が長径64cm，短径54cmの不定形に厚さ16cmほど2層に堆積している。上層は，ローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子多量を含む暗褐色土，下層は，焼土ブロック少量，焼土粒子，炭化粒子多量を含むにぶい赤褐色土である。炉床は凹凸で中央がくぼんでおり，表面は赤く硬く焼けている。

遺物は出土していない。



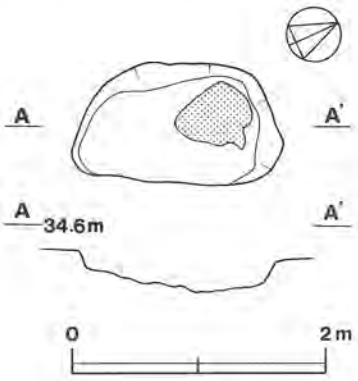
第104図　第7号炉穴実測図

第8号炉穴（第105図）

本跡は，当遺跡の中央部F3e$_2$区を中心に確認され，第13号炉穴の東側1.2mに位置している。本跡の南東壁は，第28号住居跡の南西コーナーによって掘り込まれている。

調査できた部分から推定すると，平面形は長径1.64m，短径0.94mの楕円形で，長径方向はN－20°－Eであったと思われる。残存した壁は，外傾して立ち上がっており，壁高は18～22cmである。炉床は南西から北東へ緩やかに傾斜する底面の北東壁際に設れられており，焼土が長径58cm，短径26cmの不定形に，厚さ6cmほど堆積している。炉床は凹凸で，表面は赤く硬く焼けている。炉床の南西側の底面がわずかにくぼんでおり，足場と思われる。炉穴の北東側は外傾して立ち上がる壁であるが，一部撹乱を受けているため煙道があったかどうか確認できなかった。本跡の覆土は，ローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む褐色土が堆積している。

遺物は出土していない。



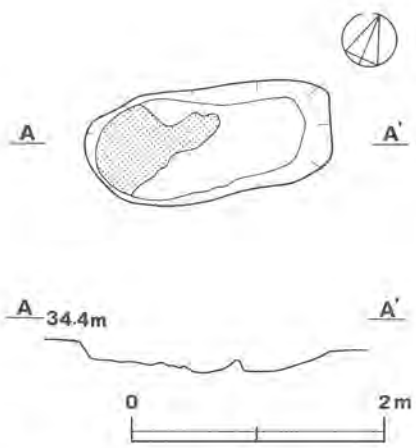
第105図　第8号炉穴実測図

第9号炉穴（第106図）

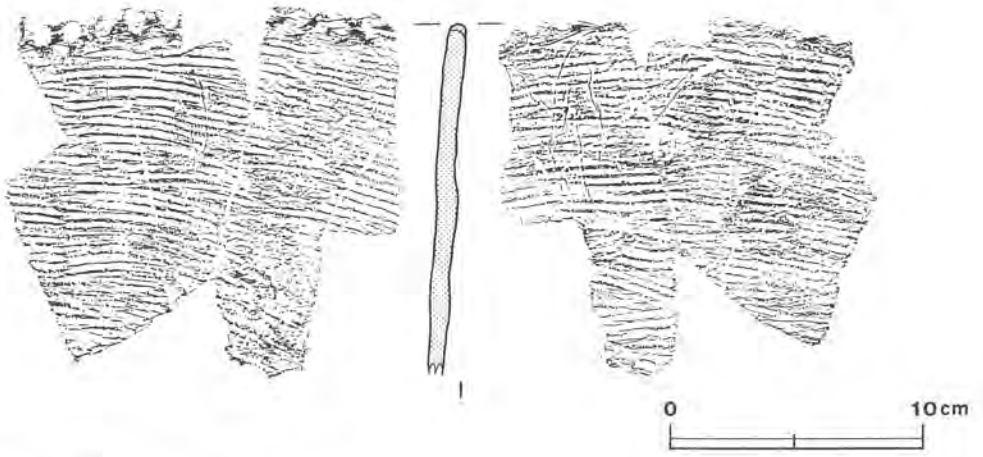
本跡は，当遺跡の中央部F3f$_4$区を中心に確認され，第14号炉穴の東側約0.3mに位置している。

平面形は，長径1.96m，短径0.92mの楕円形で，長径方向はN－63°－Eである。壁は外傾して立ち上がっており，壁高は16～20cmで，北西側がわずかに高くなっている。炉床は，中央部がわずかに低くなる皿状の底面の南西壁際から中央部にかけて設けられており，その北東側には焼土ブロックが散らばっている。炉床には焼土が長径100cm，短径58cmの不定形に，厚さ5cmほど堆積している。炉床は凹凸で，表面は赤く硬く焼けている。炉床の東側の底面は4cmほどくぼんでおり足場と思われる。炉床の南西側の壁にそって幅8cmほど赤く硬くなっている。この部分が煙道のあとと推定される。本跡の覆土は，ローム粒子，炭化粒子微量，焼土粒子，焼土ブロック少量を含む暗褐色土が堆積している。

遺物は，覆土中から，縄文時代早期の野島式に比定される深鉢形土器の破片が出土している。



第106図　第9号炉穴実測図



第107図　第9号炉穴出土遺物拓影図

出土土器

第107図1は，第9号炉穴から出土した縄文式土器片の拓影図である。1は口縁部片で，口唇部は棒状工具による押圧が施されている。外面は条痕文が斜位に，内面は条痕文が横位に施されている。色調は内・外面とも橙色である。胎土は繊維と細砂を含み，焼成は普通である。

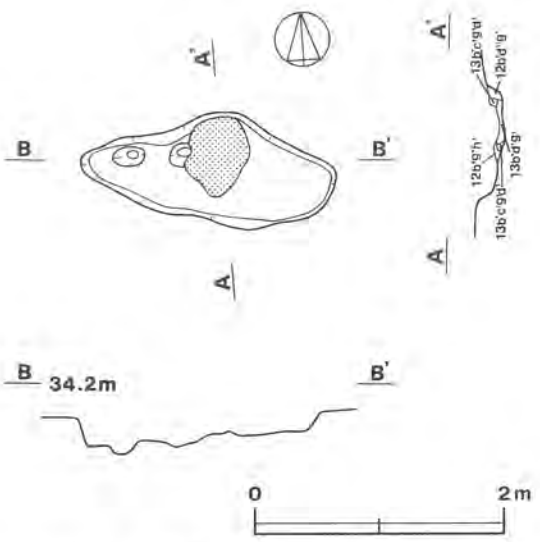
第10号炉穴（第108図）

本跡は，当遺跡の中央部F2a,区を中心に確認され，第68号土坑の東側約1.6m，第69号土坑の北側約0.4mに位置している。

平面形は，長径2.04m，短径0.90mの不整楕円形で，長径方向はN－82°－Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がっており，壁高は20cmほどである。炉床は，南東壁際から北西へやや傾斜する底面の北東壁際の中央付近に設けられており，焼土が長径60cm，短径44cmの楕円形に6cmほど堆積している。炉床は凹凸で，表面は赤く硬く焼けている。炉床の南西側の底面は緩やかに皿状にくぼんでおり，足場と思われる。炉床の北東側は垂直に立ち上がる壁で，一部がやや赤く焼けており，この部分が煙道と推定される。

覆土は，ローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，覆土中から，チャートの剝片が3点出土している。



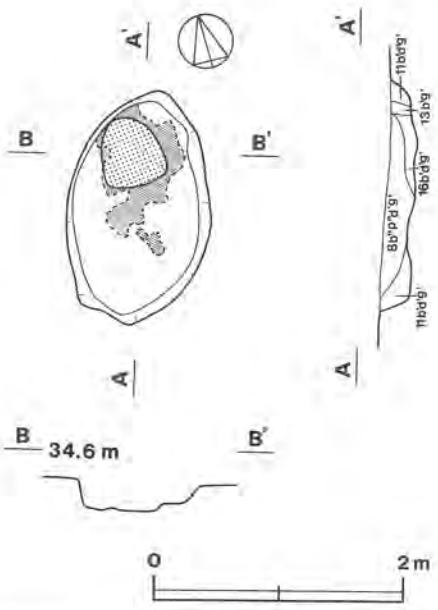
第108図　第10号炉穴実測図

第11号炉穴（第109図）

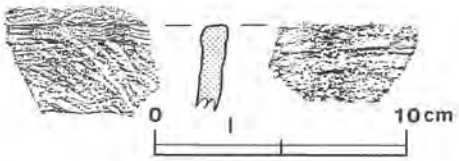
本跡は，当遺跡の中央部F3e$_2$区に確認され，第72号土坑の東側約0.2m，第13号炉穴の北側0.4mに位置している。

平面形は，長径1.88m，短径1.14mの楕円形で，長径方向はN－27°－Eである。壁は外傾して立ち上がっており，壁高は20～30cmで北東壁側が高くなっている。炉床は，南西壁際から北東へ緩やかに傾斜する底面の北東壁際に設けられており，焼土が長径54cm，短径44cmの楕円形に14cmほど堆積している。炉床は皿状に10cm掘り下げられており，赤く硬く焼けており，炉床周辺のロームまで赤褐色に変化しているのが確認できた。長期間使用されたと思われる。炉床の南西側の底面に長径54cm，短径44cmの楕円形の平坦な部分があり，足場と思われる。炉床の北東側は外傾して立ち上がる壁で，この壁にそった幅10cmほどの覆土には，焼土粒子と炭化粒子が多量に含まれており，この覆土が煙道のあとと推定される。

遺物は，縄文時代早期の野島式に比定される深鉢形土器の破片3片が出土している。



第109図　第11号炉穴実測図



第110図　第11号炉穴出土遺物拓影図

出土土器

第110図1は，第11号炉穴から出土した縄文式土器片の拓影図である。1は口縁部片で，外面は斜位に，内面は横位に条痕文が施されている。胎土は繊維を含んでいる。焼成は普通である。

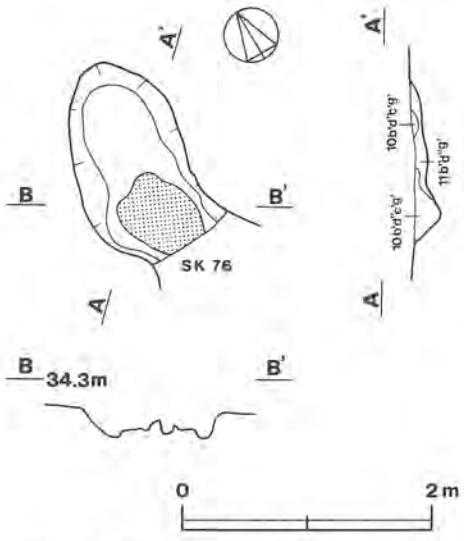
第12号炉穴（第111図）

本跡は，当遺跡の中央部F3g$_5$区に確認され，第9号炉穴の東側約3.0mに位置している。本跡の南壁は，第76号土坑によって掘り込まれている。

調査できた部分から推定すると，平面形は長径1.84m，短径0.92mの楕円形で，長径方向は，N－11°－Eであったと思われる。壁は外傾して立ち上がっており，壁高は20cmである。炉床は第76号土坑によって掘り込まれた南壁際から，北へわずかに傾斜する底面の南壁際に設けられていたと思われ，長径70cm，短径50cmほどの楕円形であったと思われる。炉床の南側は，南壁とともにわずかに掘り込まれ一部直線をなしている。焼土は厚さ3cmほど堆積している。炉床は，凹凸で赤く硬く焼けている。炉床の北側の底面は皿状にややくぼんでおり，足場と思われる。炉床の南側の壁は第76号土坑によって掘り込まれているため，煙道は確認できなかった。

覆土は，ローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，出土しなかった。



第111図　第12号炉穴実測図

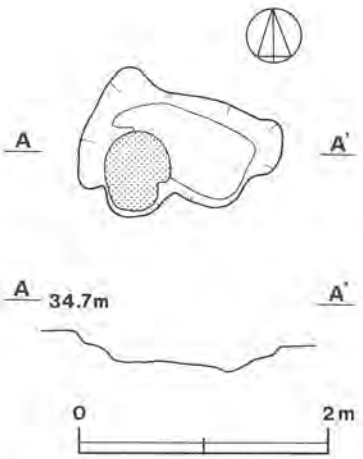
第13号炉穴（第112図）

本跡は，当遺跡の中央部F3e$_2$区に確認され，第11号炉穴の南側0.4m，第８号炉穴の西側1.2mに位置している。

平面形は，長径1.62m，短径1.22mの不整楕円形で，長径方向はN－80°－Wである。壁は南壁の一部が垂直である以外は外傾して立ち上がっており，壁高は20～30cmで西側が高くなっている。炉床は，西壁際から東に緩やかに傾斜する底面の西側に寄った南壁際に設けられており，焼土が長径64cm，短径52cmの楕円形に８cmほど堆積している。炉床は平坦で，表面は赤く硬く焼けている。炉床の北東側の底面は，わずかに皿状にくぼんでおり，足場と思われる。炉床の南西側は外傾して立ち上がっており，この部分に煙道があったと思われる。足場を含めた炉穴底面は，長さ110cm，幅40cmの不定形で狭い。

覆土は２層からなり，上層はローム粒子多量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む暗褐色土，下層はローム粒子，焼土粒子少量，炭化粒子微量の褐色土が自然堆積している。

遺物は出土していない。



第112図　第13号住居跡実測図

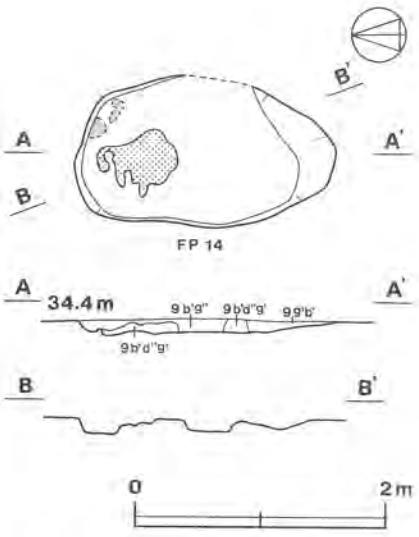
第14号炉穴（第113図）

本跡は，当遺跡の中央部F3g$_4$区を中心に確認され，第28号住居跡の南側約1.4m，第９号炉穴が東側約0.3mに位置している。

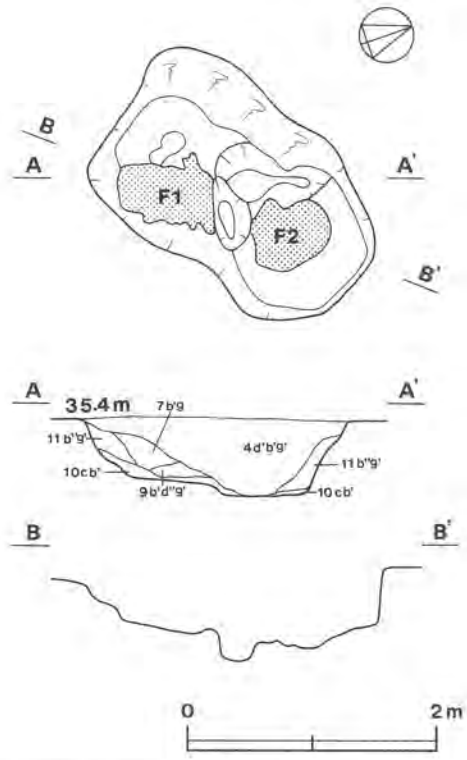
平面形は，長径2.10m，短径1.22mの楕円形で，長径方向はN－4°－Wである。壁は外傾して立ち上がっており，壁高は16cmである。炉床は北から南へ緩やかに傾斜する底面の北壁際に設けられており，焼土が長径60cm，短径44cmの不定形に，厚さ６cmほど堆積している。炉床は凹凸で表面は赤く焼けていたが軟弱であった。炉床の南側の底面は７cmほどくぼんでおり，足場と思われる。炉床の北側は外傾して立ち上がる壁で，この部分に煙道があったと思われるが確認できなかった。

本跡の覆土は，ローム粒子微量，焼土粒子少量を含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は出土していない。



第113図　第14号炉穴実測図



第114図　第15号炉穴実測図

第15号炉穴（第114図）

本跡は，当遺跡の北部C4h₄区を中心に確認され，第39号住居跡の西側約3.4m，第84号土坑の北側約1.8mに位置している。本跡は当遺跡で検出された14基の炉穴とは離れており，最も北に存在している本跡の中央部は，木の根のため撹乱を受けている。

平面形は，長軸2.28m，短軸1.52mの長方形で，長軸方向はN－55°－Eである。壁は外傾して立ち上がっており，壁高は28～60cmで，北東側が高くなっている。

本跡からは炉が2基検出され，南東壁下で南コーナー寄りに位置する炉をF1，北東壁下に位置する炉をF2とする。

F1の炉床は，南西壁際から北東へ傾斜する底面の南東壁際に設けられているが，本跡の中央付近にあった木の根によって撹乱を受け，北東側は一部存在していない。

調査できた部分の焼土は，長径78cm，短径46cmの楕円形状に，厚さ4cmほど堆積している。炉床はややくぼんでおり，表面は赤色に焼けているが，やや軟弱であった。炉床の南東側の壁は外傾して立ち上がっており，この部分に煙道があったと思われるが，上面が撹乱を受けているため確認はできなかった。炉床の北西側は，炉床とほぼ同レベルで平坦になっており，この部分が，足場と思われる。

F2の炉床は，南西壁際から北東へ傾斜する底面の北東側をさらに鍋底状に1段掘り込んだ北東壁際に設けられており，焼土が直径60cmほどの不整円形に，厚さ10cmほど堆積している。炉床は皿状にくぼんでおり，炉床の表

面は赤く硬く焼けている。炉床の北東側の壁にそって幅20cmほどの覆土には，焼土粒子が多量に含まれている。この部分が煙道のあとと推定される。足場は炉床の南西側で炉床よりも５cmほどくぼんでいる。この足場は南側が木の根によって壊されている。新旧関係は，F1の底面をF2の底面が掘り込んでいることから２基の炉は，F1の次にF2を使用したものと思われる。

遺物は，覆土上層から，土師器片22片が出土しただけである。

表４　炉穴一覧表

炉穴番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模 長軸×短軸(m)（ ）は炉床のみ	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土状態	出土遺物	備考
1	$F2h_8$	N－55°－W	不定形	3.34 × 2.28	25～40	外傾	凹凸	自然	土器片28片	
2	$G2a_9$	N－15°－W	楕円形	3.16 × 1.56	13～50	外傾	凹凸	自然	土器片８片	SI-5と重複
3	$G3a_1$	——	楕円形	(0.90 × 0.60)	15	外傾	凹凸	自然		
4	$G3a_1$	N－50°－W	楕円形	1.30 × 0.90	10～20	外傾	凹凸	自然	土器片１片	SK-7と重複
5	$G2a_9$	——	円形	0.98 × 0.93	22～28	外傾	平坦	自然		
6	$G2a_0$	N－11°－E	楕円形	3.80 × 1.00	12～34	外傾	凹凸	自然	土器片１片	SD-2と重複
7	$G3f_1$	——	不定形	(0.64 × 0.54)	16	外傾	凹凸	自然		
8	$F3e_2$	N－20°－E	楕円形	1.60 × 0.98	18～22	外傾	凹凸	自然		SI－28と重複
9	$F3f_4$	N－63°－E	楕円形	2.00 × 0.90	16～20	外傾	凹凸	自然	土器片19片	
10	$F2a_7$	N－82°－W	不整楕円形	2.04 × 0.90	20	垂直	凹凸	自然	チャート剝片３点 土器片１点	
11	$F3e_2$	N－27°－E	楕円形	1.89 × 1.19	20～30	外傾	凹凸	自然	土器片３片	
12	$F3g_5$	N－11°－E	楕円形	(1.80) × 0.90	20	外傾	凹凸	自然		SK-76と重複
13	$F3e_2$	N－80°－W	不整楕円形	1.56 × 0.90	20～30	外傾	平坦	自然		
14	$F3g_4$	N－４°－W	楕円形	2.02 × 1.20	16	外傾	凹凸	自然		
15	$C4h_4$	N－55°－E	長方形	2.28 × 1.37	28～60	外傾	凹凸	自然	土器片22片	

３　土　　坑

当遺跡において検出された土坑は，85基である。これらの土坑の多くは住居跡を検出した調査区にあり，D・F・G・H・L区に検出されている。土坑を掘り込んだところ，覆土もあまり締まりがなく，耕作・木根などによる撹乱を受けているものもあった。土坑の平面形は，円形，楕円形，隅丸長方形，長方形，不整円形，不整長方形，不定形を呈している。出土遺物は全体的に少なく，第１・６・16・81・83・84号土坑からは，底面や覆土中から比較的多くの遺物が出土しているが，他の土坑からは，ごく少量で土坑に伴うものとは判断できなかった。特徴的な土坑のみについて形状等を記述し，他の土坑については一覧表をもって掲載することにする。

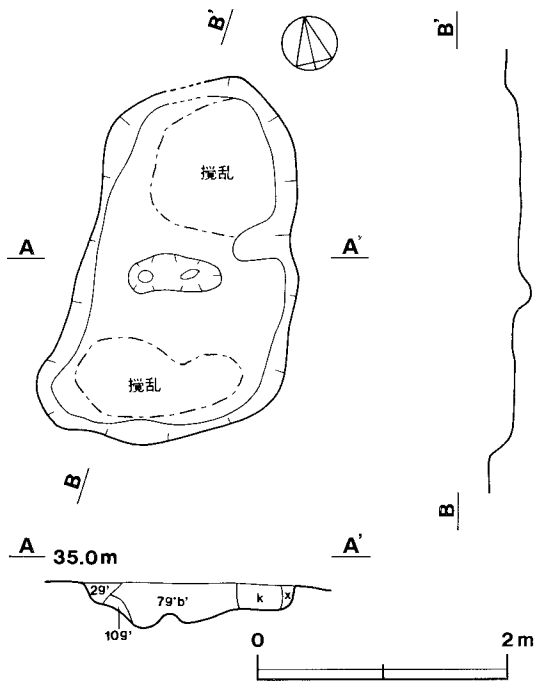
第１号土坑（第115図）

本跡は，当遺跡の中央部F2j$_4$区を中心に確認され，本跡の西側1.5mは調査エリア外で，第３号住居跡の北西約２mに位置している。

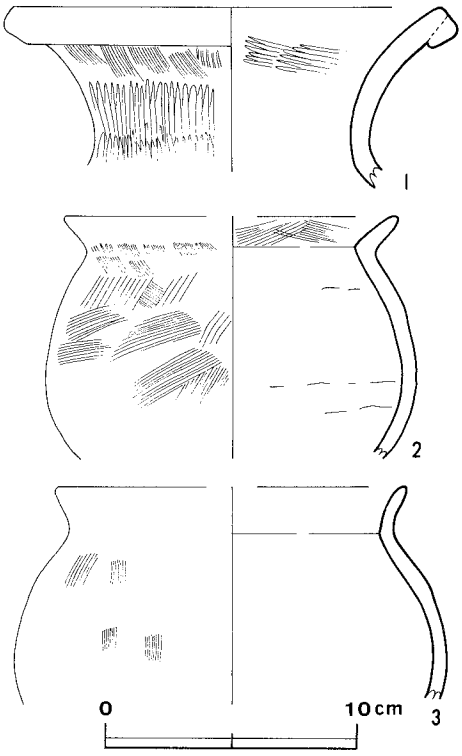
平面形は，長軸3.0m，短軸1.7mのやや北東側が幅の狭くなる隅丸長方形で，長軸方向はＮ－24°－Ｅである。壁はロームで外傾して立ち上がり，壁高は10～18cmである。底面は北東コーナー部と，南西壁が撹乱を受けやわらかいが，他はほぼ平坦で硬いロームである。

覆土は，２層からなり一部撹乱を受けている。上層はローム粒子多量，焼土粒子少量を含む暗褐色土，下層はローム粒子少量を含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，南西壁際の覆土上層から，甕形土器（P251・P252）の口縁部と，壺形土器（P253）の口縁部が出土している。そのほか土師器片84片が出土している。



第115図　第１号土坑実測図



第116図　第１号土坑出土遺物実測図

第１号土坑出土遺物観察表

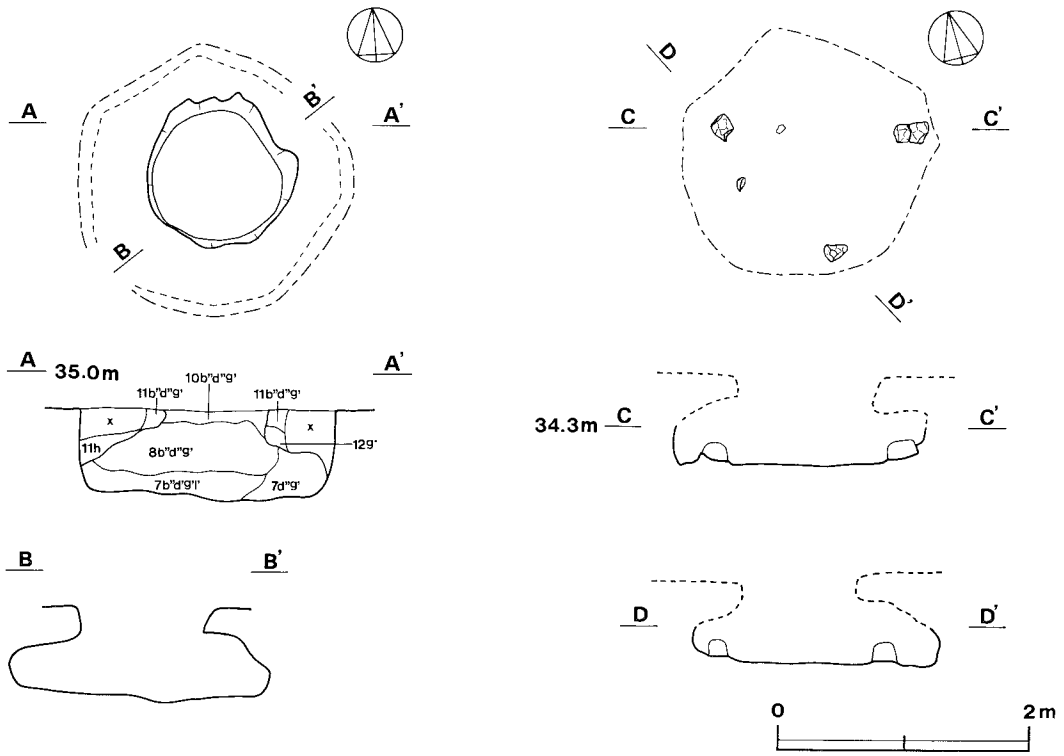
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第116図 1	壺形土器 土師器	A 17.2 B (6.6)	口縁部は複合口縁で，頸部から外反して立ち上がる。頸部以下は欠損している。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後縦位のヘラ磨き。胴部内面－横位のハケ目整形後横位のヘラ磨き。	スコリア・砂粒 橙色 普通	20% P253

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第116図 2	甕形土器 土師器	A(13.3) B (9.8)	口縁部は頸部から「く」の字状を呈して立ち上がる。胴部はほぼ球状を呈し，中位に最大径を有する。	口縁部内・外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ。胴部外面－斜位のハケ目整形，内面－斜位のハケ目整形後横位のヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% P251 外面煤付着
3	甕形土器 土師器	A(14.0) B (8.8)	口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。胴部は球状を呈し，中位に最大径を有すると思われる。	口縁部内・外面－横位のナデ。胴部外面－縦位のハケ目整形，胴部内面－ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	20% P252

第6号土坑（第117図）

本跡は，当遺跡の中央部G2d$_9$区に確認され，第11号土坑の東側約3m，第2号溝の西側約0.6mに位置している。当初，確認段階では断面形が円筒状を呈するものと予測したが，調査の進行に伴い，フラスコ状土坑であることが判明した。

掘り込みの上面は東にやや張り出しているものの長径1.2m，短径1.1mのほぼ円形で，底面は長径2.0m，短径1.9mの円形を呈する土坑である。壁はロームで硬く，断面はフラスコ状を呈し，北東壁は底面から0.2mほどの高さまで外傾し，さらに，内彎しながら0.4mまで立ち上がったのち外傾しながら上面に至る。壁高は80cmである。底面は，中央部からやや北東側に長径40cm，短径32cm，深さ4cmほどの楕円形に凹んでいる部分を除いて平坦で硬く締まったロームである。凹んだ

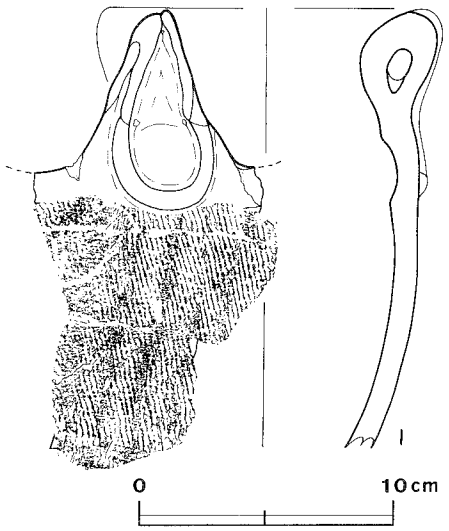


第117図　第6号土坑実測図

部分についての性格は不明である。

覆土は，4層からなり，上層はローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む褐色土，中層はローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む褐色土，下層はローム粒子，鹿沼土少量，焼土粒子，炭化粒子少量を含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，東・南・西壁の底面直上から，接合できた石棒(第151図Q153)が3つにわれて横位の状態で出土している。また，中央部の覆土層から，加曽利E1式の深鉢形土器口縁片1片(P303)が出土している。



第118図　第6号土坑出土遺物実測図

第6号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備　考
第118図 1	深鉢形土器 縄文式土器	A(13.0) B(17.8)	波状口縁部片で，橋状把手を縦位に貼付している。橋状下部には円状の隆帯を貼付し，以下に無節Lの縄文を施している。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	10% P303 加曽利EⅠ式

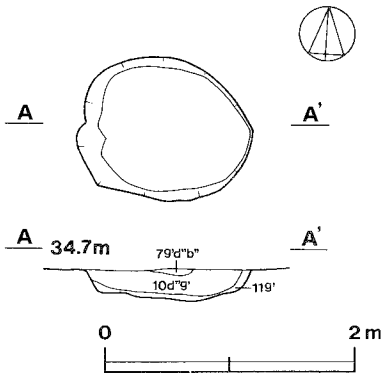
第16号土坑（第119図）

本跡は，当遺跡の中央部G2i_9区を中心に確認され，覆土から露呈した土器の一部も同時に検出した。第2号溝の東側約0.6mに位置している。

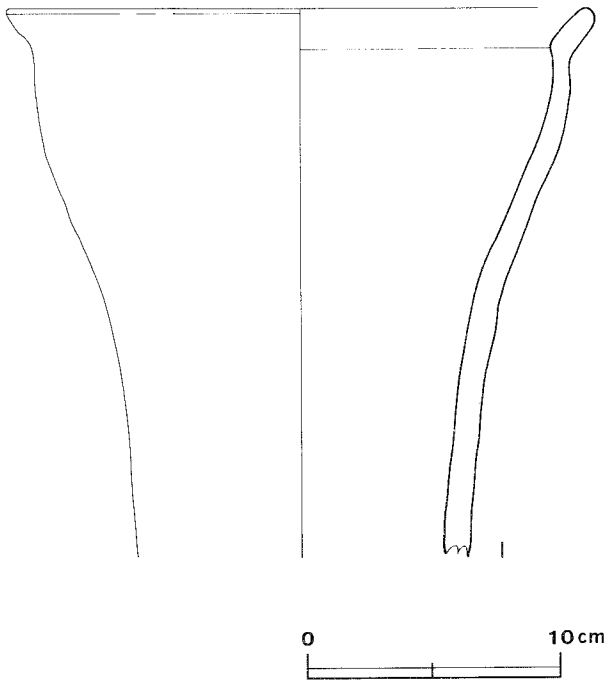
平面形は，長径1.4m，短径1.1mの楕円形で，長径方向はN－89°－Wである。遺構確認面から底面までの深さは16～20cmである。壁はロームで外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦で硬く締まったロームである。

覆土は，2層からなり，上層はローム粒子少量，炭化粒子微量を含む褐色土，下層はローム粒子少量を含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，中央部からやや北に寄った底面から，底部を欠損した深鉢形土器（P254）が口縁部を北東に向け斜位の状態で出土している。深鉢形土器は，縄文時代中期の阿玉台期に比定されるものと思われる。



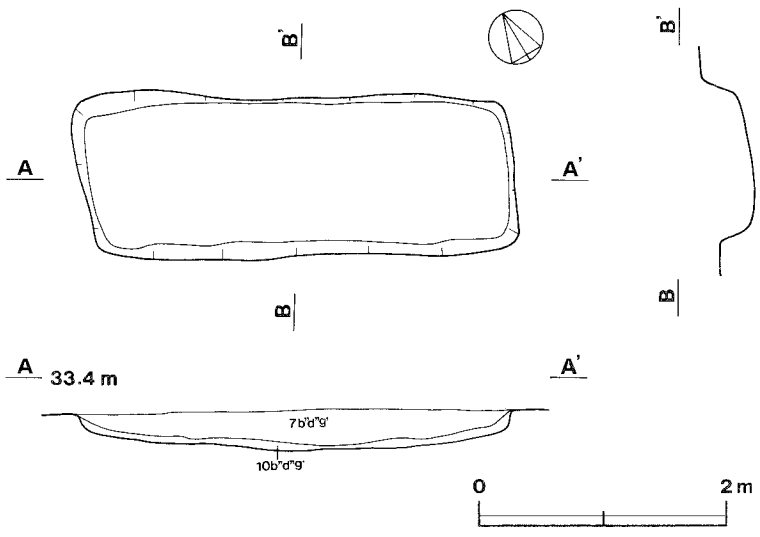
第119図　第16号土坑実測図



第120図　第16号土坑出土遺物実測図

第16号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備　考
第120図 1	深鉢形土器 縄文式土器	A 23.5 B(22.2)	胴部は下位からほぼ垂直気味に立ち上がり，胴部上位で軽く内彎気味に開き，口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部内面に稜を有する無文の土器で，口縁部の内・外面は横位のナデ，胴部内・外面は斜位のヘラナデが施されている。	スコリア・砂粒・雲母 褐色 普通	60% P254 外面煤付着 阿玉台式



第121図　第81号土坑実測図

第81号土坑(第121図)

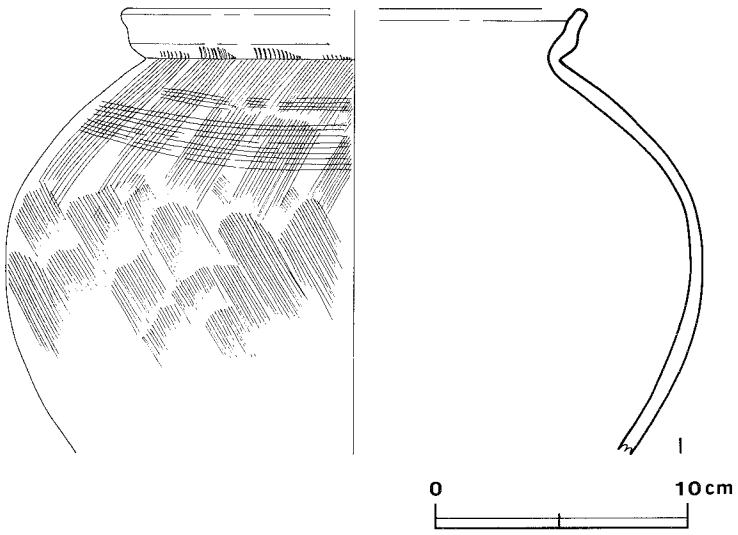
本跡は，当遺跡の北部D4j$_1$区を中心に確認され，第83号土坑の東側約2.2mに位置している。

平面形は，長軸3.5m，短軸1.3mの長方形で，長軸方向はN－60°－Wである。壁はロームで外傾して立ち上がり，

壁高は25cmほどである。底面は，平坦で硬く締まったロームである。

覆土は，2層からなり，上層はローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む暗褐色土，下層にローム粒子多量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む褐色土がレンズ状に自然堆積している。

遺物は，接合できた口縁部から胴部にかけてのS字状口縁を有する台付甕形土器(P262)が覆土上・中層から出土し，時期は古墳時代前期に比定される。また，同時期の土器片は上・中層を中心に175片出土しており，投棄されたものと思われる。



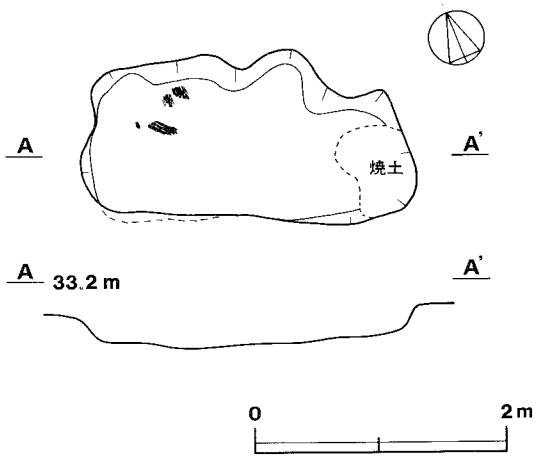
第122図　第81号土坑出土遺物実測図

第81号土坑出土遺物観察表

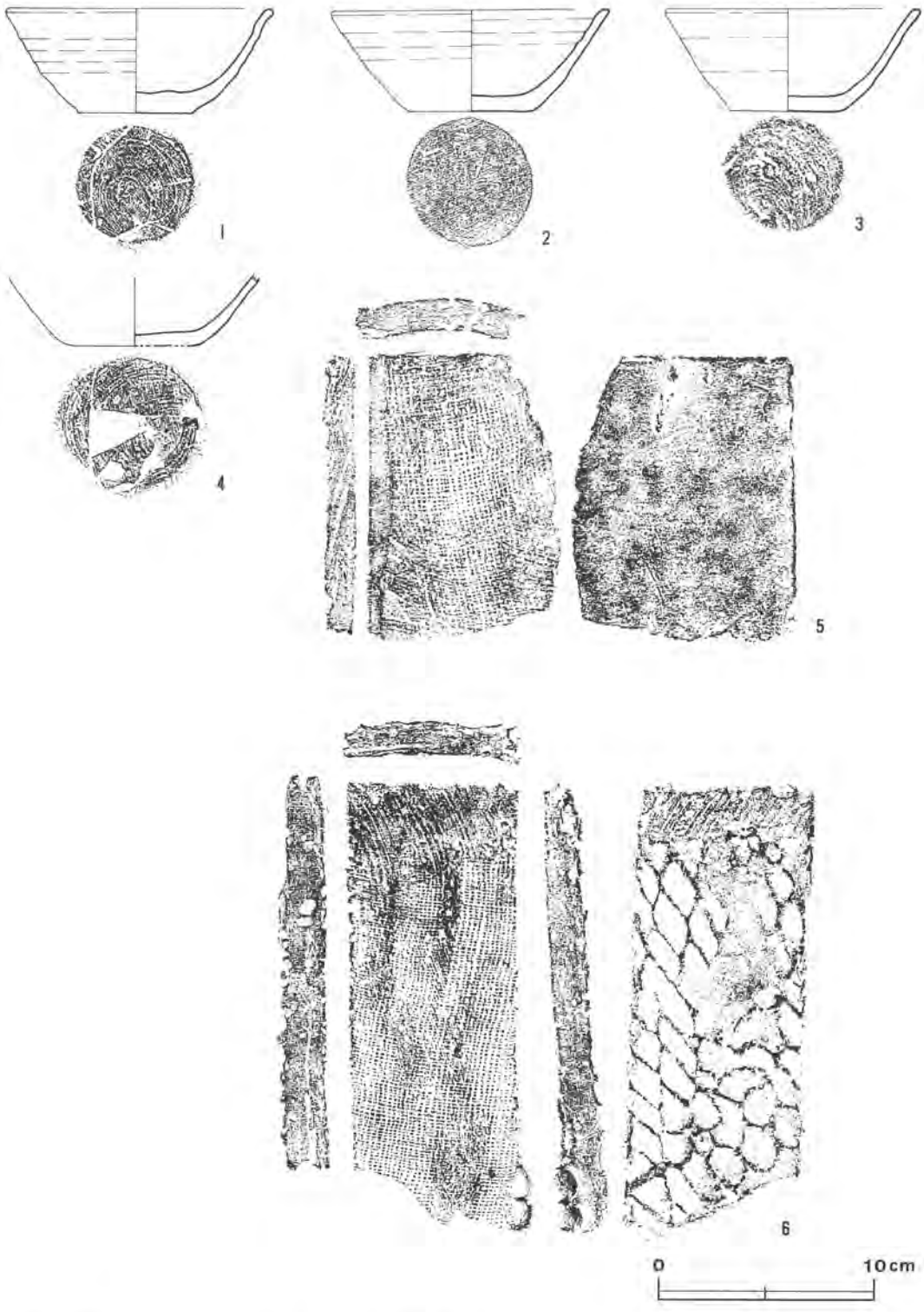
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第122図1	台付甕形土器 土師器	A(18.4) B(18.1)	口縁部は「S」字状を呈する。胴部は横長の球形を呈し，中位のやや上側に最大径を有する。台部は欠損している。	口縁部内・外面－横位のナデ。胴部外面－斜位のハケ目整形後上位に横位のハケ目整形，胴部内面－斜位のナデ。	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	30% P262 外面煤付着

第83号土坑（第123図）

本跡は，当遺跡の北部D3j$_0$区を中心に確認され，第35号住居跡の南東側約2.4m，第81号土坑の西側約2.2mに位置している。当初，確認段階では住居跡と予測し調査を実施したが，黒褐色土が10～15cmほど堆積した傾斜地と判明したため住居跡として認められず土坑として取り扱った。



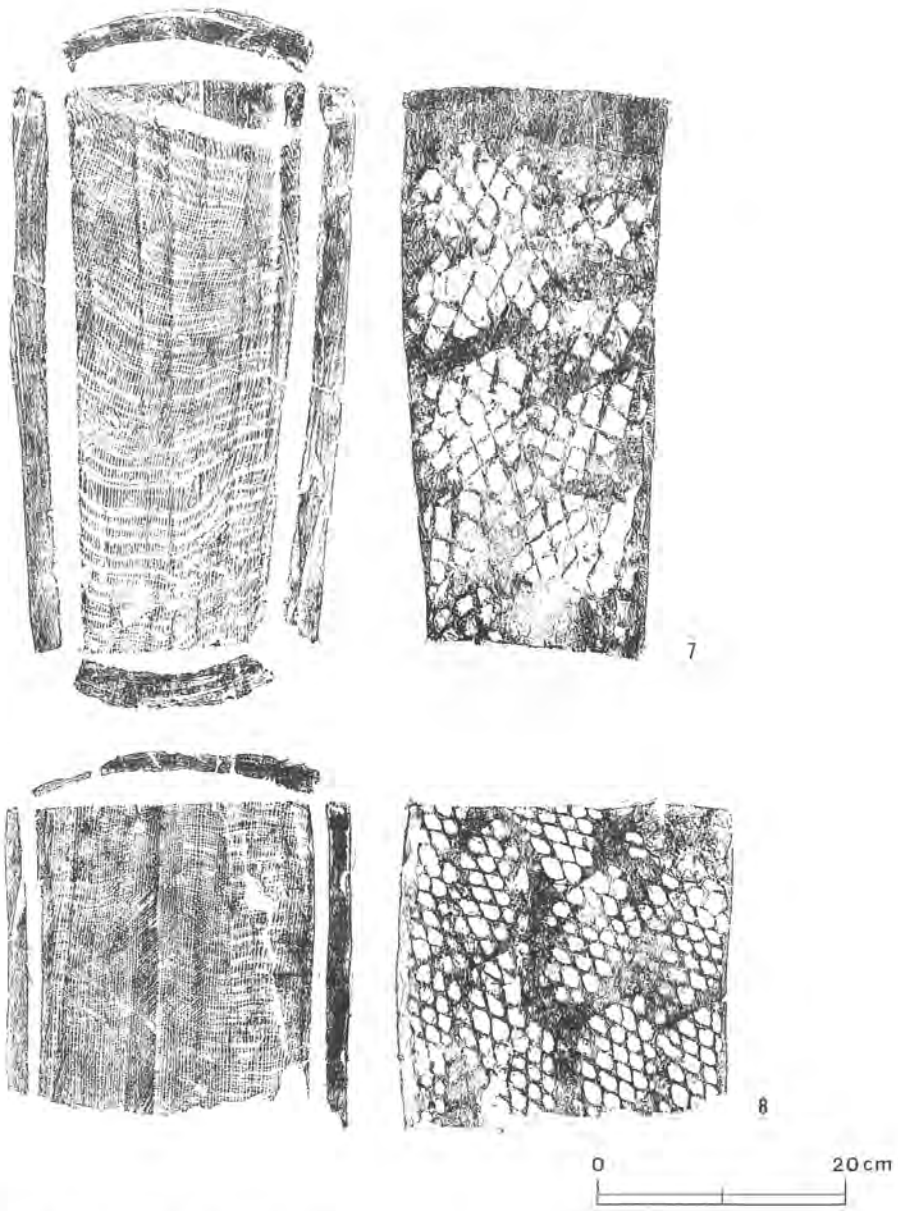
第123図　第83号土坑実測図



第124図　第83号土坑出土遺物実測図・拓影図

平面形は，長軸2.7m，短軸1.2mの長方形で，長軸方向はN－68°－Eである。壁はロームで硬くしまり，大きな根によって撹乱を受けた南西壁を除いて，他の壁は外傾して立ち上がり，壁高は30cmほどである。底面はほぼ平坦なロームで硬く締まっている。

覆土は，木の根によって，撹乱を受けているものの4層からなり，上・中層はローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む黒褐色土，下層はローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子，炭化材微量を含む黒褐色土が自然堆積している。南東壁にそって炭化材は混入した焼土が，長径70cm，



第125図　第83号土坑出土遺物拓影図

短径50cmの不定形の範囲に約6～12cm堆積している。また炭化材が南西付近に散在しており，土坑の中で木等を燃やしたものと思われる。

遺物は，中央部の底面から完形の坏形土器（P265）が正位に出土し，それに倒立した坏形土器(P266)が重なった状態で出土している。中央部と南西壁の底面や覆土中・下層から，接合できた坏形土器（P263・P264）が破片で散らばった状態で出土している。出土した4点の坏形土器の時期は平安時代国分期に比定される。また，中央部の覆土下層と南西側の焼土中から，完形のものと一部欠損した瓦が（TP91～TP94）が倒立や正位の状態で出土している。そのほか覆土中から土師器片109片が出土している。

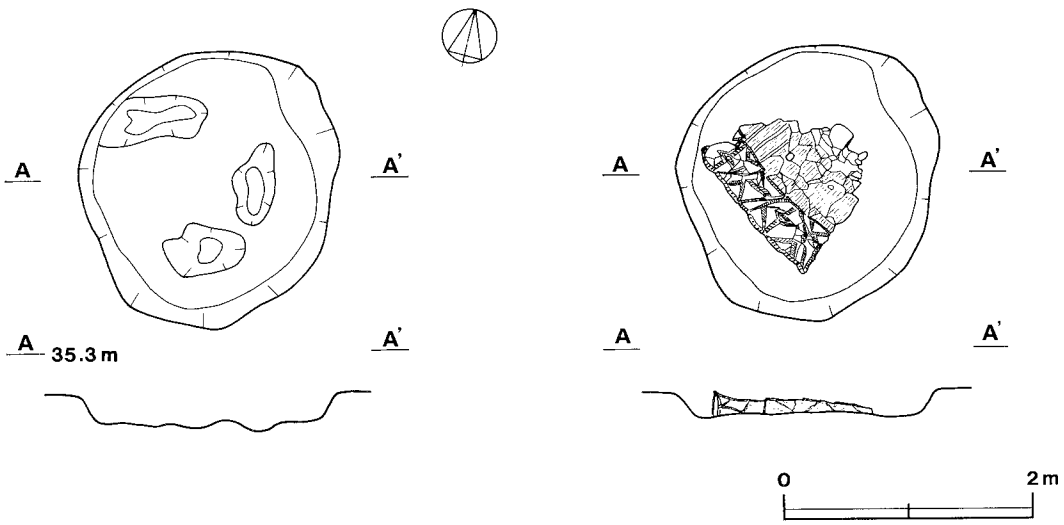
第83号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第124図 1	坏形土器 土師器	A 12.3 B 5.0 C 5.4	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。底部は平底である。	水挽き成形。底部右回転糸切り後無調整。体部内面横位のヘラ磨き，体部内・外面の水挽き痕は弱い。	砂粒・細砂 橙色 普通	99% P266
2	坏形土器 土師器	A 12.8 B 4.9 C 5.8	体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。底部は平底である。	水挽き成形。底部切り離し不明で，手持ちヘラ削り，体部・底部内面一横位のヘラ磨き。	砂粒・細砂 橙色 普通	99% P265 底部外面煤付着
3	坏形土器 土師器	A 11.8 B 4.8 C 5.4	体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。底部は平底である。	水挽き成形。底部右回転糸切り後無調整。体部内・外面の水挽き痕は弱い。	砂粒・スコリア・細砂 浅黄橙色 普通	80% P263 二次焼成 内・外面剝離
4	坏形土器 土師器	B (3.2) C 6.0	体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。底部は平底である。	水挽き成形。底部右回転糸切り後無調整。体部内・外の水挽き痕は弱い。	スコリア・砂粒・細砂 橙色 普通	50% P264

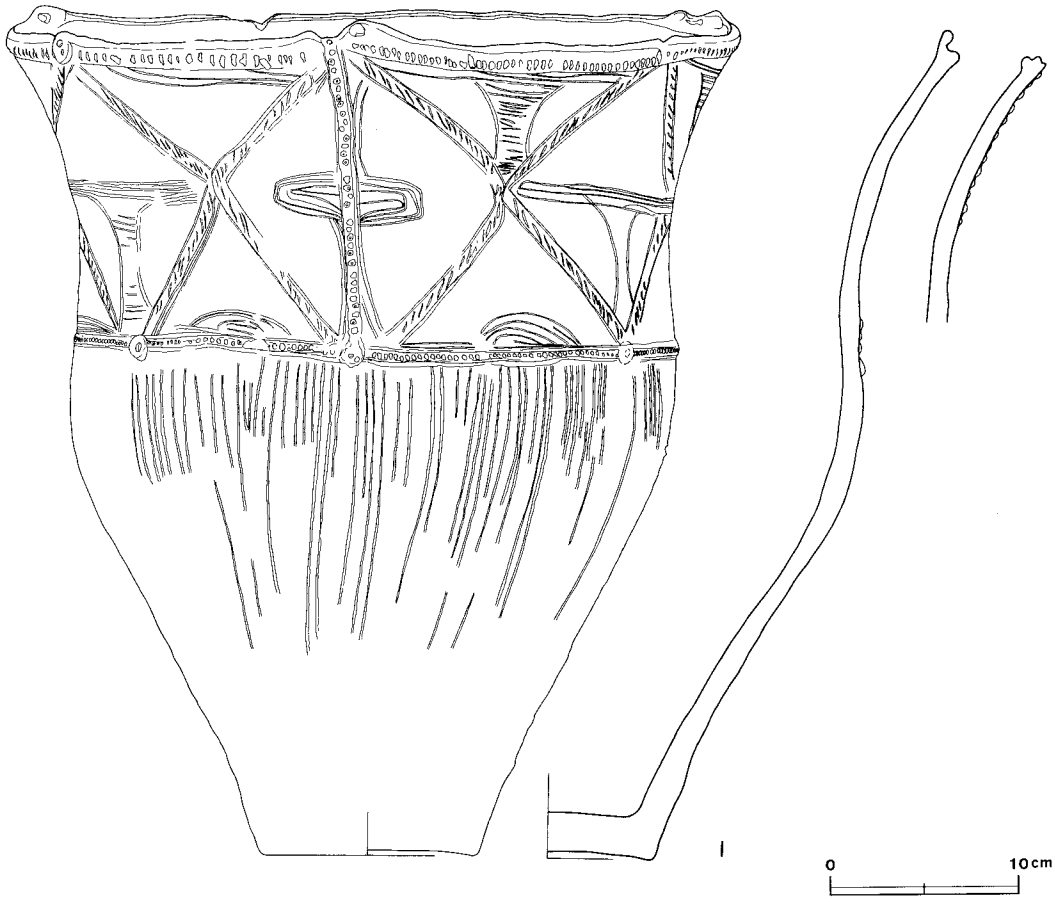
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第124図 5	丸瓦	厚さ 1.5	凹面には，布目痕がみられる。凸面には，縦位のナデ調整が残る。側面の凹面側には，面取り調整が施されている。	砂粒・細砂 にぶい橙色 良好	20% TP94 磨滅している
6	熨斗瓦	厚さ 1.6～2.0	凹面には，布目痕がみられる。凸面には，斜格子叩きが施されている。	砂粒・細砂 橙色 良好	50% TP93 二次焼成
第125図 7	熨斗瓦	厚さ 2.1～3.1 広端 20.0 狭端 16.0	凹面には，布目痕が残る。凸面には，斜格子叩きが施されている。凸面側の側面には，面取り調整が施されている。	砂粒・細砂 橙色 良好	100% TP91 二次焼成
8	平瓦	厚さ1.7～2.30	凹面には，布目痕が残り，部分的にヘラナデによって消されている。凸面には，斜格子叩きが施されている。凹・凸両面側の側面には，面取り調整が施されている。	砂粒・細砂 橙色 良好	50% TP92

第84号土坑（第126図）

本跡は，当遺跡の北部C4i$_4$区を中心に確認され，第38号住居跡の北東側約0.4mに位置している。平面形は，長径1.2m，短径1.0mの楕円形で，長径方向はN－22°－Wである。壁はロームで外傾して立ち上がり，壁高は10cmほどである。底面は，わずかに凹凸がありロームで硬く締まっている。



第126図　第84号土坑実測図



第127図　第84号土坑出土遺物実測図

覆土は，1層からなりローム粒子微量を含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，底面から口縁部を南西に向けた完形の深鉢形土器（P300）が横位につぶれた状態で出土している。縄文時代後期に比定される。そのほか，チャート片2点が出土している。

第84号土坑出土遺物観察表

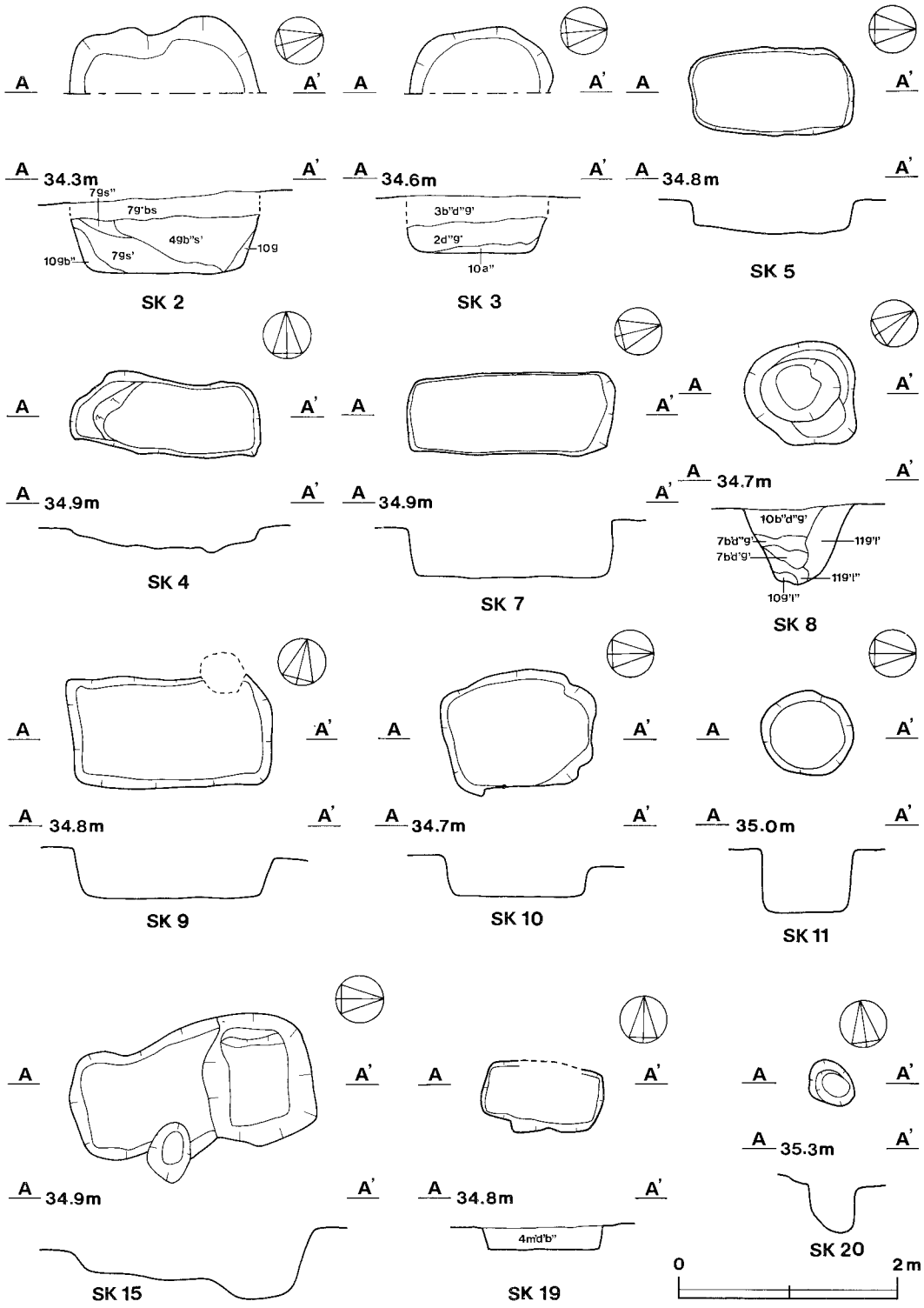
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第127図 1	深鉢形土器 縄文式土器	A 38.2 B 45.5 C 11.1	胴部は膨らみをもち，頸部で括れ，口縁部は外反している。口縁は3単位の波状口縁を呈し，波頂部には直径1cmほどの刺突を有し，波底部には円形貼付文が付されている。口縁直下の内面には1条の浅い沈線を，外面には刻みのある隆帯を施し，胴部上位には刺突のある隆帯をそれぞれ横位に巡らし，文様帯を区画している。隆帯間は，波頂部の脇から垂下する刺突を有する隆帯によって結ばれ，3単位に区画している。文様帯は，平行沈線による幾何学的な文様で区画し，平行沈線間には，斜位の沈線で充填している。胴部には7本を1単位とした櫛歯状工具による，縦位の条線が施されている。内面は横位のナデが施されている。底部は平底である。	砂粒・スコリア・ 小礫 にぶい橙色 普通	95% P300 外面煤付着 内面斑点状剥離 堀之内Ⅰ式

表5　土坑一覧表

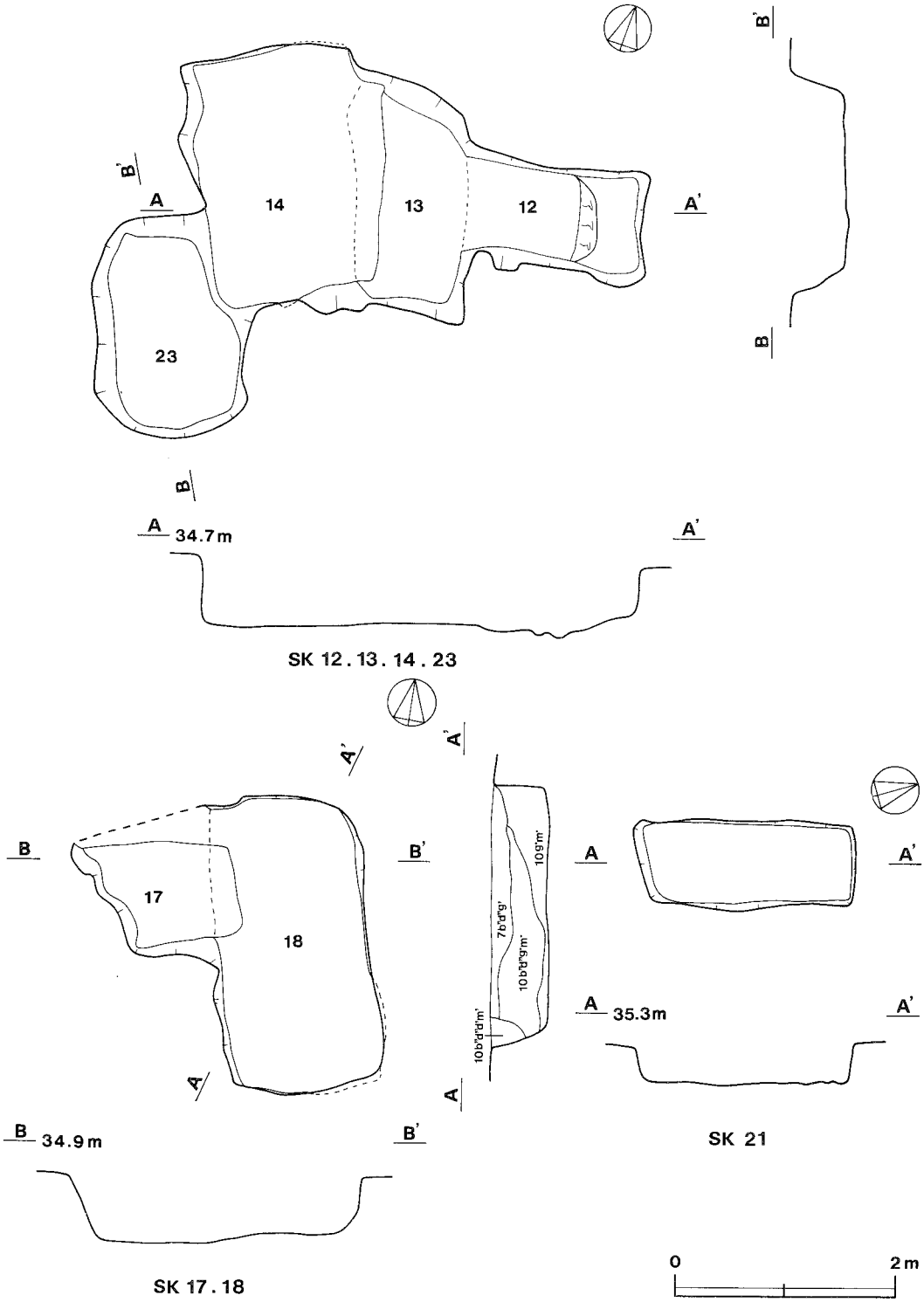
土坑番号	位置	長軸方向(長径方向)	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土状態	出土遺物	備考
1	F2j$_4$	N－24°－E	隅丸長方形	3.00 × 1.70	10～18	外傾	平坦	自然	甕・壺・土器片84片	
2	G3c$_8$	——	不明	1.66 ×(0.70)	50	外傾	平坦	自然	土器片5片	エリア外
3	G3g$_7$	——	不明	1.32 ×(0.62)	30	外傾	平坦	自然		エリア外
4	G3d$_1$	N－83°－W	楕円形	1.75 ×(0.70)	18	外傾	平坦	自然	土器片13片	SI-14と重複
5	G2d$_0$	N－2°－W	隅丸長方形	1.49 × 0.80	30	外傾	平坦	自然		SI-14と重複
6	G2d$_9$	——	円形	2.00 × 1.90	80	フラスコ状	平坦	自然	石棒1点・土器片1片	
7	G3b$_1$	N－14°－E	長方形	1.91 × 0.75	49	垂直	平坦	自然		FP-4と重複
8	G3a$_2$	——	円形	1.10 × 1.00	71	外傾	椀状	人為	土器片1片	SI-13と重複
9	G3h$_3$	N－77°－E	長方形	1.88 × 1.00	36～48	外傾	平坦	自然		
10	G3i$_3$	N－7°－W	長方形	1.40 × 1.10	26～38	外傾	平坦	自然		
11	G2d$_8$	——	円形	1.15 × 1.10	60	垂直	平坦	自然	土器片3片	
12	H3a$_1$	N－71°－E	長方形	(1.61)× 0.91	50	外傾	平坦	人為		SK-13と重複
13	H2a$_0$	N－17°－W	長方形	2.10 ×(1.01)	55	外傾	平坦	人為		SK-12・14と重複
14	H2a$_0$	N－30°－W	長方形	2.45 × 1.75	50	外傾	平坦	人為		SK-13・23と重複
15	G3j$_1$	N－11°－W	長方形	2.25 × 1.15	20～65	外傾	平坦	自然		
16	G2i$_9$	N－89°－W	楕円形	1.40 × 1.10	16～20	外傾	平坦	自然	深鉢・土器片10片	
17	H3c$_1$	N－80°－E	長方形	(1.28)×(0.94)	60	外傾	平坦	自然	土器片11片	SK-18と重複
18	H3c$_1$	N－12°－W	長方形	2.78 × 1.41	48	垂直	平坦	自然	土器片10片	SK-17と重複
19	G2i$_0$	N－83°－W	長方形	1.12 × 0.60	23	外傾	平坦	自然		
20	G2g$_6$	——	円形	0.45 × 0.43	28～40	外傾	平坦	自然	土器片1片	

土坑番号	位置	長軸方向(長径方向)	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土状態	出土遺物	備考
21	G2h$_5$	N－14°－E	長方形	2.00 × 0.83	38	外傾	平坦	自然	土器片4片	
22	G3i$_2$	N－72°－W	楕円形	1.60 × 0.70	50～63	外傾	凹凸	自然	土器片3片	
23	H2a$_0$	N－26°－W	長方形	2.06 × 1.36	32～44	外傾	平坦	自然		SK-14重複
24	H3b$_1$	N－12°－W	長方形	1.83 × 0.82	34～44	外傾	平坦	自然		
25	G2d$_8$	——	円形	1.05 × 0.95	51	垂直	平坦	自然	碗・土器片2片	
26	L1g$_9$	N－53°－E	長方形	2.20 × 1.14	66～84	外傾	平坦	自然	土器片4片	
27	L2g$_1$	——	不整円形	3.10 × 2.95	90～114	外傾	平坦	自然	土器片1片	
28	L1f$_8$	——	円形	1.10 × 0.88	28	外傾	皿状	自然		
29	L1f$_8$	——	不整円形	1.34 × 1.20	8～20	外傾	緩やかな凹凸	自然		
30	L1d$_6$	N－47°－W	楕円形	1.76 × 1.10	15	外傾	平坦	自然		
31	L1e$_6$	N－68°－W	隅丸長方形	2.21 × 1.67	20	外傾	平坦	自然		
32	L1e$_7$	N－89°－E	楕円形	1.61 × 1.00	14～26	外傾	平坦	自然	土器片1片	
33	L1d$_8$	N－47°－W	楕円形	1.46 × 1.23	24	外傾	平坦	自然		
34	L1e$_8$	——	円形	1.11 × 1.05	25	外傾	平坦	自然		
35	L1e$_9$	——	円形	1.27 × 1.16	18	外傾	凹凸	自然		
36	L1b$_0$	——	円形	1.35 × 1.26	12	外傾	平坦	自然		
37	L1c$_6$	——	円形	1.22 × 1.12	8～28	外傾	緩やかな凹凸	自然		
38	L1b$_6$	N－70°－W	楕円形	1.20 × 0.86	25	外傾	平坦	自然		
39	L1b$_5$	N－29°－W	楕円形	2.51 × 0.90	22	外傾	平坦	自然		
40	L1a$_9$	——	円形	2.07 × 2.01	22～44	外傾	平坦	自然		
41	L1d$_9$	N－30°－W	楕円形	2.13 × 1.10	20	外傾	平坦	自然		
42	L1c$_8$	N－75°－E	楕円形	1.09 × 0.78	15～40	外傾	平坦	自然		
43	L1a$_8$	N－41°－W	楕円形	1.06 × 0.77	14	外傾	平坦	自然		
44	L1d$_9$	N－49°－W	楕円形	1.32 × 1.14	24	外傾	平坦	自然		
45	L1e$_0$	N－42°－E	楕円形	1.32 × 1.04	18	外傾	平坦	自然		
46	L1c$_6$	——	不定形	1.35 × 1.17	20	外傾	平坦	自然	土器片5片	SI-23と重複
47	L1i$_0$	N－29°－E	楕円形	1.65 × 1.08	30	外傾	皿状	自然		
48	L2h$_2$	N－4°－E	楕円形	1.49 × 1.24	18	外傾	平坦	自然		
49	L2i$_3$	N－51°－E	楕円形	3.43 × 2.07	10～30	外傾	凹凸	自然	土器片1片	
50	L2c$_2$	N－42°－W	楕円形	0.96 × 0.77	25	外傾	平坦	自然	土器片1片	
51	G3h$_4$	N－81°－W	長方形	1.58 × 1.04	19	外傾	平坦	自然	土器片4片	
52	G3e$_2$	N－7°－W	長方形	2.50 × 1.18	40	外傾	平坦	自然	土器片21片	
53	H2d$_5$	N－12°－E	長方形	2.83 × 1.47	27	外傾	平坦	自然	土器片13片	SK-54と重複
54	H2d$_5$	N－12°－E	長方形	2.13 × 0.63	45	外傾	平坦	自然		SK-53と重複
55	H2c$_7$	N－13°－E	長方形	(1.90) × 0.82	50	外傾	平坦	自然	皿(陶器) 土器片33片	SK-56と重複
56	H2c$_7$	N－75°－W	長方形	1.73 × 0.57	45	外傾	平坦	自然		SK-55と重複
57	H2c$_8$	N－5°－E	長方形	1.66 × 0.90	35	外傾	平坦	自然	土器片5片	
58	F2b$_6$	N－64°－E	楕円形	0.70 × 0.58	18	外傾	平坦	自然	土器片2片	
59	F2b$_8$	N－49°－E	楕円形	0.50 × 0.40	40	外傾	平坦	自然		
60	E2i$_6$	N－57°－W	方形	0.90 × 0.96	45	外傾	平坦	自然		SK-61・SD-3と重複

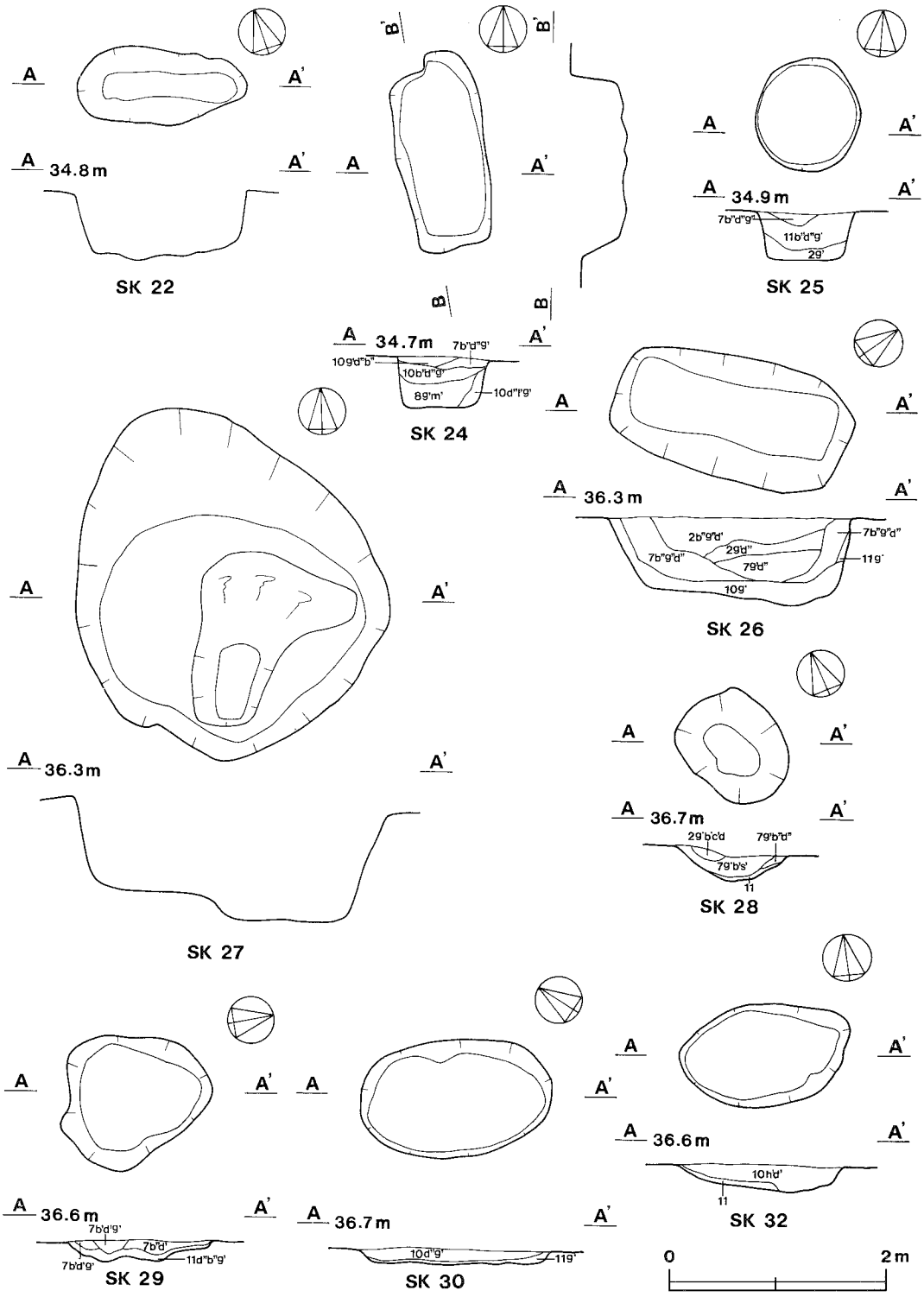
土坑番号	位置	長軸方向(長径方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土状態	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
61	E2i$_{6}$	N－46°－E	不整長方形	3.39 × 2.43	160	外傾	凹凸	人為	土器片13片	SK-60・SD-3と重複
62	F3d$_{4}$	N－26°－W	楕円形	2.00 × 1.14	55	外傾	平坦	自然	擂鉢(陶器)・内耳形土器土器片91片	
63	F3e$_{4}$	N－36°－W	長方形	3.14 × 0.75	47	垂直	平坦	自然	土器片5片	SI-32と重複
64	F2d$_{0}$	——	円形	1.04 × 0.95	45	外傾	平坦	自然	土器片4片	
65	E2j$_{7}$	N－19°－E	方形	1.54 × 1.34	110	外傾	平坦	自然	土器片18片	
66	F3d$_{3}$	N－53°－W	長方形	2.90 × 0.76	33	外傾	平坦	自然	土器片9片	
67	F2d$_{9}$	N－25°－W	楕円形	2.00 × 1.60	63	外傾	平坦	自然	土器片8片	
68	F2a$_{6}$	N－54°－E	楕円形	1.54 × 1.04	10～20	外傾	平坦	自然		
69	F2b$_{7}$	N－60°－W	長方形	1.57 × 0.88	7～15	外傾	凹凸	自然	土器片6片	
70	F2d$_{8}$	——	不定形	0.98 × 0.75	16～83	外傾	平坦	自然		
71	F3f$_{1}$	N－37°－W	楕円形	1.07 × 0.70	15～22	外傾	凹凸	自然		
72	F3e$_{2}$	N－77°－E	楕内形	1.86 × 0.97	47	外傾	平坦	自然	土器片4片	
73	F3g$_{6}$	——	不定形	0.80 × 0.52	40～60	外傾	坑状	自然	内耳形土器・甕土器片52片	
74	F2d$_{9}$	——	不整円形	1.00 × 0.88	14～28	外傾	凹凸	自然	土器片1片	
75	F2c$_{9}$	N－13°－E	楕円形	1.47 × 1.15	24	外傾	平坦	自然	土器片5片	
76	F3g$_{5}$	N－90°	方形	(0.92)× 0.90	10～24	外傾	緩やかな凹凸	自然		FP-12と重複
77	D3c$_{1}$	——	円形	2.58 × 2.53	23	外傾	平坦	自然	土器片14片	
78	D3a$_{3}$	——	円形	1.32 × 1.26	10	外傾	平坦	自然		SI-34と重複
79	C2j$_{9}$	——	円形	1.28 × 1.25	46	外傾	平坦	自然	土器片3片	SK-80と重複
80	C2j$_{8}$	N－60°－W	隅丸長方形	(2.62)× 2.23	24	外傾	平坦	自然	土器片4片	SK-79と重複
81	D4j$_{1}$	N－60°－W	長方形	3.50 × 1.30	25	外傾	平坦	自然	台付甕土器片175片	
82	D3b$_{2}$	N－40°－E	楕円形	3.55 × 1.70	14～26	外傾	凹凸	自然		
83	D3j$_{0}$	N－68°－E	長方形	2.70 × 1.20	30	外傾	平坦	自然	坏・土器片109片・瓦4点	
84	C4i$_{4}$	N－22°－W	楕円形	1.20 × 1.00	10	外傾	凹凸	自然	深鉢・土器片5片・チャート片2点	
85	L2e$_{4}$	N－66°－E	楕円形	2.03 × 1.70	183	外傾	平坦	人為		



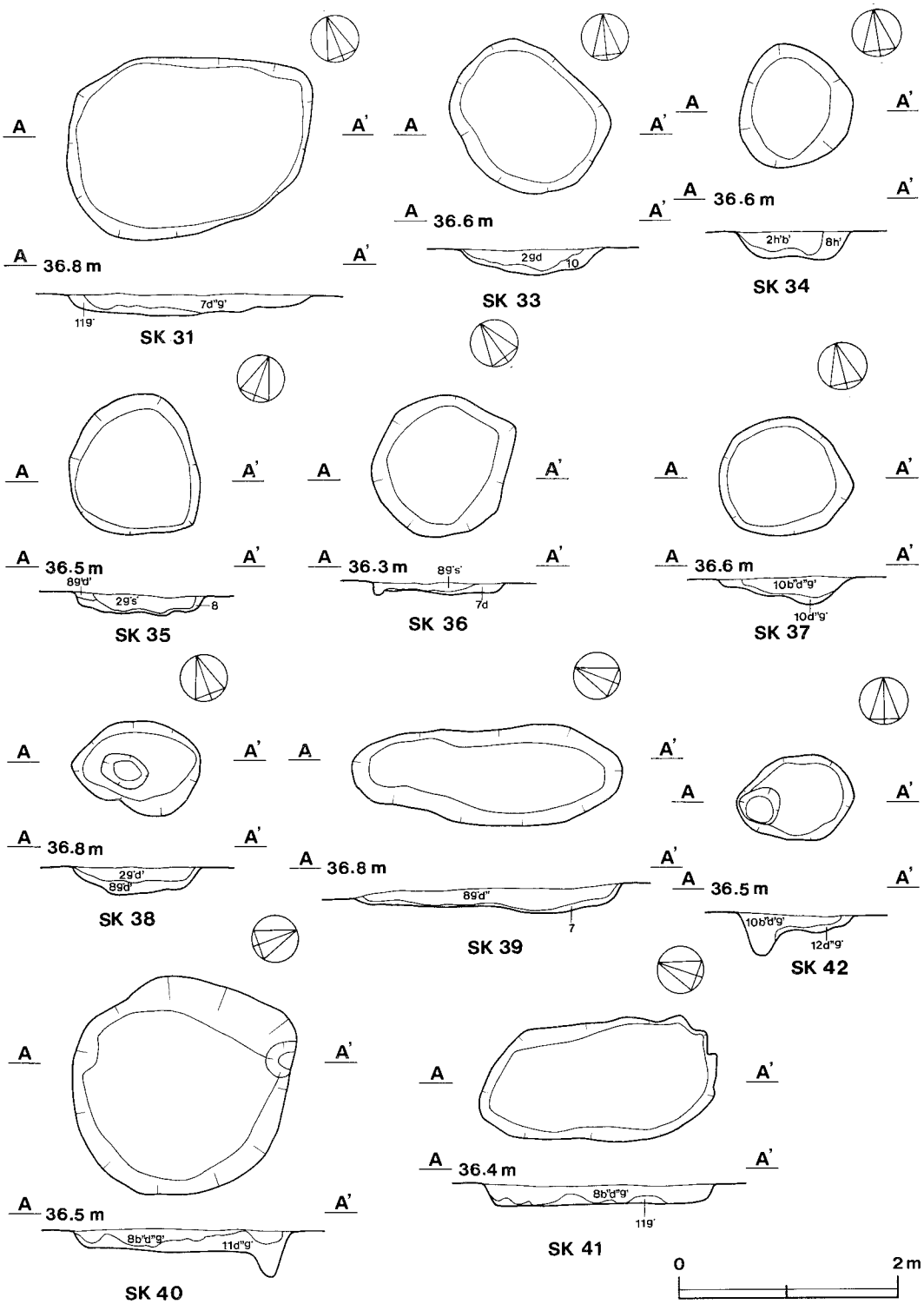
第128図　土坑実測図(1)



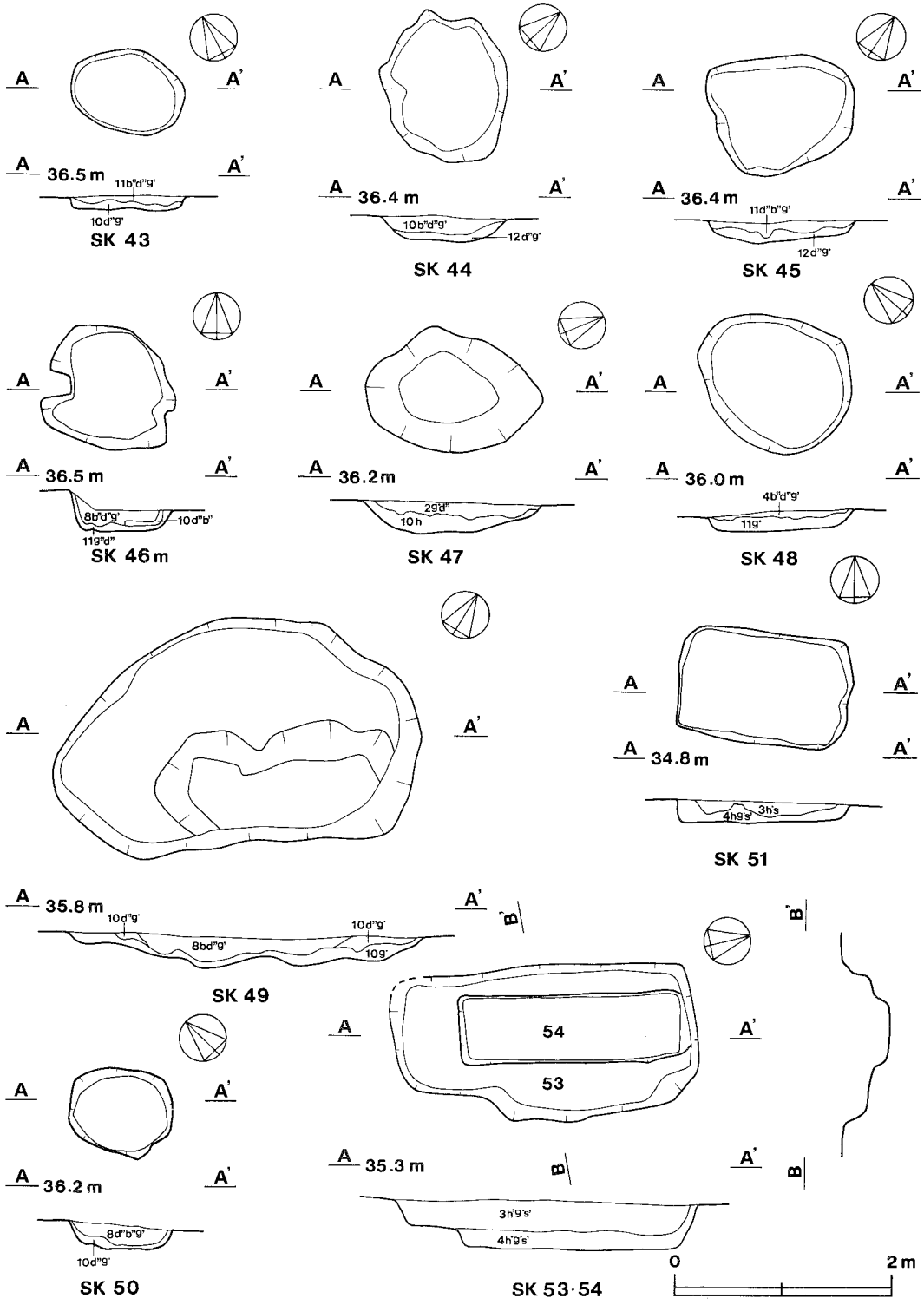
第129図　土坑実測図(2)



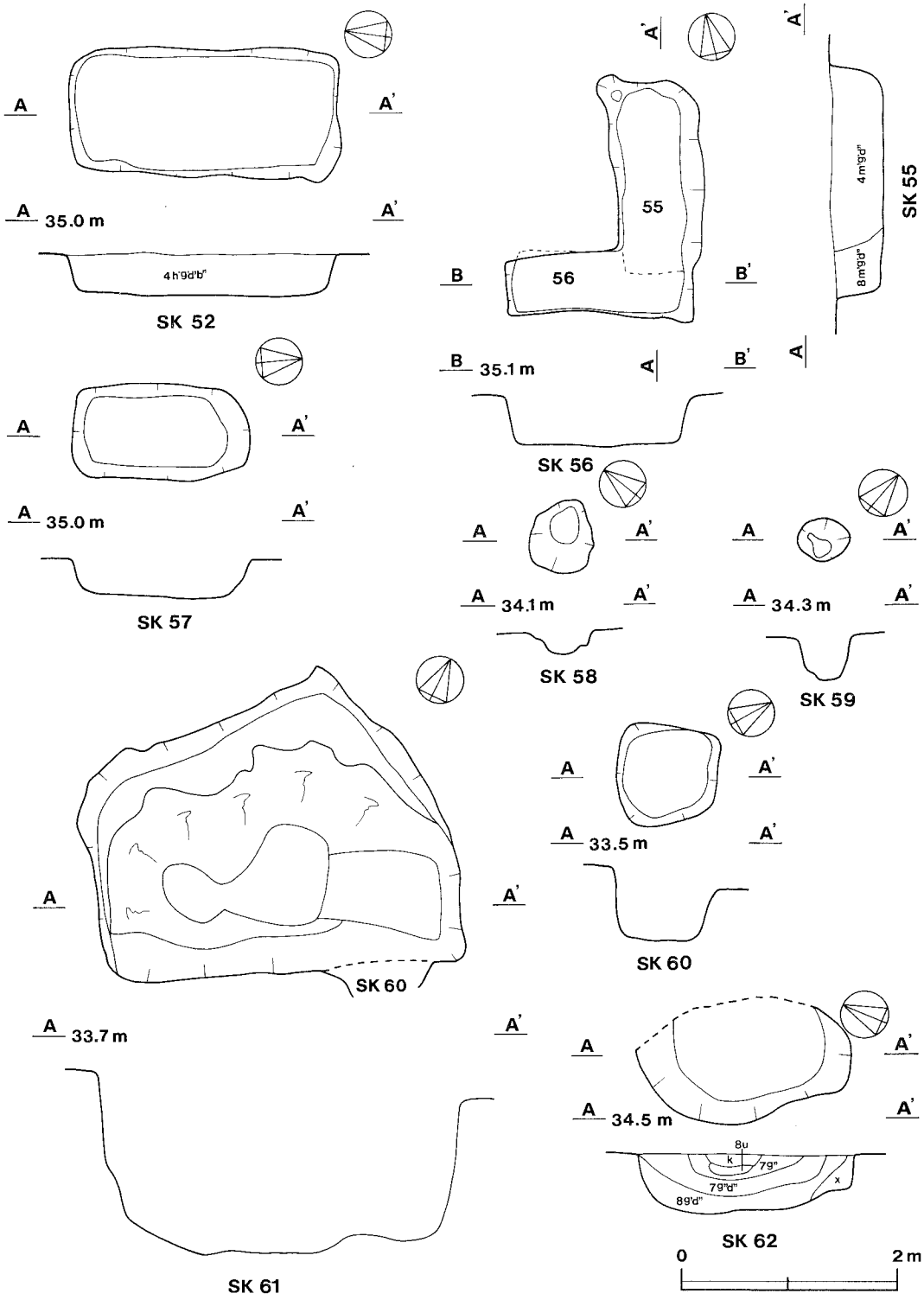
第130図　土坑実測図(3)



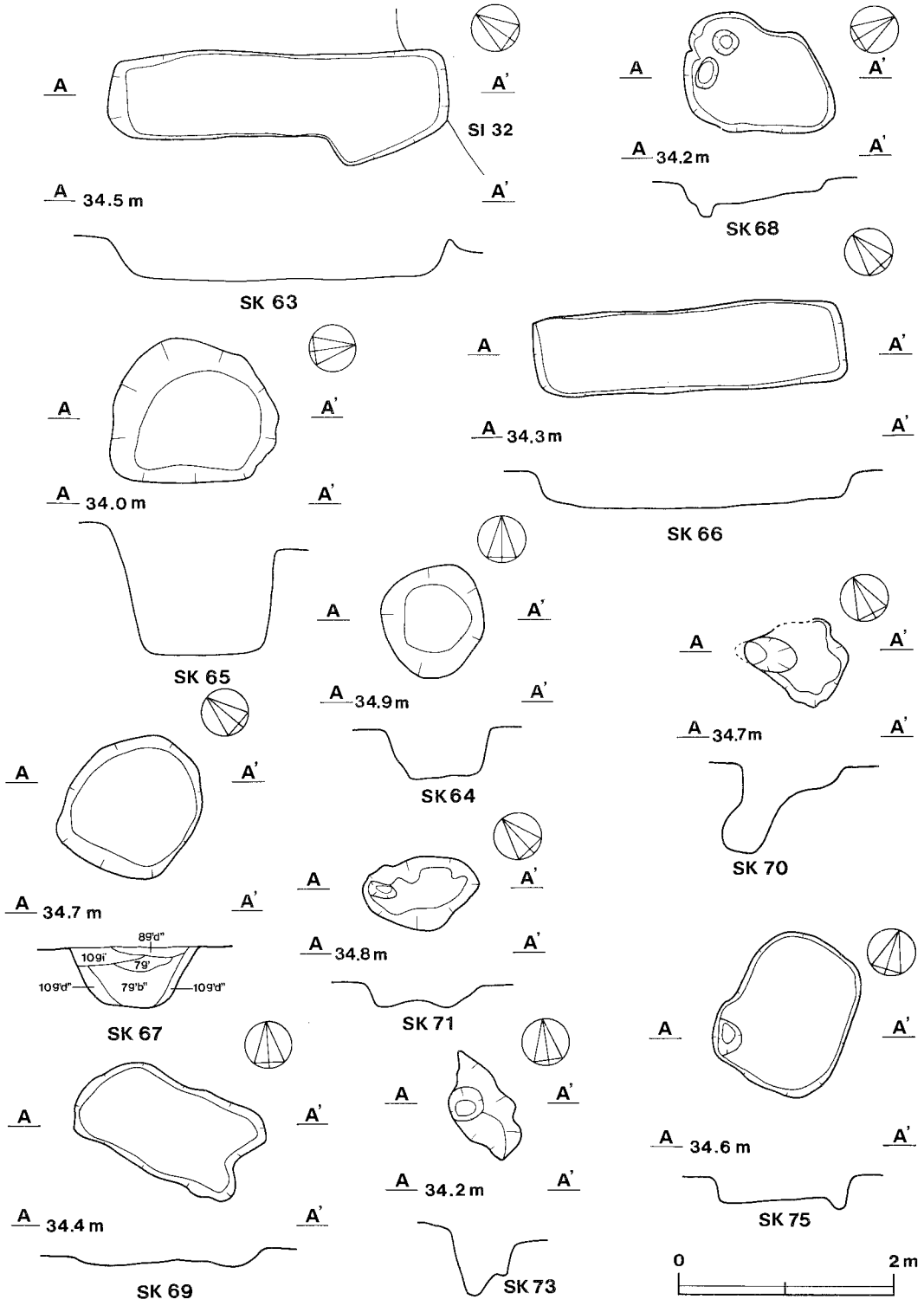
第131図　土坑実測図(4)



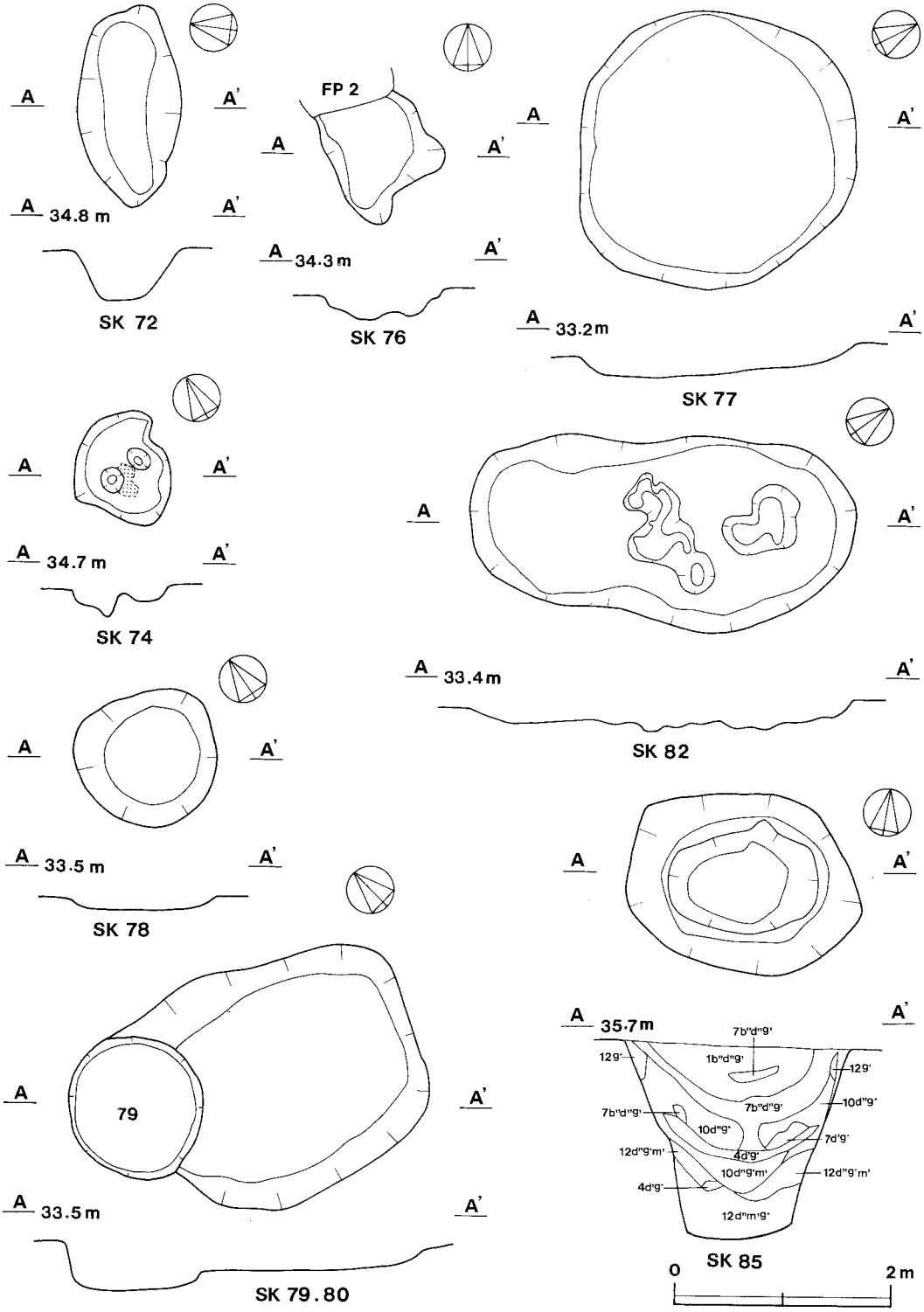
第132図　土坑実測図(5)



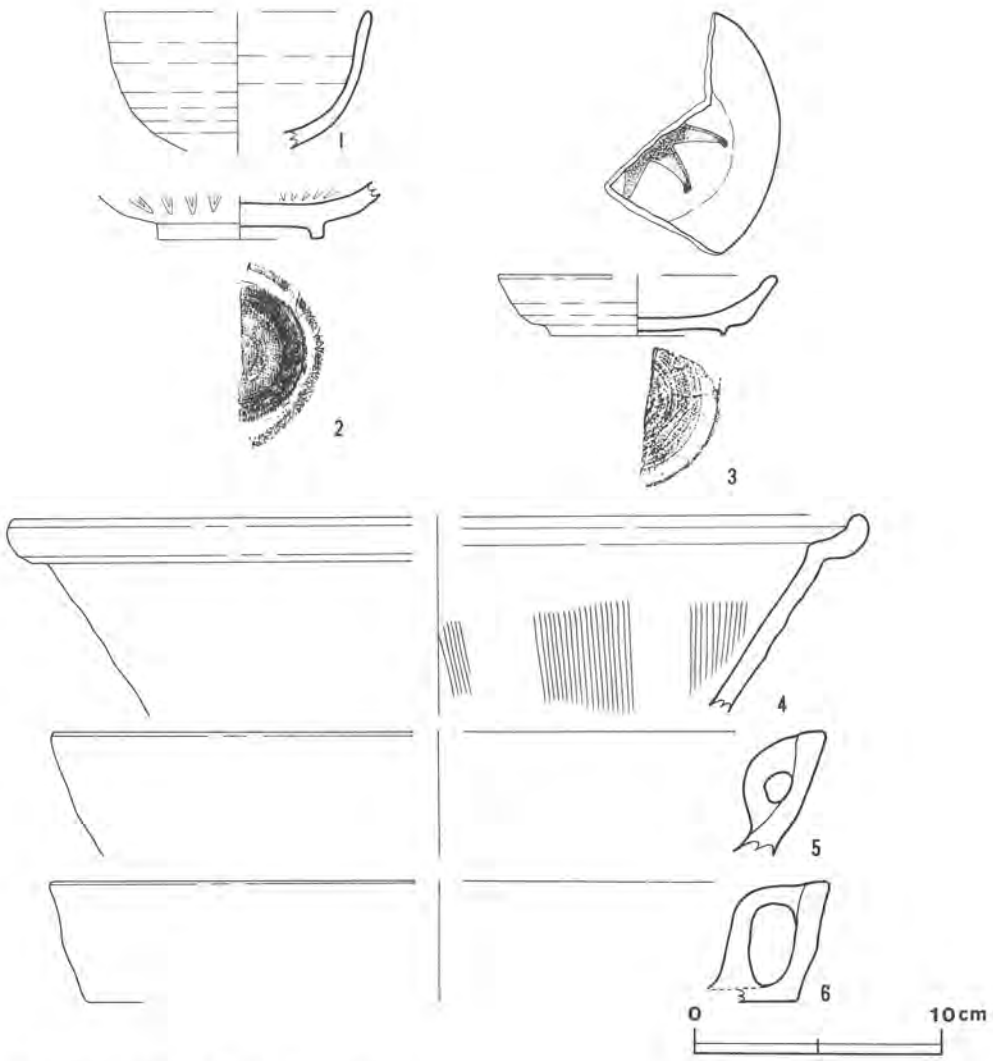
第133図　土坑実測図(6)



第134図　土坑実測図(7)



第135図　土坑実測図(8)



第136図　土坑出土遺物実測図

土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第136図 1	碗 (陶器)	A(10.8) B (5.6)	体部は下位より内彎しながら立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。底部は欠損している。	水挽き成形。底部を除いた内・外面－施釉。	(胎土) 淡黄色 (釉) 明黄褐色	40% P256 近世瀬戸 SK-25覆土
2	碗 (陶器)	B (1.8) C (6.8)	底部破片で，体部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り後高台接合，外面太く浅い沈線が菊花状に巡る。高台を除いた内・外面－施釉。	(胎土) 淡黄色 (釉) オリーブ黄色	30% P255 近世瀬戸 SK-25覆土
3	皿 (陶器)	A(11.3) B 2.5 C (7.2)	体部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り後高台接合，底部を除いて内・外面－施釉。底部内面－草花文。	(胎土) 灰白色 (釉) 灰白色	30% P257 近世瀬戸 SK－55覆土

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第136図 4	擂　鉢 (陶　器)	A(34.3) B (8.0)	体部は直線的に外上方に開いて立ち上がり，口縁部に段を有している。	ロクロ成形。内面－19本1単位の櫛目が縦位に施されている。器面は内・外面－凹・凸で施釉。一部露胎。	細砂 極暗赤褐色 普通	20% P258 近世瀬戸 SK－62覆土
5	内耳形土器 土師質土器	A(31.4) B (5.0)	体部はやや内彎気味に開いて立ち上がる。口唇部は平坦，器高が低く，耳は1か所残存。	内・外面－横位のナデ。耳接合。	砂粒・雲母 暗褐色 普通	10% P259 SK－62覆土
6	内耳形土器 土師質土器	A(31.6) B 4.9 C(28.8)	体部はやや内彎気味に開いて立ち上がる。口唇部は平坦。平底で器高が低い。耳は1か所残存。	内・外面－横位のナデ。耳接合。	砂粒・雲母 褐色 普通	10% P261 SK－73覆土

4　溝

当遺跡の調査区から検出された溝は6条である。これらの中には，第5・6号溝のようにほぼ同一の規模と方向性をもっているものもあるが，その他はいずれも共通する性質がなく，時期や性格については不明である。

第1号溝（第137図）

本跡は，当遺跡のL1区に確認され，第23号住居跡の東側約5.2mに位置している。

溝の北端は，L1c_9区に確認され，主軸方向はN－5°－Wを指し，南方向のC1e_9区まで直線的に4.6m延びている。さらに，L1d_9区では南東方向に角度を変えて主軸方向N－16°－Wで直線的に4.8m延びてL1e_9区の南端で消滅している。総延長は9.4mである。溝は上幅30～50cm，下幅16～30cm，深さ9～14cmである。壁は，ロームで締まり，ゆるやかに立ち上がり，底面は平坦である。断面形は皿状を呈している。北端の底面レベルはa点で36.115m，南端の底面レベルはb点で36.091mである。

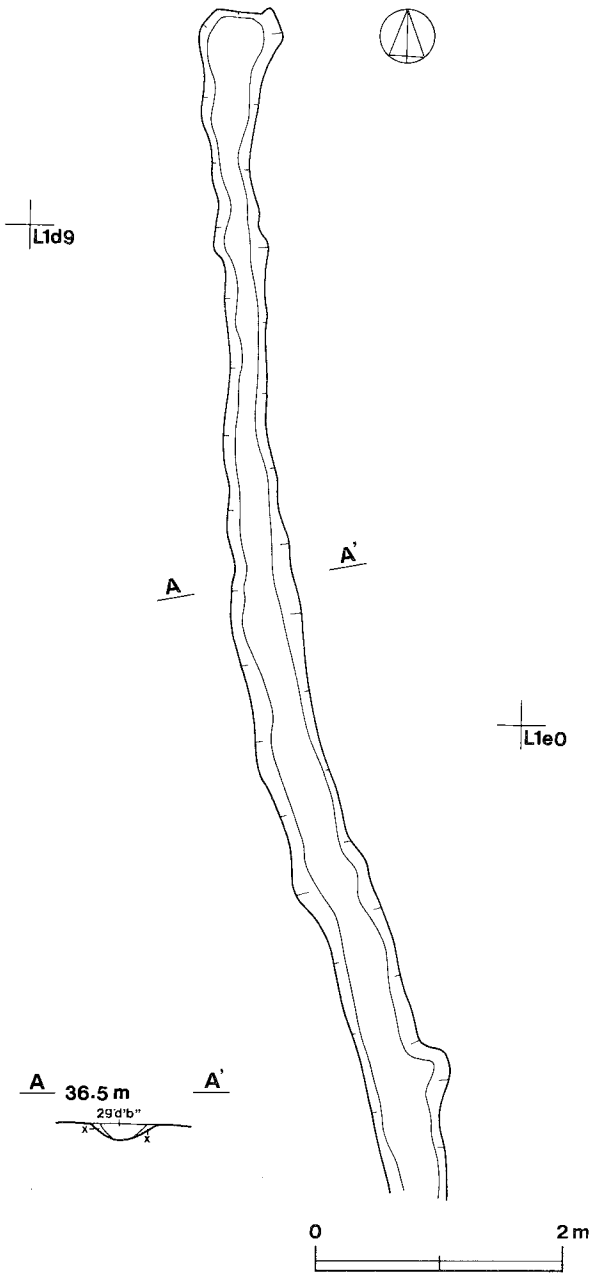
覆土は1層で，ローム粒子多量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む黒褐色土が，あまり締まりのない状態で堆積している。

遺物は，出土していないため，時期は不明である。

第2号溝（第138図）

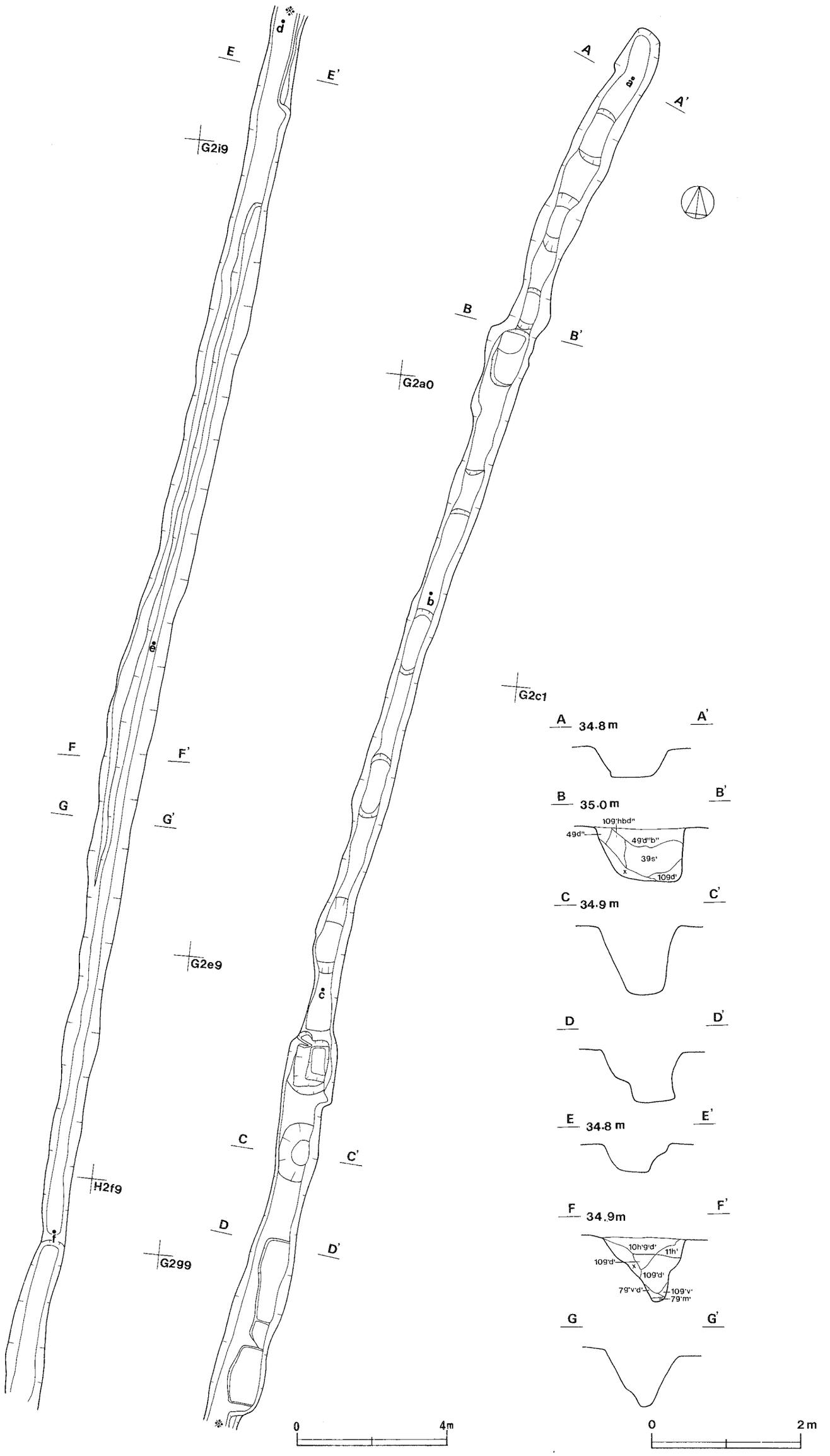
本跡は，当遺跡の中央部F2・F3・G2・H2区に北方向から南方向にほぼ直線的に確認されている。また，本跡は遺跡内の地籍図に見られる土地の境界線に沿って掘られている。

溝の北端は，当遺跡の中央部F2・F3区を横断する市道の南側F3h_1区に確認され，主軸方向は，N－25°－Eを指し，南西方向のF2j_0区まで延びており，長さは8.7mである。F2j_0区から南西方向



第137図　第１号溝実測図

$G2e_9$区までの長さは19.7mで，主軸方向は，N－12°－Eを指し，$G2e_9$区から$H2c_8$区までの長さは34.3mで，主軸方向はN－8°－Eを指している。さらに，$H2c_8$区から南方向の$H2g_8$区までの長さ14.3mで，主軸方向はN－3°－Eを指している。調査した溝の総延長は77.0mである。また，本跡は，南側のI2区にも延びていることが$H2g_8$区の南側壁から確認できるが，畑の境界に沿って掘られていることや，遺構の覆土，出土遺物等を検討した結果，開発前まで使用されていた溝と思われるため表土除去した部分のみ調査した。溝の幅は，$F2j_0$区から$G2e_9$区の間は，やや狭く上幅64～88cm，下幅28～53cmであるが，その他は，上幅80～125cm，下幅26～53cmである。壁は，ロームで締まり，外傾して立ち上がり，$G2f_9$，$G2g_9$区の西壁は，緩やかに立ち上がっている。底面もロームで締まっており，$F3h_1$区から$G2g_9$区の間は凹凸しているが，$G2h_9$区から$H2g_8$区は全体的に平坦である。$F3h_1$区と$G2g_9$区の間の凸凹は，溝の底面を耕作者が部分的に掘り下げたもので長さ1.2m～1.9m，幅28～53cmである。従って深さも一定せず20～90cmである。断面形は，全体的に「_/」形を呈しており，掘り下げられた部分は，「⌝_/」，「__/」，「_/」を呈している。底面のレベルは，a点で34.083m，b点で34.058m，c点で34.41m，d点で34.109m，e点で33.783m，f点で34.212mである。



第138図　第２号溝実測図

覆土は，上層にローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む暗褐色土，下層にローム粒子少量，炭化粒子微量を含む締まりのない褐色土が自然堆積している。

遺物は，上層から土師器片，陶磁器片がまとまった状態で，砥石が散在した状態でそれぞれ少量出土している。本跡に伴うものではない。陶磁器は，近世，近代に比定されるものと思われる。

第3号溝（第139図）

本跡は，当遺跡の中央部E2，F2，F3区に確認され，北側の小支谷に傾斜する台地縁辺部に位置している。また，古墳時代前期の第30号住居跡を掘り込み，第61号土坑によって掘り込まれている。

溝の南東端は，$F3d_3$区に確認され，直線的に北西へ$E2i_6$区まで延び，第61号土坑によって掘り込まれ煙滅している。$F3d_3$区から$E2i_6$区までの長さは31.8mで，主軸方向はN－50°－Wを指している。溝は上幅120～196cm，下幅100～138cm，深さ10～18cmである。壁はロームで硬く緩やかに外傾して立ち上がっている。底面もロームで硬く平坦である。断面形は皿状を呈している。なお，$F2b_0$区にある南西壁の一部が撹乱を受，$F2a_9$区から$E2i_0$区の間の北東壁は農道下にあったため破壊され確認することはできなかった。底面のレベルは，a点で33.156m，b点で33.739m，c点で34.083mで，北側の小支谷に向って傾斜している。

覆土は1層で，ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子微量を含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，覆土上面に磨滅した縄文式土器片，土師器片299片が出土している。本跡に伴うものではない。

第4号溝（第139図）

本跡は，当遺跡の北部C2，C3区に確認され，第34号住居跡の北西側約1.8mに位置している。本跡の北西側は，エリア外の畑へ延びている。

溝の南東端は，$C3j_2$区に確認され，北西方面にほぼ直線的に$C3j_1$区まで延び，$C3j_1$区では一度南西方向に方向を大きく変え，その後再び北西方向に変えて，ほぼ直線的に$C2i_8$区まで延びている。$C3j_2$区から$C3j_1$区までの長さは3.6mで，主軸方向は，N－63°－Wを指している。また，$C3j_1$区では，主軸方向をN－90°－Wに変えて西方向に2.4m延びている。さらに，$C3j_1$区から$C2i_8$区までの長さは11.3mで，主軸方向はN－73°－Wを指している。総延長は17.3mである。溝の上幅72～180cm，下幅29～48cm，深さ14～16cmである。壁はロームで硬く緩やかに外傾して立ち上がっている。底面もロームで硬く平坦である。断面形は皿状を呈している。底面のレベルは，a点で33.31m，b点で33.2m，c点で33.16mである。

覆土は，1層で，ローム粒子，ロームブロック少量，炭化粒子微量を含む黒褐色土が自然堆積

している。

遺物は，出土していない。従って本跡は時期不明である。

第5号溝（第139図）

本跡は，当遺跡の北部D_4区に確認され，第37号住居跡と，第6号溝を掘り込んでいる。本跡の北側は，南東方向にほぼ直角に屈曲し，調査エリア外の神明神社の盛土下に延びており，本跡の南側は，重機によって破壊され存在しない。

溝の南端は，$D4d_4$区に確認され，第6号溝と合流している。そこから北方向にほぼ直線的に，$D4a_4$区まで延びている。さらに$D4a_4$区で南東方向に角度を変えてエリア外の神明神社の盛土下へ延びている。$D4d_4$区から$D4a_4$区までの長さは11.6mで，主軸方向はN－13°－Eである。また$D4a_4$区で，主軸方向をN－67°－Wに変え南東方向に1.04m延びて神明神社の盛土下へ延びている。総延長は12.64mである。溝は上幅62～82cm，下幅34～64cm，深さ32.5cmである。壁はロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がっている。底面もロームで硬く平坦である。断面形は「＼＿／」を呈している。南側の南東壁は，2.12cmしか残存しない。底面のレベルは，a点で34.22m，b点で34.30m，c点で34.32mである。

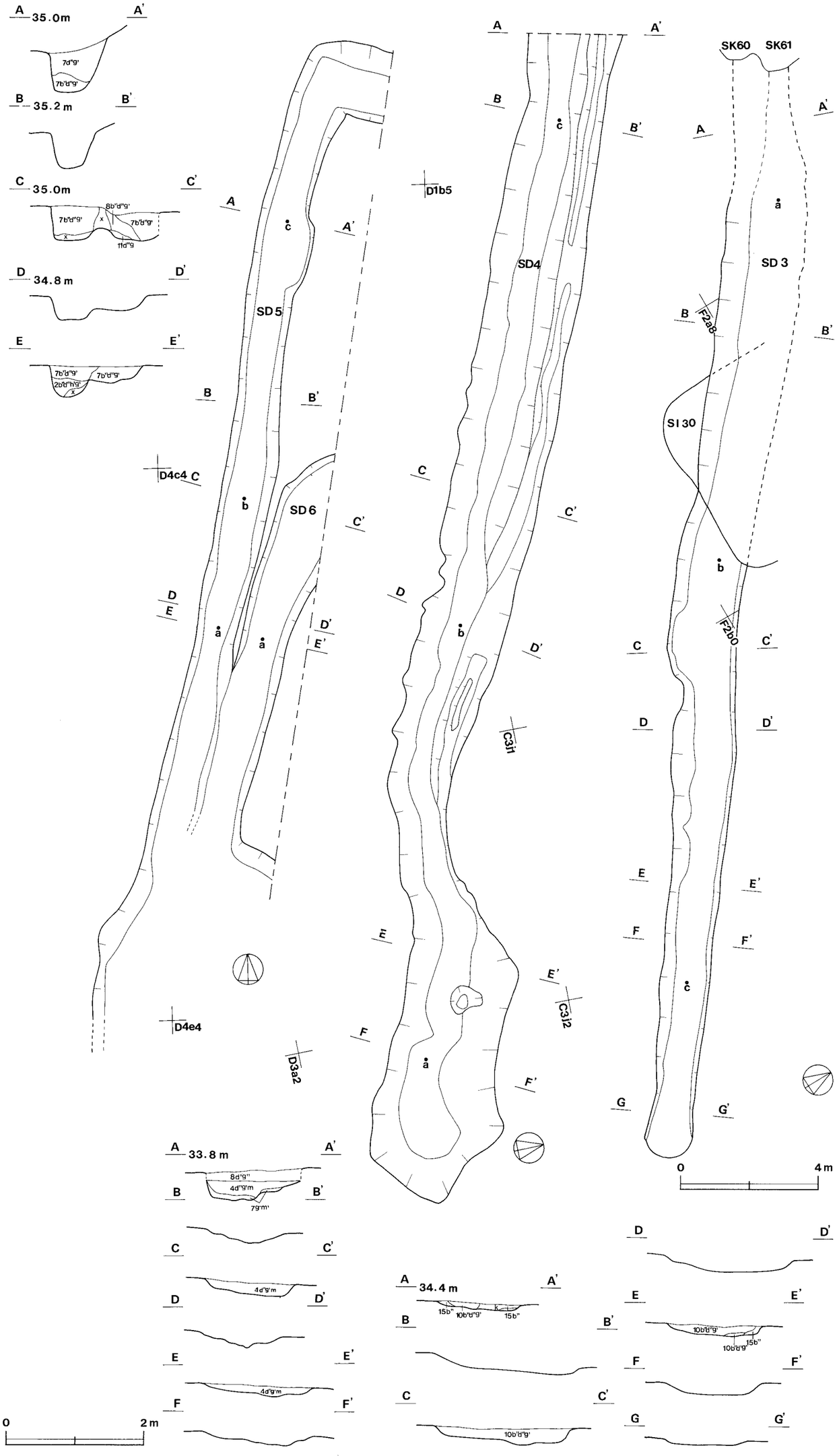
覆土は，上層にローム粒子少量，炭化粒子微量を含む暗褐色土，下層にローム粒子，焼土粒子，炭化粒子微量を含む暗褐色土が埋め戻された状態で堆積している。

遺物は，土師質土器の完形の坏形土器（P284）が北西壁際の覆土中から正位で出土している。そのほか磨滅した縄文式土器片，土師器片が出土している。いずれも本跡に伴うものではない。なお，第6号溝との新旧関係は，本跡が第6号溝の南側部で西壁を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

第6号溝（第139図）

本跡は，当遺跡の北部D_4区に確認され，第37号住居跡を掘り込み，第5号溝によって南側が掘り込まれている。第5号溝と同様に本跡の北側は南東方向に屈曲し，調査エリア外の神明神社の盛土下に延びており，南側は，重機によって破壊され存在しない。

溝の南端は，$D4d_4$区に確認され，第5号溝との合流によって西壁が一部破壊されている。そこから北東方向にほぼ直線的に$D4c_4$区まで4.8m延び，主軸方向はN－18°－Eである。$D4c_4$区で主軸方向をN－52°－Eに変えて，1m延びて神明神社の盛土下へ延びている。総延長は5.8mである。溝は上幅70～82cm，下幅50～60cm，深さ22～51cmである。壁はロームで硬く外傾して立ち上がっている。底面はロームで硬く凹凸である。断面形は「＼＿／」を呈している。なお，南側の北西壁が2.12mにわたって存在しないのは，第5号溝によって破壊されたためと思われる。


A 35.0m A'
7d"g'
7b'd"g'
B 35.2m B'
C 35.0m C'
8b'd"g'
7b'd"g'
7b'd"g'
11d"g
D 34.8m D'
E E'
7b'd"g'
7b'd"g'
2b'd"h'g'
SD5
SD6
SD4
SD3
SK60
SK61
SI30
F2a8
F2b0
D1b5
D4c4
C31
D4e4
D3a2
C3i2
A 33.8m A'
8d"g"
4d"g'm
7g'm'
4d"g'm
4d"g'm
A 34.4m A'
15b"
10b'd"g'
15b"
10b'd"g'
10b'd"g'
10b'd"g'
15b"
0 2m
0 4m

底面のレベルは，a点で34.35mで，同地点での第5号溝の底面レベルより13cm高く，北北東方向から南西方向に向かって緩やかに傾斜している。

覆土は，2層で上層にローム粒子，ロームブロック少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む暗褐色土が，下層にローム粒子少量，焼土粒子，炭化粒子微量を含む暗褐色土が埋め戻されたように堆積している。

遺物は，覆土上層から，磨滅した縄文式土器片微量，土師器片少量，陶器片微量が出土している。いずれも本跡に伴うものではない。陶器片は，近世・近代に比定される。

表6　溝・堀一覧表

番号	位置	主軸方向	断面	規模				壁面	底面	覆土状態	出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)					
SD-1	L1	N－16°－W	皿状	9.40	30～50	16～30	9～14	外傾	平坦	自然		
SD-2	F2・F3・G2・H2	N－8°－E	逆台形	77.00	80～125	26～53	20～90	外傾	平坦	自然	土器片296片	
SD-3	E2・F2・F3	N－50°－W	皿状	31.80	120～196	100～138	10～18	外傾	平坦	自然	土器片299片	SK-61と重複
SD-4	C2・C3	N－73°－W	皿状	17.30	72～180	29～48	14～16	外傾	平坦	自然		
SD-5	D4	N－13°－E	逆台形	12.64	62～82	34～64	32～50	垂直	平坦	人為		
SD-6	D4	N－18°－E	逆台形	5.80	70～82	50～60	22～51	外傾	凹凸	人為	土器片165片	
SD-7	C4	N－36°－E	逆台形	38.88	－	68～75	68～122	外傾	平坦	自然	土器片1177片	SD-8・10と重複 1号堀
SD-8	C4	N－36°－E	逆台形	36.36	(220)	39～56	80～88	外傾	平坦	自然	土器片26片	SD-7と重複 2号堀
SD-9	D3・C4	N－31°－E	逆台形	41.20	210～310	70～90	50～140	外傾	平坦	自然	土器片32片	3号堀
SD-10	B4・C4	N－29°－E	逆台形	7.60	150～170	30～40	98～108	外傾	平坦	自然	土器片21片	SD-7と重複 4号堀

5　堀

当遺跡で検出された堀は，4条である。調査区のB4，C4，D3区に確認され，いずれも一つの方向性に従っている。この方向性は，遺跡内の地籍図に見られる土地の境界線，つまり，神明神社の境界線と一致し開発直前まで使用していた農道に沿って掘られていることも判明した。当初，第7号溝として調査を進めたが，その後の調査の過程で第7号溝と重複する第8・9・10号溝を確認した。これらは，神明神社に伴うものと思われ，規模，形態が他の溝と違うため第7・8・9・10号溝を，それぞれ第1号堀，第2号堀，第3号堀，第4号堀とした。調査に際しては，溝と同一記号（SD）を用いたため，溝と同一方法で記述した。

第1号堀（SD－7・第141図）

本跡は，当遺跡の北部C4区に確認され，第2号堀(SD－8)によって南東壁を，第3号堀(SD－9）によって南西側を，第4号堀（SD－10）によって北東側のコーナー部付近を掘り込まれてい

る。先端部のあるC4b$_7$，C4c$_7$区の南東側は調査エリア外であるが，さらに，南東方向に堀が延びていることが確認されている。第2号堀（SD－8）の南西辺によってその大部分を切られ，底面，南東壁の一部，北西壁だけが残存しているだけなので規模の詳細については不明である。調査出来たところから推定される範囲で記述する。

堀の北東端は，C4b$_7$，C4c$_7$区に確認され，そこから北西方向のC4b$_6$区に延びている。長さは，4.78m，主軸方向はN－71°－Wを指している。さらに，C4b$_6$区から72°の急角度で屈曲し，南西方向のC4i$_1$区まで直線的に延びている。C4b$_6$区からC4i$_1$区までの長さは34.1mで，主軸方向は第2号堀（SD－8）の南東辺と一致し，N－36°－Eを指している。なお，C4i$_1$区で本跡の南西端は，重複して並行に走る第2号堀（SD－8）とともに第3号堀（SD－9）によって，底面をさらに深く掘り下げられて消滅する。

堀全体の規模は，上幅不明，下幅68～75cm，深さは68～122cmである。壁はロームで硬く，51°～57°の角度で立ち上がっている。断面形は「＼＿／」状の逆台形で，全体的に箱堀状を呈している。底面は，ロームで平坦である。底面のレベルはe点で33.761m，f点で33.382m，g点で33.509m，h点で33.838mである。北から南へ徐々に低くなっている。

覆土は，半分ほど第2号堀（SD－8）によって切られており，詳細は不明であるが，下層にローム粒子，ロームブロック少量を含む暗褐色土，中位にローム粒子少量，炭化粒子微量を含む黒褐色土，上層にロームブロック少量を含む褐色土が自然堆積している。C4g$_3$区には人為的に埋め戻されたと思われる層もみられる。

遺物は，覆土の下層と中層から縄文式土器片微量，土師器片少量，陶器片微量，覆土上層から管玉（Q164）が出土している。いずれも本跡に伴うものではないと思われる。従って時期は不明である。

第2号堀（SD－8・第141図）

本跡は，当遺跡の北部C4区に確認され，北西側を平行して走る第1号堀（SD－7）の南東壁を掘り込み，第3号堀（SD－9）によって南西側部を掘り込まれている。C4b$_7$，C4c$_7$区の南東側は，調査エリア外であるが，本跡がさらに南東方向に延びていることが確認されている。第1号堀（SD－7）の南東側の壁を切っているため，底面と北西壁の一部，南東壁だけを検出しただけであり規模の詳細は不明であるが，調査出来たところから推定できる範囲で記述する。

堀の北東端は，C4c$_7$区に確認され，そこから北西方向のC4b$_6$区に延びている。長さは2.96mで，主軸方向はN－50°－Wを指している。さらに，C4b$_6$区から89°の急角度で屈曲し，南西方向のC4i$_1$区まで直線的に延びている。C4b$_6$区からC4i$_1$区までの長さは約33.4mで，主軸方向は，N－36°－Eを指している。調査できた底面と南東壁から，堀全体の規模は上幅220cm前後，下幅39～56cm，

深さ80～88cmである。壁は57～65°の角度で立ち上がっている。断面形は「＼＿／」の逆台形で，全体的に箱堀状を呈している。底面はローム層で平坦である。また，残存した北西壁が南西方向にい屈曲するC4b$_6$～C4c$_6$区にかけてピット状の落ち込みを6か所確認した。北側にあるピット状の落ち込みの上部は撹乱を受けていた。ピット状の落ち込みについては性格不明である。底面レベルはｉ点で33.893m，ｊ点で33.644m，ｋ点で33.707m，ｌ点で33.438mである。北から南へ徐々に低くなっている。

覆土は，下層にローム粒子，ロームブロック少量を含む暗褐色土，上層にローム粒子少量を含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物は，覆土中から，縄文式土器片微量，土師器片少量，陶器片微量が出土している。いずれも本跡に伴うものではない。

第3号堀（SD－9・第141図）

本跡は，当遺跡の北部D3，C4区にまたがって確認され，第1号堀（SD－7），第2号堀（SD－8）の南西端部の底部をほぼ垂直に掘り下げ，そのまま同じ方向に延長する状態で南西へ延び，遺跡の中央部に入り込んだ小谷津田の北側につながっている。

堀の北東端はC4i$_1$区に確認され，そこから南西方向のD3h$_6$区にほぼ直線的に延びている。長さは41.2mで，主軸方向はN－31°－Eを指している。堀の上幅は，210～310cm，下幅70～90cm，深さ50～140cmである。壁はロームで硬く，39°～49°の角度で立ち上がっている。断面形は，「＼＿／」状の逆台形で，全体的に箱堀状を呈している。底面はロームで平坦であり南西方向に傾斜している。なお，北東端から南西へ約6.14mのところで約29cm底面を掘り下げ，D3f$_8$区から小谷津田につながるまで，ローム層下の粘土層に達している。底面のレベルは，ａ点で31.933m，ｂ点で32.148m，ｃ点で33.543m，ｄ点で33.933mである。北から南へ徐々に低くなっている。

覆土は，下位にローム粒子少量，ロームブロック微量，炭化粒子微量を含む褐色土，中位にローム粒子，炭化粒子微量を含む暗褐色土，上位にローム粒子微量を含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，覆土中層から磨滅した土師器片少量，須恵器片2片，陶器片1片，石製模造品の双孔円板1点が出土している。いずれも本跡に伴うものではない。

第4号堀（SD－10・第141図）

本跡は，当遺跡の北部B4，C4区にまたがって確認され，第1号堀（SD－7）のコーナー部付近を掘り込んでいる。本跡はB4j$_7$区で屈曲し，東側の調査エリア外に延びていることが確認されている。

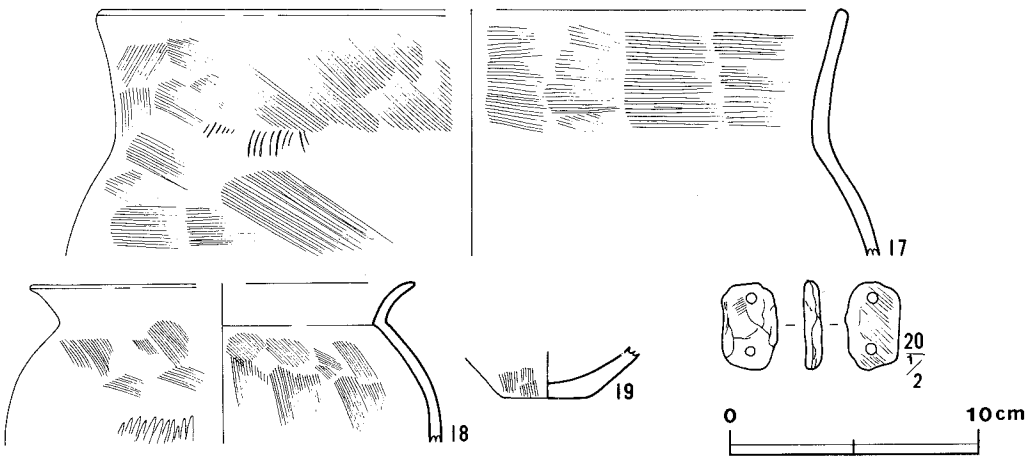
堀の北東端は，B4j$_7$区で確認され，東側のエリア外から約0.5m延びている。主軸方向はN－75°－

Wである。さらに，B4j_7区で85°の急角度で屈曲し，南西方向のC4b_6区に延び第１号堀（SD－７）に合流している。B4i_7区からB4b_6区までの長さは7.6mで，主軸方向はN－29°－Eである。

堀の上幅は150～170cm，下幅30～40cm，深さ98～108cmである。壁はロームで硬く，50°～62°の角度で立ち上がっている。断面形は，「＼＿／」状の逆台形で，全体的に箱堀状を呈している。底面はロームで平坦でである。底面のレベルは，１号堀と合流するm点で34.14m，n点で34.10m，o点で34.035mである。

覆土は，下層にローム粒子，ロームブロック少量を含む褐色土，上層にローム粒子，炭化粒子微量を含む黒褐色土が自然堆積している。

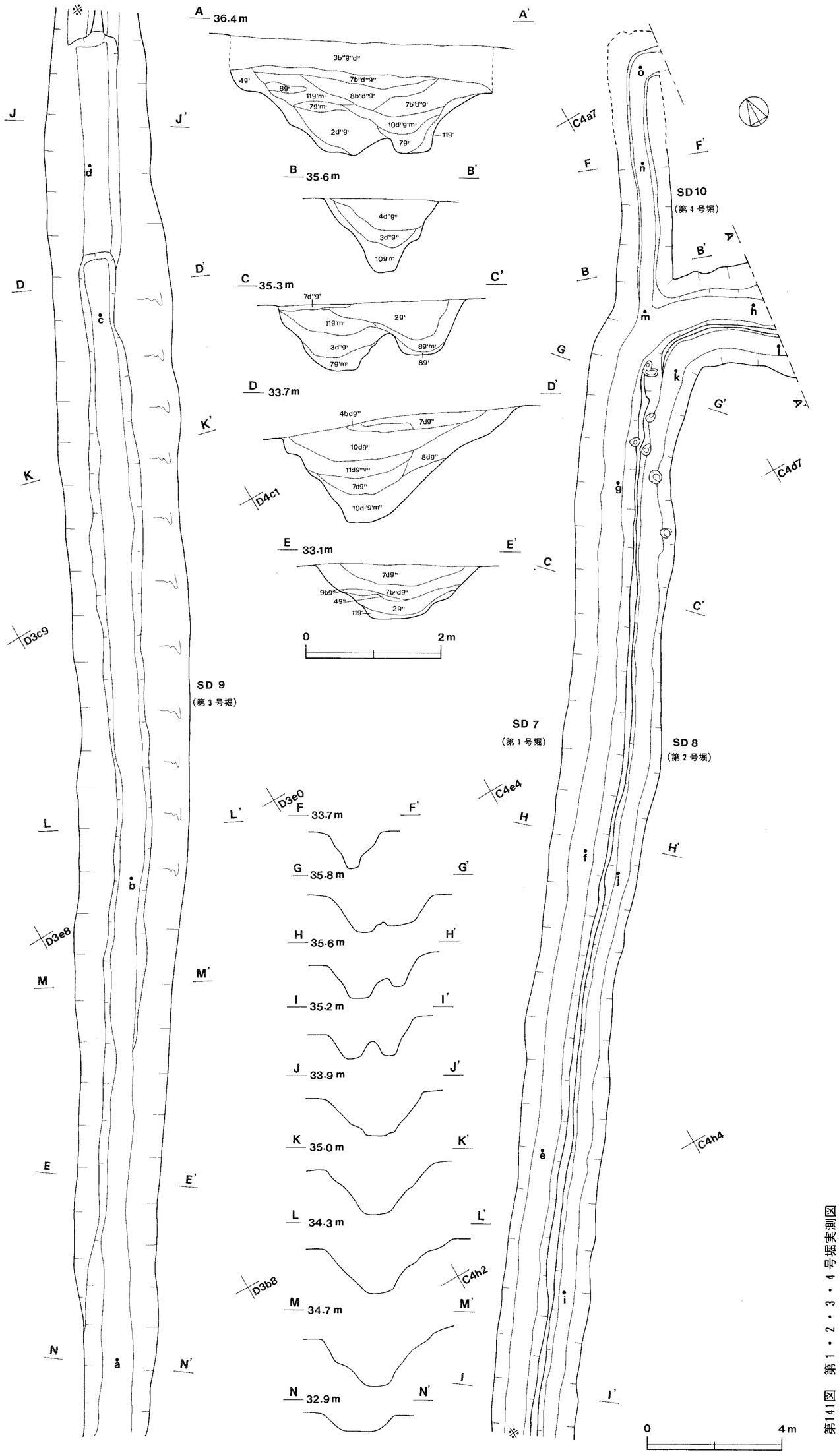
遺物は，覆土中から，縄文式土器片や土師器片が微量出土している。本跡に伴うものではない。



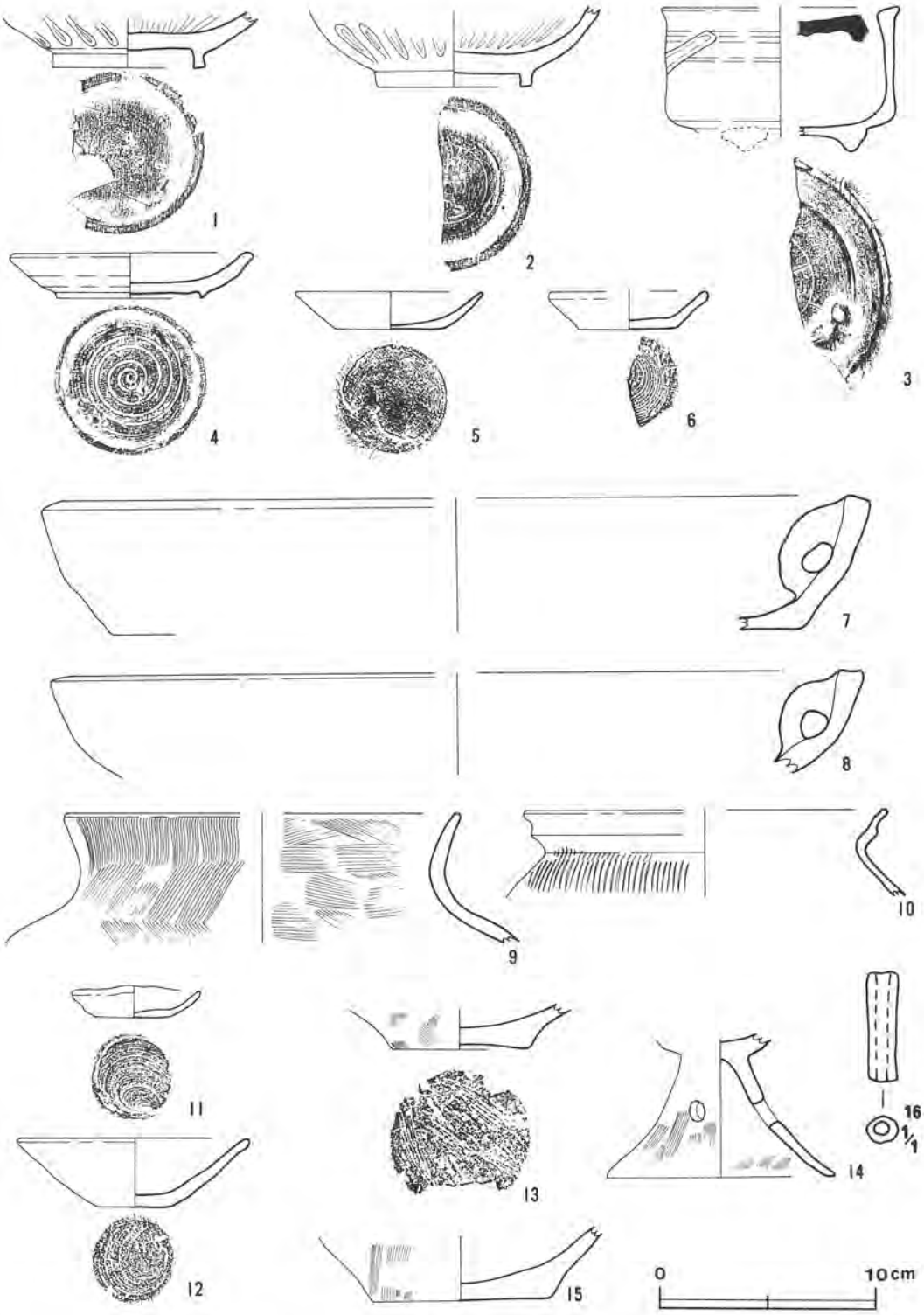
第140図　溝出土遺物実測図(1)

溝出土遺物観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第142図 1	碗 （陶　器）	B (2.3) C 7.2	底部破片で，体部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り後高台接合，外面に太く浅い沈線が菊花状に巡る。	(胎土)淡黄色 （釉）オリーブ黄色	40% P273 SD－2
2	碗 （陶　器）	B (3.6) C 7.2	底部破片で，体部は内彎しながら立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り後高台接合，外面に太く浅い沈線が菊花状に巡る。	(胎土)淡黄色 （釉）オリーブ黄色	30% P275 SD－2
3	香　炉 （陶　器）	A (11.0) B 6.6 C (10.1)	体部はほぼ垂直に立ち上がり，口縁部で外傾する。口縁部内側はやや内側へ突き出し，稜を有する。	水挽き成形。外面－横ナデ，底部回転糸切り，体部外面に太い凹線が斜位に施され，口縁部内・外面，体部外面－施釉。	(胎土)灰黄色 （釉）灰オリーブ色	40% P277 SD－2
4	皿 （陶　器）	A 11.3 B 2.1 C 6.8	体部は内彎気味に立ち上がり口縁部はやや外反する。	水挽き成形。底部露胎，底部回転ヘラ削り，横ナデ。	(胎土)灰黄色 （釉）淡黄色	100% P278 近世美濃 SD－2



第141図　第1・2・3・4号堀実測図



第142図　溝出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第142図 5	皿 土師質土器	A 8.7 B 1.7 C 5.0	体部は直線的に開き，口唇部に丸味をもつ。底部内面中央がわずかに凹む。底部は平底である。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 橙色 普通	90% P267 口縁部内・外面煤付着 SD－2
6	皿 土師器	A (7.3) B 1.8 C 4.5	体部は直線的に開き，上位で外反気味に立ち上がる。底部は平底である。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 橙色 普通	30% P272 内・外面煤付着 SD－2
7	内耳形土器 土師質土器	A (38.4) B 6.2 C (32.0)	体部は内彎気味に開いて立ち上がる。口唇部は平坦。底部は平底で，器高が低い。耳は1か所残存。	内・外面－横位のナデ。耳接合。	砂粒・小礫・雲母 にぶい褐色 普通	10% P271 外面煤付着 SD－2
8	内耳形土器 土師質土器	A (37.8) B (4.7)	体部は内彎気味に開いて立ち上がる。口唇部は平坦。器高が低い。耳は1か所残存。	内・外面－横位のナデ。耳接合。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	5% P268 外面煤付着 SD－2
9	甕形土器 土師器	A (18.4) B (6.0)	口縁部片で，口縁部は頸部から外反して立ち上がる。	口縁部内・外面－斜位のハケ目整形。	砂粒 橙色 普通	5% P280 SD－3
10	台付甕形土器 土師器	A (16.8) B (4.0)	口縁部片で，「S」字状を呈する口縁である。胴部は球形を呈すると思われる。	口縁部内・外面－横位のナデ。胴部外面－斜位のハケ目整形。	スコリア・砂粒 にぶい褐色 普通	5% P281 SD－5
11	皿 土師質土器	A 5.9 B 1.4 C 3.6	体部は底部から外傾して立ち上がる。底部は平底である。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 浅黄橙色 普通	100% P285 SD－5
12	坏形土器 土師質土器	A 10.8 B 3.2 C 3.6	体部は底部から外傾して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。底部は平底である。	水挽き成形。底部回転糸切り，横位のナデ。	スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	100% P284 SD－5
13	甕形土器 土師器	B (1.8) C 6.4	平底の底部片で，胴部は底部から外反して立ち上がる。	胴部内・外面－斜位のハケ目整形後ヘラナデ。底部－ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% P283 SD－5
14	高坏形土器 土師器	B (6.4) D 10.6 E 5.6	脚部は接合部から「ハ」の字状に開き裾部に至る。脚部中位に3孔を有する。坏部は欠損している。	脚部内・外面－斜位のハケ目整形後縦位のヘラナデ。	スコリア・砂粒 橙色 普通	50% P291 SD－7
15	甕形土器 土師器	B (3.0) C 8.4	胴部は底部からやや内彎気味に立ち上がる。底部は平底である。	胴部外面－斜位のハケ目整形後ヘラナデ，胴部内面－縦位のヘラナデ。	砂粒・小礫 橙色 普通	10% P289 SD－7
第140図 17	甕形土器 土師器	A (30.2) B (10.0)	口縁部は頸部からほぼ外傾して立ち上がる。胴部は球形を呈すると思われる。	口縁部外面－斜位のハケ目整形，内面－横位のハケ目整形。胴部外面－斜位のハケ目整形，内面－斜位のヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	8% P292 SD－7
18	甕形土器 土師器	A (15.5) B (6.5)	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有すると思われる。	口縁部外面－斜位のハケ目整形後横位のナデ，口縁部内面－横位のハケ目整形後横位のナデ。胴部内・外面－斜位のハケ目整形。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% P290 SD－7
19	埦形土器 土師器	B (1.9) C 3.8	底部片で，胴部は平底の底部からやや内彎気味に立ち上がる。	胴部外面－縦位のハケ目整形後斜位のナデ。	スコリア・砂粒・石英 褐灰色 普通	20% P293 二次焼成 SD－9

管玉（第142図16）

管玉は，第１号堀（SD－７）から出土したものである。滑石製で，円柱状に形が整えられ，磨きが施されて光沢がある。長さ1.7cm，直径0.4cm，孔径0.15～0.2cm，重さ0.6gである。

双孔円板（第140図20）

双孔円板は，第３号堀(SD－９)から出土したものである。滑石製で，板状を呈しており，表・裏面および側縁に擦痕が認められ，欠損した部分を除いて滑らかになっている。長径2.4cm，短径1.4cmの隅丸長方形を呈し，厚さ0.4cm，孔径0.2～0.3cm，重さ1.9gである。

６　井　　戸

当遺跡において検出された井戸は３基である。

第１号井戸は，調査区の中央部F_2区の宅地跡から検出され，第２・４号井戸は調査区のH_2・H_3区から検出されている。いずれも崩落のおそれがあるため底面までは調査できなかった。なお，第３号井戸は，詳細に検討した結果，第85号土坑として取り扱った。

第１号井戸（第143図）

本跡は，当遺跡の中央部$F2h_5$区を中心に確認され，第２号住居跡の西側約0.6mに位置している。本跡は宅地跡に検出されたもので，最近まで使用されていた可能性が強い。

平面形は，直径1.51mの不整円形で，深さは，確認面から2.1m以上である。壁は，垂直な北側の壁を除いた他の壁は確認面から0.8mの深さまでやや外傾しているが，それ以下はほぼ垂直に掘り込んで，円筒形状を呈している。

覆土は，上層に炭化材，焼土ブロック多量を含む締まりのない黒褐色土，下層にローム粒子多量，炭化材，焼土粒子少量を含む締まりのない黒褐色土が人為堆積の状態で堆積している。

遺物は，覆土上層から大きな川原石，縄文式土器片３片，陶磁器片１片，土師器片14片が混じり合った状態で出土しているが，埋戻しの際に入ったものと思われる。

第２号井戸（第143図）

本跡は，当遺跡の中央部$H3c_1$区に確認され，第18号土坑の西側約0.1mに位置している。

平面形は，直径0.86mの円形で，深さは確認面から1.58m以上である。壁はほぼ垂直に掘り込んで，円筒形状を呈している。

覆土は，上層にローム粒子，焼土粒子，炭化粒子微量を含んだ暗褐色土，中層にローム粒子少

量を含んだ褐色土，下層にローム粒子，焼土粒子，炭化粒子微量を含んだ暗褐色土が人為堆積で締まりのない状態で堆積している。

遺物は，出土していない。

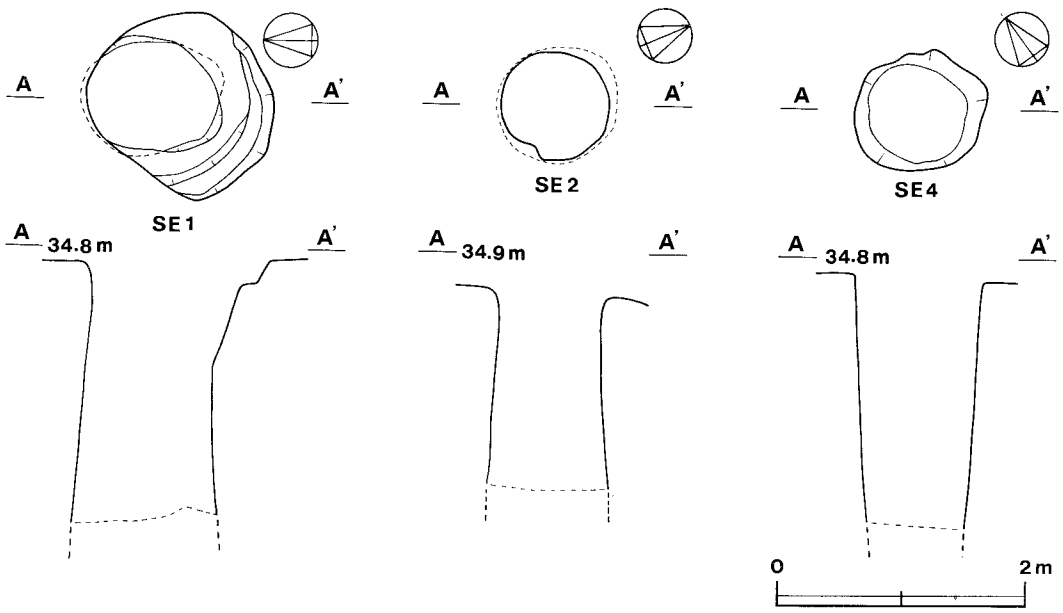
第4号井戸（第143図）

本跡は，当遺跡の中央部H2c$_8$区を中心に確認され，第57号土坑の南側約2.3m，第2号溝の西側約0.5mに位置している。

平面形は，直径1.01mの円形で，深さは確認面から1.98m以上である。壁はほぼ垂直に掘り込んで，円筒形状を呈している。

覆土は，ローム粒子少量，ロームブロック，炭化粒子微量を含む締まりのない黒褐色土，南側の壁にそってローム粒子多量，炭化粒子微量を含む暗褐色土が人為的堆積の状態で堆積している。

遺物は，確認面から1.5mほどの覆土から石10点，土師器片12片，磁器片1片が出土している。埋戻しの際に入ったものと思われる。



第143図　第1・2・4号井戸実測図

7　その他の遺物

〔1〕 遺構外出土土器

当遺跡からは，縄文式土器及び土師式土器が出土している。これらの遺物のうち，実測できたものは観察表で説明し，拓影だけの縄文式土器は文様等から次のように分類し掲載した。

縄文式土器の分類

I群	縄文時代早期後葉		茅山式土器
II群	縄文時代前期前葉	a類	関山式土器
		b類	黒浜式土器
III群	縄文時代前期後葉	a類	浮島式土器
		b類	十三菩提式土器
IV群	縄文時代中期前葉		阿玉台式土器
V群	縄文時代中期中・後葉	a類	加曽利EI式土器
		b類	加曽利EIII式土器
VI群	縄文時代後期前葉	a類	堀之内I式土器
		b類	堀之内II式土器

I群の土器（第144図1～3）

1～3は胴部片で，条痕文が，1は外面に縦位，内面に横位，2は内・外面に縦位，3は外面に横位に施されている。また，3は内・外面に整形のための指頭による押圧が認められる。色調は明褐色で，胎土は，繊維に比べ細砂が多く含まれている。焼成は普通である。

II群の土器

a類（第144図4～6）

4・5は口縁部片である。5は口縁が内そぎ状を呈し，4・5の外面は異条斜縄文が菱形を構成し施されている。

6は胴部片で，外面は異条斜縄文が4・5と同様に菱形に施され，更に重複して1条のコンパス文が横位に施されている。色調はにぶい褐色で，胎土は，繊維が多量に含まれている。焼成はやや不良である。

b類（第144図7～14）

7～11は口縁部片で，7・8は波状を呈している。7の外面は口唇直下から撚糸文が斜位に施されている。8の口縁部外面は，平行沈線を横走させ，以下に付加条縄文が施されている。9は

口縁に平行刺突文を2列に横走させ文様帯を構成している。10は口唇直下から無節Lの縄文が施されている。11は口縁が角頭状を呈し，外面に異条斜縄文を施されている。

12・13は胴部片で，12は単節LRの縄文が斜位に，13は付加条縄文が縦位に施されている。

14は底部片で，胴部下位外面に単節LR縄文が斜位に施されている。色調はにぶい橙色が多く，胎土に，繊維が多量に含まれている。焼成はやや不良である。

Ⅲ群の土器

a類（第144図15～21）

15～18は口縁部片で，15は波状を呈し，半截竹管による平行沈線を2列横位に施し，沈線間に同施文具による爪形文が粗く施されている。16は口縁上端に半截竹管による深い沈線が縦位に施され，以下は横位の刺突文を間において，横位の平行沈線が施されている。17は口唇直下から波状貝殻文を横位に巡らし，更に，重複して太い刺突文が1列横位に施されている。また，補修孔が，外面は径9㎜ほどに，内面はわずかに凹んだ状態で穿孔されずに残っている。18は波状貝殻文が2段横位に施されている。

19～21は胴部片で，19・20はアナダラ属の貝殻腹縁による貝殻波状文が，21は波状貝殻文が2段横位に施されている。色調は明赤褐色が多く，胎土は細砂を多く含み，焼成は普通である。

b類（第144図22・23）

22・23は磨滅した胴部片である。22は外面に平行沈線による同心円文が施されている。23は外面に平行沈線による鋸歯状文が施されている。色調はにぶい橙色で，胎土は砂粒が多量に含まれている。焼成はやや不良である。

Ⅳ群の土器（第144図24～29）

24・25は口縁部片で，24は口縁直下，及び隆帯の上・下側に2列の刺突文を施している。内面には稜を有している。25は波状を呈し，波頂部が欠損している。隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。

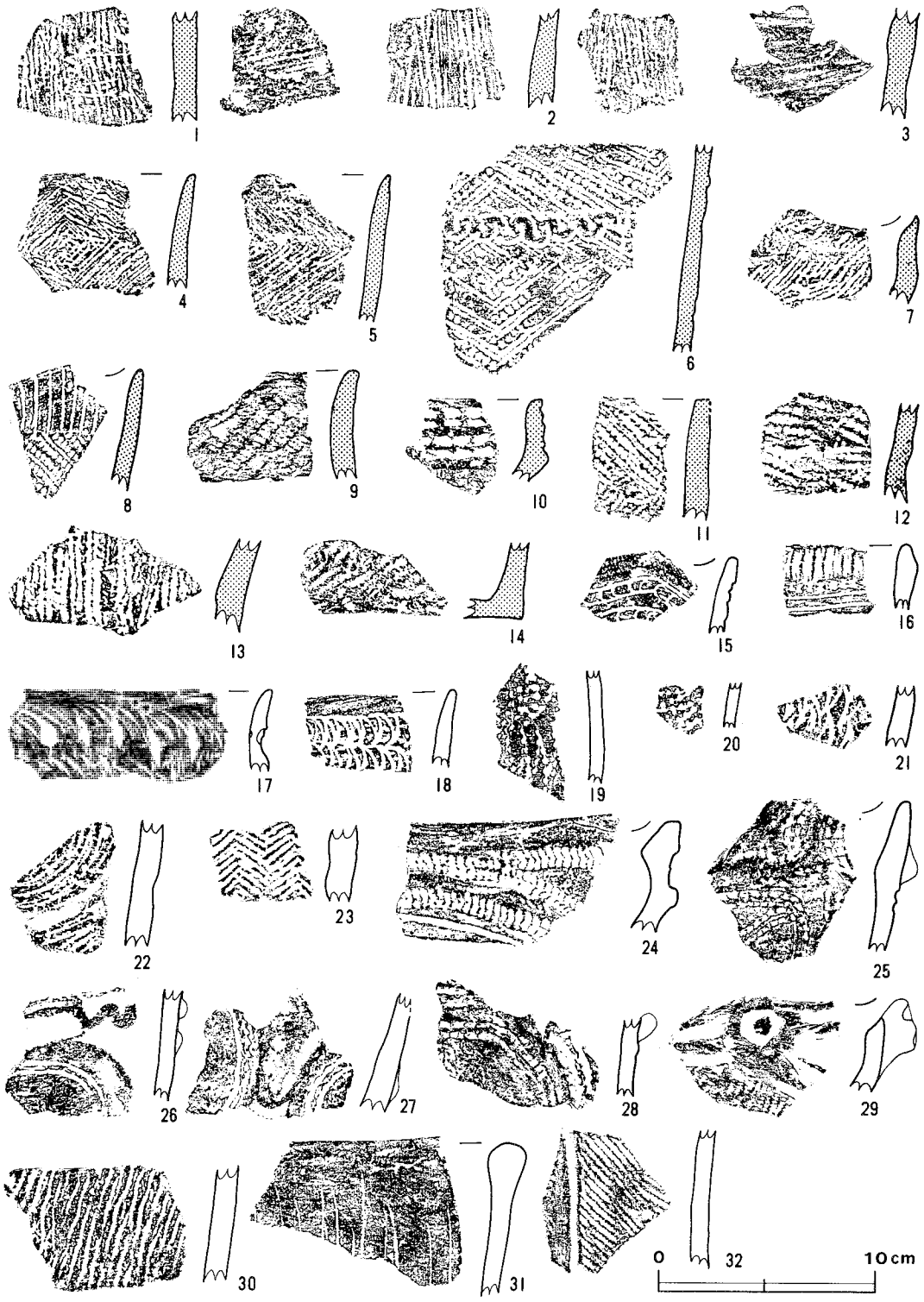
26～28は胴部片である。26は上部に蛇行する粘土紐が貼付され，以下を隆帯による楕円文で区画し，区画内には2列の結節沈線文が隆帯に沿って施されている。27・28は隆帯による楕円文で区画され，隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。色調は明赤褐色で，胎土は砂粒と雲母が含まれている。焼成は普通である。

Ⅴ群の土器

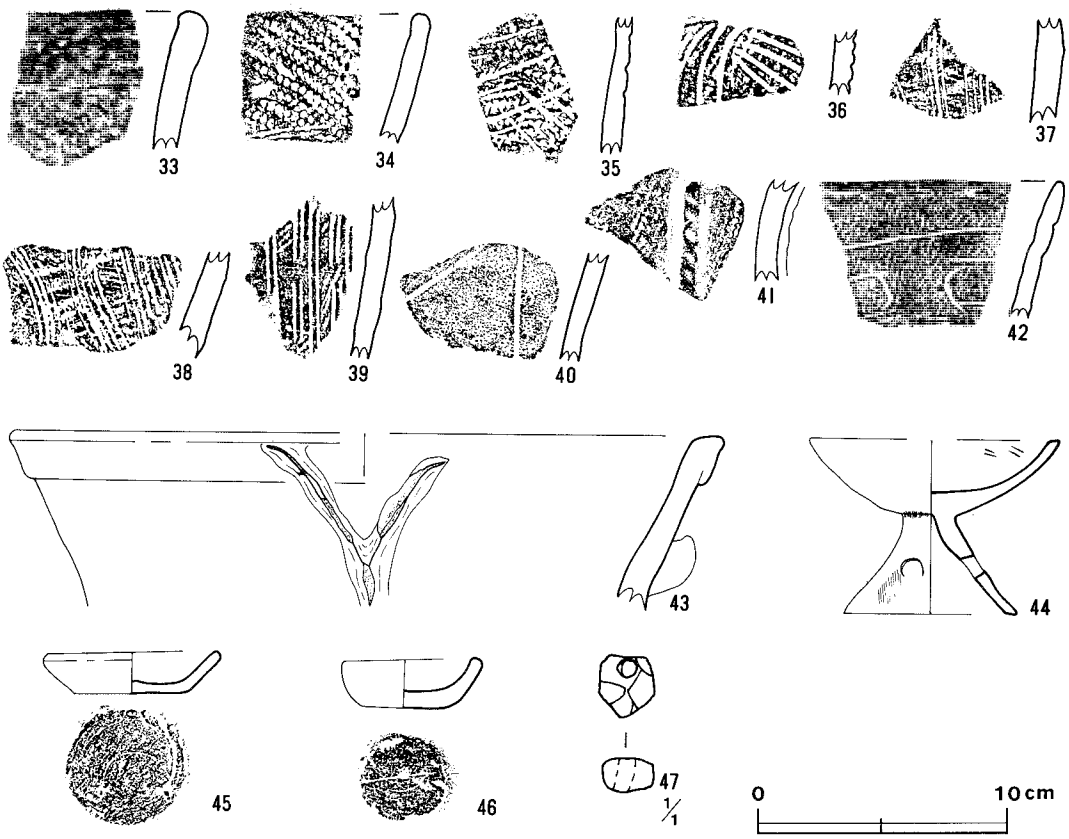
a類（第144図29・30）

29は口縁部片で，口唇部には隆帯を巡らし，その一部は，突出して渦巻文を呈している。隆帯の下側には縄文が施されている。

30は胴部片で，斜位の撚糸文が施されている。色調はにぶい褐色で，胎土は細砂を含み，焼成



第144図　遺構外出土遺物拓影図(1)



第145図　遺構外出土遺物拓影図・実測図(2)

は普通である。

b類（第144図31・32）

31は口縁部片で，肥厚した口縁から条線文が縦位に施されている。

32は胴部片で，単節LRの縄文を，磨消帯が垂下して区画している。色調はにぶい褐色で，胎土は細砂を含み，焼成は普通である。

Ⅵ群の土器

a類（第145図33～41）

33・34は口縁部片で，33は無文で口縁の内側に浅い沈線を横位に巡らしている。34は口唇直下から付加条縄文が施されている。

35～41は胴部片で，35・36は縄文を地文に斜位の沈線が施されている。37～39は縄文を地文に平行沈線が弧状や縦位に施されている。37・38は外面に煤が付着し，同一個体と思われる。40は斜位の沈線が施され，内・外面は砂粒でザラザラしている。41は縄文を地文に刻みを有する粘土紐が縦位に施されている。色調はにぶい褐色が多く，胎土に細砂を含み，焼成は普通である。

b類（第145図42）

42は口縁部片で，口縁に1条の沈線を巡らし，以下は沈線による長楕円形で区画している。地文は縄文である。色調はにぶい橙色で，胎土に細砂を含み，焼成は普通である。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第145図 43	深鉢形土器 縄文式土器	A 28.8 B (7.0)	口縁部から胴部上位にかけての破片である。口縁部は外傾して立ち上がり，口縁上端には無文の隆帯を周回させ，その直下に断面三角形状の隆帯による「V」字状文が施され，4単位に区画している。器面は無文である。口縁部内・外面，胴部上位外面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	20% P296 外面煤付着 阿玉台式

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第145図 44	高坏形土器 土師器	A (9.9) B 7.1 D 7.0	坏部は接合部から内彎気味に立ち上がり，口唇部は平坦である。脚部は接合部から「ハ」の字状に開き裾部に至る。脚部中位に3孔を有する。	坏部外面－斜位のハケ目整形後斜位のナデ，坏部内面－横位のヘラナデ。脚部外面－縦位のハケ目整形，内面－横位のハケ目整形後横位のナデ。	砂粒 橙色 普通	70% P295
45	皿 土師質土器	A 7.2 B 1.7 C 4.6	体部から外傾して立ち上がる。底部は平底である。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 浅黄橙色 普通	100% P297 内・外面煤付着
46	皿 土師質土器	A 5.6 B 2.1 C 3.5	体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。底部は平底である。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 浅黄橙色 普通	100% P298 口縁部の一部煤付着

臼玉（第145図47）

47は，D3j_0区から出土した臼玉である。表・裏面・側面とも打ち欠いて割り出されたもので，横位の擦痕が認められるが一部欠損している。法量は直径0.8cm・厚さ0.5cm・孔径0.2cm・重さ0.3gである。石質は滑石である。

〔2〕 石器・石製品

当遺跡からは，石鏃・石錐・石匙・石錘・打製石斧・磨製石斧等の石器と，石棒・石製模造品等の石製品が出土している。本項では若干の解説を加え，個々の石器・石製品の出土位置，法量等については一覧表にして掲載した。

(1) 石鏃（第146図1～13）

石鏃は，19点出土し，そのうち13点を図示した。完存品は9点で，他の10点は基部の一部や先端部が欠損している。石質はチャートが8点，頁岩が8点，黒曜石が2点，メノウが1点である。有茎石鏃が1点，無茎石鏃が16点，抉りの深いもの7点，浅いもの5点である。他の2点は，欠損品のため抉りの状況は不明である。3はハート形を呈し，12は全体的にやや丸味を帯びている。

(2) 石錐（第146図14・15）

石錐は，2点出土している。14・15はつまみ部から錐部にかけて，両側縁から剝離調整が加え

られ細身に尖らせている。錐部の先端部は欠損している。石質は頁岩である。

(3) 石匙（第146図16～19）

石匙は4点出土している。いずれも横型石匙で，完存品は3点である。18は刃部を欠損している。石質は，頁岩2点，チャート1点，粘板岩1点である。基部・刃部とも両面から調整が加えられ丁寧に作り出されている。17は粘板岩の扁平な剝片を利用したもので自然面が残っている。

(4) 打製石斧（第147図20～27）

打製石斧は28点出土している。そのうち8点を図示した。完存品は10点で，他の18点は基部や刃部が欠損している。石質は安山岩が12点と多く，他に流紋岩2点，頁岩5点，片麻岩8点，粘板岩1点である。形態から分類すると，分銅形12点，撥形16点である。27は第23号住居跡から出土したものであり，扁平で方形状を呈する自然礫の両端を打ち欠いている。平面形は撥形で，まだ刃部も作り出していない未完成品である。

(5) 磨製石斧（第148図28・29）

磨製石斧は2点出土している。いずれも両側縁及び基部は研磨されている定角式磨製石斧である。石質は緑泥片岩と片麻岩である。29は使用痕を有する刃部だけが残っている。28は扁平で剝離痕がみられる。

(6) 石錘（第148図30）

石錘は1点出土している。30は扁平な円形の自然礫を利用し，両端に紐をかける切り込みを施したものである。石質は安山岩である。

(7) 磨石（第148図31～35）

磨石は，33点出土し，そのうち5点を図示した。磨石としての単一機能だけが認められるものや凹石や敲石としても使用された痕跡をもつものもある。平面形状は，整った長方形，楕円形，円形に近いもの，不整形のものがある。石質は安山岩26点，片麻岩2点，緑泥片岩3点，頁岩2点である。35は凹を有し，凹石と兼用して使用したと思われる。

(8) 敲石（第148・149図36・37）

敲石は，14点出土して，そのうち2点を図示した。自然礫の下端部・周縁に敲打痕が認められるものである。石質は安山岩10点，砂岩1点，頁岩1点，花崗岩1点，石英斑岩1点である。36は定角式磨製石斧を転用したもので，刃部と基部に敲打痕と磨った痕跡が一部に認められる。

(9) 調整痕のある剝片（第149図38・39）

剝片は2点出土している。39はチャートの剝片の側縁に押圧剝離による調整が認められる。38は頁岩の剝片で，表裏両面に粗い剝離が加えられている。

(10) スタンプ形石器（第149図40・41）

スタンプ形石器は，2点出土している。いずれも自然礫の上・下端と側面の一部を打ち欠き，

片手で握りやすいように加工している。底面の平坦部は主な使用面であると思われる。41の断面形は三角形を呈している。石質は40・41とも流紋岩である。

⑾ **砥石**（第149・150図42～47）

砥石は，比較的多く出土している。全体で17点あり，そのうち6点を図示した。砥石は各面を使用したものが多いが，中には特定の面しか使用していないものもある。断面形は，方形，長方形，楕円形をなすものがある。44は第2号溝の覆土中から7点出土したうちの1つで，片面しか使用していない。近世かそれ以降に投棄されたものと思われる。石質は凝灰岩11点，安山岩4点，砂岩2点である。

⑿ **軽石**（第150図48・49）

軽石は5点出土し，そのうち2点図示した。2点とも一部に研磨したと思われる部分も認められるが，欠損部が多く，形状や加工痕が明確でないため軽石として取り扱った。49は第23号住居跡から出土したもので，断面形は扇状を呈している。

⒀ **礫石**（第150図50・51）

礫石は，2点出土している。50・51はいずれも長楕円形の自然礫に打撃を加え，比較的粗い調整により刃部が作り出されている。チョッパー的・掻器的な機能を持っていたものと思われる。石質は安山岩である。

⒁ **石核**（第151図52）

石核は1点出土している。こぶし大の自然の周縁に打撃を数回加え，複数の剝離面が作られている。石質は頁岩である。

⒂ **スクレーパー**（第151図53）

掻器は1点出土している。53は縦長剝片の側縁部に両面からの調整剝離を施したものである。石質は頁岩である。

⒃ **石棒**（第151図54）

石棒は1点出土している。54は第6号土坑から出土した無頭石棒で，頭部の先端は丸くなっており，一部擦り痕が認められる。表面は敲打によって丁寧に調整されているが，頭部・体部の表面は風化によって剝れ易くザラザラしている。断面形は円形を呈している。石質は花崗岩である。長さは56.5cm，直径16.2cm，重さ18.25kgを有している。

⒄ **凹石**（第151図55）

凹石は1点出土している。小破片で，表・裏面に凹穴を2～3か所ずつ有する。石質は安山岩である。

⒅ **石臼**（第151図56）

石臼は2点出土し，そのうち図示は1点である。56は下臼の小破片と思われる。磨り合わせの

溝は磨滅しており，数条の浅い溝が残る。石質は安山岩である。

⑲ 五輪塔（第152図57～61）

五輪塔の完存品はなく，五輪塔の一部が５点出土している。すべて図示した。内訳は，空・風輪１点，風輪１点，火輪２点，水輪１点が出土している。石質は花崗岩である。60は角錘状を呈する五輪塔の火輪で，屋根反り，軒反りはあまり強くなく，各角は磨滅している。

表７　石器一覧表

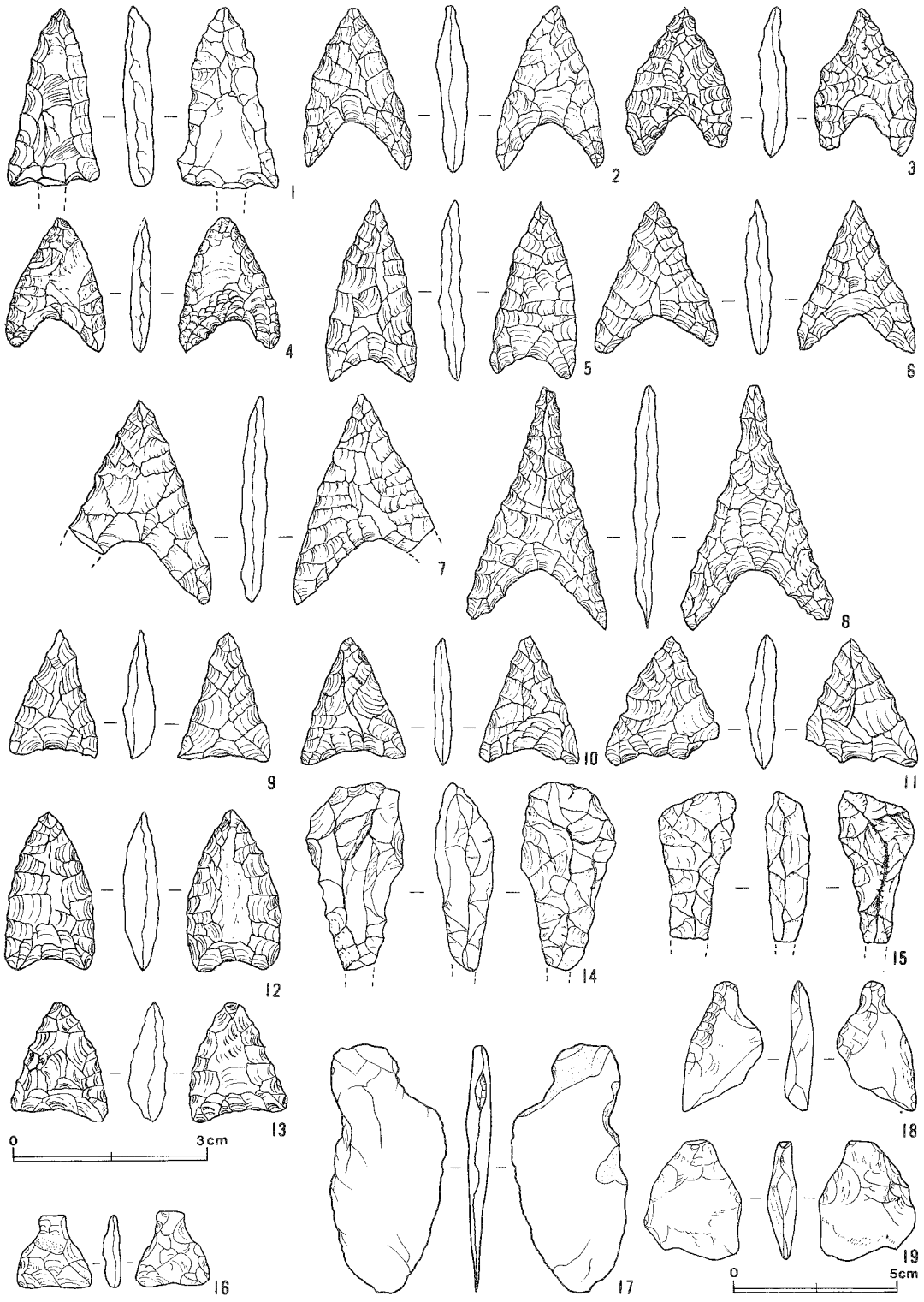
遺物番号	器種	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
Q 1	石鏃（有茎）	$F2f_0$	(2.7)	1.5	0.5	(1.4)	頁岩	一部欠損 第146図－1
Q 2	石鏃（無茎）	表採	2.5	1.6	0.5	1.2	頁岩	完形 第146図－2
Q 3	石鏃（無茎）	$C4d_6$表採	2.3	1.6	0.4	1.0	黒曜石	完形 第146図－3
Q 4	石鏃（無茎）	$L1h_6$	2.0	1.6	0.3	0.7	チャート	完形 第146図－4
Q 5	石鏃（無茎）	$G2d_6$	2.9	1.4	0.3	0.7	頁岩	完形 第146図－5
Q 6	石鏃（無茎）	SK－63	2.4	1.9	0.3	0.7	チャート	完形 第146図－6
Q 7	石鏃（無茎）	SD－3	3.1	2.2	0.4	(1.1)	チャート	一部欠損 第146図－7
Q 8	石鏃（無茎）	$L1b_6$	3.8	2.2	0.4	1.8	メノウ	完形 第146図－8
Q 9	石鏃（無茎）	SD－7	2.6	1.6	0.3	(0.8)	頁岩	一部欠損
Q 10	石鏃（無茎）	表採	2.8	1.7	0.6	(1.5)	黒色頁岩	一部欠損
Q 11	石鏃（無茎）	$G2g_5$	2.0	1.4	0.5	0.7	チャート	完形 第146図－9
Q 12	石鏃（無茎）	$L1i_7$	1.9	1.6	0.2	0.6	頁岩	完形 第146図－10
Q 13	石鏃（無茎）	D3東側トレンチ	2.0	1.7	0.4	(1.0)	チャート	一部欠損 第146図－11
Q 14	石鏃（無茎）	$F2h_6$	2.4	1.3	0.6	1.4	黒曜石	完形 第146図－12
Q 15	石鏃（無茎）	$F2e_8$	1.8	1.5	0.6	1.0	頁岩	完形 第146図－13
Q 16	石鏃（無茎）	$D3i_9$	(2.1)	1.9	0.7	(2.2)	チャート	一部欠損
Q 17	石鏃（無茎）	現水田	(1.9)	1.6	0.4	(0.9)	チャート	一部欠損
Q 18	石鏃（不明）	$D3a_3$	2.3	1.2	0.4	0.8	頁岩	一部欠損
Q 19	石鏃（不明）	H2区表採	2.6	1.5	0.4	(1.2)	チャート	一部欠損
Q 20	石錐	Cトレンチ	(2.9)	1.5	0.9	(2.7)	頁岩	一部欠損 第146図－14
Q 21	石錐	$G2f_7$	(2.4)	1.2	0.5	(1.1)	頁岩	一部欠損 第146図－15
Q 22	石匙	SD－3	7.7	3.6	0.8	16.7	粘板岩	完形 第146図－17
Q 23	石匙	F4西側トレンチ	4.0	2.4	0.9	(5.4)	頁岩	一部欠損 第146図－18
Q 24	石匙	$D4c_3$	2.3	2.3	0.6	2.2	チャート	完形 第146図－16
Q 25	石匙	Cトレンチ	3.6	3.1	0.9	7.5	頁岩	完形 第146図－19
Q 26	打製石斧	F3	12.6	9.5	3.1	179.9	流紋岩	完形 第147図－20
Q 27	打製石斧	E4	11.2	7.0	1.5	106.1	安山岩	完形 第147図－21
Q 28	打製石斧	F3	11.4	8.1	2.2	(397.9)	片麻岩	一部欠損 第147図－22

遺物番号	器種	出土地点	法量				石質	備考
			長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
Q 29	打製石斧	E4	11.3	7.5	1.4	118.6	安山岩	完形 第147図－23
Q 30	打製石斧	H1東側トレンチ	9.4	7.8	1.7	133.2	安山岩	完形 第147図－24
Q 31	打製石斧	H1東側トレンチ	8.6	7.1	1.5	103.6	安山岩	完形 第147図－25
Q 32	打製石斧	G1東側トレンチ	10.6	7.0	1.1	(103.5)	頁岩	一部欠損 第147図－26
Q 33	打製石斧	S1－23	12.0	6.9	3.7	377.6	安山岩	未完成 第147図－27
Q 34	打製石斧	D－2	10.5	5.7	3.1	221.0	安山岩	一部欠損
Q 35	打製石斧	SD－2	(6.8)	9.1	3.9	(198.9)	安山岩	½ 残
Q 36	打製石斧	SD－9	9.3	7.1	2.5	(169.3)	片麻岩	一部欠損
Q 37	打製石斧	F2	(6.9)	7.6	2.8	(133.4)	流紋岩	½ 残
Q 38	打製石斧	F3	12.6	6.4	2.8	(337.3)	片麻岩	一部欠損
Q 39	打製石斧	$D1c_8$	(6.2)	(7.9)	(3.3)	(122.0)	安山岩	一部欠損
Q 40	打製石斧	Aトレンチ	(9.9)	9.4	4.0	(412.8)	頁岩	一部欠損
Q 41	打製石斧	Dトレンチ	(5.8)	6.5	1.5	(59.0)	安山岩	½ 残
Q 42	打製石斧	G1東側トレンチ	7.9	5.1	2.5	119.3	安山岩	完形
Q 43	打製石斧	G1西側トレンチ	6.8	5.3	2.5	129.0	粘板岩	完形
Q 44	打製石斧	G1西側トレンチ	7.3	3.6	1.4	43.8	片麻岩	完形
Q 45	打製石斧	$G2g_5$	12.0	6.3	2.5	(205.0)	片麻岩	一部欠損
Q 46	打製石斧	$G2a_5$	14.0	8.6	5.8	900.8	頁岩	未完成
Q 47	打製石斧	$F2a_9$	9.3	7.8	2.7	(202.4)	安山岩	一部欠損
Q 48	打製石斧	$G2f_7$	(4.9)	3.9	(1.1)	(26.4)	頁岩	破片
Q 49	打製石斧	$F3d_1$	6.9	4.5	1.6	(47.9)	安山岩	一部欠損
Q 50	打製石斧	SD－7	7.4	5.7	1.8	(119.7)	片麻岩	一部欠損
Q 51	打製石斧	F2	5.9	4.0	1.7	(46.5)	頁岩	一部欠損
Q 52	打製石斧	F3	6.8	5.4	2.6	111.4	片麻岩	完形
Q 53	打製石斧	表採	6.7	4.8	1.7	59.2	片麻岩	完形
Q 54	磨製石斧	Lトレンチ拡張部	(6.4)	5.6	2.7	(119.7)	緑泥片岩	½ 残 第148図－28
Q 55	磨製石斧	G1西側トレンチ	7.8	4.1	0.8	40.8	片麻岩	完形 第148図－29
Q 56	石錘	現水田（Ⅳ区）	6.0	6.2	1.3	49.2	安山岩	完形 第148図－30
Q 57	磨石	SI－22	10.7	10.0	4.8	710.9	安山岩	完形 第148図－31
Q 58	磨石	SD－2	7.1	6.6	5.3	322.5	安山岩	完形 第148図－32
Q 59	磨石	F3	(6.1)	6.1	4.1	96.7	安山岩	完形 第148図－33
Q 60	磨石	E1東側トレンチ	8.2	7.9	5.5	499.6	安山岩	完形 第148図－34
Q 61	磨石	F3	9.5	8.0	4.5	461.2	安山岩	完形 第148図－35
Q 62	磨石	$F2j_9$	9.2	7.3	4.0	356.1	安山岩	完形
Q 63	磨石	$F2j_9$	9.0	(4.3)	4.9	(189.4)	安山岩	½ 残
Q 64	磨石	$G2d_4$	7.4	7.8	3.6	270.5	安山岩	完形
Q 65	磨石	SI－22	(7.9)	(6.3)	4.9	(241.6)	安山岩	破片

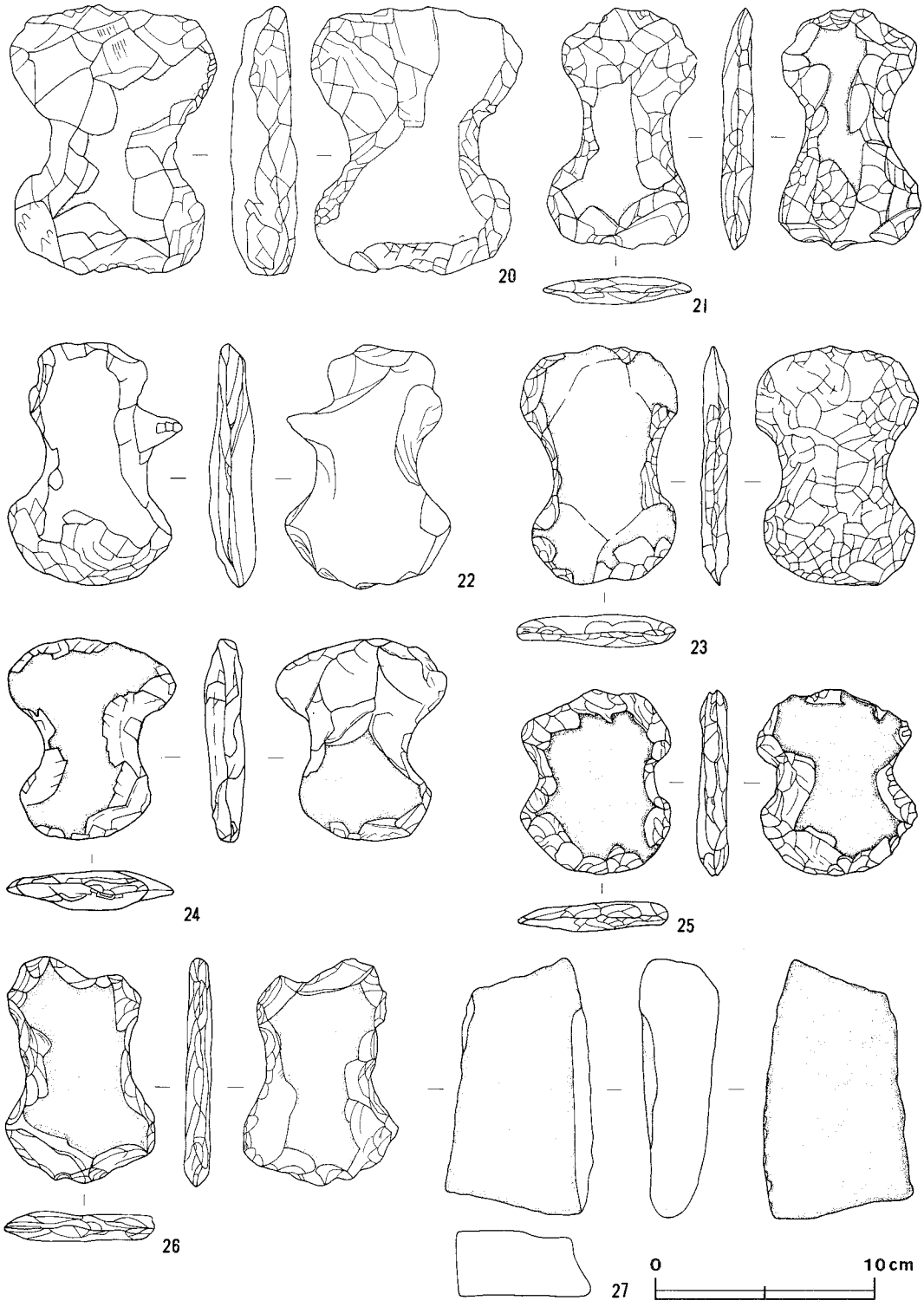
遺物番号	器種	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
Q 66	磨石	C4h$_5$	9.8	6.7	4.6	366.6	安山岩	完形
Q 67	磨石	SK−25	10.5	7.0	2.3	257.1	安山岩	完形
Q 68	磨石	D2	7.5	3.9	3.2	(90.1)	安山岩	½残
Q 69	磨石	SD−2	(9.6)	3.4	(2.5)	(109.5)	緑泥片岩	破片
Q 70	磨石	D2	9.0	8.3	3.4	364.5	安山岩	完形
Q 71	磨石	D2c$_9$	(7.8)	7.4	3.6	(291.7)	安山岩	一部欠損
Q 72	磨石	SD−2	(7.9)	2.7	2.3	(70.3)	黒色頁岩	一部欠損
Q 73	磨石	F2	(10.1)	7.8	4.4	(385.2)	安山岩	½残
Q 74	磨石	L2g$_4$	8.4	7.9	2.2	204.1	安山岩	完形
Q 75	磨石	F2	9.7	7.9	3.6	348.8	安山岩	完形
Q 76	磨石	L2e$_3$	(9.2)	(4.5)	(3.6)	(115.1)	安山岩	破片
Q 77	磨石	L1i$_0$	12.1	4.6	2.8	222.6	片麻岩	完形
Q 78	磨石	L1h$_0$	10.8	9.4	4.1	512.3	安山岩	完形
Q 79	磨石	L1h$_8$	11.2	7.2	4.3	506.4	安山岩	完形
Q 80	磨石	M2a$_1$	(10.6)	10.5	5.8	(869.1)	安山岩	一部欠損
Q 81	磨石	Aトレンチ	11.3	3.3	2.3	126.0	片麻岩	完形
Q 82	磨石	Aトレンチ	9.6	(6.5)	1.9	(150.7)	安山岩	½残
Q 83	磨石	F3	(13.6)	3.8	2.5	(188.9)	緑泥片岩	一部欠損
Q 84	磨石	G2西側トレンチ	(11.9)	7.4	3.2	(343.5)	安山岩	一部欠損
Q 85	磨石	G3西側トレンチ	9.8	3.4	2.6	124.2	頁岩	完形
Q 86	磨石	Mトレンチ	8.6	2.7	1.9	119.3	緑泥片岩	完形
Q 87	磨石	H1東側トレンチ	9.7	8.7	4.5	473.9	安山岩	完形
Q 88	磨石	J1東側トレンチ	(8.5)	8.2	3.5	(295.2)	安山岩	½残
Q 89	磨石	表採	10.3	10.1	5.6	625.0	安山岩	完形
Q 90	敲石	F2	9.2	5.0	4.9	305.9	安山岩	完形 第149図−36
Q 91	敲石	F2a$_9$	14.5	10.2	8.1	1187.7	石英斑岩	完形 第149図−37
Q 92	敲石	F2g$_8$	(6.0)	5.6	3.4	(92.1)	安山岩	½残
Q 93	敲石	F2j$_9$	8.8	4.8	3.2	194.8	安山岩	完形
Q 94	敲石	G2f$_7$	12.4	7.8	4.1	831.6	硬質砂岩	完形
Q 95	敲石	G3c$_1$	7.8	6.2	2.2	130.7	頁岩	完形
Q 96	敲石	SI−22	(7.6)	5.7	3.4	(232.3)	安山岩	一部欠損
Q 97	敲石	D3b$_2$	10.3	8.7	3.7	538.9	花崗岩	完形
Q 98	敲石	G3c$_1$	(3.5)	(5.3)	(1.8)	(36.4)	安山岩	破片
Q 99	敲石	SK−62	9.1	7.8	3.9	(185.6)	安山岩	一部欠損
Q 100	敲石	SD−2	10.2	6.4	5.1	240.2	安山岩	完形
Q 101	敲石	SE−覆土	(10.7)	7.6	4.2	(478.7)	安山岩	一部欠損
Q 102	敲石	SK−53・54	(7.4)	(5.7)	4.3	(170.5)	安山岩	破片

遺物番号	器種	出土地点	法量				石質	備考
			長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
Q 103	敲石	F2	11.4	9.8	2.1	(312.6)	安山岩	一部欠損
Q 104	調整痕のある剝片	$F2j_9$	4.7	4.0	1.6	22.2	頁岩	未完成 第149図－38
Q 105	調整痕のある剝片	$D2c_8$	1.8	2.3	0.5	1.6	チャート	未完成 第149図－39
Q 106	剝片	$F2c_0$	2.1	1.3	0.7	1.3	チャート	
Q 107	剝片	G1西側トレンチ	2.8	1.8	0.5	2.6	安山岩	
Q 108	剝片	G2西側トレンチ	2.7	1.4	0.5	1.4	チャート	
Q 109	剝片	SI－23	7.2	4.5	2.3	85.0	安山岩	
Q 110	剝片	SI－23	7.8	6.7	2.3	92.2	安山岩	
Q 111	剝片	SD－3	9.7	3.7	2.4	86.1	輝緑岩	
Q 112	剝片	SD－3	5.5	2.1	1.2	8.6	粘板岩	
Q 113	剝片	Cトレンチ	9.4	5.5	2.5	108.2	安山岩	
Q 114	剝片	表採	4.7	3.6	1.0	8.5	頁岩	
Q 115	剝片	F2	2.4	2.1	1.4	4.6	黒曜石	
Q 116	スタンプ形石器	SD－7	11.4	8.3	5.1	549.5	流紋岩	完形 第149図－40
Q 117	スタンプ形石器	Hトレンチ	13.5	7.8	6.2	671.8	流紋岩	完形 第149図－41
Q 118	砥石	$G2g_5$	(10.5)	2.9	2.1	(76.1)	凝灰岩	一部欠損 第149図－42
Q 119	砥石	SD－2	(11.6)	2.8	2.4	(108.1)	凝灰岩	一部欠損 第149図－43
Q 120	砥石	SD－2	8.4	6.8	4.6	(149.7)	安山岩	一部欠損 第150図－44
Q 121	砥石	Eトレンチ	5.0	4.9	3.9	(67.6)	安山岩	一部欠損 第150図－45
Q 122	砥石	$D3i_9$	(9.7)	10.7	5.2	(534.4)	砂岩	一部欠損 第150図－46
Q 123	砥石	$H3b_9$	(10.5)	4.6	2.1	(109.4)	凝灰岩	一部欠損 第150図－47
Q 124	砥石	$H2a_0$	(6.3)	3.0	2.3	(58.7)	凝灰岩	一部欠損
Q 125	砥石	SD－2	(7.8)	3.0	1.9	(63.8)	凝灰岩	一部欠損
Q 126	砥石	SD－2	(4.3)	4.3	2.1	(27.2)	安山岩	一部欠損
Q 127	砥石	SD－2	(7.0)	2.8	2.8	(73.0)	凝灰岩	一部欠損
Q 128	砥石	SD－2	(9.6)	2.8	2.6	(102.5)	凝灰岩	一部欠損
Q 129	砥石	SD－2	(4.6)	2.6	2.1	(28.9)	凝灰岩	一部欠損
Q 130	砥石	SD－9	(6.0)	4.2	2.8	(55.8)	砂岩	一部欠損
Q 131	砥石	F東側トレンチ	8.2	5.8	2.3	82.3	安山岩	一部欠損
Q 132	砥石	SK－25	(7.9)	2.9	3.0	(94.9)	凝灰岩	一部欠損
Q 133	砥石	$G2b_1$	6.3	5.9	2.1	(113.3)	凝灰岩	一部欠損
Q 134	砥石	表採	(8.3)	2.4	2.1	(42.9)	凝灰岩	一部欠損
Q 135	軽石	$D4d_1$	(7.5)	6.9	4.7	(106.6)	熔岩	第150図－48
Q 136	軽石	SI－23	6.6	5.5	3.5	18.1	熔岩	第150図－49
Q 137	軽石	$D3i_9$	(8.8)	(5.9)	4.9	(78.2)	熔岩	
Q 138	軽石	$D3i_9$	7.2	4.9	4.1	40.8	熔岩	
Q 139	軽石	$D4d_1$	6.0	5.1	4.8	69.6	熔岩	

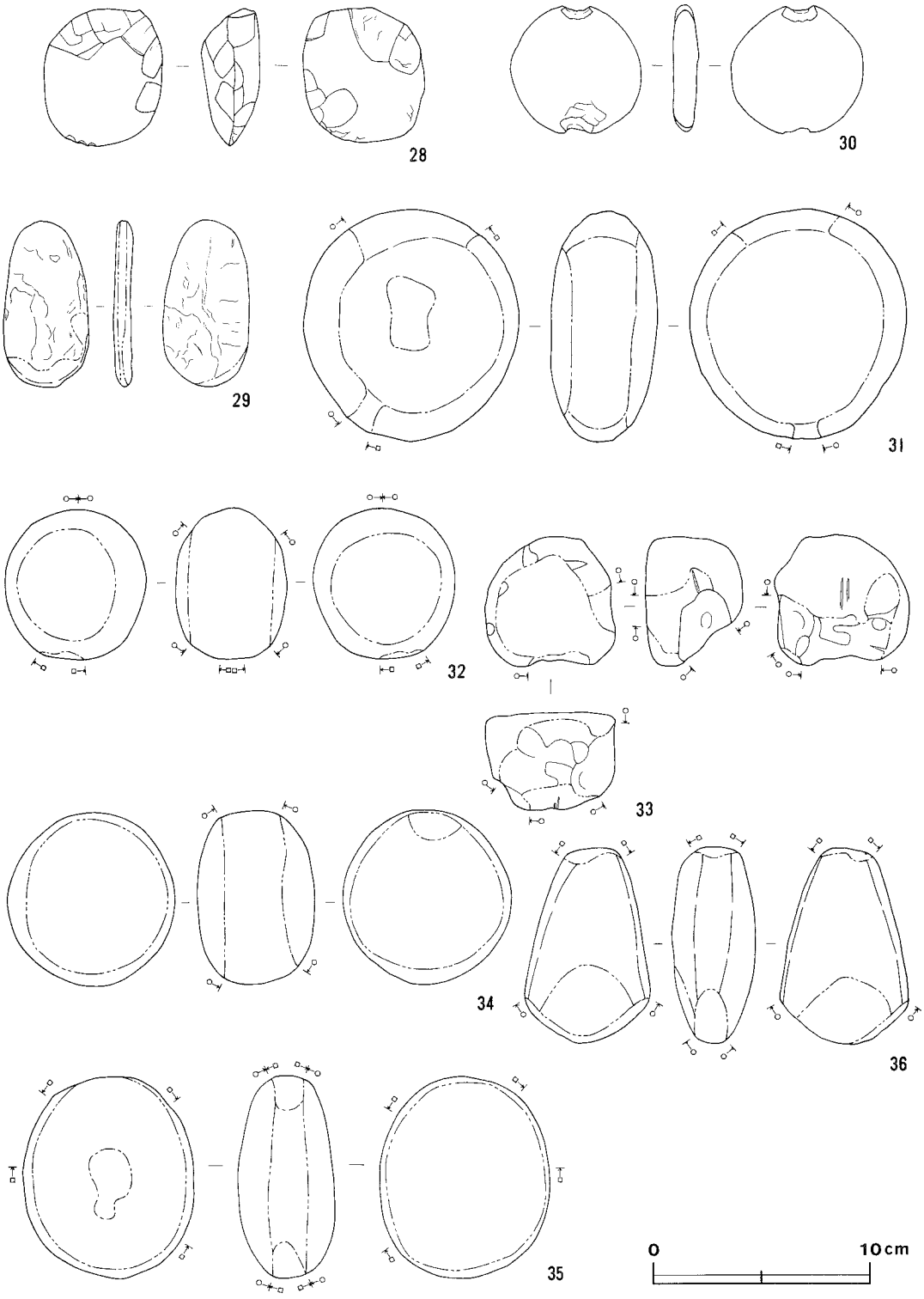
遺物番号	器種	出土地点	法量				石質	備考
			長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
Q 140	礫石	J1東側トレンチ	6.8	8.7	1.7	106.7	安山岩	第150図－50
Q 141	礫石	L2	10.0	8.2	4.9	376.3	安山岩	第151図－51
Q 142	石核	$G2d_6$	8.4	7.3	4.2	239.2	頁岩	第151図－52
Q 143	石核	F3	5.3	3.0	1.0	15.3	頁岩	
Q 144	スクレイパー	F2	5.6	1.3	1.5	18.7	頁岩	第151図－53
Q 145	石棒	SK－6	(56.5)	16.2	14.9	(18,250)	花崗岩	一部欠損 第151図－54
Q 146	凹石	Aトレンチ	10.9	6.1	5.5	327.9	安山岩	第151図－55
Q 147	石臼	F3	(12.5)	(10.1)	(8.6)	(1,170.8)	安山岩	破片 第151図－56
Q 148	石臼	F3	(11.7)	(5.6)	(5.3)	(348.8)	安山岩	破片
Q 149	五輪塔（空・風輪）	$D4d_2$	21.7	15.8	15.2	(6,000)	花崗岩	一部欠損 第152図－57
Q 150	五輪塔（風輪）	$D4d_2$	20.2	21.4	14.5	(8,600)	花崗岩	一部欠損 第152図－58
Q 151	五輪塔（水輪）	$D4d_2$	27.5	(25.4)	18.1	(15,700)	花崗岩	一部欠損 第152図－59
Q 152	五輪塔（火輪）	$D4e_2$	21.3	23.2	13.3	(9,000)	花崗岩	一部欠損 第152図－60
Q 153	五輪塔（火輪）	$D4e_2$	28.5	26.3	16.4	(19,000)	花崗岩	一部欠損 第152図－61
Q 154	原石	$C4h_5$	8.9	8.1	3.3	292.0	砂岩	
Q 155	原石	$C3h_5$	12.4	9.9	6.7	1,490.7	安山岩	
Q 156	原石	SD－2	19.5	13.1	6.3	1,185.9	安山岩	
Q 157	原石	現水田（Ⅳ区）	(5.8)	6.0	6.3	(129.1)	安山岩	
Q 158	原石	$L2f_9$	(12.8)	(9.5)	(6.8)	(432.6)	安山岩	
Q 159	原石	$L1g_6$	(10.8)	(8.5)	(5.3)	(427.9)	安山岩	



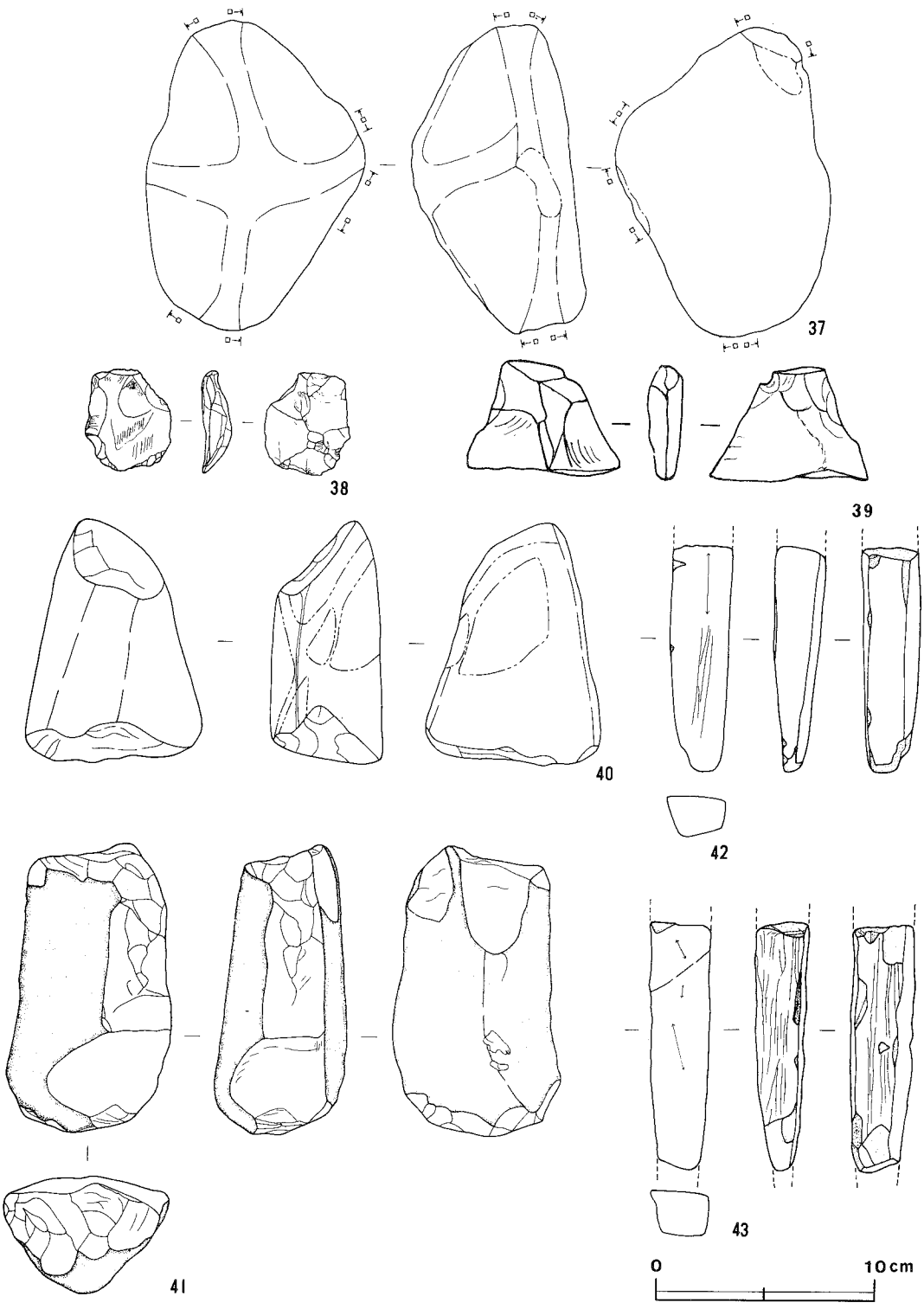
第146図　石器実測図(1)



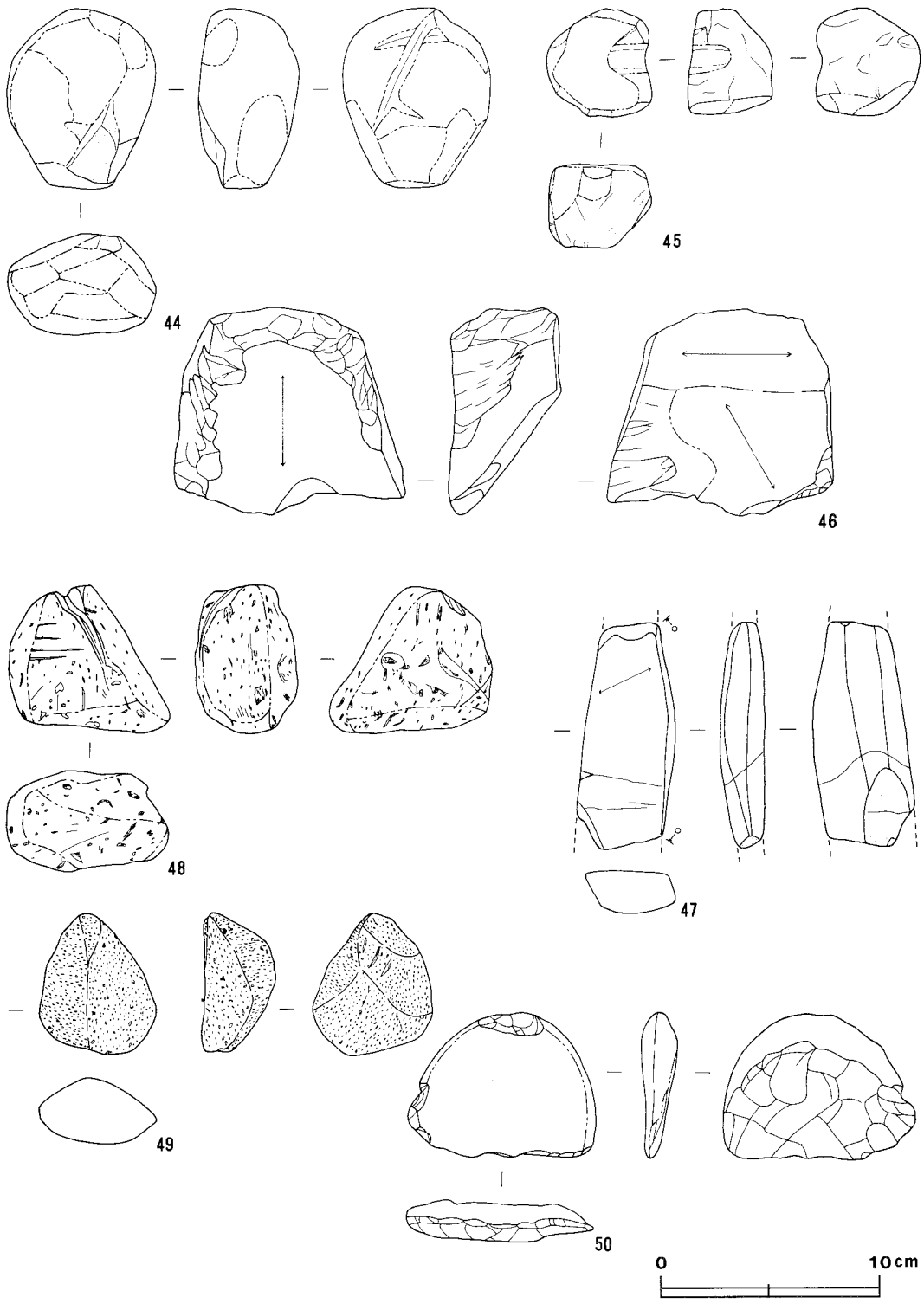
第147図　石器実測図(2)



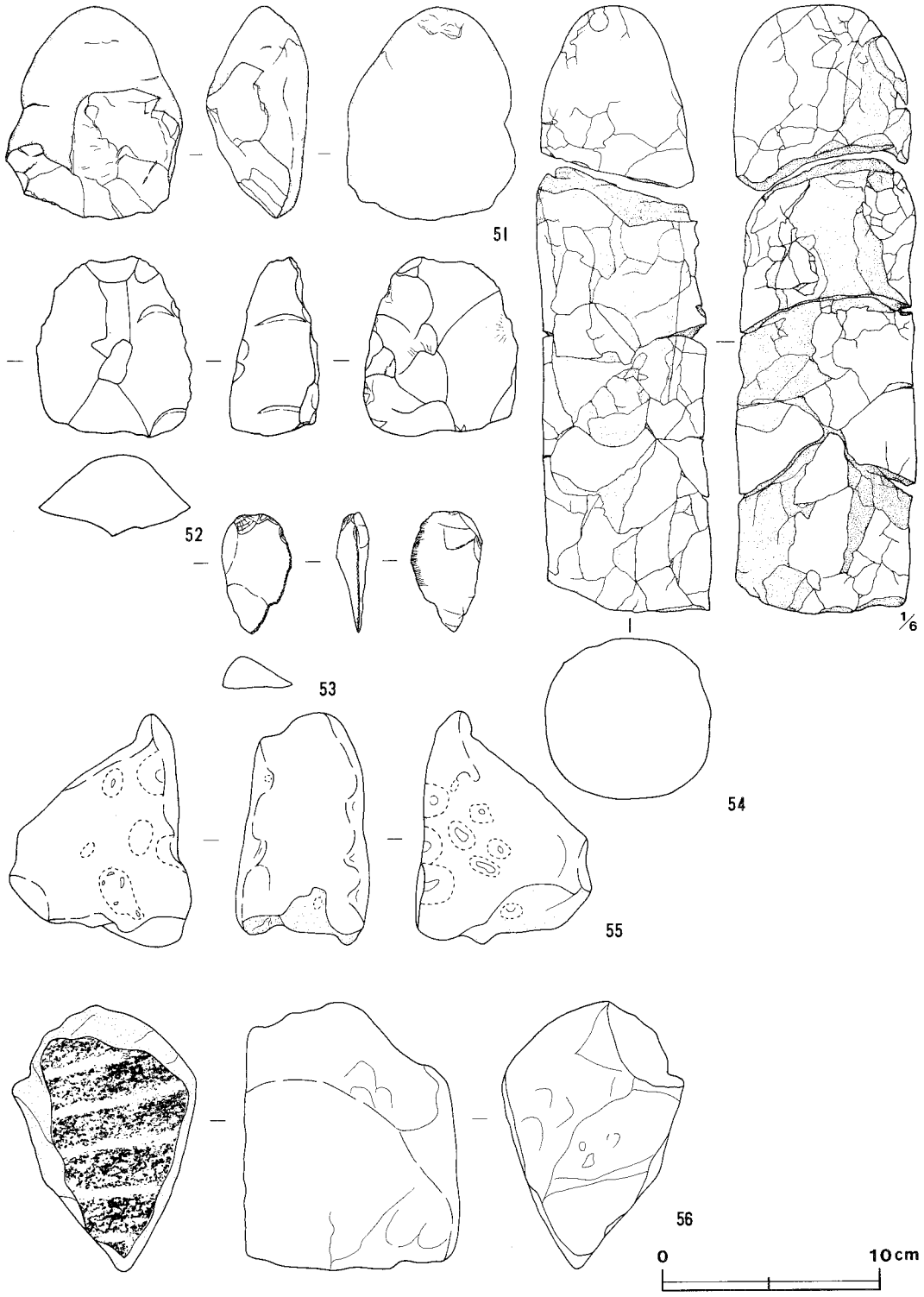
第148図　石器実測図(3)



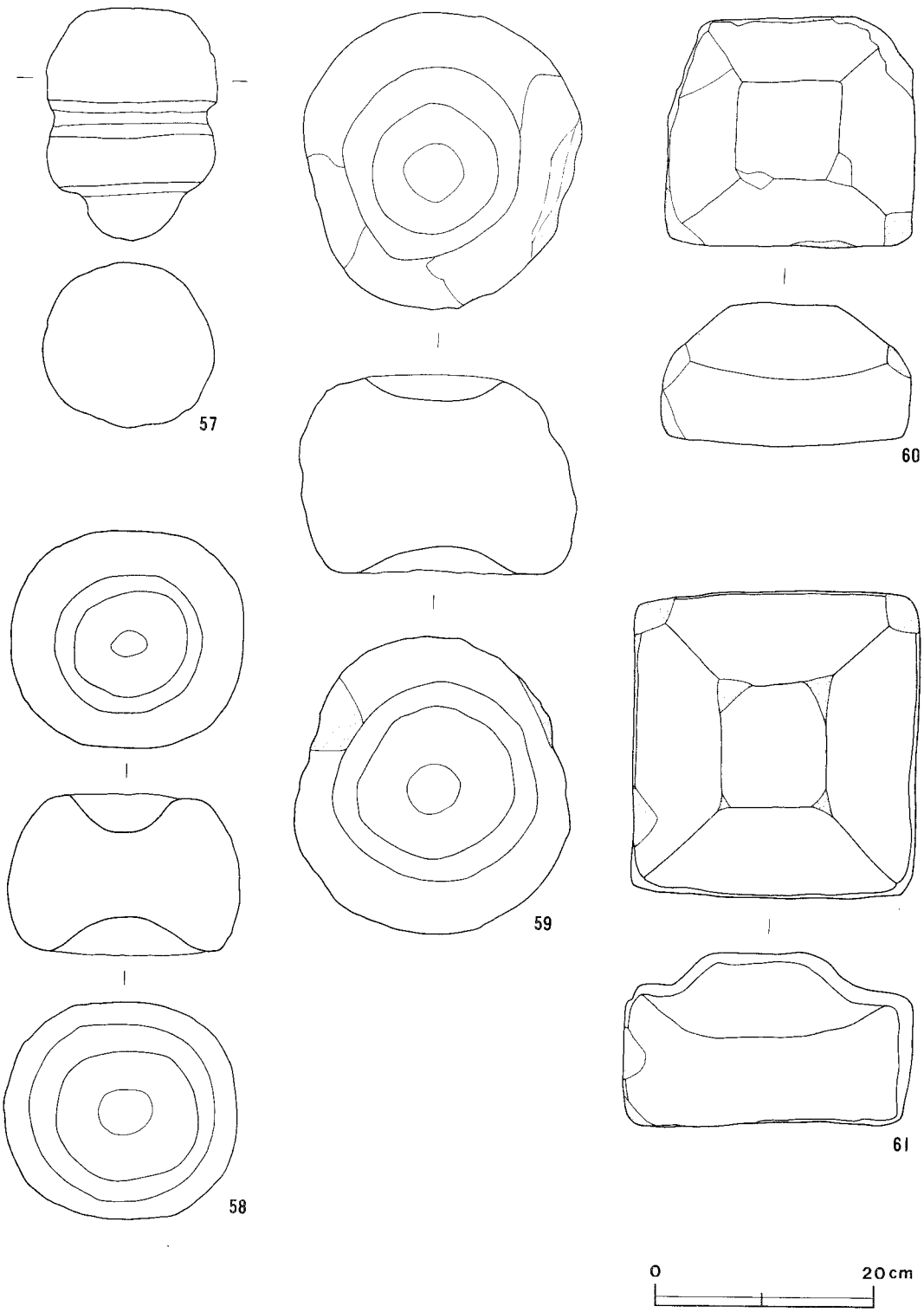
第149図　石器実測図(4)



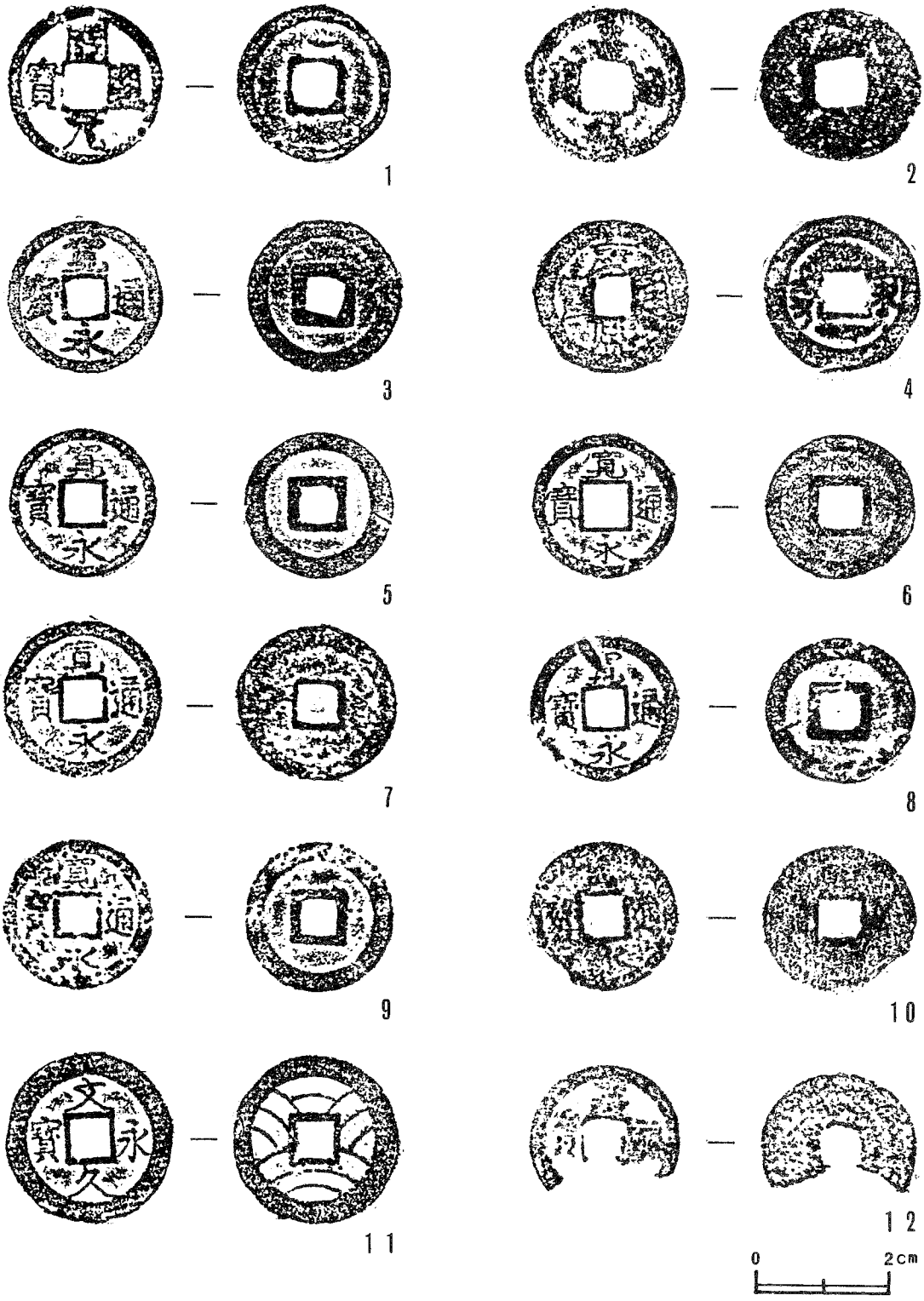
第150図　石器実測図(5)



第151図　石器実測図(6)



第152図　石製品実測図(7)



第153図　古銭拓影図

〔3〕 古銭（第153図1～12）

遺溝外から12点の古銭が出土した。出土地点は様々であり，遺跡の北側台地のC3，C4，D3，D4，E4区，Aトレンチから出土したものと表採のものがある。

出土貨幣を鋳造地によって分類すると，渡来銭と国内銭とに分けられる。渡来銭は唐銭の「開元通寶」，宋銭の「嘉祐通寶」と思われるもの，清銭の「康熙通寶」が各々1点計3点出土している。国内銭は，「寛永通寶」7点（古寛永1，新寛永5，新・旧不明1），「文久永寶」1点計8点出土しており，いずれも江戸時代に鋳造されたものである。他に，判読困難な不明銭1点が出土している。

表8　古銭一覧表

番号	銭　名	初鋳年（西暦）	鋳造地名	出土地点	備　考
第153図1	開元通寶	武徳4年（621）	唐	E4区	裏面上部に爪蹟有り
2	□□通寶	嘉祐元年（1056）	宋	E4区	□□は嘉祐か
3	寛永通寶	寛永3年（1636）	日本	D3区	古寛永
4	康熙通寶	康熙年間（1662）	清	D3区	裏面に二文字有り，一文字は東，他は不明
5	寛永通寶	寛永8年（1668）	日本	表　採	新寛永
6	寛永通寶	寛永8年（1668）	日本	D4区	新寛永
7	寛永通寶	寛永8年（1668）	日本	Aトレンチ	新寛永
8	寛永通寶	寛永8年（1668）	日本	C4区	新寛永
9	寛永通寶	寛永8年（1668）	日本	Aトレンチ	新寛永
10	寛永通寶		日本	表　採	周縁一部欠損，新旧不明
11	文久永寶	文久3年（1863）	日本	C3区	裏面に波紋有り
12	□□通寶			C3区	不　明

8　低湿地調査（現水田部）

調査区の中央部は，D2，D3，E2，E3区にあり，当遺跡の西側約300mを南流する西仁連川から東に入り込む狭小な谷津が形成されており，その小谷津を北と南から挟むようにある台地には，古墳時代の集落が検出されたことから，同調査区（低湿地部）には，古墳時代の水田遺構の検出が予想されたため，台地部の試掘同様トレンチ試掘を実施した。試掘の結果，現在まで水田として利用していた耕作土の下に泥炭質の泥層を検出した。さらに，その検出面から約1m下の海抜31.1m付近（泥層）で，斜位に，あるいは，直立気味の状態で樹木を検出した。同調査区は多量の湧水

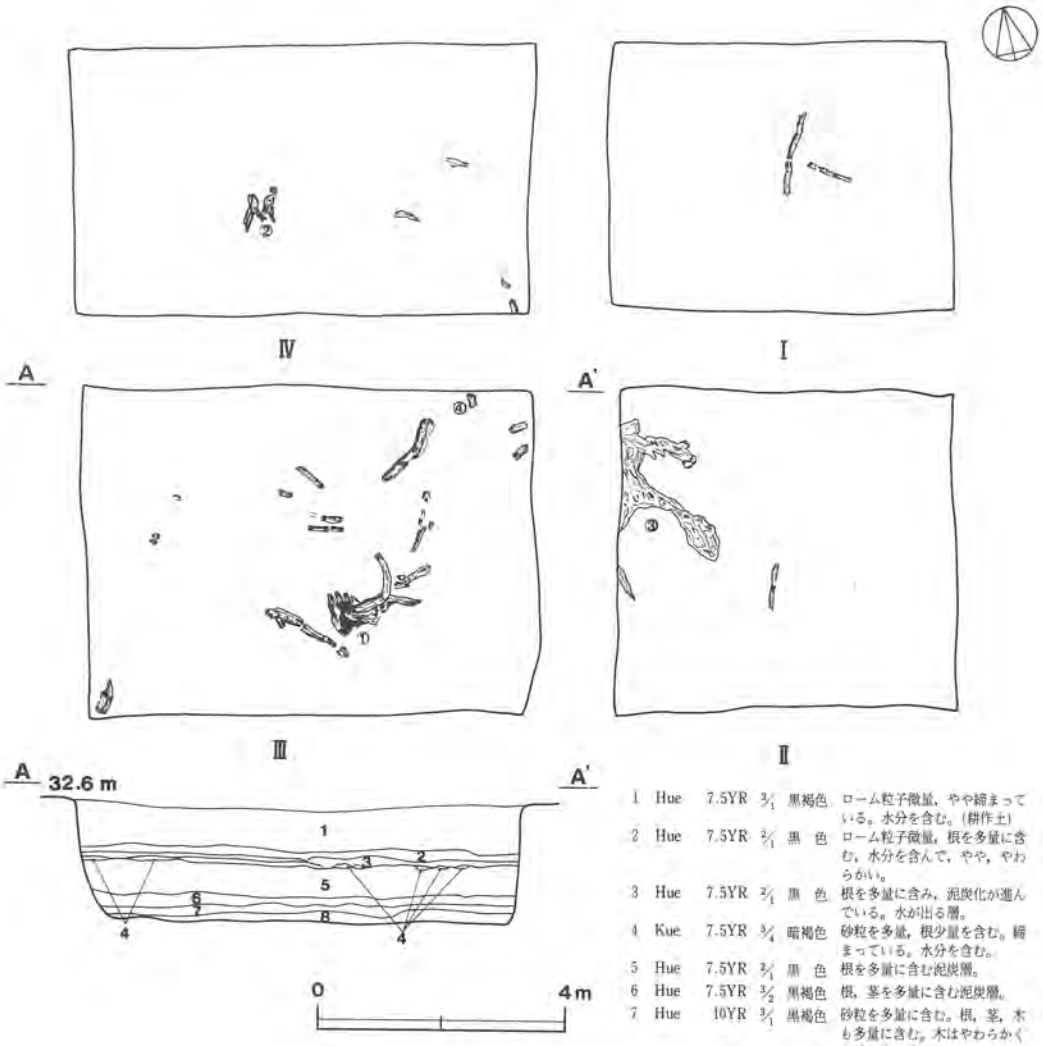
と流入する水があり，深くなると土の崩落の危険もあることを考慮して調査方法を検討した結果，谷津田の中央部付近のE3b_4区を中心に，南北11m，東西14mほどに矢板を組み調査区を設定し，住居跡の調査と同じ四分割法で実施し，地区名は北側より時計まわりでⅠ～Ⅳ区とした。また，樹木が水田遺構に伴う杭等とも考えられたため，トレンチ試掘によって明らかになった土層断面を詳細に比較検討しながら，樹木の出土する地点まで土層ごとに重機によって慎重に除去しながら調査を進めた。

水田として利用していた耕作土は，ローム粒子を微量含む黒褐色土が0.7～0.8mほど堆積している。その耕作土を除去した下の海抜31.7m付近から黒色の泥炭質泥層が露呈した。この層は砂質シルトと呼ばれるものを主体とし，多量の葦の根を含む層である。層厚は，中央付近のE3c_3区，E3c_4区で，0.9～1.0m程度でほぼ一定である。上部から下部になるに従って黒色土から黒褐色土とわずかながら変化も窺える。また，基本的に砂粒と葦の根からなる構成物質も，下部になるに従って根と茎が多量になるなど相違もみられ，5層に分かれ堆積しているが，大きくは，土層の色，含有物等から一層として見るのも可能である。この層の上部には，層厚4～8cmの葦の根を含む暗褐色の砂層が断続的に堆積している。また，泥炭層の下には，灰黄色の砂粒を含む粘土層が堆積していた。泥炭質泥層の広がりはトレンチ試掘の土層を観察すると，調査区中央を中心にして径約28mの内側に見られ，それより外側になると葦の根も少なく泥炭質泥層もなくなってしまう。また，泥炭質泥層の下に堆積している粘土層が，調査区中央より葦の根や泥炭質泥層がみられなくなった付近での方が，約30～35cm一段高くなる状態をしめしている。以上のことから推定すると，調査区を含む谷津の中心から径約28m内側では，周辺より一段低くなったために水が溜まって小沼化し，その後，葦が群生し，根・茎が枯れて堆積し，そのことが何度も長い間くり返されたため，葦の根と茎から泥炭質泥層が形成されたものと思われる。しかし，水田遺構は，詳細な土層の観察にもかかわらず検出することはできなかった。

泥炭質泥層の下部から出土した樹木多数は，ほとんど横位の状態で検出され，いずれも樹種はハンノキである。この樹木については，出土した時点から注意して掘り進めたが，泥炭質泥層の下部以外出土しなかった。第154図はその下部から樹木が出土した状況を示したものである。Ⅲ・Ⅳ区には木の根元付近が折れた状態(①・②)で出土している。またⅡ区には樹木が横倒しになった後，泥炭質泥層の土圧と粘土の浸食が加わり，水分を多量に含んで柔らかくなり，つぶされた状態（③）で出土している。その他，人為的な加工痕とみまちがう痕跡があった樹木（③）がⅣ区から出土した。樹木の小口を斜めに削り出したような痕跡である。この樹木に削り出したような痕跡があったのは，堆積した樹木は水により柔らかく劣化し，さらに堆積が進行し，水と土圧の浸食を受け，削り口状の痕跡が形成されたものと思われる。また，横倒しになっている樹木を，粘土や泥炭質泥層で研磨すると，同様な削り口がみられ，スコップで削りとった部分でも，手で

よく洗うと滑らかな面が出来，その後酸化して黒色化して出土した加工痕と区別がつかなくなることからも判断できる。

調査区からの出土遺物は，耕作土，泥炭質泥層から磨滅した土師器片，縄文式土器片が少量出土している。出土状況から，いずれも流れ込んだものと思われる。また，泥炭質泥層の下部から炭化したくるみの実1個，石錘（Q56）1点が出土している。



1	Hue	7.5YR	3/1	黒褐色	ローム粒子微量，やや締まっている。水分を含む。(耕作土)
2	Hue	7.5YR	2/1	黒　色	ローム粒子微量，根を多量に含む，水分を含んで，やや，やわらかい。
3	Hue	7.5YR	2/1	黒　色	根を多量に含み，泥炭化が進んでいる。水が出る層。
4	Kue	7.5YR	3/4	暗褐色	砂粒を多量，根少量を含む。締まっている。水分を含む。
5	Hue	7.5YR	2/1	黒　色	根を多量に含む泥炭層。
6	Hue	7.5YR	3/2	黒褐色	根，茎を多量に含む泥炭層。
7	Hue	10YR	3/1	黒褐色	砂粒を多量に含む。根，茎，木も多量に含む。木はやわらかく水分を多く含む。
8	Hue	2.5YR	7/2	灰黄色	砂粒を微量に含む粘土層。細かい根も含む。

注　2，3，5，6　泥炭層で葦の根が腐植，樹木片は砂層の上面，又，砂層から出土している。

第154図　低湿地調査（現水田部）

第4節　ま　と　め

当遺跡において検出された遺構は，竪穴住居跡39軒，竪穴遺構2基，炉穴15基，土坑85基，溝6条，堀4条，井戸3基である。

遺物は，縄文時代では早期の野島式，茅山式，同前期の関山式，黒浜式，浮島式，十三菩提式，同中期の阿玉台式，加曽利EⅠ・EⅢ式，同後期の堀の内Ⅰ・Ⅱ式の縄文式土器およびその土器片が出土し，古墳時代では前期五領式の土師器が出土している。その他，これまで述べてきたように，石器，石製品，土製品，及び陶磁器片等が出土している。

以上のことから，当遺跡は，断続的ではあるが縄文時代から近世頃までの複合遺跡であることが明らかになった。ここでは，当遺跡の主体をなす縄文時代早期・前期の遺構と遺物，古墳時代前期の遺構と遺物等に焦点を絞って述べることにする。

1　縄文時代について

〔1〕 土器群の分布について

縄文時代の遺構としては，竪穴住居跡2軒，炉穴15基，土坑3基である。これらは早期とみられる炉穴15基，前期に属する竪穴住居跡2軒，中期の阿玉台式期，同期の加曽利EⅠ式期，後期の堀之内式期とみられる土坑が各々1基ずつである。これらの遺構のほかに，第3節7〔1〕で述べたように早期の茅山式から後期の堀之内Ⅱ式までの土器片が希少でかつ断続的ではあるが出土しているので，まず，それらの土器群の分布について，若干述べておきたい。

第Ⅰ群土器とした条痕文系土器群（茅山式）は，D2，F2区に3片みられるだけである。

第Ⅱ群土器とした前期前葉の土器群（関山式，黒浜式）は，関山式に比定されるa類は3片がD2区から出土しただけで，ほとんどは黒浜式に比定されるb類の土器片である。黒浜式土器片はL1，L2区を中心として，K1，K2区に広がりをもち，中央部のD2，F2区にも若干分布している。L1区には黒浜式期に比定される第22・23号住居跡が存在している。

第Ⅲ群土器とした前期後葉の土器群（浮島式，十三菩提式）は，浮島式に比定されるa類は7片がF2，F3，G2区から出土し，十三菩提式に比定されるb類は2片がF3区から出土している。浮島式土器は，それらの土器の分布と出土量をみると十三菩提式土器片に比べてF3区の周辺に広がり，わずかながら出土量も増えている。

第Ⅳ群土器とした中期前葉の阿玉台式土器群（阿玉台Ⅰ・Ⅱ式）は，D4，F2，F3，G2，G3区と比較的広範囲に認められ，出土土器は約120片である。G2区には阿玉台式期に該当する第16号土

坑が存在している。

第V群土器とした中期中・後葉の加曽利E式土器群（加曽利EⅠ式，加曽利EIII式）は，C4，G2区と小支谷で水田部にあたるE3区から出土している。E3区の土器片は流れ込んだものと思われる。G2区には加曽利EⅠ式に該当する第6号土坑が存在しているが，出土量は少なく，加曽利EⅠ・EII式含めて約30片である。

第VI群土器とした後期前葉の堀之内式土器群（堀之内Ⅰ式，堀之内II式）は，他の土器群の分布状況とは異なり，小支谷の北側台地縁辺部に分布している。堀之内Ⅰ式に比定できるa類は，C4，D2，D3区に9片，堀之内II式に比定できるb類は水田部から流れ込んだ状態で1片出土している。C4区には堀之内Ⅰ式に該当する第83号土坑が存在している。

以上が，遺構外出土の縄文式土器の分布状況である。各土器群に該当する住居跡は，第II群の黒浜式期しか検出することはできなかったが，各時期に人々の生活が営まれていた一部であったことを窺い知ることができた。

つぎに，当遺跡からは，前述したように黒浜式期の竪穴住居跡2軒，野島式期の炉穴15基，阿玉台式期，加曽利EⅠ式期，堀之内Ⅰ式期に比定される土坑3基がそれぞれ検出されているので，次に，これらの遺構について述べることにする。これらの遺構は，時期を異にしているように，遺跡内においてもL1区に検出された住居跡群と，G2，C4区に単独で検出された土坑がそれぞれ離れて所在している。

〔2〕 竪穴住居跡について

第22・23号の2軒の竪穴住居跡は，標高37mほどの遺跡の南端部で台地の中央部に存在している。住居跡は2軒とも撹乱をうけ，遺存状態はあまりよくない。規模，平面形は，第22号住居跡が長軸3.64m，短軸3.16mの隅丸長方形を呈し，第23号住居跡が長軸4.38m，短軸3.25mの隅丸長方形を呈している。長軸方向は，第22号住居跡がN－21°－E，第23号住居跡がN－75°－Eと方向にも差がある。柱穴も，各住居跡とも位置や柱穴数，規模が異なり，共通性に欠ける。第22号住居跡の柱穴配置は不明瞭であるが，第23号住居跡は4本柱で，それぞれを結ぶとほぼ整った方形を呈する。炉跡は各々1か所ずつ検出され，中央ないしやや西寄りに位置し，炉の覆土が少なく焼土の量もあまり多くないことと，炉付近の性格不明のピットが複数存在するという点で共通性が認められる。

以上のことを基に，同時期に該当する近辺遺跡においてどのような状況となっているかを表わしてみたのが表9である。方形を基調とする住居跡が多く，円形を基調とする住居跡は少ない。また，規模についてみると，長軸または長径方向の長さが4～6mの範囲に属するものが多いこともわかる。多くは炉を有し，柱穴の位置の規則性の有無はそれぞれ約半数に分かれる。従って，

当遺跡における該当住居跡も方形を基調とし，規模もほぼ同様の範囲にあり，炉，柱穴を有し，第23号住居跡は柱穴の位置が規則性もあることから，他の遺跡と類似した傾向を指摘することができ，大きな隔たりはないと考える。

ここで，第22・23号住居跡の炉付近の性格不明ピットについて若干触れておきたい。この性格不明のピットについては，縄文時代の住居跡の研究をしている笹森健一[(1)]氏が論考の中で「Cピット」（炉または炉付近に位置するピット）の名称を与え，「黒浜式期の4本柱の住居跡では炉跡と結び付きながらも住居床面中央に位置し，形状は柱穴状，袋状，集合ピット状の他，埋設土器をともなうものもある。よって，柱穴とは考えない方が良い」と指摘しているのに対して，塚田光[(2)]氏は，「5本柱については，4本主柱穴方形配列の中央付近に第5番目の主柱穴を設ける」ものと指摘し，意見が対立している。これらの意見からすると，当遺跡の第22号住居跡ではP_1～P_3が，第23号住居跡ではP_5・P_6が第5番目の主柱穴または「Cピット」として該当すると考えられる。しかし，本跡では「Cピット」と柱穴を明確に区別する具体的な資料を得ることはできなかったため，現状ではその性格を明らかにすることはできなかった。今後「Cピット」と柱穴を明確に区別できる具体的資料が増加し不明確である機能について明らかになることを期待したい。また，当該期の住居跡には不定形の住居跡が存在すると考えられていることもあり，鈴木素行[(3)]氏が「黒浜式期の住居跡の主柱は6本から4本へと減少し，その床面形態も長方形から正方形へと近づき，

表9　近辺遺跡における黒浜期住居跡の形状・規模等一覧表（境松遺跡より転記）小田林遺跡を除く

所在地	遺跡名	形状・規模等	検出軒数	形状 平面の形状 (隅丸)方形	(隅丸)長方形	不整(長)方形	(不整)円形	(不整)楕円形	不定形	規模 長軸または長径の長さ 4m未満	4m以上5m未満	5m以上6m未満	6m以上	炉有無 あり	なし	柱穴規則性 あり	なし
茨城県	水海道市	大生郷	11	3	6	・	・	2	・	1	1	5	4	・	11	3	5
	豊里町	大境	1	・	・	・	・	1	・	・	1	・	・	1	・	1	・
	石岡市	外山	3	1	・	・	・	2	・	2	1	・	・	2	1	・	3
	石岡市	新池台	7	1	4	・	・	2	・	・	・	5	2	・	7	5	2
	勝田市	遠原	4	2	・	・	・	2	・	3	1	・	・	3	1	1	2
	古河市	原町西	2	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	2	・	・	2
	谷田部町	境松	8	・	2	・	5	1	・	1	2	1	4	7	1	3	5
	結城市	小田林	2	・	1	1	・	・	・	1	1	・	・	2	・	1	1
千葉県	柏市	花前I	8	2	1	・	2	1	2	1	3	2	2	5	3	3	5
	柏市	鴻ノ巣	21	5	2	12	・	・	2	2	12	4	2	20	1	10	10
合計			67	14	16	13	7	11	4	11	22	17	14	42	25	27	35

※1　原町西遺跡は平面形状・規模は不明である。
※2　柱穴の規則性の欄は柱穴がない住居跡があるので軒数と数字が一致しない。
※3　鴻ノ巣遺跡は長径・短径不明の住居跡1軒ある。また，境松遺跡は長径・短径の推定値もある。

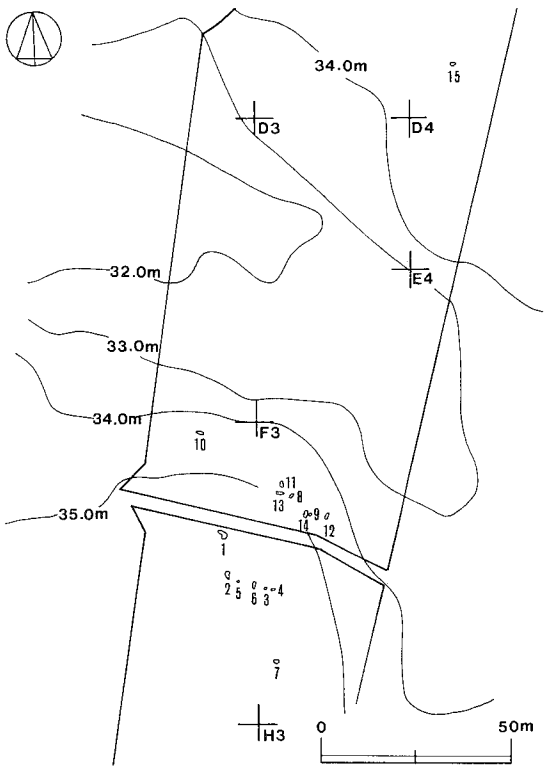
周溝は時期的には諸磯式期まで一部残存するが全体的には壁柱穴とともに消失する傾向にある」と指摘している。笹森氏も「住居跡形態をみると縄文時代前期の小屋組において，前期初頭以来の片流れの形態から，次第に水平小屋組へ変容する過程が推察できる」としている。当遺跡の2軒の住居跡は，いずれも周溝，壁柱穴を有さず，第22号住居跡の柱穴も一方に偏り不明瞭であるのは，その変容する住居跡の一連の中で形成されたものとも考えられる。

遺物は，第22・23号住居跡から出土した土器片は細片で接合するものもなく器形を窺えるものはなかった。従って，住居跡について詳細な時期を述べるのは不可能であるが，土器の文様構成をみると2軒の住居跡からは類似した土器片が出土しており，縄文を施したもの，撚糸文を施したもの，棒状施文具により沈線文が施されたものの3つに細分される。当該期では新しい段階とされるコンパス文，木葉文，及び肋骨文の施されている土器が見られないことから，黒浜式土器でも古い段階の土器に比定されるものと思われる。

〔3〕 炉穴について

当遺跡から検出された炉穴は15基で，早期後半の野島式期のものと考えられる。炉穴は当遺跡の中央部に入り込んだ小支谷を挟むように張り出している北と南の両台地の，標高35m前後の緩やかな傾斜地に位置している。第8・9・11・12・13・14号炉穴はF3区に，第2～6号炉穴はG2・G3区の区界付近にそれぞれまとまっており，第7号炉穴はG3区，第1・10号炉穴はF2区，第15号炉穴は単独で離れて存在している。

炉穴の平面形は，他の遺跡での検出例と同じように楕円形が多い。壁高は，炉床のみの第3・7号炉穴を除いて，10～60cmである。規模は，第5号炉穴が長径1m未満と最も小さく，第4・8・11・12・13号炉穴が長径1～2m未満と中形で数が多く，第9・10・14・15号炉穴が長径2～3m未満でやや大きくなり，第1・2・6号炉穴は長径3m以上と大きい。炉の数は，第1号炉穴に3基，第6



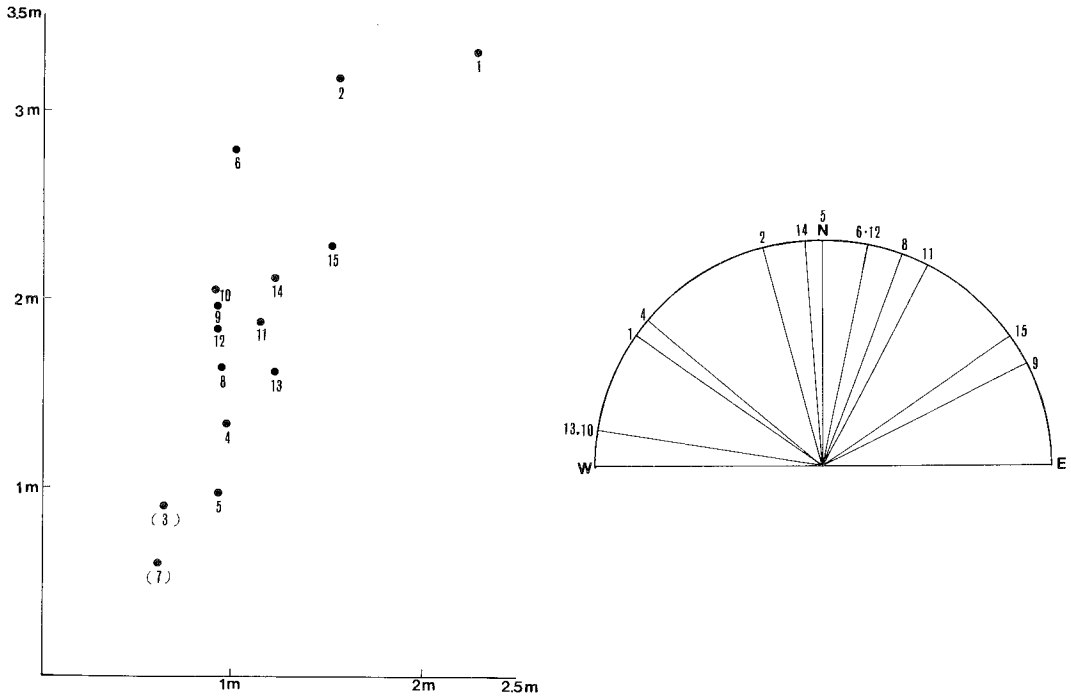
第155図　小田林遺跡炉穴配置図

・15号炉穴に２基設けられており，他はいずれも１基である。炉の位置は，第１・６号炉穴のF2が底面中央に設けられているほかは壁際に設けられており，炉床から足場にかけてやや傾斜している。第15号炉穴では炉が北東壁際と南東壁際に各１基ずつ設けられていたのは南東壁際の炉が使用に耐えられなくなったため，さらに，底面を掘り炉の位置を変えたものとも考えられる。しかし，第１・６号炉穴については，新旧関係を明確にすることはできなかった。足場は炉床よりもやや低くなっており，１人が座れるほどの広さである。また，足場は長径方向の一端に片寄った炉床の反対側に位置している。南側の台地斜面では足場を北・北東・北西方向，北側の台地斜面では南方向，つまり小支谷側に構築しているものが第１(F1)・２・４・６(F1)・８・10・11・14・15(F1)である。これに対し南側台地斜面では南方向，北側台地斜面では北方向に，つまり，台地側に足場を構築しているものは，第１(F3)・５・９・12・13・15(F2)である。奥山下根，奥山Ｃ遺跡では，早期後半の条痕文土器群を伴う炉穴が台地突端部の傾斜地に分布しており，それらの炉床は長径方向の一端に片寄っていることが多く，奥山下根遺跡の炉穴の長径方向は多くが等高線に直交している。しかし，当遺跡では15基のうち等高線に直交しているのは４基ほどであり，すべてが地形や気象条件を考慮し，長径方向等が谷または等高線に直交する方向に向けられて構築されていたとは考えにくく，炉穴が占地する局部的な部分における方向で，設置していた炉穴の方が多かったと考えられる。また，南三島遺跡では炉穴が82基検出され，すべて構築時期は野島式期と考えられている。南三島遺跡の炉穴は北側の谷と南側の沖積地に臨む台地上の平坦部に形成されており，約60％が北部に集中している。表10は南三島遺跡の炉穴の形態を示したものである。平面形は円形14基，楕円形53基，不定形15基で，楕円形が最も多い。当遺跡の平面形は円形１基，楕円形11基，不定形１基で楕円形が多い。規模は１m未満10基，１～２m未満49基，２m以上23基，１～２mのものが約６割を占めている。当遺跡は１m未満１基，１～２m未満６基，２m以上のものが約５割近くを占めている。炉の数については１基のみを有する単独の炉穴が63基，２基のものが12基，３基のものが７基で，当遺跡は，単独の炉穴が12基，２基のものが２基，３基のものが１基と単独が圧倒的に多い。尚，第３・７号炉穴は炉床のみで

表10　南三島遺跡（第1・2・3・4・5・6区）炉穴形態別集計表

平面規模(長径) ＼ 平面形 ／ 炉跡の数(基)		円形	楕円形	不定形	計	
1 m 未 満	1	2	6	2	10	10
	2					
	3					
1 m 以 上 ～ 2 m 未 満	1	10	28	5	43	49
	2	1	4		5	
	3		1		1	
2 m 以 上	1	1	6	3	10	23
	2		5	2	7	
	3		3	3	6	
計		14	53	15	82	

あったため，平面形，規模については除いた。一般に炉穴は時期決定される遺物を伴っていないことが多いのにもかかわらず，南三島遺跡では細片を含めて半数近く遺物を伴っている。また，南三島遺跡では82基とかなり多数の炉穴が検出されており，野島式土器も多量に出土しているが当遺跡と同様当該期の住居跡は見つかっていないのは共通している。



第156図　小田林遺跡炉穴の規模分類・長径方向

〔4〕 土坑について

当遺跡において検出された土坑は85基である。これらの土坑は様々な形態を示し，時期不明のものや後世の撹乱と思われるものも多数含まれている。縄文時代の土坑のうち出土土器から時期推定が可能な土坑は，第6・16・84号土坑で，それぞれ離れて存在している。なお，縄文時代前期の住居跡が検出されたL1区には，同期に対比される土坑も数基あると思われるが，不確実なため除外した。標高35m前後の台地のやや内部に位置している第6・16・84号の3基の土坑について概略する。

第6号土坑の平面形は長径2m，短径1.9mのほぼ円形で，断面形はフラスコ状を呈している。出土遺物は加曽利E1式期に比定される土器片が覆土下層から出土し，底面の3地点からも1個体に接合できた石棒が出土している。第16号土坑の平面形は長径1.4m，短径1.1mの楕円形で，阿玉

台式期に比定される胴部下半を欠損した深鉢形土器が底面から横位の状態で出土している。第84号土坑の平面形は長径1.2m，短径１mの楕円形で，堀之内式期に比定される深鉢形土器が潰れた状態で底面から出土している。

まず，第６号土坑は断面がフラスコ状を呈する所謂袋状土坑である。袋状土坑は，縄文時代前期中葉頃から出現し，中期中葉の阿玉台式期末から加曽利E1式期に盛行するが，以後は衰えつつ後期前葉にまで及んでいると考えられている。当遺跡の袋状土坑は，盛行期に構築されたものと考えられる。茨城県内では，竜ケ崎市赤松遺跡，旧桜村下広岡遺跡，旧谷田部町境松遺跡，石岡市東大橋原遺跡，日立市諏訪遺跡等で盛行期の袋状土坑が検出されている。千葉県船橋市高根木戸遺跡の袋状土坑からは人骨が検出されており，墓壙の推定も可能であると考えられる。また，当該期における石棒の出土例は住居跡内から出土する事例が多数を占め，住居跡以外の遺構からは少なく，屋外の出土事例は，配石，列石遺構からであり，土坑からはほとんど類例がない。石棒の用途を考える上では，山本暉久[4]氏は論考の中で，「石棒の出土状況が大きな意味をもつ」と述べている。そこで本跡の埋土の状況や石棒の出土状況をみると，埋土は自然堆積であったが，底面直上の３か所から１個体に接合できた石棒が，投棄されたのか置かれたのか判断できなかったが，石棒が簡単に破粋するとは考えられず，破粋した後に埋めたものと考えられる。尚，周辺からは，当該期の住居跡を含むいずれの遺構も検出されておらず，本跡が単独で検出された状況のため，他の遺構とのかかわり合いにおいても検討することはできなかった。従って，本跡の性格は不明であるが，石棒が縄文人の信仰の対象としていたもので祭祀用具とするならば，本跡は多少なりとも信仰とかかわりをもっていたものと考えられる。

また，第16・84号土坑のように長径１～２m前後で，深さ0.3～１m未満の土坑では，一般的に墓壙，貯蔵穴，作業場などがあげられている。第16・84号土坑においては，深鉢形土器が出土していることから埋甕遺構とも考えられる。そこで，単独屋外埋甕が28基検出された南三島遺跡の埋設形態と遺存状態をみると，正位，斜位がほとんどで横位は１例のみであり，土器内には締まった覆土があり，完形，略完形は少なく，器形を窺えるほどの土器としては不完全なものが多いとされている。このようなことから，２基からの出土土器を見ると，横位で潰れたため土器内に土が含まれておらず，完形または略完形であることから埋設遺構の可能性は薄く，埋土の状況から自然的堆積状況を示しており，墓壙の可能性も低いと思われる。

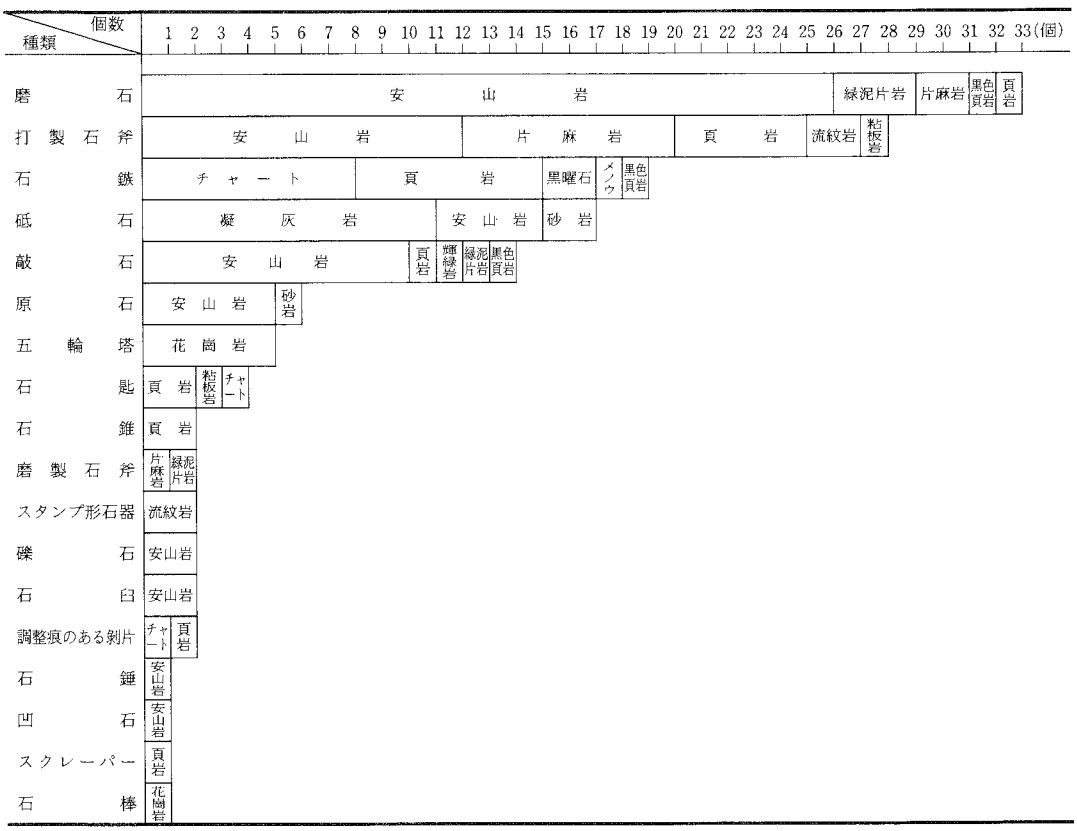
以上，第16・84号土坑について述べたが当遺跡及び周辺からは当該期の住居跡はいずれも検出されていないため，集落等との関連を明らかにすることはできなかった。従って，土坑の性格は不明である。

〔5〕 石器・石製品について

当遺跡から出土した石器・石製品は17種類で，総数142点である。（剝片，石棒等を除く）縄文時代の遺構の数に比べて比較的多い。これらは遺構に伴って出土したものは少なく，遺構への流れ込みや遺構外出土が多い。石器の出土数が多い理由として，出土土器からも判断できるように同調査区は長い間に渡って，生活の場であったためとも考えられるし，集落の縁辺部に位置していることも考えられる。石器の種類と石質については，表11に示したとおりで，石鏃19点，打製石斧28点，磨石33点，敲石14点などが主なもので，磨製石斧２点，石錘１点，石匙４点，礫石２点，石錐２点と少なくなる。これらをみると，石鏃・打製石斧・磨石・敲石の４種類で全体の７割を占めている。これらの出土した石器使用の頻度の高低によって当遺跡における生産活動の傾向を判断することはできないが，狩猟用具と考えられる石鏃や，採集用具としての打製石斧・磨石・敲石，漁労活動を示すと考えられる石錘が出土していることは，当時の生業のあり方をある程度反映しているのではないかと考えられる。

第６号土坑からの石棒が１点出土したが，これは縄文時代中期中葉の所産と見られる。この石

表11　出土の石器と石質



棒は，無頭で大型のものであるが，石棒だけでは遺跡の性格や祭祀に係わるものかどうかは不明である。

石器の石質を見ると多種にわたっており，その中で安山岩が最も多く，次いで頁岩，凝灰岩の順である。また，石器の用途に応じ石材を選択していることがわかる。石鏃は，チャートや黒曜石のように薄く剝離しやすい石材を，磨石，敲石には，目の粗い岩石を利用している。打製石斧は安山岩で，比較的身近な材料を使用している。

また，当時の人々は石器の原石を求めて河原や露頭を歩いて手に入れたと考えられる。中でも河原石等は，流紋岩，砂岩，チャート，花崗岩を基盤にして玢岩，安山岩，石英斑岩，頁岩を産出し，東方を流れる鬼怒川水系が供給地であったと考えられる。また，黒曜石のように近くに産地がないものは，はるばる交易を通してもたらされたものと考えられる。

2　古墳時代について

当遺跡の古墳時代の遺構は，出土土器から，古墳時代前期に属すると考えられる竪穴住居跡36軒，竪穴遺構2軒が検出された。そこで，住居跡から出土した土器を器種ごとに分類し，さらに時期区分を行い，その後それらを基にして集落の変遷を若干述べてみたい。尚，第3節1の〔2〕で述べているように，第10・12・15・29・37号住居跡，第38・41号竪穴遺構については，破片で出土量も少なく，器種等の分類は困難であるため省略する。

〔1〕 古墳時代前期の土師器について

対象とする土器は竪穴住居跡出土土器である。器種としては，壺形土器，小型壺形土器，甕形土器，小型甕形土器，台付甕形土器，甑形土器，埦形土器，高坏形土器，器台形土器，坩形土器，坏形土器，及び小型土器などがある。器種ごとに主に形態的特徴により分類する。（第157・158・159図）なお，36－1とあるのは，第36号住居跡から出土した遺物の番号1を表し，土器観察表及び図版の番号と同じである。

壺形土器

完形品は9－1，26－1，30－8の3点，ほぼ完形品は36－1で他はすべて破損品である。口縁部の形態差により3類に分類した。

A　類　口縁部が単口縁の壺形土器で，口縁の器形によりAⅠ，AIIの2種に分かれる。

AⅠ類　口縁部が頸部からゆるやかに外反する形態である。27－7，30－8は胴部が球形で，胴部中位に最大径を有し，26－1は胴部中位からやや下位に最大径をもち，いずれも胴部にはハケ目整形後ナデが施されている。

AII類　口縁部が頸部から「く」の字状に強く屈曲し，外傾する形態である。7－5は胴部がやや扁平であるが，底部は欠損のため明らかでない。9－1はやや小さく，胴部中位からやや下位に最大径をもち，底部がやや突出している。胴部にはハケ目整形後ナデが施されている。

B　類　口縁部が有段口縁の壺形土器

完形の例がないので器形は明確でない。4－2は口縁部が頸部から強く外反し，口縁部中位に明確な段を有し，さらに外方へ大きく開く。28－4は口縁部の中位以下を欠損するが，明確に段をもち，外上方へ大きく外反して開く。36－1は口縁部の中位以上が欠損して明確でないが，中位に段を有していたものと思われる。いずれも外面にヘラ磨きが施されている。

C　類　口縁部が複合口縁の壺形土器

B類と同様に胴部が欠損して口縁部のみが出土しており，器形は明確でない。口縁部の形態から3類に分類される。

CI類　口縁部は頸部からほぼ垂直に立ち上がり，中位で外反し，内面に稜を有する30－9がある。さらに27－4・6は口縁部の内面に凸帯，外面に棒状浮文を貼付している。

CII類　頸部から単純に外反する形態で，17－2・26－2がある。

CIII類　頸部からゆるやかに外反し，中位からやや内彎気味に立ち上がる。5－4がある。

小型壺形土器

A　類　いずれも単口縁で，平底である。7－3は胴部中位に最大径を有し，口縁部はゆるやかに外反する。11－3は口縁部が「く」の字状に外反する。いずれも完形品で，整形技法は外面にハケ目を残す。

甕形土器

甕形土器は出土した個体数の最も多かった器種であるが，多くの破損品も出土している。主に口縁部の形態差から3類に分類した。

A　類　口縁部が単口縁の甕形土器で，口縁部の器形からAI・AII・AIII・AIVの4種に分かれる。

AI類　口縁部が頸部からゆるやかに外反する形態である。26－3・17－3・35－6・4－3は胴部が球形で，中位に最大径を有している。26－3は外面全体にハケ目整形が施され，17－3の胴部下位にはハケ目整形後ヘラナデが，35－6は部分的にハケ目が残っている。4－3は口縁部から胴部に縦位のヘラ磨きが施され，胴部外面のハケ目が消滅する過程には時間差があり，当遺跡では胴部外面がハケ目整形後ヘラナデや削り状の整形によってハケ目が消される例が優勢である。

AII類　口縁部が頸部から「く」の字状に屈曲し外反する形態である。胴部は球形で，全体にハケ目整形後ヘラナデにより整形される。7－6・25－4・30－17などがこれに当る。

AIII類　口縁部が頸部から内彎して立ち上がる形態である。口縁内面の下位に稜を有し，口縁

部上位に最大径をもつものである。7－8は底部を欠損し，35－13の底部は平底である。

AIV類　AIII類に比べて口縁部が頸部から直立気味に立ち上がる形態である。胴部は球形で，中位に最大径を有する。5－8は底部を欠損し，胴部外面はハケ目整形後ヘラナデによって消されている。27－9は完形で，口縁内面に横位のハケ目整形，胴部外面に斜位のハケ目整形がそれぞれ施されている。

B　類　口縁部が複合口縁の甕形土器

27－10は，口縁部が頸部から「く」の字状に外反し，胴部は球形である。口縁部内・外面にハケ目整形，胴部に縦位のヘラ磨きが施されている。

C　類　口縁部が受口状を呈する甕形土器

胴部の中位に最大径を有し，口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し，口縁部外面に稜を有している。34－5はハケ目が粗く，口縁端部は短かく外反する。34－12A・Bはハケ目が部分的に残り口縁部の中位からつまみあげられたように直立する。

小型甕形土器

出土数4点のうち3点が完形品である。甕形土器と同様に口縁部の形態からA・C・Dの3類に分類した。

A　類　口縁部が単口縁のもので，AII・AIVの2種に分かれる。

AII類　口縁部が頸部から「く」の字状に屈曲し外反する形態である。27－8は器形がややゆがんでいるが平底で，口縁部内面の下位に稜を有する。胴部外面はヘラナデが施されている。

AIV類　口縁部が頸部から直立する形態である。5－7は口縁部は短く直立して立ち上がり，胴部はやや扁平な球形である。

C　類　口縁部が受口状を呈する甕形土器

1－5は胴部中位以下を欠損している。口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し，中位からつまみあげられるように短く上方に立ち上がり，口縁端部で外反する。外面にハケ目整形がわずかに残る。

D　類　口縁部に刻み目のある甕形土器

小型の完形品で，9－2である。口縁部はゆるやかに外反し，口縁端部に刻み目がつけられている。胴部は中位に最大径をもち，やや長胴化し，底部中央がわずかに凹む。

台付甕形土器

口縁部や胴部下半以下を欠失したり，台部のみが存在するため，台付甕と明確に判断できたものを，口縁部の形態差から2類に分類した。

A　類　口縁部は単口縁のもので，AI・AIIの2種に分かれる。

AI類　口縁部は頸部からゆるやかに外反する形態である。これらは，細部の形態差はあるも

のの，台部は「ハ」の字状に広がり，胴部中位に最大径をもつ特徴が共通している。26－4・35－14の外面整形は斜位のハケ目が全体に，30－24・25はハケ目整形後ナデ消されている。

AII類　口縁部は頸部から強く屈曲し外反する形態である。36－7は胴部のやや上位に最大径を有し張りがある。外面はハケ目整形後ナデ消されている。台部は欠損している。34－15は胴部中位に最大径を有するが，胴部中位から台部にかけて急につぼまり，器形はいちじく状を呈する。ハケ目整形がナデ消され頸部にわずかに残る。34－14は口縁部外面の中位に稜を有し，胴部の下位はハケ目整形がナデ消されている。台部は欠損している。

B　類　口縁部がS字状を呈する台付甕形土器

完形品はなく，口縁部を中心に破片で出土している。5－12は胴部上位が強く張るものと思われる。ハケ目が粗い。16－6はハケ目を窺うことはできない。いずれも口縁部は外方へ大きく伸びる。36－10は台部で，端部を折り返し，28－13は外面のハケ目を指頭で山形状に磨り消している。36－9の内面は指頭による押圧が窺える。尚，住居跡出土ではないが，第81号土坑（81－1）から出土した台付甕形土器は，胴部上位の張りがやや弱いもので，肩部に横ハケ目が認められる。胴部外面のハケ目整形は，器肉を薄くして熱効率を高めようとする整形と，より装飾的な意味をもつものと考えられている。

甑形土器

完形品を含めて3点と出土数は少ない。口縁部の形態から2類に分類した。

A　類　口縁部が単口縁の形態をもつものである。体部は小さい底部から内彎しつつ立ち上がって口縁部に至る。最大径は口縁にあり，すべて焼成前に単孔を穿つ。28－14・34－17がこれに当り，体部にハケ目整形が残る。

B　類　口縁部が複合口縁の形態をもつものである。34－16は体部中位以下を欠損しているため，器形を窺うことはできないが，体部中位から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる状況から長胴化すると思われる。体部外面にハケ目整形が残る。尚，第34号住居跡において短胴と長胴の甑が共伴することから，甑の深さによる使い分けが考えられる。

埦形土器

比較的器形が明確に残っているものが多い。口縁部の形態から2類に分類した。

A　類　口縁部が単口縁で内彎する形態である。1－2・3は体部が平底の底部からゆるやかに内彎し，体部にハケ目整形が残る。16－2は口縁部外面に軽い稜をもち，底部外面の中央が凹む。34－4は体部外面にヘラ磨きが施されている。7－2はやや突出する平底の底部から体部は内彎する。

B　類　口縁部が単口縁で外反する形態である。13－1・27－3は底部の中央が凹む。体部外面にハケ目整形が残る。28－3は体部がほぼ球形で，口縁部は短く外反する。

高坏形土器

全体の器形を窺えるものは4点である。他は坏部か脚部を欠損しているため，坏部の形態から4類に分類した。

A　類　坏部下端に稜をもち，体部が坏底部からゆるやかに内彎する形態である。7－1・31－1は脚部が「ハ」の字状に開き，坏部より小型である。内・外面にハケ目整形が残る。40－2は脚部を欠損しているが，前2者に対して坏部は小型であるが，内・外面は朱彩された後磨きが施されている。

B　類　坏部下端に稜をもち，体部が坏底部から直線的に外傾する形態である。5－1・30－3が該当し，2点とも脚部を欠損しているが，坏部より大型化していると思われる。内・外面にハケ目整形が残る。

C　類　坏部下端に稜をもたない形態である。3－1・30－2で，体部は半球形状で，外面にハケ目整形が残る。

D　類　体部が坏部下位から外反し，下位に稜をもつ形態である。35－1の1点で，内・外面に朱彩が施されている。外面の稜の上位に横位の平行沈線が3本巡る。坏部下端以下を欠損するため全体の形状は不明である。丁寧なつくりである。

器台形土器

出土数は11点で，4点が完形品である。器受部の形態から5類に分類する。

A　類　皿状の器受部が外反し立ち上がる形態である。31－2の器受部は下端に稜をもつ。脚部を欠損し，貫通孔は窺えない。

B　類　皿状の器受部が内彎し立ち上がる形態である。21－2は口縁端部が面をもつシャープなつくりで，脚部は中位から裾部にかけて内彎し，外面にヘラ磨きが施されている。33－4の脚部は，「ハ」の字状に開き，外面にヘラ磨きが施される。6－1・28－1は前2者より器受部が浅い。脚部は欠損して不明であるが，本類に含まれると思われる。

C　類　皿状の器受部が内彎し，口縁端部で直立する形態である。36－2・3はB類に比べて器受部が浅く，下端に軽い稜を有する。脚部はヘラ磨きが施されている。

D　類　断面形がX字形状を呈する形態である。中央孔はすべて貫通し，内・外面にハケ目整形が施される。33－3の1点だけ出土した。

E　類　装飾器台と称される土器である。27－1の1点が出土した。器受部の底部に装飾用の凸帯を有し，体部は外反して立ち上がる。器受部中位に4孔，下位に4孔の楕円形の窓が，底部中央に1孔が穿たれる。脚部は屈曲せずゆるやかに広がり，中位に3孔，下位に3孔が穿たれる。内・外面にヘラ磨きが施される。

坩形土器

口縁部の形態から3類に分類した。

A　類　体部が短く，口縁部が高くなる形態である。いわゆる小型丸底土器と称されるもので，最大径を口縁部に有し，体部は浅く底部は平底であるが中央がわずかに凹む。33－2は外面にハケ目整形，34－3は内・外面丁寧なヘラ磨きが施されている。

B　類　体部から口縁部が直立気味に立ち上がる形態である。39－2は口縁端部でわずかに外反する。体部はやや扁平な球形で，外面にハケ目整形が施される。底部は欠損している。

C　類　A類より口縁部がやや直立気味に立ち上がる形態である。24－3は体部が欠損していたため器形は不明であるが，口縁部に最大径を有すると思われる。口縁部外面はハケ目整形が施される。

坏形土器

埦形土器より浅いものを坏とした。完形品で1点出土している。

A　類　体部が平底の底部から内彎して立ち上がるものである。34－1がこれに当り，体部外面はヘラナデ後，横位のヘラ磨きが施されている。

小型土器

手捏土器，ミニチュア土器などと称される小型品を一括したものである。下記の器種の模造したものと考えられ，2類に分類した。小型壺，小型甕の中にはここで取り扱うのも可能と思われるものもある。

A　類　埦形土器を模造したものを，器形から2種に分ける。

AI類　体部は平底の底部から内彎しながら立ち上がり，体部外面にはハケ目整形が施されている。16－1がある。

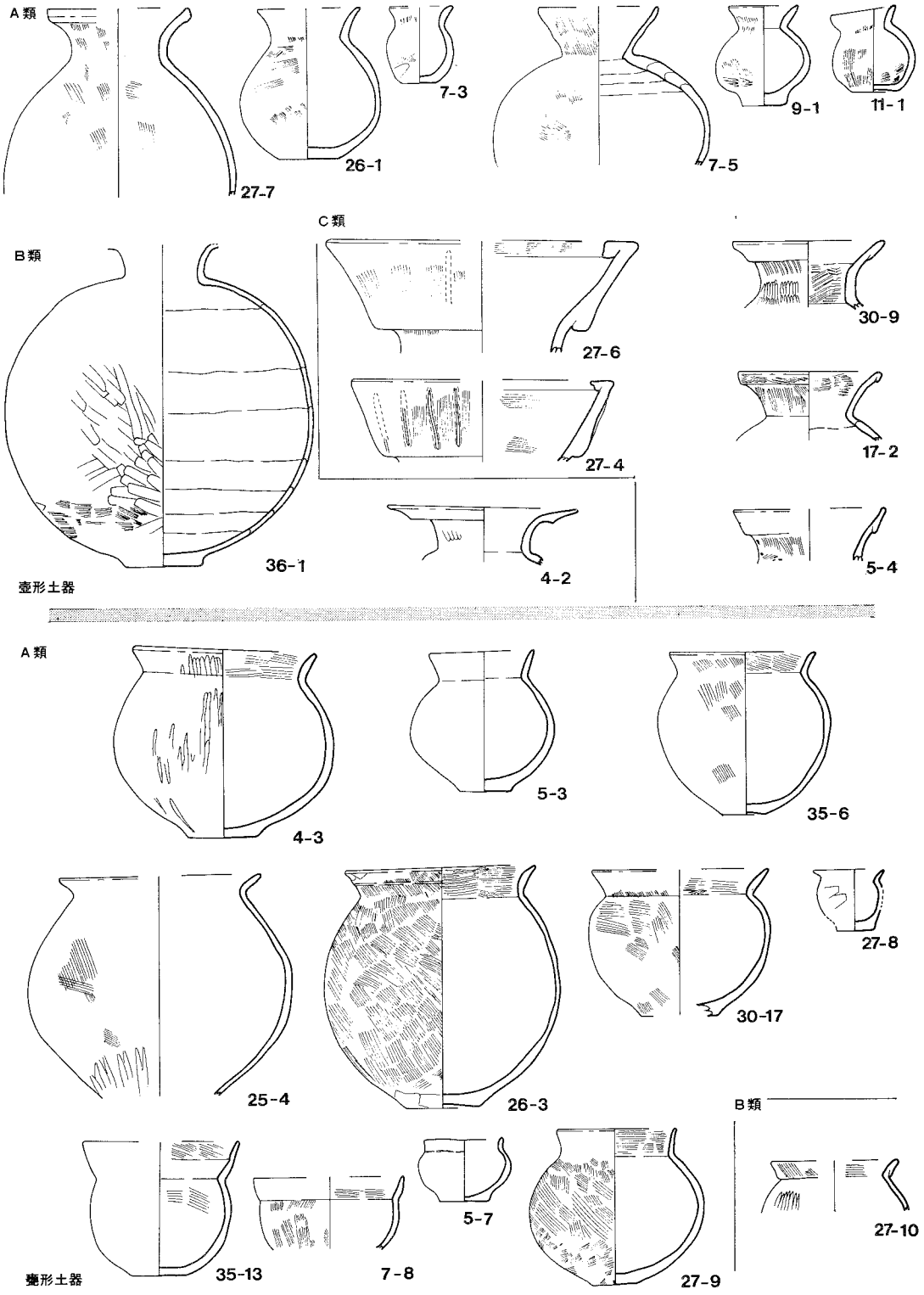
AII類　体部は平底の底部から外傾して立ち上がる。口縁部は薄くなる。30－1がある。

B　類　高坏形土器を模造したものである。坏部外面に指頭痕が残り，脚部には3孔が穿たれている。40－1がある。

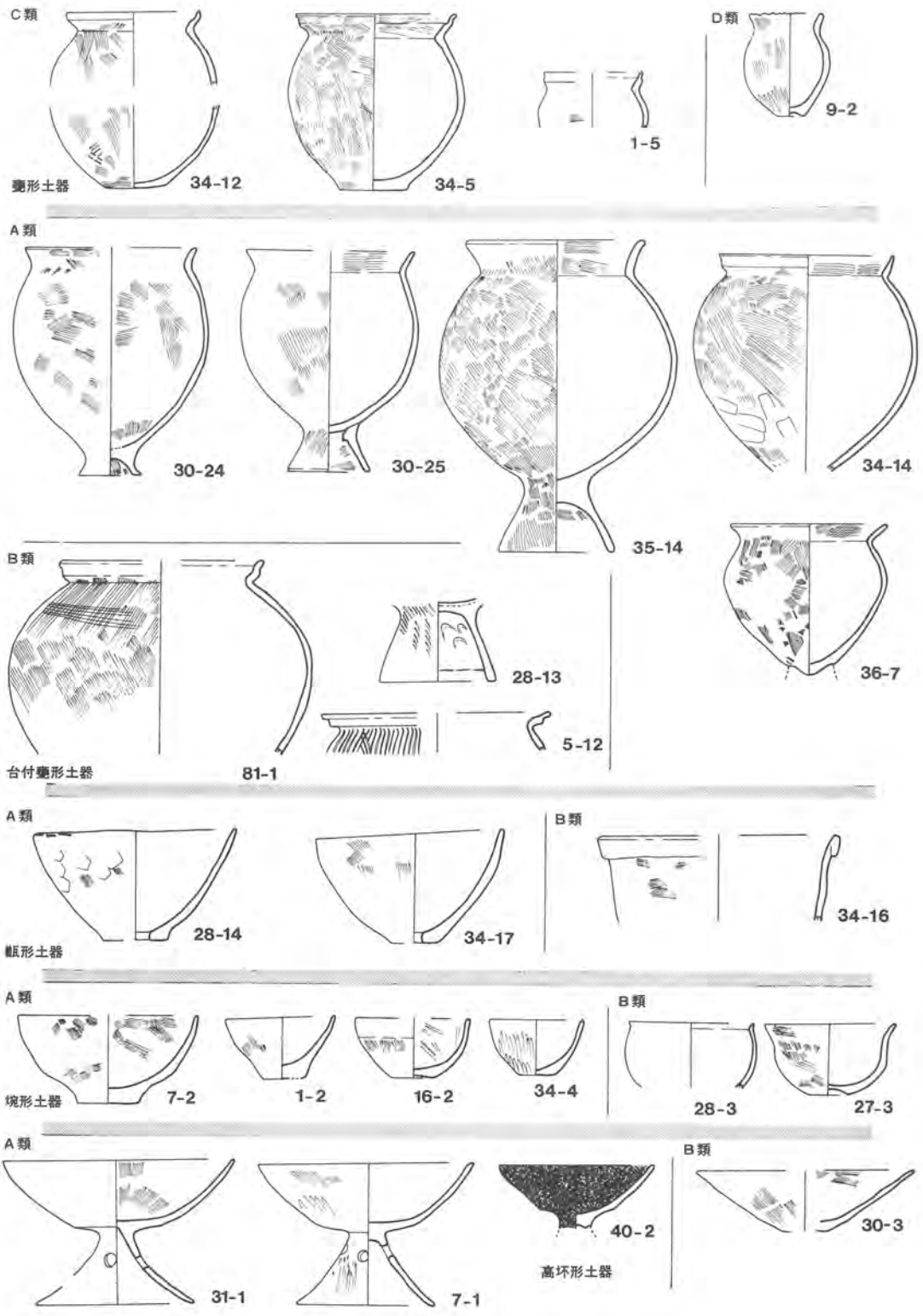
以上，出来るかぎり当遺跡の住居跡出土土器のすべてを網羅するように検討し分類を試みたが，小破片のため，住居跡内出土土器にもかかわらず全容が把握できない土器もあり，割愛せざるを得なかったものもある。

以上の分類を基に，各器種ごとの様相について概略してみると，壺形土器は全体的に少なく，口縁部は比較的多様な状況を示している。また，B類のように，きわめて前時代的な様相が強く感じられるのも存在する。

甕形土器の底部は平底で，器面には全体にハケ目整形だけのものは少なく，ハケ目整形後ヘラナデ調整されているものが多い。



第157図　小田林遺跡古墳時代前期土器集成(1)



第158図　小田林遺跡古墳時代前期土器集成(2)

第159図　小田林遺跡古墳時代前期土器集成(3)

台付甕形土器は台部が少ないことから，量的に少ないと思われる。整形技法も甕形土器と同様に，ハケ目整形とヘラナデ調整のあるものがある。特徴的なのは，台部の整形技法で，内・外面にハケ目整形を施しているもの，台部の端部を折り返し，さらに，そのハケ目を指頭ですり消しているものがある。また，口縁部が「S」字状を呈するものも数は少ないが見られる。

甑形土器は3点と少なく，単口縁と複合口縁が見られ，当遺跡では新しい時期に位置づけられる住居跡からの出土である。

埦形土器は底部から内彎するもの，口縁部が外反するものがほぼ同数みられ，整形技法もハケ目整形後ヘラナデなどが認められる。

高坏形土器は脚部が「ハ」の字状を呈するものと，裾部が広がるものがある。比較的新しい時期に含まれる様相を呈するA・B・C類から，前時代的な様相を呈するD類まで認められる。

器台形土器は小型器台と大型器台がある。小型器台は脚部の中位以下がやや内彎して開くものがあり，東海地方西部にみられるものがある。器受部に装飾用の窓を穿った大型器台もある。

坩形土器は体部が短く，口縁部が高く立ち上がるもので，古い様相をもっている。

小型壺形土器，小型甕形土器，小型土器はいずれも数が少なく，壺，甕，高坏等を模造していると思われる。

さらに，分類したものを集計したものが表12である。全体的に出土量を比較してみると高坏，器台が多く，坩形土器が少ないこと，朱彩されたものがわずかにみられることがあげられる。以上の点から当遺跡の出土土器群が五領期の中でどこに位置付けられるかについてみてみたいと思う。

表12　土器分類集計表

器種／遺構番号	土師器																																								
	壺						小型壺		甕						小型甕				台付甕			甑		埦		高坏				器台					坩			坏	小型土器		
	A		B	C			A		A				B	C	A		C	D	A		B	A	B	A	B	A	B	C	D	A	B	C	D	E	A	B	C	A	A		B
	I	II		I	II	III	I	II	I	II	III	IV			II	IV			I	II																			I	II	
SI-1									1	1							1							3							(1)										
2									2															1																	
3																													1												
4			1						1																																
5						2			2			1	1			1					1			1			1														
6												1																			1										
7		1					1			2	1													1	1	1															
8																													1												
9		1																1																							
11								1		1																															
13																									1																
14									1																																
16	1								1												1			1															1		
17					1				2																																
18																													1												
20												1																	1												
21																									2				1		1										
24																										(2)											1				
25									3	1									(2)					1																	
26	1				1				1										1																						
27	1		2			1						1	1		1				(1)						1		(1)							1							
28			1						4	3									1	(1)		1			1						1										
30	1		1	1					4	4									2 (2)					1			1 (2)		1 (1)											1	
31																										1				1											
32				1					1	1																															
33									1																						1		1		1						
34									3	2				3						2		1	1	1		(1)									1			1			
35									1	5	1								1 (2)					1				1			(1)	1									
36			1	1															(2)	1											1	1									
39									2	1																										1					
40																										1															1

（　）台部・脚部のみ

そこで，当該期の良好な資料を得た善長寺遺跡，栃木県の伯仲遺跡，烏森遺跡(5)，谷近台遺跡，赤羽根遺跡をみてみると，伯仲遺跡，烏森遺跡，谷近台遺跡はいずれも小型器台が存在するが，小型丸底土器（坩）を欠くとされ，小型丸底土器波及以前の土器群と理解されている。それぞれの遺跡から出土した甕に特徴がある。烏森遺跡では，口唇部に刻み目を施す甕・台付甕があり，伯仲遺跡では，口縁部から胴部にかけて，縄文を施す甕，胴部にハケ目を残すナデあるいは，削りが施されているのが特徴である。また，S字状口縁の台付甕が認められている。谷近台遺跡では，肩部に横位のハケ目を施すものを含めたS字状台付甕が甕の主体を占めている。これらの3遺跡は栃木県内では古墳時代前期前半に位置付けされている。善長寺遺跡では，台付甕（P11）の胴部が下膨れを呈するものが出土し古い様相を示すとされ，古墳時代前期前半に位置付けられている。さらに，赤羽根遺跡の出土土器は，壺形土器の頸部に豆粒状浮文を貼布し，口唇部に面を有するもので，古い様相を呈しているとされている。その中で，器面の整形もハケ目整形からへ

ラ削り整形の割合いが増加していることが新しい様相とされている。また，小型丸底土器（坩）のセットが成立することもあって，赤羽根遺跡は，前述の栃木県内の3遺跡に継続するものであり，古墳時代前期の後半に位置付けられている。

古墳時代前期でも新しいとされる埼玉県の後張遺跡の土器の特徴をみてみると，小型高坏は，脚部が「ハ」の字状に開くものを含みながらも裾部が内彎気味に開き柱状部をもつ。坩は，口縁部が大きく開き，体部の浅いものが出現する小型の坩と思われるもので，薄手の丁寧な作りのものである。さらに，後張遺跡は布留式土器の影響を窺わせるとされている。五領期を3期に分けた滝沢亮[6]氏は，「S字甕は在地の生産のみで，さらに，口縁部がシャープさを欠き若干たったようになる退化品が中心となる。器台は次第に減少してゆき，若干残存するのみになり住居跡のセットで占める割合は少なくなる。」としている。また，S字甕・器台の消滅が考えられるともしている。木村直[7]氏は，五領式土器を2つに分け，「五領期の新段階は，壺形土器の器種組成での減少傾向，坩形土器のヘラ磨き省略とハケ目・ヘラ削り痕を残すものの増加，甕のハケ目整形の省略とヘラナデ，ヘラ削りの頻度増加，器台形土器が基本的に存在しない」ことをあげている。

以上のことをもとに，当遺跡の五領期の土器をみると，甕・台付甕の口縁部に刻み目が認められないこと，小型丸底土器と小型器台が存在すること，ハケ目整形よりヘラナデ・ヘラ削りが優勢であること，高坏の脚が「ハ」の字状を呈していること，器種も多種とバラエティーにとんでおり，減少の傾向がみられないことなどを考え合わせてみると，当遺跡は，器面の整形がハケ目整形でヘラナデ・ヘラ削りが主たる段階，小型丸底土器と器台のセットが明らかに存在する段階，S字状の台付甕が主体的に存在する段階，五領期の安定した器種を豊富に含む段階であると考える。以上のことから，五領期をⅠ～Ⅲ期に分けて考えてみると，当遺跡は，五領Ⅱ期の範疇にあると考えられる。しかし，五領Ⅱ期の中には壺形土器の口縁部棒状浮文は，古い要素であり，高坏の坏部が半球のC類，下端に稜を持つA・B類もあることを考慮すると，新旧の時間差が認められる。そこで，五領Ⅱ期を古期・新期の二段階に細分してみた。ただ，古期・新期でも明瞭にわけられるわけではなく，新期の土器群の中に古い様相を呈す土器が共伴していることから，五領古～中期・五領中～新期のように，時間的な幅をもたせることにした。

(1) 五領古～中期

この時期に含めた土器群は，第2・3・4・5・7・9・11・13・16・17・18・21・26・27・30・32・35号住居跡から出土したもので，土器群の器種は，壺形土器，甕形土器，台付甕形土器，高坏形土器，埦形土器，器台形土器，坩形土器などで構成されるものである。

壺形土器は，口縁部片が多く良好な資料とはいえない。A類・B類・C類が認められ，器形の豊富さを物語っている。B類は27－4・6，30－12に認められる。口縁部棒状浮文は，この時期まで遺存し，以後消滅すると思われる。B類は善長寺遺跡の五領Ⅱ期に位置付けられる第39号住居

跡にも求められる。

甕形土器は，口縁部形態からA類・B類に大別される。前者は頸部から屈曲する角度，器肉の厚さ，口唇部の形状で4種に細分され，AI・AII類が多い。口縁部から胴部にかけての調整は，口縁部に明瞭なハケ目を残すもの，ハケ目の痕跡を留めるもの，丁寧に横ナデされるもの等多様である。また，胴部も口縁部と同様の様相がみられる。B類は第5・27号住居跡に2点あり，胴部にヘラ磨きが施されている。

台付甕形土器は，A類・B類で，後者はS字状を呈する台付甕である。AI類の口縁部はゆるく外反するものが多く認められる。特に，第26・27・30・35号住居跡に遺存の良いものが出土した。この時期を含めた住居跡から出土する台付甕は，古期・新期の特徴を具備すのものが共伴しており，当遺跡の様相を窺い知る資料にあたるかと考える。

埦形土器は，A類・B類が存在する。底部が平底で，口縁部にかけて内彎するものが多い。7－2は新期よりも大ぶりである。体部外面にハケ目整形が残っている。

高坏形土器は，A・B・C・D類が存在する。遺存の良いものが少なく，完形となったものはこの時期では第7号住居跡の1例に過ぎなかった。坏部下端の外面に軽い稜を有し，内彎気味に立ち上がる。坏部が内彎するものと外傾するものとに別れている。器面の調整はいずれも粗密の差はあるものの，ハケ目整形後ヘラ磨きが施されている。古い様相を示す35－1は坏部破片で，朱彩が施されている。

器台形土器は，B類・D類が存在する。高坏と同様遺存の良いものが少なく，ほぼ完形となったものは第21号住居跡の1例に過ぎなかった。欠山式タイプといわれるもので，脚部が内彎気味に開き，孔も脚部に7孔穿たれている。器台は小型丸底土器（坩）とセット関係にあるとされるが小田林遺跡では，この時期には第21号住居跡にセット関係が認められるだけである。第27号住居跡から出土した装飾器台と称されるE類は，善長寺，烏森，赤羽根遺跡にも類似するものを求めることができるが，この時期に存在すると思われる小型丸底土器を伴っていないことから，第27号住居跡は第21号住居跡より先行するとも考えられる。しかし，共伴する土器からはこれを説明できず，同時期にせざるを得ない。

坩形土器は，B類が破片で第21号住居跡から出土しているだけで，この時期に消滅しているものと思われる。以後，主体となるのはA・C類と思われる。

小型土器は，A類で，いずれも埦形土器の模造としたが，祭祀のあり方の一端を示すものと思われる。具体的には明らかにしえない。

各住居跡から検出した土器群について，共伴の可能性が強く，土器群の構成を知るうえで多くの資料を得られたのは，表12でも明らかのように第5・7・27・30・35号住居跡の5軒である。概して遺存の良いものが少なく，土器群の構成をみた場合資料に乏しい状況であるが，当時の様

相を知る手掛りになろうと思われる。

(2) 五領中～新期

この時期に含めた住居跡群は，第１・６・８・14・20・24・25・28・31・33・34・36・39・40号住居跡の14軒であり，器種は，壺形土器，甕形土器，台付甕形土器，甑形土器，埦形土器，高坏形土器，器台形土器，坩形土器，坏形土器などで構成され，個々の土器群は当該期の特徴をもつものばかりでなく，五領古期の特徴をもつものとの共伴が全般にわたって認められる。

壺形土器は，該期のものは少なく，Ｂ類の36－1は大型壺形土器であり，ほぼ完形に近い。胴部は球形で器面はハケ目整形後ヘラナデにより消され，下端にハケ目が残っている。36－4は，Ｃ類でもＡＩ類に類似している。Ａ類はこの時期より次第に消滅してゆくものと思われる。

甕形土器は，ＡＩ・AII・Ｃ類があり，口縁部の形状，胴部の形状等多様であり，明確に当該期の特徴を見出すことは難しい。概略的には，胴部の膨らみが球形から長胴化して膨らみを減じる傾向を感じる。胴部の調整もハケ目整形からヘラナデが多くみられるようである。Ｂ・Ｃ類は第34号住居跡からのみ出土しており，新しい様相と思われる。

台付甕形土器は，Ａ類・Ｂ類が共伴して出土している。34－15・36－7は胴部下端が台部近くまで絞られてやや長胴の器形が特徴であり，AII類の出現が認められる。しかし，胴部の整形は器面全体にハケ目整形が残っているもの，部分的にハケ目整形が残っているものが共伴している。28－13・36－9は口縁部がＳ字状の台付甕の台部で，埼玉県の雷電下遺跡の第25号住居跡からの台付甕と類似し，五領II期に位置付けられている。当遺跡において，Ｓ字状台付甕は出土量からみて，前段階を含めて主体的な存在ではなかったと思われる。

埦形土器は，Ａ類が存在する。体部のハケ目がヘラナデにより消されて，甕の整形技法の変化とよく対応する。平底が目立つ時期であるが，前段階と明瞭な差はないと思われる。

高坏形土器は，Ａ類・Ｄ類が存在し，坏部下端に稜を持つ。31－1・40－2及び稜を有さない半球形の坏部の20－1の３点は，いわゆる和泉式期的な高坏に先行する形態である。一般的に半形の方が古いと思われる。両者とも共伴する遺物が良好でないため，細かな変化については明らかでない。

器台形土器は，Ｅ類の装飾器台を除いて，Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ類が存在し，器受部に多様さが認められる。小型丸底土器（坩）が共伴する住居跡が前段階よりは増加しているのが特徴である。また，Ａ類は赤羽根遺跡，善長寺遺跡にも類似するものが存在する。

甑形土器は，Ａ類・Ｂ類が存在し，第34号住居跡ではＡ・Ｂ類が共伴している。底部が小さく口縁部が大きく開く鉢形で，体部にハケ目を残している。前段階古期では資料を欠いており明らかではない。

坩形土器は，Ａ・Ｂ・Ｃ類が存在しているが，Ａ類が主体と思われる。33－2は外面にハケ目整

形を施し，34－3は外面にハケ目を残さず，ヘラ磨きを施しているのが特徴である。39－2は球形の体部から口縁が高く立ち上がる前段階のものかと思われる。

坏形土器は，当遺跡で1点出土したのみである。第34号住居跡の遺物と共伴しており，この時期から出現してくるものと思われる。

小型土器は，高坏形土器の模造ではないかと思われる。烏森遺跡においても器台か高坏を模したものが出土しており，前段階でも存在していたと思われる。

〔2〕 遺構について

ここでは出土土器による時期区分に従って，五領古～中期，五領中～新期の2段階に区分して，各時期の住居跡の特徴についてふれてみたい。

(1) 五領古～中期

この時期に含めた住居跡群は，前述しているように第2・3・4・5・7・9・11・13・16・17・18・21・26・27・30・32・35号住居跡の17軒である。

住居跡群は，第35号住居跡が小谷津田の北側台地の南縁辺部に位置するほかは，南側の台地の平坦部から谷津に向う北側斜面部にまとまりをもって所在している。

住居跡の平面形は，隅丸長方形・隅丸方形・長方形等があるが，主体は隅丸長方形であり，類型化されていると思われる。

平面規模は，長軸の長さをみると，第3号住居跡の8.25mを最長として，第26号住居跡の3.74mが最も短い。長軸と短軸の差をみると，第5号住居跡では131cmで最も長方形状を呈し，第26号住居跡では6cmで正方形に近い形状を呈している。

平面規模の分布を，長軸の長さを基準としてみた場合，3m台2軒，4m台4軒，5m台3軒，6m台3軒，7m以上3軒，不明2軒であった。この結果から，住居跡の所在位置を見ると長軸6m以上の比較的大形の住居跡が，谷津田の縁部から南側に寄った台地の内陸部のG2区に集中する傾向がみられ，5m以下の小・中規模をもつ住居跡は，谷津田の縁辺部に多く，大形の住居跡をとり囲むように占地する傾向がみられる。

柱穴は，住居跡が土取りや削平により破壊されたり，一部が調査地域外にあることもあり，明確にすることはできないが，配置や規模から推定すると，大半の住居跡では4か所が普遍的なようである。

炉跡は，床面を浅く掘り込んだ地床炉で，2基検出された第5・27・30号住居跡以外では，1基が付設されている。炉跡の位置は，床面中央よりやや北・北東・北西の方向で，主柱穴を結んだ線より内側にあるものが大半を占めている。

貯蔵穴は，第３・７・９・21・26・27・30・35号住居跡の８軒で検出した。住居跡内の貯蔵穴は南壁や東コーナーに付設されたものもあるが，南東コーナーに付設されたものが大半を占めている。平面形は第35号住居跡の円筒形状を除いては楕円形であり，位置，形態とも類似性が認められる。第27号住居跡の貯蔵穴からは粘土塊が検出されている。

壁溝は，検出されなかった。壁柱穴は第３・21号住居跡から検出され，破損をまぬかれた北壁の一部と西壁から南壁にかけて比較的しっかりと掘り込まれている。間隔は不統一で，規模は径22～26cm，深さ20～26cmであった。第21号住居跡は第３号住居跡の南壁を利用して構築されていたため，南壁の壁柱穴は第３・21号住居跡のいずれに伴うかは判断できなかった。

住居跡の長軸方向は，第３・７・９号住居跡は北から西へほぼ18°で指向が共通である。第４・５・17・35号住居跡はＮ－57°－Ｅ～Ｎ－72°－Ｅを指向しているものの，他は北から西に偏るものと北から東に偏るものに分かれる。

(2)　五領中～新期

この時期に含めた住居跡群は，第１・６・８・14・20・24・25・28・31・33・34・36・39・40号住居跡の14軒である。

住居跡群は，小谷津田を挟むように，北側台地の縁辺部から内陸部にかけてと，南側台地の縁辺部から内陸部にかけて所在している。

住居跡の平面形は，隅丸方形が８軒と半数をこえ，他に隅丸長方形・長方形・方形が小数確認され，前段階とはやや差がみられる。第20・31号住居跡は土取りにより壁が確認できず全容を知ることができなかった。

平面規模は，第８号住居跡が最も大きく長軸7.62mである。第１号住居跡は長軸2.65mと当遺跡では最小規模の住居跡である。

柱穴は４か所が基本になるが，土取りや撹乱により柱穴の確認できなかったものもある。

炉跡は住居跡の一部を破壊された第20・33・36号住居跡以外は，床を掘り込んだ地床炉が検出された。炉跡の位置は住居跡の平面形態が類型化しているものの，その位置は一定せず，中央からやや北壁・東壁・西壁に寄って検出されている。

貯蔵穴は，第24・25・28・33・34・36号住居跡に認められた。検出できなかった住居跡は一部の調査や破壊されたためとも考えられる。位置は東コーナー・南東コーナーに付設されている。平面型は円形・楕円形・長方形とさまざまである。第34号住居跡の貯蔵穴の覆土下層から埦形土器が正位で出土している。

壁溝は検出されない。壁柱穴は，重機により撹乱を受けて残った第８号住居跡の西壁・北壁・東壁の一部に検出された。規模は径28～38cmであり，ほぼ1.3～1.5mの間隔で壁を垂直に切り込んで付設されている。

長軸方向は，第36号住居跡がほぼ西に指向するほかは，ほぼ北東，北北東，北西を指向しておりまとまりが認められる。

〔3〕 集落について

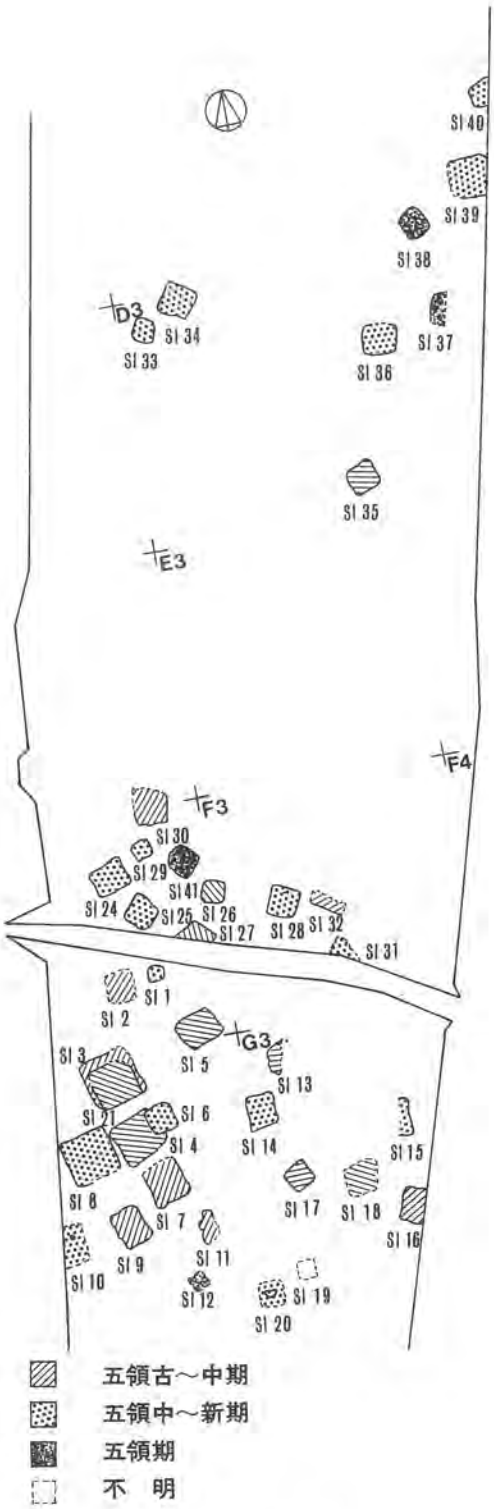
当遺跡では前述したように，縄文時代前期の黒浜式土器を出土する住居跡も検出され，集落を形成していたことは明白である。しかし，当遺跡の中心は古墳時代である。ここでは，古墳時代の住居跡について出土土器による区分に従って，同時代の集落の変遷にふれてみたい。古墳時代の住居跡出土土器は，五領古～中期，中～新期の2段階に区分した。今回の調査は，道路建設予定地内の調査のため，集落の限界がおおよそ確認できたのは，南側だけであり，北側は住居跡が散在しているため集落の一部と考えられる。南側は古墳時代の遺物の出土量が希薄でもあった。他の3方は区域外にも遺構の存在が予想され，特に，東・西へは広がりが考えられる。しかし，集中度からみれば，調査区は集落のほぼ中心地域と考えられる。

(1) 五領古～中期

出土土器群から，この時期に属すると思われる住居跡は17軒である。これらの17軒の住居跡の分布は，小谷津田を北と南から挟むような台地縁辺部の南側の一群と北側に一軒検出されたものに分かれる。住居跡群には接近したものや，重複した第3・21号住居跡がみられることから，この時期も2期に分かれると思われる。群として明瞭なのは，谷津田の南側に存在する住居跡群であり，その中の大形住居跡群第3・4・7・21号住居跡は北西から南東にかけてほぼ一列に配置された状態である。近接している6m以下の小・中形の住居跡は，長軸方向や，住居跡間の距離などには規則性が認められず，単独で住居跡が検出されている。しかし，これらは長軸6m以上の大形住居跡の北側と東側から囲むような状態が認められる。また，この時期の人々は住居跡の集中度からみると，谷津田の南側の台地を中心に生活を営んでいたことが考えられる。

尚，谷津田を挟んで，北側に一軒存在していることについては，多くは語れない。しかし，南側の台地縁辺部に位置する第35号住居跡と同時期の住居跡が土取りにより破壊されていたことを考えると，北側台地上の第35号住居跡と同時期に集落が形成されていたことも推測できる。

もう一つの特徴は，第3・4・7・21号の大形住居跡がほぼ$G2c_5$区を中心にした地区に数軒近接して構築されていることである。これらが検出された地区は撹乱があった所であり，同様に大形住居跡も撹乱を受け出土遺物が少なく，多くは述べられないが，第21号住居跡から東海地方西部の欠山式の搬入品と考えられる器台形土器が出土していることは，注目されることである。大形住居跡に関しては，小久保[8]徹氏が論考の中で弥生時代が対象ではあるが，「眺望性に富む立地」で「他の住居に対して絶対規模が大きく」，しかも他とは，「一定距離を隔て，単独存在」し「整っ



第160図　時期別住居跡配置図

た形態を示向する」と述べている。当遺跡をみると，大形住居跡は北側の谷津田を望む最も標高の高い場所に占地している。集落内での配置は，他の住居とは隔絶されたような所は認められず，集落の一部を構成されるように配置されていると思われる。住居跡内施設で他と相違する所はあまりない。しかし，出土遺物では東海地方西部の土器をもつなどから，大形住居跡以外の住居跡とは区別してみることができないだろうか。また，後続する五領中～新期でも，石製模造品の剣形品が出土している大形の第８号住居跡が，同様に大形住居跡が構築されていた地区に配置されているのは，この地区が，五領古～中期から何らかの特殊性をもった要因があったと考えられる。

(2)　五領中～新期

この時期になると，前段階と比べて住居跡も14軒とやや減少しているが，出土遺物が貧弱なため明確にできず同期に加えることができなかった第10・15・29号住居跡を加えるならば前期と同数になる。

これらの住居跡の分布は，大形住居跡を検出した南側の台地内陸部と谷津田の台地縁辺部，及び北側台地の傾斜地に検出された。この時期の住居跡の重複は認められず，単独で存在している。住居跡の面積は，前段階の平均面積の31.6m²に比べて平均で7.8m²の差があり，小さくなる傾向がみられる。大形の第８号住居跡は，前段階の大形住居跡と形態も同じで，

同じ地区に構築されている。このことは，同地区が前段階からある程度の計画性をもった集落の造営に，都合の良い条件があったとも考えられる。また，前段階のものと住居跡形態等が類似していること，小範囲に接近していたことを考えると，２期に分かれると思われるがその時間差は少ないものと考えられる。別の特徴として，住居跡群が前段階より北側へ移動している傾向が認められる。これは，当遺跡の北側に所在する本田遺跡の南端に，つまり，当遺跡の北側に，和泉Ⅰ式に属する住居跡が検出されていることから，概略的にみれば，五領古～中期では台地の南側に配置されていたのが，古墳時代中期に近づく五領中～新期の新しい時期になると，北側の台地上へも大きく集落が拡大していったものと思われる。最後に，集落の北側寄りに位置する，第36号住居跡から出土した大型壺形土器の類似壺は，当遺跡の周辺では，栃木県の向北原遺跡と，千葉県の我孫子中学校校庭遺跡に求めることができる。前者は，方形周溝墓の周溝から一括出土したもので，口縁部に棒状浮文が施されていることもあり，やや性質を異にすると思われる。後者は第７号住居跡から出土したもので，底部は欠損しているものの，形態・法量とも当遺跡と類似性がみられる。この壺は集落の中で特殊な位置を占めていたと予想されており，当遺跡の第36号住居跡においても器台と共伴していることを考えると，祭祀的性格の強い住居跡であったことも考えられる。また，この壺がどのように使用されたのか出土状態からは明確にすることはできなかった。しかし，胴部外面に煤等が付着していないことからも，通常の煮沸に使用されたとは考えにくく，貯蔵用とするのが妥当と思われる。本跡には貯蔵穴が付設されていることから，貯蔵穴では支障を来たすもので，当時では貴重であったものを壺に貯蔵したのではないだろうか。他にもいくつかの推測も可能と思われるが，根拠に乏しいので後稿に譲る。尚，これに類似する壺は前述した２点以外に，周辺遺跡では出土例はない。従って，製作場所や流通経路等の解釈もまだ時期尚早と思われる。

当遺跡に近接している神明塚古墳，富士浅間塚は五世紀以降に構築された古墳と考えられているもので，今回の調査地域内から，古墳にかかわるような遺構，遺物の検出をみることはできなかった。しかし，大形住居跡を含む古墳時代前期集落の検出は，当地域の古代からの性格を解明する一つの視点となり得る資料と思われる。今後も資料の蓄積を以って，全容が解明されていくことを願いたい。

引用文献

注1　笹森健一　「縄文時代前期の住居と集落（II）」　土曜考古4　1981

2　塚田光　「第1部・IV縄文時代竪穴住居の研究」　縄文時代の基礎研究　1982

3　鈴木素行　「原町西貝塚発掘調査報告書」　古河市史資料第9集　1985

4　山本暉久　「石棒祭祀の変遷」　古代文化　31－11・12　1979

5　栃木県文化振興事業団　「烏森遺跡」　栃木県埋蔵文化財調査報告第80集　1986

6　滝沢亮　「南関東における古式土師器の様相－主に太平洋沿岸地域について」　物質文化No.36　1981

7　木村直他　「神谷原III」　八王子市椚田遺跡調査会　1982

8　小久保徹　「弥生時代の大形住居について」　埼玉考古第17号（1977）

参考文献

○　伏見遺跡調査会　「常陸伏見」　昭和54年

○　茨城県教育財団　「赤松遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告IV　昭和55年

○　川崎純徳他　「石岡市東大橋原遺跡一第1～3次調査報告－」　石岡市教育委員会　1978～80年

○　茨城県教育財団　「下広岡遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告X　昭和56年

○　鈴木裕芳他　「諏訪遺跡発掘調査報告書」　日立市教育委員会　1980

○　茨城県教育財団　「南三島遺跡1・2区（上・下）」　茨城県教育財団文化財調査報告第27集　昭和59年

○　茨城県教育財団　「奥山下根遺跡他1」　茨城県教育財団文化財調査報告第29集　昭和60年

○　茨城県教育財団　「南三島遺跡6・7区（上・下）」　茨城県教育財団文化財調査報告第30集　昭和60年

○　茨城県教育財団　「奥山C遺跡他2」　茨城県教育財団文化財調査報告第31集　昭和61年

○　茨城県教育財団　「南三島遺跡5区」　茨城県教育財団文化財調査報告第32集　昭和61年

○　茨城県教育財団　「大境遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第34集　昭和61年

○　茨城県教育財団　「南三島遺跡3・4区（I）」　茨城県教育財団文化財調査報告第44集　昭和62年

○　茨城県教育財団　「境松遺跡」　茨城県教育財団文化財調査報告第41集　昭和62年

○　愛知考古学談話会　「欠山式土器とその前後」　第3回東海埋蔵文化財研究会　1986

○　浜松市教育委員会　「伊場遺跡遺物編3」　伊場遺跡発掘調査報告書第5冊　1982

○　静岡県教育委員会他2　「下野遺跡」　1985

○　沼津市教育委員会　「八兵衛洞遺跡」　沼津市文化財調査報告第26集　1985

○ 埼玉県遺跡調査会 「諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡」 埼玉県遺跡調査報告第8集 1971
○ 埼玉県教育委員会 「雷電下・飯玉東」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集 昭和55年
○ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 「後張II」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集 1983
○ 埼玉県教育委員会 「下田・諏訪」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集 昭和54年
○ 岡崎文喜他 「高根木戸」 船橋市教育委員会 1971
○ 印旛村教育委員会 「吉田馬々台遺跡」－縄文早期炉穴址の調査－ 1980
○ 野田市桜台遺跡調査会 「桜台遺跡発掘調査報告書」 1981
○ 我孫子市教育委員会 「我孫子中学校校庭遺跡」 我孫子市埋蔵文化財報告第7集 1985
○ 石田川刊行会（群馬県） 「石田川」 昭和43年
○ 栃木県教育委員会 「柴工業団地内遺跡調査報告」 栃木県埋蔵文化財報告第43集 昭和56年
○ 栃木県教育委員会 「久保遺跡」 栃木県埋蔵文化財報告第52集 昭和57年
○ 栃木県文化振興事業団 「赤羽根」 栃木県埋蔵文化財調査報告第57集 1984
○ 栃木県文化振興事業団「伯仲遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第58集 1984
○ 益子町教育委員会「向北原」－古墳時代集落跡発掘調査の記録－ 昭和61年

終章　むすび

新四号国道建設に伴う，茨城県のルート内に所在する27遺跡の発掘調査は，昭和57年度から始まり昭和63年9月末日をもって終了した。今回，昭和57・60・61・62年度にかけて調査を実施した結城市に所在する本田遺跡・善長寺遺跡・小田林遺跡の報告書が刊行される運びとなった。

本田遺跡からは，古墳時代中期の住居跡1軒が検出されたが，同時代の調査例が少ないため当地域では貴重な資料となった。当該期の住居跡が単独で存在することはまれであり，その点から考えれば，当該期の集落の広がりが当遺跡の南東側へかけて想定でき，集落の一部と考えられる。

善長寺遺跡からは，住居跡，土坑，堀などが検出されており，なかでも第29号住居跡は，平面形が長軸10.6m，短軸9.8mの方形を呈する大形の竪穴住居跡で注目される。また，古墳時代前期から後期までの土器のほかに滑石製の勾玉・臼玉・管玉・紡錘車・有孔円板・剣形品の石製模造品及び未製品が出土した。また，工作台・砥石・原石及び石屑が出土した住居跡もあったことから，玉作り工房跡と判断できたことは，県内でも数少ない当遺跡の性格を最も特徴付けるものであった。また，玉作りの製作工程の一部を窺い知ることができ，大変貴重な資料を得ることができた。

小田林遺跡からは，住居跡，炉穴，土坑，溝，堀などの遺構と，縄文式土器・石器・土師器などの遺物を検出した。縄文時代早期の炉穴15基，同時代前期の住居跡2軒の検出は，この時期から当地域へ人々が移り住み生活が営まれていたことを実証したものである。また，同時代中期の第6号土坑から出土した石棒は，類例が少ないことからその性格を知るための資料提供ができたものと思われる。古墳時代前期の集落は，周辺遺跡とともに集落の変遷をたどるうえでの良い資料になった。第36号住居跡から出土した大型壺形土器は，県内においても珍しく大いに注目される。また，東海地方西部の土器がわずかではあるが検出されたことは，当時から東海地方の影響を受けていたことを示すものであり，周辺地域との比較には貴重な資料を示したものであり，今後，多くの類例を収集し比較検討していきたい。

いずれの遺跡も，多くの成果をもたらした反面，道路敷地内という限定された範囲のため，全容をとらえるまでには至らず，土器の分類も大まかであり，検討の余地を多く残している。今後多くの類例を収集し，十分に検討したいと考えている。

最後に，本報告書を作成するにあたり関係各位から御指導・御協力を頂いたことに対し，心から感謝の意を表したい。

写　真　図　版

〔本田遺跡〕

〔善長寺遺跡〕

本田遺跡調査前全景

本田遺跡調査後全景

PL2

第１号住居跡遺物出土状況

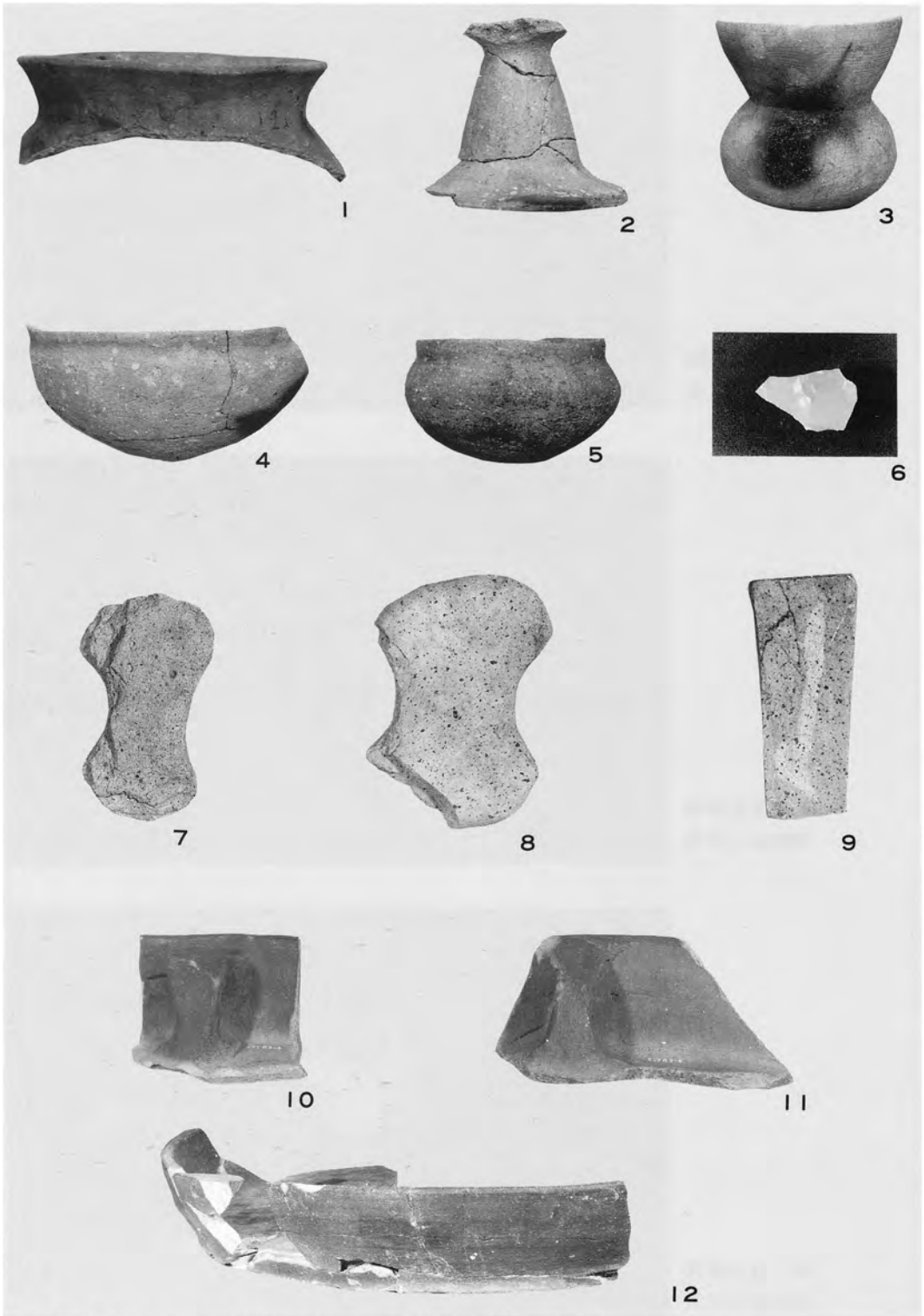
第１号住居跡

第１号住居跡
遺物出土状況

第１号住居跡
遺物出土状況

第１号住居跡
遺物出土状況

PL4



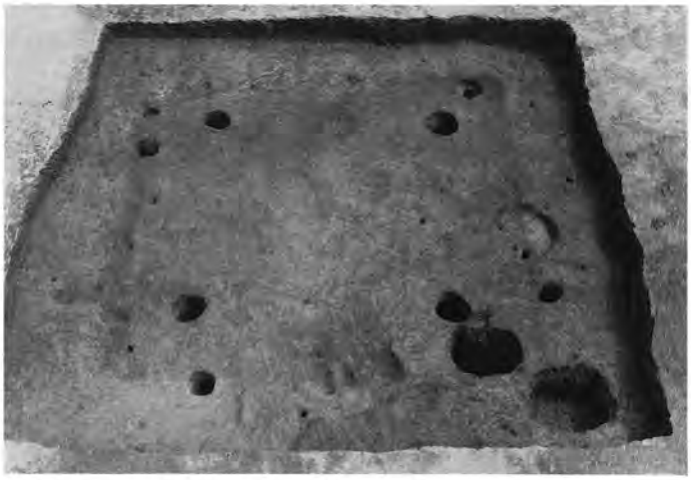
第1号住居跡・グリッド出土遺物 1～6 (SI 1), 7～12 (グリッド) 1/3

善長寺遺跡発掘前全景

8分の1グリッド発掘

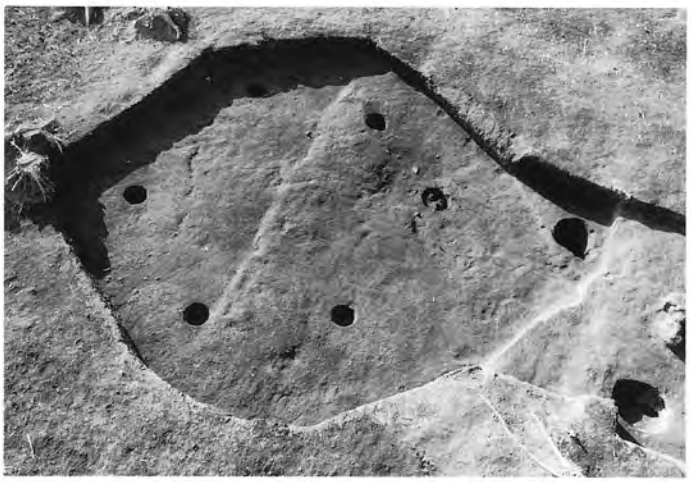
遺構確認

PL6



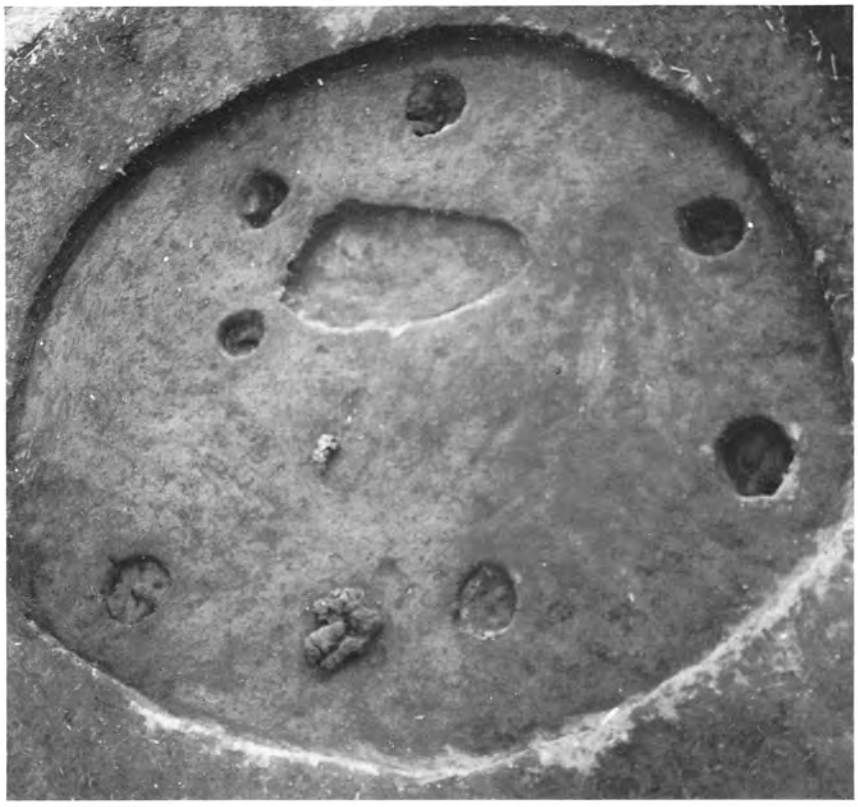
第 1 号住居跡

第 3 号住居跡



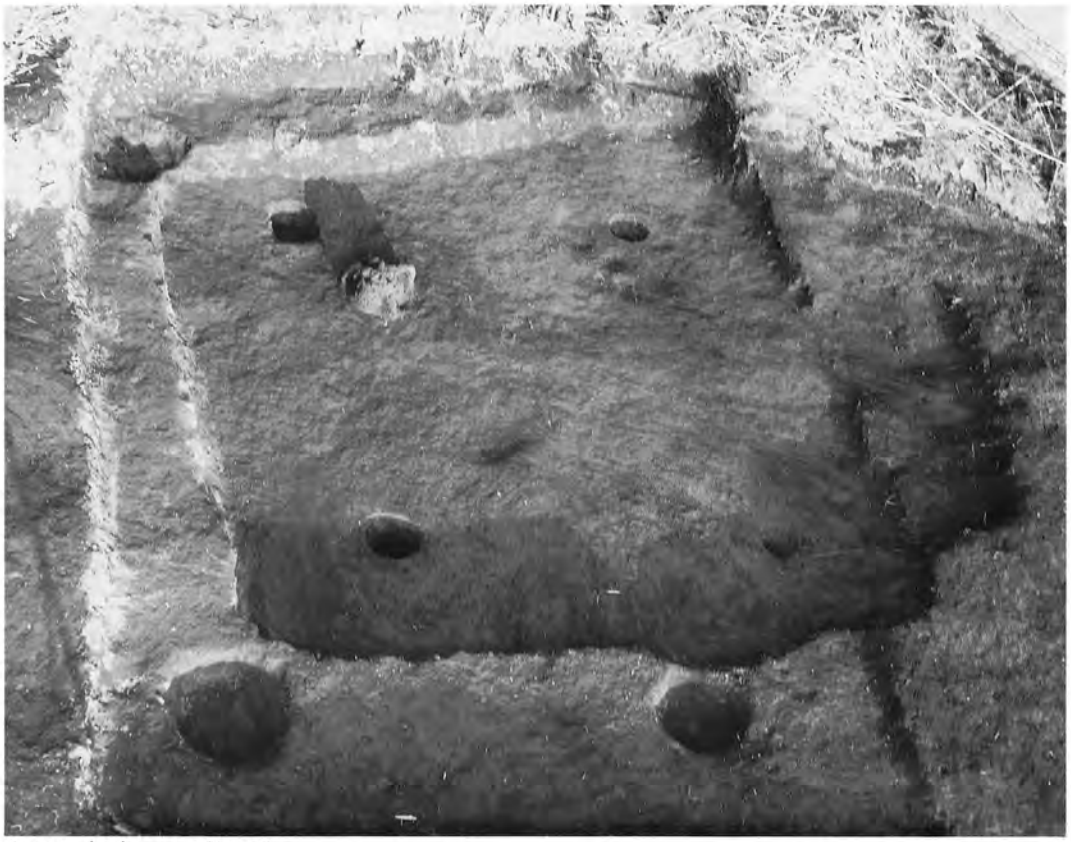
第 8 号住居跡

第 4 号住居跡



第 5 号住居跡

PL8



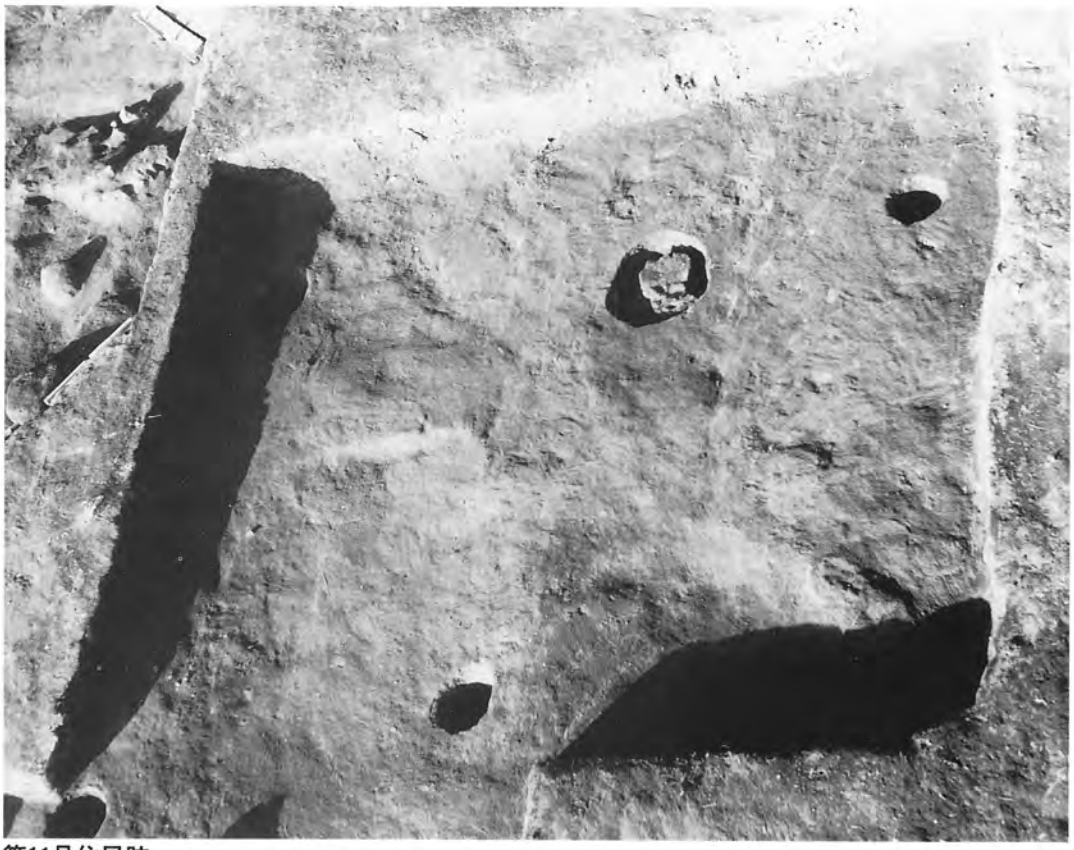
第６Ａ（大）・Ｂ号住居跡

第６Ａ号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況

第10号住居跡

第15A（手前）・
B号住居跡

第14号住居跡・
第３号土坑(左)

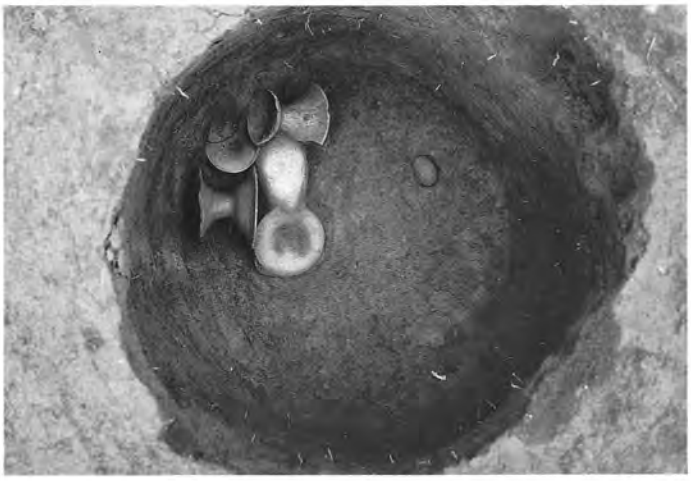


第11号住居跡

第12号住居跡

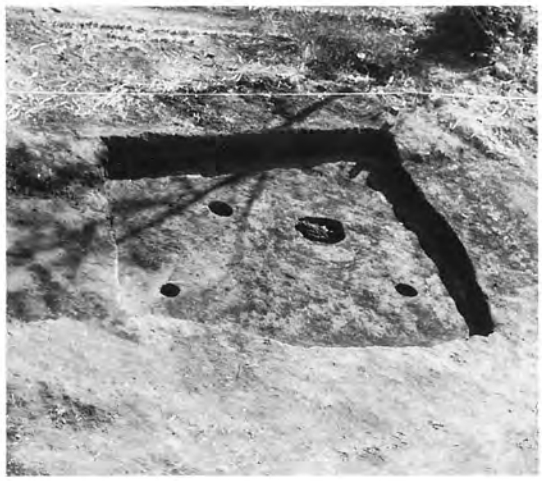
第16(大)・
51号住居跡

第17号住居跡



第17号住居跡
貯蔵穴遺物出土状況

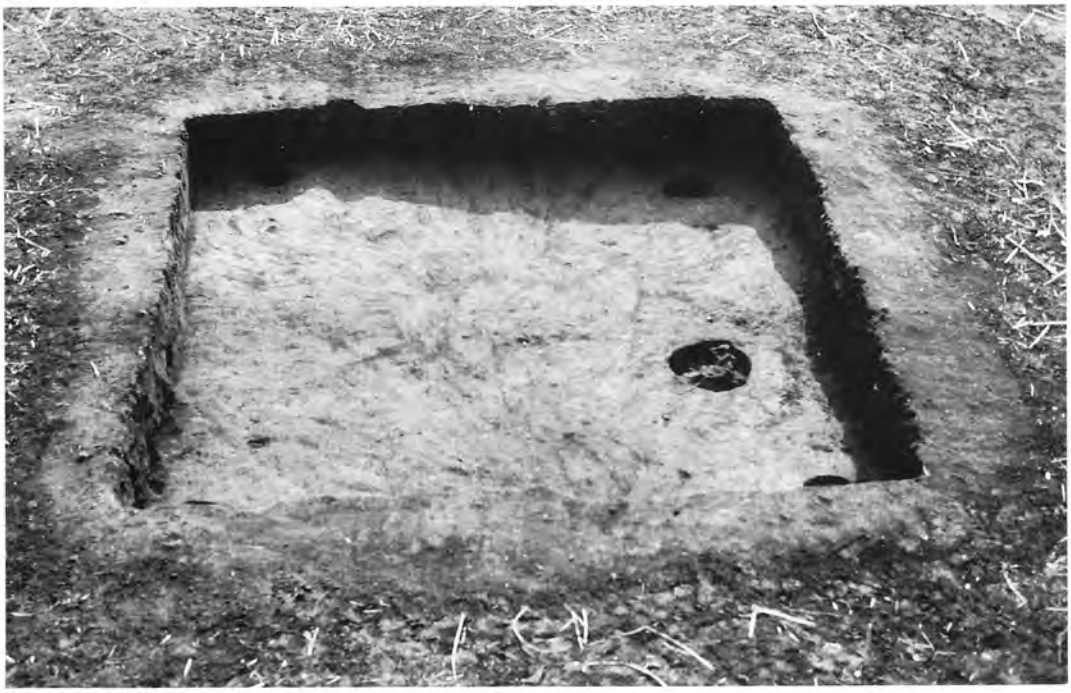
PL12



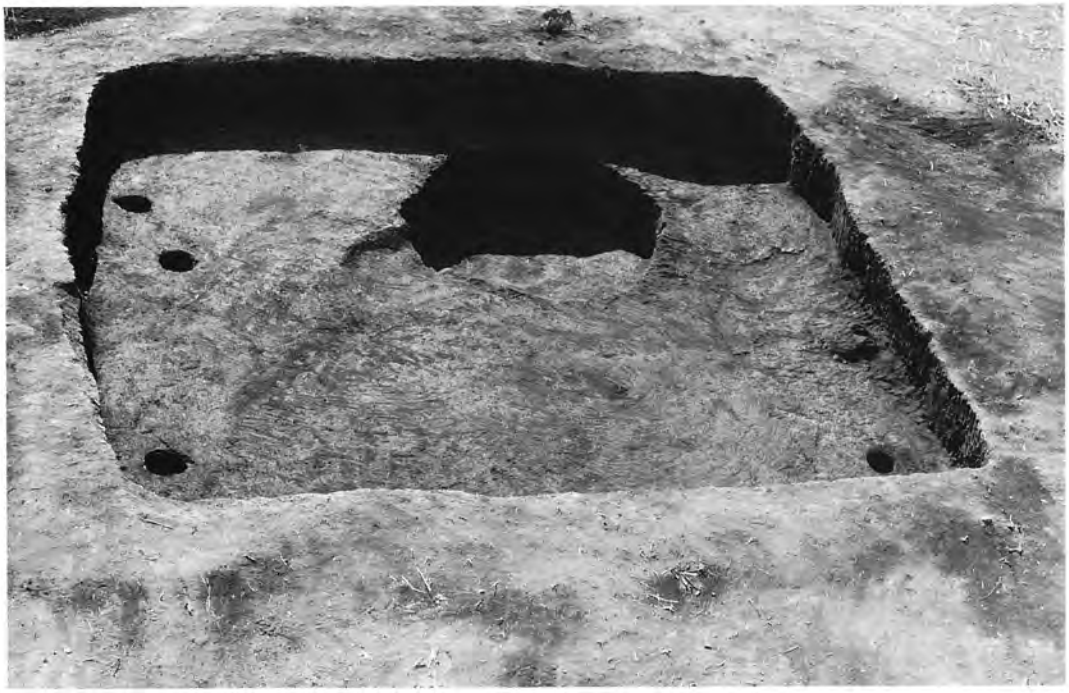
第18号住居跡

第27B号住居跡
遺物出土状況

第27B号住居跡
遺物出土状況



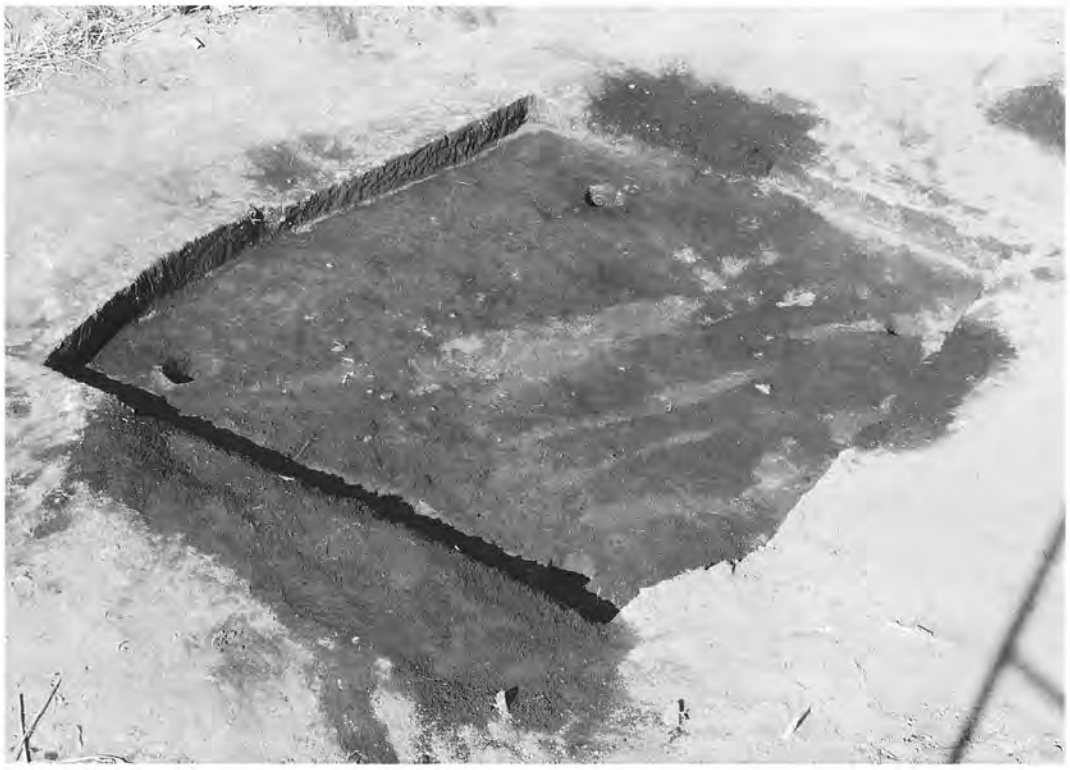
第19号住居跡



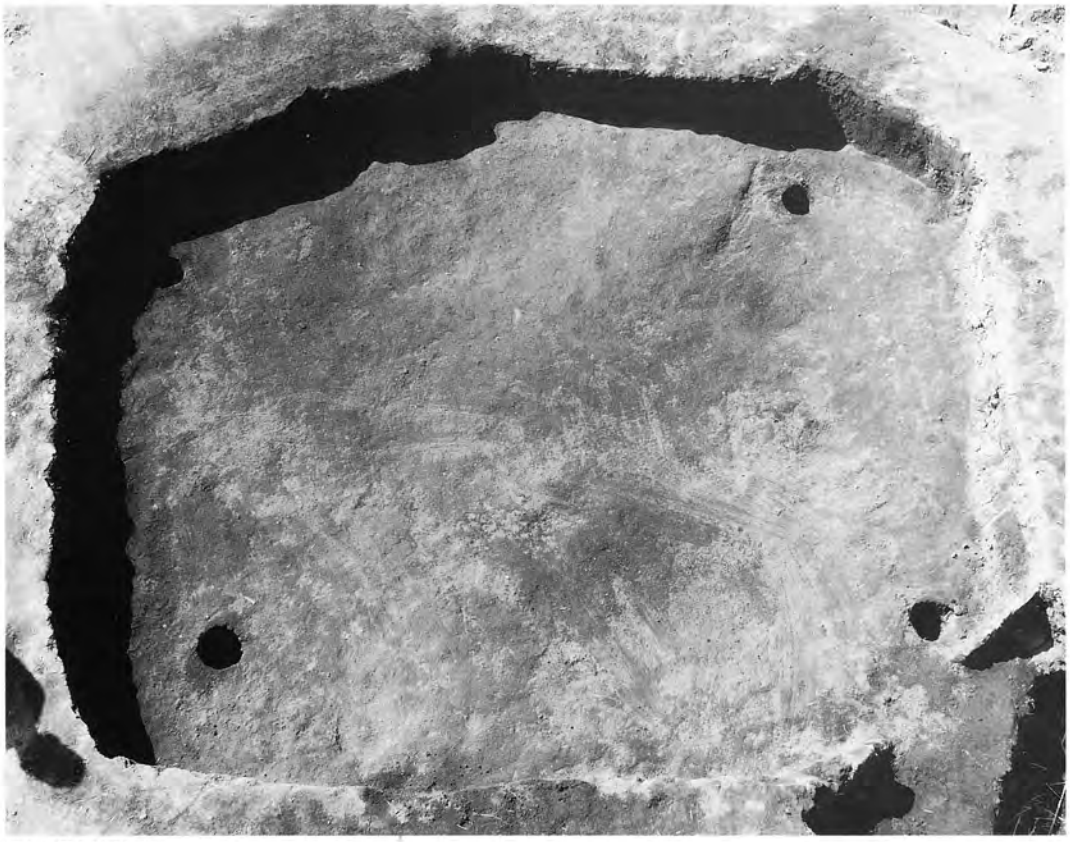
第20号住居跡・第9号土坑

PL14

第21号住居跡



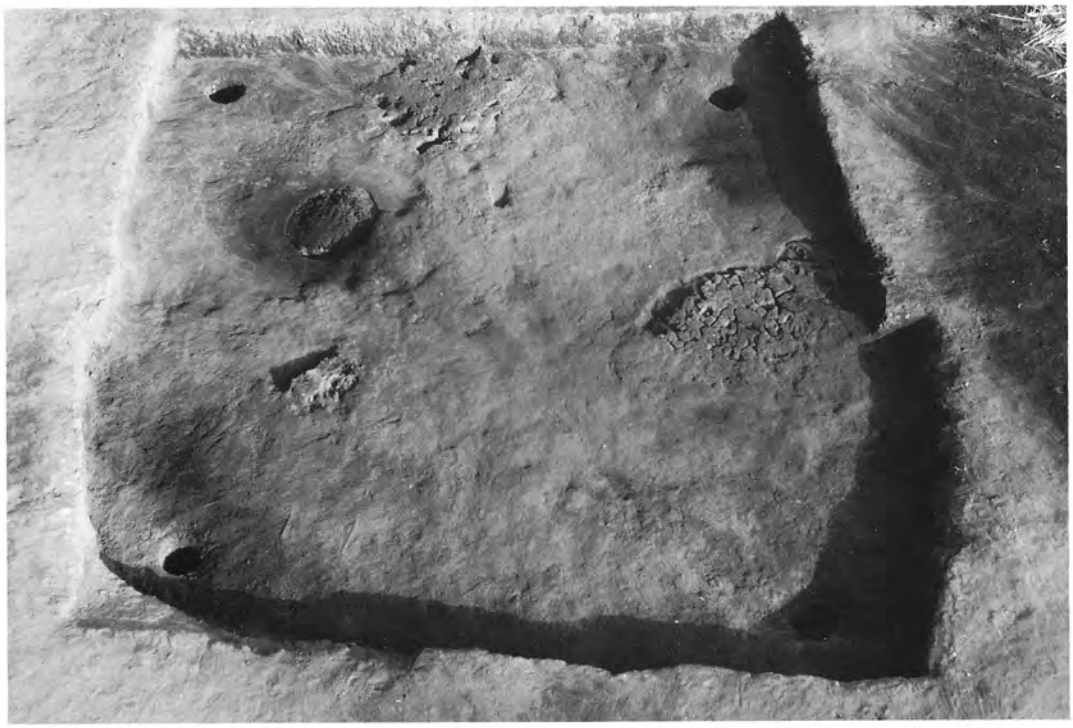
第22号住居跡



第23号住居跡

第24号住居跡

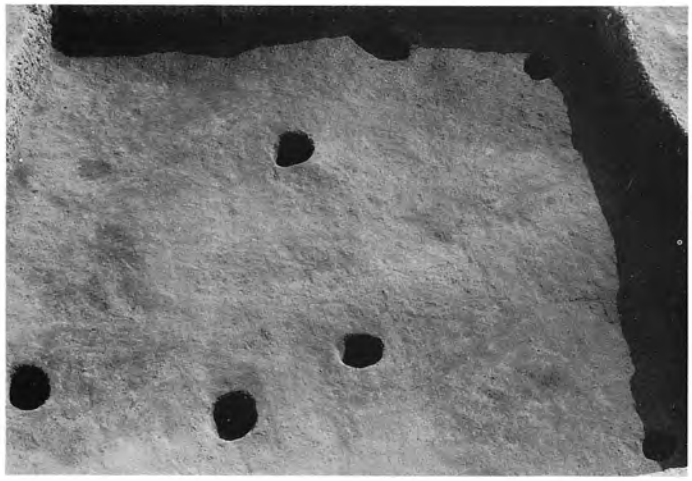
PL16



第25号住居跡

第27A（小）・B号住居跡

第29(大)・30(中央)
31(左)号住居跡

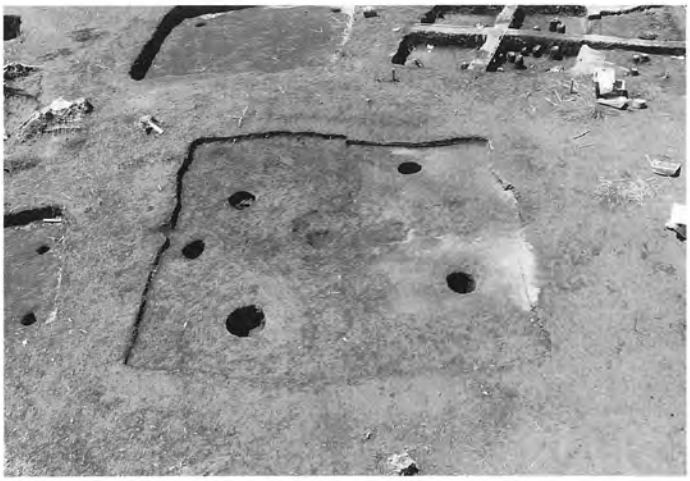


第34号住居跡

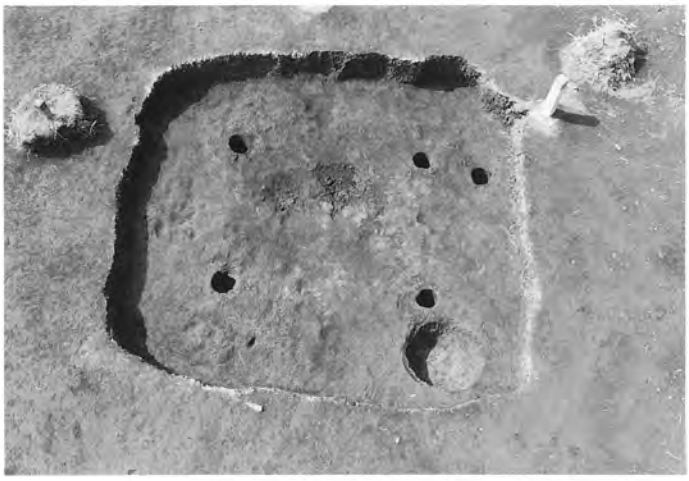
第35号住居跡

PL18

第36・61(手前)号住居跡



第37号住居跡



第38号住居跡

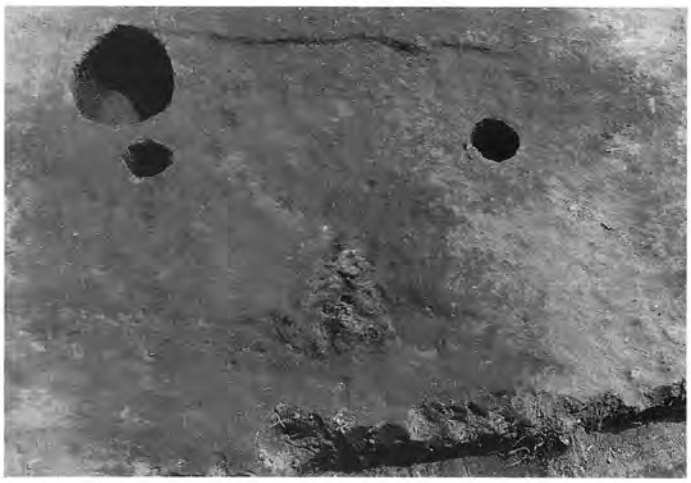
第38号住居跡
遺物出土状況

第39号住居跡

第39号住居跡
遺物出土状況

PL20

第40A（大）・B号住居跡



第41号住居跡

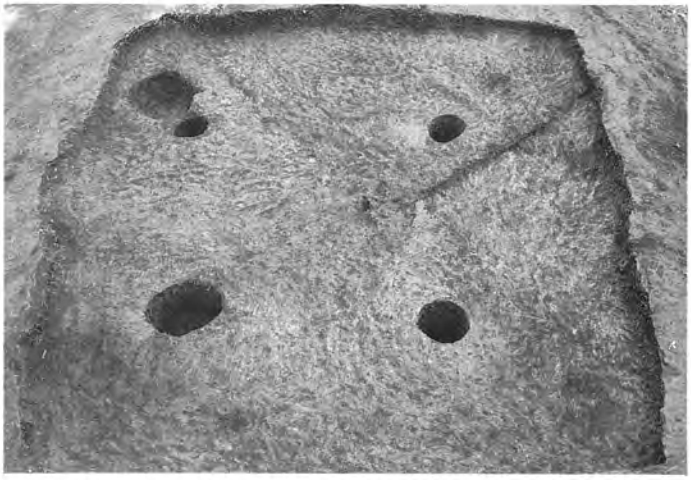
第42号住居跡

第42号住居跡
遺物出土状況

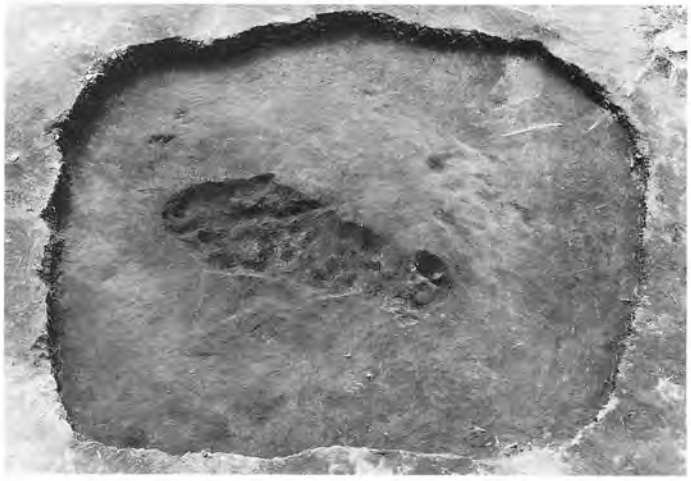
第42号住居跡
遺物出土状況

第43号住居跡

PL22



第44号住居跡

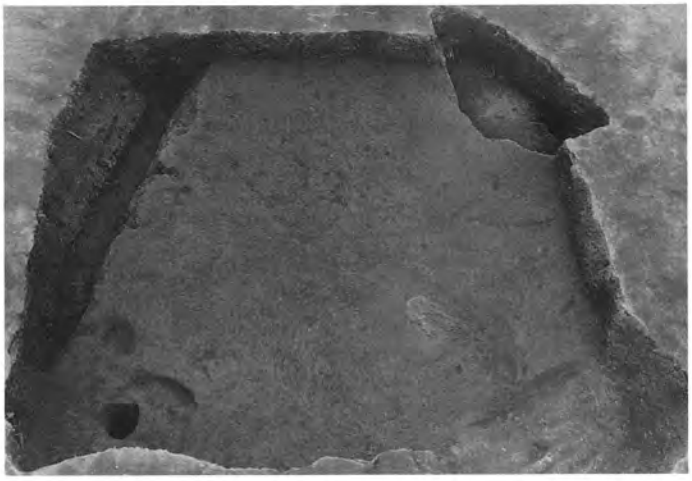


第46号住居跡

第45号住居跡

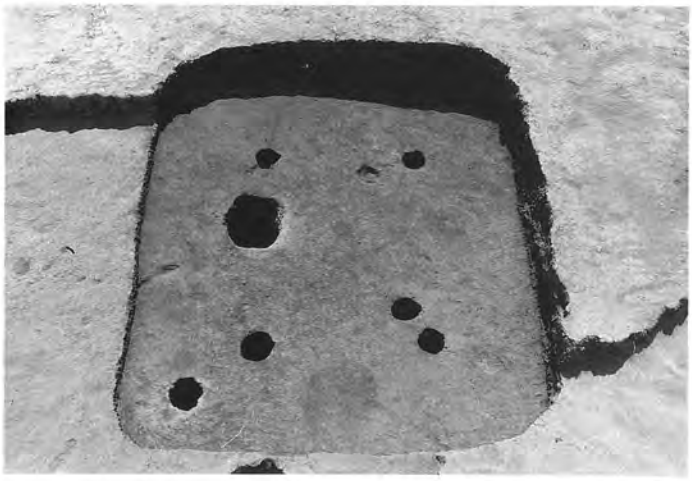
第47号住居跡

第48号住居跡



第49号住居跡

PL24



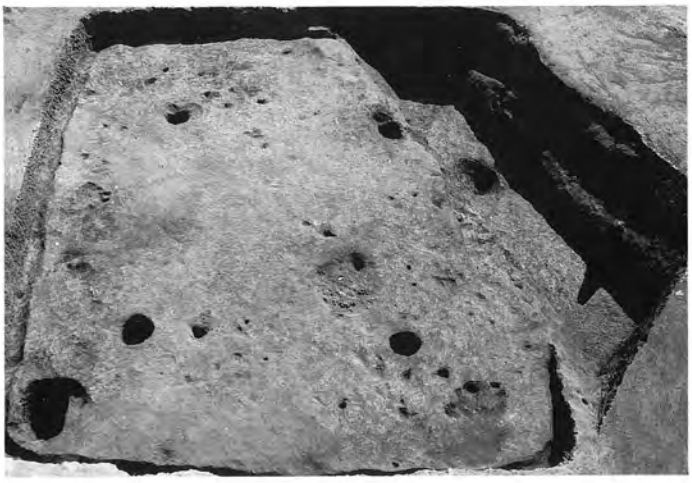
第50号住居跡

第52号住居跡

第54号住居跡

第54号住居跡

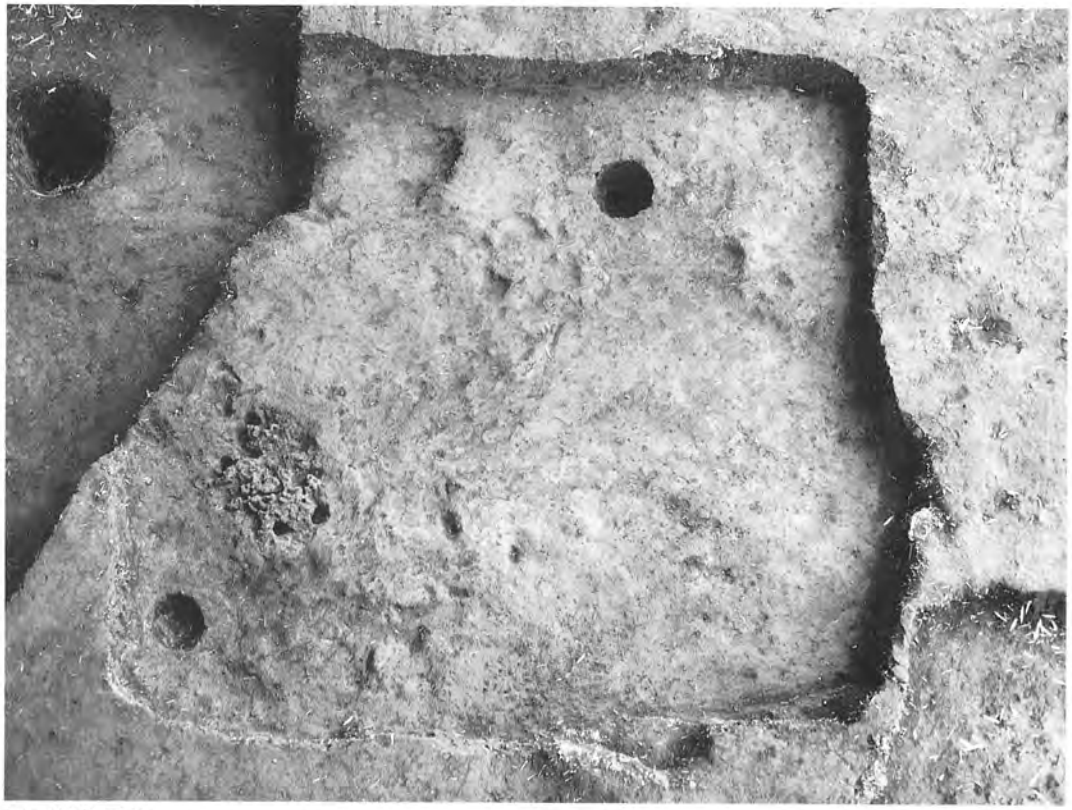
第55号住居跡



第56号住居跡

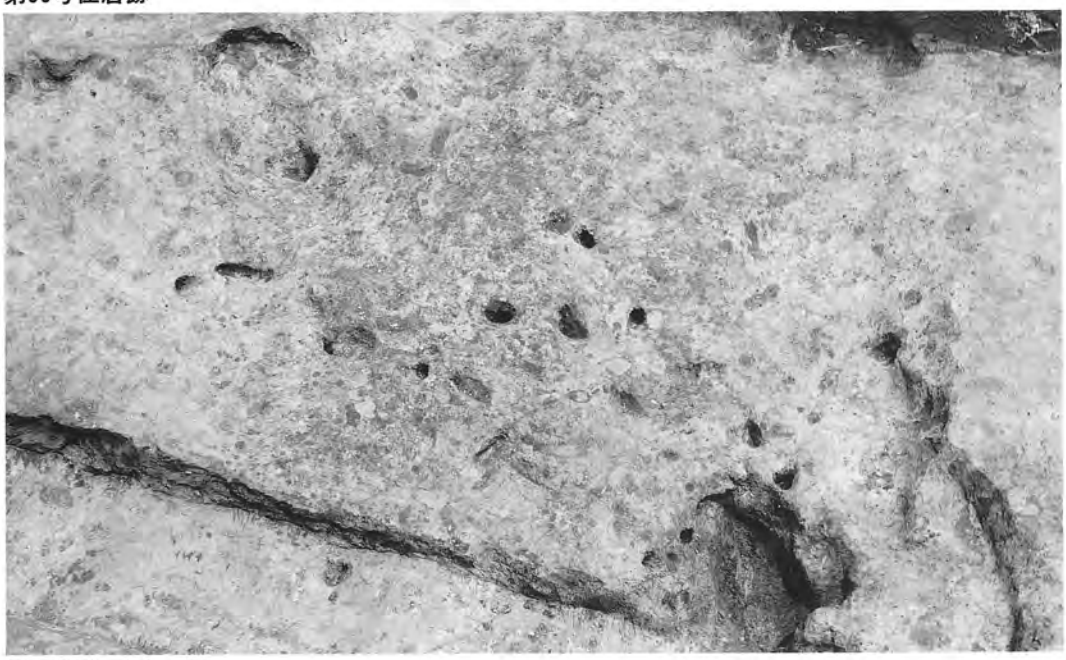
PL26

第57号住居跡

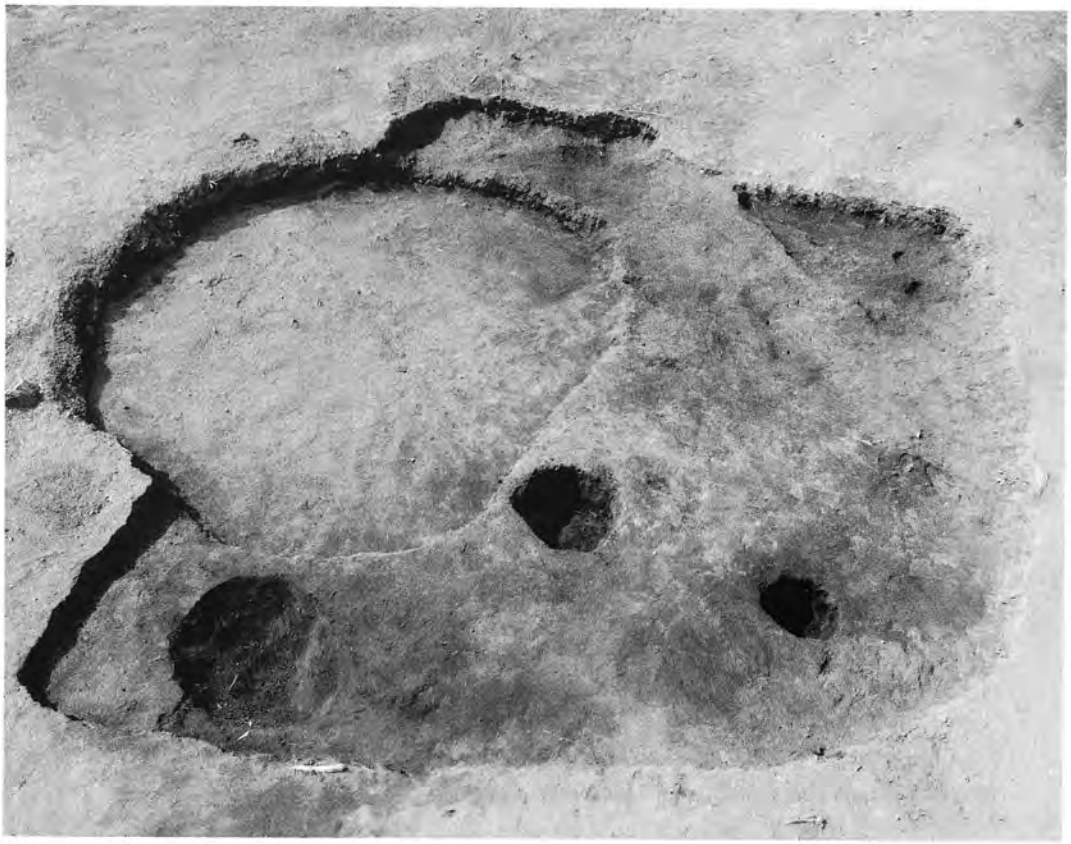


第58号住居跡

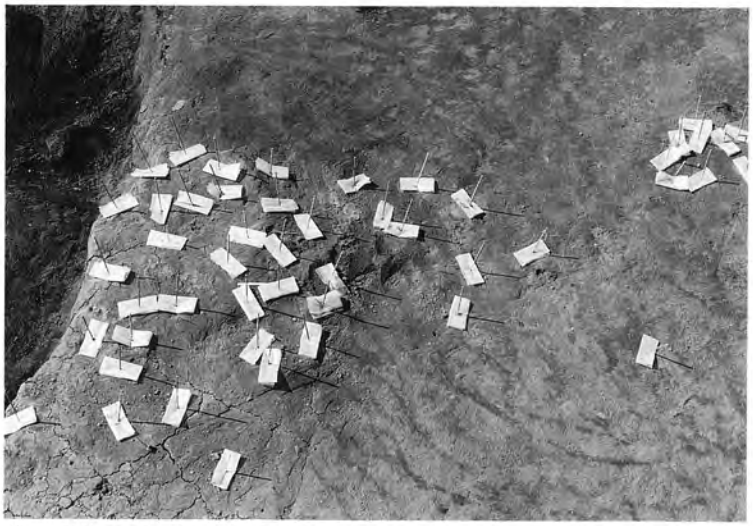
第59号住居跡



第60号住居跡



第62号住居跡，第10号土坑（左）



第55号住居跡石製品出土状況

第24号住居跡
紡錘車出土状況

第1号土坑

第2号土坑

第5(大)・6(右)・7(上)・8(左)号土坑

PL30

第4号土坑

第11号土坑

第5号土坑
遺物出土状況

実測風景

第1号溝

第2号溝

PL32

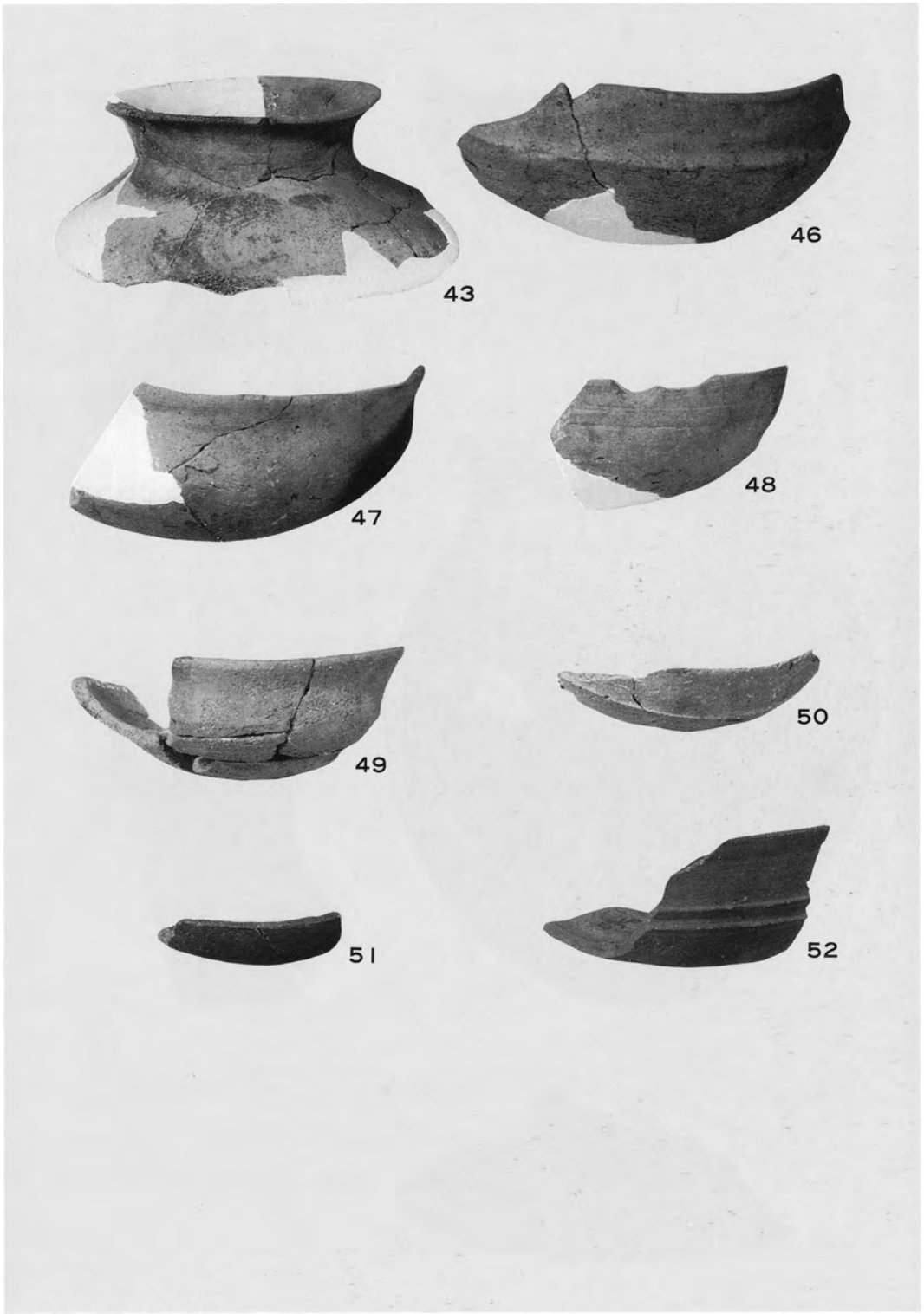
第1号堀

発掘後全景

現地説明会

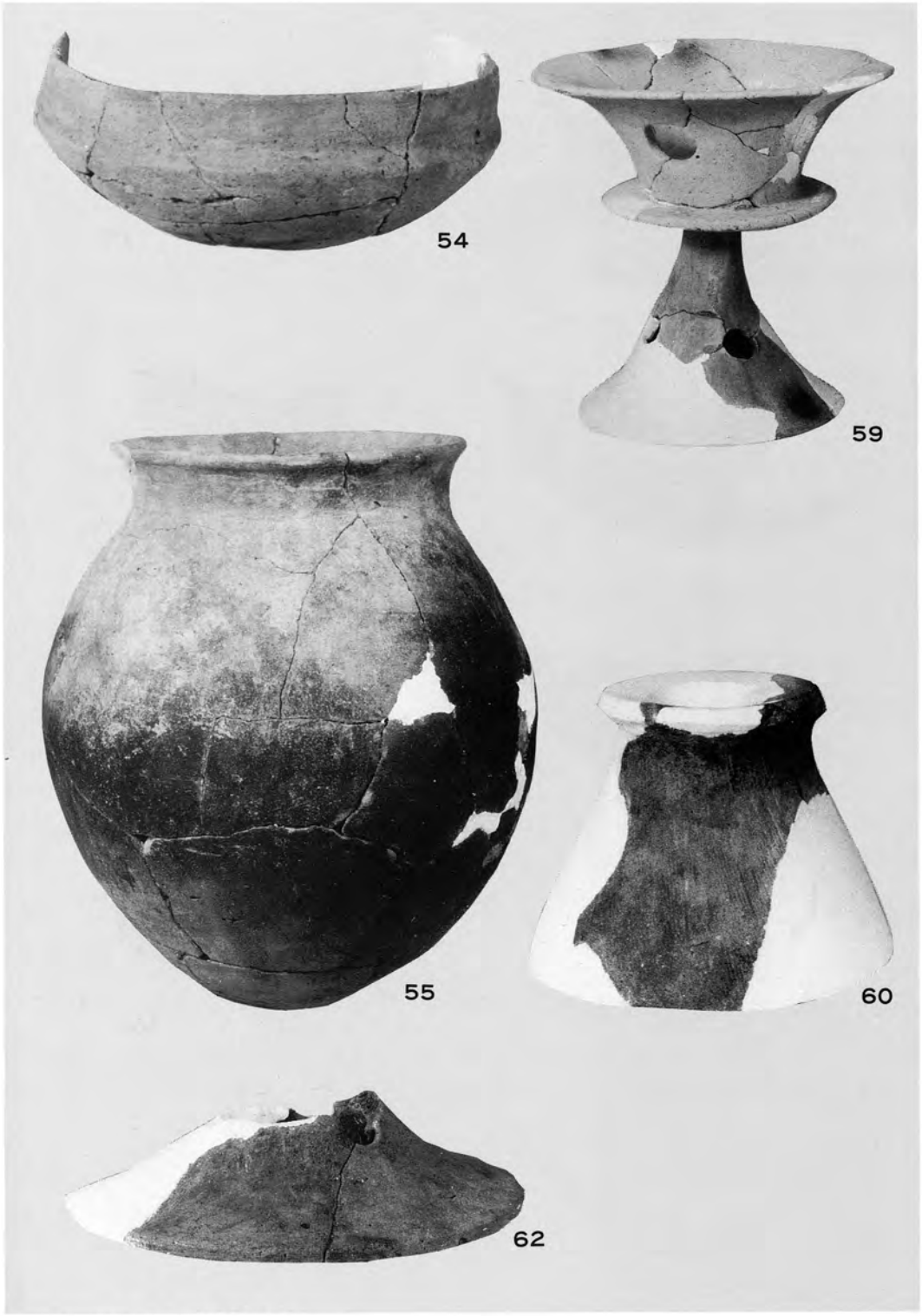
現地説明会

善長寺　遺跡全景航空写真

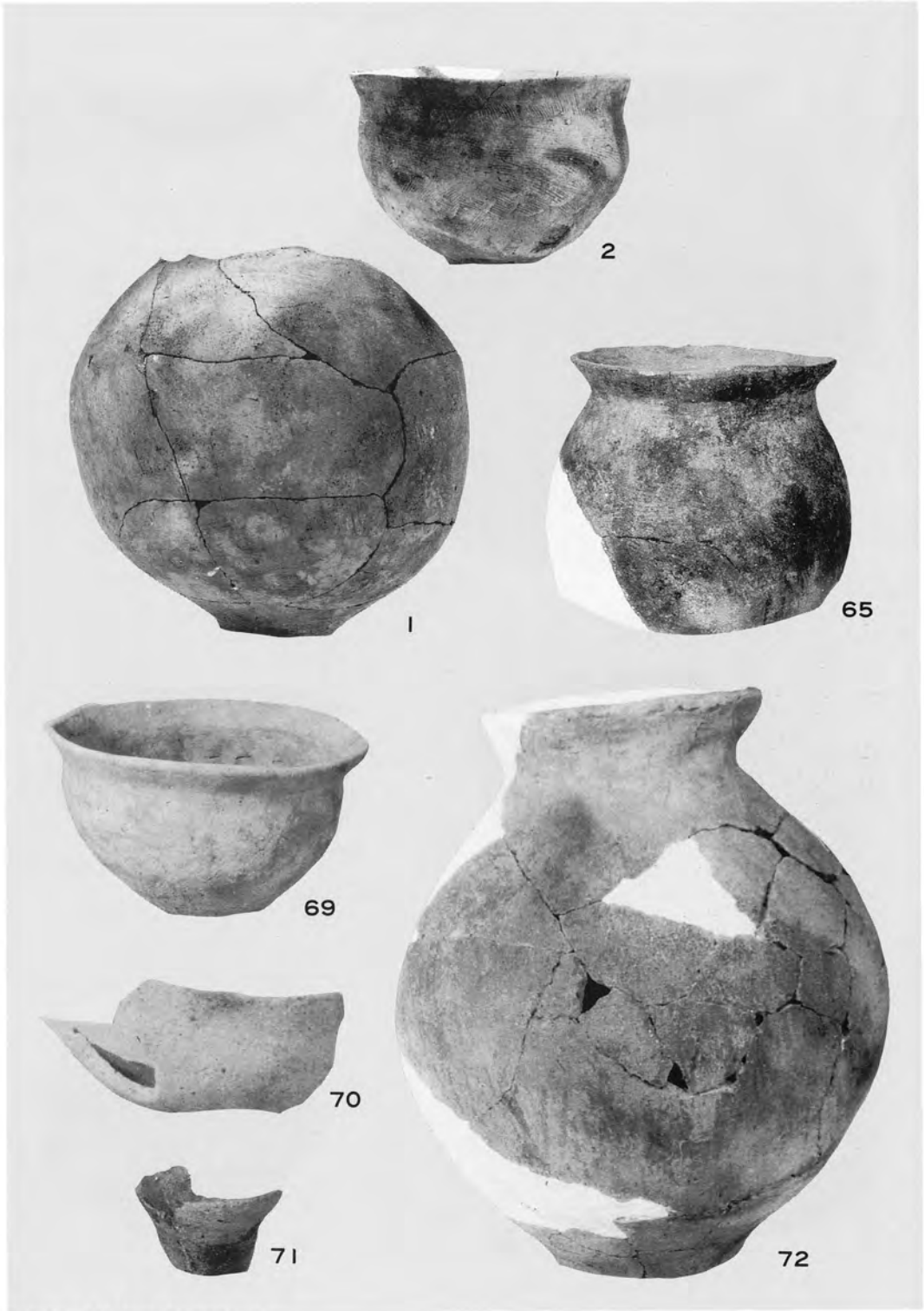


第1号住居跡出土遺物

PL36

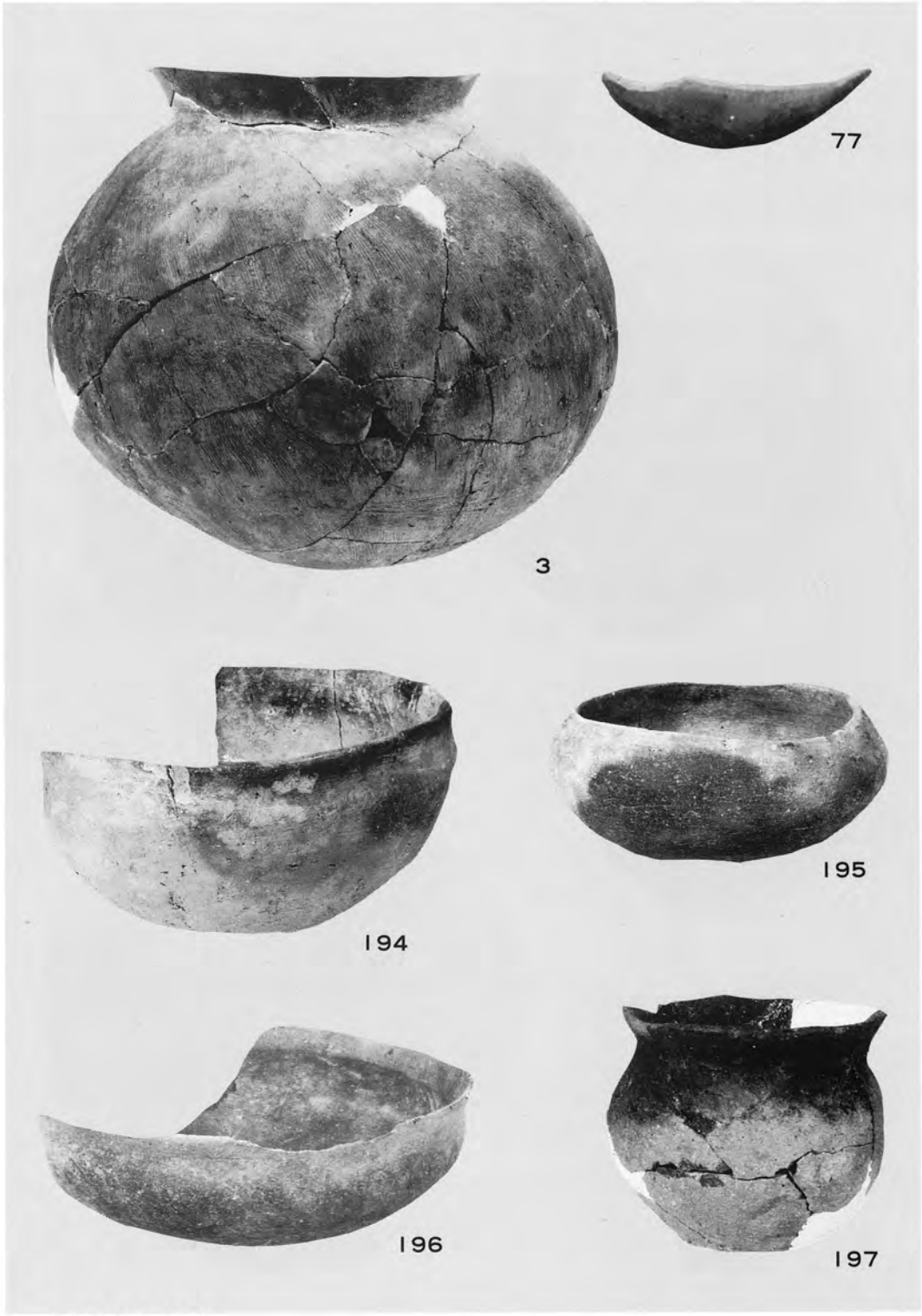


第3・4・5号住居跡出土遺物

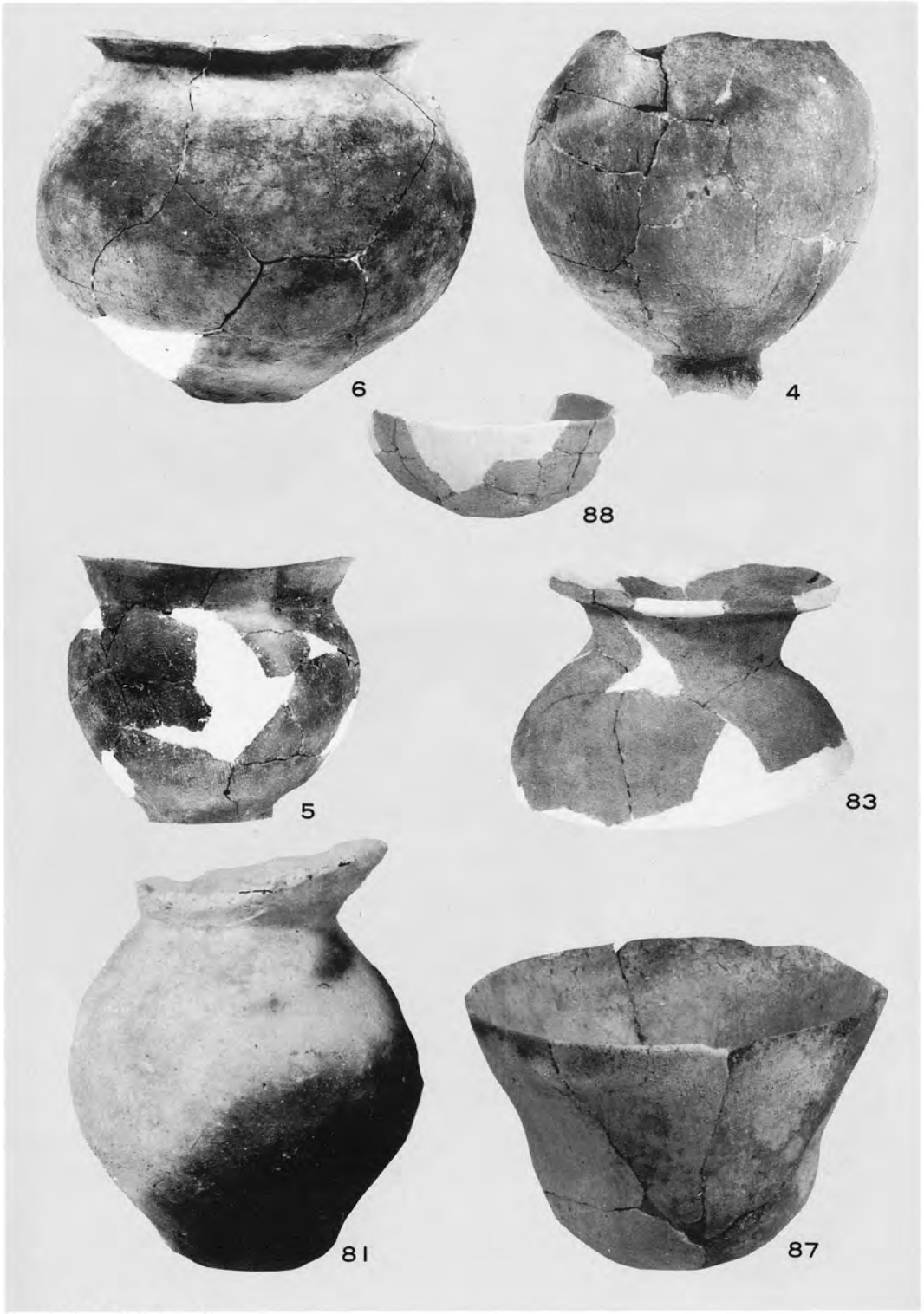


第６Ａ・Ｂ号住居跡出土遺物

PL38

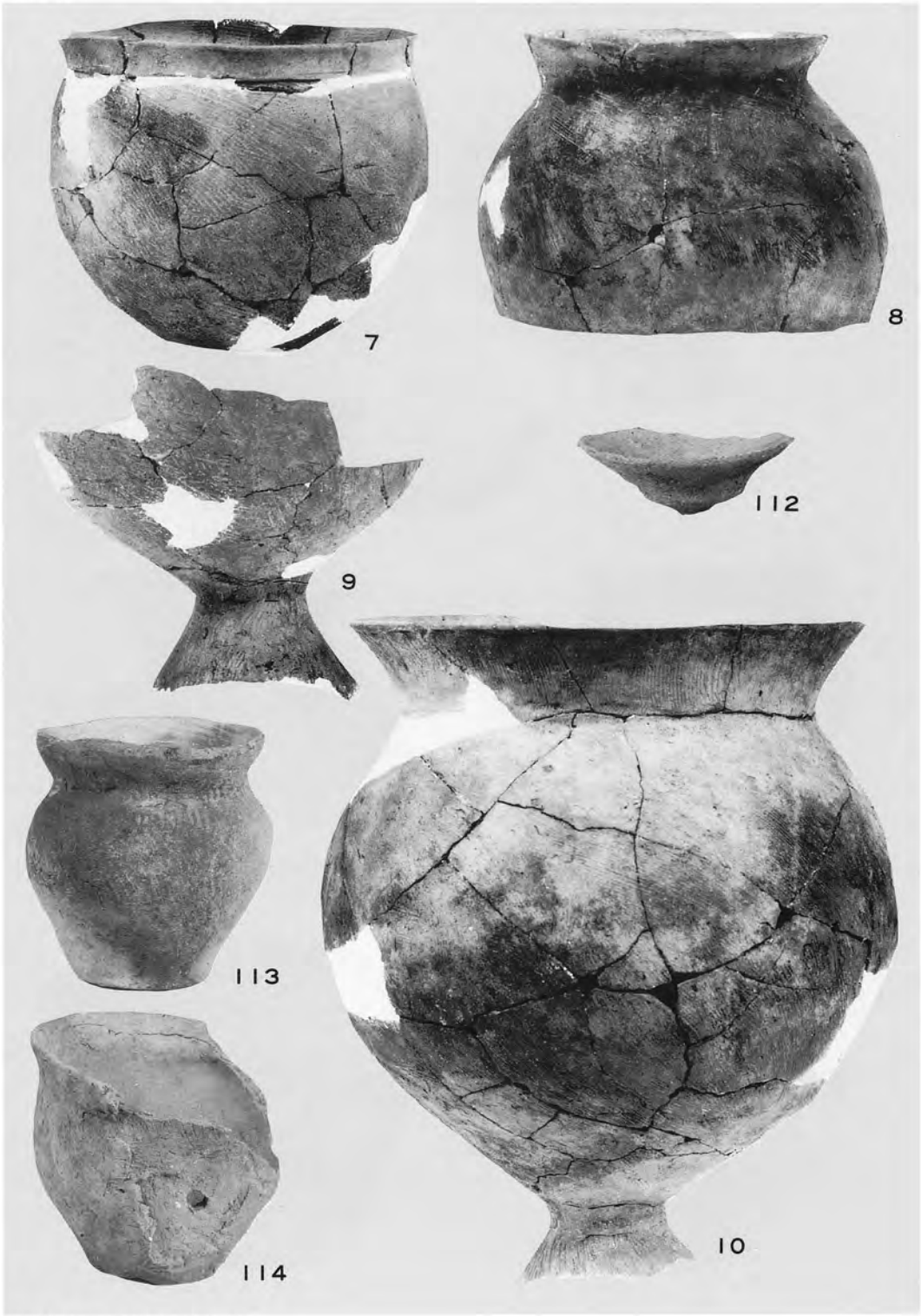


第 8 号住居跡出土遺物

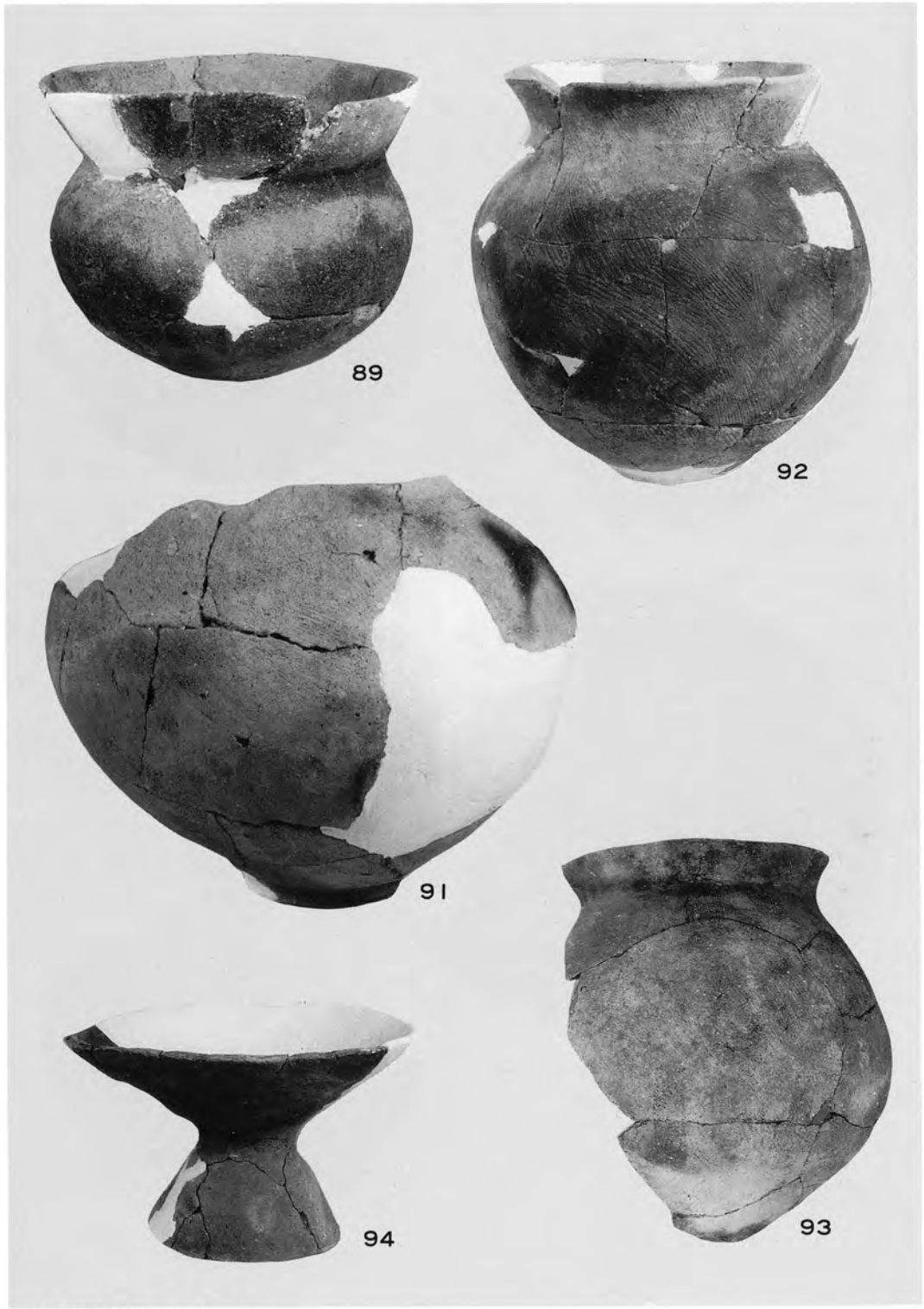


第11号住居跡出土遺物

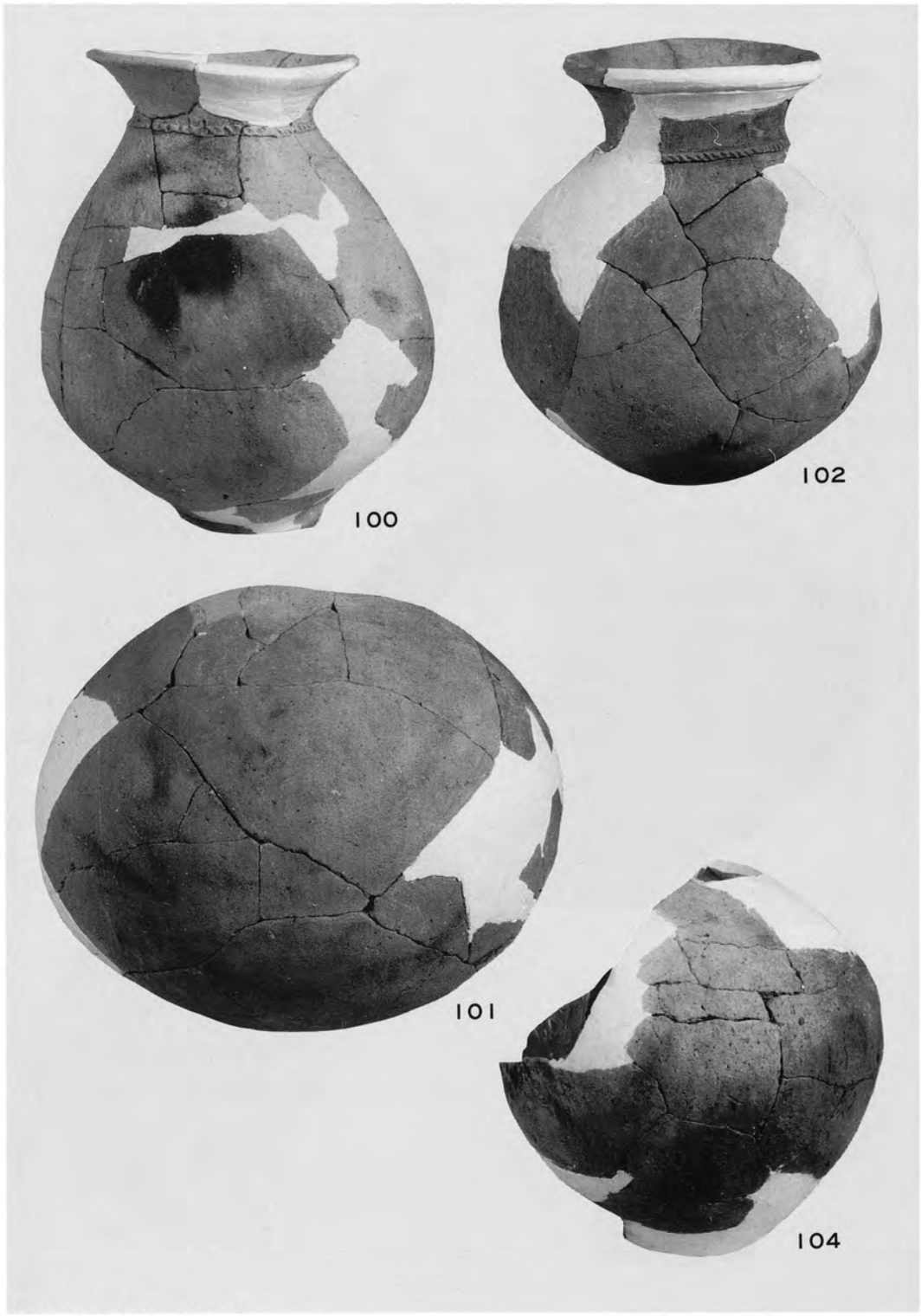
PL40



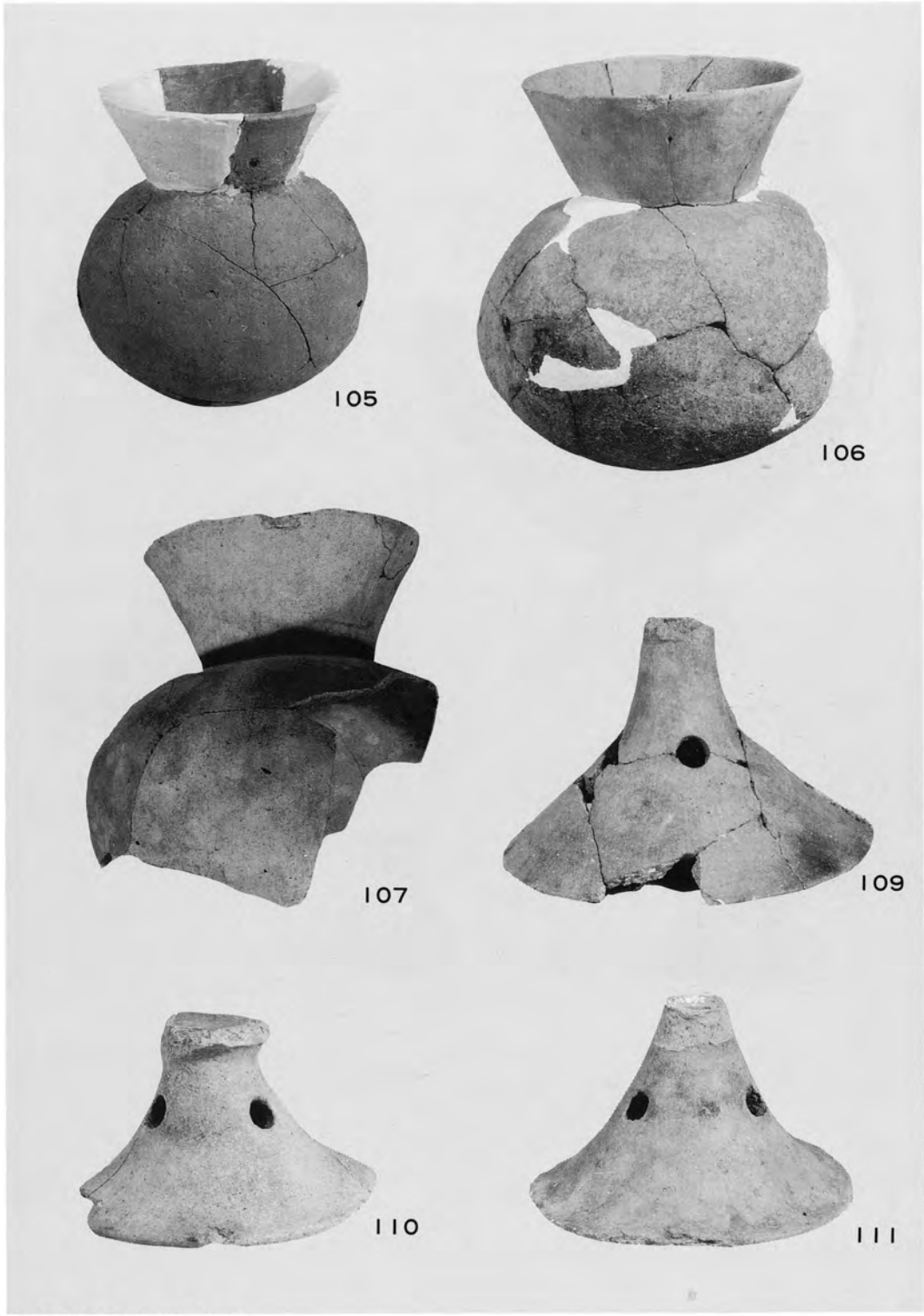
第12号住居跡出土遺物 (1)



第12号住居跡出土遺物 (2)



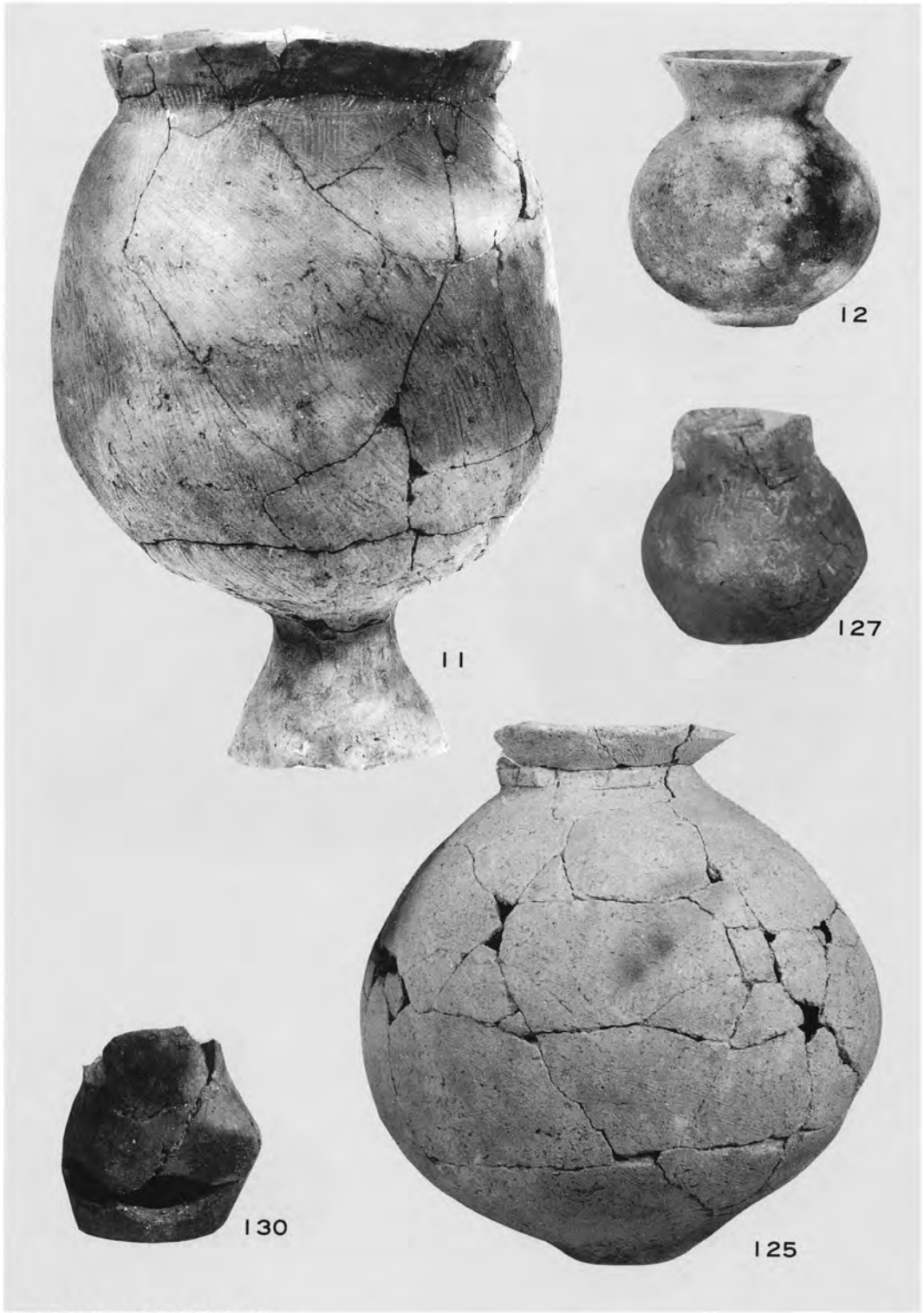
第12号住居跡出土遺物（3）



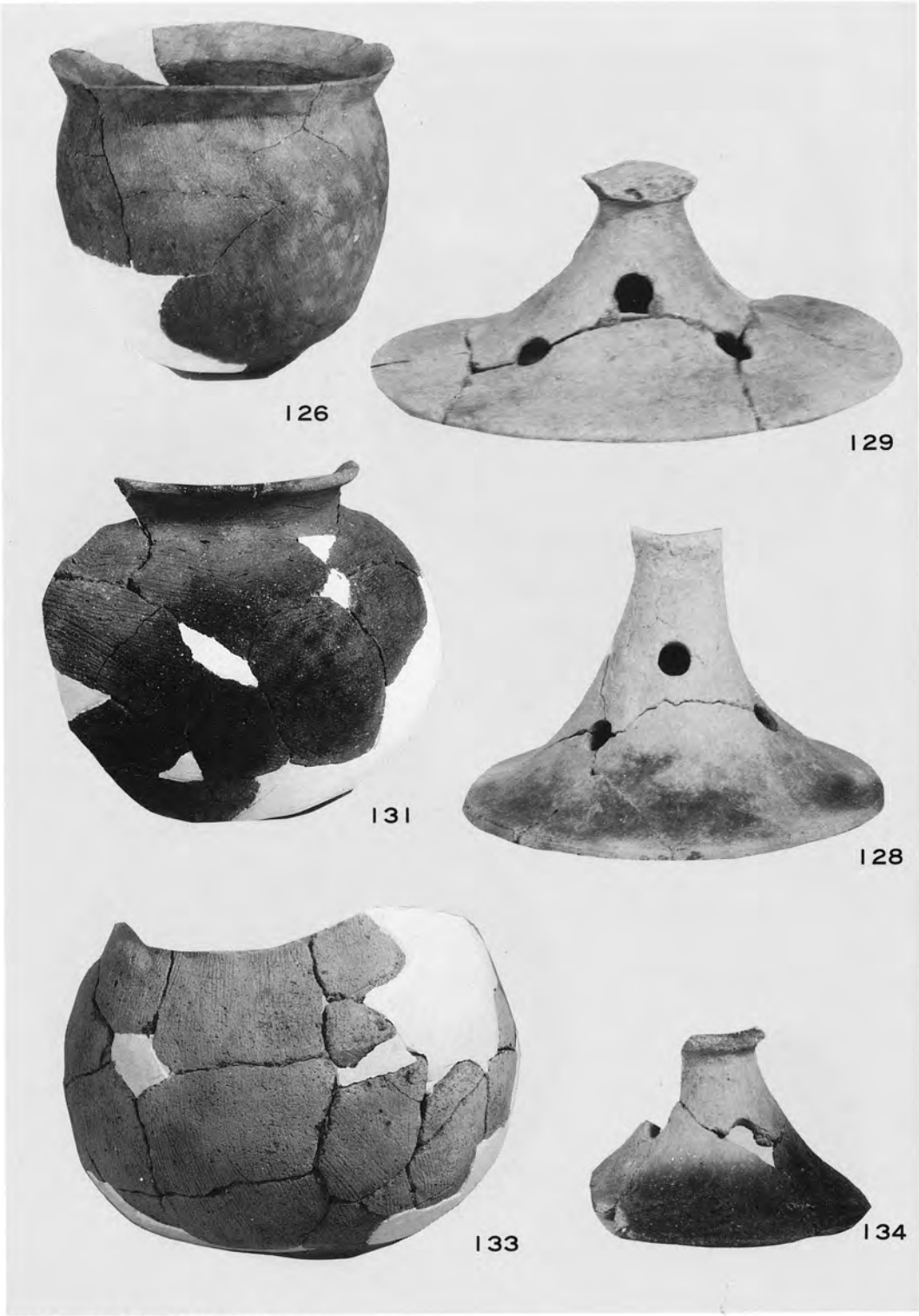
第12号住居跡出土遺物 (4)

PL44

第14号住居跡出土遺物

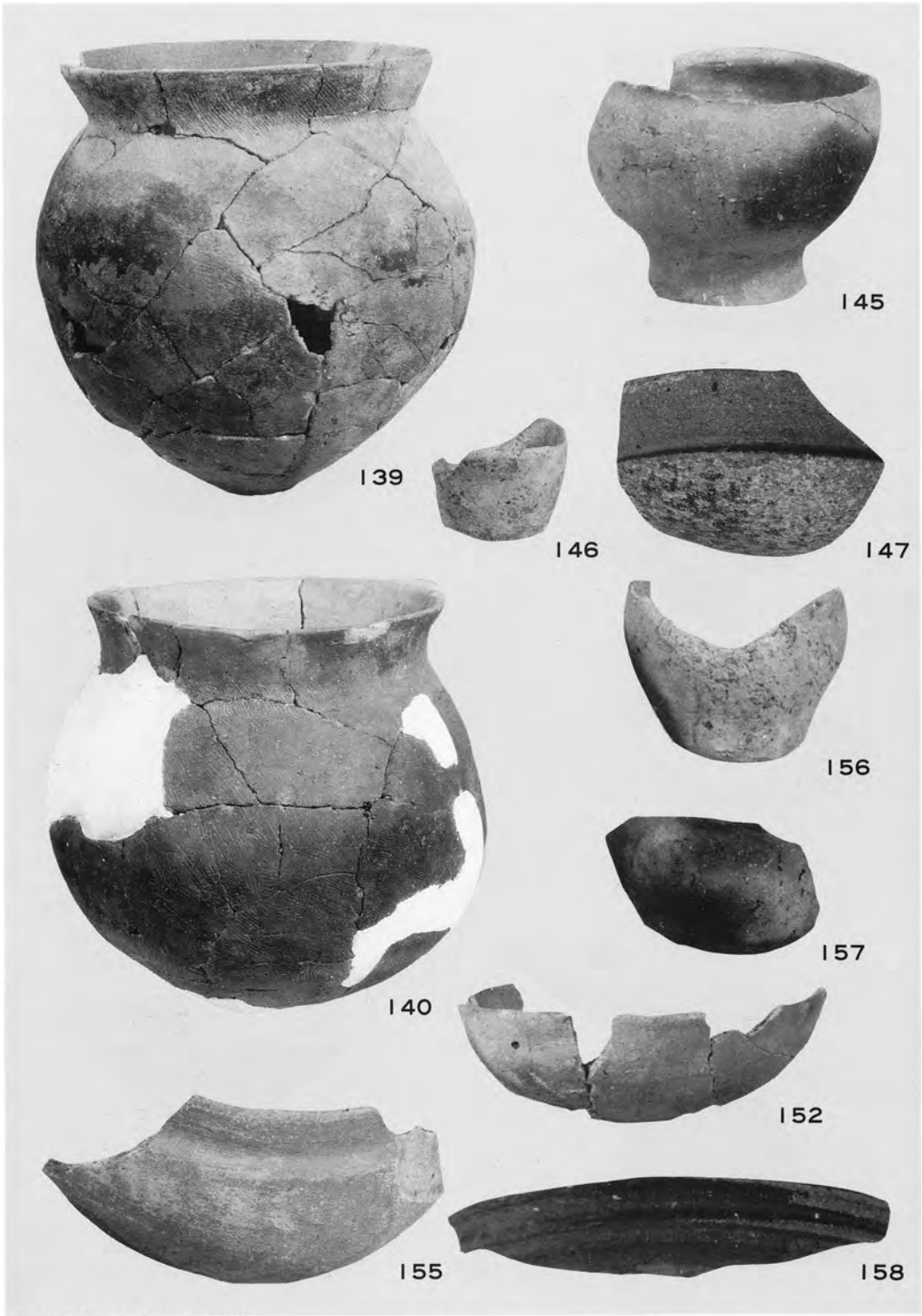


第15A号住居跡出土遺物（1）

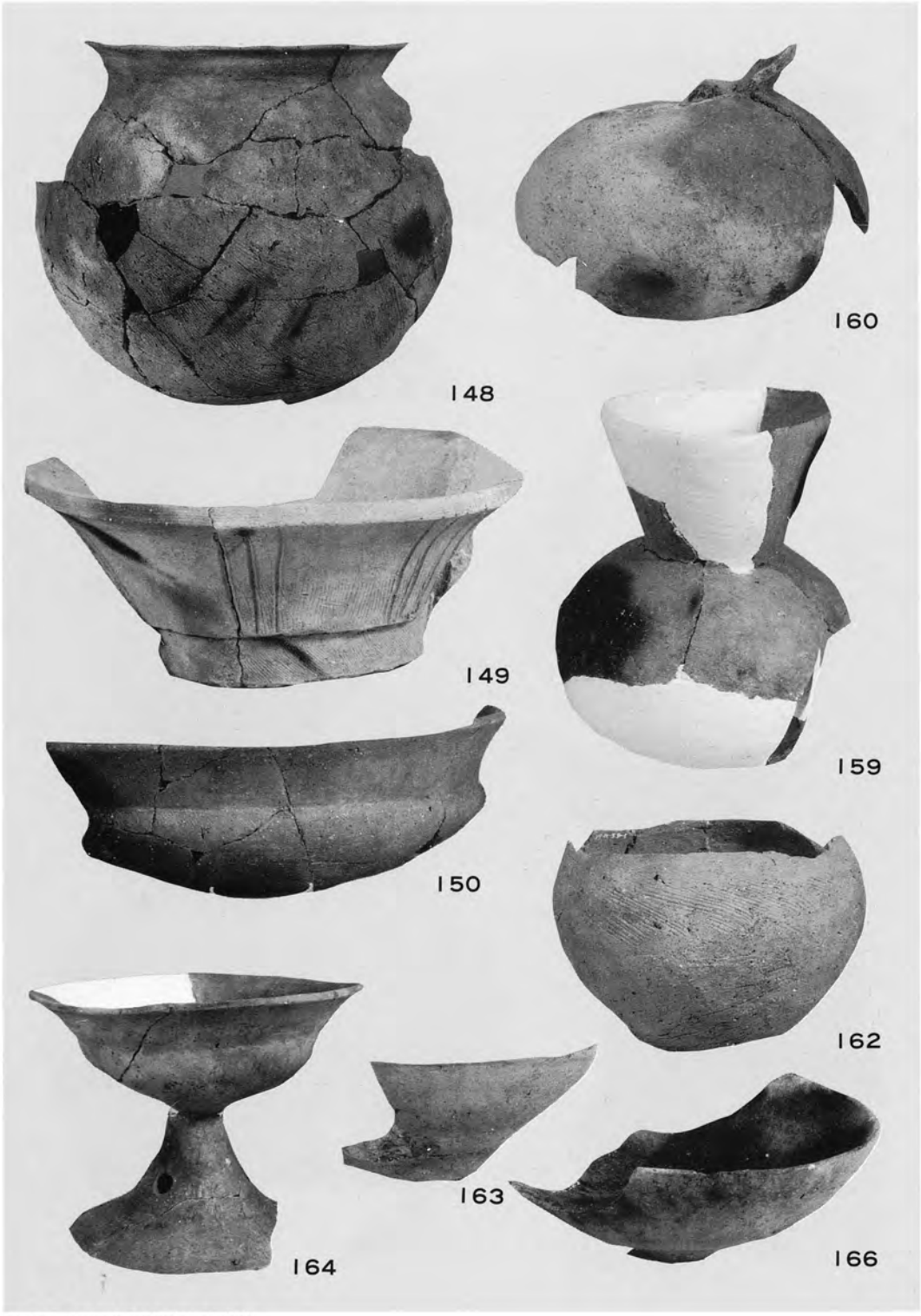


第15A・B号住居跡出土遺物 (2)

第16号住居跡出土遺物

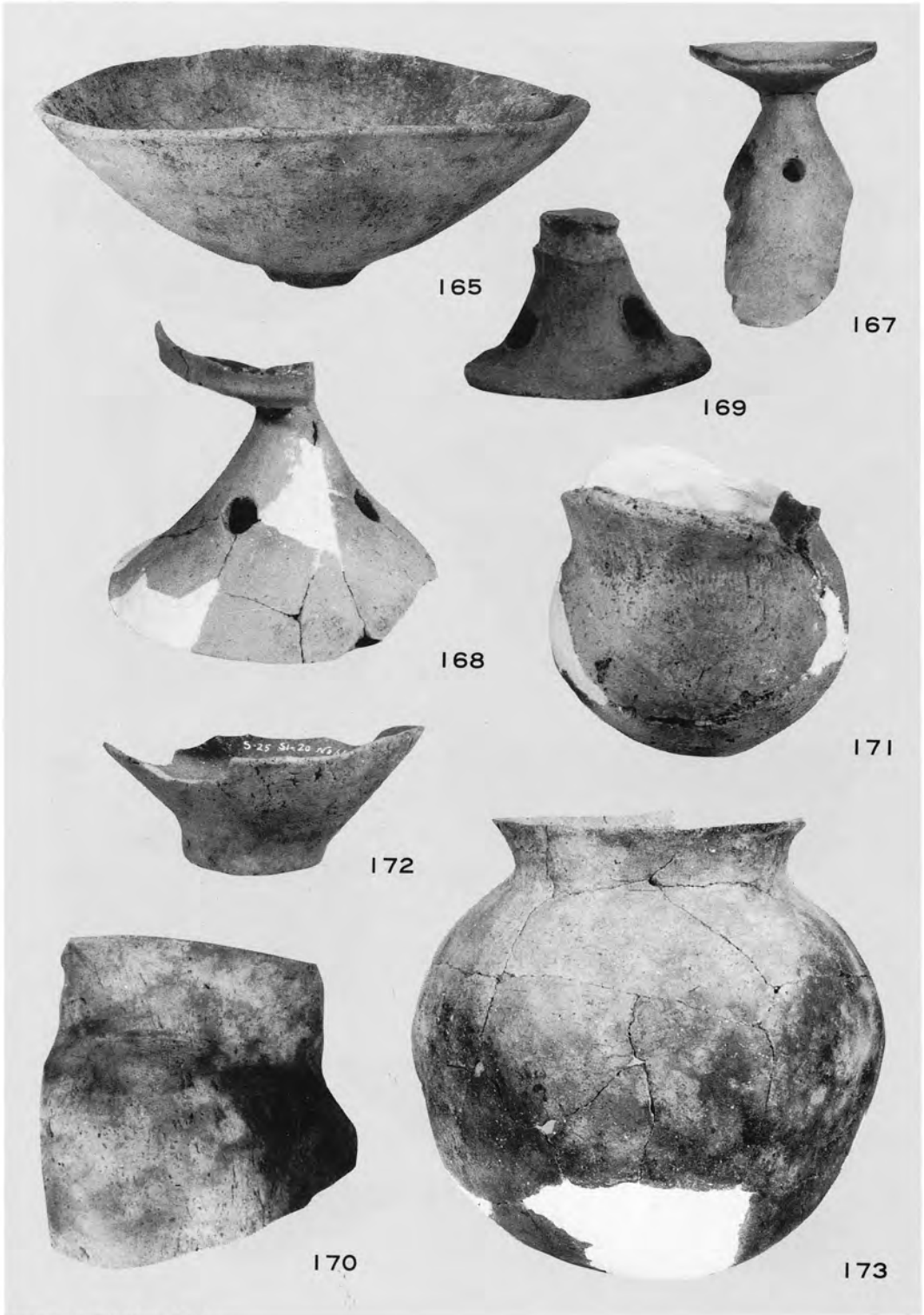


第17・18号住居跡出土遺物

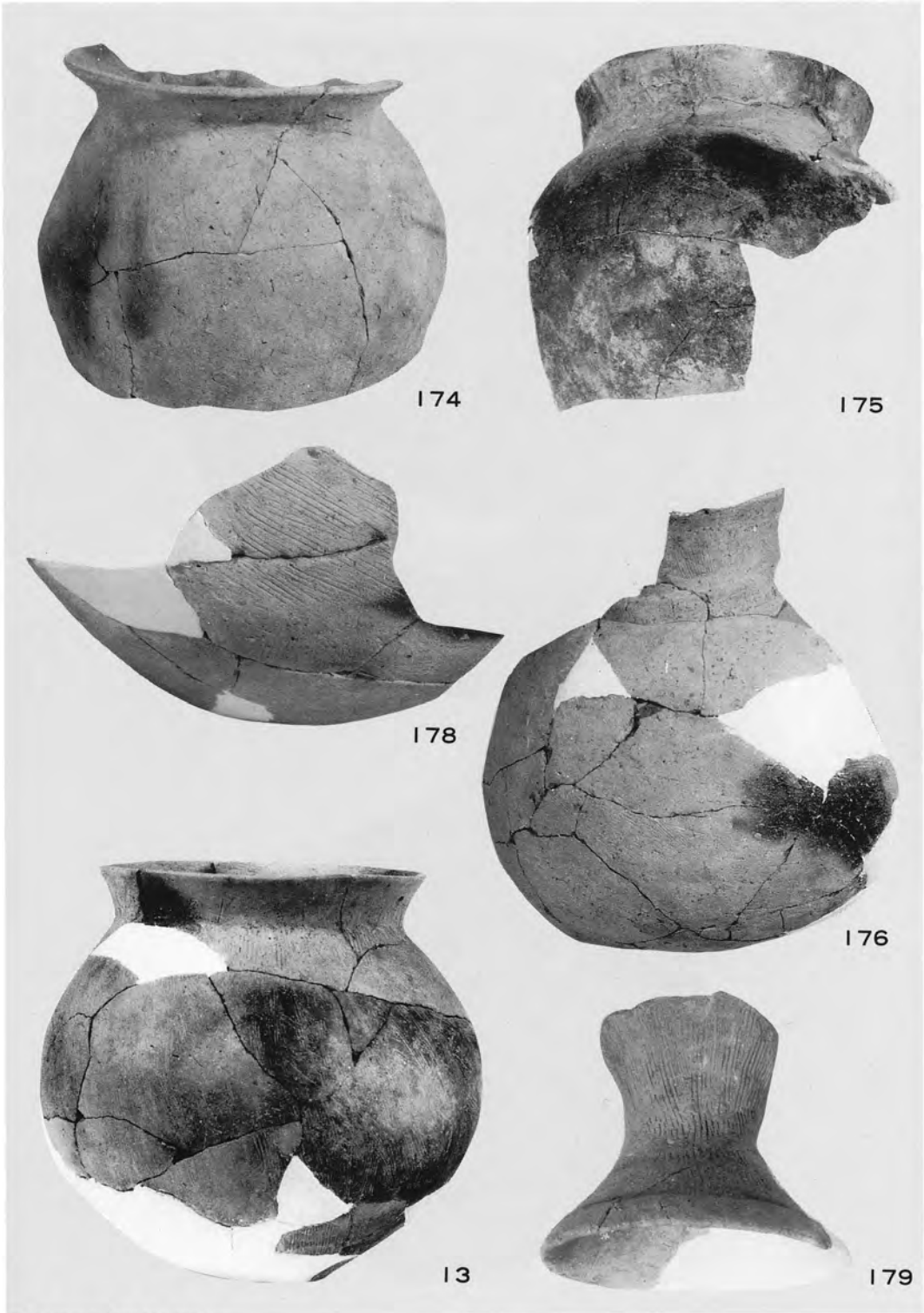


第19・20号住居跡出土遺物

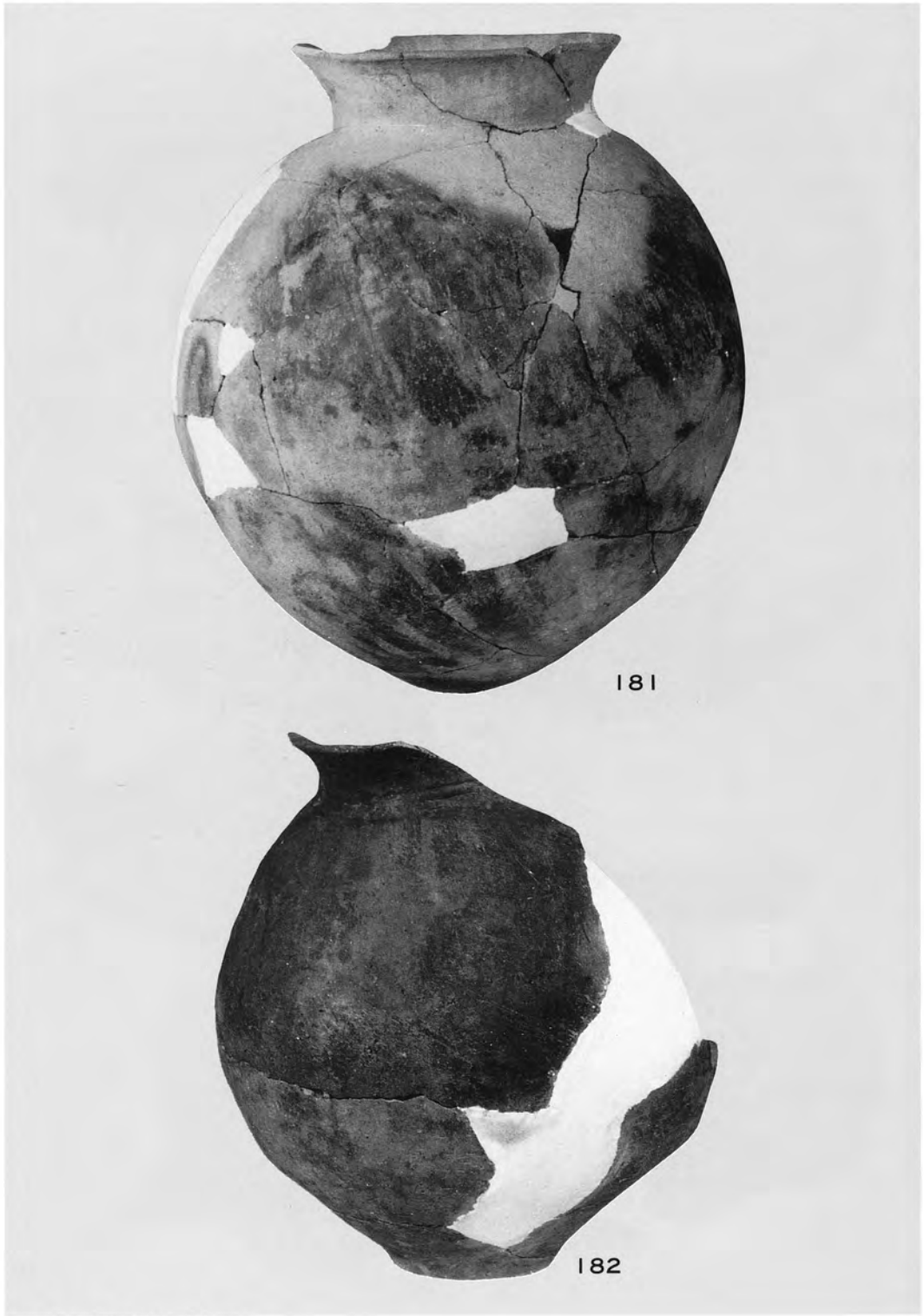
PL50



第20号住居跡出土遺物

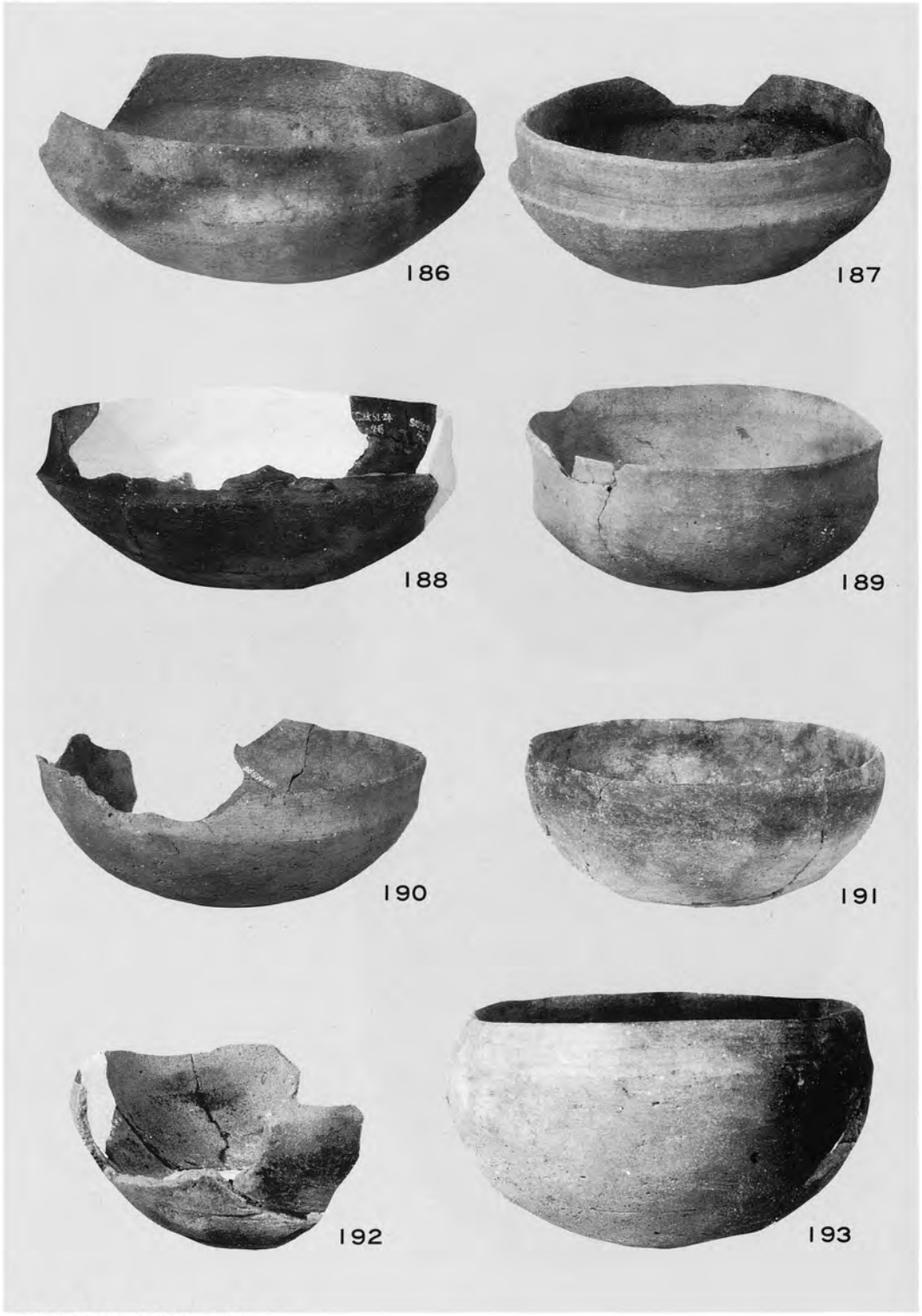


第21号住居跡出土遺物

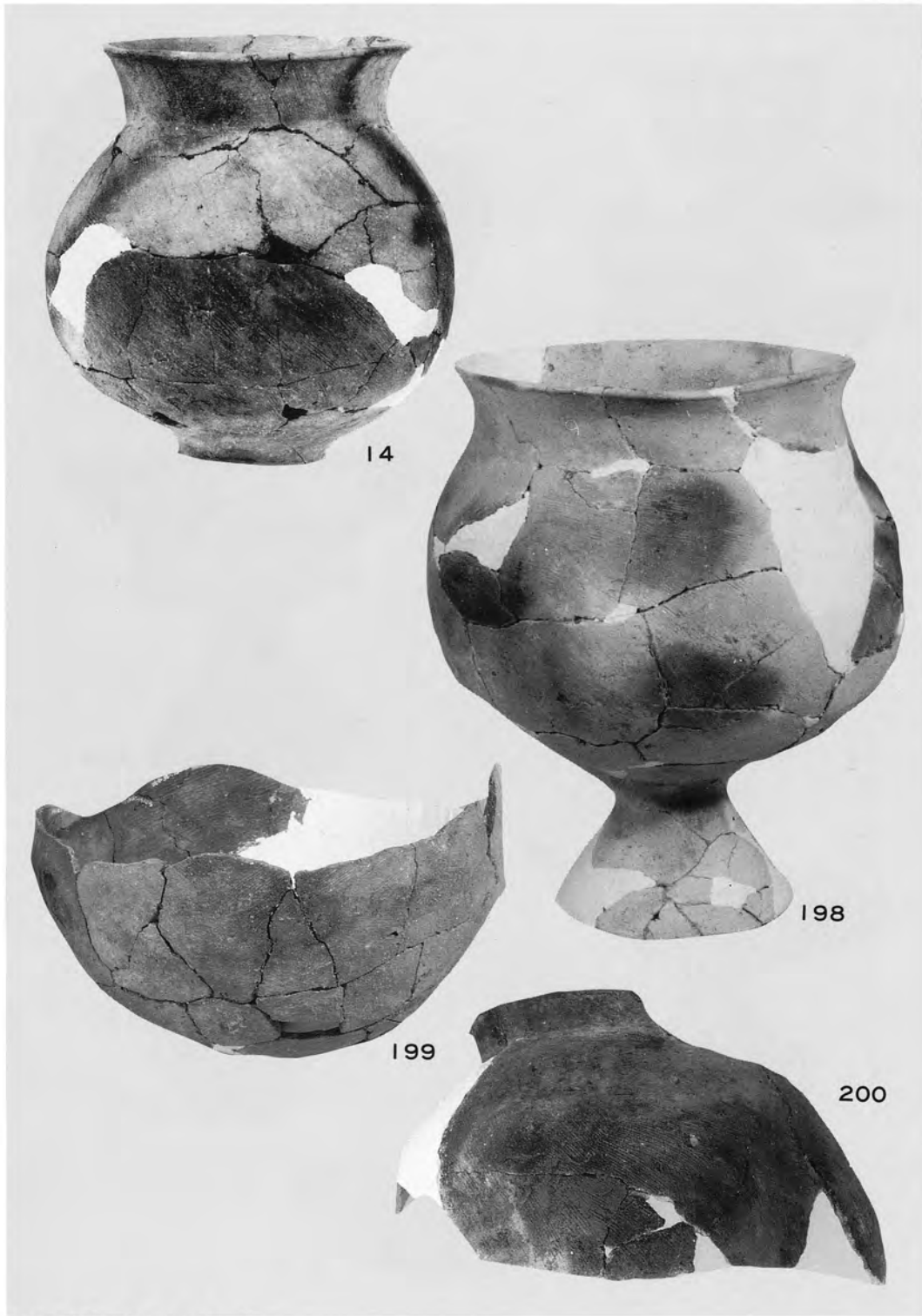


第24号住居跡出土遺物 (1)

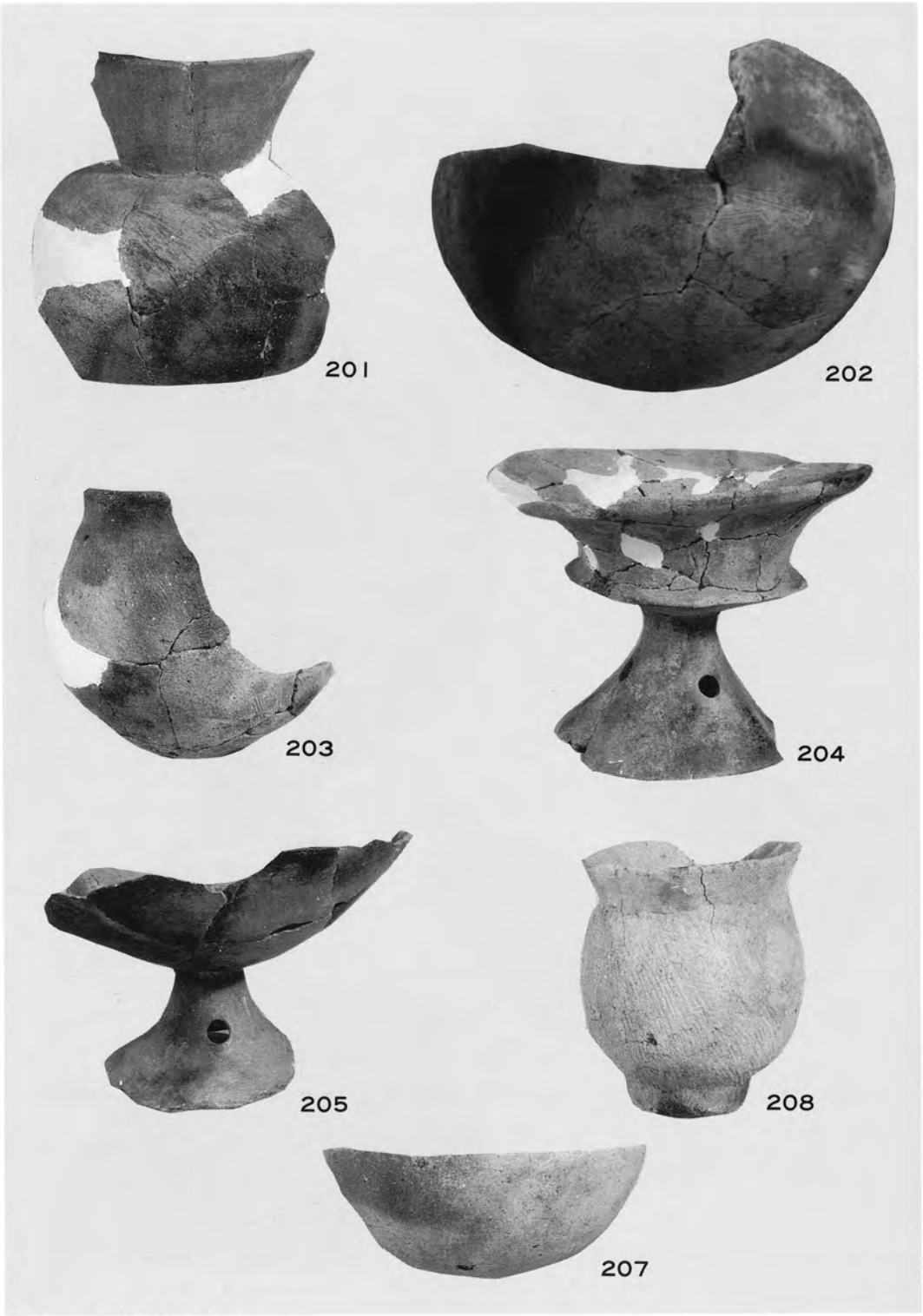
第24号住居跡出土遺物 (2)



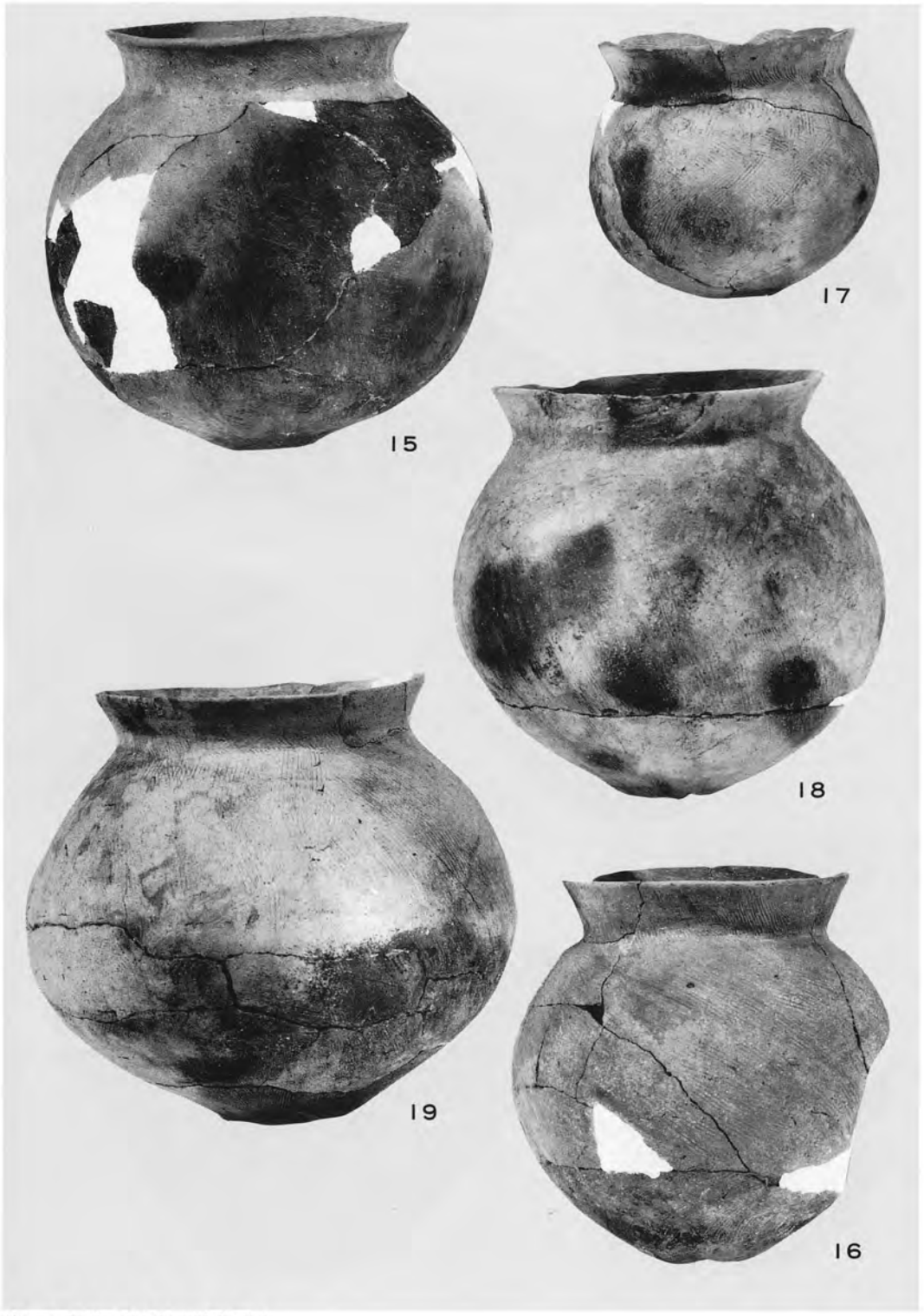
第24号住居跡出土遺物（3）



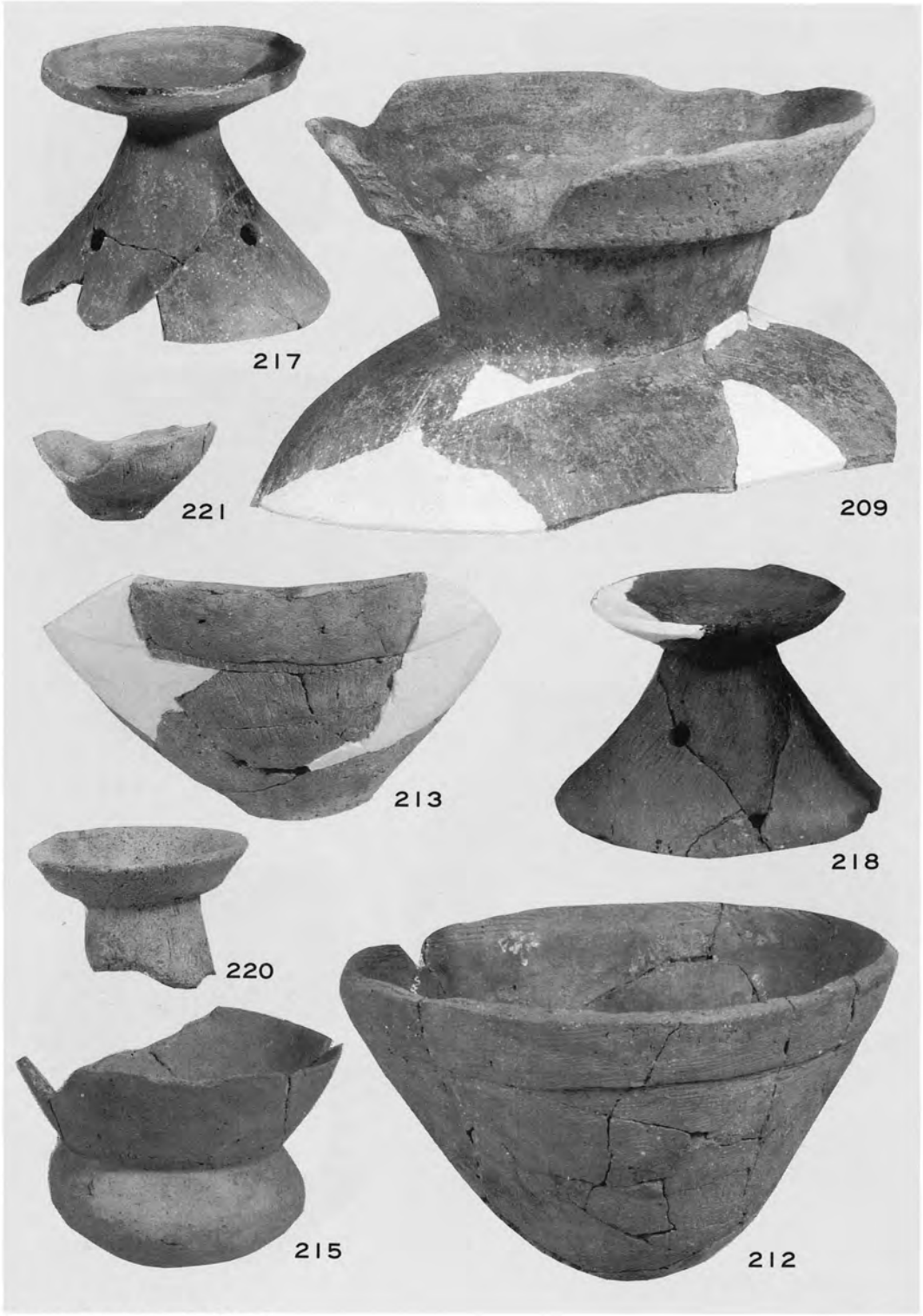
第25号住居跡出土遺物 (1)



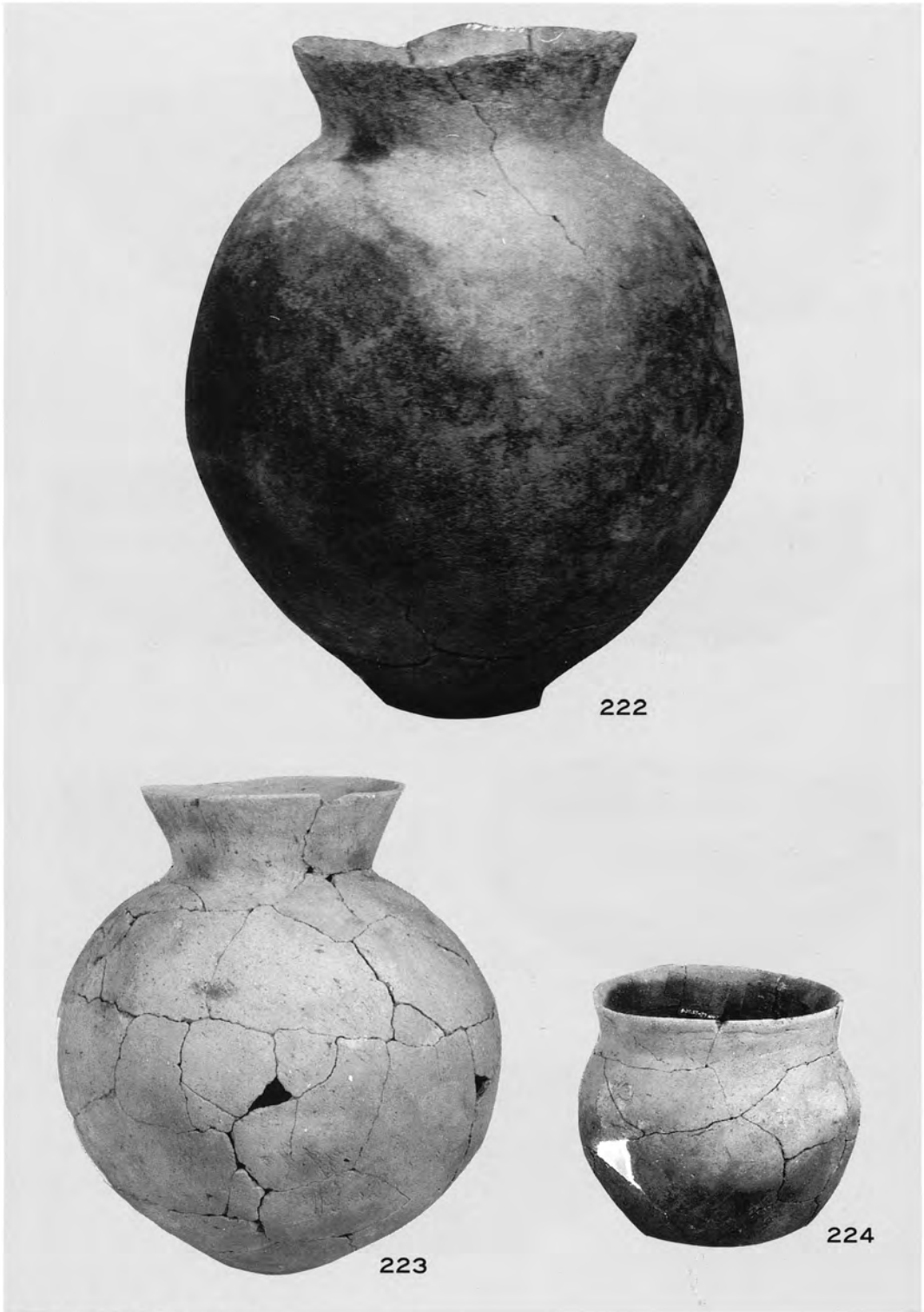
第25号住居跡出土遺物 (2)



第27A号住居跡出土遺物（1）

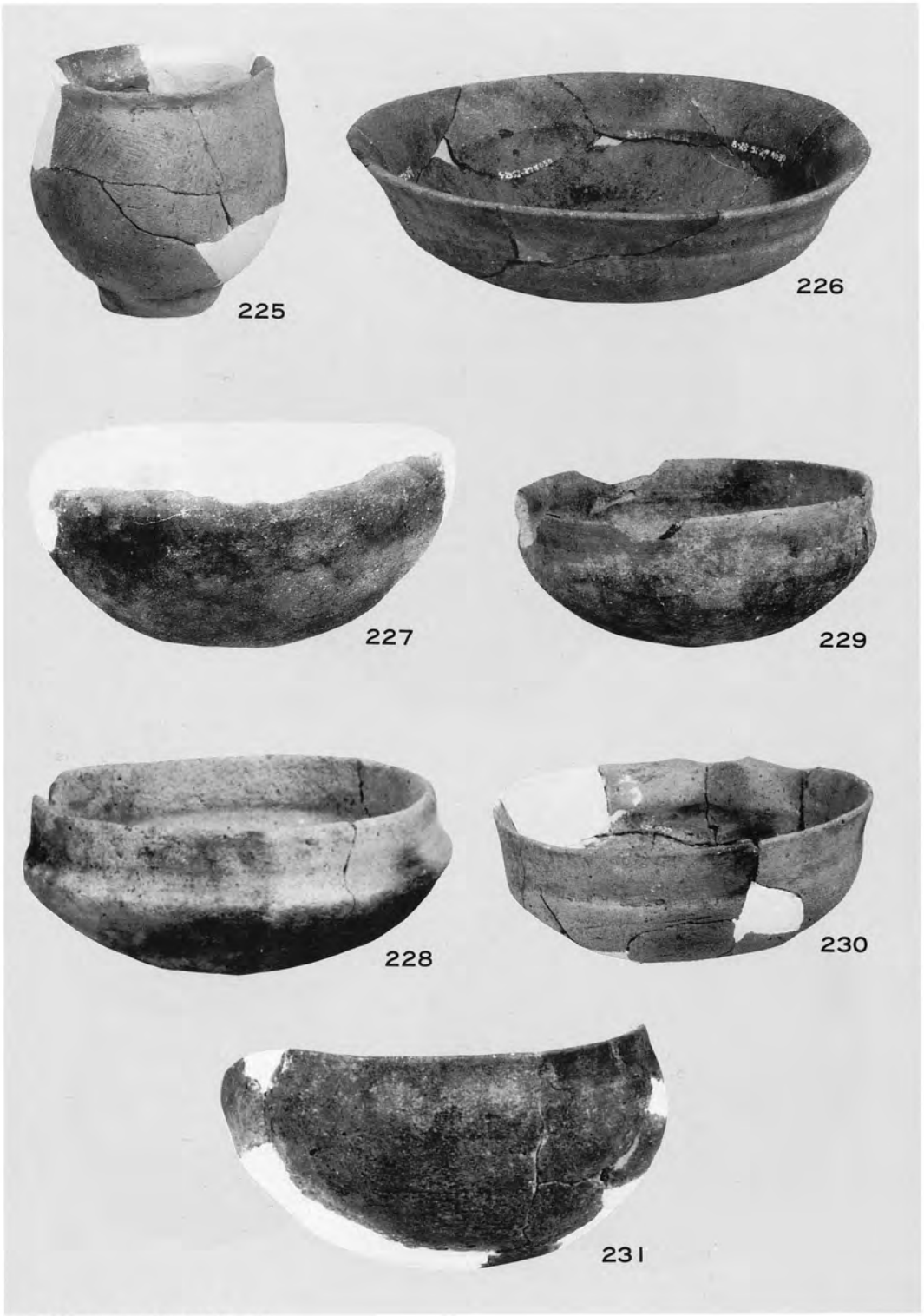


第27A号住居跡出土遺物（2）

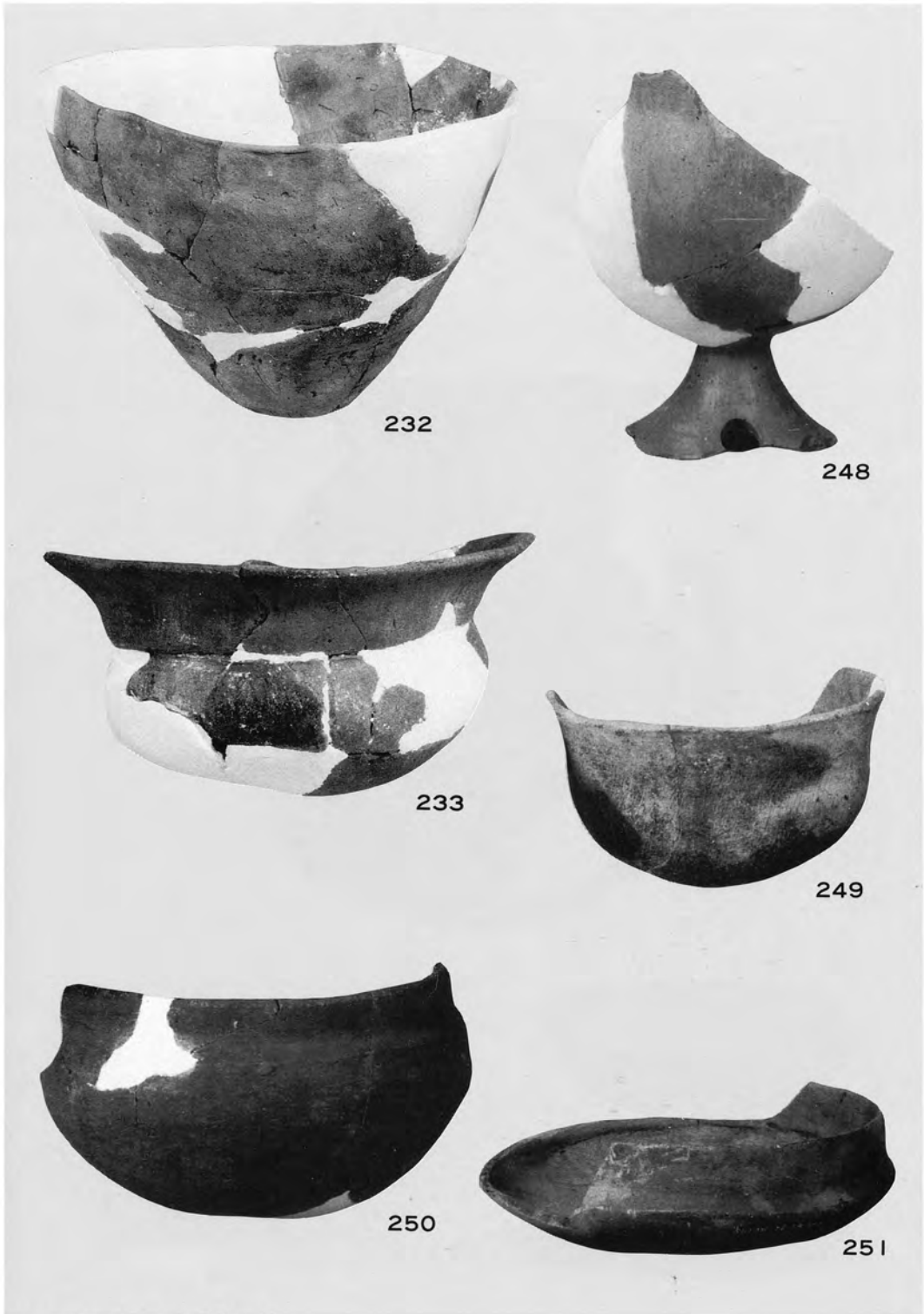


第27B号住居跡出土遺物（1）

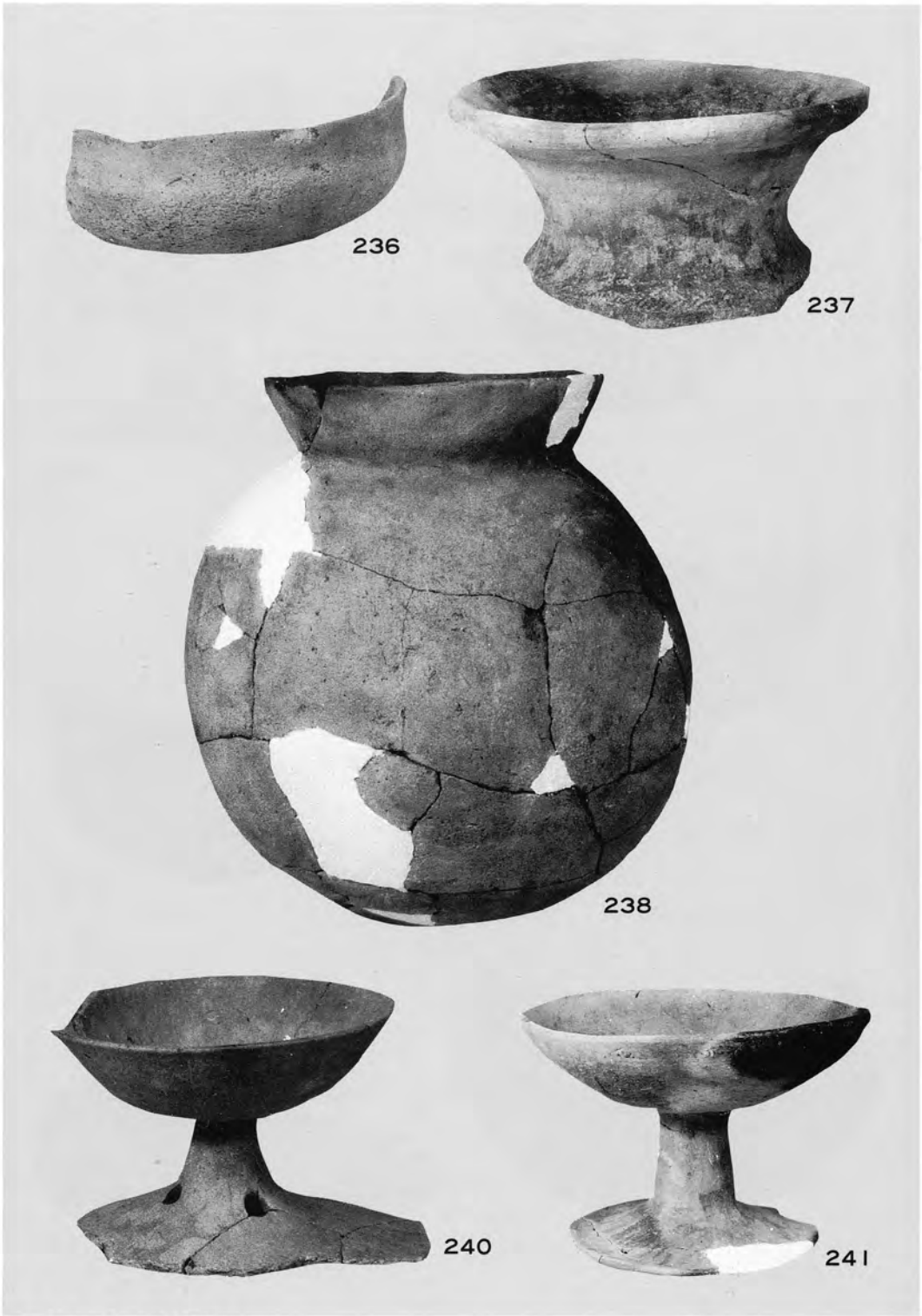
PL60



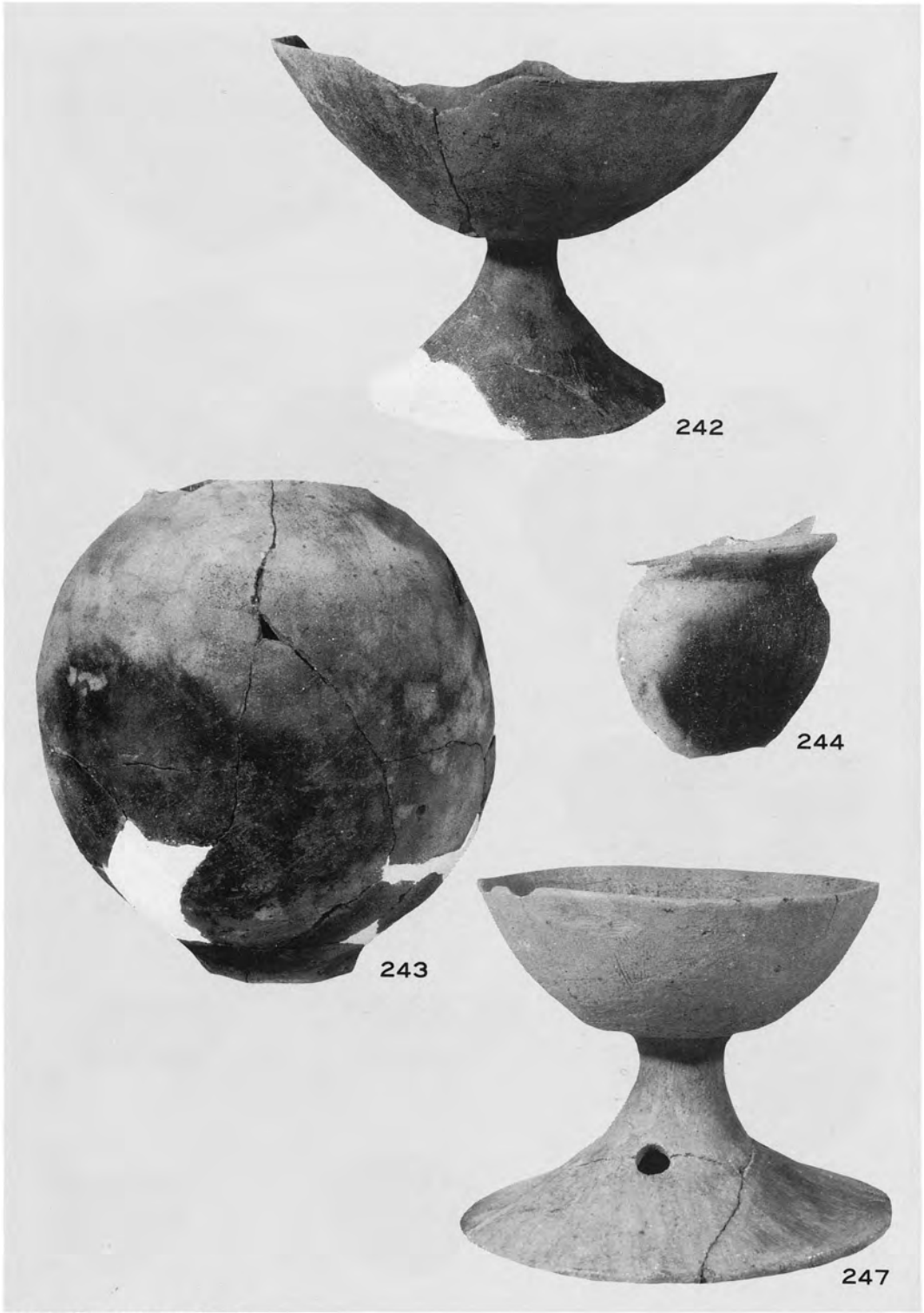
第27B号住居跡出土遺物（2）



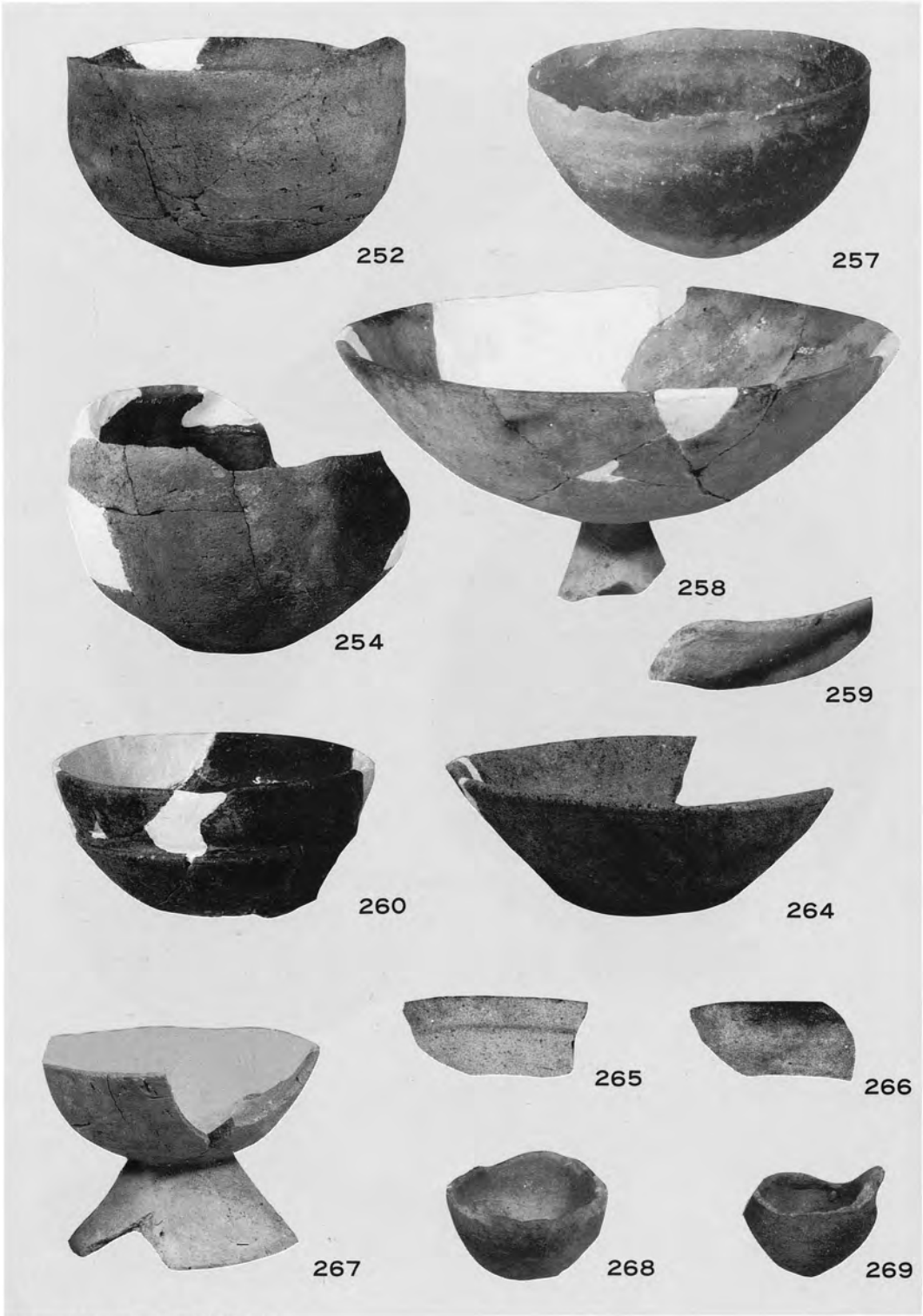
第27B号住居跡出土遺物（3）



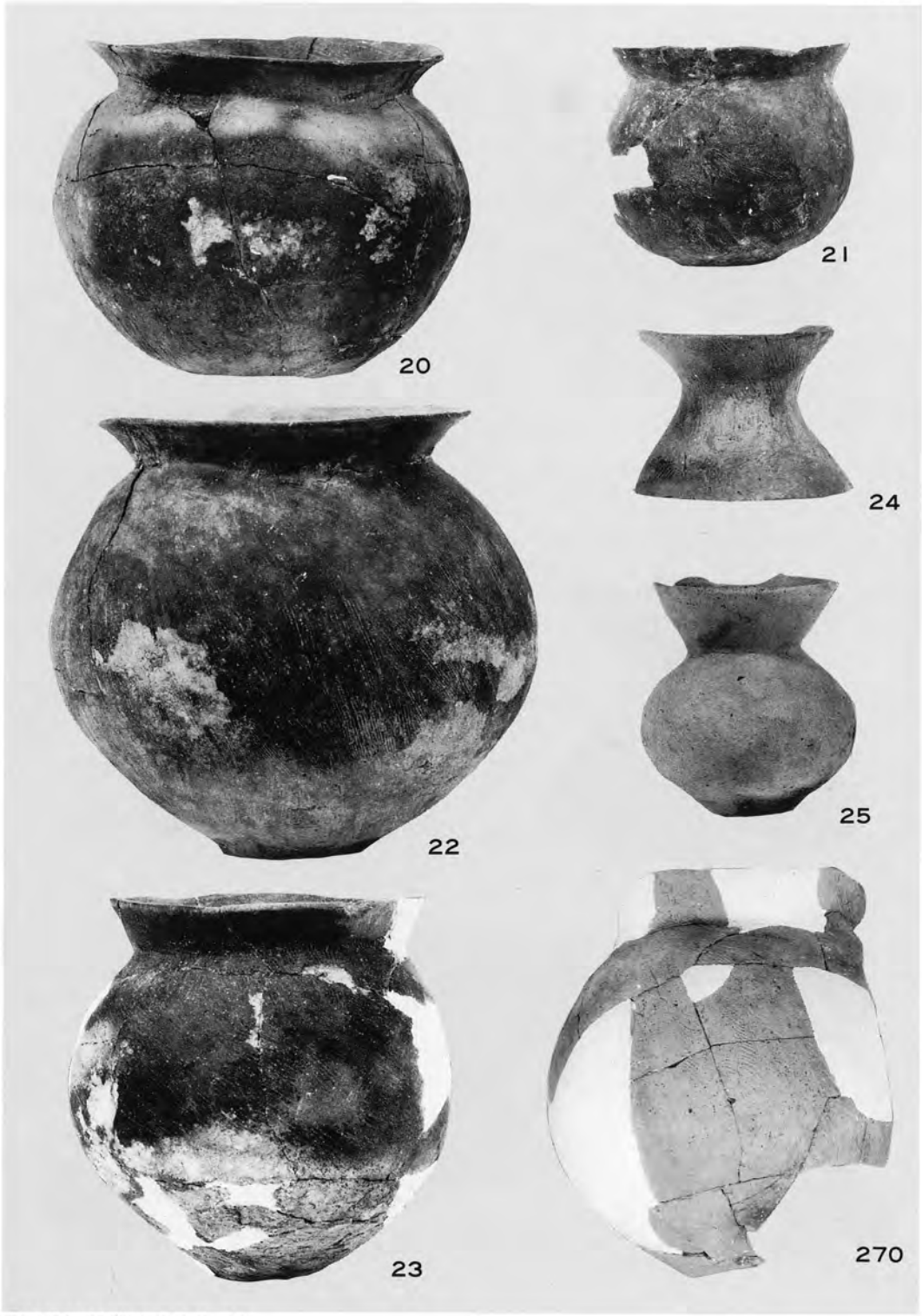
第29号住居跡出土遺物 (1)



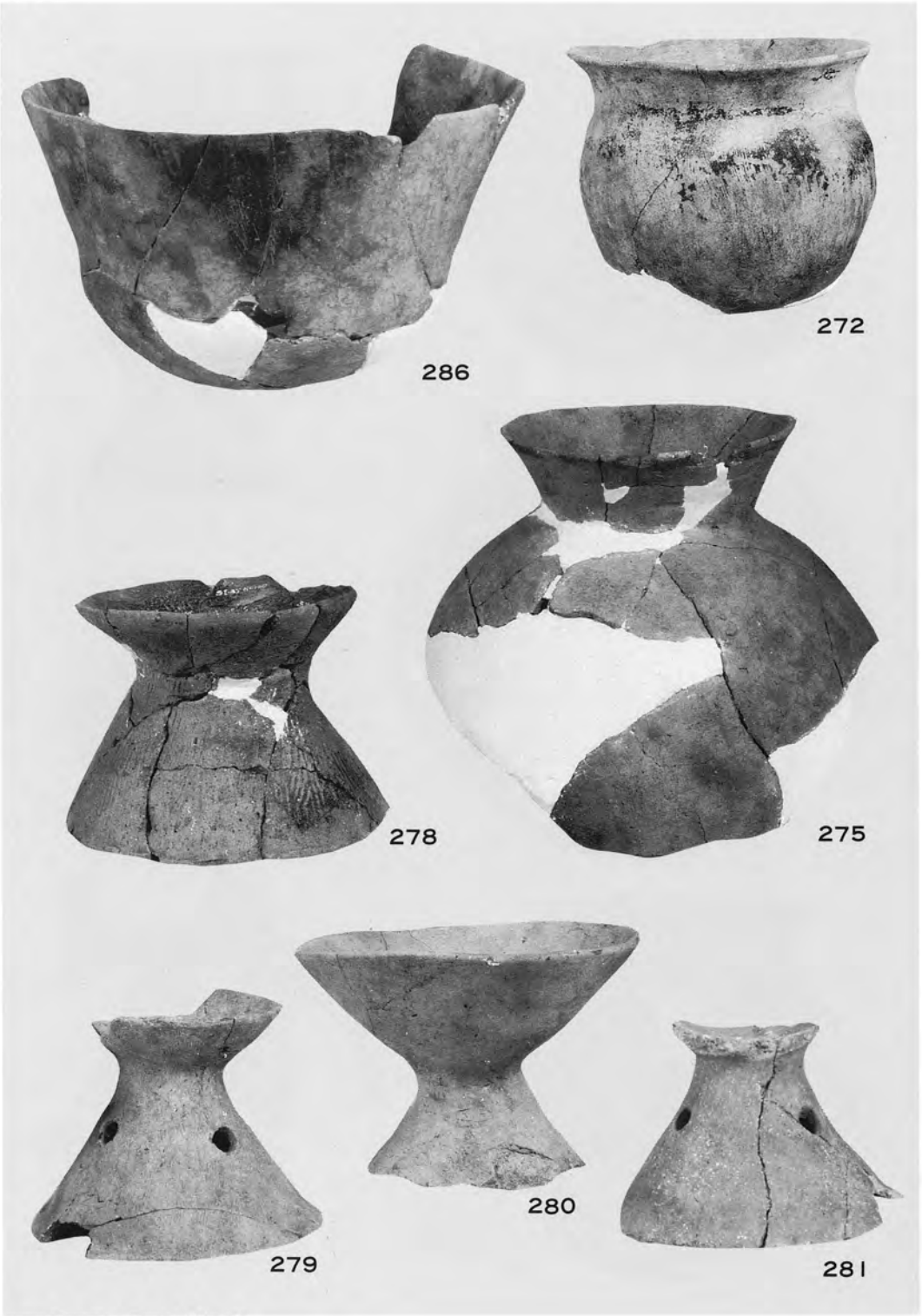
第29号住居跡出土遺物（2）



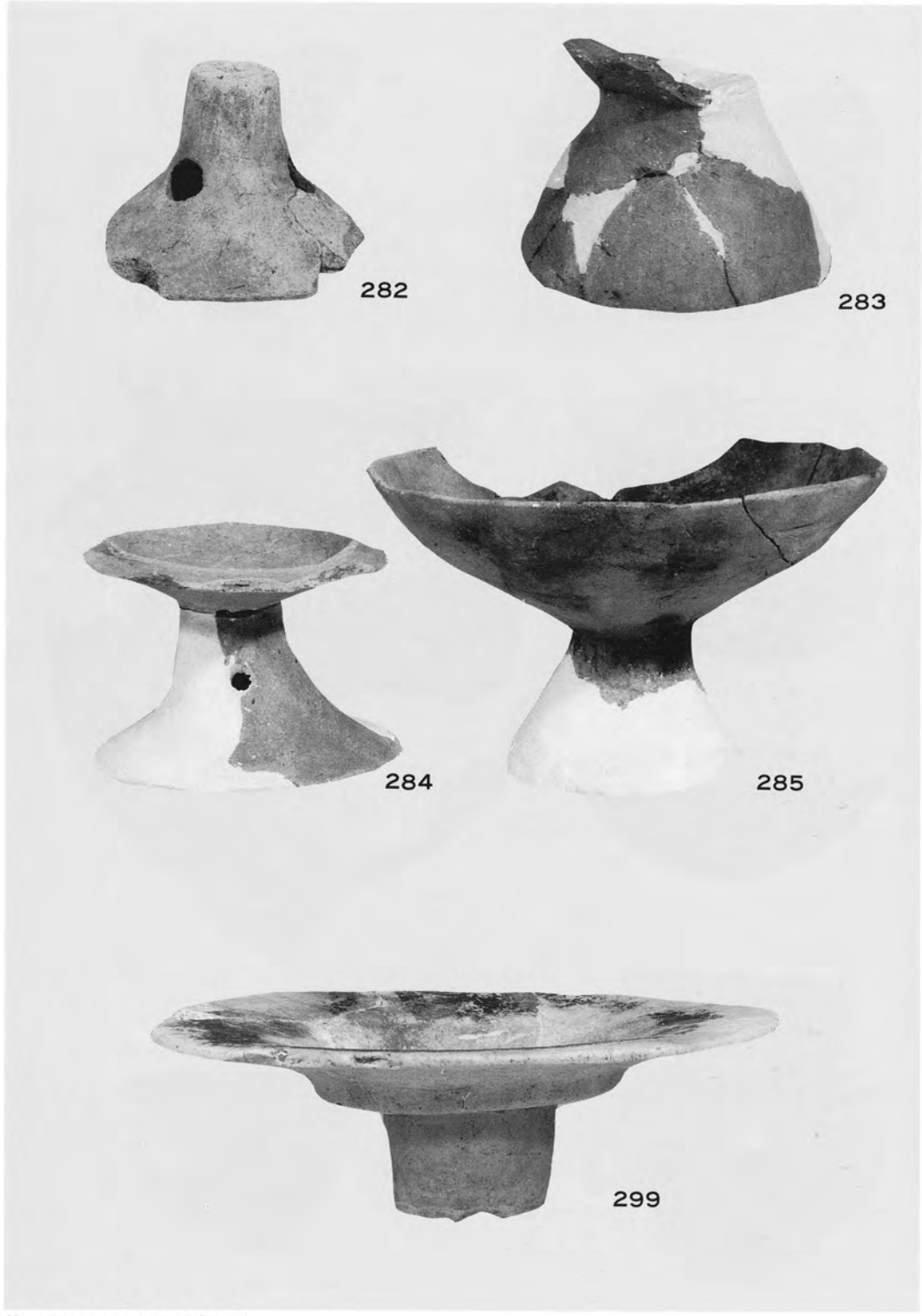
第30・31・34号住居跡出土遺物



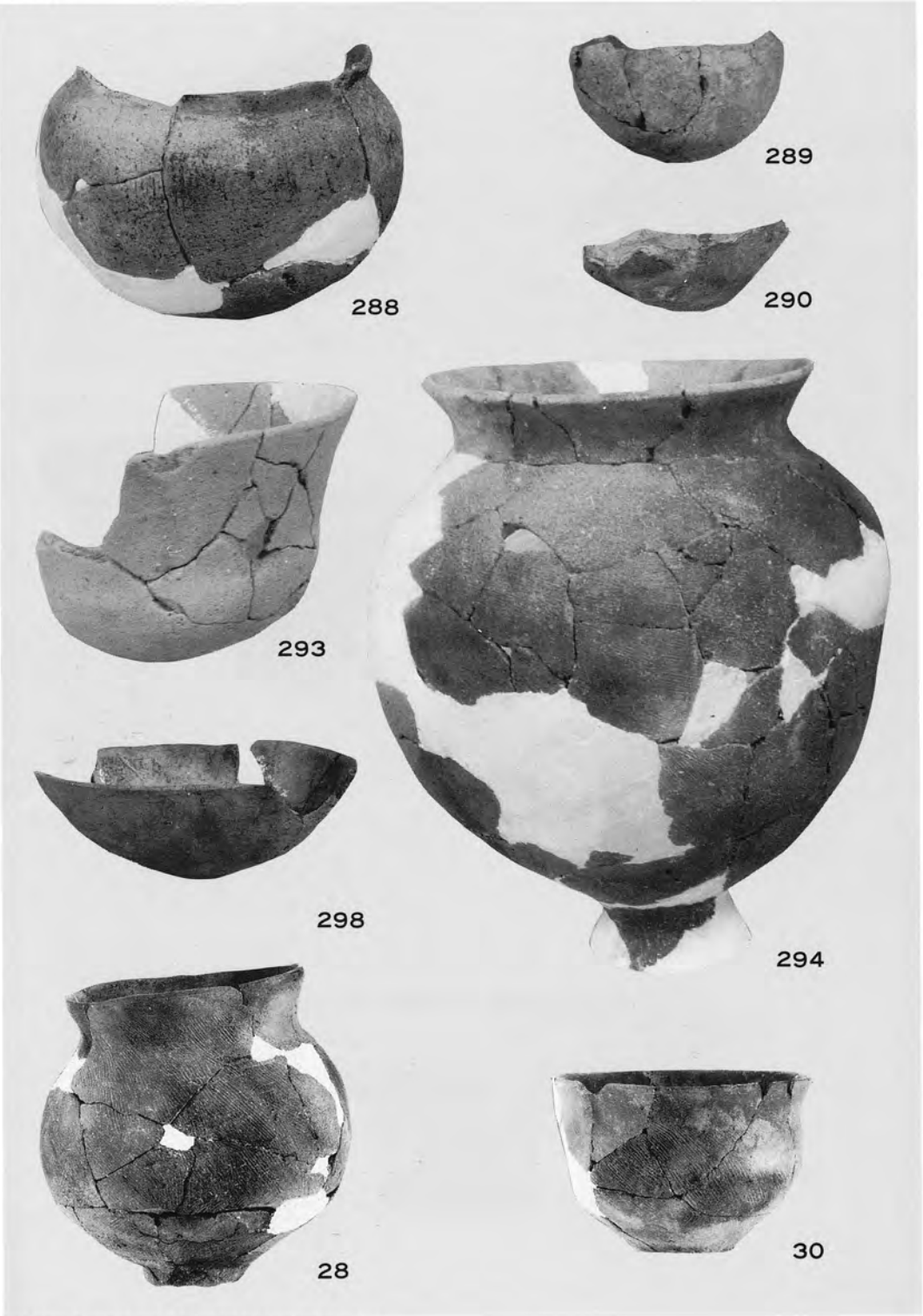
第35号住居跡出土遺物（1）



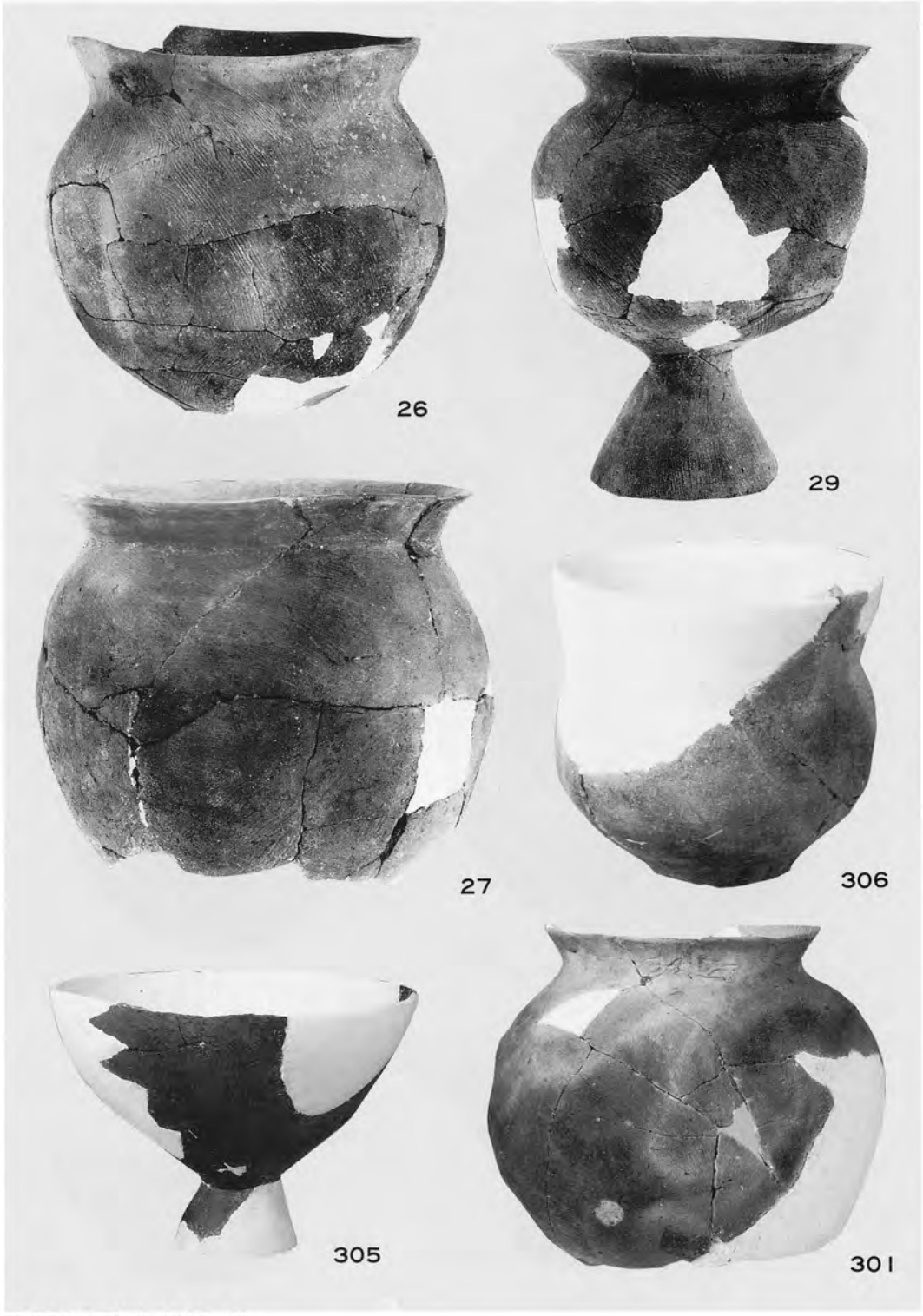
第35号住居跡出土遺物 (2)



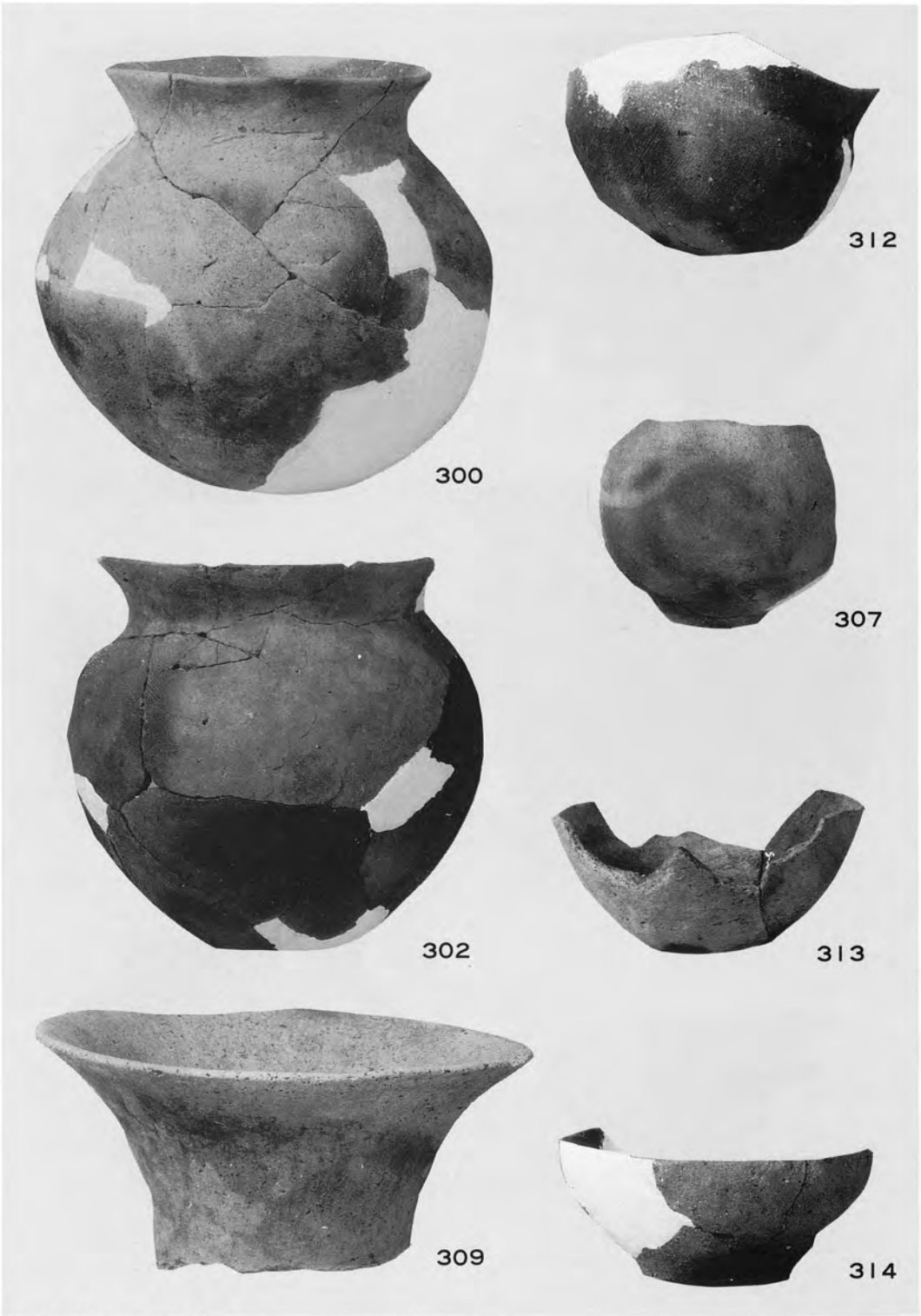
第35号住居跡出土遺物（3）



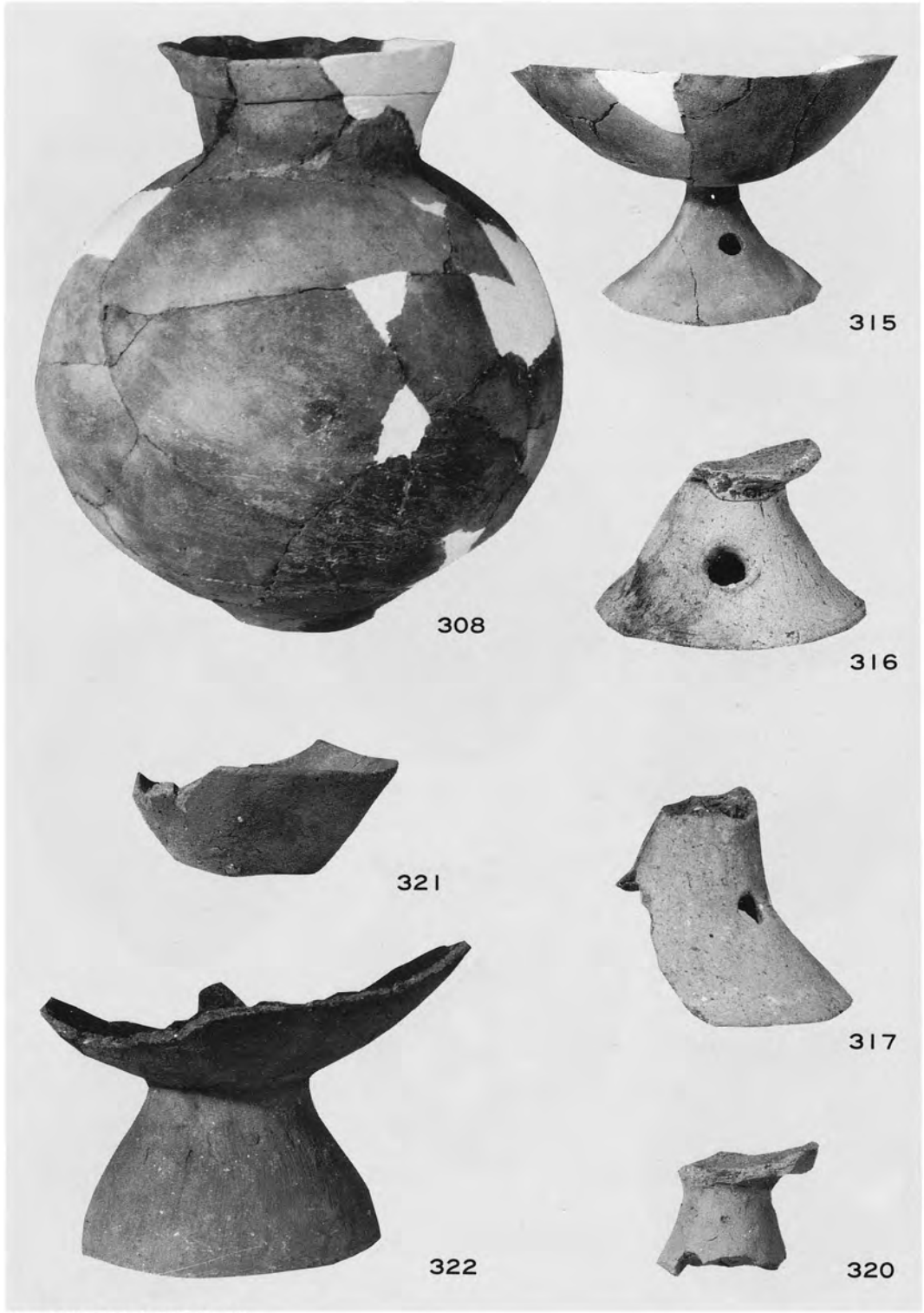
第35・36・37・38号住居跡出土遺物（4）



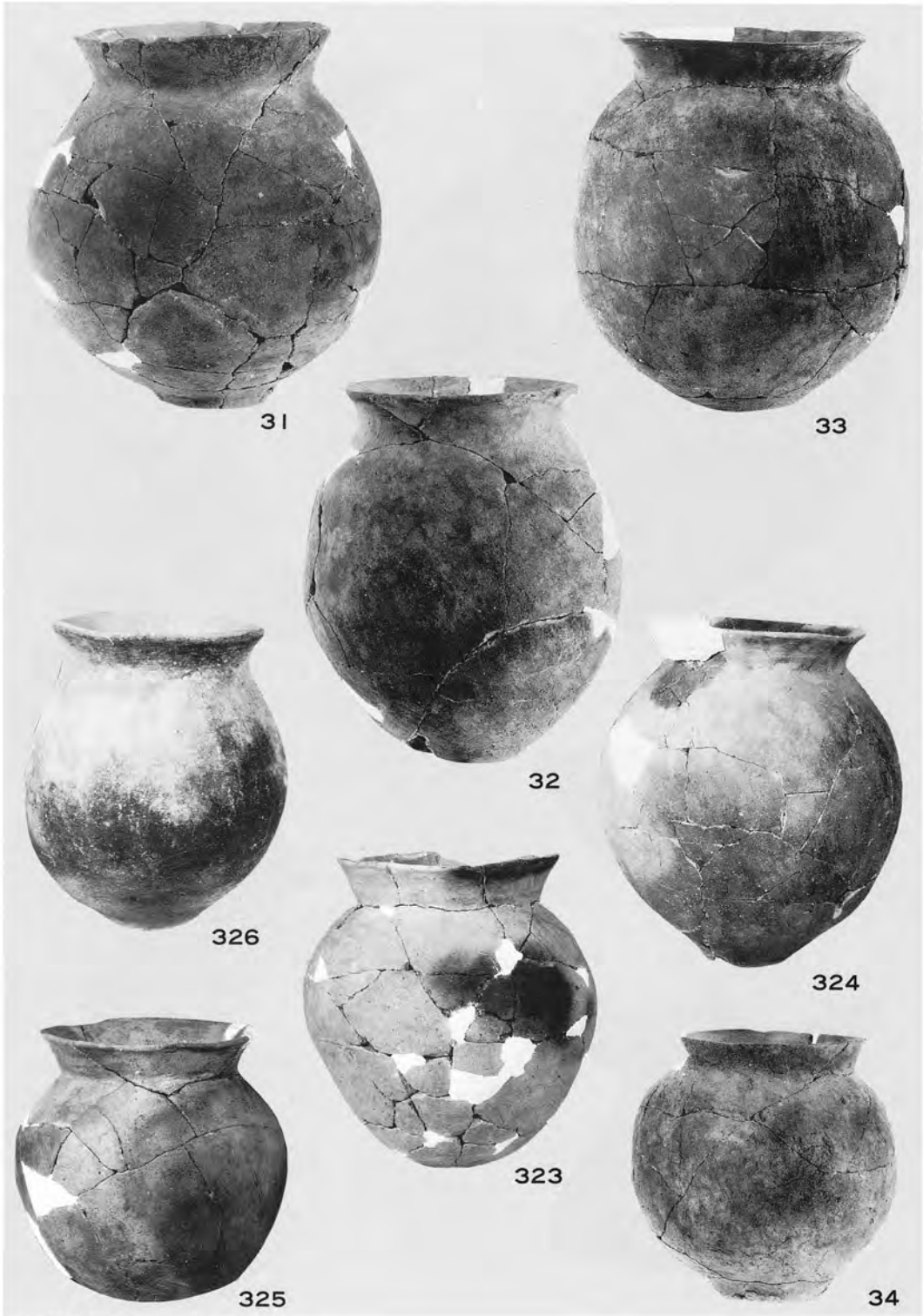
第38号住居跡出土遺物（1）



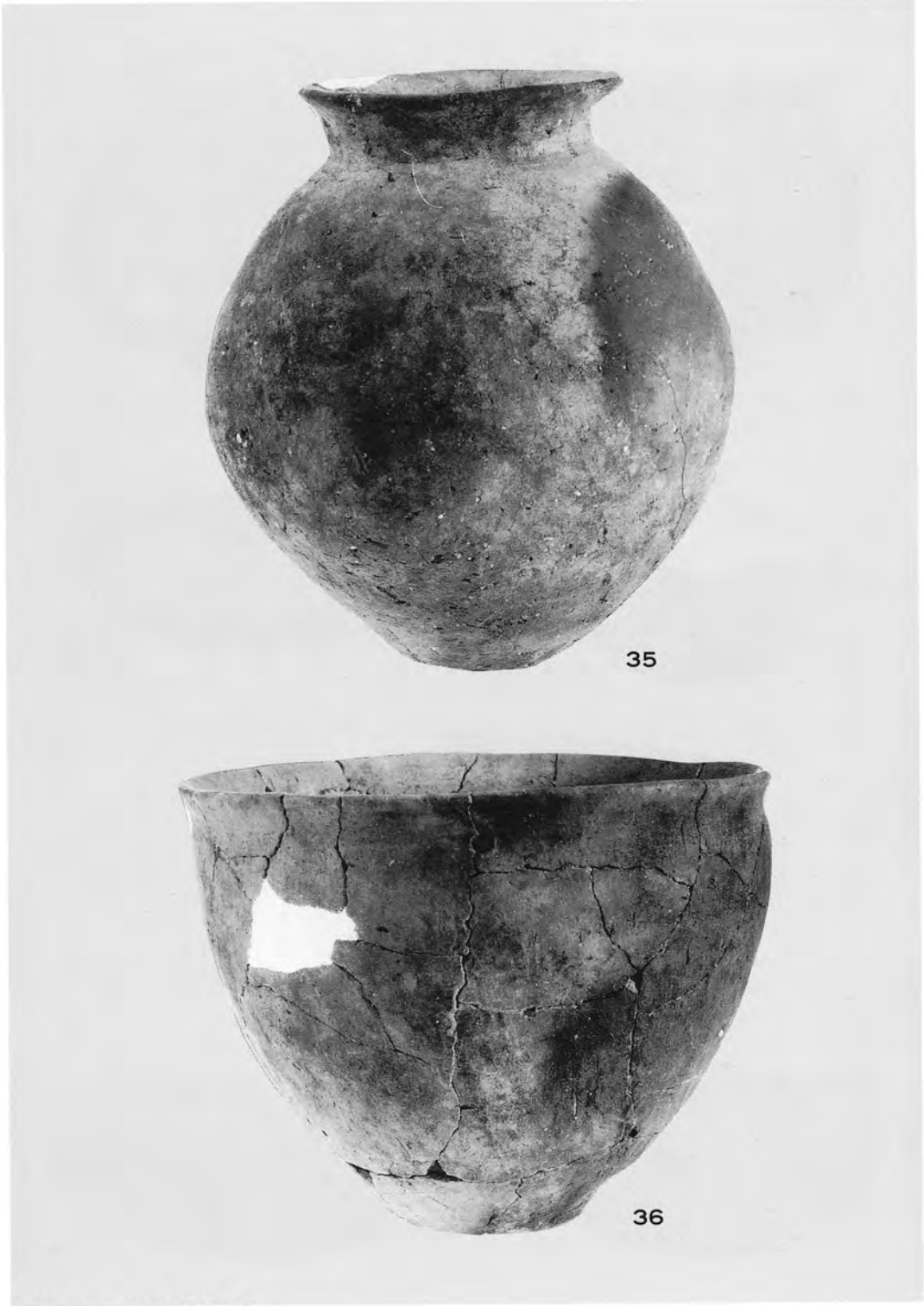
第38号住居跡出土遺物 (2)



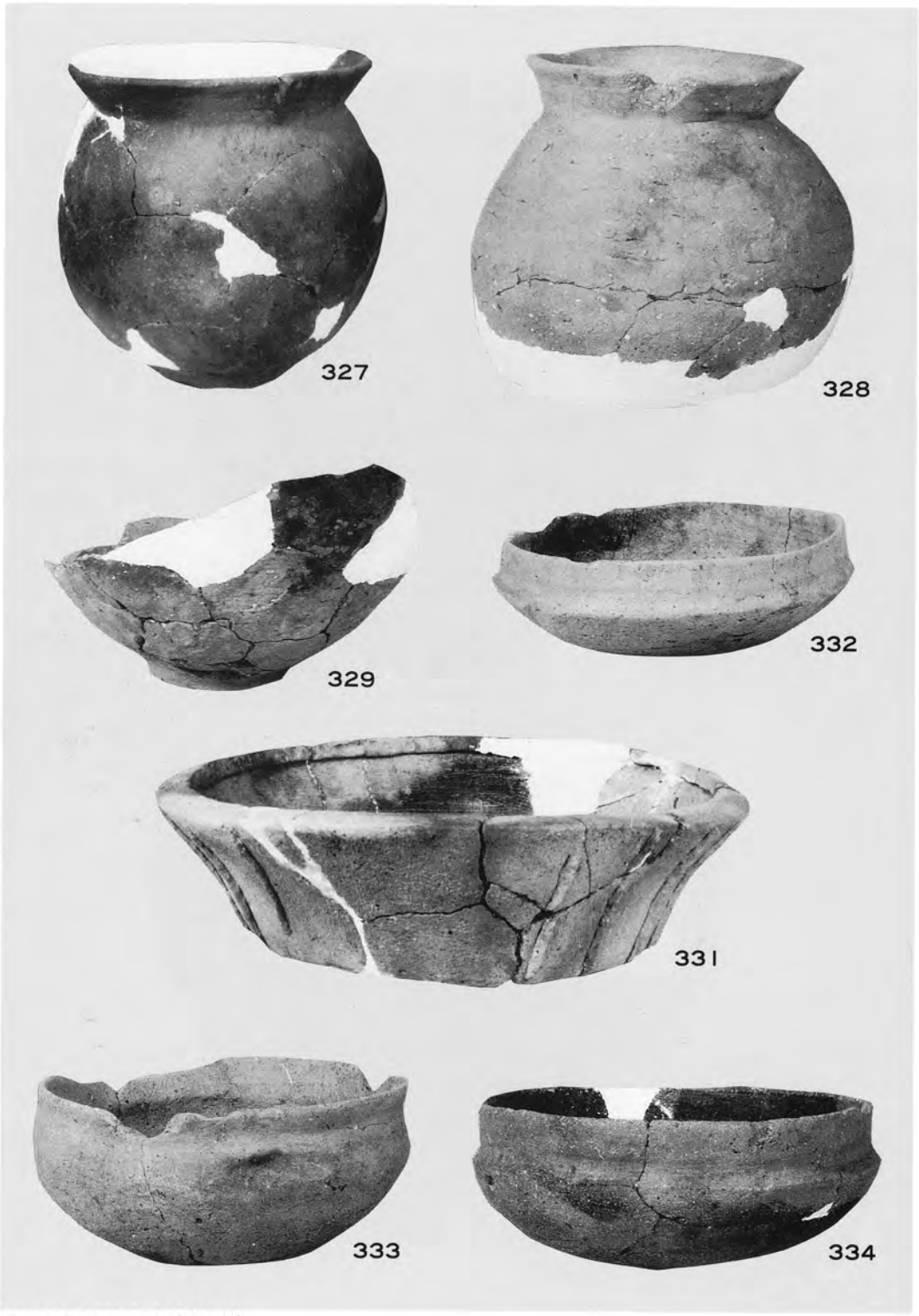
第38号住居跡出土遺物 (3)



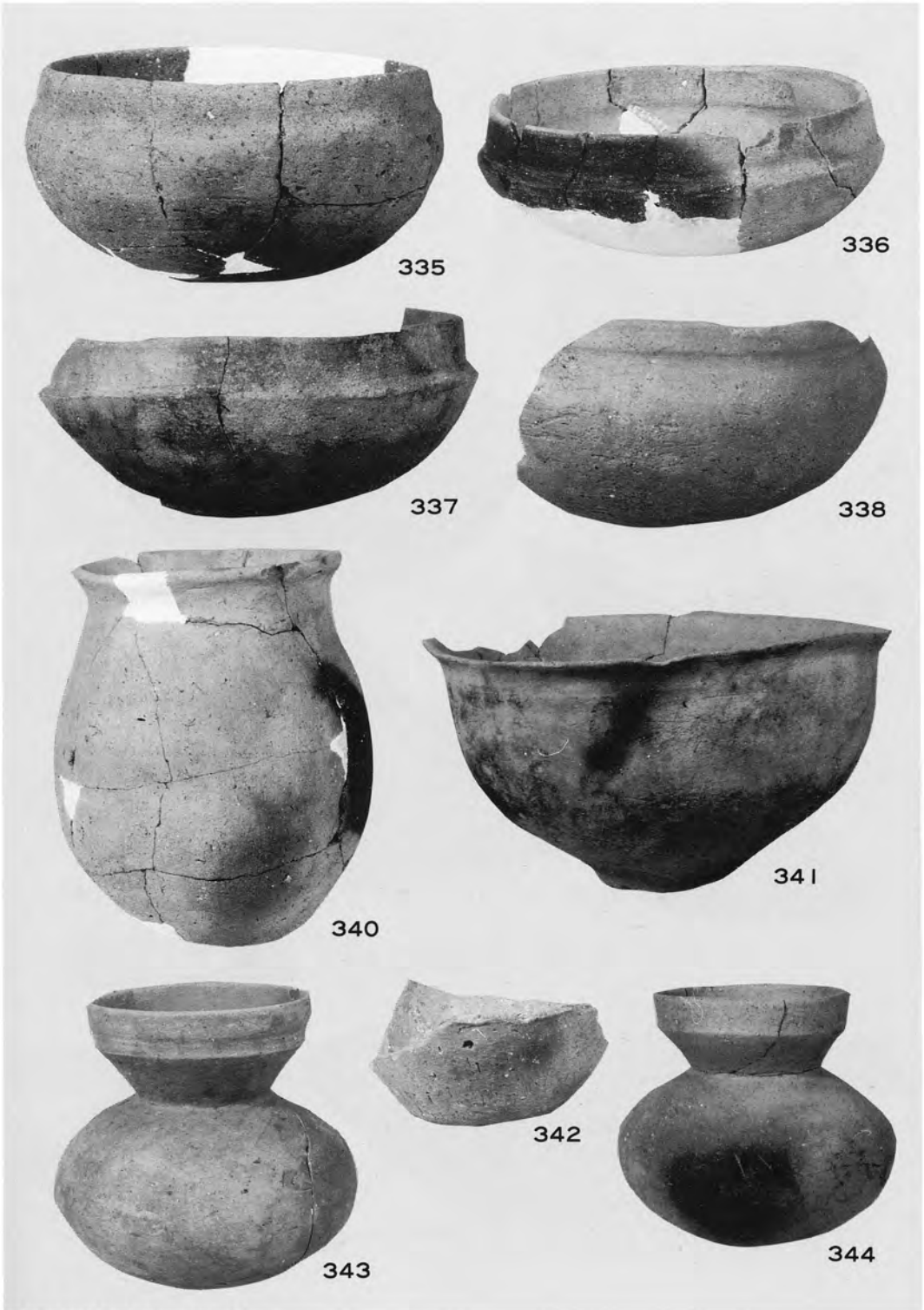
第39号住居跡出土遺物 (1)



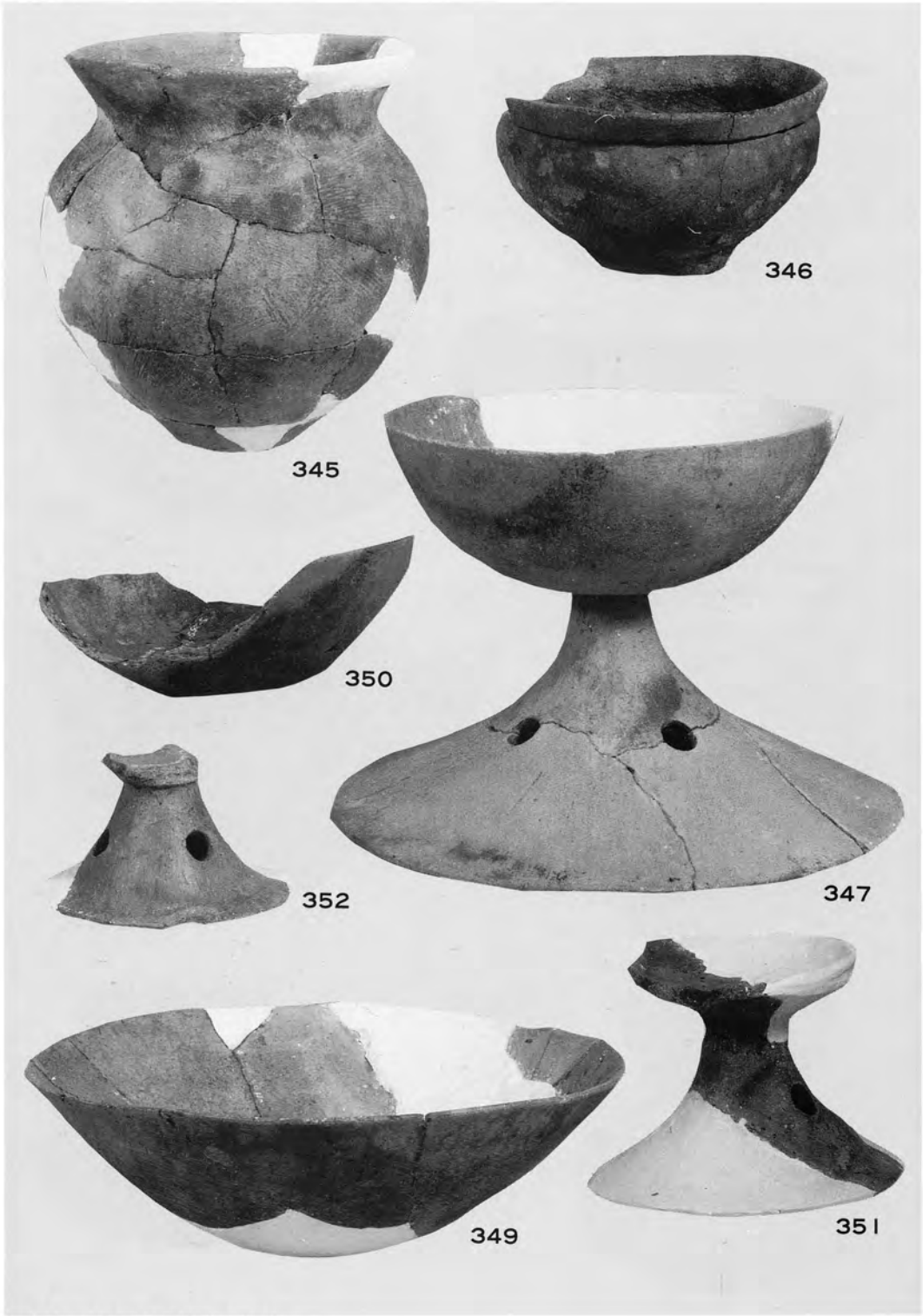
第39号住居跡出土遺物（2）



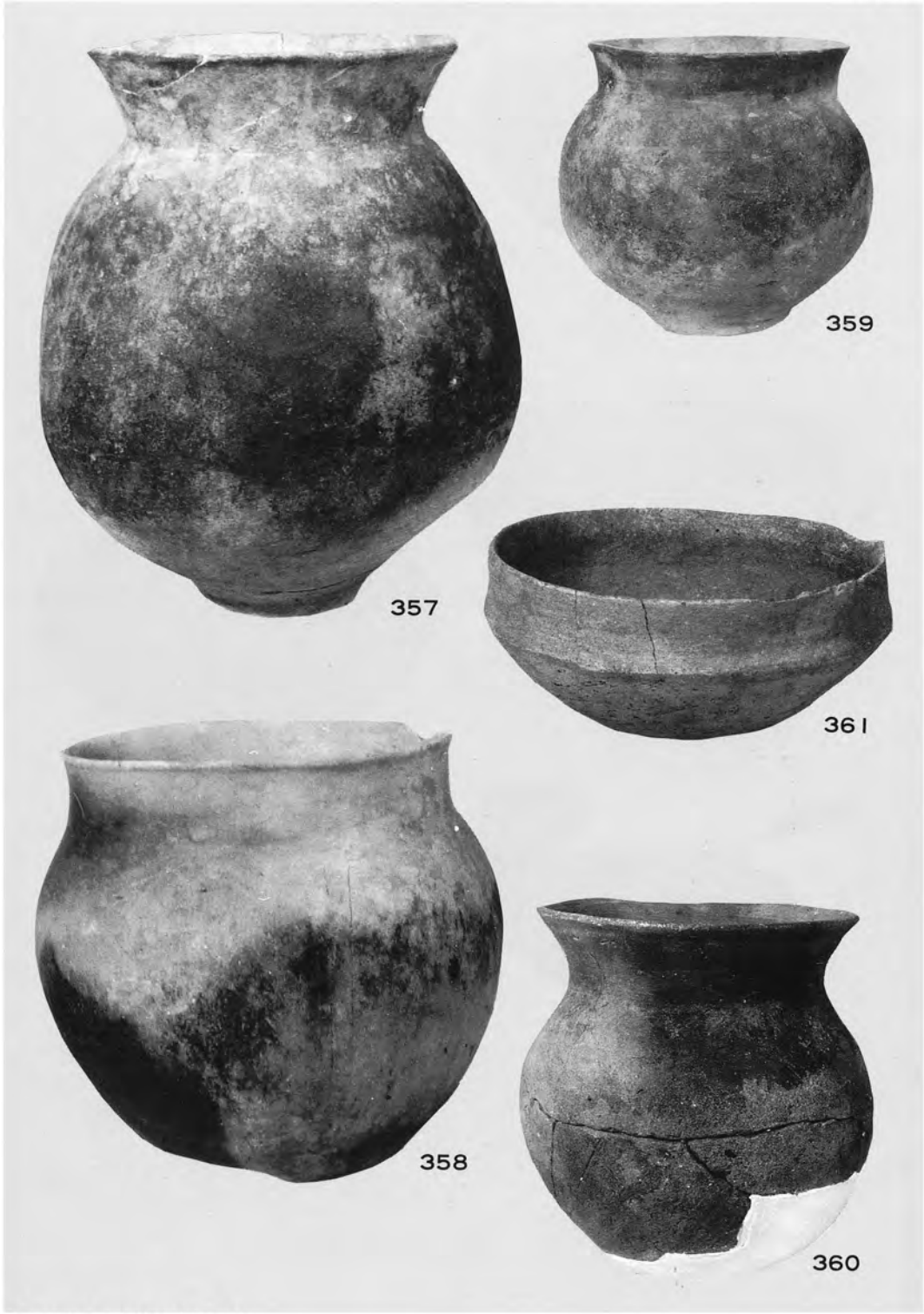
第39号住居跡出土遺物（3）



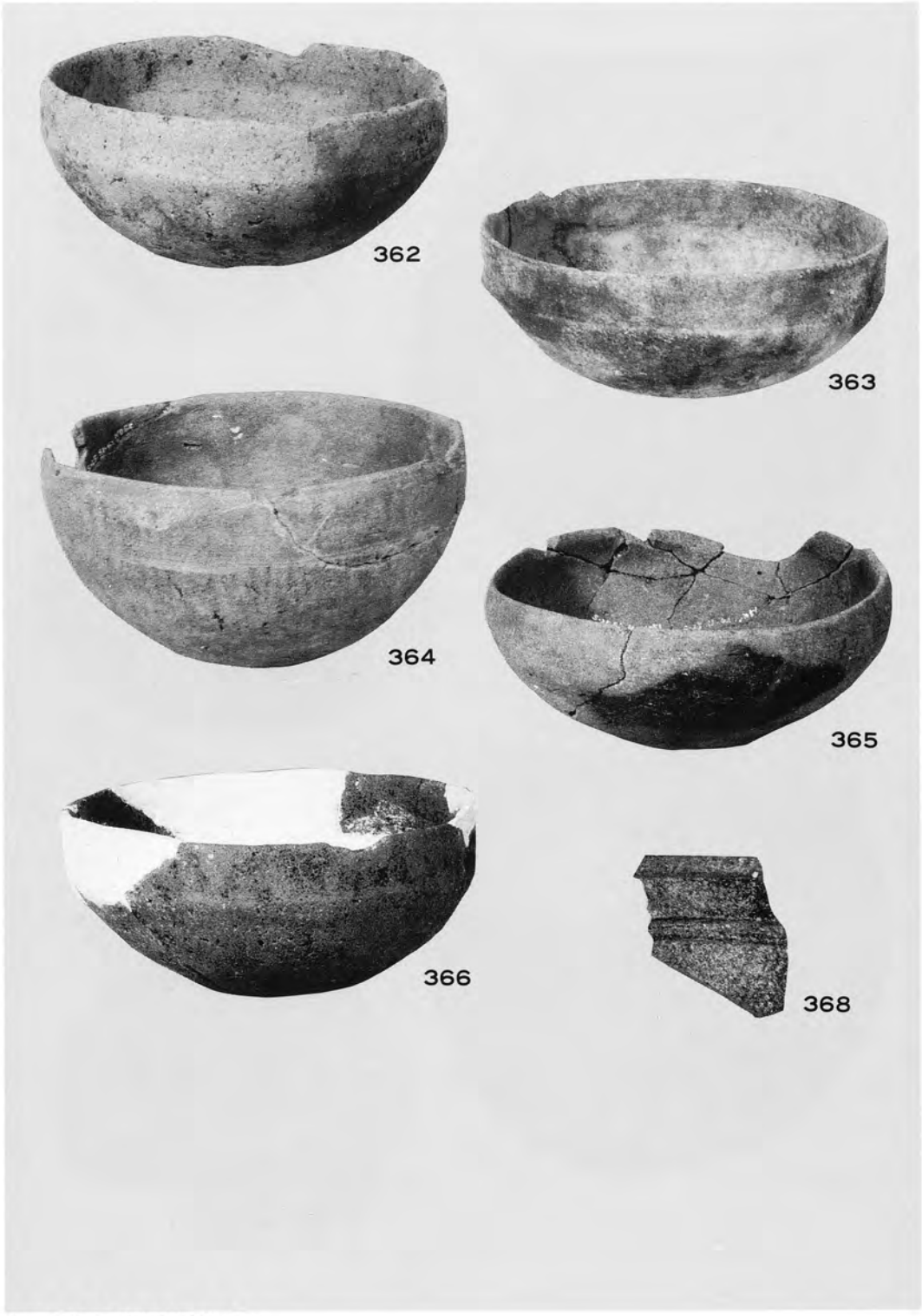
第39号住居跡出土遺物 (4)



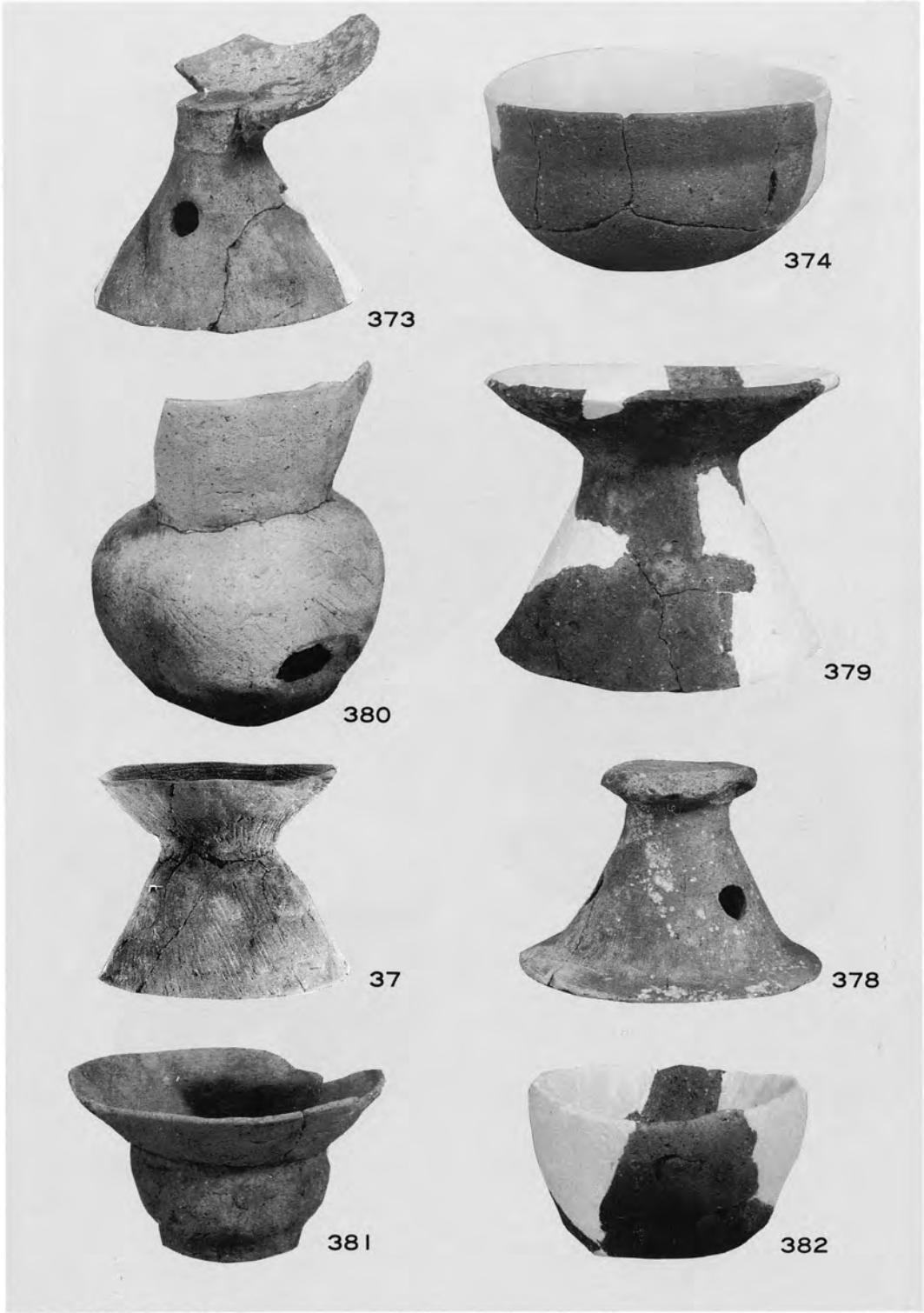
第40A・B号住居跡出土遺物



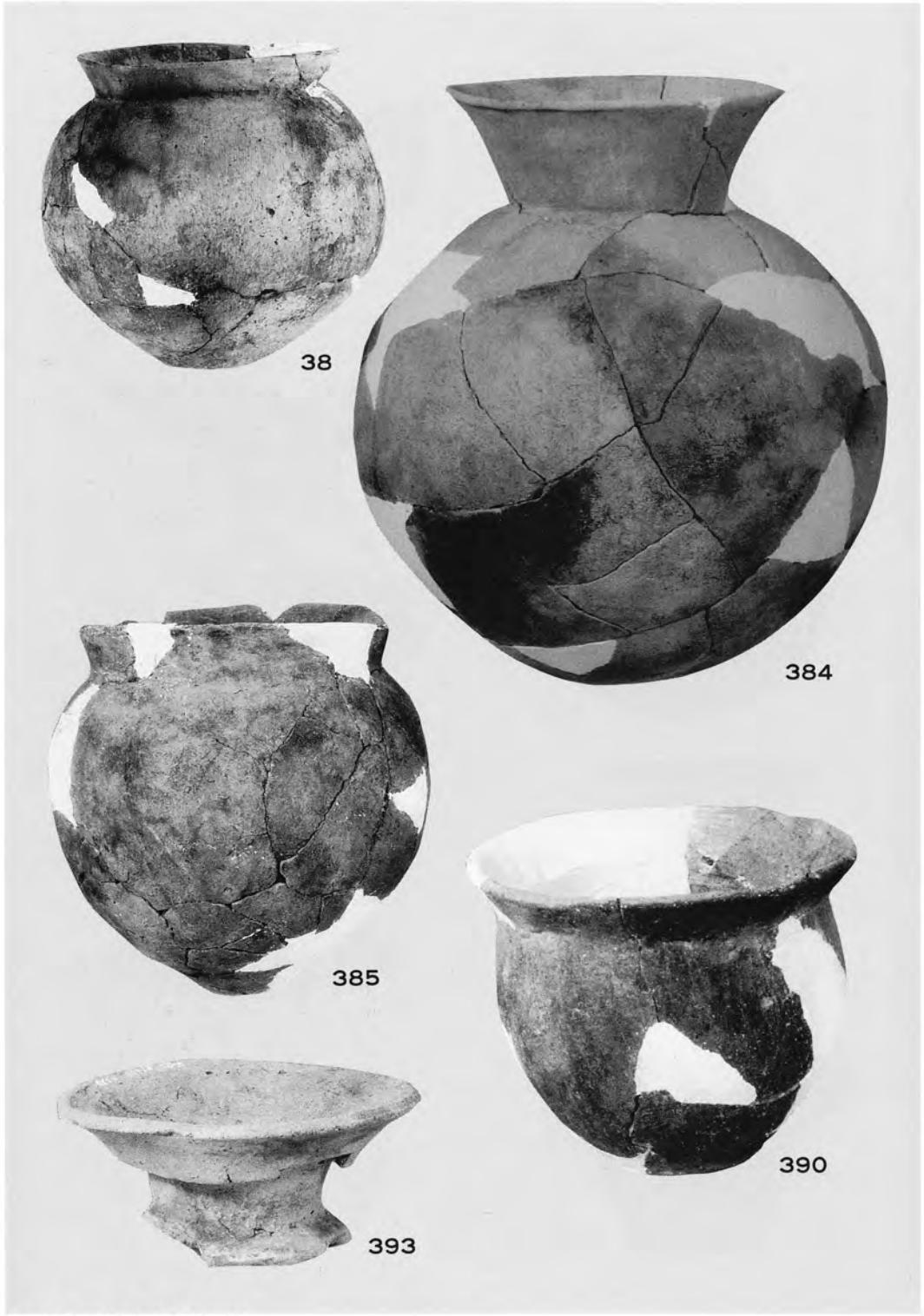
第42号住居跡出土遺物（1）



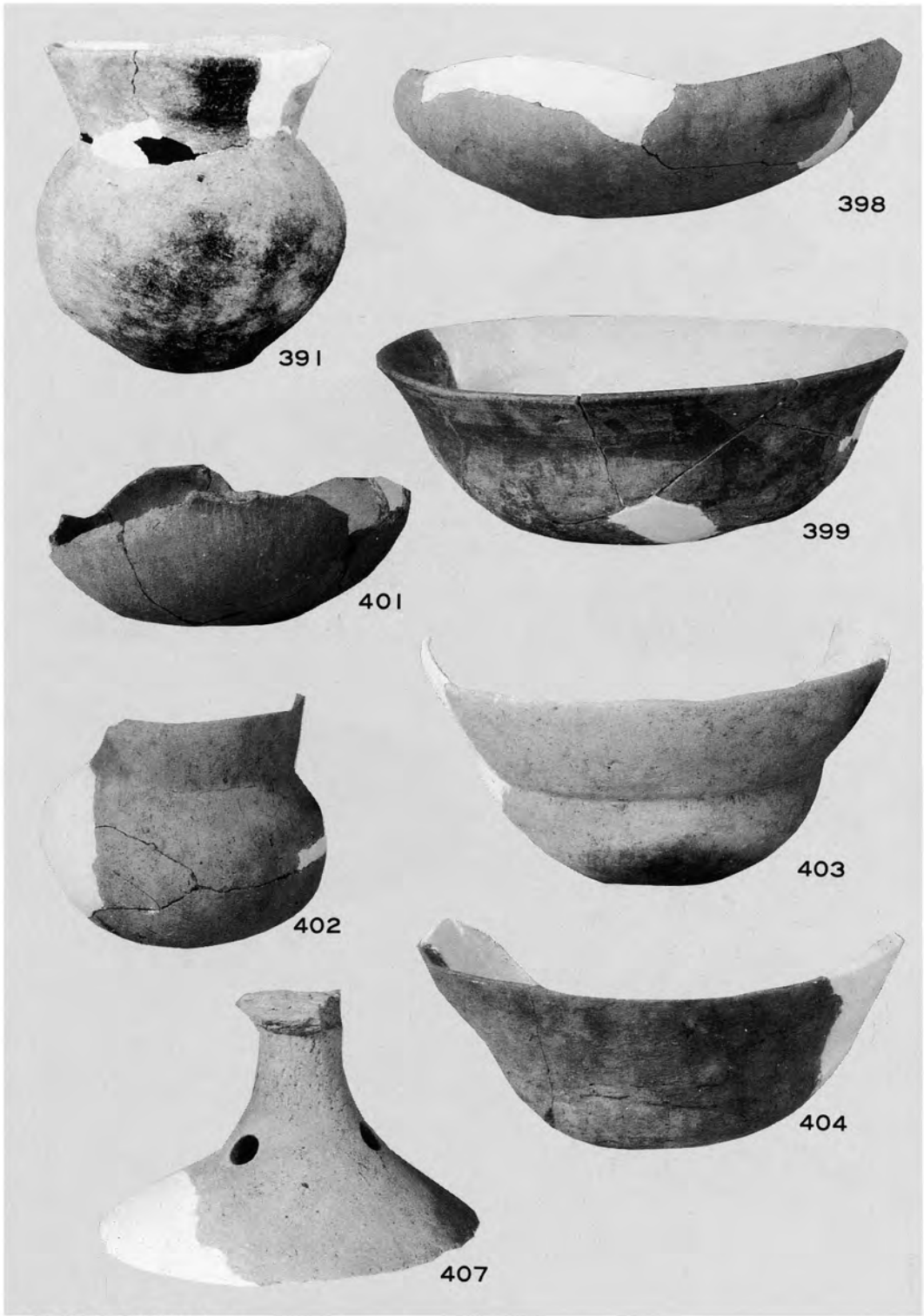
第42号住居跡出土遺物 (2)



第43号住居跡出土遺物

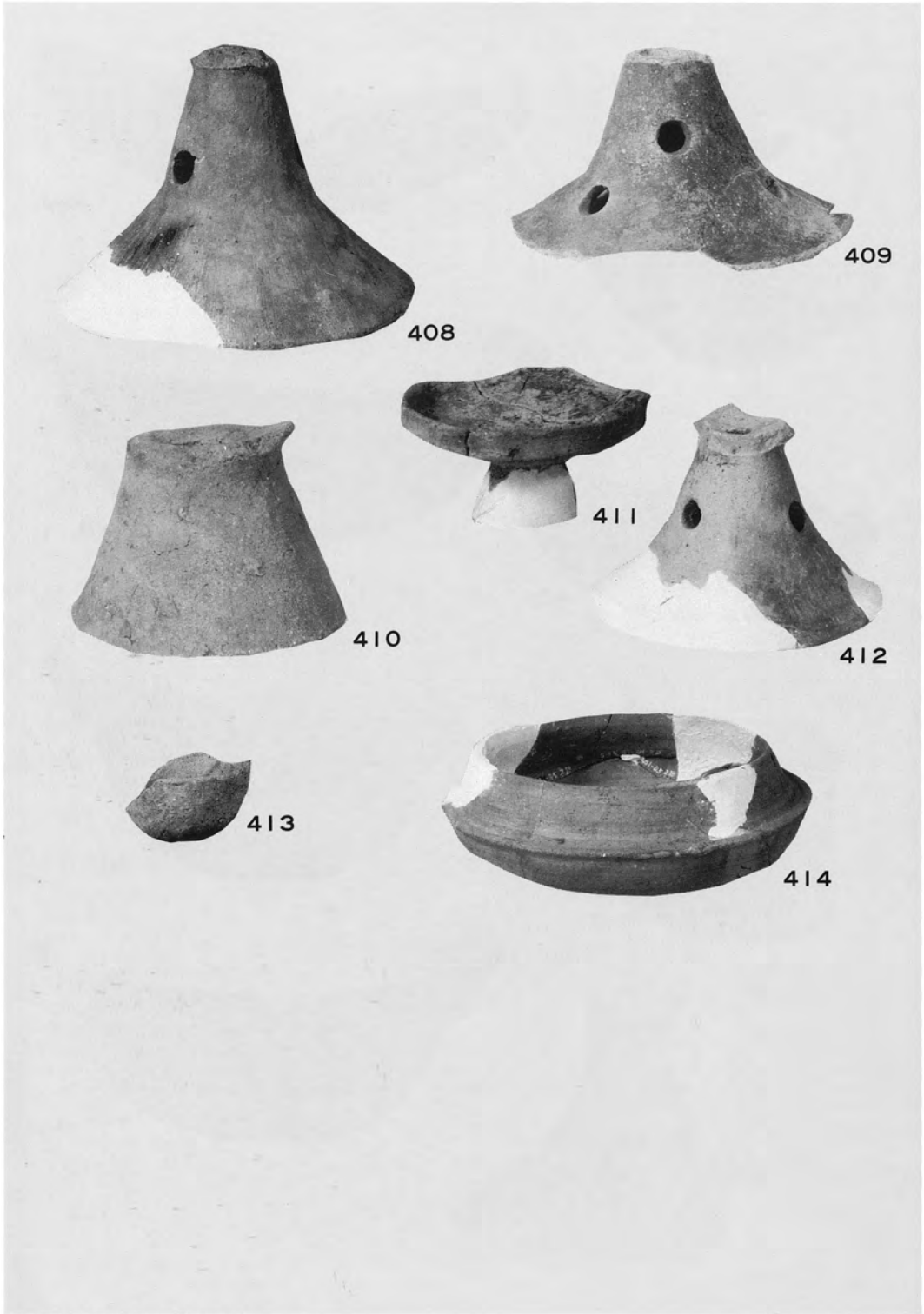


第45号住居跡出土遺物（1）

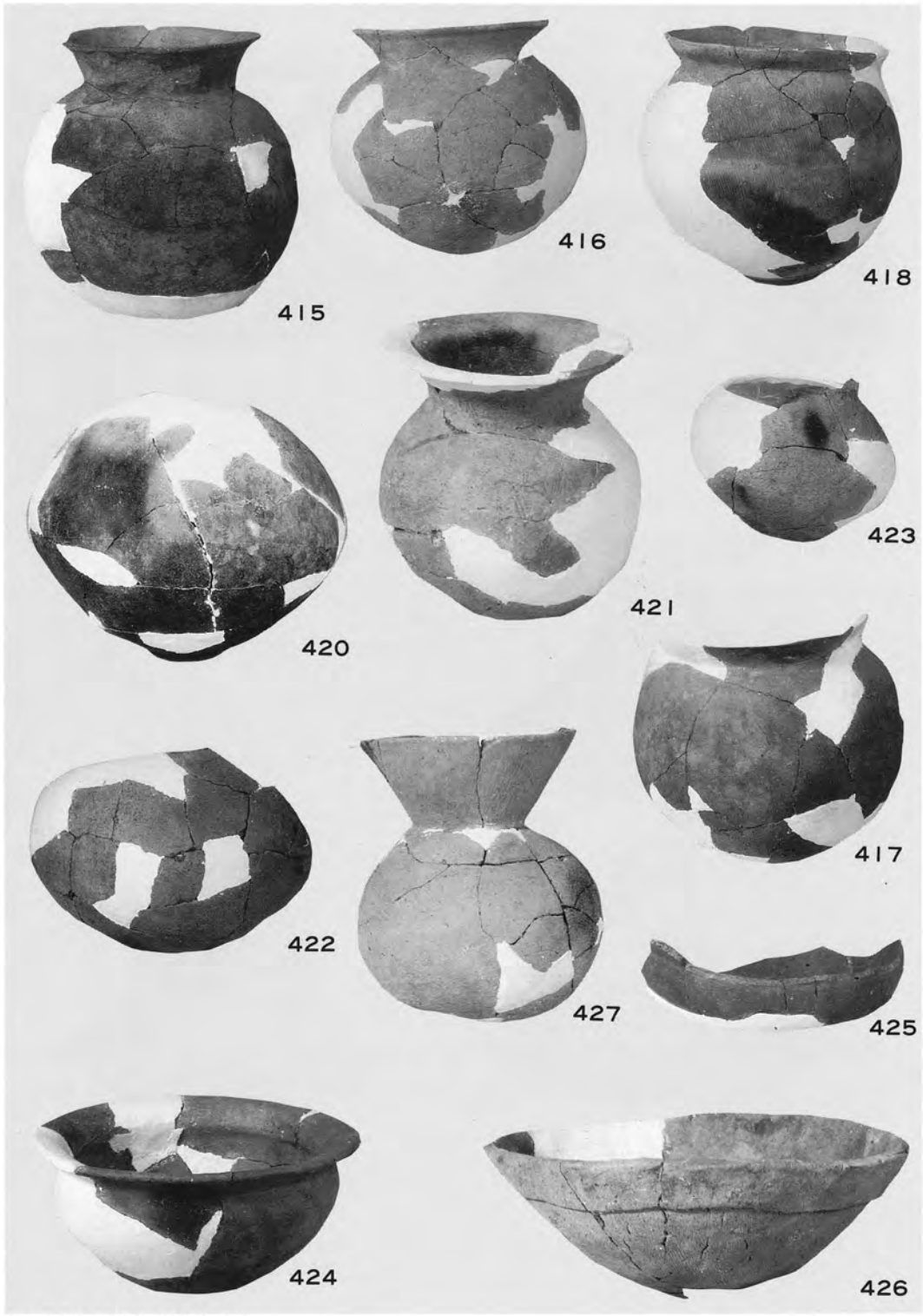


第45号住居跡出土遺物 (2)

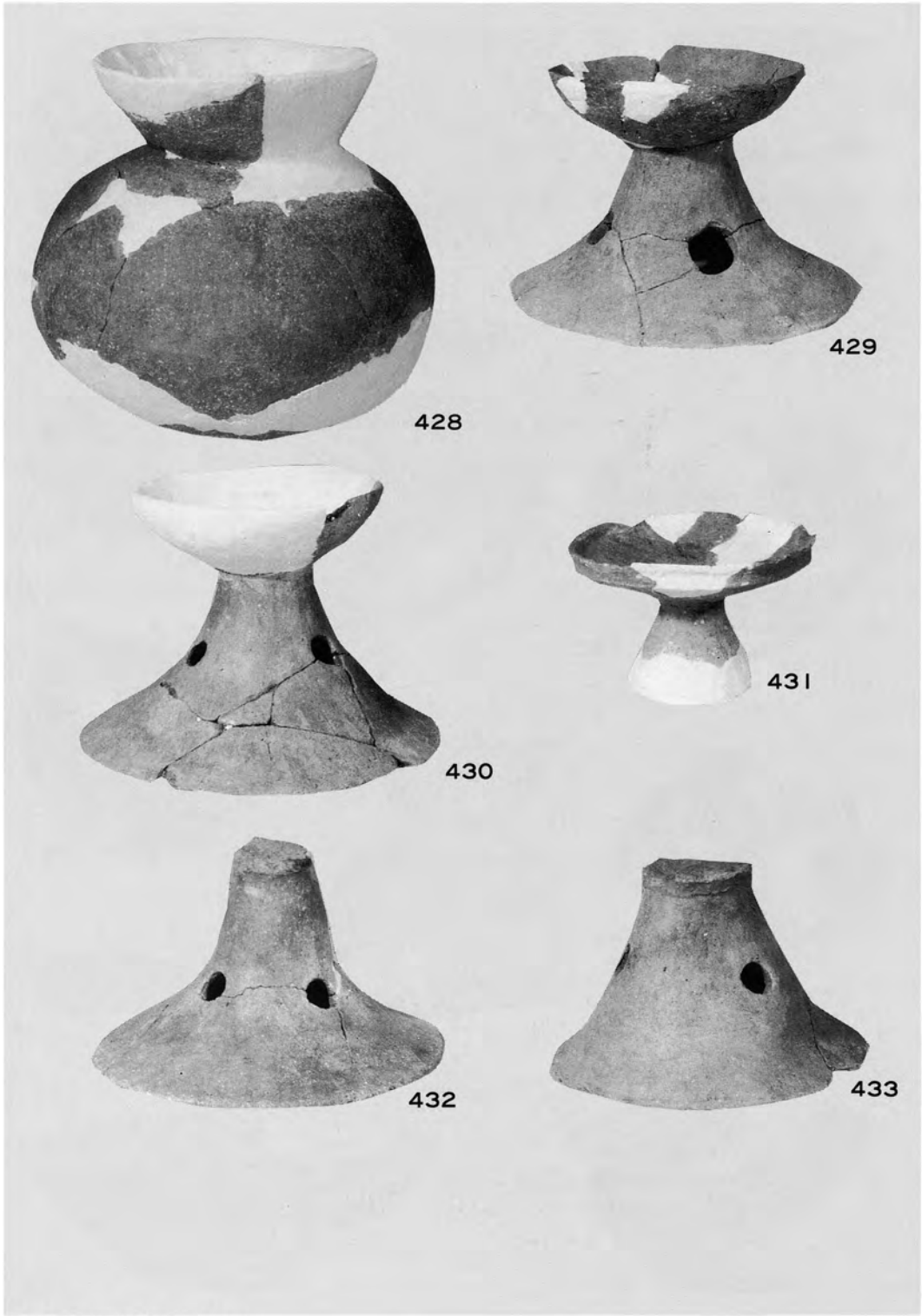
PL82



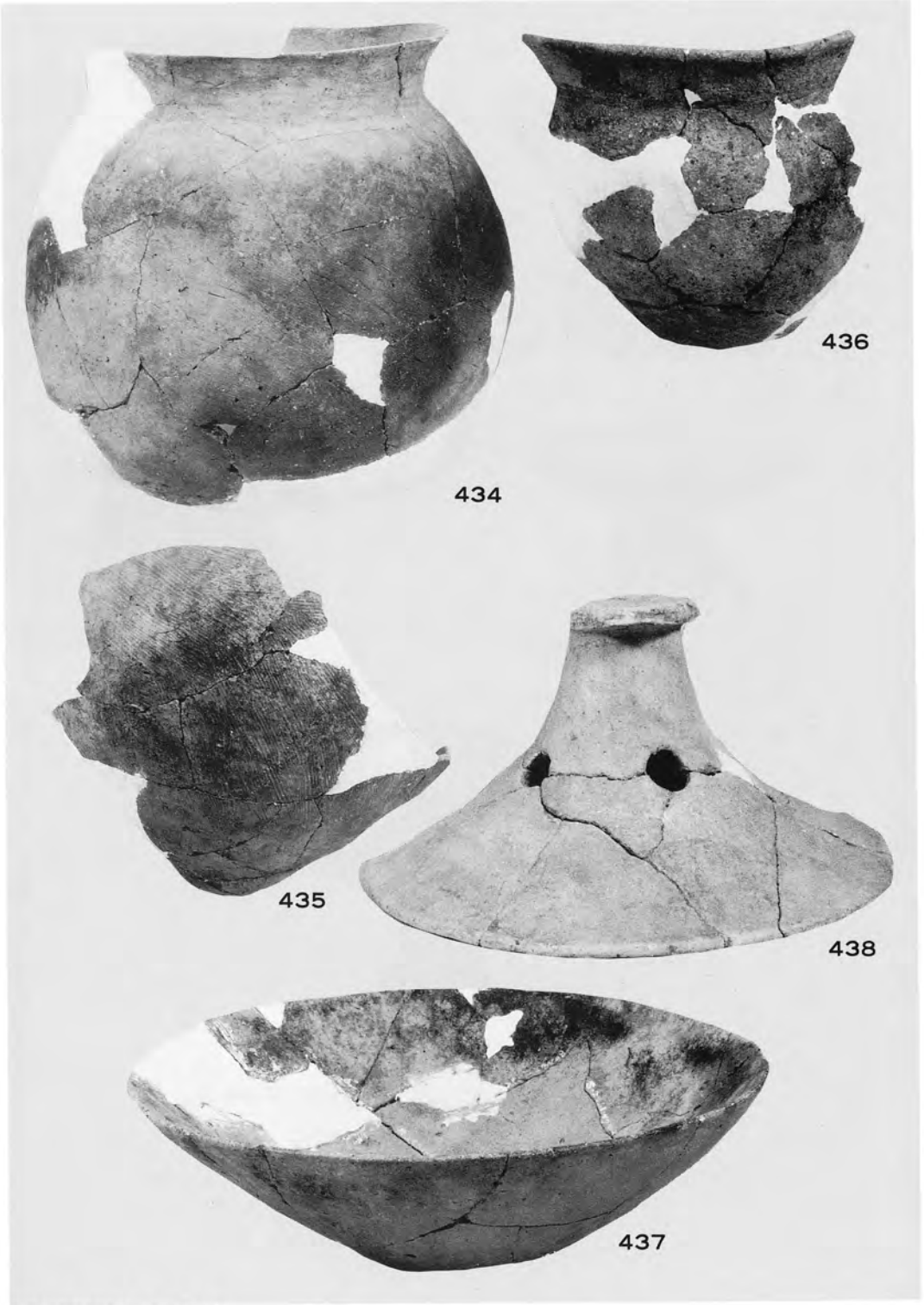
第45号住戸跡出土遺物（3）



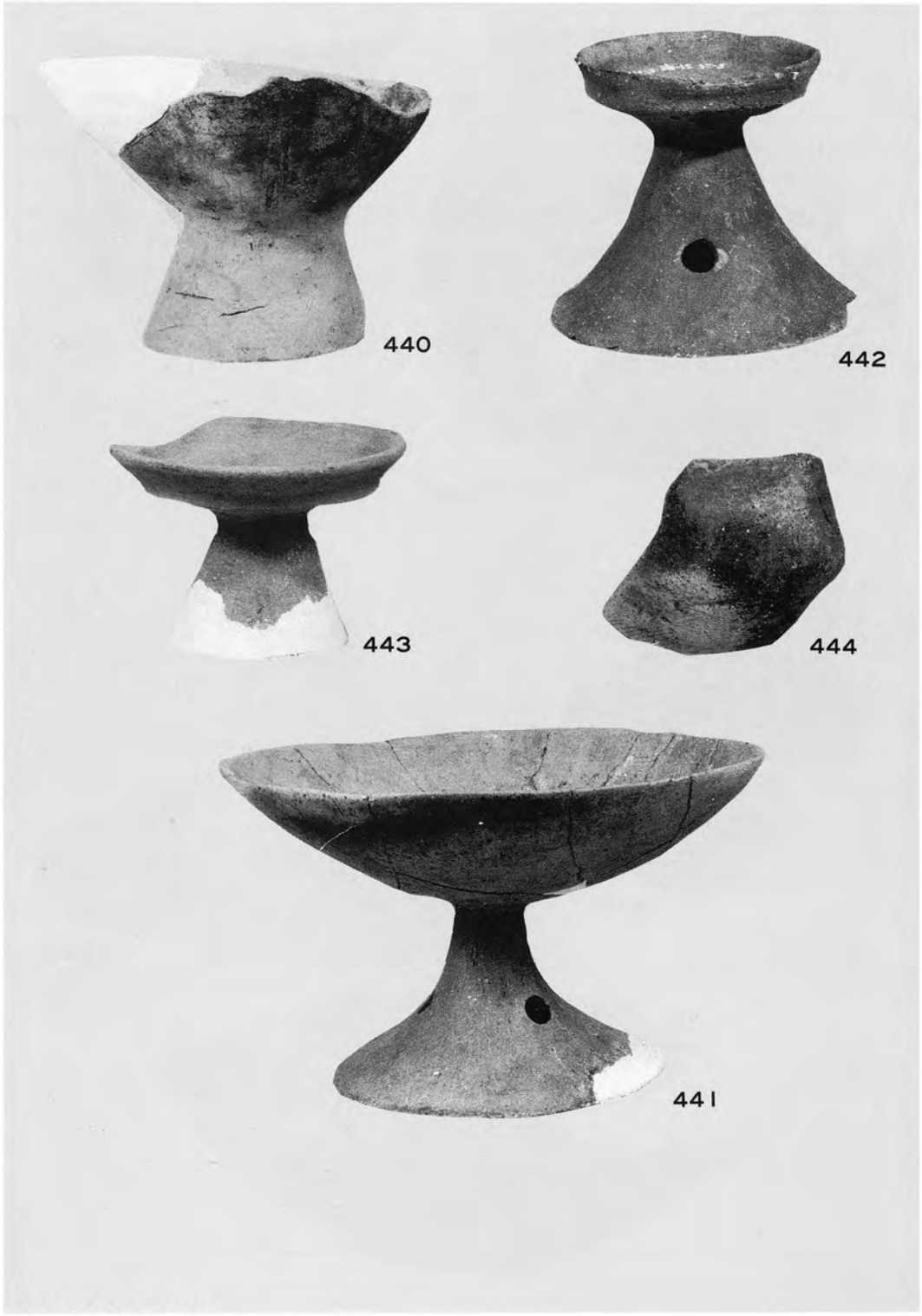
第46号住居跡出土遺物 (1)



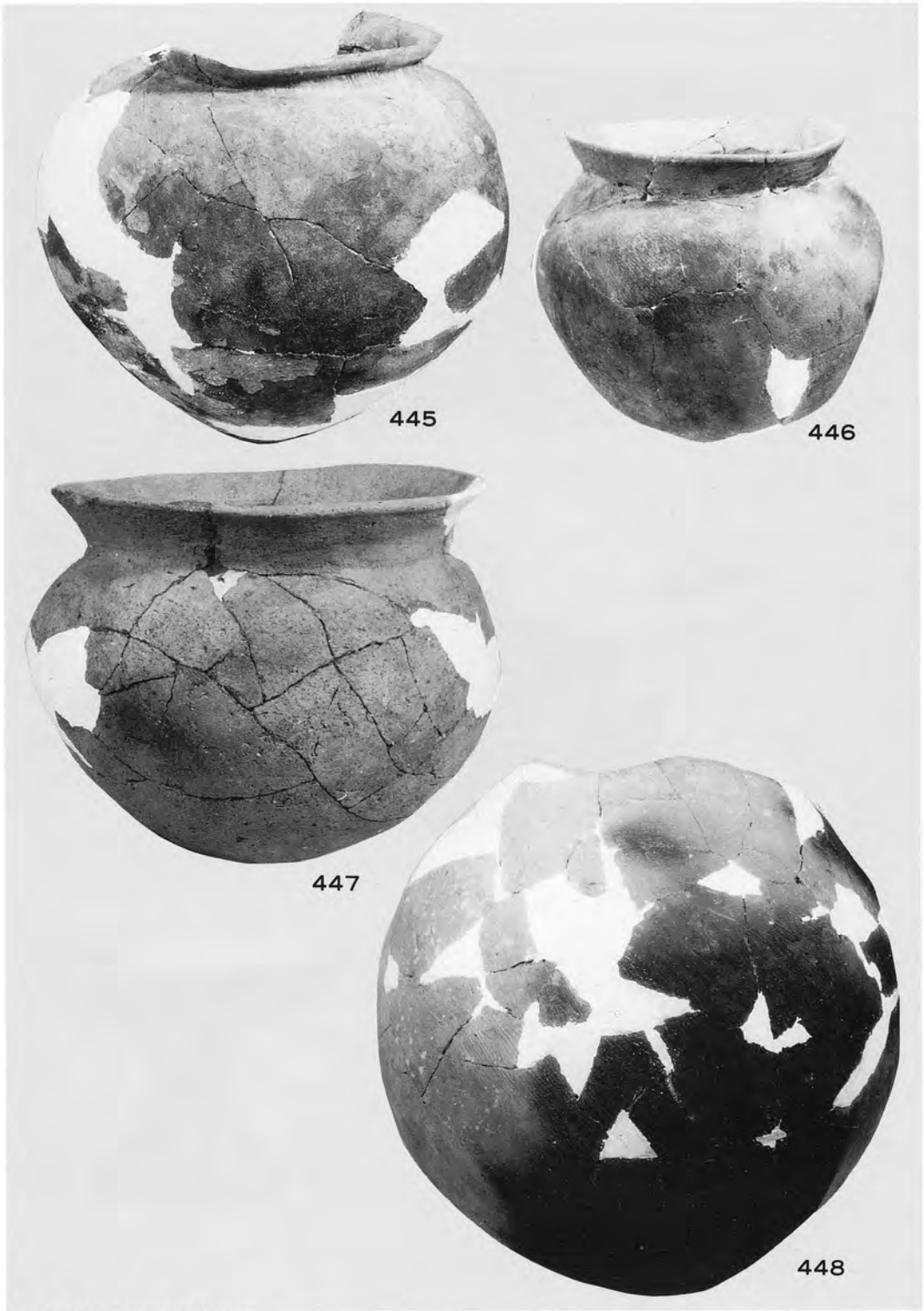
第46号住居跡出土遺物 (2)



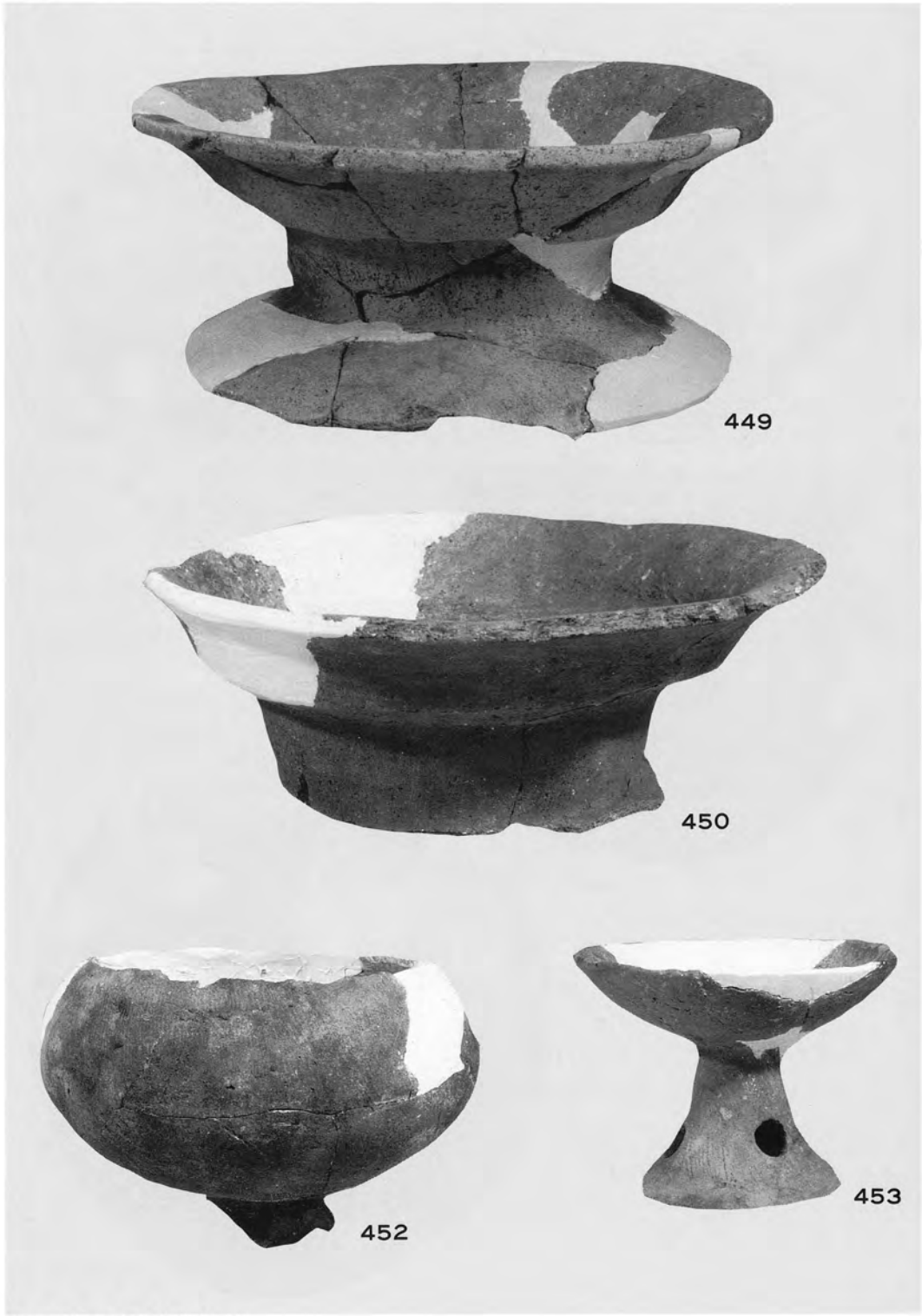
第47号住居跡出土遺物



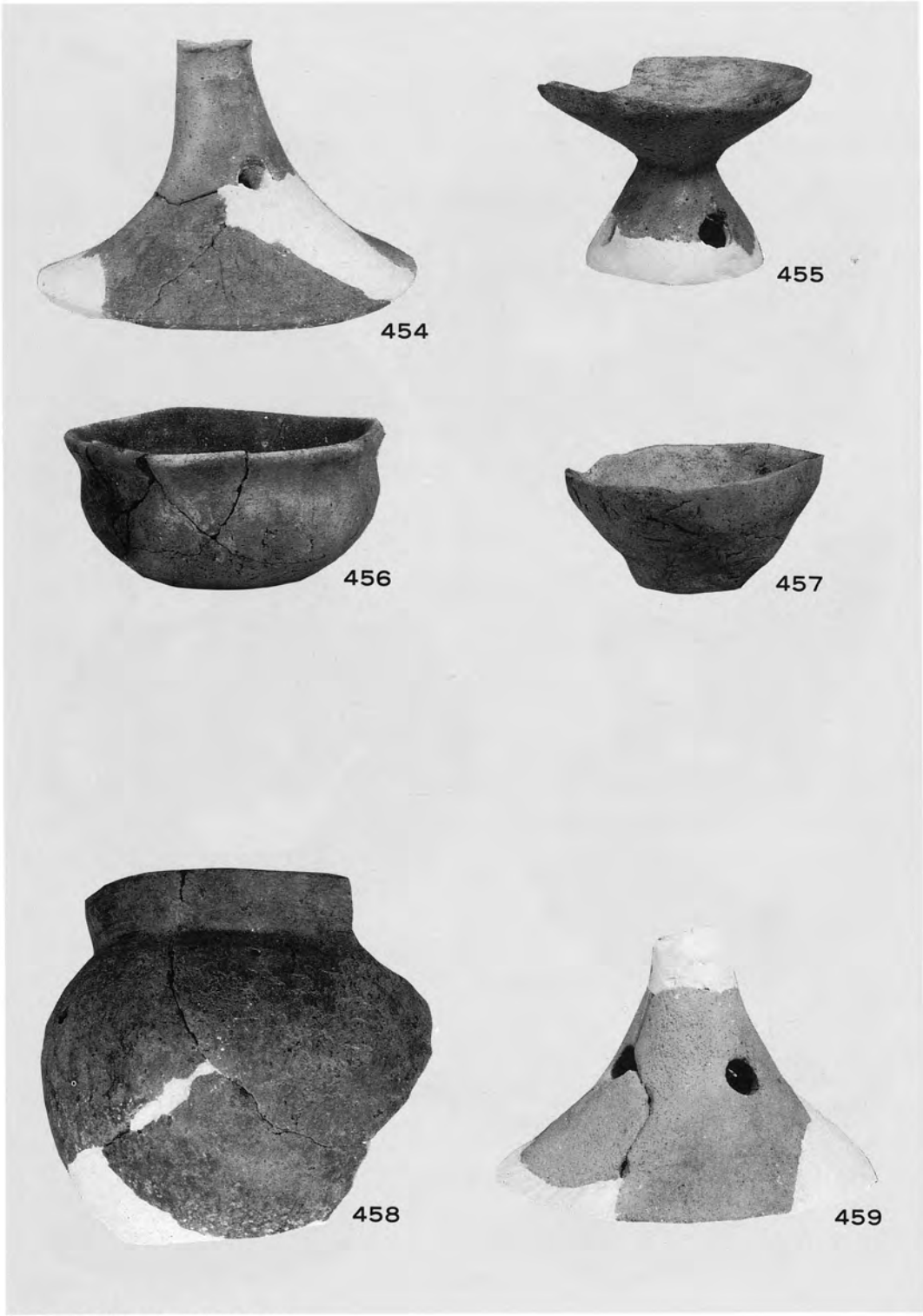
第48号住居跡出土遺物



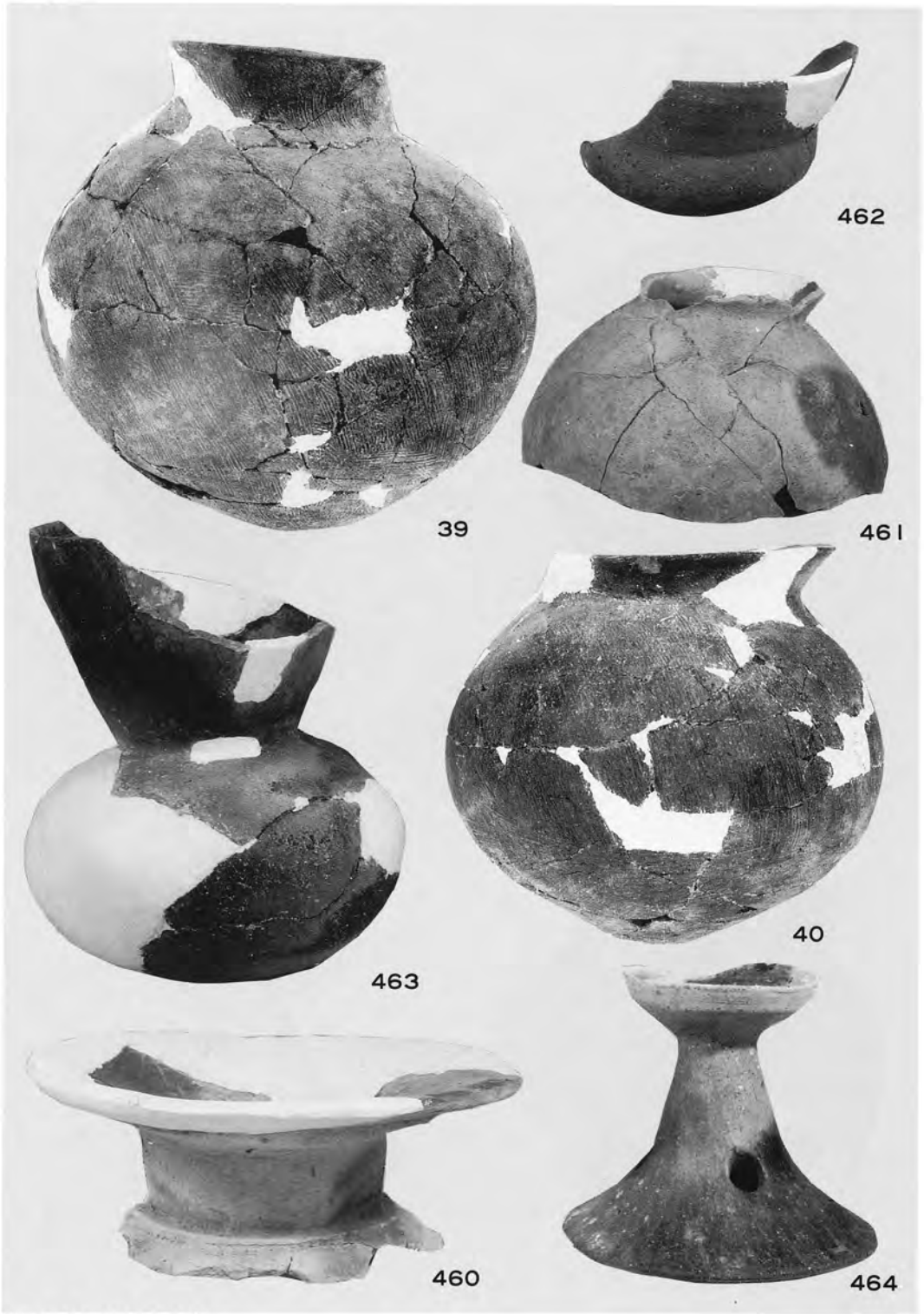
第49号住居跡出土遺物 (1)



第49号住居跡出土遺物 (2)

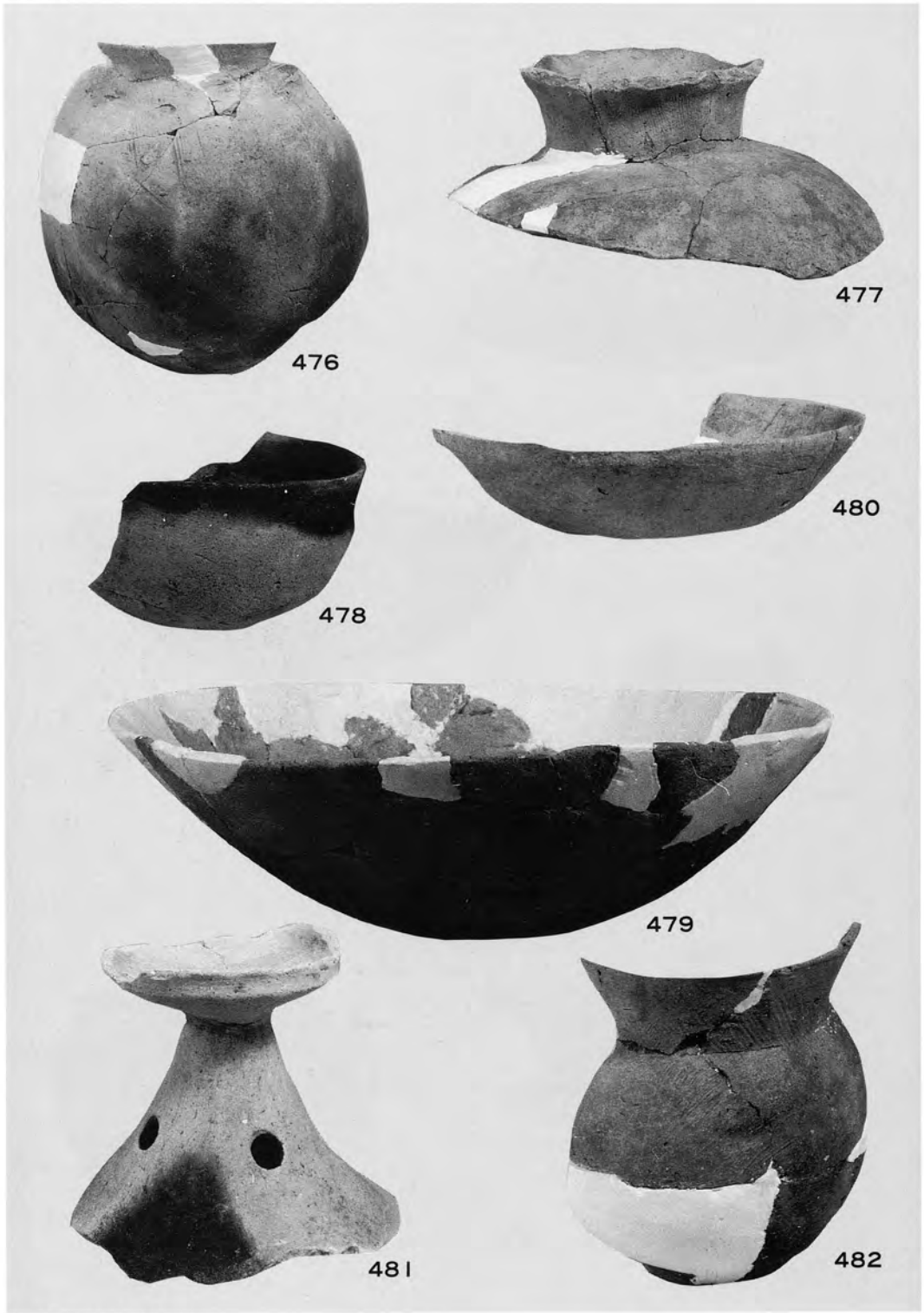


第49・50号住居跡出土遺物（3）

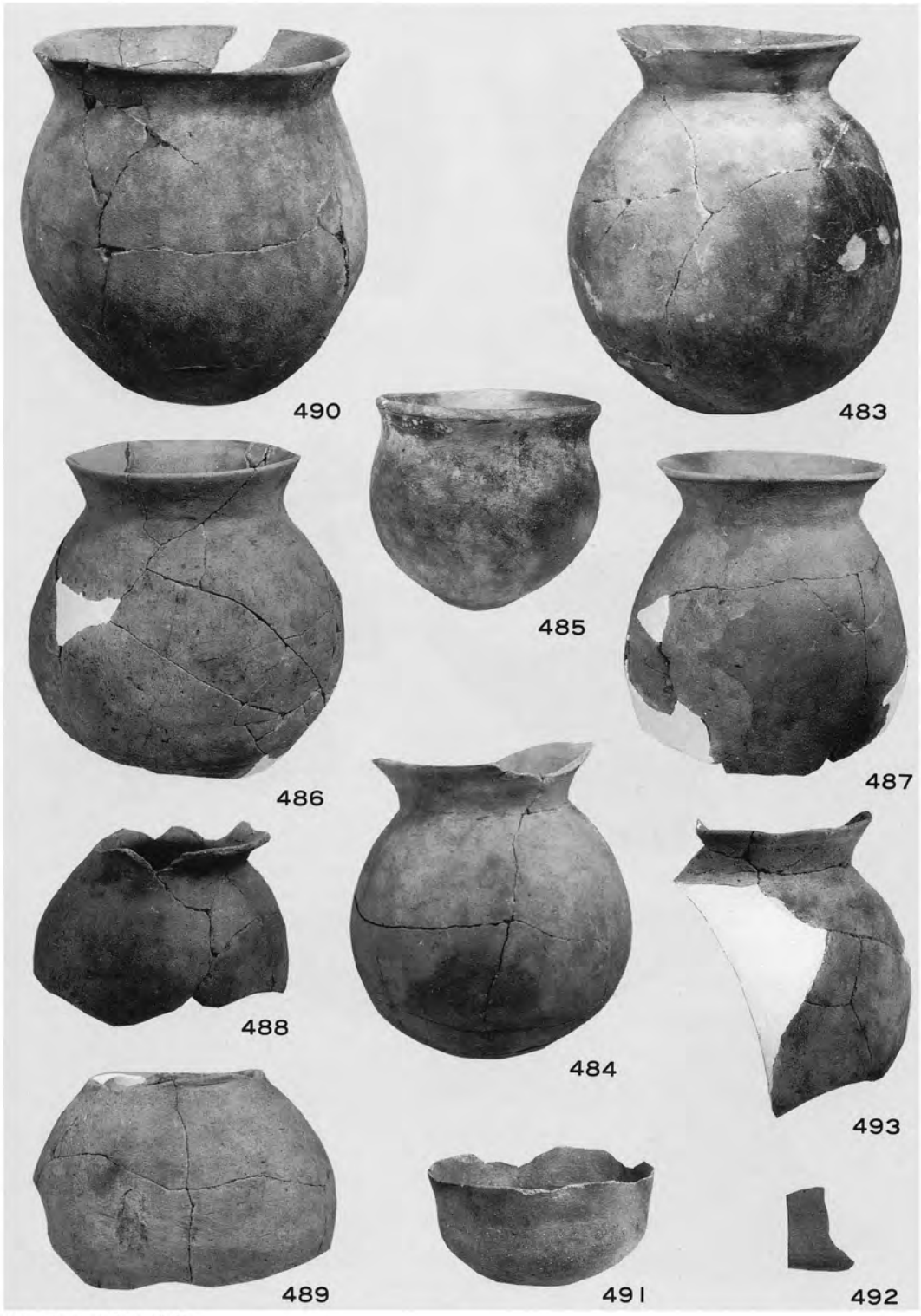


第51号住居跡出土遺物

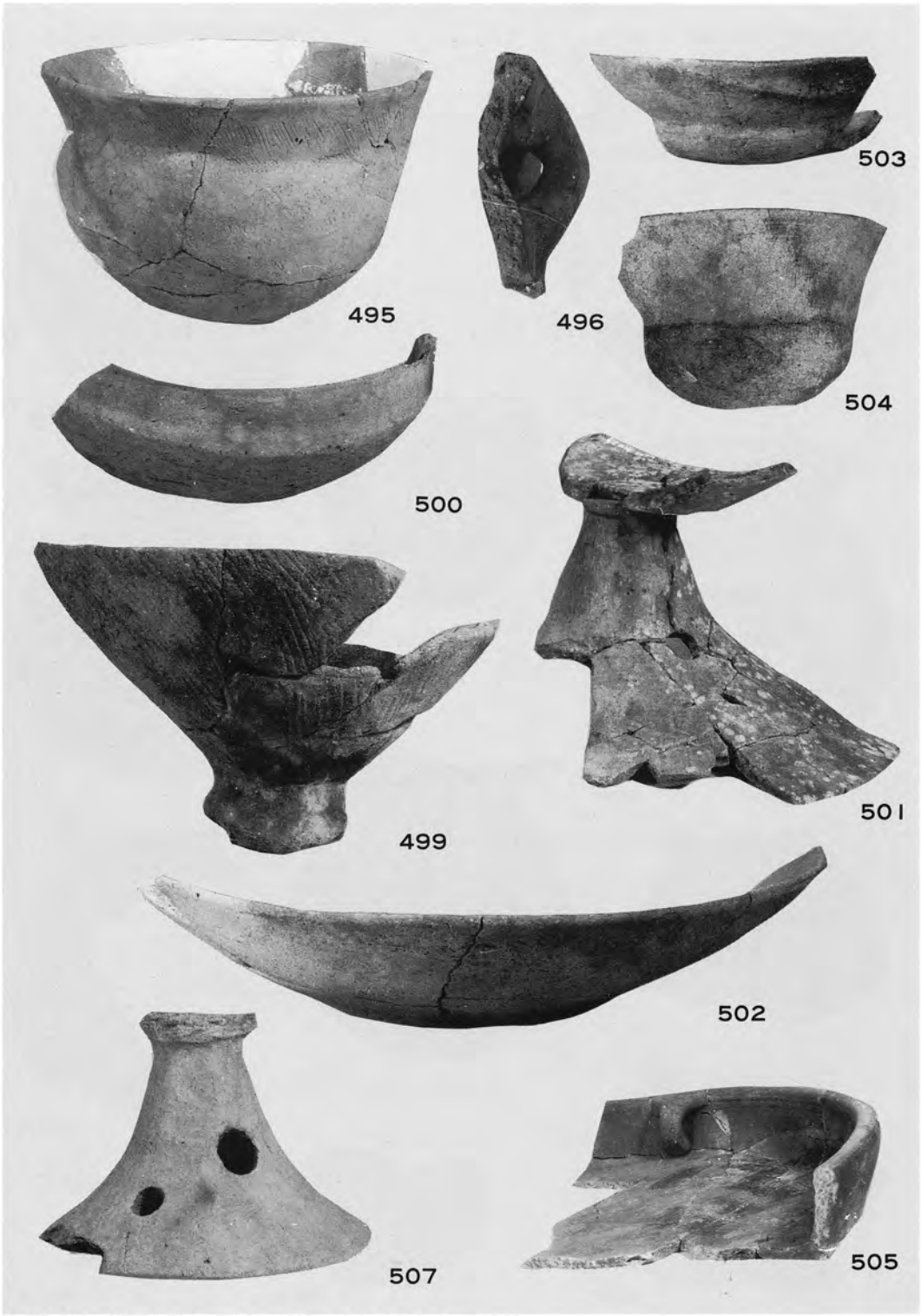
第53・55・56・57・60号住居跡出土遺物



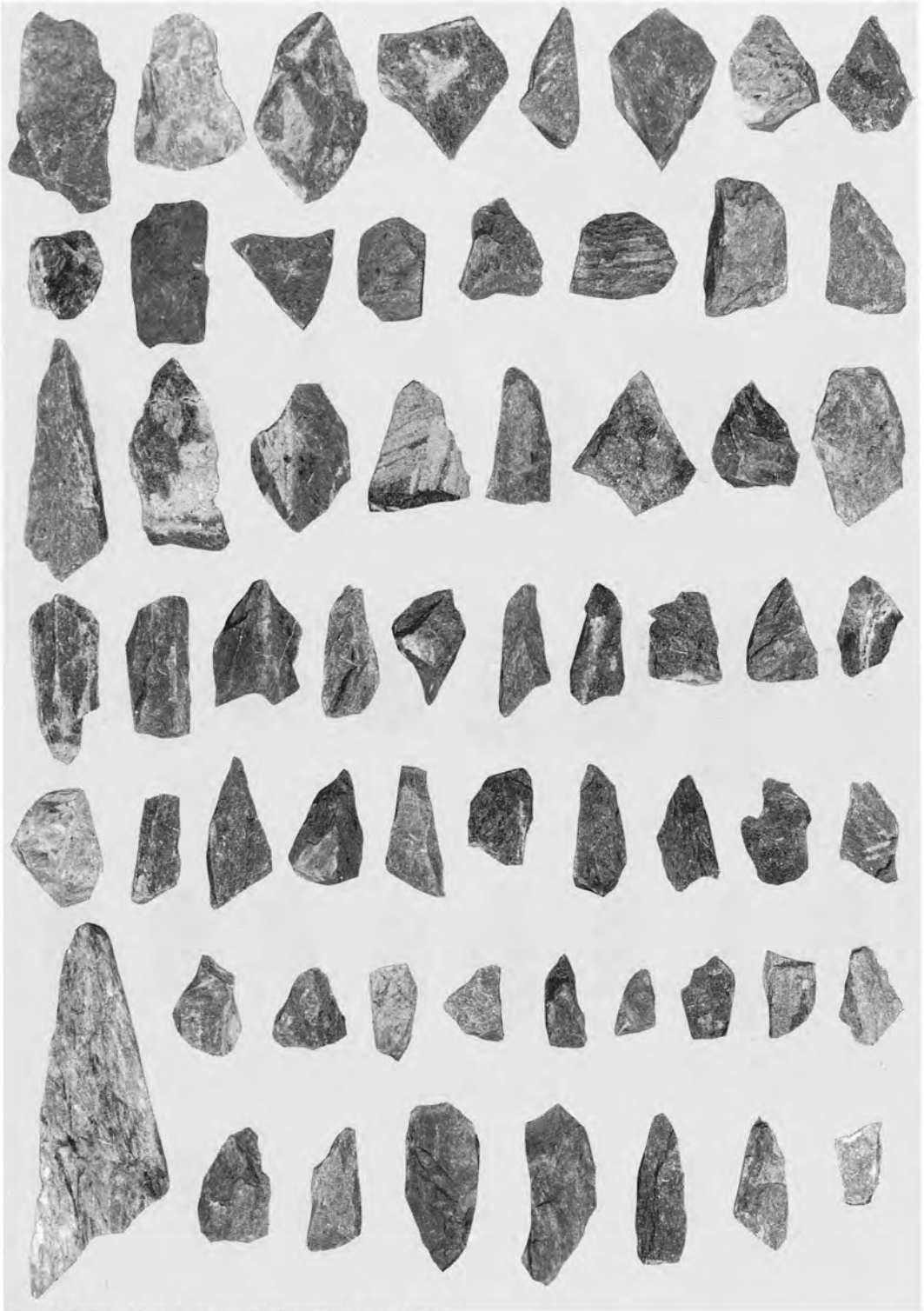
第4号土坑出土遺物



第 5 号土坑出土遺物

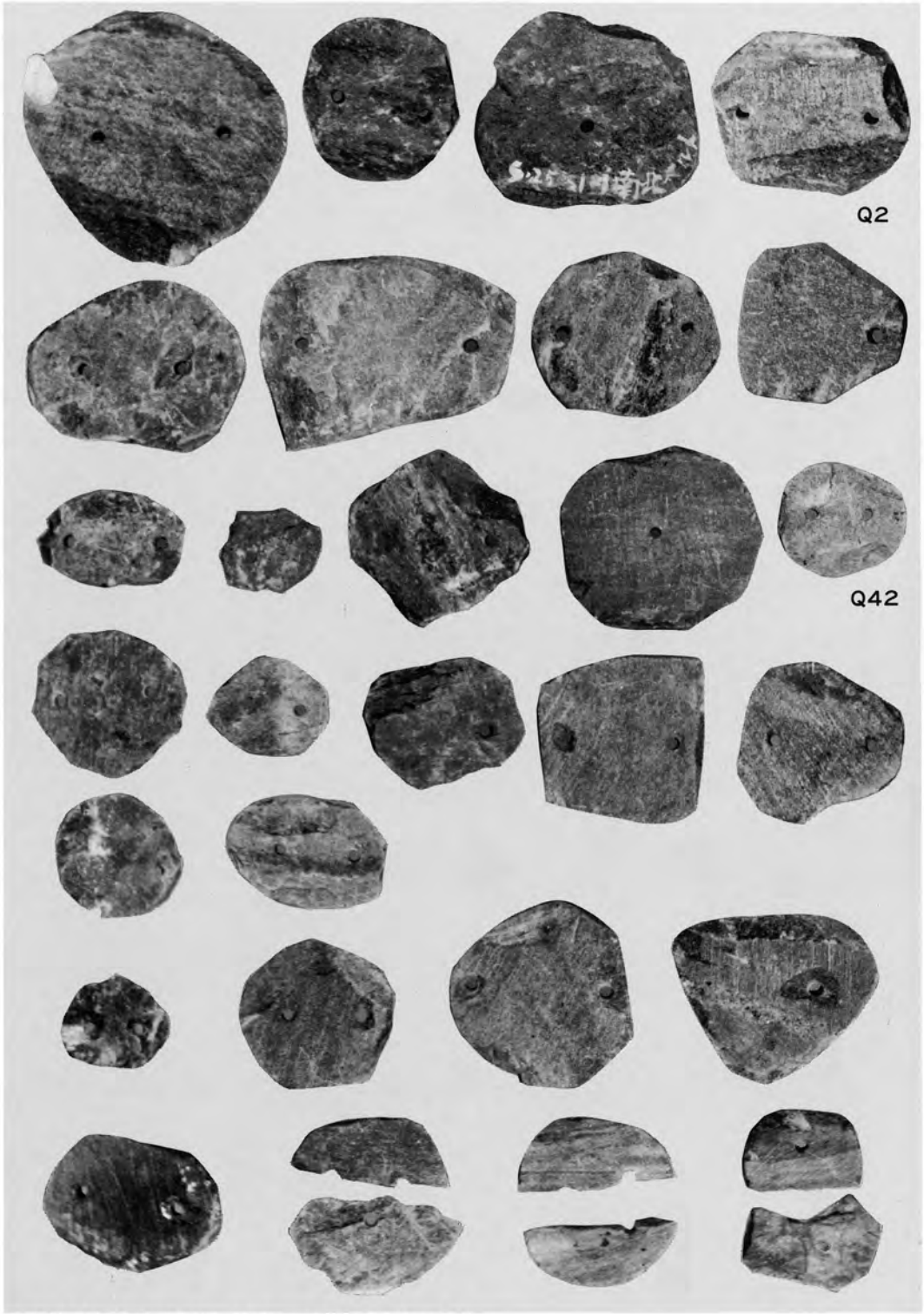


第１号溝，第１号堀，グリッド，表採出土遺物

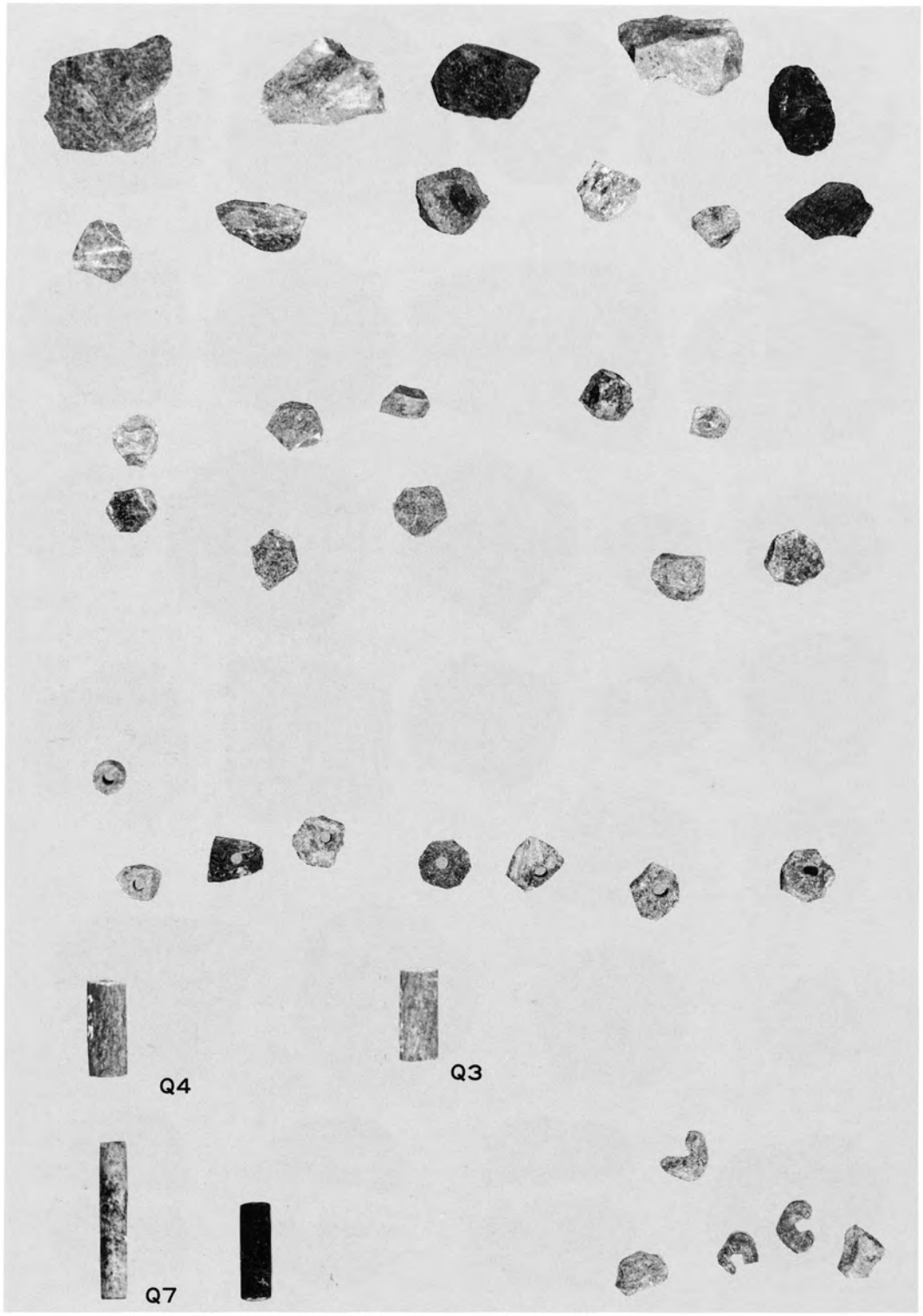


第１号製作跡出土剣形品（⅔）荒割り・形割り

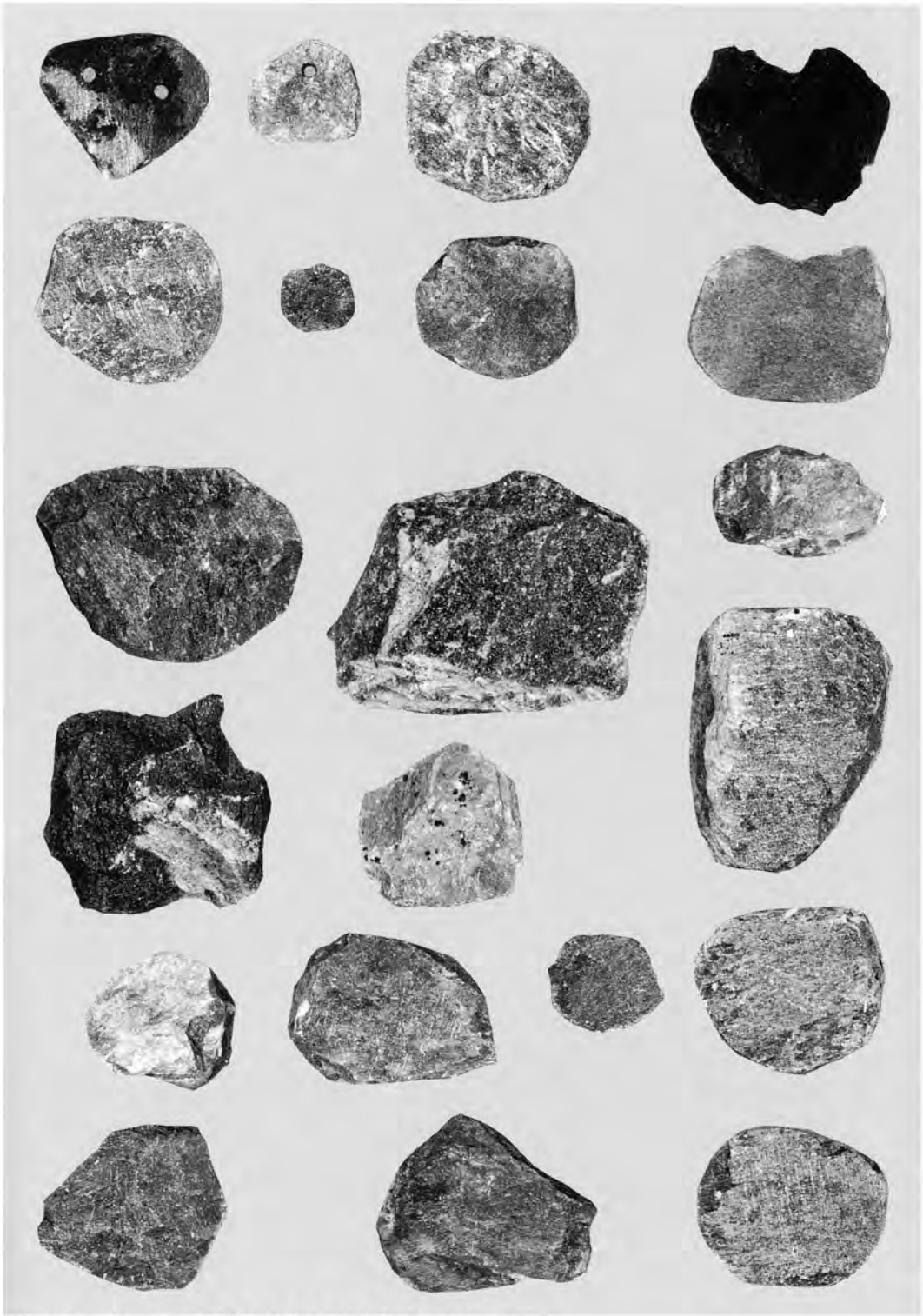
第1号製作跡出土剣形品（⅔）研磨・穿孔・完成・破損



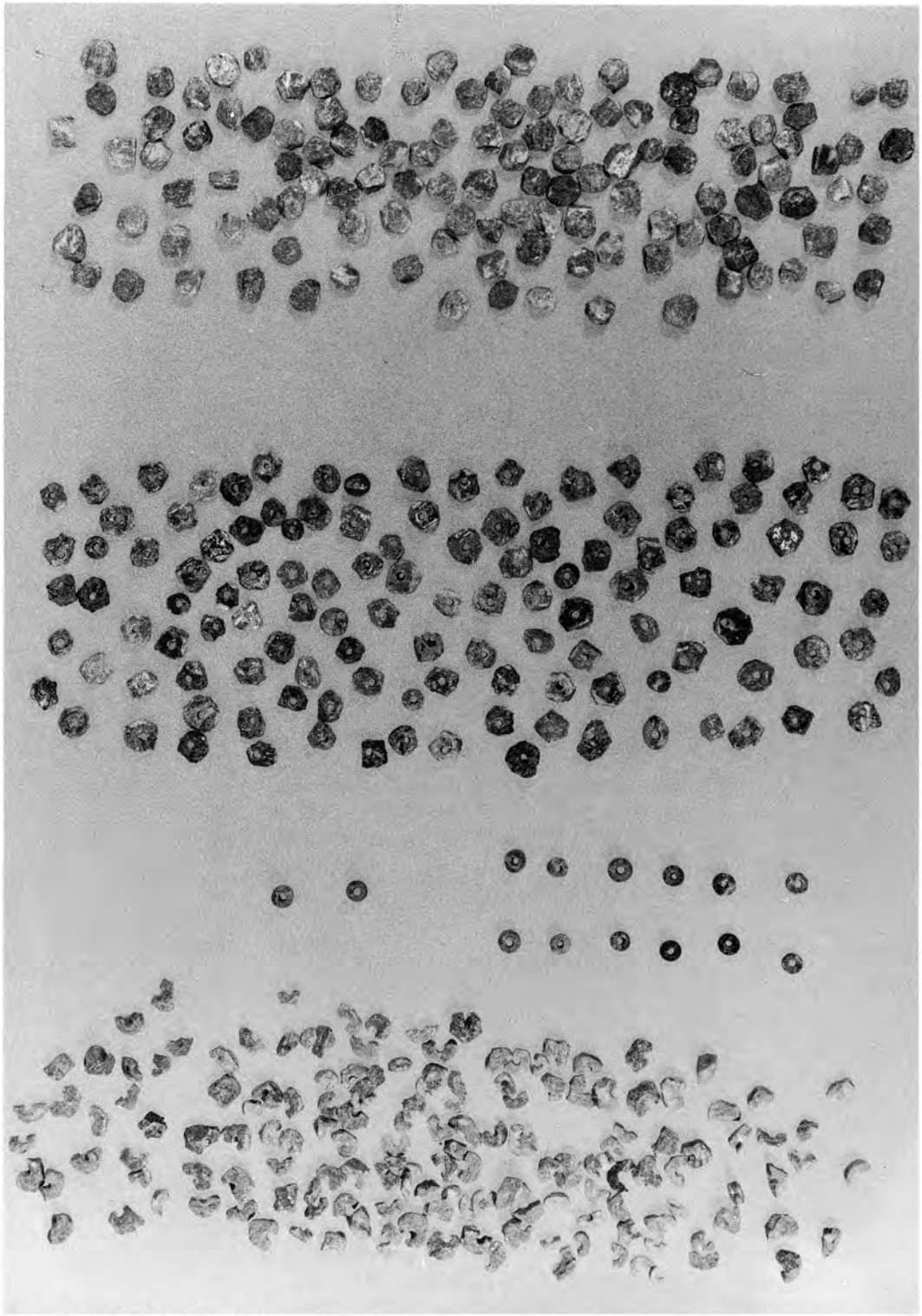
第１号製作跡出土円板（1/1），穿孔・完成・破損



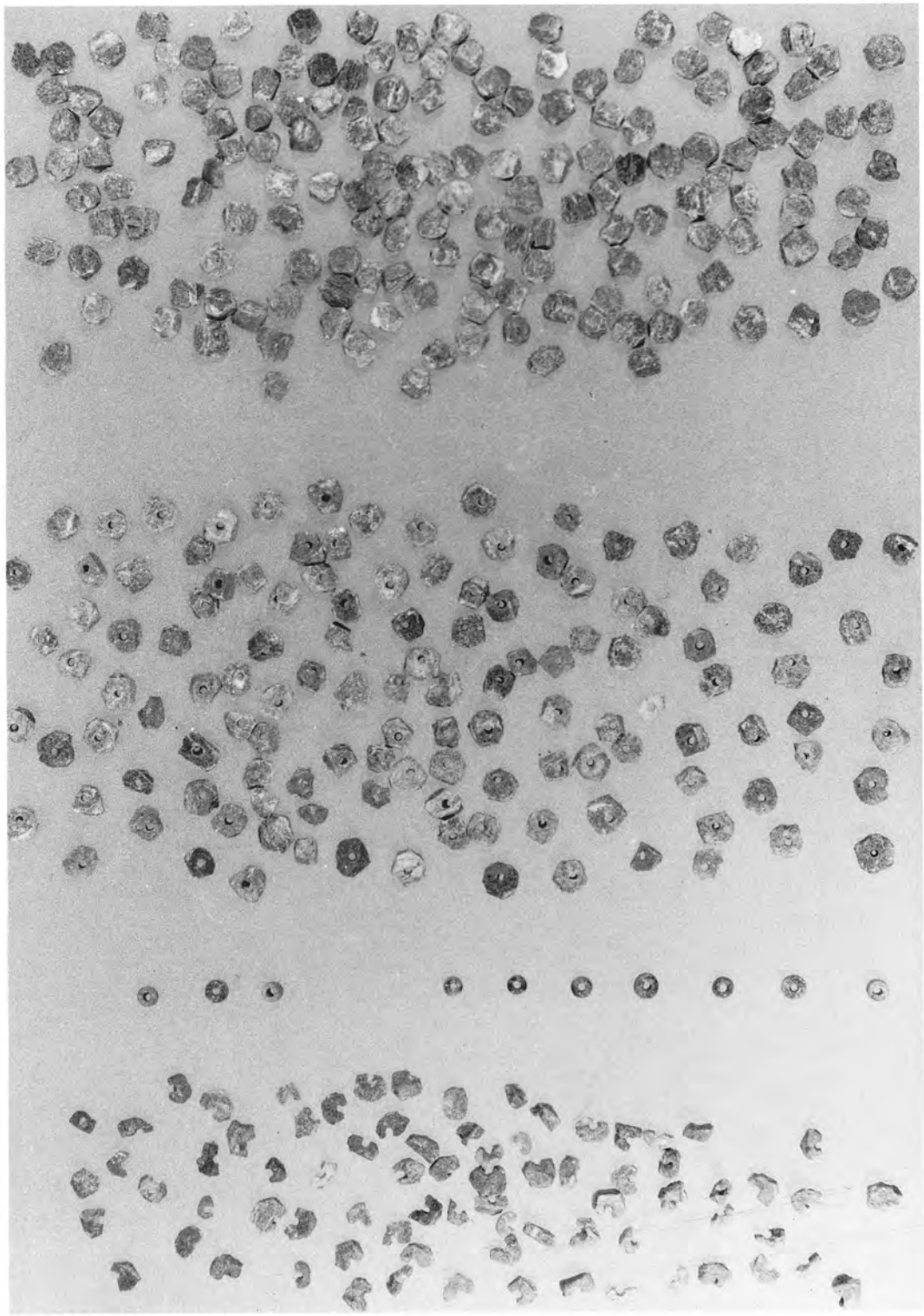
第１・２号製作跡，第20号住居跡出土遺物（臼玉・管玉）（1/1）



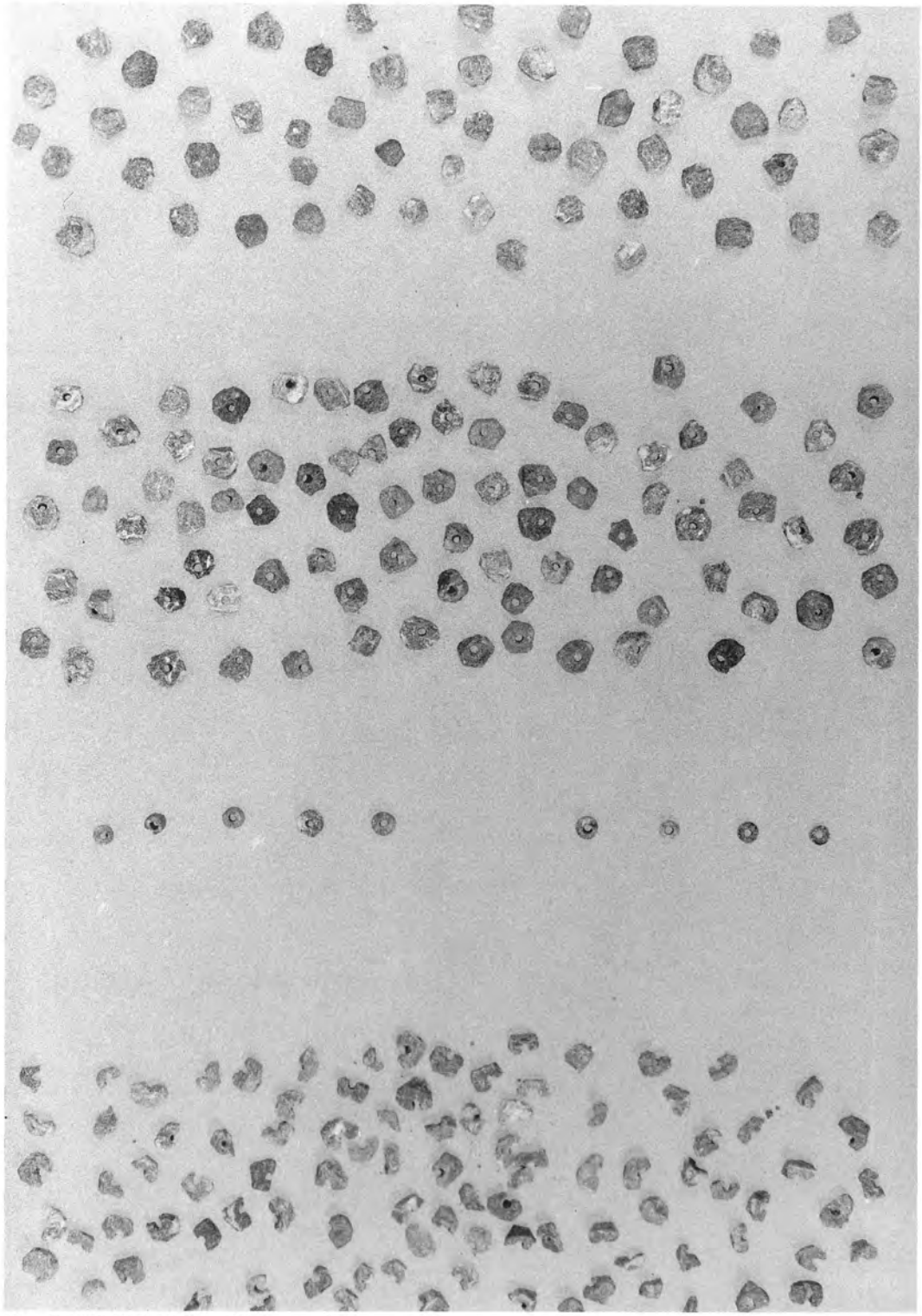
第19号住居跡，第１号製作跡出土円板（1/1）形割り・研磨



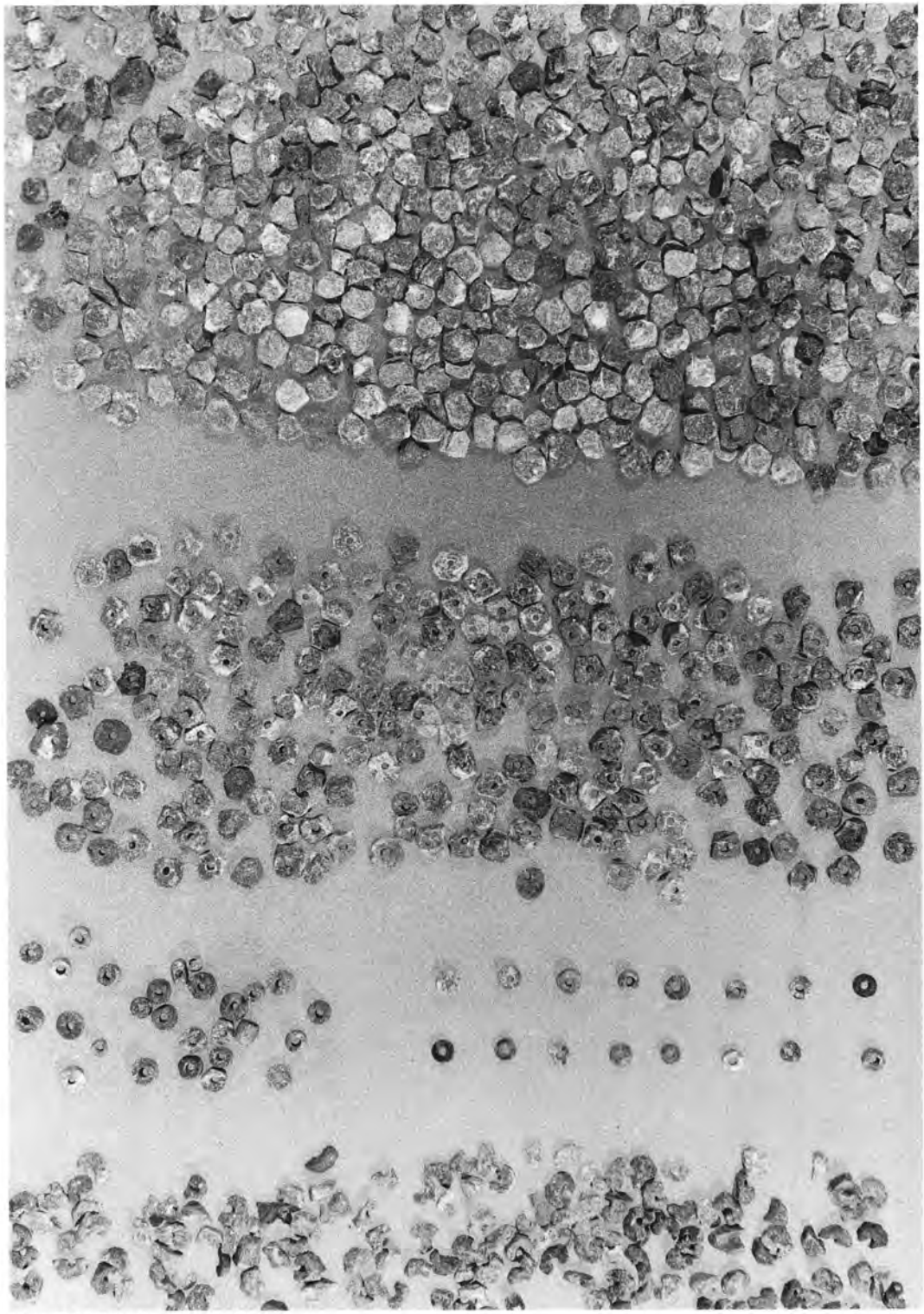
第2号製作跡出土臼玉（⅔）



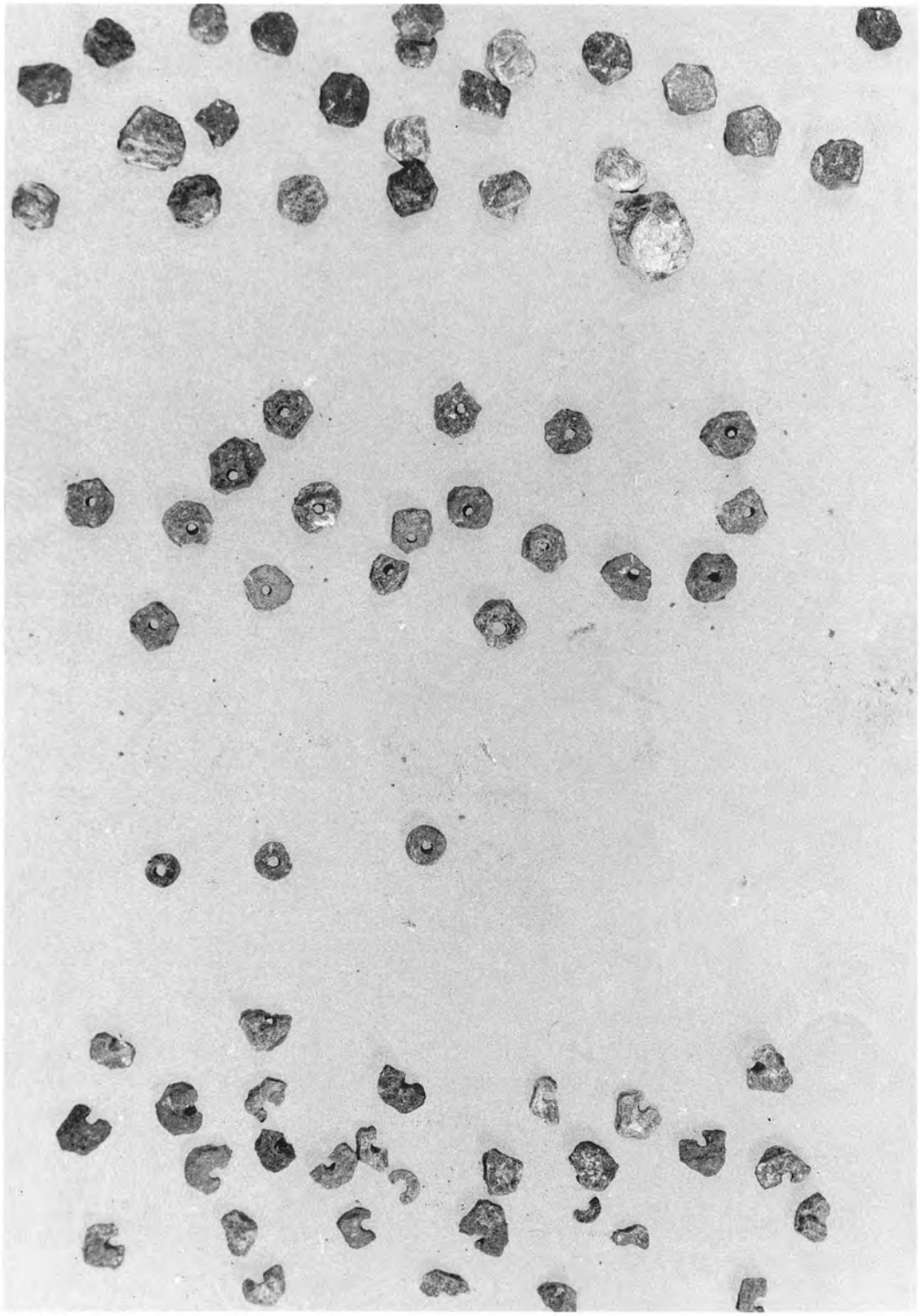
第3号製作跡出土臼玉（⅔）



第4号製作跡出土臼玉（⅔）

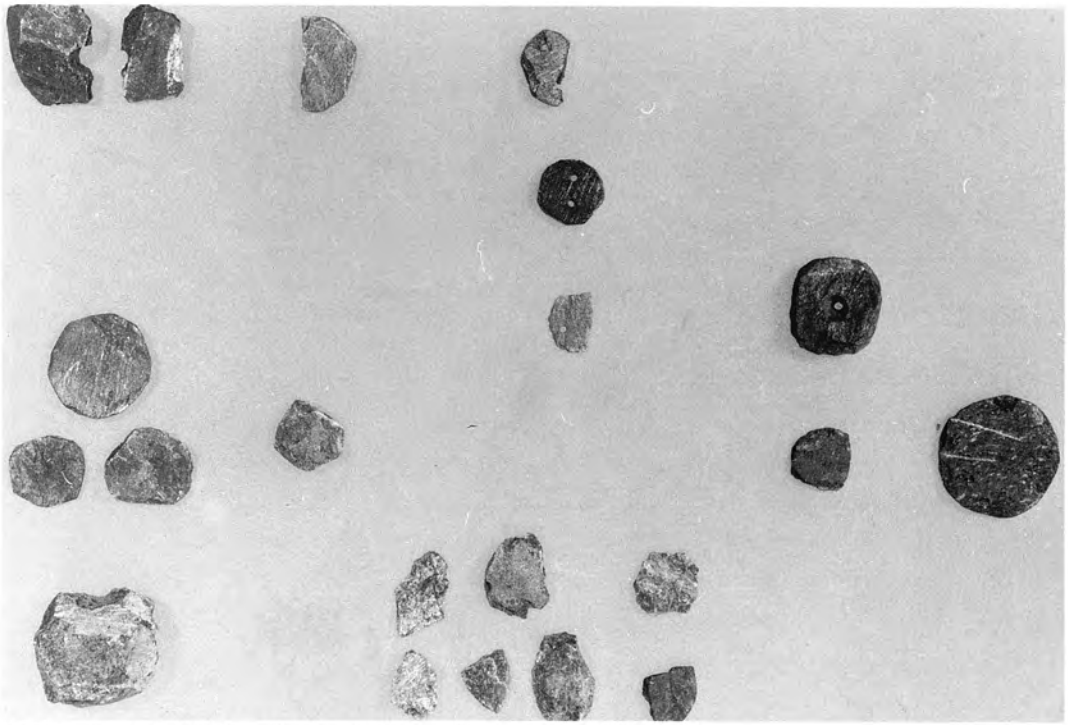


第5号製作跡出土臼玉（⅔）

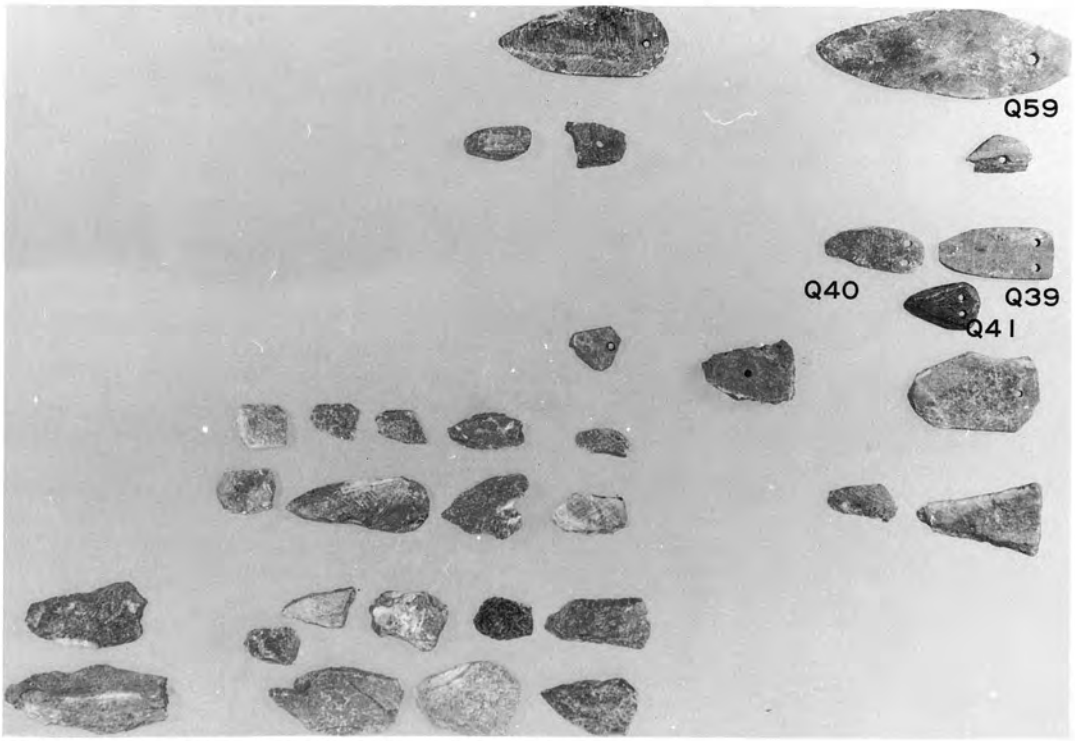


第56号住居跡出土臼玉（1/1）

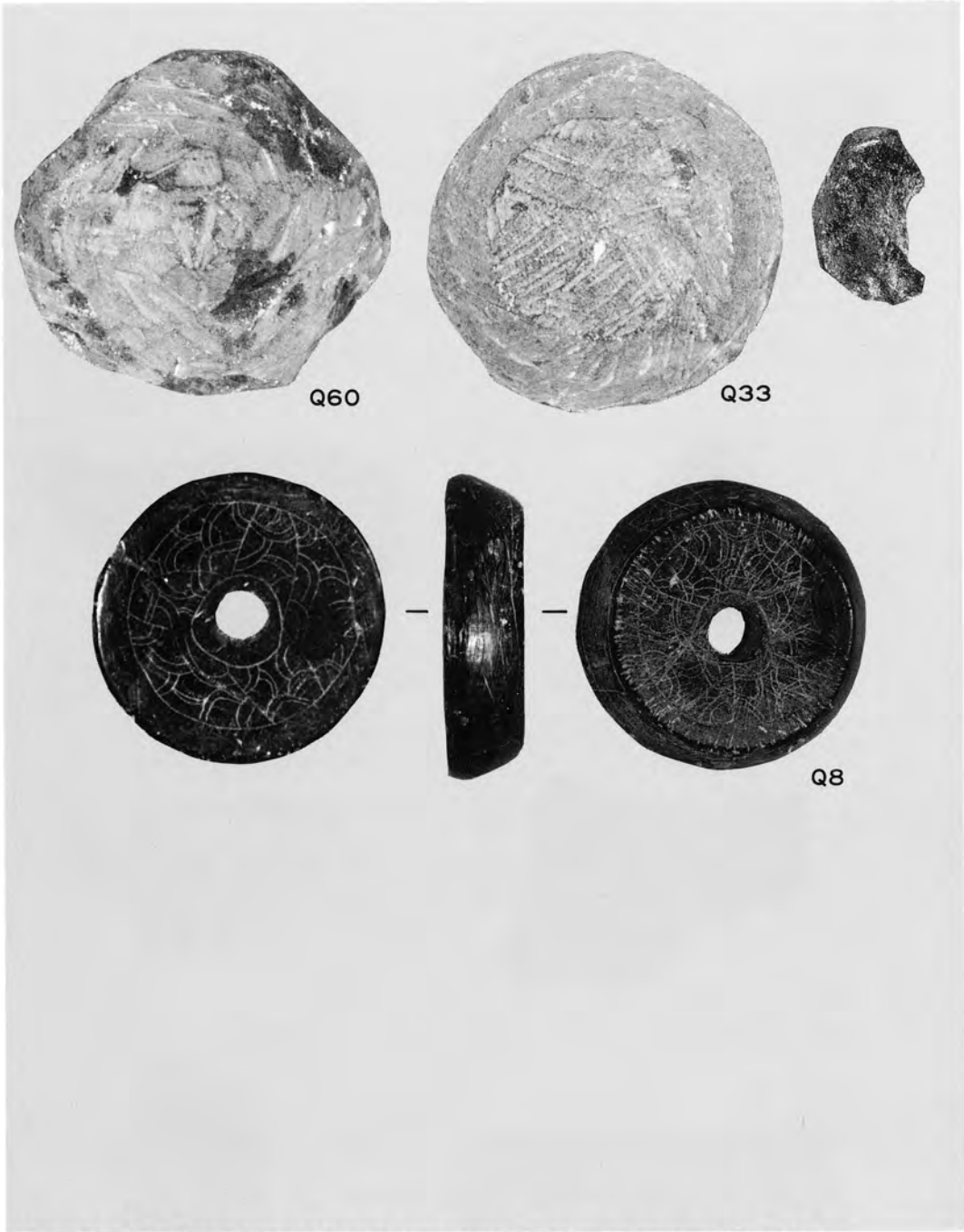
第1・2・3号製作跡，第14・42号住居跡，第1号堀出土勾玉（1/1）



第2・4・5号製作跡，第56号住居跡，第1号堀出土円板（½）

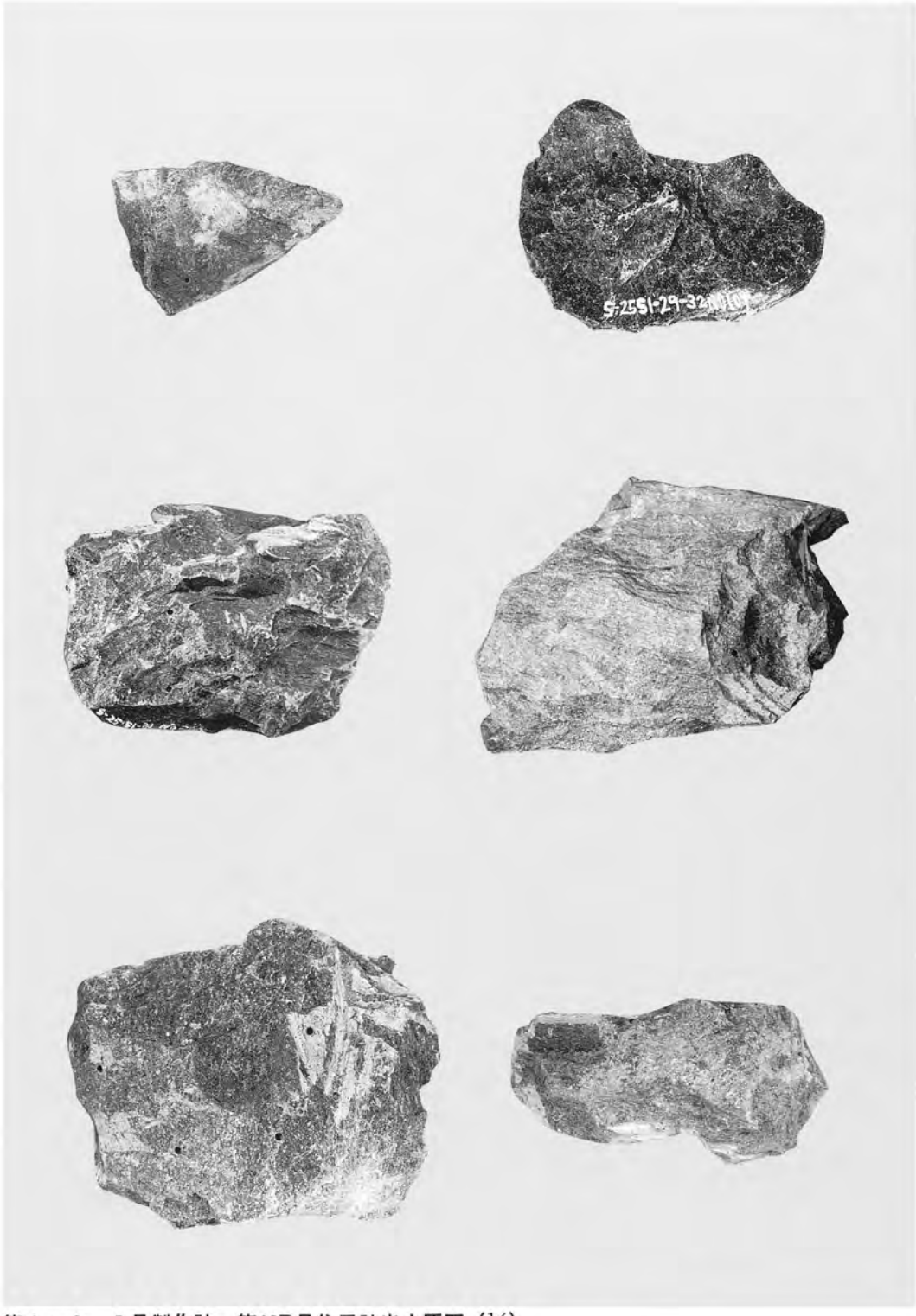


第24号住居跡，第4・5号製作跡出土剣形品（½）



第 1 号堀，第 4 号製作跡，第24号住居跡出土紡錘車（1/1）第 5 号製作跡勾玉（1/3）

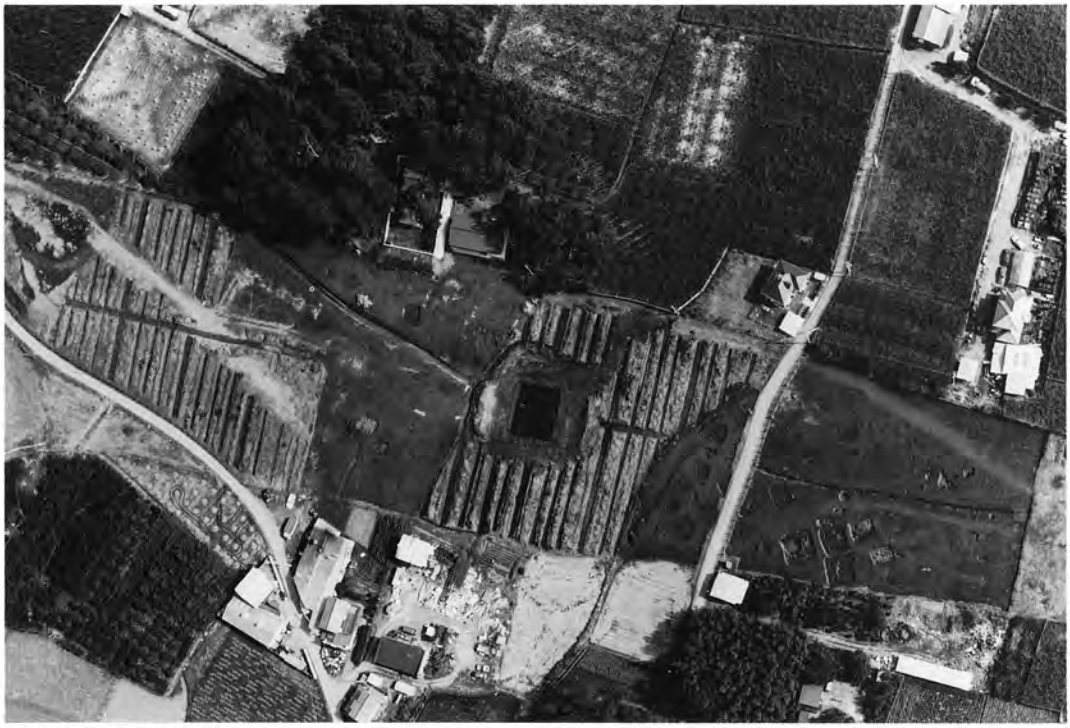
第2・4・5号製作跡出土工作台・砥石（⅓）



第１・２・５号製作跡，第40B号住居跡出土原石（⅓）

写　真　図　版

〔小田林遺跡〕



調査終了時全景

試掘終了全景（北側）

PL111

発掘前全景（昭和61年度）

発掘前全景（昭和62年度）

遺構確認（南側台地）

発掘終了全景（南側台地）

PL113

遺構確認

発掘終了（G2区）

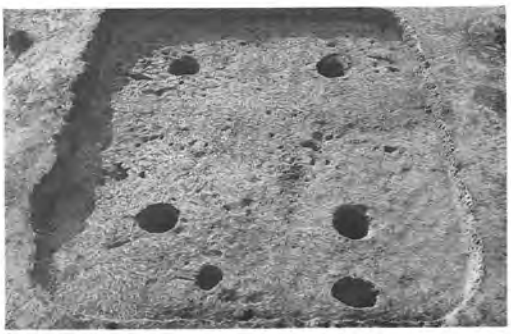
L 1 区遺構確認

第 3 号住居跡

L 1 f 5 遺物出土状況

第 3 号住居跡遺物出土状況

第 1 号住居跡



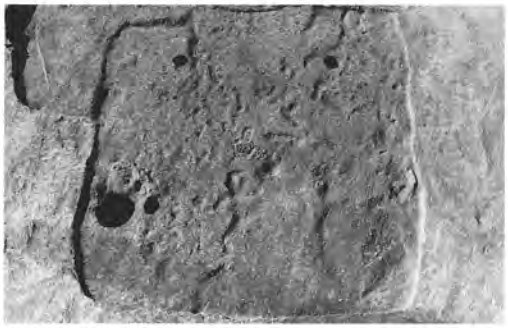
第 4 号住居跡

第 3 号住居跡

第 5 号住居跡

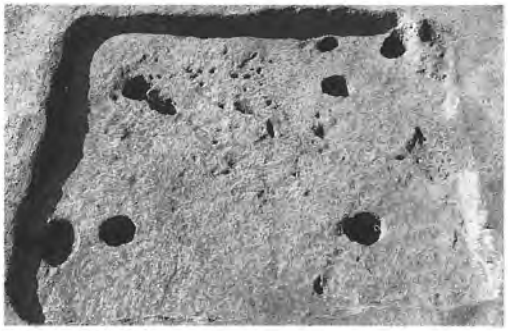
第 5 号住居跡遺物出土状況

第 8 号住居跡



第 6 号住居跡

第 9 号住居跡

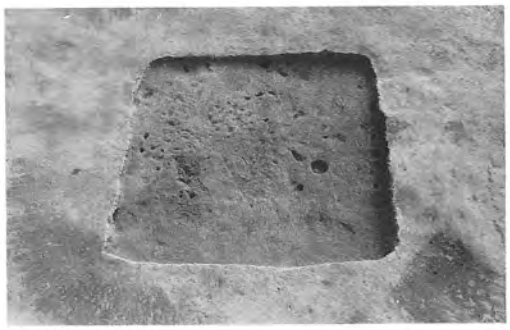


第 7 号住居跡

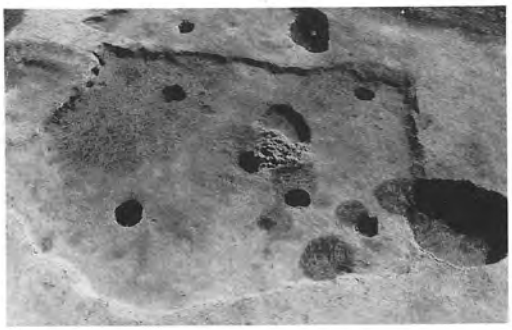
第 9 号住居跡遺物出土状況

第 7 号住居跡

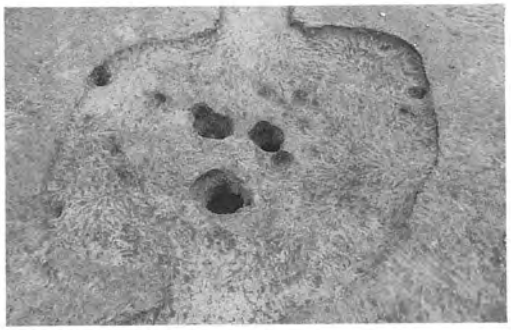
第16号住居跡



第17号住居跡



第26号住居跡



第22号住居跡

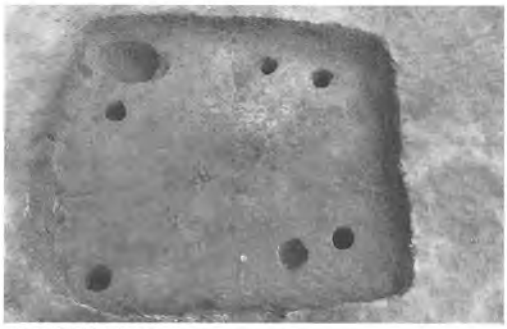
第26号住居跡遺物出土状況

第24号住居跡

第26号住居跡遺物出土状況

第25号住居跡

第26号住居跡遺物出土状況



第26号住居跡

第27号住居跡遺物出土状況

第27号住居跡

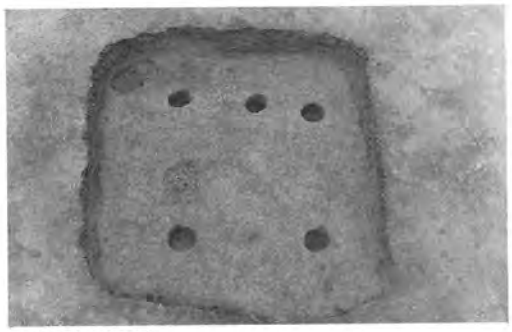
第28号住居跡

第27号住居跡遺物出土状況

第28号住居跡遺物出土状況

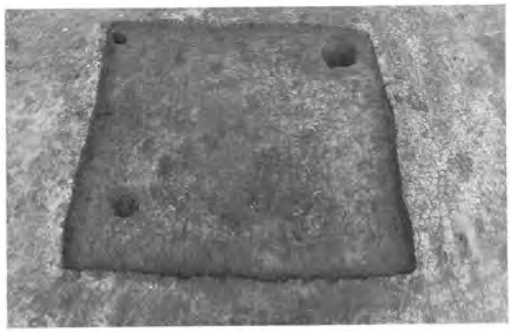
第27号住居跡遺物出土状況

第28号住居跡遺物出土状況



第29号住居跡

第33号住居跡



第29号住居跡

第33号住居跡

第30号住居跡遺物出土状況

第33号住居跡遺物出土状況

第30号住居跡遺物出土状況

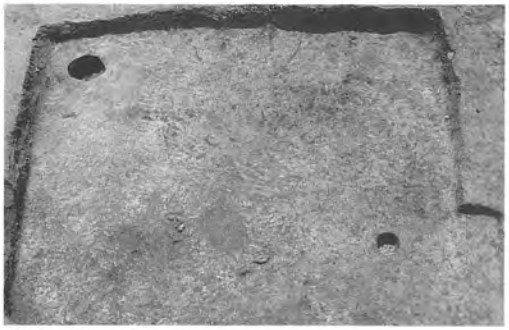
第34号住居跡

第34号住居跡遺物出土状況

第35号住居跡遺物出土状況

第34号住居跡遺物出土状況

第36号住居跡



第35号住居跡

第36号住居跡遺物出土状況

第35号住居跡

第36号住居跡遺物出土状況

第36号住居跡遺物出土状況

第39号住居跡

第37号住居跡

第40号住居跡遺物出土状況

第38号住居跡

第41号住居跡

第38号住居跡遺物出土状況

第１号炉穴

第2号炉穴

第6号炉穴

第3号炉穴

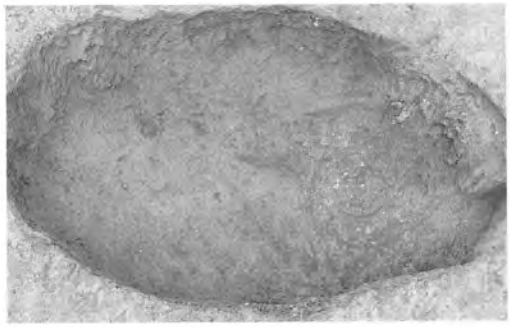
第8号炉穴

第4号炉穴

第9号炉穴

第4号炉穴遺物出土状況

第10号炉穴



第11号炉穴

第13号炉穴

第11号炉穴遺物出土状況

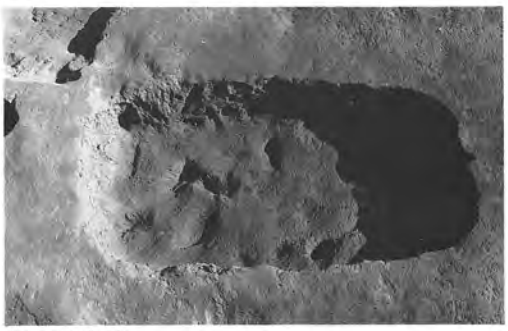
第14号炉穴

第12号炉穴

第15号炉穴

第12号炉穴

第１号土坑



第5号土坑

第11号土坑

第6号土坑

第16号土坑

第8号土坑

第21号土坑

第10号土坑

第22号土坑

第24号土坑

第43号土坑

第26号土坑

第47号土坑

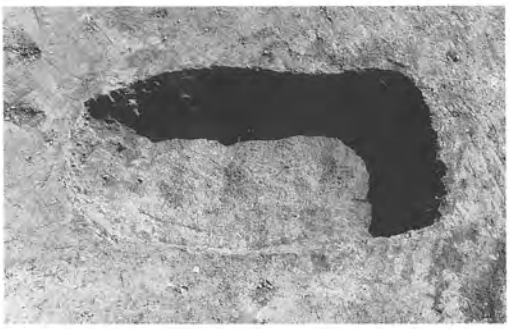
第27号土坑

第48号土坑

第41号土坑

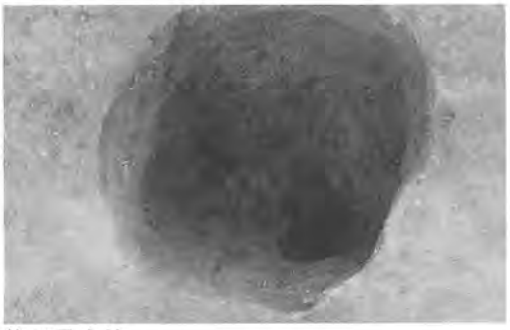
第49号土坑

第51号土坑

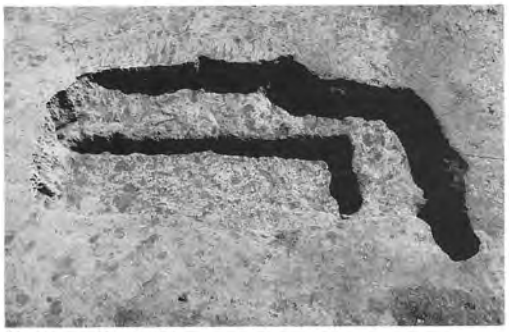


第57号土坑

第52号土坑

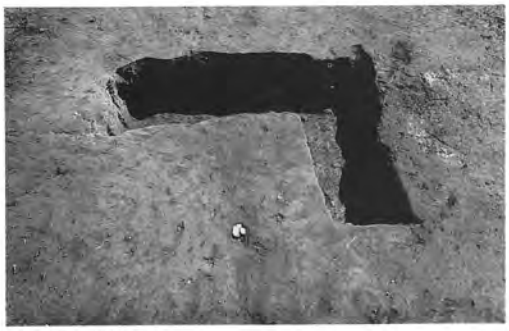


第59号土坑



第53・54号土坑

第60号土坑



第55号土坑

第63号土坑

第64号土坑

第83号土坑

第66号土坑

第84号土坑

第71号土坑

第84号土坑遺物出土状況

第81号土坑

第1号溝

PL127

G・H区全景

第7・8号溝

第4号溝

第2号井戸

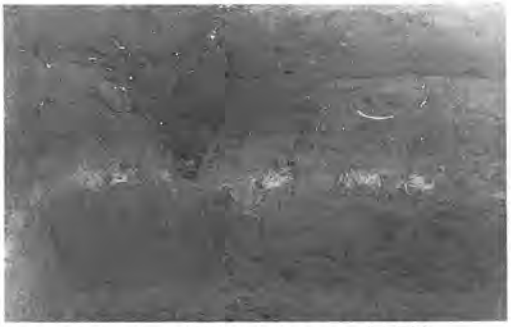
第5・6号溝

第4号井戸

第7・8号溝（北側）

現水田部（Ⅰ～Ⅳ区）

現水田部（Ⅲ区）樹木出土状況



テストピット　土層セクション（南壁）

現水田部（Ⅲ区）樹木出土状況

現水田部作業風景

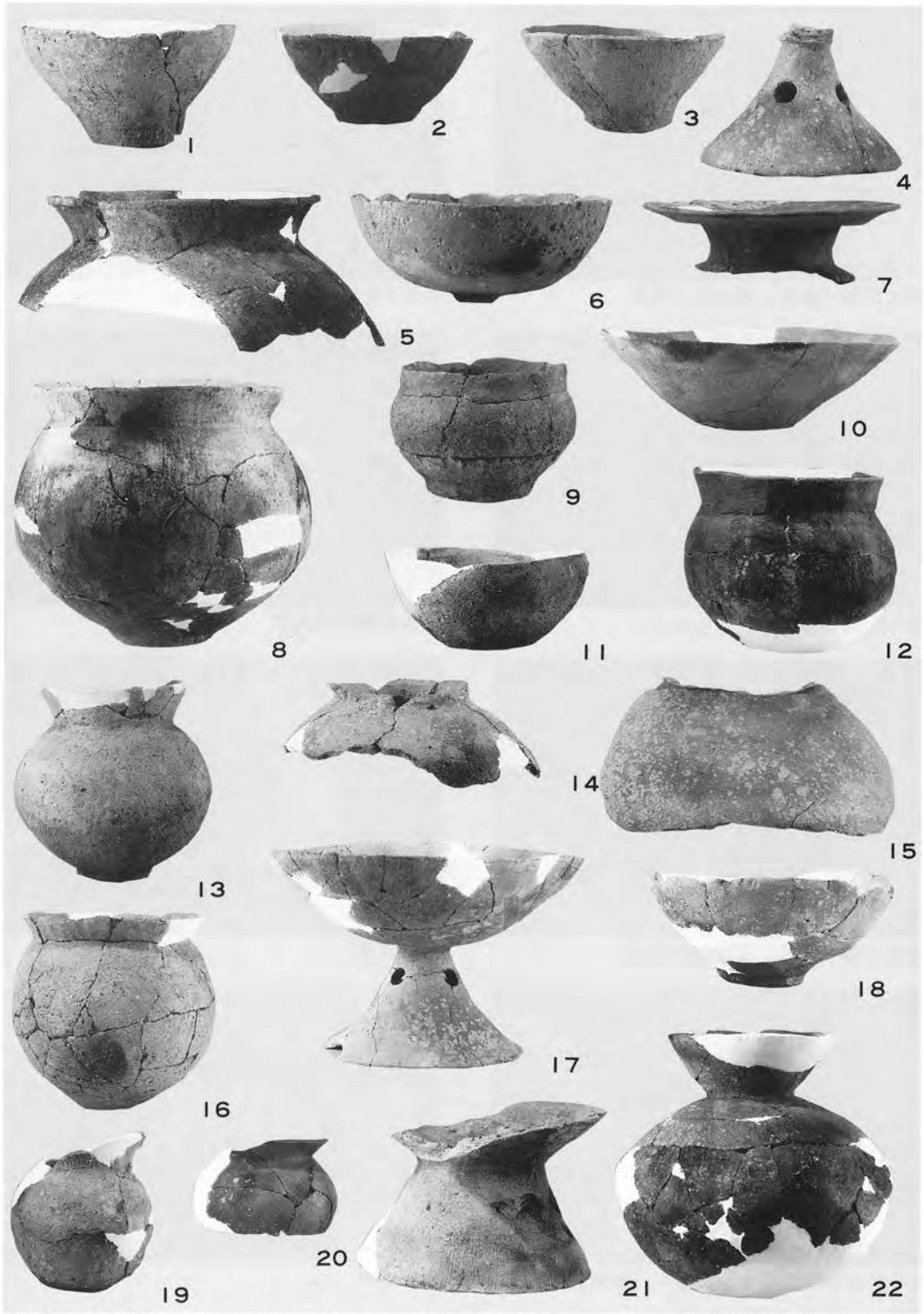
現水田部（Ⅳ区）遺物出土状況

作業風景

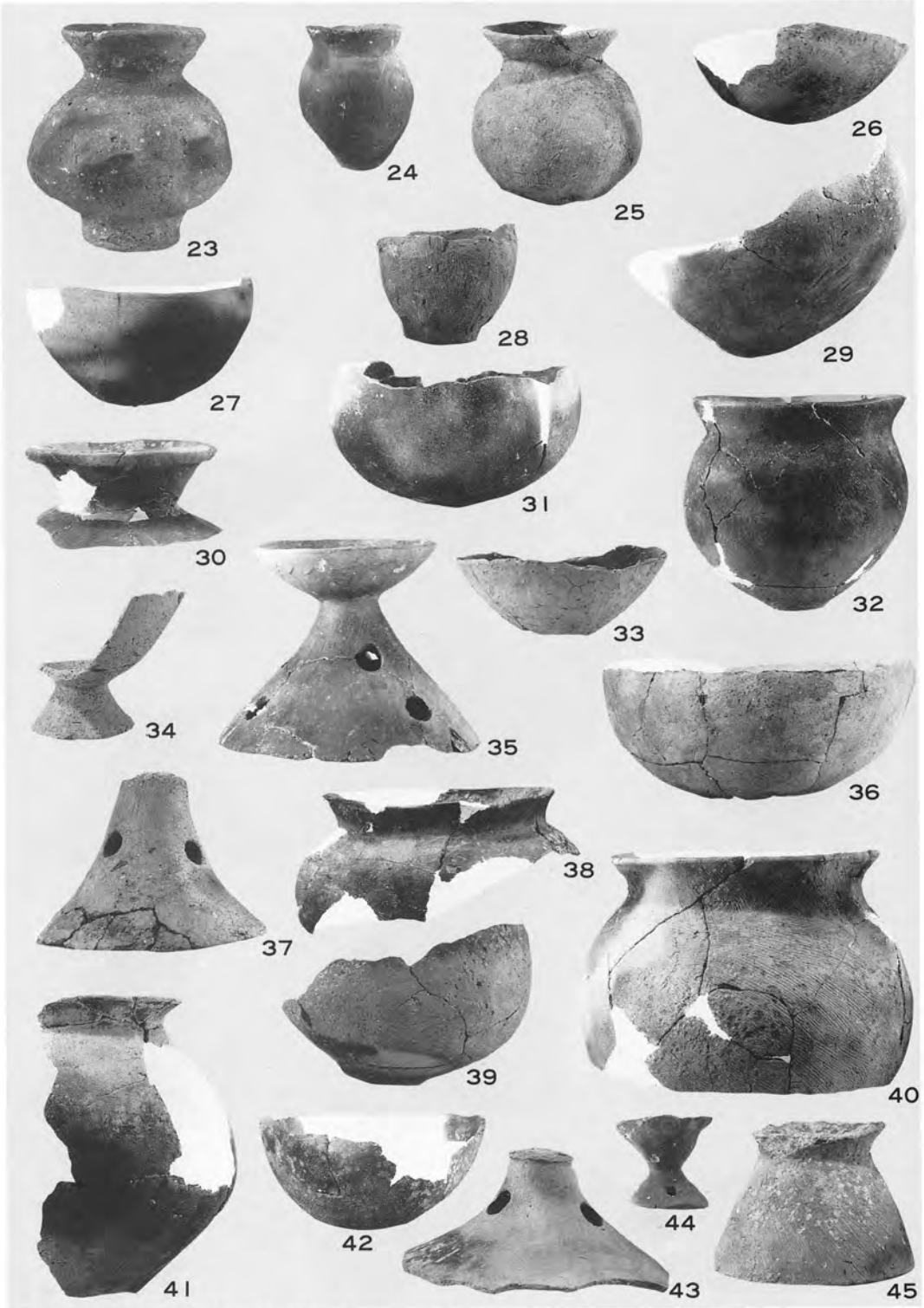
Ⅰトレンチ　土層セクション（東側）

班内研修

PL129

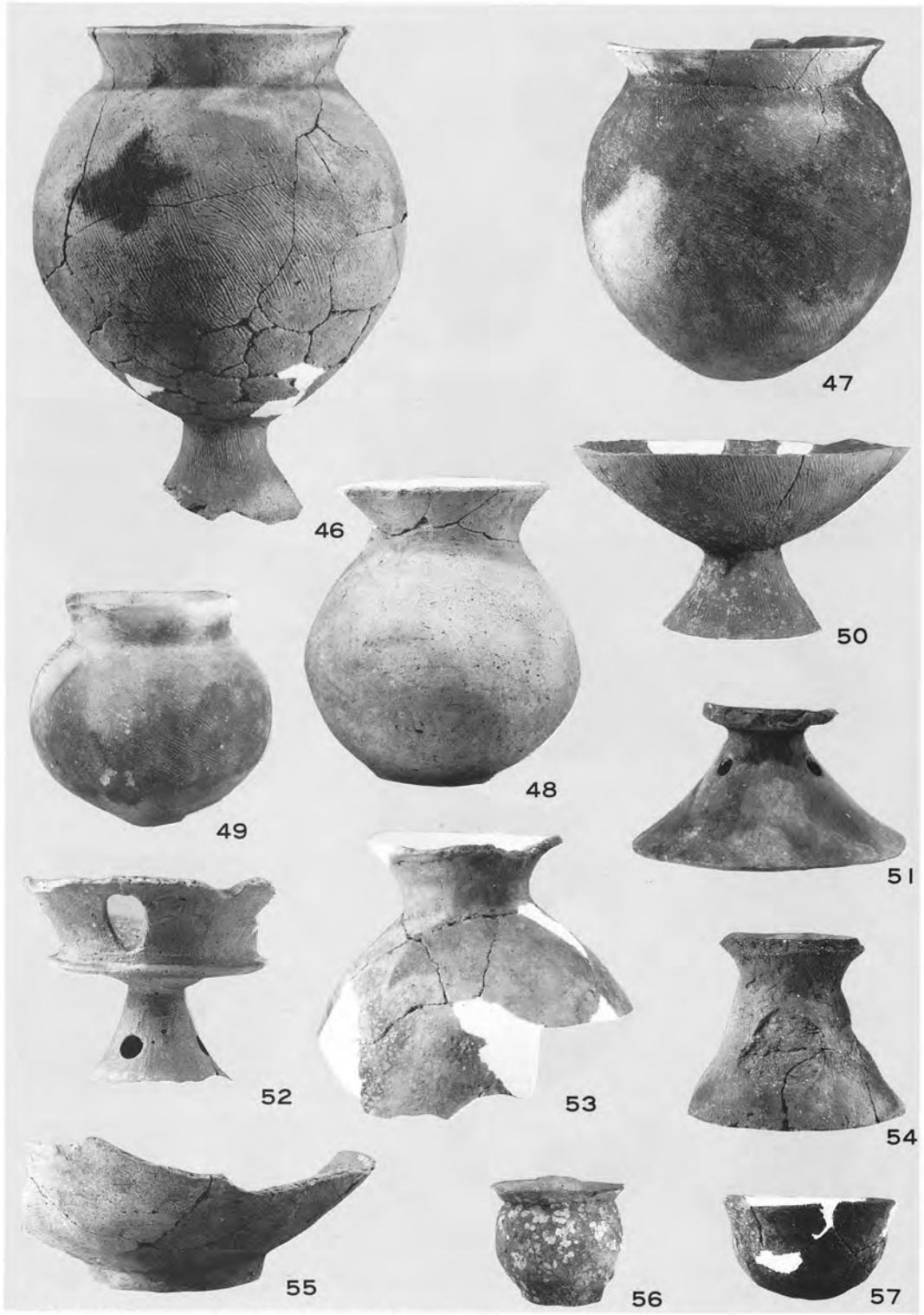


住居跡出土遺物 (1)　1～4・6・9～11・14・19・21(1/3)，5・7・8・12・13・15～18・20・22(1/4.5)

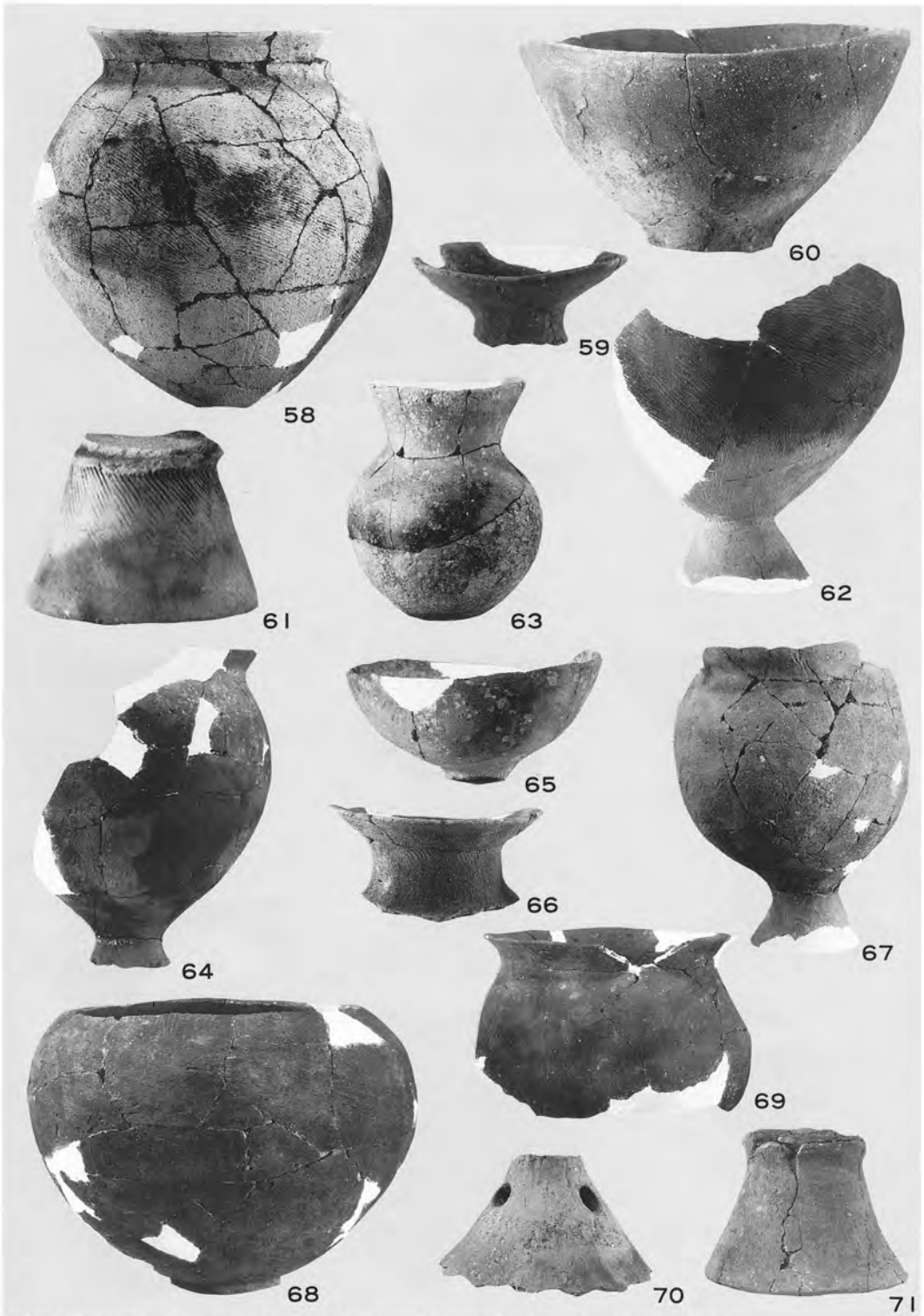


住居跡出土遺物 (2)　23～29・33～37・42～45 (1/3)，24・30～32・38～41 (1/4.5)

PL131

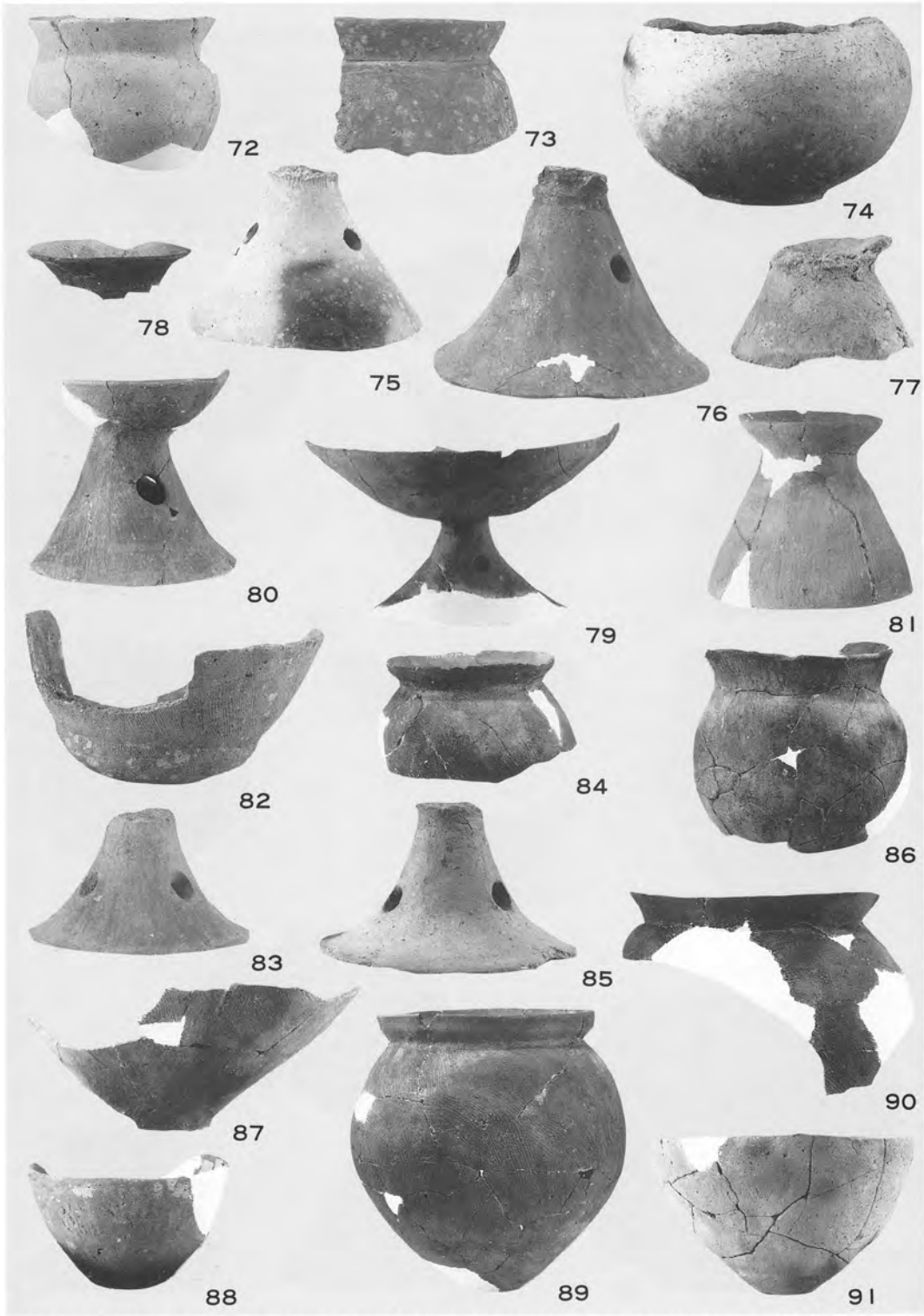


住居跡出土遺物 (3)　51・52・54～57 (1/3)，46～50・53 (1/4.5)

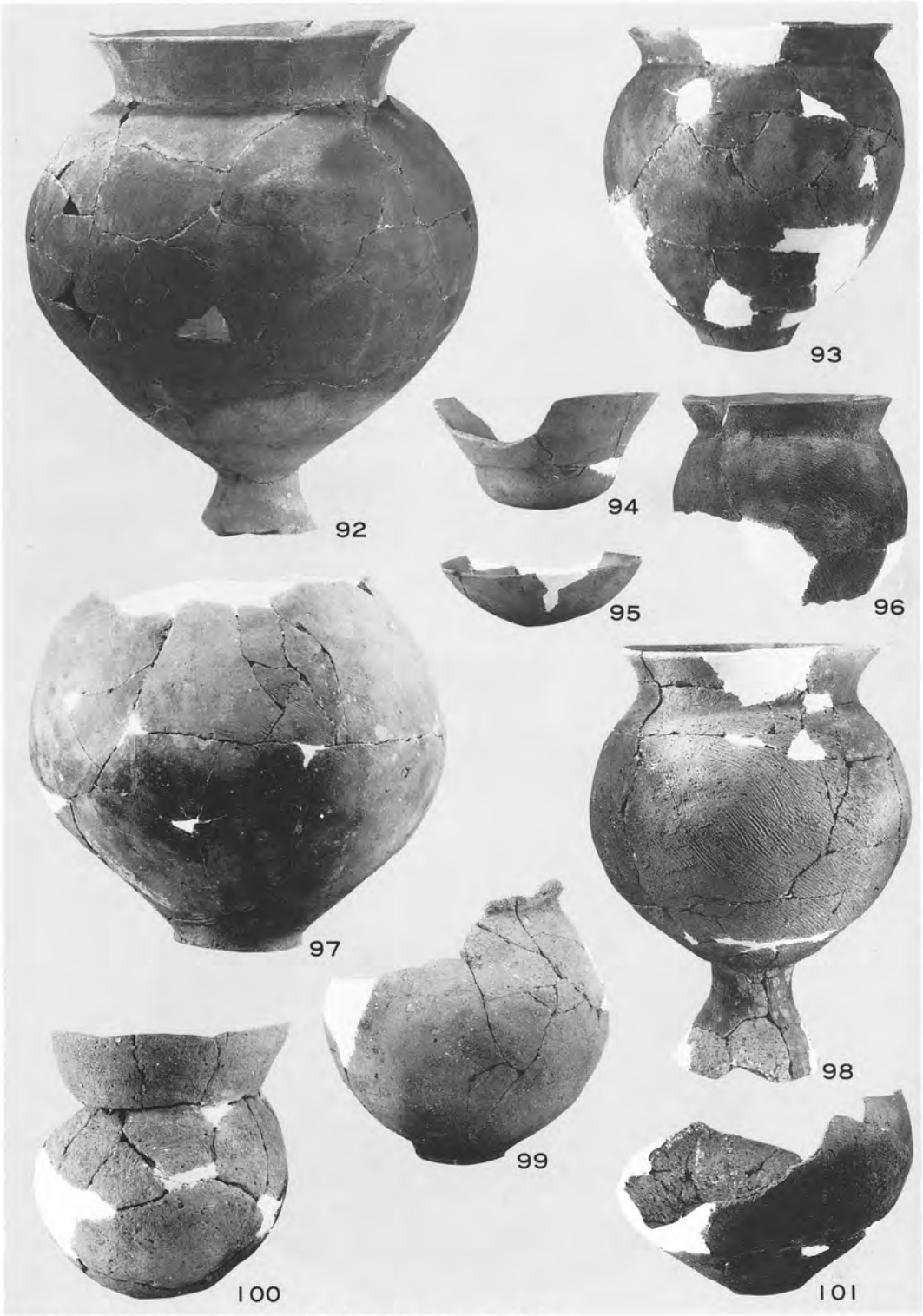


住居跡出土遺物 (4)　59～61・65・70・71 ($\frac{1}{3}$)，58・62～64・66～69 ($\frac{1}{4.5}$)

PL133

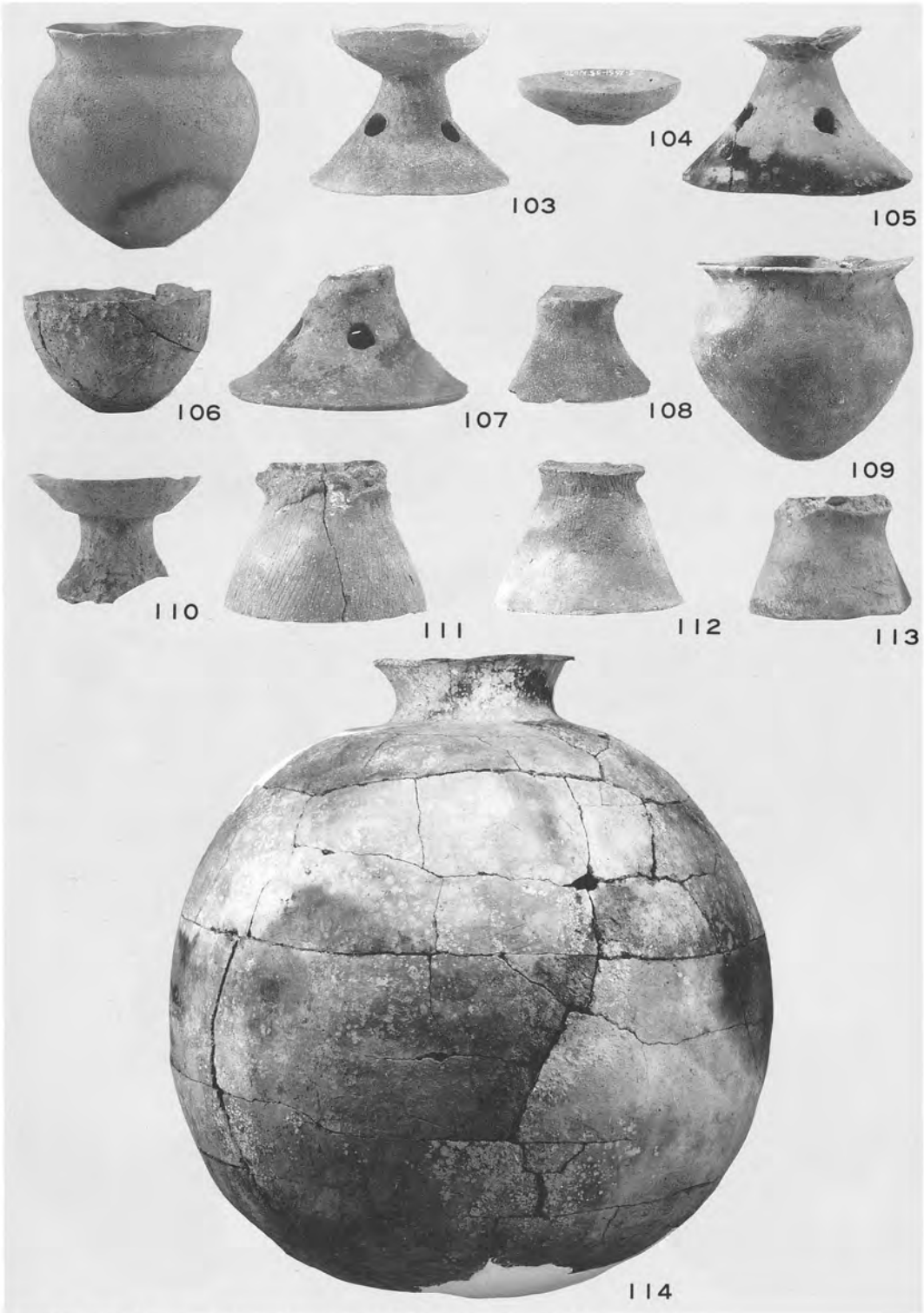


住居跡出土遺物（5）　73～78・80・82・83・85・88（1/3），72・79・81・84・86・87・89～91（1/4.5）

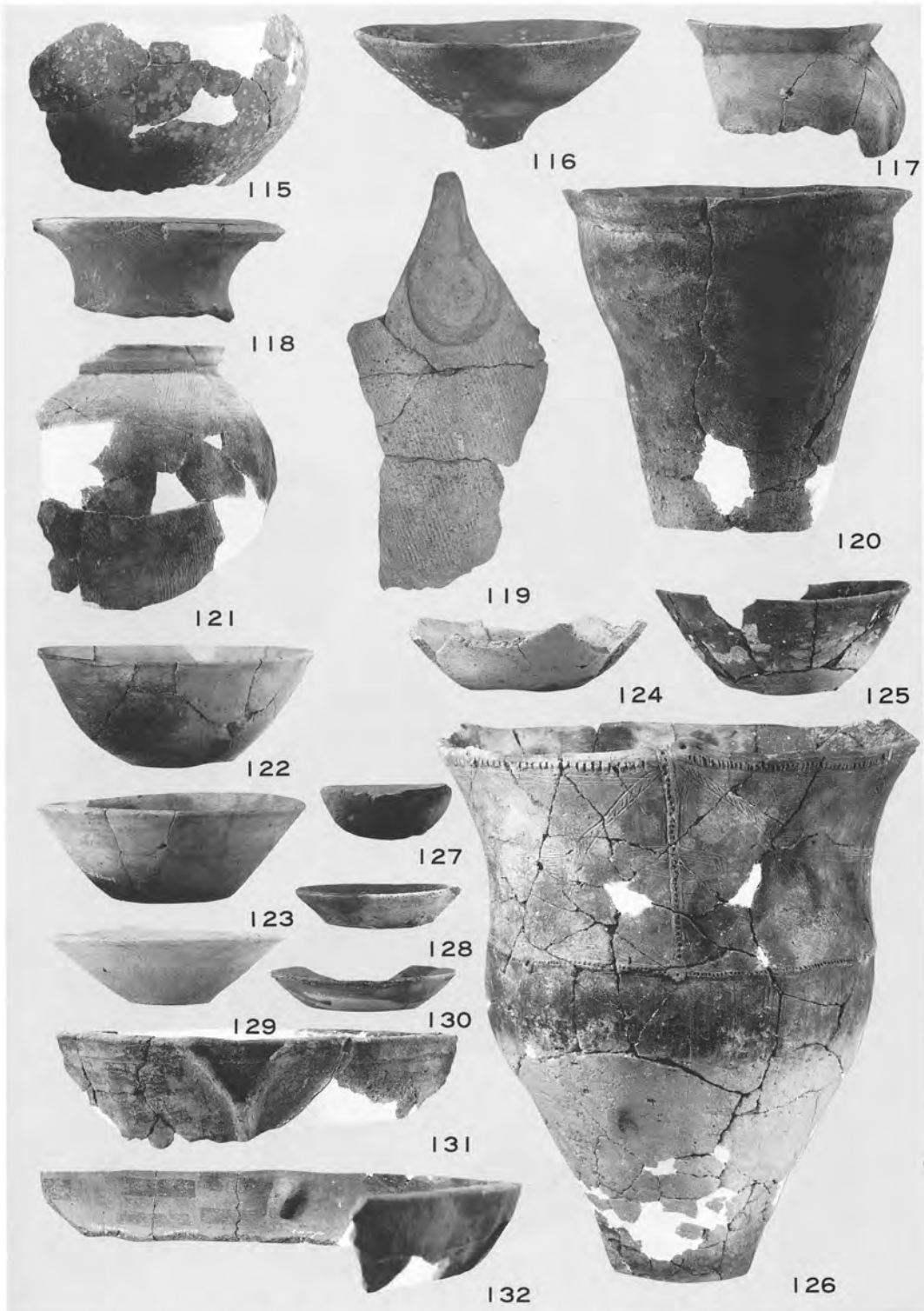


住居跡出土遺物 (6)　99・100 (1/3) , 92～98・101 (1/4.5)

PL135

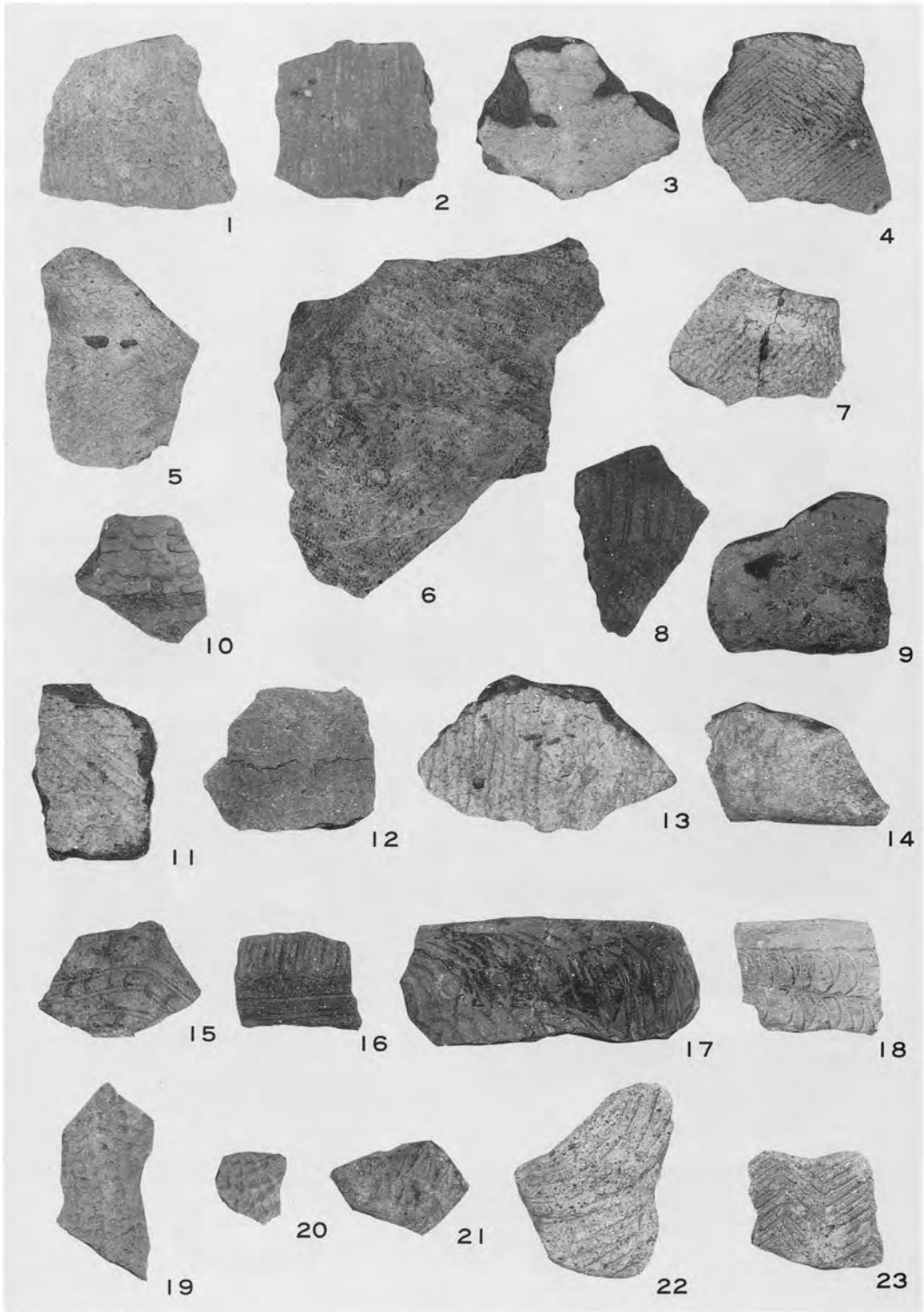


住居跡出土遺物（7）　103～108・110・112(1/3)，102・109・113(1/4.5)，114(1/6)

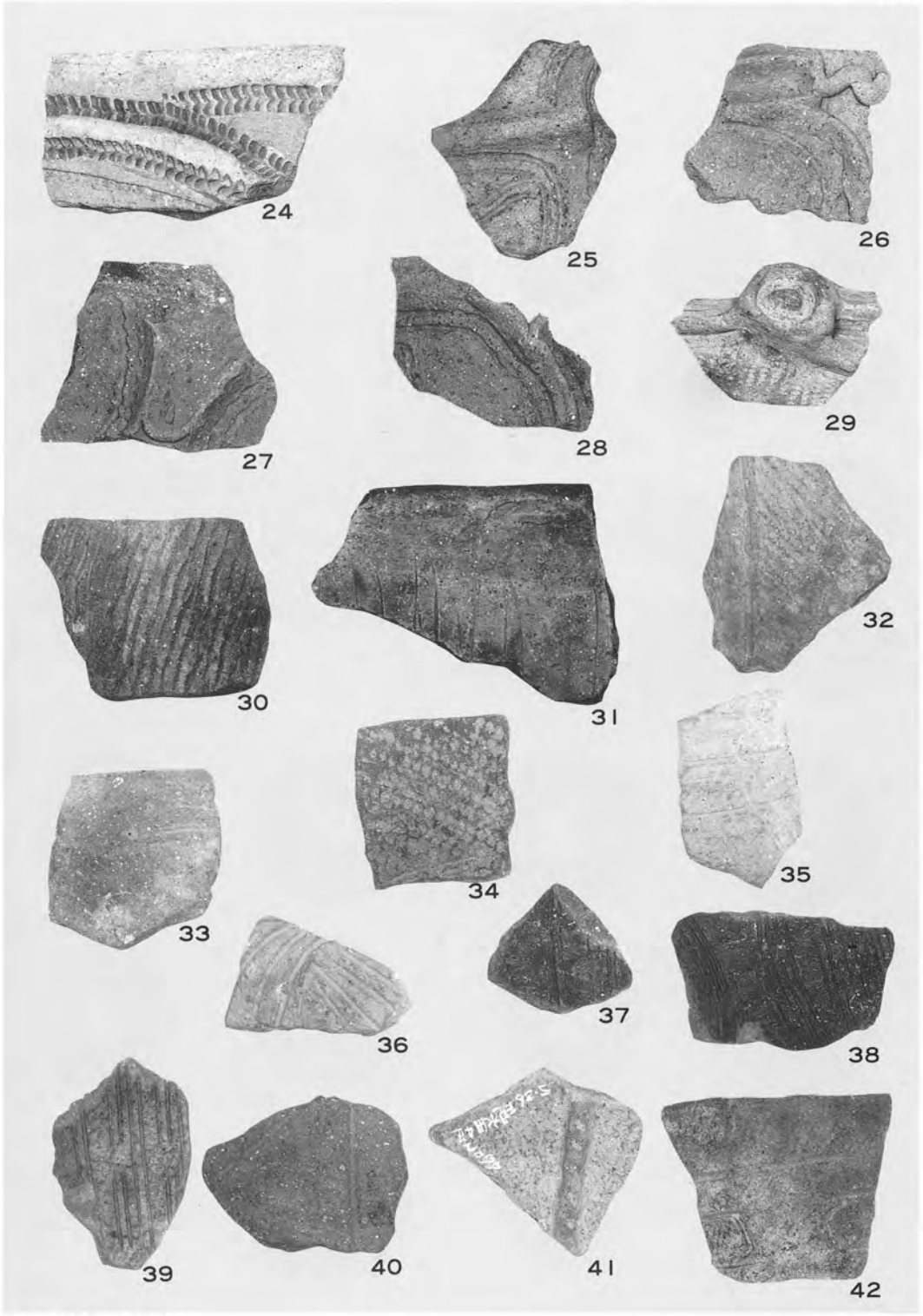


住居跡，土坑，溝，トレンチ，遺構外出土遺物 (8)　116・119・122～125・127～130(1/3)，115・117・118・120・121・131・132(1/4.5)，126(1/6)

PL137

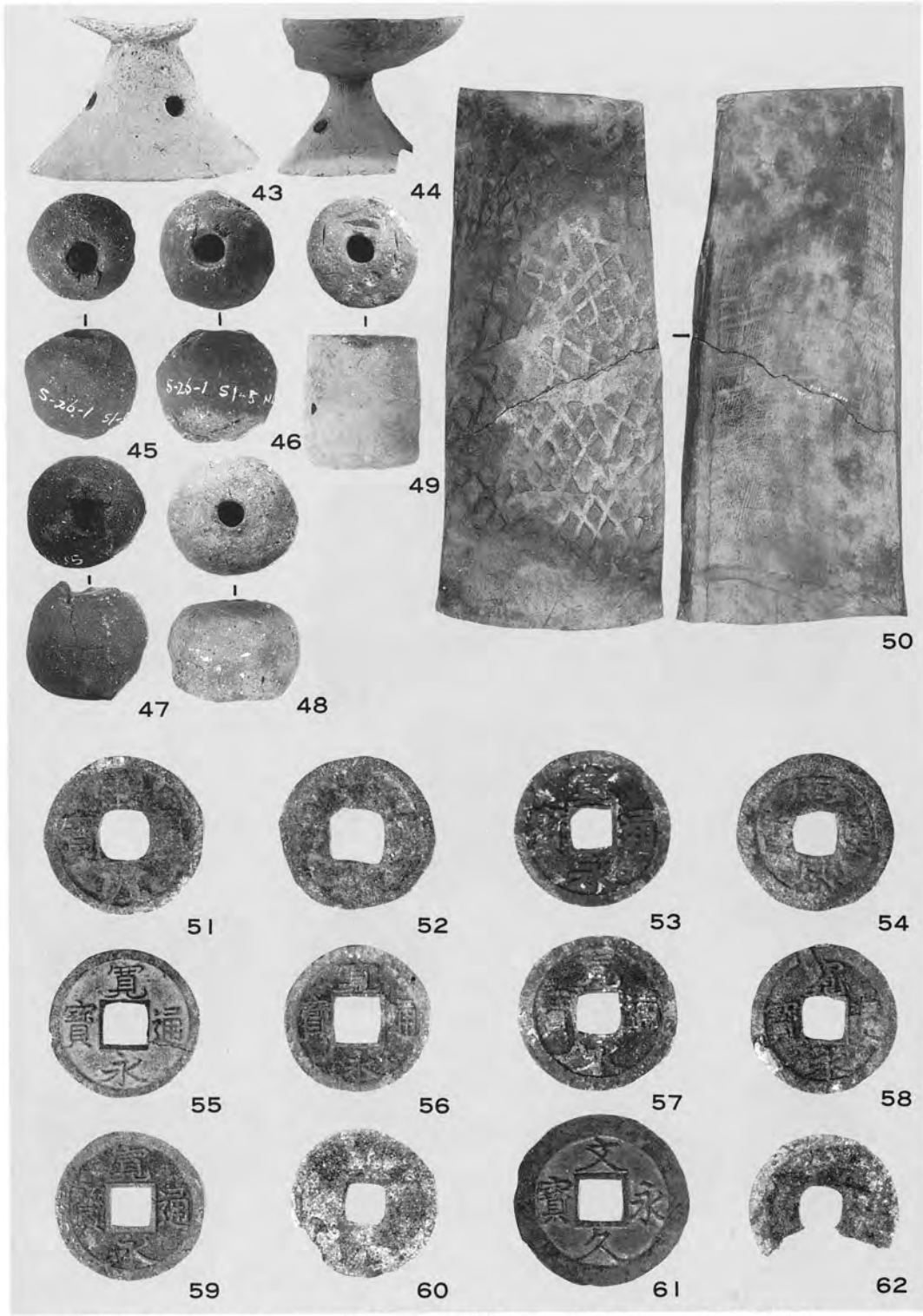


遺構外出土遺物 (9)

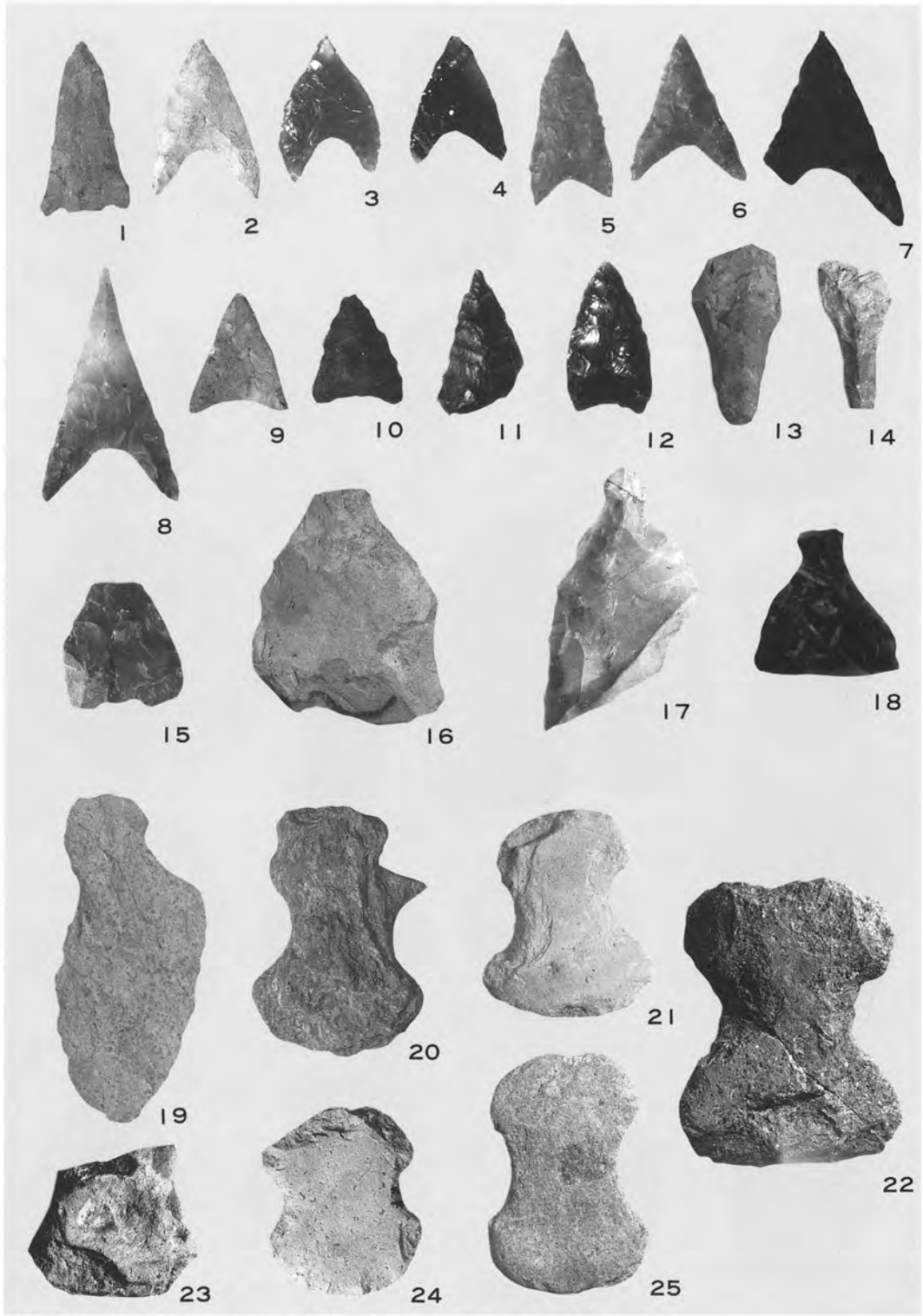


遺構外出土遺物 (10)

PL139

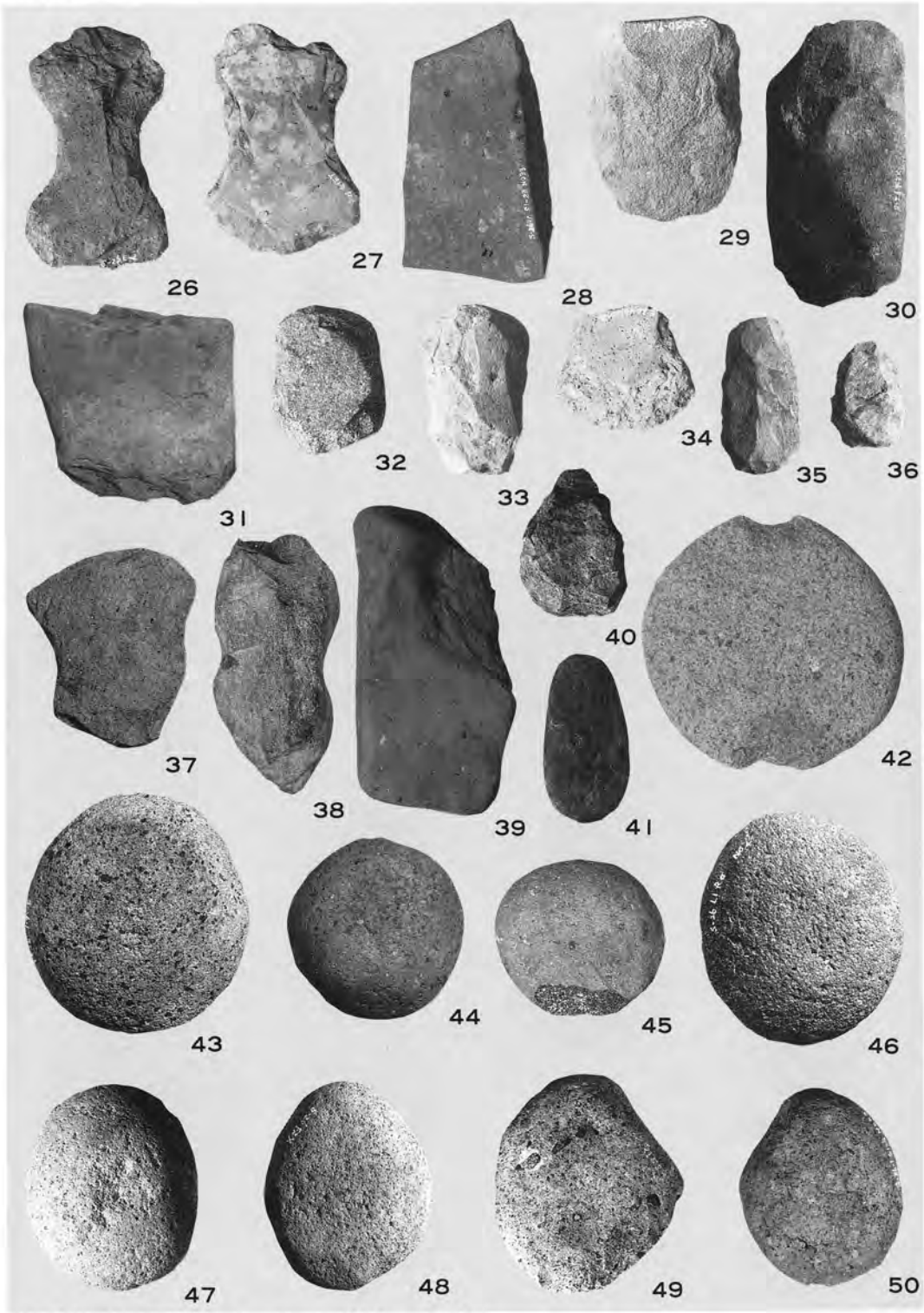


遺構外出土遺物 (11)　土製品・瓦・古銭　43・44(1/3), 45～49(2/3)・51～62(1/1), 50(1/6)

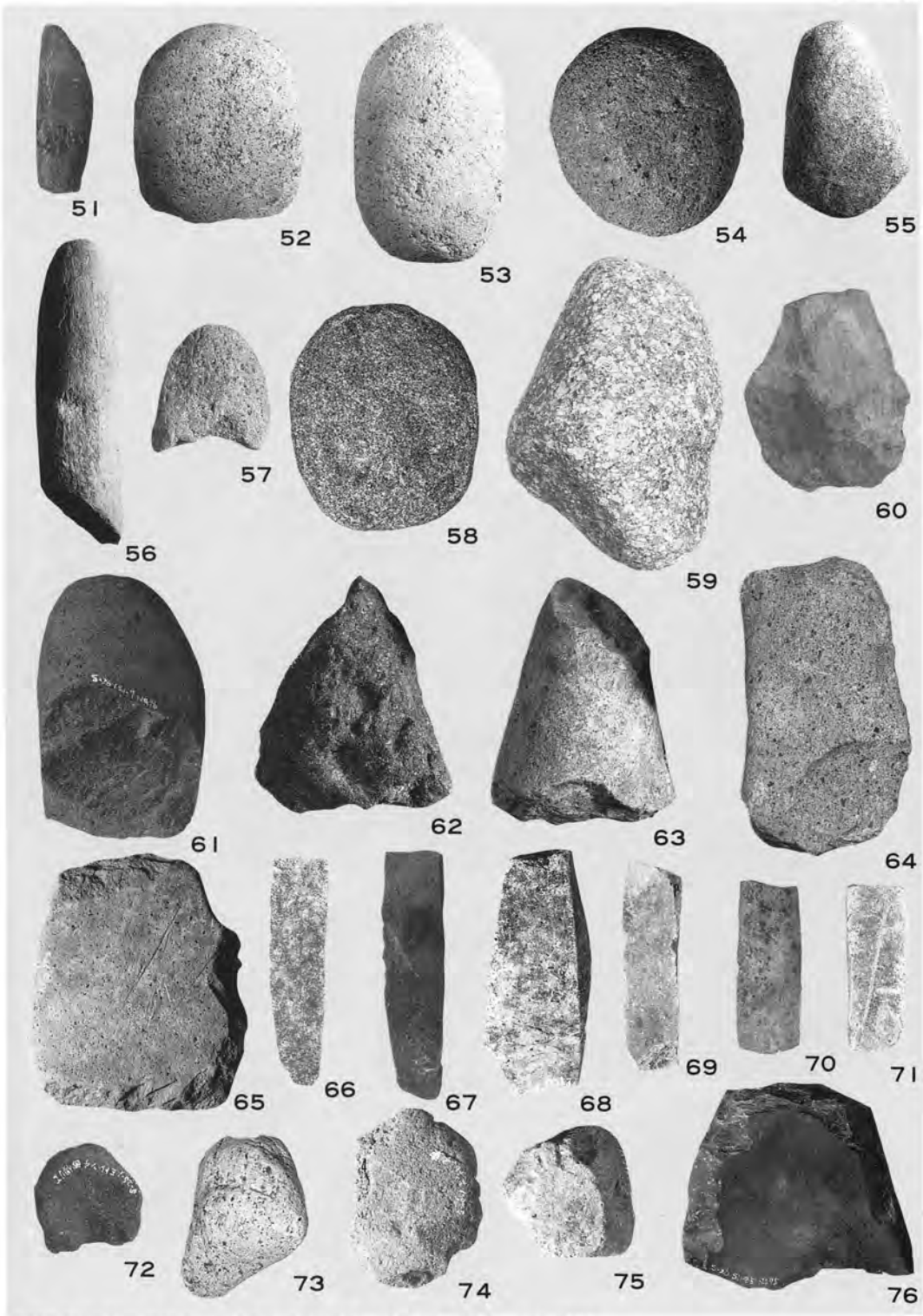


出土遺物 (12)　石器　　1～18 (1/1)，20～25 (1/3)，19 (5/8)

PL141

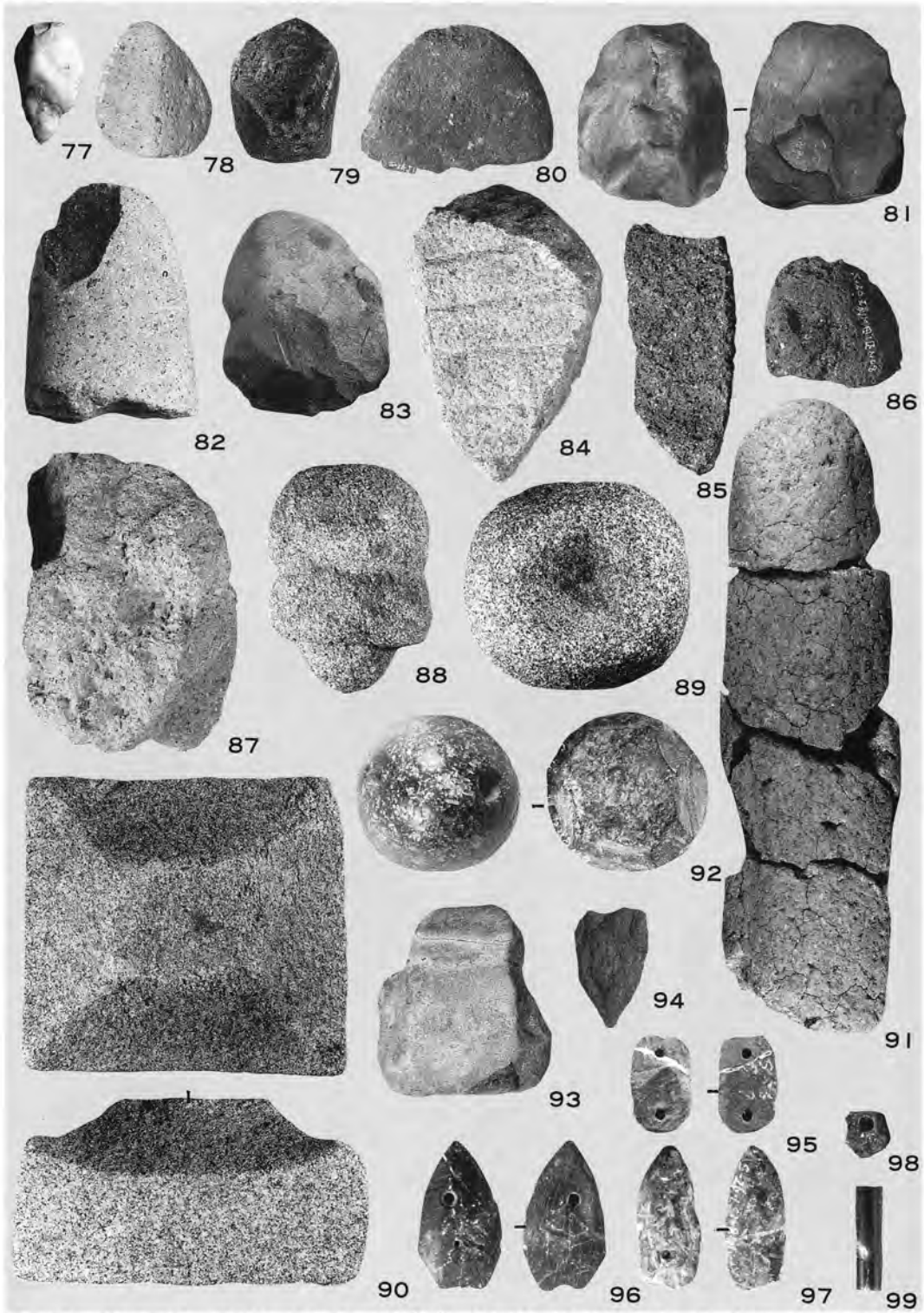


出土遺物 (13)　石器26～41，43～50 (1/3)，42 (5/8)



出土遺物 (14)　石器・石製品　51～59・61～76 (⅓)，60 (⅟₁)

PL 143



出土遺物 (15)　石器・石製品　77～87・93 (1/3)，92・94～97 (2/3)，98・99 (1/1)，88～91 (1/6)

写真図版掲載遺物対照表(1)

写真図版番号	掲載図版番号	写真図版番号	掲載図版番号	写真図版番号	掲載図版番号	写真図版番号	掲載図版番号
PL129- 1	第 9 図- 2	PL130- 38	第 49 図- 3	PL133- 75	第 64 図- 5	PL135-112	第 84 図- 9
PL129- 2	第 9 図- 3	PL130- 39	第 49 図- 5	PL133- 76	第 64 図- 4	PL135-113	第 84 図-10
PL129- 3	第 9 図- 4	PL130- 40	第 49 図- 2	PL133- 77	第 65 図-26	PL135-114	第 83 図- 1
PL129- 4	第 9 図- 1	PL130- 41	第 49 図- 4	PL133- 78	第 67 図- 2	PL136-115	第 88 図- 3
PL129- 5	第 9 図- 6	PL130- 42	第 49 図- 1	PL133- 79	第 67 図- 1	PL136-116	第 89 図- 2
PL129- 6	第 13 図- 1	PL130- 43	第 88 図- 1	PL133- 80	第 71 図- 4	PL136-117	第116図- 3
PL129- 7	第 16 図- 2	PL130- 44	第 89 図- 3	PL133- 81	第 71 図- 3	PL136-118	第116図- 1
PL129- 8	第 16 図- 3	PL130- 45	第 49 図- 6	PL133- 82	第 71 図- 2	PL136-119	第118図- 1
PL129- 9	第 18 図- 7	PL131- 46	第 51 図- 4	PL133- 83	第 71 図- 1	PL136-120	第120図- 1
PL129- 10	第 18 図- 1	PL131- 47	第 51 図- 3	PL133- 84	第 75 図-12A	PL136-121	第122図- 1
PL129- 11	第 18 図- 2	PL131- 48	第 51 図- 1	PL133- 85	第 74 図- 2	PL136-122	第124図- 1
PL129- 12	第 18 図- 8	PL131- 49	第 55 図- 9	PL133- 86	第 74 図- 8	PL136-123	第124図- 2
PL129- 13	第 18 図- 3	PL131- 50	第 56 図-13	PL133- 87	第 75 図-11	PL136-124	第124図- 4
PL129- 14	第 18 図- 5	PL131- 51	第 55 図- 2	PL133- 88	第 74 図- 4	PL136-125	第124図- 3
PL129- 15	第 20 図- 3	PL131- 52	第 55 図- 1	PL133- 89	第 75 図-14	PL136-126	第127図- 1
PL129- 16	第 22 図- 6	PL131- 53	第 55 図- 7	PL133- 90	第 75 図-10	PL136-127	第145図-46
PL129- 17	第 22 図- 1	PL131- 54	第 55 図-12	PL133- 91	第 76 図-17	PL136-128	第145図-45
PL129- 18	第 22 図- 2	PL131- 55	第 55 図-11	PL134- 92	第 76 図-15	PL136-129	第142図-12
PL129- 19	第 22 図- 3	PL131- 56	第 55 図- 8	PL134- 93	第 74 図- 6	PL136-130	第142図- 5
PL129- 20	第 22 図- 7	PL131- 57	第 55 図- 3	PL134- 94	第 74 図- 3	PL136-131	第145図-43
PL129- 21	第 22 図-10	PL132- 58	第 60 図- 1	PL134- 95	第 74 図- 1	PL136-132	第142図- 8
PL129- 22	第 22 図- 5	PL132- 59	第 59 図-11	PL134- 96	第 74 図- 7	PL137- 1	第144図- 1
PL130- 23	第 26 図- 1	PL132- 60	第 60 図-14	PL134- 97	第 74 図- 9	PL137- 2	第144図- 2
PL130- 24	第 26 図- 2	PL132- 61	第 60 図-13	PL134- 98	第 80 図-14	PL137- 3	第144図- 3
PL130- 25	第 29 図- 1	PL132- 62	第 60 図-12	PL134- 99	第 79 図- 9	PL137- 4	第144図- 4
PL130- 26	第 32 図- 1	PL132- 63	第 64 図- 8	PL134-100	第 80 図-13	PL137- 5	第144図- 5
PL130- 27	第 38 図- 2	PL132- 64	第 65 図-24	PL134-101	第 79 図-11	PL137- 6	第144図- 6
PL130- 28	第 38 図- 1	PL132- 65	第 64 図- 2	PL135-102	第 79 図- 6	PL137- 7	第144図- 7
PL130- 29	第 38 図- 7	PL132- 66	第 64 図- 9	PL135-103	第 83 図- 2	PL137- 8	第144図- 8
PL130- 30	第 40 図- 2	PL132- 67	第 65 図-25	PL135-104	第 80 図-13	PL137- 9	第144図- 9
PL130- 31	第 40 図- 1	PL132- 68	第 65 図-18	PL135-105	第 79 図- 4	PL137- 10	第144図-10
PL130- 32	第 40 図- 3	PL132- 69	第 64 図-14	PL135-106	第 79 図- 5	PL137- 11	第144図-11
PL130- 33	第 43 図- 1	PL132- 70	第 64 図- 7	PL135-107	第 79 図- 2	PL137- 12	第144図-12
PL130- 34	第 45 図- 1	PL132- 71	第 65 図-27	PL135-108	第 80 図-15	PL137- 13	第144図-13
PL130- 35	第 45 図- 2	PL133- 72	第 64 図-13	PL135-109	第 84 図- 7	PL137- 14	第144図-14
PL130- 36	第 46 図- 4	PL133- 73	第 65 図-20	PL135-110	第 83 図- 3	PL137- 15	第144図-15
PL130- 37	第 46 図- 1	PL133- 74	第 64 図-10	PL135-111	第 84 図- 8	PL137- 16	第144図-16

写真図版掲載遺物対照表(2)

写真図版番号	掲載図版番号	写真図版番号	掲載図版番号（遺物番号）	写真図版番号	掲載図版番号（遺物番号）	写真図版番号	掲載図版番号（遺物番号）
PL137- 17	第144図-17	PL139- 54	第153図- 4	PL141- 29	(Q 36)	PL142- 66	第149図-42
PL137- 18	第144図-18	PL139- 55	第153図- 5	PL141- 30	(Q 38)	PL142- 67	第149図-43
PL137- 19	第144図-19	PL139- 56	第153図- 6	PL141- 31	(Q 40)	PL142- 68	第150図-47
PL137- 20	第144図-20	PL139- 57	第153図- 7	PL141- 32	(Q 43)	PL142- 69	(Q 128)
PL137- 21	第144図-21	PL139- 58	第153図- 8	PL141- 33	(Q 42)	PL142- 70	(Q 125)
PL137- 22	第144図-22	PL139- 59	第153図- 9	PL141- 34	(Q 41)	PL142- 71	(Q 132)
PL137- 23	第144図-23	PL139- 60	第153図-10	PL141- 35	(Q 44)	PL142- 72	第150図-45
PL138- 24	第144図-24	PL139- 61	第153図-11	PL141- 36	(Q 51)	PL142- 73	第150図-48
PL138- 25	第144図-25	PL139- 62	第153図-12	PL141- 37	(Q 47)	PL142- 74	(Q 131)
PL138- 26	第144図-26	PL140- 1	第146図- 1	PL141- 38	(Q 45)	PL142- 75	(Q 133)
PL138- 27	第144図-27	PL140- 2	第146図- 2	PL141- 39	(Q 46)	PL142- 76	第150図-46
PL138- 28	第144図-28	PL140- 3	第146図- 3	PL141- 40	(Q 53)	PL143- 77	第151図-53
PL138- 29	第144図-29	PL140- 4	第146図- 4	PL141- 41	第148図-29	PL143- 78	第150図-49
PL138- 30	第144図-30	PL140- 5	第146図- 5	PL141- 42	第148図-30	PL143- 79	(Q 139)
PL138- 31	第144図-31	PL140- 6	第146図- 6	PL141- 43	第148図-31	PL143- 80	第150図-50
PL138- 32	第145図-32	PL140- 7	第146図- 7	PL141- 44	第148図-34	PL143- 81	第151図-52
PL138- 33	第145図-33	PL140- 8	第146図- 8	PL141- 45	(Q 64)	PL143- 82	(Q 101)
PL138- 34	第145図-34	PL140- 9	第146図-10	PL141- 46	(Q 78)	PL143- 83	第150図-51
PL138- 35	第145図-35	PL140- 10	第146図-13	PL141- 47	第148図-35	PL143- 84	第151図-56
PL138- 36	第145図-36	PL140- 11	(Q 18)	PL141- 48	(Q 73)	PL143- 85	(Q 148)
PL138- 37	第145図-37	PL140- 12	第146図-12	PL141- 49	(Q 74)	PL143- 86	(Q 157)
PL138- 38	第145図-38	PL140- 13	第146図-14	PL141- 50	(Q 62)	PL143- 87	(Q 158)
PL138- 39	第145図-39	PL140- 14	第146図-15	PL142- 51	(Q 72)	PL143- 88	第152図-57
PL138- 40	第145図-40	PL140- 15	(Q 16)	PL142- 52	(Q 75)	PL143- 89	第152図-58
PL138- 41	第145図-41	PL140- 16	第146図-19	PL142- 53	(Q 79)	PL143- 90	第152図-61
PL138- 42	第145図-42	PL140- 17	第146図-18	PL142- 54	(Q 87)	PL143- 91	第151図-54
PL139- 43	第142図-14	PL140- 18	第146図-16	PL142- 55	第148図-36	PL143- 92	第56図-16
PL139- 44	第145図-44	PL140- 19	第146図-17	PL142- 56	(Q 83)	PL143- 93	(Q 154)
PL139- 45	第18図-14	PL140- 20	第147図-22	PL142- 57	(Q 92)	PL143- 94	(Q 107)
PL139- 46	第18図-15	PL140- 21	第147図-24	PL142- 58	(Q 97)	PL143- 95	第140図-20
PL139- 47	第18図-16	PL140- 22	第147図-20	PL142- 59	第149図-37	PL143- 96	第24図-4
PL139- 48	第56図-15	PL140- 23	(Q 37)	PL142- 60	第149図-38	PL143- 97	第24図-3
PL139- 49	第56図-14	PL140- 24	第147図-25	PL142- 61	(Q 94)	PL143- 98	第145図-47
PL139- 50	第124図-7	PL140- 25	第147図-23	PL142- 62	(Q 101)	PL143- 99	第142図-16
PL139- 51	第153図-1	PL141- 26	第147図-21	PL142- 63	第149図-40		
PL139- 52	第153図-2	PL141- 27	第147図-26	PL142- 64	第144図-41		
PL139- 53	第153図-3	PL141- 28	第147図-27	PL142- 65	(Q 103)		

茨城県教育財団文化財調査報告第51集

一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書2

結　城　地　区

平成元年3月25日印刷
平成元年3月31日発行
発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
印　刷　有限会社　川田プリント
水戸市上水戸4丁目6番53号